四人の魔法使い

畑山香樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
四人の魔法使い

【Ｎコード】
Ｎ４０３９Ｌ

【作者名】
畑山香樹

【あらすじ】
いつも通りに学校へ向かっている俺こと柊夏哉（ひいらぎなつや）と、花街香苗（はなまちかなえ）と、天雲沙鳥（あまくもさとり）の三人。　その道中に一人の女の子が倒れていた。　その子はやっかいにも俺にしか見えない。　しかも、なんと異世界から来たと言うではないか。　かくして、異世界から来た少女は俺たちの平凡な生活をどのように変えてくれるのか！？　……ってどこの漫画だこれ

※現在小説修正中ですので、変なところもあるかもしれませんが気にしないでください※

第一話　《プロローグ》　憧れを抱くものの決意

この世界は黒で覆われている。
暗闇と言うわけではない。相手や建物は、認知できる。
ただ、背景、空や大地が、全てのものを拒むように、黒一色に統一されている。
建物の中から光が漏れることは、決してない。この世界の住人は無駄なことはしない。光がなくとも物が見えるのだから、光を必要としない。
空には唯一、光と呼べるものがある。
その光は一時間に一度、たった十秒やそこらで消えてしまう。とてもではないが、あの世界の光とは比べるまでもなくちっぽけである。
私はあの世界が好きだ。
あの世界の生き物の頂点にたっている種族は、いつも、私たちが持っていない光に満ち溢れている。一人では何も出来ずにいる、ちっぽけで、ただ弱いだけの生き物の癖に、複数集まると、無理だと思っていたことも出来てしまう。そして、いつも笑っている。
何が楽しいのか分からないし、どう見ても無意味で、利益になるものなど有りはしないのに、何が楽しいのか笑っている。
私は、その行為が理解できなかった。しかし、それと同時に、憧れを抱いた。
皆が幸せに生きていて、そんな生き方をいつも思っていた。
私はこの世界が嫌いだ。この世界には全てがある。それ故に何もない。
必要なものは何でも揃っている。逆に言えば、不必要なものは何一つない。私の好きな世界のような、幸せな気持ちにはなれない。
退屈だ。ここは退屈すぎてつまらなさすぎる。
だから私は、この世界を裏切った。私の好きな世界を犯そうとす

る、この世界を。
私が裏切ったところで、どうこうなるものでもない。私を処刑して終わりだ。何も変わらない。でも、　動かずにはいられなかった。黙ってはいられなかった。
昔の私なら、こんな無駄なことはやらなかっただろう。でも今は、誰かのために動いている。少しは、あの者達に近づけた気がした。だから次は、守りたいと思った。
何も悪くない人達に起ころうとしている危機から。
目の前の扉に手を触れる。
「……もう少しか」
それは高さが十メートルはあろう程の、巨大な扉だった。その先には、異世界に通じている。
目的はひとつ、向こうの世界へ行ってある人物を探し、守ること。別に誰かに指図されたわけではない。今の私には味方はいない。無論向こうの世界にも。それどころか、あちらは私のことなど見えないはずだ。

完全な孤独。

それが今私の中でうごめいている。
それでも後戻りは出来ない。前へ進むだけだ。
大好きな地球を守るために――。

第一話　《一章》平凡な少年少女

四月二十八日

雲ひとつない空、とは言えないが、快晴と呼べるような天気にも関わらず、俺は学生寮の一階にあるロビーのソファーに身を沈めていた。いや、ここはだからと言った方がいいか。だって暑いんだもん。まったく、地球は何をやっているんだ、今は春なんだから適温にしろ適温に。

俺がいるこの学生寮は、俺たちが通っている麦谷（むぎたに）高校専用のものだ。八階建てで、麦谷高生の四分の三はここの寮を利用している……別に数えたわけではないが。

時刻は八時三分、服装は学ラン。

この状態で学校に行かないのは、勿論誰かを待ってるわけで、

「夏哉君待った～？」

トテトテと階段を降りてくる一人の少女。

「あーこらこら、そんな急いで階段降りるな。こけるぞ、香苗」

「そんな転ばない――キャァァァ！？」

言って、香苗と呼んだ少女は転んだ。

言わんこっちゃない、と思いながら、重い体を持ち上げて香苗のもとへ歩き出す。

花街香苗（はなまちかなえ）、この子はなんて言うか、うん、ロリ。ロリって言う言葉がぴったりな子だ。髪はブラウンでショートボブ。身長は（確か）百四十八センチで、体はスレンダー、流麗な曲線を描いている……と言えば聞こえはいいが、はっきり言っちゃえば幼児体型。出るものは全く出ていない。しかも、今来ているブレザーは、高校で用意できる最小のサイズだ。それでも少しブカブカなのを見ると恐れ入る。沙鳥とは大違いだ。

「……夏哉君、今ものすごぉーく失礼なことを考えてなかった？」

「そんなことないだろ、ただスラッとした、メリハリのない体だな

ーと」
「――ッ、夏哉君！！流石にそれは言っちゃダメだよ！！」
転んだ状態から立ち上がり、俺に怒りをぶつける。
「お、ちゃんと立てんだ。どっか痛いとこないか？」
「えっ、あ、うん。大丈夫だよ、いつものことだから」
「そっか。でも気を付けろよ、いつか大怪我されちゃあ心配するからな」
「……うん。ありがと」
香苗の怒りも収まり、頬が少し紅色に染まっている。
俺は内心、思いっきりガッツポーズをする。香苗と会ってから三週間、ようやく対処法が分かってきた。成長って素晴らしいな、うん。目の前の少女を見て切実に思う、わたくし柊夏哉（ひいらぎなつや）であった。
ちなみに香苗は、よく転ぶ。何もなくても転ぶ。何かあっても転ぶ。
それから、言うの忘れたけど、俺たちは決して付き合ってはいません。これを忘れるな。これは後々最大の伏線に……ならないな。でもこれは事実だ。周りにはあんま信用されてない気がするけど。
「まぁ冗談はさておいて」
「その冗談で私はいっぱい傷ついたよぉ」
微妙に涙目になってるが無視。
正直に言って、その姿が可愛くて少し心がグラついてしまったのはここだけの秘密。
「沙鳥どうする？いつもならそろそろ来る時間だけど、外で待つ？」
「うん、待つ待つ」
と言うわけで、俺たち二人はもう一人の少女を待つため、名残惜しい学生寮から外に出る。
……クーラー涼しかったな～
「香苗さん香苗さん」

「どうしたの？」
「これは一種のいじめでしょうか？」
「なんで？」
「どうしてこんなクソ暑いなか外で立ちっぱじゃなきゃいけねぇんでしょうかねぇ！？」
時間にして五分。俺と香苗は、ずっと照り続ける太陽の下、アスファルトで焼き肉パーティーでも出来そうなほどの暑さに耐えている。確か気温は二十九度だった気がする。
しかも俺は学ランだから。下も黒だから。全身黒ずくしだよ。だからと言って、香苗を一人にしとくのは忍びないし、もうちょっと待っててあげようよ、なんて言われちゃったら待つしかないだろう。別に香苗のことを愛してると言うわけではないが。
と言うか全てはあいつが悪い。なんの連絡をしないで遅れるあいつが悪い。
「……沙鳥死んでくれねーかな」
無意識にそんなことを呟いた。すると突然、
「えええぇっ！？」
香苗の叫び声に、俺は驚く。
「香苗、どうしたっ！？」
「それはこっちのセリフだよ！？」
「は、俺！？」
「夏哉君、そんなことを思ってたなんて……」
「だから俺が何言った！？」
「まさか、私もそんな風に思われて……？」
「話噛み合ってねぇー！」
「いやぁぁぁぁ！！」
「それはこっちのセリフだー！！」
ハァハァハァ、なんだ？いったい何が起こってるんだ？理解不能だ。
すると遠くから、おーい、という声が聞こえた。俺と香苗は声の

する方へと顔を向ける。その時、チラッと見えた香苗の顔は、ひどく怯えているように見えた。それはそれとして、先程の声の主の顔が見えた。

「さと……」

「沙鳥ちゃん逃げて！！」

香苗が再び叫ぶ。

呼ばれた天雲沙鳥（あまくもさとり）は、何かなんだか分からないような顔をしている。

そりゃそうだ。そもそも、はじめからいる俺ですら分からないんだからな。

「ちょ、ちょっとカナっ！？夏哉、これどういうこと！？」

「俺も知らん！」

香苗はお世辞にも速いとは言えない足で、沙鳥のもとへと走っていった。

「ねぇカナ、どうしたの？」

駆け寄って抱きついてきた親友に、沙鳥は優しく声をかけた。

未だに興奮が覚めないでいる香苗。その次に驚くべき言葉を聞く。

「夏哉君が沙鳥ちゃんを殺そうとしてるの！」

「「はいぃぃぃ！？」」

いや驚いたね、まさか俺が沙鳥を殺そうとしてるなんて。

香苗は冗談なんて言うような子じゃないから、本気でそう思ってるのだろう。沙鳥もそう思ったのか、複雑な表情で俺を見てくる。

「夏哉どういうこと？まさか本当に……」

「いやいやいやいや、んなわけあるか」

「じゃあなんでカナがこんなこと言うのよ。カナが嘘ついてるとは思えないし」

「それには同感だけど、心当たりはないぞ」

香苗の顔を見る。

するとようやく、理由を話してくれた。
「だって、夏哉君が沙鳥ちゃん死なねーかなって……」
今日の記憶を反芻してみる。
……あぁ、なんか言った覚えがあるような、でも記憶が曖昧だ。きっと無意識に言っちゃったんだろうなー。
俺が言い訳を言おうとした矢先、沙鳥が俺の代わりに弁解してくれた。
「もぅ、カナったら。大丈夫だよ、夏哉がそんなこと本気で言ってるわけないってばー。多分私が来るの遅くなっちゃったから愚痴言っただけだと思うよ」
ごめんね、と謝る。
いや～、こんなしっかりした沙鳥見るのはじめてかも。最初に会ったときがこんなだったら、絶対惚れてたな。
沙鳥は美少女だ。もちろん香苗もそうなんだけどね。
でも沙鳥は、香苗と違ってスタイルは抜群だ。出るところは出て、絞まるところは絞まっている。その上、スポーツ万能と来た。どちらかと言えば、女子にモテるタイプだ。親しみやすい性格もあって、校内ではアイドル的な存在になっている。だけど俺の場合、沙鳥との出会いが微妙すぎたので、今のところ恋愛感情が持てない。仲のいい友達、てのがしっくりくる。
ところで香苗はというと、沙鳥によって、徐々に冷静さを取り戻していった。
「そう、だよね。夏哉君がそんなこと本気で言うわけないよね。ごめんね二人とも、迷惑かけちゃって……」
「もう気にすんなって。元はと言えば、俺が変なこと言っちゃったのが原因なんだし。俺の方こそ、ごめんな」
「遅れて来た私が言うのもなんだけど、学校に行こっか」
香苗の勘違いを解き、いざ麦谷高校へ行かんとする我ら一同であった。

第一話　《二章》二人の告白

「――でね、ご飯作ってたら遅れちゃったの」
「あ、そうだったんだ」
俺と香苗と沙鳥は、雑談しながら麦谷高校へ向かっている。立ち位置としては、俺と沙鳥が香苗を挟む形だ。ここでお互い手を繋いで私服に着替えると、身長的に親子のように見えるんだろうな。
「あ、そうだ。今日って魔法あったっけ？」
「うん、あるある。三現だよ」
「私苦手だから嫌だな～」
「こらこら～、そんな落ち込まないの。やらなきゃ上達しないよ」
「……じゃあ、沙鳥ちゃんも数学とか、いろいろ勉強しようね」
「むむむぅ。まさかカナが反撃してくるとは……。そんな悪い子はお仕置きだー！」
「意味分かんない――きゃっ、コチョコチョしないで～！」
……今、日常会話に『魔法』とか出てきて何この子達大丈夫？とか思ったそこのあなた。そうです。この子達は頭がおかしいんです。俺は違うよ、俺は正常。詳しくは、『頭がおかしくても大丈夫！誰でも簡単、ドキドキ魔法使いのなり方～ポロリはないけどチラリはあるよ～』第二十三巻を参照してね。
「……夏哉君大丈夫かな？急に空に向かって変なこと言ってるよ」
「……年頃の男の子だから、人には言えないような秘密がいっぱいなんだよ。カナ、絶対、頭おかしー、とか言っちゃダメだよ。相談とかされたら、きちんと対応してあげてね」
「うん。沙鳥ちゃんも、その、頑張ろうね」
「うん」
……どうやら今の考えが、口に漏れてたらしい。
これは、弁解の余地無さそうだな、どうしよ。
もう放っとこう。それより、冗談はさておき説明しなければ。俺

は（自称）何かと気が利くのだ。
まず、魔法を使える人は数少ない。麦谷高校の生徒とＯＢの人だけだ。何故麦谷高校だと言うならば、そこしか魔法について勉強出来ないからだ。
それと、一番重要なのは、『魔法がある』と言うことを、世間一般に知られてはいけない。こんなことを広めてしまったら、魔法を軍事目的とかに利用されかねないとかなんとか。でも魔法は適性のない人には使えないとか言ってたから、知ってても量産はできないと思うけどな。
麦谷高校の生徒はみんな魔法が使える。適性がどうのこうのってやつは、入学試験の時に判別されてるらしい。
では次に、魔法について。
魔法は四つの属性と召喚魔法と言うものがある。属性は火、水、地、風があり、これらを組み合わせて雷やらテレポートなどいろいろ出来る。なんでも出来るわけではない。
召喚魔法は言葉の通り、異界の住人を召喚する魔法だ。言葉は通じてるみたい、指示した通りに動いてくれるから。
とまぁ一通りの説明がこれで終わったけど、これでもう現実逃避が出来なくなってしまった。どうしよう。そうだ、こいつらの説明をしよう。
花街香苗は、前に言ったけどロリ。しかし、勉強はかなり出来て、入学試験ではトップで合格。人を見掛けで判断してはいけない、実に分かりやすい例だ。だがしかし、魔法だけは苦手、というか全く使えない。適性があるのに魔法が使えないのは、教師も悩まされている。
天雲沙鳥、こいつもちょっと話したから少しカット。見た目の特徴と言えばきれいな黒髪のポニーテールってところだろう。魔法はかなり使える。それこそ、今までの誰よりも素質があり、使いこなせる。教師からは少し贔屓にされている。
こんなすごいパーフェクト超人、というわけではなく、勉強はか

らっきしだ。まったくもって二人は正反対だ。
二人を横目で見る。こうやって二人を見ると、本当に美少女が揃っている。こんな二人と一緒に登校したり、バカやって笑ったりして、今はとても幸せだ。
俺の視線に気付き、二人は可哀想な人を見るような顔をする。
「夏哉君どうしたの？どこか具合が悪くなった？」
「大丈夫だよ、私たちはずっと夏哉の味方だからね」
人がせっかく誉めてるのに、変な気の使われ方をされている。今の二人の声は、今までにないような、とても優しい声をしていた。今はその言い方が微妙につらい。
俺は、さっきまで思ったことを言った。
「お前らほんと正反対だなーって、見た目も中身も」
無論あまり誉めない方向で。
この言葉を聞き、香苗は人を哀れむ顔から、怒る顔へと変貌されていく。
「夏哉君！私と沙鳥ちゃんを比べないでっていつも言ってるでしょ！」
私が劣ってるんだから、と付け足して、ぽこぽこ叩いてきた。
はっきり言って怖くも痛くもない。むしろ可愛く見える。
この瞬間、俺と沙鳥は、今までのぎこちない雰囲気が嘘みたいにアイコンタクトをする。
（沙鳥！）
（分かってるって！）
（しくるなよ）
（こっちのセリフ）
この状態でやることはひとつ。
「いっつー！ちょっと何すんだよ香苗！」
全力でからむ。
「ふぇっ！？」
「お前はいつからそんなに暴力的になっちゃったんだ？親の顔が見

てみたいよ！」
「え――」
「ちょっと何言ってんのよ！あなただってお父さんでしょ？それにこの子はお父さんっ子なんだから、こんな風になったのはあなたのせいよ！」
「え、えええぇぇぇぇ！？」
「いやいや、お前といた時の方が多かっただろ？だから、こんな風になっちゃったのは模範となったお前のせいだ！」
「何よ！」
「何だよ！」
「ちょ、ちょっと二人とも。喧嘩はやめな――」

「「子供は黙ってなさい！！」」

「うぅぅ、子供じゃ、ないもん！！」
ズキューン！！
俺と、恐らく沙鳥も、涙目の状態で上目使いをしている香苗に、心を撃ち抜かれた。
これが狙いだったとはえ、まさかここまでだとは思わなかった。
今の香苗は小動物を思わせるようで、すごい可愛い。超抱き締めたくなる。
だけどいかんせん、当たり前のことだが、俺は男で香苗は女だ。ただのクラスメイトを、しかも道のど真ん中で抱き締めたりしたら、変なレッテルを貼られてしまう。その上、こいつはロリだ。実年齢はどうあれ、見た目は中学生か、最悪小学生。そんなことをしてしまうと警察沙汰になってしまうのは避けられない。
抱き付くまいと必死に理性を働かせている中、となりにいる沙鳥は理性を無視し、欲望のままに香苗に抱きつき頬擦りをし始めた。
「あぁぁ～～～ん、カナぁ～～～♪メッチャ可愛いぃ～～～～♪」
すりすりすりすりすりすりすりすりすりすり

「さ、沙鳥ちゃぁん、人前だからやめてよぉ」
くそっ沙鳥の奴！あんな堂々と抱き付きやがって！
俺は周りを気にせず、頭を近くにある塀にぶつけ、抱き付きたくなる衝動を押さえつけながら沙鳥を恨む。いやそれより、なんで俺は女に生まれなかったんだー！？そうすりゃ俺だって抱きつけたのに！！
「な、夏哉君！？本当に大丈夫なの！？病院行ってきた方がいいんじゃないの！？」
そういえば俺は今、かなり危ない人として見られてたんだった。
今までが冗談だったのか、今回だけ本気で理解してくれているのか、沙鳥はここだけは否定してくれた。
「違うよカナ。多分夏哉のことだから、どうして女に生まれなかったんだー、そうすりゃ香苗に抱きつけたのにーって私のことを恨みながら、抱き付きたくなる衝動を押さえてるんだよ」
抱きついたまま、俺の思っていることを正確に伝える。つーか沙鳥、いつまで抱きついてる？それからなんで俺の思ってることが分かるんだ？エスパーか？
「残念、魔法使いだよ～」
「だからなんで分かるんだよ！？」
「ん～なんとなくかな？」
そんなんで分かったら苦労しねーよ。まさか魔法で心が読めるようになるのか？チート過ぎるだろ。
香苗の方に目を向ける。そこには頬を染め、少し俯いている。
「香苗大丈夫か？」
沙鳥も心配になって顔を覗き込む。
「……あのさ、夏哉君は、その、だ、抱き締めたい、の？」
「え、いや、そりゃまぁ……」
急に変なことを聞いてくるので、しどろもどろになって答えた。
どうしたんだ？
「……いいよ……」

「へ？」

「夏哉君なら、ギュって抱き締めてもいいよ……？」

は？今なんつった？いいよっていいってこと？でも常識的に考えてアウトだろいろんな意味ででも本人がいいって言ってるしというかその意味ってまさかいやいやまさかそんな訳でもでもこんな風に言ってくるんだしいやいや！

これじゃ埒があかないので、直接聞くことにした。

「な、なぁ香苗、それってやっぱ、その、告白……って受け取っていいわけ……？」

香苗は林檎のように耳まで真っ赤になり、小さく、しかししっかりと頷いた。

はっきり言って困った。告白自体はかなり嬉しい。でもしかし、こんな道端で、しかも登校中に言われても、どう対処していいのか分からない。もう一度言うけど、告白されたことに関しては本当に嬉しいんだからな。

この事は、さすがの沙鳥も驚いたようで、え、あ、え、うぇ、と言葉になっていない。……それにしても沙鳥の表情、どうも変な感じがする。ただ驚いたという感じではなく、なんて言うか、そう、聞きたくないものを聞いてしまったような、そんな感じだ。

まさかとは思うが……。

「沙鳥……」

「な、何？」

明らかに態度がおかしい。これは俺の仮説も、多少は当たってるかもしれない。

「お前も、だったり……？」

「――ッ！？」

あからさまに動揺をしている。この反応に、香苗もビクついてしまう。

「……あぁもう！そう、私も夏哉のこと好き！」
いつもより少し声を小さめにして、力強く告白をした。
これは自分でかなりの修羅場をつくってしまったかもしれない。

第一話　《三章》非日常への第一歩

今俺たちは、固まっている。
幸か不幸か、今この道は三人しかいない。
俺は悩んだ。
こんな状況は初めてで、何を言えばいいか分からなかった。考えて出てくることじゃないのは、なんとなく理解していた。
だから俺は、思っていることを口にする。
「……あのさ、その答えもうちょい待っててくれないか？」
「「！？」」
二人はこの言葉を、一番聞きたくないだろう最悪の意味にとらえてしまった。だから二人とも顔が真っ青になってしまった。
「あ、振るとかそういう意味じゃなくてさ、答えを先延ばしにしてほしいんだ」
「……どうして？」
香苗が聞いてくる。
俺は息を整える。
「どっちが好きか、っていうのがよく分かんないのと、もし選んじゃったら、もう一人と離れるって言う意味だろ？」
あっ、と香苗と沙鳥は顔を見合わせる。
「その、できれば俺はまだこの三人で一緒にいたいんだ。どっちかと付き合ったら、お前ら優しいから、二人きりにしてくれるだろ？完全なわがままだけど、そうしてくれないか？」
俺は頭を下げた。こんなひどい答えは、二人望んでいないと思う。
色々と言われると思っていた。
しかし、俺の耳に聞こえてきたのは、二人の、楽しそうな笑い声だった。
訳が分からず顔をあげてみると、そこには本当に笑顔があった。
「フフ、なんか夏哉君らしいね」

「そうだね、ちゃんと私たちのこと分かってくれてるし。私もまだカナとは離れたくないな」
「えっと……許してくれるの？」
「許すも何もね～」
「うん。別に怒ってないよ。私の方こそ、変なこと言っちゃってごめんね」
まさか許されるとは思ってなかった。こんな答え方は、ただの逃げだ。みっともないったらありゃしない。
それなのに二人は笑ってくれた。
少しの戸惑いはあるが、気持ちはいささか楽になった。
「あ、だったらいっそ一夫多妻制の国にでも行くか？」
俺は幸福者だ。
「私さんせー♪ねぇカナー、どんなとこがある？」
こんな素晴らしい人たちが、俺のことを好きになってくれて。
「えーっと確か――」
こんな幸せな日常が、いつまでも続くと思っていた。

思っていたのに――――――

それは、道の上に転がっていた。
そこは、俺たちが三週間ほど使っている通学路。
あまりにも不自然に、しかしまばらに増えてきた他の通行人は、それがあることが当然のように『その物体』を通り過ぎる。そんな光景は、どうみても異様だった。
なんだあれ？
率直にそう思った。あんなのは普通ではない。もちろん、俺がおかしくなったわけではない。
「なぁ、あれなんだと思う？」
俺は『その物体』を指差す。もしかしたら、町内の催しなのかも

しれない。
「え、あれって？」
「ん～、強いて言えば道路？いや空気かな？」
「そういうのを、聞いてるんじゃないと思うんだけど……私も見えないけどね」
おいちょっと待て。
「何言ってんだよ？あの黒いやつだってば」
再び、二十メートル先のものを指す。
「何言ってんだよ、はこっちのセリフだってば。なんもないよ」
「夏哉君、本当に大丈夫？学校休んで病院行く？私たちついていくよ」
物凄い心配されてしまった。
二人――特に香苗――は冗談は言っても嘘はつかない、と言うかつけないから、見えないと言うのは本当なんだと思う。
そうだとして、あれはなんだ？見えてないのは、二人だけではないらしく、他の通行人も駄目のようだ。なるほど皆が何も言わないわけだ。
「夏哉には何が見えてるの？」
「……なんか黒い布みたいのが上にかかってる。中身は見えないけど」
「ねぇねぇ、ホントになんか見えてるんだよね？」
「ああ、もしこれが俺のためにやってくれてる大掛かりなドッキリとか、俺に恨みを持ってる誰かが、幻術と言う嫌がらせとかじゃないんだからな」
恨みと言ったら、沙鳥といつも一緒にいるから、嫉妬されてることぐらいか。
「ちょっと待ってて。……、ここ一帯はそういうのは使われてないよ。町全体でのドッキリなんてあり得ないし……私たちをからかってるんじゃないんだよね？」
「今回に限っては、絶対ないと断言出来る」

「だったら……」
「「だったら……？」」
沙鳥の言葉を待つ。今のこいつの顔は真剣そのものだ。何かに気付いたらしい。
期待していると、ついに沙鳥が高らかに叫ぶ。
「夏哉が見てるのは女の子！その子を助けることで、いろんな事件に巻き込まれると言う、主人公フラグなんだよ！！」
ババーンという効果音が聞こえてきそうなほど、堂々と自信満々に言った。
しまった。俺は忘れてたよ。こいつは正真正銘のバカだって言うことを。
知識で勝ってる香苗が分からないのに、こいつが知っている確率なんて低いに決まっている。
香苗も俺の考えにシンクロしたのか、同時にため息をつく。
「ちょっと近づいてみてくるわ」
「夏哉君大丈夫？……頭」
「まだ引きずるのそれ！？」
まさかここまで重症に思われてたとは思わなかった。
半ば逃げるようにして、『その物体』に近づく。何よそのため息感じ悪ー、という文句は完全無視。
近づいてみてみると、それはほんの僅かに動いていた。大きさは一メートル五十センチくらいで、黒い布からは四本の、少し折れ曲がった棒状のものが出ていた。
色は肌色、棒状のも先には、それぞれ五本のさらに細い棒が――――
「これ、人間じゃねーかッ！？」
そう、黒い布の下にあった『その物体』は、人間だった。その下に、大量の液体が浸っている。

第一話　《四章》謎の少女

人が倒れている。
それを認知したとき、どうすればいいか分からなくなった。
顔は分からない。黒い布が、フードのように頭を覆っている。
怪我をしていた。
それは少し離れたところからでも分かった。その人を中心に、液体が溢れ出ているからだ。
だけど、それを理解していても動けなかった。
溢れでている液体は、恐らく血だろう。それなのに、その人から出ている液体の色は、緑。明らかに人間のものではない。
ならなんだ？動物だってあんな色の血液はあり得ない。もしかしたら、懐に持っていた緑色の液体をこぼしているだけか？
「……うっ……」
呻き声を聞いて、考えが吹き飛んだ。
すぐに駆け寄って、倒れているそいつを抱える。
（！？なんだこいつ、軽すぎるだろ！？）
抱えて感じたのは、人間としてはあり得ないたった十五キロほどの重さだった。
本当にこいつはなんなんだ、という疑問をひとまず追いやり呼び掛ける。
「おい、大丈夫か！？」
「……ん、……あ、……――ッ！？」
そいつは目を開け、俺を見た瞬間突き飛ばし、俺と十メートルほどの間を開けた。怪我人とは、人間とは思えないほどの力で。
それによって頭に被っていた布から素顔が見えるようになった。
そこにいたのは女の子だった。見た目は俺と同じくらい。髪は金色で、瞳の色は翡翠。とてもきれいな美少女だ。髪は布を羽織っているので、正確には分からないが、恐らく長い。

そんな中、一際目立っているものがある。
それは耳。
その他のどのパーツも人間と同じなのに、耳だけは違った。
彼女の耳は、よく漫画で見るエルフや妖怪のように尖っている。
人間ではあり得ないことだ。
「貴様、何故私が見え――」
言いかけて、少女は倒れてしまった。今ので相当無理してしまったらしい。
「おい、しっかりしろ！どうしたんだよ！？」
俺の呼び掛けにも、ピクリとも反応しなくなった。
まずい、どうしよ、どうすればいい、どうすれば――――――
「夏哉君どうしたの？」
後ろを振り返ると、香苗と沙鳥がいた。
そうだ沙鳥だ。こいつなら魔法でなんとかなるかもしれない。
「沙鳥！今マズイんだ！！かなりすごい怪我してるからまほ――ムグッ！？」
沙鳥に口を押さえられた。
「夏哉落ち着いて。まずひとつ、私は何も見えないから何がなんだか分からない。もうひとつ、ここは外だからそういうのは禁句。最後に、今の夏哉はかなり痛い人に見られてるから」
淡々と告げられた沙鳥の言葉に、徐々に冷静さを取り戻していく。
この際痛い人になるのはもうどうでもいい。いや駄目だけど。
でもそんなことより、まずはこの子が先決だ。よく考えると、こいつは人間ではない。
だったら、こちら（まほう）の法則が通じるかどうかなんて分からない。
「沙鳥ありがとう。もう大丈夫」
「そっか。じゃあ聞くけど、どうしたの？」
ひとまず二人に状況を話さなければ。

俺は倒れている少女を抱え、香苗達をつれ人目につかない、細い道へ行く。

香苗と沙鳥に、今の状況を話す。さすがの香苗も真剣に聞いてくれている。

「……じゃあ、夏哉以外誰にも見えない美少女が、緑の血を流して倒れていると、そしてその子はかなり危険な状態と、そういうこと？」

「要約するとそうだ」

普段の沙鳥だったら、『ほら言ったでしょ！私の言った通りのフラグが立ったー！』と騒いでいることだろう。こういうときに、真剣に俺を信じてくれる二人は嬉しい。

俺は背負っている少女に目をやる。息が荒い。

「問題はどうすればいいかだ。こいつは人間じゃない、だから魔法が効くかどうかも分からない」

「ねぇ夏哉君、ちょっといいかな？」

「どうした？」

「私達にはその子見えないけど、触れるのかな？」

「そういやそうだな。今手の上にいるから触ってみて」

二人は、恐る恐る手を伸ばす。

その手は、大怪我をしている少女に触れ――ずに通り抜けた。

「「「……」」」

沈黙がその場を支配する。

数秒後、その沈黙を破ったのは香苗だった。

「駄目、みたいだね」

「うん。夏哉、どうなってる？」

「香苗は喉を、沙鳥は足を貫いてるよ」

ビクッと体を震わし、手を引っ込めた。今のは俺が悪かったな、反省。

でも、俺しか触れないということは分かった。
本当にこいつは何者だ?見れず触れず人間離れして、幽霊なのか?全然分からん。
そんな中、香苗がひとつの可能性を提示する。
「もしかしたらだけど、その子召喚獣だったりしないかな?」
「あー、そういう考えかー。可能性はあるけど見た目が女の子そのものだし、なんで見えないんだって話があるし、召喚した人も近くにはいなさそうなんだよな」
召喚獣とは、召喚魔法で召喚された生き物のことだ。
この召喚獣は、見た目がこの世のものではない、妖怪のような姿をしている。
異界の住人と呼んでる理由のひとつがこれだ。実際問題、召喚獣が異界の住人かどうかなんて分からないんだよね、向こうしゃべれないから。
俺の言葉に納得し、少しへこんでしまった香苗。
「そうだよね。ごめんね、変なこと言っちゃって」
「いや、俺の方こそ全部否定してごめん」
これは第一候補としておこう。
「ねぇ、一通り話は聞いたから学校に行かない?魔法が効く効かないも校内じゃないと意味ないし、召喚獣だったとしたら先生がなんとかしてくれるかもしれないし」
沙鳥が妥当な案を出す。実際それくらいしか出来ないしな。
「じゃあ行くか」
さすがにお姫様だっこじゃつらいから、背負って運ぼうとする。

ヌメッ

「ぬをおぅっ!?」
俺の叫びに驚く二人。本当に人気のない場所でよかった。
「どどどうしたの夏哉君!?」

「ヌメって、背中が今ぬめって！！」
「なに言ってんのよ？」
「だから背中がヌメってしたんだよ！！」
二人に背中を見せる。
だか二人はそれでも、頭の上の？を消さない。
「何もないよね？」
「なんもないね」
なんだって？と言うことはこいつ等が見えないもので、ヌメッと生暖かいものといったら……。
「……マジか？」
「今度は何っ？」
「……こいつの血液が俺の服を通り抜けて、じかに俺の肌に触ってる」
「え、嘘、ホント！？」
「さすがにこの状況では嘘つけねーよ」
沙鳥がかなり驚いてる。香苗も驚いてるようだけど、声を出すほどではないらしい。むしろ、何か納得したようだ。
「ということは……」
「香苗、なんか分かったのか？」
「うん、その子、『私たちが触れない』んじゃなくて、『夏哉君しか触れない』んだと思うの」
「……なるほどな」
「え、何？どういうこと？二人で納得しないでよ～」
沙鳥はまだ理解してないみたいだ。全くバカなんだから。
「つまりね、その子はこの世界にあるものは触れないの。……倒れてたって言うことは地球自体は触れるみたいだけど。だからね、服とか鞄とかも触れないんじゃないかって」「……分かったかも」
こんなに分かりやすく説明をしたので、沙鳥も理解できたんだろう。

「ということは、もし夏哉が背負ってる子が裸だったら、二人は裸同士でくっついてるってことだよね？」

ブフゥ――――――――――ッ！？

「な、テメ沙鳥、お前何！！」

とんでもないことを言われ、言葉にならない。

仮にも俺のことが好きだって、五分前に言ったばっかなのに、どうしてこんな例えを使えるんだ！

「……夏哉君。どうなのかな？」

「うわぉ！？こんなこえぇ香苗見たことねぇ！！安心してください香苗さま！そんなことは一切ありません！ちゃんと白いワンピースみたいなのを着ています！！」

「……本当に？」

さらに怖くなった。ダメだ、もう耐えられそうにない。

「本当です、信じてください香苗さま！！」

土下座する勢いで言いまくった。もしこの子を背負ってなければ、土下座しているだろう。

背筋が凍るような思い、というのを今身をもって体験してしまった。これからは本気で怒らせないようにしなければ。

それなのにあのバカが、

「そんなこと言っちゃって、私たちが見えないことをいいことに、あんなことやこんなことをしちゃってるんじゃないの？」

「ちょ、沙鳥何言い出し――」

この答え方はダメだったな、これじゃ図星だって思われそうだ、と後悔したのは二秒後。

「夏哉君」

笑ってる。笑ってるよこいつ。なのに全然笑ってない。どす黒いオーラ満々だよ。

人間は、触れずに人を殺せる。

これも身をもって体験してしまった。今日は初体験がいっぱいだ

な。
　はっきり言って、ここまで沙鳥を、いや、人間を恨んだことはない。沙鳥が香苗に抱きついたことなんて比ではない。
だから俺は……
「さ、沙鳥、ちょっとこっち来い」
　震える声で、沙鳥を呼び掛ける。
　俺の意図に気付かずに、沙鳥は一歩前に出る。
　重心が前にかかった瞬間、沙鳥の手を握り引っ張る。
「ふわっ！？」
　何が起こったのか分からず、変な声を出して体を俺の胸へとうずめる。
　さぁこうなった日には、
「――ッ！？……へぇ夏哉君やっぱり沙鳥ちゃんを選ぶんだね。そうだよね、私なんかより沙鳥ちゃんの方が綺麗で可愛くてスタイルもいいしね。でも夏哉君、答えは後に出すとか言っておきながらそんなことやるんだ。ふぅーん」
　多分これで百パーセントの怒りを出せたと思う。
　沙鳥の顔は、これ以上の恐怖なんてこの世にはありません、勉強でもなんでもやるのでどうか助けてください、という顔をしている。
　俺の恐怖を感じてくれてなによりだ。
　さて、この後やることは決まっている。
「「すいませんでしたーーーーーーーーーーーー！！！！」」

第一話　《五章》アンという名

俺達は少しはや歩きで学校へ向かっている。
目的地までもう少しというところで、少女は目を覚ました。
「……んんっ、……」
「お、気付いたか？」
周りの人に聞かれないように小声で話す。
「――――ッ！？貴様！！」
俺の背中で暴れだす。
「わっ、ちょ、待て！落ち着け！俺なんもしないから！」
「その子気付いたの？」
後ろから声が聞こえる。
香苗だ。その右隣には沙鳥がいる。今の香苗は、いつも通りの可愛らしい女の子に戻っている。沙鳥はまだ顔色が悪い。
「ああ、そうなんだけど……ちょやめい！髪は引っ張るな！傷口開くぞ！」
ピタッと、少女が動きを止めた。
「傷口……そうか、私は生きているのか……」
なんか変な雰囲気になってしまった。
多少は冷静になってくれたので、この機会に色々と聞いてみる。
「なぁ、お前は誰だ？なんで俺にしか見えないんだ？お前は人間じゃ――」
「貴様は」
俺の疑問を遮られてしまった。
「貴様は何故私が見える！？何故私に触れる！？何者なんだ！？」
こっちが聞きたいことをほとんど言われてしまった。俺の話全く聞いていないのか。自己中のわがままお嬢様だなこいつは。
でもこういうことを聞くってことは、この子にも予想外のことだったようだ。

俺は反抗せずに質問に答える。
「何者だって言われたら、人間の夏哉って答えればいいのか？なんで見えて触れるのかの方は俺にも分からない」
「人間、だと……！魔族か聖族ではないのか！？」
「？なんだそれ？俺は真人間だけど」
そんな人間が、などブツブツ呟いている。
その表情からは驚きと、ほんの一瞬だけ喜びの表情を浮かべた気がした。
そう眺めていると、少女が再び、少し落ち着いた風に質問してきた。
「おい貴様人間と言ったな。だったらここは地球で間違ってないか？」
「まぁ確かにここは地球だけど、もしかして宇宙人？」
「……そうか。私は、ようやくこれたのだな」
また無視かよコノヤロー。
さすがにほんのちょっとイラッときたので、文句を言おうと少女の顔を見ると、

少女の頬に一粒の水滴が伝っていた。

俺は息を飲んだ。その姿は、あまりにも綺麗で見とれてしまった。
そこにいたのは、体重が十五キロしかなく体から緑の血を流している正体不明の生き物ではなく、感動のあまり涙を流してしまう、俺のよく知る人間そのものだった。
「貴様、確か夏哉とか言ったな」
彼女の声でハッとなり、我に変える。
「あ、ああ……」
「何故私を背負う？何が目的だ？」
「目的って言われても、傷ついてるお前を助けようとしか言いようが……」

「見ず知らずの私を、か？」
「放っとけないっしょ、普通」
「そうか……」
なんか、ようやく会話らしい会話が出来た気がする。ちょっと感動。
「あ、そういや名前聞いてなかったんだけど」
「……き、貴様に名乗る名などない」
まだまだ心開くには時間がかかりそうだ。
「えぇっと、じゃあなんて呼べばいい？」
「知らない、勝手にしろ」
さてどうしよう。人に名前をつけるなんてしたことないし、初めて会った人だから変な名前なんてつけられない。
必死に悩んでいると、ふと、ひとつの名前が浮かんだ。
「アン」
「ん？」
「アンって呼んでいいか？」
「アン……」
そのまま黙り込んでしまった。気に入らなかっただろうか？まさか、この名前の由来に気付いてしまったのか？
そんなことはあるはずないのに、ついそんな不安を抱いてしまう。
少女は小さな声で言う。
「意味は？」
「意味？」
「この名前の意味はなんだと聞いている」
「いや、え、無いけど……」
「ではどうしてこの名前にした？」
「ん～、響きがいいなと思ったから……？」
もしかしたら殺されるか？
そんな風にビクビクしてると、背中から小声で俺の考えた名前を何度も呟く。

「気に入った」
「そっか、じゃあよろしくなアン」
「……」
「どした？」
「……よ、よろしく、でいいのか？」
ほんの少しだけ頬が赤くなっている。
アンと打ち解けることが出来てよかった。
と、すっかり二人のことを忘れていた。
「そうだアン、今後ろにいる二人はでっかい方が沙鳥で、ちっさい方が香苗な」
香苗と沙鳥のことを軽く紹介する。
「夏哉君！ちっさいって言わないでよ！……あの、私花街香苗です。よろしくお願いします、アンさん」
「えー、でっかい方の私が沙鳥でーす。アンちゃんよろしくね」
香苗が少し怒りぎみに、沙鳥は恐怖から抜けたのか、ちょっと楽しげに言う。
言い終わると、アンはとても驚いていた。
「お、おい夏哉！こいつらも私のことが見えるのか！？」
「いや、二人には見えてないよ。ただいるよって言っただけ」

「目に見えないのに信じてるのか……？」
「そうなるな。ほんと嬉しいことだよ」
またもやアンは驚いている。なんだか知らないけど、こういう考え方は特殊らしい。それとも俺が変なことを言っちゃったのか？
「あの、大丈夫か？」
どんな聞き方だよ俺。
「あ、ああ」
おお、返事してくれた。
少し考えさせてあげようと前を向くと、約一ヶ月で見慣れてきた麦谷高校の校門に到着した。

第一話　《六章》魔法と奇法

「じゃあ沙鳥、頼むぞ」
俺、香苗、沙鳥、アンの四人は、教室には向かわずに学校の体育館裏にいる。少しじめじめしていてお世辞にも良い場所とは言えないが、誰もいないし来ないので、こっそり何かをするには最適な場所だ。
ここで何をするかというと、当然アンの治療だ。その方法は魔法。俺には治癒魔法なんて使えないが、過去最高の魔力を持っている沙鳥なら使用可能だ。
「いいけど、私アンちゃん見えないよ」
「そこはあれだ、俺が手を握るから」
あ、ちょっと赤くなった。やっぱり好きな人に手を握られると嬉しいんだな～（↑完全他人事）。
香苗の方を向いてみると、何が言いたいか分かるほど顔に出ていた。
「……香苗はまた今度な」
「！？……うん……」
羨ましそうな顔から、瞬間湯沸し器のように顔を真っ赤にした。
「アンはまだ平気か？」
俺は隣で横になっているアンに聞いてみる。
ほんの少し前に、壁に寄りかかろうとしたら、壁をすり抜けてしまい頭を地面に打ち付けてしまったときは笑った。アンには少し怒られたけど。
「ああ、というよりこのくらいの傷ではまだ死なない」
そうだったのか、ちょっと必死こいて損したかな。
激しい運動をしなければまだ平気らしい。怪我を直すことにはこしたことはないけど。
「じゃあやるか」

俺は沙鳥の手を掴みアンの傷口へと手をやる。
沙鳥は手に魔力を集中させ――ようとして何もしない。
因みに手に魔力を集中させると手が光る。つまり今回は光らなかったと言うことで、
「治癒魔法ってどうやったっけ？」
ここに来て爆弾発言。
何こいつ、嫌がらせ？なんでここに来てそんなこと言う？だったら分かったとか言うな。分からないって言えたチャンスあっただろ。
しかしそこは香苗、治癒魔法の知識はちゃんとある。
「沙鳥ちゃん、水と地、１：２だよ」
「あ、思い出した思い出した。ありがとね」
沙鳥は礼をいい、今度こそ手に魔力を集中させる。
「なぁ夏哉、これから何をするつもりだ？」
「いやなに、アンの怪我を直そうと思ってな」
アンは驚きを通り越して呆れている。
「……忘れているようだが、私は貴様以外何も触れないのだぞ。それなのにどうやって傷を直すと言うのだ？」
「忘れてはないよ。まぁこれが成功するかどうか分かんないんだけどさ、やらないよりはマシかなって程度だし。それにこれはちょっと特殊なものだから、もしかしたらいけるかもしれないんだよ」
ふぅん、と納得してくれたのかもう何も聞いてこない。
「じゃあやるよ」
今度はしっかり輝いた。沙鳥の手からは青とも土ともつかない、なんとも不可解極まりない色の光が生じている。手を包むほどの光だ。
その光がアンの傷口に触れる。
すると、沙鳥の顔が安堵の表情を浮かべる。
魔法はアンに効いているようだ。
俺はホッとひとあ――
「何故貴様が奇法を使っているっ！？」

アンは激昂して起き上がり、沙鳥に掴みかかろうとしていた。
「はぁっ!?ちょっ待った!」
とっさのことで、ついアンを羽交い締めしてしまった。その衝撃でアンの傷口から血があふれでる。
「あ、悪ぃ……」
「夏哉!貴様これはどういうことだ!?何故こいつが奇法を使える!?人間ではなかったのか!?それとも騙していたのか!?どうなんだ!?」
傷が開くのもお構いなしに一気に捲し上げる。
「待てアン!一旦落ち着け。そんな一気に言われても分からん。一つずつゆっくり言え」アンは叫ぶことをやめた。
部外者二人は何がなんだか分かっていないご様子。
「……何故沙鳥は奇法を使える?」
少し警戒を込めた口調になってしまった。せっかく築き上げてきた関係がぁ(泣)。
「えぇっと、素質があるから……?」
「なんだその疑問形は?それと素質とはなんだ?」
「あーその、詳しくはよく分かんねーんだよ。先生に『君たちは魔法を使える素質がある』って言われて、実際魔法が使えたから凄ぇって感じで、ほとんどの人がそう思ってると思うよ。魔法は六十年前くらいから使われるようになった」
ん~、伝わっただろうか?
アンは、今までにない驚愕の表情が出ている。
「そんなふざけた話があるか!私達が産み出した奇法を人間ごときがたった六十年前から、しかも凄いからって理由だ――!?」
急に話をやめてしまった。
その表情は驚愕や怒りから、後悔へと変わっていく。
「す、すまない。お前たち人間のことを悪く言うつもりはなかったんだ。なんて言うか、その、あまりにも信じられなくて、本当にすまない」

「や、いいんだけど、もしかしてまほ――奇法ってかなり危ないものだったり？」
「いや、そういう副作用なものはないが、疑問に思わないのか？どう考えても普通ではないだろ？」
「そう言われたらそうなんだけどさ、人間っていうのは理解できないのはあんま深いことは考えないんだよ、全員じゃないけど。それで不思議なことには好奇心に負けて、興味本意で関わっていくんだ。それが安全で、害がないと思うと考えなしに使っていっちゃう。それが人間なんだよ」
　かなりくさいことを言ってしまった気がする。だんだん恥ずかしくなってくる。考えなしに行動して、後に後悔してしまうのも人間だ。
　こういうのは分かりにくいと思ってたが、アンは成る程な、と納得して頷いている。
「理解できたの？」
　正直にいってさっきの説明は分かりにくいと思う。
「まぁ大体な。やっぱり私たちとは根本的に考え方が違う」
　何が、と思ったけど、それを聞く前にやることがあった。
「それより早く傷直さないと」
　沙鳥も待ってました、という感じで準備ＯＫだ。
　俺は再び沙鳥の手を傷口にあてる。
「そういえば香苗、今何時？」
「（……やっと話に参加できた！）今十九分だよ！」
うん、前の呟きは無視しよう。俺に聞こえてるということは、恐らくみんなにも聞こえてると思うけど。
　それはさておき、時間的には後十五分くらいだから、ちょっと急ぎ目にしなければ。
「怪我が直ってるの分かるか、アン？」
「ああ、かなり癒される。後十分くらいで完治すると思う」
「そっか、そりゃよかっ――」

「夏哉、あなた何してますの！？」

第一話　《七章》秘めたる想い

「夏哉、あなた何してますの！？」

俺達の会話に割って入ってきた。四人とも、声の方へ目をやる。

一瞬マズイ、と思ったけど、すぐに聞き覚えのある声だと気付く。

「真樹、どうしてここに？」

「馴れ馴れしくわたくしの名前を呼ばないでくれません！」

この、漫画などでよく見るお嬢様口調の少女は早乙女真樹（さおとめまき）。実際こいつはお嬢様で、早乙女総合病院の社長の孫娘らしい。らしいというのは、こんな分かりやすいお嬢様が知り合いにいるのがいまだに信じられなくて、本人には本当に申し訳ないが、あまりにもベタすぎて真偽を疑うってしまう。

髪型は背中の真ん中まで伸ばしたストレートで桜色、目は少しつり上がっているが顔はとても整っており、香苗や沙鳥、アンにも劣らず美少女だ。

「冗談はおいといて、本当になんでこんな人目のつかないところに来てんだよ？」

「それはこっちのセリフですわロリコン！！」

「ロリコン！？」

そんなことなんでこいつに言われなきゃ――そうだな、言われてもしょうがないかもな。

チラリと香苗を見る。

ずぅ～～んと、そこだけかなり暗いオーラというか雰囲気というかそんなものが漂っている。この場所もかなり陰気なので暗さ倍増。

「いつまで沙鳥様の手を握っていますの！」

ビシッと指を差された。

そうだ、俺以外のみんなはアンのことは見えない。となると、はたから見れば俺たちは、教室にも行かずにこんな人気のないところ

で手を繋いでる男女。つまり逢い引き？みたいな風に見られる。
沙鳥はこの学校ではアイドル的存在。そんなやつと普通である俺がこんなところにいれば、しかも握手ではなく手首を握っているところを見られては、無理矢理つれてきた風に見られる。
真樹は、呼び方で分かるように沙鳥ＬＯＶＥであり、（自称）一番尊敬している。だから沙鳥に変な虫がつかないように、親衛隊――事実そういう人はたくさんいる――のようなことをしている。
親衛隊？が今一番危険視している人物は、俺と香苗。理由はいうまでもなく、四六時中一緒にいるからだ。登下校時や昼食時など、様々。嫉妬にも近いものかもしれない。
そんな俺がやっちまってるのだから、真樹の怒りは当然だろう。
今の状況は誤解しか生まない。だから俺は誤解を解こうと必死になる。
「言っておくがこれは誤解だ」
「これのどこが誤解なのですかゴミクズ！！」
ゴミクズとは酷い言われようだ。
しかし、俺もここで引き下がれない。アンの怪我を直すのに必要なことだ。納得してもらわないと。
「あー俺が憎いのはよく分かったから、もうちょい待ってくれないか？すぐ済ませるから」
「――！？これから何をする気ですかこの変態ッ！！」
事態が悪化してしまった。
真樹の怒りが頂点にのぼり、右足を振るう。その先は俺の腕。
見事にクリーンヒットして激痛が走り、沙鳥の手を離してしまう。
というか普通女の子がスカートで、しかも男の目の前で足をあげるか？見えなかったけど。
俺は左手で蹴られた右腕に触れてうずくまる。
そこに、今まで黙っていた人物が動いた。
「貴様、夏哉に何をする！！」
アンだった。

ほんの少し前にあったばかりで、本当の名前すら教えてくれないのに、俺のことで怒ってくれるのは本当に嬉しい。
アンは怪我も気にせずに、真樹に殴りかかる。
「おいアン、待て！」
それはやりすぎだろと、アンを止めるために右手を出す。
このとき俺とアンは忘れていた。

アンは誰の目にも見えないことを。
アンはこの世のものに触れないことを。

アンは真樹の顔を殴ろうとして、それが叶わずにすり抜けてしまい、バランスを崩して転んでしまった。
俺はアンの服を掴もうとして、それが叶わず、

むにゅっ

右手が、女の子特有の柔らかい双山の一方を掴んでしまった。
あ、真樹って着やせしてるんだぁ。あっはっはー。
ゴキッ！！バキッ！！ベキッ！！
三方向から鈍痛がする。
こうなるとは分かってたよ、こうなるとは。唯一の救いは四方向じゃないってとこかな。
でも最近の女の子って力あるなー、もしかしたら俺死んじゃうかも。
しばらくして衝撃がなくなった。
「二人とも行くよ」
沙鳥は香苗と真樹を、どこかの組のボスのように引き連れてフェイドアウトしていく。
一瞬だけ俺を見た三人の目が、ゴミを見るような冷たい目だったのは気のせいだと思いたい。

その場に残ったのは、痛みで動けずに地面に這いつくばっている俺と、何が起こったのか分からないといった顔をしているアンだけだ。

「な、夏哉、今何が起きたんだ？何故香苗と沙鳥と、真樹、だったか？その三人がいきなり殴ってきたんだ？」

あ、だから殴ってこなかったのね。

「女の人はな、男に胸とか尻とかを触られたら怒るもんなんだ」

「そうなのか？」

「そうなんだ」

「では何故触られてもいない香苗と沙鳥が殴ったのだ？」

「許可もなく男が胸を触ると女の敵になっちゃうんだよ」

「では今の夏哉はこの世の女の全てを敵に回したということなのか？」

「なんか凄い大事になった気がするけど、まぁそうなるな」

アンはうつむいて、今にも泣きそうな顔をしている。

「本当にすまない」

「いいよ、気にするな。すぐになんとかなるさ。それより怪我、平気か？」

「あぁ、完全ではないが傷口は塞がったし痛みも引いた。沙鳥は本当に凄いな」

アンが腹にあった傷を撫でる。

「あのさ、そろそろ俺の質問に答えてくれないか？お前は何者だ？」

「……分かった、話す。でも……私の名前は言わなくていいか？言いたくないんだ」

俺は首を縦に振る。

「私は魔界という異世界から、ここへ逃げてきた」

この世には魔界、聖界、そして地界、つまり地球という三つの世界がある。

この三つの世界にいるものには、それぞれ特徴がある。
魔界にいる魔族は奇法と呼ばれる現象を引き起こす能力、聖界にいる聖族は高度な道具を作り扱う能力、地球にいる人間は他人との絆を築き上げる能力、それぞれがそれぞれの能力に長けている。
世界はお互いがお互いに干渉出来ないが、それには例外がいる。
神と呼ばれる存在だ。
神は他の世界でも姿を確認出来るし、触れることも出来る。
そして神が他の世界の神を下すと、その世界は下した神のモノとなり、神以外の者でも下された世界に干渉できるようになる。下された世界の住人は神には逆らえなくなる。
そこで、魔界の神が狙いを定めた世界が?地球?。
アンはそれに反対した。
『地球を無理矢理支配するな』と。
しかし当然のこと、たった一人の意見で世界の意見が変わるわけがない。
アンは罪人とされ、魔界すべての敵となった。
アンは逃げた。その先は地球。
「私はこの世界で、アルクシア様の依代を守りに来た」

「アルクシア様と依代って?」
「アルクシア様とは魔王のことだ。名前の意味は『全てを統べる』。依代はこの世界にいるアルクシア様が憑依するのに必要な人のことだ」
「ちょっと待て、どうしてその依代が必要なんだ?確か神って他の世界でも干渉、つまり魔法とか使って人を倒せるってことだろ?」
「確かにアルクシア様はこの世界に干渉できるが、この世界にとっては異物だ。世界は異物を極端に嫌う。そのため、アルクシア様の力が三分の一くらいまで抑えられてしまう。人は殺せても神は倒せない」
「ということは、その依代を使うと異端ってことにならなくて、力

は制限されなくなるのか？」
「そういうことだ」
「なるほど、じゃあもうひとつ、魔界の人たちはみんな異世界に行けるのか？」
「……これは説明しにくいのだが、私はさっき聖界は道具に長けてると言ったな。その道具のなかに、異界を見る鏡と異界に行く扉がある。それを聖王は魔界に持ってアルクシア様にあげたのだ」
「あげたってまたなんで？」
「それは、よく分からない。とにかくそうなって、アルクシア様はその高度の技術を欲した。その後どうなったか分かるか？」
「……まさか聖王を下そうと？」
「そうだ、戦争をした。幾度も幾度も飽きることなく。そして少し前ようやく、神二人が相討ちで重症になり戦いは幕を下ろした」
「じゃあなんで地球を狙う必よ――おい、まさか地球手に入れて戦力ＵＰしようとしてるんじゃねーだろうな！？」
「……その通りだ。いつ開始されるかは分からないが、近い時期だろう」
「なぁ魔王って重症なんだろ？そんなやつがすぐに来るのか？」
「ああ。戦争が終わったのは、この世界でいう六年前だ。私たちにしては短いが、この期間あれば半分は回復できるし、魔族の奇法を無理矢理奪えばほとんど直る」
「……そうか」
俺は絶句した。
今までの常識が覆された。
正直信じられないし、信じたくない。そういうことはマンガだけで十分だ。
でも……、
「貴様は私の言うことを信じるのか？私の言葉は、お前からしたら戯れ言もいいところだろ？無理に信じなくていい」
「いや、ちゃんと信じるよ」

「……どうしてだ、どうして信じられる？会ったばかりだというのに」
「俺は魔法が使えるから、普通の人よりはそういう耐性があるしな。それに……」
少し間をあける。
「それに？」
ひとつ深呼吸をして息を整える。
「アンがそう言ってるんだ。それこそ会ったばかりの俺のために怒ってくれた、信じるには十分だよ」
「……」
「……」
体育館裏に沈黙が起きた。
五秒くらいした頃、アンが沈黙を破った。
「私は……私は人間ではない、化け物だ。姿形などいくらでも変えられるし、さっきの傷など直さなくても一時間ほどで完治する」
アンは震える声で、今にも泣きそうな顔で言う。
「私は人間より遥かに勝ってる。一人でもどうにでもなる」
もしかしたら今までがいつも一人で、寂しかったのかもしれない。
「私は化け物だ。そんな私を信じてくれるのか？」
今まで誰かに頼りたくて、でも誰にも頼れずにいたのかもしれない。
「化け物（わたし）が、化け物（わたし）より弱い人間（なつや）に頼っていいのか？」
誰よりも絆を求めて、その絆を捨ててでも他人の絆を救おうとしたのかもしれない。
そして、彼女を救う役目を得たのが、俺。
俺は救うべき少女の頭にポン、と軽く叩く。
「いいんだよ。お前は化け物なんかじゃない。誰かのために怒ったり泣いたり出来て、ちゃんと自分の思ったことを伝えられる。アン

は十分人間らしいよ。俺なんかでよかったらいくらでも頼ってくれ」
アンは顔をくしゃくしゃにして、嗚咽を漏らしながら涙を流す。
今まで溜め込んでいたものが、ようやくここで吐き出すことが出来たのだ。
一番望んでいたものを手に入れることが出来たのだ。
だから俺は守ってあげよう。
ずっとこいつの絆であってあげよう。
俺はアンを抱き寄せる。赤ちゃんを抱くように優しく。
「安心しろ、もう一人にはしないから」
孤独から解放させてあげるために。
アンも俺の背中に手をまわす。
「……ひくっ……ぐずっ、……あり……がと……ひくっ……ひくっ」
繋がりを求めるように強く、それでいて優しく。

キーンコーンカーンコーン……

HR開始のチャイムが聞こえた。俺は遅刻決定だ。
でも、
一人の少女が救われるなら安いものだ。

第一話　《八章》襲来

俺は今、廊下に立たされている。
理由は言わずもがな、一現目を三十分も遅刻したからだ。ちなみに授業は五十分間。
一現は現国、この先生は風紀に厳しい。しかもかなり昔が好きなのだ。だからこんな古典的かつ、漫画でしか見たことがないような『廊下で立つ』という罰を与える。
隣にいるアンがばつの悪そうにしている。
「すまない。私のせいでこんな……」
「気にするな、どうってことないよ。それにちょうどいいや、さっき思い付いた質問していい？」
教室内に聞こえないように小声で喋る。
「なんだ？」
アンの顔が真剣になる。
「依代っていただろ？それは誰だか分かってるの？」
「いや、分からない、多分誰も」
「分からないって、じゃあどう探すんだ？」
「……勘？」
「そんなんで世界救えると思うなっ！」
「い、いや待て！実際アルクシア様も分かっていないようなのだ。ただ時期になれば呼ばれる、としか言わない」
俺は深いため息をつく。世界の救世主様が勘で動くなど聞いたことがない。運や偶然はありそうだけど。
「じゃあもうひとつ、なんやかんやで話がそれてた気がするんだけど、結局魔族のやつらはいつでも地球にこれるのか？」
「そういえば言ってなかったな。魔界にある扉をくぐれば誰でも来れる。それを使うには二十分ほどの時間が必要だがな」
「じゃあさっきの傷ってアレか？お前を殺しに来た刺客が？」

「そうだ、まぁこのくらいは覚悟の上だ。向こうが邪魔者を排除しに来るのは分かっていたしな」
歯をくいしばる。
俺はその刺客に怒りを覚えた。魔界の常識なんて知ったこっちゃねぇ。大切な人を傷つけられるのは、絶対に許せない。
でも、ここで怒ってもしょうがない。まずはやるべきことをしないと。
「うん、大丈夫だ。ちゃんと俺も協力する」
「……」
急に黙るアン。
どうしたのだろうか、俺が何か言ってしまったのか？
俺が記憶の海にダイブして失言があったかどうか探しているとき、か細い声が聞こえた。
「あ、あの、本当に無理しなくていいんだぞ？別に私を手伝わなくても誰も攻めることは出来ない。規模が大きすぎるし、何より危険だ。私一人でだいじょう――」
「ていっ！」
「ふきゃっ？！」
俺はアンに脳天チョップをお見舞いした。
……さっきのアンの声は可愛かった。
「？？？」
「俺はさっき頼っていいっつったよな？それにお前は一人で世界救えんのかよ」
「それは、その……」
「さっきのチョップは一人だけでなんとかしようとした罰だ。ちゃんと俺を頼れ、一人より二人の方がいいだろ」
アンが少し驚き、そしてすぐに微笑む。
「そうだな」
「分かればよろしい」
「何がだ？」

突然、後ろから第三者の声が割り込んできた。
俺達は振り返る。そこには、いつの間にか終わったのか教師用の現国の教科書を持った五十代の人がいた。つまり教師。
やべぇ、汗が止まらねぇ。今日はあれだ、厄日だな。うん、決定。
「柊、お前何故立たされているのか自覚しているのか？」
「あ、はい。十分反省してます……」
「ほぅ、では何故廊下で叫んでいるのだ？」
石原ティーチャーのこめかみがピクピク震えている。あそこまで血管が浮き出ている人を見るのは生まれて初めてだ。
「え、えっと……」
必死に言い訳を考える俺。
見えない魔族の女の子と会話してました、なんて言ったら、即病院送りをされてしまう。
「友達が自殺したいと言ってきたんです！」
思い付きを言ってみた。
「……はぁ？」
何を言っているんだこいつ、みたいな顔をする。
「だから、自殺したいと言ってる友達が俺に電話してきたんです！それを説得するためについ叫んじゃったんです！」
「……」
「……」
「……そうか」
「先生、分かってくれ―」

「授業中に携帯を使うとはいい度胸だな」

「てねぇぇぇぇ！！」
むしろ状況が悪化してしまった。今日はやることなすこと裏目に出ている。どんだけ最悪なんだよ今日は……。
まぁ最後のは自業自得のような気もするけど。

「柊は宿題五倍だ！！」
「マ、マジッスか……」
俺は項垂れる。
これは、説教が無くって喜ぶべきなのか、元がどれだけの量か分からない宿題を、五倍もやらなきゃいけないことを嘆くべきなのか、誰か教えてくれ。
石原先生はその場を後にして、職員室に向かった。
教室の中からは、変な目で俺を見たり、大爆笑したり、とにかく俺の敵――その中には香苗や沙鳥も含む――ばかりしかいない。
隣にいるアンだけが俺を慰めてくれる。もうどっちが人間だか分かんねーや。
いい加減項垂れてるのも目立ってしまうので、自分の教室である一年三組の席に戻る。
俺の席は一番後ろの真ん中辺りで、香苗と沙鳥の間。今日だけは地獄の空間だ。因みに真樹は一年五組。これだけは本当に、本当に助かった。
今の機嫌を確かめるために、香苗に話しかける。さっきので多少和らいだかもしれない。
「あ、あの～香苗？次の授業ってなんだっけ？」
「数一、自習、変態」
「変態！？変態って何！？もしかして俺に言ってる！？さすがにそれは酷いだろっ！！」
「やめて近づかないでもう喋りかけないで」
「嫌なわりにはちゃんと受け答えしてくれるのね」
ピクッと肩が動く。そして顔をそらしてしまう。
あ、こりゃもう話聞いてくれないな。
諦めて次の次の授業について考える。三現目は魔法の実習、初めての召喚魔法をするはずだ。
「なぁアン、あと一時間したらうちらの魔法の授業があるから見てなよ」「ん？ああ――あああああぁぁぁ――――――――――っ

！！」

「うをぉっ！？」

アンが急に絶叫したので、俺もつい叫んでしまう。あ、また変な目で見られた。

「お、おいアン！どうしたんだ！？」

誰にも聞こえないよう小声で言う。

「……夏哉、私は重大なことを忘れていた」

「重大なこと？」

アンが気まずいような顔をしている。

「私は、刺客がいると行ったな？私を殺すために」

「あ、ああ……」

「そいつらはな……」

――――――――！！

遠くから急に変な音がする。叫びにも似た声だった気もしたが、何を言っているのか意味が分からない。

その音を聞いたアンは顔が真っ青になっていく。

「魔力を探知出来るんだ」

第一話　《九章》人と魔の共同戦線

走る。
ひたすら走る。
ただ走る。
俺にはもう走ることしか出来ない。
どこに向かって？そんなのは決まっていない。
理由？そんなのはひとつしかない。
「ねぇアンさんアンさん」
「な、なんだ？」
「確かに俺は協力するって言ったよ」
「そうだな」
「でもこの後どうするんだよ！？」
後ろから変な生き物が襲ってきてるからだ。

――――十分前――――

「そいつらは、魔力を探知出来るんだ」

俺は唖然とした。
え、ちょっと待って、ていうことは何？今の音って……、
周りを見渡す。誰もさっきの音について何も言わない。
つまりこの世界に干渉していない。
叫びにも似た音は体育館の裏で聞こえる――沙鳥が治癒魔法を使った場所だ。
廊下に出て、体育館裏を見れる窓から顔を出す。
そこにいたのは人間、ではなくどう表現していいか分からないようなものだった。

遠目から見ても分かることは、大きさ。人間よりも二倍くらいはあるかというでかさである。そんなのが五体いる。

形。五体が別々だ。人間の姿をしているものもいれば、蛇のような体に二又の頭、犬のような毛むくじゃら、腕が四本頭が三つ足が二本の配置がばらばらで人間としてみれば足しか合っていないもの、足が無数にある百足のようなもの。

色。それは何故か皆統一していて焦げ茶色一色。

……本当に俺のボキャブラリーのなさには嘆かわしい。

あんな化け物じみた姿をしてるやつらに面識はないのだが、どこか見覚えがある気がする。

「アン、あいつらか？」

隣にいるアンに呼び掛ける。

顔が真っ青だ。

「そうだ、あいつらが、刺客」

「魔族の、っとー……あ、奇法だ、奇法って人間に効くのか？」

「絶対に効かない、といつもなら断言できるのだが、奇法が使える人間に対しては分からない。まったく地球は私の常識を裏切る」

なんだろう、何故か笑っている。呆れて笑うしかないといった風だ。

「最悪の場合を考えた方がいいよな」

「私はそう思う」

「だよな……」

俺は軽く屈伸をして準備をする。

いつでも走れるように。

「じゃあ行くか？」

「分かった」

俺は走って四階の廊下から一階の下駄箱を目指す。

下駄箱についた。靴に履き替える。外に出る。刺客たちはまだ気付いていない。校門まで走る。息を整える。

「じゃあ魔法使うぞ」

「分かった」
俺は全身に力を注ぐように集中する。
俺が得意とする魔法属性は風。
自分の手のひらに風の球体があるようにイメージする。
一、二秒ほどで、手のひらに風の渦巻く球体が出来た。イメージ的には螺〇丸？
その球を中心に、まるで小型台風のように風が吹きすさぶ。
真横では、やはりこれは奇法だ、と感心？している。
そしてその球体を空に掲げ、打ち出す。

――――現　在――――

「ア、アン……ハッハッ、後ろ、着いてきて、ハッ、るか？」
「ついてきてるが、もうじき追い付かれるぞ。空飛ぶのは走るより早いし疲れないし」
クソッ、魔族はいいよな空飛べて！
アン曰く、そういう能力はデフォルトらしい。
ヒュー、と後ろから音と共に熱が近づいてくる。
火炎だ。後ろにいる刺客さんたちがアン――と俺――に向かって放ってきた。
「真後ろから二発、左斜め後ろから二発。初弾五秒後着弾。右にずれて」
アンの指示に従いながら避ける。
今はこの繰り返し。
「ちか、くに、公園……、あるから、そこで戦お……」
「もう喋らなくていいから走れ。それと、今から一方的に私の考えを言うから聞いてくれ」
コクり。

「依代についてなんだが、まず奇法、魔法が使える者がそうだと思ってる。そして私は、あ、あの、言いにくいんだが、お前がそうなんじゃないかと思う」

……確かに、それは俺もそう思う。あの麦谷高校のなかでも、異界の住人に干渉できるというイレギュラーは俺くらいしかいない。俺が魔王の依代になる確率は高い。

俺は必死に思案していると、見覚えのある場所に出てきた。

洛輅公園。

約二百メートル四方の大きな土地があり、木々がたくさん生い茂っている。ベンチや遊具も充実している。

都合のいいことに、洛輅公園には誰もいない。

「ア、アン、こ、ここでなんとかしよう」

ぜいぜい言いながら公園の敷地内に入り、膝に手をつき息を整える。

来た道を振り返った。

そこには炎弾が三発、その後ろにさらに四発、一番後ろに化け物五体。

百足みたいなのは地面を這っており、残り四体は空を飛んでいる。おもに――というか確実に――百足以外が炎弾を放っていて、その百足はただ這っているのみ、何か重要な役割を持っているのだろうか？

ふと、その化け物を見ると既視感を抱く。

なんだ？どこかで見たことがある……？じゃあどこだ？マンガ？いや、そういうのじゃない。二次元じゃなく三次元で見たはずだ。

どこだ？結構最近だった気がする。確か高校にはいった辺りの……

「――ッ！！思い出した！！」

「な、なな、な、な、なんだ急に！？」

「アン、お願いがある。ちょっとだけでいい、時間を稼いでくれないか？もしかしたら何か分かるかもしれない」

「時間って、どのぐらいだ？」

「分からないけどなるべく早く済ませるし、自分でも避けれたら避ける。だから頼む！」
言いながらポッケから携帯を出す。
「……分かった、信じてるぞ」
「さんきゅー」
かける相手は登録の一番最初。
五体が公園に到着するやいなや炎弾二発、風で作った鎌鼬二発を繰り出す。
通話ボタンを押す。
『プルルルルル、プルルルルル――』
頼む、早く出てくれ！
アンは俺を背にして、必要最低限の箇所を土の壁で守る。地属性は防御力が高い。
『プルルルルル、プルルル――ブツッ！』
き、切られたぁ！？
くそっ、あいつまだ怒ってやがる。
ぐっ！っとアンの呻き声が聞こえる。
見ると二の腕辺りの黒い布が切れている。切れた場所から見るにかすった程度のようだ。
再び電話をかける。
『プルルルルル、プルルルルル、プルルルルル』
まだ出ないのか！
突然腕に痛みを感じた。
くっ、流れが当たったか。
「夏哉！？」
駆け寄ろうとするアンを左手で制する。ただかすっただけだから、このくらい平気だ。
『プルルルルル、プルルル――もしもし？』
「もしもし、沙鳥か！！」
ようやく出た！声から察するにやはり機嫌が悪い。

『なんの用よ変態』
「今そんなん言ってる場合じゃねぇんだよ！俺の話――っく！！」
ヒュン、と音がする方に目をやる。
前方約六十度から六発の水弾が俺に向けられる。
とっさに後ろに跳ねる。刹那、立っていた場所に六つの水弾が着弾。地面には穴どころか、芝生すら動かない。
『ちょっと夏哉！？今何やってるの！！』
「今はそんなのどうでもいいから真面目に俺の話を聞いてくれ！！今自習時間だな！？」
『そ、そうだけど』
「じゃあ香苗つれて魔法に詳しい教師に魔法について、特に召喚魔法の始まりについて聞いてこい！！今すぐだ！！大抵の教師はお前ら二人の質問ぐらい答えてくれるはずだ！！」
『わ、分かったけど……夏哉は大丈夫なの！？』
「かなりマズイから電話切る！俺のこと思うんだったら早く聞いて、俺の電話まで待ってろ！！」
電話を切る。
急いでアンを探すために辺りを見渡す。すぐに見つかった。状況は劣性、布はボロボロで素肌がちらほら見えていて、血も流している。
「アン、大丈夫か！？」
「今のままじゃちょっと厳しいな……」
――――――――！
――！
――――――！
――――――！
魔族たちがなにか話している。
「何言ってるんだ？」
「……『あの人間はなんだ？』『殺す！』『命令はあいつだけだ』『つい殺しちゃったらしょうがねーよなぁ！』ってところだ」

なんか、なんとなく分かってた気はしてたけど、過激だなあいつら。
「アン、実際のところどうだ？五人相手に戦えるか？」
「一人では無理だ。さっき説明したと思うが、私はこの世界に対しては異物だ。つまり全力が出せない、あっちもそれは同じだがな。それに向こうは私をギリギリ倒せる戦力を送り込んでる――逆に言えば、二人なら勝てる可能性があるということだ」
なるほど、もしアンのいう通りの戦力ならいけるかもしれない。
でもそれは前提があるからで、
「ごめん、はっきり言って俺はあんま戦力にならないかも。魔法もまだ一ヶ月もやってない、ド素人もいいところだ。これは厳しいかも」
「そうか、それは本当に厳しいが、一人でやるよりは勝てる可能性が高い、今度はちゃんと頼りにしているぞ」
アンは、まるで絶対成功すると分かっているかのように口元をあげる。どこにそんな余裕があるのか。
俺は力ではあまり役に立てないと思い、頭をフル回転させてどうすればいいか考える。
ピン！とひとついいアイディアが浮かんだ。
「アン、ちょっと耳貸せ」
「どうした？」
俺はアンを呼び、思い付いた作戦を伝える。
「ゴニョゴニョ、ゴーーニョゴニョニョニョ。ゴニョゴーニョ、ゴニョ……どうだ？」
「……うん、やってみる価値はあるな」
よし、と気合いを入れ、大きく息を吸う。
距離は十メートル強。
手に力を集中させる。
――――――――――――――！！
「「「「！？」」」」

アンが何かを発すると、化け物たちは体感温度が十度くらい下がったようにビクッと震え、互いに何か発する。
その隙を見逃すことなく、アンは脅威的な脚力で十メートルという間を一秒もかからず、たった二歩で詰めた。
早すぎた。一瞬残像が見えた気がして、本体を目で追うのがギリギリだ。
アンは一番近かった敵――蛇みたいなの――に狙いをつけた。
敵は未だ攻撃体制に入ってはいない。さっきの衝撃的な言葉に驚きを隠せていない。
右手に炎をまとわせ、二又の頭の片方を手刀で切り落とす。落ちた頭は炎に焼かれ灰になり、焦げ臭いにおいが鼻孔をくすぐる。
すぐさま蛇の切り落とされていない頭を掴み、そこから炎を伝わさせる。
頭が燃え始めた頃、そのまま手を離すことなくジャイアントスイングのように振り回す。
皆近くに集まっていたので、その餌食になる。
三回転ほどした後、全身に火が回った蛇を毛むくじゃらに向かって投げる。
毛むくじゃらはバックステップのようにしてかわす。
地面に落ちた蛇は燃え尽きて、何も残さず死んだ。
残り四体、依然不利な状態は変わらない。その上相手もショックから抜け出し、完全に戦いに集中した様子だ。
四体はアンを囲むように円陣を組む。
アンはどれから倒そうか思考を巡らせている。
敵が俺の存在を忘れた瞬間、あらかじめ空気中に作っておいた二つの風の刃の一つを、俺に背を向けている腕が四本あるやつに向けて放つ。
投擲した透明な刃――ほんの少し緑っぽく色づいている――は、一本の腕を背中に生やした敵に迫る。
相手はまだ気付かない。

刃は距離を詰める。……三メートル……二メートル……一メートル……

グサッ！！

風は、背中に生えた腕の人差し指と中指の間をきれいに二つに裂く。

切れた断面から見覚えのある、緑色の液体が飛び散る。

――――！

恐らく苦痛によっての叫び声をあげている化け物。

痛みを与えたものへと目を向ける、つまり俺。

目を向けると言うことは、アンから目をそらすということで、

ブンッと、

アンは一歩で敵に近づき、いつの間にか握っていた水の剣を振り上げている。

ザンッ！！

敵を一刀両断にする。

切った瞬間、俺はもう一つの風の刃を放つ、アンに向かって。アンは切るために使った力に逆らわず、そのまま前に倒れ込む。

アンの頭上、俺の刃が通過して、

ザクッ！！

後ろに迫っていた、ひとがたの敵の顔面にめり込む。貫通はできなかった。

だがそれによって動きを止めた。

アンは地面に左手をつき、片手ハンドスプリングのように回転する。

逆立ちになった一瞬、右手に持っていた水の剣を投げる。剣は人間で言うところの心臓部分に突き刺さる。

ひとがた化け物はそのまま倒れる。

アンが着地すると、そこに毛むくじゃらは無数の氷柱を叩き込んでくる。その軌道上には俺がいる。

アンはかわさず目の前に岩の壁を作り出し、氷柱を防ぐ。

ズズ、
アンの足元から突起物が出てくる。それはアンの顎に向かって一直線に延びる。死角からの攻撃は、さすがのアンもかわせない。
直に喰らいのけぞる。
その隙をつき、近寄っていた百足がアンに巻き付き、絞め殺そうとする。
「ぐっ……がはっ……！」
肺の空気を吐き出す。
「くそっ！」
俺はアンのもとへ走る。走りながら手に集中、鋭いナイフをイメージ。
右手にうす緑色で形状が十センチくらいのナイフの風をまとわせる。
視界の上にチラッと何か見えた気がしたので見上げると、巨大な氷柱を俺に向けて投げる毛むくじゃらがいた。
俺は左足に力を入れて、右に飛ぶ。
巨大な氷柱は地面に触れると、突き刺さらずに粉々に砕ける。
飛んだ後、再びアンに向かって走る。
毛むくじゃらはアンの作った壁の頂点に立ち、新たな巨大氷柱を作ろうとしている。今度はアンを狙っている。
アンまでは後四メートル、そこまで出せる限りの力で走る。
アンまで残り二歩、思いっきり右腕を振り上げる。上は見ない、間に合うと信じているから。
アンまで残り一歩、走ってる力も加え、百足を切るために腕を伸ばし下へ振る。躊躇はしない、アンまでは届かない長さのナイフだから。
ザクザクッ！！
――――！
百足が叫ぶ。
生暖かい緑の血液が飛び散り、俺の顔や学ランを通り越して腹な

どを濡らす。
　完全には切れなかった、ナイフの長さが足りなかったようだ。しかしそれで十分だった。
　アンは自力で百足を千切り、俺を抱えてその場から離れる。間一髪氷柱によって穴空きになることは免れた。
　アンは俺から離れ、空を飛んで毛むくじゃらに向かう。
　毛むくじゃらは、今度は炎弾をアンに向けて射つ。
　アンも炎弾で応戦する。
　炎弾と炎弾、互いが互いを相殺し、煙幕が出来る。その中にアンと毛むくじゃらがいるので状況が分からない。アンのことだから万が一はないと思うが、心配は心配だ。
　少しずつ煙幕が晴れていく。目をよく凝らしてみると、上の部分が明るく輝いている。
　煙幕がほとんど消えて、明かりの正体が分かった。
　巨大な炎弾だ。
　アンが生成している。大きさの直径は三メートル弱。それを毛むくじゃら一体のために投げる。
　毛むくじゃらは避ける間もなく炎弾を喰らい、消滅する。
「……終わった」
　つい呟いてしまう。
　こんな現実離れの戦いをしたのなんて当然初めてで、あまりにもすごい出来事で尻餅をついた。
　ダメだ、気が抜けてたてねぇや。
　空から俺に向かってアンが降りてきた。
　俺は頑張って右手だけあげた。
　アンも右手を前にだし、
　ハイタッチをする。
　ドサッと――音はしなかった――俺の横に座り込む。アンは身体中ボロボロだ。
「大丈夫か？」

「いや、病み上がりだからかなり疲れた、夏哉がいなかったら死んでた、ありがとう」
言って、もうボロボロになった黒い布を剥ぎ取って捨てる（ぽい捨て禁止ですよ）。
中に見えたのは、白かった半袖のワンピースで、したにフリルがたくさんついている。白かったというのは、緑の血液がたくさん染み込んでいて、逆に白の割合が少なくなってしまったからだ。
いやそれよりも……
「――!?ちょ、アン！お願いだから服どうにかして！」
今までの戦闘により、ボロボロになったワンピースは色々なところが破けていて、胸やら腹やら足やら、なんかエロいことになっている。
「ん?ああ、もうボロボロになってしまったな。面倒だからこのままで――」
「頼む、それはやめてください！出来ればちゃんとした服を、最悪素肌を隠してください！」
「?まぁ夏哉がそういうなら……だが今から作るのは面倒だから夏哉の服でいいか」
「は?俺の服って?」
するとアンは光に包まれる。
なんだ、何が起きるんだ?
光がだんだん消えていくと、驚きの光景がそこにはあった。

アンが学ラン着ていた。

「ええぇぇ!?ななな、なん、なんで、なんでぇ!?」
なんで服を着てるんだ！しかもなんで学ランチョイス!?……まぁこれはこれで似合っててていいんだけど。
「魔族は姿を好きに変えられるんだ。それの応用で、服程度ならイメージすれば作れる」

なるほど、だから見本のある学ランを来てるのね。
「だがあのときの作戦は正直助かった」
「あそこまで効くとは思わなかったけどな」
作戦とは、アンが言ったあの言葉だ。俺の言った通りに言ったのなら、こういったはずだ。
『ここにいる人間は、アルクシア様の依代だ！こいつが死ぬと地球は手に入らないぞ！』
俺たちの話で混乱してくれてよかった。あれなかったらこっちがまずかった。
「ところでアンはなんで俺たちの言葉が分かるんだ？世界違うのに」
「私は翻訳機を脳に埋め込んでるからな。意識するだけで色々な言葉を話せたり理解できたりするのだ」
「の、脳って……」
うん、聞いたら敗けだ。もう一日でいろんな耐性が出来てしまった。
「そうだ、沙鳥に電話しないと」
携帯を取り出す。時間を見てみると学校でてから四十分かかっていた。沙鳥に電話したのは二十五分前だから話しは終わってるだろうか。
沙鳥に電話をかけてみる。

第一話　《十章》大好きな人のため

なによ夏哉のバカ、なんで真樹の胸を揉むのよ！サイテー！わ、私だってむむむ、胸くらい、あるのに。

私は悶々としてた。授業なんて聞いてられない。

どうしてあんなことするの？夏哉アンちゃんのためにやってたんじゃなかったの？もしかして嘘？でも夏哉のあんな真剣な顔、初めて会ったときと同じだったし。

……

はっ！顔赤くなっちゃった！に、にやけてないかな？

あ、アンちゃん放っておいちゃった。大丈夫かな？私ちゃんと救えたのかな？

「そんなんで世界救えると思うなっ！」

ひぃっ！ごめんなさい！……って世界？なんで？もしかしてアンちゃんと話してる？じゃあアンちゃん平気なんだ、よかった～。

「……また柊か、みんな無視しろ、あいつは宿題二倍だ」

え、今日宿題あるの！カナに見せてもらわないと。

右をチラッと見る。

カナもこちらを見ていてくれて、もぅしょうがないなぁ～見せてあげるよ、みたいな顔をしている。

ほんと私はいい友達を持った。

でもカナのその表情とは別に、不安の色も混じっていた。多分夏哉のことだろうな。

やっぱりあれはやりすぎたのかな？夏哉なにも言わなかったけど、あれは事故だったのかな？

「じゃあこれで授業終わる、ちゃんと宿だ――」

「ていっ！」

「……宿題やってこいよ」

先生が教室から出ていく。

「分かればよろしい」
「何がだ？」
夏哉が先生に捕まった。周りが気にならないほどアンちゃんのこと想ってるのかな？
さっきの？世界？って言葉も気になるし……
もしかして、夏哉が？特別？になっちゃうの……？
それだけは嫌！夏哉にあんな思いはさせたくない！私は選ばなくていいから、カナでも真樹でもアンちゃんでもいいから、夏哉には？特別？じゃない？普通？の人でいてほしい！
夏哉がうつむいて教室にはいって、私のとなり、自分の席につく。なんか夏哉の顔が見れない。変な気持ちになる。
あ、私、嫉妬してるんだ。いきなりやって来たアンちゃんに、私とカナしか知らない夏哉を取られて、引き込まれそうで、でも何も出来ないから嫉妬してるんだ。
今、夏哉の隣には私じゃなくて、カナじゃなくて、アンちゃんがいる。
夏哉はそんな自覚はないと思う。
アンちゃんが困ってて、それが夏哉しか出来ないから動いてるんだと思う。
分かってる、分かってるのに。
……私はいやらしい、酷い女だな。
誰でもいいって思ってたのに、やっぱり誰よりも一番隣にいたい。
周りのことなんて気にしないでずっと一緒にいたい。
「うをぉっ！？」
ビクッと驚きで私の体が震える。
なんだろう、凄く嫌な予感がする。どうして急に変な声を出したの？普通の人だったら、ただのおかしいやつだって思う。
でも夏哉にはアンちゃんがいる。多分アンちゃんかとんでもないことを言ったんだと思う。
夏哉が立ち上がる。

私から遠ざかろうとする。
行かないで、お願いだから離れないで！ずっと私のそばにいてよ！
言いたい。言いたいのに今は理性が勝ってる。だから何も言えない。
夏哉は、多分アンちゃんと一緒に、廊下に出ていく。私の知らない夏哉になろうとしている。
あれ？？私の知らない夏哉？？
私って夏哉の知らないところってないの？夏哉は面白くて、いつも三人でくだらないことやって、私たちに意地悪してくるけど本当は優しくて、いつも私たちのことを思ってくれて……あれ？夏哉の好きな食べ物って何？中学の頃は何をしてたの？誕生日はいつ？血液型は何型？どんな女の子がタイプなの？
分からない。……私、夏哉のこと何も知らない。ほんのちょっとしか知らない。
私に、夏哉をとらないでって言う資格があるの？
分かんない。なにも分かんない。
私はどうしたいの？何がしたいの？
私は、夏哉と一緒にいたい。
でも私は一緒にいていいの？
夏哉は私が隣にいていいの？ううん、夏哉は絶対いていいって言う。そういうやつだもん。でも、夏哉　は一番だれといたいの？カナ？私？それともアンちゃん？
分からない、分からないよ。
私はどうすればいいの？教えてよ、ねぇ夏哉！

『ブ――――、ブ――――、』

「！？」
携帯のバイブが鳴る。思考を一時中断。
誰から？真樹、じゃないよね、今授業中だし。

携帯を取り出す。
そこに現れていた文字は、
『柊夏哉』
「――!!」
今一番話したくない相手だ。
『ブ――――、ブ――ブチッ!』
私は電話を切ってしまった。
ここで電話をしてしまったら、アンちゃんがメインで私がおまけになっちゃいそうな気がする。
今の電話、アンちゃんに関わってることなんじゃないの?アンちゃんのために私に電話してきたんじゃないの?私のためじゃなく、アンちゃんのために、
『ブ――――、ブ――――、ブ――――、』
また電話がなった。それがイラついてきた。
理不尽なのは分かってる、夏哉はただ人を助けようとしているだけなんだ、分かってるのに!
気持ちがコントロール出来ない。嫌な感情だけが心の中に積もっていく。
しつこいので、しょうがなく電話には出ることにした。
『ブ――――、ブ――、』
ピッ。
「もしもし?」
『もしもし、沙鳥か!!』
夏哉だ、すごい必死そうな声をしてる。
それがまた嫌だった。
「なんの用よ変態」
何言ってるの私?なんで夏哉に嫌われるようなことを言うの?嫌だ、こんな私嫌だ!

『今そんなん言ってる場合じゃねぇんだよ!!俺の話――くっ!』
夏哉の苦痛の声が聞こえた。
その声を聞いて、今までの考えが吹き飛んだ。
「ちょっと夏哉!?今何やってるの!!」
夏哉が今困ってる、私を頼ろうとしている。
助けなきゃ、私が夏哉を助けなきゃ!
夏哉が?特別?になろうとしてるなら、私も一緒に?特別?になってあげないと!
『今はそんなのどうでもいいから真面目に俺の話を聞いてくれ!!今自習時間だな!?』
あれ?
「そ、そうだけど」
『じゃあ香苗つれて魔法に詳しい教師に魔法について、特に召喚魔法の始まりについて聞いてこい!!今すぐだ!!大概の教師はお前ら二人の質問くらい答えてくれるはずだ!!』
なんでアンちゃんの名前が出てこないの?アンちゃんが大変で、アンちゃんを助けるために私に電話してきたんじゃないの?魔法?魔法とアンちゃんが関係あるの?もしかして私の勘違い?
「わ、分かったけど……夏哉は大丈夫なの!?」
『かなりマズイから電話切る!俺のこと思うんだったら早く聞いて、俺の電話まで待ってろ!!』
ブツッ!と電話を切られてしまった。
訳が分からない。
夏哉の状況が分からない。
夏哉の言った意味が分からない。
でも、
夏哉がピンチなのは分かった。
夏哉が私たちを必要としてるのは分かった。
私たちが夏哉を助けられることは分かった。
だったら動こう。

「カナ、ちょっと来て！」

現文の宿題をしているカナの手を掴む。

「え、ええ？沙鳥ちゃん？」

期待に答えないと。

嫉妬とか、イラつきとかもう関係ない。

大好きな人のために、出来ることをしないと。

第一話　《十一章》隠された真実

私たちは今誰もいない国語教室にいる。そこでカナに夏哉から言われたことを説明する。おふざけはなし、真剣に説明するし、真剣に聞いてくれてる。

「魔法の始まりって、なんで知る必要なんだろう？」

「私も分かんないし、それって授業で聞かなかった？確か六十年くらい前に実験で失敗してその代わりに魔法が使えるようになったんでしょ？」

そう、魔法は科学（サイエンス）によって産み出されている。

どんな実験で、どんな理屈は全く分からないけど、確かしら……？なんだっけ？しらなんとかさんだった気がする。しら……が？いや白髪は違う、失礼にもほどがある。

まぁとにかくその人が見つけたやつだ。

夏哉はなんでそんなことを調べろって言ったんだろう？

「……もしかして前提が違うとか？」

「前提ってなんの、カナ？」

「実験の副産物で魔法が作られたわけじゃない」

「え？どういうこと？」

「つまり先生たちは私たちに嘘を教えてるとしたら？そして本当のことを夏哉君が知ったとしたら？」

訳が分からない。

カナが言ってることは、ギリギリついていけてるし理解しているつもりだ。

でももしそうだったとして、どうして嘘をつく必要があるんだろう、どうして夏哉がその嘘に気が付いたんだろう――

「あ」

私はひとつの可能性に思い至った。
「アンちゃん……」
「うん、私もそう思う。アンさんがなんらかの魔法の本当のことについて知ってて、夏哉君にその事を言ったんだと思う」
あくまで仮定だよ、と付け足す。
そっか、やっぱ夏哉はアンちゃんのために……
ブンブン！と首を振る。
違う、今はそんなこと考えちゃダメ！
早く聞くこと聞いて教えてあげないと。
「よく分かんないけど、早く聞きに行こ。誰が詳しいかな？」
「多分教頭の不知火（しらぬい）先生だと思う。魔法を見つけた人の息子だし」
あ、そうだ不知火さんだ、魔法見っけた人。
カナ本当に知識あるな、尊敬しちゃう。
「よくいるところは……実験室だっけな？」
「そうなの？じゃあまずはそこに行こっか」
私たちは国語教室をあとにして、東棟と西棟の二つあるうちの一つ、東棟の三階にある科学実験室に行く。

「実験室到着、っと」
実験室前に到着した私たち。目の前には？科学実験室？というプレートが飾ってある。
ここは普通の教室より少し広い。生徒たちはもちろん、教師たちも魔法について研究しているので、設備は万全。
「私教頭先生に会いたくないな～。なんていうか、あの先生少しおかしくて、ま、ま、マックサテライト？」
「なにそれ！？マッドサイエンストじゃなくて？」
「そうそれ！よく知ってるね」
「常識だと思うんだけど……」
「まぁとにかく苦手なんだよ」

「本当にすごい科学者なんてほとんどいかれてるからね」
「カナ、今なにげにさらっと酷いこと言ったね」
「偉人なんてそんなものだよ。哲学者なんて、私たちが想像もつかないいかれた考えを持ってるからあんなに有名になったんだから」
「へ、へ～……」
「それより沙鳥ちゃん、先生と話してる間なに言われても怒っちゃダメ、絶対話を合わせるの」
「例えば？」
「夏哉君のこととか家族のことをバカにされても絶対に逆らっちゃダメ。私たちはあくまで聞く側だから主導権を握っちゃダメ、話をしてくれなくなる」
「分かった」
心を決めてドアを叩く。
ドンドン、ガラガラガラ
「「失礼します」」
私たちは中に入る。
そこには白衣を着た白髪の、六十くらいの男の老人が、色のついた液体の入った試験管を覗いている。
「お、おぉおぉ！君たちのことは知っておるよ！学力トップと魔力トップの二人だね！」
白衣の男、不知火教頭先生は、試験管を置いて私たちのもとへ来るや否や、右手で私の、左手でカナの顎に触れてくる。しわくちゃな手が嫌な感触を与える。普通の老人ではなんともないのに。
私は必死に感情を圧し殺し、会釈をするよう頑張るが、恐らく頬がひきつってる。
「それで、二人は何故ここに来ているんだ？授業はどうした？」
「授業は今自習ですので問題ありません。ここには、不知火先生にお聞きしたいことがあってきました」
カナが、大人を目の前にして堂々としゃべる。普段のカナとはまるで別人のようで、少し大人びてる風だった。

多分これは頭脳戦。いかに相手に不快な気持ちを与えず、且つ私たちが必要とする秘密な情報を聞き出すという駆け引き。

私にそんな芸当は出来ないので、カナにすべて任せる。

「ほぅほぅ、聞きたいこととは？」

私たちの顎から手を引いて自分の顎を撫でる。

「魔法についてです」

ピクッ、と不知火先生は固まった。

「学力トップの君が魔法の何について聞くというのだい？」

少し声がキツくなった気がする。本当にこれでいいの、カナ？

「魔法について、授業で習ったことや教科書に乗っていることは大体理解しています。しかし一つだけ分からないことがあります」

「なんだいそれは？」

「何故私たちが魔法を使えるかです」

え、何言ってるの？そんなの素質があるからじゃないの？

先生も目を見開いている。

しかしそれはほんの少しの出来事で、顔に手をやり高らかに笑う。

「ハァッハッハッ！！君はおかしなことを言うねぇ！そんなのは教科書にも、それこそ最初の授業で習ったことだよ！君たちには魔法を使える素質がある。だから魔法が使える、こんな簡単なことも分からないのかい君たちは？」

その通りだ。そんなことは私でも知ってる。

でもそれはカナだって絶対知ってるはず。その上でそんなことを言うんだから、本当に何か気付いたんだと思う。

私はカナを信じてる。

「確かにそれは私も知っています。ですがそれはおかしな点がいくつかあります。まずひとつは、その素質というのです。授業では約六十年前から魔法が使われるようになったと教えられました。しかし、何故急に魔法が使われるようになったのですか？その素質とい

うのは突然変異のように突発的に起こるものなのですか？少なくとも私は、過去の噂でも魔法を使ったことのある人というのは聞いたことありません」

「……」

「もうひとつは、不知火先生の父親の実験について。私たちは六十年前の実験の失敗したことによって生じた、偶発的な力を魔法、と呼ぶと習いました。そこまではいいとしましょう。しかし問題はそのあとです」

「なにが、問題と言うんだね？」

「この魔法と呼ばれるものは、機械を使って生じた力です。いや、もしかしたら機械ではなく薬品などで生じたものかもしれませんが、そこはいいです。どちらにしろ、なんらかの道具を使わないと生まれない力なのです、魔法というものは。しかし今私たちは道具も何も使わずに魔法を使えている、しかも使える者と使えない者の二つに別れている。教科書には実験のことも私たちが魔法を使えるようになった年が、同じ六十年前と記載されています。長くても一年やそこらで改良できるとは思えません。これはどういうことなんですか？」

ヤバい、私なんにも分からないや。カナのことは信用してるけど、私がまったく理解してないので不安になってくる。

不知火先生はものすごく真面目な顔をする。

「これは驚いた、最近の子供は知能が低下し、誰も気付かない低脳ばかりと思っていたが、どうやらわたしは君たちを見くびっていたようだ」

いちいち勘にさわるような言い方をしてくるなこのじいさんは。しかも私はなんも喋ってないのに頭いいみたいなこと言って――ってこれは誉められてるんじゃん。

「それで、君たちはどうしたい？」

「……どう、とは？」

「確かに君たちが言った疑問は確かだ。普通の人間なら誰でも辿り

着ける、普通の疑問だ。しかしこれを知ってなににになる？君たちにはなんのメリットもない」

「いいえ、私たちは将来魔法について携わりたいと思っています。そのために、少しでも真実を知りたい、というのは科学者としては当然では？」

あれ、私将来勝手に決まっちゃったよ。

先生はいかにも、珍しいものを発見したような顔をし、また笑った。

「ハァッハッハッ！いいねぇ、いいよ二人とも！こんなにもわたしを興奮させたのは魔法を見せられたとき以来だ！」

……一歩間違えると変態の言葉だよね。女の子を前にして？興奮した？なんて……。

「いいだろう、そんなに知りたいのなら教えてあげよう」

やったー！任務せいこー！カナほんとすごいよ！もぅさいこー！！

という感情は極力出さないようにしているけど、ついついにやけてしまう。

チラッと横目でカナを見ると、ホッとひと安心といった風に顔を緩ませている。

「まずは実験についてだ。六十年前、父がどんな実験をしたか分かるかい？」

「……いえ」

「私もちょっと……」

ようやく喋れたかも。

「そうだろうそうだろう、やはり凡人には分からないだろうな。おっと、別に気にしなくてもいい、ただ父がかなり狂っていたというだけだから、普通は理解できんのだよ。気にやむことはない」

あんたも十分狂ってるでしょ！！

ツッコみたい、本当にツッコみたい！

でも我慢しないと……あぁしんどい。

「父が行っていた実験とは……」

なんか無駄にためてる。そんなに重要なのかな？

「異空間転送装置の開発だ」

「……はぁ？」

つい変な声をあげてしまった。

だっていきなり？異空間？なんて言われてもあまりピンと来ない。マンガとかならよく出てくるような　設定でも、それを現実にしようなんて馬鹿げてる。

カナはというと、なにかを必死になって考えている。

「……それは、瞬間移動のようなものですか？」

先生は口を大きくつり上げ、否定する。

「いいや違う、言葉の通りだ。異空間、つまりここではない別の世界への転送を可能とする装置だ」

「なるほど……大体理解できました」

理解できたの！？

「そしてその実験は成功した」

え、成功？失敗したんじゃないの？

と思ったところで、カナがさっき言ってた言葉を思い出す。

『先生たちは私たちに嘘を教えてるとしたら？』

そうだ、私たちの持ってる知識は、偽り。そして今聞こうとしていることが、真実。

「まず父はその装置を使い、異空間のものを引っ張り出すことをした。そこに出てきたものは、なんとも得体も知らない、化け物だったらしい」

なんだろう、私なんか知ってるかも……。

「……召喚獣？」

召喚獣とは、召喚魔法によって現れた生物のこと。そして案の定、

「そうだ！のちに召喚獣と呼ばれる化け物がそこにはいた」

やっぱり、召喚獣のことだったんだ。でもなんでその話？なんか

繋がりがあるの？
「そしてその召喚獣は不思議な力を持っていた。それが、魔法だ」
「「！！」」
これには私もカナもかなり驚いた。私たちが使っていた魔法が、実は異世界のものだったなんて。
でもどうしてこの話を内緒にするんだろう？こんな話、信用されないと思ってるから？それとも他に、別の何かがまだあるのかな？それになんだろう、なんか違和感が……
「あの、質問よろしいですか？」
カナが聞く。
「なんだい？」
「あなたの父親の実験については分かりました、魔法のオリジナルについても。ですが、どうしてその魔法が私たちに使えるようになったんですか？」
そういえばそうだ、私たちが使ってる魔法はオリジナルじゃない、別の世界の技術の模倣だ。バカな私でも分かるけど、異世界は地球とはいろんな法則とかが違うと思う。その違う法則の技術を、どうやって地球で使うことが出来るんだろう？
「いい質問だねぇ、答えてあげよう。その事については、父も苦労したようだ。詳しいことは省くが、色々な実験をした。そしてひとつの結論に達した」
また遠回しに言う。さっさとはっきり言ってほしい、と思った。言わないけど。
「それは……？」
「化け物の一部を体内に取り込めば、異空間の法則が使えるようになるのではないか」
「え……？」
「そしてそれを実行した。日本中に薬と称し、国民のほとんどに飲

ませた。あとから生まれてくる子には、三歳になると飲ませるようにさせた」

「う、そ……」

隣にいるカナに聞こえるかどうかという小さな声で呟いて、自分の体を見る。ということは、私は召喚獣の一部が取り込まれている……？だから魔法が使える？

怖くなった。今まで考えなしに使ってたけど、私は魔法が得意ということは、一番人間から離れてるってこと？

私は？特別な存在？？

ぎゅっと、手を握られた。

握ってくれる人を見る。

カナがいた。

大丈夫、私は一人じゃない。

私を優しく包んでくれる手がある。もうあんな思いなんてしたくない。

カナが先生に確認をとる。

「では素質があるというのは、異界の住人の一部を取り込み、それが体内で消えずに残っている、ということですか？」

「物分かりが早くていい。そうだ、その通りだ」

私はよく分からなかったけど、カナはちゃんと理解できてるからいいのかな？

でもとりあえず、これで聞くことはもうな――

あ、分かった、違和感の正体。

「あ、あの～、ちょっといいですか？」

私はおずおずと手をあげる。

カナは少し驚いてる。

「どうしたんだい？」

「あの、召喚獣についてなんですが、そのなんとか装置で出てきた化け物が召喚獣なんですよね？」

「そうだが？」

「だったらどうして召喚獣は魔法が使えないんですか？」
違和感の正体はこれだ。入学したときに一度先輩に見せてもらったことがある。でもその召喚獣は一回も魔法を使わなかった。
これはおかしいと思う。
「それは分からない」
「え？」
その答えは予想外だった。この人のことだから、偉ぶって言うものだと思ってた。
「確かに異空間転送装置で現れた生物と召喚獣は同じ、正確には類似しているが、魔法は使えない。人間で異空間転送をする副作用だと考えているが、確証はない」
「そ、そうですか……」
「他には聞きたいことはあるかね？」
「いえ、もう大丈夫です。ありがとうございました、とても参考になりました。それではこれで」
カナが最後にしめる。
と、最後に先生が忠告してくる。
「この事は私と校長と理事長しか知らない。くれぐれも内密だよ、内密に」
キヒヒヒ、と意味ありげな風に笑う。
走りたい気持ちを抑えて科学実験室を出る。

東棟と西棟を繋ぐ渡り廊下、私たちはそこまで無言で歩く。
渡り廊下の中ほどまで来ると、緊張の糸が途切れる。
「「はぁ～～～～」」
二人して座り込んでしまった。
「沙鳥ちゃぁん、怖かったよ～！」
カナが私に抱きついてくる。少し涙目なのが超かわいい。
というかさっきまでとまるで別人だ。

「カナお疲れさま、ほんと凄かったよ」
「うん、私もあんな風になれると思わなかった」
「内容は理解できてる？」
「うん大丈夫」
携帯を取り出す。
時間を見てみるとあれから二十分くらいしか経ってない。もう一時間以上は経ってた気がしてたのに。

『ブ――――、』

「ふにゃあっ！？」「きゃあっ！？」
いきなりバイブがなって驚く私とカナ。
私、変な声出ちゃった！恥ずかしっ！！
危うく携帯を落としそうだったけど、なんとか握り返して落とさずにすんだ。そして私たちを驚かした正体は、

『柊夏哉』

私は通話ボタンを押してカナに渡す。

第一話　《十二章》依代

「――――分かった、ありがとな香苗」
『ううん、大丈夫。それよりも夏哉君は平気なの？』
「大丈夫だ、二人のお陰でなんとかなりそうだよ」
『そっか、じゃあ沙鳥ちゃんに返すね』
『……夏哉？』
「おぅ、ほんと助かったよ、ありがとな」
『……夏哉』
「ん、どうした？」
『あのね、夏哉一人になろうとしてない？』
「え？」
『一人で？特別？になろうとしてない？』
「ッ！？……大丈夫だよ、一人じゃない。アンもいるし、香苗も、お前だっていてくれるんだろ？だから大丈夫だ」
『……うん、分かった。終わったら全部話してね』
「了解」
ピッと通話を終了する。
「夏哉、最後のはなんだ？かなり意味深な風だったが」
携帯の近くによって俺たちの会話を聞いてたアンが質問する。
「悪ぃ、色々あるんだ。多分あとで話すから待ってくれ」
「？まぁよいが……」
俺はベンチに座って、さっきの戦闘の疲れを癒している。アンは座れないので立ちっぱなし。
さっき倒した魔族たちは何も残さず、文字通り消えてしまった。アン曰く、異世界で死んだ者は、世界によって消滅させられるらしい。
香苗との電話で、色々なことが分かった。凄く衝撃な事実を知る羽目になってしまったが、俺の知りたいことは聞けた。

俺の持ってる仮定が七割ほど確信に近づく。後の三割は、
「アン」
「なんだ？」
「俺たちの会話でなんか分かったことがあるか？」
恐らくこの異界の少女が握ってると思う。
「少しだけな。あの、なんとか装置というやつで現れた生物は恐らく、いやほとんど魔族だと思う」
「やっぱりそうか……ごめんな」
「何故夏哉が謝る？お前は関係ないだろ？」
「いや、人間代表として、さ」
「別に大丈夫だ。逆に言えば、魔族の誰かが実験台にならなければ夏哉には会えなかったし、私はそこで殺されていた。むしろ感謝しなければ」
「そっか」
ベンチから腰をあげる。そろそろ戻らないとマズイ、先生に何言われるか分からない。
体力はほぼ回復したから問題はない。精神問題もなんとか大丈夫。
「学校に戻るぞ、話は帰りながらで」
「分かった」
俺たちは何事もなかったような公園を去り、学校に向けて足を運びはじめる。
「アン、質問だ。今までに魔族の誰かが急に消えたっていうことがなかったか？噂でもいい」
アンは曲げた人差し指を口にあて、んーとうなっている。
「……確かにそんなことはあった。目の前にいたやつが消えたっていう報告は受けたことはある。だが消えたやつはすぐに戻ってきたぞ。そして妙なのは、消えた時の記憶が皆ない。おかしいことだったが、理解できなかったのであまり大事（おおごと）にはならなかったが」
「それは本当だな？」
「事実だ」

これで俺の考えが九割事実に近づいたと思う。
「なぁ、俺の考えを聞いてくれ、肝心なところは抜けてるけど、大体のことは筋が通るはずだ」
「本当かっ？」
「ああ、まず依代っていうのは魔法が使える誰かっていうのは確実だ、魔族の一部が入ってるんだからそれ以上の適合者はいないと思う」
俺の意見にアンは同意してくれる。
「それは私もそう思う」
「それで確認だけど、魔界の神は本当に『呼ばれる』って言ったんだよな？」
「ああ、確かにアルクシア様は言った」
「それで、俺たちが使える魔法のひとつ、召喚魔法っていうのが、魔族の誰かを無理やり地球に呼ぶってやつだ」
「……もしかして、アルクシア様が言ってた『呼ばれる』って、そのその召喚魔法とかいうやつで呼ばれるということか？」
「俺はそう考えてる。しかもその依代が神様を召喚するんだと思う。地球（ここ）に召喚されて依代を探すってことはないと思うんだけど」
「なるほどな。もしそうなら、すぐに地球にいる神にやられるな」
「俺の考えはここまでだ。どうだ、なんかおかしな点はあるか？」
「いや、確かに利にはかなってる。だが肝心の依代が……」
そう、それが一番重要なことだ。でもそれはまだ分からない。残りの一割はそこだ。
「俺もそこまでは分からないけど、最初から比べればかなり人数は減ったと思う。今までに神が召喚されたってことはないから、先輩たちはない。あるとしたら俺たち一年か、そのあとに来る麦谷高の生徒だ」
「何故そうなる？魔法を使えるものはここだけではないだろう？魔族の一部はいろんな所で体内に取り込まれたんだ。全員ではないにしても、かなりいると思うが」

確かにそう考えるとかなりの人口になってしまう。日本だけとはいえ、一億はいる。そんななかから探せ、は厳しいけど、これにひとつの条件が加わればその人数は激減する。その条件は、
「アン、地球ではほとんどの人が魔法を知らないんだ。死んだ人も合わせてだいたい二万人くらいしかしらないはずだ」
「何故言い切れる？それにその二万人という数は？」
「先生は『魔法を教えてるところはここしかない』って言ってた。ということは、もし素質があっても麦谷高に来ないと魔法という存在は知らないはずなんだ。そんで、その麦谷高校にいた生徒がだいたい二万人」
魔法なんて存在しない、そんなのあるわけがない。
それが今の人間の常識。
子供でもないのに、魔法がこの世に存在するなんて思っている人は頭がおかしい、そういう風に思うのが人間だ。
だから実際に、魔法があっても使おうとは思わない。
それが普通なことだけど、今の俺たちには都合がいい。魔法を使わないということは、魔界の神を呼ばないということだ。
「……そうか、それなら夏哉ではなかったとしてもかなり絞れてくるか」
「ああ」
とは言ったものの、まだ数が多いのは代わりない。
麦谷高に来なくても、なんらかの偶然で魔法が使えるようになり、召喚魔法で神が現れるという可能性もある。
依代の候補とはいっても、俺以外には見当もつかない。俺と同じくらいの特別なそんざ――――
「……ぁ……」
俺は足を止めた。
待て待て待て！！それには心当たりがあるんじゃないか！？
どうした？という声が聞こえたが無視。
考えろ、その可能性を否定するんだ！！

「……つや？……つや。おい夏哉！」
ハッとなって顔をあげる。アンが不安そうな顔で除き込んでいる。
「一体どうしたのだ、急に立ち止まって。なにかあったのか？」
ガシッとアンの両肩をつかむ。
「へ？な、どうし――」
「なぁ、神様って一番強いのか！？」
頼む否定してくれ！
「な、何を言っておる？そんなのは当然だろ」
「その神を呼ぶ方法って他にないのか！？」
頼む否定してくれ！
「そんなものあるわけないだろ。あって知ってたらもう言ってる」
「神は本当にここに来んのか！？」
頼む否定してくれ！！
「お前本当にどうしたんだ？何故急にそんなことを聞いてくる？」
「頼む答えてくれ！」
頼む、俺の聞きたい答えで答えてくれ！！
「……神は必ず来る、いつ来るか分からないがな」
最悪だ。
俺はアスファルトに膝をつける。
ダメだ、アンに聞けば聞くほど信憑性が高まってくる。
「夏哉、大丈夫か？何が起きてるのか私には分からない。だから私に教えてくれ」
「……力ってたくさん持ってれば、それだけ大きい力を出せるってことだよな？」
俺は最後の悪あがきをする。
「？？まぁ力の使い方を誤らなければそうだろうな」
「……神様を召喚するやつは、世界で一番強い生き物を召喚するんだから、並外れた力が必要だよな？」
お願いだ、違うと言ってくれ。
「そうなってくるな」

「神様を召喚する力って魔法だよな？」
お前は間違ってる、そんなわけないって言ってくれ。
「その召喚魔法というものの理屈は分からないが、魔法を使って行われるならそうだろうな」
……だったら心当たりは一人しかいない。
「……とり……」
「え？」
魔力トップで入学して、教師に、これほどの才能を持っている人は見たことがない、とひいきされてる少女。
「沙鳥だ」
「！？」
ここ一帯の空気が凍りついた。
「沙鳥が持ってる魔力は並外れてる、それこそ歴代一位だ。誰も足元にも及ばない」
「アルクシア様も、奇法の力は並外れてる。私くらいの力が千あっても勝てない」
どうして思い付かなかったんだ！沙鳥の魔力が異常だったのは俺も知ってたことじゃないか！そして魔界の神だって特別魔力を持ってるなんて想像は難くないはずだ！
「だ、だがまだ沙鳥でよかったではないか、沙鳥ならちゃんと話せば分かってくれるはずだ」
アンの声に焦りが混ざる。それはそうだ、俺の知り合い、しかも怪我を直してもらった恩人が、この世界を滅ぼす中継ぎに選ばれてしまったのだからあまりにも皮肉だ。
だが現実はあまりにも残酷だ。
「……俺、お前に言ったよな、魔法の授業があるから見るかって」
「あ、ああ、言ったと思うが、でもなんでそん、な……」
アンの顔が徐々に青ざめていく。気付いてしまったようだ。
「その授業がな……」
でも俺は言葉を止めない。最後の望み、アンの考えてることが俺

のと違ってるということにすがるために。
アンもそんな思いだろう、自分の考えが違っててほしいと。
「召喚魔法の実習なんだよ」
「……」
アンは無言。しかしその無言が同じ答えだと物語っている。
「！そうださっきの！さっきの機械で沙鳥と話をすれば！」
携帯のことを言ってるみたいだ。
でもその考えも不可能だ。
「授業は外だ、外に携帯は持っていけない」
「……授業まであとどのくらいだ？」
携帯を取り出す。時間は十時四十九分を表している。
「だいたい一分くらいだ。教師が召喚魔法の説明とかするからそれもいれて、タイムリミットはあと五分くらい」
「ここから学校へは？」
「走って十二分ってところか」
「なら飛ぼう」
「……は？」
意味が分からない。飛ぶ？人間が飛べるわけないだろう。
「私が風の魔法でお前を飛ばす。それならなんとか間に合うかもしれない」
「えぇっと、それは吹っ飛ばすって訳じゃないよな？」
「当たり前だ。風の魔法で浮かせて空を移動するだけだ」
なるほど、それならいけるかもしれない。
ただ問題は、その姿が見られたらまずいんだけどこの際しょうがない、世界と比べたら些細なことだ。
「じゃあアン頼む」
「分かった、とばすぞ」
俺とアンの体が約十メートルほど浮き、学校へ向かって文字通り一直線に飛ぶ。

第一話　《十三章》召喚

「……うん、わかった。終わったら全部話してね」
そう言って沙鳥ちゃんは夏哉君との電話を終わらせた。
沙鳥ちゃんが夏哉君に言ったことがすごく気になる。
「沙鳥ちゃん」
「ん？何？」
「やっぱりまだ気にしてるの？」
「えっ？……あ、……うん……」
昔沙鳥ちゃんはいつも一人だった。とても孤独で、寂しかったんだと思う。私も少しだけなら分かる気がする。
そんな寂しい気持ちを救ってくれたのが夏哉君。
だから沙鳥ちゃんは、私や夏哉君が一人になっちゃうのを極端に嫌う。同じ思いをさせたくないと思って。
だから私は沙鳥ちゃんの手を握る。
「大丈夫だよ」
いつまでもずーっと一緒にいるから。
沙鳥ちゃんのちょっと驚いた顔。
そのあとすぐに沙鳥ちゃんが抱きつく。
「え、あ、ちょ、え、さ、沙鳥、ちゃん……？」
私は、急な沙鳥ちゃんの反応で、どうすればいいか分からなくなった。
「もぉ、私こんな子供に慰められちゃって」
「な、何言ってるの！？私子供じゃないよぉ！」
みんな酷い、どおして子供子供いうの！？それは確かに、身長とか顔とか、そのは、発育、とかは、その、ゴニョゴニョ……だけど勉強は出来るのに！！
いかに私が子供じゃないかを考えてるとき、沙鳥ちゃんが私に囁く。

「ほんとありがと」
私はさっきの、くだらなくないけどくだらないことを考えるのをやめた。
そして私の大切な人を抱きしめる。
「うん、私もありがとう」
私と友達になってくれて。

キーンコーンカーンコーン

二現目の終了のチャイムだ。
沙鳥ちゃんは、廊下についている腰をあげて私に手をさしのべる。
私は沙鳥ちゃんの手を握って立ち上がる。
「戻ろっか」
「うん」
私たちは手を握ったまま教室に戻る。

「そういえばアンちゃんのことなんだけどさー」
私たちは今更衣室にいる。次の時間が魔法の実習で外に出るので、動きやすい体操服に着替えるためだ。今ここには私たち二人しかいない。
「カナの言った通りかもね」
「え、私？」
なんか言ったっけ、と思いながら右にいる沙鳥ちゃんの方を向く。
沙鳥ちゃんはちょうどワイシャツを脱いでるところで、つまり上はブラしかしてないわけで、

ぷるんっ

沙鳥ちゃんのが揺れてる。

……沙鳥ちゃん酷いよ、それ見せるために私呼んだの？タイミング良すぎだよ。それに比べて……

顔を真下に向けると、自分の足がはっきり見える、見えちゃう、見たくないのに！

確かにね、私が沙鳥ちゃんみたいな風におっきくなるなんてことはないって分かってるよ？でもさすがにＢカップはほしいよね？別にこのくらいは望んでもいいよね？

あ、どうしよう、だんだん涙が出てきちゃった……グスンっ。

「……ひっ、ひくっ……ぅぅぅ……」

「やっぱカナはすごい……カナっ！？ちょっと何泣いてるのっ！？え、何、思い出し？今朝のことの思い出し泣きなのっ！？」

思い出し……そういえば沙鳥ちゃん、私を抱き締めるといつもむにむに……

それに真樹ちゃんも大きくて……

「う、うう、うわぁぁぁぁぁんっ！！」

「えぇぇぇっ！？余計泣いちゃった！？ほんと大丈夫！？」

肩をつかんでガクンガクン揺らしてくる。その衝撃で沙鳥ちゃんの胸もぷるんぷるん……

「沙鳥ちゃん、そんなに私が嫌い！？私をいじめてそんなに楽しいの！？」

「え、私今回は何も……」

「胸で私いじめてるじゃん！！」

「へ？胸……？あぁ、そういうことか」

そう言って両手でたぷんたぷんする。

「今日はそういうつもりでやった訳じゃないよ～」

「だったら早く体操服着てよぉ」

沙鳥ちゃんは私の言うことを聞いて着替える。

「ねぇカナ、もしかしなくても私の話聞いてないよね？」

「うん、全然。アンさんがどうしたの？」

「んっとね、アンちゃんホントに召喚獣じゃないのかなって」

えーと、あ、確かに朝そんなこと言った気がする。
「アンさん魔法のこと知ってるから？」
「うん、もしかしたら夏哉の召喚獣になったりして」
「ん～どうなのかな～、でも普通の召喚獣とは違うみたいだからなんとも言えないな～」
「まぁそうなんだけどね……じゃあ行こっか」
「うん」
話ながら着替えたので、少し時間がかかっちゃったけど授業には間に合った。

「――――はい、じゃあ召喚魔法の説明は終わり」
校庭でメガホン片手に召喚魔法の歴史、やり方、扱い方を事細かに説明した先生。
私たちはグランドに座って聞いている。クラスは三、四組合同。
私はだいたい分かってたから、皆よりは少し聞き流して軽くメモする程度に抑えた。どうしてか、沙鳥ちゃんからは真面目だねぇって言われちゃった。私そんなに先生の話聞いてなかったのに！
「じゃあ天雲さん！前に出てきてください」
「は～い」
沙鳥ちゃんは意気揚々に立ち上がり先生の隣に行く。
「では天雲さんに見本を見せていただきましょう、天雲さん、やり方は分かりますか？」
「あ、はい、大丈夫です」
先生にとびきりのスマイル。
先生（女性）は少し頬を赤らめる。
私の周りにいる人たち（男女）も皆、？きゃー沙鳥ちゃーん♪♪？？こっちむいてー♪♪？？？沙鳥様付き合ってくださーい！！！！？？ふざけんな、沙鳥たんは俺の嫁だ！！！！！！？
「……」

皆凄いな……、沙鳥ちゃんホントにアイドルみたい。
というかもし沙鳥ちゃんが夏哉君と付き合ったら、夏哉君殺されちゃうかな？本気で。
「じゃあやっていいですか？」
「え、ええ……お願い、します……」
召喚魔法は普通の魔法と違って呪文が必要になってくる。自分の声を媒介にして、異界の住人――召喚獣をその場に呼ぶ。
沙鳥ちゃんの足元を中心に、三重の白い光が円となって輝く。
「『開け、異の世界。聞け、異の存在。我、汝を欲する。汝、我の声に答えよ。出でよ、我従えるもの、召喚！！』」

「やめろぉぉぉ――――――――――――――――――ッ！！！！！！！！！！！！！！」

どこかから聞き覚えのある声が聞こえた。
ふと、どこか違和感を覚える。
一つは空。
晴天だったはずの空が、重い鉛のような雲が埋め尽くされている。
もう一つは目の前。
そこには沙鳥ちゃんがいる、そこはいい、でもその周りがおかしい。
さっきまでは白い光が沙鳥ちゃんを包んでいたのに、今は黒い光がまとわりついている。
こんなのは私知らない、こんな風になるなんて教科書にはなれなかった。
「え、ちょ、なにこれっ！？」
沙鳥ちゃんも、隣にいる先生も驚いている。
皆はパニックに陥ってる人もいれば、泣いてる人もいて、凄いと感動してる人、さっきの声の主を探している。

ダンッ！！と、

空から何かが落ちてきた。

落ちてきたそれは、沙鳥ちゃんの方へ向かって走る。

「沙鳥ぃぃぃぃ――――――――！！」

夏哉君だ。

皆がざわついた。

どうして、どうして夏哉君が空から降ってきた？どうしてあんな必死な顔をしてるの？

沙鳥ちゃんを見た。

そこには――正確にはその後ろには――何かがいた。

黒い光でよくは見えなかったけど、人の形をした何かがいた。それは沙鳥ちゃんと同じ百六十センチくらいで、背中には黒い羽のようなものが生えていた。

夏哉君は手を伸ばす。

黒い光に触れようとした瞬間、沙鳥ちゃんを中心に爆発音がした。

夏哉君は吹き飛ばされ、沙鳥ちゃんは砂煙で姿が見えなくなってしまった。

一瞬の静寂。

「――――きゃぁぁぁぁぁぁあああっ！？」

誰かの叫び声。

その声が引き金となり、皆が慌てふためく。

皆が沙鳥ちゃんから逃げようと必死になって走る。

私は人の波に飲まれながら夏哉君のもとに向かって走る。

「夏哉君！？」

見つけた。グランドで仰向けになった体を起こそうとしてる。

「くそっ！！間に合わなかった！！」

「夏哉君大丈夫！？」

「ああ、なんとか……ああ、当たっちまったよ」
夏哉君は沙鳥ちゃんの方を見る。
私も見ると、急に突風が吹く。
私と夏哉君は目を細める。
砂煙が晴れる。
そこに立っていたのは、

沙鳥ちゃんだけだった。

第一話　《十四章》現れた聖と魔

今俺は空を飛んでる。
学校はもう目の前にある。
「夏哉、沙鳥はどこにいる！？」
「校舎の右側のグランドだ！！」
「分かっ、た……おい、人が集まってるぞ！」
「ホントかっ！？」
俺には校庭はよく見えない。でも言われてみるとなんか塊みたいなのがなくはないかもしれない。
「あぁ。今誰かが前に出てきたぞ」
「！？他に誰かいるかっ！？」
「ああ、二人だけだ、顔までは見えないが。残りは皆座ってる」
「じゃあ前に出てきたのは沙鳥だ！きっと教師は沙鳥を見本に使おうとしてるはずだ！！」
「ちっ！！間に合うか！？」
麦谷高校まであと五十メートル強。俺もなんとなく見えてきた。
そこに白い光が見えた。
「ヤバイ、あいつ召喚魔法使う気だ！！」
「な、なんだと！？」
「アン！俺をあそこまで投げ飛ばせ！！着地は自分で何とかする！！」
「分かった！」
アンは俺の襟元を掴み、投げる体勢をとる。俺は息を思いきり吸う。
アンが投げる。
その後すぐ俺は叫んだ。
「やめろぉぉぉ――――――――――――――――ッ！！！！！！

！！！！！！！！！！」

投げ飛ばされたことによってすごい風圧を覚悟したが、全然感じない。きっとアンの魔法のお陰だ。

沙鳥がいるであろう場所を見ると、おかしいことに気が付く。

建物の影が見えない。さっきまでは晴れだったはずだ。それに沙鳥がいるところに、今度は黒い光が光っている。

こんなの魔王が来るフラグバリバリじゃねぇかよ！

そろそろ地面が近づいてきたので、魔力を集中させる。

風を正面から受けるようにしてスピードを減速させる。

ダンッ！！

なんとか自分の足で着地した。

着地した勢いを殺さずに沙鳥のもとへ走る。

「沙鳥ぃぃぃぃ――――――――！！」

頼む、間に合ってくれ！！

手を伸ばす。

あともうちょっとで沙鳥に触れる。

そんな時、

沙鳥が黒い光に包まれ、

爆風が起きた。

俺は五メートルほど吹き飛ばされて、仰向けになった。

なんだ、何が起きたんだ！？

「――――きゃぁぁぁぁぁぁあああ！？」

誰かが叫ぶ。

たくさんの足音が聞こえる。

「夏哉！！」

上からアンが降りてくる。
頑張って体を起こす。
「夏哉君！？」
「くそっ！！間に合わなかった！！」
地面を殴り付ける。
「夏哉君大丈夫！？」
皆が逃げるなか、香苗は俺のところまで走ってきた。
「ああ、なんとか」
「夏哉まずいぞ、あれはやはり……」
「ああ、当たっちまったよ」
沙鳥から再び風が吹く。
そこには沙鳥が立っていた。
しかし、どこか様子がおかしい。
うつむいたまま動こうとしない。
「沙鳥、大丈夫か！？」
「沙鳥ちゃん！」
俺と香苗、アンは沙鳥に走って近寄る。

「アアァァァぁぁぁぁぁあああああああああああああッッッ！！！！！！！！！！！！」

天に向かって沙鳥は叫ぶ。
その叫びは大地を揺らし、校舎のガラスはすべて割れる。
俺たちは近寄ることが出来なかった。香苗に至っては腰を抜かしてしまった。
叫びをやめ、ようやく俺たちに顔を合わせる。

そこにいたのは沙鳥であって沙鳥ではなかった。

肌の色が違う。

いつもは元気で、健康そのもののような肌色なのに、今は不健康極まりないほどの白だ。髪の色も紫に代わり、目の下にはそれぞれ黒い線がタトゥーのように刻まれている。

極めつけは翼。

まがまがしいほどの漆黒の翼を生やしている。先ほどの突風もこの羽がやったのだろう。

もうすでに沙鳥の体の中には魔界の神が侵入していると考えた方が自然だ。

目の前にいる何者かは、喜びの表情を浮かべながら呟く。

「やっと……やっとこれた……！あと、あともう少しで……見つける。待ってて……あたしたちは引かれ逢うの……」

そんなうわ言を言い続けてる。

何を言ってるのか訳が分からない。

言葉自体が分からないんじゃなくて、意味が分からない。

「なぁアン、あれはアルなんとか様だよな？」

「あぁ、アルクシア様で間違いない」

「そのアルクシア様は何言ってんだ？なんかの暗号か？」

「いや、私にも分からない」

ということは神様自身の問題ということか。

隣で立てなくなった少女は、思い出したかのように言う。

「沙鳥、ちゃん……？何、何これ？あれなに？沙鳥ちゃん何してるの？夏哉君どうしたの？沙鳥ちゃん変だよ？どうしちゃったの？」

香苗が混乱して涙を流す。

当たり前だ、目の前にいる親友がおかしくなっちゃったんだ、普通でいられる方がおかしい。

俺は事前にどうなるか考えてたので、正常とは行かなくてもまだ冷静に判断できる。それはアンも同じだ。

「香苗、俺の声聞こえるか？」

なるべく恐怖を与えないように優しく話しかける。

「……グズッ……ヒグッ……、うん……」

「じゃあ簡単に言うけど、沙鳥は今操られてるんだ、自分が呼んだ召喚獣に」
「……操られてる？そんなの聞いたことないよ？」
「沙鳥が呼んだのは特別なんだ。神様って呼ばれる存在を呼んじゃったんだよ」
「かみ、さま……？なにそれ？私そんなの知らないよ？」
「うん、わかってる。でもそういうのがあるって思ってくれ」
「神様ってあの神様？」
「そうだ、召喚獣がいる世界で一番偉くてすごい神様だ」
「なんで沙鳥ちゃんが……？」
「それは……」
俺は言いよどむ。
これは言っちゃいけないと思うけど、本当のことを言わなければならない。

「沙鳥の魔力が特別だからだ」

「！？どうして、どうしてそんなこと言うのっ！？夏哉君までそんなこと思ってたのっ！？」
必死になって抗議してくる。
俺だってこんなこと言いたくない。
「頼む落ち着いてくれ！実際そうなっちまったんだよ！ここは納得してくれ！！」
「でも――」「夏哉逃げろッ！！」
そのまま喋らなくなってしまった。
代わりにアンが叫ぶ。
香苗が見てる方向――沙鳥を見る。
沙鳥は右手を俺たちに突きだし、そこに三十センチほどの炎弾を瞬時に作りだす。
香苗の手を掴み、沙鳥の視線から外れるように走る。

沙鳥は俺たちを気にも止めてないのか、全く動かずに真っ直ぐ炎弾を一発打ち出す。炎弾の着弾地点にあった花壇は、燃えることすら許されずに消し炭すらも残さず消えた。

あんなのまずい！掠りもしたら死ぬぞ！

幸いにも校内に人影はない。多分みんなは逃げた。つまりこいつを外に出さない限り人への被害は出ないはずだ。

「……まだ体に馴染まないか……」

二十メートルほど離れて、しかもボソッと呟いたはずなのに何故かその言葉ははっきり聞こえた。

今のので全力じゃねぇのかよ！

無茶苦茶過ぎる。こんなのからどうやって守れって言うんだよ！

沙鳥と目が合う。

それだけで全身の力が根こそぎ奪われてしまったような感覚に陥る。

恐怖。

心の奥から沸き起こる、ただ純粋な恐怖が俺の体を蝕む。

動けない、動く気すら起きそうにない、立ってるのもやっとだ。

ペタン。

すぐ隣でそんな音が聞こえた。

香苗がまた座り込んでしまった。

それを見て俺は気が変わった。

そうだ、俺がなんにもしなかったら香苗が傷つく。沙鳥が元に戻ったとしても、香苗を傷つけてしまったという罪悪感を抱いてしまい、壊れてしまうかもしれない。

そんな悲しい思いを二人にはさせたくない。

俺は握ってたままの手に力を入れる。

「香苗、逃げ――」

るぞ、とは言えなかった。

その原因は、

目の前に、沙鳥がいたから。

「「「――――ッ！！！！！！」」」

俺たち三人は驚きで言葉が出なかった。

一瞬で、ほんの一瞬で二十メートルという距離を縮めてきた。

沙鳥は俺の顔に触れ、愛しいものを見るようにうっとりしている。

「あんた……懐かしい……誰？」

「夏哉ぁぁああっ！！」

真っ先に我に帰ったアンが沙鳥の右側から真空の刃を投げる。

しかし沙鳥はそちらを振り向きもせず右手を刃の方にかざす。

パキーンッ！

甲高い音が聞こえた。

真空の刃が砕けた音だ。それは分かる、でもそれをどうやってやったかは分からない。

でもさっきのお陰で俺の顔から手がどけた。

すぐさま香苗の手を引っ張り割れた窓から校舎に入る。アンも俺たちの後を追う。

沙鳥も一歩踏み出そうとすると、糸が切れたように倒れてしまった。

「――ッ！！沙鳥ちゃんっ！？」

香苗が沙鳥に向かって駆け寄ろうとする。

俺は香苗を行かせまいと腹に手を回し、進めないようにする。

「夏哉君離してっ！！沙鳥ちゃんが！！」

「馬鹿！！お前は沙鳥に俺たちを傷つけさせたいのかッ！！」

香苗は渋々俺に従い校舎の中に入っていく。

家庭科調理室。

ここでこれからの方針を決める。
「なぁどうして沙鳥は倒れたんだ？」
アンに聞いてみる。
「……恐らく沙鳥の体がアルクシア様の力に耐えられなくなったんだと思う」
「じゃあもしかして沙鳥はあのまま動かないのか！？」
ピクッと香苗が反応する。
「いや、時間が立てば沙鳥の体にアルクシア様が馴染んでいき動けるようになるはずだ」
「そうか……」
それは嬉しいことなのか、どうなのか。
「夏哉君、アンちゃんはなんて？沙鳥ちゃんは平気なの？」
俺は今までのことをかいつまんで話した。
世界は三つある。魔界、聖界、地球。
その中の魔界にいる生き物が召喚獣で、アンはそこの住人。
魔界は地球を支配しようとしてる。
支配するためにはその世界にいる神様を倒さないといけない。
それを阻止するためにアンはここに来た。
地球で行動するためには依代という人間の入れ物が必要。
その入れ物に選ばれたのが沙鳥。
さっきまでの沙鳥は魔界の神様が体内に入り込んで操っている。
「……」
一通りの説明をし終えた。
香苗は黙って聞いてくれた。
「今すべきことは、沙鳥から神様を引き離して魔界に返すことだと思う」
二人はうなずく。
目的は決まった。
でもそれをどうやってやるかはまた別だ。あんな化け物、ここにいる三人だけでなんとか出来るわけがない。

「アン、どうやって戻すか分かるか？」
「正直私にも分からない。依代を使うのはアルクシア様もこれが初めてなはずだ」
「お前も分からないか……」
「夏哉君いいかな？」
「どうした？」
「地球にも神様がいるんだよね？」
アンに目をやる。
「確実にいる。神がいないと世界は創造できない」
ぽた、ぽた、ぽたぽた、ポタポタポタポタ、ザァァァァァァァ
――――
突然の音に三人同時に外を見る。
案の定雨が降ってきた。恐らく、あの雲も合わせて神の出現の副作用だろう。
「あ、ごめん、話が途切れた。神は絶対いるって」
「だったら地球の神様はどうしてまだ来ないのかな？神様っていうくらいなんだからすぐに来れると思うんだけど」
「あ、それ俺も思った。アンはなんか分かるか？」
「私は分からない。それに地球に来るのもこれが初めてだ、だから地球については全くといっていいほど教えられない」
「そっか、分かんないって」
「うん……」
じゃあどうする？どうすれば対抗できる？地球の神は使えないと考えた方がいい。でもそれ以外何ならなんとかなる？
すると香苗が何か思い付いたようだ。
「あの、聖界の神様はどうかな？」
「「！？」」
そうだ、対抗できるものがいた。
聖界の神は香苗に言ってないけど、魔界の神と互角に戦ったんだった。

でも……、
「アンどうだ？確かに聖界の神だったら沙鳥もなんとかしてくれると思うんだけど」
「それはそうなんだが、問題はどう呼ぶかだな」
「ああ、どう呼ぶかだな」
香苗にも分かるように答える。
考えろ、どうすれば神を呼べる？召喚魔法か？でもそれは今まで魔族しか召喚してないと思う。もしかして聖族もあんな姿なのか？
「なぁなぁ、聖族って基本どんな姿してんだ？具体的には魔族と同じような姿か？」
「違うな、聖族は人間みたいな――言うなれば天使のようなものだな。姿は魔族のように変えられない」
「そっかぁ、天使か。なら召喚魔法で呼んだことはないな」
「聖族って天使なの？」
「あぁ、アンが言うにはな」
「なんか聖族の人と魔族の人って天使と悪魔の関係みたいだね」
「バッ！？香苗お前なぁ！！」
「――ッ！！」
言って香苗も気付いたのか、すぐさまアンがいる――であろう――場所に向かって謝る。
対してその本人はというと、
「別に気にしてないぞ、香苗の言ったことは本当だ。私たちは悪魔だ。聖族とは正反対の存在、そう気に病むな」
本当になんにも感じやいような声で言う。
まぁアンが気にしてないんだったらいいんだけどな。
「香苗、アンは気にしてないって。イメージ的にはあっ、て、る……」
待て待て待て！！今なんて言った！？正反対！？魔界と聖界は正反対って言ったか！？つーことはつまり……
「おいアン！今から俺の質問に正直に答えろ！！」

いきなりの俺の叫びに二人とも戸惑っている。
俺はアンの答えを待たずに質問を繰り出す。
「聖族は魔法使えないんだよな!?」
「あ、あぁ」
「聖族は武器とか作れるんだから頭はいいんだろうなぁ!?」
「え、まぁ魔族に比べたら比べるまでもなく上だろうな」
つまり聖族は頭が良くて魔法が使えない。
対する魔族は頭が悪くて魔法が使える。
これはどっかで聞いたことがある。
「ねぇ夏哉君、何?どうかしたの?」
香苗が何がなんだか分からないと言った顔をしてる。アンも同じ風だ。
「結論を言うと、聖界の神を呼べるかもしれない」
「えっ、嘘っ!?」「夏哉、どうやるのだ!?」
二人が噛みつくように俺に寄ってくる。
「神様を呼ぶ方法は召喚魔法だ」
この案には香苗が疑問をあげる。
「夏哉君、それ無理なんじゃないの?さっきのアンさんに言った質問だと、聖族の人たちは一度も召喚したことないってことになるよ?」
確かにそれはそうだ。俺だってそう思ってた。
さっきまでは、
「それなら説明はつくと思う。召喚魔法が使えるのは、皆体のなかに魔族の一部があるからだ。つまり普通の人より魔族よりなんだ。で、召喚魔法は『魔族を呼ぶもの』じゃなくて『異世界のものを呼ぶもの』だろ?」
「あ、うん。先生はそんなこと言ってたけど……」
「よし、ここまではいいな?そんで俺は、魔界の依代がいるなら聖界の依代もいると思うんだ」
「考えられなくはないのだが……」

「な、アン、考えられなくはないだろ？」
「で、でも、もしそうだったとして、誰が聖界の依代なの？今から探す訳じゃないでしょ？」
「もちろん。そこで思い出すこと、香苗、頭が悪くて魔法がめっちゃ使えるって聞いたことない？」
「えっと、沙鳥ちゃん？」
「そうだ、沙鳥だ。アンは？」
「アルクシア様だな」
「そう、魔界の神だ。じゃあもうひとつ、頭がめっさ良くて、でも魔法は何故か全く使えないってのは聞いたことないか？」
「そ、それって……私？」
「お、おい夏哉、まさか……」
「そう、アンの思ってる通り、もし聖界の依代がいたとしたら、それは十中八九香苗だと思う」
ビシッと香苗を指差す。
「え、えええ、えええぇぇぇぇっ！？そ、そんな私無理だよ！？私魔法使えないんだよ！だから召喚魔法も使えなくて……」
俺はその言葉を否定する。
「それは違う、たぶん大丈夫だ。そもそも召喚魔法はアンたちが使ってる魔法じゃない、地球オリジナル。実験の装置を人間が使えるようにしたものだからサイエンスだ。そんで魔族の一部は、人間で異空間転送を使えるようになるきっかけに過ぎないと思うんだ。香苗はこの学校に入学できたんだから、召喚魔法は使える。俺はそう思う」
「で、でも私は――」
ドォーンッ！！
外で大きな音が聞こえた。
沙鳥が動けるようになったんだ。
「もう言ってる時間がないぞ！」
「ああ、もう言ってる時間はない。香苗、ここはダメもとでもいい

からやってくれ！何もしないよりはマシだと思う！」
「わ、分かった！」
香苗は目をつぶり集中する。
一息深呼吸。
足元には三重の白い光の円。
「『開け、異の世界。聞け、異の存在。我、汝を欲する。汝、我の声に答えよ。出でよ、我従えるもの、召喚！！』」
白い光が、調理室を覆うほどに煌めく。
数秒して光が収まる。
そして香苗の後ろには、

頭にわっかのついてない、白い天使がいた。

第一話　《十五章》神への説得

目の前に、白い天使がが立っている。もちろん女性。
髪は腰の位置まである銀髪。
服装は真っ白な長い布だけを巻いており、右肩で縛っている。それと、やはり白い布を腰の辺りでベルトのように巻いて縛っている。
顔は超美人、大人のお姉さんといった雰囲気で、かなりグラマー。
香苗とは正反対。
そして背中には白い羽。沙鳥のとは正反対のものだ。
これは、成功したのか？
つい疑問形になる。
このような人間の形をした生き物は、今まで召喚されたことはないと思う。
この場にいる全員が無言。
そしてこの場の沈黙を破ったのは、
「お、久しいな人間」
天使だった。
待てよ、今こいつ日本語を喋った。普通は異世界の言葉なんて、翻訳機がないと喋れないはずだ。その証拠に今までの召喚獣は一度たりとも日本語を喋ったことはない。ということはこいつは普通じゃない。
「あんた、聖王か？」
消去法で考えるとそうなる。
「そうだ、わしは聖界の神、メルティウムだ。しかしぬしがわしのことを知るとは思わなかったぞ」
今、神って言ったよな……？じゃあ俺の読みは当たったのか？
そんなことを考えていると、あれ？と思うことがひとつ。
今までの言葉、全部俺に向かって言った？しかも『久しいな』って……

「あ、あの！」
声を出したのは聖王を召喚した少女。
「ん、ぬしがわしの依代か。どうかしたか？」
依代、じゃあやっぱり香苗が聖界の器になるのか。
「その、今の言い方だと夏哉君と知り合いみたいな感じなんですけど」
それなんだよ、俺もそれは思った。
香苗とアンは俺に視線を向ける。
俺だって分からない。こんな人間とは別次元の生き物を見たことがあるなら、きっと一生忘れないと思う。
しかし神様は香苗の言葉を肯定する。
「ああ、夏哉というのか、確かに知り合いだ。夏哉は六年前のこと忘れたか？」
「六年前……？」
六年前。
確かあの時は……車に引かれそうになって……でも無事で……
「えぇっ！？まさかあんたあんときの猫！？」
「おぉ、思い出したか。確かぬしはわしに名をくれたな、名前はア――」
「まぁぁぁぁあああ待て待て！！そんなことよりお願いだ！！」
マズイ、こんなところでその秘密を暴露されたらたまったもんじゃない。
三人は不思議な顔をして、何か言いたそうだ。
しかし俺は神だろうが魔族だろうが何も言わせない。
「端的に言って、地球が魔界の神様にどうにかされそうなんだ！だから手伝ってくれねぇか！？」
聖界の神、メルティウムは真剣な顔つきになる。
「やはりここにはアルクシアがいるのか。それで、わしにどうしろと？」
「そのアルクシアってやつと依代の体を引き離して魔界に還してほ

しいんだ。あんたにも損はないだろ？ここを取られたら、ただでさえ均衡してる勢力バランスが悪い方に崩れるぞ」
「ん？……あぁ、そういうことか……」
メルティウムはボソリと呟いた。
「ぬしは神に交渉を申し込むか？」
「これが一番手っ取り早いからな」
さっきの言葉はどこか引っ掛かったけど、気にしないことにする。
ああはいっても本当はただこれしか方法が分からないから、これで首を縦に振ってくれないとどうしようもない。
「いいだろう、夏哉とは何かの縁だ。ぬしの言った通りのことだし手伝ってやろう。だがひとつ条件がある」
そう言って、俺を指差す。

「お前の命をもらう」

「はっ？」「えっ？」「何！？」
俺、香苗、アンはそれぞれ驚きの声をあげる。
「どうする？ぬし一人で世界は救えるぞ？」
どうするって言われても、いきなりではすぐに答えられない。
「そんなのダメっ！！」
香苗が俺の袖をつかみメルティウムを睨み付ける。
「お願いします！夏哉君を犠牲にしないで沙鳥ちゃんを助けてください！！」
「嫌だ」
メルティウムは即答した。
考えることすらしない。
「ど、どうしてですか！？」
「別に今からアルクシアを倒す必要はない。ストリックとアルクシアが戦って、相討ちならそれでよし、アルクシアが勝ったとしてもかなり消耗してるだろう。そこを狙った方が確実だ。ここでいう漁

夫の利だな」
　確かに利にかなってる。地球のことを考えなければ、それが一番楽な方法だ。
　でもそんなのもちろん絶対に納得出来ない。出来るわけがない。
「……もし俺が死ねば地球を助けるのか？」
「そうだな」
「夏哉君ッ！？」
　香苗は驚いてると言うよりは怒ってる感じだ。
　俺は香苗の叫びを無視する。
「そうすれば沙鳥は助かるんだな？」
「沙鳥……？アルクシアの依代のことか？それなら安心しろ、ちゃんと助ける」
「そうか……」
　なら決まった。
　俺の答えは……

「俺はあんたを頼らない」

「えっ？」「へっ？」「んんっ？」
　香苗とアン、そして何故かメルティウムまでもが驚いてる。
「ちょ、ちょっと待て、今なんと言った？頼らない？わしを頼らないと言ったか？」
「ああ」
「何故だ？命が惜しくなったのか？地球の危機だと言うのに？」
　少しメルティウムの声に動揺が見えている。俺は首を縦に振るんだと思ってたらしい。
　そりゃ地球を守れるんだっら自分の命くらいって、どっかの主人公は犠牲になるんだろうな。
　でも生憎だったな。
「もし俺が死んで地球、沙鳥が助かったとしても、その沙鳥は俺を

殺してしまったって言う風に思って、絶対落ち込むからな。そんな想いは香苗にも沙鳥にもさせたくない」

「ではどうすると？ぬしは神を止められると？」

「そんなん知るかッ！あんたが手伝ってくれなくてもあいつを説得でもなんかして追い返すわ！」

メルティウムを正面から睨み付ける。

当の本人は目を少し見開いて、口は半開き。

つまり唖然としている。

見てないけど後ろにいる二人もそんな雰囲気を醸し出している。

「あはははははははっ！！」

不意にメルティウムが大口を開けて笑い出した。しかし、大口を開けてるにも関わらずどこか品がある。

「あ～、ぬしは変わってはくれんの～。よかろう、ぬしの頼み、このわしが叶えてやろう」

「……え？そ、それ本当か？俺の命なしで？」

「当然じゃ……おい依代、確か香苗じゃったか？」

「あ、はい」

香苗は一歩前に出る。

「いいか、これからわしはぬしの体に入る。拒絶するな、すべて受け入れる気持ちでいろ、沙鳥とやらを助けたいのだろ？」

「あ、は、はい！！」

そう元気よく返事をして、俺の方を振り返る。

「夏哉君、私行ってくるね」

「ああ、ごめんな、怖い目に会わせちゃって」

首を横に振る。

「ううん、平気。それより聞きたいことがあるの」

「なんだ？」

「今朝のことなんだけど、実はもう答えが決まってたりする？」

「え……？」

どうしてそんなことを聞くんだ、とは言わない。

今の香苗にはそんなこと言うべきではないと、脳ではなく心が命令している。
香苗は必死に何かを――依代としてではなく一人の女の子としての決意したのに、それに水を差すようなことは出来ない。
だから正直に答える。
「ごめん、まだ決まってない。二人のことは好きだけど、そういうんじゃなくて、その……」
ダメだ、うまく言葉に出来ない。
でも香苗は満足そうな顔をしている。
「そっか、私と沙鳥ちゃんは今同じなんだ」
そう言って香苗は一歩前に出て、
唇と唇を重ねる。

俺は動けなかった。
一瞬何が起こったのか分からなくて、なすがままになった。
どのくらいの時間が流れただろうか。二、三秒だったかもしれないし、二十秒くらいだったかもしれない。
香苗は俺から離れる。
香苗の顔はとても頬を赤く染めて恥ずかしそうに、でも飛びっきりの笑顔だった。
「じゃあこれで沙鳥ちゃんより一歩リードだね」
今の香苗は、とても大人びていたような気がした。
「行ってきます、夏哉君」
「……行ってらっしゃい」
香苗は俺に背を向け、メルティウムに近づいていく。
香苗とメルティウムが向き合う。
「ではいくぞ」
「はい」
パァァっと二人が白い光に包まれていく。

ドッゴォォッ！！

近くでものを壊す音が聞こえた。

ここに一切近づいて来ないのは、まだ沙鳥の体に慣れてないからか。

俺とアンがそちらに意識を向けている間に、光が収まっていく。

そこにはさっきまでと変わらぬ姿の香苗がいた。

「えっと、香苗？」

「わしだわし」

「メルティウム？」

「そうだ。というかぬしは神に対してタメ口か？」

今さらだなおい。

「それでは魔王アルクシア様をどうにかしてくださいませメルティウム様」

「ぬしはこの状況でかなり余裕があるのぉ」

「いやホントお願いします！そろそろ向こうも調子が戻っちゃうと思うんで！」

「まあそうだなぁ、では行くか。もちろん二人にも手伝ってもらうぞ」

メルティウムは俺たちに沙鳥を戻す方法と作戦を説明する。

第一話　《十六章》向かい合う神々

何処？何処にいるの？
あなたはどうしてここにいないの？どうしてあたしの前に現れてくれないの？
あたしじゃダメなの？ここまでしても来てくれないの？
どうすれば来てくれる？
どうしたら――

「アル」

誰？誰がその名前を呼ぶの？

「どうしてここにいる、とは聞かぬが、その依代から離れてくれぬか？」

その声、あたしは一番聞きたくなかった。

「メルティウム」

香苗と沙鳥、もといメルティウムとアルクシアが向かい合って何か話してるみたいだ。俺には遠くて聞こえないけど。
メルティウムたちはグランド――アルクシアは倒れた場所から全く動いてなかった。その代わり周りにいくつかクレーターが出来ている。
俺とアンは調理室で身を潜め二人を眺めている。
「メルティウム様がアルクシア様を？取り敢えず？説得している」

？取り敢えず？を強調されていると言うことは、あまり効果がないと言うことか。
「じゃあさ、今のうちに作戦の確認していいか？」
「分かった」
まず沙鳥を元に戻す方法は、メルティウムからもらった聖界製の札二枚をアルクシアの腹と背中に一枚ずつ同時に貼る。その後その札にメルティウムが力を注ぐと分離成功となる。そしたらメルティウムが強制異空間転送をして万事解決となる、らしい。
そのために俺たちがすることは、神二人が闘ってる途中でメルティウムがアルクシアを動けなくするから、迅速且つ確実に札をつけるということだ。
「そのためにもうちょい近づこうと思うんだけど」
「そうだな、じゃああそこに行くのが良いと思うんだが」
アンが指差した先、そこは俺たちがアルクシアから逃げるときに校舎内に入るために通った廊下だった。
「了解」
俺は同意し、細心の注意を払って動き出した。

さてと、どおしたもんかのぉ。
説得を試みたものの、あんまし効果は無さそうだな。
「おーいアルクシアァー、バカな真似はよせー。ぬしの親御さんがどんな想いをしてるか分かってるのかー」
「……」
無言かい。
せめてツッコんでほしいのぉ。
と思ってたらアルクシアが久方ぶりの発言をする。
「何故、どうしてあんたが来るの？あんたは今ここに来るやつじゃないでしょ？」
「まぁな、だがしょうがないだろ呼ばれたんだし」

「だったら中に入らなければいいのに」
「でもなぁ、夏哉に頼まれたからのぉ」
「……夏哉？」
「会っとらんか？魔族の娘とおったやつだが」
「……ああ、あいつね」
「似ておるだろ？」
ピクッとこの言葉に反応した。
「あれは何？どうしてクーレラが見えるの？」
「そりゃわしも分からんが、もしかしたらわしのせいかもな」
「何をした？」
「いやなに、昔やつの目の前でかなりの力を使ったからのぉ、その力がなんらかに干渉してあんな体質になった、というのが妥当だろうな」
「地球（ここ）に来たことあるの？」
「あぁ。誰かさんのせいで帰還に失敗してしまってな」
「……」
「そんときに知り合った。少ししか会わんかったが恩人でもあるから手伝うことにした」
「そう」
……そろそろ時間稼ぎもいいところか。二人移動しただろ。
「じゃあ話は終わりだ。もう一度聞くが、早くその依代から出ていけ」
「嫌」
「だろう、なっ！！」
『だろう』で空間を裂き空中から二枚ほど札を出し、『なっ』でアルクシアに向けてひとつだけ投げる。空間を裂くのは異空間転送（ディメンションワープ）の応用だ。
途中、札が炎に包まれる。
燃えているわけではない、炎を纏って敵を攻撃する道具だ。
わしらは魔族のように特別な能力――奇法といったか――や身体

能力を持ち合わせておらん。
それ故に道具で対抗しないと話にならぬ。
聖界製の武器はアルクシアの右胸に一直線。
続いてもう一枚。
わしから見て、アルクシアより右に飛ばす。これもすぐに炎を纏う。
言っておくがこの炎はわしが使うことによってこの世界に干渉されるようになっているが、雨程度で威力も消えるものではない。
一枚目をかわさせるように飛ばし、かわしたところで二枚目が仕留める、という淡い希望を持っていたのだがアルクシアは動かず、一枚目があと一メートルという距離で地面が盛り上がる。そのまま上へ円錐のように突き上げて札を貫く。
一枚目の札は機能停止、炎もパチッ消えただの紙になり、二枚目は半歩横にずれることで躱す。
「あらまぁ」
なんかオバサン臭いことを言ってしまった。神にオバサンもなにもないんだがな。
空間を裂いてみっつほど取り出す。
ひとつは手のひらサイズ、ここでは野球ボール程度のグレーの球ともうひとつは拳銃型のもの。みっつ目は別の札。
上に球を放る。
一メートルほど高さが上がったので球の効果発動。
球が割れ、頭上に暗雲が立ち込める。

ゴォアアッ！！

空から雷が降ってくる、が暗雲がそれを吸収する。
ほんの少し吸収できずに頬を切る。少し焦げ一筋の血が流れたから親指で拭う。
わしが出した暗雲は、触れる電気に関するもの、電流や電圧、電

波、電磁波等をすべて吸収する使い捨て道具。
さすがに神の一撃だし、わしもまだ本調子ではないからこぼしてしまった。
ん？どうして雷が来ると分かったか？
そんなのわしが神だからに決まってるだろ。
……本当はパチッって空の方で聞こえたのでな。何処で聞こえたのかは探せ。
まぁそんなことより、あの雲は吸収したのじゃ、雷のエネルギーは消えてない。つまり……
「弾けろ」
雲からアルクシアを標的に雷を放出。雲消滅。
続いて左手で拳銃の持つ部分にある一筋の溝をなぞり射つ。
アルクシアは電撃を電撃で相殺。そのエネルギーで雨粒は蒸発し水煙と閃光が生まれる。
これで視界は殺した。
そして銃弾は、
ガッ！！
地面に当たったような音。アルクシアが地属性の魔法で防いだのだろう。ここまで予定通り。
バァン！
前方で爆発音がする。
わしの射った球が起爆し土の壁を壊す音だ。
目をつぶり一言。
「イ・トゥルニア」
目を開けると目の前にアルクシアがいる。
「よぉ、久しぶり」
驚愕するアルクシア。
さっきの拳銃、あれは攻撃型と移動型の二つの特性がある。握る部分にある溝に自身の血を染み込ませ、その状態で弾を射ち言霊を言うと、弾の位置と入れ替わる、という仕組みだ。

あらかじめ左手に用意していた札をアルクシアに張り付ける。
わしは一歩下がる。
札から出る衝撃波でアルクシアは吹き飛び倒れる。
今使った札は、わしの意識ひとつで札の表一方方向に衝撃波を出す。さしずめ投擲リモコン地雷といったところか、ちゃんと地雷のようにもできるし。
衝撃波を喰らえば、倒すはいかないまでも多少は動かな――

ブンッ！！

「！？」
後ろに気配を感じたからしゃがむ。
案の定首があったところをなにかが通過。
バックステップで距離をとり、空間から攻撃型と防御型の武器を取り出す。
その間を好機と思ったか、一瞬で距離を詰めいつの間にか持っていた刀で斬りかかる。
手首の力だけであるものをわしとアルクシアの間に割り込ませる。
刀を降り下ろす瞬間、あるもの――ピンポン玉くらいの大きさの球――を中心に縦三メートル、横一メートル、厚さ三十センチほどの光の壁が現れる。
それによって刀は弾かれた。
光の壁を消す。
そこにはアルクシアのがら空きの腹。
さっき出した攻撃用の武器の刀で腹に横薙ぎ。
アルクシアは刀を持ったままバク転の要領で紙一重でかわす。切れた部分は服と皮一枚というところか。
着地すると刀身が輝きだし、それをわしに向ける。
とっさに光の壁を展開。
光の壁に何か衝撃波のようなものがぶつかる。

ピキッと壁にヒビが入る。
もう耐えられそうにないのぉ。
急いで壁から離れる。球は砕かれ、壁も崩れ去る。
わしは砕けた球を見て呟く。
「よくもまぁこんなになって」
アルクシアを見て、倒れてるアルクシアを指差す。
「あれはかなり驚いたぞ。まんまと騙された、策士策に溺れるとはこのことだな」
「あんただけが武器を使うなんて思わないで」
「変わり身、か」
アルクシアは閃光が走ったときになんらかの道具（ダミー）を使ったんだろうな。
そして本体は移動。
その間に刀を出し、わしの奇襲を待つ、といったところだろう。
で、あやつの持ってる刀の能力は……
「魔力増強（ジックブースト）」
「なんの話？」
ズテッと効果音が出そうなくらいズッコケた、心の中で。
いや確かにわしも『変わり身、か』の次に説明もなしに『魔力増強』って言ったぞ？言ったが普通に分からんか？それとも能力を読み違えたか？とまで考えたが、そういえばあやつは天然だったのぉ。
ま、分からんなら聞くが一番、というわけで、
「その刀の能力の話だ。己の魔力を刀に注ぐことで魔力を増幅させ、纏うやら飛ばすやらをするのだろ？」
「敵にどうしてそんなことを教えなきゃいけないの？」
敵、か。
「ほぅぬしはその程度のことも教えられないほどいっぱいいっぱいなのか、それはすまんかったのぉ、だがこれならわしも案外余裕でぬしを倒せるかもな」
プチッ

なんかアルクシアから音が聞こえてくる。
「そんなに知りたいの？そう、なら教えてあげる。あんたの言った通りよ」
やっぱりそうか。ということは壁をぶっ壊したのは風ってことか。
でも、まさか本当に言うなんてな……
「さてと、教えてくれてありがとな」
「ふんっこんなの知ってどうなる？知ったところでどうにもならないでしょ？」
「まぁな、それよりぬしのそのセリフ、悪党のそれだぞ？」
「別に悪でもいい」
「……そうか」
アルクシアは構え直す。
わしは道具を取り出す。
「ならわしは正義の味方ってとこだな。正義は必ず勝つ、ということでそろそろ退場させて帰るとするか」
「あんたはそれでいいの？」
「……いいんだよ」
「そう」
では始めるか。

第一話　《十七章》作戦開始

俺たちはアルクシアからの距離が一番近いであろう場所に来た。
実際問題、向こうも動き回ってるわけだから一番近いとは言い切れないんだけど。
クランドを見る。雨が降ってるけど、比較的近いので会話は聞こえないけど姿は見える。
「……あのさ」
「……なんだ？」
「あの二人凄すぎねぇか？」
「いやまぁ、うん、神なのだから当然と言えば当然なんだがな、しかもあれでウォーミングアップなのだろ？」
「……信じられないな」
メルティウム曰く、？まだ本調子ではないので最初ウォーミングアップしてくる、それが終わったら呼ぶから用意してろ？だそうなんだけど、未だ連絡なし。合図とかそんなのもしてないから、これはウォーミングアップ中ということになる。しかもどう連絡するかとか聞いてない。
それから、動いてるのは神たちなんだけど見た目は香苗と沙鳥なのでかなりシュールだ。
「俺たちいなくても平気じゃね？」
「私もそう思ってくるが、戦力はあった方がいいだろう」
「戦力になると思うか俺ら」
「言うな」
こう言っていると、
『おーい、夏哉と魔族っ娘ー』
「うおっ！？」「ひゃっ！？」

どっかから声が聞こえる。
キョロキョロ辺りを見渡すと再び声が聞こえてくる。
『なんだ、さっきの声？魔族っ娘がものすっごーく可愛い声を出していたが』
アンの顔が真っ赤になる。
そしてその原因を作った張本人である声が分かった。
「メルティウム？」
『ぬしはまたその反応か？』
「どっから聞こえるんだ？」
『無視か。……札だ札』
沙鳥を元に戻すためにもらった札を出す。
『聞こえるだろ？わしの思ってることを札を通して音としてるんだ』
「うわぁ、すげ」
つい驚嘆の声が漏れる。
『感心してる場合ではないぞ。そろそろ動きを止める、よく見ておけ』
「了解」
「分かりました……あのメルティウム様」
俺の返事のあとに続いたアンだが、何か聞きたいことがあるらしい。
『どうした魔族っ娘？』
「その？魔族っ娘？とはなんでしょうか？」
あ、そういえばそんなのを言ってたな。名前を教えてなか、た……
『わしぬしの名前知らぬからのぉ』
「あ、も、申し訳ありません！私、あ、えっと、アンと申します！魔族ですがメルティウム様にご協力をさせていただきます！！」
あああああぁぁぁぁぁっ！！
「アン？……なるほど、そういう訳か……」
「メルティウム様ぁ！？急ぎましょう！急いで沙鳥を助けましょう！！」

隣でビクッとなった。
「ちょっ夏哉!?どうしたのだいきなり」
「アンは黙ってろ!!それより早くお願いしますっ!!」
『分かった分かった、分かったからそう騒ぐな。今も準備はしてるからもうちょい待っておれ。バレぬようわしから合図はせんならな』
「「……」」
札から声が聞こえなくなった。
「……あー」
「……言いたいことは分かる」
「とりあえず言わせて。あいつ準備って動きながらしてるんだろうな」
「しかもアルクシア様を目の前にしているのだから、なにも起こらない筈はないな」
「なのにあんなスラスラと俺らと話したよな?」
「……化け物だな」
「味方でよかった」
この嬉しさを噛み締める。よくメルティウムを召喚することを思い付いた、ナイス俺。
「まぁそろそろ、話も終わりにしよう」
「あ、じゃあひとつ案があるんだけど」
「なんだ?」
「札を張るとき、俺が真っ直ぐ走って行くからアンは上から飛んで背中にまわってくれないか?」
「それはいいが、どうしてそんな面倒なことをする?」
「アルクシアも神だろ?もしかしたらのこともあるし、念には念をだ」
「分かった」
アンはうなずく。
俺たちは窓枠の向こうにいる二人を見据える。

わしは今絶賛逃走中。
別に敵に背を向け、必死こいて逃げてるというわけではないがな。

ドドドドドドドッ！！

刀を通して水弾を幾つも撃ってくる。
ダンッわしはそれらを舞を舞うように?優雅に??華麗に??美しく?躱す。
時折さっきの拳銃やら札やらで牽制をするが、土の壁に阻まれたり相殺されたりでダメージは与えられてない。
今まで見てて分かったことは、刀を使ったところでダンッ一度に複数の魔法は使えない。
っと……ふぅ危ないのぉ、香苗(このからだ)が小さくてよかったわ。
さて、あと一回か。
「何をする気?」
「ん?なんのことだ?」
わしは動くのをやめる。
「誤魔化さないで。あんたが今までなにもしないってことはあり得ない。なにか仕掛けてるに決まってる」
「敵に聞くのか?」
「気になる」
どんだけ自己中なんだあやつは。
「まぁいいがな、今からぬしを捕らえる罠を仕掛けてるんだよ、おとなしく捕まれ」
「嫌。罠ならここから離れればいい」
アルクシアは空を飛んで離れようとした。
が、
「ざ～んね～ん♪」

空からアルクシア目掛けて降ってくるものがある。
上を見るが、雨によって視界は悪く、目も満足に開けぬ筈だ。
故に反応が遅れた。

ドゴァァァッ！！

空から降ってきたそれは地面に大きな穴を開けた。
落ちてきたのは、大きさ六メートルほどの三日月型の刃。夏哉とアンと話してる間に空高くにあげといたのだ。
アルクシアは地上に降りてきて右腕を抑えている。さっきのが当たったのだな、緑の血が流れ出ている。出血量から見て深くはない。
「どうして、上に飛ぶって分かった？」
わしは落とした巨大刃へ歩いき、それに触れながら説明をしてやる。
「ぬしはこう考えた筈だ。？罠が仕掛けられてるということはある程度の範囲がある、その範囲は自分とメルティウムの距離が半径として自分中心にドーム状に展開している可能性が高い、横に逃げるか上に逃げるか、上なら死角からつけるから有利だ？とな。どうだ、合ってるだろ？」
「違う」
あれっ？わし読みを間違えたか。
「とりあえず浮いてれば平気って思ったから」
「あっそうかい」
拳銃を構える。
アルクシアに向かって走りながら何発か撃つ。
アルクシアは相殺せず、距離を取るために横へ飛ぶ。
弾を装填、追い討ちをかけるように撃つ。
なんなく躱される。
よし、ここでいいか。

靴が淡い光を放つ。

ダンッ！！

地面を踏みつけることで最後の仕掛けを完成させる。
拳銃の溝に触れ、弾を打ち出す。
アルクシアとは見当違いの方へ。
弾は地面に着弾する。
踏みつけたところに液体を垂らす。
垂らした場所は光だし、二方向へ伸びていく。あるところまで行くと光は折れ曲がり、また一直線に進む。そしてまた折れ曲がる。
お互いの光が繋がり、上から見ると銃弾を中心とした正五角形の光の筋が現れる。
「もしかしてそれが罠？でもあたしは中にいないわよ」
光の外にいるアルクシアは、わしへ向かってくる。
フッ、すべては整った。

「イ・トゥルニア」

銃弾との位置が入れ替わる。

わしではなくアルクシアが。

「な――ッ！？」
「行け！」
五角形の角から五本の蔓がアルクシアに巻き付く。
「クッ！！」
「言っとくが奇法は使えんぞ。その蔓には奇法を封じる効果がある」
「なんであたしがここに！？」
「この銃の効果は知っておろうな？」

「弾と自分の位置を入れ換えるんでしょ？でもだったらどうしてあんたじゃなくてあたしなの？」
「ん～、五十点といったところか」
「どういうこと？」
「この銃はな？血を染み込ませた者？と弾の位置を入れ換えるのだ」
「でもあたし、それに触ってない」
「それはそうだが、ほれ、あれ見えるだろ？」
わしは指差す。
「あ……」
そこにはアルクシアの血がついた三日月型の刃があった。
「そういうことだ、あの血を使わせてもらった」
たたたたた……
夏哉が走ってくる。
「これでチェックメイトだな」
光の中に入る。上からはアンが降りてくる。
アルクシアの頬がつり上がる。

「まだ」

アルクシアの周りで地面が突き出し、蔓すべてを断ち切る。
「なッ！？」「ちょっ！？」
マズイ！！あれでは夏哉が格好の的だ！！
間に合え……！
指輪を取り出す。
アルクシアは突き出した地面から槍を夏哉に投擲。夏哉はかわせない。
「トミアラ！メルティウム、夏哉、アンを転送！！」

屋上。

わしら三人は空間移動でここに逃げてきた。夏哉は生きてる。
「ハァッハァッ、メルティウム、これはどういうことだ？」
「すまん、あれはわしのミスだ。まさかあの状態で魔法を使われるとは思わなかった」
「あの状態って光の中にいるときですか？」
「いや、あの蔓に触れると奇法は使えなくなるはずなのだ」
「使えない状況で魔法が使える……道具の不備があるということは？」
「考えにくいの、確かにミスはあるかもしれんが確率はかなり低い」
「アンなんか分かるか？」
「いや、え～……魔法が使えなくなる前に使ったとか？」
「……時間差か」
「そんなの出来んのか？」
「出来る筈だ」
皆深い説明はしない。そんな余裕などない。ここで夏哉がひとつ提案を出す。
「動かなくするには、痺れさせる？」
「まぁ筋肉の痙攣を引き起こせればいけぬこともないだろうが……」
「アルクシア様に対して簡単に出来るのか？」
「メルティウムさ、前に電気吸収するやつ使ったっしょ？あれ他にどんなのがある？」
「電気関係なら吸収、放出が出来る。球の状態で電気を流し込めば雲にしたときすぐに放出出来る」
「じゃあ最初に電気を吸収させて、そのあとまた吸収するってこと出来る？」
「出来るぞ。どんな電気量でも二回だけ吸収して、それを一気に放出する。分割は出来んがな」
「……それ何個ある？」
「最低百はあるぞ」
「じゃあ二個くんない？」

「構わんが、どうするんだ？ぬし、しっかり策はあるんだろうな？」
「成功するかは分かんねぇけどな」

土の槍は人間を貫かずに、空を切った。
逃げられたか。
蔓の残骸を見る。光はもう消えている。
さっきのは危なかった。あれに捕まると奇法使えないんだ、今まであんなの使ってなかったのに。
とっさに時間差魔法を使っててよかった。あれがなかったらあたし終わってたな。
これからどうしよ。
ここから離れて探しに行くのもいいけど、
「……夏哉」
とかいったっけ？
あの人間と話がしたい。
メルティウムはあの建物の中に逃げたのかな？
じゃああれをぶっ壊せば……ダメだあいつは死んじゃう。
えーとどうしようあたし考えるの苦手だし、早く出てきてくれないかな。
立ってるのも疲れるから座って待ってる。
一分位すると空からメルティウムが降りてくる。
「何してるんだ？」
「座って待ってる」
「わしをか？」
「違う、夏哉って人間。座ってれば来ると思ったから」
「自分で探せばいいだろうに」
「すれ違いになりそうだから」
「そうか、ま、わしらはそれで楽なんだがな」

「人間は？」
「ぬしを捕まえる準備をしてる」
「そう」
あたしは立ち上がって奇増刀（きぞうとう）に力を注ぎ、メルティウムに切りかかる。
途中剣に風が纏う。
向こうは二枚の札を重ねて投げてくる。
それは周りの雨粒を吸収しつつスピードをあげてくる。一枚は水、もう一枚は風の能力があるんだと思う。
あたしはそれを切り裂く。
水の塊は八等分になって地に落ちる。
風を纏わせることで一撃で八回の攻撃が可能になる。
もう一度剣を振るう。剣の先から空気の圧縮弾を出す。さっき壁を壊したやつだ。
それがメルティウムの腹に当たり、
水となって崩れ落ちる。
「ッ！？どこ行った！？」
「どこだろうな」
上から声が聞こえた。
前へ飛ぶ。
直後上から巨大な水弾が降ってくる。
水しぶきが舞う。
「いつの間に……」
「下に飛び降りてきた時からだな、札は分身の後ろから投げだ」
くそっ、雨で見えなくなってきたか。
「ほ～れほれほれほれ～！」
メルティウムは風や水を纏わせた剣やら札やら魚の骨やらを投げてきた。
「魚の骨ッ！？」
それに気をとられてぬかるみに足をすくわれた。

「しまった――」
「隙あり！」
上には近くまで迫っていた剣の先があった。
奇増刀でそれを防ぎメルティウムを止める。
するとメルティウムの剣が光る。
地面を太い棒状に盛り上げてあたしを上へ上げる。
剣からレーザーが発射。
あたしはギリギリ躱せたけど、土の柱は崩れた。
あたしも下に落ちる。
着地しようとバランスをとろうとしたとき、後ろから奇法を使う気配があった。
振り向くと、ちょうどクーレラが雷を撃ってる瞬間だった。
躱そうと思ったが、威力も少ないしあたしから少し狙いがずれてる風に思えた。
何かあるかもしれないと、空にとどまることはやめ重力に従い落ちる。
雷は予想通りあたしのもといた場所からずれていた。
どういうことだろう？クーレラなら狙いくらいつけられるだろう。
あたしが奇法を使ったんだから場所は特定できるし。
雷が進んでいた先を見ると、雷はすでになく代わりに黒い雲があった。
あれはさっきメルティウムが使っていた……
「！？まずい！」
あの雲は雷を吸収したやつだ。いつの間にあんなのが、と思いすぐに思い付いた。空飛んで巨大な水弾をぶっぱなした時だ。
雷が放出される。
「！？」
クーレラが使ったときよりも力が上がってる！？
風の奇法を使って軌道から外れて着地。
クーレラとメルティウムを探す。

二人は空を飛んでいて、しかもメルティウムは夏哉を持っていた。
ここでふと疑問が頭のなかでうずまく。
どうしてあいつがいるの？あんなのか抱えながらなんてさすがに戦えないはず。
メルティウムは、夏哉はあたしを捕まえるための準備をするって言ってた。
ここにいるってことは準備が終わったってこと。
もしかしてもう確実にあたしを捕まえられるってこと？だからメルティウムは抱えて……
あれ、そういえばどうして雷が地面に当たった音がしないの？クーレラだけだったら疑問はないけど、　その間にはメルティウムの道具がはいってる。
つまりあの雷は、この大地に干渉するはずなのに。
雷が落ちたであろう場所を見る。
そこには大きな穴はなく、黒い、こんなところには発生しない、見覚えのある雲があった。
「なッ！？三段構えか！！」
つい声が漏れた。
急いで壁を生成、しかしそこに雷は飛んでこなく、
あたしは気を失った。

第一話　《十八話》終焉とあの真実

バシャ

アルクシアは倒れた。
「……いったか？」
「分からんが、ダメージは喰らったろうな」
「降りてみますか、メルティウム様」
「そうだな」
二人はアルクシアのすぐそばに降りる。
アルクシアは手足が痙攣して所々皮膚が焼けている。靴は焼けているが、服にそこまで被害はない。
メルティウムはアルクシアの体を起こす。
「ほれ二人とも、さっさと札を貼れ」
いいながら、空間を裂いて空豆ほどの球をふたつ取り出す。……空間を裂くって言ったけど、他に言いようがない。空中でファスナーを開けたみたいにぽっかり穴が空いて、その奥はなんかこう、グチョグチョの変な風になってる。
深いことは気にしないで札を取り出す。
「ところで沙鳥は平気なのか？人間じゃ死ぬほどの電撃を喰らったと思うんだけど」
そう、アルクシアは電撃を喰らって気絶したのです。
さて盾を出したのにどうして喰らったのか、
それは感電です。
地面には雨＋メルティウムの水系の道具によってたくさんの巨大な水溜まりがあるのです。それこそアルクシアが足をすくわれるほど。
まずアンの電撃を、あらかじめ学校の電気を蓄えさせていた雲に吸収させ、そのふたつの電気を、もうひとつメルティウムに頼んで電

気を溜め込んだ雲に吸収させる。そうして何倍にも膨らんだ電撃を地面の水溜まりに喰らわすと、感電してジ・エンド。
という理屈でした。
でもちろん、そんなのを喰らったら人間はほとんどの確率で死ぬだろうけど、
「安心しろ、殆んどのダメージはアルクシアに喰らうはずだ。多少は残るが死にはしない。それと、アルクシアはこの程度では死なん」
「ふぅ、よかった～」
「言いたいことはあるが、それより早くせい」
「了解」「分かりました」
せーの、と背中と腹同時に貼る。
メルティウムはふたつの球を上に投げる。
ふたつは勝手に沙鳥の上空で停滞し、その間に切れ目が出来る。
「ベルバー・ハノサ」
メルティウムがなにか言う。
すると沙鳥の背中から誰かが出てくる。
すごく綺麗な人だ。髪は肩よりちょい長めで、右目は髪に隠れてる。
服装は、かなり露出度が高い。二の腕や太ももは丸出しで、へそも見えてる。色は上が群青で下は赤。
体型はちょっとスレンダーで（香苗ほどではない）、沙鳥の体と同じところに焼けたところがある。
多分この人がアルクシアだろう。
沙鳥を見ると、目の下の線は消えていて、肌の色も元に戻ってる。
アルクシアは気絶したまま中に浮く。
切れ目が徐々に開いていき、そこに飲み込まれていく。
切れ目が閉じていき、完全に閉じると球は砕け散る。
「おわった……？」
「ああ、これで無事終了だ」
メルティウムが言うと、雨は弱まり、やみ、空の雲が散っていき、

陽の光が差す。
メルティウムを見る。演出だ、と言ってきた。
虹も出てきて、確かにこれはいいなと思う。
「んんっ……」
「沙鳥!?」
沙鳥が目を覚ました。
「……ぅぅ……、な、夏哉?どうしよ、体死ぬほど痛いよ……なんかピリピリするし、動かないよ……」
「沙鳥!だいじょ――」
「ちょっと退いてろ」
メルティウムが割り込んでくる。
「カナ……?」
「おとなしくしておれ」
メルティウムは両手で沙鳥の顔を固定させ、
沙鳥の唇を奪う。

「んっ……」「はいぃぃぃっ!!」「え、な、ちょっ」
俺とアンは何が起きたのか理解できず、沙鳥は目を閉じている、というか気絶してるのか?
ここにいる人は皆動かなくなり、二十秒ほどしてメルティウムは唇を離した。
沙鳥が全く動かないということは、本当に気絶しているのか。
「あの~メルティウムさん?何をしてるのかな?」
「なんだその言い種は、折角こやつの傷を治していたというのに」
「え、嘘っ!?」
沙鳥を見ると、確かに傷は消えていて、肌がつるんっとしてる気がする。
「あの、ホントありがとう!」
「別に構わんよ」

ボソッと、そのあとに何か言ったみたいだけど、聞こえなかった。
「それで、知らないのにやったのか？」
「はい？」
なんだ？全く意味が分からない。何を知らないんだ？
「だからさっき言ったではないか、？言いたいことはあるが？と。だから今ここで聞いておるのではないか」
え～と……言った気がするけど、ダメだ、思い出せない。
「ごめん、僕もう年寄りだから物忘れが激しくって」
そこにアンが参加する。
「ハァッ、夏哉もう年寄りなのか！？こんなに若く見えるのに、もしかしてこの二人もなのか！？人間は見た目じゃ分からないな……！！」
あー、アンが変な誤解をしてしまってる
「待て待て待て、違う、これは冗談だ」
「じゃあ覚えておるんだろうのぉ」
「忘れました」
「や、やっぱり夏哉は……」
「無限ループかい！！」
あーもー、話が進まん。
「で本当になんのこと？」
「ぬしはあの雷を当てたらどうなるかとか知らんでやってたのかという話しだ」
「あ、うん、知らなかったけど、あんたがおもいっきりやってたから大丈夫なのかなぁと」
「信頼されとるのかのぉ、わしも」
「そうなんじゃないんでしょうか」
「ふん。あ、おい、アンちょっとこっちに来い」
「は、はい！」
メルティウムは俺から離れてアンを呼び、なんかこそこそしている。

話が終わると、こっちに戻ってくる。
「ではそろそろわしも戻るぞ」
スーッと、沙鳥の時と同様にメルティウムが出てくる。
倒れそうになる香苗を支える。
メルティウムは指で空中に自分と同じくらいのたて線を引く。その線が裂ける。
「ではな、もうで会わんことを祈っとるぞ」
「次会ったら茶ぐらい出すからな」
「お、それは楽しみだのぉ」
三人、クスリと笑う。
「じゃあの」
メルティウムは裂け目に入っていった。裂け目は閉じられる。
この場には気絶した少女二人と、俺と異界少女しかいない。つまり俺が二人を運ぶのか、沙鳥も香苗の部屋でいいよな、等と考えていると、
「なぁ夏哉」
アンに呼び掛けられた。
「どした?」
「その、なんだ……」
なんか歯切れが悪い。本当にどうしたのか。
「私の名前の由来、メルティウム様から聞けと言われたのだが」
あの野郎何言ってくれちゃってるんだよ。
「夏哉は私に嘘をついたのか?」
「は?なんで?」
「初めて名前をつけたときに、理由なんて無いと言った」
「あー……怒らない?」
「怒られるような理由なのか?」
「多分」
「安心しろ、そう怒らんよ」
「ふぅ、じゃあ言います。『アン』という名前は、昔俺がつけた猫

の名前です」
「ね、ねこ？」
「はい、猫です。昔その猫が道路で倒れてて、それを助けようとしたら車が来てて、もうダメだと思ったらなんか車の方がつぶれててね。まぁ死んだ人はいなかったんだけど。で、そのときつけた名前がアンというわけ」
　このときの名前は適当につけたはず、と付け加えた。
「その猫ってもしかして、メルティウム様？」
「うん、そうらしい。これにはすごく驚いた」
「何故お前は私にその名前をつけたのだ？」
「アンを見たとき、不思議な生き物だなって思って、そういや昔同じように不思議な生き物いたな、あ、あの猫だ、ならその名前パクっちゃえ、という風になりました」
「なるほど、分かった」
「えぇっと、ごめんなさい」
「いや、どうして謝る？謝れる覚えはないが」
「人間には猫と同じ名前つけられて嫌だと思う人もいるかなと思うから」
「別にそんなので不快になったりはせん。むしろ良いではないか、猫だぞ猫、あんな可愛い生き物と同じ名前なんだぞ！あれはいい……」
　判明、まさかアンが猫好きだとは思わなかった。
「じゃあそろそろ帰るか」
「あ、ちょっと待て」
　アンに呼び止められる。
　アンはなにか言いにくそうな顔をしている。
「大丈夫か？無理して言わなくていいと思うけど」
「いや言う。言うからちょっと待て」
　二、三回深呼吸をして、よし！と気合いを入れる。
「私の本当の名前はクーレラだ。意味は《二番目》だ」

一瞬時間が止まった。
きっと今の俺の顔は、キョトン、というのがお似合いなんだと思う。
「え～、どうしてそれを今？」
「夏哉が名前のことを教えてくれたから」
ん～、まぁよくわからんがそういうことにしとこう。
「その、アルクシアのときもそうだけど意味って何？」
「私たちの世界は名前に必ず意味を持たせるのだ。だから意味のない名前をつけられたときは驚いた」
なんかその言い方だと適当につけた感が出てくるな。
「まぁ日本人は適当だな、意味を持つ名前をつけたり響きだけで決めたり」
あ、そういえば、とちょっと疑問ができた。
「どうしてその名前を使わなかったんだ？」
「嫌だったから」
「何が？」
「せっかくここに来たのだから、魔族ではなくただの生き物として過ごしていきたいと思ったからだな」
「これからもアンって呼ぶけどいいか？」
「構わん、むしろそうしてくれ」
「分かった」
もう言葉が続かなくなったから、しばらくそのまま無言でボーッとしてた。
「よし、いきますか。アンはどうする？」
「私はちょっとな」
もしかしたら魔界に戻るのか？まぁ向こうが故郷だしな、当たり前っちゃあ当たり前か。
「それじゃぁな」
俺は香苗と沙鳥を抱える。
「ああ」

またな、と言ってどこかへ飛んでいってしまった。

第一話　《エピローグ》特別な四人

四月三十日。

神が出てきてから二日後、俺、香苗、沙鳥は学校へ向かっている。

昨日は先生が『電気が使えなくなった。きっと召喚獣の仕業だろう、だから休み』という連絡網が来た。ホント召喚獣様様だね。

それと沙鳥は召喚魔法禁止例が出された。まぁこれはしょうがないな。

一昨日、俺は気絶している二人を俺の寮部屋まで運んで、沙鳥の家に今日は止まる旨を伝えた。別になにもしてないよ。

二人はなかなか起きなくて、結局昨日の四時くらいに起きた。だからなんにもしてないって。

しばらくして俺はあの日起きたことを全部話した。

それを聞くと沙鳥はやはり泣き出して、俺たちに何度も謝り出した。俺と香苗は三十分かけて落ち着かせた。

簡単な飯を食わせて二人は香苗の寮部屋に向かわせてまた寝させた。

そして今日に至るわけだが、

「はぁ〜」

隣で大きなため息をつかれた。

「どうしたんだい沙鳥さん、ため息なんてつくと幸せが逃げて——もしかしてまだ体調悪い？」

最初はおふざけで言ったけど、あんな電撃を喰らったんだ、まだまだ万全じゃないはずだ。

「あ、ううん、体はちょっとだけだるいけど全然問題ないよ。でもね……」

また大きなため息をつかれた。

「沙鳥ちゃん大丈夫？なにか悩みごとがあるなら言ってね」

香苗が気遣うが、沙鳥は香苗の目をそらしてしまう。

「な、夏哉くぅん！もしかして私が原因！？」
俺の袖を引っ張りながら涙目で訴える。くぅぅ、チョー可愛い！
そんな幸せに浸りつつ沙鳥に聞いてみる。
「沙鳥ホントどうした？マジで悩みがあるなら相談受けるから」
香苗をどっかほっといて、と付け足す。
ひどいよー！！といってポコポコ叩いてくる。
「夏哉……」
「ん？」
「香苗と、し、しちゃったんだよね？」
俺と香苗は凍りつく。
え、ちょっと今なんて言った？
『夏哉、香苗としちゃったんだよね？』
もしかして香苗とキスしたことかぁ！？
なんでばれた！！俺は話のなかでそんなこと一度も言ってないぞ！！！
首を横に向ける。可能性があるとしたら香苗だ。
（おい香苗！お前言ったのか！？）
（い、言ってないよ！昨日は私たちすぐに寝ちゃったし！）
（じゃあなんで知ってるんだよ！？）
（知らないよぉ！）
くそ、香苗じゃない。なら誰がこいつに言ったんだ？
「あ、あの～沙鳥さん？」
「なに？」
「なんのことをしちゃったと？」
「だ、だから、きき、……キス」
あ、これは終わったわ。
香苗に目配せをする。
香苗もわかっているのか、首を縦に振る。
よし、じゃあ今からすることはひとつ。
「すいませんでしたッ！！」「ごめんなさいっ！！」「ごめんッ！

！」
俺と香苗と沙鳥は同時に頭を下げて謝り、ん？沙鳥？
俺は顔をあげる。そこには同じような姿勢で頭をあげている沙鳥の姿があった。
「ちょっとなんで夏哉とカナも頭下げてるの？」
「それはこっちのセリフだ。どうしてお前が頭下げる？」
香苗もコクコクと頷いている。
「私はその、香苗と、キ、キスをしちゃって……私初めてで、カナは分からないけど多分初めてな感じだし――」
グサッ！！と隣で聞こえた気がする。うん、これじゃ余計罪悪感があるよな。
「――私も、その、初めては夏哉としたかったし――」
グサッグサッ！！今度は俺の胸にも刺さってきた。これはマズイ！
「――だから二人に謝ろうと思って……二人はなんで謝ったの？」
い、言いにくい。言いにくすぎるぞコレッ！
どうする？本当のことを言わないでおくか？いやダメだろう。ここで誤魔化したら余計悪化する気がする。
俺は腹を決めた。
「実は、俺たちキスをしました」
「……へ？」
「ですから俺たちはキスをしちゃいました」
「キス？」
「うん」
「キス」
「キス」
「カナと？」
「うん」
「二人初？」
「俺はそう」

「わ、私もです」
「いつ？」
「一昨日」
「私が乗っ取られたとき？」
「はい」
「ホント？」
「言い訳をさせてください」
「なに？」
「あの状況だったら絶対断れない」
「ふぅーん」
「どうしましょう？」
「じゃあ私とキスして？」
「はぁっ！？今ここでぇっ！？」
「うん」
「お願いですから恥を知ってください」
「三人道端で謝ってるのに恥を知れって言うの？」
「ホントすみません」
「じゃあやろう」
「そんな簡単にしてはいけません」
「じゃあ無理矢理襲っちゃうもん！」
「女の子がそんなこと言うんじゃありません！」
沙鳥がマジの目をしてたから、もう言葉が通じないと悟る。
どうしよ。
「夏哉ぁーっ！！」
身を守る方法を考えていると、空から声が聞こえた。
何事かと見上げると、見覚えのある少女が降ってくる。
「夏哉っ！！」
「グハッ！？」
少女は俺に体当たり、もとい抱きついてきた。
「アン、重い、死ぬ……」

「貴様、レディに対してそれは言ってはいけないことだろう」
「うるせぇ!!って言うか本当に体重増えてんじゃん!!十五キロはどうした!?耳もとがってないし!」
「ああこれか?昨日のうちに人間みたいに変えてみたのだ」
アンは俺の上からどき、俺は立ち上がる。
「お前、魔界に帰ったんじゃなかったのか?」
「私は一度もそんなことは言ってはおらん。それに私はまだ罪人だ、魔界など帰れん」
そういえばそうだったな、すっかり忘れてた。
一度息を整える。
「おかえり、アン」
「ただいま、夏哉」
そう言うと、俺に抱きついてきて顔を近づけ――
「「ダメ――――――!!!!」」
吹き飛ばされた、俺が。本日二度目、俺なんか悪いことした?
「夏哉君!!誰だか知らないけどこんなところでなにしようとしてるの!?」
「なんでその子にはしようとして私にはしないの!?」
え、待て、二人ともなに言ってるんだ?なんかアンが見えてるような口ぶり……
「あの、二人このアンちゃんが見えてるの?」
「お前が『ちゃん』つけるな、変な気分になる」
「え、この人がアンさん?」
「そうだ、よろしくな香苗に沙鳥」
「うん、よろしくね」
「こちらこそよろしく」
……なんか和解してるけどさ、疑問があるじゃん。
「なんで二人はアンのこと見えるのさ」

「あれ？そういえば」
そうだよ沙鳥ちゃん、それが正しい反応なんだけどいかんせん、反応するタイミングが遅い。
「それはあれだ、神が中に入ったのだからそのくらいの副作用はあるだろう」
「え、じゃあ今の私たちって夏哉君と同じってこと？」
「ああ。夏哉は昔のこと言ったのか？」
「あ～……忘れてたわ」
「なになに？なんの話？」
「すごい気になるんだけど」
「じゃあまた後でな」
「ということは、これは私と夏哉だけの秘密というわけだな」
「なんかそれムカつくね、カナ」
「うん」
ああ、二人の目が怖い。
「そうだ、夏哉、言いたいことがある」
アンがいきなり真剣な声で言ってきた。
「どうした？」
「私はお前のことが好きだ」
「「「えっ」」」
「こんな気持ちは初めてなのだが、この世界の本を読んで分かった。私は夏哉に恋愛感情を抱いてる」
アンは真面目だ。会ってからちょっとしか時間は経ってないけど、その想いは凄く伝わった。
「今はまだ答えは出さなくていい。答えを出すには私たちはお互いを知らなさすぎる。だから出来ればこれから先、お互いのことを知ったら答えが欲しい」
あ、今アンが言った関係って、そっくりだな。
俺は自然と微笑む。
それをアンは笑われたと悪い意味で取ってしまった。

「そ、その、嫌か？」
「いや、そういうんじゃなくてな、ちょっとすごいなって思ったんだよ」
「私が変なことを言ったのか？」
「違うよ、香苗と沙鳥もそんな関係だなって。こいつらも告白して俺が答え出せなくって答えを待たせてるんだ」
「そうか、なら二人はライバルになるのか」
「うん、そうだね」
「アンちゃんにも負けないよ！」
三人はいっそう燃えている。これから凄く仲が良くなりそうだ。
と、そういえば沙鳥のため息やアンの登場で忘れてたことがひとつ。
「皆さん皆さん」
「なによ夏哉、今いいところだったのに」
「ほわっつたいむいずいっつなう？」
「……カナ、夏哉君はなんて言ったの？」
「沙鳥ちゃん、それくらいは覚えようよ……」
「えへへ、ごめんね」
「今何時？だって。えぇっと……あっ！！」
「か、香苗、どうした！？」
「今、八時二十六分」
「ええっ！？あと四分じゃん！！夏哉なんでもっと早く言わなかったの、てもう先に行ってるし！！」
「いそげよ～」
しょうがないから手を振ってやる。
沙鳥はちょい早めに走ってくる。香苗も走るが、沙鳥についていくのは辛そうだ。
「そういえばアンさ、メルティウムとなに話してたの？」
ちょっと気になったもんだから、隣で飛んでるアンに聞いてみる。
「あれか。あれはメルティウム様に奇法の七割ほどを失う代わりに

ものを触れる力を貰ったのだ」
そう言うとアンはそばにあるコンクリートの壁を触る。
本当に触ってる。それは凄いけど、
「魔法はいいのか？」
せっかくそういう力があるのに、もったいない気がする。
「別によい。この世界じゃ奇法は使わないだろうしな、それにこれで少し人間に近づけたんだ、私は得をした」
「そっか、ならいいや」
俺は思った。
一昨日のことは、訳が分かんなくて自分が香苗や沙鳥たちと離れていきそうで怖かった。
でも、アンに出会うことが出来た。
香苗と沙鳥が俺と同じふうに特別になった。
それはよかったと思う。
みんな一人じゃなくなった。分かち合うことができるようになった。
俺は幸せだ。
こんな最高の人が三人もいるなんて。

後書きという名の雑談

作者「うおぉぉぉぉっ！ついに来たこのあとがき（おれじだい）！！俺はコレを書きたかったといっても過言はな――」

？？「さぁくしゃぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！！！」

作「グハッ！？だ、誰だ跳び蹴りしたやつはっ！？」

？？「あれはどういうことですのっ！？」

作「お、お前は、ギャグ要因としてほんのちょっとだけ出てきた早乙女真樹！」

真樹「誰がギャグ要因ですの！！」

作「で、主人公に胸を揉まれてしまった少女がどうしたのさ？」

真「ぶん殴りますわよ」

作「お嬢様の言葉じゃないね」

真「そんなの関係ありません。それよりどうしてわたく――」

作「は～い、ここで主役たちのご登場で～す！」

真「あなた、どういうつもりですの？」

作「や、無理にでもやらないと出てこれなくなりそうだから。それとも真樹は沙鳥と会いたくないと、そういうことかい？」

真「うっ……、分かりましたわ……」

作「じゃあはい登場！」

四人「「「「どうも～」」」」

真「さ、沙鳥様ぁ～！」

沙鳥「よしよし、真樹～怖かったよね～」

作「俺はどっかの変質者か？」

夏哉「さぁな」

作「否定してよ……」

アン「それより私たちはどうすればよいのだ？後書きと言われてもやることは決まってるのか？」

夏「というかどうして後書きなのに後書きの場所で書かないでもう

一部作ってんだよ？」
作「それはね、後書きスペースで書ききれないからだよ」
夏「どんだけ長いげぇの作ろうとしてんだよてめぇは！？」
作「だって後書き夢だし」
夏「知るかッ！」
ア「それでやることはどうなんだ？」
作「あんまし決まってない」
香苗「あんましって……」
作「あ、じゃあひとつお知らせ。自分の小説を閲覧してると、字がいっぱいで読みにくい気がする！」
ア「小説だからな」
作「だから段落ごとに行を開けることにします」

作「こんな風に」

香「なんでここで言うの？もっと早く気付かなかったの？」

作「気付いてはいたけどさ～、なんつーかこう、中途半端なとこで直すのは気分が悪い」

沙「まぁ分からなくはないけどね」

夏「じゃあキリのいい一話が終わったってことで二話以降は行を開けようと」

作「そゆこと。後書きもそんな感じで、途中でやろうと思ったけど俺は中途半端が嫌い」

真「こういう人ほどなにかやろうとしたら途中で諦めてしまうものですわ」

作「う、うるせぇ！」

ア「どうした？動揺か？」

作「そんなんじゃありません！」

夏「あ～、こんなんじゃ進まねぇ。香苗、俺らで進めんぞ」

香「うん、分かった。……ところで真樹ちゃんはなんか言いたいことがあったんじゃなかったの？」

真「ええそうですわ！どうしてわたくしがあんな出番が少ないんですの！！」

作「まぁ待て、それには深い事情がある」

真「なんですの？」

作「まずな、いっちばん最初は香苗が主人公だったんだ」

五人「「「「「えええぇっ！？」」」」」

夏「ちょっと待て、じゃあ俺はどうなんだよ！？」

作「知ってた？昔の麦谷高って女子高だったんだよ」

夏「俺の存在が消えたぁぁぁぁッ」

ア「わ、私は？私はどうなんだ？最初は香苗が私のことを見えるよ

うになるんだよな？」

作「知ってた？昔は世界って地球だけだったんだよ」

ア「私だけでなく神も存在消えたっ！！」

沙「じゃあ私たち三人は変わってないってこと？」

作「そうそう、基本今となんも変わってないよ。香苗と沙鳥がいつも一緒で、それに嫉妬した真樹が香苗に決闘を申し込むっていうほのぼのとした小説だったな」

香「それのどこがほのぼのなの！？」

真「それにわたくしは決闘を申し込むほど香苗のこと嫌ってはいませんわ！」

香「真樹ちゃん……ありがとう」

真「うぅぅ……、その上目使いは卑怯だと思うのですが」

沙「うん、しょうがないよ。この子無自覚だし」

作「あ～、そこで盛り上がってるとこ悪いんだけど、これ昔の話だからね。その過激さを夏哉に回しただけだから根本は変わってないよ」

夏「はぁっ、なにそれ！もしかしてその理由で俺が出るようになったのか？」

作「うん七割ほど」

夏「もう大半を閉めてるじゃねぇかよッ！」

作「だって香苗がいじめられるのは申し訳ないじゃん」

夏「まぁそうだけどよ……」

沙「それで、その頃の真樹はよく登場してたの？」

作「うん、三話目くらいから」

真「ちょっと待ちなさい！全然先ではありませんの！」

作「いやいや、あのときは一話が短くってさ、一、二話にもちょくちょく出てきたけどしっかり出てきたのは三話って話」

沙「それで、そっからどうなったの？」

作「ちょっと恋愛っぽいのを入れたいなぁって思ってね、夏哉を入れたんだよ」

夏「俺復活！」

ア「私はまだなのか？」

作「まぁ聞け。それでその後禁書目録を読んでたら天使とか神を入れてみたいな～って思って、登場したのがアンなのだ」

ア「私、神でも天使でもないぞ」

作「細かいことは気にしない」

ア「細かくないが、まぁいい」

沙「もしかしてさ、真樹も夏哉フラグを立てようとしてたの？」

真「それは絶対ありませんわ」

作「うん、それは考えなかった。真樹は沙鳥ラヴだから夏哉には最初から、いかないように考えてた」

香「それって夏哉君のことを好きにならないから出番が少なくなったってこと？」

作「あ、そうなるかも」

真「そんなの無茶苦茶ですわ！」

作「まぁ安心しろ、次の話には入れ……られないから三話でな」

真「なんですのそれ！酷すぎますわ！！それになんですのこのタイトル！？四人の魔法使い？！完全にわたくし入っていないじゃありませんの！夏哉！わたくしと代わりなさい！！」

夏「そんなそれこそ無茶苦茶だろ！」

作「夏哉は主人公だから消せないし」

真「では香苗かアンさん代わりなさい！！」

香「そ、そんなぁ！真樹ちゃん私のこと嫌いじゃないんでしょ！？」

真「それとこれとは話は別ですわ！」

香「夏哉君！」

夏「ごめん、俺にはどうにもすることも出来ない」

香「そんなぁ！じゃ、じゃあ沙鳥ちゃん！！」

沙「え、私？」

作「じゃあ沙鳥と変われば？こいつ夏哉とは誰が付き合ってもいいって言ってたし」

沙「え、えええ、わ、私そんなこと、い、い、言ってない……」

作「もとい思ってた」

沙「なんで知ってるのよっ！？」

作「秘密」

夏「沙鳥、それはどういう……？」

沙「いや、その、私じゃなくても、夏哉が幸せになってくれればいいなって思って……」

夏「そっか、ありがとな」

沙「ふ、ふにゅぅぅ～……」

真「な、夏哉あなたなに沙鳥様の頭を撫でているのです！！早く離しなさい！！それにわたくしは沙鳥様のそばにいたいのに、その沙鳥様がいなくなってしまうのならヒロインになる意味がありませんわ！そして私に撫でさせなさい！！」

夏「最後の欲丸出しはなんだ！？」

香「もう、じゃあ私どうすれば――」

ア「あ……」

真「どうしたんですのアンさん？なにか良い案を思い付きましたか？」

ア「いや、そうではなく……」

夏「ほんと何かあったのか？」

ア「その、私はみんなのことが好きだ。だから嫌がらせとかそういうのではないのだが……」

真「要領を得ませんわね。はっきり言ったらどうですの？」

ア「あぁ。なぁ作者、この題名って？四人の魔法使い？だよな？」

作「そうだけど？」

ア「その四人とは、私と夏哉と香苗と沙鳥だよな？」

作「そうだけど？」

ア「……香苗って魔法使えないんじゃ……」

作「……」

夏「……」

香「……」

沙「……」

真「……」

香「で、でもでも、私召喚魔法は使えるよ？これもれっきとした魔法だよね？」

ア「それは科学で作ったものなのではないのか？」

香「うぅ……」

真「あ、あの香苗？その、ほんと申し訳ありませんわ。わたくしなにも考えなくて……わたくし引きますわ。香苗はヒロインとして頑張ってくださいまし、陰ながら応援させていただきます」

香「その優しさが傷付くよぉ～！」

作「あ、安心しろ、俺が魔法使えるようにしとくから」

香「ほんと？」

作「ああ」

香「いつ？」

作「……最終話？」

香「限りなく後だよそれ！」

夏「香苗……」

香「夏哉君……」

夏「大丈夫だって、もし魔法が使えなくて脇役になっちゃったとしても俺はそばにいてやるから」

香「……ほんと？」

沙「ほんとだって私もずっとそばにいるよ。だから落ち込まないで、ね」

香「沙鳥ちゃん……うん、ありがとう！」

夏「よしよし」

香「えへへ～」

作「よし、良い話になったところでそろそろ終わりの時間だ」

夏「皆さんここまで見てくれてありがとう」

香「これからも頑張って続けます」

沙「もし暇だったらこれからも暖かい目で見守ってね」

ア「読んでくれる人が増えてくると嬉しいな」

真「ご意見・ご感想をお待ちしておりますわ」

作「それでは皆さん」

全員「「「「「「また今度～」」」」」」

作「なんか一瞬最終回っぽい匂いがしたな」

夏「それは言うな」

作「それからこれがほんとの最後、勉強あるからこの先投稿遅れる。じゃあ！」

夏「ちょ、待てお前、言い逃げすんなー！！」

第二話　《プロローグ》私と私と貴方の出会い

私は一人だった。

私は一人だった。

小学校の時から周りには誰もいなくって、

小学校の時から周りにはたくさんの人がいて、

だから一人で勉強するしかなくて、

いつも私のためにいろんなことをしてくれるけど、

そうしたら余計周りの人たちは離れていって、

みんなは私をアイドルだなんだと讃えあげて、

勉強が出来るようになると、

勝手に高嶺の花なんて呼んで、

とたんにみんなの見る目が変わって、

その噂が周りにも広がって、

たくさん人が集まってくるようになった。

たくさんの人が私を知るようになった。

でも、

でも、

誰も私と対等には扱ってくれなかった。

近づく人はみんなただ私を利用してるだけ。

私を見たらみんな私を男女問わず尊敬の眼差しを向ける。

それは一人よりはよかった。

私を見てくれるのは嬉しい。

でもそれはとても寂しかった。

でもそれじゃつまらなかった。

みんな学校だけでしか接してはくれない。

みんな私と話すときはいつもよそよそしい。

私もみんなみたいに一緒に帰ったり遊んだりしたかった。

私もみんなみたいに普通にバカな話とかしたかった。

私は周りに人はたくさんいたけど、
友達だけはいなかった。

どんなにたくさんの人が私を頼ってくれても、
どんなにたくさんの人が私のために尽くしてくれても、
友達がいないからいつも寂しさを感じる。
友達がいないからいつも心から笑えない。

そんなとき

そんなとき

私が不安だったとき、

私が孤独だったとき、

貴方が私の前に現れてくれた。

貴方だけが私と一緒に帰ってくれた。
貴方だけが私と一緒に笑ってくれた。
貴方のお陰でとても大切な友達が作れた。
貴方のお陰で心から許せる友達が出来た。
だから私は貴方のことが好きになった。
好きになって、ずっとそばにいたいって思えるようになった。
私は貴方のことをあまり知らないと思う。
それでも私は貴方を好きになれた。
貴方のことをもっと知りたい。
貴方のことをもっと好きになりたい。
私は貴方に感謝してる。
どれだけ言葉にしても足りないほどの恩をもらった。
だから、貴方には幸せになってほしい。
貴方だけにはあんな思いをしてほしくない。
そして、

出来れば、

私のそばで幸せになってほしい。

私のそばで恩を返したい。

私の愛する貴方に、嫌な思いはさせたくない。

第二話　《プロローグ》私と私と貴方の出会い（後書き）

作者「どうも、皆さん。俺の小説を見てくれてありがとうございます。今回はアンと真樹が出ます」

アン&ａｍｐ;真樹「「どうも」」

作「これからはメインの四人＋一人のうち二人が交代で後書きに来ます」

真「作者、どうしてメイン四人＋一人と言う言い方なのですか！？それからどうしてわたくしとアンさんなのですか？」

ア「それは私も思った。私たち面識はないぞ。むしろ最初はあの三人の誰かが来るべきでは？」

作「いやさ、あの二人あんなポエム的なこと言っちゃったから、恥ずいだろうなって。夏哉も同じ」

ア「まぁそれなら納得だが」

ア&ａｍｐ;真「「……」」

作「ん？どうした？」

真「アンさん、わたくしたち後書きでしか会ったことはありません

が、気持ちはひとつに出来そうな気がしますわ」

ア「奇遇だな真樹、実は私も同じことを思った」

作「おお、二人とも仲良くなったのか。それはいいことだぞ」

ア&真「「死ねぇぇぇぇぇっっっ！！！！」」

作「ぐはっ！！」

真「アンさん亡き作者の代わりにわたくしたちが頑張っていきましょう」

ア「そうだな、本編ではまだ知り合えないが後書きでは頑張っていこう」

作「て、てめぇら何しやがる……」

ア「黙れゲスが」

真「クズはクズらしくわたくしたちの言う通りに動いて沙鳥様とわたくしとアンさんと香苗の出番を増やしなさい」

作「それが人に頼む者の態度かよ……」

ア「頼むのではない、命令だ」

作「嫌だ、と言うわけで後書きは終わります」

ア「な、貴様逃げる気かっ！？」

作「ほらほら、早くしないと終わっちゃうよ？」

真「くっ、いつか殺す《これからもよろしくお願いしますわ》」

ア「生まれてきたことを後悔させてやる《みんな、暇だったら感想や評価をよろしくな》」

作「お前ら本音がダダ漏れだぞ」

第二話　《一章》小学生じゃない

私、花街香苗は今日この日、たくさんの不安とほんのちょっとの希望で胸がいっぱいだった。

入学式。

これから麦谷高校で新しい学校生活が始まる。

今まではあんまりいい思い出はなかったから、少し遠くの学校を選んで、それがこの学校だった。

特にいじめがあったって言う訳じゃなかったけど、居心地は悪かった。

私は寮部屋で、新しい制服の独特な匂いを嗅ぎながら袖を通す。

ちょっと大きいけど、三、四ヶ月くらいするとちょうど良いくらいのサイズになるよね。胸とか胸とか胸とか。

思ってて悲しくなってきた。

軽い朝食をとって、寮を出る。

普通よりは少し早めだけど、私は新入生代表の挨拶をしないといけないからしょうがない。

小学校、中学校と友達と言える人は誰もいなかった。

だからこの新しい場所で自分を変えていっぱい仲良くできたらいいな、と漫画みたいなことを思ってた。

漫画と言えば、曲がり角で男の子とぶつかって恋に落ちるって言うのもベタだなぁ、でも現実ではあり得ないなぁって考えてた。

すると、思ってたことが現実になった。
私が曲がったとき、本当にぶつかった。
地面と。
いわゆる転んじゃいました。
うぅぅ、痛い、恥ずかしい……こんなの誰かに見られたら友達作るどころかからかわれちゃ――
「おい、大丈夫か!?」
み、見られたぁー!
どどど、どうしよう、凄く恥ずかしい!
このまま逃げちゃえば私が誰だかばれないかな?
でも足擦りむいちゃって痛いし走れるかな?
必死に打開策を考えていると、向こうからまた声を掛けられた。
「お嬢さん大丈夫?怪我はない?」
お、お嬢さんなんて初めて呼ばれた。
それに凄く優しい声。
顔をあげるとそこにはこれから行く麦谷高校の制服を着た男の子が

手を差しのべていた。

誰だろう？

新入生の登校時間はまだ後だし、二、三年生はもう学校始まってるし、もしかしてふ、不良！？

でも、不良があんなふうに優しい声がかけられるのかな？

でもでも、それが演技だったらどうしよう！

それにあの人が来た方向って高校がある方だし！

やっぱり学校をサボってきたのかな？

いろんな可能性を思案していると、男の子が私の腕をつかみ立ち上がらせた。

「きゃっ！？」

「どう、痛くない？あ～、ひざ擦りむいちゃったね」

ひざを見ると、確かに少し血が出てた。

男の子はポケットからハンカチを取り出して血を拭き取り、包帯みたく巻いてくれた。

「よし、これでいいかな」

「あ、ありがとうございます……」

「ん、いいって。それよりお嬢さん偉いね」

「？なんでですか？」

私とこの人は、もちろん今日会ったばかりだ。
そんな人に偉いと言われても、戸惑うしかない。

「だってひざ擦りむいても泣かなかったでしょ？強い子だねお嬢さんは」

男の子が私の頭を撫でてくる。
あれ、もしかしてこの人……

「あ、あの……すいません……」

「どうしたの？」

「私、いくつに見えますか？」

「ん～、十一歳ってところだと思うんだけど、どお？」

や、やっぱり……。

ちょっと泣きたくなってくる。
た、確かに私は周りの女の子よりはちょっと、ほんのちょっとだけだよ、成長は遅いと思うけど……
そ、そこ、鼻で笑わないでよっ！
もう……で、成長は遅いと思うけど、でも十一歳はないと思うんだけど！
十一歳って小学生だよ！
小学生はないよね！？
しかも私今制服着てるんだよ？

私はこの人に抗議することに決めた。

「ち、違います……私高校生です！」

うん、ちゃんと言えた。
これで分かってもらえるはず！

「あ、そっか。お嬢さんも早く高校生になりたいんだね？だから高校の制服着てるんだ」

分かってもらえなかった！
どうしよう、どうすれば分かってもらえるんだろう。
無理に騒いでも余計悪化する気がする。
こういう思い込んじゃってる人に感情的になったらダメだ、すぐに揚げ足をとられちゃう。
私を証明出来るものってなにかないかな？

あ、あった、私を証明出来るもの。

私は鞄の中を探り始めた。
そしてひとつのものを取り出した。

「あの！これ私の学生証明書です！これで私が高校生だってことを認めてくれますよね！？」

男の子は私の学生証を手にとる。

よし、今度こそ大丈夫だ。
でもなんでだろう？
なんだか既視感を感じる。

「これ、君のお姉さん？偉いね、忘れ物を届けに来たんだ。君と香苗ってお姉さん、凄く似てるね」

やっぱりいいいい！

もうどうすればいいの！？

私悪いことなんてひとつもしてないのに……。

もしかして生まれてきたことが悪かったのかな？

だから友達も出来なくて……

そんなことはないって理屈では分かってるのに、感情が暴れだして理性が効かない。

「……ひっ、ひくっ……ぐすっ」

涙がこぼれ落ちてしまった。

ダメだ、早く止めないと。

こんなところで泣いちゃったら余計子供だって言われちゃう。

でも止められない。

さっきよりもたくさん流れちゃう。

終わった、って思った。

多分こういう噂が広がって、変な目で見られちゃう。

昔以上に孤独になっちゃう。

そう思うと止まらなくなる。

そんな思考の悪循環をしてしまう。

絶望の淵に立たされている、というのは大げさかもしれないけど、私にとってはそのくらいの思いだった。

「え、あ、ちょっと、え、泣いてる？もしかして、花街香苗さん？」

しゃべることが出来なかったのでコクリ、とうなずいた。

「妹とかそんなんじゃなくて本当に高校生？」

コクリ、

「これから俺も行く麦谷高校の新入生？」

コクリ、

「……」

男の子は黙りこくってしまった。

男の子の顔は見てないからどんな表情をしているか分からない。

それに顔自体も見てなかったから、どんな顔かよく分からない。

多分昔の癖で顔を会わせられなかったんだと思う。

自分でも治したいと思ってるけど、人と接することが怖くなってどうしようも出来ない。

「あの、花街さん……」

今までと違った、申し訳ないと言う雰囲気が百五十三パーセント出ている声をだす。

私もなんとか言葉を変えそうと必死になる。

「ずずっ……は、はい……」

「すいませんでしたァァァァァァッッッ！！」

土下座する勢いで謝り出した。

この人きっとここが道路だってこと忘れてる。

そうじゃなかったらこんなところで、こんな大声で叫ぶはずはない。

幸いにも今周りには誰もいない。

恥は最小限で抑えられた。

「あ、あの、そんなに頭を下げないで下さい！その、分かってくれればもういいですから！」

「でも俺すごい最低なこと言っちゃったし、もしムカついてストレスが溜まってるなら殴ってもいいんで！」

え？殴ってもいいって、この人……

「マ、マゾ、なんですか？」

「てめぇ誰がマゾだこらァ！！」

「ひぅっ！？ご、ごめんなさい」

「だぁから泣かないで下さいよぉ！」

「うぅぅ……ごめんなさい」

「どんだけ謝るん……はぁ～、分かった、ちょっと落ち着こう、お互い謝るのはやめよう」

「は、はい」

ふぅ～、とお互いほとんど同時に深呼吸をした。

「えっと俺は柊夏哉です」

「あ、花街香苗です」

「今から学校？」

「う、うん」

「じゃあ学校に行きながら話しましょう」

私はそれに同意した。

第二話　《一章》小学生じゃない（後書き）

作者「どうも皆さん二日ぶり（だっけ？）の再開ですね。今回は夏哉と香苗です」

夏哉＆ａｍｐ；香苗「「よろしく（お願いします）」」

作「さて始まりました過去編。第二話は香苗視点でやっていきます」

香「なんかちょっと恥ずかしいな」

夏「なぁこれは沙鳥は出ねぇのか？」

作「なんだい夏哉君？君は沙鳥ちゃんに出てきてほしいのかい？」

香「え、そうなのっ！？やっぱり私じゃ胸が足りないの？」

夏「そんなんじゃねぇよ！！プロローグで香苗と沙鳥が出てきただろ？だから沙鳥は出るのかって思うじゃん」

香「実際問題どうなの？」

作「ちゃんと出るよ。香苗が前半で沙鳥が後半って感じで」

夏「長さは？一話みたいに二十部くらいいっちゃうのか？」

作「未定です」

香「未定って、先の展開全く考えてないのっ！？」

作「全くっていう訳じゃないけど、部分部分でしか思い付いてないから書きながら構成していくから」

夏「無計画すぎねぇか？」

作「それが俺」

香「じゃあ質問」

作「どうぞ」

香「この作品は何話くらいまで続くの？」

作「考えてない。でもストックは三、四話ある」

香「これからメインキャラは増やしていくの？」

作「考えてない、けど増やす確率は高い。その場合は女の子率が高いと思う」

香「コメディって入ってる？」

作「入ってんじゃん。第一話の二章全部」

香「それって私たちの告白の場面でしょっ！？あれはコメディじゃないよ！」

作「はいはい分かったから涙目にならない」

香「グズッ……じゃあ最後。夏哉君は九話でどうして沙鳥ちゃんに電話したの？」

夏「なんか口調が変わったッ！？すげぇ怖ぇ！」

作「それはね、最初は頭いいから香苗に電話させようとしたんだよ。でも、すごい現実な問題があったんだよ」

香「問題って？」

作「電話登録帳で沙鳥の方が早く出た」

夏「だろうな、『天雲』と『花街』なら『天雲』のほうがすぐ出るに決まってるよな」

香「わ、私名前に負けた……」

作「じゃあそろそろ時間だ」

夏「みんな見てくれてありがとう」

香「感想や評価も待ってます」

作＆amp;夏＆amp;香「「「またね～」」」

香「もし時間関係なかったら私に電話してた？」

夏「百パーセントそうだな」

香「うわぁぁぁぁぁぁんっ！！」

第二話　《二章》謝罪禁止

私は今柊さんと登校してる。

うわぁっ、すごい緊張するー！
こういうのには憧れてたけど、最初は女の子友達とか、もっとなんて言うかフレンドな感じでやりたかったのに。

今となりにいるのは今日初めてあった人で、しかも男の子。
フレンドリーな雰囲気なんて作れないし、もう心臓もドキドキしっぱなしで死にそうになる。

チラチラと柊さんの顔を見る。
髪の毛は男の子にしてはちょっと長めなのかな？
目にかかるかからないかくらいの長さで、黒髪。
顔はかっこいいとは言えないけどだからといって可愛いって訳でもないし、変って感じでもない普通の顔。

「あの～花街さん？」

「は、はいっ！？」

あうぅぅ、声が裏返っちゃった。
もしかしてチラチラ見てるのばれちゃったのかな？
それとも普通の顔って思ったのがダメだった？

「……もうちょい普通に出来ないのか？」

私の思ってたのと違った。

「ごめんなさい……」

「いや、謝んなくていいから」

「ご、ごめんなさい」

「あぁだからもう！今から謝んな！謝罪禁止！」

「ひゃあっ！？は、はいっ！」

初対面の男の子に怒られちゃった。

「じゃあやり直し」

やり直しする意味あるのかな？

「花街さん、もうちょい普通に出来ないのか？」

「あ、その……私、こういうの初めてで、すごい緊張して……」

「ふぅん、じゃあさ、なんで今登校してるの？一年ならまだ時間あるっしょ？」

「あ、それは……」

と言いかけてやめた。

さっきまで散々意地悪されたからここで黙ってて、代表挨拶のときに驚かそう。

そう思って必死に別の言い訳を考える。
私は頭いいもん、だからすぐに思い付いた。

「えっと、時間間違えちゃって……」

「あ、やっぱり？俺もそうなんだよ。で、さっき気が付いて戻ってきたらちょうどあの場面と」

あの場面、つまり私が転んじゃったところだ。

「あの、誰にも言わないで下さいね！」

「ええ～、どうしよっかな～？」

柊さんはにやにやしながら悩むふりをしている。

「……柊さんが私を転ばせて、それを笑いながら指差していじめるってみんなに言いふらします」

「ちょっと待て！なにそれ！？俺そんなことやってないよね！？」

「それに道のど真ん中で人目も知らずに土下座して大声を出して謝ったことも言います」

「俺そこまでやってないよね！？」

「女の子の言うことと男の子の言うこと、どっちの方が聞いてくれるのでしょう？」

「ほんとすいませんでした。絶対に誰にも言いません」

「じゃあ約束守ってね」

「分かりました……」

これで変な噂を流されることはなくなった。

まずは一件落着。

「花街って結構腹黒かったんだな」

「え、そう？」

「そうだろ。普通に見た目に騙された、中身は年相応かそれ以上かも」

「そう、かな？初めて言われたかも」

それはそうだよね、仲がいい人なんていなかったんだし。

と、ここで少し違和感を覚えた。

私、家族以外でこんなに普通に話すなんて幼稚園以来かも。

どうしてだろう？

なんか、この人といるとやすらぐっていうか素の自分でいられる。

なんとなく、なんとなくだけど、柊さんとは仲良くなれそうな気がする。

柊さんといれば自分を変えられるかもしれない。

でも、なんで初めてあった人とこんなふうにしゃべれるんだろう？

もしかして私、柊さんのことが、す、好き？
よく分からない、こんな気持ちになったの初めて。
と、とりあえずなんか言わないと。

「あ、あの、柊さん！」

「ん？どうした？」

「ふ、ふつつかものですが、よろしくお願いします」

「え、何ッ！？なんでこの場面でそんなセリフ！？いろいろ吹っ飛んだよねぇ！？」

「ふぇっ？な、なにか問題でも？」

「大有りだろっ！なんであって三十分も立ってないのに新婚みたいな挨拶してんだよ！？」

「え、新婚……」

何この人、初めてあった人に新婚なんて……
顔が赤くなる。
そんなことを言われたら変に意識しちゃう。

「あの、柊さんは新婚さんになりたいんですか？」

「なんでそうなる！？それはむしろお前じゃねッ！？」

「私ですかっ！？」

「そうだろ、あんな挨拶しやがって！」

あんな挨拶？
私変なこと言ったっけ？
ダメ、全然思い付かない。

私は直接聞くことにした。

「私そこまで変なこと言いました？……ぁ……そうですよね、すいませんでした」

言ってて気が付いた。

私は花街香苗だ。
いつも一人で友達なんていない。
特に嫌われてはなかったかもしれないけど、好かれてもいなかった。
もしかしたら知らないところで勉強できてウザイって思われてたかもしれない。

そんな私と仲良くなんて出来るはずがない。
立ち止まってうつむき、柊さんから離れようとしたとき、頭に軽い衝撃を受けた。

「いたっ！？」

なんだろうと顔をあげると、ちょっと怒り気味の柊さんの顔があった。

周りには誰もいない。
つまりなにかやったとしたら柊さんしかいない。

「えぇっと……」

「お前バカだろ、バカだよな、バカと認めろ」

「え、えっ、え、ええ？」

なんで頭叩かれたの？
私なにかした？
私本当に悪いことしてないよね？

「えぇ、な、なにするんですか……？」

「俺言ったよな？」

「な、なにを……？」

「忘れたとは言わせねぇぞ」

「ご、ごめんなさい……」

ドスッ！！

再び頭に衝撃を受けた。
さっきよりちょっと痛い。

「ひ、柊さん、何するんですかぁ！？」

原因は柊さんのチョップだった。

「俺謝罪禁止って前に言ったよなぁ？」

「え、それってまだ有効だったんですか！？」

「当たり前だコノヤロウ！なにかは知らんが許さん」

「ご、ごめ……」

ギロッ

「ひぃぃ……、分かりました！」

「はいよろしい」

凄く優しい顔に戻った。

もうこの笑顔が天使のように思える。

この人は絶対本気で怒らせないようにしないと。

「それで？俺の言葉忘れる程のことなんだから、なんか凄いことなんだろうな？」

「え？」

「だから謝った理由だよ」

「ぇぁ……その……」

私は戸惑ってしまった。

それは多分自分が今抱いてる恐怖のせいだ。
いままで自分の想いなんて他人に話したことがない。
話してしまったら、私に対する扱いがより悪くなるかもしれなくて怖い。
そうなるかなんて分からないけど、今より悪化するくらいなら押し黙ってた方がいい。

でも、

やっぱりなんとなく、根拠とかはないけど、柊さんなら平気なような気がする。

さっきまでと同じように、変わらないで接してくれる気がする。
さっきみたいにペシペシ頭を叩いてくれる気がする。
……頭を叩くのはやめてほしいかも。

とにかく、柊さんに言おうって思えた。

「……その、柊さんが嫌な思いをしたと思ったから……」

「どうして？」

「私、友達とかいなくて……だからどうやって話したらいいか分からなくって……私は普通に話してたつもりだけど、柊さんずっと大声だったから……私といるのが嫌だったのかなって……」

お願い、なにも変わらないで。

いつも通りに接して。

私、もう一人になりたくない……！

「そっか、悪かった。いろいろ怒鳴った俺が悪かった。ごめん」

「え……？」

柊さん、今……

「でもな、挨拶にさっきのはよくないとおも――」

「えいっ！！」

私は少し腰を下げ、腕を引き、力いっぱい正拳突きをお腹に繰り出した。

「ガバッ！？」

柊さんは倒れ込み、苦悶の表情を浮かべながら溝の辺りを抱えてうずくまってる。

もろに入っちゃったのかな？

「おいこらてめぇ……！なにしやがんだこら……！」

「柊さん自分が言ったこと忘れたんですか？」

「なにをだ……？」

「謝罪厳禁なんでしょ？さっき柊さん謝りました」

「あれ俺も含まれてんの！？」

「当たり前ですよ。男女差別はいけません」

「こんな都合のいいときだけ使うな！！」

「……その、迷惑、でしたか？」

「……はぁ～」

すごいため息をつかれてしまった。

調子に乗りすぎちゃったかな？

そうだよね、柊さんのこと思いっきり殴っちゃったんだもん、ま、

マゾ疑惑があるけど怒ってるよね？

やっぱり私は人と仲良く出来ないのかな？

柊さんは立ち上がって、私にデコピンしてきた。

「ぁいたっ！」

「確かにさっきのは痛かったよ、コノヤロウって思ったよ。でも楽しいなとも思った」

「ぇ……、ほんと？」

「ああ、ほんと痛かったけど迷惑とは思ってない。殴るのは勘弁だけどまぁ、デコピンくらいならいいぞ」

「あ……」

良かった、変わってない。
ほんのちょっとしか時間は経ってないけど、初めて会ったときと同じだ。
ううん、最初よりも仲良くなったかも。

「はいっ！」

私は今までにないくらい元気に返事をした。
多分今の私、凄い幸せな顔をしてると思う。
柊さんと知り合いになれて本当によかった。

「あ、でも花街じゃ手が届かないか」

と思ってたのに。

お腹を抱えて笑われた。

「もうっ！！柊さん、笑わないでよっ！！」

私はそろそろ怒った。
さすがに許せないよこれは！
そのくらい私だって届くのに！！

「わ、悪かった悪かったって、もう怒るな」

「今謝りましたね！？謝ったので一発行きますよ！」

「じゃあどうしろと言うんだよッ!?分かった、謝罪禁止令はもう撤回!謝罪万歳!!」

「柊さん、自分の都合のいいときだけ変な条令出して自分がピンチになったら取り消すんですか?なんですか?独裁者ですか?酷いです!!」

「じゃあ俺はどうすればいいんだ!?」

「さぁ?」

「凄い投げやり!!」

「あ、逃げないで下さい!」

「断る!」

「って、もう学校じゃないですか?」

「あり?ほんとだ」

いろいろあって、学校に着いた。

第二話　《二章》謝罪禁止（後書き）

作者「おい、夏哉、沙鳥！大変だ、大変なことが起きた！！」

夏哉「あ？どした？」

沙鳥「今回は私と夏哉が担当ね」

作「そんなのはどうでもいい！それよりも聞けっ！！」

沙「そ、そんなのって……」

夏「ほら泣くな泣くな。で、ほんとどうした？」

作「ぴ、ＰＶが……」

夏「ＰＶ？」

作「ＰＶが五千突破した！！」

夏＆ａｍｐ；沙「……え……？」

作「しかもユニークも千を越えたのだ！！」

沙「か、上条さん！上条さんはどこ！？」

夏「そ、そうだ、誰か！上条さんを呼んできてくれッ！！」

作「何が幻想だコノヤロウ！！」

夏「だってあり得ねぇだろう！！千？五千！？」

沙「こういう場合はどうすればいいの？この小説をけなしちゃうと見てくれた千人の人に失礼だし、だからといって？これ凄いんだぜ？なんて胸を張れるようなものでもないし」

作「ああそうさ、だから俺は対策を考えた！」

夏「どんなだ？」

作「沙鳥」

沙「なに？」

作「脱げ」

沙「えええぇぇぇぇっ！？なんでそうなるのっ！？」

作「お色気だ。今のあとがきにはお色気が必要だ」

夏「作者、いいこと言った！沙鳥さん、よろしくお願いします！！」

沙「な、夏哉まで……分かったよ……ぬぎねぎ」

作＆amp;夏「「脱ぐなぁぁぁぁぁぁ！！！！」」

沙「ええっ！！どっちよぉ！！」

作「ボケだボケ！変にお色気とか出すとダメな気がする！」

夏「気がするかよ」

沙「でも一話で更衣室の描写があったけどいいの？」

作「これのこと？……ピラリ」

沙「なななななな……！な、なんで、写真……？」

作「え、これは、夏哉が欲しいって言ったから」

夏「な、俺そんなこと一言も――――」

沙「夏哉、そ、そんなに見たかったら、いい、い、言えば、見せるよ……？」

夏「沙鳥……」

作「ピポパポピ……おお真樹？俺だよ俺、え？いやオレオレ詐欺じゃねぇって！」

夏「沙鳥、さようなら！」

沙「夏哉ぁ！？」

作「じゃあ一人消えたから沙鳥一人で終わってちょ」

沙「は～、みんなほんとありがとね。まさか千とかいくとは思ってもなかったよ。ほんっっっとうに嬉しいよ♪出来ればこれからも見て、感想とか評価がほしいな」

作「というわけで皆さん……」

作＆ａｍｐ；沙「「ばいび～」」

第二話　《三章》噂のあの子

「花街～、見っかったか？」

「いえ、まだです」

私たちは昇降口に立ってた。

そこで何かをなくしたというわけではなく、そこに貼ってある紙に書いてあるであろう自分の名前を探している。

紙に書いてあるのはクラス分け表。

自分が何組になってるかは、知らなきゃいけない。

一組から九組まである中、私は一組の方、柊さんは九組の方から調べてる。

私はちょうど一クラスを見終わったところだ。

ちょっと高い位置にあるから首が疲れてはかどらない。

柊さんは二クラスが終わったところ。

このどこかに必ず書いてあるとは分かっているけど、すぐに見つからないと不安になってくる。

二組の欄は見終わった。

次は三組。

そこで、驚くべき名前を見た。

「あ、天雲沙鳥さんだ！」

「天雲沙鳥？どーっかで聞いたことあるな、どこだっけ？」

「え、柊さん知らないんですか！？千鳥山中のアイドルって言われてて、隣町くらいなら知らない人はいないって言われてるほどですよ？」

「あ～、聞いたことあるわ～。確か超美少女でスポーツ万能、料理も出来て人当たりもいい、勉強はダメだけどそこがまたいい、っていうのを聞いたことがある」

「私はそれにスタイル抜群で親衛隊がいて、男女問わず告白されて有名会社の御令嬢だって聞きました」

「それって実際合ってんのかね～？」

確かに噂には尾ひれがつくものだ。
でも確実に言えることはある。

「少なくともすっっっごく可愛くて、すっっっごくスタイルはよかったですよ」

「お前と違って？」

「はい」

それは当然のことだ。
私と天雲さんとは見た目も中身も正反対だ。
私と同じだなんて思われたら天雲さんに失礼にもほどがある。

私の返事をどう取ったのか、柊さんは気まずそうな顔をしている。

「あー、そのさ、天雲沙鳥って人とは会ったことないから分かんないけどさ、お前も、その、十分上だと、思うぞ……」

「えぇ……？」

柊さんは顔を背けてしまった。

耳が凄い真っ赤だ。

私も顔が凄く熱くなる。

いいいいいい、い今柊さんどういう意味で言ったの？あれって、かか、か、可愛いってこと？ええ、私に言ったんだよね？は、初めて言われた……。う、嘘じゃないよね？からかってる？でもあんな気まずそうな顔してたんだから励まそうとしたおせじだよね？でも初めて言われた。

うぅぅ、なんかこのままだと変に意識しちゃうよ～。

なんか、なんか話変えないと。

深呼吸深呼吸……、スーハー、スーハー、

「ひ、柊さんは、天雲さん、受験の時、見なかったん、ですか？天雲さん、来たとき、大騒ぎに、なってました、けど……」

あぁ、同様が隠しきれてない、声が震えて途切れ途切れになっちゃってる。

柊さんはその事についてはなにも言ってこなかった。

「ああ、あぁ、でも、ギリギリだったんだよ……あ、受験の時来るのがな、そんときには殆んどいなくて」

柊さんも凄い動揺してる。
私のことなんて気にしてらんないんだ。

これ以上話してたら余計気まずくなりそう。
だから再び自分の名前を探すことにした。

「……あ、名前があった」

三組三十二番、花街香苗。

天雲さんと同じクラスだ。

私、あの天雲さんと同じクラス。
なんだか複雑な感じがする。
天雲さんと一緒のクラスは凄く嬉しいけど、人がいっぱいいそうでなんか大変な気がする。
でも、天雲さんがいることで私のことを見る人はいなくなるからまたひと……
だ、ダメダメ！
そんな人を悪く言うようなことを思っちゃダメだ。
こうなったとしても、それは天雲さんのせいじゃなくて私のせいなんだから。

それに、

横目でいまだ赤くなってる男の子を見る。

私は今は一人じゃない。
柊さんが側にいてくれる。
あ、別に恋人同士って訳じゃないけど、友達としていてくれると思う。
……誰に言い訳してるんだろう。
そういえば、私たちって友達ってことになってるのかな？
だんだん熱も覚めてきた頭で考えるけど、よく分からない。

「あの、柊さん」

「え、ああ！な、なに？」

柊さん面白いほど動揺してる。

「私たちって友達ってことになってるんですか？」

「ほえ？あー、まあそうじゃね。会ったばっかりだけど知り合いってほどよそよそしくはないし、かといって恋人ってわけでもないし」

「そうですね、ありがとうございます！」

柊さんも私のこと友達って思っていてくれて嬉しかった。
だから変に大きい声で返事してしまった。

「お、おう……？あ、俺もあった」

私の二個下、三組三十四番、柊夏哉。

「私と同じですね……」

「なんか、怖いな……」

「同感です……」

三十分前くらいにあった人と、たった今話題になってた人が私と同じクラスになるって凄い偶然だ。

つい誰かが裏工作をしたって思ってしまう。

「誰かがなんか仕組んでんじゃね？」

柊さんも同じことを思ったようだ。

どうやってクラスを分けたんだろう？

成績の順、じゃなさそうだし、平均かな？

そんなことを考えてたけど、ほんとにもう、柊さんと同じクラスになれてよかった。

一年間は一人にならなくても済む。

私は頭を下げた。

「柊さん、これから一年よろしくお願いします」

「こちらこそよろしくお願いします」

柊さんも頭を下げた。

お互い顔をあげて、どちらともなく笑い、少し早い自分達の教室に

向かった。

私たちは四階にある教室に入ったけど、そこにはもちろん誰もいなかった。
でも隣の、四組の教室で話し声が聞こえた。
私たちと同じように早く来ちゃったらしい。

鞄を自分の席のわきに置く。
特にやることもなかったので、代表挨拶が書いてある紙を見て頭の中で練習する。
大体はもう仕上がってるので、問題は緊張しないで言えるかだ。

柊さんがこっちに近づいてきた。

「な～にやってんの？」

「秘密です」

「え、何？人には言えないこと？」

「ん～、どっちかと言うと、柊さんには見られたくないものですね」

「エロいやつ？」

「……普通そういうこと女の子に向かって言いますか？」

「いや別に女として見てないって訳じゃなくてさ……」

「私のこと嫌らしい目で見てたんですかっ！？」

「違うって！真面目な話だよ！……ふぅ、正直に言うと、こんな風に言っても花街になら平気だな～って思えるんだよ。バカ言っても普通に話してくれるな～って感じで」

あ、柊さんも私と同じこと感じてくれてるんだ。

初めて知った。

人って、誰かと共感できるとこんなに幸せな気持ちになれるんだ。

家族ともいっぱい共感できることはある。

それでもあまりバカみたいなことは言いあえない。

迷惑かけないようにって思っちゃう。

だから、柊さんみたいな人とは初めて会うタイプだ。

変なことを言っても分かってくれる。

心から許せる。

「お、おい、どうした？」

「え？」

気付いたら涙をこぼしてた。

初めて知った。

私って以外と涙もろいんだ。

目を擦り涙を拭う。

柊さんが凄い悲しそうな顔をしてる。

多分柊さんは、私が怒ってるって、哀しんでるって勘違いしちゃったと思う。

「あ、柊さん、気にしないで下さい。その、これは嬉し涙なので。私いつも一人だったので誰かと同じことを共感とか出来なかったので、それが嬉しくって……」

「そっか」

柊さんは笑った。

私も泣きながら笑った。

「あのさ、話は変わるけど?お約束?って言葉知ってるか?」

え、何急に?

「えぇっと、マンガとかお笑いとかで使われる方の意味ですか?」

「そうそれ」

「えぇ~と、ちょっと待っててくださいね……もしかして私が泣いてる状態で誰かが来て勘違いされるってやつですか?」

「そうだ、なんかありそうじゃね？」

「だったらもっとそんな風にしてあげましょうか？……あ、ちょっ、柊さん！？なにするんですか！！みたいな？」

「うわっ超マンガみたい。てか花街ってマンガとか読むの？」

「ん～、たまに読む程度で――」

「おい、大丈夫かッ！？」

「「えっ？」」

誰かが教室に入ってきた。
男の子が二人。
一人はすっごくかっこいい。
顔はテレビで出てくるアイドルにも負けないくらいだし、声も惚れ惚れしてしまう。
もう一人は……こういうことを思っちゃ失礼だけど、ちょっと地味な感じがする。
特徴と言えば、パッと見で分かるくらい無表情、というか、ポーカーフェイス。
第一印象ではそんな感じだ。

さっきの一言はかっこいい人が言った。
私たちは戸惑った。

本当に私たちが言ってたことが現実のものとなってしまった。

あり得ないと思った。

あれはお互い妄想だったし、マンガみたいなことは起きないって分かってた。

なんでこうなったか考えてみる。

このタイミングで来たってことは私の叫びを聞いたってことだ。

そんな偶然、あり得るだ――

「ぁ……」

つい声が出てしまったけど、理解した。

この人たちはきっと四組にいた人だ。

だから私の声が聞こえたんだ。

早く誤解をとかないと！

「あ、あの、私たちは別――」

「もう大丈夫だから早くこっちにおいで！俺たちは貴女の味方だから！」

あうぅ、この人も最初話を聞いてくれない。

私って話を聞いてくれない人に縁があるのかな？

「あの、申し訳ないがこちらはほんと大丈夫だから。俺らが勘違い

させたのはわる――」

「お前は早く離れ――」

「いい加減にしろ」

ドスッ！！

「うう……っ！！」

ポーカーフェイスの人が肘でかっこいい人の脇腹を突く。

凄い苦しそうだ。

見かけによらず結構凄い人だったんだ。

「あぁ、すいません、僕たちが勘違いしてました。邪魔してすいません。これで失礼します」

「おい夕馬！なんで帰るんだ――」

「うるさいよ、あの人たちはそういうことをしようとはしてないって」

そういって二人は教室から去っていった。

「……」

「……」

「……嵐のような人たちだったね」

「ああ。話も聞かねぇし」
「あれは初めて会ったときの柊さんと同じでしたよ」
「マ、マジですか……？」
「マジです」
「……ごめん、ウザかったよな」
「正直……」
「うん、ごめん」
「いえ」
「……」
「……」
なんか変な空気になっちゃった。
どうすればいいんだろう？
こんな空気になったのは初めてだし、こんな気まずい空気なんて今後なりたくない。
柊さんなんか言ってくれないかな。
って、人に頼ってちゃいけないよね、私ってダメだな。
「ほんっと最悪」

「「ご、ごめんなさい！！」」

「えっ？」

「あれ？」「へ？」

最初は柊さんが私のことを言ったのかと思ったけど違った。
第三者の、とても透き通った綺麗な女の子の声が悪態をついた。

その女の子は、

「天雲、沙鳥さん？」

この近くでは知らない人の方が少ないと言われている有名人、天雲沙鳥さんが入り口の前で立っていた。

第二話　《三章》噂のあの子（後書き）

香苗「な～つやく～ん♪どこいった～？」

真樹「作者、夏哉がどこ行ったのか早く教えろ。さもなければ命はないと思え」

作者「おいいいいい！！真樹、お前のその口調まるでアンだぞ！！落ち着け！！なんでそうなった！？」

香「作者さん、私作者さんに感謝してます。私を産み出してくれて、沙鳥ちゃんや真樹ちゃん、アンさんと言う友達も出来ました。ですから夏哉君の居場所をゲロっちゃって下さい」

作「香苗もか！？待て待て待て！落ち着け俺！！この二人がキレてその原因が夏哉と言えば……更衣室か？」

香＆ａｍｐ；真「「ピクッ」」

作「合ってる？」

香「……夏哉君やっぱり私なんかより沙鳥ちゃんみたいなスタイルのいい女の子の方がいいんだ」

真「沙鳥様の着替えの写真を持っているなんて、万死に値しますわ」

作「（まずい、誰かに売るために撮ったあれをつい夏哉のせいにしたけど……）いや、俺は知らねぇけど……香苗、ちょっと」

香「なんですか？私そろそろ限界ですよ？下らないことならちょ～っと……死にますよ」

作「割りと重要だと思うぞ。撮った写真の中にな、お前のもあるぞ」

香「え？」

作「ぺらり」

香「え、あ、ああ、うあ、え、う、ああ……」

作「これも夏哉に……」

香「あわ～～～！！」

どさっ

作「（……よく考えたら俺って盗撮で犯罪者？でもま、お互い了承済みだし……）」

真「あ、作者」

作「ど、どうした？」

真「沙鳥様の写真を下さいっ！！」

作「（……周りの人もこんなんだしな。やっぱこんな状況だったら言えないよな～）」

第二話　《四章》友達

今、私たちの時間は止まっている。
微妙な空気になってしまったときに？最悪？と言って一人が乱入、それは誰もが戸惑うしかない状況で、微妙な空気がより悪化してしまった。

乱入してきた人物、天雲沙鳥さんも驚きの表情のまま固まってしまってる。

どうしてあんなことを言ったのか全然分からない。
私たちに接点なんてないし、最悪と言われるようなことは、したこと、ない、はず……。
だんだん自信がなくなってきた。

「あ……」

天雲さんの声で考えを中断。
この空気をなんとかするためになんか言ってくれるのかな？
人任せなのは分かってるんだけど、天雲さんならなんとかしてくれるはず。

「その、お楽しみのところ邪魔してごめんなさい、ごゆっくりどうぞ」

そう言って身を翻し教室を後に――

「「逃がすかぁっ！！！！」」

私たちは天雲さんのところに一瞬で走り――こんなに走れるとは思わなかった――、腕をがっちりつかんで逃がさないようにした。

「えぇと！天雲さんだよね！？てめぇこの空気嫌だからって逃げようとしたよな！話し合おう、色々誤解があるようだから話し合おう！！」

「そうだよ！ここから絶対逃げちゃダメ！！私たち二人を残さないで！！お願いします！！」

「いえ！私は空気を読みます！二人の楽しみを奪うなんて私には出来ない！だから私のことは気にしないで！」

「いやいやいや！俺はお前のことなんて一切気にしてない！俺のためにここに残れ！そして俺はここから立ち去る！！」

「さりげなく本音出ちゃったよ！ほんと私はお邪魔虫だってことは分かってますから！私がここから立ち去ればみんな万々歳ですから！だから私をこの空気から抜け出さしてください！！もう私の良心が限界です！！」

今のうちに……

「「逃がすかぁっ！！！！」」

「息ピッタリですね」

「お～い香苗ちゃ～ん？てめぇ何一人で逃げようとしてるんだ？もとはと言えば香苗が変なこと叫んだのが原因だろうが！」

「ち、違うよ！柊さんが話を振ったのが原因じゃないですかっ！」

「なんか私は関係無さそうなので、帰ります！」

「天雲さんが入ってきた途端？最悪？って言ったのが一番の原因です！」

「そうだ！こいつのせいじゃねえか！！」

「だから私はここから立ち去ります！」

「だから、じゃねぇ！元凶ならなんとかしやー―」

ガラガラッ

「おい、またお前か！！いい加減にしろ！女の子二人が困ってるだろうが！！」

「いい加減にしろ、はお前だ」

ゲシッ！！

「いぎぃぃぃぃっ！？」

「たびたび申し訳ありませんでした」

ずるずる……ガラガラッ

「……」

「……」

「……」

「……叫ぶのやめない？あいつらまた来るぞ」

「……そうですね、静かに話し合いましょう」

「……了解」

不毛な言い争いは二人の介入によって止められた。

「ええっ！？二人恋人じゃなかったんですかっ！！」

まず私たちはお互いに自己紹介をして、私と柊さんの関係を誤解のないように説明した。

その説明の後の天雲さんの第一声があれ。

最初に言ってたのは冗談じゃなくて本気だったんだ。

「それで、天雲さんはどうし――」

「あーちょっと待って」

私の言葉を天雲さんに遮られた。

「話の腰を割っちゃって悪いんだけど、私のこと下で呼んでほしい

んだ。同年代に名字で呼ばれるのはちょっと……」

私と柊さんは顔を見合わせる。

お互いに言おうか言いまいか、どっちが言うか悩んでいる。

結果、さっきまで話してた私が言うことになった。

「えっと、沙鳥ちゃん、でいいかな？」

「うん！」

「あ、私は好きに呼んでください」

「俺もご自由に」

「え、いいの？」

「別に、構わないけど……どうかした？」

「その、二人って私を誰だか知ってるの？」

突然よく分からない質問をしてきた。

「天雲、沙鳥ちゃんだよね？ここら辺では知らない人がいないっていう有名人で、勉強以外が完璧なお嬢様」

「私お嬢様でもなんでもないただの女子高生だよ～」

「あ、そうなの？やっぱ噂には尾ひれがついてるものだな」

「でもそれ以外は結構あってますよね？容姿とか性格とか……勉強

とか」

柊さんはうなずくけど沙鳥ちゃんは首をかしげる。

「ねぇどうして私が勉強できないって分かったの？実際そうだけど私その事はなにも言ってないよね」

……沙鳥ちゃん、本当に気付いてなかったんだ。

最初は私が言うつもりだったけど、とりあえず柊さんに任せようとしたら逆に？お前がやれ？という視線を送られたので、しょうがなく私が言うことにした。

「それはですね、その、沙鳥ちゃんさっき？話の腰をどうのこうの？って言いましたよね？」

「う、うん」

「私の記憶が正しければ沙鳥ちゃんは？話の腰を割る？って言ってたんだけど、本当は？話の腰を折る？なんだけど……」

「……ぇ……」

沙鳥ちゃんの顔が真っ赤になった。

「ぁぅ……」

「まぁこういう欠点があってもいいってことで」

「そうですね」

とりあえずフォローしてみるけど、

「……恥ずかしい」

あまり効果はないみたいだ。

「そういや、どうして？最悪？なんて言ったんだ？」

その言葉を聞くと、沙鳥ちゃんの顔が一気に青くなり、寂しげな顔をしてうつむいた。
その時の瞳は、どこか私と似ているようなものがあった。

「え、それは……その……」

「あ、無理して言わなくてもいいですからね」

「あ、大丈夫……私ね、過信とかじゃなくてみんなから凄く尊敬されてね、周りは私のために色々なことをしてくれるんだ。でもそれがだんだん凄いことになっちゃって……私のせいなのに止められなくって、私は？最悪？だなって思ってたの」

沙鳥ちゃんの胸の内を聞いて、どこか似ているという漠然としていた気持ちが確信に変わってきた。

この人も、いつも一人だったんだ。

自分の本音をぶつけられる人がいなかったんだ。

全部とは言わないまでも、私も沙鳥ちゃんの寂しい気持ちが分かる。
だから私は決めた。

「沙鳥ちゃん」

「ん？」

「私と、友達になってくれませんか？」

「……え？」

沙鳥ちゃんは驚いてる。
こんなことは言われたことがなかったんだと思う。
私も言うのは初めてだったからちょっと緊張した。

「い、いいの？」

「うん」

「ついでに俺も構わんぞ」

「あ、ありかとう！」

お礼を言い終わると、私に抱きついてきた。

「うぇ、沙鳥ちゃん？」

小さな嗚咽が聞こえてくる。

嬉しいんだ、私もその気持ちはよく分かる。

他人からしたら些細なことかもしれないけど、少なくとも私たちとってはこれ程嬉しいことはない。

これも柊さんのお陰かもしれない。

朝、柊さんに会わなかったら一人で学校に行って、一人で沙鳥ちゃんに会って、緊張して何も話せなくって、そのまま一人の生活になってた。

当の本人は多分なんにも思ってないんだと思うけど。

「でも意外だったな」

「何がですか？」

「てっきり沙鳥は自分の悩みは自分でなんとかするから誰にも言わない、って感じがしてたんだけどな」

「……さりげなく沙鳥ちゃんのこと呼び捨てにしたね」

「別にいいだろ？なぁ」

沙鳥ちゃんに呼び掛ける。

「う、うん……むしろそっちでお願い」

「ほらな、花街さん」

「なんか私だけ疎外感！」

「冗談だ。香苗、でいいか？」

「うん、私も下で呼んでいい？」

「どうぞ」

「ありがとう、夏哉君」

「……やっぱり私お邪魔だったね」

「ここにいて！」「是非ここにいろ！」

私たちは同時に言った。

やっぱり私たちってそんな風に見られちゃうんだ。

「あのさ！沙鳥って親衛隊みたいなのが出来てるって聞いたんだけど、本当か？」

ひいら――夏哉君、話を強引に曲げすぎ。

でもありがとう。

「えぇ～……、私の無許可でそんなのは出来てるんだと思う」

「そういうのって許可とかいるのか？」

「わ、分からないよー」

「私、親衛隊なんて現実で初めて聞いたかも」
「俺も漫画だけの空想だと思ってた」
「実は私も妄想だったらいいなぁって思ってた」
「……お前も大変だな」
「……気遣ってくれてありがとう」
今度は私が入りづらくなってきた。
さっきの沙鳥ちゃんもこんな思いだったのかな？
「じゃあもし俺が手握ってたら親衛隊もどきに殺されるかな？」
「えぇっと……まず私を呼び捨てにしてる時点でアウトだね」
「何とんでもないことカミングアウトしてんだよ！？そういう危険なことは先言え、先に」
「だ、だって、二人とも普通の人と違う反応してくれて……なんて言うか、普通に接してくれて、嬉しくて……これ言ったら避けられちゃうって思って……」
あ、これはもう……
夏哉君を見ると、髪をわしゃわしゃーって掻き乱している。
覚悟を決めたみたいだ。
沙鳥ちゃんの手を掴んで、一方的な握手をする形になった。

「あー、分かった。呼んでやるよ、呼び続けてやるよ。手でも繋いでやるよ。だから泣くな。俺たちはお前の友達であり続けてやる」

「ほんと？」

「ああ。香苗は知らんけどな」

「私だってずっと友達だよ！」

「じゃあ私とは絶対彼女にはならないんだね？」

「それは～……お前次第だな」

「夏哉君殺されないでね」

「そうなったら逃げ切ってやるさ」

沙鳥ちゃんは微笑んで、自分から手を握り返す。
もう一方の手は私の前へ差し出す。
私は沙鳥ちゃんの意図を察し、手を握る。

「よろしくね、夏哉、カナ」

「カナ？……あ、うん。よろしく！」

「よろしくどーも」

ガラガラ

戸が開く音が聞こえた。

今までからいって開ける人物と言えば凄くイケメンの男の子――そういえば名前知らない――なんだけど、今回私たちはそこまで騒いではないと思う。
私たちは戸を開けた人物を見る。
そこには……

誰？

私の知らない男の子三人組だった。
隣にいる二人も誰だか分からない様子。

学ランを着てるということはこの学校の生徒ということ。
この時間に登校してるということは私たちと同じ一年生ということ。
このクラスにいるということは十中八九このクラスということ。

ここまでは分かった。
そしてもうひとつ、ある人にとってはとても重要なことだということが分かった。

「な……お、お前。な、何して……」

男の子の一人が夏哉君に向かって言葉を紡ごうとしているけど、うまくまとまっていない。

この近辺の町のほとんどは天雲沙鳥という人物を知っていて、皆はあまりの可愛さに男女問わず好意を寄せ、親衛隊を結成するほどと

言われている。
この学校に通う生徒の大半は親衛隊の人だと言っても過言ではない。
そして目の前にいる人たち、恐らくその親衛隊の一人だろう。
その人が、自分の中で一番と言ってもいいほど尊敬してる人物が知らない男の子と手を繋いでたところを見たとしたら……

夏哉君もそれを理解したのか、ゆっくりと沙鳥ちゃんの手を離し、椅子から立ち上がる。
椅子の引きずる音で我に帰る男の子三人。

「テメェ何してやがんだ――――――ッ！！！！」

言い終わる前に夏哉君はもうひとつの出口から教室を出て逃げる。

三人のうち二人が夏哉君を追いかけて、一人は誰かに電話をしている。
多分増援を呼んでるんだと思う。

電話を終えて私たちのところにやって来る。
私はあとが怖くなるから、さりげなく手を離す。

「天雲様！ご無事でしょうか！？」

様付けときたか。

「う、うん、大丈夫だからなつ――あの人は私の友達だから追わなくてもいいよ」

「何を仰るんです！騙されてはなりません！あの野郎は天雲様を襲おうとするために近づいているだけです！ああいうやからは制裁を

加えませんと！」

ピクッと沙鳥ちゃんの体が震える。

沙鳥ちゃんは凄く怒ってる。

私もそうだ。

大切な友達を侮辱されたんだ、怒って当たり前。

だからここは私の出番。

「あの、あなた今？天雲様を襲おうとするために近づいているだけです？って言いましたよね？どうしてそんなことが言えるんですか？」

「なんだお前は！どうして天雲様のそばにいる！？」

「いいから答えてください」

私は自分が出来うる限りの凄みのある声で言った。

意外と効いたのか、男の子がたじろぐ。

「そ、そんなの、あいつが男だからに決まってるだろ！天雲様の側にいたんだ、天雲様の美貌に耐えられる男などいない！」

よし、予想通り。

あとはとどめ。

「それならあなたもですか？」

「……は？」

「あなたも沙鳥ちゃんに近づいた理由は襲うためなんですか？」

「なッ！？何を言ってるんだお前は！？」

「だってそうなんですよね？男の子は沙鳥ちゃんのそばにいると襲いたくなっちゃうんですよね？」

肘で沙鳥ちゃんに合図を出す。

「あ……、そ、そうだったの……？私、信じてたのに……そんな目で、私を見てたんだ」

目を擦って泣いているそぶりをする。

「そ、そんな、天雲様！？俺はそんな目では見ていません！」

「じゃあ夏哉君が沙鳥ちゃんの側にいても襲うという証拠にはなりませんよね？」

「お、お前はなんだ！？さっきから天雲様のことを親しげに呼びやがって！」

「私ですか？私は……」

沙鳥ちゃんを横目で見る。

「私の友達です」

とても大切な、と付け加えた。

「そうだよね、沙鳥ちゃん」

「うん、そう。私たちは大切な友達」

「あなたはそんな友達を傷つけようとするんですか？」

「クッ！」

男の子はどこかに行ってしまった。

「は～」

沙鳥ちゃんが大きなため息をつく。

「カナ、ありがとう」

「ううん、正直私もイラッときてたから」

「……ごめんね、私のせいで……」

「しょうがないよ。これからは三人でなんとかしていこうね」

「うん！」

結局、夏哉君は時間になるまでたくさんの人に追いかけ回されてたらしい。
男の子に生まれなくってよかった～。

第二話　《四章》友達（後書き）

アン「おい、作者。なにか言うことは？」

作者「すいませんでしたぁぁぁぁッッ！！！！！！」

ア「そうだよなぁ、今まで二日三日で投稿してたにも関わらず、いきなり六日も空いてしまったよな？」

作「その通りでございます」

ア「私はこの第二話では後書きでしか出れぬというのに、その出番すら遅くしたな？」

作「今さらっと本音が出たな」

ア「黙れッ！！」

作「理不尽だぁぁぁぁ！！おい今まで会話に参加してない夏哉、なんとかしろっ！！」

夏哉「う、うるせ……黙、れ……。俺はあの二人から逃げんので限界なんだよ……」

作「アン、あいつ香苗と沙鳥の着替え写真を欲しがってんだぞ。俺なんか構ってるよりやることがあんだろ？」

ア「別に、夏哉も男だ。女の体に興味をもってもおかしくない。そのくらいでは怒らん。それに、夏哉はそのようなことはせん。何か

の事故だろ」

夏「アン……ありがとう……」

ア「安心しろ、私はどんなことがあってもお前の味方だ」

作「ええ話やな～」

夏「おいこら作者ぁッ！！何投稿時間遅れてんだぁ！！」

作「それほんとゴメンナサイって！それよりな、報告があるんだ」

夏「……なんだ？」

作「俺最終目標イラスト描くことで、そっちに時間割くかもしれないからこっち遅れるかも」

ア「それは、怒りたいところだが、お前の夢を壊すわけにはいかぬし……」

夏「この小説は完成させんだよな？」

作「それはもちろん！それから、このスピンオフを書こうとしてます」

夏＆amp;ア「「……死んどけ」」

作「なんでぇ！？」

夏「テメェなぁ！投稿が遅れるのが夢のためならまだ許せるが、言

うことかいてもう一作品書くだと？ふざけんじゃねえ！」

ア「それには私も出るんだろうな？」

作「いや、アンだけは絶対でな――」

グサッ！　　ドサッ

ア「よし、これでバカは消えた」

夏「じゃあまとめるか」

ア「そうだな。皆、いつもかどうかは分からんが見てくれてありがとう」

夏「スピンオフをやるかどうかは……考え中だ、案はあるらしい」

ア「暇ならこれからも見てやってくれ」

夏「評価、感想まってま～す」

夏＆amp;ア「「またな～」」

第二話　《五章》本当の気持ち

「ではそろそろ入学式の時間なので、廊下に並んでください」

一年三組の担任になる園原先生が指示を出す。

私たちはおのおの席を立ち、廊下に出る。

「あ〜疲れた〜」

夏哉君は未だ汗だくだく。

「あのね、沙鳥ちゃんがごめんねだって」

軽くてを降り、私の言葉を了承する。

「……なんでこういうの本人から言ってこないんだ？」

「それは多分、自分とまた近づいちゃうと迷惑かけるって思ってるんじゃないかな？」

「は〜」

大きなため息をつくと、夏哉君はキョロキョロ周りを見渡した。

話の流れからして沙鳥ちゃんを探してる。

沙鳥ちゃんを見つけたのか、夏哉君は歩き出す。

……どうせ私は背が小さくて見つけられませんよーだ。

「おい沙鳥」

ギロッと、視線が一同こちらに向いた。
沙鳥ちゃんは慌てたように小声で騒ぐ。
「ちょ、ちょっと夏哉！こういうところでは下で呼ばないで！また夏哉に迷惑かけちゃうよ」
「あほ」
夏哉君チョップを喰らわす。
夏哉君ってチョップ好きなんだな～。
でも周りはよりきつい視線を向けてくる。
「俺らは友達なんだろ？そんなんで遠慮なんてしてんな。俺も香苗もこれから迷惑かけてやるから、お前も迷惑かけろ」
「え、私って沙鳥ちゃんに迷惑かけちゃうの？」
「まぁそれは必然だろうな、なにしろちっちゃいし。高いとこに置いてあるもの取ってーとか」
「そ、それくらい椅子使って取るもん」
「おお、お前もこんな知識持ってたんだ、偉いな～」
「さすがにそれはバカにしすぎだよ！」
私たちがやーやー言い合ってると、沙鳥ちゃんのクスクスと笑い声

が聞こえた。

「ははっ、やっぱ二人は面白いね」

「そうかな？」

「そうだよ、二人とも楽しそう」

「うん、夏哉君といると楽しいよ」

「え～、私とじゃ楽しくないんだ～」

沙鳥ちゃんがいじわるく聞いてくる。

「そんなことないよぉ、沙鳥ちゃんといても楽しいよ」

「ありがと」

お礼を言って、次に夏哉君を向く。

「夏哉、私すごい迷惑かけるよ？それでもいいの？」

さっきの楽しそうな口調とは正反対の、真剣な声に変わった。

「言ったろ？何があっても友達でいてやるよ」

「そんなこと言われちゃったら、私惚れちゃうよ？」

ザワザワと、空気がどよめいた。

「だったら頑張って惚れさせてみな」
「本気出しちゃうよ～」
「おう、頑張れよ」
「じゃあそろそろ行きますよ」
先生の一言で私たちは列にもどって体育館に向かった。

二、三年生がいるなか、私たち一年が入場した。
校長先生の長い話や生徒会長の話はあまり耳に入らなかった。
そろそろ自分の番になると思ったら凄く緊張してきた。
「おい香苗、大丈夫か？震えてるぞ」
夏哉君が耳元でささやいてくる。
心配してくれるって嬉しいな。
「うん、大丈夫だよ」
夏哉君の声を聞いたら、ほんと不思議なくらい震えが止まった。
心臓もあまりドキドキしなくなった。
「『新入生代表挨拶』」

来た。

一度深呼吸をする。

「はい！」

「えっ……」

夏哉君の驚く声が聞こえた。

ちょっと優越感。

人の波をくぐり、前に出ていく。

途中沙鳥ちゃんに会ったけど、凄く驚いていた。

やっぱり面白い。

マイクが置いてあるところで立ち止まる。

大丈夫、緊張は少ししてるけど固まるほどではない。

「やわらかな春の日差しに包まれて――」

言えてる。

ちゃんと覚えてる。

代表挨拶は、つまることも噛むこともなく順調に進んだ。

このとき私は別のことを考える余裕ができた。

喋りながら考えるって、我ながら器用なものだ。

考え事、それはやっぱり夏哉君のことだ。
夏哉君がいなかったらって考えちゃう。
こんなにも夏哉君のことを考えてるなんて、私夏哉君のことが好きなのかな？
よく分からない。
普通の人とは違う想いを抱いてるのは確実なんだけど、それが恋かどうかなんて分からない。
大切な友達として想ってるかもしれない。

沙鳥ちゃんはどうなんだろう？
廊下では冗談っぽく？惚れちゃうよ？？なんて言ってたけど、もしかしたら本当に好きになっちゃうかもしれない。
最悪、恋のライバルになっちゃうかも。
……ううん、？最悪？じゃないかな？
そうなったとしても私は嬉しいと思う。
根拠はないけど、そう思えちゃう。
私、沙鳥ちゃんに勝てるかな？
もし夏哉君がロリコンだったら勝て――
……どうしよ、今私自分でロリだって認めちゃった。
ちょっとへこむ。

でも、そういう風に考えることが楽しい。
考えてみたら、夏哉君と沙鳥ちゃんのこと全然知らないんだよね。

でも凄く仲良くなってる。
普通こういうのってあるのかな？
生憎私には分からない。

私は今久しぶりに神様にありがとうって言いたい。

夏哉君と会わせてくれて、沙鳥ちゃんと会わせてくれて。
私は一日で大切な友達を二人も作れた。

だから、

私は浮かれてて忘れてたのかもしれない。

私が？花街香苗？だと言うことを――

一週間後。

学校にもちょっとずつ慣れて、本格的な授業も始まってきた。
授業に？魔法？なんてものがあったときは目を疑った。
実際に、物理的不可能なことを目の前で見せてもらったときはちょっと感動した。
私も使えるなら早く使ってみたい。

私と夏哉君と沙鳥ちゃんは自分の教室に向かうために校内を歩いている。

「あ、そうだ。夏哉君と沙鳥ちゃん宿題やった？」

軽い世間話を振ってみる。

一緒にいるだけで楽しいけど、やっぱり無言はつらい。

私にしては何気ない一言だったんだけど、二人は足を止めていた。

振り返ると、キョトンとした顔のまま固まっている二人の姿があった。

え、もしかして……

「二人とも、やってない、とか？」

「……沙鳥ちゃん沙鳥ちゃん」

「なんだい、夏哉君」

「宿題って何？」

「それはね、見ただけで拒絶反応を起こしちゃう薬物なんだよ」

それは初耳だ。

「それは大変だ。まさかとは思うけど、沙鳥ちゃんはそんな穢れきった悪魔の産物に手を染めてはいないよね？」

「当たり前だよ夏哉君。そんなものに手を出すなんて頭がイカれてる人だけだよ」

私、沙鳥ちゃんのこと親友だと思ってたのに、どうやらそれは私だけのようだった。
だって親友だったら頭がイカれてるなんて言わないもんね。

「やっぱりそんなのやってくるやつって、チンチクリンで頭が狂ってるやつしかいないよな」

たった一週間で友達と言う関係が一気に崩れた。
これからまた一人か、どうしよ。

「もちろんカナはそんなのに手を染めてはないよね？」

あ、これはフリなんだね？

「私は全部終わったよ」

「「――ッ！？」」

とってもかわいそうな子を見る目を向けられた。

「か、香苗……お前、嘘、だろ？」

「そんな……！私は、カナだけはないって信じてたのに！どうして？どうしてそんなものに手を伸ばしちゃったの！？」

「……お楽しみのところ悪いんだけど、そろそろ現実逃避はやめたら？提出時間一時間目だよ」

ダダッ！

一目散に走っていった。
そろそろ本気でマズイって思ったんだろう。
私はというと、急ぐ理由はなかったのでトテトテ歩いていった。

教室に入ると人がまばらにいた。
そのほとんどの人が夏哉君たちと同じように宿題をやっている。

夏哉君と沙鳥ちゃんは一番後ろの席でプリントを解いている。

二人とも一週間前まではあの席じゃなかったんだけど、ここの担任はちょっと特殊な人で、入学式が終わったらすぐに?席替えをしましょう!?ってことになって、くじを引いて席替えをした。
ここでもなんか誰かが裏で糸を引いてるんじゃないのか、っていう風に思っちゃう。

それは、夏哉君が一番後ろの窓から三列目でその窓側に沙鳥ちゃんで、廊下側に私という、なんとも天文学的でもないけどかなりの低確率で当ててしまった。
本当に怖くなってきた。
これも魔法のせい?

そんなことを考えながら自分の席に着く。

「カナー、これどう解くの〜?」

沙鳥ちゃんからのヘルプ要請。
私、出動。
沙鳥ちゃんの机の前に到着。

「これはね、偶数で三の倍数じゃないものでしょ?じゃあまず二十

までのなかで偶数は何個ある？」

「十個でしょ？」

「うん、正解。じゃあ三の倍数で、偶数は？」

「えぇっと～……、６……１２……１８……あとは……あ、これだけ？」

「うん、あってるよ。それで問題は、偶数で三の倍数じゃないから、さっきだした偶数の数から三の倍数の偶数の数を引けばいいの」

「あ……ん～……そっか！じゃあ七個か！」

「はい正解」

「はぅ～、カナ天才だよ～！ありがとう！すっごい分かりやすかったよ～」

「えへへ、ありがとう」

お礼、言われちゃった。

嬉しいな。

「香苗、こっちも頼む」

「あ、うん」

どうしてか、二人に教えるのは凄く楽しい。

友達だからかな？

私を勉強しかできない子って思ってないのが一番だと思う。
他の皆はたぶんその程度しか私のことを思ってない。
それは私も原因の一つだけど。
それは、今も変わらない。

「ねぇ花街さん」

名前を呼ばれた。
聞き覚えはある。
小、中と同じだった霧雨さんだ。
この人が私を呼ぶのは決まってる。

「なんですか？」

後ろには二人ほど控えてる。

「あんた宿題終わってるんでしょ？ちょっと貸してくんない？」

これだ。
私を呼ぶなんてこれくらいか、連絡くらいなだけだ。
相変わらず宿題しか目に入ってない。

こんなやり取りが懐かしいって思えた。

この一週間、夏哉君と沙鳥ちゃんと一緒にいたけど、そういったことは一度もなかった。

だから自分は変わったんだって錯覚してたけど、実際は違う。
夏哉君と沙鳥ちゃんがおかしいんだ。
私のことを普通に接してくれてる二人が特殊なんだ。

でもこんな二人だから私も仲良くできた。
こんな私でも幸せだって思えた。

だから、周りを蔑ろにするって訳じゃないけど、他の人には今まで通りに思われても平気だって思った。

「あ、ちょっと待ってください」

「おい待てや」

宿題を取りに行こうとすると、いきなり夏哉君が呼び止めてきた。

「夏哉君？」

「なんだろうな、別に宿題を貸すのはいいんだけどさ、今のやり取りがすごいムカついた」

「はぁ？あんた何言ってんの？」

霧雨さんは呆れ顔で疑問を投げ掛ける。

「テメェ、香苗に宿題借りることしか考えてねぇだろ？」

「それがどうかしたの？花街さんは宿題が終わってるの。それを私が借りても何も損はないでしょ？特にあんたは関係ない」

「はぁ～、香苗いつもこんなんだったんだろうな」

「だからあんたは何が言いたいのよ！」

「まぁ一言で言っちゃうと、調子に乗ってんなアホって感じだな」

夏哉君、完璧霧雨さんたちを挑発してる。

それに対し霧雨さんたちも予想通り怒った。

「な……っ！どういう意味よそれ！？ていうかあんた何様のつもり！？」

「それはこっちのセリフだ。香苗はテメェらのためにやってきてんじゃねえんだよ。それなのに、こいつのことを考えねぇで自分の好き勝手に利用しようとしてよぉ、ふざけんのも大概にしやがれ」

「なんなのよあんた！あいつは勉強しか脳がないのよ！それを私たちが使ってやってるの、感謝し――」

パァンッ！！

夏哉君が霧雨さんにビンタをした。

「おい、別に香苗のことを好きになれとは言わねぇよ、仲良くするにも相性とか色々あるからしょうがねぇ。でもよ、本人の前で悪口言ってんじゃねぇよッ！！」

ドキッ

あ、

今分かった。

私、夏哉君のこと心から好きなんだ。

私のために笑ったり怒ったりしてくれて、

なんだかんだで私のこと考えてくれて、

とっても優しい夏哉君が、好きなんだ。

霧雨さんは、そのままなにも言わなくなった。

私個人としては、自分の心がちょっとだけ分かったから霧雨さんには感謝してる。

「霧雨さん」

私は一歩前に出る。

「な、何よ？」

「これ、どうぞ」

そういって自分の宿題を差し出す。

霧雨さんは目を見開く。

「……なんのつもり？」

「なんのって……必要じゃないかって」

「もういいわよ。……今までごめん……」

最後の一声は、かすれるほど小さかったけど、はっきり聞こえた。

「い、いえ。それで、その……」

「ん？何？」

「出来ればこれ、友達として、貸したいんですけど……ダメですか？」

「えっ、いいの……？」

「はい。片岡さんと草原さんもぜひ」

「あ、私たちの名前……」

「もちろん覚えてますよ。私、頭いいですから」

みんなポカンとして、クスクスと笑い始めた。

「そうだよね。見た目は子供、頭脳は大人ってやつ？」

「あぅ、霧雨さん！子供はやめてください！」

「はは、ゴメンゴメン。……えぇっと、彼氏君、ありがとね」

「俺は香苗の彼氏になった覚えはないんだけど……」

「「「うっそぉー！！！？？？」」」

「ちょっと待て！お前らみんなかッ！？どんだけそういう風に見られてんだよ！？」

「だってねぇ～、ずっと一緒にいるから」

ねぇ、と隣にいる二人に聞く。

二人はコクコクとうなずいて同意する。

「俺は沙鳥ともいるつもりなんだけど」

「それはさ～、天雲さんとあんたじゃ全然釣り合ってないじゃんさ～。だからそれは絶対ないって言えんじゃん」

「かなり失礼なこと言ってんじゃねぇよ少女Ｂ！」

「誰が少女Ｂじゃんよこら！」

「ほら思い出せ、よく漫画でボスの後ろについてくる女子がいるだろ？名前のないやつ。その一人がお前だ」

「勝手に決めてんじゃないじゃん！私は草原奏（くさばらかなで）って名前があるじゃんよ！それに私たちに上下関係はないじゃんよ！」

「おい少女B」

「まだ言うじゃんかよ！？」

「……ちょっと～」

「じゃんじゃんうるさいよ君っ！それに奏って……香苗と被るからやめなさい」

「私の名前にケチつけてんじゃないじゃんよ！これはどうしようもならないじゃん！それとこの？じゃん？も口癖になっちゃってるんだからしょうがないじゃん！」

「私の声聞けよっ！？」

「なんだよボス」

「誰だよボスって！私は霧雨茜（きりさめあかね）だ！」

「まぁいいや、それでビンタされた茜ちゃんがどうしたの？」

「いや、それは悪かったって……じゃなくて！それも重要だけどもう時間がないじゃん！」

時間？
とみんなが時計を見る。
八時三十一分
授業まで残り十九分。
「「やばっ！？」」
夏哉君と草原さんが慌てふためく。
「だから言ったでしょ！じゃあ花街さん、プリント借りるね！」
霧雨さんは私からプリントを受け取って自分の席に戻った。
「あ、ちょっと待つじゃんよ！」
その後に続いて草原さんも霧雨さんの席に戻る。
でも、隣にいる片岡さんは戻るそぶりをしない。
「あの、どうしたんですか？」
「花街さん、ほんとごめんなさい」
急に頭を下げられたので驚いた。
「そ、そんな！もういいですよ、済んだことです」
「ありがとう。よかったね、あの人に会えて」

夏哉君を指差す片岡さん。
今は沙鳥ちゃんと必死に宿題に取りかかってる。

「うん、あの人を好きになれて本当によかった」

「――――なるほどな、香苗も色々大変だったんだな」

アンさんは私のお腹に当ててた聴診器みたいなのを外しながら言った。

「あの、それで本当に私の過去を見れたんですか？」

「ああ、聖界の道具よりは劣るがほぼ正確に見れるぞ」

「へ～、凄いんですね」

五月一日。
ゴールデンウィーク初日、どうしてアンさんがここにいて私の過去を見てるのかっていうと、時間は二十分ほど遡る。

二十分前、私がいそいそと宿題をやっていると、いきなりアンさんが壁をすり抜けてきて、

「香苗、夏哉との出会いから恋に落ちるまでの過去を見せてくれ」

なんてことを言ってきた。

何事かと理由を聞いてみると、

「私は夏哉のことをあまり知らない。だからまずは仲のよくて近場の香苗から聞くことにした」

だそうです。

納得したけど、そこまでして、しかも恋のライバルに聞くかな？って思ったりもしたけど、本当に夏哉君のことが好きなんだなって思った。

私が了承すると、聴診器みたいなのを取り出してそれをお腹に当てた。

そして今に至るわけです。

「香苗ありがとう、色々面白かった」

「人の恋路を面白がらないで下さいよぉ」

「あー、すまないすまない。でもあれは惚れるよな」

「あ、はい……しかも本人はそういう自覚をしてなかったから余計に……」

はぅぅ、だんだん顔が熱くなってくる。

「香苗」

「な、なんですか？」

「私は夏哉が好きだ。香苗とは仲が良いとはいえ、ここを譲る気はないぞ。私が付き合っても恨むなよ」

アンさんは本気の目をしている。

私も、自分の気持ちをはっきり告げる。

「安心してください、私はアンさんにも沙鳥ちゃんにも負ける気はありませんから。それに……」

「それに？」

「私は夏哉君のファーストキスを貰っちゃいましたから、二人より一歩有利です」

「確かにそれは認めるが、私は夏哉とはひとつ屋根の下で暮らしているのだ。しかも私自身は見えないときた。人前でも抱きつき放題だ」

「ああ！それずるいです！」

「魔族の特権だな」

「うぅぅ、いいですよ～だ。そんなアンさんにも勝ちますから」

「まぁ頑張れ」

すごい上から目線だ。

「あ、もしかして沙鳥ちゃんのところにも行くんですか？」

「あぁ」

「場所分かります？」

「夏哉に教えてもらったから平気だ」

「そうですか、じゃあ行ってらっしゃい」

「行ってくる」

アンさんは再び壁をすり抜けて外に出てしまった。

第二話　《五章》本当の気持ち（後書き）

作者「は～いどうも～、過去編香苗の巻き以上で完結で～す。次からは沙鳥の巻きで～す」

香苗「今回は四日ですか。前回よりは早くなりましたがもうちょっと早くなりませんか？」

作「無理」

沙鳥「即答！？」

作「いや、今テスト前だから」

沙「作者テスト勉強なんてしてたんだ」

作「そりゃするさ。赤点やだもん」

香「それにしても、この話って短くないですか？一話は１８章＋２でしたけど今回は５章＋１ですよ」

作「それは一話は初めてだからってことで頑張りすぎたんだよ」

沙「ちょうど一話が終わった辺りから投稿遅くなったよね」

作「それは、その……一話はあらすじを完璧に考えたんだけど、二話は考えなしに、ただの思いつきで書いたんで遅くなりました」

香「私の過去はその程度なの！？」

沙「もしかして私のも考えてない？」

作「ハイそうです」

沙「うわっ、ひどっ！」

作「大まかにはできてるけど詳しくはダメだな」

香「これも5章くらい？」

作「それは絶対5章。香苗と沙鳥とでは差別しない。両方ヒロインだからそういう差はつけないよ」

沙「それは嬉しいことだね、カナ」

香「うん。ところで、スピンオフはどうするの？」

作「あれはやるよ。夏休み（7／21）に入った辺りから」

沙「時間的に平気なのそれ？絶対遅れるでしょ？」

作「俺さ、本編とリンクしてるようなスピンオフを書きたいんだよ。だから同時期に投稿したいじゃん」

香「……それ、凄く混乱しちゃうんじゃ」

作「世の読者をなめるな」

沙「どっちか片方しか見なかったら元も子もないけどね」

作「……」

沙「じゃあそろそろまとめよっか」

香「えっと、作者は本当にテストがあるので多分一週間程は投稿できないかもしれません。私事でほんとすいません」

沙「出来れば見捨てないで下さい。ちゃんと投稿するんで」

香「それから、評価とか色々できたらよろしくお願いします」

沙「それじゃあ……」

香＆amp;沙「「またね～」」

作「あ、そういえば、夏哉の彼女、誰にするか決めました～」

香＆amp;沙「「――ッ!!??誰!?」」

作「それは最終話のお楽しみ～。安心してね最後の最後でみんなを選ぶ、とかないから～」

第二話　《六章》グロ表現は禁止

私は自分の部屋でマンガをゴロゴロしながら読んでた。

ゴールデンウィークになったからと行って特にやることはないし、予定もない。

強いて言えば、ゴールデンウィーク前にたくさん貰った遊び、というかデートの誘いを断ること。

でもこれが以外と大変なんですよ、と私、沙鳥ちゃんは言いたいんですよ。

もし直接言ってくれるんだったらすぐに断れるんだけど、皆が皆手紙とか葉書とか手紙とかで出してくるもんだから返答が大変。

私のためにやってくれるんだから無下にはできない。

お返しの手紙だって断る文を書くのも時間がかかる。

今はやっと五分の一（６８枚）位終わったから休憩中。

昨日の九時から始めて今は十三時、睡眠とか食事とか休憩を抜いたとしても五時間以上。

さすがに手も疲れた。

これちゃんとゴールデンウィーク中に返せるかな？

コンコン

「は～い」

部屋のドアをノックした人物が部屋に入ってきた。

「おねぇ……うわっ、スッゴい量」
私の妹、結(ゆう)が入ってきた早々に驚いた。
「まぁね、でゆうぞうどうしたの？」
「マンガ貸して～」
「ん、勝手にどうぞ」
「ありがと。……それにしても、ほんと毎度毎度凄いよね」
「ほんとだよぉ」
「私の自慢の姉だからちょっと誇らしいけどね」
「ちょっと？もしかしてどっかで迷惑かけた？」
「もぅ気にしすぎだよ。そういう意味じゃないって。私いつも家でゴロゴロしてるお姉ちゃんを見てるからね、そこでマイナスされてるからちょっとって意味」
「そっか～、正直に私って可愛い分類に入るでしょ？」
「自分から言うんだ」
「じゃあ、『え～、私そんなに可愛くないですよぉ。私より可愛い人なんてたくさんいますよぉ』ってたくさんこんな手紙もらってる人が言ったらどうよ？」

「かなりイラッと来るね」

「でしょ？それで、結が彼氏つれてきたとして、その彼氏が私に寝返っちゃうとかってありそうでしょ？」

「私そこまで可愛くないんだ～って言いたいけど否定できないね、そういうパターン」

「別にゆうぞうが可愛くないって訳じゃないけどさ、私たくさんの人に知られちゃってるから、可愛い関係なしに来ちゃうとかってあるもん」

「大丈夫、そういうのも知ってるからちゃんと考えて行動するよ」

「あ～、ゆうぞうはいい子だねぇ。ゆうぞうだけは昔は私の唯一の味方だったよね～」

「その言い方だと私お姉ちゃんに味方してたの昔だけってことだよね！？私は今もお姉ちゃんの味方だよ！それとも何？お姉ちゃんは好きな人出来たから私をポイするの？」

「え！？私好きな人出来たって言ってない――」

コンコン

私たちがじゃれあってると、音が聞こえた。
それがどこかの壁をノックした音だと理解したのは数秒後。

「結、今の聞こえた？」

「うん、ノックする音だよね？」

「どこから聞こえた？」

「あっちの方から」

結が指差した方向はドア、ではなくこの部屋にある窓のすぐわき。

私もそこから聞こえた。

「あそこって何処の部屋に繋がってたっけ？」

「……お空？」

「……とにかく部屋はないよね、じゃあ誰かが侵入――」

「お、いたいた。沙鳥、話が……あ、取り込み中か？」

「え、ア――」

「喋るな。隣のやつが変に思うから喋るな。取り敢えず窓から顔を出して、？あ、鳥か？みたいなことを言って誤魔化せ」

いきなりアンちゃんが壁を通り抜けて私の部屋に半分だけ入ってきて、すぐに消えてしまった。

どうしてアンちゃんがこんなところにいるのか、という疑問はとりあえず横に置いといて言う通りにする。

「じゃ、じゃあちょっと見てくるね」

「お、お姉ちゃぁん、もしかしたらストーカーかもしれないよ？」

そういう考えもあるか。
ここで否定するのも変だから、

「結、電話用意」

「もう用意してるよ」

いつの間にか携帯を持っていた。
我が妹ながらほんと良くできた娘だ。

私は立ち上がって窓に近づく。
窓の外を見ると、アンちゃんがいた。
当然不審者とかはいない。

「お姉ちゃん、どう？」

「……誰もいないよ。鳥じゃないかな？」

「そっか～、よかった～」

「結、そろそろ私これに取りかかりたいからさ～」

指差す方向にはたくさんの手紙の山。

「あ、分かった。じゃあ何かあったら呼んでね」

「あんたは私のお母さんかっ」

「えへへ～、じゃあね」

結うは私の部屋から出ていった。

「は～……」

「すまなかったな沙鳥」

「うわっ、いつの間に……」

「ちょっと用があるんだが」

「まぁそのために結をいなくしたんだけどね」

「ありがとう。で、用というのは知りたいことがあってな」

「何？私が知ってることならいいけど」

「沙鳥が夏哉と会って……は見たから、入学式が終わったところから夏哉を好きになったところを教えてくれ」

「……色々ツッコみたいんだけど」

「なんだ？」

「まず、どうして急にそんなことを聞いてくるの？」

「急というわけではないぞ。お前たちに会って初めて沙鳥が休みになったからな、ちょうどいい機会と思って」

「あぁ、なるほどぉ。じゃあなんで知りたいの？」

「私は夏哉のことよく知らないからな。まずは二人見る夏哉っていうのを知りたいと思ったのだ。それと、ライバル調査」

「そのライバルちゃんは、敵である貴女に好きな人のことを教えてくれるかな～？」

「沙鳥は絶対教えてくれるさ」

「どうして？」

「沙鳥は優しいし、何より敵と言っても私の友人だからな」

あ、友人……

「？沙鳥、どうした？」

「え？」

私はいつの間にか涙を流していた。

「あれ？なんで……？」

そう言ったけど、理由はなんとなく分かってた。

でも、何も知らないアンちゃんにはそういう事情をあんまり知って

ほしくはなかった。

あぁそうか、とアンちゃんは何故か納得してた。

「嬉しいか？」

「――ッ」

ズバリ的中してた。

私は、まだ？友達？と言われるのにまだ慣れてなかった。

夏哉とかカナに会ってもそれは変わらない。

大切な友達は出来たけど、三人だけだ。

欲張りかもしれないけど、もっと友達がほしい。

だから、改めてそういわれると凄く嬉しい。

でも、

「ど、どうして分かったの？」

「お前の前に香苗の過去を見せてもらったのだ。そのときに三人が初めて会ったときがあって、そこでな」

「……さっきも言ってたけど、？見る？ってどうやって？」

「それは……」

考えるそぶりを見せて、凶悪そうな笑みを浮かべる。

「沙鳥は記憶ってどこにあるか知ってるか？」

「記憶？脳じゃないの？」

「そうだ、脳だ。記憶はそこにある。私はそこにあるものを除き見るのだ、この意味が分かるか？」

「……ごめん、分からない」

「つまり、頭を開いて脳を直接見るのだ」

「え？」

な、なにそれ。

そ、そんなことをしたら部屋は血でいっぱいになっちゃうよ。

「冗談だ」

「だ、だよねぇ～。そんなのグロすぎて言っちゃダメだもんね……」

「あぁ……そういえば、真っ赤だったな」

「な、何が……」

「何って、あの後の香苗の顔が……」

「いやぁぁぁぁっ！？ちょ、アンちゃん！何してるの！？」

「何って……私は何もしてな――ッ！誰か来る。ちゃんとごまかせよ」

ダダダダッと廊下を走る音がする。

「お、お姉ちゃんどうしたのっ！？」

慌てて入ってきた結。

「あ、いや、その。く、蜘蛛が！蜘蛛が足にいて」

「え、嘘っ！？大丈夫！？」

「う、うん。ビックリして叫んじゃったけど、ごめんね脅かして」

「はぁ～よかったぁ～」

？ごめんね？と、もう一度謝っておく。

結は笑いながら部屋を出ていく。

「……沙鳥、ほんとにすまない。今のは全部嘘だ」

「ほんとに？」

「ああ。記憶については――」

アンちゃんは空間を裂き、聴診器みたいなのを取り出した。

「――これを使った。これを当てると記憶が見えるようになるんだ」

「うぅぅ～、怖かったよぉ」

「すまない……冗談が過ぎた。私は本当に沙鳥も香苗も夏哉も好きだ」

「うん、私も好きだよ……それで、真っ赤になったって？」

「でたらめだ」

「あ、そう……」

「それで、見てもいいか？本人の了承が必要なんだ」

「あ、うん。入学式が終わったところからだよね」

「そうだ。嫌なら断っても構わないぞ」

「私は断らなかったんじゃなかったの？」

「ただの確認だ」

「そっか。どうぞ見ていいよ」

「ありがとう」

アンちゃんは聴診器をペタッとお腹の辺りにくっ付けた。

第二話　《六章》グロ表現は禁止（後書き）

沙鳥「……あれ？これって私の過去編だよね？」

作者「そうだけど？」

沙「過去一度も出てきてないよね？詐欺？」

作「これから出すって」

沙「アンちゃんも、どう思う？」

アン「よ、ようやくちゃんと登場できた……」

作「無駄みたいだな。おーい、アン。次からあと四章、全く出てこないから」

ア「死ぬか？」

作「まぁ待て。三話はお前がメインだ」

沙「あれ？三話って真樹が出てくるんじゃなかったっけ？」

作「ちゃんと出てくるよ。それなりに活躍する、かはまだ未定だけど」

ア「貴様はまた考えなしか」

作「流れは決まってるんだけどねぇ」

沙「あ、そんなことより！」

ア「そんなことより？私の出番はそんなことなのか？」

沙「夏哉の彼女って本当に決まってるの？」

ア「なッ！？本当か、それは！？」

作「え？なんのこと？」

沙「ハァァッ？なに言ってんのさ！前の後書きで言ったじゃん！！」

作「なに言ってんのさ、ただのボケじゃん」

ア「貴様は私たちの心をボケで済ます気か？」

沙「それでどうなの？」

作「……ネタバレを言うと思うか？」

沙「そんなの知らないッ！！」

作「じゃあ真樹」

沙＆amp;ア「「それはない！！」」

作「断言かよ」

ア「あいつは夏哉を嫌ってるのだぞそれは絶対にあり得ない」

作「夏哉が真樹のために色んなことをしたとしても？」

沙＆amp;ア「「ピクッ」」

作「考えても見ろ、夏哉は主人公だぞ。主人公がよく出てくる女子に何もしないと思うか？」

沙「ど、どうしよう、否定ができない……！」

ア「あいつはなんやかんやで人を助けて自覚無く好感度をあげそうな気がする！」

作「あ、時間。そろそろよろしくね～」

沙「うぅぅ～、もやもやする～」

ア「だが、やることはやっておこう。皆、作者がテスト勉強をサボってこれを投稿した。これからは本気で勉強をするとほざいてるが、信用は出来ない」

沙「赤点とか取って余計に書けなくなるかもしれないから、そのときはごめんなさい」

ア「これからも私たちの活躍をよろしく頼む」

沙「これを見てくれてる皆さん、本当にありがとう！」

ア「それではまた」

沙「じゃあね～！」

作「俺、頑張ります！赤点取らないように、みんなに迷惑をかけないように！」

第二話　《七章》席替え（前書き）

皆さんほんとすいませんっ！

先生の名前間違えました

園原が本当です

もう一生名前は間違えません

第二話　《七章》席替え

長い長い入学式が終わり、私たちは教室へ戻っていった。
私は未だにあの時の驚きを隠せていない。
あの時、それは新入生代表挨拶の時だ。
確かあれは入試で一番の人がやるものだったはず。
つまり、カナは一年生の中で一番。

トクン

だんだん胃の辺りが締まっていくようで嫌だ。
鼓動も早くなってくる。

カナは、カナも私みたいに特別扱いされたのかな？

そんな考えが浮かんで来る。
学年一位なんてどこの学校にも必ず一人いる、決して珍しいものじゃない。
それでも、一番には代わりない。
人の感じる世界なんてとても狭い。
本当の世界から探せば、カナより勉強できる人も私より凄い人もたくさんいるだろう。
でもほとんどの人は世界を自分の目では見たことがない。
人が知る世界なんて、自分の国、いや、自分が暮らしてる町。
もっと狭められる。
自分の家、通ってる学校、勤めてる会社。
そんな狭い世界の中では、私たちは特別なのだ。
だから普通とは違う対応をされてしまう。

カナはどうだろう？

考えていたらいつの間にか自分の教室に着いていた。

自分の席について約一分、私のクラスの担任が入ってきた。

「皆さん、改めてよろしくお願いします。今日から一年間、このクラスの担任になった園原冬子（そのはらとうこ）です」

三十代前半くらいの女の人が自己紹介をする。

雰囲気としてはちょっと静かで真面目な感じ。

「それでは席替えしましょう！」

前言撤回。

陽気で楽しそうな先生だ。

「センセー、どうして席替えするんスか？」

男子の当然の質問。

「先生は昔内気な子でね、高校に入った頃仲のいい子と席が離れちゃって、周りは知らない人だけで居心地が良くなかったんです。だから皆も私と同じ気持ちにはなってほしくないんです」

あ、先生私たちのことを考えて――

「でもそれ、席替えしても同じじゃねッスか？」

ほんとだ。

言われて気付く。

「君は……春原(すのはら)君ね。君、日本史0点ね」

「えぇぇッ!?ちょっ待ってくださいよ!!」

アハハハハッと皆大爆笑。

この先生とは親しみやすそうだ。

一般生徒には。

例外として私には敬うように接してくるだろう。

「じゃあもうアミダくじを作っちゃったけど……天雲さん」

「はい?」

先生は一番前にいる私の所にやって来た。

「天雲さんは何処に座りたいですか?」

「え、その……」

……やっぱり来た。

どこにいっても私は特別扱い、普通に接してほしいって言うのは贅沢かな?

「そんな遠慮することはないですよ。皆も異論はありませんね」

後ろから『おー!!』とか『そんなの当たり前です!』とか『天雲

様のお好きなところにお座り下さい！！』など、皆が皆賛成の声をあげる。
味方はいない。
私がどうやって断ろうか考え始めたとき――

「はい、異論あり。何勝手に決めてるんですか？」

一人、たった一人だけ私の味方をしてくれる人がいた。
後ろを振り向くとそこには、やはりというべき人物がいた。

「君は……確か柊君ね？」

「そうです」

「君、自分が何言ってるか分かってるんですか？」

「それはこっちの台詞です。本人の意見聞かないで、勝手にいろんなこと決めて特別扱いして」

「あなたこの方が誰なのか知らないんですか？」

「知ってますよ。勉強できないバカです」

「な――ッ！？」

周りの人も皆息を飲む。
ていうか、流石にバカはないんじゃないか？
嬉しいけど。

「本気で言ってるんですか？」

「本気だし、どこも頭はおかしくないですよ。むしろ皆がどうかしてる。ただの女子高生をよってたかって――」

「貴様ッ！沙鳥様を愚弄するな！！」

痺れを切らして一人の男子が立ち上がった。

「愚弄なんてしてねぇよ。他の方がよっぽど愚弄してると思うけどな」

「な、なんだと！？」

「本人の気持ちも知らないで。自分が良いと思ってることが必ず相手も良いって思うなよ」

「何様のつもりだ貴様はッ！？」

その後、今までで一番聞きたかった言葉を私は聞く。

「友達以外の何者でもねぇよ」

今、自分でも分かるくらい顔が赤くなってる。
嬉しい、だけじゃない。
それ以外にも何か、よく分からない別の感情が生まれている。

これって、愛情？

分からない。
こんなの初めてだ。
でも友達も、今日はじめて出来たから友情かもしれない。

周りの人に見られたくないから少し俯こうとするけど、友達はそれをさせてくれなかった。

「私も、異論ありです」

今度はカナが手を挙げてくれた。
ホントに泣きそうなほど嬉しい。

「花街さん、あなたもですか？」

先生の、夏哉との対応とは違う困った口調。
カナは学力トップだから扱いが難しいんだと思う。

「皆さん、沙鳥さんのことを考えてみてください。沙鳥さんは誰よりも優しい方です。それは皆さんの方が知ってるはずです。そんな彼女が、自分のために席を譲ってもらうというのは、罪悪感を覚えてしまうかもしれません。『自分のせいで周りに気を使わせてしまった』そんな風に思うかもしれません。そうしたら沙鳥さんはこの学校生活を楽しめるでしょうか？そうならない為に、沙鳥さんもク

ジで決めた方が良いと思います」

カナの演説が終わると、皆シンとしてしまった。

ただ一人を除いて。

「それで、先生はどうするんですか？さっさと沙鳥様に決めてもらった方が良いんじゃないですか？」

なに夏哉、沙鳥様って嫌がらせ？

先生は我に帰って私に意見を聞く。

「あ、天雲さん、どうします？」

「じゃあ皆と同じようにクジで構いません」

「え、でも……」

「だいたい香苗さんが言ったのと同じですから」

実は最初の方は忘れちゃってるけど。

「そうですか、沙鳥さんは素晴らしいですね。誰かとは違って」

そう言って夏哉の方を見る。

あなた仮にも教師でしょうに。

ようやく話は進んでアミダを選ぶことになった、もちろん私から。

それが最後まで終わり、机を動かすのは面倒だからという理由で人だけが席の場所に移動。
その席の隣には……

「おう沙鳥、近……って隣かッ！？」

「うわっ誰かが仕組んだみたい……」

夏哉の隣、私と反対側の方にはカナが座っていた。

「夏哉、そんなに私とカナに挟まれたいの？」

「言っとくが俺は仕組んでねぇ」

「でもねぇ」

「うん、誰かが仕組んだって思わないと本当に怖いよ」

カナの言う通りだ。
でもそれを考える前に言わなきゃ。

「夏哉、カナ」

「ん？」「どうしたの？」

「ありがと」

夏哉とカナは顔を見合わせて、笑って、

「ホントにあれは最悪。このクラスのほとんどに目ぇつけられたし、

言い出すの恥ずかしかったし」

「ほんとだよね。私なんてまだ心臓バクバクしてるし」

「俺もだよ。何してもらおっかな～」

「過度な期待はしないでね」

「了解」「は～い」

本当に、二人が友達でよかった。

第二話　《七章》席替え（後書き）

作者「は～い、と言うわけで七章終わり～……で、どうした夏哉俺の後ろにいて」

夏哉「これは必然だ」

作「なにが？」

夏「今回のもう一人は真樹だ、俺まだあれの恨みを晴らされていない」

作「つまり盾？」

夏「正解」

作「真樹どうした？早く来い」

真樹「今行きますわよ」

夏「自分から呼ぶだと！？」

真「お待たせしましたわ……って、何してるんですの？」

作「真樹を恐れてるらしい」

真「どうして……あぁ、あのときのですか」

夏「なんかおかしくね？」

作「安心しろ、こいつは俺があげた写真で機嫌は元通り」

夏「ナイス！俺はじめて感謝したかも」

作「夏哉は魔族に殺されるっと……」

夏「なに不吉なこと言ってんだよ！？」

真「なにをこそこそしてますの？」

作「いや、なんでもない。そういやもうそろそろ真樹を出す予定」

真「それは本当ですのっ！？」

作「さすがに出会った頃を書かないで皆と仲良くするってことはしないさ」

真「単なるギャグ要因ではありませんわよね！？」

作「ないない、確かにギャグは入れるけどちゃんとシリアスはあるよ」

真「よかったぁ」

夏「あの、俺が言って良いのかどうかは知らんけど、真樹も大変だな」

真「ほんとですわ。夏哉、出番変わってくれません？」

夏「物理的に無理だろ、それ。お前と変わったらこの小説は百合になるぞ？」

真「私はそれで構いませんわ。沙鳥様といられるなら」

夏「お前、ある意味尊敬ものだわ」

真「誉め言葉として受け取っておきますわ」

作「そろそろ締めいっとけ」

夏「了解」

真「皆様、このような小説を読んでくださいまして、本当に感謝してますわ」

夏「なんやかんやでお気に入りとかされてるしな」

真「もしよろしければ、これからもご覧くださいまし」

夏「色々と指摘してくれる方がいたら是非お願いします」

真「それでは皆さんまた来週」

夏「えっ！？これって来週まで投稿しないの！？」

真「すいません、冗談ですわ」

夏「だけど冗談で済まなさそうなのが怖い」

真「ですが、遅くても一週間くらいには書けるでしょう」

夏「そう祈りましょう」

真「では改めて」

夏&真「「またね～」」

第二話　《八章》帰り道に決めたこと

放課後。

今日は入学式だけだから午前中で終わった。

偶然にもカナと同じ帰り道だから私から誘った。

ちなみに私は家から通ってる。

「俺もご一緒して良いか？」

夏哉が話しかけてくる。

そうしたいのは山々なんだけど……

「ごめん、出来れば二人で帰りたいな」

「あー了解。明日の朝どうする？」

「明日？」

明日って、なんかあったっけ？

「明日から一緒に登校するかって話。俺と香苗は寮だから良いけどお前はどうする？」

「私って夏哉君と登校する決定なの？」

「沙鳥、香苗置いて二人で学校行こう」

「あーごめんなさい！私も行く！」

「素直でよろしい」

「私二人の愛の巣に邪魔していいの？」

「香苗、沙鳥はこれから一人寂しく学校行くって」

「ごめんなさい！私も連れてってください！」

「素直でよろしい」

「夏哉君はいいの？他の友達と行かなくて」

「俺は友達が少ないであろう誰かさんのために行こうとしてるんだけど？」

あー、優しいなこんちくしょう。

「夏哉はデリケートの部分を平気でつついてくるね」

「こんくらいつついてもお前平気だろ？んじゃあな」

そう言い残して夏哉は教室から出ていった。

「……あ、沙鳥ちゃん」

「ん？」

「夏哉君リンチされないかな？」

「あ」

そういえば忘れてた。

廊下から？待てーッ！！？という叫び声が聞こえる。

本当にごめんなさい。

「うん。あれはさっき私たちをからかった罰ということで」

「……さらっと言ったね」

「まぁ夏哉君だからなんとかするよ」

「そうだね」

私は自分の鞄をもってカナと一緒に教室から出る。

そういえば私、意外と夏哉のことを心配してない。

今日会ったばっかりなのにもう信用してるんだ。

「あ」

「どうしたの？」

カナが何かに気が付いたような声をあげる。

「私今日会ったばっかりなのに夏哉君のこと信用してるなぁって」

「あらま、私も同じこと思ってた」

夏哉にはなんか不思議な力があるのかな？
だからあんな運よく私たちを引き付けたのかな？

「夏哉君からかってくるけど、私たちが落ち込まないように明るくしてくれて、優しいよね」

「うん、本当に惚れちゃいそ」

「私は……よく分かんないや」

分からないって……

嫌な予感がよぎった。
もしかしてカナも、一人、だった？
だから他人に対する感情が分かってない？
そんなのこじつけだ。
でも考えずにはいられない。

それに、カナを誘った理由もこのひとつだ。

「ねぇカナ」

「何？」

「答えたくなかったら答えなくても良いんだけどさ」

一息置く。

「カナって、昔一人だった？」

ビクッ。

カナの動きが止まった。
この反応、本当かもしれない。
カナを傷つけちゃったかもしれない。
怒ってるかもしれない。

「沙鳥ちゃん」

カナの声に震える。

怖い。
カナが言う言葉が怖い。
私の言葉に傷ついたカナがこれからどうするのかが怖い。

自分から言ったけどすぐに後悔した。

でも、

「外に出るまで話無しで良い？」

カナは困った風な顔をしていった。
怒りなんて微塵も感じない。

私は戸惑いながら、首を縦に振った。

私たちは無言で歩いていた。

何を話せば良いか分からない。

どうするか考えてると、向こうから話しかけてきてくれた。

「沙鳥ちゃん、話いい？」

「あ、うん」

「私もね、一人だったよ。勉強がみんなより飛び抜けて出来ちゃってね、嫌われたって訳じゃないと思うけど誰も近寄って来なかった。近寄ってきたとしても交友的なものじゃなくてただ宿題を解くために利用してるだけ。でも一応頼られてたから寂しかったけど孤独じゃなかったよ」

「……」

やっぱり……。

私の予想は当たってたけど、どう声をかければいいか分からない。

私は、自分と同じ境遇の人と会えて少し嬉しかった。

それと同時に、どうやって今まで過ごしてたんだろうって思う。

孤独じゃないって言ってもつらいのには代わりない。

今更だけど耐える方法を知りたかった。

「沙鳥ちゃんあれかな？私が代表挨拶をしたからそう思ったの？私も沙鳥ちゃんと同じで特別扱いされてるって」

「うん……」

「そっか」

「カナは、今までどうしてたの？」

「それが、聞きたかったの？」

「……うん」

「私は……誰もいないところで泣いてたよ」

「え？」

「ほんとに誰も、家族にも見せないでずっと部屋の隅で泣いてたよ」

もしかしたら気付かれてたかもしれないけど、と付け足した。

「で、でも今日見た感じじゃそんな風には見えなかったけど……」

「うん、だから人前ではもう一人の自分を作ってた」

カナの言ったことは全部私にも当てはまった。

カナは私だった。

境遇も、行動も、相手に対する感じ方も。

「つらかった、よね……」

「……うん。でも、それは沙鳥ちゃんも一緒でしょ？」

「え、な、なんで？」

どうして分かったの？

「沙鳥ちゃんと会ったときね、？あ、この人は私だ？って思ったの。あ！見た目じゃないよ？沙鳥ちゃんの方が断然可愛いから」

「なに言ってんのさカナ～。カナも可愛いって～」

「そこは？私より？とは言わないんだ」

「さすがに自分の立場って知ってるから。どっかの漫画のヒロインみたいに鈍感じゃないよ。私の容姿は皆に好かれるくらい可愛いの。過剰な情けは人を傷つけるしね」

昔はそれでよく傷つけてた。

嫌われたわけではなかったけど。

「……そうだね」

様子からしてカナも私と同じことがあったみたいだ。

「あ、話がそれちゃったね」

「あ、ほんとだ。えぇっと、あ、そだ……。それで同じっていうのは中身でね、なんか寂しそうに見えたから」

「え、そう？隠してたつもりだったんだけどな」

「私も同じだから、敏感になってたのかな。それで、気付いたから特別扱いされてるんじゃないかなって」

凄いな、カナは。

会っただけでそんなことが分かるんだ。

それが分かったから、友達になろうって言ってくれたんだ。

本当に出来すぎた子だな。

「ほんとに、ありがと。友達になってくれて」

「それはこっちの台詞。あれは沙鳥ちゃんを救うためじゃなくて自分のためだったの。一人は、もう嫌だったから、だから似た境遇の沙鳥ちゃんに話しかけたの」

「……こういうのって傷の舐め合いって言うんだろうね」

「そうかも」

でも、とカナは続ける。

「多分端から見ればそういう風に見えるかもしれないけど、それでも――」

カナは私より一歩前に出て、クルッと私の方に向き直った。

「私は今凄く幸せだからそれでいいんだ」

飛びきりの笑顔を見せるカナ。
そこには純粋な幸せだけの笑顔で、寂しさとかつらさと言うものは微塵も感じられない。

「これも全部夏哉君のお陰だよ」

「……うん、そうだね」

「何その間？ちょっと気になるんだけど」

「えっ？別に深い意味はないよ？」

そっか、といって追求してこなかった。

カナは気持ちがよく分からないって言ってたけど、本当は夏哉のことが好きなんだと思う。

私も、さっきは？惚れちゃうかも？とかなんとか言ったけどきっと夏哉に惚れてる。
こんな感情は初めてだけど、多分合ってる。

だから、私はここで引かなきゃって思った。
私は今でも十分幸せだ。
だから欲張っちゃいけない。
欲張れば欲張るほど周りが不幸になっていくから。

カナはもうこんな思いをしなくていいんだ。
夏哉ともっと幸せになってほしい。

私はこれから二人を応援しよう。
二人は否定してたけど本気では拒絶してなかった。
無理矢理はダメだけど、支えられることは支えていかないと。
それが、私が初めてできた大切な友達に出来ることだから。

「カナ、これからもずっと側にいてね」

私は出来るだけ笑顔で言った。
カナはちょっとだけ驚いた様子で、すぐに困惑した顔になった。

「さ、沙鳥ちゃん、もしかして、ゆ、百合、だったの……？」

「え？」

ちょっと待って、何が起きた？
何がどうなったらそういう結論になったの？

「か、カナ？それはどういう意味かな？」

「だって沙鳥ちゃんずっと私と一緒にいたいって、それって四六時中女の私といたいってことだよね？もしかして、沙鳥ちゃんが彼氏

を作ったことがないって聞いたけど男の子には興味がないってこと？」

「ちょっと待ってぇ！！どうしたらそんな考えに思い至るの！？カナはどんな思考回路してるのさ！？バカと天才は紙一重って言うけどカナ実はバカなんじゃない！？」

「何それ、意味分かんないよ！それに沙鳥ちゃんだけには言われたくないかも！！」

「うわっ、カナ酷っ！？」

「ははっ」

「今度は笑われた！？」

「あ、いや、この笑いはそういう意味じゃなくてね、沙鳥ちゃん元気になったなって」

「あ……」

そういえば。

「つらいことはたくさんあったけどね、こうやって友達と一緒にいると楽しくって、その時はつらいことを忘れられるんだって今日気付いたの。つらい時の記憶を消したくなるときもあるけど、それ忘れたい忘れたいって思ってても忘れられない。でも、誰かが隣にいてくれたらそんなことを考えてる暇がなくなるの。だからもう大丈夫だって思えたんだ」

カナは言い終わったあと、顔をうつむかせて私の袖をつかむ。

「はぅぅ……、すごい恥ずかしくなってきた……。沙鳥ちゃん、誰にも言わないでね」

さっきの私を慰めてくれた優しい、どこか大人びたところから一転して、こんな恥ずかしがりやのちっちゃい小動物になるというギャップを見てしまったら……。

周りを見る。

大丈夫、誰もいない。

「カ～～ナ～～～！！」

「ふわっ、沙鳥ちゃん！！」

私はカナを抱き締めた。

カナはおろおろして戸惑ってる。

だってこんなところを間近で見ちゃったら誰も耐えられないって！

みんな抱き締めちゃうって！

私は道端でギュウギュウ抱き締める。

こんなところを見られたら色々とまずいけど、傷ついた心を癒すにはこれが一番だ。

「沙鳥ちゃぁん、これじゃホントに百合だよ～」

「もうどうでもいいよ！カナが可愛すぎるのがいけない！」

「そんなぁ～」

私はそのあと十分ほど抱き締めていた。

それと忘れてたことがひとつ。

私はみんなのアイドル的存在ということで、下校時に私と一緒に帰ろうとする人が多々いて、でも勇気がないからこっそり後をつけてる人がいるそうな。

で、その人に一部始終（音声なし）を見られたらしい。

だから校内では？天雲沙鳥様は百合だ！？という噂が広まり、女子は大喜び、男子はガックシだったとさ。

……ストーカーって犯罪だよね？

第二話　《八章》帰り道に決めたこと（後書き）

作者「後書きネタ考えてねー」

アン「貴様後書きのために書いているのではなかったのか？」

作「普通に考えてノリで言っただけって分からね？」

ア「香苗、こいつを殺してもいいよな？」

香苗「そんな物騒なこと言っちゃダメだよ。作者さんは私たちのために話を考えてくれてるんだから」

ア「いや、だがな」

作「香苗ぇぇ！お前だけは俺の味方だぁ！！」

香「ほら、そんな抱きつかないで下さいよ～」

ア「……香苗、なんかおかしくないか？」

香「別にそんなことはないよ」

香「（こうやって作者に恩を売っておけばいっぱい出してくれるもんね♪）」

作「……とかなんとか考えてるんじゃね？」

香「えええぇっ！？なななな、何言ってるのっ！？そんなことない

って！」

作＆amp;ア「「……」」

ア「……香苗って嘘つけないよな」

作「それもいいところだけどな」

香「あうぅ～」

ア「それは置いといて、香苗がそんな腹黒いことを考えてたなんてな」

香「だ、だって私だけ不利だもん！沙鳥ちゃんすごい有名人だし」

ア「だが私とは対等だろ？」

香「対等じゃないよ！！アンちゃん夏哉君と暮らしてるし、姿変えられるんだから夏哉君の好みに変えられるし！！」

ア「おぉ、その手があったか」

香「え？」

ア「ちょっと行ってくる」

香「ダメェー！！」

ア「冗談だ、そんなことしなくても勝てる自信がある」

香「うぅぅ、負けないもん」

作「そろそろ俺も会話に混ぜろ。寂しいじゃないか」

ア「じゃあ、そろそろまとめるか」

香「そうだね」

作「俺はスルーかっ!?」

ア「みんな、いつも見てくれてる人はありがとう。最初から一気に見てくれてる人はお疲れさま」

香「私たちの活躍はどうでしょうか?」

ア「どこかおかしいところや、意見がある人は是非言いに来てくれ。感想、評価も待ってる」

香「これからも続けるので、できれば見捨てないで見てください」

ア「それでは……」

香&ア「「また今度～」」

ア「……胸くらいは大きくしたら喜んでくれるかな?」

香「ほんとお願いだからそれはやめて！それだけは私がむなしくなるからやめてっ！！」

第二話　《九章》秘密を抱える者

入学式から三日後、私たち三人は登校してる。
今まではオリエンテーリングとか色々決めてたけど、今日から授業が始まる。
……ちょっと憂鬱なのは言うまでもない。

「あ～、授業やだ～」

「オメェはガキか？香苗と体取り替えたら丁度いいんじゃね？」

「そうだよ沙鳥ちゃん！！私と体交換しよ！沙鳥ちゃんの体ほしい！」

「え～、やだ。カナの体抱き締められないし」

私の言葉に怯え、カナは夏哉の後ろに隠れた。

「夏哉くぅん。沙鳥ちゃんが、さとりちゃんが怖いよ～」

「……カナ、何気傷付くよ」

「沙鳥、お前の趣味をとやかく言わないけどさ、嫌がる子には強要しないように」

「夏哉まで！？私そんな趣味はない！」

「自分の性癖はな、自分じゃなかなか気付かないんだよ」

「気付くもなにも持ってないから！私は男好きだから！」

『マジですか、天雲様！！！！！！』

……いろんな所から声が聞こえた。

「「「……」」」

私たちは動かず、前だけを見る。
周りを見るのが怖い。
見たらいけない気がする。
早くここから立ち去らないと。

「沙鳥、香苗、鞄持ってやる」

夏哉も同じこと考えたのか、私たちの負担を減らすために鞄を持ってくれた。

「行くぞ。一、二の、三！！」

夏哉の合図で全力で走り出す。
私は平気だけど、体力に自信のないカナは夏哉に背中を押してもらいながら私についてくる。

後ろからの、『天雲様、お待ちください！！』『そこの貴様！天雲様のお荷物を持ちやがって！！』等の叫びは無視。

とにかく全力で走る。

二分くらい走って校門の前に到着。
その間にたくさんの人に声をかけられたけど無視した。
これで私に近寄ってこなくなるかな、という淡い希望を抱いてみる
……無理そうだけど。

三十秒ほどして香苗と夏哉も到着。

「ここまで来れば安全……じゃねえな」

夏哉がため息をつく。
また迷惑をかけてしまった。

「あ――」

「謝るな」

「何も言ってないじゃん」

「お前の行動パターンは読めてる。ここで絶対謝る、そしてそのところを誰かに見られて？貴様沙鳥様になにしてやがるー？って追っかけ回される。な、香苗」

「はっ、はっ、はっ……な、なに？はっ、はっ」

「……今のカナは無理そうだね」

「そうだな。香苗、歩けるか？教室行くぞ」

「はぁっ、はぁっ、う、うん。か、肩貸して……」

夏哉はカナの側に行き肩、というか袖を貸す。
カナの身長じゃ夏哉の肩は逆に疲れる。

「私が代わろうか？」

「どうする？」

夏哉がカナに聞く。

「はぁっ、はぁっ……無理、手が、離せ、ない」

「だとさ」

「……了解。だったら荷物持たせて」

ほいよ、といって荷物を渡してくる。

今の夏哉とカナ、カナが袖をつかんで寄り掛かってるから、ラヴラヴカップルのようだ。
羨ましいと思ったけど、すぐにそんな思いを消す。
決めたんだから、二人を応援するって。

最近こんな感じで少し疲れる。
でもこんな思いを気付かれたくないからからかう。

「な～つや～、お姫様がお疲れなんだから抱っこしてあげれば？」

「誰がするか！」

「えぇ、しないの？すれば夏哉ロリコンになるのに」

「てめぇ、泣かすぞ？」

「……その、ね。私はそれでもいいんだけど、そしたら夏哉の方が危険だと思うよ？」

「……」

たらたらと汗をかく。

顔も真っ青になっている。

今までのが相当つらかったらしいから、それ以上だとマズイ気がする。

「御愁傷様。私、あなたのことが好きだったよ。これからはカナと一緒に暮らしていくね」

「やめろ！！それ冗談抜きでマジそうだから！！つーかそんときは沙鳥も助けろ！！」

「そ、そんな、私の愛する人が戦ってるんですもの。邪魔なんてできません」

「……今の言葉、めっさ恥ずくね？」

「やめてよ！ボケをマジで返さないで！時間が経つとスッゴい恥ずかしいんだよ！」

もう顔が真っ赤になるのが分かる。

夏哉酷すぎ、スッゴク恥かいた。

これはもう、お返しするしかない！

私はカナのいない左側に回り込み、体を夏哉に預ける。

「え、さと――あ！てめぇ！！」

夏哉は気付いてしまった。

でももう遅い。

誰かそろそろ――

「柊夏哉！沙鳥様を離しなさい！！」

私たちの前に一人の女の子が立ちはだかった。

その少女は見覚えがある。

きれいな桜色の長い髪を持った、ちょっとつり目の美少女。

中学の頃の、ちょっとしたきっかけでそれ以来ずっと好かれてる。

名前は――

「早乙女、真樹さん？」

「さ、沙鳥様がわたくしの名前を……ありがとうございます！」

「あ、あの人」

「香苗知り合い？」

体力が回復して話せるようになったカナは話に参加した。

「知り合いじゃないけど、早乙女真樹って確かこの町で一番大きい早乙女総合病院の医院長の孫じゃなかったっけ？」

「あら？よくご存じではありませんの、花街香苗」

「え、私の名前……」

「知ってますわよ。調べさせてもらいました。安心してくださいまし、プライバシーには配慮してますわ。わたくしは沙鳥様に近づくあなたたちがどのような人かを知る権利はあります」

「あの～」

夏哉が遠慮がちに手をあげる。

「なんですの？」

「そろそろ教室に行きたいんだけど。それから、沙鳥と仲良くなるのにどういう人とか条件とか関係ないと思うんだけど」

「……貴方、本当にそう思ってるのですか？」

真樹さんが意味ありげな風に問いただす。

夏哉はというと、その言葉を聞いた途端顔が真っ青になる。

「待て、お前……」

「わたくしは？調べた？と言いましたわよね？」

「……それはプライバシーの侵害じゃねぇのか？」

「わたくしが調べたのは貴方たちの？評判？だけ。あの人がどういう方でこんなことをしてる、それを聞いただけですわ」

どういうこと？

夏哉の評判？

どこから見ても夏哉は普通の、私たちとは違う普通の人間だ。

カナならもしかしたら知ってるかもしれないと、隣を見てみるとカナは首を横に降る。

やっぱカナにも分からないか。

真樹さんが嘘をついてるとも思えない。

「脅しか？」

「別に言いふらしませんわよ。わたくしは貴方に自覚してほしいだけですわ。自分がどういう人なのか」

「つまり？化け物の分際で沙鳥様に近づくな？ということか？」

「物分かりがいいですわね」

「分かったよ」

夏哉は私から鞄を取って一人で教室に向かう。

私たちはただ固まってるだけで動けなかった。

「沙鳥様、鞄をお持ちしますわ」

真樹さんの声で私たちは我に帰る。

「あ、私、夏哉君のところに行ってくるね」

カナは？鞄ありがとう？と言って夏哉を追いかけた。
私も行きたかったけど真樹さんがいたから無理だった。
真樹さんは私の鞄を持ち前へ進める。

「ねぇ、真樹さん」

「沙鳥様、わたくしのことは呼び捨てで構いません」

「えっと、じゃあ真樹」

「なんでしょう」

「あのさ、流石に？化け物？は言い過ぎなんじゃないの？」

別に真樹の頭がおかしいって訳じゃないのは知ってる。
と言うか二次元にいるキャラみたいに頭がおかしい人なんて現実世界には、嘘とかボケとかでない限りあり得ない。
そんなことを言うには自分の考える理由があるはずだ。
真樹はあの状況で多分嘘もボケもしないだろうし。

「いえ、あれは比喩ではありませんわ。あれは本当に、本当の意味

で化け物。わたくしも目を疑いました」

「何がどう化け物なの？」

「それは……申し訳ありません。沙鳥様の質問でも、あれは本人の許可なくわたくしの口からでは言えませんわ」

真樹の言ってる？化け物？とは、学力が化け物並みだ、とか特技が化け物だ、等のいい意味では無さそうだ。
でも、ちょっと意外――て言うのは失礼だったかな？――だったのが……

「真樹って優しいんだね」

「へっ？な、何がですの？」

私のいきなりの誉め言葉で顔を真っ赤にする。

「だって、なんやかんや夏哉にひどいこと言っても気に掛けてるし。本当に私と会わせたくなかったらその理由言った方がいいでしょ？」

「べ、別に柊夏哉のことは嫌ってるわけではありませんわけで……」

「じゃあ夏哉のこと好きなの？もちろん恋愛的意味で」

「それはありませんわ」

そんな真顔で言われちゃったらちょっと悲しい。
仮にも私は夏哉に惚れてるわけで、まぁ彼女になる気はないんだけど。

それでも複雑な気分だ。

あ、そうだ、と私は頭のなかに一言思い付いた言葉がある。
それを言うことは、私にとってはひどく難しいことで、でもみんなにとってはとても簡単なこと。
そのたった一言を言おうとするだけで心臓はバクバクしてる。

沙鳥様？と真樹が首をかしげる。

私はもう声をかけちゃったんだから言うしかない。

「あの、私と……友達になってくれない？」

「え……？」

真樹が目を見開いて驚いてる。
私がこの言葉を言うのが意外だったのだろうか。

「あ、え、わたくしが、さとりさまと、ともだち……？」

「うん、友達。ダメかな？」

「いや、でも、あ～、その、え、も、申し訳ありませんっ！」

「あれ？ちょっ、真樹！？」

真樹は走り去ってしまった。

私の鞄を持ったまま。

「私の鞄は返して！」

私の叫びで立ち止まり、少し戻ったかと思うと教室に入りまたすぐに走り去ってしまった。
私の鞄は持っていない。
その教室は言うまでもなく一年三組。

「……振られちゃったのかな？」

なんて口に出したけど、真樹のあの反応は嫌って訳じゃなくて急に言われて戸惑ってるって感じだったと思う。
それか、尊敬してる人と友達になるのが失礼に当たるって思ってるのか。
とにかく私を嫌ってないだけよかったと思う。

私はゆっくり歩いて自分の教室に入る。
夏哉とカナは席についてるけど話はしてない。
ちょっと気まずい雰囲気が流れてる。

「えぇっと夏哉、非常に聞きたいことがあるんだけど」

「大体分かってるけど、言いたくないです」

拒絶された。
そりゃ夏哉にも色々あるのは分かる。
私の想いが理不尽だって言うのは分かる。
でも、なんか秘密にされるのはやだ。

「夏哉さ、私たち信用してない？」

「は？」

何、言ってるんだろう。

「私たちが夏哉の言うこと信じないって思ってるの？それを聞いて嫌いになるって思ってるの？」

誰にだって秘密にしたいことはあるはずだって知ってるのに。

「私は、夏哉のこと信用してるよ。化け物って言われてるかもしれないけど、そんなの関係ないよ」

私だって秘密にしてることはあるのに。

「夏哉は夏哉だもん、私たちが知ってる夏哉だもん。今の夏哉が本物だもん」

最低だ。

「だから、秘密になんて、しないで……」

人の過去をほじくり返すなんて最低だ。

「……」

夏哉は頭をポリポリ掻く。

「香苗、これ卑怯じゃね」

「私に振らないでよ。でも、うん。卑怯だね」

「こうなったら言うしかないじゃん」

「ちなみに私も聞きたいよ」

「分かってる」

夏哉は私たちを正面に見据え、

「本当にごめんッ！」

頭を下げた。

「「……えっ？」」

私たちはいきなりのことで理解できなかった。

「その、信用してない訳じゃないんだけどまだ心の準備はできてません。だから待っててください。必ず言うんで」

「「……」」

私たちは顔を見合わせた。

特に意味はないし理由もなかったけど、見ずにはいられなかった。

「えっと……はい？」

「どうして疑問系なんだ沙鳥？」

「えっと、ねぇ」

「うん、なんと言うか……謝られるとは思わなかったから……」

そう、私たちは、少なくとも私は怒られるかイライラしながら教えてくれるものだとばっかり思ってた。
だから謝られたことに驚きを隠せなかった。

「それで、ダメでしょうか？」

「え、何が？」

私は夏哉に聞く。
夏哉が私たちに許可を求めるのが分からない。

「や、だから、二人が教えて～って言ってきたのに俺はちょっと待っててって言ってるんだから、それでいいかってそういうこと」

「そういうことって、いやいやいや。私が無理矢理聞こうとしたんだから許可取る必要ないよ」

「そうなの？」

「そうだよ、ね、カナ？カナもいいよね？」

「私は、夏哉君が言いたくなったらでいいよ」

「ありがと」

とりあえず一件落ちゃ……

「ああっ！私夏哉に近づいちゃった！どうしよ……」

ほんのちょっと前に起きたことをすっかり忘れていた。
夏哉は私に近づいたら真樹たちがなんかしそうだ。

「あぁ、その事なら気にしなくてもいいと思うよ」

「それは俺も同感」

「え、なんで？」

「真樹さんは？夏哉君が近づくな？って言ったんだから、沙鳥ちゃんが近づくならいいと思うよ」

「そういうことだ。あんま気にしなくていいぞ」

「あ、うん……」

なんかそれ屁理屈過ぎないかな？
それでいいならいいけど。

そうだ、夏哉に誤解を解いとかないと。

「ねぇ夏哉」

「ん？」

「あの、真樹ね、あぁさっきの人なんだけど、ほんとは優しい人だから怒らないでね。私のせいでもあるし」

「あぁそれ？一応分かってるつもり。気にしなくていいよ」

よかった、夏哉もちゃんと分かってくれてた。

「それよりもさぁ」

夏哉が話題を変えてきた。

「時間割のあの空欄ってなに？」

壁に貼ってある一枚の紙を指差す。

その紙には三組の時間割が書いてある。

そこには四つほどなにも書いていない。

その一つは今日の二現目だ。

「私は何も知らないよ。沙鳥ちゃんは？」

「カナが知らなくて私が知ってるなんてないよ」

「じゃあお楽しみって訳か」

私はその時間はちょっと楽しみだった。

どんなものかを早く知りたかった。

どっかのセリフで言う、『ワクワクが止まらない』って感じだった。

第二話　《九章》秘密を抱える者（後書き）

真樹「さ、ささ、沙鳥様ぁっ！！」

沙鳥「え、真樹？どうしたの？」

真「わたくし、ようやく再び出れましたわ！それにセリフも長い！！」

沙「うん、よかったね真樹」

真「はい！」

作者「は～い、というわけで始まりました後書きです」

沙「その前にさぁ、改めて言うことない？」

作「先生の名前間違えてすいませんでしたッ！！」

沙「というわけで今回二人の特別ゲストを紹介しま～す」

作「え、二人？」

沙「ほら真樹」

真「あ、はい。それでは園原先生、片岡さんどうぞ」

園原＆amp;片岡「「どうも～」」

作「えっと……先生はいいとしてどうして片岡？」

片「私だけ名前を言ってない」

作「え、嘘ッ！……あれまぁ～ほんとだ」

片「園原先生、私たちはこの人殺してもいいですよね？」

園「えぇ、何をしてもいいわよ」

作「ちょっとまてッ！！」

片「あ、その前に自己紹介。私は片岡深菜夏（かたおかみなか）です。作者を殺す名です、覚えておいてくれると嬉しいです」

園「じゃあ私も、っと。私は園原冬子で～す。決して柳冬子ではありません」

片「では自己紹介も終わったところで」

園「こいつを殺しましょうか」

真「賛成ですわ」

沙「……なんで真樹も？」

真「わたくし、知ってしまいましたの。この後、もう出番がないことを」

作「待て待て待て！真樹、落ち着こう！落ち着いて話し合おう！」

真「ではわたくしの出番はあるんですわね？」

作「ああ！出るさ！…………………あれ？うん、でるはず、だよ、ね？沙鳥？」

沙「私に聞かないでよ……」

片「園原先生、ここ学校じゃないんですけど魔法とか使って良いですよね？」

園「何言ってるの片岡さん、ここは法も規律も全くない異空間、何をしても構わないわ」

真「では逝きましょうか」

作「誰が行くかぁぁぁぁあああ――って動かないッ！？」

沙「ここで沙鳥ちゃんの登場！動かなくしたけどこれでいい？」

真&園&片「「「さすがです（わ）」」」

作「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁああああああああ――――――――――――――――」

第二話　《十章》押さえきれない気持ち

キーンコーンカーンコーン

一現目の日本史が終わり、この休み時間が終わると次は空白の授業が始まる。
そして先生が教室から出ていく前に次の授業の連絡事項を伝えてくれた。

「おぉ、君たち次はあれか。次は外だから制服のまま外に行きなさい」

これで自分の役目は終わったと言わんばかりに教室から出ていった。

「ねぇ夏哉！外ってことは勉強じゃないよね？はじめての授業が外なんだからこれからも外だよね！？」

「いや、そういわれても……はじめてだからっていう可能性もあるわけだしさ」

「えぇ～、やだ～。外で遊びたい～」

「小学生かお前はッ！」

そう言って夏哉は私の頭の上に手を置く。

「ちょ、なんでここでなでなでしてくるの！？」

「ほ～ら小学生、わがままは行けませんよ～」

めっさ恥ずかしい。
でも夏哉に撫でられるのは気持ちいい――って私ダメじゃん！
夏哉にはカナのこと好きになってもらわないと！

「夏哉～、カナにもやってあげなよぉ」

「えぇっ！？どうしてそこで私！？」

「だって、小学生って言ったらカナでしょ？」

「ひどっ！夏哉君、沙鳥ちゃんがいじめるよぉ」

「いやいやいや、お前は小学生だ。安心しろ、俺が保証する」

「そんな保証要らないよ！」

私は夏哉の手を退かし、カナのもとへ行き耳打ちする。

「小学生は置いといて、夏哉になでなでしてもらいたくないの？」

「え、あ、あの、そ、それは……」

うろたえて、顔を真っ赤にしてうつむくカナは可愛い。
前に自分の気持ちが分からないって言ってたくせに、他人から見れば恋する少女にしか見えない。

「どうなのさ～香苗ちゃん？」

「あー……でもさ、でもさ！私たち恋人でもなんでもないんだよ！」

え、何？
どうしてそこで恋人が出てくるの？
今の話に一切恋人関係なくない？

でもそこは私。
カナのよく意味の分からない発言を華麗にスルーして普通に対処する。

「だ～いじょ～ぶだって、私もただの友達ってだけでなでてくれたんだし」

「ただの友達じゃないよ。大切な友達だよっ」

ちょっと強めの口調で言うカナ。

いや、あの、カナね？
そう言ってくれるのはほんと嬉しいんだけどね？
話がずれてきちゃったから。

「それで、やってもらいたいの？もらいたくないの？」

「あぁぁ～……やって、ほしいです……」

かなり小さい声だったけど、たしかに言った。
じゃあそうと決まればやることはひとつ。

「よーし、夏哉！」

「ん？話は終わったか？じゃあ行くぞ」

「「え？」」

「え？じゃねぇ、え？じゃ。さっさと外いくぞ。あと五分だから遅れるぞ」

席を立ち廊下に出ていく。
おそるおそる横にいる幼女を見てみる。

「うっ、あうっ……」

あ～……

「沙鳥ちゃん！私、泣いてもいいよね！？」

「うん。私の胸で泣きなさい」

カナが私の胸に抱きついた。
私もカナを抱き締めてあげた。

ん～、あれは私が言うタイミングが悪かったのか？
でもあれは可哀想だ。
夏哉もちょっとくらい付き合ってくれればいいのに。

数十秒経った辺りでカナが動かなくなった。
いや、ほんのちょっと震えてる。
どうしたんだろう？
不安になってきたから聞いてみることにした。

「カナ？どうしたの？」

「沙鳥ちゃん……」

「ど、どうしたの？」

「私もう沙鳥ちゃんに抱きつかない！！」

「えっちょ、カナ！？……そんな捨て台詞をはいて、風の如く教室から去っていったのだった」

こんなことを一度言ってみたかった。

教室には誰もいない。

ていうか誰かいた場合はこんなこと絶対しない。

「……早く行こ」

少し後悔しながら二人を追う。

「は～い、それでは二現目の授業を開始します。三組、号令」

私はギリギリ授業に間に合った。

座る場所は見たところ適当だったので、夏哉とカナを見つけてその隣に座った。

その際に、他のみんなが私を隣に座らせようと早くから来て少しでも良い場所を見つけてとっておいてたみたいなんだけど、残念、私の一番良い場所は夏哉とカナの隣だ。

ホントにみんなに悪いことした。
ちなみにこの授業は三組四組の合同らしい。

先生は一人だけではなく四人ほど。
一人は前に、それ以外はバラバラなところに。
ひとかたまりにいれば良いと思うんだけど。

話は変わってカナだ。カナは今もご機嫌斜めのご様子。
夏哉に理由を聞くと『私の味方は誰もいないの、って言ってふさぎ込んでるんだけど、なにした？』てなことを言ってたけど、その原因はあなた様なんだがね。

とりあえずカナのことは授業が終わるまで放っておくことにした。
それより今は授業だ。

「もう気付いてると思いますが、この授業は時間割では空欄でしたね？その理由を今から説明します。それは、紙に書くだけでは信用されないからです」

え、何それ？
信用されない授業？
そんな授業があるの？
生徒のみんなもざわついている。

分かりきってるだろうけど、右隣にいる夏哉とカナを見てみる。

案の定二人は首を横に振る。
だろうね。
考えるだけ無駄なので答えを待つことにした。

「みんな不思議に思うかもしれないが仕方がない。それから私は決して頭がおかしいと言うわけではないと言うのを先に言っておく」

先生は一度言葉を区切る。
結構重要な言葉のようだ。

私たちは黙って次を待つ。

「この授業でやることは魔法だ」

『……』

全員が沈黙。

「取り敢えずまずは整理する時間を五分ほど与える。話し合っても良いからなるべく落ち着いてくれ」

うん、整理しよう。
高橋先生（♂）が言った言葉はなんだって？
私の耳には魔法って聞こえた。
もちろん今までに魔法を授業でやるなんて言うトンデモ学校は存在しない。
私はさっき誰かの言う言葉には理由がある的なことを思ってたけど、だからといって理解は出来ない。

「夏哉、今先生なんて言った？」

聞き間違えということを期待して夏哉に聞く。

「……魔法」

やっぱり、私と同じ聞こえ方してたみたいだ。

「カナは？」

「……」

「カナ？」

「たろう？」

「「は？」」

つい声が出てしまった。

たろう？

カナにはたろうと聞こえたの？

私には魔法って聞こえたけど、たろう？

ていうかたろうって何？

「え、ちょ、ちょっと！真面目に考えないでよ！私もちゃんと魔法って聞こえたよ！」

どうやらあれはボケだったようだ。

正直に言って、今凄く混乱してる。

だからそこにボケが入っても真面目に考えてしまった。

逆にこの状況でボケを言えるカナがすごいと思う。

「香苗魔法とか知ってた？」

「え？知らないけど……どうして？」

「よくこの状況でボケを言えたなーって。動揺とか戸惑いとかしてないわけ？」

だよね、やっぱ夏哉も同じこと思うよね。
私はむしろカナの方がこういうの信じられないと思ってた。
偏見かもしれないけど、勉強できる人はこういう非現実的なものを信じてないっていうのを考えてた。

「えっと、私も信じられないなって思ってるけど、でも魔法使えたらなーっていう好奇心の方が勝っちゃって。先生が言ってるんだから魔法っていうのがあって、それを子供の私たちに教えるんだからちゃんと安全は保証してると思うし」

私たちは呆然としていた。
さっきの魔法宣言にも驚いたけど、それを聞いて冷静に分析してるカナも驚きものだ。
多分夏哉も同じこと思ってる。
この子、ただの子供じゃない！

私たちの沈黙をどうとったのか、悲しそうな顔をする。

「あ、その……変、だった？やっぱりボケが寒かった？」

「そういう訳じゃなくてな、単純にスゲェなーって言葉失ってただけで」

「私も。うん、変ではなかったよ。ホントによくそこまで考えられたなーって感心してた」

「あ……その、ありがとう」

あ～！

その笑顔は反則でしょう！

自分の意思とは裏腹に顔がにやけてしまう。

夏哉も同じだ。

これはこうなっちゃうよね。

別に私が同姓愛者になったって言う訳じゃない。

「は～い、じゃあそろそろいいか～。多少の戸惑いがあると思うが聞いてくれ。まずみんな、魔法があるって言っても言葉だけじゃ信用しないと思う。だからこれから目の前で披露する」

バラバラにいた残りの三人の先生が前に出てくる。

本当に最初から前にえればよかったのに。

そして先生方が何をするかと言うと、

「まず私からだな」

最初からいた高橋先生がでてきた。

もう一人の先生――確か石野先生（♂）だったかな？――がフリスビーを用意する。

え、何？

まさか犬になってあれを取りに行くとか？

色々考えてると先生がフリスビーを高々と投げた。

「じゃあこっち見てください」

高橋先生が私たちを注目させる。

「今から魔法と言うものを見せます」

先生はフリスビーがある方向に手をかざす。
すると、今までの常識を壊すようなことが起きた。

先生の手に赤い光が集まり、それがみるみる炎に変わっていく。

それは直径十センチくらいの火球。
どう見てもあれは普通ではない。
左手はダランと下にやってるだけだから細工は出来ない。
周りも見てもそれらしい機械は見えない。

それでも私は手品じゃないかと思ってしまう。

私がただその火球を眺めていると、変化が起きた。
火球は先生の手からかってに離れて、ものすごいスピードで空に向かっていった。
その先にはさっき投げたフリスビー。
もしあれが本当の炎だったらフリスビーは燃えてしまう。

しかし炎はフリスビーを――燃やさなかった。
あれが幻影だったって言うわけではない。
ただ――

フリスビーが重力に逆らって火球を躱した。

風だと、最初は思った。
でも違った。
理由は国旗や校旗がなびいてなかったからだ。
つまり風は吹いていない。
じゃあどうして？
当然の疑問を抱いたけど、それは意外とすぐに解消された。

「ちょっと白藤さん！何をしてるんですか！？」

「え？だって炎は手品って思われちゃうかもしれないんで、あれを躱すように動かせば魔法だって信じてもらえるかと」

高橋先生と白藤先生（♀）が言い争ってる。
話から察するに、白藤先生が何かしたみたいだ。

気付けば的を貫けなかった火球は空中で消えていった。
肝心の的は軌道を変えて白藤先生に向かってる。
フリスビーは白藤先生の周りをクルクル回ってる。

「皆さんどうでしょうか？これは魔法じゃないとあり得ませんよね？」

『……』

もう声が出ない。
と言うか出せない。
何を言えばいいか分からない。

あれが魔法だって言うことは、うん、ここまで見せられたら諦めるしかない。
魔法があるって信じよう。
これでも物分かりがいい方だと思う。

「あれ？これでも信じてもらえないんですか？」

「いや、そう言うことではなくて、何を言えばいいのか分からないって感じだと思うんですが」

石野先生が私たちの気持ちを代弁してくれる。
もしかして先生も私たちと同じ思いをしたのかな？

「えー、じゃあどうしま――」

ビュンッ！！

またもや不思議な現象が現れた。
なにかがフリスビーを打ち砕いた音がした。

「油断大敵よ、白藤先生」

「赤雛先生、目的が変わってますよ」

今度は赤雛先生（♀）がなにかしたようだ。

……なんか石野先生は苦労してそうな気がする。

あの人の授業はちゃんと聞いてあげよ。

他の授業も聞けよ！って言うツッコミは無視。

石野先生がため息をつき、簡単な魔法について説明してくれた。

「まず魔法と言うものがあるという前提で聞いてください。魔法には四つの属性があります。高橋先生が使った火。白藤先生が使った風。赤雛先生が使った水。そして最後に地です。最後のは私が得意なので今から見せます」

そういった瞬間、石野先生の立ってる場所がせりあがり五メートルほどの高さで止まった。

「地属性の魔法はこんなことが出来ます」

そして地面（？）は巻き戻すかのように元の位置に戻っていった。

「この四つの属性にはそれぞれ特徴があります。火は攻撃、風は速度、地は防御、水は造形、という感じです。ちなみに先程の白藤先生の行った魔法は風を生成してフリスビーにまとわせて操り、炎弾を躱した。赤雛先生がしたことは水を生成して、その水でフリスビーを砕きました。ですよね？」

先生は後ろにいる二人の女教師に話しかける。

どちらもそれに同意した。

「他にもまだ話すことはありますが、それは後に話すとしましょう。今日の授業はオリエンテーリングということで、魔法があるということを知ること。それから必ず忘れてはいけない重要なことを覚えることです」

重要なこと？
かなり気になる。
私たちは今日一日でかなりすごい体験をしたからちょっとやそっとでは……驚くか。
人間そんなすぐには順応できない。

「まず魔法、これはすべての人間が出来るというわけではありません。特別な適性を持った人でないと扱えません。ですので、入試の面接時にその適性を持ってるかどうかを検査させてもらいました」

え、何それ？
そんなのされた覚えなんてないよ？
皆ざわめく。

「静かに静かに！あれは秘密利に行われたことだからみんなが知らなくて当然です。でもその方法はまったく害のないものだからそこの問題は気にしなくて構いません。それで、この学校に入る条件のひとつに、その適性を持つということがあげられるので生徒は皆使えます」

おぉー、とみんなが感嘆の声をあげる。
みんな自分が特別だって思ってるんだろう。

でも、

私は、

それを素直に喜べない。

その特別な適性を持ったことで夏哉とかカナに会えたんだから、それは嬉しい。
嬉しいけど、こんな特別な力を手に入れちゃったら余計に普通の人から遠ざかっちゃう。
今までより、一人になっちゃう。

私は特別が嫌い。

それが原因で孤立しちゃうから。
だから魔法なんて要らなかった。
それなのに、現実は非情で、私の願ってることなんてひとつも叶えてくれない。

「そしてこのクラスの中に、今までの麦谷高生徒の中で一番の魔力の高い、つまり一番の適性のある人がいます。その人物は……」

ゴクッと息を飲む生徒たち。
私は、それを聞きたくなかった。

嫌な予感がする。

こういう予感は結構当たる。

「みんなもよく知ってる、天雲沙鳥さんです！」

やっぱり。

やっぱり私の名前が呼ばれた。

ただでさえみんなから一目置かれている状況なのに、これで余計特別扱いされてしまう。

嫌だ。

どうしてそうなるの？

私、何もしてないよ？

私はただ普通になりたいの。

ただ普通に友達を作って、彼氏を作って、ふざけあって、笑いたいだけなのに。

そんなことを望んじゃダメなの？

私の気持ちなんて知らないで、みんなは『オ――――――――ッッ！！！！！』と歓喜の声をあげる。

お願い、やめて。

誰か、私を見て。

見た目じゃなくて中身を見て。

本当の私を知って。

私はただの女子高生だってことを理解して。

私の思考が深みにはまっていく。

その直前。

「フゥッ」

「ひゃぁっ！？」

耳に変な感触があった。

その方向を向いてみると、夏哉の顔がドアップに見えた。

「ふわっ！？」

「……ちょっと、引くなよ。軽く傷つくぞ」

「え、と……なんで？」

「先生が前に出ろだって」

先生の方を向くと、私のことをジッと見てた。
先生の話が聞こえなくなるほど、自分の考えてることでいっぱいいっぱいになっちゃうなんて……

急いで前に出る。

「それでは、これから生徒代表で天雲さんに魔法を行ってもらいます。他の皆さんは時間がないのでまた後日。次は……月曜日ですね。では天雲さん、私の言った通りにして下さい。まずは手を出して――」

言われた通りに右手を出す。

「イメージしてください、自分の腕から人差し指、中指、薬指、小指にそれぞれ力が流れるのを。イメージし終えたら、なにか力を注ぐ感じで」

目をつむって右手に少し力を入れる。
そういう、力が流れる、みたいなことは漫画とかゲームをたくさんやってるからイメージしやすい。

イメージをして、手に筋力以外の力を注ぐ。
実際注いではないと思うけど、これもイメージだ。
すると右手に熱を感じるようになる。
熱いわけではなく、ポカポカ暖かい感じだ。

前から『スゲェ！！』とか『さすが沙鳥様！』など、いろいろな声が聞こえてくる。

目を開けると、私の指の先から四つの色や形を持つ強い光が生まれ

ていた。

人差し指から、炎のような赤、水のような青、風のような緑、土のような茶。

それはまるで、さっき先生が言ってた四つの魔法の属性の様だった。
隣にいる石野先生が凄い驚いた顔をしている。
いや、石野先生だけじゃない。
他の三人の先生も同じように驚いてる。
なにかマズイことをしたのかな？

「これ程か……！」

「赤雛先生、水の光あそこまでいきます？」

「……正直微妙だわ。高橋先生は？」

「火属性だけならいけるが、四つすべては無理だな」

「で、ですよね……。あれが凄すぎなんですよね？」

なんか普通にやっただけで驚かれた。
やっぱり私は以上なんだ。
でもこの光はなんの意味が？
その答えは石野先生がしてくれた。

「この光の説明をします。これは、いわゆる魔力の量を示してます。光が強ければ強いほど魔力は多いと言うことです。色はそれぞれの属性を示してます。赤は火、青は水、緑は風、茶は地です。普通はちゃんと修行をして一人前になるとひとつの属性が今の輝きを放つ

のですが、流石は天雲さん、素質だけで私たち教師までもを凌駕してしまいました」

再びの歓声。
私は指に力を注ぐのをやめた。

「天雲さんありがとうございました。皆も次にやってもらいますので。そろそろ時間になるので最後にひとつ、一番重要なことです。それは魔法という存在を一切公言しないということです。理由としては、これを軍事的に使われたくないからです。外で魔法を使っていい場合は、人助けのみです。もし使った場合は、記憶を消させてもらいますので悪しからず」

キーンコーンカーンコーン

「さて終わりですね。四組号令お願いします」

号令をして、各々教室に戻っていった。
ちなみにカナはこの日の昼休みになでなでしてもらったとさ。
幸せそうな顔してたな。

土日を挟んで月曜日、結局数学のプリントは終わらなかった。
それは夏哉も一緒なんだけどね。
私は『ちゃんと提出してください』で終わったけど、夏哉は『何やってんだテメーは！』的な感じで怒られてた。
ご愁傷さまです。

二人は私が凄く魔法が出来ても変わらずに接してくれた。
でも周りは違った。
今まで以上に私を崇めるようになった。

今は昼休み。
一人になりたかったから、二人に断って屋上でお昼を食べる。
本音を言えば私の側にいると、今まで以上に二人に迷惑をかけちゃうって思ってるからなんだけどね。
二人に言ったら怒られそうだから言わない。

一人で食べるのはちょっと寂しいけど、これはこれでいい。
中学は屋上禁止だし、教室で食べると絶対誰かが側にいる。
もしかしたら今ここにも誰かいるかもしれないけど、見えないんだからいないと同じだ。

弁当を食べ終わり、さてどうしようかと思ってると、屋上に入るための扉のドアノブがガチャッと音をたてた。
とっさにどこかに隠れようとしたけど、周りに隠れるところはない。
私がアワアワして、引き返してくれないかなって思ってたけど、無情にも扉が開いてしまった。
こんなところ見られちゃったらどぼぁーって来ちゃうかもしれない。
その扉を開けた人物は――

「お、いたいた」

夏哉でした。

「えーっと、どして？一人で食べるって言ったよね？」

「あー違う違う。先生がお前を呼んでたんだよ。俺はパシリ。すぐ終わるから今日中に高橋さんのとこ来いだって」

「カナは？」

「二手に別れて探してる」

「そっか、了解」

私は弁当を持って今から行こうとした。
けどそれは夏哉によってはばまれた。

「ちょい話あんだけど、今すぐいいか？」

「別にいいけど……告白？」

「ちげーよ。急に一人で食おうとしてるからなんかあったんかな～って」

「え？なんでもないけど……」

「なんでもないって言ってるときほど実はなんかの布石とか重要なことになるってお前知ってるだろ？」

「……漫画の話？」

「そ」

確かにそれはそうだ。

「まぁいいんだけどさ、香苗が心配してたぞ。私嫌われちゃったかなって」

「そんなことはないけど……」

「ん～、予想だけど魔法についてじゃね？」

「え、どど、どうして分かったの！？」

ズバリ的中だった。

図星で動揺してしまった私は最初の方の言葉がまとまらなかった。

「ただの予想だったんだけどな、魔法教えられた辺りからちょっとテンション低かったから」

うそ、そんなつもりはなかったんだけど……

「そんなに変だった？」

「いやいや、ホントにほんのちょっとで気のせいかなぁって感じだったから。聞くまで分かんなかった」

「……かまかけた？」

「まぁね」

あー、なんかいいように転がされてむかつく。

コツッと夏哉の頭を叩いた。

私は夏哉に言うかどうか迷った。

夏哉のことだからちゃんと聞いてくれると思うけど、やっぱり怖い。
大丈夫だって分かってる分、もし拒絶されたらって思うとどうしようもならなくなる。
緊張で胸が痛い。
でも、夏哉の一言で決心した。
「つらいことがあんなら吐いちゃえよ。少しは楽になるぞ」
夏哉に言われると、本当にそんな感じがする。
だから夏哉に胸の内を聞いてもらうことにした。
「私ね、魔法が一番でしょ？しかもダントツで」
私は立ち上がり、端の方へと歩いていく。
この学校の屋上はフェンスはなく、一メートル位の段差があるだけだ。
その上に私は乗り、夏哉の方に振り向く。
「あぶねーぞ」
夏哉が注意してくる。
でも私は聞こえないふりをする。
うん、大丈夫。
「私、おかしいんだよ。みんなに好かれるフェロモンみたいなの出してるんだよきっと。それに……」

言葉を切ると、重力に身を任せて後ろに倒れる。
後ろにはもちろんなにもない。

つまり私は屋上から落ちる。

「ぇ……、沙鳥ぃぃぃッ！！」

夏哉の叫び声。
私のことを心配してくれる。
それは嬉しい。

でも大丈夫。

たった三日前に聞いたばかりの魔法を使う。
属性は風。
身体中に流れる血液以外のものを自分の体にまとわせるイメージをし、魔力を練る。

そうすると、魔法で作られた風は私のイメージ通りにまとわりつく。
その風を操って空中でとどまる。

私は上に飛んで夏哉の前に現れようとする。

「ほら、私習ってないのにこういうことがで――」

次の瞬間、信じられないものが目に入った。

「……に、あえぇえ……？」

夏哉が屋上から飛び降り、私に手を伸ばした。

とっさのことだったのでついそれを避けてしまい、
夏哉は私の横を通りすぎた。
ちなみにここの学校は四階、頭から落ちてるので即死。
「え、えええぇぇッ！？」
「な、夏哉っ！？」
私は夏哉の助けるために必死に魔力を練る。
かなり焦ってたけど成功。
さっきと同じ要領で自分の体から夏哉まで魔力を飛ばし、夏哉を捉える。
そして夏哉の落下スピードが減速し、ピタリと止まる。
私は自分と夏哉を屋上まで運ぶ。
屋上に着地してすぐに夏哉の安否を確認する。
「夏哉だい――」
パァン！！
夏哉にはたかれた。
「お前何やってんだよッ！！」
「え……」
「なんであんな危険なことするんだよッ！？心配すんじゃねぇかッ

！！」

「でも、私ならあのくらい平気だよ？」

「そういう問題じゃねぇんだよ！！テメェはただの女子高生だろうが！！これからは絶対あんな危険なことはするな！！いいなッ！？」

「え、いや、私普通じゃないよ？私異常だよ？魔力だっていっぱいあるし、周りなんて親衛隊を作らせるような存在なんだよ？それが、普通なわけないよ」

「チッ、あぁくそっ！！」

ギュッと、

夏哉が抱き締めてきた。

「ちょ、え？な、その、えっ、な、何してるの？」

「俺にとっちゃお前と香苗は、特別で大切な存在なんだよ」

「……え？」

「そんなやつが屋上から飛び降りたら、大丈夫だって言われても、すっげぇ不安になるに決まってんだろ？どうしようもなくなるんだよ」

あ……

私、何やってるの？

大切に思ってる人をこんな風に自分から不安にさせて。

自分の身勝手なせいで大切な人を危険な目に会わせて、傷つけちゃって。

それなのにこの人は……

「頼むから、だから今度は、俺の前で、香苗の前で、みんなの前で絶対やるな！！」

私なんかのために叱ってくれて、

味方になってくれて、

守ってくれて、

孤独じゃなくしてくれて、

「……ひくっ、ゴメンね、ゴメン、ひくっ、ね、ゴメンね、……」

夏哉は今よりも強く私を抱き締めてくれた。

ゴメンね、カナ。

私、カナを応援しようって決めたのに、カナに幸せになってほしいって誓ったのに。

私どうしようもなく夏哉のことが今まで以上に好きになっちゃった。

ずっと側にいたくなっちゃった。

許してくれるかな？

って、まずカナを応援するって許可ももらってなかったか。

ほんとゴメン、自分勝手で。

これでカナとライバルになっちゃうのか。

カナ、これからも一緒にいてくれるかな？

多分カナのことだからいてくれるよね。

だからこれからフェアで行こう。

どっちが先に夏哉を落とせるか勝負だ。

でも、

今だけは、

チャイムがなるほんのちょっとだけは、

私と抱き締めさせてください。

第二話　《十章》押さえきれない気持ち（後書き）

作者「ようやく終わった～」

香苗「ねえ夏哉君、これで沙鳥ちゃんの過去は終わりだよね？」

夏哉「その筈だけど、なぁ作者」

作「ああ、終わり終わり」

香「沙鳥ちゃんの方が量多くない？」

夏「ん？……ほんとだ、ちょっと多いな」

香「しかも何これ！十ページ！？今までで一番多いよね！？」

作「フッフッフ～、いいところに気付いたね。香苗と沙鳥の過去をよく見てみろ！あ、アンが出てきたところは抜きね。それは過去の話じゃなくて現在ってことになってるから」

夏「はぁ？何いってんだ？香苗、共通点あるか？」

香「えぇっと……過去ってことと、好きだって思った日にちが同じ、ってことくらいじゃない？」

作「チッチッチ～、甘いなチミたち。実は、香苗と沙鳥の過去編は、文字数が同じで終わってるんだよ！」

夏＆ａｍｐ；香「「はぁ？」」

作「だからァ、二人の過去を２２０１７字でまとめたんだよ。数えてみ」

夏「やだよめんどくせぇ。どうせ計算ミスでズレてるっつーの」

香「どうしてこんな面倒くさいことを？」

作「よく聞いてくれた。これはアンの道具に関係してるのだよ」

香「あの聴診器みたいなやつ？」

作「そうそれ。それは現実時間では２４分４８秒、文字数で言うと２２０１０字見続けないといけない代物なんだよ」

夏「どうしてまたそんな面倒なやつを使ってんだよアンは」

作「そりゃあれだ。魔界は道具を作るのが得意じゃない。そこで聖族が戦争時に使い捨てた道具を利用して見よう見まねで作ったんだよ。だからちょっと欠点があると、そういうわけ」

香「なるほど～。魔界とか聖族とかみんな覚えてるかな？」

作「……ま、まぁ、こんな感じで第二話もあとエピローグで終わりだから」

夏「はいはい。ところでさぁ」

作「ん？」

夏「いつもやってるまとめなんだけど、やる必要ある？」

作「な、なに言ってるんだよ！？」

夏「だってさ～、毎回同じこと言ってるだけじゃん？絶対飽きるって」

香「もう飽きられてると思うよ」

作「でも読者は神だよ！その神にお礼をする以外に何ができる！？」

夏「より良い話を作る」

作「た、確かに……！」

香「皆さん見てくれてありがとうございます。頑張ります」

作「本当にまとめが少なくなったぁ！！」

夏「これからこうしまーす」

第二話　《エピローグ》化け物たる所以

「掃除終わりっと」

アンが香苗のところに行ったあと、俺は自分の部屋を掃除してた。
理由？
そんなの決まってる。
一人の女子を居候させるんだ、色々と汚いとダメだろ？
汚いところに住めって言うほど鬼畜じゃないさ。

あ、そういえばあいつ飯どうしたんだろ？
昼前に出ていって、今はもう二時なんだから腹減ってるよな。
まぁ香苗か沙鳥のところで食わせてもらってるかな？

念のためになんか作っておこうかな。
食わねぇんだったら食わねぇで晩飯にすればいいし。
ここは寮から飯が出ないんだよな。
その代わり金がもらえるからいいけど。
もらえる理由としては、魔法の実験に協力してくれるからしい。
学校行って金くれるのはいいことだ。

俺はなんか作るために冷蔵庫の前に行く。

ふと気付く。

あんなに動いて掃除してたのに疲れてないし汗もかいてない。
今までだったら絶対くたくたになってるはずだ。

「……は～、戻ったのか？」

つい独り言が出る。
一番思い出したくもない記憶が思い出される。

『うわぁぁあああっ！来るなぁ！』

『私の子供に近づかないで！！』

『寄るな化け物！』

「は～」

再びため息をつきながら冷蔵庫を漁る。
ちょっと少なくなってきたから、明日辺りアンと町案内がてら買いに行くか。

今はとりあえず炒飯を作ることにした。
材料をキッチンに出したとき、

「夏哉！！」

アンが大声を出して壁から入ってきた。

「おかえり～、ってどこ行く？」

と思ったら部屋から出ていって玄関に出ていってしまった。
しばらくすると、聞き覚えのある声で『お、お邪魔しまーす』という声が聞こえた。
そちらに向かうと、へとへとな少女二人がいた。

「まぁ言いたいことはあるけど、とりあえず上がりなさい」

香苗と沙鳥の手を引きながら部屋へ戻る。
この寮は二人暮らしはギリギリできる程度の広さ。
それにプラスしてキッチンがある。
トイレと風呂は共同だけど、それでも十分だ。

さすがに四人座るといっぱいいっぱいになっちゃうんだけどね。
アンと共に二人を部屋に放り投げ、麦茶を出す。

「アン、昼食った？」

「あ、そういえば忘れてたな」

「やっぱか……ちょっと待ってろ。今軽いの作るから」

「ほ、ほんとかっ！？」

「嘘ついてどうする。香苗と沙鳥は？炒飯だけど」

「いい」「いらない」

「了解」

俺は七分ほどかけて一人分の炒飯を作った。

アンはそれを一口食うと、ほんと幸せそうな顔をする。

「あぁぁぁ～、うまい！すごいうまいぞ！これ名前なんと言ったか！？」

「炒飯だよ。炒める飯って書いて」

「夏哉は料理が上手いな！昨日の親子丼もうまかった！」

「ありがと。で、二人はどうしてうちに来た？」

アンは食事に専念させて、香苗と沙鳥に話を振る。

「私はアンちゃんに連れてかれた」

「私も同じ。アンさんが入ってきていきなり『夏哉のところに行くぞー』って言って……」

俺たちはアンを見る。
まだ幸せそうに食べている。

「ねぇ、魔族って地球のもの食べて平気なの？」

沙鳥が俺に聞いてきた。
それは俺も昨日思ったんだよね～。

「実際食ってんだから平気じゃね？普通だったら食えなかったんだから、毒かどうかも分からないんだし」

「……アンさん、もし私たちに、じゃなくて神様に会えなかったらどうやってご飯食べてたんだろ？」

「「あ」」

そういやそうだな。
あいつはメルティウム（覚えてる？聖界の神だよ）がいなかったら物に触れなかったわけだし。
分かんないんだから聞くか。

「なぁアン、もし俺たちに会わなかったら飯どうしてたの？」

「んっんんん」

ちょっと待てって言いたいのかな？
アンが急いでモグモグしてる姿を眺める。
ゴクンッと炒飯を飲み込むと、俺たちに顔を向けた。

「食料は亜空間に溜めてたんだ」

そう言うと、空中に指で縦に線を引く。
するとその線から空間が裂け、見覚えのあるぐにゃぐにゃした空間が見えた。

隣にいる二人が、うわっ、といって驚いている。

「アンさん、何したんですか？」

香苗が恐る恐る聞いてきた。

「ん？奇法を使って別の空間を作ったんだ」

アンは自分が作った空間に手を伸ばし、何かを取り出す。

「ん～、魔力減ったから狭くなったな……ほれ、アシムの肉だ」

取り出したそれを俺に投げた。
アシムの肉は、見た目的に鶏肉っぽい。

「……食えるのか？」

「結構旨いぞ。干し肉だからそのままいける」

そういうことが聞きたい訳じゃないんだけどな……。
でも、ここで断るのは悪いし。
俺は意を決して一口かじる。

「ん～……ん」

「どう？」

沙鳥が不安そうに聞いてくる。

「ちょっと脂っこいけど超うまい」

「だろ？」

「へ～。夏哉、私もちょうだい」

「だめ！沙鳥ちゃんそれはダメだよ！」

いきなり香苗が叫びだした。
顔がちょっと赤い。
えっと……どしてだ？
驚きは俺だけではなくて、沙鳥とアンも同じだ。

「えぇ……カナ食べたかった？」

「違う！そうじゃなくて！！」

よし、カナが考えてることを考えよう。
カナは沙鳥にこの肉を食べてほしくないようだ。
何故だ？
この肉を食べたいとかじゃなさそう。
じゃあ他には？
食べかけの肉をじっと見る。

ん、食べかけ？

「あぁ」

つい声に出てしまった。
なるほどそういうことね。

俺の声に反応してみんながこっちを向く。
香苗はあわわわ～とさっきより赤くなる。

「どうした夏哉」

「香苗の叫んだ意味が分かっちゃった」

「え、なになに？教えてー」

アンの質問に答えると、沙鳥が促す。
香苗はうつむいている。

「はいはい。じゃあまずこれはなんでしょう」

右手に持ってる肉を掲げる。

「えっと、あ、あ、アスクの肉？」

「訪ねてどうする」

「アシムの肉だ」

「はいアン正解。でもただのアシムの肉ではありません。俺の食べかけのアシムの肉です。つまり香苗は次にこれを食べる人は俺と間接キスすることになると考えたわけです」

「「あぁ！」」

二人の慌てた顔が目にはいる。

そして沙鳥は香苗を睨む。

「カナ～！よくも邪魔したな～！」

「だ、だって！やっぱ気になるし……そうなるくらいなら私がって」

「友達だって信じてたのに」

「友達と恋は関係――あ、アンさんダメ！」

「チッ」

二人が口論していた間にアンが俺のところに来ようとしてたけど、見つかっちゃった。

「アンちゃん、抜け駆けはずるいんじゃない？」

「済まんな、魔界ではこれが普通だ」

「あ、魔界と言えば、私は神の依代なんだから神と同様の力があるはず。だからアンちゃんに命令する！抜け駆け禁止！」

「どんな理屈だ！」

「だったら私も神だもん。しかも聖界。聖と魔だったら聖の方が正しいはず！」

「香苗、お前もか！二人とも特別は嫌いじゃなかったのか！？」

「「夏哉（君）と一緒ならそれでいい」」

「あー、屁理屈並べてー！」

「は～い皆さんストップ～」

面白かったから黙ってたけど、そろそろ本題に入りたかったから止める。

「止めるな夏哉！私たちは今大切な話をしてるんだ！」

みんな俺の方を向いてくれない。

「大切な話って？」

「誰が夏哉と間接キスをするかだ！」

「何で？」

「だからアシムの肉でだ！」

「よーく俺を見ような」

「「「え？」」」

みんな俺の方を向く。

は～、ようやくか。

「「「あれ？」」」

俺を見て不思議そうな声をあげる。

正確に言えば俺の手を見てだけど。

「夏哉、肉はどうしたの？」

みんなの代表で沙鳥が聞いてくる。

「食った」

「どうして？」

「うまかったし、それにこれで誰か食うか争ってるくらいなら元から断とうと思ってな」

「夏哉、貴様……」

「へぇ～、そんなことするんだ～」

「夏哉君……」

マズイ！
選択ミスった！
ここまで来たら後には引けない。

「待て待て待て！落ち着こう！まずお前らは俺に用があってきたんじゃないのか！？だんだん逸れてきたからこんなことしたんですごめんなさい！！」

叫びながら土下座しました。
これぞ日本の文化です！

「あ、そういえばそうだったな。忘れてた」
「私も忘れてた。でアンちゃんなに？」

口調が普通になった。
助かったのか？

「夏哉、聞きたいことがある」

「な、なに？」

「お前が化け物だって言われた理由を教えてくれ」

「「「え？」」」

あこいつらに言うの忘れてた！て言うか待てなんでこいつが知ってるんだ？二人が言ったのか？まずいまずい忘れてたのバレたら二人に怒られるか！？どう言えば許してもらえる！？

必死に言い訳を考えてると、沙鳥が大声を出した。

「ああ！忘れてた！！」

お前も忘れてたんかいッ！！

「私も忘れてた……」

「結局みんな忘れてたのね」

心配して損した。

「で、どうしてアンがその話知ってたんだ？」

「沙鳥の記憶を見て知った」

「じゃあアンさんはどうして私たちも連れてきたの？」

「沙鳥の記憶にそれに関するものがなくてな。折角だから今ここでみんなに話してもらおうと思ってな」

なるほどね、ちょうどいい機会だな。

「了解。ちゃんと話すよ」

俺は生まれたときから異常だったらしい。
生まれたてだと言うのに一切産声をあげず、ずっと無表情。
三ヶ月経ったら立てるようになり、その二週間後には普通に走れるようになり、喋れはしないが言葉も通じていた。

そんなこと普通ならあり得ない。

当然周りには気味悪がられた。
自分だけじゃなく俺を生んだ両親も疎まれた。
しかし両親はそれでも俺を見捨てなかった。
必死で原因を探すためにいろんな病院に行った。
そこで受ける審査結果はすべて異常無し。

医者にも原因が分からない以上どうすることも出来ない。

しかしその二ヶ月後、憑き物が取れたように泣き出した。
それは、両親が聞くはじめての俺の泣き声だった。

それ以降、俺は普通の赤ん坊に戻った。
よく泣くし、走ることはしなくなった。
両親はそれを喜んだ。
自分の息子が普通に戻った。
これからは俺がみんなに蔑まれることはなくなる。

が、悪い評判と言うのはそう簡単に消えない。
俺が普通になってもみんなは異常な子供、人間ではない子供を見るような目をする。
それでも両親は諦めなかった。
俺を幸せにするようにたくさん愛情を注いでくれた。

でも、

それは無意味に終わってしまった。

俺のせいで。

俺が四歳になる頃、家族で遠くに出掛けた。旅行の途中、休憩をするために公園に向かった。
そこにはたくさんの人がいた。

俺たちがベンチに座ってると、サッカーボールくらいの柔らかいゴムボールが転がってきた。
ボールの持ち主が手を振ってる。
俺は持ち主に返すためにボールを持ち、投げた。
普通なら届かない距離だった筈だ。

それなのに、

ボールは届くどころかものすごいスピードで持ち主を通りすぎ、二十メートルほど離れた木にぶつかりめり込んだ。

その光景を見た人たちは動かなかった。

人間が当たったら大ケガは必須。
そんなスピードのボールを、ただの四歳児が投げた。
幸いにも人には誰にも当たらなかった。

両親も、俺自信も驚いた。
今まで異常だとは言われたけど、こんな力はなかった。
何故かこの瞬間変な力に目覚めてしまった。

俺は謝ろうとしたのだろう、一歩前に出る。
その動きで、公園内は爆発した。

『うわぁぁぁああああああああああああッ！！』

人は俺から一ミリでも離れるために走る。

化け物と叫びながら。

俺は戸惑い、人を求めるように歩く。
俺と同い年くらいの少年が転ぶのが視界にはいる。

少年が心配になって近づく。

『うわぁぁあああっ！来るなぁ！』

すると少年は泣きながら叫んだ。
その顔は恐怖で歪んでる。
そこに少年の母親らしき人物がやって来た。
その母親も叫ぶ。

『私の子供に近づかないで！！』

母親は少年を抱き上げて逃げ去った。

それからというもの自分の力が制御できず、たくさん物を壊した。
人も怪我をさせた。

それが、九年間続いた。

「――と、他にもあるんだけど、きっかけはこんな感じだな。今にして思えばあの力は魔法だったんだろうな」

「「「……」」」

「おーい聞いてるか～」

まぁみんなが黙ってる理由は分かってるつもりだ。

三人とも、俺のために悲しんでくれてる。

本当に俺は人に恵まれてるな。

俺としてはもう過去のことなんだし、今は平気なんだから気にしないでほしいって言いたいんだけど、やっぱ無理か。

三人今にも泣きそうな顔をしてる。

「夏哉済まない、私のせいで嫌なこと思い出させて」

特にアンは自分が聞いたからか、すごい責任を負っている感じがする。

「いいっていいって。もう気にしてないし、いつか話すって言ったしな」

「だが！！……つらかっただろ？」

「まぁね。みんな軽蔑した？この男に騙されて、こんな化け物と一緒にいたなんて、って思った？」

「そんなことないよっ！！」

「思ってないっ！！」

「そんな訳あるはずがない！！」

三人が同時に言ったもんで何言ってるか全然分からない。

でも否定してくれてるのは分かった。

「俺はそれで救われてんだよ。香苗と沙鳥は孤独から救ってくれたって思ってるみたいだけど、俺も三人に救われてんだよ。ありがとな」

ついに泣いてしまった。

アンは耐えてるけどギリギリってところか。

「あ、ああっ、ううっ……ひくっひくっ、あぁ、あぁ……」

「……ひっ、あっ、あうっ……ぐずっ、なづやぁ……ひくっ」

香苗と沙鳥は最早言葉になってない。

俺は頭を撫でてやる。

「アンはいいのか？」

「大丈夫だ、私が聞いたんだから泣きはしない」

「そう？」

そっか、ならしょうがない。
俺は香苗と沙鳥を抱き締める。
「なぁっ!?」
アンが叫ぶ。
二人は泣いててそれどころじゃないようだ。
「ほ〜ら、泣かなくていいからな」
アンを見て、からかうように二人を慰める。
「夏哉、何してる?」
アンが狐につままれたような顔をしてる。
「だって俺が話を聞かせちゃったから泣いちゃったんだよ?俺が慰めなきゃ」
「じゃ、じゃあ私にも!」
「え?お前は泣いてないんだから別に慰める必要ないだろ?」
「そんな……」
もしかしたら泣くかな。
ここで俺は釘を刺す。

「アンは泣かないんだよな？偉い偉い」

「あ、あうぅ……」

完全にうなだれてしまった。

今の泣きそうは傷ついた泣きそうではなくなったのでひとまずは安心だ。

さて問題は……

腕のなかにいる少女たちを見る。

未だに泣いている。

これも自業自得といったらそうなんだけどね。

「さて、どうすっかな～」

後書きという名の雑談？

？？「どうも皆さんお久しぶり、というのが合ってますかね？樋口夕馬です」

？？「みんな久しぶりっ！今回後書きに参加することになった源快斗だ。よろしくな」

？？「二人ともいつ出てきたか言わないと分かんないでしょ？二人は第二話《三章》《四章》で出てきた地味の夕馬とイケメンの快斗。わたしは初めましてだね。長嶋千佳音、二人の幼馴染みやってるよ」

夏哉＆amp;香苗＆amp;沙鳥＆amp;アン＆amp;真樹「「「「「「ちょっと待てー！！！！！！！！！」」」」」」

夕馬「それで謝らないといけないことが――」

夏「待てよおい夕馬！お前なに後書きに出てきてんだよ！？」

夕「落ち着いて夏哉、僕たちまだ本編では仲良くなってないよ」

夏「そんなん知るかァ！！それより説明しやがれ！」

作者「それは俺が説明しよう」

沙「作者？」

作「あのね～、俺スピンオフやるって言ったじゃん？」

香「うん」

作「樋口夕馬が主人公です」

夏＆ａｍｐ；香＆ａｍｐ；沙＆ａｍｐ；ア＆ａｍｐ；真「「「「「ええぇぇぇぇっ！！！！！？？？？？」」」」」

夕「よろしくお願いします」

沙「なんで樋口君なの？」

作「とりあえず待て。まずスピンオフの内容はラブコメだ」

香「だったら、その……（チラチラ）」

夕「ん、別になに言ってもいいですよ。気にしませんし」

香「あ、その……顔が地味だし……その、源さんの方がいいんじゃ……ゴメンナサイ！」

夕「いいですよ、本当のことです。それにこういうのはこいつが適任ですしね」

快斗「はぁ？なんだよ適任って。ラブコメなんて俺が一番縁のないやつじゃん」

夏「ちょっと待て！その顔でそれはないんじゃないの！？」

快「いやいや、俺なんて周りに女子って言ったら千佳音ぐらいしかいないし、他はずっと遠巻きで見てるだけだぞ？夕馬なんていつも

女子から呼ばれてるし」

夏「うそー！？」

千「あー、それわたしが説明するからちょいきて」

真「千佳音さん、でしたわね？あの人が言ってることは嘘なのですか？」

千「いや、まぁ、ん～、嘘ではないんだよね～。あんたたちラブコメ漫画読んだことある？」

夏「ある」

香「ちょっとだけなら」

沙「あるよ～」

ア「ん～、ないな」

真「ありませんわ」

千「分からない人がいるか～。えっとまず、あいつは顔もいいし性格も優しいから女子にはモテるわけ」

夏「でしょうね～」

千「でも、本当にかっこいいから近寄りがたいってみんな思ってるわけ」

ア「なるほどな、だから遠巻き見てたんだな」

千「そ。でもあいつ超がつくほど鈍感で、それこそ漫画の主人公と同じくらいな訳」

夏&香&沙「あ～……」

ア「それは、そんなに酷いのか？」

夏「ん～そうだな……例えばいっぱい抱きついたり自分のためにご飯を作ってくれたりしても友達としか思わないって感じ？」

ア「それは……」

真「ちょっとオーバーすぎません？」

千「いや、そんな感じだよ」

ア&真「うそっ！？」

千「一番酷いときなんか、相手が勇気振り絞って告白してきたのに、『俺も好きだよ、友達として』って言ったんだよ？そんときはわたしと夕馬でボコッたけど」

夏「ないわ～」

ア「夏哉は違うよな？」

夏「大丈夫です、三人とも俺のことが好きなのは知ってます」

香「それであの、樋口さんのことは……」

千「それはね、さっき言った通りみんな快斗に近づかないわけだ。でも快斗のことは知りたい。じゃあどうやって快斗の情報を詳しく知るか」

ア「……夕馬か」

千「そういうこと。ことあるごとに夕馬を呼び出しては快斗の情報を聞き出してるらしいよ」

真「それはちょっと、不憫ですわね……」

千「まぁそんな訳で全部快斗の勘違いってこと」

夏「うん、どっからどう見ても主人公だな。夕馬が言った適任ってこともよく分かった」

沙「じゃあ話が終わったから戻ろっか」

作「おわった〜？」

夏「ん〜。なにそのトランプ？」

作「俺の計らいで交流会をと思ってな」

ア「それは嬉しいが、なんかあるのか？というかゲームは何をするのだ？」

作「とりあえずやってもらうのは一回勝負の大富豪。でも普通にや

ってもつまらんから大富豪になったら大貧民に罰ゲームとして言うことをひとつ聞いてもらうってので」

沙「面白そうだね！じゃあ早速やってみよう！」

真「アンさんはルール分かりますの？」

ア「大丈夫だ、夏哉に教えてもらった」

快「じゃあ開始！」

作「じゃあみんながやってる間適当に間繋ぎまーす。最初に謝らなければならないことが。誤字脱字が多くて申し訳ありませんでした！ほんと気を付けてると思ってたんですがね、探してたらいっぱいありました。出来ればそういう報告をしてくれたら嬉しいです。是非教えてねっ！

はい次に夕馬を主人公にした理由は、普通かっこよくて鈍感な少年がやるところ、あえて地味なやつがやるって言うのが面白いんじゃね？って思ったんです。ちなみに全くモテません。これは夕馬がモテるのではなく親友の快斗がどうなっていくかを夕馬視点で書いていく小説です。まぁ夕馬も恋愛はしてくと思いますけどね。

ま、こんな感じでいっか。これ以上やると後がなくなるしな。裏技の時間短縮～」

――――二十分後――――

沙「あー、負けたぁ！！」

快「んじゃ夕馬、どうするんだ～」

夕「えーっと……」

真「（ギロッ）」

夕「（どうしようかな？ここで選択肢を間違えると早乙女さんに殺されるだろうな。なにかないかな？……）」

夏「まだ決まんないのか？」

夕「ん～……うん、あれにしよ。ちょっと作者と話してきます」

沙「え、なんで？」

夕「まぁ色々と」

夕「じゃあ罰ゲームですけど」

沙「痛くしないでね？」

真「安心してください、そんなことしたら殺しますから」

夕「大丈夫ですって。はい天雲さん、この猫耳と尻尾をつけて語尾

に？ニャー？とつけてください」

沙「えぇっ！？恥ずっ！樋口くんってそんな趣味あったの？」

夕「そういう意味ではなくて、これが一番安全だと」

沙「安全？」

夕「詳しくは聞かないで下さい。それよりも早く」

沙「あぁはい」

夕「つけましたね？じゃあ三、二、一、はい」

沙「これでいいかニャー？」

夏＆ａｍｐ；香＆ａｍｐ；ア＆ａｍｐ；真＆ａｍｐ；快＆ａｍｐ；

千「「「「「うわぁぁぁぁぁ〜」」」」」

沙「え、これ、ダメだったかニャ？」

夏「沙鳥！出来ればですますでお願いしますッ！！」

沙「え？ですます？えっと、これでいいですかニャ？」

夏「ありがとうございますッ！！」

沙「なんで夏哉は敬語なんですかニャ？」

香「沙鳥ちゃん凄く可愛い！」

真「ちょっと香苗！お退きなさい！邪魔ですわよ！」

香「だってぇ～」

沙「二人とも喧嘩しちゃダメですニャー！」

香＆amp;真「「はうっ！！」」

ア「さとり～♪」

沙「ア、アンちゃん！？ちょっとそんなに抱きつかにゃいでニャー！」

ア「あぁ！凄くいいぞ沙鳥！もうダメだ！ずっと抱きつきたい！！」

沙「それは勘弁してくれニャー！！」

千「夕馬、あんたさすがだね」

夕「実は僕もここまでになるとは思わなかった」

千「猫好きだった？わたし気付かなかったけど」

夕「そうじゃなくてさ、変な罰ゲームだったら早乙女さんに殺されるって思ったから何にしようか考えて、そしたらコスプレが思い付いて、猫なら耳と尻尾つけるだけだから簡単かなって思ったんだよ」

快「なるほどな。実は俺、もっと仲良くなってたらあそこに加わってたかもしれない」

千「わたしも。あれは天雲さんのファンに見せたら気絶しちゃうんじゃない？」

作「かもしれないな」

快「うおっ！？作者いたのか？」

作「どうせ今回影薄いよ～だ」

夕「これって後書き関係ないよね？」

作「急に話変わったな。まぁ関係ないけどあれだ、ちゃんと雑談って書いてあるんだからいいんだよ」

千「そういうもの？」

作「そういうものなの。さて、話を進めないと。おーい、魔法使い組～プロフィール紹介まだやってなかったから今からするぞ。来いや」

夏＆amp;香＆amp;ア＆amp;真「「「「やだ」」」」

作「あっそ、なら勝手にやってるわ」

柊夏哉（ひいらぎなつや）
１５歳
身長１４２ｃｍ
体重９７ｋｇ

たんじｙ

夏「まてまてまてッ！！」

作「どうした？」

夏「どう考えてもおかしいだろ！？なんだよ１４２ｃｍって、ちっちゃすぎるだろ！！９７ｋｇ！？どんだけデブなんだよ俺！？」

作「だって勝手にやっていいって言ったから」

夏「分かった！分かったから自分でやる！」

柊夏哉（ひいらぎなつや）
１５歳
身長：１７４ｃｍ
体重：６５ｋｇ
誕生日：８月５日
好きなもの：海、マンガ、鰻丼
嫌いなもの：勉強、冬の寒さ、台所によく出る黒いあいつ
特徴：かっこよくもブサイクでもない。かといって可愛くもない普通の顔。
髪は普通の男子にしたらちょっと長めの黒髪。微妙にツンツンしてるけどぺったんともいえる中途半端な髪型。

夏「こんな感じだな」

作「つまんね」

夏「プロフィールに面白さ入れてどうする！？」

作「次は香苗」

香「自分でやります！」

花街香苗（はなまちかなえ）

１５歳

身長：１６２ｃｍ

体重：３９ｋｇ

ＢＷＨ：８７，５４，７５

夏「香苗ぇぇぇぇ！！」

香「な、なに？」

夏「嘘はいかんよ嘘は」

香「ナンノコト？」

夏「沙鳥、自分のプロフィール紹介しろ」

沙「分かりましたニャー」

天雲沙鳥（あまくもさとり）

１５歳

身長：１６７ｃｍ

体重：４２ｋｇ

ＢＷＨ：９１，５８，８２

誕生日：６月２１日

好きなもの：アニメ、マンガ、ゲーム、ラノベ

嫌いなもの：勉強、トマト（ケチャップはＯＫ）、お化け

特徴：美少女。近隣の町には天雲沙鳥と言う名前が知れ渡ってるほど。元気はつらつ！みたいな顔をしてる。
髪は黒髪のポニーテール。リボンをほどくと背中の半分くらいの長さ。

沙「これでいいですかニャ？」

夏「よ～し、良くできました～」

沙「ニャ～、なでなでいいニャ～」

香「うぅぅ～いいな～」

夏「それで香苗さん？」

香「ナンデショウ？」

夏「沙鳥と比べてどうでしょう」

香「沙鳥ちゃんスタイルいいね」

夏「そうじゃないよね？どう見ても鯖読みすぎだよね？１６２ｃｍ？沙鳥と比べて２０ｃｍは差があるよね？」

香「違うよ！身長差は１９ｃｍだよ！」

夏「そんなんどうでもいい！！それになんだ！？バスト８７！？嘘も分からない程度につきなさい！！」

香「大丈夫だよ、私たち姿は見えないんだから。みんな想像してる

だけなんだから」

夏「俺嘘つき嫌い！」

香「あぁぁぁゴメンナサイ！！ちゃんとやります！！」

花街香苗（はなまちかなえ）
１５歳
身長：１４８ｃｍ
体重：３９ｋｇ
ＢＷＨ：７２，５４，７５
誕生日：１１月６日
好きなもの：猫、お寿司
嫌いなもの：高いところ、
自分が幼児体型なこと
特徴：美少女。でもちっちゃい。すごいロリロリ。人見知りのイメージを与える顔。
髪はショートの茶髪。だいたい肩にかかるかかからないか程度。

香「これでいい？」

夏「いいけどさ、猫好きなの？」

香「好きだよ～。ね～アンさん？」

ア「あぁ、猫は正義だ！」

香「猫は正義～！」

沙「二人はダメだニャ」

夏「しょうがねぇ、真樹。次頼むわ」

真「なんでわたくしが紹介しないといけないんですの？プライバシーの侵害に当たりますわ」

夏「沙鳥」

沙「真樹、私真樹のこと知りたいの。お願い、教えて」

真「沙鳥様……！分かりました、すぐに教えますわ！！」

早乙女真樹（さおとめまき）

１５歳

身長：１６１ｃｍ

体重：４３ｋｇ

ＢＷＨ：８２，５５，７９

誕生日：８月３日

好きなもの：沙鳥様！！

嫌いなもの：蜘蛛、百足、炭酸

特徴：ちょっとつり目だけど美少女。お嬢様って感じがするけど実際お嬢様。

髪型は金髪縦巻きロール、ではなく桜色のストレート。長さは腰の辺り。

真「これくらいでまとめましたがどうでしょう沙鳥様！？」

沙「真樹ありがとうですニャー」

真「はうぅっ！沙鳥様ぁ！」

夏「ふぅっ、じゃあ最後はアンだな」

ア「あぁ、分かった」

アン（クーレラ）
身長：??
体重：??
ＢＷＨ：??
誕生日：４月２８日（にしとこう）
好きなもの：猫、親子丼、炒飯
嫌いなもの：魔界
特徴：魔界から来た異世界人。なのでいろんな姿に変えることができる。

夏「ちょっと待てーッ！！」

ア「なんだ？おかしいところがあるか？」

夏「あるだろ！プロフィールなのに？はないだろ！」

ア「しょうがなかろう、一定して体をとどめてないし」

夏「どう言うこと？」

ア「夏哉の好みの体がどんなのかを探ってるからな」

香＆ａｍｐ；沙「「えぇっ！？」」

夏「そうだったんだ……」

香「ずるいよねそれ……」

沙「ニャー、一緒に暮らして好きな体に変えられるしニャー」

ア「私は私のできることをしているだけだ」

香&沙「「うぅぅ～」」

夕「作者、僕たちのプロフィールはどうするの？」

作「こっちは四人の魔法使いだから、お前らは自分の小説で書く」

快「そういや小説の名前は？」

作「『その想いは変わりますか？』にする」

千「意味は？」

作「後々に関わってくるから言わない」

真「作者、他には何をするんですの？」

作「もうおわり。沙鳥ー、猫耳取っていいよー」

沙「は～い」

夏＆ａｍｐ；香＆ａｍｐ；ア＆ａｍｐ；真＆ａｍｐ；快＆ａｍｐ；千「「「「「……………………」」」」」

沙「あからさまにがっかりしないでよ……」

作「あぁ、ひとつ忘れてた。次は夕馬たちの方書くんで」

夕「皆さん、拙い文でしかも誤字脱字が多い小説ですが、これからも見てください。感想、意見などは受け付けてますので言いたいことがあったら是非どうぞ」

作「それでは皆さん、またね～」

第三話　《プロローグ》持つべきものは友（前書き）

ほんと申し訳ありませんでしたっ！！

私の確認不足で矛盾、というか間違いを一部書いてしまいました。

ここに、間違いを直すことを誓います！！

第三話　《プロローグ》持つべきものは友

五月二日、午前九時。
俺とアンは町の商店街で買い物と町案内（一部）をしていた。
この商店街は休み中とあってかかなりの人でごった返している。
ここでは一通りのものが手に入る。
食料、衣服、家具に日用品、電化製品も取り扱っている。

「夏哉、今日は何を作ってくれるんだ？」

そんな中、アンが目をキラキラさせて俺に聞いてくる。
一応町案内のつもりなんだけど、周りには目もくれていない。
ほんとに地球食（？）が好きになったようだ。

さて今日は何作ろう。
買い物に来たけど何買うかは決めてない。
自分だけのを買うなら適当でいいけど、アンがいるとなると考える。
男と女な訳だし、もっと言っちゃえば人間と魔族だ。
差別する訳じゃないけど、やっぱり勝手が違う。

うんうん唸ってるとアンがムスッとした声で俺に呼び掛ける。

「夏哉、聞いてるのか？」

おぉそうだった。
つい考えに夢中になってしまった。

俺はポッケから携帯を取り出して耳に当てる。

「おい夏哉！今私が話しかけてるんだぞ！」

「もしもし、アン？」

「は？」

突然の俺の行動にアンは意味が不明といった顔をしてる。

「お前俺しか声聞こえないだろ？こうしてりゃ自然なの」

「あ、そうか。怒鳴って済まなかった」

「いいよ。んで、今日の飯なんだけど、まだ決まってないんだよな。お前の好みとかよく分からないし」

「いや、そこは夏哉の好きなものにしてくれ」

「ん～、じゃあ……麻婆豆腐でいくか」

「まーぼーどーふ？」

「見てのお楽しみだな」

それから、魔界の食べ物などを話しながら必要になるだろう食べ物やアンの日用品を買っていく。

といってもアンに買うものは少なかったけど。

服はイメージで作れるし、買って着たとしても服が浮いてるようにしか見えないしな。

一通り買った俺たちは、商店街を散策してた。
まだゴールデンウィークはあるので、気長に案内するつもりだ。

「何か見たいものある？つっても何あるか分かんないよな」

「そうだな……正直こういうところは私はあまり使用しないしな」

「今度みんなで遊園地かどっか行くか」

「ゆ―えんち？」

「みんなで遊べる場所だ。結構楽しいと思うぞ」

「それは楽しみだな。皆とは沙鳥と香苗か？」

「まぁね。お、夕馬じゃん。アン、これからちょっと知り合いと挨拶するから話掛けられねーや」

「分かった」

アンの返事を聞くと、少し小走りで走っていった。

「夕馬ー」

「あ、夏哉。買い物？」

樋口夕馬（ひぐちゆうま）、俺の数少ない友達だ。

いつも無表情で何考えてるか分かんないけど、胡散臭いとかそういう変なイメージは受けない。

「ん、食料とか日用品とか」

「ちょっと意外だったかな。料理作れないからカップラーメン食べてそうなイメージだった」

「勝手に変なイメージつけるな。お前も食い物？」

「まぁね。僕は趣味とかそういうのがないから食料しか買うものがないんだ。それにしても、その量多くない？重そうなのに平気？」

夕馬は俺が手に持っているエコバッグ（大）四つを指差して言う。

今までだったら汗だらだらで持ってたかもしれないけど、幸か不幸か、また過去の力が着実に戻ってきちゃってるのでこのくらい余裕だ。

「だーいじょうぶだいじょうぶ。俺こう見えても筋力あるから」

「そうなの？料理作る以上に意外だった」

「かなり失礼だな。お前よりは力あるって自負してるけど？」

今の俺なら細い夕馬だけじゃなく、少なくとも校内で上位の成績はとれると思う。

「そりゃあそうだよ。僕の力なんて微々たるものだし。お詫びといってはなんだけど、これあげるよ」

夕馬は財布を取り出し、中から紙を三枚出して俺に差し出してくる。

「麦谷、福引券？」

今まで黙っていてくれたアンが紙に書いてある言葉を呟いた。

この福引券はゴールデンウィーク中に四枚集めるごとに一回、よくあるあのガラガラを回して商品ゲットできるというどこの商店街にもあるやつだ。

俺はその福引券を五枚持ってる。

「いいんか？あと一枚じゃん」

「僕はもう買い物はしないんで平気。こういうのは使う人が使えばいいの」

「お前ほんっと欲ねーな」

「ちゃんとあるさ。衣食住、昼寝」

「……え、それだけ！？」

「当然彼女もほしいよ」

「いやさ、まぁそれも欲なんだけどさ、なんつーの？基本的すぎない？ゲームぅとか旅行ぉとかそういうの」

「ないねー。でも嫌いって訳じゃないよ。誘われたら普通にやるし、それなりに楽しめるよ」

「あっそうかい。じゃあお前がいいって言うんならもらうけどいいんだな？」

「うん、どうぞ」

俺は夕馬の手にある福引券を取り、それを財布にしまう。

「さんきゅ。じゃあ早速ガラガラやりに行ってくるわ。じゃあな」

「じゃあまた四日後」

俺らは軽く手を挙げそれぞれすれ違った。

一度振り返り、夕馬が人混みで見えなくなるのを見計らって携帯を取り出す。

「アン悪かったな、長引いて。もういいぞ」

「分かった。夏哉、今の話を聞いて行きたいところが思い付いた」

「福引き？」

「名前は分からんが、その券で何をするか見てみたい。夏哉は持っているのか？」

「五枚ほど。ってお前見てなかったかな？」

「多分だが、そういうのは買い物が済んだあとにもらえるのだろ？」

「そうだけど？」

「その時は夏哉が女と喋ってて気に食わなかったからそっぽ向いてた」

女の人女の人。

たぶん店員さんのこと言ってんのか。

最後と言うことはレジ係かな。

「……あの人たちはただ仕事で話してるだけだから。義務でしょうがなく話してるだけだからいたずらとかするなよ」

「何！？あやつらは夏哉と仕方なく話していただとっ！？許せん！夏哉と話せるだけで幸せだというのに、それを仕方なく話しているなど言語道断！！夏哉、ちょっと待っていろ。すぐにあやつらの息の根を止めてやる」

「ちょぉっと待て！！」

つい叫んでしまった。

まずいと思って周りを見ると、数人がこっちを見てただけだ。

他は聞いてないのか聞こえない振りをしてるのか、見向きもしない。

まぁよかったわ、ここがこんなに賑わってて助かった。

さてあと問題はアンだ。

どうにか止めないと大惨事になってしまう。

俺はとっさに一言声をかけた。

「飯！！」

「ん、なんだ？」

「俺から離れると今日飯食わせない」

「それは嫌だ！！わかった！もう離れない！一生側にいる！！」

これでなんとか人殺しは回避できた。

俺は無意識にため息をつく。

でもあれ？

俺とんでもないこと言った？

俺アンから離れられない？

更なる苦悩に誘われそうになるが、もう諦めて考えをやめる。

今は福引きのことを考えよう。

「じゃあ福引きこれから行くぞ」

「わかった」

「おめでとうございます～！！」

おじさんが手に持ってたベルをカランカランとならす。
最初、その意味が理解できなかった。
言ってることは聞こえたけど、ついそれを疑ってしまう。
唖然としていた頭を回転させて、今の状況を口に出す。
「いっとう、とうせん？」
「はい、一等大当たりで～す！じゃあこれ、二泊三日温泉宿泊券、ペア一組二枚です」
差し出された二枚のその紙を手に取る。
それは冗談抜きに宿泊券だった。
「やべ、二回で当てちゃったよ……」
俺は計八枚あったのでそれを全部使い（当然か）、二回ガラガラを回したわけです。
一回目は残念賞でティッシュひとつ。
まぁこんなもんだろうなと、諦め半分で二回目を回してみたらどうよ。
なんと金色の球が出て一等ゲットダゼ！
……俺こんな運よかったっけ？
後ろの順番待ちの人たちから、『え、一等当たっちゃったの？』『チッ、あーやられた』『おーすげぇすげぇ』等の声が聞こえた。
微妙に居づらかったのでそそくさと寮に戻ることにした。
ほんと持つべきものは友だな。

「夏哉、まだ話してくれないか？」

アンが寂しそうな声で俺に呼び掛ける。
そんな声をされたら俺が悪いみたいじゃないか。
チャッチャと携帯を出して耳に当てる。

「ゴメンゴメン。なんか用あった？」

「さっきもらった紙はなんだ？」

「あれは……簡単に言えば遠くに遊びに行けるためのチケットかな？」

「遊び？楽しそうだな」

「じゃあ明日辺り行くか」

「行く行くっ！！」

「よし、これで明日からの予定は決まった、と。あとは四人だから香苗と沙鳥誘って……あと一人は……」

「おい夏哉！あと一人は私だろっ！」

「安心しなさい。アンは誰にも見えないから四人のうちには入らな

い。ちゃんと一緒に行けるよ」

「そうか、よかった」

というかお前をおいていくわけがない、とは言わない。
だって恥ずかしいじゃん。

さてあと一人は……

「やっぱ夕馬か」

福引券をくれた本人しかいないでしょ。
旅行嫌いって言ってはなかったし。

早速誘おうとしたけど、重大なことに気付いた。

夕馬の電話番号とメアド、しかも寮の番号すら知らない。

つまり連絡方法なし。

やっちまったなおい。
なんでメアドとか交換しなかったんだろ？
俺のバカ。

でも連絡が取れないならしょうがない。
諦めて他の人がいないか考えていた。

けどダメだ、俺には友達が少なすぎる。
どうしようもないからあと二人に任せよう。

「なぁなぁ、もしかしたらお前の知らないやつが一緒になるかもしれないけどいいか？」

「ん、私は構わないぞ」

あれ、意外。
こいつのことだから、知らないやつとは居づらくなるんだと思ってた。

「いいの？もしかしたら女子かもしれないぞ？」

「夏哉、私も考えがあるんだ。誰かが来たとして、そいつは私が見えない。だから私が何をしても分からない。ということは私が夏哉に抱きついたとき、香苗と沙鳥は私を注意すればその誰かは二人を奇異の目で見ることになるから注意できない。つまり私は何をしても構わないと言うことだ」

「な、なるほどねぇ……」

なんかアンが腹黒くなってるわ。

「えっと、じゃあさアン、今から沙鳥のとこ行って温泉旅行行けるか聞いてきてくんない？チケット渡すから」

「あぁいいぞ」

「って、もしチケットお前に渡したらどうなるんだ？」

「詳しくはよく分からんが、服にしまえば平気らしい」

「へぇ、ならいいや。じゃあよろしくな」

「分かった。昼までには帰ってくるからまーぼーどーふをつくって待ってろ」

「りょーかい。沙鳥に誰か誘える人がいたら誘えって言っといてね」

「分かった」

誰にも見られないようにこっそりチケットを渡し、アンは空に飛んでいった。

そういや香苗と沙鳥がＯＫしてくれるかも分かんないんだよな。

計画性無さすぎ。

せめてどっちかは来てくれたら嬉しいな。

そう思いながら携帯を開き香苗に電話をする。

第三話　《プロローグ》持つべきものは友（後書き）

作者「どうも、投稿を待っていてスピンオフを読んでない人には六日ぶり。スピンオフを読んでる人は三日ぶりです」

香苗「今回私全然でなかった……」

真樹「わたくしなんてこの前も、その前も出ていませんわよ……」

香「あ、ごめん……」

真「いいですわよもう、諦めてますわ」

作「諦めてるんなら次出さなく――」

真「ふざけるな!!さっさとわたしを出せッ!!」

香「え、真樹ちゃんっ!?」

作「またか!?またアン化したのかッ!?」

真「黙れ、四の五の言わずに出せ!!」

作「アンどころかもう不良になっちゃった!!」

真「ぁ……、作者、早く私を出しなさい。次は出るんでしょうね?」

香「真樹ちゃんが帰ってきた～!お帰り真樹ちゃん」

真「え、あ、た、ただいま。すみません、取り乱して」

作「ちなみに出番はお前たち次第だよ」

香「え、どういうこと？」

作「お前たちの選択肢ですべてが決まるってこと」

真「選択肢とはなんですの？」

作「まず香苗、明日（五月三日）から明明後日（五月五日）まで暇ですか？」

香「えっと、宿題も終わったしやることもないから暇だよ」

作「じゃあ二つ目、夏哉の旅行の誘いを受け――」

香「受けます、受けます！受けさせてもらいます！！」

真「さすが早いですわね」

作「はいじゃあ決定。次は真樹」

真「わたくしは暇ですわ」

作「そうじゃなくて、沙鳥とメアドまたは電話番号交換した？」

真「誰がそんな恐れ多いことを」

作「じゃあ出れねぇぞ」

真「な、なんでですの！？」

作「お前は沙鳥に誘われるか誘われないかという状況にある。それなのに電話番号もメアドも知らなかったら連絡の取り様がないでしょ？」

真「今から行ってきますわっ！！」

香「あ、行っちゃった」

作「じゃあ香苗はまとめを」

香「皆さんいつも見てくれてありがとうございます。もしよかったら指南などをよろしくお願いします。次はスピンオフを書くと思いますので、こっちを読んでる人は待っててください。それではまた今度」

真「こ、交換してきま……誰もいない！？」

第三話　《一章》車内での説明

「みんな早っ。切符買った？」

俺が最寄りの駅に到着すると、香苗、沙鳥、アン、真樹の四人が立って待っていた。

一人だけ浮いてるし、他の人には見えてないけど。

ちなみに俺は遅刻はしてないよ。

ちゃんと五分前に到着したよ。

この四人が早いだけだよ。

あ、どうして寮で暮らしてる香苗やアンと一緒に来なかったのかと言うと、沙鳥が『三人だけで一緒にいるのはずるいから別々に集合！』というメールが送られてきたからだ。

「おはよう夏哉君」

「おっは～」

「遅いですわ。女性を待たすなんて最低な男ですわね」

「ん、流れ的に私もやるのか。おはよう夏哉」

本日二回目のアンとの挨拶をした。

それでまず、どうして辛口お嬢様こと、早乙女真樹がいるかというと、沙鳥が誘ったからです。

俺的にはその選択は嬉しかった。

真樹はアンが知ってる数少ない人物の一人だ。
知り合いというわけではないけど、全く面識のない人物と二泊三日を過ごすのはつらいと思う。

「申し訳ございませんお嬢様。お詫びに荷物をお持ちします。でいいか？」

「貴方、もしかして私のところに執事でもいると思ってますの？」

「あれ？いなかったの？」

金持ちお嬢様だからいて当然だと思ってたんだけど。

「いませんわよ。漫画の読みすぎですわ」

「あれそうなの？まぁ偏見だったわな、わり」

「別に怒ってるというわけではありませんけど。いつものことですわ」

なんか真樹も大変そうなんだな。
これもお嬢様ならではの悩みというやつか。

「それで切符は買ったの？」

「買いましたわ。後は貴方だけ。貴方こそチケットを忘れてませんわよね？」

「当然」

そう言いつつ、ちゃんと持ってきたよな？という不安に押し潰されそうになってるのは秘密。
その不安を取り除くために、財布の中にしまっておいたチケットを出す。

「ホレちゃんとあるぞ。後一枚は沙鳥が持ってるけど……沙鳥？」

沙鳥の方を向くと本人はちょっと落ち込んでた。

理由を聞こうと真樹に話しかけようとしたとき、視界に一瞬影のようなものが映り、なんだろうと思いながらも無視して振り替えると、真樹はいなかった。
どこ言ったのかとキョロキョロ見回すと、すぐ見つかった。

真樹は沙鳥のところにいた。

なるほど、さっきの影は真樹だったのか。

感心しながら沙鳥がどうして落ち込んでるのか考えた。

1．俺が他の女子（真樹）と話してたから。

2．挨拶したのに俺が返事しなかったから。

3．占いの結果が最悪だったから。

4．見たい深夜アニメの録画を忘れたから。

……4番が高確率のような気がする。
他のもなくはないけど、1番2番の場合は落ち込むというよりはや

ーやー文句を垂らすと思うし、3番の場合は気にしないはずだ。
答え合わせをするために聞こうとした。
しかし、それは沙鳥の一言によって遮られた。

「真樹、執事いなかったんだ」

ズコォッ！

心でズッコケました。
執事かよッ！？
まぁこいつならそんなこと考えても不思議じゃないな。

でもこれはみんなズッコケるよね？
ほら、香苗だって呆れてるし、アンは……何が起きてるか分かってないな。
真樹に至っては……あれ？今度はこいつが落ち込んでる！？

「申し訳ありません沙鳥様！すぐに執事を雇いますわっ！」

そう言って真樹は携帯を出し電話を……

「ちょっと真樹！マジで電話するなッ！」

「何を言ってるんですの！？沙鳥様がわたくしのせいで落ち込んで

いるのですよ！わたくしがなんとかしなければ！！」

「だったらそれは今はやめてくれ！！そして沙鳥は嬉しそうな顔するなッ！！」

俺は必死こいてツッコミをする。

ちょっと怖いのは、この二人がボケじゃなく素で言ってることだ。

だから俺がツッコんだら笑うでなく、本気で落ち込んだり怒ったりするから困る。

助けを求めようと、香苗を見てみたら、携帯片手にアンと世間話してた。

他人のふりしやがって！

ピロピロピロリ～

ホームから電車到着の音楽が鳴った。

「ふぅ、やっと時間……やば、切符買ってねぇ！」

俺は急いで切符を買い、ホームを駆け巡った。

俺たちが乗る電車から先に乗ってた香苗が手招きをしてたので、みんなを探す手間が省けた。

電車に乗り、四人ボックスに腰を掛けようとしたけど、そこで一悶着あった。

誰が俺の隣に座るかだ。

はっきり言って俺と真樹の席は決まってた。

真樹は沙鳥の前か隣で、窓際がいいと言ったので即座に着席。
俺はその対角線に座ろうとしたけど、そうすると俺の隣の人が座れなくなるので待機。

香苗と沙鳥は結局じゃんけんをして決めることにした。
結果は香苗の勝ち。
香苗は俺の隣に座り、前は沙鳥になった。

四人落ち着いたところで、ひとつ気付いた。

アンをどうしよう。

アンは見えないからどっかの席に座らすってことはできないし、だからといってずっと立ちっぱ、いや、浮きっぱにさせるのも忍びない。

真樹に聞こえないようにアンに話しかける。

「アン、ずっと浮きっぱになりそうなんだけど、疲れないか？」

「そうだな～……。あ、いいこと思い付いた」

そういうとアンは座りだした。

俺の膝の上に。

「んぬ――！」

「ほら叫ぶな。周りに迷惑がかかるぞ」

つい叫びそうになったけど、ギリギリアンが手で口を塞いだ。
迷惑になるって分かってはいたけど、いきなりそんなことを思春期の男子にしてきたら驚いて叫ばずにはいられないだろう。

「「あぁぁぁっ!?」」

そんな俺の叫びの意味とは違う叫びが二方向から聞こえた。

「ちょっと何してるの!?」

「アンちゃんどいて!」

それは言わずもがな、香苗と沙鳥のものだった。
意味としては嫉妬だろう。

気持ちは分からなくはないし、大元の原因は俺のせいだからあまり強くは言えない。
でもだからといって他の乗客に迷惑をかけてはいけない。

「おいふ――」

「だが私に座る場所がないし、夏哉が浮きっぱは疲れるだろうと心配してくれたんだ。それを無くすためにはこれしかないだろう」

アンに遮られた上に、火に油を注がれた。

これ以上騒がれたらまずいのでどうしたもんかと考えていたら、救世主が現れた。

「あの二人とも、何を騒がれているのです?」

真樹が話に割り込んできた。

真樹の声を聞くと二人は気まずい顔になり、鼻をならし勝ち誇った雰囲気をまとってる（俺には表情がうかがえない）。

「それに？アンちゃん？とはなんですか？」

香苗と沙鳥がどうにかして言い訳を考えていたのだが、結局思い付かなかったのか俺に視線を送る。

つーか香苗、お前頭良かったんじゃなかったのか？

ひとつため息をついて、どうするか考えた。

考えて出てきた答えはひとつだけだった。

「あのさ、信じられんかもしれないけど、ここに目に見えない少女がいます」

アンを指差して正直に言うことにしました。

その結果、香苗と沙鳥は驚きの表情で『え、言っちゃったけどいいの？』的な視線を送ってきて、アンは『おい、私は美少女だ』と変なところで意地になり、真樹は意味が分からないと言った顔だ。

「はぁ？何を……ちょっと夏哉、それはタブーじゃありませんの？」

タブー、つまりそれは俺たちにとっては校外での魔法使用禁止のことだ。

麦谷高校に通ってるおかげで、そこに存在してることは疑ってないようだ。

その代わりにそこにいる人物が魔法を使ってステルス状態《透明人間》になってると思ってるらしい。

だから魔界とかそういうところは省いて説明する。

「いや、あれで隠れてるって訳じゃなくてさ、なんつーの……幽霊みたいなやつなんだよ」

「幽霊？」

「そう幽霊。こいつは誰にも見えないし、基本的には何も触れないんだよね」

「……基本的とは？」

「こいつに初めてあったときは触れなかったんだけど、今は自由ってこと。こいつが触りたいって思ったら触れるし、すり抜けたいと思ったらすり抜けられるし」

「本当にそんな生き物がいるんですの？」

「じゃあ手だしてみて」

真樹は言われた通りに手を差し出す。

「はいアン、握手」

アンは俺の言葉にうなずいて真樹の手を握る。

あ……、と真樹は驚きで声を漏らし、何度かアンの手をにぎにぎす

る。

「これ、本当に手みたいな感覚ですわ……」

「姿は人間と同じだから」

「……どうして貴方は見えるのですか？いや、話からすると沙鳥様と香苗もですか？」

「それは知らん。見えるもんは見えちゃうんだからしょうがない。今んところアンは俺ら三人にしか見えてないっぽい。あ、名前は片仮名でアン」

アンは、よろしく、とアンを認知することができない真樹に向かって挨拶した。

「その、アンという子は私たちの言葉は分かるのですか？」

「取り敢えず意味は理解できるし喋れるよ。読み書きは……どうなの？」

首をアンに向けて聞いてみる。

「多分できるぞ。少なくとも読みはできる」

「そんなことわたくしが知るわけがありませんわ」

俺はアンに聞いたはずなのに、真樹も答えてきて、それがほぼ同時だったのでどっちもなに言ってるか分かんなかった。

どうして真樹も答えた？

……あぁそっか、こいつアンが見えないから俺がアンに聞いたのを自分と勘違いしたのか、納得。
ほんとすいませんでした。

俺が考えてる内に隣にいる沙鳥が真樹に耳打ちをして、真樹の頬が薄紅色に染まっていく。
多分沙鳥が今の状況を教えてるんだろうな。
それで自分の勘違いに気付いた真樹が恥ずかしくなって赤くなったと、そういうことかな。

俺は聞き逃してしまったアンの解答をもう一度聞きだして、真樹に顔を向けた。

「真樹さん真樹さん、話の続きはいいですか？」

「え、ええ、構いませんわ」

まだ頬が少し赤い。

「読み書きは出来るってさ。あと高校で習ってるあれも出来る」

「あれって……」

真樹の顔が真剣になる。

「アンという子は何者なんですの？本当にこの世の生き物なんですか？」

その言葉を聞いたアンはピクッと反応し、震えだす。

多分拒絶され、畏怖されるのが怖いんだと思う。
俺はそっとアンの手を握る。
少し力を入れすぎたのか、アンは顔を歪ませ、握り返してくれた。
そして震えも止まった。

「真樹、悪いんだけどさ、アンを化け物扱いするのやめてほしいんだ。こいつも普通と違って気にしてるから」

「あ、いえ、わたくし、そんなつもりではなく……ごめんなさい」

真樹は俯き項垂れ、それを沙鳥が肩を抱いてあげる。
アンを見ると、大丈夫だ、と言って笑顔を見せた。
無理してる風ではない、ほんとに大丈夫なんだと思った。
それを真樹に言うと、真樹も若干顔が緩んだ。
これで一段落ついたと思ったとき、隣からボリュームの小さい声がした。

「それでアンさん、いつまで夏哉君の上に乗ってるんですか？」

「あ、香苗いたのか。あまりに小さかったので気付かなかった」

「アンさん！夏哉君みたいにいじらないで下さい！」

香苗は学んだのか、周りに迷惑がかからない程度の声で叫んだ。
端から見ると、急な香苗の一人芝居を見て真樹はどうしてるかと顔

を向けると沙鳥が一生懸命通訳をしていた。
それを聞いて真樹も微笑んだ。

もう暗い雰囲気はなくなったかなと思い、俺も香苗いじりに参加する。

「まぁまぁ香苗、しょうがないだろ。電車乗ってまだ三回くらいしか喋ってないだろ？だから影も薄くなって身長も縮んじゃうのさ」

「身長関係ないよ！それにもっと喋ってたよ！」

「ほぅ、それは本当かな？ちなみにじゃんけんは会話とはしません」

「えっ！？えっと、えっと……もうどうでもいい！」

「香苗、どうしてお前は沙鳥の方がしゃべってないとは言わないんだ？確か香苗と同じくらい会話に参加してないぞ」

「「え？」」

俺と香苗はつい声をあげてしまう。
通訳を聞いた真樹もそういえば、と沙鳥を見る。

電車乗ってからを思い出してみるものの、確かにあんまり喋ってない。

「あれ？おっかしいな」

「そういえば喋ってないよね？」

「……沙鳥様はきっと存在自体が偉大なので影が薄くなるということがないんですわ」

「「なるほど～」」

「えっ!?夏哉君と沙鳥ちゃん納得しちゃうの!?ということは私存在が偉大じゃないの?まぁ偉大じゃないけど」

「……おぉ、分かった!」

「分かったって何がだアン」

「その存在の偉大さとやらは胸の大きさで決まるのだ!」

「「んなっ!?」」

俺と香苗は恥ずかしくなって顔が熱くなる。
沙鳥から聞いた真樹も同様。

唯一変化なしは沙鳥のみ。

「なるほど～、それは一理あるかも。夏哉、私の胸存在感ある?」

沙鳥は両手ですくって強調してくる。
何がとは言わすな。

「なーばかばかばか、そんなん聞くな!」

「確かに胸はオスを引き付けるためにあるといいますし、大きければ大きいほど引き付けられるので存在が大きいとは言えますが……」

「そこ！何変なところで真剣に解説してるんだ！？」

「夏哉君、やっぱり胸が大きい子の方が好きなの？」

「いやいやいや！俺別に胸の大きさで決めてるわけないから！！」

「そうなのか？夏哉昨日私の９８ｃｍの胸を見てなかったか？」

「バッ、それ違――ッ！！」

「「夏哉くぅん」」

「待て待て待て落ち着け！あれにはちゃんとしたわけが！」

「なんですの？夏哉、アンさんが何を言ったのか教えなさい」

「言えるかァ！！って沙鳥いうな！！」

「……最低」

「だから誤解だっての！！」

俺はその誤解を解くために約一時間、ちょうど電車が目的地に到着するまでかかった。

第三話　《一章》車内での説明（後書き）

作者＆ａｍｐ;真樹「「沙鳥様ほんと申し訳ありませんでしたァァッ！！！！」」

沙鳥「え、ちょっな、何？何事？」

作「前回の後書きで真樹が沙鳥のところにメアド聞きに来たよね？」

沙「来た来た」

真「それで、あの、第一話十章の夏哉から電話が来るところを読んでほしいのですが……」

沙「いいけど……あ」

作「そうなんです。いったい何人が気付いたでしょうか。実際作者も忘れてました。あの時点で、実は沙鳥は真樹の電話番号を知ってました」

沙「あぁ……確かに電話来るとき『真樹、じゃないよね』とかって思ってたということは知ってるってことになっちゃうよね」

真「沙鳥様、本当に申し訳ありませんでした！！どのように謝罪すればいいのか……！！」

沙「えっと、えっと……じゃあそうだ！一話の頃は電話番号しか知らなくて、メアドは知らなかったということに！それで前回の後書きはメアドを聞きに来たってことにしよう！」

作「それだッ！それにしよう、そうしよう！はい、矛盾解決！！」

真「しかし！」

沙「真樹ももう終わり！気にしすぎちゃダメだよ」

真「は、はい……」

作「ほんと二人には迷惑かけたんで本編でなんとか償いをさせてもらいます」

真「……例えば？」

作「真樹視点で二人きり」

真「誰ですか！？誰と二人きりなのですか！？」

作「沙鳥に決まってるじゃん」

真「許します！許しますわ！！」

沙「私は？」

作「頑張って二人きりにします」

沙「やった～」

作「よ～し、なんとか済んだ～」

沙「じゃあ恒例のお礼コーナー！」

真「皆さんいつも見てくれてありがとうございますわ。次の投稿は多分六日後だと思いますわ」

沙「それじゃあまたね～」

第三話　《二章》干渉の条件

目的の駅に到着した俺たち。

守志那町（かみしなちょう）、ここに目的の温泉宿がある。

ここはどちらかと言うと田舎に分類される町で、辺りを見渡すと木々や山が多い。

だからといって建物が少ないわけではなく、駅周辺にはたくさんの店が軒連なっており、遠くにはいくつかの高層建築物が建てられている。

今回俺たちが向かう矢田染（やたぞめ）温泉はそこそこ名の知れたところで、テレビで取り上げられるころも多々ある。

そのため、ここは観光町ということにもなっている。

駅で俺たちはこれからについてを相談していた。

「ん～、時間的にはどっかで昼飯食うか？」

時刻は十一時四十二分。

この案がベターだと思う。

「私賛成かな」

「私も～」

「構わんぞ」

香苗、沙鳥、アンの三人が同意する中、真樹は考える素振りを見せ

る。

「どうした？飯より行きたいとこあるんか？」

「いえ、そういうことではなく、昼食はいいのですが、アンさんはどうするんですの？というか食べられますの？」

あ、忘れてた。

アンは誰にも見えないんだった。

今まで家で昼飯食ってたから深く考えてなかった。

「飯自体は食べられるんだけど……アンは腹ペコか？」

「我慢はできるが……空腹は覚えてる」

「やっぱそうなるよな～。……まぁバレないように食わすわ」

「済まん……」

「気にすんな」

アンが落ち込んでるところをなだめる。

「えっと、じゃあ何食べよっか？」

「ファミレスでいいんじゃない？」

香苗の問いに沙鳥が答える。

「ＯＫ～」

「わたくしも構いませんわ」

俺と真樹も同意する。

が、アンはちょっと違った。

「ふぁみれすってなんだ？」

まぁアンが知らなくても無理はないわな。

「ファミレスってのはな、金払うと飯出してくれるところだ。俺よりうまいの出してくれるぞ」

「ほんとっ！？じゃあすぐ行こう！」

アンは俺の手を引き、ファミレスへの道へと急かす。

「待て待て、まだどこにあるか分かんねぇんだからちょっと待ってろ」

「じゃあどうするのだ？」

「携帯で調べます」

俺は携帯を取りだしピコピコボタンを押す。

一分ほどかけて場所を見つけた。

「３００m先にデニ○ズがあんだけどそれでいい？」

「「「いい（ですわ）よ」」」

みんなの同意も得れたので動き出す。

店に入ると、まだ人は多くなかった。

少し早かったかもしれないけど、混んでるよりはマシだ。

一番隅の、椅子二つに壁側にソファーがついてる席を選ばせてもらった。

壁側の椅子のところに香苗、通路側に真樹。

ソファーの壁側から俺、アン、沙鳥。

違和感なく座らせるために真ん中にアンを座らせ、膝の上に荷物を置かしてもらって、人が来たら干渉できないようにしてもらう。

「あの、質問なのですが」

店員にメニューとお冷やをもらうと、真樹が沙鳥に質問してきた。

「ん？」

「アンさんが食べ物を飲み込むとき、食べ物はどう見えるんですの？」

「どういうこと？」

「沙鳥様には普通に人が食べてるように見えるのでしょうが、わたくしにはアンさんが見えませんので食べ物がどこまで見えるのかと。最悪の場合、胃の中にあるところまで見えたらちょっと……」

「あ、そうじゃん。夏哉、そこのところどうなの？」

「分っかんね。そこんとこ知っとくか。真樹さ、いまどう視えてる？背もたれとか」

「普通に見えますわ。何もありません」

「じゃあアン、沙鳥のポーチをテーブルに触れるか触れないか程度に持ち上げてみて」

「分かったが、今持ちあげると浮いてるように視えるんじゃないか？」

「そうだな。……じゃあ紐だけでいいか。紐掴んで上にあげてみ」

「分かった」

アンは紐をつかみ、ゆっくり上にあげる。
徐々に上がり、ようやく真樹にも見える位置に達した。
というのに真樹は何も言わない。

「真樹どうかしたか？」

「何がですの？」

「いや、紐が浮いてるとか言わないのかなって」

「はぁ？何言ってますの？浮いてませんわよ」

「「「「へ？」」」」

俺たち四人は驚きの声をあげた。

いや、おかしい。

アンはちゃんと持ってる。

香苗と沙鳥に聞いても持ってるって答える。

つまり真樹だけには見えてないと言うことになる。

俺はアンが掴んでる紐の上のところに指をかける。

「ここにあるんだけどなんにも見えない？」

「見えませんわ」

「じゃあアン、手放して」

ん、といって紐を放す。

俺には普通に見えたけど、真樹は目を見開いている。

「……急に、紐が現れました」

「と言うことはアンが触ってたか――」

ぐうぅぅぅぅ

俺の言葉を遮る音が鳴った。

その音を聞いた四人は、音源を目で辿る。

「ぁ……」

その音源から、また別の音が聞こえた。

「「「「「……」」」」」

「その、これは……」

「カナ～」

カナと呼ばれた少女は顔を真っ赤にして、気まずそうにうつむく。

犯人は香苗ちゃんでした。

いや、腹が減ってたのは分かるけどね、あとちょっと我慢してほしかったよね。

さすがにシリアスパートは理解してほしかったよね。

みんなが沙鳥を批難する目で見る。

それに耐えかねた香苗が抗議する。

「だってだって！お腹が空くのはどうしようもないことだもん！私だって空気読みたかったけど鳴っちゃったんだもん！しょうがないじゃん」

「いや、まぁカナの言う通りなんだけどさ～、でもちょっと……」

香苗の言うことも沙鳥の言うことも分かる。
でもここは飯を食う場所だし香苗の意思を尊重しておく。

「俺が悪かった。香苗の言うことも確かだし、メニュー選んでさっさと食おう」

「ほんとごめん……」

「しょうがないしょうがない」

メニューは二つだけなので俺、アン、沙鳥と香苗、真樹で分けるのがベターなんだけど。

「夏哉、沙鳥様といちゃいちゃしないで下さいまし」

テーブルの下でげしげし蹴ってくる。

「大丈夫だっつーの、アンもいるんだから出来ねぇって」

「私となら構わないよな？」

真樹の隣の香苗が不満そうに通訳をする。
チラッと見えた沙鳥も不機嫌そのものだ。

「えぇ、構いません。むしろそのままくっついてくださいまし」

「「なぁぁぁぁっ！！」」

「おぅまかせとけ」

二人とも訳すつもりはないそうなんで俺が言っとく。

それよりさっき言ったことを本人すら忘れていそうだ。

「おい、早く食うんじゃなかったのか？」

「夏哉、実際どうなの？」

沙鳥、怖いです。

「はぁ～。ほんと情けないけど、まだ決めれません」

「まだ？どういうことなんですの？」

言えない。

言ったら真樹に殺される。

真樹はなんにも知らないんだよね？

知りながら俺を公開処刑するするつもりじゃないよね？

どっかの偉人が、？人間は素直が一番？って言ってた気がする。

俺はその法則に従う。

「すいません。その話はまた今度にして下さい」

「言えないようなことなんですの？」

「その通りなのでご飯を食べさせてください」

「……分かりましたわ」

そう言って香苗とメニューを見る。

俺たちもメニューを開いて選ぶ。

「沙鳥決まった？」

「んっと……ハンバーグカレードリアかな」

「了解。アンはなんか食いたさそうなのある？」

「いや、分からないから夏哉と同じでいい」

「そっか。じゃあ……オムライスでいっか。これ食ったことないよな？」

「ないない。どんな味がするんだ？」

「食ってからのお楽しみだ。二人はどう？」

「決まったよ～。サイドメニューどうする？」

「サラダ加えればいいんではありませんの？」

「じゃあ他に、ポテトは？」

「ＯＫ～。ドリンクバー有りでいい？」

「うん、いいよ」

「ドリンクバーとはなんだ？」
「飲み物のみ放題ってことだ」
「へ～」
「じゃあ決定。真樹ピンポン押して」
「はい」
ピンポーン
「お待たせしました。ご注文をどうぞ」
早っ！？
まだ押してから十秒も経ってないぞ！
もしかしてずっと待ってた！？
そんなに注目されるメンバー……ですよね。
男一人に美少女三人。
その一人は有名人になれるほどの超美少女だし。
目立つっちゃ目立つよな。
「あの、お客様？」「夏哉？」
「あ、すいませんっ」
店員とアンがほぼ同時に訪ねてきた。

どうやらみんな早さに気をとられてたらしい。
俺だけじゃなくてよかった。

「えっと、ポテトとサラダと、オムライス二つ、ハンバーグカレードリアひとつ。二人は？」

「タラコスパゲッティと担々麺、サンドイッチに、あとドリンクバーを四つ」

「確認します。フライドポテトがおひとつ、サラダがおひとつ、オムライスがお二つ、タラコスパゲッティがおひとつ、担々麺がおひとつ、サンドイッチがおひとつ、ドリンクバーがおひとつ。以上でよろしいですね？」

「はい」

「かしこまりました。少々お待ちください」

店員は厨房へ戻っていった。

「真樹サンドイッチも食うの？」

「えぇ。わたくしだけでなく食べたい人はどうぞ」

意外と食うのな。

ボケーっと何をするでもなく真樹を見てると、ひとつの案を思い付いた。

「なぁ真樹、メアド教えて」

「……わたくし、貴方のこと好きではありませんわよ」

「深読みしすぎだっつーの。あれだ、アンにケータイ持たせりゃ二人きりになったとしてもメールで会話できるだろ」

「そういうことですか。名前は夏哉ではなくアンでよろしいですわね？」

「もうどうでもいいです」

真樹とメアドを交換し、料理が来るまでアンにメールの使い方を教える。

アンは飲み込みが早く、使い方はすぐに覚えた。

料理が運ばれ、食べるごとにアンが絶賛してたのは言うまでもない。

アンが口にしたものは、口に入れると見えなくなるようだ。

その他に分かったことは、まず持ったものが消える条件。

ひとつはものを触るだけでは消えず、一部でもこの世界のもの以外で包まれないと消えない。

つまりさっきのポーチの例えでいうと、ポーチを身体の上にのせるだけでは消えず、一部――ポーチの紐を握ると、そこの部分は手に包まれてるということになるのでポーチは消える。

これはどこの部分を使っても同じで、身体いっぱいに使ってもアンの洋服をものにぐるっと巻いても消える。

でも本当に包まれてなければいけないので、間――つまり端と端が開いていたら消えない。

もうひとつは消える対象は比較的小さいものだけだ。

消えるものと消えないものの境界ははっきりとは分からないし、？小さい？という定義も体積によるものか重量によるものかは分からない。
今のところ香苗サイズの人間は消えず、２ｋｇ弱のリュックは消えた。
もしかしたらもっと複雑なことがあるかもしれないけど、今分かるのはこれくらい。
でもこれだけ分かれば十分かな。

一時間ほどかけて昼食を済まし、ファミレスを出る。

温泉宿に向かう途中、俺たちは守志那通りという、お土産屋とか食べ物屋等で賑わってるところに立ち寄った。
特に理由はなくただの暇潰しだ。

「ねぇ見て見て、これよくない？」

「あ、可愛い」

「沙鳥様、こちらはどうでしょう？」

「いいじゃんいいじゃん。真樹このブレスレットつけてみれば？」

なんとも女子高生らしい会話をしている三人。
実際女子高生だし楽しんでくれてるなら誘った甲斐があるってもんだ。

「夏哉は混ざらないのか？」

俺の側で、今は地に足をつけてるアンが近くの商品を見ながら聞いてくる。

「ん～、入っていってもいいんだけどさ、やっぱ女子の会話には入りにくいっていうかさ」

「そんなものなのか？」

「そういうアンは？」

「やっぱ真樹がいるといちいち通訳が必要になって話が途切れるだろ？それにあんなにはしゃいでて私に話しかけると周りも変に思うだろうしな」

「そっか。なぁ、真樹がいるのは嫌か？」

気にならないと言ったら嘘になる。

俺と香苗と沙鳥だけなら普通に接してあげられるけど、真樹は違う。

普通の人間だからアンのことが見えないし、コミュニケーションをとるのも一手間いる。

ちょっと居づらいかもしれない。

俺の考えてることを感じ取ったのか、アンは微笑んだ。

「大丈夫だ、心配するな。少し不便だが、楽しいことは変わりない。真樹にも少しは受け入れてもらったしな」

「……それならよかった――」

？――ッ？

「ん？」

何か聞こえた気がした。

後ろを振り返ってみるけどそこにはただたくさんの人が歩いてるだけ。

別に変わったところはない。

「夏哉、どうした？」

「いや、なんか声みたいなのが聞こえて」

「声か？私はも何言ってないし……香苗たちか？」

三人はいまだお土産を物色してる。

「いや、多分違うと思――」

？――ーん、―母さーん！？

「聞こえた！」

今確かに幼い声で？お母さん？って泣き叫ぶような声が聞こえた。

「何がだ？」

アンには聞こえていないみたいだ。
そして周りの通行人にも。

俺だけにしか聞こえていない声。
まるでアンと初めて会ったときみたいだと思い出す。

でも今はそれどころではない。
さっきの声が本当だったとして、幼い子が泣いてるんだから多分迷子だ。
もしかしたら他の人が気付いて探してるかもしれないけど、まだ泣いてる声が聞こえてるから助けてないのかもしれない。

今更だけど、もし泣いてる声が普通の、空気を震わして伝わる振動だったとしたら、誰も聞こえてない声が聞こえる俺の耳は化け物並みだ。
本当に戻りつつあるようだ。
さっきの電車での、アンの手を握ったときの歪めた顔も痛みから来るものだろう。
力加減が出来なかったかもしれない。

いやいやと、頭を振って考えを振り払う。
今は迷子であろう子の元に駆けつけてあげるべきだ。
勘違いだったとしても、それはそれでいい。

「アン、もしかしたら迷子の子がいるかもしれないからそっち行こうと思うんだけど、ここで待っててくんない？」

「ちょっと待て、話がよく見えないんだが」

「今急ぎだから後で話す」

「ならついていく。よく分からないが、二人の方がいいだろう」

「え？いや、あーまいいや。沙鳥！ちょっとここ出るから待ってて！もし遅かったら先宿行っててていいから」

「は～い」

沙鳥にしては珍しく軽く流してきたが気にせず店の外に出て走る。

向かうは当然、声が聞こえるであろう場所へ。

第三話　《二章》干渉の条件（後書き）

夏哉「皆さん、見てくれてありがとうございます」

アン「分かってるかもしれんが、次はスピンオフを出すからまた六日後くらいか」

夏「これからもぜひ見てね～」

作者「って待てや！なんでこんな早々に終わらす気なんだ！？」

夏「なんかもうめんどくさくなってさ～」

作「おまっ！読者様だぞ！神様に向かってなんていう口を！！」

夏「あぁ、もういいっすよ。みんなこんな下らないあとがきなんて気にしないっすよ」

ア「それに後書きに力入れるくらいなら本編頑張った方がいいだろう」

作「そんなさらりと正論を吐くな！！後書きだってちゃんと補足説明で役に立ってるわ！！」

ア「たってないだろ」

作「いいやたってる！プロフィールとか！」

夏「まぁそうだけどさ、でも後書きで？これからも読んでください

?って呼び掛けんの無意味じゃね?お前だって気に入ったものなら言われなくても読むだろ?」

作「当然!」

夏「逆に本編がつまんなかったらどれだけ呼び掛けようが見ねぇんだよ。だからくどいように?また見てね?なんて言うな、余計ウザくなって見てもらえなくなるぞ」

作「マジでか!?」

ア「作者が自分で作ったキャラに説教を食らってるのは……まぁいっか。そういえば作者曰く、第三話は私がメインの話だそうだ。伏線は張るのかどうかは未定だが、できれば張りたいとのこと。探してみるのも一興か。だがすぐにバレたらそれは読者がすごいか作者の文才がないか……読者には申し訳ないが後者の方が強いと思う。長々とすまん、ではまたな」

夏「だからこうすれば――」

作「ほうほう――」

ア「まだやってる……」

第三話　《三章》意外な行動

わたくしたちはお土産を物色していた。
かれこれ三十分ほどはいただろうか。
気付くと、夏哉の姿が見えなくなっていた。

「あれ？香苗、夏哉は何処行きましたの？」

「え？そこにいな……いね、何処だろう。沙鳥ちゃん知ってる？」

「ん、夏哉？アンちゃんとどっか行くって言ってたよ。すぐ戻るけど遅かったら先行っててだって」

……妙ですわね。
夏哉は駅から３００ｍしか離れてない場所でさえ携帯を使うほどこの場所は慣れてない。
それなのにこの地域でどんな用があるの？
観光だったとして、それならどうしてわたくしたちを誘わない？
アンさんと二人きりになりたかった？
それならわたくしたちを誘わずに二人で来ればいい。
それに……

「沙鳥ちゃん、何処行くか聞いてないの？」

「うん、ずっとお土産に夢中だったし。急に何処行ったんだろうね？まさか二人でデート！？」

沙鳥様が、夏哉に好……いやいやいや！待ちなさい、待ちなさい！
わたくしは何を考えているの！？沙鳥様が夏哉に好意を寄せてる！

？そんなの絶対ありませんわ！！わたくしおかしいですわよ！！
……落ち着きなさい。沙鳥様はお優しい。だからあんな夏哉なんか
に好意を寄せてあげてるのですわ。そうです！決して心のそこから
愛してるとか、そういうのではありませんわ！！夏哉なんかに頭を
撫で撫でされて頬を緩ませるのも沙鳥様の寛大なお心のお陰！！そ
うでなければあんな、あんな……！！

「ふぅ……」

まずい、思考が逸れましたわ。
とにかく、そんなお優しい沙鳥様が、急な夏哉の行動にその場で疑
問を持たないのが一番おかしい。
行かせるにしても少しは食い下がるはず。
しかしそんなところは見てもないし、沙鳥様もそんなことはしてな
い。
それに沙鳥様の近くにいたわたくしと香苗は夏哉の言葉すら覚えて
ない。
気付かぬうちにそれほどお土産に集中してたのか。
とにかく何かが変なことには変わらない。

わたくしは携帯を取りだし、少し前に登録した電話番号へとかける。
まさかこんな早くに使うとは思わなかった。

四回目のコールで夏哉は電話に出た。

「もしもし？」

『……』

出たはいいけど向こうは何も答えない。

「もしもし？夏哉？聞いてますの？」

「真樹どうした？夏哉に電話？」

「夏哉が出ません」

「「え？」」

二人は驚きの表情を隠せてない。

「電話は通じてるんですが……」

すると香苗が手を小さく上下に降ってる。

えっとえっと、と声を出してるので恐らく何か考えているんだろう。

三十秒ほどで思案が終わり、わたくしに電話を変わるように指示した。

言われた通り携帯を渡す。

携帯からの音を拾おうと、耳を近づける。

沙鳥様も同じことを思ったのか、わたくしの前に立ち携帯に耳を近づける。

きゃぁぁぁぁっ！！

沙鳥様の顔がこんな近くにー！？

「もしもし？香苗だけど、アンさん？」

『……』

何も聞こえない。

成る程、アンさんだったとしてわたくしが聞こえないのはしょうがない。
しかし沙鳥様も香苗も、何も反応しないところを見るとどちらも聞こえてないみたいですわね。

「じゃあもしあなたがアンさんで、私の声が聞こえてるなら携帯を軽く二回叩いて」

『……トン、トン』

聞こえた。
香苗の言う通り二回叩く音が聞こえたと言うことはアンさんなんだろう。
つまり夏哉は昼食の時から預けたままということになる。
全く無頓着と言うか。
わたくしが考えてる間に香苗は質問をする。

「今から質問するから、?分かった??はい?なら一回、?分からない??いいえ?なら二回叩いて」

『トン』

「じゃあまず、夏哉君と一緒にいる?」

『トン』

「今すぐ夏哉君と代われる?」

『トン』

「じゃあお願い」

『トン』

「はい、真樹ちゃん」

「え？わたくしですの？」

「だって真樹ちゃん夏哉君に用があるんじゃないの？」

確かに用はありますけど。

「香苗はないんですの？どう考えても色々おかしいですわよ。何かあったとしか思えません、わ……」

「「……」」

沙鳥様と香苗はキョトンとした顔を向ける。

な、何か変なことを？

『もしもし？香苗？』

携帯から夏哉の声が聞こえた。

ひとまず二人は置いといて夏哉に意識を傾け……ちょっと待って！

わたくし、沙鳥様を後回しにして夏哉を優先させた？何を、何をしてるんですのわたくしは！？唯一無二の存在である沙鳥様を後回し？そんなことをしていいとでも？

わたくしはその場に踞（うずくま）る。

わたくしは最低ですわ。
よりにもよって夏哉を優先させてしまうなんて……。

『おーい、香苗？どうしたー？』と携帯からの振動は、耳には届いてるけど理解はしていない。

そんなわたくしを心配してくれるのか、沙鳥様が声をかけてくれる。

「真樹どうしたの？」

「沙鳥様、わたくしは最低でどうしようもない人間です。本当に申し訳ありません」

「あの、真樹？早く電話に出な。電話代もったいないよ」

「は、はい……」

渋々沙鳥様の言葉に従う。
それもこれも全て夏哉のせいだ。
沸々と怒りが込み上げてくる。

「なんの用？」

『え？ちょ、あんた誰！？しかもなんでそんな怒ってんの！？香苗は！？』

「喧しい。騒ぐな」

『っと、っと、お前真樹か！？』

「それ以外に誰がいる？」

『口調変わりすぎだッ！！そしてお前から電話かけてきたんだから用があるのはお前なんじゃね！？』

夏哉の言葉で我に返る。

わたくしは失態を犯してしまった。

こんな人が多いところで何をしているんですの？

一度心を落ち着かせ、頭を冷やす。

「取り乱してすいません。夏哉、貴方今何してますの？」

『えっと、本当に真樹さん？怒ってない？』

なんとも女々しいですわね。

「もう怒ってませんわ。それより早く質問に答えなさい、何かあったんではないんですの？」

『ん～、簡単に言えば迷子探し。つーかなんで分かった？』

「それは後でいいですわ。それよりも、迷子？どうしてわたくしたちに言わないんですの？二人より五人で探した方が早いではありませんか」

『いや、そうなんだけどな。迷子がいるかどうかも分かんねぇし』

「は？……ちょっと待ちなさい、どういうことですの？」

『えっと、幼い子が？おかーさーん？って叫んでる声が聞こえた気がしたから、今探してるんだよ』

「……気のせいでは？」

『ないね。今も聞こえてるし。幻聴じゃない限り――と言ってるそばから発見。わりぃ、できれば先行っててくんね？俺そっちに戻れる気がしねぇから』

「……貴方が迷子では？」

『宿までの道は大丈夫だから。地図は簡略だけど沙鳥の持ってるチケットの裏に書いてあるから。じゃあよろしく』

そう告げると夏哉は電話を切った。

画面を見ると四分三十二秒、二百八十円かかった。

この程度ならまだ無料通話が残ってるので平気ですわね。

「お待たせしましたわ……って沙鳥様、何をしてますの？」

二人はお互いに抱き寄ってプルプル震えてる。

……香苗羨ましいですわ。

「いや、だって、真樹ちゃん、さっきすごい怖くて……」

「……申し訳ありませんでした」

二人の目は本当に恐怖に塗りつぶされている。

そんなに怖かったんですのね？

「それで、夏哉どうだったの？」

落ち込む心を引き上げ、簡潔に夏哉の言ったことを説明する。

「迷子……ねぇねぇ、これってフラグ立たない？」

「ふらぐ？」

「ん～簡単に言うと、ある出来事をきっかけに、その当事者（♀）は夏哉君に惚れちゃうってことかな？」

「……沙鳥様、迷子の子は幼いらしいですわよ？」

「だから、例えば迷子を探してる保護者！その子が私たちと同じくらいの女の子だとして、迷子を見つけたお礼とか言って仲良くなっちゃうってことも無きにしもあらずなんだよね」

沙鳥様は淡々と説明してくれていますが、わたくしとしてはちょっと妄想のしすぎだと……

決して沙鳥様の考えを否定するというわけではないけれど、やはり現実離れしてるというかなんというか。

「あの、沙鳥様。わたくし、そういう話には疎いのですが、普通では有り得ないのでは？」

わたくしは正しいことを言った筈だ。

それなのに二人は揃ってため息をつく。

「普通じゃないんだよね、夏哉君は」

「はっ？」

「じゃあ夏哉とアンちゃんが出会った話をするね」

香苗の後を継いで沙鳥様が話す。

「アンちゃんが道端で倒れてて、そこを夏哉が発見して介抱した。そしてそのあといろんなことがあって、今じゃ二人は同棲中」

「……」

思わず絶句をしてしまう。

如何にそういうのに疎いわたくしでも、今の夏哉の状況は異常すぎる。

確かアンさんは人間の姿で、胸があると言ってたから女性なんだろう。

その女性を男性が助け、しかもひとつ屋根の下で暮らすなんて、漫画でしか有り得ないような状況に陥っている。

それを普通と言えるだろうか？

「……あの、実は夏哉は漫画などの住人とかでは……？」

「はっきり否定できないところが怖いよね」

「三人に告白されて答えを出さずに一緒にいるってところも主人公だよね、夏哉は」

「ちょっと待ってくださいまし」

今聞き捨てならない言葉を聞きましたわ。

「今三人に告白されたと言いました？」

「ん、言ったよ」

「誰と誰と誰ですの？」

「私とカナとアンちゃん」

そうですかそうですか。
分かりましたわ。

「沙鳥様、香苗と一緒に宿へ向かっててくれませんか？」

「真樹は？」

「夏哉《あのゲス野郎》を殺す」

「まままま、真樹、おお落ち着いて？お願い。そん、そんなこ、怖い顔しないで」

沙鳥様が泣きそうな、泣きそう……泣き、そ……

「沙鳥様！申し訳ございません！わたくしのせいで怖い思いをさせてしまいました！」

「ううん、もういいよ。真樹、できればずっと笑っててね。そっちの方が可愛いから」

沙鳥様が泣きそうなのを堪えて微笑み、わわ、わたくしのことを、かわ、かかか、可愛いと……！

「沙鳥様ぁ、ありがとうございます……」

「真樹？なぜに涙？」

気付いたら涙を流していた。

それもその筈、沙鳥様に可愛いなどと言われたら、感動で涙を流してしまうのは当然。

「すいません、つい」

「真樹落ち着こ、ね？」

「そうだよ、よく考えてみてよ。もし私と沙鳥ちゃんを先に行かせちゃうと、温泉宿じゃ夏哉君と相部屋だよ？」

は？何を言って――

「カナどう言うこと？」

沙鳥様もわたくしと同じことを思ったのだろう、わたくしが聞きたいことを聞いてくださいました。

「だってチケットは二枚で沙鳥ちゃんと夏哉君が持ってるんでしょ？私と沙鳥ちゃんでペア、真樹ちゃんと夏哉君でペアってなっちゃうでしょ？」

「香苗、何を仰(おっしゃ)ってるんですの？」

「へ？」

全く、香苗は実は馬鹿ではありませんの？

「わたくしは夏哉を殺すと言ったのですわよ？相部屋になるわけがありませんわ」

「えぇっ！？真樹ちゃん！冗談じゃなくて本気で殺す気だったの！？」

「ちょ、真樹ダメだよ！！さすがに犯罪者の友達にはなりたくないよ！！」

「ツッコむところそこっ！？」

「沙鳥様が言うなら仕方ありませんわね」

「すごい従順！！」

沙鳥様に言われたら従うほかありませんわ。

「ね、ねぇ真樹ちゃん？さっき言ったの冗談だからね？ちゃんと従業員に言ったら一緒にしてくれるからね？」

「……香苗、怯えてます？」

「あ、あの、失礼だとは思うけど、さっきの見たらちょっと怖くて……」

あ、目に涙を浮かべて震えてる香苗は、沙鳥様ほどではないにしろとても可愛く見える。
純粋に保護欲に刈られてしまう。
気付いたら香苗の頭に手を乗せ、撫で撫でしていた。
「ふぁっ？」
「ごめんなさい、もう怖がらせませんわ」
と、香苗を宥めていると気になることが二つ浮かんだ。
「そういえば、どうしてアンさんは電話に出なかったんですの？香苗知ってます？」
ひとつ目はこれだ。
香苗の質問に答えていたからわたくしたちの質問は聞こえていた筈だ。
「うん、多分だけどね。まず、アンさんの声は真樹ちゃんに届いてないんだよね？」
「ええ、そうですわ」
「普通の人には聞こえない、つまり鼓膜を震わせてないってことでしょ？」
「あぁ、そういうことですの」

「分かった？」

「ええ」

考えてみれば簡単なことでしたわ。
こんなことに気付かないなんて、人を馬鹿呼ばわりするのは出来ませんわね。

「あの～お二人さん？出来れば私にも分かるように教えてほしいんだけど」

沙鳥様が？を浮かべながらおずおずと手を挙げて聞いてくる。
わたくしはもはや脊髄反射を越えた速度で沙鳥様に体を向け、分かりやすく説明する。

「沙鳥様、まず始めに？音？はどう伝わるか分かりますか？」

「えっと、あれじゃない？振動が鼓膜に当たるんだよね？」

「そうです。しかしアンさんは今のところ三人しか声が聞こえてませんわよね？」

「うん」

「つまりアンさんの声は、わたくしの鼓膜を震わせていない、というのは分かりますか？」

「え？でも私たちはアンちゃんの声聞こえるよ？」

「それは……申し訳ありません、その原理は分からないのですが、

皆が聞こえない以上空気の振動で伝わるものではないことは確かです。そして携帯のマイク。これは音、つまり空気の振動を相手に伝えるというものです。しかしアンさんは空気を震わすことができないので、携帯の前でどれだけ騒ごうともわたくしたちには伝わらないのです」

「ん～、要するにアンちゃんは電話は使えないと、そういうこと？」

「えぇ、その通りですわ」

「……沙鳥ちゃん、絶対分かってないでしょ？」

「ソンナコトナイデスノコトヨ？」

片言になってますわよ沙鳥様。

理解できていないのは明白ですが、わたくしは沙鳥様の味方。嫌な気持ちにならないように話をそらす。

「香苗、もうひとつ疑問があるのですが」

「ん、何？」

「先程電話をしてるとき、二人ともキョトンとした顔をしたのは何故ですの？」

二人は顔を見合わせ、あぁ、と納得の表情を浮かべる。

「えっと、なんか真樹ちゃんが意外なことをしたなぁって」

「意外？」

「夏哉君のことすごい心配してたなって」

あ、そういえばどうしてあんなに必死になってたんでしょう。
いや、考えるまでもないでしょう。
夏哉のことは心底嫌ってるというわけではありませんし、嫌ってたとしても同行者がトラブルに巻き込まれたら心配するに決まってる。

それに、夏哉には謝らないといけない。
未だ？化け物？と言ったことを取り消してない。
確かに、今まで多くは語ったことはなく、むしろ沙鳥様を守るために敵意を向けていたけど、何度も会っていくうちに夏哉が噂の化け物ではないことは分かった。
それに沙鳥様が少しでも認めた人だ、少なくとも悪い人ではない。

だから照れ隠しとかそんなのではなく、友人、と呼べるかどうかは定かではないが、知人として心配しているんだ。

別に、深い理由はありませんわ。

そう言おうとしたら沙鳥様に遮られる。

「あーあ、ライバルが増えちゃうのか」

ぷちっ。

何かが切れたような気がした。
実際は音なんて出てないし、切れてもいない。
こういう効果音で、こういう表現が一番しっくりくる。

「なんだと？」

気付くと、ドスの効いた声を出していた。

ひゃっ！！という怯えた声が脳に染み渡り、我に返る。

何度も謝り、謝られ、店員に注意された。
わたくしたちは逃げるようにしてお土産屋から出た。

……お土産を買うのを忘れましたわ。

第三話　《三章》意外な行動（後書き）

真樹「やりましたわ！！とうとうわたくし視点が始まりましたわ！！」

アン「よかったな」

真「……なんか複雑な気分ですわ」

ア「ん？どうしてだ？嬉しくないのか？」

真「アンさんもまだ一回しかしてませんわよね？」

ア「一回、というと……視点のことか？」

真「えぇ、しかもわたくしより短い」

ア「それがどうかしたか？」

真「それなのにアンさんは何も気にせず飄々としていて、これで騒いでいた自分が悲しくなってきて」

ア「あ、いや、そう意味ではないし、真樹を陥れようとしてたわけではないぞ。なんというか、今のところ本編ではまた夏哉と二人きりになれたから、今は満足してるんだ」

真「二人きりと言えば……アンさんすいません、話は変わるのですが作者。沙鳥様と二人きりにしてくれる約束はどうしたんですの？」

作者「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ～～～～」

ア「異様にあの空間はネガティブで埋め尽くされてるぞ？」

真「近寄り難いのですが……聞くしか有りませんわよね。作者、何してますの？」

作「俺はダメ人間だ」

ア「何があった？」

作「書いたやつを確認しないで投稿しちゃったから矛盾を生じさせてしまった」

真「またですの？では、ここで矛盾を正当化させるために理由を考えろと？」

作「いや、もう修正しちゃったから土下座です、すいませんでした」

ア「土下座が早いな。身に付いてるのか？」

作「すいませんでした」

真「ツッコミすらしないとは……重症ですわね。今度はいったい何を間違えましたの？」

作「アンがものをつかむと消えるってやつ」

真「あれですか。ちょっと分かりづらいですわよね、アレ」

作「本当に力不足ですいません。修正はしたので第三話《プロローグ》をどうぞ。《二章》の説明が正しいです」

真「はぁ～、わたくしがいるときに謝罪するのが多いのは何故ですの？」

ア「偶然だと思おう」

第三話　《四章》迷子の子供

土産屋から出てすぐに夏哉は走り出す。
私もそれについていくが、正直訳が分からない。
誰かが助けを呼んでいる、というのは夏哉から聞いて分かった。
夏哉が言ったことだから信用出来る。

しかし私には全く聞こえなく、今も夏哉は聞こえてるらしいがいくら耳を済ましたところで町の喧騒しか耳に入らない。
それなのに夏哉は泣き声を聞き分け、ある程度の方向も把握してるらしい。

有り得ないと思った。

私は人間より五感が敏感だ。
その私ですら聞こえない音を夏哉は聞き取れる。
そこから読み取れることは、夏哉が異常ということだ。
しかもそれに心当たりもある。
一昨日の一日、夏哉が自分の過去を話してくれた日。
その過去の夏哉は異常だった。

もしそれが戻ったのだとしたら？

根拠はない。
あれは力だけが上がり、聴覚は変わってないかもしれない。
でも、それを疑ってしまう。
電車の中、夏哉は私を安心させるために手を握ってくれた。
しかし、握ってくれた力が強かった。
いや、強すぎた。

多少の痛み、人間が本気ではなく無意識に強く握ってしまう程度なら、毛ほどにも感じない。
ましてや夏哉なのだから、私を傷つけようとは思っていない。
それでも無意識のうちに私が顔を歪ましてしまうほどの力を出した。
これは力の加減が出来なかったということではないんだろうか？
加減が出来ないほどの力を手に入れたんではないんだろうか？

「おい、アン」

そんな思考は夏哉の声によって遮られた。

「なんだ？」

「お前空から泣いてる子供探してくれないか？方向は分かっても下からじゃ見つけにくいし」

「それはいいが、私はどんなやつが迷子か分からないぞ？」

「奇遇だな、俺もだ」

「……つまりそれらしい子を探せと」

「うん、頼む」

「分かったよ」

そこで話を切り空へ飛ぶ。

聞きたいこと、確認したいことは山ほどあったけど、きっと今聞いたところで？また後で言う？とか言うんだろう。
だから今は子探しに専念する。

プルルルルッ！！

「ぬをっ！？」

振動と共に懐から音が溢れ出す。
元となってるそれを取り出すと、夏哉の携帯電話だった。
そういえば返してなかった。
よく見ると、『早乙女真樹』の文字が浮かんでいる。
確かこの文字が浮かんでる人が話をしたいんだよな？

夏哉に用があるんだろうが待たせるわけにはいかないし、電話をしてみたい気もする。
真樹には悪いが付き合ってもらう。

携帯を開き、通話ボタンを押す。
すると音と振動が消える。
これは今真樹と話せる状態になったと言うことだよな。

『もしもし？』

携帯を耳に当てると真樹の声が聞こえた。
少し感動を覚える。

「もしもし、私だ」

『……もしもし？夏哉？聞いてますの？』

ん？

「いや、真樹？アンだが……」

少し変だ。
私の声が分からないのは仕方ないだろうが、そうだとしても私の声を聞いたとしたら？あなた誰？？という対応が妥当だろう。
つまり私の声が聞こえていないということか。
理由は、これがこの世界用のものだから魔族の私が使えないんだろう。

『もしもし？香苗だけど、アンさん？』

香苗の声が聞こえた。
もしかしたら香苗なら聞こえるかもしれない。
そんな淡い希望を抱きながら声を出す。

「あぁ、そうだ」

『……』

しばらくしても帰ってこない。
やはり向こうには届いていないということか。

『じゃあもしあなたがアンさんで、私の声が聞こえてるなら携帯を軽く二回叩いて』

そうだな、これなら取り敢えずは通じるか

トン、トンと二回叩く

『今から質問するから、?分かった??はい?なら一回、?分からない??いいえ?なら二回叩いて』

トン

『じゃあまず、夏哉君と一緒にいる?』

トン

『今すぐ夏哉君と代われる?』

トン

『じゃあお願い』

トン

ん〜、やっぱりというか、面倒くさいな。

地上に戻りながらそんなことを考えてた。

その時に夏哉を発見した。

「夏哉〜、香苗から電話だ」

「ん?電話?あ、お前に携帯預けっぱなしか」

不自然に見えないようにうまく携帯を渡す。

「じゃあさ、ちょっとここいら探しといてくんね？この近くだと思うから」

「分かった」

干渉モードをオフにして、人混み、建物、道などを全て無視してそれらしい人を探す。

……何も落としたものはないよな？

確認オッケー。

改めて探す。

手掛かりもなくもの――この場合は人だが――を探すのは正直つらい。

夏哉なら声が聞こえるんだろうが、ここに来ても一向に聞こえない。

夏哉はこの辺りと言ったから、その声というのはこの世界のものではないと思う。

魔族か聖族。

その可能性が高い。

特に魔族。

ここまで追ってきたのかもしれない。

気は抜けない。

私は魔力がかなり減ってる。

アルトラが一人でも来たら太刀打ちできない。

魔界には大まかに二つの位がある。

平民（トアラ）、一般的な魔族。

人間の魔力（きほうりょう）の平均を１００としたとき、トアラの平均は約２００弱。
人間でも実力者なら倒せる程度だ。
貴族（アルトラ）、魔族の二割程度しかいない。
トアラの上に立ち、仕切る存在。
平均およそ６０００強。
私もアルトラだが、聖界の王に力を取られたから８００ほどしかない。
因みに神であるアルクシア様は６５７０００００程。
桁が違いすぎる。
そんな御方を相手にしたことを思い出すと今でも身震いを起こす。

神経を研ぎ澄ませ、周囲を警戒する。
それに加え風属性の奇法を耳に纏わせる。

奇法にはそれぞれ特性があり、炎は破壊、浄化、水は造形、鎮静、地は防御、復元、そして風は速度、強化。

つまり耳に纏わせれば聴覚が？強化？される。

？――――……？

今、泣き声のようなものが聞こえた気がした。
立ち止まり、耳を澄ませる。

「……ひくっ、うっ、ぉかあ、さん……」

今度は確実に聞こえた。
泣き声がする方に向かうと、幼い子がいた。
多分この子だろう。
側に近づいて肩に手を伸ばす。

もし人間ではなかったら干渉モードオフ《今の状態》でも触れる筈だ。
勿論周囲には気を配らせる。
ゆっくりと手を進め、肩に手を――置けなかった。
「……ふぅ」
取り敢えずは平気らしい。
夏哉のところに急いで戻る。
夏哉はその場を動いておらず、まだ電話をしてた。
「夏哉、それらしい子を発見したぞ」
手をあげて返事をする。
「と言ってるそばから発見。わりぃ、できれば先行っててくんね？俺そっちに戻れる気がしねぇから」
夏哉は香苗に一言二言話してから電話を切る。
「香苗なんだって？」
「あー、違う違う真樹だった」
「あぁ、確か真樹から電話がかかってきたな。それで？」
「真樹ちゃんは僕たちのことを心配してくれたんだよ」

「そうなのか？」

香苗でも沙鳥でもなく真樹が電話をして来た。
ということは、真樹もライバルになる！？

「くそ、真樹まで敵に回るか」

「は？何言ってんの？」

「いや、なんでもない。早く行こう」

「ま、いっか」

三分ほど歩いて目的の女の子がいた。

「あの子で合ってるか？」

「多分、合ってる」

夏哉はその子に近づき話しかける。

「こんにちは」

女の子は鼻をすすりながら顔をあげる。

「ズズッ……だれ？」

「えっと、正義の味方だよ」

「なに、ひっく、それ？」

目を擦り、首を傾げながら聞く。

香苗もそうだが、小さい子はどうして瞳に涙を浮かべると、どんな仕種でも可愛く見えるんだろうか。

「んーと、困ってる子を助ける人だよ」

「こまってる？」

今度は反対側に傾げる。

「そ。ズバリ、君迷子になっちゃったでしょ？」

「え、どうしてわかったの？」

「君の？おかあさん？って呼ぶ声が聞こえたから、助けに来たんだよ」

「おかあさん……グスッ、ぅぅ、おかあさぁん……」

「おかあさんに会いたいよね？」

女の子は首を縦に振る。

「よし、お兄さんが会わせてあげるよ」

「ほんと？」

「うん。だから、お兄さんにいろいろ教えてくれるかな？」

「うん」

「じゃあ、名前、教えてくれるかな？」

「んっとね、るあ」

「るあちゃんか。何歳かな？」

「ななさい」

「ありがと。るあちゃんは誰と来たかな？」

「おかあさんと、おとおさんと、あかねぇときた」

「じゃあ、誰かに電話番号とか教えてもらった？」

横に振る。

「それじゃ何できたかな？車？」

「でんしゃできたよ」

「んーと、おかあさんたちは今日帰るって言ってた？」

「ううん、おとまりするっていってた」

「じゃあ何処に行くかっていってた？」
「おんせんってゆってた」
「そっか、じゃあちょっと待っててね」
夏哉はるあに背中を向けて数歩離れる。
そして携帯を開きボタンを何度か押す。
「アン、ちょっと来い」
「ん？なんだ？」
「悪いんだけど、上から探してくんない？」
「いやいやいや、それはかなり見つけるのは大変じゃないか？」
「頼む。多分いろんな人に聞いたりしてる人がそうだから」
「まぁ言われたらやるが、どうするんだ？私たちが迷子になるんじゃないのか？」
そういっても夏哉は焦った風には見えない。
「お前確か魔法使ったら気配みたいなのが分かるんだよな？」
「あぁ。あ、そういうことか」
つまり夏哉が魔法を使って居場所を伝えるということか。

「頼めるか？」

「分かった。なるべく間隔を短く頼む」

「了解。見つからなくてもなるべくこまめに帰ってきてくれ」

「分かってる」

私は再び空へ飛んだ。

――――――――――

アンを見送ると、また携帯の画面に目を戻す。

今携帯で周辺の温泉宿を検索している。

電車で、七歳のるあちゃんを連れて来たということは、あんまり長い距離を歩くということはしないと思う。

だから駅から一番近い場所を宿に選ぶと思う。

検索結果、一番近いのは俺たちと同じ矢田染温泉だった。

だからアンからの連絡が来るまではそっちに向かうことにする。

るあちゃんのところに戻る。

「ごめん、待たせちゃったね」

るあちゃんは首を横に振る。

なんかるあちゃんは香苗を思い出させるな。

「じゃあお母さんたちを探しに行こっか」

「うん」

俺は手を差し伸べ、その手をるあちゃんが握る。

「お腹減ってない？」

「……ちょっと」

「じゃあなんか食べよう」

「うん」

近くにコンビニがあったからそこに立ち寄り適当に食べ物を買って食べた。

その後お土産を買ったり肩車をしてあげたりした。

幸か不幸か、何事もなく無事に温泉宿に到着した。

アンともはぐれなかった。

第三話　《四章》迷子の子供（後書き）

夏哉「うをぉぉ、久しぶりに魔法とか異世界の話したな」

沙鳥「みんな覚えてるかな？奇法っていうのは魔界での魔法で、アルクシア様っていうのは魔界の神様だよ」

作者「沙鳥にものを教えてもらうってどうよ？」

沙「なにそれ！？私がバカだって言いたいのっ！？」

作「分かってるじゃん」

沙「ひっ、ひくっ、なつやぁ、あのあんちくしょうがいぢめるよぉ」

作「だれがあんちくしょうだ」

夏「すまない、俺も一瞬作者と同じように考えた」

沙「私帰っていい？」

作＆amp;夏「「だめ」」

沙「うぅぅ……」

夏「なぁ、今回いつもより遅かったよな、更新。なんかあった？」

作「あれだ、オープンキャンパス。俺は受験生だし。スピンオフの後書きでは言ったんだけど、受験生は何かと忙しいのでもっと更新

遅れます。八月はもう無理かも。九月中には必ず出します」

夏「りょうか～い」

沙「ねぇねぇ、今回魔法の話が出てきたけど第三話は魔法中心の話なの？」

作「魔法、っていうよりはアンが中心だな」

夏「今回はアンが大活躍？」

作「するよ。因みに一話は夏哉、二話は香苗と沙鳥。四話は沙鳥かな？もしかしたらまた香苗と二人かも」

沙「へぇ、何気考えてるんだね」

夏「真樹はなし？」

作「真樹は、五話かな？四話には登場させるつもり」

沙「あのさ、本編で魔力の数値化してたでしょ？」

作「うん」

沙「私どんなの？」

夏「俺も」

作「えっと、沙鳥は４９９０００００、夏哉は９８０、因みに香苗は３、真樹は３４００」

夏「うわ、沙鳥桁がちげぇ。それに真樹もすげぇ」

作「夏哉はなんか力が湧いてるし、沙鳥は依代だから言わずもがな。真樹はいろいろあるんだよ。それから真樹は魔力二位だから」

沙「へぇ、真樹すごいね」

夏「なんか、桁が違いすぎてもうどうでもいいわ」

作「じゃあ皆さん、閲覧ありがとうございます！次の投稿まで時間が空きますが、どうか見捨てないで暖かい目で見守ってください！」

夏＆amp;沙「「じゃあまたね～」」

第三話　《五章》迷子の正体

「あ、夏哉だ……その子誰？」

俺たちが宿に到着すると、先に着いていた沙鳥に声をかけられた。

「真樹から聞いてない？迷子の子」

「聞いてたけどさ、なんでここにいるの？保護者は？」

「それをこれから探す」

クイッと、袖が引っ張られる。

「ん？どうしたの？」

「だれ？」

あぁ、そうだな。
三人紹介しておこう。

「まず話しかけてきた子が沙鳥ちゃん」

「さとりちゃんしってる！すごいゆーめーじんだよねっ！？」

「お、るあちゃん知ってるんだ、偉いね～」

頭を撫でる。

「えへへ～」

「るあちゃんって言うんだ。私のこと知っててくれて嬉しいな。よろしくね」

「るあっていいます。よろしくおねがいします」

るあちゃんは恭しくお辞儀をする。
その仕種は微笑ましいものがあり、とっさに体が動いた。

「ふぇっ？」

俺はるあちゃんを抱き上げてた。

刹那、るあちゃんがいたところに手を伸ばしてきた。

「夏哉、何してるの？」

「それはこっちのセリフだバカ」

手を伸ばした人物、それは沙鳥だった。

「私はるあちゃんを抱き締めようと」

「お前の馬鹿力じゃるあちゃんが泣く」

「誰が馬鹿力っ！？」

自覚無しか。

「先週くらいだったかな？そうやって香苗に抱きついたら香苗、痛くて泣きそうになってたよな？」

「う〝……」

「あれは、本当に痛かったよ、うん」

香苗はその時のことを思い出してプルプル震えてる。

「かなえってあのこ？」

るあちゃんが香苗を指差す。

「そうだよ。あのお姉ちゃんね、身長が大きいけどあれで九歳なんだよ」

「な、夏哉君！ちょっとそれは――」

「香苗、小さい子がそばにいるんだぞ。騒ぎ立てるな。それに見ろあの子の顔。あの顔を裏切れるのか？」

香苗が何か言おうとするのをアンが遮る。
実はここに来る前にアンと打合せしてた。
？俺が言うことにキレる香苗を黙らせといてくれ？と。
アンは役割をしっかり果たしてくれて、香苗はただ唸ってるだけで何も言わなくなった。
因みにるあちゃんはというと、

「うわぁっ、かなえおねえちゃん、わたしとふたつしかちがわないのにおっき～！」

俺の言ったことを真に受けて目を輝かしている。
こんな目を見てしまうと誰も裏切れない。

「るあっていいます。かなえおねえちゃんよろしくおねがいします」

沙鳥と同じように自己紹介するるあちゃん。
香苗はその姿を見て、

「か、かわいい～……」

悶絶していた。

さぁ最後だ。

「るあちゃん、最後にあの目がつり上がって怖そうなお姉ちゃんは――」

「誰が怖そうですのっ！！」

「ひぅっ！？」

真樹のツッコミ（さけび）でるあちゃんが縮こまってしまった。
みんな、避難するような目で真樹を見る。
真樹は、俺たちならまだしも、沙鳥にまでそんな目をされてしまったのが耐えられなかったんだろう、ものすごい悲しそうな顔をする。

「あぅっ、さ、沙鳥様……申し訳ございません」

さすがに可愛そうになってきたのでフォローをいれる。

「大丈夫だよるあちゃん。あのお姉さん、真樹ちゃんっていうんだけどね、真樹ちゃんお人形さんが大好きな可愛らしい子なんだよ」

「な――っ!?」

騒ぎ立てそうなのを目で訴えて牽制する。

空気を読め、と。

その想いが通じたのかどうかは分からないけど、香苗同様押し留まった。

「まきおねえちゃんもおにんぎょうすきなんだ!るあとおなじだねっ」

満面の笑みを真樹に向ける。

憎々しげな真樹の顔が、徐々に緩んでいく。

うん、和むことはいいことだ。

紹介も終わって、そろそろ宿の人に聞くことにする。

この三人にるあちゃんを任せ――ようと思ったけど怖くなった。

特に沙鳥が。

加減忘れてやってしまいそうな気がする。

香苗と真樹だってヘマやって嘘がバレるかもしれないし。

「じゃあるあちゃん、ちょっと来てくれる?」

「うん」

「ちょっと夏哉、貴方その子を何処へ連れていく気ですの?まさか……」

「違う違う違う！そうじゃありません！！この子の親知ってるか聞いてくるだけだ。みんな先に入っててていいよ。ん～と……はい」

財布からチケットを取りだし真樹に渡す。

「これは……部屋は二つですの？」

「そりゃそうだろ。それとも何か？俺と一緒に寝たいか？」

「バカです――」「「寝たいですっ！！」」

「「……」」

二人が元気よく声をあげた。

その顔は頬を赤らめて、これでもかって言うほど真剣な顔をしている。

そこまで俺といたいとは、さっすが俺。

一方隣では絶望的な顔をしている。

「さ、さとりさま？」

まぁ俺としては……

「じゃあ俺がいない間にじゃんけんで決めといて」

めんどくさくなりそうだからこっから逃げる。

どっちに転んでも俺は構わないし。

るあちゃんの手を繋いで受け付けに行く。

「あ、そうだ。るあちゃん、お父さんとお母さんの名前って分かる？」

これを聞いておかないとどうしようもない。

「えっと、めぐみおかあさんとやすふみおとうさんだよ」

めぐみ、やすふみ。

どっかで聞いた覚えがある気がするな。

何処だっけ？

「めぐみさんとやすふみさん、ね。じゃああと名字も教えてくれるかな？」

「みねぎしっていうの！」

みねぎし。

みねぎし、めぐみ。

みねぎし、やすふみ。

峯岸恵深、峯岸康文！

思い出した！！

あの二人の子供か！

じゃあ？あかねぇ？って……

いや、それはまだあとだ。
まずはこの子に会わせないと。

「ありがと。じゃあ、お兄さんから離れないでね」

「うん！」

満面の笑みを向けてくる。
ふぅ、癒される。

「夏哉、私がいることを忘れるなよ」

うッ！？

まずったまずった、声が出そうになった。

くそ、なんだよアン、嫉妬か？
こんな小さい子に対して嫉妬なのか？

動揺がるあちゃんにバレないように深呼吸する。

「おにいちゃん？」

「ん、大丈夫。ごめんね」

よし、冷静になった。
受付の人に話し掛ける。
見た目三十代前半くらいの女性だ。

「すいません」

「はい？」

「こちらに、峯岸という方が予約してないでしょうか？」

「少々お待ちください」

そう言って奥の方へ引っ込んでしまった。

二分ほどして戻ってきた。

「ミネギシという方は三組ほどいらっしゃいますが……」

「えっと、その中に峯岸恵深か峯岸康文という人は？」

「その方ならいます。一泊二日でご予約されています」

よしっ！！

予想が当たった！！

もしかしたら同姓同名って可能性があるけど、確率は少ないだろう。

「連絡先とかって聞いてますか？子供が迷子になってるんですが」

「分かりました、直ちに連絡します。お子さんの名前は？」

「るあです！」

るあちゃんが元気よく返事をする。

「るあちゃんね、分かった。じゃあ今すぐママとお話しさせてあげるから、待っててね」

「おかあさんに、あえる？」

るあちゃんは非常に寂しそうな顔をする。

「うん、絶対会わせてあげるからね。失礼ですが、お名前は？」

今度は俺に聞いてきた。

これは、俺の勘違いじゃなかったらまずいよな。

「あ、ちょっと待っててください。沙鳥！ちょっと来い！」

「ん？なぁに？」

「え、さとり……」

沙鳥が近づいてくる。

そばに来た沙鳥に耳打ちをする。

「沙鳥、頼みがある」

「ひゃっ！？」

無視。

「るあちゃんの親と連絡取れるようになったんだけど、るあちゃん見っけたのお前ってことにしてくんね？」

「へ？なんで？」

「あとで絶対言うから頼む」

「……分かった」

沙鳥と入れ違いになって、沙鳥を受付の前に。

「あの、私でいいですか？」

「え、あ、あなた、さとり、天雲沙鳥さん、ですか？」

「そうですけど……」

「わ、私！ファンなんです！！えっと、あ、握手してください！」

まさかこんなところまでファンがいるなんて。

さすが沙鳥だな。

「それは構わないんですけど、先にこの子の親と連絡取らせてあげてください。連絡先は分かってるんですよね？」

「はい！すぐやるので待っててください！！」

沙鳥め、分かってたが本当に年上の人も手玉に取ってる。

対応に慣れてるな。

俺は傍観しつつ、ほぼ答えが確定しつつある問いをるあちゃんにする。

「ねぇるあちゃん。るあちゃんさっきあかねぇっていうお姉ちゃんがいるって言ってたよね？」

「うん」

「そのお姉ちゃんの名前って灯里（あかり）ちゃん？」

「そうだよ。あかりおねえちゃん。おにいちゃんしってるの？」

「う～ん……名前を知ってる程度だけどね」

「すごぉい！おねえちゃんゆーめーじん！！」

「そうだね。じゃあるあちゃんもお姉ちゃんみたいに有名人になっちゃおうか」

「うん！……くわぁぁ～」

るあちゃんは大きくあくびをする。

「るあちゃん眠たくなってきちゃった？」

「ちょっとだけ」

はぐれて泣いたり、ここまで歩いたりしてくたびれちゃったんだろう。

「ん～……。あ、じゃああのソファーに座ってようか」

「うん……」

近くにあるソファーまで運び、横にしてあげる。
案の定すぐに眠りについてしまった。

それを見計らってなのか、香苗とアンと真樹がこちらに来る。
その中で一番に真樹が質問を繰り出す。

「夏哉、先程その子が言ってた灯里って、うちの高校の峯岸灯里ですの？」

「そ。確か、四組だっけ？」

「五組でわたくしのクラスですわ」

「そうだっけ？まぁその子と、って訳じゃないんだけど、色々あったんだよ」

「色々ってな――」「夏哉～、るあちゃんは？」

香苗の言葉を遮る沙鳥。
香苗ドンマイ。
沙鳥は何があったのか。

「今寝てるけど、どうした？」

「るあちゃんのお母さんが声聞きたいって」

ん～、どうするか。
起こすか寝かしておくか。
……起こすか。

「るあちゃん、るあちゃん」

肩を揺らす。

うんうんと唸って、しばらくすると起きた。

「ん～……、おにいちゃん？」

「るあちゃん起きた？お母さんがね、るあちゃんと電話したいって」

「おかあさん！？どこどこっ！？」

「沙鳥お姉ちゃんについて行ったら電話できるよ」

「わかった！さとりちゃんいこっ！」

沙鳥とるあちゃんが去るのを見送る。

さて、と。

「じゃあ香苗ちゃん、続きをどうぞ」

「あ、うん。えっと……、そうだ。色々って何？」

「いや～、正直言いたくないんだけどさ～、昔にね」

「昔？昔の彼女とかですの？」

「何っ！？夏哉！それはホントかっ！？」

「待て待て！違う！アンも真に受けるな」

「ん、アンさんはなんて言ったんです？」

香苗が通訳する。

「じゃあなんなんだ？」

「じゃあなんだと聞かれたら、どう答えよ……」

なんか上手い具合に説明できるかと考えてると、香苗が申し訳ない風な顔をする。

「ねぇ、夏哉君。昔っていうか、今もだと思うんだけど、その子と家が近かったりする？」

あー、この風だと分かっちゃったかな？

「うん。お向かいさん」

「そっか……。大丈夫？」

……優しいな。

「へーきへーき。まぁあの時はつらかったけどな。その上親同士が仲良かったからさ、親の方が大変だったと思う」

「会いたくない？」

「向こうが会いたくないでしょ。全然会ってないから向こうがどう

思ってるかは分かんないけど」

「分かった。みんなで全力で夏哉君のこと隠すね」

俺の考えもお見通しですか。
スッゲー怖い。
でもそれ以上に嬉しい。

「ホント、ありがとな」

「当然だよ。私、夏哉君のこと考えてるんだもん」

「……ありがと」

「どういたしまして」

第三話　《五章》迷子の正体（後書き）

作者「おぉ、意外と早く終わった」

アン「いや、十分遅いぞ」

香苗「これからはいつも通りの更新時間なの？」

作「無理無理。学校始まってるし、九月はいちばん忙しい。十月もテストあるから……いつも通りになるのは十一月かな？」

ア「あっそ、なら次は十日とかそんなくらいかかるのか？」

作「もーちょい掛かるかな？スピンオフやるから十五日くらいだと思う」

香「あ、そんなことよりさ」

作「そんなことって……」

香「アンさん、私魔力一応あるんですよね？」

ア「ああ。微弱だがな」

香「だ、だったら！私もその分魔法使えるよね！？」

作＆amp;ア「「無理」」

香「なんでっ！？」

作「じゃあまず、魔力の司る場所ってのがあるんだよ。それが脳な訳です」

香「はい」

作「それで、魔法ってのは魔力を体の外に放出して使うものでしょ？ＯＫ？」

香「ＯＫ」

作「つまり脳から体を通って魔法を行使するわけ。で、魔力を流すとき、体が抵抗になっちゃうわけ」

ア「つまりあれだ。身体に魔力を流したら流した分だけ削られるんだ」

香「削られるって、どのくらい？」

作「高校生の平均身長を考えて、脳から腕までだったらだいたい１５くらいかな。脳から最短距離の頭までだったら２くらいで平気だ」

香「じゃ、じゃあ、私が実際使える魔力って、１だけ？」

ア「それから、たった１じゃ魔法は使えないぞ」

香「結局、私は魔法無理？」

作「そういうことだ」

香「いやぁぁぁぁあああっ！！」

作「壊れたな」

ア「ちょっと酷かったか？」

作「ま、いっか」

ア「切り替えはやっ」

作「次の投稿も遅れるかもしれませんが、よろしくお願いします」

ア「感想とか書いてくれるとテンションが上がって早くなるかもしれないぞ」

第三話　《六章》真の恐怖

香苗と、何やら意味深なことを話した夏哉は宿の者から、前もって預けてた（らしい）荷物を持って奥に行ってしまった。

しかし、妙だな。

どうして……

「アンさんどうしたの？そんな考え込んで」

「どうしましたの？」

私の思考は二人によって遮られた。

「アンさんがね、夏哉君の方向いてなんか難しい顔してたから」

「香苗、この世界では奇法以外の力があるのか？」

「へ？」

「夏哉の持ってた荷物、確か昨日家にあったがそれが何故ここにある？瞬間移動が使えるのか？」

「……」

香苗はポカンとした表情を浮かべ、

「ふ、ふふふっ、あははははははははは、はははははははははは！！」

「うをっ!?」「なあっ!?」

いきなり笑い出した。
私と真樹はいきなりのことで悲鳴をあげる。
驚いたのは私たちだけではなく、周りの人も香苗の方に視線を向ける。

「ちょ、かな、かなえ、香苗が壊れた!?」

「香苗、しっかりしなさい!どうしたんですの!?」

「ねぇねぇ、ちょっとどうしたの!?カナに何かした!?」

知らん!
私はただ質問しただけだ!

「はははは~、は~。さ、さとりちゃあん」

香苗は腹を抱えながら笑いながら瞳に涙を浮かばし、るあと一緒に来た沙鳥に反応する。

「カナ!?大丈夫!?」

「あんさんが、アンさんが……はははは!」

「私か!?私なのかっ!?」

「アンちゃん何したの!?」

私は何もしていない！！

「まぁいいや！真樹、カナを部屋に連れていって！」

「分かりましたわ」

沙鳥が真樹に指示を送る。
ここまでしっかりした所は始めて見たかもしれない。

「私はどうする？」

くいっと、親指を香苗たちの方へ指す。
ついていけということか。

指示通りに香苗の元へ行くと、前方から先に行ってた筈の夏哉が走ってくる。

「真樹！香苗のバカ笑いが聞こえたんだけど、なんかあった？」

「いえ、わたくしもよく……。アンさんが何か言ったようで」

「アン？」

夏哉がこちらを向く。

「私は変なことは言っておらん」

「はぁっ、はぁっ、みんなごめん……。もう大丈夫～」

香苗はどうやら落ち着きを取り戻したようだ。

「えっと……香苗、何がなんだかさっぱり。まず沙鳥は？」

「沙鳥様はるあちゃんと一緒に保護者が来るのを待ってますわ。それから、わたくしも状況が飲み込めてないのですが、結局峯岸さんとはどういう関係なんですの？」

「いや～、ちょっと人前だと言いにくいから部屋についてからでいい？」

「分かった」

「分かりましたわ」

夏哉は私たちを連れて歩き出す。

私もそれにそれに付いていく――が、

「――ッ！？」

今の感覚は――

「あれっ？おいアン来ないのか？」

「あ、済まない。今行く」

今度こそ皆に着いていく。

宿の一室はそれなりに広く、寝るだけなら五人は普通に入る。
夏哉は備え付けの座布団を取り出してみんなに渡す。
私は断ったが。

「えっと、じゃあまず俺からでいい？」

夏哉が切りだ――

「待って！私から、私から言わせてっ！！」

したと思ったら香苗が割り込んできた。
どうしてそこまで必死なのか分からない。
私はそんな重要なことを言ってしまったんだろうか？

「あ、まぁ、いいけど……」

突然の香苗の申し出に若干戸惑いつつも、先手を許す。

「えー、夏哉君が部屋に向かったときね、夏哉君預かってた荷物もらったでしょ？」

「そうだけど」

「それでアンさんが、？夏哉の部屋にあった荷物がどうしてここにあるんだ？魔法以外の力でテレポートを使ったのか？？って聞いてきたから」

テレポート？

隣にいる夏哉を肘で小突き、意味を聞く。

どうやらテレポートと言うのは瞬間移動のことのようだ。

「なるほどね～。二人理解した？」

「わたくしは」

「いや、訳が分からん」

「ＯＫ～、ちゃんと説明してやるからちょっと待ってろ」

そう言って夏哉は立ち上がり、香苗の前で膝をつく。

「夏哉、君……」

「香苗」

とても優しい顔になった刹那。

「いふぁいいふぁいいふぁいいふぁいっ！！」

おもいっきり両頬をつねった。

「おいこら香苗。テメェふざけてんじゃねぇぞ。何そんなことでバカ笑いしてんだ、アァッ！？」

「ふぉ、ふぉふぇんなふぁい！！」

「アンはまだここ来て一週間も経ってねぇんだから分かんねぇに決まってんだろうが。それとも何か？そういうこととしてアンを蹴落と

して俺を手に入れようとしたのか？腹黒いなこの野郎」

「ふぃがうふぃがう！！」

「アンも真樹もなんか言ってやれ」

つねる行為をやめないままこっちを振り向いた夏哉の顔は――にんまりと意地悪そうな笑みを浮かべていた。

なるほど。

いぢめろと、そういうことか。

そういうことなら。

「じゃあまずは真樹から」

「分かりましたわ」

真樹もノリノリのようだ。

「香苗、目的のためなら手段を選ばないのはいいですが、それで友人を陥れるなど、恐ろしいにも程がありますわ。わたくし、付き合いを考えた方がいいのかもしれませんわね」

「ふぁきちゃあん！！」

次は私か。

「香苗、お前は私のことが気に入らなかったんだろ？今までだったら沙鳥だけがライバルだったのに、急に現れた私が目障りなんだろ？そんなに私のことが嫌いだったんだな。今までの振る舞いはすべ

て虚構、だったんだな。裏切られた私は、これから何を信じれば……！」

顔を手で覆い、泣く真似をする。

指の隙間から覗かせると、香苗があたふたして今にも泣きそうな顔を、夏哉が呆れたような顔を、真樹が何が起こってるのか分からないと言った顔をしている。

夏哉がやれと言ったのにどうして呆れられる？

そして完全に当初の目的から逸れている気がする。

「ふぁ、ふぁんちゃん、ふぉふぇんなふぁい。わふぁふぃ、ふぉんなふふぉひひゃなふへ。ふぁから、ふぉの、ふぁふぁとをふぁちになっふぇふへふぁふぇんふぁ？」

もはや何を言ってるか分からない。

だが、そんなことはもうどうでもいい。

私は、いや私たちは動き出した。

「「かなえぇぇぇぇぇぇぇええええええええええええええええっ！！」」

私と真樹は香苗に抱きつく。

夏哉（しょうがいぶつ）をどけて。

「グフェッ！？」

変な声が聞こえたがそんなのは耳に入らない。

私は少しでも香苗に近づこうと、強く強く抱き締める。

「かなえぇ！そんな頬を赤くして涙目なんて反則だぞ！！」

「沙鳥様！申し訳ございませんっ！！今だけ、今だけは香苗に頬擦りをさせて下さいましっ！！」

「ぺくちゃっ！」

「……さとりちゃんいまのくしゃみ？」

「え？そうだけど」

「えっと……だいじょうぶ？」

「うん、風邪じゃないから。それよりまだかな～」

「さとりちゃんさとりちゃん、おさんぽいきた～い」

「ん？じゃあ少し歩こっか」

「うん！」

「「かなえ～」」

「ま、真樹ちゃ、アンさんも！あぅ～」

あれから十分くらい経っただろうか。
私たちは未だ香苗に抱きついている。

香苗には幼児特有のぷにぷに感がある。

夏哉に抱きついたときも気持ちよかったが、香苗は香苗で柔らかくて気持ちいい。

ところで、今まで無視してた夏哉は何してるんだろう？

香苗に抱きついたまま首を回す。

……すぐに見つかった。
夏哉は部屋の片隅で踞っていた。

さすがに可哀想になってきたので夏哉の元に向かう。
決してあの姿を見て抱きしめたくなったというわけではない。
決して、決して！あんな姿をした夏哉を慰めれば好感度が上がるなどということは考えていないっ！

頭を振って今の思考を飛ばす。
大丈夫、疚しいことはない。

「夏哉」

「ん？おぉ来た来た。じゃあ本題に入るぞ」

あれ？

「夏哉？」

「ん～？どうかした？」

なんか普通だ。

全然落ち込んでない。

「夏哉、落ち込んでなかったのか？」

「いや、こうしたらアンがこっちに来てくれるかなと」

なっ！？

読まれてただとっ！？

私の考えが分かってこんなことをするなんて……

「……弄ばれた」

「ちょっと待てごめんなさいわたくしのせいなので誰にも言わないで死にたくありませんだからそんなことを言わないで下さいお願いします」

いきなり土下座された。

突然のことで頭がついていけない。

見るからに何か謝ってるんだろうが、理由が皆目見当がつかない。

だから私は香苗に聞くことにした。

「香苗、夏哉が急に謝ってきたんだが」

「へぇっ？なに？」

まだ真樹に抱きつかれてるが、うん、気にしないでおこう。

「あぁ。夏哉に弄ばれたって言ったら……」

ゾクッ！！

急に殺気が私の肌を突き刺した。
それは、不可視なもので物理的効果がないものである筈なのに、私の肌をジリジリ焦がし、胃や心臓、いや、体内にある臓器すべてを締め付けるような感覚に陥る。
背中は己が出した汗によってビッショリで、服もヘバリついてしまい気持ち悪い。
しかし、そのようなことも気にしてられない。
気を抜いたら、殺される。

これほどまでの殺気は、今までに受けた試しがない。

私同様に殺気を感じたんだろう、真樹は逸速（いちはや）くその場から立ち去る。

殺気の中心に立つ花街香苗の元から。

「ふふふ、なぁつやくぅぅぅぅぅん。あぁそびぃましょぉぉ」

「どこの友達だお前はッ！？まままま、待て、待ってください誤解なんですってばっ！！アンテメェッ！！だから言うなって言っただろうがッ！！俺を殺す気かッ！！」

「何言ってるの？そんな殺すなんてしたくないよ。この服汚したくないし」

「だったら殺気消せやコラッ！！そして俺を殺さない理由は服のためだけなのか！？」

「あはは～、何言ってるの？当たり前じゃん。この服お気に入りだし。だからまず両腕両足の骨を尾って動けないようにしてあ鼻の骨も折ってそれから針を買ってきてそれを全身に刺すの針って治療に使われてるから健康にいいんだよその後気が済むまで蹴ってケッテ死にそうになったら沙鳥ちゃんに治療させてもう一度やり直しへへへすっ

っっっっっごく楽しそ♪」

「ヤンでる！お前ヤミすぎだぞッ！！周り見ろ！アンとか真樹とかドン引きだぞ！！」

「周りなんてどうでもいいよ。私、夏哉君のことしか目に入ってないから」

「それはもっと別の機会に聞きたい言葉だから――ダメダメダメ寄るな来るなぁぁぁぁぁぁぁあああああああああッ！！」

「「……」」

私と真樹はゆっくりと部屋から出た。
二人っきりにしてあげた方が良いだろう。

私は夏哉から借りてた携帯を取りだしメモ機能を表示させる。
そこに真樹に聞きたいことを文字として打ち込み、真樹の肩を叩く。

「ひっ！？香苗待ちなさいわたくしはただ貴女が可愛かったから抱きついたのであって決して嫌がらせのためでは――！……って、あれ？」

恐らく、肩を叩いたのが香苗だと思ったのだろう、すごい怯えようだ。
分からなくもない。

「香苗、じゃないなら……アンさん？」

「そうだ、といっても伝わらないか」

私は携帯を真樹の目線に合わせて携帯の画面を掲げる。

「きゃっ？携帯が浮いて――……ごめんなさい、アンさんが持ってるのですわよね。えぇっと……『夏哉に弄ばれた、と言ったらああなったんだが、どういうことだ？』……夏哉に何されましたの？」

さっきの文を消して新しい文を打ち込み真樹に説明する。

すると真樹は呆れたような顔でため息をつく。

『どうした？』

「いえ、これは誰のせいと言うか……アンさんってここに来て間もないんですわよね？」

『ああ。六日ほどだ』

「では教えますが、弄ぶと言うのは、確かに夏哉の思い通りに動かされたという意味もありますが、男女の間だと微妙に違って、夏哉がアンさんの体を好き勝手使ったという意味とも取れるんですの」

……何？

『本当か？』

「えぇ……ですので、ああなったのはその言葉が引き金になったのですが、アンさんは知らなかったわけですからどうしたものかと」

……後で謝っておこう。

そう心に誓った。

因みに、その後本題であった、何故荷物が瞬間移動したかというのは、運送会社というものに頼んだからしい。
今までも見たことがあって気になっていたのだが、どうしてあんな鉄の塊が動くことができるか聞いたところ?科学?の力で動いてるそうだ。
奇法以外で炎や雷を出せたり物を動かしたりする技術は、魔界のそれより発達しており、聖界に似ているように思えた。

第三話　《六章》真の恐怖（後書き）

作者「は～いどおも、今回は予想より早く書けました」

真樹「周りにとってそれが早いのか遅いのかは分かりませんがね」

作「それを言うんじゃありませんッ！」

真「そんなことより、今回香苗、壊れましたわね」

作「壊れた壊れた。よく考えると俺壊れたキャラ出したことないわ」

真「ところでわたくしは何時になったら沙鳥様と一緒になれるんですの？」

作「いや～、こうやって小説を書いてるとさ、小説って俺が書いてるんじゃないんだよね」

真「は？」

作「だから、俺が最初にこう書くって決めると、後は皆が勝手に動いちゃうから俺の予想エンドにはなるんだけど過程が思い通りにならないんだよ」

真「……つまり、なんですか？わたくしたちのせいで沙鳥様と二人きりになれないと、そういいたいんですの？」

作「フラグは自分で立てよう！」

真「……このバカに頼ったわたくしがバカでしたわ」

作「さて、実はまた謝らなければならないことが……」

真「またですの？何度は何を仕出かしましたの？」

作「第二話《九章》の後書きなんですが、途中で切れてました。うる覚えなんですが書き加えておきました。ご迷惑をお掛けしました」

真「なんですの？本当になんでわたくしの時に毎度毎度謝るんですの？嫌がらせ？」

作「本当に、これは本当に偶然」

真「第一、ちゃんと確認しなさい。どうして確認もせずに投稿しますの？」

作「だって恥ずかしいし」

真「……優しい読者の皆々様、このようにバカな作者なのですが、どうかこれからもよろしくお願いします」

作「ホントごめん！」

真「そういえば今回はわたくしだけなんですの？」

作「いや、ほんとは夏哉もなんだけど……」

夏哉「……（ガクガクブルブル）」

真「え、と、夏哉？」

夏「ひっ！？真樹様！？わたくし何かしでかしたでしょうかっ！！申し訳ありません！次こそは気を付けますからっ！！」

真「……これは？」

作「あまりのショックで誰も怒らせないようにしようとするあまりに臆病になり、口調が真樹化したんだよ。なっ」

夏「も、申し訳ありません香樹（こうき）様！わたくしなんでもしますから！だからお仕置きだけはお止めくださいい！！」

真「作者にまでこのような対応！？作者！これは大丈夫なんですの！？」

作「大丈夫、な、はず……だよね？」

真「そこで疑問系っ！？」

第三話　《七章》優しい女の子

「あ、さとりちゃん！おはなさいてる！」

「ん？あ、ほんとだ。なんて名前だろ？」

「えっとね、？ヤマツツジ？っていうんだよ。ごがつよっかのたんじょうかなんだよ」

「へ～、詳しいね。どっかに書いてあったの？」

「ちがうよ。るあがしってるんだもん」

「え、嘘っ。……私小学生にまで学力負けた」

私は今るあちゃんとお散歩中で、小学生に打ちのめされました。

「さとりちゃんだいじょうぶ？」

そしてなんてことだろう、小学生に頭を撫でられて慰められてしまった。

普通だったらかなりのショックだっただろうが、今は違う。

「――――――っ！！可愛い！可愛すぎるよ！！るあちゃん！ぎゅうぅぅぅって抱きしめていい！？」

「え？えっと……だっこ？」

「うん、だっこだっこ！」

「るあだっこすき！」

私はるあちゃんをだっこした。
あぁぁぁ、るあちゃんの可愛い顔がこんな近くに！

「さとりちゃん」

「あ、ちょっと苦しかった？」

「ううん。おっぱいがおおきくてぷにぷにできもちいい～」

「そっか、気持ちいいんだね」

それならもうちょっと強く抱きしめてもいいよね？

と、考えていたら空から何か声が聞こえた。
なんだろう、と思い風属性の魔法を耳にまとわせる。
すると今度ははっきり聞こえた。

「なっ、奇法!?ここでか……！チッ」

アンちゃんの声が聞こえた。
それにしても、なんかすごい焦ってたみたいだったな。
奇法って……なんだっけ？
どっかで聞き覚えあったんだけどな～。

空を見上げてると、何かが降ってきた。
その何かは金髪をなびかせ……って金髪？
もしかして……

「アンちゃん？」

「沙鳥っ！？」

アンちゃんは私にかかと落としを食らわせまいと、ギリギリのところで止まった。

その距離わずか２ｃｍ。

「……」

「この馬鹿っ！何故奇法を使うんだ！バカ！マヌケ！オタンコナス！巨乳！美少女！モテモテ！」

……

「るあちゃん、ちょっと待っててくれるかな？さとりちゃん今からお手洗い行ってくるから」

「うん、わかった」

「じゃあ、動いちゃダメだよ」

私は適当に歩く。

向かう先なんて分からない。

ただ単に人目につかないところに行くだけだ。

しばらく歩いて、ようやく誰もいない場所に着いた。

「ハァッハァッハァッハァッハァッハァッハァッハァッハァッハァッ！？！？！？！？」

何あれ！？
ほんと何！？
なんでかかと落とし！？
私何かした！？
私なんにもやってないよね！？
夏哉！？
夏哉関係なの！？
いやそれでも何もやってないし！！
あ～、メチャクチャお腹痛い！！
ほんとなんなの！？
るあちゃんだっこしてたのが悪かったの！？
それとも……

「あ、沙鳥？その、悪かった。うん、今回は私が悪い。ほんとごめん」

「……胸、なの？」

「は？」

「胸がいけないんでしょ！？この無駄に育った胸がいけないんでしょっ！？それが原因なんだよねっ！？私だって好きでこうなった訳じゃないんだもん！！うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！！」

「ぅわ、待て、落ち着け沙鳥！本当に私が悪かった！沙鳥は悪くない！！ああ！どうして私は今日こんなに空回りしてるんだぁぁっ！

？」

その後、私たちが落ち着いて仲直りするのに五分かかった。

「ねぇねぇ、結局そっちどうだったの？」

「あぁ、香苗の件は気にするな。かなり大変なことがあったがそっちは後回しだ」

今現在るあちゃんのところに向かっている。

お手洗いという名目で出てきたから早めに戻らないと。

それより大変なことっていうのが気になる。

「大変なことって？」

「……、――――――ッ！！（ガクガクプルプル）」

私が聞いた途端、アンちゃんは顔を真っ青にして震えている。

「えっ！？どうしたの！？大丈夫！？」

「す、済まない……。ちょっとトラウマが。それより夏哉のことだが、夏哉とるあの姉の灯里というやつの実家が近かったらしい」

「へ～」

「へ〜、では済まされんぞ。実家が近いということは昔近いところで暮らしてたということで、今まで学校も同じだ。夏哉の昔は、知ってるだろ？」

あ、そうだった。

それは、夏哉にとっては消し去りたいような過去で、絶対に耐えられるようなものではなくて。

「そいつは同じところで泊まるから難しいかもしれないが、なるべく会わせるな。話によると向こうが夏哉を嫌ってるから夏哉に何言うか分からない」

「ふぅ、わかった。なんとか頑張るよ。夏哉、平気？」

アンちゃんの方を向くと、あからさまに顔を逸らされた。

「……えっと、なんかあったの？」

「沙鳥、これから夏哉に会うときは細心の注意を払え。冗談でも決して怒らず騒がず、純粋な心で接するんだ」

「え？ほんとな、何があったの？」

「……私からはこれ以上何も言えない。この言葉は絶対に忘れるなよ」

そう言い残してアンちゃんは空を飛んでどっかに行ってしまった。

ほんとに何あったんだろう。

ものすごく気になってきたので急いでるあちゃんのところに戻って夏哉に会いに行くことにした。

温泉宿に戻ると、フロントに三人立っていた。
もしかして……

「るあっ！！」

三人のうちの一人、恐らく母親がるあちゃんのもとに駆け寄る。

「おかあさんっ！」

るあちゃんも私のもとを離れて駆け出す。

二人はぎゅっと抱き合った。
母親の後ろから二人もついてくる。

その中の父親が私に声をかける。

「あの、もしかしてあなたが、天雲沙鳥さん？」

よし、ここからが本番。
うまくごまかさないと。

「はい」

「るあを見つけてくれてありがとうございました！」

父親と、隣にいる少女――たぶんこの子が灯里さんだろう――が頭を下げた。

続けてそばで抱き合っていた母親も頭を下げる。

「いえ、そんなに気にしないで下さい。偶然見つけただけですから。るあちゃん、もうお母さんたちから離れちゃダメだよ」

「うん。ねえさとりちゃん」

「ん？」

「るあ、おにいちゃんにありがとうっていいたい」

グハッ！？

あ～、私のばかぁ！

るあちゃんに言っておくの忘れてた！！

どうしよ……、言い訳考えられるかな？

いや、大丈夫。

私はやればできる子だから大丈夫。

夏哉のためなんだから大丈夫、自分を信じろビリーブ。

「ごめんねるあちゃん。お兄ちゃんね、今疲れちゃってお昼寝中なんだって。だから私がお兄ちゃんに伝えておくから、言いたいことある？」

「やだ！るあがいう！」

るあちゃんが駄々をこねる。
どうしよ……。
正直私に子供をあやす能力なんてないし。
それを見かねた灯里さんが声をかける。

「るあ、天雲さん困ってるでしょ？我が儘言わないの」

「でも～」

「ダァメ」

「……はぁい」

るあちゃんは渋々といった感じで引き下がった。

「ありがとう灯里さん、助かったよ」

「えっ？私の名前、知ってるんですか！？」

あ、そういえば初対面の設定だった。

「うん、知ってるよ。五組の峯岸灯里さんだよね？」

真樹が言ってたの聞こえたけど、あってるよね？

「え、あ、あの、はい！その、ありがとうございます！」

あってたみたい。
それか私に気を使って嘘ついてるか。

「あぁ、でもごめんね。名前しか知らないんだ。あと出身中学が実果根中だってことくらいで」

確か夏哉の中学がそうだった。

「そ、そんなことも知ってたんですか！？」

「うん。早乙女真樹って人知ってるかな？同じクラスだったと思うんだけど」

「あ、はい！総合病院の孫娘ですよね！？」

「うん。その子から聞いてね。今も一緒に来てるんだ」

「そうなんですか。羨ましいですね」

「あかねぇあかねぇ」

と、るあちゃんが灯里さんの袖を引っ張る。

「ん？どうしたの？」

「まきおねえちゃんるあもしってる！まきおねえちゃんね、るあとおんなじでおにんぎょうさんがだいすきなんだよ！」

「え、お人形？」

灯里さんが変な顔をする。

ここで変な誤解をさせたら真樹に悪い！

私は灯里さんに耳打ちをする。

「るあちゃんの機嫌を取るためにそう言ったんだよ」

「ひゃあっ？そそそそ、そうなんですか？」

「だから誤解しないでね」

「は、はいっ」

ま、もうそろそろ大丈夫かな？

「じゃ、私はそろそろ部屋に行ってるね。るあちゃん、またね」

「さとりちゃんまたね～」

「本当に、ありがとうございました！」

再び頭を下げられる。

私は手を振ってその場を立ち去った。

「確か隣で、ここだよね」

あの後別れたんだけど、そういえば場所も聞いてないし部屋も一個しか取ってなかったことも思い出し引き返してきた。

幸いにも峯岸家族がいなかったからよかった。
いたら赤っ恥だ。

フロントに聞くと、ちょうど夏哉が借りた隣の部屋が空いていたのでそこを借りた。
二個目の部屋に自分の荷物を置いて、今夏哉のいる部屋に到着した。
夏哉大丈夫かな？
アンちゃんの様子から見て夏哉はかなりへこんでる。
だったらここは元気に入っていこう。

私は扉に手をかけて、思いっきり開ける。

「なぁっつや～！沙鳥ちゃんが来たよ～！！」

「ひいっ！？申し訳ありませんでしたっ！！謝ります！謝りますのでなにもしないで下さい！！」

「……はっ？」

あれ～、部屋間違えちゃったかな？

一歩下がって扉を見る。
うん、部屋は間違ってないよね。

もう一度室内を見る。
そこにはカナ、真樹、アンちゃん、そして一番奥にうずくまってる夏哉。
……さっきは、本当に夏哉が言ったんだよね？

「真樹、状況説明」

「あ、はい。あの、これは誰が悪いというわけではないのですが、アンさんが言葉を間違えて香苗に、夏哉に弄ばれたと言ってしまって……」

「えっ!?もてあそばれたのっ!?」

「ももも、申し訳ありませんでした沙鳥様っ!!すべてわたくしのせいです!!本当に申し訳ありませんでした!!」

「……沙鳥様、アンさんから、絶対に騒がないと聞きませんでした？」

あ、確かにそんなようなこと言われた。

「ごめん……。それで、どうしたの?」

「取り敢えず、そのような事実はありません。ただ単にアンさんが言葉を間違えただけです。しかし香苗はその言葉でネジが外れてしまって、夏哉は言葉では言い表せないようなことを受けたんだと……」

「見て、ないの?」

「見たら人間として失ってはいけないようなものを失いそうだったので。それに、助けようなどとしたら殺されそうでしたので」

話してる真樹は顔を真っ青にしながら説明した。

全部事実ってことか。

「カナは？」

「今は正気に戻りましたが、夏哉から約３ｍ近づくと夏哉がさっき以上に騒ぎます」

「……」

私はカナをにらむ。
カナはあからさまに顔を逸らす。
カナも泣きそうだ。

はぁ～、とため息をつく。
そして私は夏哉に近づく。
夏哉はわたしを見て、恐れてるのだろう、後ろに下がろうとする。
しかし後ろはすでに壁、もう下がれない。

夏哉のもと近づいて、ひざをつき目線を座ってる夏哉に合わせる。

両手を顔に伸ばす。
近づくたびに夏哉はビクビク震える。

私はそっと手を顔に添えて、

夏哉にキスをした。

顔を離すと、夏哉は何が起きたのか理解できなかったようで、ポカンとしてる。

今度は夏哉を優しく抱きしめる。

「夏哉、大丈夫だよ。怖くない。私がいるから平気だよ」

夏哉はしばらく動かなくなり、涙を流しながら私の背中に手を回す。

「さとりぃ～……今日の沙鳥なんかすごい頼もしいよ～」

これは……夏哉戻ったよね？
沙鳥様って言ってないし。
よかった。

「夏哉、るあちゃんもなんとかなったから、心配しないでね」

「……うん」

うわっ、凄い保護欲を刺激される。
男の子としていいことかは分からないけど、これはこれでありかな。

「あ、そうだ。夏哉温泉に行かない？」

「温泉？」

「こんな暗い雰囲気になっちゃったから、温泉入ってサッパリしよ」

「……そうだな」

「それで、ね、夏哉。私と、一緒に入らない？」

「ダメーッ！」

私と夏哉の会話に香苗が割り込んできた。
その声を聞いてなのか、真樹が崩れ落ちた。
まぁ、崩れ落ちた本当の理由はキスかな？

それを思い出すとだんだん顔が熱くなってくる。
ぅわあっ、私本当にしちゃったんだ。

「沙鳥ちゃんそれはズルいよ！」

「ずるい？第一これはカナが原因でしょ？勝手に勘違いして」

「うぅっ」

「それに灯里さんたちがいるんだよ？普通に入ったらばったり遭遇ってことになるでしょ？」

「なら、私も入る！」

「それはダメ。ほら、夏哉まだカナの声でもビクビクしてるんだよ？やっと戻ってきてるのにカナが近づいたらまたぶり返しちゃうよ」

夏哉は私の袖を掴んで隠れてる。

「か、香苗、俺は平気だから来てもいいぞ」

声がもの凄く震えてる。

カナもそれに気付き気まずそうな顔をしている。

「う、ううん、いいよ、ほんとごめんね」

「こっちこそ、悪い……」

「あ、真樹どうする？」

「え、わたくしですか？」

真樹は夏哉をちらっと見る。

「申し訳ありません、わたくしはちょっと……」

「ん、わかった。アンちゃんは？」

アンちゃんは一度考えるそぶりを見せる。

あれ？

即答じゃなかったんだ。

「済まん、私は香苗たちの方に行く」

「えっ？あ、わかった……」

その答えは意外だった。

アンちゃんのことだからてっきり元気よく？行くー！？って言うと思ってたんだけど……。

ま、いっか。

私は考えることをやめた。

考えるのは真樹とかカナの仕事だし。

「じゃあ夏哉、私着替え取りに行ってくるね」

とは言っても隣だけど。

「分かった」

「カナたちもとりあえず荷物こっちに持ってきたら？」

カナと真樹はうなずいて、いったん夏哉と別れた。

第三話　《七章》優しい女の子（後書き）

沙鳥「おっふろ♪おっふろ♪」

アン「ご機嫌だな」

沙「そりゃそうだよ～。夏哉と一緒だよ！」

作者「んじゃあ、約束はこれでいいな？」

沙「約束？……あぁ、あとがきのか」

作「えっ！？今思い出したの！？」

沙「うん、すっかり忘れてた」

ア「まぁこいつらしいな」

作「あ、そういえば沙鳥のプロフィールで追加が一点」

沙「え？そんなところあったっけ？」

ア「何を追加するんだ？」

作「好きなものだ」

天雲沙鳥

好きなもの：アニメ、マンガ、ゲーム、ラノベ、幼女

沙「ちょっと待ってよっ！！」

作「ん？どうした？」

沙「どうしたじゃないよ！なにこれ！？私いつから幼女が好きになったの！？」

作「よーく考えろ、そして思い出せ。香苗や流亜（るあ）に抱きついたことを。すっごい過剰な反応を示してただろ？」

ア「そういえば、そうだな」

沙「そこ、納得しない！」

作「それに香苗に『ずっと一緒にいようね』的なこと言ったし」

沙「だからあれはずっと友達でいようね、って意味で！」

作「しかも抱きついた中六割が幼女だし」

沙「いやそれは知り合いに小さい子が多くて！しかも他に抱きつける友達が、いな、くて……」

ア「沙鳥が自滅した」

作「まぁしょうがないよ。俺がそういう風に設定したし」

ア「私もか？」

作「まぁお前は異端だし。理解者はかなり少ないよ」

ア「そうだろうな」

作「あれ？落ち込まない？」

ア「まぁな。今は沙鳥とか夏哉とか、大切な人がいるから平気だ」

沙「うぅぅ、アンちゃん。嬉しいこと言ってくれるぜこんちくしょう！」

作「は～い、いいところなんで終わりま～す。今後も『四人の魔法使い』、『この想いは変わりますか？』よろしくお願いします。感想もお願い！」

第三話　《八章》出逢いたくない出逢い

「おっふろ～おっふろ～なっつやっとおっふろ～♪」

今俺の隣ではるんるんしている沙鳥がいる。
因みに後三人は別の温泉に行ってる。
三人は普通の男女別、俺たちは混浴だ。

「ねぇ夏哉、本当に私と入ってくれるの？」

「入ってほしくない？じゃあ別れよう。じゃあな」

「待って待って待って！別れちゃダメ！」

沙鳥は俺の腕をガッチリ捕まえて逃がさないようにする。

「……ねぇ、本当に嫌じゃない？私夏哉に拒否られると思ってたんだけど」

「いんや別に、理由としては沙鳥の言った通りだよ。峯岸のお父様に会いそうだし。それに水着とか着るんだろ？それなら平気だい」

「え？着ないよ。お風呂といったら裸でしょ？」

「さようなら、僕は一人で麻雀をしてきます」

「待って待って待って！冗談だから！ホラホラ、ちゃんと水着持ってきたから！」

沙鳥は慌ててレースのついた水着をヒラヒラさせる。
俺のボケにはスルーか。
ていうか……

「沙鳥、お前こっちに来る前から混浴考えてたのか？」

「ま、まっさか～。備えあれば憂いなしだよ」

「お前がこんな難しい言葉を……！完璧に嘘ついてるな」

「これはそんな難しい言葉じゃないよっ！？」

「で、どうなんだ？」

「……そうなればいいなって思ってました」

「素直でよろしい」

「ねぇねぇ、そんなに裸見たくないの？」

また複雑なことを。

「興味はちゃんとあるんです。ただし直接見ようとすると緊張してしまうんです。そして恥じらいを持てと、そう言ってしまうんです。男心も複雑なんです」

まぁ全員じゃないけどね。

「そうなの？私が見てもいいよって言っても？」

「言っても」

「……覗きしようとするのに？」

「俺はしてないぞ。で、それは、向かい合ってみると緊張するから覗いてみようと思うわけだと思うんです」

「ふ～ん」

と、話し合ってるうちに温泉に到着。

「んじゃな～」

「は～い」

俺は男、沙鳥は女の暖簾をくぐった。

服を脱ぎ、タオル巻きゃ平気だろ、と思ってたら、脱衣所の端にロッカーがあった。

なんだ、と思いながら近づくとそこには『レンタル水着　一着二百円』と書かれてた。

神だ！って思ったね。

これで万が一っていうことがなくなった。

早速二百円入れて水着を着る。

「ふは～」

混浴の温泉は俺以外誰もいなかった。
だからかなりゆったりできる。

いや～、温泉今思えば初だよ。
いいね～温泉デビュー。

良い気分に浸ってると、ガラガラと戸を開く音が聞こえた。

「あれ？誰もいない」

「今んとこ二人だけだぞ～」

「まぁお風呂の時間にしてはちょっと早いか。ていうか夏哉もう入ってるの？体洗った？」

「お前は母さんか。洗ったよ、頭以外」

「なぁんだ、せっかく流しっこしようと思ったのに……」

沙鳥はガッカリした風に言う。

「お前はガ……」

キか、と言おうとしたけど言えなかった。
俺は喋りながら振り返り、沙鳥を見た、見てしまった。

沙鳥はちゃんと水着を着ている。

オレンジ色だ。
右胸にはコサージュが一個ついているだけのシンプルなもので、下も上部分にレースがついてるものだった。
髪はほどいていて、少し大人っぽく見える。

「ん？夏哉どうしたの？どっか変？」

沙鳥は自分の体を見回し始める。

「いや、そうじゃなくてさ」

「じゃあ何？見とれちゃった？」

「いや、あの、うん。見惚れました」

沙鳥は普通に綺麗だった。

「へ？」

動きを止める沙鳥。
多分本人は冗談で言ったつもりなんだろう。
素直に言ったらだんだん顔が赤くなってあたふたする。

「あ、え？う、ぁえ、ちょ、あ、ほ、ほんと？おかしくない？」

「全く。いや、もう、ほんと、凄い」

いつもとほんとに違う。
普段は普段でまぁ可愛いけど、こう着るものを変えると凄い変わる。

俺は顔が赤くなるのを悟られないように顔を逸らす。

「そっかぁ、よかった～。ねぇねぇ、似合ってる？」

「知らん」

「む～、さっき可愛いって言ったじゃん」

「言ってない。見惚れたって言ったの」

「可愛いって言ってるのと同じじゃん！」

「ええい！さっさと体洗え！早くしないとのぼせて俺上がるぞ」

「だったら出れば良いじゃん。……あ、そうだ。出るついでに背中洗って～」

「誰が出るって言った？」

と言いつつも俺は風呂から出る。

借りもあるし、こんぐらいはしてあげないとな。

「もぅ、素直じゃないんだからっ」

「俺は素直だ。ほれ、背中向けろ」

「髪の毛もやって～」

こんのやろ～！

「俺は召し使いじゃねぇ！」

「いいじゃん今日ぐらい～！ぶれーこーじゃぶれーこー！」

無礼講の意味分かってねぇぞこいつ。

「はあああぁぁぁぁ～」

大きなため息をつく。

「そんなあからさまなため息つかないでよ～……」

俺はシャワーのヘッドを手にして、髪を濡らそうとするが思いとどまる。

沙鳥の髪を見てて触りたくなってきた。

うわっ、スゲーサラサラ。

それが気持ちよくって何度も手櫛をする。

「夏哉何してるの？」

「お前の髪サラサラだな～って」

「そぉなの？やたー、ほめられたー」

沙鳥は子供のように笑顔になって喜んだ。

いい加減やってると苦情が来そうだったので、名残惜しみながらシャワーを出し、髪を濡らす。

その後ボトルの頭を押してシャンプーを出し、それを両手で擦って泡立てる。

「はーいおじょーさまー、動かないでくださーい」

「わ～い、本当にやってくれた～！頼んでみるもんだね」

「うるせぇ」

泡も結構立ってきたので擦り終了。
まずは沙鳥の頭皮をマッサージしてやる。

「ふぃ～、あ～そこ、きもち～」

つーかこれで良いのか？

「沙鳥さんよ～、誰かの頭洗うなんて始めてなんだけど、これでいいんか？」

「ん～？どーでもいいよ、てきとーに。あ～いいわ～」

適当って……。

「女は髪命なんじゃねぇの？」

「フツーはね～。私は別にきれいに見せようとは思ってないし」

「それは女子を敵に回す発言じゃね？」

「私を敵に回す女の子は少ないよ～」

「そりゃそうだ」

頭を良い感じに洗い、次は髪に入る。

優しく頑張ろう。

泡を髪に染み込ませるように何度も撫でるようにする。

「髪長いと手入れめんどくさくね？」

「まぁね。でも周りに比べたらほんと適当だよ。見たことないけど男の子みたいにワシャワシャ～ってやってるよ」

「女としていいのかよ……。短くしたりはしないの？」

「いや昔ね、髪がきれいだねって言われて、だったら髪切れば普通の女の子に見てもらえるかなって思ってバッサリ切ったわけ。カナよりちょっと短いくらいかな？そんで学校行ったら大騒ぎ。凄いショックだったらしくてね、誰がいじめたーって話になって授業どころじゃなくなったんだよ。それ以来切らなくなった」

「ふ～ん、大変だったな」

「そう思ってるなら私のお髪（かみ）をよろしくね～」

「それ言うなら御髪（おぐし）だ馬鹿野郎」

「そうなんだ、へ～」

ん～、後ちょいかな？

「どう？他にやんなきゃダメなことある？」

「適当でいいって言ったじゃん」

あれは誇張じゃなかったのかよ。

じゃあもう流しちゃって良いか。

「分かりましたよ。じゃあおめめに入ると痛いからギューって瞑ってね～」

「は～い、って私は幼稚園児かっ！？」

「ナイスノリツッコミ。そしてお前は幼稚園児だ」

「う～、ひどぉい！ってちょ、待って！いきなりシャワーかけないでっ！！目に入る！」

俺はなるべく泡を沙鳥の目に送るようにシャワーをかける。

沙鳥の反応おもしれ～。

これがあれか、好きな子にちょっかいをかけたくなる小学生男子の心境か。

泡もきれいさっぱり流し落としシャワーを止めると、沙鳥は振り返り睨み付けてくる。

「夏哉！さっきわざと目に入れようとしたでしょ！？」

沙鳥は本当に幼稚園児のように頬を膨らます。

俺はそれを見て、つい手を出した。

「ぷふうぅぅぅ？な、いきなり何すんの？」

人指し指で沙鳥の頬をツンツンした。

うわっ、これはまる。

ツンツンツンツンツンツンツンツンツンツンツンツン。

「ぅえ、な、ええっ？ほんと何？」

「お前のほっぺプニプニで超気持ちいい。お前ほっぺ最高」

「ん、なんかちょっと恥ずかしい！ていうか真顔でやんないでよ」

「それならニヤニヤしながらやってほしい？」

「それは無理」

真顔で返された。

「ちなみにほっぺならカナの方が柔らかいよ」

「じゃあやるしかないな」

「そうだね」

俺たちは固く誓った。

「あ、それより私の胸の方がプニプッ！？」

言い切る前に頭を叩く。

「セクハラは犯罪です」

「う～、叩くことないのに～」

「はいはい、じゃあ次背中ね～」

「うん」

沙鳥は髪を前にやり、背中を露にさせる。

スポンジにボディーソープをつけて泡立てる。

「沙鳥、紐ほどくから水着落ちないように持ってろ」

「え～、めんどくさ～い」

「スポンジ目に当てるぞ」

「それはやめて！」

沙鳥は水着を押さえる。

俺は紐をほどこうとする。

するんだけど、凄い緊張してきた。

なんだよこの状況、かなり恥ずいじゃねえか！

いや、こう考える程状況は悪化する。

意を決し、素早く紐を引き、背中を擦る。

「ぅい！ちょ、夏哉痛い！」

「あぁわり」

少し力を弱める。

うん、もういいや。

「はい終わり～」

「早っ！？早すぎるよ夏哉！髪の半分もたってないよ！？」

「いいの、後は自分でやりなさい」

「前もやって～」

「流石に怒るぞ」

「は～、しょうがないな～」

スポンジを沙鳥のわきにおき、急いで手を洗い湯船へ直行する。

しかしそれが災い、足を滑らせてしまった。

「いっつ～ッ！！」

「あはははははっ！！な、何やってんの夏うわっ！？」

笑いながら言う沙鳥の言葉は途中で途切れた。

その時沙鳥は立ち上がり、俺のそばに来ようとしていた。
しかし足元にスポンジがあることに気付かずに、踏んで滑ってしまった。

俺のいる方に。

躱すことが出来ない俺は受け止めようと手を伸ばした。

うん、ここまでは合ってるはずだ。
そうしないと沙鳥怪我しちゃうし。

そうして伸ばした手は胸へ――は行かずに肩をガッチリ押さえることが出来た。
ここもいい。
どこぞのマンガのように胸を鷲掴みとかそんなことはない。

しかし、やってしまった。

沙鳥は受け身を取ろうと反射的に手を伸ばす。
ということは手で押さえてたものは重力によって下に落ちてしまう。
今回押さえていたものは水着、しかも紐はほどいたまま。

水着が自然の法則に逆らうということはできず、下に落ちてしまう。
故に露になってしまう、沙鳥の二つの大きな……

「あ、え、う、ちょ、な、ちょ、え、ま、え、ぇあ、なっ！！」

沙鳥はもはや言葉になってな――。

ガラガラ。

ザブーンッ！！

「おわッ！？なんだ？」

「ねぇりょう～、なんの音？」

間一髪、沙鳥を湯船に叩き込んだ事でさっき入ってきた男女に見られることはなかった。

「すいません、連れが転んでしまい……」

謝りつつ、水着を素早く回収。

俺も湯船に浸かって沙鳥に水着を渡す。

「夏哉……」

「な、なんでしょう？」

ヤバい、また殺られるか？

俺悪くないのに……

「泡付いたままお風呂の中入っちゃった……」

「……」

それは……

「沙鳥」

「何？」

「忘れよう」

「そうだね」

水着をつけ直した沙鳥は再び上がり、体を洗い直す。
俺も頭を洗うために出る。
沙鳥も流石に人前であれ言うのは言えないらしい。

体を洗い終えて、また湯船に入り、十分ほどで上がった。

俺たちが出るとき、『あの娘可愛かったな……。特に胸が凄い』『それはほんと同意せざるを得ないけどいやらしい目で見るなぁっ！！』『ガバッ!?』とか聞こえたけど気にしないでおこう。
きっと僕らには関係ない。

「ホンットごめんッ！！」

「いいっていいって、気にしてないし」

「いや、女としては気にした方がいくね？」

風呂から上がってから沙鳥と合流すると、即座に俺は謝った。
まぁ当然でしょ。

しかし沙鳥、予想はしてなくはなかったけど流石に今回はボコってOKだったのに許すとは、もうちょい恥じらいを持ってほしい。

「いやいやいや、ちゃんと恥ずかしいは恥ずかしいけど、夏哉なら平気なんだって」

「恥ずいこと言うな」

ポコン

「いった～、暴力はんた～い」

バシッ

「おまっ、何が暴力反対だ」

ベチベチッ

「女の子に手をあげるなんて最低」

ドッ！

「グーで殴るな」

ベチッ！

「ねぇ、そろそろやめない」

「そうだな」

はい、照れ隠し終了。

「カナたち上がったかな？」

「それは女のお前の方が分かってんじゃないの？」

「ん～……まだ入ってるかな？そっちにジュース一本」

「賭けかい。なら部屋につく頃には三人いるにジュース一本」

「じゃあ私カルピス」

「俺リンゴで」

「多分私よりいっぱい時間かかってると思うんだけどな～」

「俺はあの半分くらいだぞ」

「それ短くない？えっと、か、か、か？違う、ん～、もういい！とにかく早い！」

「なんだよお前？」

「あ！おにいちゃんとさとりちゃんだ」

話し合っていると幼い、ちょっと前に聞いたことのある声が聞こえた。

声の方を向くとるあちゃんともう一人……

「峯岸」

今日逢いたくなかった、峯岸灯里と出逢ってしまった。

第三話　《八章》出逢いたくない出逢い（後書き）

香苗「んむ～～～～～～～～！！」

沙鳥「～～♪～～～～～～♪～～♪」

作者「光と影だな」

沙「光、とかげ？」

作「そのネタ何人ぐらい知ってると思ってんだ」

沙「ちなみにカナはその漫画の主人公をモチーフにしました～」

作「そしてその裏話をお前が何故知ってる！？」

沙「ひ・み・つ♪」

作「あっそうかい！」

香「も～、沙鳥ちゃんばっかずるい！！」

作「いや、お前は自業自得だ」

香「うぅぅ……で、でも！それにしたって私夏哉君といいことあんまないじゃん！」

作「あ、いいことと言えば……」

香「何!?これから先私何かあるの!?」

作「今現在香苗がメインになる話が思い付かない」

香「えええええぇぇぇぇぇぇっ!?」

作「その代わり真樹が多い」

香「ホントにヒロイン交代なんてないよね!?」

作「あぁ、それから補足説明なんだけど」

香「無視しないでっ!!」

作「まぁ聞け。これはお前のことだ」

香「私?」

作「神の話あったじゃん?魔界が魔法に特化して、聖界が道具に特化してるってやつ」

沙「あぁ、あったね~。だから私魔力凄いんでしょ?」

作「そうそう。で、香苗の場合は頭脳が特化してるわけじゃん?」

香「うん」

作「実はそれだけじゃなくて」

香&沙「「え?」」

作「聖界は道具の扱いに特化してる訳で、香苗もそういう道具の扱いはピカイチなわけ」

沙「カナそうだったの？」

香「いや、私もはじめて知った」

作「バスケで例えると、沙鳥は魔力、力があるから体力だけはかなりあるわけだ」

沙「ふむふむ」

作「まぁスポーツ万能って言っても技術は平均よりちょい高い程度、バスケのシュートは何回か投げて一本なんだよ。それを体力でカバーって感じ。で、香苗の場合はシュートは体力と力がある限りはほぼ確実に入るわけだ」

沙「カナすごーい！」

香「で、でもでも！私スポーツで活躍したことないよ？」

作「だから、そこで体力と力のなさが原因なんだって。技術があっても力がないと届かないでしょ？それに周りは香苗は運動音痴って思ってるから球技とかはボールは回ってこない」

香「そ、そう言えば！」

沙「ん～、じゃあ投げナイフとかは凄いの？」

作「力がないから距離は出ないけど凄いよ」

香「やった～、新たなスキル～！」

沙「でも投げナイフなんて使わないだろうけどね」

香「……」

第三話　《九章》恐怖の思いと策略準備

「あ～あ、やっちゃったね」

「……本当に、なんというかぁ、すいませんでした」

「いやいや、夏哉が悪いって訳じゃないけど。私の努力は無駄に終わったってことだよね？」

「……怒ってます？」

「え？いや別に怒ってないよ？お風呂一緒には入れてよかったし」

峰岸姉妹から離れて、テンションダダ下がりで歩いていた。

「なぁ、普通風呂って夕方に入らない？なんでおやつの時間に入るんだよ？るあちゃんおやつのおねだりしろよ」

「まぁこの時間に入ってた私たちが言うのもなんだけどね」

それ言っちゃダメでしょ。

そぉんなことを思ってると、部屋に到着した。

「やっぱお前らの方にいるよな？」

「まだいるとは決まってないじゃん」

因みにまだ賭けは続いてる。

沙鳥は猛反対したけど俺がじゃんけんで勝利したから続行中。

「じゃあお前からは入れ」

「なんで」

「マンガみたいなことがあったら大変だろ」

「そんなベタなことはさすがに……」

と言いつつも沙鳥は戸に手を掛ける。

「たっだいま～」

ガチャッ

「「きゃあっ！？」」

「えっと……きゃあ？」

部屋の中から香苗と真樹の叫びが聞こえた。

最後のはきっと空気を読もうとしたアン。

「あ、沙鳥様でしたか……」

「ノック位してよ～」

「ごめんごめん」

「沙鳥、状況説明よろしく」

「えっ！？夏哉君もいるの！？」

「うん。今ヤンキー座りして私のパンツ覗こうとしてるよ」

「バカ言ってんじゃねぇ」

沙鳥の軽そうな頭をパシンッと叩く。

「いった～！何すんのさ？」

無視無視。

「香苗さんに真樹さん、わたくしは何も見てませんから～。で沙鳥、状況は？」

「言っていい？」

「「ダメ」」

「だそうです」

「了解。ホラな沙鳥、俺の危機回避能力すごいだろ？」

「夏哉実は覗いてたりしてた？」

バカ野郎！

どうしてそんな部屋の中の人物（特に真樹）の殺気を買うようなこと言ってくるんだよ！？

どんだけ俺を底辺に持っていきたいの！？

マジで怒ってる!?

沙鳥の表情からはそんな様子は伺えない。
ただの天然なのか、それとも怒りを隠せるほどポーカーフェイスになったのか。
前者であってほしい。

「俺が何時そんなことした?お前とずっと一緒だったろうが」

「ほら、わたしと離れたときにチョチョイと」

「できるわけねぇ!つーかあの雰囲気で覗きができるほど神経図太くねぇよ」

「そりゃそうだね」

やっと分かってくれた。

心からほっとしてると、部屋から声がした。

「沙鳥様、夏哉、もう良いですわよ」

その言葉を聞いて俺たちは部屋に入る。

三人は同じような浴衣を来ていた。
恐らく着替え途中に俺たちが到着したんだろう。
三人とも似合っている。
ちなみにアンは、当然用意されているものを着てるのではなく自分で作ったものだ。
見分けはつかない。

というより三人がここにいるということは……

「リンゴは俺のもの」

「はぁ～、負けちゃった～。ていうかあれだよ。あれなかったら」

「ん？何かあったのか？」

俺と沙鳥の会話に疑問を持ったアンが割り込む。

「何かあったのか、と聞かれたら、何かあったと答えます」

「何その口調？」

香苗が聞いてくる。

「こう言った方が真樹にも分かりやすいかと」

「夏哉……折角沙鳥様とお話が出来ると思ったのに！！」

「通訳をお話と読み取るのかお前はッ！？」

はぁ～、とため息をつく。

そして、空気を変える。

「今からマジで聞いてほしいんだけど」

雰囲気が変わったことに気付き、みんな真顔になる。

「峯岸灯里と会ってしまいました」

「「「えっ」」」

みんな驚きを隠せないと言った表情をしてる。

「みんながなんとかしようとしてくれたのに、俺がぶち壊してしまってすいませんでした」

しばらくの沈黙。

それを破ったのは真樹だった。

「わたくしたち何もしてませんわよね？」

「うん」「そうだな」

「え？」

「確かに話を聞いてどうにかしようと思いはしましたが、香苗の説得で何もしてませんし、アンさんは何かしました？」

「私は沙鳥に教えただけだ」

マジですか？

何これ？

じゃあ俺の謝り損？

「頭下げた意味ねぇ……」

「で、夏哉君。峯岸さんとどうなったの？」

香苗は心配そうな顔をする。

俺は三人にあの時のことを説明した。

「峯岸」

今日逢いたくなかった、峯岸灯里と出逢ってしまった。

「え、なんで……？」

峯岸は目を見開き震えてる。

俺が峯岸に何かしたというわけではないけど、昔の俺のしたことは知ってる。

だから恐怖が体を支配しているんだろう。

「おにいちゃんおきたの？」

るあちゃんにそんなことはなく、無邪気に俺の元へ駆け寄ろうとする。

「――ッ！？ダメッ！！」

しかしその手を峯岸が掴み、引き寄せる。

そしてるあちゃんを抱き締める。

荷物が落ちてもお構いなしだ。
まるで、化け物からるあちゃんを庇うかのように。
いや、これは比喩ではないか。
実際俺化け物だし。

「あかねぇ、いたいよ」

るあちゃんの言葉を無視して俺を睨み付ける。

「?おにいちゃん?って、あなたのことなの!?」

確かにおにいちゃんって呼ばれてたな。

「そうだよ」

「この子に何したの!?」

何したって言えば……

「迷子のその子を見つけた」

あと手を繋いで肩車しておにぎりとかお菓子買ってあげたくらい?
あ、あと自己紹介か。

「嘘!るあを見つけたのは天雲さんだって!そうですよね!?」

「それは……」

「あほ、普通に?柊夏哉が助けました?なんて言ったらお前らパニクるだろうが」

沙鳥の言葉を引き継ぐ。
さぁこれからどうしよう。
るあちゃんもいるしあんまり騒ぎにはさせたくない。

「天雲さん！天雲さんはその人に騙されてるんです！！その人から離れてください、危険です！！」

「え、えっと……」

沙鳥はどうすればいいのか、俺と峯岸を交互に見る。

「言う通りしにしとけ。るあちゃんの前で騒ぎは駄目だろ」

沙鳥だけに聞こえるように小声で言った。
沙鳥は渋々といったように俺から離れて峯岸姉妹の方へ足を向け、通りすぎていってしまった。

「どうして、あなたがこんなところにいるの？」

峯岸は今だ警戒を解かずに聞いてくる。

「くじ引きで当てたんだよ。ほら、麦谷高の近くの商店街でやってたっしょ？」

「あかねぇ、どうしておこってるの？おにいちゃんがなにかしたの？」

るあちゃんにはこの状況が飲み込めず、自身の姉に訪ねる。

「るあは静かにしてて」

しかし姉は妹の問いには答えず、さらに抱く力を加えた。
仕方なく、俺が教えることにした。

「るあちゃん、あかねぇはるあちゃんを悪い人から守ろうとしてるんだよ」

「わるいひと？どこにいるの？」

「俺だよ。あかねぇは悪者のおにいちゃんからるあちゃんが怪我をしないように守ってるんだよ」

「なんで？おにいちゃんせいぎのみかたっていったよね？」

そんなことも覚えてたのか、沙鳥よりも記憶力あるんじゃないか？

「ごめんね、おにいちゃん嘘ついちゃった」

「でもおにいちゃん、るあをあかねえたちにあわせてくれたからいいひとだよ！」

「ありがと」

るあちゃんは何も知らないからそういうことが言える。
それでも、そんな風に言ってくれるのは嬉しい。

「それでね、るあ、おにいちゃんにおれいがいいたかったの。？たすけてくれてありがとう？って」

「うん、どういたしまして。もう離れちゃ駄目だよ」

「うん！」

俺は峯岸と視線を合わせる。

「じゃあ俺はもう姿を見せない、一人で出歩く、それでいいな」

「……」

峯岸は無言のまま立ち上がり、るあちゃんの手を引きながら走って俺の横を行く。
俺はそれを見てる。

峯岸は俺が見えなくなるまで警戒しようとしていた。
しかしその結果周りに気を配ることが出来ず、反対側から来る人と肩をぶつけてしまった。

「あ、ごめんなさい」

「あ～大丈夫大丈夫」

謝り、それからは俺を警戒することなく行ってしまった。

「……はぁ～」

俺は近くの壁にもたれかかる。
ああいう反応はここ一ヶ月されてなかったから、ちょっとくるな。
ま、自業自得だし、しょうがないか。

「というわけなのです」

と、最後は明るく言ってみたものの、やっぱり雰囲気は重かった。

「夏哉君大丈夫だった？」

香苗が心配げに聞いてくる。

「あ～、もう全然駄目。だから香苗こっちに来なさい」

「え、もう平気なの？」

「大丈夫だから来なさい」

香苗は立ち上がり俺のところで正座をする。

別に怒るつもりはねぇのに。

俺は香苗の顔に手を伸ばす。

香苗は何かされるのだろうと思い、目を瞑る。

ぷにっ

「……え？」

「うおっ、これすご」

ぷにぷにぷにぷにぷにぷにぷにぷにぷにぶに

「ちょ、夏哉君？」

ぷにぷにぷにぷにぷにぷにぷにぷにぷにぶにぷにぷにぷにぷにぷに
ぷにぷにぷにぷにぶにぷにぷにぷにぷにぷにぷにぷにぷにぷにぶに
ぷにぷにぷにぷにぷにぷにぷにぷにぷにぶにぷにぷにぷにぷにぷに
ぷにぷにぷにぷにぶにぷにぷにぷにぷにぷに

「これはまるわ〜。香苗最高」

え？
何してるかって？
香苗のほっぺをぷにぷにしてます。

「え、あ、ちょ、えぇ？」

香苗は混乱したのか、言葉を紡ぐことが出来ていない。

「えっと、夏哉？なんでそんなことしてるんですの？」

恐らく香苗も聞きたかったことを真樹が代弁した。

「いやね、風呂の時に沙鳥のほっぺぷにぷにしてさ〜、気持ちよかったんだよ」

「なっ！？そ、そんな羨ましいことを……！」

「まぁそれは置いといて。そんで沙鳥が香苗の方がぷにぷにだよ〜

と言ってきたので今こうしている所存です、って真樹さん？聞いてます？」

「沙鳥様とお風呂を一緒に入ったあげくにほっぺぷにぷにになんてことをするなんて……！どんな感触だったのか言ってから死になさい！！」

怒ってるように思われたが（実際少しは怒ってる）、本音は違ったらしい。

「羨ましかったんだな？」

「な、なにを……」

「羨ましかったんだよな？」

「そ、そんなことは……」

プイッ

顔を逸らされた。

「わたくしが沙鳥様のほっぺをツンツンぷにぷにしたのが羨ましかったんですよね、真樹さん？」

「うぅぅ……はい……」

小さい声だけど、頷いた、認めた。

わぁ～い、真樹に勝った～。

別に嬉しくないけど。

「もぉ、真樹うなだれちゃってるじゃん。夏哉言い過ぎ～」

「そんなことはない。それよりお前ら二人、飲み物買ってきて～。みんなの分」

「何、私パシリ？」

「いいじゃん、結局俺のジュース買うんだし。真樹も沙鳥と二人きりになれるんだし。アンも新しい味を体験できるし。一石三鳥、やったね」

「私の苦労を引いて一石二鳥だよ！ってあれ？得じゃん！？やったね！」

沙鳥がバカでよかった～。

よく考えれば沙鳥に得はないと分かるはずなのにそれに気付かないとは。

「じゃあ行ってくるねっ。真樹行こ！」

「はいっ」

「じゃあ俺も」

そして二人は立ち去っていった。

「夏哉君もどこか行くの？」

「荷物の整理。なんやかんやでドタバタしてたからなんもやってなくてな」

そういって俺も部屋を出て隣の部屋に入る。
とは言ってもそこまで散らかってるというわけではないし、やることも限られる。

鞄のなかを漁り、ひとつの袋を取り出す。

コンコン、と壁を叩く。
隣とは壁一枚だから届くはずだ。

「アン～、ちょっと来てくれ～」

「ん？なんだ？」

そう言いながら壁をすり抜けてやってくる。

「ちょっと頼みがあんだけど」

そして俺はひとつの作戦をアンに伝える。

第三話　《九章》恐怖の思いと策略準備（後書き）

真樹「……（ジーーー）」

夏哉「……（たらたら）」

作者「何、この状況？」

夏「知るか。なんかいきなり睨まれた。作者変われ」

作「怖いからやだ。真樹は何があったの？」

真「……顔を、赤くしました」

作＆amp;夏「「は？」」

真「ほっぺをぷにぷにしたって夏哉が言ったとき、沙鳥様が顔を赤くしましたわ。ほっぺをつつくだけであんなに赤くするとは思えません。何があったんですの？」

作「おまえ、描写にないことを勝手に言うな」

真「貴方は黙ってなさいっ！！」

作「なにその発言！？俺せっかくお前の要望に答えて沙鳥と二人きりにしたのに！」

真「それは当然のことでしょうが！それにそんなの、沙鳥様かわたくしの視点がないと意味がありませんわっ！！」

作「まぁ、ドンマイ！」

真「殺りますわ」

夏「そうだやれやれ～！」

作「夏哉はなんでそっちサイドなんだァァァッ！？なんだ？言っていいのか？俺は作者だからなんでも知ってるんだぞ！？」

真「言うって何をですの？」

作「何ってそりゃ、夏哉とさ」夏「アアアアアアアアアアアアアアアッ！！分かりました！お前の側につくから何も言うなッ！！」

作「ということで何かあるのは明白です、真樹さん」

真「そうですわね。というわけでどちらか言って下さいまし」

作「多分沙鳥が普通に教えてくれるんじゃね？沙鳥が言って不利になるようなことじゃないし」

真「そうですの？では行ってきますわ」

夏「待って、行かないでぇぇぇぇッ！！」

第三話　《十章》話の果てにあるもの

「～～～～♪～～～♪～～～～～♪」

「真樹嬉しそうだね」

「はいっ！」

わたくしは、普段はしない鼻唄を歌いながらペットボトルを持って廊下を歩いている。
それほどまで今の状況は嬉しい。
今まで、沙鳥様と一緒にいることはありましたが、いつも夏哉や香苗が傍にいる。
だから二人きりという状況はとても嬉しい。

「真樹ってさ～」

突然、沙鳥様が話を切り出してきた。

「なんですの？」

「夏哉のこと好きなの？」

「……はぁ？」

沙鳥様の前だというのに、沙鳥様を避難するような声を出してしまった。

夏哉のことが好き？

そんなことはあり得ない。
夏哉が嫌いと言う訳ではないが、恋人になることは絶対にあり得ない。
夏哉に限らず、他の男でも無理だ。
それに今一番親しい男は夏哉なのだから、誰かと付き合うとかは考えられない。

「それはあり得ませんわ」

「そうなの？」

「はい。男と付き合うなんて考えられません」

「じゃあ同姓愛者？」

「……沙鳥様よく堂々と聞けますわねそんなこと」

「相手が真樹だからね。真樹とカナ以外には聞かないよ」

沙鳥様、そんなにわたくしのことを信じて……
？わたし？なんて――

「そういう訳ではありませんわ。単に男が苦手なだけで」

「え～、そうなの～？私には夏哉と仲良さそうに見えるけど？」

「確かに今男では夏哉と一番仲が良いですが、それだけですわ。向こうは知りませんがわたくしは友人で止まってます」

「カナにだったら？照れ隠し～？って言えるんだけど、真樹真顔で言うからね」

「本当のことですし。沙鳥様はどのような性格をお望みで？」

「真樹にはツンデレが似合うと思う！」

「ツンデレ？ツンデレってあれですか？いつもは冷たい態度をとって不意に恥ずかしがり屋になるみたいなものですか？」

「大体合ってるけど微妙に違うかな？いつもは恥ずかしくって素直になれないでツンツンケンケンな態度を取るのは同じだけど、気を抜いたときに出る可愛らしい本音を言うってやつなんだけど、そのギャップがいいんだよねっ」

……沙鳥様はわたくしに何を望んでいるのでしょう？

あ、ツンデレか。

「沙鳥様、流石にそれは……」

「分かってるって。真樹は今のままで十分だって」

「……そうですわね、ありがとうございます」

「何その間？実は変わりたかったり？」

「いえ、そういう訳ではなく、こんなに沙鳥様に思われて幸せだなと」

「へへ、ありがと。お、ちょうど到着」

と、沙鳥様は扉に手を掛ける。

「ただいま、買ってきたよ」

「ん、サンキュ～」

「あれ？アンちゃんいないの？」

あ、アンさんいないんですか。
やはり知り合いでわたくしだけが見えないというのは複雑ですわね。

「ああ、なんかこういう場所は初めてだから見て回りたいんだって」

「アンちゃん大丈夫かな？」

心配そうに廊下の方に顔を向ける沙鳥様。

「あいつもガキじゃないんだし平気だろ。人様に迷惑話掛けねぇよ」

……あれ？
これは――

「今の二人ってなんか子供の心配してる夫婦みたいだね」

「えっ？」「はぁ？」

「……」

わたくしは香苗の前まで歩いて顔の位置を合わせるためにしゃがみ

こむ。

「香苗？貴方今何を言いました？」

「ひぃっ！？ま、まま、真樹、ちゃん？」

香苗の顔が見る見るうちに蒼白になっていく。

「わたくしがチラッと思ったことを何言ってるんですの？」

「あ、真樹ちゃんも思ったんだ？」

しまった！

つい本音を……！

どうしようもなかったので香苗の頬をつねった。

「かなえぇぇぇぇぇぇ～！」

「ひ、ひはひほ～！」

あぁ、香苗の頬は気持ちいいですわ。

「真樹、そろそろその辺にしとけ」

そう言って夏哉はわたくしの肩に手を――

「ヒッ、ぃやあっ！？」

振り返り様に夏哉ね鳩尾に拳を捻（ねじ）り込んだ。

「うぐっ!?ガハッガハッ!!」

「え、な、え、え?夏哉ぁ?」

「はぁっ!はぁっ!はぁっ!はぁっ!はぁっ!はぁっ!はぁっ!…あ」

咄嗟のことでつい夏哉を殴ってしまった。

「な、夏哉?大丈夫ですか?」

「な、なんとか……」

「真樹ちゃんそんなにそういう風に見えた夏哉君が嫌だったの?」

「い、い、いえ。今のはそういうのではなくて……。夏哉、今のは本当に申し訳ありませんでした」

「おお……。でも他のやつにはやるなよ。これは死ねる……」

「夏哉はその死ねるパンチをよく耐えたね」

「……ほんとすごいね俺」

本当に申し訳ありませんでした。
しかし、先ほどのわくたしの拳の威力はかなりのものだった筈で、気絶する可能性の方が高い。
それを受けて、たった数秒で会話が出来るようになるなんて夏哉はどれだけ頑丈なんでしょう?

「そうだ、気分転換に話をしよう」
夏哉は起き上がりながら言う。
「「「話？」」」
わたくしたちは声を揃える。
いきなり過ぎたので当然の反応だ。
「そうそう。この宿調べてたら面白い話があってさ」
「何々？教えて～」
夏哉は入り口付近に背を向けて座り、夏哉から見て右に沙鳥様、正面にわたくし、左側に香苗という順で座る。
「あ、アンちゃんはいいのかな？」
「あいつには悪いんだけどさ、ちょっとこういう話は理解されないと思うんだよな～」
「そうなんですの？」
「うん。だからアンはまた今度」
「そっか。じゃあ始めて～」
沙鳥様の言葉にわざとらしい咳払いで返事をする。

「では。……昔の話なんだけどな、この場所に大きな館が建ってたんだよ。
昔のそこは人里離れた場所で、そこには一人の女とその息子が住んでたんだ。
その館は本来夫のものだったんだけど、夫は病に犯されて故人に。
夫は生前貴族の出でかなり裕福な家だった。
対する女の方は農民の出でいつも貧しい暮らしをしていた。
二人は身分の差はあったけど恋に落ちた。
しかしそんなことがバレたら色々と問題が起こる。
だから二人は皆にこの関係を言わず、隠れるようにして会うようになった。
そしてその会うために作られた場所がさっき言った大きな館。
会う度に二人は益々互いを好きになっていく。
そして二人の間には子供が産まれた。
幸せだった。
未だその関係を秘密にしてた二人にとって、いつバレるんじゃないかって日々怯えながら暮らしていたが、今の生活は充実していた。
そんな生活がいつまでも永遠に続くんだと二人は思ってた。
しかし、そんな幸せな日々は幕を閉じた。

子供が産まれて半年が過ぎた頃、突如不幸が襲った。

夫が倒れた。

女はすぐさま医者に見せた。
医者は胃に異物があると診断した。
しかし当時の医療技術ではどうすることも出来ない。

夫は、自分の息子の誕生日を見ることも出来ずにこの世を去った。

残された女は、息子と一生懸命生きることを決意した。

しかし、ひとつ問題があった。

それは金銭面だった。
今までは全て夫が工面してくれた。
だから大きな館でそれなりの暮らしが出来ていた。
しかし夫が亡くなり、言い方は悪いが金銭源がなくなってしまった。
女も持っていることには持っているが、微々たるもの。
そんなもので人二人分を養えるほどこの世は優しくない。

ある日、女は子といくつかの物が入った籠を背負い人里へ降りた。
その手には一本の鉈を持って。
その道中、一組の若い男女とすれ違った。

その時女は思った。
喉が渇いた、と。

女は躊躇せずすれ違った男の背中を鉈で切った。

男は倒れ、傍にいた女は何が起こったのか分からず、ただ呆然としている。

女は男の隣にいる女にも目をつけた。

顔を女に向ける。

今まで呆然としていた女は自分に命の危険を感じ、その場から離れようと命からがら背中を向ける。

しかし時既に遅し。

背中を向けた途端、サクッという肉を切り裂く音が聞こえた。

それを聞いた女は呼吸が止まり、倒れて血を流す。

血、液体、飲み物。

そのような連想が女の頭には出来ている。

女は籠の中に入っていた陶器を二つ取り出すと、血の溢れるところへそれを置き、陶器に満ちるのを待った。

陶器がどす黒く、赤みがかった液体で満たされた。

女はその陶器を持ち、口へ運び喉を潤す。

その時女は思った。

あぁ、こんなに簡単に喉の渇きが潤わされるんだ、これならずっとこんなことをしてよう、と。

その日を境に里は地獄と化した。

いつも決まった場所、決まった時間に現れると、誰かは分からないが必ず二人はこの被害にあい命を落とす。
そして女はいつも服に真っ赤な血をつけて家に帰る。

その女を、人々はこう呼ぶようになった。

鉈を持ち、血で服を染める女、鉈染女（なたぞめおんな）。
そしてその女が住んでいる館を鉈染の館、と。

そして一ヶ月後、どうしようもなくなった里人たちは武士に依頼して鉈染女を殺すことに決めた。
女は無数の刀傷を負い、全身を包帯で巻かれながら絶命した。

というわけでこの宿の名前の由来でした」

夏哉が長い話を終える。
わたくしたちは何も動かない。
ただ固まっている。
いや、正確には二人だけ動いていた。

沙鳥様と香苗だ。
二人とも震えている。

「あれ？なんでみんな無言？」

「いやいや、いきなりあんな怪談話聞かれたらああなりますわよ」

「そ、そそそ、そうだよ！夏哉のばかぁ！最初は恋愛話でいいなぁって思ってたのに！」

「ひどいよ夏哉君！」

「あ、いや、うん、悪かった」

「沙鳥様を怖がらすのはやめてくださる？」

とはいうものの、実はわたくしもかなり怖かった。
誰も人がいなかったらどうにかなっていたかもしれない。

「すいませんでした」

「というよりこれは本当のこと――」

『……のどが、かわいた……』

「「ひゃあああああっ！？」」

「ん？二人ともどうした？」

「いいいいま、今、『のどがかわいた』って」

沙鳥様が声を震わしながら伝える。
沙鳥様が聞こえたということは聞き間違えではないようだ。

「え？聞こえたか？アンじゃねぇの？」

しかし夏哉には聞こえていないようだ。

「いいえ、わたくしも聞こえましたわ」

「マジ？俺だけ聞こえてない？香苗は……さっき叫んだから聞こえたのか」

香苗は首を縦に振り、夏哉にしがみつく。

「な、なつやくん。あの話って本当なの？」

「いや、知らん。書き込みに書いてあったこと話しただけだし」

「でで、でもね、でもね？いま『喉が渇いた』って、話に出てきたでしょ？まさかゆうれ――」

「いやぁぁぁぁぁぁぁ！！カナ、言わないで！絶対言わないで！そんなの絶対いないから！そんなのあり得ないんだからっ！！」

そういえば沙鳥様は幽霊の類いが苦手だった。

「分かったよ、俺が確認してくる。真樹、どっから聞こえた？」

「えっと、隣から……」

「ん？じゃあ俺の部屋か？行ってくるわ」

「き、気を付けてね？」

夏哉は立ち上がり部屋を出ていく。
そしてすぐに戻ってきた。

「誰もいなかったぞ？」

「「え、嘘！？」」

そう言いながら夏哉は戸を閉めずに入ってきた。

「夏哉、どうして閉めないんですの？」

「いや、みんなの言ってるのが本当ならきっと誰かのいたずらだろ？開けときゃ見えるかなって」

まぁ、確かに一理――

『喉が渇いた。血、血が欲しい』

「なつやぁ！」「なつやくぅん！」

「何？」

「またさっきの声が聞こえましたが、本当に聞こえないんですの？」

「いやホントさっぱり」

夏哉が嘘をついているようには見えない。
それに嘘をついてなんの得があるか。

怖くなってきた。
表には出ていないと思うが、かなり恐怖を感じている。
どうにかならないかと、つい夏哉の方に目を向けて、止まった。
いや、夏哉に目が止まったわけではない。
その後ろ。

白い着物を来た、黒髪の長い何者かがいた。

「あぁ、ぁ、ぁ……」

もはや声が出ない。

その女は、着物の所々を赤い何かで染めていて、その手にはやはり赤く染まっている鉈を持っていた。
それを持ってる手は包帯に包まれていた。
手だけではない。
長い前髪で分かりにくいが、顔にも包帯は巻かれていた。
そして、よく見るとその何者かは浮いていた。

わたくしの、恐らく引きつっている顔を見て何か感じたんでしょう、
三人も後ろを振り向く。

「「ひやあぁぁぁっ！！」」

沙鳥様と香苗が叫び、その場から離れる。

しかし、動かないものが一人いた。

「夏哉っ!?何してるんですの!?」

「何って、こっちのセリフだ。なんもいねぇぞ?」

あり得ない!

夏哉だけには見えてない!?

いや、わたくしたちだけ見えてる?

何故!?

しかし今はそんなことは関係な――

『二人、見つけた。早く、飲みたい』

その何者かはわたくしの思考を遮り、そんなことを言った。

「夏哉!わたくしのことを信じてそこから離れなさい!!」

「え、え?」

夏哉が戸惑ってると、何者かが鉈を振り上げる。

「早くっ!!」

夏哉は立ち上がりその場を離れようとするが、遅かった。

何者かは既に鉈を、その軌道上にいる夏哉に向かって降り下ろす。

わたくしたちは目を瞑る。
その後に聞こえた音は、

カシャッ

……え、カシャ？

わたくしは恐る恐る目を開ける。
そこには、倒れることなく立っている夏哉と、何故かカメラを持った着物姿の何者かがいた。

「え、あ、あれ、え？」

言葉をうまく紡げない。
どうなっているか理解出来なかった。

「ドッキリ、だいせいこー！ドンドンパフパフ～」

夏哉がおどけながら言った言葉を、二十秒ほどかけて理解した。

「「「はぁっ！？」」」

「いや～、みんな面白かったよ。ホイ、カメラ」

そう手を出すと、何者かは夏哉にカメラを渡す。

「さぁって、勘の良い方々はもうお気づきでしょうが、ここで種明かし。はい、オフモード3、2、1」

カウントが終わると、着物、鉈、包帯、髪が全て落ちた。

「なっ!?き、消え――」

「「アンちゃん（さん）!?」」

消えたと思ったら、二人がそんなことを叫んだ。

じゃああれはアンさん?

そう言えばアンさんはものを自由に触ったり出来るとか言ってましたわね。

「じゃあ、今回主役を勤めていただいたアンさん、一言どうぞ」

「「「「……」」」」

沈黙が訪れた。

いや、恐らくアンさんが何か言っているのだろう。

「それどころじゃないよ!」

「そうだそうだ!」

香苗と沙鳥様がいきなり叫ぶ。

やはりアンさんが話をしてた用だ。

「はいストップストップ。いきなりそんなこと言っても真樹が対応できねえだろ？わたくしがアンの代弁をさせていただきます。『まず、この作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などには、一切関係ありません』まぁこれは俺が言わせたんだけど、アン一発で覚えちゃってさ～。偉い偉い」

夏哉は空中で手を左右に振る。

恐らくアンさんの頭を撫でているんだろう。

「はい、で続き。『皆の反応は面白かったぞ。いや～夏哉にさっき頼まれて上手くいくかどうか不安だったが、夏哉の様子からして成功のようだな。それから、こういうときは皆夏哉に抱きつけば良いんじゃないのか？』以上。誤字があるかもしれないけど意味は同じ。何か質問は？」

質問？

わたくしと沙鳥様と香苗は顔を合わせる。

「「「どうしてこんなことし（まし）たのっ！？！？！？」」」

「いやね、？矢田染？温泉って聞いたとき？鉈染？ってピンと浮かんでさ、催しになるかなぁって。で、前日に道具を用意して今日ぶっつけで本番迎えたわけさ。あ、因みに声は着物の中にテープレコーダーを仕込ませて出したやつで、鉈はプラスチック製なやつだからご安心」

「……へぇ、それは良かったですわね」

「え？」

「ナツヤァ？私たちのためにしてくれたんだろうけどね、限度があるよねぇ？」

「あ、あの、皆様方？」

「私たち、本当に怖かったんだよ？」

「あれ～……」

「「「いい加減にしろぉっっっ！！！！！！」」」

「ぎゃあああああああああっ！？」

今日の矢田染温泉に、悲鳴が上がった。

第三話　《十章》話の果てにあるもの（後書き）

作者「どうも、作者です。本日はこのような小説を読んでいただき、誠にありがとうございました。これからもよろしくお願い致します」

アン「な、なんだいきなり？何かあったのか？」

作「いやいや、最近良い切り出し方が思い付かなくてさ。だから初心に戻ってこう、丁寧な風に」

ア「そうか。ところで、あの話はあいつらにとってやりすぎじゃなかったのか？」

香苗「……（ガクガクブルブル）」

作「いや、あれ実はね」

ア「裏話とかあるのか？」

作「最後らへんの鉈で背中を切るってあったじゃん？最初は首を切り落とすにしようと思ったんだけど、わたくし、グロいの苦手なんです」

ア「……つまり、思い付いたのは良いものの、実際書いてみるとその場面を思い出してしまい、自分が気持ち悪くなってしまったからやめたと言うわけか？」

作「そういうこと。もっと言えば俺は血を飲むところで結構来ました」

香「だったら書かなくて良いじゃん！正直に言って！この話、これからの展開に必要不可欠！？」

作「いや、あの怪談話は全く関係ない。言うなれば閑話休題だな」

香「だったら使わないでよぉ！！」

ア「そんなことよりも作者！私の出番がないぞ！どういうことだ！？私がメインなんだろ！？」

作「それは大丈夫。多分この次から本番だから。なるべく長くアンのターンにする予定」

ア「予定、か」

作「正直一話の長さは越えられないと思うけどね」

ア「そうか、なら無理にでも越えろ」

作「それから三話には香苗は出番らしい出番はないぞ」

香「そんなぁ！？」

ア「私は無視かっ！？」

作「じゃ、今日はこの辺で。また来週～」

香「これは本当に来週になると思いますよ」

ア「だから無視するなぁ！死ねぇ！！」

作「グブチュグファッ！？」

第三話　《十一章》同胞との再開

夏哉が殴られた後、皆で食事をした。
選り取り見取りな食べ物を前に興奮した私を見た夏哉、香苗、沙鳥の三人は引いていた。

その後部屋の割り当てを決めるのに一悶着起きた。
夏哉と真樹はすぐに決まった。
しかし香苗と沙鳥は夏哉と一緒に寝たく、真樹も沙鳥と一緒が良く、夏哉とは嫌と主張する。
香苗たちと夏哉さっきまで喧嘩してたのに、現金な奴だ。
夏哉はどちらでもいいと言っているので香苗は一人で夏哉と寝ると言ってくるが、当然沙鳥が許さず反論する。
沙鳥が夏哉と寝ると言うと香苗と真樹が反論。
業を煮やした夏哉が、女子全員で一部屋、異論は許さない、と叫んだことでその場は丸く収まった。
因みに私も女子の一員だそうだ。
残念。

午後十時半になり、今まで一緒にいた夏哉は自分の部屋に戻った。

香苗たちは布団を敷き始める。
私の分の布団は怪しまれるため敷かず、沙鳥と香苗の間に挟まれるように寝ろとのことだ。
順番は真樹、沙鳥、私、香苗だ。

寝るときの際、抜け駆けしないようにとお互いがお互いの手を握ろうと沙鳥が提案してきた。
真樹は嬉々と、私と香苗は渋々と従った。

三十分ほど経つと、皆疲れていたのかぐっすり眠ってしまった。

……そろそろか。

私は腕の形を変え、限りなく細くすることで沙鳥と香苗の手から逃れる。

こうしてみると、やはり私は人間ではないと自覚する。

干渉モードをオフにして床をすり抜け、隣の部屋に向かう。

そこには夏哉が寝ていた。

私は夏哉を起こそうとして、やめた。

やはり夏哉には関係ない。

「済まないな」

「……んっ、ん～ん」

ビクッと体を震わす。

起こしてしまったか？

「なーつやー？」

「……」

無反応、ということはまだ寝ているか。

私はすぐに外に出て、人気のない――まぁ夜に人気も何もないのだが――近くの森に向かった、体に風魔法をまとわせて。

森のなかで、少し開けた場所に着地した。

「……現れろ」

脳に埋め込まれた翻訳機能を停止させて言う。

つまりこの言葉は魔界の言葉だ。

私の呼び掛けに、音もなく十から二十の魔族が現れた。

見たところ三、四人がアルトラで、残りがトアラと言ったところか。

因みに以前来た五人の刺客は、百足のような奴がアルトラでその他がトアラだ。

……？誰それ？？とか、？百足強かったっけ？？とかはいってくれるな。

貴族と言っても弱い部類だ。

私が観察をしてると向こうのリーダー格であろう、背丈二ｍ五十？程の人間とドラゴンが掛け合わさったアルトラが話しかけてくる。

「久しいな、クーレラ《二番目》。相変わらず趣味の悪い格好だ」

「……あぁ、お前タクノム《偉大》か。なんだその姿は？イメチェンか？」

チッ。

心の中で舌打ちをする。

おどけた風に言ったは良いがこの状況はマズイ。

ただでさえアルトラ一人で力の差があると言うのに、それが三、いや四人か。

それに加えトアラも十三人。

どうやっても部が悪い。

その中でもタクノムはマズイ。

タクノムは私の知る限りではかなりの実力者だ。

しかし知る限りではあのような姿ではなかった。

顔はカブトムシのようで、胴体は箱のような直方体、人間でいう肩の付け根からは左に五十?程の刃が三本、右にバズーカ砲のようなものが装着されていた筈だ。

「イメチェン?」

「イメージチェンジ、人からの印象を変えるために自分の姿を変えることだ。それにしても、たった一ヶ月しか会っていないと言うのに?久しい?か。それほど私に会いたかったのか?」

「戯れ言を。アルクシア様に背いた罪、此処で裁かせて貰う」

「そう簡単に出来るのか?私はそのアルクシア様相手に逃げ延びたんだぞ?」

「……本当にそう思っているのか?」

「……なんだその言い種は?」

「貴様、奇法量が極端に減っているな」

私は後ずさる。

やっぱりバレたか。

「おおよそ、トアラ四、五人と言っ――」

話の途中で私は踏み込む。

タクノムではなく、一番近い樹のようなトアラに。

手に炎を薄く刃のように纏わせ敵を斬る。

「ブグファッ！？」

しかし殺さない。

拳をトアラの体内にめり込ませる。

「ふっ」

息を短く吐く。

そして私だけが持つ特殊能力（アビリティ）を発動させる。

「吸収（ドレイン）か」

「そうだ。これが二番目たる所以だ」

私たち魔族の名前は、全て神アルクシア様に決めてもらっている。

そしてその名前には全て意味があり、それが自分自身の意味になる。

つまり私は二番目、魔族の中で神の次の実力ということだ。

その実力には奇法だけではなく頭脳、技術、経験、とにかく全てを駆使しての実力だ。

いま使っている吸収（ドレイン）は、文字通り相手の奇法力の半分を吸収するアビリティだ。

奇法力を抜かれたトアラは気絶する。
私は魔族の弱点である頭を斬る。
魔族は体を斬られても死なない。
弱点は脳と心臓だけで、どちらかを潰さなければいずれ回復する。

「そういえば無駄を嫌う貴様らが、どうしてこんなに集めてきたんだ？もしかして、私を過大評価してくれているのか？」

「……本当はな、そこのトアラ六人と俺ら三人だったんだがな、何故か他がさ迷っててな。今日此処で出逢ったから従わせた」

「さ迷う？ここで？」

おかしい。
何故地球（ここ）で魔族がさ迷う？
しかもそれをタクノムが知らないというのがおかしい。
知らないうちに異界の門（ゲート）を使ったのか？

私が考えてると、読み取ったのかタクノムが教えてくれた。

「こいつらは最初に俺がお前を殺すために派遣したやつだ」

「……よくもまぁそんなに敵にペラペラ話してくれるな。良いのか？」

「関係ない。結果貴様は始末するんだからな」

……本当に始末されるかもな。
さっきまでのやり取りの内容を覚えたからといって特に役立てるものはないし。

それにしても、どうしてわざわざタクノムまでも来る必要がある？
あいつは言ってしまえば王のようなものだ。
全員を束ねてはないにしても八割五分程度は支配しているのに自身が来る必要はない。
じゃあ何故？
他に役目がある、とは思えないから奴自身が来ることに意味がある？
士気を上げるとか地球を見たかったとか私と直接会う必要があった――

あれ？
まさかあいつ……

「タクノム」

「なんだ？」

「お前、私に惚れたか？」

「ほれた？」

あぁ、？惚れる？は地球の言葉だったか。

「つまり私にお前の子を産ませたいのかと聞いている」

「なぁッ！？貴様、いきなり何を！？」

狼狽えるタクノム。
それにつられどよめき始める魔族の者たち。
その隙を逃さずもう一体のトアラをさっきと同じ方法で襲い、奇法

力を奪う。

「クーレラ、どのような思考を持てばそのような結論に至る？」

「普通に考えろ。私一人倒すのにお前はいらん。お前は王なのだから他の奴に任せてれば良い。なのにお前が来たと言うことは私に会いに来たぐらいしか思えんからな。成る程、一ヶ月会わないだけで久しいと言ったのは自分が寂しくて仕方なく、その姿も私の好みに合わせて人間のような姿という訳か」

「貴様ッ！異端者の分際でタクノム様に何をほざくッ！？」

隣にいた側近のようなアルトラが叫び、私に襲いかかる。
しかしそれをタクノムは手で制する。

「馬鹿が、挑発に乗せられるな。彼奴は俺らを怒らして隙をつくのが目的だ」

「いやいやいや、タクノム、今さら取り繕っても遅いぞ？さっきの焦りの顔は面白かった。まるで私の言ったことが図星だったかのようだぞ？」

「俺は貴様を殺すつもりでやって来た」

「私の死に間際を看取ってくれるのだろ？まぁそれには感謝するが、私は死ぬつもりもないし、先約は既にいる」

「先約だと？ワヤカか？それともマシュッテンか」

これを聞いてくるということは、本当のようだ。

「さぁ、なっ！！」

言葉と同時に地面を思いきり踏む。
すると地面が揺れ、大半のものがバランスを失う。
これは地属性の魔法で、半径二ｍほどの範囲に小規模な地震を起こさせるものだ。
まぁ地面が揺れると言っても普通の人間なら揺れは感じないんだが。

私は四人の中で一番弱いであろう狐顔で二本足のライオン、尻尾がとかげのようであるアルトラに標準を定め、地面から円錐条の岩を生やす。
取り敢えずこれは試しだ。
二人分吸収した私でどこまで通用するのか。

アルトラは私の攻撃に一瞬狼狽えはしたが、それだけだった。
私の魔法を片手で、虫を払うかのように吹き飛ばした。
本気ではなかったとはいえ、これは絶体絶命というやつではないのか？

「弱いな。カレスにも勝てないか」

「一対一なら倒せ――」

「――――！」

突如、私たちには理解出来ない音が聞こえた。
確かに意味は理解できない。
しかしその音自体は聞いたことがある。

私は風を足に纏わせ、音源である茂みのもとへ一瞬で駆け寄る。
その間にいたものは吹き飛ばす。
その茂みにいたのは、

「夏哉！？」

「――――――」

何か言いながら頬をかいて気まずそうな顔をした夏哉だった。

第三話　《十一章》同胞との再開（後書き）

夏哉「うおぉ、今回はアンしか活躍してねえな」

作者「活躍と言ってもまだ戦闘本番は始まってないけどな」

沙鳥「でもなんやかんやでアンちゃんさ、三話ではやっと活躍、て感じだよね」

夏「まぁ、言われてみたらな」

作「あ、活躍と言えばさ、今までの話振り返ってみたんだけど……」

夏＆amp;沙「「ん？」」

作「夏哉って、そこまで活躍してなくね？」

夏「えっ！？嘘だぁ！」

作「だってさ、一話の刺客たちはアンメインだったし、神々のバトルは完璧フォロー側だったし、二話なんて香苗と沙鳥がメインだったっしょ？三話も微妙だし」

夏「じゃあ、一番活躍してるのって……」

作「アンじゃね？バトってるし。まぁ恋愛面では香苗か沙鳥だろうけど、夏哉は一番活躍してないと思う」

夏「テメェこら作者！！なんで俺の活躍増やさねぇんだッ！！」

作「まぁまぁ、この後ちゃんと活躍させるさ」

夏「……マジ？」

作「マジマジ。二人くらい命救っちゃうから」

沙「それはネタバレになるんではないんでしょうか？」

作「まぁ、こんくらいなら平気さ」

夏「そういや作者、補足説明あるんじゃねえのか？」

作「あるある～。あのですね、前に言った魔力の基本値ですが、あれは全て地球にいたときと言うことですので、魔族が魔界に帰ったときは約三倍ほどになりますよという訳です」

夏「はい、じゃあ後書き終わり。感想くれたら嬉しいだそうで～す」

沙「ねぇ作者、この話の終わり方って夏哉が灯里さんと再会した時みたいじゃなかった？」

作「……沙鳥さん、気にしてるんだから言わないで下さいよ。文才なくてすんません」

第三話　《十二章》殺す決断

いきなりの登場に、私は慌てふためくしかなかった。

「あ、な、なんで、夏哉なんでここにいるんだっ！？」

さっきまで夏哉は布団に入って寝てた筈なのに。

私の質問に、夏哉は意味不明な言葉で返してきた。

「――――――――？」

この言葉が理解できない。

と思ってその原因に思い至った。

翻訳機を機能させていなかった。

私は心の中で念じ、機能させる。

「夏哉、これで聞こえるか？」

「おぉ、普通に喋った」

夏哉はいきなりのことで少しの驚きを覚えたようだ。

「なんでお前がここにいる？寝てたんじゃなかったのか？」

「いや～あんときね、実は起きてたんだけど寝ぼけててさ。最初はアンがいたずらしに来たと思ったからいいやって思ったんだけど、

よくよく思い出してみたら謝られた気がして、部屋見に行ったらアンがいなかったから探しに来た」

「その、済まなかった」

「それは何に対して謝ってんの？」

「は？」

「わたくしは今怒っております。何故だか分かりますか？」

「えっと……私が誰にも頼らないで危険な目にあってるから？」

「はい残念」

夏哉に頭を叩かれた。

ちょっと痛かったので頭を押さえる。

「そんなことじゃありません！俺は、お前が何も言わずに勝手に出ていったことに怒っているんです！」

ビシッと指を差された。

「別に俺はお前が何やろうが誰かに大迷惑をかけない限り止めないけど、いきなりいなくなったらビックリして心配するでしょーが。何やるかは言わなくていいから？出掛けてくる？の一言ぐらい言うかメモを残すぐらいしろ」

夏哉の言葉に、私は項垂れることしか出来なかった。

「……済まなかった」

「よし許す」

今度は、衝撃ではなく優しく撫でられた。

「それで、どうすんの？」

「どうする、とは何が？」

「この状況だよ。一人でやるのか、俺と一緒にやるのか」

「……一人でやるって言ったら？」

「俺は傍観してるよ。止めはしない」

「手伝ってって言ったら？」

「戦ってる間にどうして夜中に俺とアンが出掛けてるのか二人に説明しろって命令する」

私は考える。

しかし、どっちを選ぶか、ではない。

どんな言い訳が一番良いか、だ。

「じゃあ飛びっきり良い言い訳を考えておく」

「おっけ～」

―――――――――

なんだ、あの人間は？
クーレラとはどんな関係だ？
いやそれより、どうして話したり叩いたり出来る？
どう見てもあれはこの世界の生物だ。
異世界のものとの接触は神以外不可能。
しかし、あれは神でもないのにクーレラに干渉している。
もしかして、あれが依代か？
それなら、あり得るかどうかは別として納得は出来る。
それなら、あいつは殺すべきではない。

俺が決心すると同時に、向こうは戦闘体勢に入った。

「お前ら！あの人間は殺すなッ！狙うは反乱者、クーレラのみだ！！人間は連れて帰る！！」

俺の一声で全ての者が戦闘体勢に入った。

クーレラが話し掛けてくる。

「そう言えば言ってなかったな」

「何をだ？」

「私、名前変えたんだ」

「な、なんだとッ！？貴様！反乱だけでなく、神の洗礼すら反するつもりかッ！？」

俺たちの名は神から授かったもの。
その名は自分の存在を表す。
それを変えるなど、自分の存在を否定するのと等しい。

「血迷ったか……！」

「別に魔界を裏切ったんだからこだわることはないだろう。今の私の名は？アン？。それと、もうひとつ」

そこで言葉を区切ると、クーレラは隣にいる人間に抱きつく。

「私の先約はワヤカでもマシュッテンでもない。ここにいる柊夏哉だ」

俺は、ただ呆然としているしかなかった。

有り得ない。
どうしてあんな貧弱で、しかも異世界のやつを選ぶ？

俺の心は、怒りに満ちていた。

「前言撤回だ！今すぐ彼奴等の首をもぎ取ってこい」

『ウオオオオオオオオッ！！』

――――――――――――

うわっ、タクノムのやつ相当キレてるな。
挑発しすぎたか？

これからの対策を考えていると、夏哉に袖を引っ張られた。
翻訳機を機能させる。

「どうした？」

「あの～、皆さんいきなり大声出しているんですが、状況を五十字以内で説明しなさい」

うむ、五十字か……。

「わたしのすきなひとはなつやだといったら、りゅうみたいなやつがきれて、ころせとおたけびをあげた」

指を折りながら言う。
四十六字、なんとか出来たな。
欲を言えば五十字ピッタリで終わらせたかったが。

「正直かなりマズイ？」

「マズイな。特にタクノム、さっきの竜みたいなやつが一番マズイ。私を他の誰かに取られたから気が荒立っている。それにあれは魔族の現時点で二番目に強いぞ」

「へぇ～アンちゃんモッテモテ～」

「まぁそういう訳だから援護頼む」

「ちょい待ち」

私がどれから倒すか考えていたら、夏哉に呼び止められた。

「俺もちゃんとやるって。まかしときんしゃい」

「いや、しかし……」

と言った瞬間、夏哉がブレた。

「え？」

そう思ったら夏哉は消えていた。

「ガァッ！？」

戸惑っていると後方からタクノムの声が聞こえた。

その間コンマ２秒。

振り返るとタクノムは飛ばされ、そこには夏哉が立っていた。

何かを殴ったかような格好をして。

タクノムは木々をすり抜け、姿が見えなくなる。

まさか、夏哉がタクノムを殴り飛ばした？

周りの魔族も、ただ呆然としていた。

どうしてそんなことが出来た？

ここからタクノムまでは５ｍほど離れている。

それを一瞬で詰め、油断してたとしてもあのタクノムを殴り飛ばしたなんて。

それに一番不可解なのは、夏哉は奇法を使っていない。

つまり、これは夏哉自身の力と言うことで、しかし人間である夏哉があんなに出せるわけがない。

思い当たる節があるのは昔の……

「アンッ！！」

夏哉の叫びで我に帰る。

夏哉を見ると、近くにいた鋭い１０ｃｍ程の爪をもつやもりのようなトアラに襲いかかっている。

それに気付いた私も、未だ理解が追い付いていない近くの熊にワニのような口と尻尾を持ったトアラに攻撃をする。

夏哉は拳、私は生成した炎の剣。

夏哉の拳は見事顔に直撃して地面に沈めた。

私の剣は相手の右肩から左脇にかけて深めに斬り、返す刃で両足を切断する。

斬った傷は焼いて出血させないようにする。

大きな叫び声をあげる熊型のトアラが倒れるのを確認せずに夏哉に叫ぶ。

「夏哉！そいつをこっちに持って来いっ！」

夏哉は未だ地に伏しているやもり型のトアラを蹴り飛ばす。

……普通の人間は２ｍ以上は蹴り上げないと思うが。

ちょうど私のところに来ると、私は剣を突き上げ串刺しにして、それを剣ごと地面に落とす。

私たちの一連の動きを見て、全ての者が我に帰った。

「タクノム様ッ！？」

猫と人間を混ぜ合わせた体型、といえば良いのだろうか。
体格は人間で二本足だが腕や足は猫のもの。
顔も髭が生えたり瞳も瞳孔が縦に鋭く広がっている。
しかし頭には耳でなく２０ｃｍ程の長さで太めの角が生えているアルトアだ。
タクノムが飛ばされた方へ走り去っていく。
先程私に怒声を放ったのもこいつだ。
因みに女。

「夏哉、戻ってこい！」

私は夏哉を呼び戻す。
先程までは奇襲だから成功したが、本番はこれからだ。
一回態勢を建て直した方がいい。
夏哉は言った通りに戻ってきた。

私はその間に二人のトアラの体に腕を一本ずつめり込ませて、二人文の奇法力を吸収する。

体から腕を抜き、緑の血を払う。

「えっと、何やったの？」

夏哉が言いにくそうに言う。

「こいつらの奇法力、つまり魔力を吸収したんだ」

そう言いながら私は足で心臓を踏み潰して二人を絶命させる。

「……殺す必要があるのか？」

そこでハッとなる。

私は今の行為をなんの迷いもなくただの作業のように行っていた。

それこそ、人が朝起きて歯磨きをするかのように。

それ程までに私にとって今の行動は普通だったのだ。

しかし、夏哉にとって殺しは非日常だ。

やはり夏哉に、いや香苗も沙鳥もこの世界に巻き込んではいけない。

だから私は非情になった。

「面白いことを言うな。私はあの時だって五人の魔族を殺したぞ？その時は何も言わないで、何故今になってそれを言う？あの時は自分で殺す必要がなくて、今は自分も殺さなければいけなくなるからか？」

「アン？」

夏哉は違和感を感じたんだろう、眉を動かす。

「言っておくがな夏哉、私たちにとってこれは普通だ。向こうは私を殺しにかかってくる。だから殺す。前言撤回しよう、殺しが出来ないなら足を引っ張るだけだ。私一人でやる。夏哉は宿に戻ってろ」

一言、一言言葉を紡いでいく度に胸が締め付けられるように痛む。
どうやら私は嘘をつくのが苦手らしい。
本当の気持ちを言い出したくなる衝動に駆られる。
しかし、それを言っては駄目だ。
言ったら夏哉は絶対私のために殺すと言う。

「早くしろ、早くしないとこいつらも襲ってくるぞ」

「アン……」

夏哉は呟く。

「俺が悪かった。ごめん」

そして頭を下げた。

そんな隙を見逃すわけもなく、ここにいる魔族全てが一斉に襲ってきた。
あるものはその体ごと、あるものは奇法で生成した武器を持ち、あるものは空から、あるものは炎弾や水弾などの遠距離奇法。

「夏哉ァァァアアアッ！！」

私の叫びで夏哉は今置かれた状況を理解した。
しかし理解しただけで一斉砲撃は躱せない。

「くそっ！！」

悪態をつきながら、私はもうひとつの特殊能力（アビリティ）を使用する。

時空支配（タイムルール）。

世界全ての時を止め、その中を私だけが動ける。
その間私はすべてを傷つけることは出来ないが、物は動かせる。
まぁリスクはあるんだが。

私は夏哉を抱え、攻撃を掻い潜り、安全な場所に隠れる。

時空支配（タイムルール）を解く。
およそ7秒、7分か。
「うわぁぁ――あ、あれ？」

「夏哉、だいじょう――うぐっ！？」

私は立てなくなり、そのまま倒れ込んだ。
今回は足に加えて痛覚もか。

「ア、アン？どうした！？」

「ハァッ、ハァッ、な、夏哉、怪我ないか？」

と言って気付いた。
今私は演技をしてたんだ。

「今、私はお前を、助けるために、足の感覚、が、無くなって、痛覚が全身、に回ってる。だから、足手まとい、なんだ。ハァッ、早く、帰――」

ぎゅっ、と。

私は抱き締められた。

「ごめん。ほんとごめん……！」

夏哉の悲痛の思いが伝わってくる。
私も謝りたくなってくる。
しかし、と自分を律する。

「謝ってる場合か……！足を犠牲に、逃がしてやったんだ。早く逃げろ」

「大丈夫」

夏哉は、しっかりとした声で言う。

「大丈夫。やってやるよ」

夏哉の決意を私は否定した。

「やめろっ！！夏哉は誰かを殺す必要はないっ！！」

そして自分の過ちに気付いた。
こんなことを言ったら――

「アン、ほんとありがとう。俺のために。本当に大丈夫だから、殺す。アンは休んでな」

夏哉は私を横にする。
それを抗う気力は今はない。

「夏哉、7分だ。7分経ったら動けるようになる。それまで耐えろ」
時空支配（タイムルール）のリスク、それは私の感覚をどれかランダムで失うか、痛覚を与えるかだ。
今回は足の感覚が無くなり、その上痛覚も与えられるという運の悪い状態だ。
そしてこの効力は時間を止めた時間の60倍、つまり7秒の場合は60倍の7分の間だ。
それを過ぎれば効果も消える。

「分かった」

夏哉はそのまま歩いて行く。

――――――――――

どういうことだ？
何が起きた？
いや、どうなったかは分かる。
あの人間に殴り飛ばされたのだ。
それは理解出来る。
しかし理由が分からない。
確かに、弱ったクーレラに俺等に干渉出来る人間、人間には驚きはしたもののそれだけで、油断はしていた。
あんなのが一人くらい増えたところで痛くも痒くもない。
そう思っていた。

俺は殴られた腹部を見る。

そこは、皮膚が破れ、新しい皮膚が覗いていた。

俺の皮膚は特殊な仕様で、二重になっている。
外皮は鎧のような役目を持っており、内皮を守っている。
この外皮は中まで衝撃を与えないし、１００？の鉄球を落としたとしても砕かれない程の強度を誇っている。
ましてや拳などでは逆に拳の方が砕ける。
例えクーレラが奇法であの人間を補助したとしてもだ。

彼奴は本当に何者だ？
本当に神なのか？

いや、それは有り得ない。
アルクシア様という神に一番近くにいる俺だから分かる。
神と俺らとは次元が違うのだ。
雰囲気というか、立ち振舞いというか、兎に角全てが違う。
威圧や、存在が他とは比べ物にならない。

あの人間にはそれを感じない。
それどころかこの場にいる誰よりも感じない。
そのような奴が、どうやれば俺の皮膚にこれほどまでのダメージを与えられる？

「タクノム様ッ！！」

「ルホンか……」

側近であり、魔族の中で神の次に信頼しているルホンが俺のもとに駆け寄る。

「ご無事で――タクノム様、それは……！」

ルホンは俺の腹部を見て絶句する。

「信じられないが、彼奴がやった」

「え、そ、そんな……」

ルホンは驚愕のあまりへたり込む。

「それにしても、来るのが遅かったようだな？」

「も、申し訳ありませんでしたッ！！ルホン《従者》という身でありながら相手の行為に呆然としてしまいました！いかなる罰をも受け入れます！！」

ルホンは片膝を立て頭を下げる。

「フン、まぁいい。行くぞ。彼奴等二人を殺す」

「ハッ！」

俺は立ち上がり、飛ばされた方へと見据える。

「ルホン、貴様翻訳機を持っていたか？」

「ハッ、ここに」

ルホンはこの空間を切り裂き亜空間を出現させ、そこから翻訳機を取り出す。

俺はそれを受け取り額へと持っていく。

翻訳機は頭のなかに吸い込まれていく。

正常に機能するかを確認すると、俺は飛んで元の場所へと戻る。

第三話　《十二章》殺す決断（後書き）

アン「皆、今回も見てくれてありがとう。今回も私の独壇場だったな」

沙鳥「い～な～。私も引き続いて出番なしだよ～」

ア「まぁでもお前はスピンオフでも出てるからいいだろ？ちょっと前には後書きも出たんだし」

沙「でもなんか皆に百合百合言われちゃうし……」

作者「しょうがないよ、事実なんだし」

沙「誰がだっ！」

ア「いや、いきなり？抱き締めていい？？はないだろう」

沙「だってさぁ～、可愛かったんだもん」

作「拗ねた子供のように言うな」

沙「もういいもんっ。あ、あのさ、作者に聞きたいことがあるんだけど」

作「ん？」

沙「魔界では魔法のこと？奇法？って言うでしょ？」

作「そうだよ～」

沙「でも魔界の言葉って片仮名ばっかだよね？どうして奇法だけ感じなの？」

作「……」

ア「目を逸らすな」

作「名前をつけたご本人登場！」

沙＆ａｍｐ；ア「「へ？」」

アルクシア「どうも」

沙＆ａｍｐ；ア「「え～～～～っ！？」」

作「神登場」

ア「あ、ああ、アルクシア、様？」

アル「怖がらなくていい。今日は何もしない。後書きだし」

作「それでは早速、アルクシアさんに答えていただきましょう」

アル「どうして奇法だけ表記が違うのか、だよね？……知らない」

作＆ａｍｐ；沙＆ａｍｐ；ア「「「え？」」」

アル「だってあたし作者から産み出されたんだから、神の神は作者で、と言うかそういう設定を考えるのが作者でしょ？」

作「やめてぇ！なんでそういうこと言うの！？」

アル「だって本当のことだし。作者考えてないの？」

作「すいませんでした。ノリでつけたら駄目だね。深い意味とか全くないよ」

沙「あ、ねぇねぇ」

ア「どうした？」

沙「今思うとここにいるメンバー凄くない？神にその依代に魔界元ナンバー2って」

ア「……本当に、凄い状況だな。少し怖……」

アル「……」

ア「あ、アルクシア様？」

アル「クーレラの人型って可愛いね」

ア「え？」

アル「もうちょっと幼く出来ない？メルティーの依代くらい」

ア「メルティー……メルティウム様か。わ、分かりました」

ポンッ

ア「ど、どうでしょうか？」

アル「……可愛い」

ア「え？あっ、ちょっと！どうして抱き締めるんですか！？」

沙「……これって、もしかしてアルクシアがあんなだから私も抱きつきたくなる衝動に駆られるのかな？」

第三話　《十三章》一人目の貴族

アンを人目のつかないところに置いて、さっきの場所に戻る。

チラッと後ろを振り返る。

そこにはアンがいるはずだ。

アンはきっと、俺に殺さないようにするために言ってくれたんだろう。

『大丈夫。やってやるよ』

自分がアンに言った言葉を反芻する。

『本当に大丈夫だから、殺す』

あんなことを言ったが、正直なところ迷っている。

そりゃ殺しなんてしたくない。

でもそうしなければアンが死んでしまう。

「ああ～！」

苛立って頭を掻く。

なんで俺こんなに優柔不断なんだよ。

好きな子も選べないし……。

「……分かった、結果論を考えよう」

自分で確かめるように呟く。

どういう結果になってほしい？

みんながハッピーエンドになればいい。

どうなればそうなる？

誰も死なない、誰も殺さないようにしてもうアンが襲われないようにする。

そのためにはどうすればいい？

アンに対する認識を変えればいい。

それなら……

――――――――――――

私たちの中には未だに動揺が解けていないものがいた。

私も、していないと言ったら嘘になる。

なんとか隙をつき攻撃を放ったとしても、この場にはタクノム様とルホン様がいない。

アルトアが私とカレスしかいない状況で動揺するなと言う方が無理な話だ。

それに攻撃の当たる瞬間、クーレラと人間が消えた気がした。

実際弾幕が晴れた後には死体や肉片が全く広がっていなかった。

人間ならまだしも、あの二番目があれで殺られる筈がない。
つまりあそこから人間を連れて逃げたのだろう――あの全方位からの攻撃を一瞬のうちに。

かつてタクノム様から聞いたことがある。
クーレラに奇法とは異なる特殊能力（アビリティ）があると。
それがあるから？二番目？なのだと。

恐らくそれで逃げたのだろう。

現状把握が終わった今、タクノム様とルホン様がいない状況に置いてやるべきことはひとつ。

「ウズナ《頭脳》、どうする？」

カレスが聞いてきた。

「タクノム様が帰ってくるまで私が指揮を執る。異存はないな、カレス《鋼鉄》？」

「分かった」

カレスが頷くのを見計らって私はトアラに叫ぶ。

「聴けッ！動揺するなッ！タクノム様が戻られるまでは私が指揮を執る！指示に従えッ！！」

皆が私の方に注目する。

「奴等はまだ死んでいない！」

ザワザワと、全ての者がざわめく。

「静かにしろ！！相手は腐っても二番目！そう簡単に死ぬわけがない！警戒を怠るなッ！その命をとして、奴等の首をタクノム様に捧げろッ！！」

『オオオオオオオオオオオオオオオオッ！！』

これで一先ずは士気を保てた。

後は周囲の警戒だ。

何故かは知らないがクーレラは力を失っている。

特殊能力（あのちから）があったとしても多勢に無勢、奇襲を狙ってくる筈だ。

それにあの人間も、スピードや力が私たちと同等、いや、それ以上かもしれない。

そんなことは俄には信じがたいが認めよう。

そうしなければ見えないこともある。

この世界は確か、力でも物でもなく人との繋がりに特化した世界だ。

そんな世界であんな力を出せるとは思えない。

クーレラの力か特異体質と考えるのが妥当か。

そう考えていると、前方の茂みから音が聞こえた。

「ウズナ様、確認してきます」

肉を寄せ集めてそれを丸みの帯びた頭と腹に象り、太めの手足を二本ずつ付けた小柄なトアラが言う。

私はそれを了承し、向かわせる。

ゆっくりと音源に近づくトアラ。

後ニ、三歩で茂みというところで、丁度トアラの右側から何か飛び出した。

飛び出した何かはトアラの傍で止まる。

それは先程の人間だった。

人間は止まると同時に拳を構えていた。

繰り出された拳は、反射的に左足を軸に半回転したトアラの頭があった場所を殴った。

しかし攻撃を躱したは良いものの、咄嗟のことでバランスを崩す。

あいつは終わった。

そう思ったが、人間は攻撃をしない。

いや、出来なかった。

理由は単純、自分もバランスを崩して肩を地に付けていた。

それを見て理解した。

「貴様等、聞けッ！あの人間にはスピードや力を付加させる能力の様なものがあるが、それを制御しきれていないッ！それに加えて戦闘経験がない！！脅えるな！！力があっても扱う技術がなければ恐るるに足らん！」

バランスを崩したトアラの目付きが変わった。

体勢を立て直し人間を見据える。

―――――――――

マ、ママ、マズッ！！
奇襲したのになんも出来てねぇ！！
その上力入れすぎて倒れるし。

倒れた瞬間、人間大の大きさの兎のような魔族が叫んだ。
ウサ耳があるのに全く萌えがない。
まぁそれは人間じゃないからかもしれないが。
今思えば服を着ている。
出会った頃のアンも着てたから、もしかしたら女なのかもしれない。

何を叫んでるかは分からないが、それが終わった途端、さっき襲ったキューピー（？）を丸っこくした肉々しい魔族が体勢を立て直しこちらを睨み付けてくる。

とっさに伏せたまま足を動かし相手の足を刈りにいく。
体のほとんどを地面に付けていたため思いっきり力を出してもバランスを崩すことはない。

俺の放った蹴りは、今度こそ当たりキューピー（俺命名）の体をぐらつかせる。
キューピーの体は見た目通り分厚い肉で包まれているようでダメージ的にはあまりない様に見える。
しかし今度はキューピーが地に伏した。
その間に俺は立ち上がりキューピーを他の魔族がいるところに蹴り飛ばす。
蹴り飛ばされたキューピーは二人の魔族を巻き添えにして、何にもぶつかることが出来ずに森に消えた。

死んではいないと思うが、あれほどの大きさのものを高速でぶつけたんだから気絶くらいはさせられたと思う。

魔族たちの方を向く。
残りは後八、いや、さっき竜のやつ飛ばしてそれを追ったやつもいるから十か。

これからどうしよう。
今何分くらい経ったっけ？
もう奇襲なんて出来ないからめんどくなるだろうな。
だったら正々堂々と、

「誰かー、俺の言葉分かる人いませんかー？」

説得することにした。

でも今思えば向こうが翻訳機持ってないとどうしようもなんないんだよね。
失敗失敗。
……これ最終手段だったのに。

それに、

「うをっ！？」

俺の言葉を合図にしたかのように一番攻撃力の高い炎弾をいくつも撃ってきた。
それを避けながら、あの右手が欲しい、と心の中でぼやく。
まぁ無い物ねだりだからしょうがないと思い、相手の遠距離魔法を避けながら前へ突進する。

突進だから今度は止まらず、そのまま魔族にぶつかる。
ぶつかった相手は体長一m程の鳥のような魔族で、地に立っているもののその足は細く陸上には向いていない体型だと伺える。
突進した際魔族の羽を掴み、飛ばされそうになる魔族をこの場にとどめる。

突然のベクトルの変化に魔族は声をあげたが無視してこちら側にてを引く。
こっちに向かってくるところにカウンターで拳を顔面にお見舞いする。
今度は羽から手を話し吹き飛ばす。

これで後九。

全神経を足に集中させてその場から離れる。

それは偶然だった。

俺が下がった瞬間、炎の刃が先程あった頭の部分を通過し、頬を掠めた。

「うわあっつッ!?」

傷自体は深くないと思うが、頬は刃の熱で火傷をしているだろう。
それに加えて刃からの熱波が顔を包み込む。
焼けはしないものの、サウナに入ったように暑い。

取り敢えず距離は取れた。

その距離約十m。

しかし、遠距離魔法を持ってる向こうはこんな距離をなんともなかった。

向こうのウサ耳が何か指示を繰り出す。
それに答えて相手は空中に円錐形の石が現れた。

いや～、マズマズッ！
あんなん当たったら死ぬって！！
いや炎も死ぬけど。

何か盾になるものを探す。
って、向こうこっちに触れねぇから無理じゃん！！
魔法使うか？
ほんとはまだ取っておきたかったけど。

そう決めて力を込めようとすると、石の礫（つぶて）――にしては大きいが――を打ち出す。

しかし早さがなかった。

これ幸い、と魔法を使うのをやめて体力を削らないようにギリギリで避けることにした。

それがマズかった。

一番近くの石を躱した。
その瞬間石が破裂した。
比喩でもなんでもなく砕け散った。

その破片は容赦なく俺の体中に襲いかかってくる。

「ガ、アアアあああああああああ！！」

その破片の威力はバカにならないもので、服をすり抜け直に肌に突き刺さる。

幸いなことに体内に残るほどの威力はないし、数える程度しか刺さっていない。

しかもそれだけにとどまらない。

誘爆するように他の石も破裂していく。

それに石の中心から爆発しているのか、破裂する瞬間に風が起こる。

ひとつだけなら問題ないが、それが何十ともなると話は別だ。

激痛から逃れようとするが、風圧によって動けない。

風圧に身を任せれば次の破裂を近くで受けてしまうので出来ない。

十秒くらい続いた。

石は全て誘爆されてたので円錐形の石が突き刺さるということがなかったのが幸いだ。

破裂がなくなり、痛みで膝をつきそうになったがなんとか踏ん張る。

突き刺さってる石を抜く。

「――クッ！っあぁっ」

血が服に染み渡る。

それを確認してから七人の相手を見る。

ウサ耳が何か言っている。

今現在、あのウサ耳が指揮を執ってるようだ。
それならあいつ倒せばなんとかなるか？
距離を取るのはまだダメだと思い、接近戦を選ぶ。

――――――――――

……微妙だな。
人間相手にトアラが四人もやられるとは。

だが分かったこともある。
あの力はクーレラから与えられたものではない。
武器らしいものは持ってない、完全近距離で遠距離攻撃を持っていない。

後はあいつ事態が私たちに干渉出来て、触れたものには私たちに干渉できない、と言ったところか。
それは先程の礫を見て分かった。
服が破れていない。

「奴は遠距離の攻撃を持っていないし防ぐ手立ても持っていない。接近戦に持ち込むな」

皆各々奇法を使うため集中する。

ふと、人間を見る。
人間は右に顔を向けている。
視線の先を追う。

そこには何もない。
ただ森だけだ。

森の中に、何かあるのか？
何かあるとすれば……

「カレス、右側の森にクーレラがいる可能性がある。三人くらい連れて警戒しろ。まだ行かなくて良い」

「分かった」

カレスは手近な三人に声を掛けて右側に寄る。

その瞬間を狙ったかのように人間は動いた。

その狙いは私。

一直線に、私を見る。
あれははったりかっ！？
ここの指揮が私だと判断し、まず私を殺すことに決めた。
そのためにわざと他のところに視線を向け気を逸らしたか……！

「カレスッ！！命令撤回！遠距離攻撃であいつを止めろ！！」

カレスだけでなく他のトアラも攻撃を加える。
六人の一斉攻撃なら、速度があっても躱せない。
そう思っていた。

しかし人間は、翔んだ。

奇法を使って。

有り得ない。

何故だ？

あいつはなんだ？

どうして私たちに触れる？

どうして奇法が使える？

どうしてクーレラ《異端者》なんかを助ける？

どうして、どうして、どうして――――――

その問いには誰も答えなかった。

第三話　《十三章》一人目の貴族（後書き）

真樹「……暇ですわね」

香苗「出番ないしね。っていうか今寝てるって設定だから暇って言うのもどうかと……」

作者「因みに三話は一回真樹の一人称が入る予定」

真「そうですか」

作「あれ、喜ばんの？」

真「最近作者の言葉が信じられませんので」

香「スピンオフの『その想いは変わりますか？』でも色々予定通りにいってないしね」

作「じゃあいいもんっ。僕の言葉は信じないんだよねっ！僕が夏哉の好きな人は真樹だ、って言っても信じないんだよねっ！」

真「そんなの、当たり――」

香「や、やっぱりそうなんだ……。真樹ちゃんも夏哉君のこと好きだし……」

真「香苗？落ち着きなさい。何口走ってるのです」

？？「呼ばれて飛び出てにゃにゃにゃにゃーん」

真「なんですの、このどこかの生徒会の帯に書いてあるセリフはっ！？」

？？「知らぬ。紙に書いてあった」

香「え、メルティウムさん？」

作「つーか誰も呼んでねぇよ」

メルティウム「黙っておけ。時に作者、先日はどうしてアルだけを呼んだ？」

作「だって質問に答えて欲しかったから」

メ「神の出番は均等にしろッ！だからこの小説は人気がないのだ」

作「関係ねぇだろそれ！！」

真「……あれが神、ですか。余計にカオスな状況になりましたわね」

香「あれ？真樹ちゃんメルティウムさん知ってるの？」

真「後書きではなんでもアリですので。本編では知らないことになってますわ」

香「へぇ～、便利だね」

真「あの神が香苗に……。ショックでしょうに」

香「な、何がショックなの？」

真「見て分かりません？あのグラマーなスタイル。それが地球に来るときはスレンダーとも呼べない小さな体ですわよ。可哀想に」

メ「いやいや、ショックは受けてないぞ。あのような体はそう体験出来ないからの。特に胸の当たりが軽くなって動きやすかった」

香「な、なにこれっ！？新手のいじめですかっ！？」

メ「わしは事実を言っただけだが……」

真「わたくしはそうですわよ。わたくし夏哉のことは好きではありませんの。それなのに勝手に妄想して……」

香「スンッ、グズンッ……真樹ちゃんのお人形遊びいっ！」

真「訳の分からないことを言わないで下さいましっ！」

メ「行ってしまったの」

真「……作者は？」

メ「話が会わなかったから殴った」

真「……そうですか」

第三話　《十四章》出来なかった事

あと、八人。

正直ここで魔法を使う気はなかった。
本当ならもっと粘って、あの竜みたいなやつに対して不意打ちとして使おうと思っていたが、あの一斉攻撃はマズイと思い、つい使ってしまった。

結果として一人倒せたからまぁ良しとしよう。

そして、指揮官がいなくなったことと俺が魔法使ったことが相まって混乱している。
その隙を逃すわけがなく、俺は一番近くにいる魔族をぶん殴る。
もちろん隠す必要がなくなった魔法を付加して。
魔族は今までになく吹っ飛んだ。

あと七人。

――――――――――

な、何が起きたんだ？

俺たちの攻撃は、確かに人間を捉えていた。
空を飛べない人間が躱せる筈がない。

しかし躱した。

俺たちにしか使えない奇法を使って。

常識が覆された。

それもたった一人のちっぽけな存在によって。

戸惑わないわけがない。

結果ウズナ《頭脳》を失った。

頭のいいあいつを失ったのは大きい。

俺では指揮なんて出来ない。

しかしこの場にアルトアは俺しかいない。

俺が悩んでる間にも一人やられた。

「お前ら、あいつを殺せ！！行動はなんでもいい！クーレラだけは警戒しておけッ！！」

それだけを言って、俺はあの人間に炎弾を打ち込む。

あいつが先程使った奇法は風だ。

風の弱点は火。

どれだけあいつが特別だろうがそれは変わらない。

人間はそれを後ろに飛んで躱す。

着地した地点にすかさずトアラたちが各々得意な属性の弾を撃つ。

人間に向けられたそれらは、しかし空を飛ぶことで躱された。

俺も空を飛ぶ。

この世界の者は飛ぶことが出来ないと聞いたことがある。

ならば空中戦では慣れてるこちらの方が有利だ。

俺に続いて二人のトアラも続く。
残りは地上での援護だ。
奇法を使い、人間を牽制する。

俺はそのため出来た時間を使い、先程同様地属性の奇法で先のとがった岩を何十と作り出す。
後ろに控えるトアラも、一人は風と水で雷を、もう一人は水と地で傀儡を生み出し攻撃に備える。

まずは傀儡で攻撃を仕掛けさせる。
その数五体。
傀儡は、その操る者と水属性の糸で繋がっており、それが切れるか奇法力が途切れるまで動き続ける。
姿形は各々違う。

一体目の、あの人間と同じような格好でそれより少し大きい鋭い槍を持つ傀儡が人間を突き刺しに行く。
人間は地上からの攻撃を躱しながらのため、初めは傀儡の攻撃は完全には躱せず所々かすっている。
しかし慣れてきたのか、傀儡の攻撃に合わせて右の拳を槍の脇に当てて逸らすようになった。
殴られるようになって槍はどんどん削れていくが、それもすぐに元に戻る。

俺も攻撃に加わることにした。
控えさせていた鋭い岩を発射させる。

人間は下に降りて躱そうと思ったのか、高度を下げる。
しかしそれは阻まれた。

二体目の傀儡だ。
十字という単純な姿をしている。
その傀儡の四つの先端が触手の様に伸び、人間の手足に巻き付き身動きを取れなくする。

人間はもはや格好の的だ。
前からは俺の岩と先程の大きな槍を持った傀儡、他の傀儡は傀儡使いの前で待機している。
上からは雷。
下からは無数の弾。
この状態では躱す術はない。

今度こそ勝利を確信した。

人間は腕に力を入れている。

ミシッ

一本の触手が軋む音が聞こえた。
そう思った瞬間、何処かから奇法を使った気配を感じ、傀儡が消えた。

何事かと後ろにいる傀儡使いを見ると、傀儡使いから出ている筈の糸が二本切れていた。
槍を持った傀儡と十字の傀儡のものだ。

その隙をつき人間は全ての攻撃を避けるために奇法で高度を下げながらこちらに向かってくる。

下に弧を描いて進み、風の刃を傀儡使いにぶつける。

それを一体の傀儡を操ることで防ぐ。

人間はそのまま進んで傀儡使いに殴る体勢に入る。

傀儡使いは残る二体の傀儡を駆使し、こちらに来るのを阻もうとする。

しかしそれはむなしく終わり、二体とも人間に殴り飛ばされてしまった。

壁を失った傀儡使いはなすすべもなく殴られ、地に落ちてしまった。

人間は方向転換してこちらを向き、近づいてくる。

俺はとっさに土弾を繰り出すが、相手は手に纏わりつかせた風の刃で切り落とされる。

殺される。

そう思ったのも束の間、人間は俺の脇をすり抜けた。

ガンッと何かと何かがぶつかる音が聞こえた。

――――――――――

私は何が起きたのか分からなかった。

時空支配（タイムルール）の効果が切れ、夏哉を助けるために上空から最速で移動する。

すると上空に九つの影が見えた。

その内の五つは傀儡だと理解したとき、ひとつの影に三方向からの

攻撃が見えた。
そしてひとつの傀儡が一人の手足に巻き付き動きを封じる。
この時点で、いや、もう少し前からあの影は夏哉だ。
傀儡の理屈は分かってる。
風の刃を撃ちだして夏哉を捕らえている傀儡から伸びている糸がある筈の場所をを切断する。
結果として傀儡は二体消えた。
夏哉は攻撃の届かない下に行きながら傀儡を使っているトアラがいる方に向かう。
あいつは夏哉に倒されるだろう。
ならば……！
私はアルトアであるカレスに向かう。
ギリギリまで奇法は使わない。
私の射程内に入ると、私は炎の剣を造り上げ振り被る。
ガンッ！！
私の剣が何かとぶつかる音がした。
その何かはカレス、ではなく……
「夏哉？」
私の味方である夏哉が私の攻撃を防いだ。
「アン、ごめん」

そう言うと、夏哉は左肘でカレスの頭を撃ち抜いた。
凄まじい勢いらしく、カレスは地に落ちた。
しかしあれは《鋼鉄》だからあれくらいではやられないだろう。

「やっぱ殺せねぇや。覚悟決めたって言ったけどやっぱ怖くなった」

「別にそれでいいんだ、夏哉。だから私に任せろ。巻き込んで悪かった」

「話を最後まで聞け」

しかし夏哉は私の言葉を遮った。

「今から俺のわがままで行動する。誰も殺さないであいつらを追い返す。それと、今からアンに殺しはさせない」

夏哉はそれを真顔で言った。
その言葉に嘘偽りは感じない。

「アンは別に無理して変えなくていい。俺が勝手に動くから」

その一言一言から夏哉の気持ちが流れてくる。
そんな言葉を聞いてしまっては反対なんて出来ない。

「分かった。もう誰も殺さない。それでタクノムをぶん殴って追い返す。それでいいんだな？」

「ＯＫＯＫ、じゃあそれで決定。それで、後五、六人のはず」

「……ウズナがいないんだが、どうした？」

「ウズナ？知らんけど俺が倒したやつらはぶん殴って森のどっかにいるはず」

こいつ、普通にアルトアを倒したのか？
まぁ確かにあいつはあの中では三番目だし、攻撃専門ではなく魔族の中では珍しい頭脳派だが、それでも経験や奇法量では向こうが上の筈だし。

と、思考に陥っていると夏哉の異常さに気づいた。
力とかそういうものではなく、見た目がおかしい。
もの凄く疲れているのか呼吸は荒いし、何より服の表面に斑に赤い染みのようなものが滲んでいる。
最初は服の模様かと思ったが、今思い返せば夏哉の着てた上着は無地の深緑だった筈だ。
赤なんてあるわけがない。
それでも気付かなかったのは、私たちのものとは全く違うものだったからだ。

「夏哉、それ、血か？」

そう、その赤いシミから鉄のような匂いがしていた。
私たちのものは緑だし、その様な匂いはしない。

「あ、あぁ、まぁな。大丈夫だよこんくらい」

「バカ言うなっ。服を脱げ！今から治す」

夏哉の服に手を掛けようとした瞬間、夏哉に突き飛ばされた。

先程までいた場所に水弾が通過した。
恐らく正気を取り戻したトアラが放ったものだろう。

「そんな暇ねぇよ。隙突かれてやられる、って俺が言えねぇよな。
ホントごめんな」

夏哉が言う間にも相手は徐々に気を持ち遠距離攻撃を飛ばしてくる。

「それこそ謝ってる暇はないぞ」

私たちは話しながらそれを避け、意外と余裕だな、だと自分で思った。

「ふっ、そうだな。……もう、大丈夫なのか？」

「大丈夫じゃなかったら来てない。取り敢えずタクノム、あの竜が来るまであの雑魚共ぶん殴るぞ」

私の言葉に苦笑する夏哉。

「女の子が使う言葉じゃね～」

「うるさい」

でも女っぽくないと思われるのはしゃくだな。

「じゃあこうしよう。今からあの弱い方たちをあしらいましょう」

「……ないわ～」

「我儘なやつだな。ならどうすればいい？」

「そのままでいいよ」

そのように即答されてしまわれたらもう何も言えないではないか。

「……分かったよ。じゃあ改めて、勝つぞ」

「おう」

私たちは攻撃を掻い潜りながら残りの四人、いやタクノムたちをいれての六人を倒しに下に降りて行く。

――――――――――

「タクノム様～、あの女の言ったこと本当なんですか～」

「……なんのことだ？」

「もうっ、知らばっくれちゃってぇ～。タクノム様がクーレラに子を生ませるって話ですよぉ。わたし許しませんよ。タクノム様の女は私ですよ」

「……貴様は本当に性格が変わるな、ルホン」

「当たり前ですよ、こんな姿タクノム様にしか見せません。それで、話を逸らさないでくださいよぉタクノム様ぁ」

「たわけ。あんな言葉異端者の戯れ言に過ぎん」

「でもそれにしてはあの言葉を聞いた時動揺してたように思いますけど？」

「知らん」

「もう、紛らわさないでくださいよタクノム様っ」

第三話　《十四章》出来なかった事（後書き）

夏哉「アンさんや、今回ツッコむところが山ほどあるんですが」

アン「奇遇だな、私もだ」

作者「どうも、今回も『四人の魔法使い』を見てくれてありがとうございます」

夏「来たな」

作「ん、夏哉どう、し、た……？そんな、殺気、立てて……」

ア「貴様、一週間ならまだなんとかだったが、二週間とはどういうことだ？」

作「いや、これには深い訳が！」

夏「なんだ？言ってみろ？」

作「先月金使いすぎて親に四日間携帯止められてた」

夏「馬鹿死ねっ！！」

作「うっさい！！バカなのは知ってんだよバカ！！」

夏「てめぇだけには言われたくねぇっ！！」

ア「まぁ待て夏哉、そんな馬鹿に構うな。それより、私も言いたい

ことがあるんだが」

作「ア、アンさん？い、言うから、言うからそんな殺気を立てないで下さい……」

ア「貴様次第だな。まず、こんな時間が空いたのになんでいつもより短いんだ？携帯止められた、は言い訳にならないぞ。文の構成なぞメモ帳で出来るんだからな」

作「これはマジ話なんだけど、あれがちょうどよかったんだよ。区切りとして」

ア「そうか、まぁ良いとしよう。それともうひとつ、最後の文はなんだ？」

作「えぇっと、それはなんというか、字数稼ぎと言いますか……」

ア「今かなり真面目な場面だと、分かっているな？」

作「そりゃもちろん、俺が書いているんですからね」

ア「伏線か？」

作「よ、予定なしっす」

ア「じゃあ死ね」

作「え、な、ちょま、ぎゃあああああああああああああっ！！」

ア「全く、あいつのバカのせいで私たちの出番が遅れてしまったで

はないか」

夏「だな。でもこれからはいつも通りになる、はず。ていうかなるかな？」

ア「みんなほんと済まん。そんな約束を断言できないような作者だか、どうか支えてください」

夏「よろしくお願いしますっ！」

第三話　《十五章》賭けと本気の始まり

目の前にある光景を見て、唖然とした。

俺が連れてきた魔族が誰一人としていなかった。

アルトアである頭脳（ウズナ）や鋼鉄（カレス）すらいなかった。

その代わりに所々を汚し、息を切らしているクーレラと人間だけの姿があった。

二人もこちらに気付いて顔を向ける。

「あ、やっと来たか。なんともゆっくりな登場だな」

「……他は？」

「ぶん殴って森のあちこちに散らばってるはずだ。心配せずとも殺しはしてない」

「どういうことだ？」

殺しはしてない？

そんな訳がない。

相手はクーレラ《二番目》だ、邪魔するものなら容赦なく切り捨てる。

自分の命を狙われているなら尚更。

生かしておく意味がない。

俺の疑問に、クーレラは意外な言葉で返した。

「こいつに頼まれたからな。誰も殺すなって。私もこいつに殺しはしてほしくない」

俺は絶句した。

こいつが他人のために自分の意思を変えるのか？

こいつが他人のために自分の不利になるようなことをするのか？

俺が、

俺が知っているクーレラは何処に逝った？

怒りが込み上げた。

クーレラがあんな腑抜けな存在になってしまった事に。

そんな腑抜けがそれ以上の腑抜けの元に行った事に。

そして何より、

その原因を作った地球《この世界》の事に。

脳に有る翻訳機を起動させる。

「人間ッ！！」

まず手始めに彼奴を殺す。

「貴様を、殺すッ！！」

――――――――――――

「人間ッ！！」

「は、はいっ」

いきなりドスの効いた声で呼ばれて肩を震わす。

だってそうでしょう、さっきまで訳分からない言葉で話してると思ったら急に俺を呼んだんだ。

マンガみたいに相手の気を察知する、とかそんなトンデモ能力なんて全くないが、俺に向けての強烈な殺気は普通に感じる。

「貴様を、殺すッ！！」

何故か殺人予告をされてしまった。

「お、おい、アン」

アンの袖を引く。

「お前また怒らせるようなこと言ったのか？」

「いや、今度は言って――」

ドンッ！！

アンが言葉を途切らせ、俺を突き飛ばす。

何事、と思った瞬間目の前に炎の刃が通りすぎた。

しばし呆然となり、アンは大丈夫なのか心配になったがアンも俺を押した瞬間に反動で下がったので杞憂に終わった。

「夏哉！大丈夫かっ！？」

「あぁ！なぁ、あの猫も強いのか？」

「ルホンだ。意味は？従順？。詳しくは知らんが強い筈だ。奇法量だけではこの中で二番目」

「じゃあ一対一で行け――行けるか？」

話してる間にも相手は攻撃を仕掛けてくる。

ちょっときついな。

「流石に今の私にタクノムは厳しいな」

「そっちじゃない」

「ん？……夏哉！……いや、いけるのか？」

俺の一言で意味を理解してくれたようだ。

「なんとかする。早めに終わらせてくれよ」

「分かった」

そう言うとアンは猫、俺は竜に飛び込んでいった。
あの竜は最初から俺だけが目当てのようで、好きなアンには全く目もくれずにこちらに攻撃を仕掛ける。
スピード重視の炎の刃やパワー重視の炎弾を無数に放る。
そこから見るに炎が得意らしい。

熱波に当てられるが気にせずギリギリで躱し、着実に前に進む。

「――――――――――!!」

大声が聞こえた。
一瞬そちらに首を傾けると、どうやら猫が何か叫んだようだ。
生憎内容までは分からない。

足を前に運び、後四、五歩というところで風魔法を使いスピードを加える。
魔法を使った瞬間、竜は体を強張らすのが見えた。
その隙を突けるかと思いながら近づく。

しかし思ったほど動揺はしてないようで、すぐに戦略を変えて２ｍ強、厚さはまちまちだか１０ｃｍの岩の壁を作り出す。
どうやら魔族は皆四つの属性を使えるらしい。
頭に入れておこう。

俺は魔法で右手を強化する。
そして足を止め、慣性の法則に従い重心を前に持っていき力を殺さず壁を殴る。
今なら普通に壊せるほどの力を持っている。

ゴンダンッ！！

結果は予想通り、壁は殴ったところを中心に崩れていき、人一人が通れるほどの穴が開いた。

その穴が開いたと思ったら、そこから炎が吹き出す。
炎弾ではない。
広範囲に広がる炎だ。
あんなの喰らったらすぐに焼け死ぬ。

「フンッ、他愛ない」

ガンッ！！

金属を叩くような音が、響き渡る。

竜に風の刃がぶつかった音だ。
竜は刃を投擲した方を見る。

そちらにはアンがいた。
竜がアンに気を向けた。

俺はその隙を見逃さない。

自由落下で竜の元まで降りていく。

今は夜なので月明かりという淡い光での薄い影しか落ちないのは幸いだった。

後少し、というところで竜は気付いた。
一歩下がるがそれに構わず拳を振るう。
拳は肩に掠り、竜はバランスを崩す。

俺は魔法で着地の衝撃を和らげ、すぐさまアッパーカットを繰り出す。
しかし相手は右手を差しだして俺の攻撃を防ぐ。

ガッ!!という音が響く。

お互い少し止まる。

「貴様、どういうことだ?」

「OK~話をするから一旦攻撃なしにしよう」

俺はその場からバックステップで二、三歩下がる。

「あんたさっき壁出したっしょ?それ殴るとき魔法、奇法ちょっと使って飛んだの。飛び上がる瞬間だけ。で、壁越えたらただ下に落ちるだけ」

「チッ、そういうことか。何故俺が壁を出すと分かった?」

「いや、知らんかったけど……」

「何故嘘をつく?分かっていなければクーレラがあのタイミングで

俺に攻撃などしてくる筈がない」

アンの方をチラッと見る。
アンは肉弾戦のヒットアンドアウェイ、猫は攻撃を受け止めながら魔法で牽制をしている。

「あぁ、あれね。あれは打ち合わせなし。アンが自分であのタイミングで出してくれたんだよ。アーン、ありがとー！」

アンはこちらを向かずに手をあげて答えた。

「という訳でアンの機転だ」

「……やはり、貴様か」

ボソッと、竜が呟いた。

「え？」

「貴様が、貴様がクーレラを変えたのか……」

「変えたつもりは全くないんだけどな。この世界では女心と秋の空って言葉があってな、女はコロコロ気持ち変わるから気を付けろって意味だ。気を付けておけ」

「安心しろ夏哉！私はこの世界の人間ではないからいつまでもお前を想い続けるぞ！！」

俺たちの会話を聞こえてたのか、アンが叫んだ。
ふざけるなと思った。

せっかく話が出来るようになったのに怒りを助長させるのは有り得ない。
後でお仕置きだ。

「貴様……」

「わ、分かった分かった！最後にひとつだけ！！賭けをしようッ！！」

「……賭け、だと？」

よし、乗ってきた！
内心でガッツポーズをする。

「俺が敗けを認めたらアンでもなんでもくれてやるし、依代の情報を教えてやる」

「依代？」

「知ってんだろ？アルクシアの依代、この世界でアルクシアが動くために必要な人間。因みに聖王の依代も知ってる。そいつを殺せば聖王はこの世界では弱いままだ」

「……」

相手は黙った。
熟考しているのだろう。

「俺が勝ったら、アンに関わるな」

「……いいだろう」

話は決まった。
これで俺は勝たなくてはいけなくなった。

―――――――――――――

私はルホンの元に向かった。

正直に言って夏哉は勝てない。
いかに力があろうが経験不足が否めない。
こちらを早く仕留めなければ。

「クーレラァ！この泥棒猫がぁっ！！」

「猫はお前だろうが！」

ゴッ！！と鈍い音が広がる。

しかしどちらにも損傷はなく、そのまま鍔迫り合いをする。

「貴様だけは殺すッ！！タクノム様を裏切るなんて赦さない！！」

「知るかアホ。あいつの下についた覚えはない」

そう言っても相手の怒りは収まらない。
それどころか増してる気がする。

「異端者である貴様がタクノム様に要求される事すら腹立たしいのにあまつさえそれを断るなんて、万死に値する！！」

今のルホンの言葉、何故か部下の言葉ではなく女の嫉妬のように聞こえた。

昔はそういうことには全く疎かった。
あの世界が嫌いだったことも背中を押したかもしれないが、誰が誰に好意を寄せているかなんて分からなかった。
しかし地球（ここ）に来たら少しずつ分かるようになった。
今も夏哉たちに出会って変わることができて良かったと実感する。

重心を前に持っていって、その反動で後ろに跳ぶ。

足を地につける前に横目に見て風の刃をふたつ生成、着地と同時に両方放る。

片方はルホン、もう片方はタクノムに。

ルホンは土の剣で払い、タクノムは何もせずに皮膚で弾く。
お互いダメージはないが、その代わり気をこっちに向けた。
これで今の私の役割は果たされた。

夏哉が上からタクノムを殴る。
が、これは掠っただけだった。
その後もう一発殴るがそれは防がれ、一時膠着状態が続いた。

「タクノム様ッ！？」

ルホンが叫ぶ。

私は夏哉に倣い拳を振るうために距離を縮める。
奇法、いや、魔法で慣れていこう。
魔法を使わないのは温存のためだ。

流石に気付いたルホンは視界に私を捉え、仕掛ける拳を剣で薙いだ。
深追いはせずに下がる。

「貴様、邪魔するかッ！？」

「当たり前だ。そうじゃなければこんなところに立ってない」

もう一度足に力を入れて前に爆進する。
肉弾戦にさせないためか魔法で牽制してくる。

「舐められたものだな。魔力は減っても技術は落ちてないぞ！！」

私はそれを躱しながら近づく。

再び手刀で斬りつける。
相手も同様に剣で受け止める。

ニヤッと、ルホンの口許が上がった。

何かある、そんな直感に従い後ろに下がる。

直後土の刀身が赤く光り、爆発を起こす。
ルホンのいる空間を煙が包み込む。

ギリギリ躱した私の全身を熱が舐め回す。

それに遅れて礫が襲う。
風を操り礫を受け流す。
礫の量は少なかったのかすぐに止んだので再び突進を掛ける。
未だ煙で姿が見えないから風で吹き飛ばし、ルホンを見つける。
ルホンは、こんなに早く攻撃を仕掛けてこないと思ってたのか驚いている。
しかし私の攻撃にはしっかり対処して小さい岩の盾を右手の甲に出現させて手刀を防ぐ。

私はまた後ろに下がる。

「アーン、ありがとー！」

夏哉の声が聞こえた。
恐らくタクノムの気を逸らしたときのことを言ってるのだろう。
私は顔を向けず、手を挙げた。

「クーレラ、余裕のつもりか？」

ルホンが苛立ちを抑えずに言葉を飛ばす。

「そういう訳じゃない。ただ好きなやつにありがとうと言われたんだ、無視なんて出来る筈がないだろう？それはお前もよーく分かってる筈だ」

「どういう意味だ？」

「愛するタクノム様がこんな裏切り者なんかにご執心なのが許せないんだろ？主の気持ちを鷲掴みした泥棒猫が。違うか？」

わざと挑発させるような口調で言う。
これに乗り、怒りで理性を飛ばしミスをすればいいな程度だが。
実際、こういつまでも攻めては守り、守りは攻め、はしてられない。
早く夏哉を助けにいかなければ。

夏哉に意識を向けると、ちょうど夏哉が何か喋ろうとしていた。

「――――――――――――――――――――では女心と秋の空って言葉があってな、女はコロコロ気持ち変わるから気を付けろって意味だ。気を付けておけ」

生憎と最初の方は翻訳機を使っていなかったため分からなかったが、内容は分かった。
この世界にはそういう言葉があるのか――じゃなくて。

「安心しろ夏哉！私はこの世界の人間ではないからいつまでもお前を想い続けるぞ！！」

こう言っておかないともしかしたら夏哉が勘違いするかもしれないしな。

夏哉に気を向けた隙をついて攻撃を仕掛けてくる。

風が吹いた。
そう感じた瞬間、無数の礫がルホンの元から渦のような風に乗って飛んでくる。

元来地魔法は防御に優れており攻撃には向いていないが、速さが増せば威力は増す。

風は強力で、地に踏ん張っていなければすぐに飛ばされてしまう。
先程のように風で去なそうとすれば台風のような風に呑み込まれて去なせない。
しょうがなく魔力を使い分厚い岩の壁を目の前に出現される。
傍に座り込みそれを盾に風と礫を防ぐ。

風圧で軋みだした岩に高速の礫がぶつかり、ピシッと嫌な音がする。
不安に刈られ壁の前にもう一枚の岩を出現される。
そして念には念を入れておく。

こうすることによって攻撃は防げるが相手の位置が掴めない。
周囲の警戒を怠らずに攻撃がやむのを待つ。

普通に考えれば上からか下からの攻撃をしてくる筈だ。
何か企みがない限り。

二十秒ほど経ちようやく攻撃がやんだ。
攻撃は仕掛けて来な――

ボコッ。

地面から何かが競り上がる音が聞こえた。
後ろに下がり躱そうとするが、私が作り出した壁に背中を取られてしまい下がれなかった。

下から競り上げてきたものは鞭だった。
勿論普通の鞭ではない。
水と風で作った、伸縮自在でスピードのある鞭だ。

それが右足を突く。

幸い攻撃重視ではなかったのか足を貫かなかった。

しかしその鞭から、爆発するかのように全方位にカマイタチが繰り出される。

躱す術はなくそのまま切り裂かれる。

体には無数の傷が生まれた。

作り出した二枚の岩を消し、後ろに倒れる。

ドサッと言う音がした。

「フンッ、貴様こそ私を舐めていたようだな。あれが挑発だと言うのは分かっている。私が貴様のような言葉に怒ると思っていたのか？」

勝利を噛み締めるように言うルホン。

そんな主に従順な猫の、見るまでもなくしてるであろう勝ち誇った顔を崩す言葉を浴びせる。

「いや、普通にキレてただろ」

フッと風に刻まれた体が浮き上がる。

そしてすぐに消え、下から私が現れた。

見事、ルホンの顔が驚愕に塗り替えられた。

炎の剣を生成して斬り上げる。

流石のルホンも完全には躱せずに、左腰から右肩まで一条の傷から緑の血液が噴き出す。

しかし思ったほど血が出てないところを見ると浅かったようだ。

「ク、クーレラ……、貴様、何故……」

「特殊能力（アビリティ）、分身（クローンドール）。思い描いたものを作り出す。ちょっと使い勝手が悪い能力だ。完全に思い描かなければその通りのものが出来ないし、あやふやな部分があればあやふやなまま現れる。なんの行動も出来なければ効果もない」

懇切丁寧に説明をする。

深い意味はない。

ただ理解が出来ない難解な問題を私が知っていて、それを教えるという優越感に浸ってるだけだ。

我ながら上から目線だと思う。

「それで、壁を作ったときに使って私は地面に身を潜めた」

正直地面から鞭が来たのは怖かった。

「さて、ルホンもこの程度で参る訳じゃないだろ？」

私の言葉を受けるようにルホンは後ろに飛び下がる。

「これで体力的には同じくらいだな」

一度言葉を区切る。

「ここから本気でいくぞ」

第三話　《十五章》賭けと本気の始まり（後書き）

作者「どうも、作者です。今回、ちょっと前言撤回をしなければなりません」

真樹「なんですの藪から棒に。やはりわたくしの一人称がなくなりましたか？」

作「いや、そうじゃない」

沙鳥「真樹、そんな悲しいこと言わないでよ。おいで、なでなでしてあげる」

真「はうぅぅ～、さとりさまぁぁ～」

作「あの～、それで話戻していいですか？」

沙「うん、どうぞ。ねぇ、それって私たちがやな話？」

作「いや、ある人たちにとっては喜ばしく、ある人にとっては嘆かわしいってとこかな」

沙「なになに～？」

作「この第三話、前に第一話より短くなると言ってしまいましたが、普通に超えてしまいます」

沙「？それの誰が不幸になるの？」

真「沙鳥様、考えてみてください。今本編では戦いが始まってますわよね？」

沙「うん」

真「しかもわたくしたちが全く関わらない。ということはわたくしたちの出番が全くないということですわ」

沙「あ、そっか。でも、そこまで気にしないよ」

真「そうなんですの？」

沙「うん。あ、真樹、嬉しいこと言ってあげよっか？」

真「な、なんですの？」

沙「今私たち一緒の部屋で寝てるでしょ？だから、ずっと真樹といられるから出番無くても全然寂しくないよ」

真「さ、さとりさ……（ぱたっ）」

沙「あ、あれ～？」

作「言い過ぎたな、逆の意味で。オーバーヒートして倒れちゃったよ」

沙「すごい幸せそうな顔してる……。えっと、第三話はどのくらいの長さになりそうなの？」

作「わからん。思い付きで書いてるからな」

沙「……無計画ダメ人間」

第三話　《十六章》互いの和解

月明かりもあまり射さない薄暗い森のなか、俺は一体の竜と相対していた。
話は終わり、まさに一触即発という状況だ。

最初に動いたのは、俺。

馬鹿正直に真っ正面に突っ込んでいく。

相手が少し動いた。
それを確認してすぐに横に飛ぶ。
相手を撹乱させるためだ。
着地すると再び竜のもとに向かう。

あと四、五歩というところで視界の下の方に動きが見えた。
足に力をいれて思いっきり上に飛ぶ。
瞬間、地面から円錐状の岩が競り上がってくる。
それが右足に掠り血が出る。
軽く当たっただけのため我慢できる程度の傷だった。

魔法で滞空する。

バチッ。

そんな音が上から聞こえ、見上げると紫電が見えた。
必死で前に進む。

動くと同時に紫電が真下に落ちる。

これはギリギリ躱せた。

ホッとしたのも束の間、今度は竜本人から真っ赤な何かがいくつも飛ばされてくる。

体の周りに風を産み出してそれを去なそうとする。

しかしそれは、何故か大きさは小さくなっていくし赤い色は増していく。

確かに竜が放った何かのベクトルは変えられたが近づくほどに暑く感じる。

「――ッ!?これマグマか隕石!?」

風は地に強く火に弱い。

大きさが小さくなったのは地属性の魔法で造られたたもので、赤い色と熱が増したのは風が火を助長させてしまったからだろう。

しかし分かったところでどうしようもない。

魔力を極力減らして火力を増さないようにする。

どうすればいいか手をあぐねていると、突如目の前に水柱が立った。

ジュウゥゥという水が蒸発する音がして、水柱を切ってきたのはただの岩。

ずっと纏わせていた風によって俺自身に当たることはない。

「夏哉ー!」

下からアンが飛んできて、俺の傍で滞空する。

「大丈夫か?」

「あぁ。助かった。マジ愛してる」

「それは嬉しいことを聞いたな」

お互い軽口をぶつけ合うが空元気だというのは分かっているはずだ。

「実際そっちどうよ？」

下にいる猫から石柱が伸びる。

俺たちはそれを躱すが、石柱は折れ曲がり再び俺たちを狙う。

今度は下に降りる。

「悪い。まだ時間がかかる」

そう告げるとアンは風魔法を使って石柱をもとから切り落とす。

？あ、そういえば？と地面に着地したあとアンは思い出したかのように俺に聞いてくる。

「武器的なのいるか？好きなの創れるが」

「マジで？じゃあ……剣二本、少し長め」

言ったらアンはすぐに生成してくれた。

「こんなもんか？」

１４０ｃｍといったところか。

そのくらいの長さの土色の剣が二本アンの手に収まっていた。

剣と言っても刃はなく、木刀に鍔を付けたようなものだ。

「サンキュー」

「言っておくが地と水の魔法で作ったやつだから防御力は高いが風に弱いぞ」

「どーも。これ終わったら沙鳥に甘いケーキ作ってもらうぞ。超うまいらしいから」

「それは楽しみだ」

その言葉を最後に俺たちは互いの敵に向かって走っていった。

風で加速させて一気に距離を詰める。
その間に向こうは炎弾を繰り出す。
熱が増すのを気にせずに風で流す。

剣の範囲内に入ったと感じたとき、剣を上から下へと振るう。

しかしそれは届かずに地にぶつかった。
なんてことない、ただ単に間合いを計り間違え早く振ってしまっただけだ。
この剣はアンが創ったものだから地面は抉られないようだ。

一歩前に進み左にあるもう一本の剣で、今度は薙ぐように斬りかかる。
今度はちゃんと届いた。
横に壁を生成して防ぐ。
壁はヒビが入るだけで完全には壊せなかった。

竜はその隙をついて拳を作る。
その拳には炎が纏っており、かなりマズイ。

右の剣を頑張って振り上げ、飛んでくる拳の側面に当てて軌道を逸らすことに成功した。

ジュウッと剣から蒸発するような音が聞こえる。

剣と拳が交わっているところと右足を支点にぐるっと一回転する。
遠心力を増した剣を竜の背中に叩き付ける。

それは見事命中した。
が、何故か腹に鈍痛が走った。
そう感じると俺は飛ばされていた。
強制的に離されることで状況は理解出来た。

竜の肘が俺の腹を撃ち抜いたのだ。

少し離れた木に背中がぶつかり、止まった。

「――ッガハ!?」

この衝撃で剣を落としてしまい、肺の中にある酸素が全て吐き出される。
酸素を求めて思いっきり息を吸うが、脇腹に痛みが走り、酸素が血の味で満たされる。
恐らくさっきの攻撃で骨が殺られ、口を切ったのだろう。
口のなかに違和感を感じ、吐き出す。
それはやはり血だった。

なんとか息を整え、傍にある剣を杖がわりにして立ち上がる。
前を向くと、相手は何もせず立っていた。

「何？余裕のつもり？」

「貴様は――」

俺の言葉には答えずに竜は喋る。

「何故そんな状態になっても立ち上がる？今ので大きな痛手を負った筈だ。そこまでして守る価値が、クーレラにはあるのか？」

相手は本気でそれを聞いてきた。
だから俺も真面目に答える。

「お前の名前、なんだっけ？」

「……タクノムだ」

「俺は夏哉。それでなタクノム、これはアン、クーレラから聞いたんだけど、世界ごとに特色があるんだってな。魔界は奇法、聖界は道具、地球は絆。その通りだと思ったよ。人間は力なんて全然ないからさ、心を強くしないとダメなんだよ。逆に強い力を持ちすぎたら他人と遠ざけられるし、頭よくって技術に優れていても遠ざけられる」

実際それで香苗も沙鳥もつらい思いをした。

「俺もその一人でさ、みんなに煙たがられていつも一人で孤独で寂しかった。でもそれを救ってくれたのがアンなんだよ」

アンだけじゃない、香苗も沙鳥も、最初は違ったけど真樹だってそうだ。

「本当に救われたんだよ。タクノムには分かんないかもしれないけど、みんなが消えたら心が死んでいくんだ。普通に死ぬより俺はそっちの方がつらい。だから、俺はみんなを守るために立ってる。絶対みんなを殺させない」

これが俺だ。
みんなが俺の命だ。
みんなが楽しめば俺も楽しめる。
みんなが悲しめば俺も悲しむ。

みんな、みんな俺の大切な人だ。
そんな大切な人を俺は賭けの対象にした。
だから俺は絶対に負けちゃダメなんだ。

「……俺は、貴様を勘違いしていた」

不意に、タクノムが静かな、しかし誰にも言葉を発せさせないような声で語り出す。
隣で戦っている二人も動きを止める。

「クーレラを腑抜けにさせたただのクズだと思っていた」

俺ってそんな風に思われてたのね。

?しかし?と、タクノムは怒気のないしっかりとした声で言う。

「今の言葉で夏哉が本気だと分かった。クーレラと出逢って貴様が影響を受け、クーレラも絆という影響を受けて大切なものを持ったということが分かった。俺には分からんが、この世界ではクーレラが影響を受けたものが尊いものだと分かった」

俺は驚いていた。

タクノムは違う世界の王で、アンの命を狙っている悪党だと思い込んでいた。

しかしその認識は違った。

ただ単にこの世界について知らなすぎただけだ。

自分の世界の重要なことが他の世界でも重要なものだと思っていただけだ。

「今までの非礼は詫びよう。俺が知らなすぎた。貴様も殺す必要は無くなったし、クーレラも殺さない。しかしクーレラが裏切り者だというのは変えようがない事実、魔界に連れ帰って処罰は受けてもらう」

「……お前って超良いやつじゃん。俺もお前は力に任せて他人を支配してる最低なやつだって思ってた」

「力で支配して何が王だ。相手の本質を見抜けずして王など語れぬ」

「俺がそっちの世界に生まれてたら絶対従ってたわ」

「今からでも遅くない、従え」

「生憎と、ここで従ったら俺の大切な依代たちが利用されちゃうか

らな。結局は勝たなきゃいけねぇんだよ」

「そうか。ならば勝たせてもらう。ルホンッ！！」

「は、はいっ！」

先程までアンと戦っていた猫が我に返ったかのように返事をする。

「やれ」

「ハッ！」

その一言でルホンは何かを理解したようだ。
アンを見ても理解は出来ていないらしい。

「さぁ、貴様に悪夢を見せよう」

――――――――――――

私は、いつの間にか止まっていた。
それはルホンも同じだった。

私たちはタクノムの言葉を聞き入っていた。

正直タクノムがこんなに良いやつだとは思わなかった。
流石皆に好かれる王というところか。

しばらく聞いていると話が終わり、急にルホンを呼んだ。

「やれ」

「ハッ！」

二人の間でそれだけのやり取りが行われた。
私には訳が分からない。
当然夏哉も分からないだろう。

ルホンは動いた。
手には水と炎の剣。
それを持って斬りかかっては来ず、水の剣を地面に突き刺そうとして――弾かれた。

「あれっ！？」

「言っておくがここは魔界じゃないから地面には干渉出来ないぞ」

まあ表面ギリギリから魔法を使えば地面から競り上がっていくように見えるが。
今まで地面から延びるように出てきたものは全部そうだ。

戸惑っている間に一歩ずつ近付く。

「チッ」

今度は突き刺す出なく持ちながら切っ先を地につける。
その地点から地面が私に向かって氷結していく。
それに当たらぬように飛んで躱す。

ルホンを見ると、その地点には水の剣を残して本人はいなかった。
首を回して探すがどこにも見えない。

フッと、視界に陰りが入った。
上を見上げると炎の剣を持ったルホンがいた。
両手で持って斬りかかってくる。

私はそれを握って押さえる。
ジュゥゥ、という音がする。

「なッ!?貴様、手が――」

私はルホンの顔面に蹴りを入れる。

ルホンは剣を手放してしまい、森のなかに沈んでいく。

「いや～、水纏わせてるといっても熱いものは熱いな」

そう呟きながら剣をぽいっと捨てる。

下に降りてルホンの出方を待つ。

チラッと夏哉たちを見る。
タクノムは夏哉を殺さないと言った。
それは本当だろうがやはり心配だ。

それにタクノムが言っていた?やれ?が気になる。
言われたルホンも特にしてることは何もない。

ルホンが飛ばされた方をじっと見る。

あの程度で殺られるわけはないので仕込みをしてるんだ――

ヒュンッと何かが私に向けて真っ直ぐ飛んでくる。

土の盾を生成して、それを弾く。

それは土の剣だった。

しかも柄の部分は緑色に染まってる。

私は違和感を覚えた。

普通遠距離攻撃を仕掛けてくる場合、剣のような形では当たるところが少ない。

弓なら分かるが剣というのはいささか腑に落ちない。

そう思ってると今度はルホンが突っ込んでいた。

何故か抜刀をするような格好で。

また剣か。

そう思い盾を構える。

相手の肩が動いた。

全身に力を込める。

しかし思った衝撃が全く来ない。

その代わりにまた何かが目に飛んできた。

咄嗟のことで目を瞑るという回避行動しかとれない。

目に当たったのは生暖かい液体だった。

ドスッ、と腹に衝撃が入る。

剣で斬られたのではなく、拳を入れられたような感覚だ。

「残念だな。剣は持ち合わせていない」

うずくまる私に上から喋る。
次の追い討ちに気を固めるが、なかなか来ない。

しょうがなく目についたものを手で拭うと、それは緑色の液体、魔族の血液だった。
おそらくルホンのだろう。

辺りを確認すると、何故かルホンは遠くにいた。
右手を前にかざし、血を落とす。
その下には先程私が下に落とした炎の剣。

血を剣に含ませた瞬間、一瞬だけだか輝いたように見えた。
剣に血を染み込ませて何が――

「そういえば……」

先程投擲された土の剣には何か、緑色の液体のようなものがついてなかったか？

慌てて確認をすると、確かに柄に緑色のものがついていた。
よく見ると血だ。

そこで気づく。
何故相手が剣にこだわるのか。

何をしようとしているのかは分からないが、それぞれの属性の剣に

自分の血液を染み込ませることで、タクノムが命じた何かをするつもりなのだろう。
となれば、ルホンが次に狙うのは一番最初に捨てた水の剣。
それを見つけてどうにかしなければならない。

起き上がろうとすると、何かに縛り付けられた。

「な――ッ！？」

見ると、水の縄で縛られていた。

「動かせると思ったか？」

考えを読まれていたようだ。

「ならこれだっ！！」

風の刃を産み出して水の剣に飛ばす。

「甘いっ！」

しかし割りと私の近くに炎の壁を作り出して風の刃を阻む。

どうにかして壊したいが、壁のせいで正確な場所が分からない。

壁が薄れて消えていくと、ちょうどルホンが水の剣に血液をこぼしているところだった。

血液が剣に染み渡ってもただ水の剣が一瞬輝いただけだったが、ルホンが魔力を練っていくとそれに呼応するように四ヶ所から魔力の

反応が増し、四色の光も増していく。
ひとつは地の剣から土色が、ひとつは水の剣から青色が、ひとつは火の剣から赤色が、最後のひとつは森の中から緑色が。
確かあそこは私が飛ばした場所だ。
予想としては風の剣がある筈。

それが増していくと、それぞれの剣が少し宙に舞いながら円を描くように回り、四つの切っ先を私に向ける。

嫌な予感がして、どうにか縄をほどこうとするがなかなかほどけない。

四苦八苦している間に一本の炎の剣が私の腹を突き刺す。

「あっ……あ？」

しかしどういう訳か痛みが全く感じないし血も出ていない。
その代わりに力が抜けていく。
これは、まずい状態なのか？
それすらも分からない。

続けて風の剣、土の剣、水の剣という順にそれぞれ別の場所に刺さる。
やはり痛みは感じない。

「貴様は私の名前の意味が解るか？」

「……じゅう、じゅん……」

力なく言う。

力が本当に入らないのだ。

「そうだ。しかし貴様は恐らく意味を履き違えている。いや、そうではないな。ふたつのうちひとつしか理解できていないといったところか」

……そうか、こいつの名前の意味は……

私は完全に体を動かすことが出来なくなった。

第三話　《十六章》互いの和解（後書き）

香苗「うわぁ～、私たちの知らないところでかなり凄いことになってるね」

夏哉「なんでこんなことになったんだろうな？」

作者「ということで終わりました十六話。そして本当にいつ第三話が終わるか目処が立っていない作者です」

夏「これは正直かなりの長話になるんじゃねえの？第一話は一章分のページ数が少なかったわけだし、文字数でいくととっくに越えてるっしょ？」

作「そうなんだようね～。もうちょいコンパクトにしたい気持ちはあるんだけど、バトルを書いてると思ってる以上に文が長くなって」

香「それにしてもタクノムさん凄くかっこいいっていうか、いい人だよね」

夏「だよな～」

作「これは書いてる途中に変えました。よく思ったらタクノムは地球のこと全く知らないし、王なんだから人をまとめるカリスマ性を持ってないといけないから恐怖政治って訳でもないし。それにこの話の中に悪人は誰もいないさ、誰もね」

夏「なんか含みのある言い方だな」

香「でも夏哉君もかっこよかったよ？特に『みんなが消えたら心が死んでいくんだ。普通に死ぬより俺はそっちの方がつらい。だから、俺はみんなを守るために立ってる。絶対みんなを殺させない』ってところ」

夏「やめろ。こうやってあとになって聞かされるとめっちゃ恥ずかしい……」

香「それと、夏哉君はアンさん愛してるの？」

夏「それずるくない？お前知らない設定だろ？」

香「えぇっと、後書きだから？」

夏「俺に聞くな」

香「それでどうなの？」

夏「分かってると思うけどノリだよ」

香「だよね～」

作「……何このやり取り？」

第三話　《十七章》瀕死の強さ

俺は飛んでくる炎弾を躱す。

そして思いっきり踏み込んでタクノムとの距離を詰める。

持っている刃で斬りつける。

タクノムはそれをバックステップで躱し、手に土の球を生成して投げる。

変化球でもない直線を描いて飛んできたのでカマイタチで斬り落とす。

その瞬間、土の球が炎も混じりながら爆発した。

爆風はかなりの威力で俺のもとに届き、吹き飛ばされる。

バランスは崩したが、手を付きながら足で着地出来た。

今のは、球の中に炎が入ってて、カマイタチが引き金になったのか。

取り敢えず俺なりに分析してみるが、これは俺に悪夢を見せるほどではない。

――『悪夢を見せてやろう』――

そう言ってから、特にアクションを起こしていない。

ハッタリか？

いや、ルホンっていう猫に呼び掛けたからそっちが何かするのか。

「タクノム様っ！終わりました！」

考えているとルホンがタクノムに叫んだ。

何がだ？

そう思いそちらに首を向けると、

火炎が襲い掛かってきた。

全力で横に飛びそれを躱す。

直撃は免れたがそれもギリギリだったのでかなり熱い。

「あっつ～ッ！！」

「くっそ、そっちも……」

？かよ？と、言葉を続けられなかった。

攻撃してきた方を見て、唖然としていたからだ。

そこには、ルホンでもタクノムでも、ましてや俺たちが倒した魔族たちでもない。

「アン？」

俺の方に手をかざしている大切な人の一人だった。

当然後ろには何もない。

つまり火炎は俺を狙っていた。

ダンッ！！

アンが踏み込み俺との距離を縮める。
手には拳を握っている。
寸でのところでそれを手のひらで受け止めた。

アンは俺に足払いを掛けてバランスを崩してくる。
なす術なく俺は地面に転んだ。

受け身はギリギリとれたが、アンは再び拳を握っていた。

地を転がりながら拳を躱し距離を取る。
アンは仕掛けてこない。

「こりゃ悪夢だな……」

これがタクノムが言っていたことだろう。
あのルホンがアンを操って同士討ちさせるつもりか。

「ルホンは自分より奇法量が低いやつを一人？従順？させることが出来る。準備に手間がかかるし一人しか操れないから使い勝手が悪く、一対一ではあまり使わないが、今回はこれが有効的だと思ったからな」

「なるほどね～、つまり無理やり従わされてるわけか」

ならばやることは決まった。

カラン、カラン、っと持っていた二振りの剣を落とす。

「アン！聞いてるかッ！？っていうか聞いてる前提で言う！」

一息つく。

「少し我慢してくれッ！！」

今度は俺が一気にアンとの距離を詰める。
アンを操ってるルホンはそれが意外だったのか、アンに指示を送れなかった。

俺は加減してアンの鳩尾を撃ち抜く。

「う、ぐ……ッ！？」

気絶したアンは前のめりに倒れそうになり、それを腕で支える。
ゆっくりと地面に横にしてタクノムを見る。

「……どういうつもりだ？何故ためらいもなくクーレラを殴れる？大切ではなかったのか？」

相手は怒った様子もなく聞いてくる。
さっきだったら怒り狂ってたはずだが、今は俺の考えを聞いてから行動するつもりのようだ。

「大切だよ。でもアンも俺のことを大切に思ってくれてる。そんなアンが俺を傷つけたいと思うか？アンならきっと罪悪感を覚えるはずだ。操られていたとしても絶対悲しむと思う。だったらその罪悪感を俺が背負うしかねぇだろ。アンがそんな余計なもんを背負うくらいならいくらでも背負ってやんよ」

俺の心を話した。
多分分かってくれると思う、タクノムもアンも。
結果、タクノムは笑った。
「クックックッ、いいぞ貴様、気に入った。ほんと、こっちの世界にいなかったのが悔やまれる。ルホン、これから手を出すな。一対一でやる。他のやつらが目覚めても手を出させるな」
「よろしいのですか？」
「構わん」
タクノムはこちらに気を向けた。
「あ、そうだ。タクノム、悪いな、仲間殺して」
向こうは殺さないと決めたのに、こっちは殺してしまった。
申し訳なく思い、しかしタクノムは予想外にも厳格な物腰で言った。
「謝るな。そんなの死に逝った者に対する侮辱でしかない。死は変えられない。ならば誇れ、死に行く者より勝ったことを。決して悔いるな」
「……分かった」
タクノムの言葉を了承する。
そして、どちらともなく動いた。

お互い距離を詰め、拳を握る。

先行したのは、俺。
顔を狙って拳を飛ばすがタクノムは左手でそれを防ぎ、空いている右手で殴りかかってきた。
俺も同様に左手で防ぐ。

膠着状態に陥ったので、軽口を聞いてみる。

「いや～、一世界の王が何か弱い人間なんか相手にしてるんだろうね？手ぇ抜いてくんない？」

「ふんッ、何がか弱い人間だ。連れてきた魔族を二人で壊滅させ、手負いの状態で俺の攻撃を受けてなお力が拮抗してるなど。どこをどうすればか弱く見える？」

お互い反動をつけて距離をとる。
俺は落とした剣の場所に着地し、それを拾う。
タクノムも俺のと同じような剣を二振り創る。
俺と同じように戦いたいのかもしれない。

左足を前に出す。
それを見たタクノムは突進してくる。

俺は前には進まず、一振りの剣を投擲する。
狙いは腹。

タクノムはそれを剣で払うことで打ち落とした。

その隙に体を低くしながら前進して残った一振りで斬りつける。

それも剣で防ぐ。
お互い体はがら空き。

だから俺は？もう一振りの剣？で斬りつける。

タクノムはこれには驚き回避が遅れた。
その結果俺の攻撃は顎に当たり仰け反る羽目になった。
空いた腹に蹴りをお見舞いする。

思いっきり蹴ったわりにはそこまで吹っ飛ばずに堪えられた。

俺のさっきの最後の攻撃は、一本目の投擲した剣を拾ったのだ。
うまい具合にタクノムが下に落としてくれたので助かった。
剣をつきながらこちらを見るタクノム。
もう一度攻撃を仕掛けるために前に進もうとすると、

「や、やめろッ！！」

タクノムではなくルホンが叫び、

ドスッ！！

「えっ……」

やけに背中が熱い。

熱くて熱くて焼けてしまいそうだ。
そこから、それに負けないほど熱いものが背筋に流れた。
全身から力が抜ける。

「ゴフッ!?」

口から、先程とは比べほどもない異物が吐き出される。

咳をした衝撃なのか、そのまま地面に倒れ込む。

ドクドク、と背中と口から熱いものが流れる。
それが俺の下で溜まっていき、色が紅いのを見てこれが血なんだと理解した。

しかし、何故か痛みはない。
ただ熱いだけだ。

どこかからか何かが聞こえる。
もうそんなの気にならない。
いや、気にすることが出来ない。

じわじわと痛覚が全身を這い巡っていく。
叫び声すらあげることも出来ない。

これからどうなるんだろう。
死ぬのかな?

死。

それを意識した途端、何かが蘇った。

死んじゃダメだ。
死んだら他が大変な目に会う。
起きなきゃ。

しかし体が動かない。
指一本すら動かせない。
息をするのもつらい。

こんな傷を負って立ち上がれないなんて何が化け物だ。
相手を倒さないで何が化け物だ。

立ち上がれよ。
ここで立ち上がらないとまた戻るぞ。
大切なものをまた溢していくぞ。

立てよ。
足を動かせよ！

そう願うが体は全く動かず、意識も薄らいでいく。

――――――――――

「や、やめろッ！」

ルホンが叫んだ。
気が付くと俺の真正面、夏哉の真後ろから奇法の気配がした。
すると夏哉の動きが止まり、口から血を吐いて倒れた。

背中にはそこそこ大きな石円錐が突き刺さっていた。
奥の茂みには俺が連れてきたトアラが一人。
「ルホン、急いで治癒しろッ！！」
直ぐ様ルホンに指示をした。
ルホンはそれに従い夏哉のもとへ駆け寄る。
俺は夏哉を突き刺したトアラを殺そうとして、やめた。
向こうは何も知らない。
殺せと命じたのは俺で、奴はただその命を遂行しただけだ。
誰のせいとすれば俺のせい。
感情に突き動かされ、何も知ろうとせず軽はずみな命を出した俺のせい。
恐らく夏哉は死ぬ。
かつてクーレラが興味を持ったこの世界について調べてみた。
当然人間についても。
あの怪我は人間にとっては致命傷だ。
見たところ心臓は貫かれてはいないし貫通もしていないが体の半分以上はえぐられている。
傷を直したところで血が足らずにどうしようもないだろう。
ふと、夏哉を見る。
そのとき俺はとんでもないものを見た。

ゆらりと、

背中に石を突き刺したまま、

血を溢したまま、

夏哉が立ち上がった。

何が起こっている？

あの怪我では生きてることも容易ではないし、ましてや立つことなど不可能に近いはずだ。

夏哉は背中に刺さっている石を、まるでゴミを払うように引き抜いて捨てた。

そこから余計に鮮血が吹き出す。

「夏哉、だいじょ――」

それ以上言葉を紡げなかった。

何故なら、いつの間にか俺の目の前に立っていたからだ。

奇法を使った形跡はない。

ならばどうやってあの距離を縮めた？

脚力だけでここまで来たと――

「済まんな。ここで死んで負けるわけには行かないんだ」

そう言うと、ゴッ！！という衝撃を顎に受けた。

「ウッ！？」

先程の刃での攻撃とは比べ物にならない。

俺は上に飛ばされた。

上を見ると、夏哉がいた。

「な――」

今度は胸部に踵を食らった。

その威力は凄まじく、俺の外皮を粉々に砕き、しかもさほど軽減されずに全身に届いた。

地面に叩きつけられる。

俺はこの世界に干渉出来ない。

唯一触れる大地ですら掘ったり砕いたりすることは叶わない。

よって地面に叩きつけられても威力は吸収されずに直に食らう。

「ガアアアアアアッ！！」

口の中に血の味を覚える。

自分の血を味わうのは久しぶりだ。

地に伏せた俺の脇に夏哉が降り立つ。

「殺しはしない。それが？俺？の願いだか、ら……」

ドサッ、と夏哉は俺の脇に倒れた。

死んだか。

そう思ったが夏哉の口から寝息が聞こえた。

俺は呆れた。

あんな怪我をして動いても死なないのか。

首を無理矢理横に動かす。

夏哉の脇が見えた。

その上にある背中からは、血が流れていない。

まさか塞がったのか？

そう言えば倒れた後夏哉に何か変化が生じた気がした。

なんだったのだろうか？

「タクノム様ッ！！」

ルホンが涙声になりながらも走ってきた。

「大丈夫ですかッ！？」

「……駄目だな。体が動かん」

「そんな……！」

ルホンは夏哉を睨む。

「殺すな。治療しろ」

「んん……」

少し離れたところで小さな声が聞こえた。
この声はクーレラか。

「……あれ？夏哉？」

「クーレラ、聞こえるか？」

「タクノム？」

たったったっ、と近づく足音が聞こえる。

「な、夏哉っ！？」

「直してやれ。ルホン、頼む」

そして二人は俺たちを治癒するために必死になった。

第三話　《十七章》瀕死の強さ（後書き）

真樹「かなり佳境、というよりほとんど終わりましたわよね？」
アン「そう、だな。この小説そこまで熱血じゃあないから傷直してまたぶっ倒れるまで戦う、というのはないだろう」
作者「というわけで本当に後三、四話で終わりそうです。ようやく目処が立ちました」
ア「遅いが、まぁそれなりに活躍出来たし文句は言わないでおこう」
真「途中アンさんではなく夏哉がメインになっていましたが……。まぁそれは置いといて、作者、あの夏哉はなんですの？もう人間やめてるじゃないですか」
ア「あれはいくらなんでも……」
作「うるさいっ！ちゃんとそれが伏線になるようにするわっ！！」
ア「な、作者が、伏線だと……！？」
真「あり得ませんわっ！そんな高等技術なんて作者に出来ません！！それにもし出来たとしてもそれを覚えている頭がある筈ありませんっ！！」
作「黙れ！そんくらいの頭はあるわっ！」
真「では今何個伏線がありますか？」

作「そんなの2つに決まっ……あれ？あれは伏線だから3つ、あ、え、えっと、あれっ？」

真「ほらありません」

ア「せめてこの話の夏哉のことは忘れるなよ？これ忘れたら色々アウトになるぞ」

作「がんばります……」

真「今思うとシリアスとギャグの差が激しいですわね」

ア「待て真樹。こいつだぞ？自分では面白いと思ってるかもしれんが、周りにとってはギャグでもなんでもない？え、何これ？？って言う反応しか生まない内容だぞ」

真「あっ……。申し訳ありません、気付かないわたくしが馬鹿でしたわ」

ア「大丈夫だ。こいつよりましだ」

真「この馬鹿と比べられるのは癪ですが」

ア「あ、す、済まない」

真「いえ」

作「そこはかとなくバカにしてるでしょ？」

ア＆ａｍｐ；真「「うん」」

作「即答された!?もうイジメだぁーっ!」

真「この後書きを書いてる時の裏話。この馬鹿後書きなのに前書きのところで書いてました」

作「なんで言わなければバレないようなことを言うんだよ!?ちょっと恥ずいじゃねぇかっ!!」

第三話　《十八章》勝利の炎

声が聞こえた。

真っ暗の空間の中、力を求めたとき。

聞いたこともない、しかし懐かしい声だった。

『叶えてやる』

そんな一言だけを聞いた。

その声の先に見えるのは、自分自身だった。

俺はその後上に浮かんでいき、俺は下に落ちていく。

下に行けば行くほど意識が薄れていく。

しばらく落ちていくと、急に体が浮き上がった。

上に行けば行くほど意識が戻っていく。

そしてまた俺に会った。

俺は先程とは逆に落ちていく。

俺と俺がすれ違うとき、俺は俺に顔を向けて話し掛けてきた。

『賭けは勝った』

と。

それともう一言言った。

『これからも求めろ』

そう言って俺は顔を前に戻し、落ちていく。

俺は甦りつつある意識の中考えた。

俺の言った言葉の意味を。

しかし考え始めると空から光が降ってきた。

上を向く。

光がどんどん迫ってくる。

あ、俺が近づいているのか。

そして俺は光の中に入っていった。

「――つや、夏哉！大丈夫か！？夏哉！」

近くで俺を呼ぶ声が聞こえた。

ゆっくりと目を開ける。

目の前には泣きそうなアンの顔。

「夏哉っ！」

目を開けたのを確認したのか、俺の頭を抱いた。

状況を整理しよう。

アンが操られてそれをぶん殴って、タクノムとサシで勝負してたら背中になんか突き刺さって……

「あれっ！？」

思いの外大きな声が出て、そばにいたアンがビクッと肩を震わせる。

「な、なつや、どうした？というより耳元で叫ぶな……」

アンは耳を押さえながら俺から離れた。

「あ、わりぃ」

体を起こす。

「な、貴様もう動けるのか？」

隣からタクノムの声が聞こえた。
そちらを向くとタクノムがルホンに治療を受けていた。
いやそれより……。
「俺、生きてる？」
そこが疑問だった。
心臓は貫かれてはいないだろうがかなり突き刺さったんだ、それは致命傷だし出欠多量で死んでるはずだ。
回りを見渡すと赤く染まった草が生えている。
見るからにそれは血で染まってる。
この中で赤い血を持っているのは俺だけ。
「勝手に私たちを殺すな。生きてるよ」
耳が直ったのかアンが教えてくれた。
「えぇっと、他にいくつか聞きたいことがあるんだけど。俺なんで生きてんの？そしてなんでタクノムが倒れてんの？」
「覚えてないのか。質問には俺が答えよう」
今度はタクノムが答える。
というかなんかタクノムの素肌が違う。
さっきまでは青紫だったのに今は薄い黄色が多い。
所々青紫の肌があるけど、脱皮？
「まず背中の傷は俺の下の者がやった。一対一で戦うと言ったが部

下まで話が通らなかった。すまない」

口だけを動かし、本当に申し訳なさそうに言う。
本当は頭を下げたいんだろうけど、体が動かないのか。

「まぁいいよ、結果オーライだし。それより続き」

「分かった。その前にまず俺がどうしてこうなったかだが、倒れたお前が突然起き上がり、やられた。その様子だとやはり覚えてないか」

「……まじ？」

俺は全く覚えてない。
しかしタクノムの言うことをまとめるとだ、背中に孔空けながら一世界の王を倒したと言うことになる。
自分で化け物望んだけど、どんだけ化け物なんだよ俺……。

「それで怪我の方は、俺を倒した後夏哉が倒れて、そのときには既に塞がっていた。アンに治療を任せようとしたが直すところがなかったらしい」

「そうなの？」

アンに聞いてみる。

「ああ。私が目を覚めたときに夏哉が倒れて、一分くらいしか経っていないが全くの無傷。違和感はないか？」

俺は手をグーパーグーパーしてみたり、立ってジャンプしたりして

みるが全く違和感がなかった。

「少し疲れはあるけど全然平気」

「……夏哉ほんと人間やめてるな」

黙れアン、と言いたいところだが否定出来ない自分がいた。

「夏哉、これは予想だが」

未だ治療を受けているタクノムが声を掛けてくる。

「倒れてからの貴様は、どこか別の人物のような気がした。何が、と言われたら答えられないが別人格が顕れたように思えた。心当たりはあるか？」

「……心当たりねぇ～」

そう言われても全く思い当たらない。

今までそんなことはなかったし言われたこともない。

強いて言えばあの夢か……。

「俺が倒れたとき変な夢見てさ、俺が二人いたんだよ」

何故かその夢は鮮明に覚えてる。

その事を話した。

「なんか、意味ありげだな。ただの夢としては出来すぎている」

「ああ。賭けと言うのは俺とのやつだろうな。恐らくそのもう一人の貴様が別人格なんだろう」

アンの呟きにタクノムが自分の見解を立てる。
確かにそう聞くと、ただの夢とは思えない。
でも何かあるのかもしれないけどまだ謎だ。
どんな意味があるんだ？

むくりとタクノムが体を起こす。
ルホンの治療によって動けるようになったようだ。

「まぁ、こんなところか。ルホン、帰るぞ」

「え、マジで帰るの？」

タクノムの一言に驚いてしまった。

つい声に出すとタクノムが至って真面目に答える。

「ああ。過程がどうあれ俺は貴様に負けた。それに今も体を動かすので精一杯。再戦しても勝てやしない」

ルホンの肩を借りて立ち上がる。

「この賭け、貴様の勝ちだ」

「……」

そう言われても全く実感がない。

結局タクノムを倒したのは俺じゃないようだし、俺が勝ったと言えるのか？
でもここで？負けた？なんて言えないから勝ちは譲ってもらおう。

「よし。じゃあ帰るか、アン」

「いや、それはいいんだが、もしここで帰って後ろからまたグサリとやられる可能性があるぞ？まだこの事誰にも言ってないだろ？」

「……そうだな。ならば少し待っていろ」

「分かった」

俺は宿がある方向を見る。
何故かそこは明るく輝いていた。

「あり？アン、あそこって光ってたっけ？」

指差しながらアンに聞いてみる。

「いや、そんな記憶はない……あれ炎だぞ？」

光源を見ながら、気付いたように言う。

炎？
じゃあ山火事？
それとも宿から……

思い立ってすぐ火事になっている場所へ本気で走る。

―――――――――――

柊と別れた後、るあとお風呂に入って遊んでごはんを食べた。
その後るあを寝かせて両親に昼間のことを話した。

「な、柊夏哉が！？」

「お父さん静かに、るあが起きちゃう」

お母さんがお父さんをたしなめる。
るあを見ると、寝息を立てて寝ていた。
まだ起きてない。

「わ、悪い。それで、大丈夫か？」

「うん。特に何もされてないけど……」

「ねぇ、本当に柊さんの子供がるあを見つけたの？」

お母さんが聞いてくる。

「分かんない。本人が言ってただけだから」

「もしそうなら、お礼言った方が……」

「何言ってんだ。何されるか分からないぞ」

お母さんの提案をお父さんが否定する。

私もそれはごめん被りたい。

「でも浩介さんと弓の子よ？根から悪い子とは思えなくて」

「そんなことは関係ないだろ？親がよくたって子がいいと言うわけではない」

そう言えば二人と柊の両親仲がよかったんだっけ？

それなのに柊のせいで……。

クイクイ、と誰かが後ろから袖を引っ張った。

振り返ると、眠そうに目を擦っているるあがいた。

「るあどうしたの？起こしちゃった？」

「あかねぇ、おトイレ……」

それを聞いてお父さんはため息をついた。

「はぁ。灯里、連れていってこい」

「分かった。じゃあるあ行こ」

「うん……」

るあの手を引きながらお手洗いに向かう。

水の流れる音が聞こえた。

「るあ終わった〜？」

「うん」

個室からるあが出てきた。

私は先に外に出る。

「あかねぇ、とどかな〜い」

あ、忘れてた。

「ごめんねぇ、今行くから」

ほんの五、六歩だけど駆け足で行った。

私はるあを抱えて蛇口に手が届くようにしてあげる。

洗い終わるのを見計らって下ろす。

「ありがとう」

手を拭きながらお礼を言う。

「じゃあ帰ろ」

るあは私の隣まで来て、二人で自分の部屋に戻る。

「ねぇねぇ、のどがかわいた」
と思ったがるあがそんな要求を出してきた。
「るあお手洗い行ったばっかじゃない……」
「だめ？」
買ってくれなきゃ死んじゃう、みたいな視線を送ってくる。
「はぁ～、しょうがない。じゃあ行こっか」
「うんっ。あかねぇだいすき！」
私たちは手を繋いで自販機に向かった。
その途中、るあが質問してきた。
「ねぇあかねぇ」
「ん？」
「あかねぇおにいちゃんのこときらい？」
私は立ち止まってしまった。
実を言うと、その答えがはっきりしていないからだ。
柊のことなんて何も知らない。
でも、嫌いじゃないからと言って恐怖の対象には変わりない。
私はるあに諭すように話す。

「柊はね好き嫌いじゃなくて近寄っちゃいけない人なの。近づいたら怪我しちゃうし、いつも何かを壊しちゃうの。そんな化け物に近づいたら死んじゃうかもしれないんだよ？」

「ちがうもんっ！」

しかしるあは私の言葉を否定する。

「おにいちゃんそんなひとじゃないもんっ！おにいちゃんるあとおててつないだもん！おんぶしてくれたもん！おかしとかくれたもん！おかあさんたちにあわせてくれたもんっ！おにいちゃんはいいひとだもんっ！おにいちゃんきらいなあかねぇきらいっ！！」

舌足らずな言葉を長く紡ぐと走り去ってしまった。

「ちょっと、るあ待って！」

私はるあを追いかけようとする。

しかしその瞬間を見計らったように防災警報が鳴り響く。

私はその音で立ち止まってしまい、るあを見失った。

『火事です。火事です。火元は地下一階ボイラー室。火元は一階ボイラー室。お客様方は従業員の指示に従い、落ち着いて、火急的速やかに避難をお願いします。繰り返します。火事です――』

ボイラー室で火事！？

どうしよう、ここ割りと近いから早く逃げないと！！

でもるあが……

ペチッと両頬を叩いて覚悟を決める。

「るあーっ！！るあー、何処ー！？」

私はるあの名前を叫びながら探しにいく。

第三話　《十八章》勝利の炎（後書き）

夏哉「……題名の意味違くね？」

沙鳥「そうだね。正直？勝利？と？炎？に繋がりはないね」

作者「いいじゃんいいじゃん別に！いいの思い付かなかったんだもん！」

沙「まぁいいけど。今回ちょっといつもより短いね」

作「しょうがない。ちょうどキリがいいのがここだったんだからさ～」

夏「ていうか作者、本気でタグにチートいれたな？」

作「だってチートじゃん。ね～」

沙「ね～」

夏「沙鳥もか……。まぁ否定はしないけど」

作「ねえどうする？」

夏「何が？」

作「後書きやることねぇ」

夏「知るか」

沙「じゃあ紹介でもすれば?灯里さんの」

作「そうだな」

峯岸灯里(みねぎしあかり)
身長：１５３?
体重：４１?
ＢＷＨ：７９，５９，８３
誕生日：１２月7日
好きなもの：ロールケーキ、犬
嫌いなもの：大きな音、苦い食べ物
特徴：肩に掛かるくらいに伸ばした薄いブラウンに少し緋色が混ざったような髪を持っている。温厚そうな顔で、実際慌てたとき以外は温厚でしっかりしている。
昔から夏哉と家が近かったせいもあり、夏哉の過去にしでかしたことをよく知る人物の一人。そのため夏哉に苦手意識を持っている。
急に大きな音を聞くと驚いて冷静さを欠いて慌てふためく。

作「こんな感じかな?」

沙「ん～、今思えば灯里さんと夏哉って幼馴染みな関係だよね。家がお向かいさんで小中高と全部同じ学校でしょ?」

夏「そうだな。まぁその間中嫌われまくってたけど」

作「果たしてそんな関係のなか、夏哉はどのように灯里と流亜を口説いていくのか!?そこが一番の見所だな」

夏「まてまて!まぁ灯里のことはまだいいとしてるあちゃんはない

だろ!?俺にそんな趣味はな――」

沙「じゃあ夏哉争奪戦でカナは論外ってことだよね?」

夏「え、ちょ、そ――」

作「よかったな沙鳥。ライバルが一人減って」

沙「うんっ。あ、もしこの事カナに言ったら昼間の繰り返――」

夏「それだけはやめてくださいこんちくしょーッ!!」

作「因みに夏哉が泣きながら沙鳥に抱きついたあのレアな映像が」

沙「ほうほう」

夏「俺死ぬッ!!」

第三話　《十九章》怒り

ジリリリリリリッ！！

「ふあ？」

けたたましい音と共に意識を取り戻していく。
しかしそれでもまだ目覚めたばかりなのでうまく頭が働かない。
わたくしは右手で目を擦っていくと上から声が聞こえた。

『火事です。火事です。火元は地下一階ボイラー室。火元は地下一階ボイラー室。お客様方は従業員の指示にしたがい、落ち着いて、火急的速やかに避難をお願いします。繰り返します。――』

その放送を聞いて一気に目が覚めた。
心なしか室温も上がっている気がする。

隣を見ると沙鳥様と香苗が目を擦って唸っている。

「沙鳥様、香苗、起きてくださいまし！」

「んむ～、まき？」

沙鳥様はまだ寝ぼけているようだ。

「二人とも起きてください！どうやら火事が起きたそうですわっ！」

「かじ？」

二人はむくりと体を起こす。

わたくしはその間に立ち上がり手探りで電源のスイッチを探す。
意外とすぐに見つかってそれを押す。
突然の光源の出現により顔をしかめる。

しばらくすると目も慣れていき、周りも見えるようになった。

「あれ？アンちゃんは？」

沙鳥様が呟いた。

「え？あ、ほんとだ。何処行ったんだろ」

その呟きに香苗も疑問を抱く。

私には見えないが、アンさんは沙鳥様と香苗と手を繋いで寝ていた筈だ。
それがいないと言うことは夏哉の部屋にいる可能性が高い。

「沙鳥様、もしかしたら誤報かもしれませんが、先ほど火事が起きたという放送が入りました。念のため荷物を整理して窓から逃げられるようにしてくださいませんか？」

「え、か、火事！？」

？火事？という単語で沙鳥様が慌てる。
それを香苗が落ち着かせる。

「沙鳥ちゃん落ち着いて！真樹ちゃん、火元は？」

「地下一階ボイラー室ですわ。わたくしは取り敢えず夏哉の部屋を見てきますので、申し訳ありませんが沙鳥様とわたくしの荷物お願いしますわ」

「うん、分かった」

靴に履き替え、ゆっくりとドアを開ける。
ドアの隙間から火の手がここまで伸びていないことを確認すると、即座に体を滑り込ませて外に出てドアを閉める。

全く、こんなときに役立つとは。

廊下に出ると、気温が四、五度上がったかのように暑い。
火事は本当のようだ。

わたくしは急いで隣の部屋まで行き、ドアを叩く。

「夏哉！起きてます！？夏哉っ！」

ゴンゴンゴンと何度も叩くが返事が全くない。

仕方なくドアノブを回すと、鍵を掛け忘れたのか開いてしまう。

「夏哉入りますわよ！」

カチッと電源を入れる。
室内が照らされ、様子が見えてくる。

その部屋の中心に敷かれている布団の中に、夏哉はいなかった。

「あれ？」

代わりに何か乗っていた。

歩を早めて敷かれた布団まで行く。

昼間の事もあるのでドッキリではないかという考えを頭の隅に置いておく。

紙を手に取ると文字が書かれていた。

『ちょっと出掛けてくるわ。朝までには帰ってくる予定だけど帰ってこなかったらちょい待ってて。アンも一緒だから』

という内容だ。

またアンさんとですの？

今日一日夏哉はアンさんと行動をよくしますわね。

どうでも良いですけど。

念のため押し入れなどを調べてみたが本当に出掛けてるみたいだ。

夏哉には申し訳ないが勝手に荷物をまとめさせてもらう。

といっても適当に詰め込むだけですが。

詰め込みが終わるとドアをノックする音が聞こえた。

わたくしはドアを開ける。

そこには従業員とおぼしき男性がいた。

「夜分すいません。ただいま火事が起きてしまい急いで避難をしていただきたく」

「誤報ではないんですね？」

「はい。原因はまだ分かりませんがボイラー室からの火事ですので、窓の外から避難してください。懐中電灯をお渡ししますので、右手側にある玄関の方に他の従業員がいます。そちらの指示にしたがってください」

「分かりました」

「では失礼します。本当は私たちが先導するべきなのですが」

「いえ、構いません」

あ、一応聞いて見ますか。

「すいません、お聞きしたいことがあるんですが、わたしより少し背が高くて同い年くらいで黒髪の少年を見ませんでしたか？」

「黒髪？もしかして昼間迷子をつれてきた男子かな？」

「はい。外に出ると言ってたので大丈夫だとは思いますが、もし見つけたら……香苗に連絡するように言っておいてくれませんか？」

「分かりました。香苗様です――」

「ヒャアッハッハッハッハッハッハァッ！！」

突然遠くから男性の異常な笑い声が聞こえた。
声を聞く限り精神がイカれてる感じがする。

「なんだぁ？」

従業員は先程の奇妙な笑い声に素頓狂な声を出す。

わたくしは考え、決断する。

「貴方は早く避難の方をお願いします」

「は？え、何？」

突然のわたくしの言葉に素で反応する。

「わたしは声のする方へ行ってきます」

「はぁっ？何言って――」

男性の言葉はそこで途切れてしまった。

何故なら、わたくしが左手で男性の右手首を、右手で右二の腕を掴み、相手に背中を向けて足を広げ、左足を男性の左足の外側に、右足を男性の右足の外側に置き、右太ももを脛に当てて思いっきり引っ張ったからだ。

男性は宙を舞い、わたくしは掴んでいる腕を軽く上に引っ張る。
それによって上半身は少し上に浮き、足からの着地をさせる。

「ご安心を。このように護身用の技は覚えていますし、医者の孫で

すので医療はかじってます。応急処置程度なら出来ます」

腕を引いて男性を立ち上がらせる。

わたくしは手を離し、夏哉の荷物とメモ紙を取りに室内に戻り、窓へ向かう。

「香苗！！います！？」

「ま、真樹ちゃん！？」

香苗と沙鳥様が外にいた。

見ると沙鳥様が懐中電灯を持っている。

ということは沙鳥様のところに従業員が来たということになる。

「夏哉君は！？」

「メモ書きがあって外にいるそうですわ！これ、夏哉の荷物です！！」

窓から身を乗りだし夏哉の荷物を香苗に渡す。

香苗は自分の荷物を一旦置き、両手で夏哉の荷物を持つ。

「後これ、メモ紙ですわ。アンさんも一緒にいるそうです。先に行っててください」

「真樹ちゃんはっ！？」

「これでも医者の卵ですので、見てきますわ」

「じゃあ私も――」

「その荷物を沙鳥様一人に持たせるわけにはいかないでしょうに」

「真樹」

今まで黙っていた沙鳥様が声を掛けた。

「な～んか真樹が主人公っぽくなろうとしてるけど」

そう言葉を区切ると、親指で自分を指す。

「私泣(ヒロイン)かせちゃダメだから」

ね、とウィンクする。

「はい、承知しました」

そのまま踵を返し、従業員に話しかける。

「貴方は直ぐに各部屋に回ってください」

「え？あ、その、え？」

「早くっ！！」

「ハ、ハイッ！！」

駆け足でこの部屋を出ていく。

私も靴を履いて走る。
笑い声が聞こえた方に。

しばらく走ると、一人の男性が立っていた。
逃げ遅れた人か、この状況にした人か。
どちらにしても話しかけないことには始まらない。

「大丈夫ですか？」

この場はまだ火の手が回っていない。
近くに部屋もあるので逃げられる。

「あぁ？なんだい君？」

こちらを振り返る。
見た目は二十代前半といったところか。

「おおっ！？君は沙鳥様の側にいる女の子ではないかっ！？」

？沙鳥様？……。
つまり沙鳥様支持者というわけですか。
まぁ沙鳥様ですから全世界からの指示、いえ、神からの指示を受けていると言っても過言ではありませんが。

「早くここから逃げませんと死にま――」

？すわよ？、とは紡げなかった。

何故ならその男はナイフを手に持ちこちらに近づいてきたからだ。

わたくしはバックステップでそれを躱す。

その扱いを見て、素人だというのは分かった。

「いきなりなんですの？」

この男が犯人と見て間違いないですわね。

男を見ると、何故か震えている。

「ムカつくムカつくムカつくムカつくムカつくムカつくムカつくムカつくムカつくムカつくムカつく……」

こ、これは本当にイカれてますわ。

「なんで、なんで沙鳥様の傍に僕じゃなくてお前らがいるんだッ！！」

あ、嫉妬ですか。

ということはわたくしたちを殺して沙鳥様に取り入ろうと、そういう――

「だから僕は沙鳥様を殺してあの世で一緒になるんだ」

この男は終わってる。

そう思った。

好きな人を殺して自分も死ぬ、そんなようなことを本当にするなんて。

しかし身の毛も弥立つ思いはまだ終わらなかった。

「それであの大きなおっぱいを揉んで握り締めて、一杯孕ませるんだ！」

震えが止まらなかった。

恐怖が体を支配する。

蘇る記憶。

全身から力が抜ける。

ペタッと尻餅をつく。

「い、いや……」

何も出来ない。

する気が起きない。

相手は懐に手を忍ばせ、瓶を取り出す。

そこには液体が入ってて、その瓶を後ろに放り投げる。

瓶は割れ、液体が染みだす。

今度はマッチ箱を取りだし、一本マッチを擦るとこぼれた液体に落とす。

ボオッ!!と火が迸る。

「沙鳥様は僕のものだ!!僕のものにならない沙鳥様は死んじゃえばいいんだ!!ヒャアッハッハッハッハッハッハッ!!」

ピクッ。

その言葉にわたしは反応した。

「……せない」

怒りだ。

「そんなこと、させない……」

怒りが体を支配した。

「あんたみたいな最低なやつが……」

恐怖は残ってる。

「沙鳥の傍にいていい筈がない」

だけどそんなのは無視する。

「あんたみたいなどうしようもないやつに……」

力の入らない足を無理矢理動かす。

「沙鳥をどうこうさせない」

目の前にいる敵を倒すために。

「沙鳥はわたしの大切な友達だ！！あんたみたいなクズ野郎のものじゃないっ！！」

立ち上がり、敵を見据える。

「勝手な妄想を抱いて友達を汚すあんたを絶対許さないっ！！」

わたしは走った。

力一杯、出せる限りの全力で。

あの男に近づくだけで吐き気がする。

近づきたくない。

逃げ出したい。

でも、今だけはダメ。

ここで引いたら、わたしを許せない。

相手はナイフを持った手を振りかぶる。
しかし体は隙だらけだし、攻撃も躱せる。

左腕を伸ばし、降り下ろしてくる手首を掴む。
相手は力も弱かった。
右手に渾身の力を加える。

「アアアアアアアアアアアァァァァァッ！！」

叫びと共に拳を相手の溝にいれる。

「グァッ……！！」

相手は後ろによろめくが、そうはさせない。

掴んでいる右腕を引いてこちらに寄せる。
そしてもう一撃。

それをもう一度繰り返そうとすると、右手を誰かに掴まれた。

「真樹ストップ」

「離せ！！こいつだけは！こいつだけはここで殺――」

「真樹ッ！！」

その後左腕も掴まれ、後頭部に衝撃を受けた。

「いっ――！！」

その衝撃で男の右腕を離してしまう。

「落ち着け真樹。元に戻れ」

頭の衝撃と聞き覚えのある声に我に返る。

「な、夏哉？」

首を回すと夏哉が見えた。

「え、な、どうしてここに？」

「いやな、さっきまで外にいたんだけど、ここが燃えてるのが見えて、裏から部屋行って三人の安否確認しようとしたんだけど誰もいなくて、なら自分の荷物でも取りにいくかと思ったら誰かさんの叫び声が聞こえたから来たって訳」

「き、聞いてたんですの？」

「まね。で、そのぼこぼこにされた男は犯人？」

「え、えぇ……」

夏哉は気絶している男の元に寄り、それを脇に抱えた。

その時、夏哉がこちらに背中を向けた時、違和感を覚えた。
夏哉の服、背中にあんな真っ赤な模様なんてあったっけ？
わたくしの記憶にはそんなの全くない。

「な、夏哉……」

「ん？どうした？」

夏哉はなんともないように振り返る。
そんな風にされるとそれが普通だと思ってしまう。

「い、いえ。なんでもありません……」

「そう？じゃ、逃げま――」

しかし夏哉は途中で言葉を区切り、首を横に向けた。

「ど、どうしました？」

「ん～、デジャビュか。一応聞いてみるけど今声しなかった？多分るあちゃんだと思うけど」

「え、こ、声？全く聞こえませんでしたが……」

「あ～、そっか。じゃあちょっと見てくるから真樹はその男引きずって逃げ――」

「イヤッ！！」

反射的に声が出た。
そして夏哉にすがり付くように袖を掴む。

「お、お願いですので今この男と二人きりにしないでください！」

わたくしの懇願に、夏哉はひとつため息をつく。

「はぁ～。分かった、俺がこの犯罪者担いで行ってみるから、付いてくる？一人で戻る？」

「……付いていきます」

「よし来た。じゃあ走って行くぞ」

「は、はい」

わたくしは夏哉が抱えてる男から距離を取りながら夏哉に付いていく。

第三話　《十九章》怒り（後書き）

作者「さ、ついにクライマックス。後一章書いて、エピローグで第三話終わりです」

香苗「ねぇ、今更すぎるしもしかしたら前に言ったかもしれないんだけど……」

アン「どうした？」

香「普通？章？と？話？が逆だよね？？第三章十九話？だよね？」

作「いや、それは前に友達に指摘されたさ。で、本当は？話？じゃなくて？巻？にしたかったんだよ」

香「えっと、漫画を数える一巻二巻？」

作「そうそうそう。だけどよく考えたらこれを？巻？で数えないでしょ？だから？話？になった」

ア「つまりこいつの頭の足りなさでクダグダになったというわけだな？」

作「全く持ってその通りです」

ア「それにしても、まさか最後の最後で真樹がヒロイン、というか主人公っぽくなったな」

香「うん。いつもだったらあれ夏哉君のポジションだよね？」

ア「それになんか口調も変わってるし」

作「ま、類友ってやつだな」

ア「なんだそれ？」

作「さ～ね～」

香「それにしても凄いよね。ＰＶがそろそろ５００００になりそうだし、だいたい４０人がお気に入りしてくれてるんだよ？」

ア「ほんと、申し訳ないな。こんな駄文を５００００回もきてくれて、あまつさえ４０人がお気に入りだぞ？他がわからないからどの程度なのかわからないが、作者にしたらあり得ない数字だろ？」

作「全くです！！ほんとありがとうございますっ！！……でも、欲を言えば感想ほしいです。つーかさっさと寄越せやッ！！いつまで経っても一向に感想が来ねーじゃねブッ！？」

ア「おいこら作者ッ！！テメェいきなり何逆ギレしてんだ！アァッ！？！」

香「さっすがに私もキレチャウナ～。アハハ～。……死ね」

ア「あ、そうだ。読者の皆さんがストレス解消のためにここの感想に罵倒を載せる、っていうのはどうだ？」

香「アハハ～、いいねそれ。作者の要望も読者のストレスも一気に解決出来るねっ」

作「ま、まてまて待ってくださいッ！！すいません！！流石にそれは勘弁してくださいっ！！それは俺キツい！！土下座しますんでどうかそれはやめてください読者の皆様方ぁっ！！あ、でも感想はください」

第三話　《二十話》救出、そしてお礼

「るあー！るあーっ！」

気温が炎によって徐々に上昇し、顔も汗で濡れている。

いまだにるあを見つけることが出来ない。
もしかしたらもう外にいるのかも知れない。
そう思い立った瞬間、泣き声が気がした。

「るあ！？」

私は聞こえた方に足を向ける。
正直暑くて疲れたけど、足に鞭を打って駆ける。

徐々に声が大きくなってる。

「るあー！聞こえる！？」

「あかねぇ！？あかねぇっ！助けて！」

私は足を早める。

るあはすぐ見つかった。
廊下の突き当たりに座っている。

「るあ、大丈夫！？」

すぐに駆け寄ってるあを抱き締める。

「あかねぇ！あかねぇ！」

るあは私の胸で泣きじゃくる。
私は優しく抱き締める。
しかしそうした瞬間るあは声をあげなくなり、その代わり肩を大きく揺らして苦しそうにしている。

「るあ！？ねぇるあっ！？」

体を揺らしてみても全く反応しない。

早く脱出しないと。

私は立ち上がろうとするが、それを見計らったのかここからひとつ先の少し離れた部屋から轟音が鳴り響き、ドアが吹き飛ぶ。
そこから炎が巻き上がり、唯一の逃げ道を塞ぐ。

逃げることが出来ない。

思いっきり火に飛び込んで抜ける？
るあを抱えながらだと厳しい。
廊下の小さい窓から抜ける？
大きさは大丈夫かもしれないけど二人は無理だし、窓を開けた途端酸素が入り炎が増してしまう。

解決方法が思い付かないとき、学校で禁止されている、しかしこの状況では唯一の方法を思い付いた。

魔法だ。

確か記憶を失われるとか言ってたけど、人助けならいいともいってたと思う。

意を決して力を込めようとしたとき、

「灯里ーッ！るあーッ！」

「柊！？」

私たちが避けていた柊夏哉の声がした。

「こっちか！？真樹大丈夫か！？」

「大丈夫ですわ」

早乙女さんもいるようだ。

「チッ！！火で動けねえのか！！……真樹、少し我慢しろよ」

「え、何、うわっ！？」

いきなり早乙女さんの悲鳴が聞こえた。

「灯里！！急いで壁を向いて右側に寄れ！！」

柊に叫ばれたので慌てて言う通りにする。

「行ったか！？」

「う、うん！！」

「ん、じゃあ――」

ダンッ！！という大きな音がしたと思ったら、突然目の前の炎が揺らぎ、隣でザザザッ！！という音がして突風が体を打った。

「きゃあっ！！」

突風に目が開けられずに腕で顔を隠し悲鳴をあげる。

突風が収まり目を開けると、隣に早乙女さんと知らない男を抱えた柊がいた。

「大丈夫か！？」

なんでここにいるの？

そんな疑問を少し考え、それどころじゃないことに気づいた。

「るあが！るあが倒れたのっ！！」

「夏哉、下ろしなさい！わたくしが見ますわ！」

柊は早乙女さんを下ろし、早乙女さんはじっとるあを見る。

「……まずいですわ。脱水症状に酸素不足。すぐに抜け出しませんと」

「るあ大丈夫なの！？」

私は早乙女さんに詰め寄る。

「子供ですので、十分から二十分以内に水分と酸素を与えればなんとか……」

「よし、じゃあすぐ出るぞ」

柊が簡単に言う。

しかしここは炎に囲まれてるし、抜け出したとしても道が分からないのですぐに脱出出来る保証はない。

「どうするんですの？抜け出すにしても遠いですわ」

「酸素と水分、どっちの方が優先？」

「それは……酸素ですわ」

「なら平気だ」

「だからどうするんです？」

柊は笑った。

「俺を誰だと思ってる？化け物だぞ？こんな壁くらい一発だ」

そんなことをためらいもせず、普通に言った。

「壁壊すと風入って火が増すからすぐ出ろよ？」

そう言うと柊は足を開いて拳を構える。

「行くぞ！三、二、一、零！」

拳を前にある壁にぶつける。

ゴッ！！

大きな音が鳴り響くと、冷たい風が肌を撫でていく。

「早く出ろ！！」

柊の声に引かれて、先ほど撃ち抜いた場所から外へ出る。

「ぬぅをっ！？段差！？」

柊が叫ぶが、遅かった。

床と地面には段差があり、足を取られる。

二人はちゃんと着地出来たけど、私は疲れが溜まっていたのか、踏ん張りが効かず倒れてしまう。

メキッ。

上空でそのような音が聞こえた。

首を回して見てみると、宿の屋根の一部が落ちてくる。
少し大きいく、当たったら絶対骨が折れる。

早く逃げないと、と思うが足が重くて動かない。

当たる！そう思ったから、るあを守るように上に覆い被さる。

痛みを堪えようと目を瞑るが、全く痛みが来ない。
その代わり柊の叫びが聞こえた。

「ほわちゃ～ッ！！」

ベキッ！、という音が聞こえ、その後宿の方から何かとぶつかる音が聞こえた。

恐る恐る目を開けると、すぐ側に柊が着地した。

「怪我、してな――いぃぃ？」

突然柊が倒れた。

「夏哉！？ちょ、大丈夫ですの？」

早乙女さんが駆け寄る。

「……ごめん、疲れて動けない」

「疲れて、って……。峯岸さん、立てますか？」

「う、うん……」

私は腕を使って立ち上がる。

早乙女さんはるあの目の下を引っ張りながら言う。

「取り敢えず少しは時間が延びました。宿に沿ってまっすぐ行けば皆がいます。水分くらいはあると思いますので行ってください。歩いて十分掛からないと思います。わたくしも付いていきたいのですが一応柊を見ておかなければなりませんので」

「うん、大丈夫です」

私はるあを背負う。

少しだけど呼吸が落ち着いた気がする。

「ありがとう、早乙女さん」

「わたくしは何もしてませんわよ。言うならこちらに言ってくださいまし」

そう言われて柊を見る。

いまだ地に伏せている。

助けられたのには感謝してるが、今までのことがあり素直に言えない。

「あ、あの……」

「何してんのさっさと行けよ」

私が言おうとするのを遮って柊が言う。

「何化け物にお礼しようとしてんだよ?俺は偶然お前ら見っけて、偶然一緒に脱出しただけだ。お礼される筋合いはねぇ。それにこんなんで立ち止まってるあちゃんがどうにかなったらどうする?俺のせいにすんなよ」

そんな、思ってないようなことを淡々と言った。
嘘だというのはすぐに分かった。
でも柊の言うことも確かだったので私は歩き出した。

そして、心の中で『ありがとうと』『ごめんなさい』を何度も何度も繰り返した。

――――――――――――

「全く、貴方も不器用ですわね、あんな憎まれ口叩いて」

「うるせ」

わたくしは倒れた夏哉の傍らに座る。

「どうしたんですの、いきなり倒れて。確かに疲労は溜まるかと思いますが倒れるほどですか?」

わたくしの問いに夏哉は笑いながら答えた。

「いや、さっきまで死闘を繰り広げてたからな。そのあとすぐ５０

０ｍほどを全力疾走して真樹を止めて、そっからは知っての通り」

死闘って、なんですの？

その意味を考えあぐねていると夏哉の方から話し掛けられた。

「それにしてもお前、あいつに思いっきり叫んでたけど、何言われたの？」

そこは聞いていなかったようだ。

つまりタイミングよくわたくしの声だけを聞いた、と。

だんだん恥ずかしくなってきましたが、必死に表情に出さないようにして冷静に答えた。

「？沙鳥様は僕のものだ、僕のものにならないのならあの世で一緒になるんだ！？だそうですわよ」

最後の一言は言わないでおこう。

余計気分を害しますし、わたくしも吐きそうになる。

「ごめん真樹、あの時止めなきゃよかった。もっと言えば俺も殴ってればよかった」

「貴方、それは流石に死にますわよあいつも。壁に穴開ける拳なんて」

「加減ぐらい……出来ると思います」

「自信ないんですか」

そうだ、この機会だから夏哉に言っておかないと。

「夏哉」

「どうした？」

「申し訳ありませんでした」

わたくしは頭を下げる。

わたくしのこの行為が意外だったのか、『え、あ、え？』と、戸惑っている。

「えっと、な、何？」

「わたくしたちが初めて会ったとき覚えてますか」

「何これ？なんかフラグっぽくね？まぁいいや。初めてっつーと、前に沙鳥と手を繋いだときだっけ？」

「違いますわ。もっと前、登校するとき男子に追い掛け回されて、香苗が喋れない程走った時のことです」

「ん～、ちょっと待って。……あ、確か沙鳥が俺に寄りかかってきて、そんときか」

思い出してもらえたようだ。

「えぇ。それで、その時、夏哉のことを化け物と言ってしまい、ま

だその事を訂正してないというか……」

徐々に声がしぼんでいってしまう。

そんなわたくしを見た夏哉は、大きなため息をついた。

「別に全く気にしてないぞ。それに、いちいち気にしてたら俺絶対ハゲてるっつーの。それに事実だろ？壁壊したり、２ｍくらいジャンプして屋根の一部蹴り飛ばしたり。まぁいいんだよ。結局この力があったから生きてるわけだし」

「どういうことですの？」

最後の一言だけが分からなかった。

？生きてるわけだし？？

まさか本当に死闘をしたんですの？

あり得ないと思いつつ、服の背中についていた赤い模様を思い出す。

もしかしたらそれは血かもしれない。

わたくしはそこを指摘する。

「夏哉、背中についてる赤いのなんでしたの？」

「は？赤いの？なんか付けてた……え、マジ！？やっべ！真樹ちょっと起こして！！」

言われたように夏哉の上半身を起き上がらせると、突然上着を脱いだ。

そして服を見て再びため息をついた。

「これもう着れねぇじゃん……」

「それなんですの？……血のように見えるのですが」

「ん～……まいっか。この事は話すとして、まずアンのこと話すわ」

それから十分か十五分くらいの時間を掛けて説明された。
アンさんのこと、四月二十八日のこと、先ほどの死闘のこと。
正直話が飛びすぎだと思ったが信じてみることにした。

「理解した？」

「まぁ、一応は……」

「ま、そうなるわな」

「でも一応信じてあげますわ」

「サンキュー。あ、そうだ。背中になんかあとある？」

夏哉の背後に回るが、特に変わった変化はない。

「別になんともありませんわ、よっ！」

最後の掛け声と共に平手打ちを背中に当てる。

バチンッ、といい音がした。

「いッ!?てんめ、死ね!あー、いてーッ!!」

両手で叩かれたところを擦る夏哉。

その背中にはわたくしの手形がくっきり浮き上がった。

「まぁ、きれいな紅葉」

「何いいとこのお嬢様みたいなこと言いやがって!」

「一応いいとこのお嬢様ですわ」

「そうでございましたねッ!!」

しばらく沈黙が支配した後、夏哉が立ち上がった。

「じゃあそろそろ俺らも行くか」

「大丈夫ですの?」

「歩く程度ならな。それに早くいかないとこいつも目ぇ覚ますだろうし」

夏哉は自分の服をロープのように使って男の両手を縛る。

それをまた脇に抱えて歩き出す。

わたくしもその隣を歩く。

「そういやあの言葉、沙鳥に言ってあげれば?」

「どの言葉ですの？」

「『沙鳥はわたしの大切な友達だ！！あんたみたいなクズ野郎のものじゃないっ！！勝手な妄想を抱いて友達を汚すあんたを絶対許さない！！』真樹ちゃんカックイ～」

「なっ！！ば、バカじゃありませんの！？なんでそんなの覚えてますのっ！？」

「きっと沙鳥は泣いて喜ぶぞ。その後沙鳥は抱きついてきて『真樹ありがとう！真樹がこんなに私のこと思ってくれたなんて！大好きっ！』ってなるぞ」

「それはグッと来るところがありますがキャラじゃありませんし！それに沙鳥様を呼び捨てにしたんですわよ！？殺されますわ！」

「で、実際沙鳥はどうしてくれると思う？」

「……ありがとう、って言ってくれると思います」

「だろ？言えばいいのに」

「絶対言いません」

「あっそ」

「夏哉ーっ！真樹ーっ！」

前方から沙鳥様の声が聞こえた。
見ると沙鳥様と香苗がこちらに走ってくる。

「沙鳥様！香苗！」

「え、ちょ、待って。嫌な予感がする。絶対あのまま抱きつかれる。真樹、助けろ！俺今そんなことされたら死ぬ！」

「知りませんわ」

「そうか！よーし分かった！なら俺は最後に自分の株をあげるためにあの言葉を言ってやる！『沙鳥はわたしのと――』」

「あーっ！！分かりましたわ！いいでしょう、今回だけは味方になってあげますわ！沙鳥様！今だけは申しありませーんっ！！」

――――――――――――

翌朝。

俺たちは少し離れたホテルを借りて一晩過ごした。

今俺たちは、かつて矢田染温泉があった地にいる。

火事によって建物は半壊、幸い死人はでなかった。

そして、何故ここにいるかと言うと、

「すいませんでしたっ！」

沙鳥がその場にいる従業員全員に頭を下げた。

皆キョトンとしている。

「その、この火事は私がここにいたから起きちゃったことで、だから皆さんに謝らないと、と思って。謝るだけじゃすまないと思いますけど、すいませんでしたっ！」

ホテルの人から、従業員がここにいると聞いたのでここまで足を運んだ。

対して従業員たちの反応は、

「な、何言ってんですか天雲さん!?天雲さんのせいじゃないですよ!!」

「そうですよ!悪いのは全部瀬尾(せお)ってやつのせいですよ!天雲さんは何もしてないじゃないですか！」

そうだそうだ、と周りも同調する。

「皆さん……。ありがとうございます！」

その状況を遠巻きに見た俺の感想。

「ああやって沙鳥のファンが増えていくんだな」

「そうかもね」

隣にいる香苗が苦笑で返してくる。

「おにいちゃん！」

と、後ろから舌足らずな声が聞こえた。
後ろを向くとるあちゃんがこちらに走ってくる。
「るあちゃん？どうしたの？」
まさかまた迷子？
そう思ったけど後ろに灯里がいたのでほっとした。
るあちゃんはペコリと頭を下げる。
「るあとあかねぇをたすけてくれてありがとうございます！」
顔をあげたるあちゃんは笑顔だった。
倒れて心配だったけど杞憂に終わったようだ。
「どういたしまして。それ言いに来てくれたの？」
「うんっ。あかねぇはおにいちゃんのことわるいひとっていってるけど、るあはおもってないよ。るあにとっておにいちゃんはせいぎのみかただもん！」
「そっか……」
そんな風に言われると、なんだかむず痒くなる。
小さい、何も分からない子でもお礼を言われると言うのは嬉しい。
「あの……」

るあちゃんの後ろ、今まで黙っていた灯里が話し掛けてきた。、

「ん？」

顔をそちらに向ける。

「えと、その、昨日はありがとうございましたっ！それから、今までごめんなさいっ！」

さっきのるあちゃんより深く頭を下げる。

本気でそう思っているのだろう。

昨日助けてもらったお礼と、今まで偏見で俺を見た謝罪と。

ま、気にしなくていいんだけどね。

「はいよ～。どういたしまして」

俺は軽く答える。

「……え？」

それを灯里は意外に思ったようだ。

「な～に戸惑ってんの？」

「だ、だって、凄いあっさりしてるから……」

「別にそんな気にしてないの、俺は。つーか俺に謝るくらいなら、親に俺の親と仲直りするよう説得してきなさい」

「ゆ、許してくれるの？」

「だぁから、怒ってないって。あ、そだ。るあちゃん」

「なに？」

「るあちゃんの家の前に赤い屋根の家なかった？」

「あるよ？」

「それ、お兄ちゃんの家なんだ」

「ほんとっ？じゃああそびにいっていい！？」

「うん。その時はあかねぇに言ってからね」

「わかった！」

るあちゃんは嬉しそうに笑顔になった。

「じゃ、るあ。そろそろ戻ろ」

「え～」

ぐずるるあちゃん

「るあちゃん、言うこと聞かないと」

「……うん。じゃあね、おにいちゃん」

「またね」

二人は手を繋ぎ帰っていく。
俺はそれを小さくなるまで見送る。
「……」
「よかったな、誤解解けて」
感慨深く見ているとアンが話し掛けてきた。
「そうだな」
「あ、そうだ。夏哉、こっち向け」
「ん？」
言われた通りに振り向くと、アンの顔がだんだん近づいてきて、
唇が触れた。
二秒くらい時が止まり、アンは顔を離した。
俺が戸惑っていると、アンが可愛らしくウインクした。
「愛しると言ってくれたお礼だ。助けてくれたのもな」

愛してる？
……あぁ、タクノムの攻撃から守ってくれた時――

「アンさん！！な、なな、何したの！？」

声のした方を見ると香苗と、謝罪を済ました沙鳥が顔を赤くしていた。
真樹は何が起きているのか分かってない。

「何って、お前ら二人が前にやったキスだ」

「そうじゃなくて！なんで今こんなところで夏哉君としてるのって聞いてるのっ！」

「それに結局昨日は二人何してたの！？」

「え、アン何も話してなかったの！？」

「アンちゃん？」

ギロッと二人がアンを睨む。

「いや、こういうのは言わない方がいいと思って。言い訳しろって言ったのお前だし」

「「言い訳？」」

……二人が怖いです。

「ごめん、俺のせいだね」

「夏哉、昨日のことですの？驚かれるかもしれませんが普通に話せばいいのに。分かってくれると思いますわよ」

「え、真樹知ってるの！？」

「えぇ。本人から……」

考え込む二人。

「昨日二人で外に出掛け……」

「夏哉君がアンさんに『愛してる』って言って……」

「アンちゃんに言い訳考えさせて……って夏哉が逃げたっ！」

嫌な予感がしたので走って駅まで逃げた。

どうか殺されませんように。

第三話　《二十話》救出、そしてお礼（後書き）

真樹「ようやくわたくしも事情を理解しましたわ。これでレギュラーに一歩近づきました」

沙鳥「よかったね、真樹っ。後は夏哉に恋するだけ！」

真「さようならレギュラー、わたくしは一生忘れませんわ」

沙「諦め早！？」

作者「はぁ～」

沙「作者どうしたの？」

作「最後にさ、アンと夏哉のキスあったじゃん？今思うと、無理矢理詰めたな～って」

真「まぁ、完全に後付けというか、おまけみたいになりましたわね」

作「ほんとはね、もっとロマンチックな感じを予想してたわけだ。沙鳥は微妙だったけど、香苗みたいな」

真「あれはまぁ、そうとは言えなくはないですが……」

沙「いいんじゃないの？アンちゃんらしいと言えばらしいし」

作「そうだな～。じゃ、もうひとつ」

沙「何～？」

作「真樹と夏哉をキスさせるかどうか」

真「しませんわよっ！！」

作「だってさ～、真樹勝手に動きすぎなんだもん！」

真「どういうことですの？」

作「夏哉が最初にるあを探しに言ったときさ、真樹夏哉に気遣いの電話したでしょ？沙鳥と香苗だけじゃなく俺も驚いたんだからね！！」

真「そんなこと言われましても……」

沙「まさか真樹、作者をも越える力をもって……！」

真「いえ、それはさすがに……」

作「それにさ、正直性格も思った以上に柔らかくなったな～って思ったし。まぁそれはまだいいんだよ？いいんだけどさ、まさか夏哉に？化け物？って言ったことを根に持って謝る気満々だったのは、正直困ったよ！当初の予定では真樹が犯人ぶん殴らないし、もっと言えば火事なんて起こらなかったんだぞ！？」

真「えっ！？あの火事わたくしのせい！？」

作「しかも他のヒロインより真樹の方が謎というか、伏線多いし。

どうしてくれる!?」

真「それは貴方のせいですわっ!!」

作「まあいいや。じゃ、第三話も後えぴろーぐ。第四話は閑話休題的なものなので、特に物語に関係はありません。しかしスピンオフはかなり重要になると思います」

沙「ねぇ、第四話って何やるの?ネタバレしない程度で」

作「まぁ、一年だけのミニ運動会っていうかレクレーションだな。スピンオフのほうと時間がクロスしてやるので、より知りたい人はそっちも見てね」

真「では後書きは終わります。感想、お待ちしてますわ」

第三話　《エピローグ》異界の神

真っ黒な世界。

これがこの世界には一番しっくり来る。
色がないわけではない。
しかし黒の割合が多い。
八割が黒と言っても過言ではない。

俺はその世界で、一番高い漆黒の塔の頂上で跪(ひざまず)いている。

闇。

この塔の内部も漆黒、最早闇に支配されているようにも思える。

跪く理由、それは目の前に神が存在しているから。

王を凌ぐ神。

俺より二つ、いや、今はひとつ上の、しかし届きようのない存在。

「魔界が王の存在、タクノムが参上つかまつりました」

「お帰り、タクノム
この世界の神、アルクシア様はこの闇の空間に、やはり漆黒の椅子に座っている。

「で、クーレラは？」

圧倒的な存在感を示しながら、しかし気軽に話し掛けてくる。
言葉だけを聞けば、こんな威厳の無さそうなのが神？と思うかもしれない。
しかし目の前に立てば誰でも分かる。
この方は神だ、と。

「……申し訳ありません、失敗致しました」

「あれ？じゃあ全滅？確か九人ぐらい？」

アルクシア様は皮肉でも嫌味でもなく、ただ疑問に思ったので質問する。
責める様子もないアルクシア様の優しさに感銘を打たれる。

「はい。あ、しかし死んだのは四人です。それ以外は怪我だけで済んでいます」

「え？クーレラ殺さなかったんだ」

アルクシア様が驚くのも無理はないだろう。
彼奴は向こうの世界で変わった。

「その事でお話したいことが」

「何々？教えて」

「はっ。クーレラが殺さなかった理由、それには地球に存在するある人間のせいです」

「人間？ていうか異世界の人は干渉できないでしょ？バカにしてる

？」

「いえ！滅相もございませんッ！……私も驚きましたが、向こうの世界には我々に干渉出来る人間がいたのです」

「ほんと？そんなの……」

アルクシア様は途中で言葉を区切らせ、何か思案する。

何か思い当たる節があるのだろうか？

「ねぇ、その人間って、名前何？」

「夏哉です」

「夏哉、夏哉、夏哉……もしかして黒髪？」

俺は夏哉を思い出す。

確か黒髪だった。

「はい。そのように覚えてます」

「そっか、あの子が……」

夏哉のことを思い出したようだ。

「それで、他に報告は？」

「……誠に言いにくいのですが、前（さき）の派遣隊、それに加えて最初のクーレラ討伐隊の生存者の計十四名、半数がその夏哉に倒されました」

「えっ！？」

アルクシア様は身を乗り出してまで驚く。

「夏哉が本当に倒したのっ？」

「はい。そして、クーレラは何故か奇法力の大半を失っておりました」

「奇法を……？……ねぇ、夏哉はどうやって倒したの？」

「それが、我々を凌ぐほどの運動能力と、奇法を使って」

「……からかってないよね？」

「もちろんです」

「その運動能力ってどれくらい？」

「……一瞬姿を捉えられなくなるほどの脚力をもち、一撃で私を吹き飛ばす腕力を持っております」

「ということは、タクノムは夏哉にやられたの？」

「そうなのですが、正確には違います。我々が夏哉に致命傷を与えた時、別の人格が現れました。その時の夏哉は、本当に別人で、私を一撃で戦闘不能に追い込ませました」

「致命傷の状態で？」

「いえ、その人格に変わった途端、傷は再生された模様です」

「………………」

再び思考する、我らが神。

すると突然、何かが乗り移ったように笑い出した。

「ふふ、ふはは、はははっ！！」

「あ、アルクシア様？」

俺の言葉で我に変える。

「あ、ごめん。ありがとう。もう戻っていいよ」

「あの、処罰は？」

「しないよそんなの。今タクノム《偉大》に何かがあったら困るのこっちだし。傷を直してまたあたしを手伝って」

俺は微笑む神に見惚れ、我に帰って頭を下げる。

「勿体無いお言葉、ありがとうございます」

俺がこの場を去ろうとしたとき、思い出したかのようにアルクシア様が声を掛ける。

「そうだタクノム。怪我が治ったら《義妹》と《愛憎》を地界、っていうかクーレラに送って」

「あの二人を……急ぎでございますか？」

「ううん。すぐにやらなくていいけど、早めがいいな」

「畏まりました。では今すぐにでも」

「だから急ぎじゃないって。う～ん……じゃあ今回傷ついた皆が完全回復したら送って」

「……畏まりました」

いったい何を考えてるんだろうか、このお方は。

――――――――――――

あたしはタクノムがここから去るのを見送る。

この場にあたし一人しかいないことを確認する。

「見つけたんだ。……通りで似てるわけだ」

つい言葉に出してしまった。

「メルティは気付いてるかな？気付いてるか、メルティだし」

この場にはいない人物を二人思い描く。

「絶対負けない」

あたしは思いを新たにする。

後書きという名の雑談？

作者「は～い！第三話終了っ！皆お疲れ～」

夏哉「お疲れ～。や～、なんか俺久々に活躍した気がする」

真樹「いや、久々というより初めてではないんですの？」

夏「ウルセーッ！」

香苗「でも今回は私たち以外全員活躍してない？」

沙鳥「その？たち？の中には私も入ってる？」

香「そうでしょ？」

沙「いや私はね、誰かさんがヤンじゃってその後始末をしたり、お風呂であんなことやこんなことがあったり」

香「あんなこ……。何したの！？ねぇ何したのっ！？」

沙「ふっふ～、知りたい？」

香「知りたいですっ！」

真「知りたいですわ！！」

アン「お、真樹もか」

沙「アンちゃんは？」

ア「ん～、話の腰を折ってしまうんだが、？あんなことやこんなこと？の意味が分からん。なんらかの比喩か？」

沙「え～っと、そっか～。説明して分かるかな～」

夏「説明するな。いや、するにしてもここでするな」

ア「なんか変な意味か？」

夏「まぁそういう風にもとれる」

ア「じゃあ夏哉、後で教えてくれ」

夏「……と言ってますが、教えてもいいですか？」

香「常識的に駄目じゃないかな？」

夏「じゃあさ、小学生と男、どっちが教えた方がいい？」

香「私小学生じゃ――」

沙「夏哉かな？」

真「どちらかと言えば男じゃないんですの？」

香「二人とも私が小学生だってこと否定してよ！！」

ア「香苗、何言ってるんだ？」

香「え？」

ア「夏哉たちは誰もお前のことを小学生と呼んでないぞ」

香「……あ」

ア「つまりお前は自分で小学生と認めてるんだっ！」

香「そ、そんな――！」

真「……沙鳥様、確か魔族って頭悪いんではありませんでしたっけ？」

沙「そうだっけ？夏哉？」

夏「そうだよ～。沙鳥を見れば明白」

沙「事実だけどさ～！事実だけどさ～！！」

真「夏哉、沙鳥様をいじめないで下さいまし」

作「ね～、暇だから混ぜて～」

夏「……作者が何言ってる？」

作「いいじゃんいいじゃん～。それで、真樹。お話どうぞ」

真「えっと、それで、なんで魔族が聖族の依代に言い負けてるのでしょう？」

作「まあ、あれだ。アンは心が成長したんだよ。そして香苗は心も体も成長してないんだよ」

香「なんですかそれっ！？ちゃんと体も成長してますっ！」

作「本当に？」

香「ほ、本当ですっ！……十年後の私は」

夏「かなり先だなおいっ！」

作「でもさ、香苗はとりあえず後小説の方での二、三週間は成長しちゃダメだよ？夏哉が死ぬ」

香「ど、どういうことっ！？」

作「秘密～。っていうかネタバレになるから無理」

香「ひどいよっ！でもこの体をキープすればいいことあるんだねっ！？」

作「あるよ～。お前次第だけど」

香「頑張ります！」

ア「作者、その？いいこと？は私たちも含まれるのか？」

作「ん～、含まれない。特にアンは、次の話活躍できない」

ア「なんだと！？」

沙「そういえば学校でミニ運動会とか言ってたね」

夏「ということはアン活躍できないな」

ア「はぁ～。まぁキスしたからいいか」

真「作者、わたくしは出ますの？」

作「まぁ出るには出るけど、基本クラス対抗だからな。夏哉たち三組が中心」

夏「じゃあクラスメイトっていう新キャラが出るのか？」

作「……」

ア「何故目を逸らす？」

作「いや実はね、これのメインは障害物競争で、それで面白ネタを思い付いたから囲うと思ったんだけど……」

真「自分の好きな場面しか考えてなくて細かいところは全く、と、そういうことですのね？」

作「その通りです」

沙「まぁそれは前向きに考えて、つまりこの話では夏哉にフラグは立たないと、そういうことだよね」

作「あぁ、それはないね。流石にそういうのはスピンオフに任せる」

香「じゃあ多目に考えておいてね」

作「は～い」

ア「なぁ、この小説、というよりお前が書く小説は男が少なくないか？」

作「嫌だって！スピンオフはしょうがなくね？そういう仕様だもん。快斗というモテ夫がいるんだし」

ア「それにしてもだ。こっちだけを見ても男が夏哉とタクノムだぞ？人間に至っては夏哉だけだ」

作「だってさ、みんな孤独っていう共通点で繋がってるわけだからさ、みんな友達いないわけさ。んだからさ、男が少ないっていうよりは登場人物が少ないんだよコンチクショー！！」

夏「なんで逆ギレ！？」

香「まぁ登場人物は少ないけどね」

沙「あ、一応多いんじゃない？」

真「どうしてですの？」

沙「ちょくちょく私に取り巻く少年少女たち」

香「それは登場人物とは言わないよ……」

沙「だね～」

夏「というより俺と友達になるやつがいるか？必要以上に香苗と沙鳥に近づいてる俺だぞ？好意より怨念込められてるわ」

ア「分からんかもよ？逆に夏哉に近づけば沙鳥にも近づけると学習するかもしれない」

夏「だとしてもさらにあのお嬢様がいるから厳しいだろうよ」

真「ですわね」

作「は～い。ねぇ、話変えていい？」

香「なんの話するの？」

作「えっと、第三話の裏話。実は真樹もメインヒロインになるって話」

真「なんですのそれ!?詳しく聞かせなさい!!」

沙「でもさ、つまりそれって没案でしょ？」

真「どういうつもりですの作者？」

作「お、落ち着け、そんな睨むな。えっとだな、取り敢えず話を聞け。話は夏哉とタクノムが戦うまでは同じ。その途中で沙鳥が戦闘の音で目を覚ます。そこにアンがいないことに気がつく。沙鳥は二人を起こして夏哉の部屋にいく。しかしそこはもぬけの殻だった。

三人は音がする森へ向かう。そこで夏哉たちの戦闘に遭遇する。その時に出てしまった音にタクノムは気づき、そこに土の槍を飛ばす。その先にいたのは、真樹。真樹は腹を貫かれ、倒れる。それを見た夏哉が怒りに任せてタクノムを倒す。真樹はと言えば、沙鳥が治癒魔法をかけてくれるが血液が足りず四苦八苦していると、突然アンが自分の腕を斬り大量の血が溢れる。それを真樹の傷口に注いで血を補おうとする。結果成功して真樹は目覚める。そして魔族の血を身に宿した副作用なのか、アンの姿が見えるようになる。……まぁこんなところか」

香「つまり人間でありながらアンちゃん、っていうか異界の人たちに干渉できればメインヒロインになれたの？」

作「基本的にはね」

真「じゃあどうしてやめたんですのっ！？」

作「まぁ二つあって、ひとつは、真樹はなんやかんやで順レギュラーだし最終和では出せないなと思ってたから」

真「死にます？」

作「まてまてまて！話を最後まで聞けっ！……それで二つ目が、これ一番重要」

沙「もったいぶらずに教えてよ～」

作「そういえば、タクノム真樹に干渉できねーから無理じゃん」

夏＆ａｍｐ；香＆ａｍｐ；沙＆ａｍｐ；ア＆ａｍｐ；真「「「「……………………」」」」

作「物理的に無理だったんです。まぁ物理かどうかはわからないけど」

真「……結局わたくしは凡人と言うわけですのね」

沙「ちょっと作者！真樹落ち込んじゃったじゃんっ！どうしてくれる！？」

作「えっと真樹さん？取り敢えず出番がないってことはないよ？取り敢えず最低三話はメインとして出てくるよ？夏哉に抱きついたり二人が夫婦になったり」

夏＆ａｍｐ；真「「ちょっと待て――！！」」

作「ん？」

夏「そんなんあり得ねぇだろうが！まぁあ！？抱きつかれるのはまだいいかもしれないよ？事故で起こっちゃうかもしれないし！！でも夫婦はなくね！？」

真「そうですわっ！それだけは絶対ありませんっ！！誰がそんな戯言信じますかっ！？」

作「少なくとも三人はいるぞ」

夏&ａｍｐ;真「「え？」」

沙「そっか……やっぱり真樹も夏哉狙いか」

香「うん。真樹ちゃんそんな雰囲気もあったし……あ、じゃあアンちゃんと初めてあったとき、治癒しようと沙鳥ちゃんの手を掴んでるのを無理矢理外したのは嫉妬？」

ア「そういえば夏哉にさわられたとき殴ってたけど、あれは照れ隠し？」

夏&ａｍｐ;真「「……」」

作「な？」

夏「……えっと、取り敢えず確認だけど、違うよな？」

真「当たり前ですわ」

夏「まぁあれだ。ボケだと信じよう」

真「……沙鳥様のあの態度、見るからに本気ですわ」

夏「……知りすぎるってつらいな」

真「えぇ……」

作「あ、いい忘れたけど妹出てくるよ？」

夏「誰の？」

作「真樹。沙鳥も出すかもだけど」

真「はぁっ！？風歌（ふうか）をですの！？」

夏「ん？なんか問題あんの？」

真「いや、まぁ……大丈夫だと思いますが……」

作「ま、なんとかなるさ。あ、ところで真樹真樹」

真「なんですの？」

作「忘れてるかもしれないけどさ、混浴で夏哉は沙鳥の水着の紐をほどき、胸見たよ」

真「……」

夏「え、ちょ、真樹？落ち着いて？誤解！誤解なの！」

真「……」

……

……

……

……

……

……

……

……

……」

夏「ちょ、無言やめて？逆に怖いから！」

真「……死ね」

夏「これならタクノムと戦ってる方が生存率が絶対高いっ！！ちょ！どっから日本刀だした！？やめ――――――――――――――――――――！！」

作「はい、というわけで後書き終わりです。次は本当に短いと思います。感想、意見待ってます。是非お願いします」

第四話　《一章》帰宅

「ねぇ、私夏哉んち行きたい」

温泉宿からの帰りの電車の中、突然沙鳥がそんなことを言い出した。
今の時間帯は昼で、電車に乗る前に昼食は食べた。

「なんで？」

「いや、深い意味はないけどさ。ほんとは明日明後日もあそこで過ごす予定だったわけだしさ、暇なわけ。だから夏哉んち行こっかな～って」

「あ、よかったら私も行きたい」

「私も行ってみたいな」

「わたくしは……沙鳥様が行くなら行きますわ」

同じく香苗、アン、真樹も同意する。

「……」

俺は考える。
確かに沙鳥たちがうちに来るのはやぶさかではない。
金銭的にも距離的にも、家は麦谷高校からあまり離れてないから問題はない。
しかし一番の問題は……

「多分いいけど、誰か帽子持ってる？」

「わたくし持ってますが、どうしたのですか？」

「俺が帰ってきたら町が大騒ぎ。買い物出来ないし通行人すらいない」

「「あっ……」」

香苗と沙鳥は申し訳ない表情を浮かべながら声を漏らした。

そう、一番の問題は町の方だ。

俺が化け物だと言うことは当然知っている。

普通に町を歩けば皆は俺から視線を受けないように家の中に避難する。

もう何も壊さないとと言ってもそんな簡単には聞いてもらえない。

灯里がいい例だ。

「ま、気にすんな。んじゃ俺家に電話するからちょい失礼～」

そう言って俺は席を立って家に連絡を取りにいく。

――――――――――

夏哉が席を立った。

正直落ち込んでいた。

夏哉が簡単に家に帰れないなんて、少し考えれば分かるはずなのに。

絶対夏哉は嫌だ、とか無理、とか言わないし。

「はぁ～」

気付くと私はため息をついていた。

そんな私に真樹が声を掛けてくれる。

「沙鳥様、気にしなくていいのですわよ。本人も言ってますし。それにいつかは家に帰る予定でしょうに、一人で帰らせるより複数で帰った方が気が楽と言うものではないでしょうか？」

「そう、かな……？」

「そうですわよ。香苗も、落ち込む必要ありませんわ」

「そうだそうだ。逆に楽しんであげた方が夏哉のためだぞ」

アンちゃんも励ましてくれる。

「うん。そうする」

カナが少し笑顔になる。

真樹にアンちゃんの言葉を伝えながら、私もうなずく。

「お～い、いいって～」

ちょうど夏哉が帰ってきた。

「あ、ついでですので夏子ちゃん、わたくしの鞄を取ってくれませ

ん？」

「なにその夏子ちゃん！？」

金網の上に置いてある真樹の鞄を取りながら小さく叫ぶ。

「バレたらマズイのでしょ？それに……」

渡された荷物の中から白い帽子を取り出す。

それは当然女物だ。

「女物の帽子を被った男と見られたいんですの？」

「いや、だからって……」

言いよどむ夏哉。

さすがに無理もないだろう。

究極、とは言わないけど選びにくい選択になるはずだ。

「取り敢えず座りなさい、夏子ちゃん」

「うぜ～」

だが取り敢えず席につく夏子ちゃん。

というか……

「「真樹（ちゃん）」」

私とカナが同時に真樹を読んだ。

もしかしたら同じことを思ったのかもしれない。

「な、なんですの？」

「カナどうぞ」

「あ、はい。えっと、真樹ちゃん最近夏哉君のときの態度丸くなってない？」

私もそれが聞きたかった。

「そうですか？変わりないと思いますが」

「それはないね。いつもだったら真樹夏哉のことふざけて？夏子ちゃん？なんて呼ばないもん。絶対二人の間に何かあった。結局夜二人で何してたの！？」

何があったのか二人は教えてくれない。

絶対何か隠してる。

「だから言ったじゃん。真樹が犯人見つけて、俺がそこに加わって犯人ぶん殴って、灯里とるあちゃん助けて脱出」

「それは聞いた。でも上半身はだかになる必要がない」

あのとき夏哉は上半身はだかで真樹と一緒に歩いてきた。

しかも私と香苗が夏哉に抱きつこうとしたとき真樹に邪魔された。

絶対何かある。

「そりゃおめぇ、血だらけの服なんて着られねえだろ。そろそろ納

得しろ」

それは確かにアンちゃんから説明は受けた。
しかしそれは突拍子な話だし、その状況でアンちゃんに？愛してる？なんてこと言えるはずない。

正直納得しろと言うのが厳しいと私とカナは思う。
一般の高校生男子がなんでそんな命がけのことをしないといけないんだ、と思う。

「出来ないもん」

私はすねたように言う。

夏哉はひとつため息をついてこう言った。

「別に真樹とはなんにもありません。真樹が俺に？一人にしないで！？なんて泣いて懇願してきたなんてことはありません」

「「何それっ！」」

私とカナは一緒に夏哉に詰め寄った。
それに反応した真樹は慌てている。

「な、夏哉！何を言ってますの！？わわ、わたくし、そんなこと言ってませんっ」

「そうか？意味はほとんど同じじゃん」

「真樹ちゃんずるいっ！絶対夏哉君誘ってるでしょっ！？」

「そんなことありませんわっ！だったら香苗もやればいいじゃありませんのっ！」

「えっ……」

真樹の言葉で顔を赤くするカナ。
チラチラと隣にいる夏哉の顔を見ている。
そしてぎゅっと夏哉の裾を掴む。

「えっと、わ、私を一人にしないで……」

多分ここにいる四人全員思っただろう。

可愛いいいいいいいいいいいいいっ！！！！！！！！！！！！！

と。

今は電車の中だから理性を保てているけど、もし家とかそういうくつろげた場所だったとしたら絶対抱きついてハグハグしている。

夏哉はカナの頭をなでる。

「大丈夫だよ。何があっても一緒にいてやる」

「夏哉君……」

……何あれ。

なんか見てるこっちが恥ずかしくなってくる。

手持ちぶさたになったのでさっきから話に参加してないアンちゃんに話し掛ける。

「アンちゃん話に参加してないけど、どうかした？」

「ん？いや、どうすればお前と香苗に話を信用してもらえるかと。真樹は夏哉を信じてくれたからすぐに分かってもらえたようだが、沙鳥と香苗は夏哉を信じてないようだから困っているんだ」

その言葉で私と香苗は動きを止めてしまう。
はてなを浮かべている真樹には夏哉が説明する。

なんかアンちゃんの言葉にとげを感じてしまうのは気のせい、じゃないだろう。
これで私とカナは彼女と言う立場から遠ざかってしまった。
これじゃあ認めざるを得ないじゃないか。
まぁそこまで疑ってると言う訳じゃなかったけど。

「分かったよ～。夏哉と真樹が言ったこと全部認めるよ～。真樹と夏哉は付き合ってないって認めるよ～」

「そこまで思ってたんですの沙鳥様！？」

「だって、ね～沙鳥ちゃん。真樹ちゃんと夏哉君仲いいし。こそこそ隠れて付き合ってるかと」

「ほんとさ～、それはないから。そんなんだったら真っ先にお前らに言うから」

夏哉が呆れたように言う。
まぁ夏哉ならそうだよね。
私は少し気持ちがスッキリした。
あ、夏哉の家どんなのだろうな。

――――――――――

俺たちは今俺の自宅に歩いている。
今まではそうでもなかったけど、今ははっきり言ってつらい。
何故かと言えば……

「ジロジロ見られてるな」

アンが代弁してくれた。
そりゃそうだ、有名な沙鳥がいるし、香苗も真樹もいる。
それに皆より頭半個分大きい人物が女性用帽子を被ってるのも目を引く要因だろう。
幸か不幸か、俺の服装は男性女性どちらとも取れるものだ。

「夏子ちゃ～ん、家まだ～？」

沙鳥は歩くのに飽きたように聞いてくる。
俺は顔をあげられず、下を向きながら答える。

「死んどけ。えっと、左側に赤い屋根、道路挟んで右側に紺色の屋根がない？そろそろのはず」

「え～、赤と紺？」

「あれじゃないか？」

上からアンの声がする。
飛んで上から見たんだろう。

「んっ？あ、あれかっ！」

「見えた見えた」

沙鳥と香苗も見つけられたのだろう。

「夏子ちゃん、確か赤の方ですわよね？」

「真樹も死ね。そうだよ」

「じゃあ先行くよっ」

「あ、待ってよ～」

沙鳥と香苗が子供のように走っていってしまった。

「ガキかあいつらは……」

「悪口は許しませんわよ」

「ちげぇよ。ほら、お前も行ってこい。また二人が勘違いするかも知れねぇぞ」

「……そうですわね」

二人の後を追いかけていく真樹。

「アン」

「なんだ？」

アンが地面に降り立つ。

「ごめんな、俺のうち入ったら全然話しかけられないかも」

「気にするな。私も気にしてないし。私を気遣って気まずい雰囲気になったら怒るからな」

「りょーかい」

ピンポーン。

家についた俺はインターフォンを鳴らす。

自分のうちだけど、一ヶ月も空けているとそのまま入りにくい。

『は～い、どちら様でしょうか？』

母さんの声だ。

「え～、柊夏哉ですが」

『夏哉っ！？お帰り～っ！開いてるよ』

「なんでそんな改まって……」

「雰囲気、ってことなんじゃないかな？」

沙鳥の呟きに香苗が答える。

「んじゃ行くぞ～」

庭に入り玄関に辿り着く。

ガチャっという音を鳴らしてドアを開ける。

「ただいま～」

「お帰り～！」

ペタペタと音を響かせて、母さんが玄関に現れた。

「「「おじゃまします」」」

「あら？……ちょっと夏哉」

母さんに無理矢理引っ張られる。

靴を散らかしながら脱ぎ、中に入る。

「あにさ？」

「あの真ん中のポニテの人、天雲沙鳥さんじゃないの？」

「そうだよ。もっと言えばあのピンクの髪の子は早乙女総合病院の孫娘」

「……ほんと？」

「もっと言えばあのちっこいのはいつもテストで満点、入試一位、中学模試一位の高校生」

「……ほんと？」

「ほんと」

「……脅迫したの？」

「息子に何言ってる」

「だってあり得ないでしょっ！こんな一ヶ月でそんな有名人と知り合いになってっ！！」

ビシッと玄関に立っている少女三人を指差す。

「取り敢えずあげてあげようよ」

「そ、そうね。じゃあケーキ出してくるから」

「は〜い」

母さんは先にリビングに隣接してるキッチンに向かった。

「んじゃああがって」

三人は靴を脱ぎ、あがって俺の後についてくる。

俺の部屋は二階にある。

そこの扉を開くと、一ヶ月前と変わらない俺の部屋があった。

パッと見、誇りがついていないので掃除してくれたのだろう。

「うわぁ〜、漫画いっぱ〜い」

俺の部屋を覗いた沙鳥が呟く。

俺の部屋はベッドと小さなテレビが奥に、両脇に本棚が置いてあってそこには漫画がずらっと並んでいる。

ベッドの下に折り畳み式のテーブルがある。

俺はそのテーブルを取り出して部屋の真ん中に置く。

「ちょっと待ってて、座布団持ってくるから」

俺は一旦外に出て、すぐ右にある押し入れから座布団四枚を取り出す。

それを持ってきて三人に渡す。

「ほい、適当に座れ」

三人を座らせる。

「で、アンちゃんは二択。宙に浮いてるか俺の膝の上」

「膝の上っ！！」

予想通り即答だった。

「夏哉ずるい～」

「ふっ、魔族の特権だな。早く座れ夏哉」

「はいはい」

座布団を敷き、胡座をかく。
するとすぐに俺の上に座る。

「あんま騒ぐなよ」

「分かってる。大人しく夏哉とくっついてるから香苗も沙鳥も大人しくしてろよ」

ふっふっふ～、と今にも悪魔の角や尻尾が出てきそうな笑みを浮かべる。
正面にいる沙鳥と右側にいる香苗はむくれている。
ツンツン、と左側にいる真樹に肩をつつかれた。
状況説明しろということだろう。

真樹に説明してるとドアをノックされた。

「は～い」

俺は上半身をのけ反らせ、逆さまになったドアを見る。

ドアが開かれると、ケーキとジュースを持った母さんが入ってきた。

「お待たせ。はい、ケーキとリンゴジュース」

「ありがとうございます」

代表して沙鳥がお礼を言う。

「天雲、沙鳥さんよね？」

「はい。あ、こっちが早乙女真樹で、こっちは花街香苗です」

二人も母さんに会釈する。

「ねぇ、三人とも本当に夏哉の友達なの？」

「おい」

何を言い出すんだ。

「だって、普通に信じられなくて」

……そりゃしょうがないか。

「はい。夏哉にはお世話になってます。あ、お世辞じゃないですよ。夏哉がいたので香苗と真樹に会えたので」

沙鳥は笑みを浮かべる。

流石沙鳥、人当たりよすぎだな。

「そう。よかった。これからも息子よろしくね。この子友達少ないから」

「あ、今言うことじゃないけどこいつら俺の昔のこと知ってるから」

「えっ！？」

母さんは驚きの表情を隠さずに俺を見て、三人を見回す。

「えっと、大丈夫です。そんなことじゃ夏哉君を嫌いになりません。それに夏哉君に何かされたわけでもないので」

香苗も笑顔で対応してくれる。

「そっか……」

流石に力が戻ったということは言わない方がいいか。

「ほんとありがとう」

母さんも、笑みを浮かべてお礼を言う。

言ってくれる。

俺のために。

「あ、あとひとつ。もし向かいの峯岸さんが来たら許してやってく

んね？」

「え、え、何？どういうこと？」

「峯岸さんの娘が俺のこと誤解だって分かってくれてさ。親に説得するって言ってたからもしかしたら来るかもしれないわけだ。まぁ今日って訳じゃないだろうけど」

「……そっか。ありがと」

「はいよ～」

「じゃ、お邪魔させてもらいます。ごゆっくりね」

パタン、とドアが閉まる。

「最後の何？」

沙鳥が聞いてくる。

そう言えばこいつには言ってなかったか。

「灯里の親とうちの親が仲良かったんだよ。んで、俺がいたからこじれたわけ」

「……そうなんだ。仲直り、出来るといいね」

「そうだな」

この空間がしんみりした空気に支配される。

俺はこの空気を消すためになるべく明るい声を出す。

「よ〜し、じゃあ食べろ食べろ。あ、アンケーキ食っていいから。んで、ゲームやんね？」

「おぉ、さんせ〜」

沙鳥が同意した。

「私ゲーム分からないんだけど」

「わたくしもですわ」

「当然私もだ」

「ん、じゃあチームにするか。俺、香苗、アンチームと、沙鳥、真樹チーム」

「いいよ〜。何あるの？〇ィー？キ〇ーブ？プレ〇リー？」

「スーフ〇ミ」

「古っ！？私それ見るの十年くらい昔だよっ！？」

「冗談だ。〇ィーはないけど、ボタン少ないキ〇ーブでいいっしょ。中身マ〇パでいい？」

テレビの下に移動して、その台の中にあるゲームを出しながら聞く。

「いいよ。コントローラーあるの？」

「実はあるんだよ。四つ」

「ナイスっ！」

「じゃ、やろ～。ルールはやりながらで教えられるよな？」

「うん、大丈夫」

俺たちは夕方までずっとゲームをして、日が暮れると各々自宅や寮に帰った。

第四話　《一章》帰宅（後書き）

作者「第四話始まりました～！」

香苗「作者さん作者さん、これはプロローグないの？」

作「ないね。正直序章いるほどの話じゃないし」

アン「なぁ、今回は運動会の話じゃなかったのか？」

作「やるけどさ、これは書いてみたかったのもあるし、量稼ぎでもあるよ。ほんと短くする予定だから」

香「どのくらい？」

作「……願望でいい？」

ア「ズレる可能性ありということか。まぁ言ってみろ」

作「取り敢えず次の話は前振りというか、『ミニ体育祭ありま～す』って話で、四、五話で体育祭当日、って感じになればいいな～って思ってます」

香「うわっ、ほんと少ないね」

ア「そうだな。まぁここが短ければ私の出番も増えるだろうしな」

作「あ、そうだそうだ。これも予定だけど、最低第十話くらいまでは話が続きます」

香「あ、結構長いね。全部二十章近くいっちゃうんでしょ？」

作「多分ね～。そこは正直なんとも言えないな。それ以上いっちゃうかもしれないし、いかないかもしれないし」

ア「これ、下手したら二年かかるんじゃないか？最終話まで」

作「出来ればそこまではかけたくないな～。じゃあ目標二年以内…だから２０１２年５月までには終わらせます」

ア「がんばれ」

香「あ、そうだ。作者さん、もうひとつ聞きたいことがあるんですけど」

作「何？」

香「私たちの顔とか髪のことはよく描写されるのに、服装はあんまりしないよね？まぁ学生だから制服が主なんだろうけど、それにしてもなさすぎじゃない？」

ア「そうだな。私もまだ一番初期の服装しか説明されてないし」

作「……」

ア「どうした？」

作「……んです」

香「ん？」

作「無理なんです」

香「何が？」

作「俺人一倍服装に無頓着なんで、表現することができないんです」

香＆amp;ア「「えっ？」」

作「ほんとは頭のなかでイメージはあるんだよ？絵で描けって言えば、描けなくはないんだよ？でも言葉では表現出来ませんでした。すいません。な訳で服装は読者皆さんがご想像してください。服装は、表現しなければ特に重要ではないと言うことなので」

ア「まあ、作者だからな」

香「そうだね。あ、もし服装を表現してほしいって言う人がいるなら、感想のところで詳細を書いてください。よろしくお願いします」

ア「他力本願だが、しょうがないか」

第四話　《二章》昼休みの団欒

ゴールデンウィークが開けた日、つまり五月六日の昼休み。
ようやく屋上が使えるようになったので、俺と香苗と沙鳥とアン、
そして真樹の五人でそこに向かい、昼食を取ることにした。

「やっとここ使えるようになったね。私ちょっと憧れだったんだ～」

「屋上来るのが？」

香苗の言葉を聞き返す。

「うん。私の学校屋上立ち入り禁止だったんだ～」

「へぇ」

俺の中学はそんなことなかったな。

「なぁなぁ夏哉」

と、隣を歩いてきたアンが俺の肩を叩く。

「どうした、アン？」

「ここって出入り自由じゃなかったのか？」

「えっと、取り敢えず今日からだよ。真樹、屋上使えるのって今日からだよな？」

「そうですわよ」

「ていうか、普通にいるけどなんで一緒なわけ？」

今までは別々で食べていたのに。

「だって途中参加は気まずいじゃありませんの。ですので、この気に沙鳥様とご一緒しようと」

「いいや違うね」

しかしそんな言葉を沙鳥が否定する。

「な、何が違うんですの？沙鳥様」

「たぶん真樹は今まで夏哉と微妙な関係だったから一緒にいづらかったんだろうけど、ゴールデンウィーク中に仲良くなったから一緒に食べようと思ったんでしょ？」

「私もそう思う！」

沙鳥の推測に香苗も手を挙げて同意する。

「いや、違いますけど……」

真樹は本当のことを言っているんだろうが、たじろぎながらなので沙鳥たちほどは説得力がない。

「あ～、私の話は～……」

アンの呟きは多分俺にしか聞こえていないだろう。

こうなるとアンが可哀想なので真樹に味方してやる。

「お～い、脱線してるぞ～。俺が話振ったのが悪かったからアンの話を聞いてあげようよ」

「そうですわっ！アンさんの話がまだのようですし！アンさんどうぞ！！」

真樹は予想通り俺に便乗してきた。

香苗も沙鳥も引き下がった。

「じゃ、アンどうぞ」

「ありがとう。それで、沙鳥の記憶見せてもらったとき沙鳥普通にここに来てなかったか？そこで夏哉と抱きついて」

そんなことあったか、と思い出そうと少し考え、思い出した。

「そうじゃん！沙鳥どういうこと！？普通に扉開いたから気にしなかったけど」

「ていうかアンさんの言ったことどういうこと！？」

香苗が俺に迫ってくる。

「そりゃお前、色々あったんだよ。で沙鳥、お前の方はなんでそんな風になったんだ？」

真樹と話してる沙鳥に話を振った。

「えっとね――」

「夏哉どういうことですの？」

沙鳥の言葉を遮り、ドスの聞かせた声で言う真樹。
あからさまに怒ってる。

「な、何が？」

「沙鳥様に抱きついたことですの」

「だからそれはしょうがないんだって！アンだって俺に何もしてこないと言うことは別に変なことはなかったんだよ！なぁ！？」

「まぁないぞ。強いて言えば沙鳥の心を奪ったということぐらいだ」

「そこのところを詳しく教えてください夏哉さん」

「なんで香苗敬語なんだ！」

「気分？」

「俺に聞くな」

「で、どうなんですの？」

しつこく聞いてくる真樹。

はぁ～、とため息をつく。

「だってさ、沙鳥がここから飛び降りようとしたんだぞ」

「「ええっ!?」」

唖然となる二人。

話の矛先は沙鳥に向かった。

「沙鳥ちゃんそれ本当なの!?」

「どういうことですの沙鳥様!!」

迫ってくる二人にたじろぐ沙鳥。

すごい迫力のようだ。

「えぇっと……別に死ぬつもりじゃなかったんだよ?ただ夏哉に、『私は普通の人間じゃないんだよ～』ってところを見せようとして飛び降りて、そうしたら夏哉に怒られて『心配するからやめろ!』って言われてだきつかれたの。やましいことはなかったと思うよ」

あ～!

今改めてこういう風に言われると凄い恥ずい。

「で、沙鳥!なんでここにこれたんだよ!?」

無理矢理話を変えさせようと大声を出す。

「えっとね、確か先生に『屋上開いてますか？』って聞いたら開けてくれたよ」

「「「……」」」

俺と香苗とアンは沙鳥をじっと見る。
沙鳥と真樹は訝しげに俺たちを見る。

「なぁ、こういうのを差別と言うんじゃないんですか？香苗さん」

「そうですね、アンさん。というかこういうのありなんですか、夏哉さん？」

「普通はなしですね、香苗さん。というかその教師ロリコンですね」

「ロリコンってなんですか？夏哉さん」

「簡単に言っちゃえば幼い子ラブな大人のことですよアンさん」

「では夏哉さんもロリコンなんですか？」

「……それは香苗さんのことを言っているなら、香苗さんのことが好きであって幼いから好きなわけではありません」

「うわ、私とアンちゃんがいるのにさらっと言ったね」

「まね～」

「誉めてないと思うぞ」

「うるさい。さっさと飯食うぞ」

俺の言葉でみんな弁当を開く。

因みに香苗は顔が真っ赤だ。

「んじゃ、いただきま～す」

ガチャ

俺の言葉に合わせて扉が開いた。

そこに現れたのは四人。

樋口夕馬に源快斗、長嶋千佳音に種原穂菜。

この中で種原は俺たちと同じ三組で、他は四組だ。

「あ、先客……って夏哉か。オーッス」

快斗が俺に挨拶してくる。

快斗と夕馬は俺の数少ない、というか二人しかいない男友達だ。

「う～す。よかったな、みんな大好き沙鳥ちゃんと一緒に飯食えるぞ」

「みんな大好き沙鳥ちゃんでーす」

沙鳥は手を挙げながら笑顔で言う。

種原は知らんが、他の三人は沙鳥を神化しない数少ない人物だ。

「あ、ご一緒していいの？」

夕馬が聞いてくる。

「全然。お前に礼言いたかったし」

「お礼？」

香苗と真樹は自分の体をどけて、四人を入れてあげる。

「ほら、二日の時福引券くれたじゃん？そんとき一等当たってさ～」

「はっ！？何それっ！？柊運良すぎじゃない！？」

長嶋が信じられないと言った顔で叫ぶ。

「当たったんだから仕方ない」

「ていうかさ、夏哉弁当二つ食う気？」

快斗が俺の足元に置いてある弁当を指差す。

この二つというのは、ひとつは俺で、もうひとつはアンのだ。

チラッとアンがいる方を見る。

「気にするな。まだ腹は空いてないし。私に構わず食え」

アンさん、あんた出来た子だよ。

最高だよ。

空気読みまくりだよ。

心の中でアンを賛辞し、今晩沙鳥にでも手伝ってもらって旨いものを食わしてあげよう、と決心した。

「あぁ、最近腹減ってな。あ、そうだ。真樹、端から、樋口夕馬、源快斗、長嶋千佳音、種原穂菜。んで、あいつ早乙女真樹」

簡単にお互いを紹介する。

「え、早乙女って、あの病院の？」

長嶋が真樹を指差しながら聞く。

「千佳音ちゃん、指差しちゃダメだよ」

それを種原がたしなめると慌てて引っ込める。

「あ、ごめん」

「気にしなくていいですわよ。それで、長嶋さんのご想像通り、医院長の孫娘です」

「夏哉、ほんと凄いね。いろんな属性を持った三人の女の子を侍らせるなんて」

夕馬が俺にそんな変なことを行ってくる。

「ふざけんな」

「そうだそうだ。三人じゃない、四人だ」

……アンちゃん、少し黙ってようか。

「樋口さん、それ以上何か言ったら殺しますわよ」

真樹、それは普通に怖いです。

「すいませんでした」

流石の夕馬もこれには頭下げるしかないか。

「ねぇねぇ、いつも四人なの？最初会ったとき三人だったよね？」

沙鳥がふとした疑問をぶつける。

「ん～、いつもかな～？」

「えっと、三人ほど一緒にいるという訳じゃないですけど、いる方だと思います」

長嶋の言葉に補足説明をする種原。

「へ～、じゃあ私たちで言う真樹的存在か～」

「さ、沙鳥様、それはいつも沙鳥様のお側にいないと言うことですか……？」

「そ、そんなへこまないでよ～」

「性格的には種原さんは花街さんに似てると思いますよ」

「ほえ？」

いきなり夕馬に話を振られた香苗は頬に米粒をくっつけたまま間抜けた声を出す。

「可愛くね！こういうの可愛くね！一家に一匹ほしくねっ！」

「ペットなの！？私はペッと感覚なの！？」

俺は香苗を指差しながら夕馬たち四人に訴える。

香苗の発言は、取り敢えず無視。

因みに沙鳥とか真樹には言わない。

何故なら、二人はもう分かってるから。

「ほしいっ！」

ここぞとばかりに長嶋が手を挙げる。

「こう、ほっぺをむにむにしたい！」

「おま、それ最高だったぞ！！」

「柊やったの！？」

「同意のもと！」

「いいな～」

「……なんかうちの千佳音がすいません」

「気にしないで源君。いつもこんな感じだから」

苦笑する香苗。

なんか快斗と香苗が意気投合している。

「私思うんだけどさ、種原さんもほっぺむにむにな気がするんだけど」

「私ですかっ!?」

「うん。今度むにむにさせて～」

「え、えぇっと……」

「……うちの沙鳥ちゃんがすいません」

「いやいや、これはこれで新鮮だから」

「なんか凄いカオスな状況になってますね」

「そうですわね」

夕馬の呟きに同意する真樹。

「まぁいいんじゃねえの？楽しんでるし」

「そうそう。あ、わたし天雲さんに聞きたいことがあるんだけど」

俺が言ったあと、思い出したかのように長嶋が沙鳥に話しかける。

「あの～、出来れば下の方で呼んでほしいな～、なんて」

沙鳥が言いにくそうに言う。

「あ、はいは～い。じゃあ改めて沙鳥、聞きたいことがあるんだけど」

それを長嶋は軽く答えた。

「何？」

「沙鳥って百合？同姓愛者？」

「ブフッ！？い、いきなり何っ！？」

「だって、ねぇ。普通穂菜ちゃんみたいな女の子のほっぺむにむにしたいって言わないよ？」

「いやいやいや！さっき千佳音だってカナのほっぺむにむにしたいって言ったじゃん！千佳音も百合じゃん！！」

「私聞いたことあるよ！よくそこの香苗ちゃんと、あ、香苗ちゃんって呼んでいい？」

「どうぞどうぞ」

「ありがとう。で！香苗ちゃんに抱き付いてるって聞いたことある

よ！！」

「い、いやいや！それは……」

たじろぐ沙鳥。
まぁ事実だし。

「夏哉、どうなの？」

こっそりと快斗がこちらに来て聞いてくる。
そういえばこいつ沙鳥のことが好きなんだっけ。

「抱き付いてるよ。ファーストキスは香苗」

快斗の質問に普通の声で答える。

「「「「ええぇぇぇっ！？！？」」」」

真樹、快斗、長嶋、種原が叫ぶ。
そういや真樹も知らなかったか。

「さ、ささ、沙鳥様？それはどういう……」

「な、夏哉！いきなり何言い出すの！？」

「そういや夕馬さ、再来週ミニ体育祭あったよな？何出る？」

「ん～、障害物競争と、長縄かな？夏哉は？」

「障害物競争とドッジの予定。香苗どうする？」

「私もドッジボールかな？あともうひとつはバレーを――」

「無視するな！！」

バシッと隣にいる沙鳥に頭を叩かれた。

「何さ？事実だろ？な、香苗」

「そう言われても……。その時の記憶ないし」

「柊どういう状況それ！？」

長嶋が迫ってくる。

「いやね、二人が俺の部屋に来て昼寝をしてたら、寝ぼけて沙鳥が香苗にちゅうしただけだよ。生憎写メは取れなかった」

適当に言ったけど、大丈夫かな？

「い、色々聞きたいことが……」

種原が遠慮がちに言う。

「はいどうぞ、種原」

「え、えっと、二人って柊君のうちに行くの？」

「まぁうちって言っても寮だけどな。結構来るよ。真樹は、来たことないよな？」

「え、えぇ。ありませんわ……」

真樹も未だ動揺が抜けていない。
さすがに衝撃発言過ぎたか。
でも事実だし。

「ゆ、夕馬、なんでおめぇはそんな普通でいられんだよ。流石に驚きの事実だろ？」

「まぁ、そうだけどさ、やっぱ知り合いならそういう趣味でも優しく包み込んで接してあげるべきだよ」

「だ～か～ら、誤解なんだって樋口君！」

「あ、僕も下でいいですよ。なんなら快斗も」

「え、ほんとっ！？やった～っ！」

先程の怒った表情とは打って変わって笑顔になる。
まぁあの怒りが本気ではないにしても変わるな～。

「じゃあよろしくね、夕馬くん、快斗君っ！」

「えぇ。よろしくお願いします、沙鳥さん。あ、お二人もご自由に」

「え、えと、よ、よろしく。さ……沙鳥」

「えっと、わ、私も、下の名前で呼んでほしいんですけど、私も沙鳥ちゃん、って呼んでいいですか？」

「全然オッケー！！よろしくねっ、穂菜ちゃん」

「よろしくおねがいします。さ、沙鳥ちゃん」

ペコペコと頭を下げる種原。

「なぁ真樹さんや」

「なんですの？」

「こう、種原を見てると香苗を彷彿とさせないか？」

「しますわね。恋愛感情は全くありませんが、なんと言うか、保護欲を駆り立てられますわ」

「え、そ、そうなんですか？」

「そうなんだよ穂菜ちゃん！これは恋愛感情にあらず！親が子を見守るような！そんな感じ！」

「つ、つまり私は子供っぽいってことですか……」

「それはつまり私も子供……」

二人がうつ向いてしまった。

ズーンという効果音が発せられるとしたら、今このときだろう。

「あ～あ、沙鳥さんが二人を傷つけた」

夕馬が沙鳥を非難する。

「え！これ私のせい！？」

「もっと言えば千佳音のせい」

「わたし！？わたし関係なくねっ！？」

何故か夕馬の矛先が長嶋に向かった。
しょうがなく便乗することにした。

「だって、なぁ夕馬。長嶋がここにいるから」

「存在か！？存在しちゃいけないってか！？」

「ちゃんと理解してるじゃん」

「夕馬うざ！！最早虐めだよこれっ！！なんで夕馬だけでも大変なのに柊も加わるわけ！？っていうか夏哉でいいねもう！」

「別にいいよ。んじゃあそろそろ昼休みも終わるし戻るか」

「待てぇぇい！！」

「ん？」

「『ん？』じゃないよ！なんでそこでわたしを放置！？あんた夕馬より扱いひどいよっ！！」

「あ、ごめん……。嫌だった？」

「え、いや……。別に嫌という訳じゃないけど……」

「まぁ演技なんだけどね」

「気づいてたけどねっ！」

「夕馬、千佳音いいね。ボケたらボケた分だけツッコミが帰ってくる」

「でしょ？もうツッコミの化身と呼んでも過言ではないよ。一家に一匹いる？」

「過言だし、ペットじゃないっ！！普通にさっきの引用するなっ！」

「お～い、三人さん、お前ら物凄いアウェイだぞ」

快斗がそういう。

皆を見回してみる。

なるほど、若干引いてる気がする。

「じゃあやめようか」

「だな」「そうだね」

夕馬の言う通りもうコントはやめた。

「ほ、ほんと夕馬くんと千佳音ちゃん切り替え早いよね……」

苦笑する種原。

毎回こんな感じなのか。

「え、穂菜ちゃん、そっちっていつもそんな感じなの？」

香苗が聞く。

「うん。あ、全部知ってるって訳じゃないけど。香苗ちゃんの方は？」

「ここまで騒がしくないよね、沙鳥ちゃん」

「うん。夏哉もいつもよりテンション上がってたよね？」

「まあな。千佳音みたいなからかいがいのあるやついないし。香苗にやったら涙目になってそこの二人が抱きついちゃうし。沙鳥にやったら真樹が来るし。真樹にやったら殺されるし」

「まぁ分からなくはないな」

快斗が同意してくれた。

キーンコーンカーンコーン――

「あ、終わりだね。じゃあ皆戻ろっか」

沙鳥の言葉で皆片付けて教室に戻った。

その日の夜、ちゃんとアンにご馳走を作ってあげて喜ばれたのはまた別の話。

アンちゃんやっぱいいわ～。

第四話　《二章》昼休みの団欒（後書き）

夏哉「……なんかカオスな昼休みだったな」

真樹「そうですわね。やはり作者には八人での会話を捌くのは無理がありましたわね」

作者「そして俺は謝らないといけないことがあります」

夏「あんだ？」

作「前回の後書き担当者さ、アンと香苗じゃん？」

真「そうですわ」

作「でも第三話十九章でその二人出しちゃったんだよね」

真「要約すると、ほんとは一通りの組み合わせを出してから次に行くつもりが、同じ周で同じ組を出してしまったというわけですわね？」

作「その通りです」

夏「別に気にしないんじゃね、読者さんたち気にしないっしょ」

作「そうならいいんだけどな」

真「そういえば作者、屋上のことなんですが」

作「な、なんでしょう？」

真「あれ完璧後付けですわよね？」

夏「それ俺も思った」

作「なんのことでせうか？」

夏「お～い、口調おかしいぞ～」

真「第二話の十章では沙鳥様が屋上で昼食を取ってましたが、『その想い変わりますか？』では五月まで行けないということになってましたわよね？」

作「そ、そうですが……」

真「正直に申しなさい。その事忘れてましたわよね？」

作「……忘れてました」

夏「よかったな、沙鳥で。もし俺だったら完全アウトだったぞ？最悪香苗でも」

作「ほんと、よかったです。俺運がいい！！」

夏「調子いいなおい……。で、次回はどうすんだ？もう体育祭？」

作「の予定。前回言っちゃったしな。無理して体育祭の話し出したゼッ！」

真「ほんとあれは無理矢理でしたわね。三人しか体育祭の話してませんわよ」

作「あれだ。こっちではそこまで重要じゃないから適当でいいんだよ。頑張ってギャグだけで持っていきます！！」

夏「あっそ」

作「あ、夏哉には後半頑張ってもらうから」

夏「ん？なんだ？」

作「リアル鬼ごっこしてもらうから」

夏「誰と！？」

作「またね～。評価感想意見誤字脱字報告まってま～す」

夏「無視すんな！！」

第四話　《三章》体育祭、バレー

五月も下旬の初めである二十一日。
晴天。
今日は一年の交流会も兼ねたミニ体育祭だ。

俺はドッジと障害物競争。
香苗と沙鳥はドッジとバレー。
確か真樹はバレーと長縄だったはず。

軽い開会式的なことが終わり、まず始めは体育館でのバレーだ。
バレーは一クラス四チームで、男子二、女子二チームだ。
今回は六分間にどちらが多く点を取れるかというものだ。

体育館を四つに分けて、男子A、B、女子A、Bとして同時に進行する。
因みに香苗と沙鳥は三組Bチームで、その他は種原穂菜に霧雨茜、西崎葵衣（にしざきあおい）、舞戸部落葉（まいとべおちは）、そして補欠に三部飛鳥（みつべあすか）。
真樹は沙鳥と戦いたくないということで五組Aチームとのこと。

九クラスという半端な数なので、八チームにするためにまずくじで七枠を決めて、残り一枠を二クラスが試合で決めるといった、まぁ予選的なことをやる。

女子Aチームはそれが四組と八組、女子Bチームは二組と九組。
当然ながらそれは男子もそうなるのだが、生憎俺は同じクラスの男子に知り合いはいないので割愛するが、快斗は四組Aチームで、予選的なものはしない。

俺とアンは体育館の隅で他の人たちの練習模様を見学する。
他は練習中だ。

「夏哉、この？バレーボール？とはどんなやつなんだ？」

「まぁ、簡単に言えばいかに自分の領域にボールを落とさずに相手の領域に落とすかってやつなんだけど……」

「あ、あぁあ？」

どうも理解してないご様子。

俺は練習の光景を見せながら、また、説明しきれないところは開始した試合を見せながら説明してなんとか理解してもらった。

そうしている間に二試合目、三組対一組の試合が始まる。

「じゃあ頑張ってくるね」

「勝ってくるよ！」

意気込む香苗と沙鳥。

俺とアン、真樹が見送る。

「夏哉はやらないのか？」

「うん、俺選んでないからな」

「な、何がですの？」

アンの質問に答えると、アンの存在を捉えられない真樹が反応した。

「あ、ごめんごめん。アンのこと。俺はやらないのかって」

「あぁ、そういうことですの」

「真樹はどうなんだ？」

「真樹はどうなんだ、だって」

俺はアンのいる方向を指差す。

アンはそちらを向いて話してくれた。

「わたくしはこの試合が終わって向こうのコートでやりますわ」

そう言って向こうのＡコートを指差す。

「そうか。あ、始まるな。香苗がボールを持ってるってこてはこちらが先攻か？」

「ん、試合始まるな。そうだよ。香苗が持ってるから三組が攻撃だ」

香苗がサーブを打つ。

下から打ったので届かないということはないんだろうが、正直心配だった。

しかしそんな思いは杞憂に終わり、香苗はスピードやパワーがない代わりに的確に空いている場所にボールを落とす。

その的確過ぎるボールコントロールで相手はお見合いしてしまう。

幸先よく一点を手に入れた。

「香苗凄っ！」

先制点を取った香苗はチームのみんなとハイタッチしている。
もしかしたらこの機会に俺たち以外の友達が出来るかも知れないな。

もう一度香苗はサーブを打つ。

そして再び相手の嫌な位置にボールを落として点をもぎ取る。

「香苗ってバレーが得意でしたのね」

「嫌、そんなの聞いたことないし、運動音痴って自分で言ってたぞ？」

「そんなに驚くことか？香苗は聖王の依代だぞ？ボール、というか道具の扱いには長けている筈だ」

「あ、そっか」

そういえばそんな設定があったのを忘れていた。

「なんですの？アンさん何か言いましたか？」

「あのさ、前に依代の話したの覚えてる？」

「ええ。神の器ですわよね？それが沙鳥様と香苗」

「そうそう。で、香苗は聖王の依代で、聖王って道具を作ったり使

ったりするのが得意なんだと。だから香苗もボールを使うくらいなら余裕な筈だ、だって」

「なるほど。ですが……」

何故かそこで言葉を区切る。

「なんかあった？」

「いえ、話は少し変わるのですが、何度も夏哉を介してアンさんと話をするのは面倒くさいですわね」

「そうなんだけどさ～……」

これぱかりはどうにもならない。

第一真樹がアンの存在を知ること自体があり得ないことだし。

しばしなんとかならないかと考えてみる。

アンを見ると、少し興奮しながら試合観戦を楽しんでいる。

ん～、真樹がアンを知覚する方法、か～。

触れることは、アンが意識すればできる。

しかし見るとこは出来ない。

それを覆すのに何かいい案はないか。

真樹がアンに干渉する方法。

……魔法か？

あ、だったら。

ひとつ思い立ったのでアンを小突く。

「アン、ちょっといいか？」

「ん、なんだ？」

「魔法で幻術なんて使えるか？」

「使えるが、急になんだ？」

いぶかしげに聞いてくるアン。

まぁ流石に急だったか。

「例えば真樹に幻術をかけてアンがいるように見せられないかなと思い」

「幻術ですの？」

俺たちの話を聞いていた真樹が聞き返す。

「私の奇法が真樹に通用するのか？」

そういえばそれはまだ試していない。

「じゃあさ、魔法で手を湿らしてさ、真樹の手繋いでみて」

「了解」

アンの手が青く発光すると、その手には水滴が覆っている。
その手で真樹の手を握ると、
「冷たっ！あ、湿ってますわ」
「じゃあアンの魔法が聞くっつうわけだ。頼む、やってみてくんね？」
「分かった」
するとアンの右手からが青、緑、茶の色の光が現れる。
「額に触るぞ」
「真樹、アンが額に触るって」
そう断りをいれてからアンは真樹の額に触れる。
「う……」
真樹は短く呻くと、少し後ろによろめく。
支えようとしたが、すぐに体制を立て直したのでする必要がなかった。
「取り敢えず幻術はかけたが」
「真樹、大丈夫か？」

真樹は右手を顔に当てる。

「え、えぇ。少し目眩がした程度ですので……」

「真樹、聞こえるか？」

アンが声をかける。

真樹がそちらを向く。

「アンさん？」

アンの目を見て訪ねた。

つまり見えてるのか？

「真樹？ここに人が見える？」

「ええ。金髪の長い髪ですわよね？薄いピンクのキャミソールを着た」

「おお！成功じゃん！」

「真樹、聞こえるか？違和感とかあるか？」

「いえ、全くありませんわ。えっと、こういう言い方はどうかと思いますが、初めまして」

「私にとっては初めましてじゃないが、初めまして」

片や初対面、片や見知っている二人がおかしな挨拶をする。

「アン、これっていつまで続けられるんだ？流石に一定範囲とか制限時間とかあるっしょ？」

「まぁあるけど、人一人を幻術で見せるのは結構簡単なやつだからな。範囲は私から半径５００ｍというところだが、そんな離れたところで物理的に私を知覚出来ないだろ？時間は一週間くらいは平気だと思うぞ。まぁ私がピンチなときは切れてしまうがな」

「成る程。じゃあ一週間毎にやるとして、真樹は大丈夫なのか？毎回毎回幻術かけたら耐性とか精神崩壊とかしないか？」

そんな副作用があるなら是非やめてもらいたい。

「下手なやつならそうなるな。基本幻術は相手に気づかれずに罠にかけ、幻術をかけたという証拠を残さないようにするものだ。プロなら逆に耐性をつけさせないようにやるものだ」

「じゃあ平気なんだな？」

「ああ。真樹が無理矢理解こうとしなかったらな。解くときは『ストレ・トイム』と言えば平気だぞ」

「『ストレ・トイム』……あ！言ってしまいましたわ！」

「馬鹿だろ。お前馬鹿だろ。じゃあいいや。アン見える？」

「いえ、消えましたわ」

アンはもう一度真樹に幻術をかける。

「よ〜し、問題解決〜。じゃあ応援しようぜ」

目をスコアに向けると、６対３で三組が勝っている。
あ、今沙鳥が決めた。
これで七点目だ。

時間はあと二分強。
なんとかいけるか？

種原と交代した三部飛鳥がサーブを打つ。

少しラリーが続き、相手のアタックを香苗がレシーブをしようとするが失敗してこちらに吹っ飛んできた。

取ってあげようと手を伸ばすと、

「夏哉ぁっ！退いてぇっ！」

沙鳥がこちらに走ってきた。

やる気か。

俺は言われた通りアンの手を引いて退く。

沙鳥は壁を蹴ってさらに上に跳ぶ。
つまりは壁ジャンプだ。

「カナぁ〜！！」

沙鳥はタイミングを会わせて、海老反りしながらボールを叩く。
それは見事に香苗のもとに届く。
そして叩いた本人は背中から落ち、俺に抱き抱えられる。
お姫様抱っこ状態だ。
「これでよろしいですか？お嬢様？」
「苦しゅうないぞ」
沙鳥を降ろす。
ちょうどその瞬間、『ブ――――――』とブザー音が聞こえた。
さっきの香苗へのパスはきちんと通り、唖然としてた相手チームにボールを落としたので、点が入った。
８対３で勝利した。
香苗と沙鳥は相手に礼をしてこちらに来る。
香苗はむくれていた。
「夏哉君ひどいっ！私には一回もお姫様抱っこしてもらってない」
「俺が何度もやってるみたいな風に言うな。俺だって初めてやったわ」
「ほんとに～？」

ジト目で見てくる。

しょうがないから頭をなでなでしてやる。

「お前も沙鳥みたいに壁ジャンやったらやってやるよ」

「無理だよっ！沙鳥ちゃんくらいしか出来ないよ！」

「私は出来ると思うぞ」

「いや、アンさんは比べてはダメだと思いますわ」

「「……」」

香苗と沙鳥がキョトンとした顔をしている。

まぁそりゃそうか。

「真樹、お前向こうだろ？行ってこいよ」

取り敢えず真樹を遅刻させないようにせかす。

「えぇ」

「頑張れよ」

「応援お願いしますわ」

アンの激励を受けて真樹は小走りで行く。

「「夏哉（君）どういうこと！？」」

真樹がいなくなるとすぐに迫ってきた。

「落ち着け。お前らの言いたいことはよ～く分かる。簡単に言えばアンが幻術をかけて見えるようにさせた。アンダースタン？」

「アンダースタンド」

「あんだー……すたん？」

俺のかなり簡略化した説明を、しかし沙鳥は理解出来なかったようだ。

「っとだな、まずアンが真樹に幻術をかけた。これは分かるな？」

「うん」

コクリと頷く。

「その幻術でアンの幻を真樹に見せている。分かるか？」

「えっと……アンちゃんが、アンちゃんの幻を、見せてる？」

「そうだ。実際真樹はアンを見れない。だから幻でアンがそこにあたかもいるかの様に見せてる。だから見るはずのないものを見てんの。分かる？」

「う、うん、なんとか……つまりは真樹はアンちゃんとしゃべったり出来るんだよね？」

「まぁ幻覚だけどな」

「それよりもさ、アンさんの魔法が真樹ちゃんに効くんだね」

「ぽいな」

「それよりも！真樹の試合が始まるから行こう！」

アンが、まるで遊園地ではしゃぐ子供のように俺の袖を引っ張る。

「やれやれ、こんなはしゃぐ子供を持って大変だな～」

俺が冗談混じりに言うと、

「そうだね、あなた」

「「「……」」」

「え、な、何、この反応？」

香苗があわてふためく。

「カナは『あなた』とか言っちゃダメ」

「なんでっ！？贔屓だよっ！」

「ほら香苗、我が儘言っちゃダメだぞ？」

「なんでアンさんが親の立場！？」

「我慢しろ。せめて身長5?伸ばそう」

「……夏哉君、年齢的に成長期過ぎた私に、あと5?伸びろって言うの?」

「香苗、そんなまじ顔で言うなよ。聞いてるこっちが悲しくなる……」

「アンちゃん、魔法でどうにかならない?魔力の問題なら手伝うからさ」

「いや、知らない。私は姿変えられるし」

「うぅぅ……。望みが消えていく……」

香苗が落ち込んでしまった。

「……お、おい!真樹の試合始まってるぞ!ほら香苗、行こうぜ!?」

「そ、そうだ!真樹も応援しろって言ってたし!」

「だよね~!ほら、早く行こうよ~!!」

無理矢理明るく繕う俺たち。

「……うん」

「落ち込むなって!お姫様抱っこ?そんなんいくらでもやってやるぞ?」

「ほんとっ！」

先程までとは打って変わって眩しい笑顔になる。

「ああほんとさ。人前だと流石に恥ずかしいけど、家とかならやってやるさ」

「やった～！」

喜んでくれて何よりだ。

俺たちはようやく真樹の試合を観戦しに行った。

真樹率いる五組は六組が相手。

真樹のチームには灯里がいた。

試合は既に半分まで終わっていて、６対６のイーブンだ。

次は相手サーブ。

「真樹～、頑張れ～」

沙鳥が声援を送ると真樹がしっかり反応して頭を下げる。

沙鳥の声には灯里も反応してこちらに顔を向け、目があった。

手を小さく挙げて挨拶しようとするが、一歩引かれてしまった。

そのせいか、

「灯里っ！」

同じチームメイトに名前を呼ばれた瞬間、相手のサーブが頬にぶつかった。

よろける灯里を支える真樹。

一時ゲームを中断して相手チームも駆け寄る。

俺たちも同様に近付く。

「ごめん！大丈夫！？」

サーブを打った女子が頭を下げる。

「あ、はい。大丈夫……」

たらぁ～っと、

口から血が流れ出した。

「えぇぇっ！？血、えっ、口から、血ぃっ！？きゃあああああっ！」

サーブを打った女子はかなりテンパってる。

まぁそんなことをさせてしまった当事者としては動揺も無理ないか。

多分口を切っただけだろう。

……俺が原因なんだろうが。

「ほ、ほんとごめんなさい！！な、内臓大丈夫！？」

「内臓？だいじょう――いたっ」

口許を押さえる。

歯が当たったのか。

「いやっ！ほ、保健室！早く保健室行こっ！！」

「え、いや……」

「でも流石に血のついたままの体操服じゃやばくね？」

つい口を出してしまった。

灯里はピクッと身をすくめたが、ゆっくりと自分の服を見て『うわっ』と驚く。

「じゃあ、ちょっと行ってくるね」

灯里は立ち上がり、体育館の出口まで歩き出す。

「だ、だだ誰か付き添い……」

「あ、じゃあ俺行くから」

テンパる女子に声をかける。

少し小走りで灯里に近付く。

「灯里、大丈夫か？」

「ひっ、柊？」

「……いやさ、流石に慣れてるとはいえ傷付くことは傷付く訳で」

「あ、ごめん……」

微妙に気まずい雰囲気が漂う。

「そだ。ほい、ティッシュ」

ポッケからティッシュを取りだしそれを渡す。

「な、なんで持ってるの？」

「偶然」

「そ、そうなんだ……。もらって、いいの？」

「あげるって言ったけどな」

「ご、ごめん……」

「いや、謝るところじゃなくね？」

「ごめん……」

「だ～！」

ビクッと体を震わす。

いちいち謝られるのは疲れた。

「お前俺に謝るの禁止！分かった！？」

「……え？」

「謝罪禁止。アンダースタン？」

「えっと、うん……」

「で、さっきは悪かったな」

「な、何が？」

「俺と目を合わせちゃったからこうなったわけだし。謝っておかないと」

「あ、ううん。気にしてないから」

「そうかい。ならよかった」

しばらく沈黙のまま歩いた。

保健室まではもう少しだ。

「るあがね」

突然灯里の方から話しかけてくれた。

ちょっと嬉しかった。

「柊と遊びたいだって」

「ん、なら明日家戻るか。灯里はどうする？」

「……いいの？」

「妹一人じゃ何かと不安だろ？最悪沙鳥とかも呼ぶし」

「じゃあ、お邪魔するね」

「はいよ」

この件（くだり）で礼を言わなければいけないことを思い出した。

「そういやさ、親を説得してくれてありがとな」

「あ、うん。仲直り、出来てた？」

「あの後の次の日来て、ちゃんと話をしたってさ。親を介してだけど謝られた」

「そっか。よかった」

ホッと胸を撫で下ろす。

そして俺たちは保健室に入り、見てもらった。

特に深い傷ではなかったようだ。

第四話　《三章》体育祭、バレー（後書き）

アン「これ、体育祭メインの話だったか？」

沙鳥「ん～、どっちかと言うと幻術の話メインだったね～」

作者「だって語り部の夏哉がスポーツしてないし、やりにくかったんだもん」

沙「次回は何するの？」

作「あれだ、ドッジボール」

ア「おぉ、今度は運動メインの話になるな」

作「それで、今回の話の目処が立ちました」

ア「というと？」

作「次回ドッジ、その次が障害物競争、そして最後におまけとクラス対抗リレーで終わりだな」

沙「おまけって？」

作「それ言っちゃあネタバレだ」

ア「その次の、第五話はシリアスなのか？」

作「なっちゃうな～。取り敢えず次回で真樹の過去が明らかになる

し、伏線も一部回収する予定」

沙「思えば真樹が一番謎多くない？」

作「謎、っていうか隠し事だな。まぁこういうのがあるから沙鳥とか香苗より出しやすいってことはある。アンも、書こうと思えば過去編書けなくはないけど、まだ無理だな」

ア「それよりもだな、今回名前だけだとしても女しか新しいキャラ登場してないぞ。男はどうする？」

作「……ほんとマズイね。最悪ほんと出せないかも。夏哉と男たち仲悪いし。名前程度なら出すかもだけど。ていうか俺女好きだし別に男が夏哉だけでも関係無し」

沙「うわぁ～、言い切った」

ア「私としてはライバル増えるからやめてほしいんだが」

作「あ、それなら気にするな。夏哉はこれ以上フラグ立てる予定はない。好印象は抱かせると思うけど、恋愛はないようにする」

ア「ならいいか」

作「あ、話変わるけどさ、夏哉の正体って読者には勘づかれてるかな？」

沙「え？正体？」

ア「まぁ確証はないが、なんとなくはな」

沙「えっ！そうなの！？」

作「まぁ気付かれちゃうか。でも、原因と言うか、こうなったきっかけは予想外のものだと思います。なので期待して裏切られてください。ではまた今度。感想待ってま～す。ほんと、なんでもいいので誰かくれません？」

第四話　《四章》体育祭、ドッジボール

灯里と共に体育館に戻ると、ちょうど試合が終わる頃だった。

結果はベスト４。

優勝クラスは、男子Ａチームは快斗のいる四組、男子Ｂチームと女子Ａチームは真樹と灯里のいる五組で、女子Ｂチームは六組だった。

「夏哉～、あ、灯里さんも。灯里さん大丈夫だった!?内蔵やられてない!?」

沙鳥と香苗とアンと真樹が駆け寄ってくる。

「あ、えっと、大丈夫です。口を切っただけなので。先生にも治してもらいました」

「そっか～。よかった」

ホッと胸を撫で下ろす沙鳥。

「だから言ったでしょ?なんで顔にぶつかって内臓に傷が付くの?」

香苗がいたって冷静にツッコミをいれる。

「だって、口から血って言ったら内臓でしょ?」

「どんな定義だ。あ、ほれ灯里、向こうで待ってるぞ」

顎でくいくいっと、心配そうにこちらを見る同じクラスの女子たち

のいる方を指す。

「あ、じゃあ行ってくるね」

「お～」

たったったっと小走りで駆け寄っていった。

「なんか灯里さんと夏哉君仲良くなってるね」

「仲直りしたからな。明日うちに来る予定だし」

「「何それっ！？」」

「どうせるあの付き添いだろ？」

二人が叫ぶ中、アンが答えを出す。

「正解。どうする？三人来る？」

「「行くっ！」」

「三人って私も入ってるのか？」

「アンはもう確定だから。真樹は？」

「遠慮させていただきますわ。妹の相手をしなければならないので」

「真樹って妹いたんだ。一人だけ？」

「えぇ、妹一人だけですわ」

「夏哉、周りが外に出始めてるがいいのか？」

アンの言葉で周りを見てみると、既に半分くらいはいなくなっていた。

「次は長縄か」

「長縄はどういうのなんだ？」

「ん～、簡単に言うと二人が縄を回して、それを二十人で何回連続で飛べるかってやつなんだよ」

「なんだ、簡単そうだな」

「それが難しいらしいよ」

「らしい？夏哉はやったことないのか？」

「生憎中学ではやらなかったんだ」

「そうか」

本当はサボってただけだけど。

俺が昔、体育をやるなんて言い出したらもう大騒ぎになるし。

「確か真樹ちゃん出るよね？」

「ええ」

「真樹頑張ってね～」

「はい、沙鳥様！」

長縄の結果は、我ら三組が四十七回で優勝した。

次はドッジボールだ。

これはバレー同様トーナメント式だ。

今教師が外でコートを白い粉（名前忘れた）で引いている。

「次のドッジボールは、内野外野ってのがあって、相手チームの内野にボールを当てるとその人は外野に行く。外野の人が内野を当てると、そいつは内野に戻る。意味分かる？」

「意味は分かる」

「よし、それで、時間内に内野をゼロにすれば勝ち。時間内に終わらなかったら、内野に多く人がいたチームが勝ち。ＯＫ？」

「あぁ、多分な」

「まぁ他にも細かいのはあるんだけど、それは見ながらな」

「分かった」

コートのラインを引き終えた。
コートは二つ、なので二試合を平行して行う。
予選的なものを一試合やってからだが。

その最初の試合は六組と九組。
俺たち三組はこのどちらか勝者と戦う。

十分間という時間の中、勝者は九組だった。

続いての試合、片方では一組と四組、片方では五組と七組だ。
もし俺たちが勝ったら五組と七組のどちらかになる。

結果は、二分二十秒を残して四組の圧勝。
そして内野の数で七組の勝利に終わった。

次はようやく俺たちの組だ。

「アンは真樹と見てろ。あんま話しかけるなよ？」

「分かってる。頑張れよ」

「おう」

俺たちはコートの中に入った。
外野が三人出ていく。

三組で一番背の高い相川博臣（あいかわひろおみ）がジャンプボールに出る。

相川と九組の男子が競り合った結果、相川に軍配が上がった。

そのボールを三井大地（みついだいち）が拾い、すぐに相手コートめがけて投げる。
それは一人の女子に当たった。

これで二十九人。

溢れたボールを拾った相手は外野にパスをする。

何度も何度もパスを回して、隙の出来た香苗に投げる。

「あうっ」

当たったボールは宙に浮かび、俺がキャッチして香苗が外野に行くことを阻止した。

「ありがとう夏哉君」

「いいって。ほい、投げてみ」

ポイッと香苗に渡す。

「え、私無理だよっ」

俺は小声で言う。

「お前は聖王の依代だから道具、ボールの扱いはピカ一なんだ」

「そ、そうなの？」

「そうなの。やってみな」

「う、うん」

香苗は相手をよく見て、投げた。
そのボールは、お世辞にも速いと言えないスピードだ。
相手もそう思ったのか、ボールを取ろうと構える。

ボールが相手の手に収まる手前、ボールはフォークボールさながら起動を変え相手の足に当たった。

「えぇぇっ！？」

そのボールはバウンドして近くにいた男子の太ももに当たり、地面に落ちた。

まさかの二人当てだ。

「カナすっごーい！」

沙鳥が抱きつく。

香苗の活躍もあり、残り一分で相手を全滅した。

その次の試合も勝利を納め、決勝戦。
相手は夕馬がいる四組。

ジャンプボールは快斗と相川。

軍配は快斗に傾いた。
しかも奴は叩(はた)くのではなく、空中で掴んだ。

しかもその状態のまま相川に当てた。
そして跳ね返ったボールは再び快斗の手の中に。
ひでえな。
着地して投げようとする快斗だが、それを夕馬が止めた。
「快斗、貸して」
快斗は言われた通りに渡す。
「夏哉、行くよ」
夕馬は俺を名指しして構えた。
こいつ、俺を敵対視してたのか？
夕馬は全力で投げた——沙鳥に。
「私っ！？」
完全に気を抜いていた沙鳥だったが、なんとかキャッチ出来た。
「差別はいけないよね」
夕馬がそんなことを言ってきた。
そして意味が分かった。

こいつは沙鳥も参加させようとしてるのか。

今までの試合では、沙鳥を当てようとする奴はいなかった。
当然だろう、誰が尊敬する人にボールを当てようとするだろうか？

今までは俺が弾いて沙鳥がキャッチ、それを投げるという形で参加させていた。

多分快斗と千佳音もそういう風に思ってくれてるだろう。

香苗も沙鳥も、この体育祭を楽しめそうでよかっ――

バァンッ！！

側頭部を強い衝撃が加わった。

ボールだった。
ボーッとしてたせいで気付かなかった。

てーんてーんと地面をつくボール。
それを香苗が拾った。

「フッフッフ……香苗、ボール貸せ。快斗ぶっとばぁす！！」

「俺！？今の斎藤だぞ！？」

「そんなん関係ねぇ！気分だ気分！！」

駆け足で外野に出て香苗からボールをもらう。
取り敢えずまだ冷静さは欠けてないから力をセーブ出来る。
そしてかなり手加減して快斗に投げた。

「時間終了！外野の人は座ってください」

ホイッスルが鳴った。

俺は内野なので立ちっぱ。
正直パッと見同じくらいだ。

担当体育委員が数を数え終えた。

「結果発表！！勝者……十四対十二で三組！」

男は雄叫び、女子は叫び声をあげる。
かなり接戦だった。

校内放送が入る。

『ドッジボール優勝者は三組です！ではここで昼休みです。一時間後に次の障害物競争が始まりますので、遅刻しないようにしてください。じゃあ解さ――』

『ぐぅぅぅぅ～』

スピーカーから腹の鳴る音が聞こえた。

『かいさ――――――――――――――――――――んっ！！』

ブチッ

最後に鼓膜が千切れるんではないかというほどの音量で叫んで切った。

俺たちいつものメンバーは屋上で昼飯を食うことにした。

「アン、いつも悪いな」

「毎度毎度飽きずに言うな、夏哉も」

「だってお前、非常に罪悪感に苛まれるじゃん。お前怒っていい立場なのに優しく健気に我慢してくれて。……どっかの『お姫様だっこずるいっ！』って言ってる誰かさんとは偉い違い」

「うっ！！」

俺の言葉でどっかの誰か呻く。

「なんかしてあげるって言っても特に要求してこないし」

「私は夏哉と香苗と沙鳥と真樹と一緒にいられれば幸せなんだ。これ以上の贅沢なんて罰が当たる」

アン、お前……

「これからハグでもなんでもしてやるよ」

まるで聖者だ。

俺に出来るのがこのくらいなんて……。

「ハグ？」

「簡単に言っちゃえば抱き締めてやるってことだ」

「ほんとかっ！？それは楽しみだ！」

満面の笑みを浮かべるアン。

「か、カナ～。アンちゃんが眩しすぎるよ～」

「なんかアンちゃんに勝てる気がしない……」

「他の世界の住人だからこそこのような純粋な気持ちを持ってるんでしょうね」

各々アンに対する感想を述べる。

教室に弁当を取りにいって屋上に行くと、夕馬たちがいた。

「夕馬お邪魔していい？」

「ん、夏哉どうぞ」

夕馬が快斗との間を開けてくれたのでそこに四人入る。

「あ、そだ。夕馬くん」

「なんですか？」

沙鳥が夕馬に話し掛ける。

「ドッジボールのときはありがとっ。私のために色々考えてくれて」

沙鳥は笑顔で言った。

本当に嬉しかったんだろう、対等に扱ってくれたことに。

「沙鳥さん……」

夕馬は少し間を開けて、言った。

「いちいちそんな笑顔で言うから？沙鳥様～？とか言われて親衛隊も作られるんですよ」

「「「「「「「「「「……」」」」」」」」」」

ここにいる皆全員が何も発しない。

非常にどう答えていいのか分からない言葉を言われた。

この原因を作った本人はそんなこと気にもせずに語り続ける。

「そんな言葉で僕を落とせると思わないでください。それだったらまだ千佳音に？夕馬、愛してる？って言われた方が落ちます」

「え、えっと、夕馬くん？すごい話がズレてるというか、噛み合ってないというか……」

沙鳥はなんとか喋るがしどろもどろだ。

「噛み合ってますよ。つまり僕が言いたいのは、香苗さんって小さいですよねってことです」

「今の話でどう私に繋がるの！？一切私の名前出てきてないよね！？そして小さいって言わないで！」

「そして真樹さんはツンデレキャラが合ってます」

「ツンデレ！？沙鳥様にもそうなってほしいと言われましたがまだなってませんわよ！！」

「つまり気にしないでということです」

「「「「「「「どういう繋がり！？」」」」」」」

奇跡にも皆ハモった。

俺も叫んだには叫んだけど、夕馬の言ってる意味が分かった気がした。

つまり夕馬は、?自分はただ普通なことをしたのであって、感謝されるようなことはしていない?と言いたいのだろう。
でもこんなの、キザったらしい言葉だから言いたくないので、今みたいにはぐらかした。

実際どうなのかは分からないが、俺は夕馬の気遣いを信じてそう思いたい。

「はぁ〜、腹減ったから早く食おうぜ」

「そだね」

俺の言葉に会わせてあとから来たメンバーは弁当を開いた。

第四話　《四章》体育祭、ドッジボール（後書き）

夏哉「はい、ドッジボール終わりました～。今度は前回よりスポーツ取り入れられたな」

香苗「そうだね」

夏「それにしてもお前よくバレーボールをフォークみたいに投げられたな」

香「そうだね」

夏「……香苗、お前俺をバカにしてる？」

香「そうだね」

夏「なんでぇッ！？」

香「あっ。ごめん、何？」

夏「いやそれはこっちの台詞なんだけど……」

作「どったの？」

夏「香苗がおかしかったからさ、どうしたのかな～って」

香「……沙鳥ちゃんがね」

夏「うん」

香「また胸大きくなったんだって」

夏「それは……」

香「死んでいい？」

夏「駄目！それは駄目！作者！なんかいい案ない！？」

作「ん～、じゃあやっとくか」

沙鳥
体重４２？↓４３？
ＢＷＨ９１，５８，８６↓９４，５９，８８
真樹
ＢＷＨ８２，５５，７９↓８４，５３，８０

香「死にます」

夏「まてまてまて！早まるな！！作者のバカ！！どうしてくれるんじゃ！？」

作「落ち着け！香苗も変化がある！！」

香苗
体重３９？↓３６？

夏「……これだけ？」

作「おまっ、女の子にとって３？がどれ程の差か分かってんのか！

？」

夏「じゃあお前は分かってんのか？」

作「……」

夏「だろうな、彼女なし」

作「てめぇもだろうが、たらし」

夏「うっせえよ」

香「夏哉君、こんな、いつまでたっても成長しない私でも見捨てないでくれる？」

夏「何言ってるんだ、当然でしょうが。沙鳥もアンも真樹も、それくらいじゃ見方変わんねぇよ」

香「夏哉君……」

作「最近香苗が大胆に恥ずかしい台詞をいうようになったな。非常に初期と変わった気がする。もっとおどおどしてたはずなのに」

香「そうかな？いつも通りだと思うんだけど」

作「ま、いいや。じゃあ軽い閉めどうぞ」

夏「っと、そろそろ第四話は終わりです」

香「最悪次回で終わるかもだそうです」

夏「そうなの！？」

作「可能性は否定できない」

香「と言うわけで残り数少ない第四話ですがよろしくお願いします」

第四話　《五章》体育祭、障害物競争

昼休みが終わり、一部が入場門的な、その他大勢がグランド内に待機している。

次は障害物競争が始まる。

一レース九人で十レースで、男女は混合だが一クラス男女は五、五で参加している。

俺は一番最後。

隣には夕馬もいる。

「どうよ、行けそ？」

「まぁ、コース見た感じ最後以外難しいのはなさそうだけど」

コース内容は、まずハードル二つ、平均台、ネットに、最後夕馬が難しいといった借り物。

定番と言えば定番かもしれないけど、やはり最後がどんな物があるのかが気になる。

『あ、あ～、選手の皆さん聞こえますか～？』

放送委員の人がマイクで軽めに喋る。

『この障害物競争、なんとペケの人は罰ゲームがありま～すっ！！』

はああっ！？

聞いてねぇ！！

そんな思いは俺だけではなく、周りもやんややんやいっている。

『や～かまし～！苦情は受け付けません！というわけで罰ゲームの説明しま～す。まず罰ゲームは男女別。女子の説明から。女子は……あちらをご覧ください！』

どちらだ？

そう思っていると昇降口から教師が数人、何かを抱えながら走ってきた。

持っているのは、バッグ？

『女子の罰ゲームは、ズバリ恥ずかしいコスプレ！』

え～っ！！、と計四十五人の叫びが聞こえる。

『ちなみに発案者は各クラスの委員長よく見てごらん、九十人の中に委員長一人もいないでしょ？』

確認すると、確かに俺のクラスは誰もいない。

普通に最低だろ委員長たち。

『で、男子はこちら！』

再び昇降口を見ると、

「……」

俺は絶句した。

いや、俺だけではないはずだ。
夕馬も、他の男子たちも絶句していた。

そこに現れたのは、１８０？はあろう身長を持ち、スキンヘッド、筋肉隆々で、何故かまだ春なのに三角水着一枚という男がいた。
違う。
男じゃない。
体をくねくねさせ、まるでモデルのように歩いてるところを見る限りオカマだ。

『アリア・スウェードさんです！』

「みんな～、よろしくね～！」

まるで自分が女であることに疑いを持っていないような喋り方で、低い声を出す。
まさか、こいつ教師じゃないだろうな？

『男子の皆さんは、アリアさんにおしりペンペンされてもらいます』

おぞけが走るとは、このことを言うんだろう。
背筋も冷え、冷や汗も止まらない。

「男集合！」

その場にいる誰か男子が声を掛けると、あの夕馬でさえ集合し、みんなで円陣を組む。

「お前ら、いいか？」

集合を掛けた男子がその場を仕切る。

「本来俺らは敵同士だ。自分の仲間なんて五人しかいない。だがしかし！今は違う！今の俺たち四十五人は仲間になった！！この中に気に入らないやつがいるかも知れない。さっきまで喧嘩してたやつがいるかも知れない。だがそんな思いはひとまず横に置け！今やるべきことはそんなんじゃない！！俺たちは命がかかってるんだ。魂がかかってるんだ。蹴落とそうとか、そんなことを考えては行けない。女子たちには悪いが、なんとしてもペケにはなるなッ！！」

『オ――――――――――――――――！！』

俺たちの気持ちはひとつになった。

「ひとついいですか」

そんな中夕馬が声を発する。

「なんだ？」

「この障害物競争、一番ネックなのが借り物です。ここは運としか言いようがない。だから、情報交換が必要になってきます。例えば『野球部の人』とか『赤い携帯電話』とかの場合、まず引いた人は大声で内容を叫ぶ。そしてすぐに僕たちが反応する。でもここで一斉に叫んだら意味がない。だからここにいる人と、ゴールした人で代表を決めて、その人に叫んでもらう、というのはどうでしょう？」

「なるほどな、冴えてるお前！名前は？」

「樋口夕馬です」

「柳明良（やなぎあきら）だ」

「柳くんは何走者ですか？」

「2だ」

「じゃあゴールした方は柳くんが指揮を執って声を出してください。僕は最後なのでこっちをまとめて、僕の隣にいる柊夏哉が叫びます。僕大声出せませんので」

「分かった。じゃあ皆！情報の出し惜しみはするな！曖昧だからという理由でためらうな！取り敢えず俺か樋口に話せ……。やるぞッ！！」

『オ――――――――――――ッ！！』

気合いも十分に、俺たちは列に戻った。

パッと見て、男子だけのレースはない。

「第一走者、よーい！」

先生がピストルを持った手をあげる。

第一走者は男子七に女子がニ、競争率が高い。

パァンッ！！

ついに火蓋が切って落とされた。

男たちは本気で走る。

流石に男女という差があるだけあって前半で女子とかなりの差がついた。

そして先頭がテーブルの上に置いてある箱の中に手を突っ込み紙をとる。

「『構内にあるドラ○ンボール一個』ってえええぇっ！？」

初っぱなから変なものを引いた。

これは情報云々の問題だ。

？どこにあるんだー！？と叫びながら校舎の中に入っていった。

多分アウトかな、あの人。

次の人が引く。

「『髪が三つ編み』！！」

夕馬が俺の肩を叩いた。

「五組乃村安奈（のむらあんな）」

その言葉の意味を悟り、叫ぶ。

「三つ編みは五組乃村安奈だッ！！」

それを聞いた男子はその子の名前を叫びながら他の人たちがいるグランドに走っていった。

第一レースは、男子に被害がなかった。
順位で言うと一位八組、二位九組、三位五組、四位三組、五位一組、六位四組、七位二組、八位七位、九位六組。

六組は女子で、ミニスカへそだしメイド服にいぬ耳がついて、しかも下駄を履いていた。
観戦してるみんなは写メの雨あられだった。
参加してる俺たちはそんなことに気が回らない。
因みに八位の七組はドラ〇ンボールの人だ。

そしてその後も順調、とはいかなかった。

第二レース、第五レース、第七レース、第八レースで被害を受けてしまった。
男たちも必死に抵抗するが、最後には捕まり、計四つの悲鳴があがった。
その被害にあった男たちは真っ白に燃え付きついた。

次は最終レース。
男は五人、女子は四人。
九分の五の確率。

「最終走者、よーい！」

パァンッ！！

一斉に走り出した。

俺は流石に命の危険があるからといって全速力で走るわけにはいかなかった。
が、それでもスピードを出して一番に躍り出た。
ついに問題の借り物地点に到着した。
箱の中に手を突っ込んで紙を一枚引く。
「『身長１５０?以下の人をお姫様だっこ』!!香苗ェェェェッ!!」
俺の強運はかなりのものだった。
こんなお題、俺のためにあるようなものだ。
俺は香苗を探すために人混みの中に向かう。
しかも再び俺に運が向いたようで、俺の声が聞こえたアンが浮いてきた。
そこを目印として走る。
そこには香苗はいなく、沙鳥とアン、真樹しかいない。
「香苗は!?」
「熱中症でぶっ倒れましたわ」
香苗のバカヤロ――――――――――!!
俺は崩れ落ちそうになった。

どうやら俺は神に嫌われているらしい。
異界の神とはそれなりに話したことあるのに。

しかしここでくじけてる暇はないすぐにゴールにいる男子のもとに近づきながら聞く。

「花街香苗以外で１５０?以下の知ってるか!?」

「ダメだ!こっちはでない!」

クソッ!
足で稼がないとダメか。

唯一の頼みの夕馬を見るが、何故か項垂れている。
そんなにマズかったのか。

と、俺は思い出した。
確か灯里は小さかった気がすると。

「峯岸灯里!!何処だー!!」

灯里はすぐに見つかった。
一緒にいた女子が手を降って答えてくれたのだ。

「灯里身長何?!?」

「え、えっと、１５２、かな?」

俺は膝をついた。
頼みの綱もダメとなると、他に何がある?

「柊、内容は？」

「……身長１５０？以内」

「あ、それなら」

と、灯里と一緒にいた女子が声を出した。

「何！？誰！？」

「いつも源くんといる種原さんなんてどう？」

「源！？快斗のこと！？」

「うん、そうだよ」

快斗といる種原といったら一人しかいない。

「ありがと！」

俺はすぐさま立ち上がり種原を探す。

「種原～！！いるか！？」

「夏哉～！！こっちこっち～！！」

快斗が手を降っている。

全速力で走る。

「ひ、柊くん、私？」

「身長何？！？」

「え、えっと、１５０？だよ」

「ナイス！ちょっとお姫様だっこされて！」

「え、おひ、お姫様だっこ！？」

「ごめん！人助けと思って！！」

無理矢理種原をだっこする。

「きゃあっ！？」

種原の悲鳴を無視して走り出す。

ゴールを見るとまだ男子一人しかいない。

平気だ、そう思うとスピーカーから声が聞こえた。

『天雲沙鳥さん』

夕馬の声だ。

何をしてるか気になったけど、今はそれどころではなかったので走った。

『付き合ってください』

まさかの告白!?
彼女を連れてこいってやつだったのか？

「……え？」

夕馬の告白に種原が小さな声をあげた。
見ると驚きの表情をしている。

『えっと、いいよ』

沙鳥はそれにＯＫを出す。

それを聞いた種原の表情が寂しげなものに代わり、胸の前で手を握る。

「大丈夫か？」

声を掛けてみる。

「あ、うん……」

そういって後ろを見る種原。
恐らく夕馬がいるんだろう。

この反応を見る限り、原因は夕馬の告白か。

そう検討をつけると、ゴールに到着した。

「ゴールです！早速お題の紙を見せてください」

俺は体育委員に紙を渡す。

「えぇっと、後半のはやってますね」

俺は種原を下ろす。

「じゃあ身長を測りましょう」

そう言われてつれられた場所で種原が身長を測る。

「１５０，２。残念、やり直しです」

……は？

「な、なんと？」

「１５０，２。やり直しです」

「あ、２？伸びた」

種原が呟く。

「ふざけるな――――――

『八人ゴールしました！最後の、えっと……柊夏哉さんはもうあれなので借り物しなくていいです。というわけで！アリアさを！おーねがいしまーすっ！！』

ズシンという足音が聞こえた。
そこには、悪魔が立っていた。

「あっら〜、結構好みの顔してるじゃな〜い」

今まで感じたことのない恐怖が体を縛る。
しかしそんなものを振り払って、逃げる。

「待って〜！逃げないで〜！！」

当然向こうは追い掛けてくる。

「い〜や〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜！！」

俺は走り続けた。

そして気が付けば目の前は校舎という行き止まり。

「逃がさないわよ〜！！」

「なめるなぁ！！」

俺は思いっきり力を込めて跳んだ。
そのジャンプ力は五ｍは越えて屋上に届いた。

―――――――――――

「うわぁ、夏哉人間やめてるな～」

アンちゃんがそんなことを呟いた。

私たちは夏哉の身が心配になって追いかけている。

ちょうど今夏哉が屋上に降り立った。

「そう？あんなの魔法使えば簡単じゃない？夏哉風使えるんだし」

「いや、あいつ魔法使ってないぞ」

「え？」

「どういうことですの？」

となりにいる真樹が聞く。

「簡単に言うと、私は誰かが魔法を使えば気配で分かる。今そんな気配は全くないから、夏哉は脚力だけであそこまで跳んだんだ」

「「……」」

私たちは絶句した。

夏哉って、すごいんだね。

―――――――――

屋上まで逃げると、ちょうど反対の方から飛び降りた。
理由は向こうが魔法を使って飛んできたからだ。

『続いて、クラス対抗リレーを開始します。皆さん並んでくださ～い！柊夏哉さんも、さっさと位置についてくださ～い』

「無理だー！！」

誰に言うでもなく叫ぶ。

「テメェ逃げてンじゃねぇよ！！」

「おいぃぃぃ！！最早口調変わってんじゃねえか！！」

「あら嫌だ。アタシとしたことが」

手を頬に当てくねくねさせる。
その姿はキモかった。

気が付くとグランドに出ていて、リレーは既に始まっていた。

「なーつやー！！もう回ってくるよ！」

沙鳥の声がした。
俺は七走者目で、見る限り今六走者にバトンが回っていた。

急いで定位置につく。

しかしその間にも徐々に距離を詰められる。

「頼むから急いでくれッ！！」

その言葉を聞いてくれたのか、六走者目の人（♂）はスピードをあげてくれて、バトンが回った。

順位は四位。

しかしあまり大差がない。

俺は前にいる三人をすぐに抜かして一位に躍り出た――が、最大の難関が待ち受けていた。

目の前にオカマが立っていた。

「夏哉くん、あなたは一番長くアタシから逃げていたわ。でもそれもここまで。あなたはアタシから逃げることなんてできないの！！」

そういってスタンスを広げて待ち構えている。

正直ここまでするかと思うが、意を決する。

俺はそのまま走って、

スライディングで股の下を潜った。

「な――！」

『オ――』という歓声が聞こえた。
俺はすぐに体勢を直し、バトンを渡した。
そしてグランドの中央、人が空いている空間で立つ。
「もう逃げるのやめたの？」
オカマがこちらに来て、訊ねる。
「……もうやめだ。ここまでしつこいんなら、動けなくすることにした」
「闘って、勝てるとでも？」
先に仕掛けたのはオカマだった。
相撲のように両手を前に出して走ってくる。
俺も同様手を前に出して、相手の両手を掴む。
お互い動きが止まった。
オカマは焦りの表情を浮かべる。
オカマ自身、この体格差があるから簡単だと思ったのだろう。
しかし全く動かない。
それに焦りを見せている。
「こんちくしょうが」
俺は足を後ろに引く。

「俺に力で勝てると思うな！！」

そしてそれを前に持っていき、足払いをかける。

大きな巨体は、耐えきれなくて倒れる。

俺は腕を取り関節技を掛ける。

「いただだだだだだっ！！ギブ！ギブギブ！」

「もう俺追いかけない？」

「追いかけないわ！！」

その言葉を聞いて腕を離す。

しばらく警戒したが杞憂に終わり、オカマはテントの方に戻っていった。

そしてグランドからは先程より大きい歓声が、特に男子から聞こえた。

見ると既に走り終わったやつらがこっちに来る。

「お前すげぇな！！よくあんな化け物倒せたな！！」

「今までは沙鳥様の傍にいる嫌なやつだと思ってたけど、考え直した！！柊は神だ！！」

「柊君かっこよかったよ！！」

そんな皆からの言葉を聞いて、正直戸惑った。
こんなあり得ない力を見せて、まさか人がよってくるとは思わなかった。
要は使い方ってことなのか。
俺は嬉しい気持ちに浸った。

『結果発表！！第三位、五組！！』

――いぇ～いッ！！

『第二位、三組！！』

――いぇ～いッ！！

『そして優勝は……四組！！』

――オオオオッ！！

『代表は前に上がってください』

各クラス代表三名が台に上がり、表彰された。

『そしてＭＶＰ発表！ＭＶＰは……競技以外で活躍した柊夏哉さんです！！』

え、俺ええええええええ！？

それには驚いたが、皆が歓声をあげるので台に登り、表彰された。

そして、ミニ体育祭は幕を下ろした。

後書きという名の雑談？

沙鳥「オチがないね」

作者「後書き開始早々何言い出すのお前は！？」

夏哉「だってそうじゃん。最後こういうのは面白くオトすのが基本だろ」

作「そんな普通知るかッ！！」

アン「私たちほんと何もしてないな」

真樹「そうですわね。作者、次回はちゃんと出るんでしょうね？」

作「出る出る。むしろプロローグ枠単独出場」

真「ほんとですの！？」

作「残念だな、決定事項だ」

真「やりましたわ！！」

沙「よかったね、真樹」

ア「おめでとう」

真「ありがとうございますわ」

夏「ところで香苗は？」

香苗「…………………………」

沙「か、カナちゃ～ん、どうしたの～？」

香「……いいことなかった」

作&夏&沙&ア&真「「「「「は？」」」」」

香「作者言ったじゃん！！いいことあるって！」

作「だってお前が熱中症にかからなければ夏哉にお姫様だっこされてたわけで、夏哉もあんなに走る必要もなかったわけだ。俺は言ったぞ、『お前次第だ』って」

香「うぅぅ～……」

作「自業自得だ」

香「うわぁぁぁぁぁぁぁんっ！私のバカ～！」

夏「香苗ドンマイ。今度やってあげますよ」

香「ほんとっ！？やった～！！」

作「まぁ今回の後書きですが、かなり短いので裏話はないんだけど、おまけやっていい？」

沙「おまけ？」

作「別にこの先フラグになるとかじゃないおまけ話」

ア「いいんじゃないか？やることないし」

作「じゃあどうぞ」

柊が走って種原さん？を探しにいった。

「ねぇ灯里～」

柊にアドバイスをした友美（ともみ）が私に話し掛けてくる。

友美は高校からの友達なので夏哉のことを知らない。

「何？」

「あの柊と付き合ってるの？」

「……はぁぁあっ！？何言ってるの！？」

「だって今もここに来たし、口切ったときも一緒に保健室行ってたじゃん。こっそり後追いかけてたけど、いい雰囲気だったよ」

「それわたしも思った～」

もう一人の友達の葉月も同意する。

「それ普通にストーカーじゃん」

私がそう言うが二人はどこ吹く風。

むしろ開き直る。

「だって浮いた話ひとつない灯里がだよ？男子と、しかも天雲さんと一緒にいるので有名な柊と二人っきりになるんだし」

「気にならない方がおかしいよね。ちゃんと話もしてたし」

つらつらと話す二人。

私はそれを否定した。

「そんなんじゃないよ。柊とは……」

あれ？

柊と私ってどんな関係なんだろう？

今までは怖がって恐怖の対象だったけど今じゃそんなことなくて普通の優しい人なんだって理解してるし。

お隣さん、かな？

友達っていうにはそこまで交流はないし、でも赤の他人っていうにはちゃんと話も出来てるし。

「何その間？怪しい～」

葉月がジト目で見てくる。

「そんなんじゃないって。ただのお隣さんだよ」

「お隣？ていうことは小中も同じだよね？」

友美が聞いてくる。

「う、うん……」

「じゃあ幼馴染みなんだ」

「え？」

「『え？』じゃないでしょ。小中高同じで仲良しなら幼馴染みでしょ」

「いやいやいや！それはない！小中っていうか幼稚園の頃も全然仲良くないし！」

「そんな照れなくていいのに～」

「照れてないっ！！」

「大声だすところが怪しいよね～」

「ね～」

本当にそんなんじゃないのに、どうすれば分かってくれるんだろう。

まあ確かに今は助けてもらったり私に罪悪感を残さないようにしてくれる優しい人だって分かってるし、昔を思い返してみると私たちのために何かしようとしてくれたところもあったけど。

「まぁ、ただの知り合いだよ」

「「え～、つまんな～い」」

「つまんないじゃない！」

ぶーたれる二人の頭を叩いた。

ア「ほんとに何もなかったな」

真「わたくしはここで灯里さんが夏哉のことを好きになるとか、そういうのだと思ってましたわ」

作「それはないな。多分もう夏哉好きになる子は増やさない……予定」

香「予定なんだ」

作「小学生とか中学生に好かれるのはある可能性はあるんだけど、高校生はない予定」

沙「夏哉ロリコンだね」

夏「黙れ。というか向こうから好かれるなら違うだろ」

作「えぇっと、他に何話そ。……あ、『その想いは変わりますか？』では言ったんですけど、スピンオフがそろそろ終わるんで、『魔法少女リリカルなのは』やらせていただきます」

沙「そろそろって言っても十話ぐらいなんでしょ？」

作「まね」

香「名前決まってるの？」

作「取り敢えず。『ＡＬＬ　ＬＯＳＴ　ＳＴＯＲＹ』訳して『全てをなくした物語』です」

真「なんかなくすんですの？」

作「いや、そうじゃなくて、『全てをなくした主人公がどれだけの人を守れるかという物語』なんですよ」

ア「何かを失う話じゃないんだな」

作「まね」

真「伝わります？」

作「一番最初の後書きで言います」

沙「私たち関係ある？」

作「あるよ」

夏「あるの！？」

作「名前だけだけど」

ア「誰だ？」

作「夏哉と香苗。主人公の両親」

夏&沙&ア&真「「「「えええぇぇっ！？」」」」

香「私と、夏哉君が……夫婦……」

沙「私は！？私はどうなの！？」

作「出る予定なしだね」

沙「ひどいひどいひどい！！」

作「因みに今んところ二人だけだから」

ア&真「「だせ——！！」」

香「夫婦……」

夏「もう収集ついてないぞ」

作「じゃぁ次話予告でもするか。次回は真樹にスポットライトを当てますが、香苗と沙鳥が事件に巻き込まれます。薬を盛られる香苗と沙鳥。そして夏哉が知った真樹の真実とは？今回は学校内の問題

です」

夏「……これほんと？」

作「うん、そう。今回の後書きは本編自体も少ないので短めで」

夏「感想等々待ってます」

作「またね～。なのはもまっててくださぁい」

香「夫婦……」

夏「まだ言うか」

作「これはマジだからな」

第五話　《プロローグ》利用

わたしは消えたかった。

何もかもを失いたかった。

でもだからと言って死ぬのは恐かったから死にたくはなかった。

死ぬんじゃない、消えたいんだ。

夢のようにスゥッと。

そんなことを望んでいたけど、そんな願いは叶わなかった。

男が怖い。

頭では分かっている。

全ての男がそんな風に考えてる訳じゃない。

だから必死に繕った。

でもそれも限界になって引きこもった。

心が病んでしまった。

本当につらかった。

自暴自棄になったとき、わたしはあの人の存在を知った。

目を引くような存在だった。
わたしと同い年くらいなのに周りと違った。
気になって調べてみた。

利用出来る。

すぐにそう思った。

あの人ならわたしの身代わりになってくれる。
あの人ならわたしを救ってくれる。

男の近寄らないあの人なら、わたしの存在を消してくれる。

わたしはあの人のことをもっと調べた。
気に入られるように。

そしてわたくしは、接触した。

予想通りだった。
いや、予想以上だった。

あの人の周りには男がいない。
それに加えてわたしも消えた。
完全に近づけたわけではなかったけど、男は近付かなくなった。

『友達になってくれない？』

そう言われたときは胸が締め付けられた。
まさか騙して利用をしている相手にそんなことを言われるとは思ってなかった。

嬉しかった。
同時に罪悪感も抱いた。

自分も成長して、男にも慣れた。
だから、というわけではないけど、今度はわたくしがあの人のために何かしようと思った。

わたしを救って、わたくしを作ってくれたあなたのために

第五話　《プロローグ》利用（後書き）

作者＆amp;香苗＆amp;沙鳥「「明けましておめでとうございま～す！！」」

作「はい、というわけでやって参りました２０１１年！最初の投稿はプロローグでちょっと、いやかなり短いですがご了承ください」

沙「ちなみに皆振袖姿で～す！！」

香「今年もよろしくお願いします」

沙「ていうかさ、それこそ振袖とか『後書きという名の雑談？』でやればよかったじゃん」

作「……普通に思い付かなかった。で、『その想いは変わりますか？』で気づいたんだけど結局挨拶だけで終わっちゃったんだよ」

香「でもほんと凄かったね、第四話が終わるのがぴったりで」

作「ですよね～。俺も思った」

沙「じゃあやっぱ偶然なんだ」

作「当たり前だ！俺を誰だと思ってる？」

香＆amp;沙「「作者」」

作「まぁそうだな」

香「ねぇお正月企画とかやらないの？」

作「……いや、思い付かなかったんだよね～。それに、そういうのやるんだったらなんでクリスマスやらない？ってなるでしょ？」

香「そうかな？」

作「いいの。もしそんなことしたらスピンオフでもやんなきゃいけないじゃん」

沙「まぁいいんだけどね」

作「沙鳥～、お雑煮作って～」

沙「急に話変わったね」

香「まぁまぁ、私も食べたぁい」

沙「はぁい」

――――――――――

沙「どうぞ～」

作＆amp;香「「いただきま～す」」

沙「どうどう？」

香「美味しいよ～」

作「うまいうまい」

沙「よかった」

作「というわけでお雑煮食べたいんでここで終了～」

沙「え、マジ！？あ、え～と、今年もお願いします。いっぱい見てね。あと感想も待ってま～す」

香「詰め込んだね」

第五話　《一章》計画実行

「あ、早乙女さん、ちょっといい？」

五月三十一日の昼休み、いつもの屋上で昼食を取ろうと教室を出たところ、見覚えのある男子に声をかけられた。

「蔵持さん、でしたね。どうしました？」

蔵持龍、わたくし同様沙鳥様を愛するもので、確か隣の六組だったと思う。

身長は私より少し低く、そのせいもあってか童顔に見える。

「早乙女さんって確か沙鳥様と飯食べてたよね？」

「えぇ」

「これ、先輩がぜひ沙鳥様と早乙女さんに、だって」

そう言って取り出したのは、黒い液体が入った５００ｍｌの円柱形のペットボトルとプラスチック製のコップが三つ。

ペットボトルにはラベルはない。

「これは、コーラですの？」

「うん。余っちゃったんだって。蓋は開けちゃったけど手はつけてないって言ってたよ」

「あ、ありがとうございます。ではいただきますわね」

そう言ってコーラ入りのペットボトルとコップを受け取った。
ペットボトルはひんやり冷たかった。

屋上には先に沙鳥様と香苗、夏哉がいた。
アンさんは、幻術の効果が切れたので見えない。

「おーす。ちょっと遅かったな」

「あまり変わってないでしょう。これ、蔵持という人からの差し入れです」

ペットボトルを沙鳥様に見せる。

「コーラ？」

「のようです」

わたくしは沙鳥様と香苗の間に座る。

そして夏哉が思い出したかのように言う。

「あ、そうだったな。真樹、アンが幻術かけるぞ」

恐らくアンさんに言われて気づいたんだろう。

「分かりましたわ」

額に何かが触れるような感覚を覚える。

そう思うと立ちくらみをしたような、一瞬視界が暗くなった。

それが晴れると、わたくしの前にはアンさんが立っていた。

「真樹、見えるか？」

「えぇ、見えますし聞こえますわ」

わたくしの言葉を聞いたアンさんは夏哉のもとに戻った。

「んじゃ食べますか」

夏哉は音頭を取る。

わたくしは弁当を広げる前にペットボトルの蓋を開ける。

「飲みます？」

「飲む～」「私も」

沙鳥様と香苗はすぐに答えた。

しかし夏哉は答えない。

「夏哉は？」

「俺？いや、コップ三つしかないから真樹飲むっしょ？」

「わたくし炭酸駄目ですので」

「ん、じゃあもらうわ」

わたくしは三つのコップに全て注いで配った。

「夏哉、なんだこれは？」

「あ、そういやコーラ見せたことなかったな。ちょっと飲んでみろ」

夏哉はアンさんに手渡す。

アンさんはコップを両手で持ち、恐る恐る口へ運ぶ。

そして一口含むと、

「ぶはっ！？」

それを吐き出した。

「え？」

「あ、アン、大丈夫か！？」

夏哉がアンさんの背中をさする。

「うぅぅ……ピリピリするぅ。なんか変……」

「アンちゃん魔族なのにこういうの無理なんだ」

「魔族関係ない……」

「アンちゃん大丈夫？」

「なんとか……」

アンさんは夏哉にコップを渡す。

「ん～、アンは炭酸無理か」

「炭酸って全部こうなのか？」

「ああ。基本な」

「絶対飲まない」

アンさんは心に誓ったようだ。

「あ、話は変わるけどさ」

と、突然香苗が話題を変えた。

「アンさんの幻術が解けないってことは真樹ちゃんの家って寮から近いんだね」

「あ、知りませんまでしたか？寮から三階建ての家が見えると思うんですが」

わたくしは立ち上がって辺りを見渡す。

「あれわたくしの家ですわ」

自分の家を見つけたので指を指す。
皆も立ち上がり、指の先を見る。
「え……あれっ！？」
沙鳥様が周りより少し飛び出ているオレンジの屋根の家を指を指しながら驚嘆の意を示す。
「うわっ、すごい近い！！」
香苗も同様に大きな声を出す。
おおよそ寮との距離は３００ｍといったところか。
「それと、あの寮はわたくしのお祖父さんが経営してますわ」
「「「ほんとっ！？」」」
今度は三人が声を合わせる。
アンさんは何を言っているか分かってないようだ。
「真樹、どう言うことだ？」
「つまり夏哉たちが住んでる家はわたくしのお祖父さんのもので、それを皆に貸してるんです」
「そうなのか。いつもお世話になってます」

アンさんが丁寧に頭を下げる。
それに倣ってか沙鳥様たちも頭を下げる。

「いえいえ、こちらこそ」

わたくしも同様に頭を下げる。

「なんだよこの状況……」

夏哉が頭を下げながら言う。

「ほんと変な状況だね。さっさとご飯食べよ」

沙鳥様が言うのでわたくしたちは座り、各々弁当を食べ始める。

「夏哉～、食べたい」

「はいよ」

夏哉は弁当の中からミートボールを箸で掴み、そのままアンさんの口に運んだ。

アンさんは何回か咀嚼し、満面の笑顔になる。

「あ～、幸せ～」

「……なんかレトルトだから申し訳なくなる」

夏哉の言うことは分からなくはない。

あんな純粋な笑顔を見せられたら、手作りを作って食べさせてあげたくなる。

そんな朗らかとした思いとは裏腹に、わたくしの両隣の表情は険しくなる。

「アンちゃん理不尽……」

「？あ～ん？に間接キスって、差別だよ……」

「香苗、？あ～ん？と？アンさん？で掛けてますか？」

「そんなんじゃないよっ！」

「しょうがないだろ。いつ誰が来るか分かんないんだから」

「そうだそうだ。しょうがない」

そういうアンさんはいやらしい笑みを浮かべる。

「私がいるから見てるかもしれないし」

沙鳥様が最後の抵抗をするかのように拗ねながら言う。

「ちゃんと調べた」

「魔法使って監視してるかもしれない」

「私がそんなことに気づかないと思ったか？」

「うぅぅ……」

言い返せなくなった沙鳥様はそのまま項垂れてしまった。

「ふんっ、勝った」

アンさんが鼻を鳴らす。

「しょうがないだろ、こいつだって前まで一緒に食えなかったんだし」

「夏哉君、アンさんを贔屓目に見てる」

香苗も拗ねたように言う。

「だってよ、こいつ一人じゃ不便だろ。それにさ」

夏哉はアンさんを見る。

「こいつ超偉いし健気だし文句言わないし。もぅアンちゃん最高」

褒められて頬を緩ませているアンさんの頭を撫でる。

撫でられてくすぐったいのか気持ちいいのか、目を細めて頬を朱色に染めている。

「そういうのがずるいのっ！！」

「いや、沙鳥はともかくお前にはかなりやってると思うけど、そこんところ沙鳥ちゃんと真樹ちゃんはどう思います？」

「貴方がちゃん付けしないでくれません？虫酸が走ります」

「あ、俺初めて？虫酸が走る？って言葉聞いた」

「そんなことはどうでもいいですわよ」

「まぁそうだな。で、どう思います？」

「否定しませんわ」

「むしろ私がなでなでしたい」

「というわけだから、香苗ちゃんが？ひいきひいき？言っちゃいけません」

「えっと……はい」

香苗は渋々といった感じで引き下がった。

「香苗、穂菜ちゃんたちの仲が直ればこんなことは出来なくなるから、一緒に我慢しよ」

「うん……」

今ここに千佳音や快斗たちがいないのは、一週間前夕馬が穂菜に告白をしたからだ。

その他にも色々あるようで四人の間がギクシャクしてる。

だから屋上には四人しかいないし、アンさんも堂々とわたくしたちと会話が出来る。

「あ、夏哉。聞きたいことがあるんだけど」

何を思ったのか、アンさんが夏哉に訪ねる。

「何？」

「夏哉って今までに好きになった女っているのか？」

その質問には沙鳥様と香苗も興味を示したようで、顔をあげる。

「急になんだよ？」

「いや、ただ気になっただけだ。深い意味はないし、言いたくなかったら言わなくていいし」

「そういわれてもな……。ちょっと違うけど灯里とは仲良くなりたいって思ってたよ」

「なんで？」

空気悪くするなよ、と前置きをした。

「両親が仲良かったからな、俺も仲良くしたかったんだよ。ちっちゃい頃だから恋愛感情はなかったと思うけど」

「じゃあ初めて好きになったやつはいないのか？」

「いないよ～。アンはどうなのさ？分かんないけど俺より年上なんでしょ？」

「えっ、アンちゃんそうなの！？」

「まぁな。ここで言うと、２５７歳かな」

「に、二百っ！？」

沙鳥様が声をあらげた。

わたくしもそれには驚いた。

話を聞く限りは年上なんだろうとは思っていたが、まさかわたくしたちの十倍以上だとは思わなかった。

「アンさん。アンさん、ていうか魔族ってどのくらいの寿命なの？」

鼎の質問には皆興味があるようで、真剣に聞いている。

「えぇっと、向こうで１７８６ルイだから、だいたい８２０歳かな」

「じゃあ私たちで言うと三十一歳だよっ！」

「香苗計算早いですわね」

学力二位のわたくしすらそんなすぐには計算出来ない。

これも依代の力というわけですのね。

「じゃあアンちゃんって、私たちの倍生きてるんだな」

「実際は十倍って凄いな」

「だろ？」

「でもさ～、正直これから先心配だよな～」

「そこはしょうがないだろ。私だって理解してるつもりだ」

夏哉が遠くを見るように言うと、アンさんも諦めたように言う。

「ねぇなんの話？」

沙鳥様が二人に聞く。

その代わりとしてわたくしが答える。

「つまり寿命が違うのでわたくしたちが死んだらアンさんは一人になるということです」

「あ……そっか」

沙鳥様は気まずそうな表情を浮かべる。

それを払拭させるかのように明るくアンさんが言う。

「気にするなよ。お前たちが死んだら死んだで魔界に戻ってなんとか過ごすよ。忘れるつもりもない」

「はい、アンさん」

夏哉が手をあげた。

「なんだ？」

「俺ってもしかして死ぬまでお前を養わないといけない？」

「それはそうだろ？いきなりなんだ？」

夏哉の質問に、逆に驚いて聞き返してきたアンさん。

しょうがないとはいえ、アンさんは最早ニートですわね。

夏哉は諦めたように項垂れた。

「これから一生世話させていただきます」

「お、おお。よろしくな」

なんとも奇妙な口約束が交わされた。

「他の三人はいないのか？夏哉以外に好きになった男は」

「ちょっと待ちなさい、アンさん」

今とんでもないことを言われたような気がする。

「？夏哉以外に好きになった？？」

「そう言ったが？」

「それではまるでわたくしが夏哉のことが好きと言ってるみたいではありませんか」

「えっ？実際そうじゃないの？」

香苗は声、沙鳥様とアンさんは表情で驚きを示した。

えっ、わたくし本当にそんな目で見られてるんですの？

わたくしは矛先を夏哉に向ける。

「夏哉、皆に何か吹き込みました？」

「してねぇよ。つかそんなことしたら最低だろ俺。まだ答えてねぇんだし」

答えてない？

何を？

そんな言葉で思い出した。

一ヶ月前の言葉を。

「夏哉、聞きたいことがあるんですが」

わたくしは残り少しの弁当をゆっくりと置く。

「な、何？ま、真樹さん？」

「この前ははぐらかされましたのでここでしっかり聞いておきますわ」

「な、何をですか？」

「貴方この三人から告白されたそうですわね？」

「えと、なんで知ってるの？」

「今わたくしが質問してるのですが」

「す、すいません……」

「それで、どうなんですの？」

「されました……」

「その後貴方はなんと答えました？」

「まだ決められないから、待っててくださいと」

「へぇ、三人に告白されたのに先延ばしと、そういうことなんですのね？」

「その通りです」

「いいご身分ですわね、自分の都合で相手を三人も待たせるなど」

「面目ありません……」

「まぁこの際沙鳥様が告白したというのは目を瞑りましょう。しかし、勇気を出して言った告白に答えないでのうのうと生きているなんて最低ですわね」

「言い返す言葉もありません……」

「ねぇ沙鳥ちゃん、真樹ちゃん変わったと思わない？」

わたくしが夏哉を言い負かすと、いつのまにか後ろに下がっていた沙鳥様と香苗がこそこそと話していた。

「私も思った」

「何が変わったんですの？わたくしは今まで通りですが」

「だって一ヶ月前の真樹ちゃんだったら言葉で負かすんじゃなくて？殺す？って言うもん。ねっ？」

「うん。絶対話なんて聞かないで暴力で片付けるもん」

「……沙鳥様にはわたくしが暴力的に見えるんですの？」

「実際私にはびこる男子たちを千切っては投げ千切っては投げてたじゃん」

「……否定はしませんわ」

わたくしは目を逸らす。

そう言われては言い返す言葉もない。

「そんな真樹が言葉で負かすなんて。成長したね。なんかお祝いしないと」

「お、お祝いですの？」

どんなことをしてくれるのか。
その話が冗談だとしても期待をしてしまう。

「あ、じゃあ沙鳥が今日の放課後まで甘い言葉をかけてやるというのはどうだ？」

アンさんがそのような提案を出す。
……そんなことをされたらわたくし死にますわ。

「いや、さすがにそれは無理じゃないアンちゃん。別に出来るけどほんのちょっとしか出来ないじゃん」

「それが出来るんだよ。ちょっと待ってろ」

そういうとアンさんは宙に浮いてわたくしたちが見えないところに行ってしまった。

「なんだろうな」

夏哉が呟くとすぐに声が聞こえた。

「真樹～！」

「沙鳥様？」

聞こえた声は、どう聞いても聞き間違えようのない沙鳥様のものだった。
当然沙鳥様はそばにいる。
声のした方を見ると、沙鳥様がいた。

「「「「え、えええぇぇっ！？」」」」

わたくしたちは大声を出した。

わたくしは目を疑い、二人の沙鳥様を見比べる。

そんなことをしてる間に、宙に浮いている沙鳥様はそのままこちらに飛んできて、抱きついた。

「真樹～」

沙鳥様は頬擦りをしてくる。

「え、な、え？」

わたくしは戸惑うしかなかった。

第五話　《一章》計画実行（後書き）

アン&真樹「「明けましておめでとうございます」」

作者「いや、もう三が日すら過ぎたぞ」

ア「うるさい。それもこれもお前の投稿が遅いし、考えなしだからだろ？」

真「全くですわ」

作「それはほんと面目ない。そしてまたひとつ面目ないことが」

ア「なんだ？」

作「この話ね、二十章を予想してたんだけど、見立てだと十二話くらいになりそうかも……」

真「信じられませんわね」

作「なんで！？」

真「第四話でも六話で終わると言ってたのに五話ではありませんか」

作「返す言葉もありません」

ア「作者、この話の題名はなんだ？」

作「話変わったな」

ア「どうでもいいだろ。そうじゃなくて、全く計画関係ないだろ、この話」

作「黙秘します」

真「つまりそれが後に関わってくるというわけですわね」

作「黙秘します」

ア「最早それが答えと言っているようなものだな」

真「もしこの題名が全く関係なかったら殺りますわよ」

作「頑張ります……。あ、でも、話は戻るけどたぶん章数は二十いかないと思います。長編を望んだ人、たぶん第二話くらいの長さよりちょい長です」

ア「それじゃ、そろそろ終わるか。今年も『四人の魔法使い』と『その想いは変わりますか？』をよろしく」

真「感想待ってますわ」

第五話　《二章》幸せの在処

「お、お前、アンか？」

夏哉がわたくしに抱きついている沙鳥様を指差して言う。

「うん、そうだよ」

沙鳥様、もといアンさんが沙鳥様の声で頷く。

「魔法でこんなこと出来るの？」

沙鳥様がアンさんの体を触りながら、まるで鏡を見ているように言う。

本当にアンさんは沙鳥様と瓜二つで、違いが髪を縛るリボンひとつしかない。

制服すら同じ。

「いや、魔法というより魔族だからといった方が正確かもな」

「へぇ、すご～い。クオリティ高いね～」

感心したように呟く沙鳥様。

一方香苗はというと。

「……」

アンさんのある一点を見つめて、大きなため息をつく。

「香苗、落ち着こ。俺はあれで差別しないから」

「……ありがとう、夏哉君」

香苗の頭を撫でる夏哉。
悲しみの表情が和らぐ。

「ほら沙鳥、後ろから抱きついてあげな」

「なんか自分の声で呼ばれるのに違和感あるけど、分かった」

沙鳥様が立ち上がり、わたくしの後ろに抱きつき――ってこれはマズイ！
わたくし死にます！

沙鳥様の顔が左右に二つ。

沙鳥様特有のいい匂いがして頭がくらくらする。
それに前後から柔らかい温もりが――

「「真樹」」

両耳からささやくように沙鳥様の声が聞こえる。
こんな体験は初めてだ。

「「可愛いよ」」

「あ……あぁ……あぅぅ……」

わたくしは体の力が抜け、沙鳥様、いや、アンさんに寄り掛かってしまう。

「真樹大丈夫？」

心配そうに顔を覗かせるアンさん。

「顔真っ赤だよ？熱あるの？」

後ろにいる沙鳥様が手を伸ばし、暖かいそれを頬につけてわたくしの首を横に回す。

そしてあろうことか沙鳥様の顔が近づいてきて、額と額が触れた。

「え……な、ちょ」

「ちょっと熱いかな～」

「私もやらせて」

そう言ってアンさん、あれ？沙鳥様？どっちだっけ？

そんなことを思ってるとまた沙鳥様の顔が近づいてきた。

ピトッ。

「ん～、ほんとだ。熱あるかな」

ぎゅっ。

わたくしは沙鳥様の胸に埋まった。

「これで少しは楽になるかな」

「あ……あぅ……あ……」

「は～いそこまで」

もう何がなんだか分からなくなった時、夏哉の声が降ってきた。

「それ以上やったら真樹が死んじゃうから終了。早く離れなさい」

「「は～い」」

沙鳥様たちはわたくしから離れていく。

「真樹大丈夫か？」

「は、はひ……」

もうろれつが回らない。

わたくしはその場に伏せてしまった。

――――――――――

真樹はもう駄目らしい。

幸せだけを思いっきり詰め込んでも逆に地獄なんだな。

「アン、そろそろ戻れ」

「あぁ、無理」

なんですと？

「どういうこと？」

香苗も同じ疑問を思ったようで、アンに質問する。

「体の一部を変えるならすぐに他のものに変えられるけど、全身は一日以上経たないと変えられないんだ」

「つまりあれか？明日のこの時間まで沙鳥と同じ姿、同じ声ってことか？」

「あ、声なら変えられる。……これでいいか？」

確かにアンの声に戻った。

「なんか、これはこれでシュールだよね」

香苗がしみじみと呟く。

「そお？私は結構面白いけど」

沙鳥はアンの――自分の体をつつきながら言う。

「すご～い、私とおんなじ感触～」

「え、ほんと？私も触りたい」

香苗も四つん這いでアンに近づき、二人の二の腕辺りをつつく。

「あ、ほんと、同じだ～」

「夏哉触るか？」

「……遠慮しておきます」

アンの誘いを丁重に断り、携帯の時計を見る。

意外と時間が経っていて、もう次の授業まで十二分ほどしかない。

「次うちら体育だろ？そろそろ戻ろうぜ」

「あと何分？」

「十二分」

沙鳥の短い問いに、短く答えた。

「じゃあ早く戻ろっか。真樹、大丈夫？」

「え、えぇ……」

駄目そうだ。

「香苗、支えてあげられるか？」

「頑張ります……！」

「え、なんで？私やるよ？」

「アホ。沙鳥がやっちゃったら悪化するだろ」

今の状態の真樹にまた沙鳥が近づいたら、今度こそ死んでしまう。

俺は立つと同時に背筋を伸ばす。

三十分近く座っていたため、伸ばすと凄く気持ちいい。

香苗と沙鳥も立ち上がる。

が――

「うわっ？」

「うぅ……」

二人ともよろけた。

手を差し伸べようとしたがすぐに体勢を建て直したので、必要がなかった。

「大丈夫か？」

心配だったので聞いてみる。

「大丈夫大丈夫。ただの立ちくらみだよ」

「私もだから、気にしないで」

けどそこまでつらいようなものではなかったようなので安心した。

俺は香苗と真樹の弁当を持ってやると、香苗は真樹の前で手を差し伸べる。

「真樹ちゃん、立てる？」

「えぇ。す、すみません……」

真樹は香苗の手をしっかり握り反動をつけて立とうとするが、香苗は小さいし力もないので踏ん張れていない。
それを支えるようにアンが香苗の肩を押さえる。
そのお陰で香苗は倒れず、真樹もちゃんと立てた。

「香苗大丈夫か？」

「うん。ありがと、アン……さと、あ、アンさん」

「あ、カナ間違えた」

「だ、だっておんなじなんだもんっ」

香苗は失敗を指摘してきた沙鳥を睨み付ける。

「そんな睨み付けは全く怖くな……」

急に沙鳥の言葉が途切れた。

何事と思い、沙鳥の視線を追う。
香苗と真樹も同様にそちらに首を傾ける。

そこには、沙鳥に思いきり睨みを利かせた沙鳥がいた。

つまりアンだ。
正直かなり怖い。
あれが沙鳥の顔だとは思えない。
多分あんな顔、本人からは一生見れない。

「え、えぇっと、アンちゃん？私何かした？」

沙鳥が声を震わせながら言うと、アンは元の可愛らしい沙鳥の顔に戻った。

「いやいや、ただ単に香苗の睨みが利かないって言ったから代わりに利かしてやろうかと。これが本当の『虎の威を借る狐』だろ？」

「アンちゃんが沙鳥も知らないような言葉なんで知ってるんだよ」

「わぁたしだってそんくらい知ってるわいっ」

ぺしっと沙鳥に頭を叩かれた。

「いってぇな～」

「自業自得。バカにしすぎだよ」

「悪かったな」

俺たちは屋上を出て教室に戻った。

その途中、教室に戻る時に通る渡り廊下を歩いていたら、前方に夕馬が見えた。

夕馬に声をかけようとしたら、周りが目に入らなかったようで誰かとぶつかってしまった。

「あ、すいません」

その人は男で、学ランの襟についている学年章を見ると、三年生だった。

「いいよ、気にしなくて」

「力斗、早く行くぞ」

「ちょっと待って～」

俺にぶつかった力斗さんは小走りで走っていく。

「あ、夏哉。ども～」

俺に気づいた夕馬が挨拶しながらこちらに来る。

「おう。久し振り」

「……真樹さんどうしたの？」

いまだ香苗に支えられてる真樹を見ながら言う。

本人は恥ずかしく思ったのか、顔を逸らす。

「簡単に言えば、沙鳥にたくさんお世話されて、幸せすぎて死んだ」

「なるほど」

「それで、お前の方はどうなんだ？」

「……微妙」

「そうか。ま、なんか手伝ってほしかったら言え」

「ご安心を、もう手伝ってもらってるから」

そう言うと夕馬は沙鳥をちらっと見て、？じゃあね？と言葉を残して行ってしまった。

「沙鳥なんかしてたの？」

「教えな～い。約束したから」

多分夕馬に口止めされてるんだろう。
だから深くは聞かない。

「ならいいっか。ん～と……沙鳥、後六分」

「えっ！じゃあ急がないとっ！」

「ま、真樹ちゃん！歩けるっ？」

「大丈夫ですわ」

そうは言うが、少しおぼつかない。
どんだけ沙鳥の影響力強いんだよ。

「俺ついていこうか？」

「夏哉も着替えなきゃいけないでしょうに」

「実は中に着てんだよ」

「いるよね～、こういう男子」

「いるいる。すごいおおちゃくして家から着っぱなしで」

沙鳥が思い出したように言うと、香苗もそれに付け加える。

「ほれ、そんなことよりさっさと行け」

シッシッと手で追い払うようにする。

二人は？は～い？と子供のように小走りで教室に向かった。

「なぁ真樹、そういえば聞いてなかったんだけど」

今まで気を使ってたのか、屋上から一言も発してなかったアンが真樹に話しかける。

「どうしました？」

「結局私はどうする？お望みなら傍にいるが」

「……申し訳ありません。そうしてほしいのは山々なのですが、そんなことをされてしまっては授業に全く集中出来なくなりますわ」

「そっか。ならしょうがないな。希望があったら言ってくれ」

「その前に沙鳥の許可貰えよ」

「まぁ沙鳥なら？時間があるなら私もやる～！？とか言ってきそうだな」

アンは沙鳥の声に変えながら予想する。
それには全く疑いの余地がないな。

「確かに。真樹も、言うなら覚悟しとけよ」

「覚えておきますわ。……命に関わりますし」

冗談抜きでそうだな。

ふと、真樹が淋しげな顔をした。

「どうした？そこまで不安か？」

「あ、いえ。そういうわけではなく。幸せだな～と」

「矛盾してるぞ。幸せなら幸せそうな顔をするものだろ」

アンが不思議そうな顔をする。
俺は……分からなくはないかもしれない。
俺も昔ちょっとした幸せがあったとき、いつまでこんな幸せが続くんだろうと思ったことがある。
違うかもしれないけど、そんなことを思ってるんだろう。

「えぇ、そうなんですけど……。いつか消えてしまうんではないかなと思ってしまい」

やっぱり同じことを思っていた。

「いや、そんな長続きする幸せなんて少ないだろ。だから幸せになるために人は色々行動するんだろ？」

「「……」」

俺は、いや、俺と真樹は目を見開いてアンを見た。

「ん、どうした？私変なこと言ったか？」

「いや、そうじゃなくて。悟ってるな～って」

「え、普通じゃないのか？」

「え、ええ。確かに普通なのですが……。その、言ったら差別だと思われてしまいますが、まさか人間じゃないアンさんに言われるとは思わなくて」

「む、失礼な。人間じゃなくてもそうは思うぞ。何年生きてると思ってるんだ」

「お見それしました」

軽く頭を下げる。

そういや俺たちより何倍も歳上だったんだ。

「申し訳ありません」

真樹も小さく頭を下げた。

「いーよ。それより、そろそろ夏哉も急いだ方がいいんじゃないか？」

それを聞いて、俺は周りを見ると体操服姿の生徒がちらほらと。

「うわ、流石につらいかも。わり、真樹。じゃあな」

俺とアンは真樹を置いて教室に戻って体操服になった。

体育の授業、俺は一番最後に外についた。

「夏哉く～ん」

香苗が手を振る。

特に列に並ぶ必要がなかったので香苗と沙鳥のもとへ向かう。

「真樹ちゃん平気だった？」

「平気平気。普通に戻ってったよ」

「よかった～。もしあのまま具合が悪くなってたら目覚め悪かったし」

「そうだな。少しやり過ぎた感はあったし」

沙鳥はほっと胸を撫で下ろし、アンも反省してる。

「それより、香苗平気か？今日確か持久走だろ？」

「うん……。多分死んじゃう」

「お前のそれはリアルだからな。沙鳥どうだ？女子は２０００mだっけ？」

「うん。だいたい十分かからないくらいかな」

はっえ～。

男より早いんじゃないのか？

「夏哉は３０００だよね？どのくらい？」

「十四分を目指すよ」

「夏哉の場合はいかに力を押さえるかという問題だからな。気を付けろよ」

アンが俺に一番の問題点を指摘してきた。

言われるまでもないけど、これが案外難しいんだよな。

「頑張りますよ。香苗は……完走頑張ろうな」

「それすら不安なんだけど……」

「無理しちゃダメだよ。限界だったら歩いていいんだし。最悪先生に言お」

「うんっ。私頑張る」

そう意気込むのはよかったんだけど、結果香苗は完走出来ずに保健室に送られてしまった。

沙鳥も、きちんと完走は出来たんだけどタイムがいつもより激減した十五分。

具合でも悪いのか、そう思いながら翌日、香苗と沙鳥は熱を出して学校を欠席した。

第五話　《二章》幸せの在処（後書き）

夏哉「熱だしちゃったね、沙鳥ちゃん」

沙鳥「熱だしちゃったよ、夏哉くん」

作者「どうしよう、そろそろ投稿が二日に一回とか無理になってきた」

沙「今までがおかしかった、というか暇すぎたんだよ」

作「まぁ冬休みだったからな」

夏「なんか、のんびりしてるな。今回も前の話も」

作「……正直これは無理矢理なんだよね。どうにかして話数を稼ごうとしたら、特になんにもない話になっちゃったけど、ようやく話が進んでいくよ。……ほんとはもうちょい稼ぎたかったんだけどね」

沙「って、そんなことはどうでもいいの。作者！」

作「ん？」

沙「あんたこの小説のタグに『ガールズラブ』入れたでしょ？」

作「だってお前、流石に今回はアウトだと思う。エロくはないけどアウトだと思う」

夏「ま～、アウトだな。今まではなんとかごまかしでなんとかなっ

たし、沙鳥の好きなものに幼女が入ったのはボケで行けたけど今回は無理がある」

沙「ひどいよ～、この小説健全をコンセプトにしてたのに……」

作「時代の流れというやつさ」

夏「そんな時流れてないけどな」

沙「む～」

夏「そういや俺第五話初めての一人称だな。まぁ真樹中心って言ってたけど」

作「ん～、これからはどうかな～？一、二回はまた真樹が一人称やると思うけど、基本は夏哉に戻るよ」

夏「まぁどっちでもいいんだけどな」

作「あ、なぁなぁ、そんなことよりさ～！」

沙「なにさ？」

作「この小説の主要メンバーってさ、みんな名前の頭文字がア段なんだよっ！」

夏「どーでもいーーーー」

沙「うん。ほんとにどうでもいいね」

作「どうでもいいけどさ、なんか嬉しくね？こういう共通点があったら」

夏＆amp;沙「「別に」」

作「あっそうですかい」

夏「もうやることないな」

沙「そうだね～」

作「あ、そうだ。だったらおまけ設定ってことで、順位発表でもするか」

夏「……テストのか？」

作「そうそう。実は体育祭が終わって四日後にテストあったんだよね。因みに現在の夏哉たちの授業はテスト返しをしています。ではどうぞ」

香苗：１／３８７
真樹：２／３８７
快斗：３／３８７
千佳音：７／３８７
灯里：５９／３８７
夏哉：１４１／３８７
穂菜：１７４／３８７
夕馬：２９９／３８７
沙鳥：３７２／３８７

夏「うわ～、トップスリーが知り合いって」

沙「千佳音も頭よかったんだ～。すごいすごい」

作「まぁこれで行稼ぎにはなったからいいっしょ」

夏「だな。じゃ、感想待ってます」

沙「待ったね～」

第五話　《三章》三人だけの雑談

お食事中、ガラッとした屋上で三人が同じようなことを呟いた。

「三人だな」

「三人ですわね」

「三人だな」

今日は香苗と沙鳥が熱で欠席。
初めてアンと二人だけで登校した。

沙鳥は知らないが、香苗は三十八度二分を出していた。
咳こそは出ていないけど汗が凄かった。
一応お粥作っておいたけど食べてるかな？

「アンさん、魔法でどうにかならないものですか？」

「ん～、どうだろうな。この世界の？風邪？という症状は私の世界にはないからな。やり方が分からない」

つまり賭けみたいなようなものか。

「じゃあしょうがないですわね」

真樹は覇気がなく、どんよりしながら弁当をつける。

「そんな気にしなくても平気だろ？お前んところの医者がついてる

んだし」

真樹は、香苗と沙鳥が心配ということで早乙女総合病院の人に頼んで二人の家で看病してもらっている。

「まぁそうなのですが……」

頷くものの、やはり心配は拭えないようだ。

「なぁ、風邪っていうのは体力とか免疫力がなくなると起きるんだよな？」

「えぇ、簡単に言えば」

「じゃあもしかしたら依代だから相当疲労が溜まってたってことなのか？」

「いや、なんで依代？」

アンの仮定に俺は疑問をぶつけた。

はっきり言って香苗たちは一ヶ月前の神を卸して以来そこまでハードなことはしていない。

もちろん俺の見た限りは、だが。

他の魔族が二人を襲ったって訳もないし。

それにもしその一ヶ月前のことを言っているならそれこそ今さらって話になる。

「だって神、つまり世界を体のなかに入れるんだぞ？器だとしても相当の負担があるだろう。あいつらのことだ、多少の疲れがあっても無理しそうだし、それが溜まりに溜まって限界迎えたという可能

性もあるだろ？」

「まぁ、それはありそうだな」

アンの言う通り、多少の疲れなら俺らが心配しないように笑ってごまかしそうだな。

「あの、話が変わるんですがいいですか？」

小さくてをあげ、質問していいか俺らに促す。

「はいどうぞ」

「依代って地球に二人いるんですよね？」

「そうだな」

「だったらアンさんの世界にもいるんですの？」

俺はアンを見る。

アンは瞳を閉じ、はっきりと告げた。

「分からん」

「分からんって……」

「でも、もしいなかったらこちらが不利というか、こちらの神が向こうに行けませんわよね？」

「ていうかこの世界に本当に神なんているのかよ？ピンチの時も来なかったし」

「それにこの世界で言う？神？は空想上の存在ですし」

「そう言えばお前の世界の神ってどういう風に生活してんの？」

「だー！一斉に聞くなっ！混乱するだろ！」

口早に問う俺たちについに怒りが爆発したアンは叫んだ。

「はいはい。で、どうなの？」

「だから知らんって。少なくとも私の世界で依代は確認されてない。で、ひとつの世界には必ず一人の神がいる。神が世界を作るからな」

「出てこなかった理由は？」

「私は神じゃないから知らないが、必要ないと思ったんじゃないのか？」

「必要ないって……」

仮にも異世界の神が二人も来たのに必要ないのかよ。

信用されてるのかめんどくさがりやなのか。

「ではアンさんの世界の神様は普段どのような？」

「簡単に言えば奉られてるな。高さで言うと……全力で三分だから……」

真樹の質問にアンは何故かぶつぶつ呟き始めた。
高さってなんだ？

「だいたいここで言う１．５？ぐらいの高さの建物の一番上に座ってて――」

「「ちょっと待って」」

偶然にも真樹と揃った言葉でアンの台詞を遮った。

「なんだ？」

「いやいやいや、？なんだ？？じゃなくてさ。え、マジ？そんなでっけぇビルあんの？」

「ビルじゃなくて塔だけどな」

「いや、塔だとしてもそこまで高い建造物なん――あ、そう言えば魔族でしたわね」

「あ、でも高いのはそれひとつだけで、後はだいたい夏哉の家の半分くらいの高さと広さだぞ」

ということは一階建ての１ＬＤＫってところか。

「それって一人暮らし用で？」

「いいや、基本三人だな」

「狭っ！それは流石に狭すぎではありませんの！？」

「私たちは無駄を嫌うからな」

「だったらさ、そんなでかい建物要らなくない？神は頂上にいないとダメとかあるのか？」

「そういうわけではない。アルクシア様は世界を見通すためにわざわざ高いところで暮らしてるんだ」

「見通すって、無理だろそれ。魔法使うのか？」

「は？魔法使う必要がないだろ。アルクシア様は神だから自分の世界に何があって誰がどこにいるというのが意識ひとつで分かると言ってたからな。高いところにいるのは、他の魔族たちに会わせないようにするためだ」

「ごめん、見通すの意味を間違えてた。で、なんで会わせないんだ？」

「沙鳥を見てれば分かるだろ？アルクシア様が町を歩けば人がごった返しになって最悪死人が出る」

一度外に出ると死人が生まれるって……。

俺はそんな世界を想像して、改めて魔界への認識を変えた。

「なるほど、流石神と言ったところでしょうか」

「……まぁ、凄いっちゃ凄いけどな」

真樹の言葉にどう答えていいか分からなかった。

「ところで真樹、一つ聞きたいことがあるんだが」

「なんですの？」

アンが真樹に尋ねると、それを真樹は促した。

「なんでここで弁当を食べてるんだ？」

魔族の少女がわけ分からない質問をぶつけられたので桜色の髪を持ったお嬢様はキョトンとした表情を浮かべている。

「何故、とは？」

「だって真樹は沙鳥がいたからここで食べてたんだろ？もし夏哉のことが好きでもなんでもないなら普通ここに来なくないか？」

真樹に不信の目を向けるアン。

なるほどそういう意味だったか。

普通だったら友達だしいつもここで食べてるから、という回答もできるだろうが、真樹は何故か慌ててしまった。

「え、え、な、わたくしは夏哉のことなんか！」

「……真樹さん、俺が言うことじゃないんでしょうが、それじゃあ照れ隠しって思われちゃいますよ」

「う、うるさい！別に夏哉のことなんか好きなんですからねっ！！」

「うん、まあ分かっ――て、エエェェェッ!?好きなんすか!?」

一瞬、真樹は何がなんだか分からないようだが、自分の言葉を思いだし――顔を真っ赤にした。

「ちちち、違いますわ!!何言い出すんですの夏哉!!」

「俺なんにも言ってねぇ――――!!」

「セクハラ!変態!!この火照りをどうにかしなさいっ!!」

「どこをどうやったらその結論が出るんだ!?」

「夏哉、私はお前のこと好きだ。愛してると言っても過言ではない。変態だろうがなんだろうがそれを優しく包み込んでやる」

「勝手に変態扱いするなッ!!」

「男はストーカーの皮を被った変態って聞いたことあるぞ?」

「それ皮被る意味ないだろうが!!」

「貴方ストーカーもしてますのっ!?最低ですわ!!」

「してねぇ!!てかお前はそんな俺に告白したんだぞ!?」

「しし、してませんわ!!べ、別にあんたのことなんて好きでもなんでもないんだからねっ!!」

「完全ツンデレ!?」

「す、好きじゃないんだからさっさと屋上から飛び降りなさいっ！！」

「なんで死ななきゃいけないんだよ！？もしかしてヤンデレか！？いやデレがない！」

「怖いならわたくしが付き添いますからっ」

「心中！？」

「もうやめてくださいまし！」

「そりゃ俺の台詞じゃいっ！」

ハァハァと思い切り肩を揺らす。
そういや息切らしたの久しぶりかもしれない。

「それで、結局どうなんだ？」

アンは真樹の目を見る。
見られた真樹は少し赤く染めた顔をアンに向ける。

「どう、とは？」

「告白のことだ。真樹は四人目に入るのか？」

「は、入りませんわよ！！」

「じゃあ嫌いなんだな？」

「いや、嫌いではありませんが……」

「じゃあ好きなんだな？」

「まぁ、好きと言えば好きですが……」

ちらっとこちらを見てくる真樹。

俺は小さく手を挙げて答える。

真樹の言いたいことは分かる。

？好き？と言ったがその？好き？は恋愛感情ではなく交友的な方だろう。

しかしアンはそうではなかった。

「はぁ、やっぱり真樹も恋敵（ライバル）になるのか」

ため息をつきながら言うアンに、真樹が激昂する。

「ですからそういうのではありませんっ！！」

「アーン、そろそろからかうのやめなさい」

「は？私からかってないが？」

もしかして、素で言ってたのかよ。

少し首を傾けて真樹を見る。

すると真樹と目が会った。

「あぁ！今見つめあってたな！？」

それをめざとく見付けたアンが咎め立てた。

「違う。呆れてたんだよ。なぁ？」

「呆れたと言うか冗談が効かないと言うか」

「どういうことだよ～？」

何を言われてるのか分からないようで、アンは拗ねたように口を開く。

「つまり夏哉は友人であって、恋愛感情は全くの皆無ということですわ」

「そうなのか？」

アンがこちらを見る。

「そうなんだ」

しかしそれでは納得できないようで、

「……でも、真樹にとって夏哉は一番仲のいい男なんだろ？」

「それは事実ですわ」

「なら付き合う可能性があるのは夏哉じゃないか」

「いやいや、確かに仲は良い方だと思いますが、彼氏候補ではないのでそれ以前ですわ」

「なら夏哉は彼氏候補の候補なんだろ？」

「違います。彼氏候補の候補でもありませんわ」

「なら彼氏候補の候補のこう――」

「いつまで続くんだ――――！！」

我慢出来なくなってツッコんでしまった。
もし止めなければいつ止まるか分かったもんじゃない。

「アンはあれか？真樹に俺を好きになってほしいのか？」

冗談混じりに言ったつもりが、アンの口から意外な答えが返ってきた。

「だってなんか真樹だけ仲間外れって感じかするから」

あぁ、なるほど。
アンはアンなりに真樹のこと考えてたのか。

最近真樹に見られるようになって、話すようになって、一緒に笑い

ようになって。
そんな真樹と少しでも共通点を持ちたくて、幸福を分かちたくて。
きっと自分が、俺を好きになるのが幸せだから真樹にも感じさせてあげたいと思ったんだろう。

真樹を見る。
なんの偶然か、また視線があった。
同じことを考えたのかもしれない。

「真樹さん、アンさんがああ言ってますがどうします？」

「……非常に断りづらいのですが」

「？ＮＯ？と言える人間でもいいんじゃないのか？」

「ではＮＯ」

「即決かい」

「そりゃそうですわ。誰が貴方なんかと付き合いますか」

「おいちょっと、話が全く分からないんだが。勝手に話を進めるな」

置いてきぼりにされたアンが不服を言う。

「簡単に言えば、アンさんは優しい人、ということですわ」

「な、なんでそうなるんだ？」

本人には自覚がないご様子。

「なんでと言われましても、人のことを心配出来るのですから。ねぇ」

「そういうことだ。素直に喜んでおけ」

ポンとアンの頭の上に手を置いた。

「い、意味が分からない……」

それでもまだ納得できないようた。

「ま、少なくとも、真樹が俺のこと好きにならなくても仲間はずれにはならないってことだ」

「そうなのか？」

「おぉそうだ。もし香苗と沙鳥が仲間外れとか言ったら、そいつらは最早香苗と沙鳥じゃないからデコピンを食らわせておけ」

「うん、分かった」

「はいよろしい」

キーンコーンカーンコーン

「お、じゃあ戻るか」

「そうですわね」

俺たちは弁当をしまい、屋上から出た。

「あ、そだ。お見舞いのことなんだけどさ、真樹行くっしょ？」

「当然ですわ」

「じゃあ一日に二ヶ所行くって言うのも時間掛かるから、お前とアンは沙鳥、俺は香苗。ＯＫ？」

「なんで私は真樹となんだ？」

夏哉と一緒にいたい～、と駄々をこねるアン。

「だって沙鳥ん家ちょっと遠かっただろ？魔法の限界範囲が越しちゃうかと思い。いちいち幻術かけるの面倒じゃん？」

「まぁ、一理あるな」

渋々頷くアン。

最悪変質者に会ったらなんとかしてくれるだろうし。

「真樹もいいっしょ？」

「えぇ。構いませんわ」

真樹に確認をとると、俺はお見舞いに何がいいかなと考え始めた。

第五話　《三章》三人だけの雑談（後書き）

香苗「うぅぅ……、今回全く話に参加できなかったよ～」

真樹「風邪引いてしまいましたので、仕方ないですわよ」

作者「いや～実はね、今回香苗出そうと思ってたんだよ」

香「ほ、ほんとっ！？」

作「香苗のお見舞いってことで。でも予想以上に真樹たちの話が膨らんでな。話を増やしたい俺にとっては嬉しい誤算だったよ」

香「真樹ちゃん」

真「なんですの？」

香「ついにツンデレになっちゃったね」

真「はぁ？」

作「まぁなったな」

真「へ……あ、あれは違いますわっ！」

香「私たちの前じゃ普通なのに、夏哉君と二人きりになるとツンデレるんだ」

真「ほ、本当にそういうのではありませんわ！！」

作「アンもいたんだけどな……」

香「つまり沙鳥ちゃんの前ではキチンとしてて、途端夏哉君と二人きりになったら甘える。不倫だよ！！」

真「どこがですか！！夏哉誰とも付き合ってないでしょうに！！」

香「将来絶対なるよ。正確に言えば四年と三ヶ月後に絶対！」

真「なんでそんなに詳しいんですの！？」

作「うわ～香苗憂さ晴らしてるな～……」

香「不倫は文化とか言っちゃダメだよ」

真「誰が言いますか！！」

作「え～、この二人は置いといて、次回予告でもしま～す。次は香苗のお見舞いです。もしかしたら沙鳥のお見舞いもやるかもしれないけど。でもこれだけは言えます。次の投稿は一週間以内には無理です！スピンオフの方では言った（はず）んですが、今画力をあげるために漫画の模写してるんです。投稿はやめないんで待っていてくださいね」

香「ねぇ作者、私次絶対出るんだよね？」

作「あぁ。二人きりのお前視点だよ」

香「やった～！！」

作「ま、そんな素直には喜べないだろうけどな」

香「へ？」

真「どういうことですの？」

作「そろそろシリアスになってくるって話。ちょっと内容は重いかな？多分ギャグ的なのを入れられるとしたら次だけだと思うな。その次は、第四話次第だな」

香「じゃあ今までみたいな屋上での雑談だけじゃないんだね？」

作「はい。流石に今までのは適当すぎました……」

真「では、これで終了します。感想待ってますわ」

第五話　《四章》分からない心

ピピピッピピピッ

脇に挟んでいる体温計が鳴った。
私はパジャマ服の襟から手を入れ、体温計を取り出す。

「お加減はどうですか？」

電子音を聞いて、キッチンから戻ってきた弓太刀（ゆみたち）さんが声を掛けてきた。
弓太刀さんは真樹ちゃんのところのナースさんで、上から目線で言っちゃうと凄い有能な人だ。
なんと言っても気を利かせてくれる。
喉が乾いた時はすぐに用意してくれるし、小腹が減ってもすぐに食べさせてくれる。
汗が気持ち悪いな～って思ってたら『お身体拭きましょうか？』と尋ねてきた。
最早心が読まれてるんじゃないかって思ってしまうほどだ。

私は手に持った体温計を見て報告する。

「三十七度五分。変わらないですね」

朝から、そこまでの変化は見られない。

「気分の方はどうですか？軽めのご夕食は作りましたが」

「あ、全然大丈夫ですけど、間食のせいでまだ空いてません……」

あはは、と苦笑する。

弓太刀さんは見た目二十代後半――本当の年齢は教えてくれなかった――で、敬語を使うのもあり？しっかりした年上お姉さん？という印象を与えてくる。

それに気さくな雰囲気も持ち合わせているので、一回りくらい違う年齢でも気軽に声を掛けられる。

「大丈夫ですよ。最悪今日食べなくても日持ちするように作りましたから」

「ありがとうございます」

弓太刀さんにお礼を言ったところで、携帯が鳴った。

私は起き上がり、携帯を取る。

「起き上がって大丈夫ですか？」

「はい」

二つ折りの携帯を開いてディスプレイを見ると、夏哉君の名前が出ていた。

「もしもし？」

『おう香苗、大丈夫か？』

「うん」

『今からお見舞い行こうとしてんだけど、大丈夫か？』

「いいよ」

『……』

何故か黙ってしまった。

「何？」

『俺、なんかしました？』

はひ？

なんでそうなるんだろう？

「どうして？」

『いや、なんかいつもより素っ気ない返事だから、お粥不味かったのかと思って』

「そんなこと……」

否定しようとして、止まった。

そういえば、夏哉君がお見舞いしに来てくれるって言ってるのに、全く嬉しくない。

いや、嬉しいは嬉しいけど、そこまで嬉しいとは思えない。

なんで？

熱のせいかな？

『香苗？』

心配そうな声が聞こえて、我に帰った。

「ううん、怒ってないよ。多分熱のせいかも」

『はぁ、よかった。お粥、食えた？』

「うん。美味しかったよ」

『ならよかった。じゃあすぐ行くから』

「分かった」

ゴンゴンゴン

『ゴンゴンゴン』

私の部屋の玄関と、ほんの少し遅れて携帯から同じような音が聞こえた。

「早いよ夏哉君……。あ、弓太刀さん良いですよ、知り合いなんで」

マイク部分を手で押さえ、中腰になっている弓太刀さんを呼び止める。

私の言葉を聞いた弓太刀さんは腰を下ろした。

「夏哉君？開いてるからいいよ」

『おう』

一言だけ言って電話を切った。

「お邪魔しま～す」

ドアを開く音の後、夏哉君の声が聞こえた。

「彼氏の登場ですか。ではお邪魔しますね」

「何言ってるんですか。まだそんなんじゃありません」

「まだ、ね。頑張ってください」

外で待ってます、と言って玄関まで歩いていった。
そこで出会った夏哉君と一言二言話して、外に出た。

ってあれ？
弓太刀さんにからかわれたのに、なんとも思わなかったな。
顔も熱くなってないし。

自分の頬に手を当てる。
あ、私の手冷たい。
気持ち良いな。

「お～す、だいじょ――何うっとりしてるんだ？」

「へ？」

声のする方を見ると、制服姿の夏哉君がビニール袋片手に立ちすくんでいた。

「あ、えっと……なんでもない」

「そ、そうか」

夏哉君は私のそばまで来て、弓太刀さんが座っていた座布団に座った。

「気分はどうだ？」

「熱は変わらないけど、大分楽になったよ」

「そっか。ま、横になってろよ」

「うん」

私は勧められるがままに横になった。

「あれ？アンちゃんは？」

首を回してみるが見えない。

「沙鳥の方を真樹と一緒に行ってもらってる」

「ふうん」

「？ふうん？て。なんかないの？」

「いや、特には」

「あのさ、自意識過剰って思われるかもしれないけどさ……」

何故か言いにくそうにする夏哉君。

「こう、二人きりになったからもうちょっと喜ばれるかな～って思ってたんだけど……」

「あ、そういえば二人きりだね」

言われて気付いた。

そうだよ。

今邪魔する人、って言ったら失礼だけど、沙鳥ちゃんもアンちゃんも真樹ちゃんもいないんだ。

密室に二人きり。

でも。

全然心が踊らない。

嬉しいとは思わない。

ホントに熱でおかしくなったみたいだ。

「ごめんね、熱でダメみたい」

「あ、そうだよな。わりぃな、変な風に期待して」

夏哉君は頭撫でてきたけど、あんまり気持ち良くない。

「私こそ、調子悪くてごめんね。……それは？」

袋を見て聞く。

夏哉君は袋の中に手を入れる。

「リンゴとバナナ。もっといいの持ってこようとしたんだけど、俺お見舞いなんて初めてだから何持ってきたらいいか分かんなくてな」

「奇遇だね。私もお見舞いされるのは初めてだよ」

「あ、そうなの？それで、これ買ってきたけど食欲ある？」

「夏哉君で聞いてきた意味ではあるけど、今は空いてないよ」

「つまり食べて戻すことはないけど腹は減ってないってことか」

「うん」

私は短く答えた。

夏哉君は何か思うことがあるのか、少し間を開けて、話題を変えた。

「汗かいてないか？この時期に布団二枚は流石に暑いだろ」

そう言って夏哉君は外側にある毛布を一枚掴んで呟く。

確かに、弓太刀さんに三時間前に拭いてもらったけどもうかいてしまった。

「うん。ちょっと」

夏哉君がニヤッと笑う。

「拭いてやろっか」

「……」

私は無言で夏哉君を見つめ、一言。

「夏哉君のえっち。最低」

言った。

言ってしまった。

発言してから気付いた。

私はとんでもないことを言ってしまった。

なんでこんなまたとない機会を棒に振ってしまったんだろう。

汗臭いから？

いや、それを消すために拭いてくれるんだから本末転倒だ。

熱を出しておかしくなってるから？

いや、よくよく考えてみたらそれもおかしい。

たかが七度五分で意識は朦朧としない。

前に出した八度八分でも普通に喋れたし特におかしなことはなかっ

た。

二人きりになって照れてるから？
それにしては頭は冷静だし、顔も赤くなってる自覚はない。
……まぁこれは熱が出てるからかもしれないけど。

考えれば考えるほど訳が分からない。
私が悩んでいると、先に夏哉君が声を出した。

「ごめん。調子に乗りすぎた」

夏哉君は頭を下げた。

「ち、違！！ごめん夏哉君！拭いて！？」

それに少し罪悪感を覚え、慌ててお願いした。

「いやいやいや待て！俺はお前が慌ててるところを見たかっただけだから本当にやったらお前嫌だろ！？」

夏哉君も、慌てて私の言葉を拒否した。
なんで自分で言ったのに自分で拒否するんだろう。

「……と、アンが心配してたぞ。無茶してたんじゃないかって」

強引に話を変える夏哉君。
私もさっきの話しに食い下がっても意味がないので追求はしない。

「無茶って？」

「お前メルティウム体の中に入れたっしょ？その時の疲れが溜まりに溜まって、昨日倒れたんじゃないかって」

「いや、そんなことないよ。疲れなんて溜まってないし」

「そっか。ならよかった。バナナとか、冷蔵庫に入れとくか？それとも今食う？」

「いらない」

「ん、りょーかい」

夏哉君は立ち上がり、キッチンにある備え付けの小さな冷蔵庫を開けて買ったものを入れた。

そしてすぐに私のもとに戻ってきた。

夏哉君は私のおでこに手を当てた。

「ん～熱はなさそうだな」

「……私熱は変わらないって言ったよね？」

私は上半身を起こしながら言う。

「……なぁ香苗。お前いつもよりからいぞ。本当に大丈夫――」

「大丈夫って言ってるでしょ！！」

私の中で何かが弾けた。

心に思い付いたことをそのまま叫んだ。

「何？なんでそんなにしつこく私のことを聞いてくるの？」

「か、かな――」

「いい加減にして！しつこくまとわりつかないで！！」

「ちょっ、お、落ち着け！落ち着け香苗！」

夏哉君が私の肩に手を置く。

「いやっ！」

その瞬間、体が反応して夏哉君を思いっきり突き飛ばした。

「うっ！」

夏哉君は床に頭をぶつけ呻き声をあげる。

そこで意識を取り戻した。

「夏哉君大丈夫！？」

私は布団から出て、重たい体を無理矢理動かして夏哉君の元へ向かった。

夏哉君はぶつけた頭をさすりながら起き上がる。

私は確信した。

私はおかしい。

しかしそんなことよりも夏哉君だ。

「あ、あぁ、大丈夫だ」

「ごめんなさい。本当にごめんなさい……」

私は項垂れながら謝った。

「香苗……」

夏哉君は私の頭に手をのせようとした。
頭に手が触れた瞬間、私は言葉で遮った。

「お願い」

その言葉で、ほんの少し頭にあった感触は消えた。

「夏哉君お願い。今日は帰ってくれないかな。私今変なの。このままじゃ絶対夏哉君傷つけちゃう」

「俺は構わないなよ」

「私が嫌なの」

「……分かった」

夏哉君は立ち上がり、私から離れていった。

「なんかあったら遠慮しないですぐ言えよ?」

「うん、ありがと」

夏哉君とは目を合わせずにお礼を言った。

夏哉君が出ていった後、入れ違いで弓太刀さんが入ってきた。

「大丈夫ですか？」

「はい。……あの、出来れば一人になりたくて」

「……分かりました。花街さんのご様子も大丈夫そうなので、おいとまさせていただきます。念のため明日の朝、学校前にもお邪魔させていただきますがよろしいですか？」

「はい。お願いします」

「それでは」

弓太刀さんは自分の荷物を持って私の部屋から去っていった。

私は膝を抱えてうずくまる。

なんで？

どうして？

どうして寂しくないの？

どうして涙が出ないの？

―――――――――

俺は自分の部屋に戻ると、ずっと香苗のことを考えていた。

あれは絶対おかしい。
香苗があんなことを言う筈がない。
確かに、俺の悪ふざけが過ぎたんだと思う。
それにしても、だ。
あそこまで反発してくるか？

それに一番の疑問。

香苗が一度も笑わなかった。

あの香苗が、だ。
いつも愛想笑いくらいはする香苗がそれすらもしなかった。

なんだ？
熱のせいか？
でも熱程度でそこまでおかしくなるか？

全然分からなかった。

「夏哉」

自分の名前が呼ばれたので振り返る。
アンが浮いていた。

「お帰り。沙鳥どうだった？」

「まぁ、元気、だった」

何故か言葉の歯切れが悪かった。
それにいつもより暗かった。

「何かあった？」

「あった、って言うか……沙鳥が変だった」

「変って？」

「なんていうか……そう、夏哉に関心がなかった」

自分の中でしっくり来る言葉を見つけたようで、さっきよりいくぶん声が明るくなった。
でも、言葉の意味がよく分からなかった。

「どう言うこと？」

「私と真樹が沙鳥のところに行っても沙鳥は夏哉の話をしてこないし、今香苗と二人きりだと言っても？ふぅん？で終わったし。もう、とにかく変だった」

待て、と自分に言い聞かせて少し考える。
それは香苗にも当てはまるんじゃないか？
俺はアンにさっき香苗とあったことを話した。
アンは目を見開く。
「それ本当に香苗か？」
信じられないんだろう。
角言う俺も信じられなかった。
「でも、事実だ」
「二人が同時に熱を出して、同時に夏哉に関心がなくなる。偶然にしては出来すぎてないか？」
「だよな？魔法絡みって考えた方が妥当か？」
「待て。それなら私が気づく筈だ」
「仮にだ」
俺はアンの前に指を一本立てる。
「魔法を使ったのが、授業中だったとしたら？生徒四十……あ、二クラスだから八十か。とにかくこんな人数が同時に魔法を使うんだ。誰がどういう魔法を使うとか判別出来るか？」

「いや、無理だが……いやでも、だ。その時に誰が魔法を使ったとして、それを魅了（チャーム）とか幻術と仮定したとすると、なんらかの魔法の痕跡があの二人から出る筈なんだ。実際私は今真樹の居場所が分かる」

「チッ。じゃあ魔法じゃないか……」

「でも、それだと逆におかしいんだろ？この世界の？科学？だっけ？それで人の心を操れるのか？」

「……詳しいことは分からないけど、無理だと思う。催眠術っていう一種の暗示はあるけど、それは時間が掛かるし」

「打つ手なし、か……」

「明日さ、今度お前行ってきてくんねぇか？香苗も自分がおかしいって自覚はあるみたいで、俺に近づきたくないって言ってたから」

「分かった」

俺はパンッと手を叩く。

「んじゃ今日は取りあえず飯食うか」

「そうだな」

俺は料理を作り、まぁアンと色々やって寝た。

第五話　《四章》分からない心（後書き）

夏哉「お～、話がだんだん進んでいく」

アン「そうだな。ちょっと中心核に入ってきたと思うが、少し早くないか？」

作者「だから俺も困ってるんだよ！」

夏「あ、作者さんお疲れーす」

ア「お疲れーす」

作「え、な、なにこれ？」

夏「いや、言ってみただけだ」

ア「右に同じく」

作「あ～、アンさん？正直言って違和感出まくり」

夏「ごめん、アン。俺も同じ」

ア「安心しろ。私も自分で言って気持ち悪かった」

作「うん。まぁ分かってくれたらいいんだよ」

夏「なぁ作者。これ十章もいけんのか？」

作「いや、十章は絶対行ける。でも、十五章が微妙かな～。あ、でも無理矢理伸ばすかも」

ア「え、そんなに伸ばすの重要か？実際問題十章くらいになったとしても問題なんだろ？」

作「ん～、まぁそうなんだけどさ、今の時期だと第五話終了時に『その想いは変わりますか？』の方が終わるかもしんないんだよ」

夏「あ～、合わせたいわけね」

作「おう。この後書き（ざつだん）で追悼式的なのやれたらいいなと」

夏「馬鹿！追悼式は死んだやつにやることだ。やるなら送別会にしとけ」

作「了解しやした」

ア「作者、これって真樹がメインなんだよな？」

作「そのつもりだが？」

ア「なんだか香苗が悲劇のヒロインっぽいんだが真樹がメインでいいんだな？」

作「あ、うん。平気平気。予定じゃ真樹も今の香苗以上に悲劇のヒロインっぽくするから」

ア「うん、ならいい」

作「え～それで、次の話を書くにあたって、二つほど報告が」

夏「はい、どうぞ」

作「まず第一。次は三人称で書きます」

ア「お、これは小説初じゃないか？」

夏「そうだな。理由は？」

作「次の話、香苗と沙鳥の二人の心を書きたいんだよ。そうなると一人称じゃ無理だろ？」

ア「なるほどな。で二つ目は？」

作「物語を書く予定上、後書きに香苗と沙鳥を出したくない。ということで今後しばらく後書きは夏哉、アン、真樹の三人で回していきます」

夏「ん、了解」

ア「分かった」

作「じゃあ終わります」

夏「感想とか、誤字脱字、あれ？ここ矛盾してね？って言うことがあったら是非」

ア「こういうのをやってほしいって言うのでも構わないぞ」

第五話　《五章》二人の心情

午前六時頃。
外ではほんの少し地平線から太陽が顔を覗かせており、寮のなかでは一部の人間しか目を覚ましていない。
その一部には夏哉も含まれている。
隣では未だアンが布団にくるまって寝ている。
なんとも幸せそうな寝顔だ。

そんなアンとは裏腹に、夏哉は複雑な顔をしている。
普段より三十分以上早く目覚めてしまった理由、それは昨日の香苗の態度だ。
昨日の夕方からずっと引きずっている。

自分は本当に香苗に嫌われるようなことをしていないだろうか。

そればかり考えている。
その事はアンにキッパリと否定されたが、考えずにはいられない。
それが最初に出来た友人なら尚更。

しかし何度思い返しても自覚がない。

本当にただの熱のせいなのだろうか。

そんな可能性を頭に浮かべる。
そして夏哉はその可能性にすがり付いた。
自分は香苗に何もしてない、熱が下がればいつもの香苗に戻る。

そう言い聞かしている。

そうでもしないと、冗談抜きで心がおかしくなるからだ。

香苗に嫌われる。

そんなことを考えるだけで死にたくなりそうになる。

アンの話によると、沙鳥も同じように熱のせいでおかしくなっているようだ。

沙鳥も自分のことを嫌っている。

ただでさえ香苗との状態で不安定になりつつある夏哉にとって、それは拷問に等しい。

唯一の救いとなっているのは、アンがいつも通りに接してくれていることだ。

アンがいるから、今なんとか堪えることが出来ている。

もしアンがいなかったら……

ブンブンと頭を降る夏哉。

マイナス思考に陥った脳を振り払うかのようだ。

「……飯作ろ」

小さく呟いた夏哉は、庵を起こさないようにゆっくりと立ち上がってキッチンへと向かった。

「遅いな」

学生寮の入り口前、いつも通りの時間、夏哉とアンは香苗と沙鳥を待っていた。

三十分前、夏哉は香苗と沙鳥に体調のことについてメールを送っていた。

『今日は大丈夫か？学校に来れそう？』

という内容だ。

香苗と沙鳥はそのメールの返信を簡素な内容で返していた。

『うん、行ける』

という絵文字も顔文字も全く使われていない文に、夏哉は違和感を少し感じたが、二人が学校に来るという喜びの方が増した結果、深く考えなかった。

「私、香苗の部屋見てこようか？」

アンが提案してくる。

もし香苗がまた熱をぶり返して倒れていたら大変なのでお願いした。

アンは非干渉（ステルス）モードに切り替え、一直線に香苗の部屋まで飛んでいった。

因みに比喩ではない。

香苗の部屋の前に着いた。

「香苗〜、いるか〜？」

アンの声は誰にも聞こえないので、堂々と大声を出す。

しかし香苗の部屋からは何も反応がない。

「香苗？入るぞ？」

仕方なくアンは無断で部屋に入る。

中には誰もいなかった。

靴も鞄もなかったのでもう出ていってしまったということが分かる。

アンもそれを理解し、急いで夏哉のもとに戻った。

アンが戻ると、夏哉は塀に寄りかかっていた。

「夏哉、香苗いなかったぞ。鞄も靴もなかったから先に出掛けたと思うんだが」

「は？俺見てないけど」

「じゃあ夏哉より先に言ったということになるが……」

夏哉とアンは悩んだ。

何故香苗が自分達を置いて先に行ってしまったのか、と。

特に夏哉は昨日のこともあるので必要以上に不安感が募っていく。

やっぱり自分が何かしてしまったのではないか、それが原因で一人でそそくさと行ってしまったのではないか。

そんな夏哉を見て、何を考えてるのか理解したアンは夏哉の顔を両手で掴み、俯きつつある顔を無理矢理あげる。

「私昨日も言ったよな？夏哉は香苗にも沙鳥にも何もしてない、私がずっとお前の傍で見てたから分かるって」

「いや、でも、もしかしたら何もしなかったから期限が悪くなったのかも……」

いつもとは打って変わって弱気になる夏哉に、若干の怒りを覚えたアンは少し強めに自分の額を夏哉の額に当てる。
痛さで少し顔を歪める夏哉。

「しっかりしろ。悩みすぎだ。お前らしくない。仮に香苗がおかしい理由が夏哉にあるなら、早く香苗にあって謝ればいいだろ？もしかしてお前まで風邪引いて熱出したんじゃないだろうな？」

額を合わせながら、冗談混じりに夏哉を励ます。
そのアンの優しい励ましに幾分顔が和らぎ、心が暖かくなるのを感じた夏哉。
アンの効果はてきめんだった。

「そうだな。さっさと行って話聞くか」

「そうしろ。それで、沙鳥はどうするんだ？」

アンに聞かれて、夏哉は携帯を取り出し時間を見る。

「後……三分待とう。十五分になったら先に行けって前に行ってた

し」

実際のところ沙鳥が時間をオーバーしたというときは今までに無かったが。

三分後、沙鳥は来なかったので、今回二度目のアンと二人だけの登校となった。

好きな人と二人きり。

周りに人はいるが、それを数えなければアンは今そういう状況にある。

しかしこうなった理由が理由だけに素直にはしゃげない。

そのため、昨日の登校時にあった会話は今はない。

会話がないと足が進むようで、気がつくと二人は麦谷高校に到着した。

夏哉は自分の下駄箱から上履きを取り出すと、香苗と沙鳥の下駄箱を確認した。

ふたつとも靴が入っている。

「夏哉、ポジティブに考えろ。ここにいるということは別になんらかの事件に巻き込まれてはいないということだ」

「そうだな。わりぃ、なんかもう」

「気にするな」

夏哉はアンの些細な気遣いに感謝して、教室に入った。

教室には案の定香苗と沙鳥が席についていた。
表情を見る限り普段と変わらない。

「はよ～」

「「……」」

（む、無視された！？）

夏哉の挨拶に、二人はなんの反応の色も見せなかった。
しょうがなく夏哉は自分の席に着いて、香苗を向いた。

「香苗、おはよ」

「あ、うん。おはよう」

もう一度挨拶をするが、香苗は素っ気ない返事しかしない。

「沙鳥おはよう」

アンは沙鳥に挨拶をする。

「おっはよ～、アンちゃん」

少し小さな声で、陽気に返す。
沙鳥はいつもと変わっていない。
それに倣って夏哉も挨拶する。

「おはよー、沙鳥」

「んー」

しかし香苗同様、沙鳥も夏哉に対して素っ気ない態度を取る。

（やっぱ二人に何かしたのか？）

夏哉は二人に質問することにした。

「なぁ、俺二人に何かしたか？」

「何も」

「別に」

「じゃあなんで機嫌悪そうにしてんだよ？」

「「してない」」

「してないって……」

どう考えても機嫌悪いだろう、と思ったが口にはしない方がいいと思ったので言わなかった。

しかしここで何も言わなかったので四人の間には妙な沈黙が漂った。

夏哉は、今日ほど二人の気持ちが分からなかった。

対する香苗と沙鳥の思いは、一緒だった。

？やめて？と？違う？と？おかしい？と？なんで？だ。

どちらも心の中で叫んでいる。

何故口に出さずに心で叫んでるのかというと、喋れないからだ。
なにせ、体が勝手に動いてしまうのだ、自分ではどうすることも出来ない。

（朝からずっとこの調子だ。なんで勝手に動くの？）

香苗は思った。
これでは昨日と同じ、いや昨日以上に酷い。

（なんで夏哉に素っ気ないの？アンちゃんなら普通だったのに）

沙鳥は思った。
夏哉のことは全く怒ってないのに、口が勝手に動いてしまう。

二人は、夏哉以上に悩んでいた。
自分の一番やりたい、些細なことが出来ずに、自分の一番やりたくない、酷いことをしてしまう。
これを受け入れる器は、二人には持っていなかった。

心の中では大号泣をしているが、体はその通り動かない。

誰かが操っている。

そうとしか思えなかった。
しかし二人とも根拠がない。

もし魔法だったらアンが気付く筈だ。
そのくらい沙鳥にだって思い至った。

しかし夏哉とアンは何も言ってこない。

つまり魔法じゃない。

なら余計分からない。

二人とも同じことを考えてると、夏哉が話し掛けてきた。

「二人とも風邪は大丈夫か？」

「大丈夫ってメールで言ったよね？」

沙鳥が即答した。

香苗も、もし沙鳥が言ってなかったら同じようなことを言っただろう。

しかし内心は違った。

（うん、大丈夫だよ。もう全然平気）

（心配かけてごめんね夏哉君。お見舞いありがとう）

二人ともそう思ったが、思うだけでは伝わらない。

「そ、そうだな」

夏哉がばつの悪そうになる。

怖かった。

夏哉に嫌われることが。

そして夏哉を傷つけることが。

今も傷ついてるだろう。

二人とも、夏哉とかなり仲が良いと自負している。

そして夏哉は人を、特に自分たちを大切に思ってくれている。

そんな大切に思ってくれている自分たちに邪険に扱われたら、かなりつらいと思う。

それが分かっていて、どうしようもない自分に嫌気が差していた。

「なぁお前らおかしくないか？」

自分達の違和感を感じてくれた。

その事実は、今まで落ち込んでいた香苗と沙鳥の気持ちを晴らしてくれた。

しかし、それもぬか喜びに終わった。

「大丈夫って言ったでしょ？」

「そうだよ。沙鳥ちゃんの言葉聞いてなかったの？」

思ってもない言葉を口にする。

既に二人の精神はズタズタだ。

「いや、そうじゃなくてな。誰かに操られてるっていうか……ってもしそうなら言うわけないか」

夏哉は香苗と沙鳥の頭に手を置いた。

しかし二人はそれを払った。

「馴れ馴れしくしないでよ」

「やめて気持ち悪い」

香苗と沙鳥がそれぞれ一言、そう言い放った。

二人は死にたくなった。

（違う！夏哉君違うの！そんなこと全然思ってないの！！お願いだから信じて！！）

（夏哉、ごめんね。本当にごめんね……）

二人は願った。

この想いが誰かに、好きな人に届きますように、と。

そんな想いを、神様はしっかりと見届けていた。

「香苗、沙鳥、俺が絶対なんとかしてやるから。だから泣かないでちょっと待ってろ」

その言葉で、香苗と沙鳥の気持ちは地獄の縁から救われた。

「何言ってるの？意味分からない」

「夏哉バカでしょ？」

夏哉への悪態は今は気にならない。
それ以上に幸福を体が占めている。

「おう、俺はバカだ。そんなバカでも、二人ぐらいは救ってやるさ」

「安心しろ。私もいる。私と夏哉がいれば完璧だ。そのまま二人は手を取り合い、そのままゴールインしてやる」

「アンちゃん何それ？」

（ふざけるな！アンちゃんずるいぞ！）

「アンさん大丈夫？」

（待って待って待って！二人きり！？だ、ダメだよ！）

言葉とは裏腹に、二人はそのように文句を思えるようになった。
これも一重に夏哉のお陰だろう。

「じゃ、昼は罵倒喰らわないように真樹とアン三人で食わせてもらうわ」

「別にいいよ」

（え、真樹ちゃんとっ！？ずるいよぉ……。やっぱり真樹ちゃんも……）

「私は教室で食べるから」

（さ、三人か……千佳音たちはまだいないから、誰にも邪魔されることなく……）

二人はいつも通り、真樹を敵対視しながら、この穴埋めをどうすればいいか考えていた。

誰も使われていない特別棟にある数学教室。
あまり人が出入りしないために薄暗い印象を与える。

その教室の中、二人の男がいた。

「おい、まだダメなのかよ？」

イライラしながら一人の男が隣にいる男に聞いた。

イライラしてる男は赤髪をオールバックにしていて、その目付きは鋭い。

「まだダメだって言ったでしょ？放課後まで待たないと」

聞かれた男は明るいブラウンの髪を短くしている。

ひょろ長くて、気の弱そうな顔をしている。

「それとも、今から無効にしてもいいんだよ」

二人とも学年章は？？？、つまり三年生だ。

「チッ、わぁったよ」

「ま、やるわけないんだけどね」

ははっと見た目通り気の弱そうな笑みを浮かべる。

「それにしても、良くできたもんだな」

「まぁね。愛は全てを可能にするってとこかな」

「あっそ」

赤髪は、その男の言葉におぞけが走った。

言ってることはおかしくないのに、歪んでいるように思えた。

「じゃあ放課後よろしくね」

「分かったよ、熊谷（くまがい）」

熊谷と呼ばれた男は、先程の笑みとは打って変わり、憎悪に満ちた笑みを浮かべる。

それを見た赤髪は、実は変なことに巻き込まれてるんじゃないかと不安になる。

「よし、時間もないから戻ろっか」

熊谷の顔からは憎悪は消え、いつも通り気の弱そうな顔に戻った。

「あ、あぁ……」

赤髪はその後についていった。

黒い透明な液体が入った小さな小瓶をひとつ残して。

第五話　《五章》二人の心情（後書き）

作者「悩みました。たくさん悩みました。寝て起きて、何故か呼吸がつらくなるまで考えました。その結果、いつも通り後書きをすることにしました！」

真樹「変わってないじゃありませんかっ！」

作「いや、考え抜いた結果、こうなったの。マジで」

アン「それで？何を考えたんだ？」

作「この後書きを二人でやるか、夏哉、アン、真樹の三人でやるか、全員でやるか」

真「どうでもいいですわっ！」

作「どうでもよくないんだよ！いいことが連続して起きたんだから皆でお祝いしたいじゃんっ！！」

ア「いいこと？まぁ置いといて、なんで二人という結果になったんだ？」

作「えっとまず五人ってやつなんだけど、ほら、前回後書きで言ったけど本編じゃ二人おかしくなってるでしょ？だから削除で、残り三人の方は、香苗沙鳥が仲間外れに思えたからやめました」

真「なるほど。理解はしました。それで？良いことというのは？」

作「聞いて驚くなよ。なんと！ＰＶ１００，０００突破しましたっ！！」

ア＆ａｍｐ；真「「……は？」」

作「いや、二人の反応は分かるよ。信じられないよね？でも本当だから」

ア「あ、作者？別にいいんだぞ？私たちの人気が少ないからといってモチベーションをあげるためにそんな嘘つかなくても」

真「え、えぇ。そうですわ。本当に大丈夫ですわよ。どど、どうせ１０，０００の見間違えですわ」

作「うん、本当に、本当に分かるよ。でも本当なの。もう何十回ってくらい見たの。１／２２に１００，０００アクセス突破いたしました」

ア「ほ、本当か？夢じゃ、ないんだよな？」

作「あぁ、本当だ」

真「な、泣いても、いいですわよね？」

作「あぁ、構わない」

作＆ａｍｐ；ア＆ａｍｐ；真「「「バンザーイ！バンザーイ！バンザーイ！」」」

ア「それで、もうひとつのいいこととは？」

作「初感想もらいましたっ！！」

真「本当ですのっ！？」

作「ああ！１／２１にｇｉａｌｌｏ様とｃｏｌｏｒｆｕｌ様からきた！」

ア「なんか、幸せが連続続くと嬉しいな」

作「それに少しずつだけど話数も伸ばせるようになったかも！今回の実はもうちょい話を進める予定だったんだけど、二つに分けられるようになった！」

真「やりましたわねっ！これで登場回数も増えますわっ」

ア「本当にいいことずくめだな、作者！」

作「全くだ！読者の皆様、これからもよろしくお願いします！」

ア＆ａｍｐ；真「「よろしくお願いします！」」

第五話　《六章》犯行の手口

「操られてるっ！？」

昼休みの屋上、夏哉とアンは真樹に朝のあらましを説明した。

「予想だけどな。つか、俺はそう思いたい」

「確かに。あの香苗がそんなこと素でするとは思えませんし……」

「それに、だ。あの沙鳥がだぞ。うっとうしい取り巻きたちにも苦い顔ひとつしないのに、好きだと公言した夏哉に罵倒を浴びせるのはおかしすぎる。あいつの性格なら嫌なやつでも笑って過ごして、あとで一人抱え込むと思うんだ」

アンの言葉を聞いて、沙鳥のことを、そして香苗のことを思い返す。思い描く二人の姿は、嫌なことが起きたときはアンの言う通りだし、それ以外ならいつも楽しそうな笑顔を浮かべている。決して、好きな人に話し掛けられて素っ気ない、苛立ちのこもった言葉で返すものではなかった。

「しかし、夏哉だけなんですわよね？」

「ああ。私や教師、クラスメイトなどからの呼び掛けは、それこそいつも通りの明るい二人だ」

真樹は暫し思案する。

「例えば、操られてるのではなく好きなものを嫌いにさせるといっ

た風にされてるのではありません？」

その言葉を、夏哉が否定した。

「それだったら、アンも嫌われないか？もし真樹の考えが近いんなら、男を嫌うってなった方が自然じゃないか？」

「それなら一理あるかもしれない、が、教師が男の時でも普通だったぞ」

「もし沙鳥様たちが教師だから、と理由で普通の対応を取っていたとするなら、夏哉にもあからさまな苛立ちを向けないでしょうし」

アンは夏哉の意見に付け足し、真樹も自分の考えを述べる。

「やっぱり、俺だけなのか」

「となると一番妥当な考えは夏哉に対する私怨か。夏哉、どうだ？自分に恨みがある奴に心当たりは？」

夏哉の呟きにアンが詰め寄るが、夏哉はお手上げ、という風に両手をあげた。

「悪いけど恨みを持ってる人はたくさんいるよ。怪我させた人いっぱいいるし、二ヶ月前からは沙鳥信者の人にもだし」

「あ、悪い……」

夏哉の過去を思い出したのだろう、ばつの悪そうな顔をする。

見かねた夏哉がアンの頭を撫で撫でした。

アンの顔が綻び、すぐに怒りに満ちる。

「こんな気持ちの良い撫で撫でを受けてた二人に、強制的にそれをやめさせるなど、犯人は許せんっ！！」

その怒りの言葉を聞いた真樹は頭の上に疑問符を浮かべる。

「何ありましたの？」

「朝な、香苗と沙鳥の頭撫でたらその手を二人に払われたんだよ」

あぁ、と真樹は納得して、そんなアンに笑った。
なんか着眼点がズレているな、と。

そんな、少し和んだ空気を夏哉が引き締めるような言葉を放った。

「やっぱり俺、あの熱が原因だと思うんだけど」

二人とも顔を引き締め、頷いた。

「そうだな。よく考えたら香苗と沙鳥の体力の差がかなりあるのに、同じことをして同じ日に倒れるというのはおかしいな」

「まぁそれは一概にそうとは言えませんが、同じ時期に同じような症状、それに同じように夏哉を嫌う。それは偶然ではありませんでしょうね」

同じような考えに至って、悩む。
そこまでは三人とも、もっと言えば香苗と沙鳥も辿り着いたがその先が思い付かない。

「アンさん、魔法を使った形跡はないんですわよね？」

「ああ」

「ならばその痕跡を消す魔法、というのは考えられませんか？」

「いや、それはない。魔族にもそんなものはないからな」

「じゃあ痕跡を消すってことは出来ないのか？」

真樹の考えをアンが否定し、夏哉が追及した。
アンは夏哉の言葉に頷く。

「あるにはあるが、それは道具を使ってだ。夏哉は見たことあるかもしれないが、焦げ茶色の膜を全身に纏うものなんだ。そうすれば痕跡が出ないんだか……人間には使えないだろうな」

この世界の者は異世界の物に干渉出来ない。

基本的にはこれが絶対だ。
例外はいくつかあるが。

この話を聞いて、夏哉がひとつの可能性に辿り着いた。

「まさか、魔族の仕業とか？」

その、普通ではあり得ない考えを、普通ではあり得ない存在と、普通ではあり得ない体験をした少女は否定しなかった。

「……それなら誰にも気づかれずに行動を起こす、という確率が上がりますわね」

「それに魔界でも夏哉がタクノムを倒した、という噂は拡がっているだろうしな」

二人はそういうが、この場にいる三人は知らない。

神であるアルクシアからタクノムに傷が癒えてから送り込め、という指令を。

そしてタクノムたちアン討伐隊（クーレラ）の傷がまだ癒えてないことを。

特にタクノムはある程度の日数を重ねてはいるが治りが遅かった。

夏哉は二人の発言を聞いて、小さくため息をついた。

「悪い、俺が言い出したことだけど、大きくしすぎた感が否めない。てか流石に無理があるよな……」

「うっ、確かに……」

「そ、そうですわね……」

冷静に考えると、今の夏哉の考えは視野を広げすぎだと思い至った。

何分（なにぶん）様々なことを一度に体験しすぎたのだ、多くの、しかし確率の低い可能性を思い付いてしまうのはしょうがないことだろう。

「原点、ていうか単純に考えよ。一昨日、変わったことあったっけ？」

ん〜、と唸りながら思い返す二人。

「確か香苗が保健室に運ばれたよな？」

アンが呟くと、導かれるように夏哉が思い出す。

「そんとき女子２０００ｍやってて、沙鳥がかなりタイム落としてたな」

「それって何時間目ですの？」

「五時間目だ」

「ということは昼休み……あっ！」

何かが弾けるように真樹が顔をあげる。

そう言えばその時何かを貰わなかったか？

ひとつ思い出すと、その時の何気ない記憶が鮮明に蘇った。

「コーラですわっ」

「「あっ」」

真樹の一言で夏哉とアンも思い出す。

「確か真樹あれ貰い物って言ってなかったか！？」

「えぇ。確か隣のクラスで……」

トントンと自分の太ももを叩く真樹。
これが思い出すときの癖なんだろう。

「く、くら……蔵……蔵持！蔵持龍ですわっ」

なんてことない。
それこそ、小説や漫画の話であるようなベタなこと。

飲み物に盛る。

そんな単純なことに気がつかなかった三人は頭が固い――いや、ある意味頭が柔らかすぎたのだろう。

「待て、もし飲み物に何か入ってたとして、証拠がなかったら知らぬ存ぜぬで逃げられるぞ。それにそいつがこんなことする理由が分からないし」

アンの指摘に頷く夏哉。
言う通り、そのまま行ってももし本当に蔵持が犯人だったとしても、ばか正直には話さないだろう。

「真樹、そいつのこと詳しく知ってるか？」

そうは聞いてみたが、夏哉はそれにあまり当てにはしていない。
名前もすぐに出てこないならそこまで深い間柄ではないのだろう。

「いえ、沙鳥様のことを尊敬してるとぐらいしか……」

思った通りの答えだったが、夏哉は訝しげに思った。

真樹の言葉、ではなく真樹本人に。
何やら悩んでるようだ。
「真樹どうした？」
「いや、何か引っ掛かってて……」
「引っ掛かる？重要なことか？」
アンは聞くが、首を縦にも横にも振らない。
「分からないのですが、何か思い出せそうで……」
夏哉が切っ掛けを与えるように話し掛ける。
「飯食ってるときか？」
「いえ、コーラをもらうときなんですが……蔵持さんに話し掛けられて、コーラを貰って……」
ぶつぶつと呟き始める真樹。
邪魔をしないように静かにする二人。
三十秒ほど経っただろうか。
真樹が『分かった！』と顔をあげて叫ぶ。
「蔵持さん、コーラは貰い物って言ってましたわ！！」
「貰い物？誰から？」

「確か、先輩としか」

詰め寄って聞く夏哉だったが、芳しい答えとは言えなかった。

「よし、取り敢えず聞いてみるしかないよな」

「そうだな」

立ち上がる夏哉。
向かうは蔵持龍のもと。

「待ってください」

そんな夏哉を真樹は止めた。

「言ったでしょ？蔵持さんは沙鳥様のことを尊敬してると。夏哉が行っても警戒されるだけで何も教えてくれません。わたくしが行ってきますわ」

そう言って真樹は立ち上がり、歩き出した。

夏哉は、確かに真樹の言う通りなのでアンと一緒に座って待っていた。

（何をしていますのわたくしは！どうみてもあのペットボトルはお

かしいでしょうに！）

真樹は一人、自分の不甲斐なさに憤りを感じていた。

外されたラベル、元から空いていたキャップ。
普通そんなものを渡してくるだろうか。
答えは限りなくノーに近いだろう。

（その不自然さにもっと早く気がつけばこんなことにはならなかったでしょう早乙女真樹！）

悔しさのあまり握る手は強くなり、爪が食い込む。
それは当然痛いが、その時の失態を考えればまだまだ足りない。
こんな痛みで帳消しにされるものではない。

それに一番つらいのはあの三人だ。

片や一人は大切な人から聞きたくもない罵倒を浴びせられてしまう。

片や二人は大切な人に言いたくもない罵倒を無理矢理浴びせてしまう。

伝えたい気持ちが伝えられない苦しみと言うのは、経験したことない真樹には分からないが、夏哉を見てて凄まじいのは分かる。
平然とした顔をしているが、ほんとは痛いくらい苦しいのだろう。

真樹は下唇を噛む。

あんな仲の良い四人が自分一人のせいでバラバラになる。

そんなことは耐えられなかった。

真樹は自然と早足になって蔵持龍のいる六組へ向かった。

六組の教室の前に着くとすぐに扉を開けて、叫んだ。

「蔵持さんいますか！？」

いきなり叫び声を聞いた教室内にいた生徒たちは驚いていたが、今の真樹には気にしていない。

教室の中心辺り、一人の男が立ち上がった。

「早乙女さん？」

蔵持だった。

真樹はそれを確認すると蔵持の元へ駆け寄った。

「蔵持さん、一昨日わたくしにコーラをくれましたわよね？」

「そ、そうだけど」

「それ、先輩から貰ったと言いませんでしたか！？」

「うん。三年の伊丹慎榎（いたみしんか）さんだけど……どうかしたの？」

「伊丹慎榎……。その人の特徴を教えてください。お礼をしたいので」

適当に理由を付けて聞き出そうとする。
蔵持は特に気にした風はなく携帯を取り出す。

「写メで良いよね」

はい、と携帯を渡してくる。
それを手に取り画面を見る。
そこには蔵持ともう一人、赤髪のオールバックでつり目の男が写っていた。
他に誰もいないのでこの人が伊丹慎榎だろう。

「ありがとうございますわ」

携帯を返し、早足で屋上に戻っていった。

「お、お帰り～」

夏哉が、情報を持って帰ってきた真樹を迎えた。
「どうだった？」

「伊丹慎榎という三年生が渡してきたそうですわ」

「伊丹慎榎……」

「夏哉知り合いか？」

「いや。記憶にないな」

「三年の教室に行ってみましょ――」

キーンコーンカーンコーン

真樹の言葉を遮るようにチャイムがなった。
時間切れだ。

「残念。昼休みには終わらなかったか」

夏哉は自分と真樹の弁当を持って立った。

ほい、と真樹に渡した。

「残念って、そんな軽い……」

「だって難しく考えすぎてごちゃごちゃになったんだしな」

「それはそうですが……」

「だろ？それより、手がかり掴んだんだし次の休み時間行くか」

夏哉は先に屋上から出ていく。
その後をアンと真樹もついていく。

「ちょっと待ってください。それはやめた方がいいですわ。何処のクラスかも分からない人を探すのは時間が掛かるし、見つけたとしても時間が足りません」

「まぁそうだな。ならやっぱ放課後か」

「それが良いと思いますわ」

話が終わるそのタイミングで、アンが入ってきた。

「なぁ、それだったら私が探してこようか？三年は確か二階だったよな？」

「そう、だな。うん、頼むアン」

「分かった。……ところで、ひとつ気になったんだけど、もし飲み物に何か入ってたとして、なんで夏哉はなんともないんだ？同じように飲んだだろ？」

そのような当然の疑問を、真樹が推測を立てる。

「それは夏哉が男だからかもしれませんわ」

「なるほど、納得だ。じゃあ私行ってくるな」

そう言うとアンは壁をすり抜けて行ってしまった。

二人きりになると、夏哉が呟いた。

「今日中になんとかしたいな」

夏哉の本気の想いを感じた真樹は？えぇ？と頷いた。

第五話　《六章》犯行の手口（後書き）

夏哉「少しずつだけど進んでるな」

真樹「当たり前でしょう。進まなかったらただの駄文でしょうに」

夏「そうだな」

作者「はい、ひとつほうこく。またもや感想をいただきました。ｓｋｙｆｌａｒｅさん、ありがとうございます」

夏＆ａｍｐ;真「「ありがとうございます」」

作「？夏君？などという愛称で読んでくれて嬉しい限りです。これで感想が三つ目になったのですが、なんという。三人中二人が？書いたつもりだったんですが……書いてませんでしたね？というお言葉が。皆さん！皆さん方もそうなんじゃありませんか？実はこの小説を面白おかしく読んで、？よし、感想書いてやろう。でももう眠いから起きたらね？そう言って寝てしまい、起きたら、？あ、そういや昨日感想書いたっけ？あ、うん、書いた書いた？てな具合になってるんじゃありませんか！？それであまつさえ、？この作者何感想書いてやったのに返信しねぇんだよ。後書きで報告すらしねぇし。シネッ！？とか思ってるんじゃないだろうなぁ！？そんな読者なんか要らないんだからねっ！」

真「長い……」

夏「逆によく読者に向かって悪態つけるよな。感心するよ。なりたいとは思わないけど」

作「今の作者の言葉はフィクションです。実物の人間・団体・事件などには、一切関係ありません」

夏「あ、フォロー入れた」

作「当たり前だろォが！！誰が好き好んで読者に嫌われようとするんだよっ！？」

真「まぁいいですわ。それより、今回は初めて次回予告が出来るんですって？」

作「おう、出来る！次回、第五話《七話》少女の過去。内容は名前で大体お気付きですね。これは真樹が登場したときから考えた、作者が二番目にやりたかった話です」

夏「じゃあ一番は？」

作「最終話の後半部分！」

真「まだ先ではありませんかっ！その最終話が早くやりたいからという理由で早く終わらせないでくださいまし」

作「了解。それからさ、俺最近年なのかな？二ヶ月くらい前まで、こういう話を書こっかな～っていうのがあったんだけど、もう忘れてる」

真「メモしないのが悪いんですのよ」

作「ごもっともです」

夏「それでは皆さん、これからもお願いします。ご要望などがあったら感想でもメッセージでも構いません」

第五話　《七章》少女の過去（前書き）

嘘をついて申し訳ありません

詳しくはＷｅｂで

なんてね

……ホントふざけすぎですね、自重します

詳しくは後書きに書いてあります

第五話　《七章》少女の過去

放課後、?伊丹慎榎?という人物を探してるアンはいまだ夏哉のもとへ帰ってこない。
夏哉は心配したが、アンのことだから特に何があるというわけではないだろうし、単に人探しに難航してるだけだろうと思い、まずは隣にいる二人に声を掛けることにした。

「香苗、沙鳥、一緒に帰ろうぜ」

「「嫌」」

朝と比べると、言葉がストレートになっていた。
しかし実際の二人の心の内は正反対で、

（帰ろ帰ろ！夏哉君一緒に帰ろっ！）

（昨日お見舞いに来てくれなかったんだから一緒に帰ろ～！）

と、夏哉の意見に賛成していた。

しかし体は心に反発するように動いた。

自分の鞄を持って、スタスタと教室の外に出ていってしまった。
近くにいてもまた突っぱねられるのは目に見えているので、夏哉は二人から少し離れてついていった。
端から見れば立派なストーカーだ。

三階に降りる階段に差し掛かろうとしたとき、香苗と沙鳥は真樹に

遭遇した。

「沙鳥様、ご一緒してよろしいですか？」

「うん、いいよっ！カナもいいよね？」

「いいよ。帰ろ、真樹ちゃん」

その様子を見れば、どこもおかしい様子は見受けられない。
ただただ可愛らしい笑みを浮かべる成績学年一位と日本一美少女と謳われる少女二人だ。
夏哉との対応は、月とすっぽん以上ほどの差だ。

真樹はチラリと後ろにいる夏哉に目を向けた。
その視線の意味は、二人との下校のことなのか、伊丹慎榎のことなのか、はたまた夏哉本人のことを気遣ってのことなのか理解しかねたが、夏哉はどれにしても肩をすくめることしか出来なかった。

夏哉がちょうど二階の床を踏むとき、アンが夏哉のもとに舞い戻ってきた。
それを確認した夏哉が、小声で話し掛ける。

「アン、どうだった？」

「三年伊丹慎榎、赤髪のオールバックで目付きの悪そうな男。多分見つけた。今校舎裏にいる。誰かを待ってるみたいだった」

「因みにいつ見つけた？」

「十分くらい前だ。悪いな、遅くなって」

「いいよ。それより、また頼みがあんだけど、その伊丹慎榎ってやつ見張っててくんねぇか？俺もすぐ行くから」

「分かった」

アンは壁をすり抜け、翔んでいった。
夏哉も足を早めて校舎裏に向かった。

真樹は下駄箱にいた。
沙鳥たちとはクラスが違うので一旦別れた。
別れたといってもすぐ傍にいるのだが。

真樹は二人を待たせないように急いで靴を履き、沙鳥たちがいる方に顔を出した。
見てみると、沙鳥と香苗は紙を見ていた。
下駄箱に入っていたのだろう。

（下駄箱に手紙……まさかラブレター！？）

最近そういうことは滅多にないので、沙鳥親衛隊である真樹はチェックを忘れていたのだ。
こんなときでもそういう思考を浮かべられる真樹は、ある意味すごい。

（どうしましょう、今すぐにでもあの手紙を知りたいですし。香苗

は――）

刹那、真樹の頭の中に違和感が生まれた。

（二人が同じ時に同じ変化を起こし、放課後同じような手紙が下駄箱の中。こんな偶然ありますか？）

誰かが仕組んだとしか考えられない。

思い立った真樹の行動は早かった。

「沙鳥様、香苗、ちょっとその紙を見せてくれません？」

「ん？いいよ。はい」

二人はすぐに渡してくれた。

見比べると、使われてる字は微妙に違うが内容はほぼ同じだし、筆跡もぴったり同じ。

内容を簡単に言えば、？校舎裏に来てくれ。話がある？だ。

名前はない。

しかし真樹は大方予想はついていた。

（このタイミングなら……伊丹慎榎！）

「二人とも、校舎裏には行かないでくださいまし」

絶対何かある。

そう確信した真樹は二人に忠告した――が。

「なんで？別に行ってもいいでしょ？」

「そうだよ。話があるって書いてあるし。それになんか行かなきゃいけない気がするんだよね」

「あ、それ私も思った。ということで行ってきま～す」

いつの間にか靴を履いていた二人は駆け出した。

二人の心の内は、当然真樹の言う通りにしたかったのだが、いかんせん体が動かないので何も出来ない。

「ちょっ、待ってくだ――」

「真樹！」

真樹が二人を追おうとしたとき、夏哉が呼び止めた。

「夏哉！急ぎなさい！校舎裏に何かがありますわよっ！！」

「マジか！？実は校舎裏に伊丹慎榎がいるってアンが言ってた！」

「決まりですわね……。先に行ってますわ！！」

真樹は夏哉を置いて走っていった。

伊丹慎榎は校舎裏で壁に背を向けていた。

誰かを待っているかのように。

そんな姿を、校舎二階の壁から頭だけを出して見ている。
それは、まるで壁に生首がくっついているようでかなりシュールだ。
しかし、それを見れる人間はこの世界に四人しかいないので騒ぎにはならない。

（多分、私たちの考えが正しければ、香苗たちが来るんだろうな）

奇しくも、アンの考え通りに二人が駆け足で来た。

しかし、二人は慎榎を見た瞬間立ち止まった。
若干顔が赤くなっている。
それを横目で確認した慎榎は二人のもとへ歩き出した。

「俺の名前は伊丹慎榎だ」

「伊丹……」

「慎榎……」

そう呟くと、

二人は慎榎に抱きついた。

アンは一瞬何が起きたのか分からなくなり、確信した。

あいつが二人を狂わしたのだと。

（ここは私が手を出しても構わないよな）

アンは怒りに満ち、しかし冷静さを欠かさずにいた。

（まず殺傷力のある火は駄目だ。やるなら水か風。一番後が残らないのは風。なら風で腕力を強化して首狙いで意識を刈る）

綿密にシミュレーションをする。

もしここで怒りに身を任せて殺してしまったら、皆に迷惑が掛かってしまうし、それに夏哉との約束も破ってしまうことになってしまう。

そんなのは本末転倒だ。

アンは小動物を狩る獣のように息を潜めて機会を待つ。

そして、その機会は来た。

「香苗！沙鳥！」

夏哉が叫んだ！

香苗、沙鳥、慎榎の三人の気が夏哉に向いた。

（今だ！）

アンは力の限り素早く翔んでいく。

まだ三人はアンのことに気づいていない。
一番の懸念は、夏哉か真樹のどちらかがアンの名前を呼んでバレることだが、動いてしまったのでもう二人には気を向けない。
あと少しでアンの手が慎榎の元に届く、そんなとき。
慎榎の顔を覗くつもりだったのだろう、沙鳥の顔がこちらを向いた。
（ッ！？奇法！！）
咄嗟に身を捻ると、炎の竜がアンの頭のあった空間を襲った。
本体は躱したものの、焼けるような熱波がアンを襲う。
自分の身を守るように水で被った。
アンは再び魔力を探知した。
今度は地面から石の円錐が高速で延びてきた。
それも身を捻って躱し、慎榎の意識を刈るために纏った風を使い石の円錐を粉々にする。
纏った風を飛び道具として使えるのが、風魔法の利点だ。
アンはそのまま夏哉の傍で着地する。
「済まん、無理だった」
「いいよ、お疲れ」
そんな一言だけを交わす二人。
その間、三人を視界から外さない。

視界の中心にいる慎榎は、アンが見えないため戸惑っている。

「な、なんだっ？」

それも当然だろう、いきなり炎の竜が現れたと思ったら円錐状の石が伸び出て、それが粉々になったんだ、不思議に思わない方がおかしい。

その当然の疑問を、香苗は瞬時に答える。

「いきなりすいません。実はあの男、ステルス能力持ちの召喚獣で慎榎様を襲ったんです。それをいち早く感知した沙鳥ちゃんが退治しようとしたんだと思います。ね、沙鳥ちゃん」

「うん、そうなんです。慎榎様。いきなりごめんなさい。アンちゃ(あ)んすばしっこくてかわされちゃいました(れ)」

今、香苗は夏哉のことを、？あの男？と言った。

今、沙鳥はアンのことを、？あれ？と言った。

それは当然、言われた本人に衝撃を与えたが、言った本人たちにも衝撃を与えた。

（どうしよう、なんか知らない人を様付けしてるし、アンさんのことを召喚獣扱いしちゃったし夏哉君のこと？あの男？とか言っちゃったし……）

そして一番ダメージを受けたのは、沙鳥だった。

（私、最低だ。アンちゃん怪我してないよね？大丈夫かな？もういや！なんで私がこんなことしなきゃいけないのっ！？）

大事な人に手をあげた挙げ句、物扱いしてしまったのだ。
それで平気な方が異常だ。

「おい、あんたが伊丹慎榎だな？」

黒髪の少年は、赤髪のつり目に聞いた。

慎榎は、先程までのあわてふためいていた態度とは打って変わって、凶悪な笑みを浮かべた。

「あぁそうだ。それがどうした？」

「その二人を元に戻せ」

夏哉が指差すと、慎榎は香苗と沙鳥をさらに抱き寄せた。

「元に戻す？何をだ？」

それは当然の応答だったが、夏哉はそのおちょくるような態度に怒りを覚える。

「本気で言ってるのか？」

「本気も何も、お前ら何も変わってないよな？」

「はいっ。私は慎榎様のものですっ！」

「もう、あんな普通の男と変な口調の女の言うことなんて聞いちゃダメ！」

その言葉を聞いた夏哉と真樹は、ガチに落ち込んでいた。

「ま、まぁ普通だけどさ、皆に比べたら特徴ないけどさ……」

「た、確かにこんな口調わたくししかいませんが……でも……」

（夏哉、真樹、本当にごめんね……）

（「夏哉（君）、真樹（ちゃん）、ドンマイ」）

予想外のところで精神攻撃受けた夏哉と真樹。

謝る沙鳥に、励ます香苗とアン。

「で？沙鳥にそんなことを言われた二人。二人はこう言ってるぞ」

慎榎の言葉を聞いて、三人は顔つきを変えた。

「……ですが、このコーラを飲んだ二人がその後同時に熱を出しましたのよ、こんな偶然あります？」

そう言って真樹は自分の鞄から、十分の一ほど残った、ラベルのないコーラのペットボトルを取り出した。

それには慎榎だけでなく、真樹以外全員が驚いていた。

「……嘘だな。それはあの時のコーラじゃねぇ」

「あら、どうしてそんなこと言い切れるんですの？」

「それは昨日全部飲み干してたし、夏哉（そいつ）も飲んでただろ？なら薬を盛ったっていう証拠にはならいだろう」

それを聞いて、真樹はにやっと口角を吊り上げる。

「へぇ、？コーラは飲み干した？、？夏哉も飲んだ？、？薬を盛った？」

その単語を連ねると、慎榎はことの重大さに気付いたようで冷や汗をかいている。

「確かにこれは昼のうちに買って、友人に飲んでもらったものですわ」

ペットボトルを振りながら喋る。

シャバシャバという音が一時この場を支配する。

「つまり貴方は見ていたわけですわね。しかも？薬を盛った？という犯人しか知り得ないことを知ってるということは、自白しているに等しいですわね」

「クッ！！」

慎榎は苦虫を噛み潰すような顔をする。

そしてもう言い返せなくなったのか、開き直ったように笑う。

「アーハハハハハッ！！あぁそうだ。俺が薬を盛ったコーラを渡したんだ！」

それはもう知ってる。

夏哉、アン、真樹の三人はそう思ったが、流石に空気を読んで言わなかった。

慎榎の叫びは止まらず、自分の心の内を吐露した。

「こいつらは俺のもんだ！俺に従順だ！こいつらは俺には逆らわない！！犯そうが何しようが俺の自由だッ！！」

犯す。

その言葉を聞いて、二人は叫んだ。

（イヤッ！嫌だ！そんなの絶対嫌！！夏哉君っ！！）

（お願い！お願いだから動いて！動いてよ私の体！！）

しかしその叫びは声にならない。

寧ろ――

「きゃーっ！！ホント、慎榎様っ！？私みたいな体でも愛してくれる？」

「絶対やってくださいよっ！すっぽかしたら許さないんですから！

！」

寧ろ笑顔で、とんでもないことを発言していた。

気持ち悪かった。

今まで、こんなに自分を嫌悪したことがあるのかというほどまでに自分を嫌った。

そしてもう一人、慎榎の言葉を聞いて精神を殺られた人物がいた。

「い、や…………」

ドサッ、と尻餅をつく。

真樹だ。

真樹は顔が真っ青になりながら全身を震わし、とてつもない量の汗を流している。

「いや、いや、いや、いやいやいやいやいやいやいやいや――――――――――――――――――――――――！！」

「ま、真樹！落ち着け！」

慎榎の言葉を理解できなかったアンは、突然叫びだした真樹を宥めようとしている。

そして夏哉は。

「てんめぇ……」

怒りを押さえようと拳を握るが、その握力が強すぎて爪で食い込んだところから血が流れ出す。

夏哉は全身に力を込め、一瞬で慎榎との距離を縮めた。
自分の力を抑え込むことなんて考えていない。
全力で、目の前にいる汚物をぶん殴る。

その事しか考えていなかった。

そして拳を放とうとした瞬間、夏哉と慎榎の間に香苗が割り込んだ。

普通の動体視力以下を持つ香苗がそんな一瞬で割り込むなんて芸当、出来るわけがない。

香苗は、夏哉の行動を先読みしたのだ。

このタイミングで夏哉は距離を縮めてくる、と。

頭の回転が早く、夏哉をよく知る香苗だからこその芸当。
そこが仇となったのだ。
そして極めつけは――

「夏哉君、駄目……」

夏哉に、今にも泣きそうな表情を浮かべる。
それを見た夏哉の脳裏にはいつもの、笑顔が耐えない優しくて気の回る大切な――

「ッ！！」

夏哉は反射的に拳を止めてしまった。

香苗と慎榎の身長差は頭一個分。

香苗を巻き込ませずに殴れるのに、止めてしまった。

その一瞬の隙、そこを沙鳥が魔法で突く。

夏哉から見て右から炎竜、左から水竜、上から風竜、後ろから土竜。

全方位から同時に、しかもかなりの大きさ――どれも全長一ｍ程――をコンマ一秒でやってのけてしまうのは、流石依代としか言いようがない。

それに加え自分と慎榎、香苗の前に障壁を出すのも忘れていない。

（躱せ、ない！）

直感で死を覚悟した夏哉だが、状況は一変した。

「時空支配（タイムルール）ッ！！」

アンが叫んだ。

この世のすべての時間が止まった。

この世界で動けるのは唯一アンのみ。

ここでは何も壊せないが、ものを動かす程度なら出来る。

流石に張り付いたものは無理だが。

アンは手早く風魔法で夏哉と真樹を動かし、安全圏である屋上に避難した。
時空支配（タイムルール）を解く。
この間約五秒。

「クッ！？――ってあれ？ここ……」

「夏哉、簡単に言うとここは屋上で――」

突然の景色の変化に戸惑う夏哉にアンが説明しようとすると、途中で言葉を途切らせてしまった。

「アン？」

「済まん、特殊能力（アビリティ）の副作用で聴力が消えた。自分で何を喋ってるのかも聞こえない」

時空支配（タイムルール）、この特殊能力（アビリティ）のリスクは、それを使った時間の６０倍の長さの間、感覚の消失か痛覚の発生のどちらかがランダムに選ばれる。
今回のアンは聴覚だけ五分間消失のようだ。

「マジか！？」

アンは夏哉の唇を見て、動かなくなったところを見計らって喋り出す。

「夏哉、携帯のメモで私に教えてくれ」

夏哉は急いで携帯を取り出す。

「もう一度説明するが、ここは屋上だ。すぐ下に香苗たちがいる」

『さんきゅ、助かった』

「構わない。それより真樹はどうした？凄い具合が悪そうだが」

二人は真樹を見る。
いまだに顔が真っ青だ。

「おい真樹、大丈夫か？」

夏哉が真樹に触れようとする。
その瞬間、真樹はビクッと肩を震わせ、叫びだした。

「イヤッ！お願い！触らないで！やめて！イヤッ！イヤッ！！」

そして叫びと同時に近づく夏哉を殴り飛ばした。

「ぐ、アッ……」

「夏哉！」

うめき声をあげる夏哉。
しかしすぐ起き上がって、子供のように癇癪を起こす真樹の肩に手を置く。

「真樹、落ち着け！大丈夫だ、あいつはもういない！」

「やめてやめてやめて！」

何度も夏哉を殴打する。
しかし夏哉は、今度は倒れないようにしっかりと力を込める。
そんな中で説得する。

「大丈夫だ。恐いなら俺を殴ればいいから。だから落ち着こ。な？」

夏哉の優しげな声に、真樹は拳を止めた。

「なつ、や？」

「おう、そうだ」

暫し呆然とした真樹は、弾かれるように声を荒げる。

「ねぇ沙鳥は！？沙鳥はどこ！？」

「お、落ち着け！話す。話すからちょっと待ってくれ」

夏哉の言葉で止まる真樹。

夏哉はポチポチと携帯のボタンを押す。

『アンは香苗たちを見ててくれ
それでもしあいつが二人になんかしようと、特に服を脱がそうとしたら殺さない程度にぼこぼこにしろ
絶対阻止だ』

それを読んで、しっかりと頷く。

「分かった。じゃあこれ持っておけ」

そう言うとアンは自分の胸に右手を当てる。

「共鳴地点（シンパシーポイント）」

言葉に呼応するように右手が白く光る。

光が消えると、さっきまではなかった電池ボタンのようなものを手にしていて、それを夏哉に放る。

「それを持っていれば私がどこにいるのかが分かる。だが私が魔法を使えば消えてしまう。つまり私が魔法を使ったら、沙鳥と対峙してると思え」

そう言い残して、下へと降り立った。

夏哉は再び真樹へと向いた。

「真樹、大丈夫か？」

「うん、殴ってごめん」

「いいよ、俺頑丈だから。……それで、お前が言いにくいことを聞きたいをだけど」

躊躇いがちにいう夏哉だったが、真樹はそんな質問を見通していた。

「分かってる。そこまでバカじゃないよ」

「できれば聞きたいんだけど。口調が変わってるところとかも」

あ、と口を押さえる真樹。
これは無意識的にやってしまったようだ。

「も、申し訳ありません」

「どっちでもいいよ。それより、喋れる？」

「……うん、話す」

少し考え、いつもの喋りではない方で語り始めた。

第五話　《七章》少女の過去（後書き）

作者「ほんと約束破ってすいませんでしたっ！！」

アン「正直な、薄々感じてたぞ。どうせ次回予告に沿わないんだろうなって」

作「ほんとすいません。もう次回予告しません」

夏哉「どうして次回予告したのにズレてしまったのかというと、まず前回のあとがきの頃には、七章は一切手をつけていませんでした。このバカが感想やらＰＶやらで調子に乗ってしまい、頭の中で考えていたことを考え無しに文にしてしまったのです。申し訳ありません」

作「一応言っておきますが、わたくしが二番目に書きたかった部分は結局載せられませんでした」

ア「そんなのどうでもいいんだ。これに懲りたら、妄想だけの予告はしないことだな」

作「はい、しません。絶対にストックを作ってないのに、次回はこれやりま～すっていうのは言いません」

夏「まあ分かればいいんだけど。それにしても、伊丹慎榎自白あっけなさ過ぎなかったか？」

作「あの子そこそこ成績いいからね。相手にバレて、粘る必要がないってそうそうに理解したから、もうあっさり」

ア「頭いいならあんなボロださないだろ」

作「人間っていうのはね、アンちゃん。目の前の幸福を手に入れちゃうと、口が軽くなっちゃうんだよ。これ心理也」

夏「まぁここは認めたくないが本当のことだから、しっかり考えて幸福を手に入れるんだよ」

ア「は～い」

夏「でも考えすぎて幸福を逃しちゃうっていうのもあるから、やっぱり幸せっていうのは難しいですね」

ア「そんなことはないぞ。私は夏哉のそばにいるだけで幸せだ。ほら、簡単なことだ」

夏「アン……お前ってやつは！」

ア「ところで、感想で夏哉年上好き疑惑があるんだが」

夏「話変わりすぎだなおい……」

ア「いいだろ別に。で？どうなんだ？」

夏「まぁ憧れ、っていうか、いてくれたら嬉しいけど……」

ア「よし、なら」

ボンッ

アン（大人）「これでいいかな、夏哉君」

夏「あ、お、おう……」

ア（大）「フフっ、照れちゃって。可愛いね。お姉さんが抱きしめてあげる」

夏「待て！最後のはなんだ！？」

ア「お姉さんって言ったら抱擁でしょ？」

夏「何その定義！？作者！なんとか言ったれ！」

作「え～皆さん、『どうしてタイトルは予告通りなんだ？変え忘れ？』って思うかもしれませんが、これで間違えではありません。あえてのこのタイトルですのでご注意（？）ください」

夏「見捨てられたっ！？」

第五話　《八章》男女の友情

小さい頃のわたしは、どこにでもいる普通の少女だった。
そう、普通の少女だった。
今みたいなお嬢様口調でもないし、沙鳥様親衛隊などのこともやっていなかった。

確かに早乙女総合病院医院長の孫娘という方があったけど、わたしはその境遇をひけらかすことなどせず、クラスメイトがそれをからかったり虐めの種になるということはなかった。
むしろ『真樹ちゃん凄い！』と喜ばれていた。
友達もそれなりにいた。

幸せ、だったのかもしれない。

その時の感情なんて、もう五年以上前のものだから覚えていないが、今こうやって思い返せば幸せな時間として思い出せる。

しかし、

そんな幸せは一瞬で砕かれてしまった。

小学四年の夏、事件は起きた。

わたしは一人で学校から帰る途中、誘拐された。

当時わたしは、年の割に頭の回転も早く、父に耳がすっぱくなるまで聞かされたこともあって、病院に対する恨みがあるのか、それとも金目当ての犯行かと予想が立てられた。
動機は、後者の方だった。

わたしの手足を縛り、複数の男がわたしを囲む。
一人のリーダーらしき男が金を要求するための電話を、わたしの家の病院に一本の電話を入れた。
その際、わたしの声が聞きたいという要求が父からあったため、電話をわたしに近づけてきた。

わたしは大声で自分の居場所を伝えた。
わたしが捕まっているこの場所は、よく友達と遊んでいる場所とそっくりだったのですぐ分かった。

携帯を持った男は慌ててわたしの言葉を遮らすために、わたしのお腹を蹴ってきたことは今でも鮮明に覚えている。
鳩尾には入らなかったとはいえ、大の大人の男が手足の不自由な小学生の女に蹴りを入れたのだ、かなりの衝撃を受けた。
肺にある空気がすべて吐き出されて大きくむせる。

誘拐犯たちは困っただろう。
なにせわたしはあくまで?人質?という立場であり、金を要求するための?パイプ?という立場であるから殺すことは出来ない。

しかしわたしに対する怒りは抑えきれない――

「真樹、分かった。もういいから喋るな」

わたしが自分の過去を語っていると、夏哉が途中で止めた。

この先の話の流れの予想がついたのだろう。

いいようのない怒りに満ちた顔をしている。

「もう口で言わなくてもいいから。思い出そうとしなくていいから」

夏哉はわたしを心配してくれているんだろう。

しかしそれはもう遅い。

わたしの口調が変わるということは、既に過去を思い出してるということだ。

口にしたところで不快感は変わらない。

いや、それ以前にあんな出来事を忘れるなんてことが出来るわけがない。

でも、

「聞いて、くれるんでしょ?」

夏哉は聞いてくれるって言った。

それにわたしは頷いた。

聞いてほしいんだ。

誰かに、自分が体験したことを。

聞いてほしいんだ。
誰かに、自分が思ってたことを。

聞いてほしいんだ。
誰かに、自分がどうして今のわたしになったかを。

わたしの一言で、夏哉は頷いた。

「……分かった、聞く。でも、絶対無理するな。気持ち悪くなったらすぐにやめていいから」

夏哉の気遣いに感謝しつつ、わたしは続きを語る。

しかしわたしに対する怒りは抑えきれない。

そんな中、誘拐犯の誰かが言った。

皆でこいつを犯そう、と。

その頃のわたしはその意味をいまいち把握していなかったが、わたしにとって最悪なことをするつもりなんだろうということは分かった。

わたしは大声で叫んで拒絶した。
手足を縛られながらも、千切れんばかりに暴れた。

しかし男たちはその姿に気持ち悪い笑い声をあげる。

男の一人がわたしの服を掴み、破いた。

わたしはあらんばかりの叫び声をあげるが、もう無理だと悟り、身を強ばらせて衝撃を待った。

しかし、どれ程待ってもそんなものは来ず、何故か温かい何かに包まれている感覚を覚えていた。

おかしいと思った。

人がさわってくる感覚はないし、夏とはいえほぼ半裸の体では温かいとは感じない。

それにわたしが感じているのは、太陽から発せられる?暖かさ?ではなく、誰かに包み込まれてるような?温かさ?だ。

勇気を持って目を開くと、世界が橙色に見えた。

どこを見渡しても橙が支配していた。

あわてふためく誘拐犯も橙色がかっているし、見慣れた倉庫も橙色がかっている。

理解が出来なかった。

何が起こったのかが分からなかった。

一人の男がわたしを指差して叫んだ。

ガキが燃えてる、と。

余計意味が分からず、全身を見渡す。
と、ここでいつの間にかわたしを縛っているロープが無くなっていることに気づいた。
辺りを見回してもそれらしいものは見えないし、男たちがほどくわけもない。

心を落ち着かせると、男たちの言葉の意味を考えた。

わたしが燃えているって言った。
じゃあもしかしたら世界が橙色に見えてるのは炎のせいかもしれない。

でも、わたしにまとってる炎は全然熱くない。
むしろ守ってくれてるように思えた。

ありがとう。

炎にそう思うと、それに答えるように揺らめいた。
もしかしてわたしの思ってることが分かるのだろうか？

そう思い、炎にお願いした。

あの男たちを追い払って、と。

するとわたしの視界が晴れ、いつも通りの色に見えた。

炎が消えてしまったのだろうか。

不安に刈られると、上から光を感じた。
顔をあげると、炎の球体が六つ――男の人数分――浮かんでいた。

その六つの炎球は一直線に男たちに向かった。
それを躱す術をもたない男たちは炎球に当たり、倒れてしまった。

死んじゃった？

そう思うが、時々呻き声をあげていたのでホッとした。

再び炎にお礼をすると、いまだ漂っている炎球は役目を果たしたかのように消えていった。

その後わたしはちゃんと保護されるが、男に対する恐怖は消えず、深い心の傷となって残った。

そしてわたしが使った炎、あれが魔法だと言うことを父から教えられると、わたしは病院と協同関係を結んでいた麦谷高の施設に送られた。
目的はもちろん実験動物として。

親も苦渋の選択だったのだろう。
まだ幼いわたしを、協同関係を結んでるとはいえ一人知らないところへ送り出すということは。
戻ってきた時には何度も、何度も謝られた。

正直なところ、わたしは両親の考えは正しいと思っていた。
わたしは魔法を使うという経験をしていないため制御出来ず、もしまた何かあった時、不意に魔法が発動してしまい、暴走して、周りを傷つけてしまうことを懸念していたのだろう。

だから喜んで、とはいかないが進んで施設に入っていった。

そこでの生活は、肉体的には悪くはなかった。
全く後遺症も残ってないし、力の使い方も教えてもらった。

しかし精神的には酷かった。
あの事件のすぐ後のことだったので精神が不安定な中、研究者たちはわたしに実験動物に対する視線しか向けなかった。

わたしをわたしと見てくれない。

これがとてもきつかった。

施設には一年弱ほど入っていて、帰ってきたときは、わたしは人間不信になっていた。

誰もわたしのことを見てくれないのではないか。
誰かがわたしを見るのはわたしを襲うためではないか。

そんなことばかり考えていた。

しかし頭の隅にはちゃんと、皆が皆誘拐犯や研究者のような考えを持っているわけではない、と理解していた。
それに、わたしがこうなっちゃったせいで両親が徐々にやつれていった。
それが嫌で、わたしは無理をして学校に向かった。
事件のことを知った友達は、だけどいままでと変わらず接してくれた。

それは嬉しかった。

しかし体が震える。

皆が怖かった。
何かをたくらんでるのではないかと考えてしまう。
わたしは理性で無理矢理体を動かし、笑った。

そしてそれは、半年とも保たなかった。

わたしは理性を酷使して体を動かしていたため、精神が病んでしまった。
外に出る気にもなくなり、食事もほとんど進まない。
お見舞いに来てくれた友達にも会いたくなかった。

消えてしまいたい。

何度もそう思った。

誰かが視界に入れば恐怖に苛まれ、誰も視界に入らなければ孤独に苛まれる。

そんなわたしを見て、お母さんはパソコンを買ってくれた。
独りのわたしに少しでも孤独を払拭させようとしてくれたのだろう。

それに、わたしが戻ったとき時代遅れになってほしくないのだろう。

早速パソコンを使い、色々検索してみた。
インターネットという世界でわたしの知らない無数の情報を閲覧をするということはとても楽しく、集中できた。

そしてある日、独りの少女の噂を見つけた。

その少女はわたしと同い年で、すぐ近くの小学校に通っていた。
気になって詳しく調べてみた。

少女はかなりの美少女で、近隣の町では知らないものはいなく、そこいらにいるアイドルよりも可愛いらしい。
あまりにも美少女のために親衛隊なるものも作られている。
見た目だけでなく性格も良く、誰に対しても優しく、笑顔を見せている。

これを見つけたとき、わたしは使えると思った。

この少女を使えばわたしは両親に迷惑をかけなくて済む。

わたしはより詳しく調べ、少女の好きそうな性格を作った。
そして親に頼み込み、中学に入るとき少女が入る中学に変えてもらった。

そして中学に入り、真っ先に少女に接触した。
少女は噂以上に美しく、噂以上に男が近寄らなかった。

確信した。

この少女にまとわりつけば男は近寄ってこない。
近寄ったとしても少女に目を向ける。
最初の頃は人も怖く、演じるのも大変だったけどすぐに慣れた。
こうしてわたしは自分を偽り、少女を利用して生き続けた。

「これが、今のわたしになった切っ掛け」
すべて話終えた頃には、夏哉は俯いていた。
そして石畳の上には濡れた跡がある。
泣いているのだ。
「なんであんたがないてるの？」
「お前が泣かないから」
「は？」
「自分のつらい過去を言って泣かないから。後、自分のために泣いてくれる人がいるのって安心できるから」
最後の言葉の意味が最初分からなかったが、すぐに自分の体験談なんだと分かった。
恐らく沙鳥と香苗、アンに自分の過去を話し、泣いてくれたんだろ

う。

「つらかったよな。トラウマ引きずって、人間が怖くなって、でも大切な人に悲しんでもらいたくなくて、悩んで苦しんだんだよな」

全然違うが、同じような体験をした夏哉には、わたしの気持ちが理解できたようだ。

「お前凄いよ、そんなことがあったのに必死になれて。まだ誰かのことを想えて」

「……が、う」

しかし、

「ちがう」

わたしが求めているものは、

「違うッ！！」

そんな同情じゃなかった。

「わたしは！わたしはそんな高尚な人間なんかじゃない！わたしはただ最低な人間なんだッ！！人の弱味をつついて利用して！自分のことだけしか考えてなくて！他人なんてどうでもよかった！！必死になれて？ただ死ぬのが怖かっただけ！気を抜いたら自殺しようと痛みに悶えるのが怖かっただけ！！誰かのことを想えて？そんなのただ孤独を払拭させるためだけにしてただけ！その時以上の苦しみ

を味わいたくなかっただけ！！」

わたしは思ったことを次々と声という媒介を使って垂れ流した。

「ネットで色々調べていたのは自殺の方法なの！！どうやったら簡単に死ねるか！どうやったら苦しくなく死ねるか！それだけをずっと考えていたの！！自分という、早乙女真樹という存在を消したかっただけ！！麦谷高(しせつ)に進んで行ったのは魔法を使ってわたしを消したかったから！親がやつれるのが嫌だったのは、捨てられて餓死するのが怖かったから！！沙鳥の親衛隊になったのは男を近寄らせたくなかったから！！」

叫びが止まらない。

今までこんなに声を荒げて吐き出してるのに、まだ足りない。

「わたしはあんたとは違うの！人に冷たい目で見られたのに、人を暖かい目で見るなんて出来ない！なんであんたはそんなこと出来るの！？わたしには無理！人なんて信じられない！！叱ってよ！わたしのこと知ったなら怒ってよ！！大切な人を騙して利用した最低の女って怒ってよ！！」

耐えられなかった。

沙鳥と仲良くなっていくたびに、罪悪感が増していく。

楽になりたかった。

終わりにしたかった。

だからそれを、似ていないようで似ている境遇の夏哉にやってもらいたかった。

「なんで叱ってほしいんだ？」

しかしわたしの願った言葉を言ってくれず、顔をあげた。

「他人なんてどうでもいいのに、どうして俺に叱ってほしいんだ？」

「そ、それは……」

優しい声でしてくる質問に、回答の言葉が紡げなかった。

しかし夏哉は気にしない風に続けた。

「お前は沙鳥を守ろうとしたよな。ちょうど一ヶ月くらい前温泉宿に行ったとき、誰も見てないときに沙鳥のために戦ったよな。さっきだってそうだ。俺が説得して落ち着いたとき、一番最初に沙鳥の心配してたよな。自分を取り乱しながら、偽っている自分を忘れながら。お前自信気付いてないのかもしれないけど、お前は意外と他人のことを想ってるんだよ」

「わたしが、さとりをおもってる？」

「そうだ。今まで、って言っても二ヶ月もないけど、その間真樹を見てて凄い楽しそうだった。全然演技してる風には見えなかったし、沙鳥を――じゃねえな。沙鳥と香苗とアンの三人を大切にしてる風に見えた」

「たいせつ……？」

「あぁ。もし、あれ全部が演技だったんなら、お前は女優に向いてるよ。それに、お前沙鳥のこと友達って言ったろ？向こうだって思ってるさ。大切な友達だって」

「違う、違うの！わたしは！沙鳥を騙してるのに自分が幸せになってるのが許せないの！一緒にいて楽しいとか、嬉しいとか思ってる自分が嫌なの！！」

わたしは頭を抱えて身を縮める。

胸が凄く痛い。

早くこの痛みから解放されたい。

「それでいいじゃねえか」

「え？」

夏哉の言ってる意味が分からず、声をあげた。

「沙鳥を利用して、お前が幸せになれたんなら、それでいいじゃねえか」

その言葉を聞いて、わたしはキレた。

「いいわけ、ないでしょ！！わたしは沙鳥を道具みたいに使ったんだ！そんなのが許されるわけないでしょ！！」

息を切らし、肩を揺らしながら言い切った。

しかし夏哉は今までと変わらない風にしていた。

「お前、沙鳥をなめすぎだ」

「は？」

「お前、沙鳥のこと調べたんだろ？あいつ、今まで友達がいなかったじゃん。近づけば惚れられて、何もしなければ近づいてもらえなくて。そんなあいつがさ、早乙女真樹っていう友達を持てたんだ。その友達のためなら、それで友達が幸せになるなら、あいつは喜んで利用されると思う。考えても見ろ、沙鳥から見れば大事なやつの役に立てるんだ、嬉しいに決まってる。その程度のことでお前を嫌ったりしない。俺の知ってる沙鳥は、そういうやつだ」

わたしは、言い返せなかった。

聞けば聞くほど、その通りだと納得してしまう。

「……なん、で？」

気が付くと、呟いていた。

「なんで夏哉は、こんなに優しくしてくれるの？騙してたんだよ？あんたの大切な人騙してたんだよ？嫌いなんだよ？男が嫌いなんだよ？それなのに、どうしてこんなに慰めようとしてくれるの？」

声を震わしながら、心に思い浮かんだ疑問を吐く。

その疑問に、夏哉は即答した。

「お前は、俺にとっても大切な友達だからだ」

耳を疑った。

今のわたしを、男の夏哉が友達だと言った。

「確かにさ、お前の昔の性格は分かんないし、今の性格が作ったものなんだろうけどさ、それでも友達だって思ってる。過去の話を聞いても、全然変わらなかった。お前が俺のこと嫌いだっていうのは理解してる。視界に入るなって言われたら入らないようにする。でも、お前が泣いて助けを求めるようなことがあったら全力で助ける」

「……なんで、そこまでしてくれるの？」

その疑問にも即答した。

「俺もお前に救われたから。化け物だ、って罵られてた俺を、演技かもしれないけど一緒にいてくれたから。すっごい救われた。俺も、まだここにいていいんだって思えたんだ。お前らのためになるんなら、一緒にいたいって思えたんだ」

「……」

「だから、恩返しがしたい。皆を幸せにしたいんだ」

「……本当に、わたしのことが大切なの？」

夏哉は何故かため息をついた。

「あのなぁ、もしお前のことが大切じゃなかったらお前なんて構ってないで沙鳥たち助けに行ってるって」

「あ……」

そうだ、夏哉は今沙鳥と香苗を助けたいんだ。
昔のわたしと同じような状況の二人を。
しかも操られてあの二人は拒絶すら出来ない。

それなのに夏哉はわたしなんかのために時間を割いているんだ。

「……ひっ……ズズッ……ぅ、あぅっ……うぅぅ……」

気が付くと、わたしは泣いていた。

「わたし、いいの？わたしに友達が出来て」

「あぁ、っていうかもういるだろーが」

「……うん」

わたしは、夏哉の胸に倒れた。

「ちょ、お前大丈夫か！？」

いきなり倒れこんだことなのか、男に触れていることなのかは分からないが、わたしを心配してくれた。
それは嬉しかった。

「大丈夫。夏哉は大丈夫だから。だからわたしを抱き締めて。一人じゃないって証明して」

夏哉は優しく、しっかりと抱き締めてくれた。

温かかった。

あの時の炎に包まれた時と同じだった。

凄く安らぐ。

しばらくして、夏哉はわたしの耳元で囁いた。

「真樹、悪いんだけど俺はそろそろ友達を助けに行きたい。お前はここにいていいよ。あの男がいるんだ、無理に二人を助けようとしなくていい。俺は絶対二人を助けてくるから、家に帰って今日のことを忘れても構わない。その事について俺たちは何も言わないし、何も言わせない。安心して家に戻ってくれ」

夏哉は、本当にわたしを思ってくれる。

その言葉を聞いて分かった。

わたしは夏哉の方に手を置いて押し退けた。

「大丈夫。わたしも沙鳥に――いえ、沙鳥様に助けられました。夏哉同様に恩返しがしたいんですの」

「それでいいのか？」

まだ自分の事を偽り続けるのか、という意味なんだろう。

「えぇ。自分の事を語って、沙鳥様に泣かれるのは嫌ですので」

わたしは立ち上がり、夏哉に手を差し伸べた。

「一緒に沙鳥様を助けますわよ」

「調子いいな。さっきまでの真樹ちゃんとはえらい違い」

「やかましいですわ」

夏哉は憎まれ口を叩きながらも、わたしの手を取った。

「取り敢えず今までの鬱憤を晴らすつもりで殴りに行くぞ」

「そんな当たり前の事を」

お互い手を離し、拳を作ってぶつけた。

「よし、じゃあ行くか。アンは、特別棟の――」

途中で言葉を途切らした。

「どうしました？」

「アンがくれたやつが消えた」

夏哉が左手を開くと、確かに何もない。

「それがどうしました？」

「聞いてねぇのか。これが消えたっていうことは魔法を使った。つまり沙鳥とバトってるってことだ！」

言って夏哉は走り出した。

事の重大さを理解したわたしは、夏哉を追いかけた。

第五話　《八章》男女の友情（後書き）

作者「無事、真樹の過去が完成しました」

真樹「これで主要メンバーの過去はアンさんだけですわね」

夏哉「さりげなく主要メンバーに自分を入れた」

真「何か文句でも？」

夏「いえ……。え、えっと、これで色々伏線回収出来たってことか作者？」

作「そうだね。時々変わる口調、宿にいるときに夏哉が真樹の肩に手を置いた瞬間とその時の火事の犯人に対するの異常な反応、魔力二番の訳、と、こんな感じか」

夏「魔力二番って関係あんの？」

真「大いにありますわ。詳しくは作者が」

作「まぁ簡単に言っちゃうと、魔法っていうのはスポーツみたいなもんだよ。ある程度は素質があるけど技術も体力も必要になるだろ？その二つを上げるためには練習、つまり経験だ。魔法を何度も何度も使えば技術は身に付くし、ある程度の魔力を何度も使っていくと、筋肉の如く魔力の底上げになる。まぁ筋肉と違って絶対値が下がるってことはないんだけどな」

真「それで、わたくしが魔法を使い始めたのが小学四年。約六年ほ

どやっていますので同学年には、いえ、麦谷高在校生の中では沙鳥様の次ですわ」

夏「まぁ、沙鳥には勝てないか」

作「もし勝っちゃってたら真樹が依代になってるっちゅーの」

夏「それもそうだな」

真「ねぇ作者、今回は前回と違って一人称ですが、これからはどうなるんですの？」

作「あぁ、忘れてた。これからは一人称に戻ります。あの、あれだね。今まで一人称で、いきなり三人称にするとダメだね。つい？俺？とか？私？って風になっちゃう」

真「なれは恐ろしいですからね」

作「はい、で、今回は三話の雑談の予告通り二人が抱きつきました」

夏「ま、まぁそうだな」

真「以上終わりますっ！」

作「あ、終わらせた」

第五話　《九章》侮辱への怒り

『アンは香苗たちを見ててくれ
それでもしあいつが二人になんかしようと、特に服を脱がそうとしたら殺さない程度にぼこぼこにしろ
絶対阻止だ』

そう文字が書いてあったので取り敢えずもとの校舎裏に戻ってみるが、その場にはもういなかった。
しかし、まだ時間は経っていないのでそう遠くには行ってないはずだ。

辺りを見回すと、何故か小さな子供がいた。
一瞬香苗かと思ったが、濃い桃色の髪だし長い髪を二つに縛っているし、何より服装が違ったので別人と分かった。

子供の口が動く。
けれども私には聞こえなかった。
声が小さいというわけではなく、私の特殊能力（アビリティ）のせいで聞こえなくなったからだ。

何を喋っているかが気になったが、それどころではないのでその場を去った。

学校の外にいるのかなかにいるのか。
まずそれを確認しなければいけないので昇降口に向かった。
確か香苗は三組三十二番だったはずだ。
夏哉の二個上。
下駄箱を覗くと、香苗の靴が入っていた。

ということは中にいる。

それは分かったが、どこに向かうだろうか？

耳が使えないから聴覚に頼ることは出来ないし、沙鳥か伊丹慎榎が魔法を使わないとそっちでは感知できないし。

「……やるか」

そう呟くが私にはやはり聞こえない。

短く息を吐く。

今からやろうとすることは魔力をかなり使う。

恐らく沙鳥と出会えば先頭は必須――と、ここまで考えて思い出した。

そう言えば今夏哉に共鳴地点（シンパシーポイント）を渡していたから使えないんだ。

「しょうがない、勘で探すか」

そうは言ったが、多少は考えなければな。

伊丹慎榎は？犯す？とか言ってたが、どうやら私の知ってる？犯す？とは違うようだ。

その言葉を聞いた夏哉は怒り、真樹は恐怖しているということは悪いことをするということだろう。

悪いことということはなるべく人に見られたくないはずだから人気のいない場所に向かうのではないだろうか。

私は左右を確認してどちらが人が少ないか判断する。

見ると右側の、確か特別棟の方が人の出入りが少ないというのが分かった。
そちらの方に向かい、そして片っ端から目についた教室内に首を突っ込んだ。
言葉の通り、壁をすり抜けて中を見回す。
以前夏哉たちの前で同じようにやったら、怖いからやめろと言われたが、今は見てないし緊急事態なので勘弁してもらおう。
一階の方にはそれらしい影が見当たらなかったので二階を見て回る。

すると、意外なことにすぐ三人組が見つかった。
真ん中を歩く伊丹慎榎に、その両腕に抱きついている香苗と沙鳥。

私の考えは間違ってはなかったようだな。
そんなことを自慢げに思いながら、しかしそんなことを考えている場合ではないと気を引き締め直し、香苗と沙鳥に気付かれないように後ろから顔だけを出してついていく。

凄くもどかしかった。

夏哉が、？二人を見張れ？って言った理由は分かる。
この世界に存在していない私が勝手にこの世界に干渉してもいいことはない。
最悪、夏哉や香苗たちに迷惑が掛かる。
そうは分かっているが、目の前に助けなければならない人がいるのに何も出来ないというのは、これほどまでにつらいんだな。

早く動きたい。

早く殴りたい。

早く抱き締めてあげたい。

そんな、私の体を引きちぎらんばかりに溢れ出してくる感情を理性でしっかり抑え込む。
気を抜けば本当に襲いかかねない。

しばらく後をつけ、二階から三階に向かうための階段を上ろうとしたとき、突然周りの雑踏の音が聞こえてきた。
時空支配（タイムルール）を使って五分経ったのだ。

聴覚が戻りホッとしていると、不意に耳に入ってきた。

「慎榎様〜、まだですかぁ？沙鳥早く三人でいちゃつきたいですぅ」

「そう急ぐな沙鳥、数学教室まで待ってな」

「じゃあ私たちそこで結ばれるんですかっ？」

「あぁ、そうだ香苗。楽しみにしてろ」

「はいっ！慎榎様、世界で一番大好きです！」

「ちょ、待ったカナ！私だって慎榎様のこと好きなんだから！愛してるって言っても過言じゃないよっ！！」

「ほら、二人とも喧嘩するな」

「「はぁい、慎榎様！」」

虫酸が走る。

気持ち悪い。
吐き気がする。

どうしてあの二人からこのような気持ちの悪い言葉を聞かされなきゃならないんだ。

恐らく、私の聴覚が消えていたとき、いや私たちから離れたときからこんなやり取りをしていたんだろう。
こんなのを聞かされるくらいなら聴覚なんて消えてしまった方がはるかにましだった。

あの二人をあんな風にした男に怒りが込み上げてくる。
今すぐにでも殺しつやりたい。

「……クソッ」

誰にも聞こえないように悪態をつく。

香苗や沙鳥自信ではない私がここまで気持ち悪く思っているんだ、あの二人の方がよっぽど気持ち悪くて、怒りを覚えているんだろう。

自分を操っているあの男にも、それに対して何も出来ない自分自身に。

そう考えて、なんとか暴れ狂う感情を押さえ付ける。
あの二人の方がつらいんだ、ここで暴れまわって状況を悪くしてはいけない。

拳を強く握り締めて耐えた。
あの二人は我慢することも抵抗することもできずに、直に精神を傷

つけられてるんだ、このくらい耐えられなくてどうする。

私は耳を塞がずに、あの三人のやり取りを聞いた。
あの二人だけつらい思いをさせないように。
少しでもあの二人の気持ちを共感できるように。

「てかお前らさ、今までよくあんな男と一緒にいれたな。つまんねぇだろ、あれ」

「はい。なんの取り柄もない役立たずな男でしたし、いろいろウザかったですし」

「ほんっと、いつもいつもいらない世話ばっかりしてくるわ、勝手に人のことにズカズカ入っていくわで、もううんざりですよ」

その三つの言葉を聞いて、私は何かが外れた。

怒りが爆発する。

もう抑えられない。

抑えたくもない。

私は床をすり抜け、この世界に干渉できるようにして足をつける。

ドォッン！！

右側の壁に思い切り拳を叩きつけた。
その壁は頑丈なのか、クレーターができる程度だった。
しかしどうでもいい。

その音を聞き、目の前にいる三人がこちらを振り返る。
三人は私が作ったクレーターに目を見開く。

香苗と沙鳥は私を睨み付けた。

「沙鳥ちゃん！人払いの魔法やって！慎榎様に迷惑がかかっちゃうっ！！」

「分かった。幻術の応用だよね？」

そう言った沙鳥は人払いの魔法、つまりこの辺りの場所は存在しないという風に錯覚させる、ある種結界のようなものだ。

「慎榎様、今目の前に先程襲ってきた召喚獣がいます。動かないでくださいい」

沙鳥が忠告する。
そう言えば？あれ？は私のこと見えてなかったな。

私は遠隔からの幻術をかけた。
触れた方が魔力も少なく、しかも確実にかけられるが私には関係ない。

？あれ？に幻術をかけ終わると、突然見えた私に驚いていた。

あぁ、うざったらしい。
さっさと終わらせよう。

私は？あれ？を睨み付ける。

「貴様、よくも夏哉を侮辱したな。よくも二人に夏哉を侮辱させたな。よくも私の大切な四人を傷つけたな」

私は、今までにないほどの怒りを込めて宣言した。

「殺すッ！！」

「！？沙鳥ちゃん、障壁！！」

ありったけの魔力を足に注ぎ、一気に解放した。
音速をも超える速さで殺人対象に迫った。

拳に炎を纏わせて、殴る。

しかしそれは、たった一瞬で沙鳥が展開した防壁に遮られた。
かなり固い。
が、そんなことはお構い無く殴り続けた。

一秒に五十発ほどの拳を繰り出した結果、三秒で防壁にヒビが入る。

その瞬間、すぐ後ろから魔力反応があったので反射的に右回し蹴りを繰り出した。

そして気付いた。

後ろにいるのは沙鳥ではないか？

視覚に長い黒髪をなびかせる姿を捉え、足を止めた。

それが仇となり、沙鳥は私の足を掴むと、掴んでいる掌から炎を出し、私を燃やした。

「あ、ガァ！！」

高温の熱を感じ、咄嗟に水魔法で足を守った。
そして足に力を込めて沙鳥の手から脱出した。
長い時間喰らったわけではないので軽い火傷で終わった。

距離を置こうとするが沙鳥から魔力反応を感じ、左へ急転換する。

直後、後ろから雷撃が襲ってきた。
それは私を貫けなかったため、Uターンして再び襲ってくる。
やっぱりコントロールできるか。

避けるのは意味がない、そう思い、立ち止まって相殺しようと構える。

下から金属の柱が突き上げてきた。
私を貫こうとしてるそれを視界の端にそれが見えたのでバック転で躱す。
柱は私を追いかけるように直角に曲がった。

クソッ、流石に初動が速すぎる。
それに二つの魔法を使ってもちゃんと別々に操作できているのもマズイ。

そんなことを思いながら、私を襲う二つを見る。
柱は速度が落ち、逆に雷撃は上がっている。

私は大きめの土弾を生成、雷に向け放った。
沙鳥はそれを図ったように雷を曲げて躱した。
曲げた先にあるのは、金属の柱。
雷は柱にぶつかり、柱は雷を帯びて私を狙った。
魔法を使った瞬間なので大きな隙が生まれてしまう。
必死に身を捩るが、脇腹に当たってしまった。

「い、グッ！！」

脇腹に激痛が走る。
その後時間差で、全身を刺すような電撃が走った。

「アアッ、ガァァァッ！！」

電撃が終わり、片膝を立てて顔をあげる。

そこには、凶悪な笑みを浮かべる沙鳥、無表情でこの場を見ている香苗、突然のことで理解できてない元凶がいる。
あんな笑み、あんな無表情をあの二人が浮かべてはいけない。

私は沙鳥の攻撃のお陰で頭が冷えた。

「沙鳥！ありがとう！！お前のお陰で頭が冷えた！」

だからまずお礼を言った。
沙鳥に罪悪感なんか覚えてほしくない。

まぁ無理だろうが。

対して沙鳥の反応は、

「は？何言ってるの？攻撃食らってお礼言うなんてマゾ？気持ち悪っ」

？マゾ？という言葉の意味は分からなかったが、恐らく私を罵倒する意味なんだろう。

話し掛けるの早めた方がいいかもしれないな。

私が言えば言うほど、向こうは言いたくない罵倒を言って傷付くだけだし。

「沙鳥ちゃん、気を付けてね。アレ、何か狙ってるかも」

「了解っ」

沙鳥に忠告する香苗。

分かっているとはいえ、躊躇いもなく？アレ？扱いをされるのはつらいな。

こんな状況をさっさと終わらすために、私は考えた。

どうすればあの元凶だけを倒せるか。

沙鳥と香苗は何を望んでいるのか。

夏哉ならこの状況をどうするか。

夏哉のことを思いだし、つられるように一ヶ月前の、私がルホンに操られたときのことを思い出した。

そう言えばあのときの夏哉の行動は救われた。

私は立ち上がる。

「沙鳥！香苗！言っておくがな、お前ら程度の攻撃なんか私にダメージなんか与えない！！もう無視できる程度だ！！」

「……ねぇカナ？アレ何言ってるの？」

「ごめんね、私も分からないけど、さっきの沙鳥ちゃんの攻撃でおかしくなったとか？」

「貴様らに言ってるのではない！！」

私の怒声を聞いて身を縮める二人。

「香苗！沙鳥！少しだけ我慢してくれ！！」

夏哉が言った台詞。
それを今度は私が使う。

重心を低くして、床を思いっきり蹴る。

「沙鳥ちゃん！」

香苗の声に反応して沙鳥が魔力を練り発動させるが、なんにしても当たらなければ意味がない。

間合いに入って拳を作り、沙鳥の意識を刈り取るために溝に捻り込む。

「うぁ……」

小さなうめきをあげる沙鳥――だが。

その溝は、鉄で出来てるように固かった。

その違和感を感じていると、

ドスドス

脇腹に強烈な痛みを覚える。
何事かと思い痛む場所を見てみる。

シャーペンとはさみ。

その二つが私の脇腹から生えていた。

その二つの先端の先をを辿ると、筆箱を持った香苗の姿。

「ざぁんねぇん。実は私のお腹には鉄が仕込まれてたんでした～」

軽い調子で言う沙鳥。
そうか、さっきの魔法はこれを仕込むためのか。

私は痛みのもとを取り除くために干渉機能を消す。
するとカシャッとシャーペンとはさみが落ち、そこから人間ではないことを証明する緑の血液が流れ落ちる。

それは床には溜まらず、すり抜けていく。
距離をとるために離れようとする。
そこを狙って沙鳥は、掌から紫色の霧を放ってきた。
なんだこれは？
魔族の私でもすべての魔法を知ってるわけではないので霧の効果を図りかねていると、指先が触れた。
「――――！？」
その瞬間焼けるような痛みを感じたので慌てて引いた。
指を見ると、爪と皮が若干溶けていた。
毒霧か。
これには覚えがある。
触れたものを溶かす効果がある。
私は腹部の傷を押さえながら炎でそれらを浄化した。
一息をつかぬ間に、上に影が落ちた。
見上げると、炎の拳を纏った沙鳥がいた。
「死んじゃえ」
私も魔法を使って防ごうとするが、固まってしまった。
沙鳥のその言葉を聞いて、ではない。
今の沙鳥を見てしまい――

私は頬に強烈な痛みが走り、下に落ちていった。

第五話　《九章》侮辱への怒り（後書き）

真樹「今回はわたくし、全く出番なしでしたわね」

作者「まぁほんとはね、もうちょっと続きを書こうと思ったんだけどね、もう五ページだし、いいかな～と」

アン「つまりアレだな、少しでも行を稼ごうと必死になってるわけだ」

作「そうとも言います」

真「しかし……第五話初めは十二話いくの？とか言ってましたが、意外と行けそうですわね」

作「そうだな。これなら十五話は行きそうだ。さすが俺、よく伸ばした」

ア「実はだな、最初の方の二章三章辺りの話は要らないんじゃないかという感想が――」

作「何！？そんな感想があるだと！？そんな馬鹿なっ！！」

ア「クーレラという人からもらった」

作「お前じゃねえか！！」

真「あぁそれなら、S病院に勤務してる人からももらいましたわ」

作「S!?Sってあれだろ!?早乙女総合病院だろ!?完璧お前の回しもんだろうが!!」

ア「作者」

作「なんだい急に?」

ア「ギャグがない」

作「いや無理だろうが今の展開じゃ!!」

ア「いやそれにしてもシリアス続きだろ」

真「そうですわね。今からタグにある?コメディ?を消してきなさい」

作「いいや待て!俺はちゃんと(少ない)と書いたぞっ!」

ア「?少ない?ではなく?ない?だろうが」

作「ぐぐぐ……だってさ!俺ユーモア線ねぇもん!」

ア「ユーモア線ってなんだ?」

真「手相のことですわ。ここにこういう線があるとユーモア、つまり面白いことを思い付く性格というんですの」

ア「へ~。人の手って性格とか分かるんだな」

真「完全にそう、というわけではありませんが。因みに、右手が生

まれたときの手相で、左手が今現在の手相ですの」

ア「え、手相って変わるのか？」

真「えぇ、変わりますわよ。まぁ一気にかわるということはないでしょうが、徐々に変化していきますの」

ア「真樹詳しいな。私の手相見てくれないか？」

真「いえ、わたくしも専門ではないので詳しくは分かりませんが……あ、アンさん、親指のところに目のような輪があるので記憶力いいですわよ」

ア「おぉ、ほんとかっ？」

作「……あれ？なんかいつの間にか手相の話になってね？」

第五話　《十章》止まらない悲しみ

「っ！？」

特別棟一階からの階段で二階に到着したとき、わたくしは五感ではない感覚器官で何かを感じ取った。
それが気になり立ち止まる。
確かこの感覚はどこかで感じたことがある。
因みに、どうして屋上にいたのに一階から二階に上がってるのかというと、屋上には鍵がかかっていて外に出られなく、夏哉に抱えられて飛び降りて、昇降口から入ったからだ。
約九ｍの高さからクッションも命綱も魔法もなしで飛び降り、足がジーンとしただけという夏哉は、本当にすごいと思った。

「真樹どうした？」

突然止まったわたくしを不思議に思った夏哉が訊ねてくる。

「いえ、今不思議な感覚が……」

「それ、重要なことか？」

夏哉が焦ったように聞いてくる。
実際焦ってるんだろう。
あの二人が戦っているんだ、無理もない。
わたくしだって早く駆けつけたいと言う気持ちはある。
しかし。

「えぇ、多分。もう少しなんですが……」

本当に何か重要なことのような気がする。

「OK。信じてやろう」

夏哉はそういうと、少し登った階段を戻ってきてくれた。

「早めに思い出してくれよ。俺は二階のこの近く見てるから」

「ありがとうございますわ」

「どういたしまして」

夏哉は首をキョロキョロしながら探し始めた。

わたくしは壁に寄りかかり、目をつぶって腕を組み、意味もなく人差し指で二の腕を叩く。

確かあの感覚は……昔施設で、魔法関連の時……

「っ！そうだっ！」

わたくしは壁から背中を離し、少し離れたところにいる夏哉に向かって叫んだ。

「夏哉！分かりましたわ！！」

「どうしたっ！」

夏哉が走って戻ってくる。

「先程のわたくしが感じた感覚、あれは幻術が切れた時の感覚ですわ！！」

「……ごめん、わけわかんない」

「ですから！幻術というのは、時間切れ、呪文、術者の精神不安定の時に切れますの。時間切れ、呪文は、いわゆる正式な解き方。術者の精神の方、例えば、大ケガをしたり、こちらに気を回せなくなったりしてしまうと、強制的に切れてしまうんですの。こちらは無理やりといいますか、とにかく正式ではありませんの。その場合、術に掛かってるものは反動を受けてしまいますの」

「待て待て待て、てことは何か？お前が感じたのってその反動？」

「術者のアンさんが優秀でしたのでそこまで感じませんでしたが、確かにそれですわ」

「じゃあ何か？今アンはピンチって――」

夏哉は途中で言葉を途切らせて、視線を一点に固めた。

わたくしを見ていない。

いや、見つめてほしいというわけではないけど。

その視線を追って振り返る。

しかし何もない。

「アンッ！」

夏哉は一階へ向かう階段を駆け降りた。
わたくしも訳が分からずついていく。
「夏哉！どうしたんですのっ！？」
「アンだ！アンが落ちてきたっ！！」
「ッ！？」
わたくしも真剣みを増して走った。
一階に到着する。
そこには生徒たちがまばらに歩いていたが、肝心のアンさんがいない。
「アン！どこだ！」
「夏哉！待ちなさい！！」
夏哉の肩を掴む。
「なんだよ！アンが心配じゃねぇのか！？」
わたくしは夏哉の頬を叩いた。
「落ち着きなさい」
わたくしの言葉を聞いた夏哉は落ち着きを取り戻した。

「悪い……」

「いえ。それで、聞きますけど、本当にアンさんを見たんですの？」

「ああ」

「しかし壁に穴は空いてない。つまりこの世界に触れられない状態で落ちてきたということは、床より下に行ってしまったのではありませんの？」

「ちょ、それどうすんの！？」

「……壊しますか？」

「まてぇい」

ペシッと頭を叩かれた。

「冗談ですわ。しかし、わたくしは見えませんのでどこにいるか分からないのですが……」

「ま、まぁそうだ――うをっ、いたー！！アン待て！」

夏哉がいきなり叫んだので周りのみんなが一斉にこちらを向いた。
それを気にすることなく夏哉は走り出した。
おそらくアンさんが床から出てきたんだろう。

念のため人払いの魔法を周囲にかける。
これでわたくしが認識した人物――わたくしと夏哉とアンさん――

以外はこの場から立ち去り、わたくしたちを認識できない。

「ちょ、おま！血が出て――真樹！来てくれ！」

「分かりましたわ。アンさん、よろしければわたくしに幻術をかけてくれませんか？解けてしまって」

わたくしが夏哉のもとに駆け寄ると、アンさんが見えるようになった。

アンさんは酷かった。

体の所々に焦げのあとが残っていて服はボロボロ。

特に右足と左頬がかなり焼けている。

右の脇腹からは血が流れている。

急いで治癒魔法を駆けるが、それをアンさんに払われた。

「私に構うな。このくらいは平気だ。それより数学教室だ。あいつはそこに行くって言ってた。早く行け」

「はぁ？お前放っておけるわけねぇだろ！！」

「私なんかどうでもいい！早くあの二人を助けに――」

「黙りなさい！」

わたくしの一喝で二人は叫ぶのをやめる。

「なんですか貴方たち！こんな非常事態によく言い合いなんてでき

ますわね！」

「だから早く行けって――」

「黙れって言ったでしょ？」

わたしは素に戻って、ドスの聞いた声でアンを諫める。

「いい？確かに沙鳥たちはピンチかもしれないけど、あんただってわたしの大切な人なの！両方大切なの！両方を天秤にかけるなんてわたしにはできない。だからまずは目の前の大切な人を救う！ふざけるな、なんて言わせない。これはわたしがやりたいからやるの。アンのためなんかじゃない、自分のため。だからアンは黙って治療を受けてろ」

アンはポカンとしてわたしを見た。

その隙にわたくしはアンさんを横にしようとするが、すり抜けてしまった。

「アンさん、触れられるようにしてくださいまし」

「あ、あぁ……」

戸惑うアンさんを余所に、わたくしはアンさんを横にして治療を始めた。

「え、何？この短時間に何があったんだ？」

アンさんは隣にいる夏哉に助けを求める。

「色々あったんだよ。それより、何があった？」

「……済まない、本当はあいつが何かする瞬間に出る予定だったんだけど、お前を侮辱されて……」

「我慢できなくなってバトったのな？ったく、ありがとな」

夏哉は頭を撫でた。

アンさんは少し綻んだが、すぐに暗くなった。

「……泣いたんだ」

突然の言葉に意味を図りかねたわたくしたち。

夏哉が追求する。

「泣いたって？」

「最後に、私を殴った沙鳥が、涙を流したんだ……」

アンさんは腕で目を隠す。

しかしわたくしたちはその意味が分からなかった。

言葉ではなく、アンさんの行動が。

アンさんは今つらそうだ。

もしアンさんの言ったことが本当なら、薬の効果が薄れているということになるのではないか？

「なぁアン？それって悪いことなのか？薬の効果が減ったってことじゃねぇの？」

「……違うと思う。いや、確証はない。夏哉の言う通りかもしれないが、そうじゃないと思う」

「では、アンさんはどう思ってますの？」

傷を二割ほど癒しながら先を促す。

「……薬の効果ってさ、体に強制力をかけるものだと思うんだ」

アンさんのその予相は、あながち間違ってないかもしれない。

そうなれば口調が変化しないと言うのも頷ける。

しかし、それを何故今言う？

「あいつは、その強制力も効かないくらい悲しんでるんじゃないのか？」

「「ッ！？」」

わたくしたちは息を飲んだ。

もしアンさんの言った通りならかなりマズイ。

大切な人を傷つけても、好きでもない男に身を捧げようとしても、まだその強制力は上だった。

それでも相当苦しい筈だ、痛い筈だ、死にたくなる筈だ。

それ以上、それ以上の悲しみを抱いているなら、精神（こころ）が死んでしまう。

「夏哉！大至急数学教室に行って！！場所は特別棟四階、そこの階段上がったら右にあるっ！！」

「分かった！！」

そういうと夏哉は、姿が見えなくなるほどの早さで走り去っていった。

この場にはわたくしとアンさんの二人きり。

「真樹、大丈夫か？」

アンさんが突然わたくしを心配してきた。

「今の貴方だけには言われたくありませんわ。そのまま返してあげます」

そういうとアンさんは少しだけ笑った。

「ふっ、そうだな。だがあいつの言葉を聞いて具合悪そうにしてたから、大丈夫かと思って」

アンさんは、本当にわたくしのことを心配してくれてたんだ。
いや、？は？じゃなくて？も？だ。
皆、こんなわたくしを心配してくれている。
それはすごく申し訳なくて、すごく心地いい。
「大丈夫ですわ。一応、夏哉に救ってもらいましたので」
屋上でのことを思い出す。
男は今でも怖い。
でも何故か夏哉だけは心が落ち着く。
夏哉が抱き締め――
「あ～、夏哉め、真樹も虜にし――って真樹！？顔真っ赤だぞ！？大丈夫かっ？」
「い、いえいえ！別に抱き締められたわけではありませんわ！！」
「あ、そうなのか。って待て！抱き締められた！？抱き締められたのか！？」
はっ、しまった。
口が滑ってしまいましたわ。
「なんだあいつ。あいつが女を抱き締めたら皆惚れるのか？」
「そうなんですの？といいますか、わたくしは惚れてません！！それより！早く傷を治して後を追いかけますわよ！」
「傷の治りは私にはどうしようもできないが……。ん、待てよ？香

苗は抱き締めてもらったか？」

「まだ言うんですの、それ？」

わたくしはあきれながらも治療を続けた。

後少しで完治だ。

「夏哉に言われただろ、昼。詰めすぎても駄目だって」

「そうですが……。流石に先ほど泣きそうだったのにすぐにころっと変わられては困るんですの」

「泣いた方がよかったか？」

「それはそれで困るのですが……」

「わがままだな」

「それはこちらの台詞ですわ」

しばらく黙って、お互い笑った。

意味もなく笑った。

「いや～、真樹が変わったから驚いたが、同じだったな」

「アンさんこそ、最初怖かったですわ」

「それは済まなかったな」

「いえいえ」

そう言って、そろそろ傷も治し終えたので治療をやめた。
完治せずとも、体が動かせればアンさんは大丈夫だと思ったからだ。

「アンさん、多少痛むかもしれませんが動けますか？」

アンさんは立ち上がる。

「ああ、このくらい平気だ。行こう」

「アンさん、ちょっと」

夏哉の先を追おうとするアンさんを止める。

「なんだ？」

「探知魔法なんて使えますか？」

「使えるが……必要か？数学教室にいると言ってたし」

「念のためですわ。向こうには香苗がいます。アンさんがその話を聞いていると仮定して別の場所に移動する可能性がありますし」

「分かった」

アンさんは目をつぶり集中する。

十秒ほど経って、眉をひそめた。

「おい、香苗が沙鳥とあの男と別れてるぞ」

「はい？」

「それで香苗は止まって、二人は走ってる。香苗はあったことのないやつがいるぞ」

「どういうことですの？」

まだ沙鳥様たちの薬の効果は効いてる筈。
なのに香苗が伊丹慎榎から離れるのはおかしい。
香苗ところにいる誰かが香苗を救ってあの二人が逃げてる？

分からない。
分からない、が、今は行動すべきだ。

「アンさん、我慢できないかもしれませんが、あの男はわたくし一人に任せてくれませんか？」

「私も殴りたいんだが」

「そこをなんとか。一応あの男のお陰で夏哉に救ってもらえたので、お礼を」

「……しょうがないな。じゃあ私は夏哉のところに向かう。あいつは今二階から三階のの階段を上ってる。お前たちの教室がある棟だ。行ってこい」

「ありがとうございますわ」

アンさんにお礼を言って、わたくしたちは走った。

第五話　《十章》止まらない悲しみ（後書き）

作者「やった～、『四人』と『その思いは』連続投稿できた～」

夏哉「……お前、今日何があった？」

アン「明日大嵐がくるんじゃないのか？」

作「失敬なッ！って言いたいんだけど、俺も驚いてるからいいや。すんごいスム～ズに書けたよ」

夏「まぁいい、それよりお礼言っておこう。空ねぇことｓｋｙｆｌａｒｅさん、感想やら新キャラの案等を出してくれてありがとうございます」

ア「毎回励ましの言葉をくれて嬉しいです。作者の役に立ってます」

作「あ、アンが敬語だと！？」

ア「読者は神だぞ？神にタメ口きけるか」

作「おっしゃる通りです」

夏「なぁ、本編で疑問」

作「何？」

夏「真樹が人払い使ったでしょ？そんときそこには誰もこれないんでしょ？」

作「そうだよ」

夏「つまりその廊下は誰も通れないから他の人は、一階だから大回りして昇降口に行かなきゃいけないってことだよな」

作「そうなりますな」

ア「普通に迷惑だな」

夏「ま、まぁそこは緊急事態ということで……」

ア「そうしとこうか」

作「ところ変わって皆さん、お願いがあるんですが」

ア「なんだ？」

作「活動報告の質問に答えてくれませんか？」

夏「いや、はしょらないで言えよ」

作「あのですね、もうじき『なのは』をだそうとするんですよ。それで、なのはの姉の美由希は兄の恭也のことをなんて呼ぶの？っていう質問なんですが」

ア「え～、もし分かる人がいましたら、活動報告にかいてください」

夏「無知の作者がすいません」

作「すいません……」

第五話　《十一章》確保された犯人

アンさんを傷つけた。

それは二人の心（わたしたち）を殺す行為に等しかった。

痛かったはずだ。

いろんな魔法を受けて。

しかしアンさんは、わたしたちのことを想って言ってくれた。

『この程度の攻撃なんて効かない』と。

すごく嬉しくて、すごくホッとして、すごく申し訳なくて、すごくつらかった。

アンさんはこんなにも私たちのことを想ってくれてるのに、私たちは傷つけることしかできない。

わたしの体は、敵とみなしてしまったアンさんを倒した沙鳥ちゃんのもとへ向かった。

「沙鳥ちゃん、お腹大丈夫？」

これは、一応本心でもあった。

多分アンさんが意識を落とそうとするために放った攻撃だから、ある程度手加減してくれたんだろうけど、心配は心配だった。

「うんっ、全然平気っ！」

そう振り返る沙鳥ちゃんは、笑顔で泣いていた。

「沙鳥ちゃんどうしたの？」

「ん？あ、泣いてる。目にごみでも入ったかな？」

嘘だ。

そんな程度じゃそこまで涙は流さない。

それは沙鳥ちゃんの本心だ。

夏哉君を、アンさんを、真樹ちゃんを傷付けてしまった悲痛の涙。

しかし、私の体は泣きたいのに涙を流せない。

それはつまり、悲しみが沙鳥ちゃんの許容量をオーバーしてしまったから。

私と沙鳥ちゃんの違いは人を傷つけた数。

わたしは口だけしか言ってないし、唯一の攻撃は投げ攻撃、正直実感がない。

それに対して沙鳥ちゃんは、何度も魔法を使ったし、最後は殴ると言う攻撃でまだ感覚が残ってる筈だ。

私でもつらいのに、沙鳥ちゃんはそれ以上につらい。

私たちは本当に死んでしまう。

「おい、終わったな」

伊丹慎榎が話しかけてくる。

私は、今まで感じたことのない怒りや恐怖をこの男に抱いている。
憎むことがよくないことは十分承知だ。
しかし大切な人を傷つけすぎたこの男に対する感情はどうしようもならない。

そして何より――

「あ、はい。終わりましたっ」

「慎榎様！お待たせしてごめんなさいっ。早くいきましょ！」

この感情を持っても何も出来ない私自信を憎んでる。

私はこんなにも無力だ。

そんな私でも、それなりには我慢したつもりだ。

だから、願ってもいいよね？
叫んでもいいよね？

助けて、と。

夏哉君助けて、と。

心から求めてもいいよね？

……

お願い夏哉君！
助けて！！
もう無理だよ！
耐えられないよっ！
なんで好きな人を傷つけなきゃいけないの！？
意味分からないよ！
嫌だよ！
傷付けたくないよ！！
泣きたいよ！
叫びたいよ！
笑いたいよ！
怒りたいよ！
なんで出来ないの！？
私何かした！？
悪いことなんてしてないよ！！
どうしてこんな思いしなきゃいけないの！？
どうして好きでもない人に好きだって言わなきゃいけないの！？
どうして好きでもない人に犯されなきゃいけないの！？
どうして、どうして……

どうして、好きな人に好きって言えないの？

死にたい、死にたいよぉ。
もう無理だから、夏哉君早く助けてよ。
私たちを救ってよ。
主人公みたいに現れてよ。

そんな、心に溜まったものを心に吐き出して、心に浮かんだ都合のいい話を心に願った。

実際夏哉君は、願っても来なかった。

分かってる。

思っただけじゃ来るなんてことはないって理解してる。

もしかしたら必死に私たちを探してるかもしれないし、怪我したアンさんを介抱してるのかもしれない。

でも願わずにはいられなかった。

すがらずにはいられなかった。

夏哉君はいつも傍にいてくれたから。

今度も助けてくれると信じて。

だから願い続けた。

意味がなかったとしても。

役に立たなかったとしても。

私にはこれしか出来ないから。

私たちの体が止まった場所、四階数学教室の扉を伊丹慎榎が開けた。

そこは薄暗く、あまり人の出入りが多そうな場所ではなかった。

「熊谷来たぞ」

熊谷。

もしかしたらその人はこの男の共犯なのかもしれない。
いや、十中八九そうなんだろう。

「お帰り伊丹君」

優しそうな声で現れた人物に、正直拍子抜けした。

どう見ても悪人には見えなかった。

痩せた体で夏哉君よりちょっと高い程度の身長。
そのせいで余計ひょろ長く見える。
髪は私より明るい茶色で、気の弱そうな顔をしている。
まるでこういう行動を起こすような人には見えない。

「お前もこいつら犯るか？どっちがいい？」

私は心だけ身構えた。

「え～、私慎榎様との方がいいですっ」

「でもぉ、慎榎様が言うんだったら、言う通りにします」

何故なら体がこんなだから。

「う～ん、そうだね～」

気の弱そうな笑みを浮かべながら、熊谷さんは言った。

「じゃあ両方で」

ビクン

私の肩が熊谷さんの言葉に反応した。

すると私は、いや私たちは熊谷さんのもとに歩いていく。

「おいちょっと待てよ。どっちか一人だ」

私たちが熊谷さんのところで止まると、熊谷さんは今まで浮かべてた表情とは一変して、冷徹な無表情を浮かべた。

「あぁ、君はもうどうでもいいや。ありがとね」

「……はぁ？何言ってんだよ？」

伊丹は訳が分からず疑問をぶつけている。

「分からない？君は用済み。僕もつらかったよ、君みたいなゲス野郎と組まなきゃいけないなんて」

その言葉に伊丹は怒りを覚えたようだ。

「ァンだと？おい沙鳥！！そいつをやれ！！」

「……」

しかし沙鳥ちゃんは反応しない。

「おい！」

「無駄だよ」

伊丹の叫びは熊谷さんの静かな一言で一蹴された。

「この子らは、僕の駒だ」

「チッ！！香苗！」

「だから無駄だって」

確かに、今のいたみのことばには全く強制力はなかった。

もしかして操られなくなった？

「沙鳥、あれを倒しといて」

「分かりました、熊谷様っ！！」

「あ、ご主人様にしておいて」

「はいっ、ご主人様」

違った。

ただ私たちを操る対象が変わっただけだった。

沙鳥ちゃんは風球を掌で生成、それを投げつけた。

「くっそ！どうなってるんだよッ！？」

伊丹はそれを躱し、教室の外に出ていった。

「ご主人様、追いかけてきますねっ」

「ちょっと待って」

走り出そうとしてる沙鳥ちゃんを呼び止めた。

「何かあると大変だから電話番号登録しといて」

「い、いいんですか！？」

沙鳥ちゃんは急いで携帯を取り出した。

「あの、私もいいですか？」

「いいよ」

私の体も勝手に動く。

でも、あの男よりは全然マシだった。

心に余裕が持てた。

赤外線で登録すると、沙鳥ちゃんは走り去った。

それを眺めていた熊谷さんはため息をついた。

「別にご主人様って言われてもなんとも思わなかったな」

そう言うと傍にあった席についた。

そこに置いてあるシャーペンを手にすると、くるくると回し始めた。

見ててすごい。

「ご主人様、私はご主人様って言わない方がいいんですか？」

ここで頷いてくれた方がいいな。

いい人とはいえ夏哉君以外にご主人様とは言われたくない。

……言ったことはないけど。

「いいや、言っといて。あ、そこ座っていいから」

「はいっ」

私の体は言われた通りに座った。

この人、何を考えてるんだろう。

体目当てじゃないだろうし……

「早く来ないかな～、――――」

――――――――――――

なんでだ。

どうして俺が沙鳥から終われなきゃならないんだ？

あいつは言った。
あの薬を盛れば沙鳥は思い通りになるって。
何をしても問題はないって。

嘘をついてたのか？
じゃあなんのために俺に協力求めたんだよ！！

後ろを振り返る。

少し離れたところから沙鳥が追いかけてくる。

チッ、しつこい！

俺は右に曲がって渡り廊下に出る。

たしかここは二階か。

走っていると目の前に三人ほどの女がいた。

「どけッ！！」

俺は女どもを手で払った。

「きゃあっ！？ちょ、何するんですか！？」

俺は無視して走り続けた。

後ろを向くと、沙鳥は俺が倒した女を起こしていた。

よし！

これで時間が稼げる。

俺は学年棟に辿り着くと、上に上がった。
下だと教師がいて厄介だからだ。

階段を登り、三階に差し掛かろうとしたとき、下から足音が響いた。

「チッ、もう来たのかよ！！」

俺は四階に向かって走った。
そこから飛び降りれば巻けるかもしれない。

疲れてきた足を動かし、四階まで行く。

取り敢えず端の非常用階段のところまで走った。

後ろが気になり、肩越しに見る。

やはりまだ追いかけてきた。

「しつこい！どうす――ウッ！？」

「きゃあ！？」

後ろばかりに気を取られていて、誰かにぶつかってしまった。

俺はその場に倒れる。

マズイ、このままじゃ追い付かれる！！

「いってて……。大丈夫――うわっ！？」

俺は立ち上がり、咄嗟に俺を邪魔した女を立たせ、首を腕でいつでも締めれるようにする。

ポケットからナイフを取り出す。

「く、くるんじゃねぇ！！」

ナイフを女の頬に近づける。

沙鳥は足を止めた。

「あ、あぁ……ゆ、夕馬くん……」

女は目の前にいた男――必死で気づかなかった――に目を向けた。

「種原さん！？」

男は声を荒らげた。

俺は徐々に下がっていく。

「いいか、来るなよ？沙鳥も！何もすんじゃねえぞ！！」

しかしそれを聞かずに手をあげ――

「沙鳥様！」

ようとしたとき後ろから早乙女真樹が飛び付き、右手で手首を、左

腕で首を回し、重力と慣性の法則に従いながら倒れた。
体をぶつけないように真樹は足をしっかりついた。

「真樹さん？」

男が真樹の名前を呼ぶ。

「夕馬に、あれは穂菜ですね」

二人は知り合いのようだ。

そんなやり取りを見ながら、後ろに下がる。
女は思いの外静かだった。

「真樹さん、どういう状況ですか？」

「ややこしいし時間がないので結論だけ言うと、あれをボコらなければならないということですわ」

「種原さんに関係は？」

「ありません。申し訳ありません、わたくしたちの問題に」

「分かりました。じゃあ種原さん救出は僕に任せてください」

「……分かりましたわ。しかしあまり事を荒らげたくないので……」

「分かりました。種原さん」

男は顔をこちらに向けた。

何かあると思い、立ち止まる。
男は朗らかな笑みを浮かべて、言った。
「もしかしたら苦しかったり、痛かったりするかもしれないけど、必ず助けます。なので待っててください」
「……うんっ」
女が返事をするとその場で思いっきり足を振り上げた。
そして何もない空間を蹴った。
すると足から上履きが飛んできた。
俺はそれを持ってるナイフで防いだ。
その間にもう片方の靴に右手を入れて男は走ってきた。
そしてその右手でナイフを凪ぎ払うと、俺の髪を握り、前に引っ張ってきた。
痛みに耐えられなくなって頭も引っ張られる方に持っていくと、額に思いっきり頭突きを喰らった。
痛さのせいで女を手放し、よろけてしまった。
「夕馬くん!!」
先程捕まえた女の声を聞いて、もう一度人質にとろうと思ったが、遅かった。

「よくやりましたわ、夕馬」

その間に真樹が俺のもとに走ってきて、左ストレートを溝に食らわせてきた。

「グガァッ！！」

俺はその場に踞った。

――――――――――――

伊丹慎榎を力の限り殴った。

しかし左だったため、右より力が弱かった。

まぁそれは置いといて。

夕馬と穂菜を見る。

額が赤くなってる夕馬は、穂菜に支えられている。

「大丈夫ですの？」

「まぁ、なんとか……」

「夕馬くん無茶しすぎだよ」

「全くですわ」

「そうですね……。それより、僕たちは退散させてもらいますね」

「助かりますわ」

夕馬と穂菜は四組の教室に入っていった。

これで残る問題はあと二つ。

今度は沙鳥様に目を向ける。

誰かと電話してるようだ。

「どうしましょう？……分かりました、すぐ戻りますねご主人様」

どうやら伊丹慎榎を襲ってたのは新しく入れ替わった？ご主人様？の命令らしい。

沙鳥様に命令を下すなど、そのご主人様とやらも殺らなければならないようだ。

しかしこちらもどうにかしないといけないし。

電話を切ってこの場から去ろうとする沙鳥様を呼び止めた。

「沙鳥様！どこに行くんですの！？」

「ご主人様のところ！」

明るい声で返されてしまった。

「そのご主人様は、どこにいるんですの？」

「数学教室だよ」

沙鳥様が素直な方で助かった。
だからわたくしは中の沙鳥様に告げた。

「沙鳥様！そちらには夏哉がいます！あいつならなんとかしてくれるので、涙はお拭きになってください！どうか、笑ってください！」

「……え、何急に。ど、どうか、したの？」

「なんでもありませんわ」

もう用はなくなったようなので沙鳥様は数学教室に戻っていった。

わたくしは伊丹慎榎を見る。

あの男はまだ逃げたいようで、地を這いながらここから遠ざかろうとしていた。

呆れてため息をつき、伊丹慎榎のもとに歩みよって学ランの襟を掴んだ。

「ヒ、ヒイッ」

無視して、屋上に繋がる階段を上っていく。
その際に階段にぶつかるが、気にしないでおこう。
わたくしは階段の途中の開けた場所で止まり、詰問する。

「さあ、洗いざらい喋ってもらおうか」

わたしは男に詰め寄った。

「な、何を……」

「ここでしらばっくれる？凄いな～。ねぇ、わたしって医者の卵だから、それなりに体のこと知ってるんだ。どこが痛いかとか。それに自殺についてもかじってるから、どうすれば苦しくなく死ねるか、どう知れば苦しく死ねるかとか、よ～く知ってるんだよね～」

「ま、ままま、待て、話す！知ってることは話すから！！」

「じゃあ質問。何を使って沙鳥たちを操った？」

「ま、魔法薬だよ！」

魔法薬？

聞いたことありませんわね。

「それって何？」

「く、詳しくは知らねぇけど、熊谷が作ったんだよ！！普通の薬と魔法を使って！！」

成る程、文字通り魔法薬か。

魔法であって魔法じゃない。

だからアンも気づかなかったのか。

「じゃああんたが使った魔法薬の効果は？」

「そ、その薬に自分のＤＮＡを入れて、異性に飲ませると、まず体力の低下、一晩寝て起きると熱。その時に心が変化していくんだ」

「変化？」

「好きなやつが妙にウザくなるんだよ」

そうか、だからお見舞いの時に夏哉に対して変わった反応を示したのか。

「それでもう一晩寝ると、心は正常化するけど体がその好きなやつのことを拒絶し続けるんだ。その状態で、薬にＤＮＡを入れたやつと顔を会わせると、そいつらは言いなりになるんだ」

「成る程、理解した。じゃああのときあんたが襲われてたのはまた二人に薬を盛られたってことだな？」

「そ、それは知らねぇ！俺だってわかんねぇんだよ！あいつら熊谷を見たら急にあいつの言う通りになりやがって！」

そこは本当に分からないらしい。

「その薬を作った人のフルネームは？」

「熊谷力斗（りきと）だ」

熊谷力斗。

その名前に聞き覚えはなかった。

さっきこいつ、また薬を盛ったって話の時熊谷の名前を出してたな。

つまり同一犯か。

「も、もう分かることはしゃべった。だから帰っていいだろ？」

「は？何言ってるの？」

わたしは手の甲を足で踏みつけた。

「イガァァ！！」

「見逃すわけないでしょ。わたしの大切な友達を傷付けたんだぞ？それ相応の罰は受けてもらわないと。と、その前に」

わたしはここに人払いと、周りに真空の壁を作った。

声とは、空気の震動によって聞こえるものだ。

つまり真空の壁を作ることによって叫び声が外には漏れない優れもの。

「安心して。殺さないし跡も残さない。血も流さないから。だから、存分に地獄を味わって」

耳をつんざくほどの叫びは、たった二人にしか届かなかった。

第五話　《十一章》確保された犯人（後書き）

夏哉「真樹お疲れ～」

真樹「お疲れ様でした」

作者「早速裏話でいい？」

夏「なんだよ急に」

作「ほんとはね、最後の真樹の報復、描写しようと思ってたんだよ」

夏「んで？」

作「妄想してたら気持ち悪くなってきたのでやめました」

真「しょうがありませんわ。あんなこと、一般人が耐えられるようなことではありませんし」

夏「お前も一般人だろうが」

真「いえ、わたくしは病んでますわ」

夏「自分で言ったよこいつ」

作「ある意味でヤンデレだな」

真「香苗には負けますわ」

夏「そ、そうだな……」

真「ところで作者！昨日バトンをやりましたわね？」

作「やったやった」

真「なんでアンさんなんですの！？あれ普通に人間の方がいいでしょ！」

作「だって今現在香苗と沙鳥は囚われのお姫様だし」

真「ではわたくしが！」

作「だってお前、メインヒロインじゃねえし」

真「なぁ！？」

夏「まだ言うか。つか真樹メインの話を書いてる時点でヒロインだろ。後書きにも何度も出てるし。確かに一、二話は出番らしい出番はなかったけどさ」

真「そうですわ！！」

作「だって、最終回の後半で出てこないのはヒロインじゃないでしょ」

真「どうしてもう最終回の話が出てるんですの！？」

夏「じゃあしょうがない」

真「納得しないでくださいまし！」

作「安心しろ、最終回は真樹後書き独占のつもりだから」

真「嬉しいんだか嬉しくないんだかよく分かりませんわね！！そしてそんな先のことは信用できませんわ！！」

作「だろうね。信じるか信じないかはあなた次第。ではまた次話に。感想待ってます。ｓｋｙｆｌａｒｅさんいつもありがとう！」

第五話　《十二章》黒幕の追撃

俺は人目なんて全く気にせず、全速力で四階に向かった。

走ってる間、ずっと二人のことを考えていた。

もしアンの考えが正しければ、あの二人はマズイ。

それこそ昔の真樹みたいに人嫌いになってしまう可能性がある。

間に合ってほしい。

自分の無力のせいで二人が嫌いになっちゃいけないものまで嫌いになってしまう前に、なんとしてでも間に合わないと。

息も切れぬ間に四階の数学教室に到着した。

こういうときだけは疲れにくい体はとても便利だ。

「香苗！沙鳥！」

思いっきり扉を開きながら叫んだ。

中を見ると香苗と一人の男しかいなかった。

その男は俺を見つけると立ち上がり、こちらに近づいてくる。

その後を、香苗が二歩下がってついていく。

まるでメイドだ。

「君、柊夏哉君であってるよね？」

学年章を見ると三年だと分かった。

「そうですけど。あの、伊丹慎榎って人来ませんでした？」

今どうして香苗が後ろについているのかも聞きたかったけど、今はこっちが優先だ。

あの野郎を殴らないと気がすまない。

「来たよ」

即答で返答されたので、食い入るように迫った。

「そいつは！今どこにいるんですかッ！？」

「知らないけど……」

そして男から、矛盾したような台詞を聞く。

「今沙鳥が始末しに行ってるよ」

沙鳥が伊丹慎榎を始末しに行ってる？

それはおかしくないか？

あいつは伊丹慎榎に操られていて、絶対服従させられているはずだ。

薬の効果が切れた？

あいつのことだ、あの男なんか気にしないで真っ先に俺らに合流し

ようとするはずだ。

何より、ここに香苗を置いていくような真似はしない。

「おい、どういうことだ？」

「どういうって？本当のことを言ったんだけど。それから、目上の人にタメ口はどうかと思うよ」

「……じゃあ質問を変えます。貴方は伊丹慎榎とはどういう関係ですか？」

「……」

少し間を開けると、ククックッと笑いを噛み締めていた。

「なんですか？」

いきなり笑われても困る。

いよいよ耐えられなくなったようで、大声で笑いだした。

「くッ、ハハッ、アッハハハハハハッ！！まさか、僕の言うことを聞くなんて！ハハハハハハ！！」

「あの、意味分かんないんですけど。それより質問に答えてください」

「うん、僕もよく耐えた。いいよ、教えてやるよ化け物」

その単語を聞いた途端、体を強ばらせてしまった。

化け物。

最近では自分で言っていた単語だったが、他人からは初めてあった真樹以来だった。

胸が締め付けられるような思いだった。

正直に言って、心のどこかではもう俺は化け物じゃないんじゃないかって思っていた。

そう思い込んでいた。

自分から化け物化け物言っていたのは、皆に否定してもらいたかったから。

だから、他人から言われてしまうと心が砕けそうになる。

もう一人じゃないと意識してしまったから。

「僕は熊谷力斗。伊丹慎榎の共犯、もっと言えばこの出来事の黒幕だ」

しかし、その砕けそうな心をなんとか留める。

「テメェが？」

「目上の人にタメ口はどうかと思うよ？」

「黙れ！さっさと二人を戻せよ！！」

「傷付いた？」

「何？」

突然の疑問に聞き返した。

傷付いた？

どういう意味がある？

「言葉の通りだ。お前は昨日からの二日間傷付いたか、と聞いてるんだ。胸が引き裂かれ、貫かれるような思いをしたか？」

「当たり前だろ！誰が友達操られて喜ぶ人間がいる！！」

「人間。ふ～ん、にんげんね～」

「なんだよ」

「お前、本当に人間なのか？」

ゆっくりと指を指されながら言われた。

「ど、どういう――」

「人間が、簡単にブロック塀を壊せることが出来るか？」

俺の言葉を遮りながら、続ける。

「人間が、ゴムボールでコンクリートに罅を入れることが出来るか？」

俺が過去にしてきたことを。

「人間が、どれだけ痛みつけられても平然としてられることが出来るか！？」

決して許されるものではない事実を。

熊谷は思いっきり俺の腹を蹴り飛ばした。

俺は反応することが出来ずに吹き飛ばされて壁にぶつかった。

あまり痛くない。

「おい立てよ。こんなの痛くも痒くもないんだろ？」

「夏哉！！」

アンの叫ぶ声が聞こえた。

そちらを向くと、スッと壁からすり抜けてきた。

「アン？」

「ん？何？アン？って？挑発してる？」

「ご主人様、恐らくステルス能力を持った召喚獣だと思われます。伊丹慎榎に従っていたときも現れました」

香苗は、熊谷が納得出来るような嘘をついた。

本当のことを言わないのは、それを言って嫌われたくないからなんだろう。

「なるほどね。柊夏哉、召喚獣を見えるようにしろ。五秒以内だ。
五」
「状況はよく分からんが、こいつも伊丹慎榎と同類だな？なら――」
「アン。頼む、言う通りにしてくれ」
「四」
アンの言葉を遮って頼み込む。
その間に一秒経過した。
「しかし――……分かった。それでいいんだな？」
「三」
何か言いかけて、折れてくれた。
「あぁ、頼む」
「分かった」
「二」
残り二秒になって、アンは幻術をかけた。
「ふぅん、召喚獣は女の姿をしてるのか。こんなのは見たことない、
が今はどうでもいい。お前、女を侍らすのが好きらしいな」

「それこそどうでもいいだろ？それより、どうして二人を変な風にした？早くもとに戻せ」

俺は睨み付けるように熊谷を見た。

「お～怖い怖い。まるで人間の威圧感とは違う。流石化け物だ」

「！？貴様！よくも夏哉を侮辱――」

「アンやめろ！！」

俺は飛び掛かろうとするアンの手を掴んで止める。

「なっ！？夏哉！どうして止める！？こいつは二人を弄んだんだぞ！？倒すべき悪だろ！？庇う必要があるかっ！？」

確かにそうだ。

こいつは二人を傷付けた。

傷付け過ぎた。

絶対に許しちゃいけない。

だけど。

それだけど――

「こいつは、俺の被害者かもしれないんだ」

熊谷を見ながが言う。

熊谷はその言葉が聞きたかったようで口許をあげる。

「あぁ、そうだ。僕はお前の被害者だ。昔、その男に心を傷付けられた」

人を人として見ていない目を向けてくる。

その視線を、？懐かしい？と思えてしまうのは末期なのかもしれない。

「し、しかし！昔のことなんだろっ！？」

俺の過去をほんの少し知っているアンは、なんとか俺にフォローを送ろうとする。

しかしそれを熊谷は打ち砕いた。

「三年前だ」

その時の怒りが込み上げてきたのだろう、顔を歪ませている。

対して、その時傷付け過ぎて、壊しすぎた俺にはどのことを言っているのか分からなかった。

「たった三年前だ。それを忘れろと？あぁそうか。お前はこいつの召喚獣だから都合よく知識が埋め込まれているのか」

「違う！私は夏哉のことが心配なだけだ！！」

「それを都合のいい知識って言うんだよ。いや、知識じゃなくて感情だったな。間違えた間違えた」

熊谷は面白おかしく笑う。

そんな態度にアンは怒りを露にする。

「貴様――」

「もしそうじゃないとしたら、化け物同士傷の舐め合いをしてるのか」

さらにからかうような言葉をぶつけてくる。

アンの限界は越えた。

あいつは人の神経を逆撫でるのがうまいらしい。

「取り消せぇぇぇッ！！」

アンが一気に距離を詰めよとする。

「アン待て！！」

俺は止めようとするけど、アンは聞かなかった。

アンと熊谷の間に香苗が割り込む。

手には文房具を持っている。

香苗はそれを投擲した。
的確にアンを狙う。

「こんなもの！」

アンは風で凪ぎ払う。
そのまま熊谷の頭を殴ろうとするが、止まった。

その瞬間に香苗がジャンプしたからだ。

タイミングはピッタリ。
もしそのまま殴っていたら、確実に香苗に当たる。

その隙をついて熊谷は右フックを出した。
アンはギリギリ防ぐが、踏ん張ることが出来ずに飛ばされる。

「いつか化け物相手に復讐するためにボクシングをやったんだけど、役に立ってるな」

そんなことは無視して、アンのところまで行った。

「大丈夫か？」

「あぁ、大丈夫だ。だが夏哉！昔のことは分かるが、だからといって躊躇するな！！あいつらがしたことを忘れるなっ！！」

「分かってる。分かってるけど！話を聞かせてくれ。どういう恨みがあるのか聞かせてくれ」

「……そうだな。でも、どんな理由でもあいつらの罪を忘れるなよ」

「あぁ」

俺は頷くと、熊谷を見る。

「教えてくれ。どうして二人を操るんだ？」

「それはお――」

理由を聞こうとした瞬間、熊谷の携帯がなった。
それを取り出すと、面白いものを見つけた子供のように笑う。
その笑みに無邪気さは皆無だが。

「天雲沙鳥からの電話だ」

「「！？」」

俺たちは肩をを震わした。

沙鳥。

伊丹慎榎を始末しに行くと言っていたが、どうなったのか気になる。

「少しぐらい待ってなよ化け物。短気だからって暴れまわるなよ」

俺に罵倒を浴びせてから電話に出る。

「夏哉、状況を教えてくれ。沙鳥は何をしてるんだ？探知魔法を使ったら、沙鳥と伊丹慎榎が香苗と別行動をしてたんだ。今真樹が追

ってるけど」

「簡単に言うと、二人を操る人物が伊丹慎榎からあいつ、熊谷力斗に変わったらしい。二人は共犯だ。それで沙鳥は伊丹を始末しに行ったらしい」

「なるほどな。一応納得は出来た」

アンはそう頷くと、熊谷を見る。

熊谷は淡々と沙鳥に話しかけ、頷いていた。

「ならすぐに戻ってこい」

そう言って電話を切る。

「報告してあげよう。伊丹慎榎は早乙女真樹が倒した。はぁ、本当は早乙女真樹も手中に納めるつもりだったのに、炭酸が嫌いだというのは計算違いだった」

やれやれと肩をすくめる。

そして俺たちは怒りで身を震わしていた。

真樹までも巻き込むつもりだったのか。

「アン、つらいと思うけど我慢してくれ」

「分かってる」

理性で怒りを押さえつつ、聞きたいことを喋る。

「早く教えろ。それにどうして仲間の伊丹慎榎を始末しようとしたんだ？」

「主導権は誰が握ってると思ってるんだ」

再び睨み付けられ、黙ってしまう。

「まぁいい、沙鳥がくるまでの暇潰しだ。まず二人を変えた方法は――」

ポケットに手を突っ込んで小さな小瓶を取り出す。

中には黒い液体が入っていた。

「この僕お手製の薬を飲ませた。なにで、は馬鹿らしいから聞くなよ。この薬は自分のＤＮＡを入れて完成する。恋愛感情を抱いている異性を嫌いになり、そのＤＮＡを入れた人を見ると恋心を抱き、盲目的に服従する効果がある。前半の効果が発動するのは二日目以降、後半は三日目以降だ。その他の症状は見てきただろ？」

一気に捲し立てる。

その説明は今のところ納得できている。

そして熊谷は続きを喋り出した。

「そしてこれに複数のＤＮＡを入れると、出会った順に恋心を抱く。つまり最初は伊丹慎榎に出会ったことで服従し、その後僕に出会ったため主導権が僕に代わり、僕に服従している」

それも理解できている。

しかし、分からないこともあった。

「どうしてこんなめんどくさいことをしてるんだ？あんたが最初から一人でやってればいいだろ？」

「それだとお前は今以上に傷付かない」

「は？」

「これは僕がお前に復讐するために設けた場だ。お前がたくさん傷付かないと意味がない。だからあの最低なゲス野郎に話を持ち込んだ。あんな、女に体だけを求めた関係を築こうとしているやつは駄目だ。それにあれはもう用なしだから始末してもらった」

？まぁ？と話を続けようとしたとき、ガラガラっと扉が開いた。

「ご主人様、戻りましたっ」

「お帰り」

「お帰りなさい沙鳥ちゃん」

「ただいま～」

一見いつも通りの香苗と沙鳥。

だが決定的に違うのは、俺達に話しかけないことと熊谷に付き添っていることだ。

「早乙女真樹は？」

「置いてきちゃいましたけど……連れてきた方がよかったですか？」

怒られるのでは、と怯えた様子の沙鳥。

それを見て全く態度を変えないままの熊谷は沙鳥に指示を出す。

「別にいいよ。君は香苗のもとにいて」

「分かりましたっ」

沙鳥は小走りで香苗の傍まで行った。

「話を戻そう。あれはゲス野郎だったけど、僕の望んだ通りに行動してくれたお陰で結果は上々だ。関係ない僕でも気持ち悪かったぐらいだ、お前もかなり傷付いただろ？これで僕の計画は完成した」

勝ち誇ったような笑みを浮かべる熊谷。

俺は頭の中で何かが切れたような感覚を覚える。

自分でも分かるくらいに顔がひきつっている。

「じゃ、じゃあ何か？香苗が、沙鳥が、真樹が、アンが傷付いたのって、俺の、せい？」

「ああそうだ！お前のせいだ！！お前が僕の大切な人を傷付けたせいだ！僕はお前に何一つしていない。お前もそうだ。お前は僕には何一つしていない。でも！！僕の恋人には傷をつけたッ！！どれだけ僕が傷付いたか！どれだけ僕が苦しんだか！！化け物のお前に分かるか！？お前がいるから周りが傷付く！！化け物だから！！人の皮を被った化け物だからッ！！お前には大切なものなんてないんだ！！すべてお前が壊す！！」

「あ、　いや……、あ、　ああああ、　あああああああああああああああアあああアあああああああああああああああああああああああああああああああああアああああああああああああああああああああああああああああああッ！！」

俺は踞りながらただ叫んだ。

自分自身を恨みながら。

第五話　《十二章》黒幕の追撃（後書き）

作者「マズイマズイマズイ！！最近マズイ」

真樹「いきなりなんですの？」

作「なんか今回スムーズに書けなかった。もしかしたらすごい駄文になったかも！」

アン「お、珍しいな。作者が自分で駄文って言うのは」

作「いや、どこがって言われたら正直困るんだけど、なんか駄目だった」

真「まぁ自分でどこが駄目だか分かるなら苦労はしませんわよね」

ア「作者はあれか？俗に言うスランプと言うやつか？」

作「ん～～～、どうなんだろうね～。なんというか、先のことを考え過ぎて今が全く思い付かない」

真「言っておきますけどね、それは自業自得でしょう。今まで何度失敗してきたか分からないのに次回予告なんかして。大方後書きで？『その想いは変わりますか？』に合わせて第五話を終了させ、雑談でお別れ会をやります？と宣言してしまい焦っているのでしょ？」

ア「もしこれを一気読みしてる人には分からないだろうが、昨日スピンオフの方を連続投稿したんだ。数を会わせるためにな。なんとしても合わせたいものだから今回の話を無理矢理にでも伸ばそうと

して、作者自信あまり納得出来ていないものが出来てしまったということだ」

作「か、返す言葉がありません……。しかし！後悔はしていません」

真「これからは、読者には申し訳ありませんが次回予告をしないようにしなさい」

作「でも失敗しないと成長しないでしょ！」

真「次回予告に失敗も何もないというツッコミはこの際やめて、失敗もし続けたらただのバカですわ」

作「ですよね～」

ア「正直に言うとだな、この話だとあまり感想は望めないと思うんだ」

真「アンさんしっかりしてくださいまし！今までのでも感想は望めないものでしたわ！！」

ア「あっ！？そ、そうだった……。クソッ私としたことが！」

作「あの～、本当のことなんですけど、ちょおっと言い過ぎじゃない？」

真「でしたら感想をたくさんもらえるような小説を書きなさい」

作「が、頑張らせていただきます」

ア「じゃああれだ、これを読んだらみんな感想を書いてくれ」

作「やめなさい。もしそんなことをしたら？感想書きたくねぇ？って理由で読者減るぞ！そんなことになるくらいなら感想なんて要らない！みんな！感想なんて書かないでくれ！！」

真「感想を求めない作者というのも珍しいですわね……」

ア「まずこの馬鹿以外いないだろ」

作「あ、やっぱほしっす」

ア&真「「どっちだ」」

第五話　《十三章》取り戻す正気

夏哉が叫び出した。
私はあの男に怒りが沸いたが、今は夏哉が優先だ。
夏哉の肩を掴み揺さぶる。

「夏哉、落ち着け！しっかりしろ！！」

「俺が……みんな……傷つ、……俺が、俺が……」

チッ、今の夏哉には無理か。

心の中で舌打ちをしながら熊谷力斗を睨み付ける。
諸悪の根元をここで倒して二人をもとに戻す。
それで皆で夏哉に無事を証明すれば正気に戻る筈だ。

私は残り半分以下になってしまった魔力を節約するため、脚力のみで熊谷との距離を縮める。

その瞬間沙鳥が炎弾を放つ。

相殺すればその時に隙が出来てしまう。

あらゆる炎弾の軌道を予測してそれを躱す。

しかし炎弾の軌道が変わることはなかった。
てっきり変わるものと思ったため拍子抜け――

「へぇ、かわしていいんだ」

沙鳥の言葉にハッとなって振り返る。

そこには炎弾が見え、さらに先には夏哉がいた。

夏哉は躱す素振りを見せない。

間に合わない！

「夏哉！」

叫んだ瞬間炎弾が夏哉に被弾する。

呻き声をあげた。

私は行き先を転換し、夏哉のもとに戻る。

「夏哉！大丈夫か！？」

私の呼び掛けはどうやら夏哉には届かなかったようだ。

呟きは止まったが、依然として虚ろな瞳をしている。

特に目立った外傷はない。

「香苗！沙鳥！夏哉は無事だ！！なんてことはないっ！」

私は叫んだ。

少しでも二人の罪悪感を拭いされるようにと思って。

「はっ、炎の球を喰らって無事とか、本当に化け物だな。人外」

「えっと、じゃあ火力あげてもう一回やった方がいいですか？」

「そうだな。やってみ――」

バンッと思いっきり扉が外れた。

誰がこんな乱暴な開け方をするんだと思って目を向けると、真樹がいた。

足をあげてることから扉がを蹴り飛ばしたんだろう。

確かあれスライド式なんだが。

そんなどうでも良いことを考えていたら、真樹は熊谷を指差す。

「貴方、熊谷力斗ですわね？」

「ああそうだ。あのクズから聞いたのかい？」

「クズ……。つまりあれは捨て駒だったわけですか」

「頭の回転が早いね。で、あれはどうなったの？」

「聞くこと聞いたら寝かしておいてあげましたわ。もう断末魔がうるさくてうるさくて。寝付かせるの大変でした」

「君、見かけによらず過激なんだ」

「えぇ。まぁ、話はこの程度で。一応聞きますけど、沙鳥様に？ご主人様？と呼ばせてるのは貴方ですね？」

「そうだと言ったら？」

「寝かしつけます」

会話をやめ、真樹は一気に駆け出した。
右拳を作っている。

沙鳥が前に出ようとするのを熊谷は手で制す。

「あぁどうしよう。柊夏哉がいるせいで僕が殴られて傷付いてしまう」

熊谷の言葉に夏哉が反応した。

その瞬間、生気が蘇ったかのように夏哉は動き出す。
私を押し退け、一瞬で真樹と熊谷の間に入る。

「夏哉！？」

真樹は既に殴るモーションに入っていて止められない。
そのまま夏哉の頬に拳をぶつけ吹き飛ばされる。

「へぇ、化け物でも盾になるのか」

ゴミを見るように夏哉に目を向ける。

「夏哉！貴方何するんですの！？まさか貴方も――」

「誰がこんなのを服従させるかッ！それに服従できるのは異性だけ

だ」

真樹の言葉を一蹴する。

「夏哉っ！」

私は飛ばされた夏哉の方に向かおうとするが――

「沙鳥」

「はぁ～い」

沙鳥に遮られてしまう。

真樹のところまで引いて体勢を立て直す。

「アンさん、どういうことですの？」

「詳しくは知らんが、どうやら三年前あいつの大切な人を夏哉に傷付けられたらしい。これは夏哉に対する復讐だ、と言っていた」

「つまりさっきのは罪悪感の行動、ということですか……。しかしマズイですわね。これだと夏哉は期待出来ませんわ……。手っ取り早いのは復讐心を消すこと、ですか」

真樹が一人でぶつぶつと喋ってると、顔をあげた。

「熊谷力斗！この復讐は貴方の意思ですの！？それともその大切な人ですの！？」

「僕の恋人がこんな汚ならしいことをするわけないだろ！」

汚ならしいって……。

お前自覚あったんだ。

「ではその大切な人の名は！？」

「なんで言わなきゃならないんだ？」

「夏哉に知ってもらった方が良いのではなくて？」

「……いいだろう」

その言葉で倒れたままの夏哉も熊谷を見る。

熊谷は口を開いた。

「根本雅也（ねもとまさや）だ」

この場が固まった。

え、恋人って……男同士で？

一番最初に言葉を発したのは夏哉だった。

「根本雅也……。思い出した。あの時、俺の蹴ったボールが左

腕に当たって……」

「そうだ！骨折したんだ！何も罪はないのに！！雅也は中学剣道最後の試合だったのに！！大切な時だったのにッ！！お前に分かるか！？必死だった雅也が、お前みたいな化け物のせいで大切な試合に出られなくなったんだぞ！！」

熊谷が夏哉に叫ぶ。

しかし私には正直それどころではなかった。

隣にいる真樹に訊ねる。

「な、なぁ真樹。恋人って、お互いがお互いを愛して一緒にいる関係だよな？」

確か前に読んだ本にそう書いてあった筈だった。

もしかして見落としてたか？

「……」

「真樹？」

しかし返事がないのでもう一度声を掛ける。

「あっ。申し訳ありません。えっと、そうですわ」

「私、恋人は異性同士だと思ってたんだけど……この世界では違ったか？」

「いえ、異性同士ですし、婚約は同姓じゃ無理ですわ。まぁ恋人なら禁止されてませんが……」

真樹に説明してもらってるが、何故か顔色が悪い。

「真樹、どうした？」

「い、いえ……。ゲイの――あ、ゲイというのは男しか愛せない男のことなんですが、それを想像してしまったら気持ち悪くなってしまい……」

「それだよ！」

熊谷は怒気を込めた言葉を私たちに放ってくる。

「そういう偏見があるから差別が起こるんだ！！」

「生憎わたくしは、男同士が嫌いではなく、男自体が嫌いなもので」

あれ？

なんか話ズレなかった？

「関係、ねえよ」

と、ここで今まで黙っていた夏哉が喋り始めた。

「俺がこいつの大切な人を傷付けたことには変わりない……」

「そうだッ！！お前のせいだ！！お前さえいなければ良かったんだ！！」

「俺は、どうすればいい？何をすれば気が済む？」

「夏哉！やめろ！！そんなことしたらあいつの思う壺だろう！！」

私は必死に夏哉の正気を呼び覚まそうと叫ぶ。

「黙れッ！！沙鳥、香苗！お前らあいつらを黙らせろ！！」

「「分かりました」」

熊谷の指示で香苗と沙鳥がこちらに来た。
香苗はそこいらにある小物を、沙鳥は魔法を使って攻撃してくる。

私たちは躱したり撃ち落としたりして防ぐ。

意識は夏哉に向ける。

「さて、どうすれば気が済む、ねぇ」

ゴッと夏哉の顎めがけて蹴りあげる。
夏哉は全く抵抗せずに仰け反る。

次は拳で後頭部を殴り付ける。
やはり抵抗しない。

それを何度も、何度も繰り返す。

私も何度も、何度も繰り返し叫ぶが全く聞き入れてもらえない。
まるで熊谷の言葉しか聞こえないようだった。

「アンさん、わたくしたち友達ですわよね？」
突然隣にいる真樹が変なことを聞いてきた。
意味が分からなかったから聞き返したかったが、時間がないのですぐに簡潔に答える。
「当たり前だろ」
「ではわたくしのやることを信じてくれます？」
「何やるかは知らないが、お前のやることだから信じよう」
「ありがとうございますわ。なら十秒だけ、時間を稼いでくれませんか？」
「この状況を打破させられるのか？」
「夏哉次第です」
「分かった。十秒なんて余裕だ。一分だろうが十分だろうが、守るだけならやってやる」
「助かります」
私が見栄を張って答えると真樹は目をつぶり、右手をあげて大量の魔力を練り始めた。
その手には炎が集まりだしている。
私は真樹の前に出て分厚い岩壁を造り出す。

これで時間は稼げ――

ドゴォン！！

一瞬で砕けた。

壊した主は当然沙鳥だ。

マズイかな？

ただでさえ少ない魔力も消費しちゃってるし。

ま、頑張るか。

沙鳥が一瞬で炎弾をを十数個作り出し、攻撃のためとしては遅めの速さでこちらに向かってくる。

相殺させようと水弾を造り出すが、その後沙鳥は、また一瞬で風弾を同じくらい造り出してそれぞれの炎弾にぶつけた。

風を含んだ炎は膨れ上がり、爆発した。

私は水弾をひとまとめにして障壁にした。

ジュウウウと蒸発する音が聞こえる。

その中から二つの物体が切り裂いてきた。

それらはカッターだった。

恐らく、というか確実に香苗だろう。

撃ち落とすには時間がないので本来なら躱すところだが生憎後ろに真樹がいる。

私は腹でカッターを受け止める。

「グッ、アアッ！！」

すぐにそれを抜く。

本日四度目の腹空き。

全然なれない。

「――！！ゴホッゴホッ！？」

痛みに耐えられなくなり倒れこむと、急に胃の辺りが変な感じになったので咳き込み、口から血を吐いた。

血が胃に入ったのか。

「アンさん！大丈夫ですの！？」

「馬鹿！気にするな！！それよりまだか！？」

痛みに顔を歪めながら真樹に聞く。

そろそろ防ぎきれないかもしれない。

「安心してくださいまし。完成しました」

真樹を見ると、圧縮された炎の塊があった。

気温も上昇してきた。

私は自分に微力ながら治癒魔法をかけ、成り行きを見守った。

「えー、ここで一発っドッカーンといきたいと思います！！」

「ブフッ！？」

真樹の言葉に思わず吹き出してしまった。
口と腹から血があふれでた。
皆も固まっている。

「ま、真樹？」

すると真樹から魔力反応が――

「な、なんなのあなた……！！死ぬ気！？」

沙鳥が真樹に呼び掛ける。

「わたくしがここに来たのは、この部屋に好きな人がいるから。その人を守るタメにね。でも」

真樹は言葉を区切る。

てかなんか、真樹の口調変わってないか？

「助けられないなら心中する。憧れてたんですわよね。究極の愛」

ま、真樹、壊れたのか？

「ぐぐ……、だったらやられる前にやる！！」

沙鳥は真樹に雷撃を放つ。

私はなんとか立とうと腕に力を込めるが、

「アンさんは伏せていてください」

真樹にそう言われたので言う通り力を抜いた。

真樹、本当に信じてるからな。

?あ、それから?と真樹は雷撃が迫る瞬間に言葉を紡ぐ。

「沙鳥様、もう行動には移してますの」

雷撃が真樹を貫いた瞬間、真樹が揺らめいた。

そして消滅してしまった。

「蜃気楼をご存じですか?」

どこからか真樹の声が聞こえた。

首を回して探すと、なんと真樹は夏哉の傍にいた。

炎の塊は持っていない。

「熱によって空気が揺らいで密度が変わり光が屈折して別の場所に像を作る。因みに音は風魔法で消したり、別の場所から聞こえるようにしたりしましたの」

真樹は、種明かしをするといまだ固まっていた熊谷を蹴り飛ばした。

そして同じく固まっていた夏哉を、殴りだした。
しかも一発のみではなく二発三発、先程の熊谷同様にボコボコにし始めた。

「な、真――」

私は真樹に抗議しようとして、やめた。
真樹は私に?信じてくれるか?と聞いて、私は真樹に?信じる?と言ったんだ。
信じないでどうする。

しばらく殴り続けてると、急に真樹は夏哉の胸ぐらを掴んだ。

「夏哉、どうしてわたくしが殴ったか分かりますか?」

顔を少し腫らした夏哉が答える。

「俺が、お前を傷つけ――」

「はい残念」

今度は頭突きをお見舞いした。

「貴方屋上で言いましたわよね?『怖いなら俺を殴ればいい』って。今わたくしは怖いですわ。沙鳥様と香苗を操ってる熊谷力斗が。そんな男の言いなりになってボコボコにやられて、わたくしの知ってる夏哉が消えてしまいそうになってる柊夏哉が。貴方こうも言いましたわよね?『お前が泣いて助けを求めるなら、全力で助ける』、『俺を救ってくれた皆を幸せにしたい、恩返しがしたい』。今の柊

夏哉は、それが出来ますの？わたくしの知っている柊夏哉は、自分が傷付けた相手だろうとなんだろうとそいつが大切な人を傷付けたら、そいつをぶん殴ってやる。大切な人が助けを求めていたら、例え誰が相手だろうが闘って大切な人を守る。それが柊夏哉でしょう！？貴方は！！自分の過去を引きずって泣いてる香苗を、助けを求めてる沙鳥様を放置する気ですの！？違うでしょ？助けなさいよ！立ちなさいよ！！恩返しするんでしょ！？幸せにするんでしょ！？だったら！ここで動かないでいつ動くんですの！？」

真樹は声を裏返しながらも叫び続ける。

「もし力が足りないと言うなら、立ち上がれないと言うなら、何度でも手を差し伸べますわ。何度でも貸しますわ。貴方がわたくしにしてくれたように」

ひとつの手が、一人の男の前に差し伸べられた。

男は、今まで放っていた虚ろの目から活気ある目に変わり、その手を掴んだ。

「真樹、ありがとう。目が覚めた」

「どういたしまして」

「こう言ってはなんだけど、力は足りてるんだ。アンを治してやってくれ」

「分かりましたわ」

真樹がこちらに来る。

夏哉は右手で拳を作り左の掌にぶつける。
パァンと乾いた音が響く。

「よぉし、反撃開始だ！！」

第五話　《十三章》取り戻す正気（後書き）

作者「夏哉～！！お帰り～っ！！」

夏哉「ぬわっ、なんだ作者気持ちわり……」

アン「いや実は前回お前壊れたからメッセージのやり取りをするとき、いつも夏哉なところ真樹に変わってもらったんだ」

夏「メッセージ？つうと空――」

作「まてまてまて！名前は言ってやるな。印象が悪くなってしまう可能性があるから！！」

夏「誰のだよ？」

ア「送ってきてくれた人の」

作「とにかく、お前が帰ってきてくれたお陰でその人とも普通のやり取りが出来るんだよ！」

夏「ま、まぁお疲れ様」

ア「ところで作者、途中真樹がおかしくなったんだが……」

作「あぁ、四ページ目のあれね。よく気がつきました」

ア「いやあれは気づくも何もないと思うが……」

作「ここで読者の皆さんに問題です。あれはある漫画の台詞を丸パクリしました。多少は変わってますが。さて、それはなんの漫画の台詞でしょうか？ヒント、最近俺がはまったものです」

夏「まて！ヒント絶対意味ないだろ！皆作者がはまってる漫画知らねえし！！」

作「え～。じゃあ、漫画のタイトル。？ギ？から始まって？ル？で終わります。答えは感想にね」

ア「そうまでして感想がほしいか……。で、正解したら何かあるのか？」

作「ひとつだけ要望を聞きます。それを絶対に答えます」

ア「じゃあ例えば、『今すぐ真樹と夏哉をくっつけさせろ』でも？」

作「無理です……」

夏「『あと十話で小説を完結させろ』でも？」

作「無理です……」

作「無理です……」

ア「『作者死ね』でも？」

夏「『今すぐ柊夏哉の彼女を選んで付き合わせろ』でも？」

作「無理です……」

夏＆amp;ア「「無理ばっかだな」」

作「お前らひどいよ！！読者の皆々様！！どうかこの二人のようなひねくれた考えを持たないで要望をしてください！！」

ア「というよりまずその要望が来ないだろ」

作「く、くそっ！！折角読者密接型小説を書こうと思ってたのに！！」

夏「いや、それただの他力本願じゃねぇか」

第五話　《十四話》反撃返し

俺は目の前にいる三人を視界に入れる。

香苗、沙鳥、熊谷だ。

俺は香苗と沙鳥に宣言する。

「二人とも、悪かったな。俺はもう傷付かない！そんで、絶対熊谷から取り戻す！！」

それを聞いて、熊谷は言葉攻めをしてくる。

「取り戻す？お前のせいで傷付いて去っていった奴等を？よくもまぁそんなことが言えたもんだなぁ？あぁ？」

今までだったら言われるがままの状態だったが、真樹が俺に激をいれてくれたためにちゃんと立ち向かえる。

本当に真樹が友達で助かった。

「去っていった？そんなんお前が薬で強制的に操ってるだけだろ？」

「それだとしても、だ。こいつらを傷付けたのはお前のせいだ。化け物のお前が存在してるからだ！第一化け物が、人非ざる物が人を救えるわけがないだろう！！」

「そうよ！私の炎弾食らって平気のような男が人を救うなんて絶対無理！！」

「第一人の皮を被ってるだけで、人の心が分かってないのに何が出来るって言うんですか？寝言は寝てから言ってください。あ、化け物だから立ったまま寝れるんですか？流石人外ですね」

熊谷に続いて沙鳥と香苗も罵倒を浴びせてきた。

ふん、この程度。

「言っておくがな、昔のことを思い出してきた俺だぞ？はっきり言ってその程度の罵倒、全くの罵倒に非ず。毛ほども効かぬわ！！」

「真樹、今度は夏哉が壊れたぞ。なんだ？この部屋に入ると人間は全員壊れるのか？」

治療を受けているアンが真樹に疑問を投げ掛ける。

「いや、それはどう――ってその？壊れた人間？の中にはわたくしも入ってるんですの！？」

「正常の人間がドアを蹴り飛ばして、炎の塊を持ちながら急に軽いテンションに変えるか？」

「いえ、だからあれは演技で！！」

「だったらもう少し変えろよ。雰囲気ぶち壊しだ」

「それを言ったらこの会話が既に雰囲気ぶち壊しですわ」

真樹、確かに言う通りだ。

非常に頷ける。

だがまぁそれは置いておこう。

俺は空気を変えてアンと真樹に呼び掛ける。

「アン、真樹、聞きたいことがあるんだが」

「なんだ？」

代表してアンが答える。

その口調にふざけは全くない。

「俺って化け物？」

「あぁ化け物だ。それは事実だ」

「貴方を化け物と言わなかったら誰のことを言うんだ、て感じですわね」

二人に即答された。

二人は俺の、化け物たる理由をつらつらと述べていった。

「校舎を魔法なしで飛び越えたり飛び降りたり出来るなんてあり得ませんわ」

「背中に致命傷を喰らってかなり出血したのにその傷が一瞬で治ってピンピンしてたし」

「一殴りで木造とはいえ壁を破壊したり火の海に飛び込んで平気だったり」

「一世界の王を生身の体で倒したり姿が捉えられなくなるほどの速

さを脚力のみで出したり、神に啖呵切ったり」

ボロクソ言うなお前ら。
まあ全部事実だけど。
そしてアンの最後のは別に化け物関係なくね？

「「でも」」

二人はまた言葉を続ける。

「そんな夏哉でもわたくしを助けてくれた。わたくしのことを知って、知った上でもまだ友達と言ってくれた優しい人ですわ」

「人間外の私を、なんの警戒もなく助けてくれたり、私の居場所を作ってくれたり私のために怒ってくれたり。優しい奴だ。どれだけ救われたか」

真樹が、アンが俺のお陰で救われたと言ってくれた。
優しい奴だと言ってくれた。
化け物でもいいと言ってくれた。

こんな嬉しいことはない。

「だとさ熊谷。こんな俺でもよ、少なくとも二人は救えたんだ。こいつらがいるんなら、俺を認めてくれるなら、俺は消えるつもりもないし、こいつらのために全てを賭ける」

「いいでしょう、認めますわ。化け物であり、とても人の心が分かる柊夏哉はここにいてもいい。わたくしの友達ですわ。他の誰もが否定したとしても、わたくしは否定しません」

「認めよう。柊夏哉は私の大切な人だ。こいつほど人を想って何かしようとしてるやつはいない。私たちのことをいつも考えてくれている。他の誰もが否定したとしても、私は否定しない」

二人がはっきりと、俺を認めてくれた。

だから俺はここに残れる。

だから俺は誰かを守れる。

「というわけだ熊谷！確かに俺はお前の心を傷付けた！それは否定しない。でも！だからって関係ない香苗と沙鳥が傷付いていい理由にはならない！！俺は二人を助ける！嫌われたとしても、俺を救ってくれたやつのために助けてやる！」

「戯れ言を！！香苗、沙鳥！行けッ！！」

「「はいご主人様」」

香苗は両手に文房具を三本ずつ、指に挟んで構えている。

沙鳥はノーモーションで炎弾やら雷やらを無数に生み出して襲わせた。

俺はそれを躱し続ける。

俺の動きを読んだのか、香苗が俺が躱せない軌道で左手に持っているカッターにシャーペン二本を投擲してきた。

俺はそれを、風魔法で弾く。

その後ろから沙鳥が炎弾を放っていた。
俺の風が影響して膨れ上がっていく。
俺はなんとか出来ないかと思い、炎弾に力の限り回し蹴りを繰り出した。
その行動が幸をそうしたようで、足が炎弾に当たり、切り裂いて消滅した。
あんまり熱くない。
「……アンさん、蹴りで炎弾は消えるんですの？」
「普通は足が焼けるな。だが夏哉のあり得ないほど速い蹴りの風圧で足には触れず、蹴りの衝撃で炎弾が消えた、ということだろう」
ボソボソッと二人の会話が聞こえた。
はぁ、流石俺だな。
規格外過ぎる。
「クソッ！だったらこれだっ！！」
沙鳥が悪態をつくと、俺を囲うように紫の霧が現れた。
「なんだこれ？」
「夏哉！それに触れると溶けるぞ！！」
俺の疑問にアンが簡潔に答えてくれた。

なるほど。
これは……なんとかなるか？

霧との間はかなり狭い。
というか迫ってきてるので、足を振りかぶるということができない。
なので俺は足を床につけたまま、振り上げた。

ザァッ

目の前の霧が切り裂かれた。

俺は自分で作った出口から抜け出す。

その瞬間、目の前にコンパス三本が俺を襲う。
それを認識すると、反射でそれらを殴り付ける。
殴られたコンパスは床に叩きつけられる――ことなく粉々に砕けた。
……コンパスって砕けるんだな。

そんなどうでもいいことは隅に置いといて、香苗と沙鳥がまだ側にいるのを確認する。

一気に距離を詰めて二人の前に行く。
二人は身を強張らせる。

俺は両手を広げて――

二人を抱き締めた。

「ちょ、離せ！や～め～ろ～！！」

「さ、触らないでください化け物！」

二人の言葉を無視して、耳元に囁く。

「二人とも、俺のせいでほんとごめんな。痛かったよな？つらかったよな？これは夢だ。ただの悪夢。だから目が覚める頃には何事もなかったように、二人ももとに戻ってるよ。だから、もう少し寝ててくれ」

抱き締めている手を離すと、二人の鳩尾に拳をぶつけた。

「「ぅあっ……」」

呻き声をあげた二人はそのまま倒れていった。

俺は二人を支え、アンたちがいるところに戻った。

「取り敢えず、二人見ててくれねぇか？」

「言われなくても見ますわ」

「アンの傷はどうだ？」

「平気だ。だいたい五割っていったところか」

「アンさんの治癒能力は高くて楽ですわ」

アンは大丈夫みたいだな。

ひとまず安心して、熊谷を見る。

守るものがいなくなった熊谷を。

熊谷はたじろぐ。

「お、お前は！僕を傷付ける気か！？昔と同じように！！」

「香苗と沙鳥をもとに戻す薬は？」

俺は熊谷の言葉を無視して訊ねる。

「誰がお前なんかの化け物に教えるか！？」

「なら聞き出すまでだ」

俺は一歩で熊谷の前に行くと、顔面めがけて拳を放ち――寸どめする。

風圧によって熊谷は飛ばされる。

机のある場所で倒れたため大きな音を立てる。

「テメェ……」

「解毒剤をください」

「舐めんなッ！！」

熊谷は怒りながら土弾や水弾を放ってくる。
ここで炎を出さないということは火属性が使えないようだ。
俺はなんにもせず、ただ熊谷を見据えて立っていた。
弾が俺に直撃すると、粉塵が舞う。
「ははっ、やった……」
「本当にそう思ってんのか？」
熊谷がビクッと凍り付いた表情が簡単には目に浮かんでいる。
俺は目の前を手で払うと粉塵が晴れる。
熊谷を見ると、思った通り表情が凍り付いていた。
ひとつ歩みを進める。
たったそれだけで熊谷は『ヒイッ！！』と恐怖しかない表情を浮かべ、俺から離れようと後退っていく。
「ふぅ、懐かしいね～こういうの」
「夏哉……」
心配そうな声でアンが俺の名前を呼んだので振り返る。
見るとアンも真樹も俺を気遣うような視線を送っている。
「だぁいじょうぶだって。俺は平気」

「いや、平気そうだから心配なんだ」

「そうですわ。わたくしたちが言ってる？化け物？というのは身体能力のことであって、精神（なかみ）はただの人間なんですのよ？それにたった十五年しか経っていない未熟な精神（なかみ）なのに、逆に耐えられる方が異常なんですの！」

「なるほど。つまり俺は心も体も化け物っていうことか」

「夏哉！！ふざけたことを言うんじゃありません！」

真樹が泣きそうな顔で俺を叱る。

「ちょっと待て。真樹お前……」

「なんですの？」

「お前も三人同様俺に惚れ――」

ヒュンッとボールペンが俺の腹めがけて飛んでくる。

俺はいきなりのことで躱すことが出来ず、腹に刺さった。

「イッテ！？お前ふざけんな！！刺すのはなしだろ、刺すのは！」

俺は腹から生えたボールペンを抜く。

全然浅かったのでそこまでの被害はなかった。

「わたくしが貴方に惚れるわけないでしょうが！！そしてどうしてボールペンが刺さってそんな元気なんですの！？」

「知るか！！むしろ俺が聞きたいわ！！」

「お前ら、よくもそんな話が出来――夏哉！」

呆れた口調から一変して鋭い口調になったので振り返る。

熊谷が折れた木造の椅子の脚を持ってこちらに迫ってきた。

しかも尖ってる方をこちらに向けて。

「シネェェェ！！」

「くそぉ！！」

俺はがむしゃらにビンタするように手を振るう。

それは椅子の脚に当たって軌道がずれ、ボキッと折れた。

「あ、あ、あぁ……」

熊谷は声を震わせ、尻餅をついた。

「解毒剤、出してくれませんか？」

「あぁ……あ。あ……」

無反応。

ただ問い質しても無理だと思い、窓のあるところに行く。

窓を開け、下を見る。

よし、誰もいないな。

俺は熊谷の襟を掴む。

「アン、真樹。ちょっと出掛けてくる」

「出掛けるって、どこ行くんだ？」

かなり顔色のよくなったアンが訪ねてくる。

「ちょっと、超ミニスカイダイビング……じゃねえな。紐なしバンジーを」

「スカイ？バンジー？」

「まさか貴方……。やり過ぎには気を付けてくださいね」

アンははてなを浮かべ、真樹は俺のやることを察し、忠告してきた。

？はいよ～？と手をあげ、熊谷を引きずった。

「うや、やめっ、やめろ！離せ！！」

「ごめんなさ～い。僕化け物だから人間の言ってることわかんな～い」

窓まで行くと熊谷を脇に抱え、窓の縁に足を掛ける。

「さぁお客様、これから紐なしバンジーを開始致します」

四階数学教室。
その窓から、俺たちは飛び降りた。

「う、うわあああああああああああっ！？」

脇に抱えられた熊谷が絶叫する。

徐々に地面が近付いて来ると、俺は熊谷の頭を地面に向けるようにする。

「や、やめ、やめろ！やめろッ！！」

その声を無視して――というか聞き入れたところでどうしようもない――着地する。
流石に四階からの飛び降りは足がジーンとする。

「ハアッハアッハアッ！！」

着地した途端肩を揺らしている。
多分ホッとしたんだろう。

しかし、これだけじゃあ終わらない。

俺は足に力を込め、跳ぶ。

「はぁ――アッ！？」

突然の空気抵抗を受けた熊谷は変な声を出す。

俺は屋上に着地、再び空に向かって跳んだ。

単純計算で天辺は校舎二倍以上、約２０ｍほどの高さだ。

お～、ここまで跳ぶのは初めてだけど、結構景色綺麗だな。

そこから俺たちは生身で落下していく。

上がっていく時とは比べ物にならないほどの風圧と空気抵抗が俺たちを襲う。

俺は全然平気だが、隣はもう声がでない程だ。

地面に着地する。

屋上からは比べ物にならない痛みが襲うが、屋上からのがあんまり痛くないので全然耐えられる。

熊谷を見ると目が虚ろになっていた。

「解毒剤くれませんか？」

「……」

気は失ってないのに無言だ。

「答えないならもう一度やりましょうか」

「……げ、ます……」

「なんだって？」

「解毒、剤。あげ、ます……」

「それはよかった」

俺はここから飛び上がり、数学教室に窓から入った。

第五話　《十四話》反撃返し（後書き）

作者「あと四人！」

夏哉「何が？」

作「お気に入り数百人まで」

真樹「では最低９６人の人がこの小説を見てるのですね」

夏「ほんと感謝感謝だな」

作「これを読んでいる読者の皆さん、第五話終了までにあと四人お気に入り登録してください」

真「するとどうなるんですの？」

作「後書き（ざつだん）で色々やる。出来れば誰か案をくれたら、それを頑張ります」

夏「他人任せか。もしよければ作者のお願いを聞いてくれたら嬉しいです。それから空ねぇことｓｋｙｆｌａｒｅさん、Ｃｏｌｏｆｕｌさん、感想ありがとうございます！」

真「今さらなのですが作者、毎回ｓｋｙｆｌａｒｅさんから感想をくださいますのに、ここでお礼言わなくていいんですの？」

作「あれだ。もう友達だからいいんだよ」

真「親しき仲にも礼儀ありといいますけどね」

作「そ、それを言われてしまったらもうどうしようもない……」

夏「それで作者、昨日の後書きのことだが」

作「ナ、ナンデショウ？」

夏「結局回答感想誰も来なかったな」

真「まぁ大体予想はついてましたが」

作「ん～、そんなにシャイな読者が多――」

真「よく自分の人気のなさを他人に擦り付けられますわね」

夏「全くだ」

作「じょ、冗談なのに……」

夏「あれでいいんじゃね？取り敢えず雑談の時に回答で」

真「でもその回答の感想が来たら、皆それを見ればすぐに分かっちゃいますわよね？」

作「ま、まぁいいんじゃね？……出来ればメッセージの方でお願い？」

夏「別に気にしなくていいので、何か言葉をくれたら嬉しいです」

真「因みに第五話は次と、エピローグで終わります。第五話はもう少しですが、まだまだ続くのでよろしくお願いします」

第五話　《十五章》奪還（前書き）

本文に同じ文が繰り返し使われていました

すいません

確認を怠ったわたくしのミスです

深夜に見てくれた人々、申し訳ありませんでした

ちゃんと直すぜぇ！！

第五話　《十五章》奪還

夏哉が窓から帰ってきた。

「夏哉お帰り。終わったのか？」

「おぉアン、もう平気なのか？」

真樹の治療が終わって待っていた私を見て訪ねる。

「あぁ。取り敢えずは全快だ。魔力はまだだが」

基本治癒魔法というのは身体損傷のみを回復させるものであって、魔力は回復されない。

まぁもしかしたら沙鳥は出来るかもしれないが、普通は出来ない。

「そっか、よかった」

「それよりお前は何をしたんだ？そいつ顔が真っ青だぞ？」

私は夏哉に抱えられた熊谷を指差す。

「何って、地面からジャンプして屋上に行ってまたそっからジャンプして、だいたい２０ｍくらいの高さかな？そっから紐なしバンジー、いわゆる落下した」

そんな台詞を淡々と、さも当たり前のように言った。

いや、私は２０ｍの高さなんてなんてことはないが、人間だったら

いろいろアウトなんじゃないか？
そこから落下したら、この世界に働いている重力に引かれて地面とぶつかり死んでしまう筈だ。
それなのに夏哉は見たところピンピンしている。

本当に人間か？
実は魔族だったりしないだろうか？

「……夏哉、そんな高さまで跳ぶ必要がありますの？」

呆れを滲ませながら言葉を吐く真樹。

「あっそうだ。あのな！そこぐらいの高さに行くと町の景色が凄いよかったよ」

「そこは聞いてませんわよ。それより、薬はどうなったんですの？」

「ん、ちょいまち」

言うと夏哉は熊谷を床に落とし、しゃがんで目線を合わせる。

「解毒剤、早く出してくれない？」

「……わかっ、た……」

熊谷はノロノロと立ち上がると、教室の隅の方に歩いていった。

そこには掃除用具入れがあった。
それを開いて上の棚のところに手を伸ばすと、何かを取ってこちらに来た。

「こ、これだ……」

透明な液体が入っている小さな小瓶を二つ、夏哉に手渡した。

「本物だろうな？」

「ほ、本物だッ！！」

夏哉に怪しまれて怒る熊谷。

「じゃあもし違ったら、本気でお前を潰すから――」

ドスッ

言葉の途中で夏哉は熊谷の腹に拳をめり込ませた。

熊谷は気絶せず、呻き声を上げながら床に踞る。

「これで許しといてやる」

夏哉は熊谷に背を向け、こちらに歩いてきた。

「さぁてと、二人どうすっか？俺的には一刻も早くこの教室から出たい」

「同感ですわ。あれと同じところにいつまでもいるなんて耐えられませんわ。でも、どうします？二人を運んだとしても目立ちますわよ。わたくしたちは別に悪いことしてませんが、大事にはしたくありませんし」

「そうだな。じゃあその窓から屋上にいくか」
その言葉を聞いて真樹は顔をひきつらせた。
「また夏哉が跳ぶんですの？」
「あほ。魔法使えば楽だろうに。まぁでも俺魔法は未熟者なんで自分しか浮かせられないので二人にお願いしたいんだけど、大丈夫か？」
私たちに訊ねてくる。
全く、誰に口を利いてるんだ夏哉は。
「私なら五人全員行けるぞ。パパッとやりたいから私が全部やるぞ」
私は夏哉と真樹、未だ意識を失っている香苗と沙鳥を浮かせると、私を先頭にどんどん屋上に連れていった。
香苗と沙鳥を横に寝かせ、三人で囲む。
「さて、ここに来たはいいけど――」
コト、っ石畳の上に小瓶を二つ置いた。
先程夏哉がもらったものだ。
「これを二人にどうやって飲ませよう？」
そんな疑問を投げ掛けてきた。

そんなことを聞く必要があるのか？

「普通に飲ませればいいんじゃないのか？」

私の言葉に、真樹が答える。

「そうしてしまいますと、気管の方に入ってしまう可能性があるので咳き込んでしまいますの。あまりおすすめはしませんわ」

「そ、そうなのか……」

正直気管がどうのこうのについてはよく分からなかったが、とにかく無理だということが分かったので追求はしない。

別の方法を考えると、確か夏哉の持っているマンガのことを思い出した。

「じゃあ口移しはダメなのか？マンガでそんなことがあった気がしたんだが」

「「く、口移し！？」」

すると二人は顔を赤くしていた。

「あ、これもダメなのか？」

「その、えと～、真樹さん？それはちょっと気持ち的に抵抗があるんですよ。それに口移しでも出来るかどうか分からないですし」

「そ、そうですわっ。寝込みを襲うなど、そんなの許されませんわ

！」

どうやらこれもダメらしい。
しかし夏哉、どうして敬語なんだ？
そして真樹、なんか話が変わってないか？

「ということは……寝たままじゃ無理ってことか？」

「いえ、可能性というか、無理とは言いませんが、確実性がありませんので」

「だよな～。でも目を醒ましたら俺たちの言うことなんて聞かないだろうし」

「「「は～」」」

途方にくれ、三人同時にため息をつく。
何かいい方法はないだろうか。

思考を張り巡らせていると、？あ？と真樹が顔をあげた。
私と夏哉は真樹に顔を向ける。

「真樹、何か思い付いたのか？」

私は真樹に促す。

「目を醒ますと熊谷のことを盲目的に服従するんですわよね？」

「薬が効いてるんだからその筈だろうな」

「なら一旦わたくしたちは離れて、薬と共に置き手紙でも書けばいいのではありませんか？」

「「置き手紙？」」

「『この薬を飲んでくれ。飲まないと嫌いになるぞ。熊谷』など書いて」

あぁ、そういうことか。

「冴えてるな、真樹」

「でもよ～」

私が賛辞を送るが、夏哉は少し否定的のようだ。

「あ、完全否定する訳じゃないけどさ、香苗がいるんだぜ？もしかしたら俺たちの筆跡ってバレちゃわないか？まぁ考えすぎだとは思うけどさ」

少し自信なさげに意見を言う夏哉。

確かにそういわれると不安になってしまう。

「でしたら、アンさんに書いてもらうとかは？」

「私か？文字なんか書いたことないが」

「ひとまず書いてみて、あまりにも酷かったら賭けということでわたくしが書きます。夏哉よりは見られてないと思いますし」

「それでいいならいいが、書くものはあるのか？」

「あ……」

真樹は意外とうっかりやのようだ。

こんな重要なことを忘れるなんて。

「アンごめんな、俺の教室――じゃねえ。下駄箱のところに置いてきたんだ。そっち行けるか？」

申し訳なさそうに夏哉は訊ねてくる。

「任しておけ。あ、靴も取ってきた方がいいよな？」

今四人は全員上履きだし。

「アン……。ホントありがとう！！これ終わったらなんかひとつなんでも言うこと聞かせてもらいます！！」

「いや別にそこまで――」

と言いかけて言葉を止めた。

なんでも、ということはあれでもいいのか？

「本当に言うこと聞いてくれるのか？」

「え、えっと……、俺が出来る範囲なら」

「じゃあキス」

私は簡潔に要求を述べた。

「き、キスっ？」

夏哉にとってそれは意外だったのかなんなのか、素頓狂な声を出した。

「あぁ、キスだ。それを四回」

「四か――……いいでしょう。男に二言はない。その要求に答えます！」

「じゃあ楽しみにしてるぞ」

私は急いで夏哉の鞄のある下駄箱に向かった。

そこには夏哉の鞄と、真樹のものと思われる鞄が置いてあった。
誰もいなかったのでちょうど良い、鞄ごと持っていってしまおう。
確か鞄は取っ手（？）部分を持てば周りから見えなくなるし。

私は二つの鞄を持ったところで、靴をどうしようか悩んだ。

あ、そうだ。
亜空間の中に入れれば良いんだ。

空中に人差し指で線を引き、最近全く使ってなかった亜空間を開ける。
そこに鞄二つと靴四足入れる。

「そういえば……」

私はあることを思い出して、屋上に行く前に校舎裏に向かった。

「やっぱりあったか」

そこには香苗と沙鳥の鞄が落ちていた。

あの二人、伊丹慎榎に抱きついたとき落としたんだ。

その二つの鞄も亜空間の中に入れて、夏哉たちのいる屋上に飛んでいった。

「あ、アンお帰り～ってあれ？鞄もしかしてなかった？」

「安心しろ。ちゃんとある」

私は亜空間を開き、鞄四つと靴四足を出す。

「これ真樹のであってるよな？」

「え、えぇ。そ、そうですが……今のは？」

「そう言えば真樹には見せたことなかったな。さっきの空間は魔法で作った亜空間だ。私の魔力が広がっていてな、ものを収納するのが簡単なんだ」

「そ、そうなんですか。魔法でそんなことも……。でもそれって、アンさんの世界のものではなくても大丈夫なのですね」

真樹に指摘されて気が付いた。

別に亜空間は異世界の物質でも関係ないようだ。

「私も考えたことはなかったが、多分亜空間は？世界？という概念ではないんだろう。どの世界にも存在――」

「待て待て待て、二人とも亜空間の話はまた後。今は香苗たち優先にしようぜ」

夏哉が私たちの会話を中断させる。
その言葉の通りなので素直にしたがった。

夏哉は自分の鞄からシャーペンと紙、それから一冊のノートを出した。

「石畳の上じゃ書きにくいだろ。ノート下敷きにしな」

「分かった」

私は真樹の言う通りの言葉を書いていった。
うん、結構上手く書けた――初めてにしては。

「やっぱ無理あったな。真樹頼むな」

「分かりましたわ」

今度は真樹が、私と同じ文を書いた。
流石人、私より字が上手い。

紙と小瓶を香苗たちの近くにセットして、夏哉と真樹は遠くに離れた。

私は床をすり抜けて香苗たちの下に行くと、起こすためにツンツンと続いた。

しばらく続けて最初に声をあげたのは香苗だった。

「あれ？ご主人様？ん？なにこれ？……えぇっ、大変っ！あ、沙鳥ちゃん！沙鳥ちゃん起きて！！」

顔は出せないので声だけを聞いているが、この様子だとちゃんと騙されてるようだ。

「ん……ご主人様？」

「違うよ沙鳥ちゃんっ！そのご主人様がこれを飲めって。飲まないと、私たち嫌われちゃうよ！！」

「えぇっ、嘘っ！？じゃあ飲まないと！カナ飲んだ？」

「まだだよ！」

「じゃあ急いで飲もう！！」

しばらくしたら頭上でザァァッという何かが擦れるような音がしたので顔をひょこっと出してみる。

何故か夏哉が二人を支えていた。

二人はどうやらまた気絶してるみたいだ。

「な、なんで夏哉がいるんだ？隠れてたんじゃないのか？」

「いや薬飲んだ後さ、急に倒れそうになったから急いで来たんだよ」

急いでって、夏哉たちがいた場所からここまで１５ｍほど――いや、考えるのはよそう。

驚くのも疲れた。

隠れていた場所から真樹がこちらにきたちょうどその瞬間、先程と同じく香苗が先に声を出した。

「あれ？えぇっと……」

「なぁ香苗、俺のこと分かるか？」

「え？夏哉く――あっ、私、喋れてる……」

香苗は涙を流した。

きっともっと早く流したかったんだろう。

止まる気配が全くしない。

「う、うぅぅ～……」

続いて沙鳥も目を醒ます。

「沙鳥」

夏哉が呼び掛ける。

「え？夏――あっ」

沙鳥も涙を流す。

夏哉はそんな二人を抱き締めてあげた。

「ホント悪かったな、俺のせいでこんなになっちゃって」

「ち、違うよぉ。ヒクッ、全部聞いてたけど、ずずっ夏哉君の、せいじゃないよぉ。昔のなんて事故でしょ？」

「そうだよヒクッ、夏哉は悪く、ないよぉ、私の方こそ、あぅっ、いっぱいひどいこと言っちゃって、ごめんねっ。アンちゃんも、真樹も、皆私が傷つけちゃって……」

二人とも声を震わしながら、香苗は夏哉を気遣い沙鳥は私たちに謝罪をする。

私と真樹は香苗と沙鳥に近づくと、二人で頭を撫でてあげた。

「大丈夫ですわ、これしきのこと。安心してくださいまし二人とも、わたくしたちはちゃんとこうして無事にいます。気にやむことはありません」

「そうだそうだ。私だってもうなんともない。お前ら夏哉のこと悪くないっていってるけど、お前らだって悪くない。本心じゃないだろ？まぁ夏哉は化け物といっても過言じゃないけど、でも嫌いじゃないだろ？」

「ズズッ、当たり前だよっ！！私夏哉君のこと好き！大好き！！」

「私も！夏哉のことが好き！！夏哉だけじゃないよ？アンちゃんだって、真樹だって大好きっ！！恋愛相手として、恋敵（ライバル）として、親友として！」

「私もだよ！！嫌いになんてなる筈がない！それなのにずっとずっとみんなを傷付けて、でもそれを謝られなくて、そんな自分が許せなくて！！」

「私もカナも同じ。ずっとごめんなさいが言えなくて、だから言えなかった分のごめんなさいを言いたいの」

二人の気持ちは分かっているつもりだ。
私たちに謝ることで少しでも申し訳ないっていう気持ちを解放させたいんだろう。
少しでも皆に許してもらい、何より自分を許したいんだろう。

よーく分かっている。

でも、

「「駄目」」

私はそれをやらせなかった。
もしかしたら同じことを考えていたのか、夏哉と声が合った。

「「ええ、え？」」

私たちの言葉を予想していなかったのか、二人は戸惑いを隠せていない。

「お前らもしそれ許したら一生言い続けるだろ？」

「そうだ。この後がつかえているんだ。早く終わらせたい」

「え？この後って？」

「それはひとまず置いとけ」

香苗の疑問を夏哉は端によけた。

「あのな、まぁ早く終わらせたいってのはあるけど、？ごめんなさい？って数を言うんじゃなくて気持ちが伝わればそれで良いと思うんだ。俺は二人が凄い傷ついたのを知ってる。それを自分のせいだって思って自分を責めてるのを知ってる。強制力がかけられてたとしても、自分の口から俺たちを罵倒するようなことを言って謝りたいって思ってるのを知ってる。全部ってのは無理だけど、凄くつらい想いをしてるのは分かってる。だからお前らは、『みんなを傷付けてごめんなさい』だけで良いんだ。俺も『みんなを巻き込んでごめんなさい』で終わりにする。俺もアンも真樹も、お前らが何度も何度も謝らなくても分かってるから。お前らを許すくらいの器は持ってるから。だからそろそろ自分を許そうぜ。そんなことしてもバチは当たらないよ」

夏哉の言葉に、しばし沈黙をする二人。

「「……うん」」

しかし二人はしっかりと頷いた。

「よし、じゃあ謝罪終わりだな。夏哉、早くやるぞ」

「え、今ここで！？」

「夏哉君、さっきは置いとかれたけど何やるの？」

目を赤く腫らした香苗が私と夏哉の顔を交互に見ながら先程と同じような質問を投げ掛ける。

「えっと、それは……」

言いよどむ夏哉。

それに見かねたか――どうかは分からないが、代わりに真樹が答えた。

「色々ありまして、アンさんが夏哉にキスを四回ほど要求したのですわ」

「「き、キスっ！？」」

二人は驚いた表情を作り、夏哉に視線を向ける。

向けられる前に夏哉は二人から顔を逸らす。

そんな姿を見て、私は真樹の言葉を肯定する。

「あぁそうだ。夏哉は、この場にいる全員に合計四回キスをするんだ」

「「「「はい？」」」」

さすがにこれはいきなり過ぎたか。

「つまり夏哉は、私、香苗、沙鳥、真樹に一回ずつキスをするということだ。男に二言はないな？」

「ま、待ちなさい！！どうしてわたくしもキスされなきゃいけないんですか！？」

真樹が何故か妙なところで反論してきた。

「どうしてって、お前も夏哉のこと好きだろ？」

「好きの意味が違いますわ！！わたくしはお断りしますっ！」

「なぁアン、それは流石にさ、相手の許可がないとやっちゃ駄目だろ？無理矢理は嫌だろうし」

「当然ですわっ！まったくアンさんは……」

何故か怒られてしまった。

よかれと思ってやったことなのに……。

まぁしょうがない、減るものでもなんでもないしな。

「二人はどうする？」

私が話を向けると、二人は即答せずに夏哉の顔色を伺った。

「夏哉、私やっていいの？」

「おりゃ構わんよ。二人がいいって言いなら」

「じゃあ夏哉君、キス、していい？」

「俺から約束しちゃったからな。でも優先順位はアンからだ。二人はじゃんけんでもして順番決めといて」

夏哉は二人をどけると立ち上がった。

私も倣って立つ。

「じゃあアンさん、よろしくお願いします」

「うむ、よろしく」

私たちはお互い抱き合うと、唇を合わせた。

身体中がポカポカと暖かくなるのが分かる。

唇を離した後もまだ暖かい。

特に触れていた唇が熱い。

私はしばらく幸せな気分に浸っていた。

私の後は沙鳥、香苗という順にキスをした。

二人とも幸せそうな顔をしていた。

「ねぇアンさん、どうしてこんな提案を出したんですの？」

唯一キスをしていない真樹が私に話し掛けた。

「いや、深い意味はないが、私一人だけじゃ不公平だろ？」

同じ勝つなら相手と同じ土俵に立って勝ちたいからな。

「アンさん、大人ですわね……」

「だからお前たち以上に生きてるんだって」

実際大人なんだ。

真樹が苦笑したとき、沙鳥が夏哉に話し掛けた。

「夏哉、その、お願いがあるんだけど、いいかな？」

「どうした？内容次第だけど」

「あ、あのね、今日、一日だけでいいから、夏哉のところに泊めてくれないかな？」

なんの前触れもなく沙鳥は夏哉にお願いした。

いきなり過ぎて夏哉も戸惑っている。

「え、な、なんで急に？」

「その、昨日とか今日とか、あんまり夏哉と一緒にいたっていう感覚がないから、寂しいっていうか一緒にいたいっていうか……」

「あ、あのっ、わ、私も駄目かな？まだ夏哉君と離れたくなくて……」

二人ともまだ心の傷が深いから、夏哉と一緒にいて払拭させたいんだろう。

夏哉もそれが分かっていて、頷いた。

「分かった。二人ともうちに来い。四人じゃちょっと狭いが我慢しろ」

ここで私は空気を読む。

「あぁ、それなら私は今日真樹のところで泊めてもらうから気にするな」

「泊めてもらうって、また唐突な……」

まったくの相談もなしにした発言に真樹はため息混じりの言葉を出す。

「駄目か？」

「構いませんわ」

「ということだ夏哉。私は一晩空けるぞ」

「あぁ。悪いな、アン」

「気にするな、このくらい。じゃあそろそろ帰らないか？」

私の一言で皆立ち上がり、屋上から飛び降りて帰宅した。

第五話　《十五章》奪還（後書き）

作者「ようやく、後書きに二人が戻ってきました。どうぞ～」

香苗＆ａｍｐ;沙鳥「「ただいま～」」

作「お前らがいない間な、色々いいこと合ったんだぞ？」

沙「うん、夏哉たちから聞いたよ。１００，０００ＰＶに初感想」

香「なんか凄いね、第五話。いいことずくしだよ」

作「しかもあれだ。『その想いは変わりますか？』本編終了しました。あと残すは番外編のみです」

香「小説が終わっちゃうのは残念だけど、無事完結したってことでいいことだね」

沙「すごいすご～い」

作「まぁそんな第五話ですが、最後の最後で話が延びてしまい、次の話はエピローグではなく十六章になりそうです」

沙「あ、そうなんだ？次回は私たち三人のお泊まり話だね」

香「私楽しみっ」

作「……皆さんごめんなさい。おれもう眠くなったんであとがき終わります。またね～。ふわぁ～……」

香&沙「「ええっ、はやっ!?」」

第五話　《十六章》お泊まり

アンと真樹と別れると俺たちはいつも以上にくっつきながら通学路を歩いていく。
正直歩きにくかったが、そこまで空気が読めない男ではないので何も言わずにいた。

「あ、沙鳥さ服とかどうするの？」

「あ、そうだ。ん～と、別にいいや。いつも服脱いで寝てるし」

「それがホントだろうが嘘だろうがぜひやめれ」

たく、なんでこいつは普通にそういうことが言えるんだ？

「な、夏哉君、実は私も……」

「カナ、顔真っ赤にして言ったら説得力ないよ」

こっちは顔を真っ赤にしてるって言うのに。

「香苗、俺の気を引こうとしてるんだけど、百歩譲って沙鳥を許したとしても、お前許したら俺捕まりそうだからやめれ」

「酷いよ！わたし高校生だから夏哉君捕まらないよ！！そんなに沙鳥ちゃんみたく成長したからだの方がいいのっ！？」

「これこれ叫ぶなちっちゃいこ」

ポンポンと香苗の頭を軽く叩く。

「ちっちゃいこ言うな！」

香苗は上目遣いで頬を膨らませながらこちらを睨み付ける。

めちゃめちゃ可愛いじゃねぇか。

「ねぇ沙鳥、俺もうやだ。なんでこいつこうなの？」

「え、なんかへんだった私？夏哉君どうしたの？」

本人は本当に分かってないようで首を傾げる。

「……沙鳥、天然って罪だよな？」

「そうだね」

「ほんとに何！？」

「取り敢えず、夏哉の家に行ったらたくさん愛でるからね」

沙鳥はにっこり笑顔を香苗に向ける。

香苗はそれに何かを感じたのか、俺の影に隠れて手を握ってくる。

「夏哉君、なんか怖いよぉ。沙鳥ちゃん獣を狩る肉食獣の顔してるよぉ」

「香苗、残念だ。俺はお前の味方じゃなくて沙鳥側の人間なんだ」

「ひぃっ！」

バッと香苗は俺から離れる。

「な、夏哉君、私のこと、襲う気なの？」

「か、香苗ちゃぁん？そんなことは言っちゃいけません！俺本当に捕まっちゃうから！」

「うんカナ、多分意味は違うので言ったんだろうけどさ、その発言は男の子にうるうる目で言ったらアウトだよ。刑務所行きになっちゃうから」

「わ、分かった……」

これで前科持ちにならなくてすんだ。

そしてこの話になった大元のことを思い出した。

「で、沙鳥は服どうすんの？」

「あ、そういえばその話をしてたんだね。スッゴい脱線」

沙鳥が手をポンッと叩く。

「だからもどろうとしてんだよ。どうすんの？」

「じゃあカナのを借りよっかな？」

「おまっ、そんなことしたら破けるぞ！とくに胸の辺り！！」

「夏哉君！それいっちゃダメ！！いじめないでよ！！もうやだ夏哉君！嫌いっ」

ポコポコと俺を殴ってくる。

あ～、ホント可愛い。

「あ～あ、夏哉嫌われちゃった。ならカナはお泊まりなしだね。だって嫌いな人と一緒にいたくないだろうし。あ～残念残念」

「えっ？」

なんとも残念そうな声で言う沙鳥に、驚きを隠せていない香苗。

全く、乗れってことか。

「そうだな、沙鳥。じゃあ二人っきりで夜を過ごしますか」

「なんかえっちぃ発言だね夏哉。でもそんな夏哉を愛してます」

「ありがとう沙鳥。だったら服を取りに行かなくてもいいよね？」

「まぁなんて大胆な。私は構わないよ」

「やったね」

「ダメーっ！」

ドンッと香苗が俺を思いっきり突き飛ばした。

「じょ、冗談でもそんなこといっちゃダメなんだからっ！！」

多分香苗は気付いていないんだろう。
俺の今の状態なんて。

「いや～ん、夏哉ってだいた～ん」

これ以上にないと言うほどまでに棒読みで沙鳥は言った。

俺は今、沙鳥の胸に頭から突っ込んでいます。

やべぇ、凄くやわらけぇ。

すぐに離れないととという気持ちはあるんだけど、体がそれを拒む。
この気持ちよさを手放すな、と。

俺が固まっていると、後ろに思いっきり引っ張られた。
沙鳥の胸から離れる。

「夏哉君！公衆の面前で何やってるのっ！？」

香苗が服を掴んで引っ張ってくれたのだ。
助かった七割に、残念二割、真樹がいなくてよかった一割。

「いやいやカナちゃん、あなたがどぉんって押したから夏哉が私の胸に突っ込んできたわけで、夏哉悪くないよ。それに今人いないから公衆の面前じゃないよ」

沙鳥がすらすらぁっと説明した。

「お、おぉ、沙鳥がそんな常識人みたいなことを」

「カナ、夏哉が痴漢した。公衆の面前で胸を触った。警察いこ」

「スイマセンデシタァ！」

即謝りましたはい。

やっぱり事故だろうがなんだろうが女の子の胸に触るのはいけませんよね。

「沙鳥ちゃん、また話ずれてるよ。ボケないで、服どうするの？」

「ん～、やっぱり一旦家に帰るかな」

「そういやお前家に電話とかしたのか？」

今まで見た限り携帯さえ出していない。

「まだしてないよ。それも家帰っていうかな」

「じゃあ俺たちも行こうぜ」

「えっ、私んち来るのっ！？」

沙鳥はびっくりした様子で聞き返してくる。

「お前はなんのために今日泊まろうとしてんだよ？俺たちと一緒にいたいからだろ？じゃあ行こうぜ。まぁ嫌って言うんならその間香苗とイチャイチャさせてもらうけど、な？」

？ねー？っと香苗も返してくれた。

「それはずるいからやだ。一緒に来てくれる？」

「分かりましたお嬢様」

どこかの執事みたいに恭しく頭を下げる。

「わーっ、執事だ執事。じゃあカナはさしずめお花摘み係りってところかな？」

「なんかそこまで重要じゃないよねその係り！」

沙鳥の的確な割り振りに香苗はご不満のようだ。

俺は香苗を諭すように言う。

「何言ってんだよ？お花摘みいいじゃん。お前にぴったりだ。マスコット的存在で」

「そうそう。みんなの心を癒すんだよ～。私の部屋に飾る花を持ってくるんだけど途中で転んでぶちまけちゃうの」

「私ってドジっ娘なの！？」

「それであれだよな？沙鳥に上目遣いプラス涙目で見上げて謝るんだよ」

「それに萌えた私がぎゅうって抱きしめる」

「そんな場面をちょうど俺が見て、？周りにバレないようにな？とか言って部屋をあとにして」

「カナが？助けてー？とか言うんだろうね。私は抱き締めたまま」

うわっ、凄い簡単に想像できる。

香苗も苦笑しながら？ありそう？とか言っている。

「そういや俺沙鳥んち、場所は知ってるけど行ったことないな」

沙鳥と会ってしばらくしたときに口で聞いただけだ。

「香苗は行ったことある？」

「私もないよ」

「まぁ私からはまだ誰も家に入れてないしね。あ、アンちゃんが来たから誰もじゃないや」

「ということは男は俺初か」

「そうなるね」

なんか初めてって言うのは嬉しいもんだな。

沙鳥の家に行って荷物をとってきた後、俺らはうちに来た。

「そういやさ、飯どうする？」

「どうするってどういうこと？」

俺が二人に聞くと、逆に香苗に聞かれた。

「えっと、何作る？と誰作る？だな」

「はいはいは～いっ！」

沙鳥は元気よく手を挙げる。

「はい沙鳥」

「三人で、カレー作りたいっ！」

「カレーか……」

そういや寮に入って食ってないかもな。

冷蔵庫の中身を思い出しながら言う。

「ルーがないから手作りで、人参がちょっとしかないけどいいか？」

「あ、人参なら私あるからとってくるよ」

「おぉ、香苗助かる」

「でもルーはないし、私やり方分からないよ？」

少ししょんぼりした口調で言う。

そんな香苗に？だぁいじょうぶ？って沙鳥がポンッと頭に手を置く。

「私が作れるからいいよ。夏哉、カレー粉と片栗粉はあるよね？」

「あるある。よし、じゃあミッションスタート！」

「「おー！」」

俺たちはカレーを作り始めた。

「「「ごちそうさまでしたー」」」

パンッと手を叩いて食器を片付け始めた。

「いやーうまかったうまかった。アンと真樹にも食わせてやりたかったな」

「そうだね。沙鳥ちゃん、手作りルー美味しかったよ」

「ありがとっ。正直夏哉が料理出来たのが意外だったよ」

「人は見た目によらないってことだ。じゃあ何すっか？」

「私お風呂入りたいんだけど、寮のお風呂入っちゃ駄目だよね？」

俺が聞くと、沙鳥が提案する。

「ダメだと思うよ。確か少し離れたところに銭湯なかったっけ？」

香苗の質問に沙鳥が答える。

「あるあるある。じゃあそこ行こう！」

俺たちは身支度をチャッチャとやって銭湯に向かった。

銭湯はそれなりに大きいものだった。

「混浴あるかな？」

「あるわけねぇだろバカ沙鳥」

「バカ言うな」

「じゃあね夏哉君。覗いちゃダメだよ」

「覗かねぇ、てか覗けねぇだろ普通は。じゃあな」

俺はのれんをくぐり、パパっと服を脱いで体を洗った。

銭湯には誰もいなく、独占状態だった。

「おー、やっぱり誰もいなーい！」

「沙鳥ちゃんっ、男湯の方はいるんだから静かにしないと」

すると隣から二人の声が響いた。

どうやらあっちも女湯独占状態のようだ。

「おーい、こっちも誰もいないぞー」

「あ、夏哉っ！そっち一人なのっ？」

「そうだよ～」

「夏哉君寂しくない？こんな広いのにポツンと一人って」

まぁ言われればそうかも知れないけど、生憎一人はなれたもんだから平気だ。

とは言わない。

まためんどくさいことになりそうだから。

「取り敢えず話し相手がいるから平気だよ」

「ならよかー―」

「ねぇ夏哉！誰もいないならそっちに行っていい？」

「「ダメだろ（でしょ）！！」」

全く、沙鳥は女という自覚がない。
どれだけ理性が失われると思ってるんだ。

「もう、冗談なのに……」

「沙鳥ちゃんは冗談に聞こえないよ」

そこはひどく同意する。

「信用ないな～。まぁいいや。カナ、チャッチャと洗っちゃお」

「うん」

ここで会話も終わり、俺も体を洗うのに専念する。
と言ってももう洗い終わるのだが。

体にまとわりつく泡をシャワーで洗い流し、湯船に浸かろうとすると隣から再び声が聞こえた。

「えっ、髪の毛そんなに雑に洗うの！？」

香苗が驚いた風に声を荒らげる。
あ、やっぱり沙鳥の洗い方は雑なのね。
俺は湯船に浸かりながら二人の会話を聞いた。
別に盗み聞きじゃないよね、これ。

「うん。いつもこんな感じだよ」

「それでそんなにさらさらなの？いいなー。シャンプーとか何使ってるの？」

「わっかんない。お母さんがそこいらで適当に買ってきたやつだと思うよ」

「は～、やっぱり素質か～」

落胆している香苗の姿が目に浮かぶ。

「でもカナも髪の毛さらさらじゃん。撫でてて気持ちいいよ」

「ありがと。でも二十分はかけてるよ」

「えっ、私より短いのにそんなにかかるの！？私五分ぐらいだよ？」

五分って、男の俺と同じくらいじゃん。

「それは沙鳥ちゃんがおかしいんだよ。夏哉君、男の子ってどのくらいかかる？」

「他は知らんが俺も五分くらいだ。沙鳥、もうちょっと丁寧に洗えよ」

「ほら～、夏哉君もそう言ってるよ？」

「じゃあそのたった五分でこんなさらさらな髪になる私、凄くない？」

「いや、それはほんと驚き隠せないよ」

「お前まさか体も適当じゃないよな？」

俺は考えてるのと違う答えを望みつつ、沙鳥に聞いてみる。

「え？普通にゴシゴシーってやってるけど、これって適当なのカナ？」

「私見たことないから分かんないけど、なんか適当な気がする……」

俺もそう思う。

絶対強めで肌に擦るような気がする。

でもそれなら、そんな適当でもあんな男の俺から見ても分かるほどの綺麗な肌になるなんて、ほんと女泣かせだと思う。

まぁ実際周りは褒め称えるんだろうが。

「そうかな～？じゃあカナ見てて」

「……はぁ、なんで同じ人間なのにこんなに違うんだろう」

香苗がため息混じりに呟く。

大方沙鳥の胸を見て落ち込んでるんだろう。

「カナ、そういつもいつも落ち込まれると私も対応困るよ？私の胸触る？」

「うん」

「こらこらこら！隣に男がいるんだから自重しなさい」

「「は～い」」

ほんとにな～、無防備過ぎるよ。

そのあとしばし無言の時間が流れた。

は～、やっぱこういうでかい湯船に入るっていうのはいいね～。

「ちょ、沙鳥ちゃん。泡立ってないよ？」

「え？何？泡立ってるじゃん」

「もっと細かくしないと！」

「え～、めんどくさ～い」

「めんどくさいって……さ、沙鳥ちゃん！？ゴシゴシって、それ強すぎない！？肌傷ついちゃうよっ！」

「そぉ？こんくらいしないと汚れ落ちた気がしないし」

「もう、谷間洗うって行為がずるい！！」

「それもうただの願望！！」

つか、女の子どんだけテンション高いんだよ？

こっちに人いたらあのテンション抑えられるのかよ。

「はい、終わり～」

「えぇ!?早いよ!!鴉の行水どころじゃないよっ!!」

「え～、だって早く湯船入りたいんだもん」

「顔も洗ってないし!」

「え?顔って洗うの?」

「洗うよ!何言ってるの!?」

「いやだって顔は朝洗うもんじゃないの?」

「洗いなさい」

「は～い」

おぉ、なんかすげぇ。

「香苗、声聞いてるとお前大人で、沙鳥がちっちゃい、五歳くらいの感じがするぞ」

「ほんとっ?やったー!」

「よかったねカナ、大人だってさ」

「ていうか沙鳥ちゃん常識知らなさすぎるよ!なんでそんな適当すぎるの!?そしてなんでそれでこんなに綺麗なのぉぉぉぉぉぉっ!?」

現実の理不尽さに対する香苗の叫びは、銭湯内に響き渡った。

俺たちは銭湯から出ると定番のコーヒー牛乳を一気飲みした後寮に帰った。

帰った後は沙鳥が持ってきたトランプで遊んだ。

香苗がポーカーめっちゃ強かった。

沙鳥はブラックジャックが強く、俺はすべてにおいて平均くらいだった。

十時になると俺たちは眠くなったので、寝る支度をする。

「夏哉、なんで布団二つあるの？」

「アンさんも一緒に暮らしてるんだからじゃない？」

「香苗当たり。さて、どう寝る？」

「そんなの決まってるでしょ？」

と沙鳥。

結果布団二つくっつけて、香苗と沙鳥の間に俺が入る。

「夏哉君掛け布団ちゃんと掛かってる？」

「大丈夫だよ。って、電気消してなかったな。ちょっと待ってろ」

俺は布団から出て電気を消す。

「うわ、真っ暗。夏哉、踏まないでよ」

「……踏んだらごめん」

「どさくさに紛れて触っちゃダメだよ夏哉君」

「香苗さ、最近俺のことそんな風に見てる？俺手なんか出さなねぇよ？」

「だぁってなぁつやくん、今日みんなにチュウするんだもん。いつから見境なしになっちゃったの？」

「それ言われたら何も言えないんだけど……」

俺はゆっくりと歩き出す。

「いいじゃんチュウ。カナだって夏哉とチュウしたらすんごい幸せそうな顔してたし」

「嫌ってことじゃないんだよ？でももしかしたらこのまま貞操の危機が、って思っちゃったりしちゃうからさ」

「それは安心しなさい香苗さん。自分から進んではやらないよ」

俺は腰を低くして手を伸ばす。

あ、なにか触った。

「いたっ。何か当たった」

「あ、香苗？俺の手なんだけど、どこに当たった？」

「頭だよ」

「悪いな」

香苗の場所も分かったので今度は誰ともぶつからずに布団のなかに潜った。

「へへっ、夏哉と一緒だ」

「今更だな」

「でも私も分かるよ。こう、静かになったときに隣に夏哉君がいると落ち着くんだ」

「そうそう」

「そんなもんなのか」

俺で落ち着くとか、二人も物好きだな。

そう思っていると、両隣から同時に手を握られた。

「あんたら何？打ち合わせでもしたのか？」

「え、何が？」

「もしかして……沙鳥ちゃんも夏哉君の手握ってる？」

「？も？ってことはカナも？」

「そうだよ。二人はこの暗闇のなか、お互いの顔も見えないって言うのに同時に手を握ってきたんだよ」

それを聞いて二人とも笑った。

「あははっ、私たち気が合うね」

「うん。同じ依代だし同じ人が好きだしね」

「それで？急に何？」

「……あのね、ホントにいつもと夏哉がいてくれるのが嬉しくて。私、いっぱい傷付けたのにいつも通りでいてくれ。そんな夏哉と繋がってたいなぁって」

「私も同じ。夏哉君がずっと私たちに優しくしてくれるのが嬉しくて、離れたくないなぁって思って」

「……まだつらい？」

「う～ん、つらくないっていったら嘘になるよ」

「私も」

沙鳥も香苗もやっぱり多少無理してるようだ。

二人はちゃんと元気になるかな、と思っていたら？でもね？と香苗は話を続ける。

「夏哉君にキスされて元気になった」

「現金なやつだな～。沙鳥もか？」

「うん、私も。ホントね、私死にたくなったんだよ。三人傷付けちゃって。でも夏哉たちが助けてくれて、それに加えてちゅうしてくれたからさ、今はつらいより幸せの方が強いよ」

「夏哉君、私たちを助けてくれて本当にありがとう」

「……今思ったんだけどさ」

「どうしたの？」

「何？」

「そのさ、この事でお礼言われるのはじめてじゃね？」

「「あ」」

「明日ちゃんとアンと真樹にお礼言えよ」

「「うん」」

「じゃ、話は終わり。ホントに寝るぞ」

「あ、じゃあ夏哉君その前にもうひとつ」

「カナも？私も私も」

二人がそういうと、もぞもぞ動いてこちらに近づいてくる。

腕にこれでもかというほどまでくっつく。

「「夏哉（君）」」

香苗と沙鳥の声が先程より近い。

二人の息が耳を撫でる。

「「大好き」」

その言葉を囁いて、俺の頬に唇をつけた。

第五話　《十六章》お泊まり（後書き）

作者「ビンゴォォォォッ！！」

アン「きゅ、急になんだ？」

真樹「ついに壊れましたか？」

作「皆さん！携帯を出してください！！」

真「携帯？」

作「なんと、我が小説のヒロインは図らずして？あ？？か？？さ？が名前の頭文字になっています！！そしてそれは携帯の横一列が揃っていることを指します！！」

ア＆amp;真「「どうでもいい」」

作「ねぇそんな興味ないみたいな感じにならないでよ！！」

ア「だって本当に興味ないし」

真「そうですわ」

ア「それより真樹。真樹の家のご飯は美味しいな。見たことないものばっかりだったが、もう幸せだった」

真「喜んでもらえて何よりですわ。あ、そういえばアンさん。今日はお風呂一緒に入りましたが、いつもはどうしてますの？夏哉と一

緒、というわけにはいかないでしょう？」

ア「いつもは夏哉の部屋の空中にお湯の塊を作って、そのなかに入ってるな」

真「そ、それは斬新な入り方ですわね……。そのとき夏哉は外ですの？」

ア「あぁ。全く、別に外にいかなくていいといつも言ってるのに」

作「作者放置するなぁっ！！」

真「あれ？作者いましたの？」

作「それはないよね！？」

ア「ｓｋｙｆｌａｒｅさん、以前感想に書いてくれたような話を書いてみましたがどうでしょうか？」

作「無視された！？しかもそれ俺が言う台詞だよなッ！？」

真「今日はやけにテンション高いですわね？何かありました？」

作「いや、なんもないよ？」

真「だったら静かにしなさい」

作「はぁい。あ、それから報告！お気に入りが９９人になりました！」

真「何かあったではありませんか！！」

ア「あと一人で百人だな」

作「あとお一人様お気に入りよろしくお願いします！！」

ア「お願いしたところで作者、次エピローグでいいのか？」

作「あ、うん。次こそはエピローグ。第五話も最後です。よろしくお願いします」

第五話　《エピローグ》感謝そして謝罪

「な～つや～。おはよ～！」

香苗と沙鳥が泊まりに来た翌日、寮から学校に向かう途中に後ろからアンに話し掛けられた。
真樹も一緒にいる。

「おーす。はよ～」

俺は頭の位置まで手を挙げて挨拶を返す。

「おっはよ～」
「おはよう」

「二人もおはよう」
「おはようございますわ」

他も挨拶をして一緒に登校する。

「夏哉、昨日は手を出してませんわよね？」

「しねぇよ。そっちは、うちのアンがなんかしてないか？」

「大丈夫ですわよ。全く問題ありませんし、バレてもいません」

「それならよかった」

大丈夫だと思ってはいたが、それなりに心配してたのでほっと胸を

撫で下ろす。

すると隣から話し声が聞こえた。

「おい聞いたか？夏哉今？俺のアン？って言ったぞ？もう私は夏哉のものだな」

「夏哉君はそういう意味で言ったんじゃないよっ」

「そうだよっ。それに私たちなんか一緒にお風呂入ったりぎゅうって抱きつきながら寝たりしたんだからね！」

ガッ

「夏哉、どういうことかお聞かせ願えないでしょうか？」

「ＯＫＯＫ、分かった。分かったからそんな怖い顔で首を絞めるな」

キリキリと絞まっていく首。

緩まる気配はない。

「あ～あ、結構親しくなったつもりだったんだけどな～。それに沙鳥に関してもそこまで手を出さないでくれると思ったんだけどな～」

「親しくなって、恐怖を感じなくなったからこそこういう対応が出来るのですわ。それに沙鳥様のことは好きに変わりありませんので」

「そうなのか～」

「そうなんですわ」

あははは～、と俺たちは笑った。

「いや、あの、二人とも?首絞めたまま笑わないでよ。すごい怖いよ……」

目を向けると香苗と沙鳥は顔が青くなっている。

アンは普通にこちらを見ていた。

「いえ、まだ事情を聞いてませんので」

再び力がこもる。

「まず風呂だけど、銭湯に行ったんだよ。もちろん男女別だ」

「覗いてませんわよね?」

「覗けませんよ。覗けても覗く気ないし」

「そうですか。では抱きついたというのは?」

「二人が俺の腕に抱きついて寝ただけですよ」

「なるほど。許しましょう」

パッと首から手を離した。

それを計らってアンが話し掛けてきた。

「なぁ二人とも、なんかさっき意味深の言葉が出てきたんだが。沙

鳥の関係がどうのとか、恐怖がどうのこうのとか」

俺と真樹は顔を会わせる。

そして二人でアンに言った。

「「秘密だ（ですわ）」」

それを聞いて、沙鳥はむくれた。

「なんか二人すごい仲良くなってない？」

それに香苗も便乗する。

「ほんとだよね～。何気に夏哉君の隣にいるし」

因みに端から、俺、真樹、沙鳥、アン、香苗という風に歩いている。

「いや、これは沙鳥様をお守りするために」

「とかなんとか言っちゃって、夏哉の隣にいたいんでしょ？」

「そんなことは――」

「実はお前らが操られてるとき二人は抱き合ってたって真樹が言ってたぞ」

「「夏哉ぁ（くぅん）！」」

二人は俺を睨んでくる。

「そりゃ偶然だ。真樹が足をもつれさせて、俺が支えたときに抱き合った風になったんだよ。なぁ真樹？」

とっさに嘘をつく。

ちゃんと会わせてくれよ。

「ええ。伊丹慎榎があまりにも気持ち悪くて足が震えて、倒れそうになったときに支えられて」

よしナイス。

この話題を出せば深くは追求できないだろう。

案の定沙鳥と香苗はばつの悪いような顔をする。

「そっか、ごめん――じゃなかった。ねぇカナ」

「うん」

二人は頷くと、くるりと半回転しながら一歩前に出る。

「「私たちを助けてくれて、ありがとうございました」」

二人はペコリと頭を下げた。

俺はその行為を納得し、アンと真樹はキョトンとしてる。

「ど、どうしました？」

「いきなりなんだ？」

「あれだ。こいつら昨日お前らにお礼言ってなかったから俺が言っとけって言ってたんだよ」

それで二人は納得したような顔をする。

「どういたしまして」
「どういたしまして」

二人は返事をすると、香苗と沙鳥はにっこり笑顔になった。

今日一日の授業はつつがなく終わって放課後、俺は帰る前に一度剣道場に向かった。
ある人に会いに行くためだ。

剣道場に近づくと、剣道部員らしき男がこちらに気がついた。

「あなた、入部希望者ですか？」

「いえ、三年の根本雅也さんに用があるんですけど」

真樹に聞いたら、根本さんはこの学校で剣道部をしていると教えてくれた。
さすが早乙女家だな。

男は？ちょっと待っててください？といって道場内に戻る。

しばらくしたら一人の男が道場から出てきた。
俺は一歩下がる。

「待たせたな。俺に何か――」

男――根本雅也は固まった。
多分俺に恐怖を覚えているんだろう。

俺は頭を下げる。

「あの、お話ししたいことがあるんですが、いいですか？時間はとらせませんので」

「あ、ああ……」

思ったほど素直に話を聞いてくれたことに驚きつつも、人気の少ない道場裏へ歩き出す。

俺と根本さんの距離は空いている。

到着すると、俺は反転して根本さんに顔を向ける。
そしてすぐに頭を下げた。

「三年前は怪我をさせてしまい、すいませんでしたッ！！」

「……それか」

俺は罵倒や、殴られるくらいのことは覚悟していた。

しかし、それはいつまでも来なかった。
代わりに別の言葉が飛ばされた。
「別にいいよそんくらい」
「え？」
俺は意味がわからず、顔をあげた。
恐らく俺は間抜けな顔をしてるんだろう。
根本さんは怒った様子も、恐れてる様子も見えなかった。
「で、でもあのとき骨折させちゃって、しかも剣道の大会があったのに出れなくなって……」
「確かにそうだな。いろいろ痛かったし、苦しかったけど、事故だししょうがないだろ」
「え、じ、事故？」
まさかそんな認識されてるとは思ってなかったし、されたこともなかった。
だからどう反応していいか分からなかった。
「なんだ？お前まさかわざとやったのか？」
「そ、そんなことはないんですけど、そういう風に言われたことなかったので……」

「だってわざとじゃないんだろ？事故以外の何があるってんだ？てかどうして今更なんだよ？」

「昨日、その、あなたの恋人に言われて……」

あ、そっか。
あいつの恋人ってことは根本さんもそっちの人なんだよな。

「恋人？俺そんなのいないけど」

「え？だって熊谷が――」

「く、熊谷！？」

俺の言葉を遮り根本さんは大声を出す。
すごい慌てていて、汗も大量にかいている。

根本さんは俺との距離を一気に詰めて俺の肩を両手で掴む。

「いいか？絶対そんなこと言いふらすなよ？それはあいつの勝手な妄想だ。俺は一切関係ない。そっちの趣味も全くない。俺は沙鳥様命だ」

根本さんの目がマジだった。
この人も苦労しているんだろう。

「わ、分かりました。誰にも言いません」

そう言うと肩を掴む手が離れた。

「よし、それならいいい――」

「あ、夏哉～！」

すると遠くから沙鳥の声が聞こえた。
声のする方を向くと、沙鳥がこちらに近づいて来る。
どうやら根本さんのことは見えてないようだ。

「さ、沙鳥様！？」

そう言えば沙鳥様命とか言っていたな。

「昨日のお泊まり楽しかったから今日もまた……」

沙鳥の言葉がどんどんしぼんでいく。
その理由は分かってるつもりだ。

恐る恐る後ろを向く。

わなわなと震えている根本さんがいた。

「て、て、てめぇ、さ、沙鳥様とお泊まりだと？」

「まず！！」

俺は沙鳥に向かって走り出した。

「まてぇぇぇ！！」

後ろから追いかけてくる。

「沙鳥ぃぃ！！てめぇなんでこんなところで大声で言うんだぁぁっ！？」

「ご、ごめんなさぁい！！」

俺は沙鳥と共に根本さんから逃げた。
そしてこんなことを叫んでみたくなった。

「不幸だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

後書きというなの雑談？

作者「第五話見てくれてありがとうございました！」

夏哉「取り敢えず終わったな」

作「えぇ、終わりましたとも」

真樹「この話ほど有言不実行な話はありませんでしたわね」

香苗「そ、それは事実だけど言っちゃ駄目だよ」

沙鳥「そんな話でも凄かったよね」

アン「そうだな。その時から感想も来るようになったし。ｇｉａｌｌｏさん、Ｃｏｌｏｒｆｕｌさん、ｓｋｙｆｌａｒｅさん、ありがとうございます」

夏「それに１００，０００ＰＶにもなったしな。作者なんかしたか？」

作「してねぇよ！してたらもっと早くしてるし」

香「まずしちゃダメだよそんな不正」

沙「それより、今日はゲストいるんでしょ？放置はダメでしょ」

作「そうだな。じゃあ『その想いは変わりますか？』のキャラから二名、樋口夕馬と種原穂菜です」

夕馬&穂菜「「どうも」」

作「どうしてこの二人を呼んだかというと、二人が出ている『その想いは変わりますか?』が無事完結しましたからです!」

夏&香&沙&ア&真「「「「「おめでとう」」」」」

穂「ありがとうございます」

夕「なんで僕たち二人だけなの?まだメインはいるのに」

作「そんな大人数さばけません!!絶対空気になっちゃうし」

夕「まぁそれならいいけど」

夏「ほんとおめでとう。ほれ香苗、沙鳥」

香「夕馬くん、穂菜ちゃん。私たちでケーキ作ったんで食べてください」

沙「ここにいる全員で作ったから、美味しいと思うよ」

ア「まぁ私は単純作業しかしてないがな」

穂「うわ〜っ!美味しそうっ!!」

夕「これ快斗たちに持ってかえっていいですか?」

真「他の人たちの分はありますので、心配せずに食べてくださいまし」

夕「じゃあお言葉に甘えて」

作「じゃあケーキ食ってる間に報告を。まず、十三章後書きで出した問題、『真樹は誰の台詞を使ったか？』の答えです！」

夏「結局それ来なかったよな」

ア「というか読者覚えてるか？」

作「う、うるさいんだよっ！答えは、『ギャラクシーエンジェル』でした」

沙「あ～、あれ懐かしいよね～」

穂「沙鳥ちゃん知ってるの？」

沙「子供の頃ね～」

作「じゃあ次！なんとお気に入り百人突入しました！」

夏「おー、すげすげ」

作「ということで、完璧作者の自己満足のお話を書きたいと思います」

パチパチパチパチ

―――――――――――

イフストーリー
もし夏哉と真樹が付きあったら？

「真樹～、今日お前んち行っていいか？」

学校の帰り、夏哉は真樹にそう切り出した。

「はぁ？何言い出すんですの？ふざけないでくださいまし！！」

ゴスッと真樹の拳が夏哉にめり込んだ。

「うぅっ！？お、おま……」

フンッと真樹は一人で去ってしまった。

「たく……、付き合ってるっつーのに」

夏哉はそう呟きながら殴られた腹に手を触れると、指に紙の感触を覚えた。

なんだろうと自分の腹を見ると、学ランのボタンのところに紙が引っ掛かっていた。

そのような紙の記憶は、夏哉にはない。

二つ折りにされた紙を手に取り開いてみると、文字がかかれていた。

『来てもいいよ』

簡潔にこう書かれていた。

夏哉はその字に見覚えがあった。

一ヶ月前に付き合い始めた真樹の字だ。

夏哉は心躍りながら真樹の家に歩いていく。

真樹の家に着くと、先に帰っていた真樹が私服で立っていた。

「遅いですわよ、夏哉」

「遅いって……。だったら一緒に帰ればよかっただろ？」

そう言いながら真樹の家に上がる。

「恥ずかしいではありませんか。それに、付き合ってることは秘密という約束ですわ」

その言葉を聞いて、夏哉は人差し指を真樹の唇に当てた。

「口調、もとに戻してよ。もう家の中なんだし」

「あ、う、うん。ごめんね」

「いーよ」

お嬢様口調を消すと、人が変わったように夏哉の腕に抱きついた。

「なつやぁ」

そして、普段なら考えられないような甘ったるい声を出す。

「ごめんね、わたしも一緒に帰りたいんだよ?でもやっぱり恥ずかしいから……」

「分かってるよ。早く部屋いこうぜ」

夏哉が真樹の頭を撫でると、気持ちいいのか目を細める。

さながら猫のようだ。

部屋にはいると、真樹は更に猫になる。

「なつやぁっ!」

ぎゅっと胸に抱きついた。

「あ〜、あったかぁい」

「あああっ!!いちいち可愛いなこのやろうっ!」

夏哉も抱き返す。
「夏哉……」
真樹は熱のこもった視線を夏哉に向け、どんどん夏哉の顔に近づいて――
真「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」
沙「ま、真樹？」
真「作者！なんてものを見せるんですの！？最低ですわ！？」
作「いや、結構良くできたと思うんだけど」
夏「てかさ、そこまで拒絶されるとさすがの俺もちょっとは傷つくもんだよ？」
真「嫌なものは嫌なんですわっ！！あぁ〜怖気走る！！だいたいあんなキャラではありませんわ」
ア「そうか？あぁいうでれでれの真樹もよかったぞ？」
穂「うん。すごい新鮮だったけど可愛かったよ」
沙「でも割合がな〜。ツンツンとデレデレが完全に別れてるからさ、もっと交互に出した方が私は好きだな」
真「沙鳥様、これだけは否定させてもらいますわ。死んでもやりま

せん」

夕「夏哉的にはどうなの？ありな人？」

夏「一応ありだぞ。ギャップ萌えってやつ？」

香「あ、分かるかも」

真「分からないでくださいまし！作者っ！！他にないんですの！？」

作「生憎思い付かないからない」

真「なんでよりにもよってこれを思い付くんですの！？」

作「これでお気に入り百人記念話は終わります」

ア「他に何かやるのか？」

作「取り敢えず、この後投稿する『魔法少女リリカルなのは――ＡＬＬ　ＬＯＳＴ　ＳＴＯＲＹ――』の主人公である、紅染謙二（あかぞめけんじ）登場！」

謙二「ど、どうもです」

夏「初めまして」

謙「あ、初めまして。あの、君夏哉さん、ですよね？」

夏「ん？そうだけど」

謙「で、そちらの茶髪の子が香苗さん？」

香「そうだよ」

謙「作者、あんたやっぱり狙ったでしょ？」

作「まね～」

沙「狙ったって？」

謙「その、うちの親の名前が紅染夏哉と、紅染香苗っていうんです」

夏&香&沙&ア&真&穂「「「「「「えええっ！？」」」」」」

作「なんで驚くの？第四話の後書き（ざつだん）で俺言ったけど」

香「……あ、そうだ！そういえば言ってた！！」

沙「そんなの覚えてないよ！」

夕「覚えるに足ることじゃなかったんじゃないの？」

ア「まぁ作者は有言不実行だからな。正直信用してなかったんだと思う」

香「け、謙二くん！謙二くんのお母さんってどんな人！？ちっちゃくない！？」

謙「いや、ちっちゃくはないと思います。沙鳥さんと同じか、ちょ

っと大きい程度ですよ」

香「じゃあ胸は!?胸はどうなの!?」

謙「む、むむ、胸!?いや、ちょ、そ、え、と、そ、そ、そんな、詳しくは見てないんですけど……」

夏「そりゃそうだ。親の胸凝視するなんてマザコン以外の何者でもねぇしな」

謙「ひょ、標準、より……ちょっと大きいって、ところじゃないでしょいか?」

真「謙二さん、申し訳ありませんわ。わざわざお答してもらって……」

謙「いえ、別に――」

??「あっれ、ここどこだ?」

沙「え?あの、あなたどなたですか?」

??「ん、俺?ワイラ・ティルスキだけど……ここどこ?」

香「こ、ここは『四人の魔法使い』の後書きだけど、ワイラ君はどこから来たの?」

ワイラ「なぁ『四人の魔法使い』って畑山香樹の小説の?」

香「うん、そうだよ」

ワ「いや、俺もなんだよ」

ア「俺も、って言うと？」

ワ「俺も畑山香樹の小説の登場人物、てか一応主人公だけど」

穂「えぇっ！？それってなのはの？」

謙「いや、俺は見覚えないんですけど」

ワ「違うぞ？俺は最弱な勇者の記伝っていうやつのところだ。作者は『最勇記』とか言ってるけど」

夏「作者！！どういうこと――っていない！？」

真「あ、書き置き。『これから三つの小説を頑張っていきます。しかし最勇記の方はかなりゆっくりなものになってしまいます』だそうですわ」

夏「なんで書くんだ！？ただでさえ二つでいっぱいいっぱいだって言うのに！！」

香「あ、ワイラ君ごめんね？夏哉君別にワイラ君がいない方がいいって言ってる訳じゃないんだよ？」

ワ「気にしてないよ」

真「あ、今度は降ってきて……。『書きたくなったからしょうがない。それから、今日から２０日間、３／１０まで小説は休業させて

ください。ちょっとリアルを片付けないといけないんで。決して逃げるとはそういう訳じゃないので、ぜひ待っててください。ではまたね』と」

夏「あんのバカが……。謙二、ワイラ、あの作者じゃ苦労すると思うけど頑張れよ」

謙「うん。頑張ります」

ワ「ま、なんとかやるさ」

夕「じゃあここで予告というか、宣伝すれば？」

謙「じゃあさせてもらいます。

『俺は孤独だった。どこに行っても隣には誰もいない。しかしそんな俺にも家族はいた。そこが唯一安らげる場所。しかしそんな場所も、誰とも知らないものに消されてしまった。俺は無力だった。守るものがないから力をつけようとせず、しかし本当に守るべきものは守れずに。もうこの世界がどうでもよくなったとき、俺の目の前に現れたのは――

主人公にチートとかそんなのは全くありませんが、とてもご都合主義の予定です。原作を見ながら執筆をするので、多分原作に近く進めると思うんですが、もし変なところがあったら教えてください』ということです」

ワ「じゃあ俺か。『西暦０４５７年、ラプトンという星にある四大大陸のひとつハーツ大陸ソプリア。そこに一人の少年がいました。その少年はソプリア一有名な魔法学校、エンツィオ学院の生徒でした。そこは優秀な魔術師を排出する場所。その学園内で少年は落ちこぼれと呼ばれていました。たったひとつの、初歩の初歩の魔法し

か使えない少年。少年はそのなかでどうしていくのか。
これはオール一人称で、しかも場所が異世界という初めての挑戦が多いです。ぜひ暖かい目で見てください。更新はかなり遅いですので悪しからず』ってことなんだけど……」

ア「どうしたんだ？」

ワ「まだ一話も完成してないから初投稿がいつになるか分からないんだと」

夏「作者……」

夕「ぶっつけにもほどがあるね」

穂「そうだね」

香「あ」

沙「カナどうしたの？」

香「その、どうでもいいことなんだけど、作者の小説の主人公の頭文字がか行な行や行わ行で携帯のボタンがビンゴ」

真「本当にどうでもいいですわね」

か「ご、ごめんなさい」

謙「いや、俺は普通に驚きましたよ？よく気がつきましたね」

香「ありがとう。謙二くん」

沙「てかこれは狙ったよね？」

ワ「多分な。特に俺なんて最後に出てきたんだから偶然じゃないだろうな」

夏「よし、これでみんなやることやったよな？」

沙「実はまた新しい人が来たり」

ワ「そりゃないでしょ流石に」

沙「やっぱそうか」

香「これで作者の小説は四作目になるんですけど、不安しかないのは私だけかな？」

穂「私もそう思ってるよ」

ア「まぁあの作者だからな」

真「こんな作者でもよろしくお願いしますわ」

夕「じゃあ僕たちの、一応跡継ぎという立場の謙二さん、頑張ってください」

謙「はい」

夏「ではこれからもよろしく。感想でも評価でも、お気軽にください」

第六話　《プロローグ》憎しみ

「「お待たせ致しましたアルクシア様」」

アタシと《義妹》は、我らが神の前で跪いた。

「いいよ別に。タクノム達はもう怪我治ったんだよね？」

「はい。皆万全です」

アルクシア様の問いに《義妹》が答える。

「じゃあお願いがあるんだけど、タクノムからちょこっと聞いた？」

「はい。おね――裏切り者のクーレラの元に向かえと」

《義妹》はいつもの癖で？お姉様？と言おうとしたが、アルクシア様の前ということで言い直した。

「うん。大まかに言えばそうだよ。そこでやってほしいことがあるんだ」

「「なんなりとお申し付け下さい」」

「夏哉っていう人物が地界いるんだ。どうもクーレラの傍にいて、タクノムを倒したらしいんだ」

「え、その噂本当だったんですかっ！？」

「おい！アルクシア様の前だぞ！！」

《義妹》はあまりの驚きに声を荒らげるのでアタシがたしなめる。
だがその驚きは分からなくはない。
地界の生き物は皆弱いと聞き及ぶ。
そんな奴等が《偉大》を打ちのめすなど。

「しかも奇法も使ってくるみたいなんだ」

「……それは本当なのですか？」

「らしいよ」

我々十八番の奇法までも使用するなど、どういうことなのだ？
まさかクーお嬢が何かした？

「で、二人にはクーレラを連れてきてほしいんだ。あ、ちゃんと生かしておいてね。聞きたいこともあるし」

「「畏まりました」」

アタシたちは頭を下げる。

「多分傍に夏哉がいると思うから気を付けてね」

「その男は殺しても？」

アタシはアルクシア様に訊ねる。
《偉大》を倒したとはいえ、相手は地界の生物。
大方《偉大》は油断でもしたのだろう。
それに隙を突けばどうということはない。

ん～、と少し悩むと、指示を出した。

「そうだね。やれるならついでにお願い。でもあくまでも目的はクーレラの捕縛だからね？」

「承知致しました」

「必ずやその任務を遂行致します」

「よろしく。義妹（ネハラ）、愛憎（ヤチク）」

「「はっ」」

アタシたちはそう言うと、アルクシア様の前から立ち去った。

外に出ると、早速ネハラが口を開く。

「あ～～～～んっ♪やっとお姉様に会えるのねぇ～♪」

自分の身を抱いて悶えている。

「ネハラ、落ち着きなさい」

「だってぇ～」

拗ねるネハラ。

しかしアタシもネハラの気持ちは分かる。

短い間とはいえ、この世で神の次に愛するクーお嬢に会えるのだ、

興奮しない方がおかしい。

「喜ぶのは構わないんだ。だが、浮かれ過ぎて失態は犯すなよ？」

「分かってるよそのくらい」

ぷいっと顔を逸らす。

「で、どうするの？すぐ行っちゃう？私はすぐ行きたい！」

「まぁ待て。いろいろやることがあるだろ？」

「やることって何よヤチク？」

「まず外見だ」

アタシたちは自分の体を見る。

寸胴な体に六つの伸縮自在な触手がついているネハラに、真っ青な球体を三つ繋げ、てっぺんに顔、残り二つにそれぞれ四本の足をつけたアタシ。

「お前もクーお嬢があの忌まわしげな地界の生物のことを気にかけてることは知ってるだろ？だからこんなことになった」

「……分かってるわよ。認めたくないけど」

「だからアタシたちもその姿に変える」

「なんで！？どうして私がそんなことしなきゃいけないの！？嫌に決まってるわ！！」

「聞きなさい。言ったでしょ？クーお嬢は人間という生物に興味を抱いてるの。ならアタシたちもその姿になれば興味を向けてもらえる。寵愛されるの」

「愛……」

「それに向こうの姿になればナツヤとかいう奴の隙を簡単につける。ささっと終わる――」

「ちょっと、それ本気で言ってるの？《愛憎》」

ネハラはアタシを睨み付けた。

アタシはその言葉の意味を理解する。

「悪かった《義妹》。？愛？のことしか目に入ってなかったよ。アタシは愛憎（ヤチク）、クーお嬢を？愛？してクーお嬢を取り巻くゴミを？憎？する存在だ」

「地界の貧弱で汚ならしい存在をお姉様の視界に入ってしまうことだけで殺すに値する事よ。その上傍にいるなんて。どう残酷に殺しても足りないわ」

「ナツヤをどう殺すかは後にして、取り敢えずその王様の元へ行かないか？聞けることもあるだろうし」

「その必要はない」

アタシたちの会話に誰かが割り込んだ。

声のする前方を見ると、偉大（タクノム）と従順（ルホン）がいた。

「あ～ら、私たちになんの用？ま・け・い・ぬ♪」

「ネハラ、貴様ァァァァッ！！」

ネハラがからかうように言うと、ルホンが怒りを爆発させた。

それをタクノムが手で制する。

「やめろ。争うために来たのではない」

「しかし！！」

「下がれ」

威圧的な命令を下す。

「……分かりました」

それに渋々とルホンは従った。

タクノムはこちらに視線を戻す。

「確かに俺は敗者だ。何を言っても負け犬の遠吠えにしかならない。その上で言っておく。夏哉を侮るな。やられるぞ」

「ふん、何を言うかと思えば……本当に負け犬の遠吠えだな。偉大という存在の癖に、地界の生き物を指示するとは」

「全くよ。自分が弱いのを認めないで相手を強いとか言っちゃって。あんたの名前アルクシア様に返しちゃえば？」

名前を返す。

これは自分の存在を返す、つまり死を意味する。

「アタシもネハラに一票。地界の生物に負けるなんて、弱いにも程があ――」

「その口を閉じろ。死にたいのか？」

言い切る前にルホンがアタシたちとの距離を一気に詰めて、硬質化させた両手をアタシたちの口の前に突き出す。

「それで私たちに勝った気？」

そんなものは当然アタシたちにも見えていた。

同様に硬質化させた腕と触手それぞれをルホンの首元に当てる。

まさに一触即発という空気だった。

しかし

「貴様等、争いに来たのではないと言った筈だ」

ゾクッと、背筋が凍るような殺気を向けられた。
それに加えて威圧的な言葉に、アタシたちは手を下ろした。
くそ、流石は王と言ったところか。
「それで義妹に愛憎、聞きたいことがあるんだろ？」
「……ええ。お姉様のことを」
ネハラは仕方なくと言った風に答える。
「だろうな。まず見た目だが、あれはここを出たのと同じ格好だ」
アタシは一番最近に見たクーお嬢の姿を思い浮かべる。
地界の生物は気に入らなかったが、クーお嬢のあの姿はとても美しく、神々しかった。
その姿がまた見れると思うと、心が弾む。
「それからクーレラは、向こうでは？アン？と呼ばれている」
「アン？どういう意味だ？」
「それは俺にも分からない。夏哉とクーレラ自身がそう言っていた」
「アン……なんてみすぼらしい名前なの」
ネハラは憎らしげに呟く。

「貴様等の怒りを助長させるつもりはないが、クーレラは夏哉を愛してるそうだ」

「「なんだって？」」

アタシたちはこれ程かというまでに怒気を含める。

クーお嬢の愛はアタシたちに向けてもら――いや、アタシたちに向けてくれなくても構わない。
アタシたちが向けているだけで幸せだから。

しかしその愛の対象が貧弱な地界の生物というのは赦せない。

「ネハラ、今すぐ行くぞ」

「ええ！」

アタシたちは高速で地界に通ずる門（ゲート）に向かった。

第六話　《プロローグ》憎しみ（後書き）

作者「おはこんにばんは～。お久しぶりです。『四人の魔法使い』を十七日ぶりに投稿しました！」

夏哉「ほんと長らくお待たせいたしました。てかその挨拶なんだ？」

作「すべての時間帯で通用する挨拶だ」

香苗「それは作者の頭の弱さしか意味してないよ」

作「香苗ちゃん酷い！」

香「そう言えばこれって１０日投稿するって言ってなかった？」

作「急に変えたよ……。まぁいいや。それは気合いで早く終わらせた！」

香「へぇ～。作者さんお疲れさま」

作「ありがと」

夏「でさ～、お前何？なんなの？本当に出来んの？三作品並行」

作「やってみせるさ。期待される限り」

香「じゃあもうやめちゃえば？」

作「なんで香苗はそんなに俺に辛辣な言葉を投げ掛けてくるの！？

俺なんかした!?」

香「私の出番少ない」

作「え、いや、だ、だってさ～、正直に答えろ。お前バトル役立てないでしょ?」

香「うん」

作「で、恋愛に関しても、お前もう夏哉に惚れちゃってるし、イベントが少ない」

夏「俺が言うのもなんだけどさ、それをなんとかすんのがお前じゃないの?」

作「ん～、でも、アンには負けそうな気がするんだよな」

香「それって、アンちゃんは恋愛もバトルも参加できるから?」

作「その通り」

香「うぅぅ、どうして私には力がないの～?」

夏「あほ、お前に力があっても誰が戦わせるか。香苗はただ見てりゃいいんだよ」

香「夏哉君……」

作「そうして香苗は影が薄くなっていく」

香「……さぁくしゃさぁん。プチッと肉を潰されるのと、サクッと骨を刻まれるのと、どっちがいいですか？」

作「かかかか、かなえ、さん？ここ、こわ、こわいですよ？」

香「ざぁんねぇんでしたぁ。時間切れでぇ～す。じゃありょぉほぉってことで～」

作「待って！なんで拷問道具を持って――」

香「真樹ちゃんから貸してもらいました」

作「真樹ぃぃぃ！お前なんでこんなん持って――ぎゃあああああっ！？」

夏「死オチかい。じゃあ改めて、小説を読んでくれてありがとう。これからは投稿スピード落ちていくと思うけど、できれば見てやってください。感想や評価なども待ってます」

第六話　《一章》お出掛け

日曜日、麦谷町にある家の二階の自分の部屋でゴロゴロと漫画を読んでると、インターホンが響き渡った。

「はぁ〜い」

開いてた本を閉じ、玄関に向かう。
多分私のお客だ。

ドタドタと大きい音を立てて階段をかけ降りる。

「お待たせしました〜」

そう声を掛けながらドアを開く。

そこには私の親友、八雲愁（やくもしゅう）ちゃんがいた。

「全然待ってないです！」

水色の髪の輝きに負けないくらい眩しい笑顔を放つ。

「ん〜と、じゃあすぐ荷物持ってくるから上がって待っててよ」

「いえいえ！ここで待ってますよ結様っ」

……別に私がお嬢様とか、罰ゲームを与えてるとか、無理矢理呼ばせて喜んでるとかは全くないです。
私はただの千鳥山中ニ年生の一般生徒で、愁ちゃんも同じく千鳥山

中二年生の一般生徒だ。
それなのに何故愁ちゃんが私に様付けをするかというと――
「あ、愁ちゃん。いらっしゃ～い」
二階から声が降ってきた。
「ささ、沙鳥様っ！？おおお、おはようございます！！」
私に様付けをする理由がタイミングよく現れた。
Tシャツ一枚に短パンというラフな格好。
いつも縛ってる髪はほどいている。
天雲沙鳥。
この人物が私の姉で、皆のアイドル的な一般市民。
お姉ちゃんの妹ということで私は皆からちやほやされる。
「おはよ～。結とお出掛け？」
お姉ちゃんはただただ普通に話し掛けるが、愁ちゃんはもうテンパっている。
「はは、は、はいっ！隣町に！！」
「そっか～。行ってらっしゃい」
「あ、ありがとうございます！！」

ぺこりというほど可愛らしくない、深々としたお辞儀をする。
何がありがとうなのかが分からないけど、嬉しいなら何よりだ。

「じゃあ取ってくるね」

私は急いで自分の部屋から荷物を取りにいって、その後愁ちゃんと出掛けた。

「はぁ～」

家から出た後からずっと愁ちゃんは幸せそうなため息をつく。

「お姉ちゃんと話が出来てよかったね」

「はいっ！私はもう幸せです！！もう死んでも構いませんっ！！」

「それは困るな～。友達一人減っちゃうよ」

「そそ、その様な勿体なきお言葉、ありがとうございます！！」

なんだか誰を支持してるのか時々あやふやになる。
愁ちゃんはあくまでお姉ちゃんの支持者であって私はおまけな筈なのに、こんな風に接しられると勘違いしそうだ。

私はお姉ちゃん以上ではない。

悲観してる訳じゃなく健全たる事実。
顔は……お姉ちゃんは可愛いって言ってくれたけど他人の価値感次第なのでどうとは言えないけど、お姉ちゃんには勝てていないのは明白。

スタイルだって正直真逆だし、髪の毛だって癖っ毛だ。

そして何よりスペックで完敗している。

料理なんて全くだし、体を動かすのも苦手。

勉強だけは勝ててると言ったくらいだ。

そんな私をまるで神の使いかのように扱ってくれる愁ちゃん。

ちょっと意地悪な質問してみよう。

「ねぇ愁ちゃん」

「なんですか？」

「愁ちゃんは誰を支持してるの？私？お姉ちゃん？」

「そんなの、両方に決まってます！！」

「え～、だって一年の頃最初に会った一言が、？貴女本当に沙鳥様の妹？？だったでしょ？」

「お、覚えててくれたんですか？」

「だって中学に入って初めて話し掛けられて、初めて友達になった子の一言だよ～？記憶してるさ～」

「結様……」

うっとり熱い視線を投げ掛けてくる。

もう、全く悪い気がしない。

「それより、私はあの時、私のみてくれも中身も気にしてないで、ただ？天雲沙鳥の妹？だからって理由で話し掛けられたって感じだったんだけどな～」

「それは――いえ、その通りです。初めは沙鳥様の妹だからという理由で話し掛けました。でも、今は違います。今まで結様を見てきて、優しくて凛々しくて、私なんかを友達と言ってくれる、沙鳥様と同じくらい大切な存在です。もし私のことが迷惑な存在だと思うなら、すぐにでも離れます。姿を見せません」

愁ちゃんの目は、百人中百人が見ても真剣と分かる程だった。
私が本当に消えてと言えば、本当に一生姿を表せないだろう。

そんな友達を見て、私は愁ちゃんの手を握る。

「ごめんね、酷い質問しちゃったね。迷惑なんて思わないよ。ていうかそれこそ友達が一人減っちゃうよ」

だから、と愁ちゃんに笑顔を向けながら言う。

「これからも一生友達、いやいや、親友でいてください」

ん～、なんかクサい台詞だったかな～。

私の言葉は愁ちゃんに効果てきめんのようで、みるみるうちに顔を真っ赤にさせる。

「ここ、こちらこそ、おねが、お願いしますっ」

カッチカチになりながらも返してくれた。
ほんといい友達を持ってるね～私は。
お姉ちゃんもこういう人がいっぱいいてくれたらいいな。
そんなことを思いながら、愁ちゃんと手を繋いだまま歩いていく。

「あ～、冷たい」

ペロペロとソフトクリームをなめながら感想を呟く。

一通り遊んでお昼も食べて、今は歩きながら二人でスプーン付きソフトクリームを食べている。
私はバニラといちご、愁ちゃんはチョコオンリー。
……歩きながらは行儀が悪いとかは言わないでください。
なんかこう、憧れるじゃないですか。

「ねぇねぇ、一口もらっていい？」

「へ？」

私は返事を聞かずに愁ちゃんのスプーンを使って一口食べた。

「ふぃ～、チョコもいいね～。あ、こっち食べる？」

そう言いながら私は自分のソフトクリームを一すくいして、愁ちゃんの前に持っていく。

「どうする？食べる？食べない？」

「あ、えと、あ、え、その、た、食べます……」

「はい、あ～ん」

愁ちゃんは恥ずかしがりながらも口を開けた。

私はその中にスプーンを放る。

口を閉じると、スプーンを離す。

もともと愁ちゃんのだしね。

「どお？」

「その、熱い、です……」

「アイス食べてるのに？」

「い、いえ、か、顔が……」

も～、いちいち可愛いね～。

別に百合って訳じゃないけどさ～。

愁ちゃんを見ると、じっとスプーンを見つめていた。

「ゆ、結様が使ったスプーン。私も使ったスプーン。結様と私の唾液が絡み合ったスプ……」

ぶつぶつと危ないことを呟いていると、ぱくっと加えてしまった。

……あんまり考えたくはないけど、もしかしたら口のなかではスプーンをペロペロキャンディーの如く舌を忙しなく動かしてるんだろう。
時々口から舌が見えるから。
なんていうか、凄い危ない目をしてる。

「愁ちゃん、変態」

はっ、となって動きを止めた。

「わ、私は何を……？」

どうやら完全無意識でやっていたようだ。
本能って怖いね。

これ以上野放しにさせておくといろいろあれなので話を変える。

「なんかさ、私たち恋人って感じだね。二人っきりで出掛けてアイスをあーんとかして」

「こいび――！！」

顔をゆでダコのように真っ赤にする。
ちょいと愁ちゃんにとっては刺激的過ぎ――

ドンッ

「冷てっ！？」

思考に沈んでいたら、誰かにぶつかってしまった。

しかもその時ソフトクリームがべっとり服に付いてしまった。

「ありゃ、ありゃりゃりゃりゃ～？」

凄い間抜けというかゆるゆるというか、あんまり驚いてる風には見えなかった。

見ると私たちと同い年くらいの男の人だった。

「ご、ごめんな――」

「ちょっとあんた！！結様になんてことしてくれてるのっ！？」

頭を下げようとした瞬間、愁ちゃんは私と男の人の間に入って睨み付ける。

「様……？なんか真樹を彷彿とさせる――じゃなくて、ほんとごめん。大丈夫？」

「あ、はい、大丈夫ですっ。えっと、ごめんなさいっ。考え事をしてて……洋服弁償します！」

「そんなことしなくていいです！！この男が悪いんですから！！」

「いや、まぁそうなんだけどさ。うん、この子の言う通り弁償はしなくていいよ……」

私は何故か男の人にガン見、というほどではないが顔を見られた。

なんか顔についてる？

「な、何か？」

顔をぺたぺた触りながら訊ねる。

「あ～ごめんごめん。ただ誰かに似てるな～って思っただけ」

「はぁ！？あんたもしかして知らないの！？この方は沙鳥様の妹であらせられる天雲結様よ！！この恥知らずがっ！」

周りなんてお構いなしといった風に声を撒き散らす。

「え、妹……？」

はぁ～、またよいしょよいしょと持ち上げられるのか～。
嫌な気はしないけどさ。
男の人はポンと手を叩く。

「あぁ、お前沙鳥の妹か。通りで似てると思った」

へ？
今この人、？沙鳥？って呼び捨てにした？
男の人なのに？
もしかして数少ないお姉ちゃんのことが好きじゃない人？
ということはつまり……

「同性、愛者さん？」

「おいこら、初対面相手に何言いやがる」

「はっ、ご、ごめんなさい！！」

思わず思ったことを口にしちゃった。

「貴様！！結様になんてことするのよ！！」

愁ちゃんは私を守るかのように右ストレートを男の人の鳩尾めがけて振り抜いた。

女の子とはいえ愁ちゃんは柔道部エースらしいのでそれなりの威力は出――じゃなくて！

「しゅ、愁ちゃん、何初対面の人になんてことしてるの！？」

「全くだ。こんなの喰らったら気絶するぞ？」

「当たり前じゃない。そのつもりでやったんだ、から……」

少し自慢げに言った愁ちゃんは固まる。

角言う私も固まる。

私の言葉に答え、愁ちゃんに話し掛けたのは誰？

恐る恐る顔を向けると、そこには、殴られたお腹を擦りながら、しかし平然としてる男の人がいた。

「ちょ、なんで気絶してないのよ！！」

「お兄さん頑丈だから。あ、柊夏哉です。お姉さんにはいつもお世話になってます」

ペコリと頭を下げられる。

そうなると私も下げなきゃと思ってしまう。

「あ、いえ、ご丁寧に。こちらこそ沙鳥がお世話になってるようで。私、天雲結です。で、こちらは八雲愁です」

ペコリと頭を下げる。

「ゆ、結様!?こんな男に頭を下げなくていいんですよ!?」

「いや、だってこんな丁寧にされちゃったら……って夏哉?」

「はい。沙鳥ちゃんとクラスメイトで友達やらしてもらってます柊夏哉です」

たしか早乙女さんって人が前お見舞いに来たときその名前を聞いた気がする。

も、もしかしてお姉ちゃんの好きな人?

実名聞いてないからすっごい聞きたい。

でも聞いたら愁ちゃんが暴れだす。

どうしたものかとかんがえて、思い付いた。

私とお姉ちゃんの好きな人が知ってて、愁ちゃんの知らない、当たり障りのない質問をすればいいんだ。

「あの、夏哉さんって学校で巨漢のオカマをやっつけた人ですか？」

「あぁ、沙鳥から聞いたの？そうだよ」

「きょ、巨漢でオカマ？どんな人なんですか？」

愁ちゃんの疑問は確かだけど、お姉ちゃんの好きな人が分かったからそこまで気にしない。

「あ、それより、アイス買ってくるよ。それと同じバニラと苺でいい？」

そう言われて思い出した。

私の手には潰れてしまったソフトクリーム。

夏哉さんの服にはべっとりついたソフトクリーム。

「あ、い、いえっ！そんなのいいです――」

「やめてくれませんか？」

私の言葉を遮るような形で、どこかから声が聞こえた。

とても透き通った、綺麗な女の人のものだった。

辺りを見回すと、それらしい人物を見つけた。

綺麗な水色の髪で、大人の女性って感じがする。

肩には刀とかなんか長いものをいれる袋をかけている。

剣道とかそういうことをやってる人なのかもしれない。

しかしその人は普通の状態じゃなかった。
男の人数人に囲まれてた。
こんな道端にナンパかもしれない。

「え、えっと、警察、呼べばいいのかな？愁ちゃん？」

「あの、ナンパで警察呼んでもいいのかどうか……」

私たちが悩んでると夏哉さんが一歩前に出た。

「俺がなんとかするから、そこで待ってなさい」

――――――――――――

さて、どうしよう。
こっちに来て早々知らない男たちに絡まれてしまった。
騒ぎになるのは色々とマズイので穏便にすませたい。
正直正当防衛とか、どこら辺までが正当なのかが分からないし、助けを求めるにしても何をどうやって求めればいいか分からないし。
かといって波を立てずにこの場を納めるという技術は持ち合わせていない。

やめてと言っても全くやめる気配もないし。

もうやっちゃおうかな。

そう思って肩に掛けてある木刀を取り出そうとしたとき――

「あの、その人困ってるようなのでさっさと消えてくれませんか？」

一人の少年が男たちの輪の外から割り込んできた。

かっこよくもブサイクでもない普通の顔。

黒い、少しだけ長い髪。

ガッチリとした体型ではないが細い訳でもない普通の体型。

どこにでもいる、普通の少年だった。

この出会いは、予想外すぎた。

でもこれはよかったのかもしれない。

「あぁ？なんだテメェ？」

「通りすがりの高校生です。それより早く離れてあげてくれませんか？そうしないと……」

「そうしないと、なんだ？俺らとやろうって――」

ゴッ！！

一人の男が倒れた。

皆戸惑っていた。

どうして自分の仲間は倒れたのか？

どうして頬が赤くなっているのか？

少年は全く動いていない筈なのに。

しかし私には見えた。

あの少年は、目に見えないくらいの速さで拳を男に向けて放ち、風圧をぶつけて倒したのだ。

多分人には誰にも見えないだろう。

あれは人間離れしている。

まぁそれは置いといて。

何が起きたのか分からない男たちは倒れてる男を抱えて逃げてしまった。

「ふぅ、だいじょう――」

「ありがとぉぉぉぉぉっ!!」

私は少年をぎゅうってした。

「う、ぃ、うえ?」

狼狽える少年を置いておいて、そのまま話し掛ける。

「本当に助かったよ!もうかっこよかったしっ!さながらヒロインを助ける主人公みたいだったよっ!!」

「あ、えっと、そ、そろそろ離してはくれませんか?」

「あ、うん」

私は離れた。

「そうだ、自己紹介しないと。私は空揺火津那（そらゆりかづな）。周りは？空ねぇ？って呼ぶ人が多いよ。出来ればそう呼んでね」

「そ、空ねぇですか。あ、俺は柊夏哉です」

柊夏哉、この人が私の――

「じゃあ夏君だ！夏くぅぅぅんっ！！」

私は再び抱きついた。

第六話　《一章》お出掛け（後書き）

作者「空揺火津那登場した！！」

真樹「このキャラクターは、読者のｓｋｙｆｌａｒｅさんをもとにして誕生しました。ｓｋｙｆｌａｒｅさん、設定などをくださいましてありがとうございますわ」

沙鳥「えっと、プロフはもうちょい待っててね、と。んでんで、なんだか妹ちゃんがお世話になったようですが、お話の中心に入ってくるの？」

作「いや、ないね。フラグも立たないだろうし、ちょくちょく出てくるかもしれないけど」

沙「そっか。じゃあゆうぞうが夏哉を取り合うライバルにはならないんだ」

作「むしろ応援する方だな」

沙「よかった～」

作「あ、実は今回真樹出番少ないと思うから」

真「貴様～！」

作「だってお前、香苗に拷問器具渡したし」

沙「あ、結構後引いてたのね」

真「あ、あれは香苗に頼まれたからで、用途は聞いてませんわ！」

作「まぁそれにしても、異世界関連だから無理」

真「うぅぅ～……」

作「まぁそれはそれとして、ｋｉｔｔｉさん、はじめての感想ありがとう。ｓｋｙｆｌａｒｅこと空ねぇ、いつもいつもありがとう」

沙「いや、空ねぇことｓｋｙｆｌａｒｅさんじゃないのそこは？」

作「い～の。それから、もし？こんなキャラを出してほしい？という人は言ってください。できる限り叶えますんで」

真「他のキャラを、つくるくらいなら、わたくしの出番を、増やせばいいじゃないですの……」

作「なぁどうするよ？真樹落ち込んじゃったぞ」

沙「あんたのせいでしょうが」

作「じゃあ放置ってことで。これからもこの小説、それから他の三作もよろしくです」

第六話　《二章》良い男の名

突然抱き締められた。

誰がこんなことを予想出来るというのか？

確かにナンパから助けた。

正直要らないけど感謝はされるだろうなぁとは思ったさ。

思ったけどさ。

抱きつくってのは頭になかったわけで。

しかもさっきまでクールで大人びた表情だったのに一転して子供っぽい、緩んだ表情になるなんて思いもしなかったわけで。

公衆の面前だというのに全く動けなかった。

なすがままになっていた。

切っ掛けは特になかったけど、ふと我に返る。

「あの、火津那、さんでしたよね？そろそろ離して欲しいんですが……」

俺の言葉を聞いた火津那さんは俺から離れて、両手で俺の頬を押さえた。

「そ・ら・ね・ぇ」

ずいっと顔を寄せられた。

こう呼ばないと離さないということだろうか？

「え、えっと、空ねぇ？離してほしいんですけど……」

「は～い」

にこにこ笑顔で俺から離れる。

「あ、服が汚れてる」

火津那さん、もとい空ねぇの視線を追うと、先程沙鳥の妹とぶつかって出来たソフトクリームの跡があった。

「ああ、さっきアイスが当たっちゃって」

俺の言葉を聞いていないのか、空ねぇはポッケからハンカチを取りだした。

屈んで、ハンカチを汚れたところに押し付ける。

「これ落ちるかな～？」

ぐいぐいと押し付けてくる。

俺はベッタベタな、？む、胸が押し付けられてる～？とかはなかった。

しかし。

めっちゃ冷てぇぇっ！！

という感情が頭のなかを支配していた。

六月とはいえ、腹が冷えるのは耐えられない。

「あ、す、すいません、もう大丈夫です」

「駄目っ、染みになっちゃうでしょ？」

「その前に風邪引いちゃいますから！！」

なんでこんな頑固なの！？

ラブコメ主人公たち、こう変なところで頑固っていうのはつらいな。

まぁ性的我慢じゃない分マシだけどさ。

「あ～の～、夏哉さん？」

すると後ろから結ちゃんが俺の名前を呼んだ。

空ねぇも拭くのを止めて結ちゃんを見る。

愁ちゃんもいる。

「そちらの方は、お知り合いで？」

「あ～、いや、初対面」

すると空ねぇは立ち上がり、友達の妹とその友達に微笑みかける。

「私空揺火津那、よろしく。君たちの名前教えてもらっていいかな？」

「天雲結です」

「八雲愁です」

二人はペコリと頭を下げた。

「よし、これで友達三人目」

空ねぇはなんだか嬉しそうだ。

てかいろいろ引っ掛かる、というか聞きたいところがあった。

「ちょ、待ちなさい！なんで結様の名前を聞いて驚かないの！？」

俺が言おうとする前に愁ちゃんが疑問を投げ掛けた。

そういえばそうだ。

俺が思ったことはそれじゃなかったが、確かに？天雲？という姓を聞けば殆どが疑問に思うはずだ。

？天雲沙鳥の関係者ではないか？と。

しかしそんな素振りは全く見せなかったし、演技したとしてもまずする必要性がないと思う。

そう考えてたら、本人が答えてくれた。

「え？その子有名人なの？ごめんね、私いわゆる帰国子女って奴だから日本のことよく分からないの。こっちに来たのもついさっきだから」

ごめんね、ともう一度謝りながら結ちゃんの頭を撫でる。

俺は、なるほどと理解した。

愁ちゃんの疑問もそうだったし、俺の、友達三人目とはどういう意味だ、という疑問も。

日本に来て、という意味なんだろう。

結ちゃん親衛隊――かどうかはさだかではない――の愁ちゃんも、そう言われてしまったらもう強くは言えないようで黙ってしまった。

「火津那さんはいつから海外にいたんですか？」

結ちゃんが質問する。

「生まれたときからだよ。ずーっと十六年間アメリカにいたの」

「十六年間いたんですか。長いですね～」

ってあれ？

ちょっと待て？

今この人、おかしなことを言った気が――

「「「十六年間！？」」」

俺、結うちゃん、愁ちゃんは声を揃えて叫んだ。

十六年？

生まれてから、十六年？

ついさっき日本に来た？

それが示すことはといえば……

「あ、あの、空ねぇさん？女性にこういうことを聞くのは失礼だと思うんですが」

「どうかした、夏君？」

「お歳はいくつでしょうか？」

「私？十六歳だよ。ちょうど一週間前に誕生日だったの」

「あ、おめでとうございます」

愁ちゃんが頭を下げたので俺たちもおめでとうございますと頭を下げる。

空ねぇもペコリと頭を下げてお礼を言った。

「って、そうじゃなくて。本当に十六歳？成人まだ迎えてないの？」

「そうだよ。高校一年生だよ」

「え、じゃあ俺とおんなじじゃん」

「ほんとっ！？夏君とおんなじだ～！」

嬉しそうに笑う空ねぇ。

てっきり空？ねぇ？と呼ばせてるから年上とばかり思っていた。

そんな考えが顔に出ていたのか、空ねぇはペタペタと自分の顔を触る。

「まぁ勘違いするのもしょうがないよね。みんなから言われてるし。性格もみんな大人っぽいって言うし。嫌いじゃないけど」

ところで、と空ねぇはこちらを指差した。

「お三方は……どういう関係？お友達？」

「ん～、初対面です。ただ、俺の友人の妹さん。んで、その妹さんの友人、でいいのかな？」

「はい、概ねあってます」

「そうなんだ～。初対面なのに仲いいね」

「私はこんな男嫌いです。散々結様に迷惑かけて」

「ところで愁ちゃん、なんで様付けなの？」

「結様は尊敬に足る人物だからです！」

堂々と言った。

本当に真樹を彷彿とさせる。

まぁああっちは演技だけど。

「愁ちゃんはそう言ってくれるけど、実際お姉ちゃんがすごい有名人なんですよ。その妹だからってことで優遇されてるんです」

「へぇ〜。お姉ちゃんと似てるの？」

「いや〜、全然ですよ。お姉ちゃんの方が百倍可愛いです」

「そうか？俺はよく似てると思うけど……」

そこではたと気づく。

どうしてすぐに沙鳥の顔を思い浮かべなかったのか。

パーツは似ている。

髪も黒髪だし、沙鳥ほど伸ばしてないし縛ってもないけど、それでも似ている。

では何故気づかなかったのか。

結ちゃんは沙鳥の持ってるバカ面がないのだ。

結ちゃんは賢そうに見えるが、対する姉はそんな面影が皆無だ。

俺の中ではそれがかなりの違いを生んでいたらしい。

そこに気付いてしまえばすぐに結ちゃんを見て沙鳥を思い出すだろうし、沙鳥を見て結うちゃんを思い出すだろう。

「夏哉さんどうしました？急に話止めて」

思考に耽っていたら不信に思った結ちゃんが話し掛けた。

「あ、いや、自分の疑問を自分で解決してただけ」

「そうですか」

結ちゃんは深くは追求してこなかった。

「そだ。さっき言ったソフトクリーム買ってくるよ。空ねぇ食べる？」

「食べる！」

「愁ちゃんは？」

「名前で、しかもちゃん付けしないで気持ち悪い」

相当嫌われてるな俺。

何もしてないのに。

「じゃあ八雲、食べるか？」

見たところさっき持ってたアイスはもう持ってない。

「貰っておく」

「うし、じゃあ買ってくる」

俺は結ちゃんたちが来た方向に歩いていく。

店はすぐに見つかった。

少し人はいたが長い時間待つほどではなかった。

バニラ、バニラ&

コの四つを買って戻った。

「好きなのとって」

「ごめんなさい、私のせいでわざわざ」

「気にしないでいいよ。俺のせいだし。運がよくてもらったくらいに思ってればいいよ」

「はい。そうします」

そう言って結ちゃんはバニラ&イチゴを取る。

「じゃあもらうわ。ありがと」

「はいよ」

続いて愁、もとい八雲がバニラを取る。
俺のことが嫌いなのに礼儀は忘れていない。
いい子だね。
こういう子がいれば結ちゃんも昔の沙鳥みたく孤独にさいなまれはしないと思う。

「夏君、ありがと～」

「どういたしまして」

そして最後に空ねぇ。
バニラ&チョコを選んだ。

俺は最後に残ったチョコを舐める。
普通にうまかった。

「じゃ、俺は帰るわ」

ほんとは買い物があったけど、この服じゃいろいろ目立つ。
別に今日中に買わなきゃいけないものもないので、なんとかなる。

「あ、はい。さようなら。アイスありがとうございました」

「ありがとう」

「夏君まったね～！」

三者三用の挨拶をして来た。

最後の空ねぇの言葉だったが、今日こんな偶然の出会いだったのでまた次があるのだろうか、と思ったが言わないことにしておく。
ちゃんと空気くらいは読める。

俺は元来た道を歩いていく。

――――――――――

愁ちゃんとのデート、もといお出掛けから帰ってきて、真っ先にお姉ちゃんの部屋に向かった。
ノックをすると、入ってきていいよ、と声がする。

「お姉ちゃ～ん、ちょっとお話があるんだけど」

「え、おはな――ま、待って！私結にはなんにもしてないよ！？結うに害なすことは何一つやってないよ！？ホントだよ！！」

突然お姉ちゃんは慌て出した。

慌てたというより怖がってると言った方が正しいかもしれない。

私何かした？

思い返すが見当がつかない。

私と話するのがいやなの……あ、？お・は・な・し？するのがいやなのか。

「私は管理局の白い悪魔じゃないから」

「……ほんと？」

「ほんと。ちょっと今日会ったとある男の人の話を聞いてほしいなって」

「え、何っ！？結もしかしてそれって恋愛話！？」

「ん～、そうだね」

お姉ちゃんはきゃっきゃとはしゃぐ。

はやりお姉ちゃんも女子高生なのでこういう話に興味があるようだ。

……嘘はついてないよね。

「あのね、お昼くらいに愁ちゃんとソフトクリーム食べながら歩いてたんだけど――」

「何それ？簡単に話想像できちゃったんだけど。もしかして不良にぶつかって、アイスつけちゃって、弁償しろとか言われたところに颯爽とイケメン登場して不良を倒した、って訳じゃないよね？」

私の言葉を遮り淡々と妄想をくちにする。

「当たらずとも遠からず、ってとこかな？」

「え、嘘っ！？結いつの間にヒロインになったの！？」

「まぁ聞いてって。それで、ソフトクリーム食べながら歩いてたんだけど、前から来た男の人にぶつかって服汚しちゃったのね。私は弁償覚悟だったんだけど男の人は？いいよいいよ？って言ってくれたの」

「ありゃりゃりゃりゃ～、いい人だね」

その時、夏哉さんと同じ言葉をお姉ちゃんが使ったので、なんだかおかしく思えた。

「うん、そうだね。でね、その時ちょうど近くで女の人がナンパにあってたの。そしたらその男の人が間に入って、ナンパした人たちを一瞬で追い払ったの」

「マジ？なんかもう主人公みたいな人だね」

「でしょ？しかもその後、ぶつかったお詫びにってアイスおごってくれたの」

「へ～、その男の人に惚れちゃったんだ」

「私惚れてないよ」

「え？だって恋愛話って……」

「私の恋愛話とは言ってないよ」

「じゃあ誰の？」

「まぁまぁ、もう少しで話終わるから。私ね、その男の人に質問してみたの。？学校で巨漢なオカマを倒したことありますか？？って」

「え……」

お姉ちゃんが固まる。
流石に気づいたか。

「そしたらね、うんって言ったの。それに名前聞いたらね、柊夏哉さんって言うんだよ」

「え、ちょ、えええぇっ！？」

お姉ちゃんは思いっきり目を見開き、叫ぶ。
よほど以外だったらしい。

「夏哉さん、言っちゃなんだけど見た目は普通なのに、強くて優し

くて、それこそ主人公みたいだったな～。差し詰めヒロインはお姉ちゃん？」

そうたずねるけど、お姉ちゃんは驚きのあまり口をパクパクとしている。

「お～い、お姉ちゃ～ん」

「はっ！？ねぇ結！本当に、ほんっっっっっっっと～～～～～に、フラグ立ってないよね？正直妹にも容赦しないよ？」

「私には立ってないよ。確かに優しいし、お姉ちゃん笑顔にさせてくれた人でも、いや、してくれた人だから、お姉ちゃん応援するよ。余程私イベントがない限り」

「うぅぅ～、結いい子だよ～。結が妹でほんとよか――あれ？そう言えば結、さっき私？には？って言わなかった？？には？って」

「うん、言ったよ」

「ということは結以外にはフラグ立ったってこと？愁ちゃんとか愁ちゃんとか愁ちゃんとか？」

さすがお姉ちゃん、夏哉さんのことになると敏感だね。

「残念。愁ちゃんじゃなくてナンパに会った人の方。顔を赤くはさせてなかったけど、むぎゅぅぅぅって抱き締めてたよ。英語で言うとハグ」

「それほんと！？」

「うん。まぁその人帰国子女って言ってたから、外国ではそれが普通ってだけかもしれないよ」

「うむ～、あとで問い詰めないと……」

「……お姉ちゃん、話も聞かないうちに嫉妬に狂って夏哉さんを襲っちゃダメだよ？」

「結は私のことヤンデレヒロインに見えてるの？夕〇ちゃんじゃないから安心しなさい」

「うん、分かった。話はそれだけだよ。もしかしたら夏哉さん、本当に主人公の如くフラグを立ててるかもね」

「……否定出来ないよぉ。あれ多分主人公気質あるし……」

「漫画だとヒロインとえっちぃイベント起こるよね？どう？」

「……ありました」

「うっそ？ほんとにっ！？フラグ固まってきた～？」

「そうだったら嬉しいね～」

「ん、じゃぁ頑張ってね」

私は立ち上がってドアに向かった。

「教えてくれてありがと。愛してるよ」

「……お姉ちゃん百合って噂あるけど、まさか……。それに近親相――」

「馬鹿死ねゆうぞう！！」

お姉ちゃんは手元にあった枕を掴み、投げてきた。

私は慌てて部屋から出て扉を閉める。

ボンッという音の後に、ボトッという音が聞こえた。

枕がぶつかり、重力に引かれ下に落ちたのだろう。

顔を真っ赤にしたお姉ちゃんの顔を浮かべながら部屋に戻る。

第六話　《二章》良い男の名（後書き）

香苗「ひうっ、あうっ、ぐずっ……」

アン「うぅぅ、ずずっ、う、あっ……」

作者「え、何のっけから二人泣いてるの？」

香「……出番がない」

ア「この三話名前すら出てない」

作「いや、大丈夫だって。ちゃんと次話は出すから」

香「……でも出るって言ってもほとんど火津那（ねえさま）さんがヒロインになっちゃうし魔族との戦闘だから沙鳥ちゃんはあっても私はないでしょもっと言えば学校話になったとしても沙鳥ちゃんもアンさんも真樹ちゃんもいるからどうせ私影薄くなるんでしょ兄弟姉妹もいないからその分スポットも当てられないししかも私単体じゃ全くネタにならないし聖族なんてまだ神様しか来てないし活躍出来ないよ正直私特有の頭脳も道具の扱いに長ける能力も活躍してないし本当に私は真樹ちゃんとポジションを変えるんだよね第一話の雑談でもアンさん言ってたし魔法使えないのになんで四人の魔法使いの四人に入ってるんだって私は皆からどんどんどんどん忘れ去られて影でひっそり生きていくんださようなら夏哉君さようなら皆私は画面端の方で応援してるよ」

ア「ちょ、さ、作者。私はまぁボケのつもりでいってたけど、香苗の奴マジだぞ？どうにかすべきじゃないのか？」

作「う、うん、流石に俺も可愛そうになってきた。か、香苗ちゃ～ん、戻っておいで～。こっちに来れば夏哉とデート券あげるよ～？」

香「いいですよどうせ作者さんのことだから有言不実行になってしまうんでしょそれにで来たとしてもアンちゃんとか沙鳥ちゃんも加わった四人でいや真樹ちゃんも入れて五人でお出掛けでしょきっとそうだ」

作「安心しろ、ちゃんと二人きりだ。尾行は……あるかもしれないけど、邪魔はしないように言う」

ア「だ、大丈夫だ。私は覗きなんて真似はしない。香苗がお泊まりしたときも私はちゃんと空気を読めたし。今回もちゃんと空気読むから。な？」

香「……うん」

作「さぁてそろそろ謝辞を送りたいと思います。空ねぇさんｃｏｌｏｒｆｕｌさん感想ありがとうございました。いつもいつも誉めてくれて嬉しいです」

ア「他の読者の皆もありがとう。評価もお気に入り数も着々と増えているのも皆のお陰だ」

香「ではこれからもよろしくお願いします。……出来れば、私の出番を増やすための案をください」

作「うわぉ、まさか最後で要望を出すとは思わなかった」

香「あ、でも無理に出さなくて良いですからね」

第六話　《三章》転校生

翌日の登校日。
俺、香苗、アンは沙鳥を待っていた。
すると……。

「なぁぁぁぁっつやぁぁぁぁっ！！」

猛ダッシュで沙鳥が走ってきた。

「おー、おはヨオッ！？」

突然走り幅跳びの要領でこちらに飛んできたと思ったら、そのままヘッドロックをかけられた。

訳が分からない。
俺は沙鳥に何をしたと言うのか？

「夏哉ぁ～？洗いざらいゲロってもらうからね～？」

「はぁっ！？何が！？ほんといきなりなんだよ！？」

怒っているのか、そう思ったが違う気がした。
絞めてる腕に力が全然と言っていいほど入っていない。
ただ抑えてると言った感じだ。

それにだ。

今まで混乱して気付かなかったが、

ムニュムニュっ。

さっきから頭に沙鳥の大きい大きいお胸が押し付けられている。

や、柔らかすぎる……。

一瞬、もうこのままでいいやという考えをよぎったが、ごくわずか残った理性がそれを打ち消す。

こんな人前で何をやっているんだ、と。

いや、人前じゃなければやっていいというわけではないけど。

そんな思考をしている間にも沙鳥は押し付けてくる。

これは確信犯だ。

何故沙鳥がいきなりこんなことをしてくるのかは全く分からないが、そろそろ俺も限界になってきたわけで。

こんな寮の真ん前で浴場なんてしたら最低な男というレッテルを貼られてしまうわけで。

俺は人差し指でツンツンと脇腹をつつく。

「ふきゃあっ!?く、ぷっ、ぬ、あっ!?ちょ、なつっ!?や、やめっ!?ぬ、ふぎっ!?」

しばらくつくとヘッドロックが外れたので慌てて離れる。

ほ、本当に危なかった。

地べたに座りながらはぁ、はぁ、と肩を揺らす。
沙鳥はつつかれた脇腹を抑えながらこちらを睨み付ける。
「何するの夏哉!?」
「それはこっちの台詞だ!!お前の行動の理由が全く分からない!!」
「夏哉の方が分からないよ!!脇腹つつくなんてっ!ひどいよひどいよっ!!」
「あの～、沙鳥ちゃん、夏哉君」
いよいよ本格的に叫び合いが始まろうとするときに香苗が止めた。
「外なんだし寮の前なんだし、叫ぶのはやめよーよ」
そう香苗に指摘されては従わざるを得ないので、俺たち四人は肩を並べて歩いていった。
俺と沙鳥はすっかり毒気を抜かれた。
「それで、沙鳥はなんであんなことしたんだ?」
アンが仲介役として入ってくれた。
「あのね、昨日夏哉がカクカクシカジカでね、それをカクカクシカジカかどうか確かめようと思ったの」
「沙鳥ちゃん?この世界は三次元で、決して二次元じゃないからそ

んなご都合言葉が通用するわけないーー」

「夏哉、それは本当なのか？ちゃんと説明しろ！」

「え？」

アンが香苗を遮るように俺に迫ると、香苗が固まった。
ここで俺が取る行動と言えば。

「いや、誤解だっつーの。俺はあの人とはなんの関係もないっての」

乗る以外にない。
てかまぁ沙鳥の聞きたいことは今分かったけど。

「な、なんで、夏哉君とアンさん通じたの！？」

「だって私と沙鳥の仲だし」

「俺と沙鳥の仲だから当然じゃね？」

「え、もしかしてカナ分かってくれてないの？」

沙鳥の驚きように香苗は狼狽える。

「わ、分かってって……ふ、ふんっ、分かってるもん。どうせいつも通り私をからかって喜んでるんでしょっ？絶対三人の思い通りにならないんだからっ！」

か、かわえぇ～。
特に？ふんっ？鼻をならして大人ぶったところがめっちゃかわえか

った。

あ～、今日は何？
俺の理性を破壊する日なの？
俺耐えられるかな？

顔を緩ませながら香苗を見てると、アンが最初に口を開いた。

「あれだろ？昨日夏哉が出掛けたときのことだろ？その時に夏哉があった女の」

「そうそれそれ。夏哉いつのまにかフラグ立てちゃってさ～」

「誰にも立ててねぇっつーの。結ちゃんになんて聞いたんだよ？」

「ナンパにあった人を助けたら抱きついてもらったって」

「それで、それは本当なのか？」

「ん、ま、まぁそれはほんとだけどさ……」

「知ってるか？夏哉に抱き締められたり夏哉を抱き締めるとフラグが立つんだぞ。沙鳥然り私然り真樹然り」

「あ、ほんとだっ！」

「いや、そう言われても……」

「というかなんで話が通じてるの！？」

耐えきれなくなった香苗が叫んだ。

「どうして話が成立してるの!?何?本当にカクカクシカジカで話が通じたの!?おかしくない!?そして私まだ夏哉君に抱き締められてない!!」

これでもかってくらいにツッコむ香苗。
そして最後にちょろっと本音を吐いた。

「あのな、香苗。前にも言った気がするけど、お前抱き締めたら俺警察沙汰になっちゃうんだよ。考えてもみろ、高校生が小学生を抱き締めるなんて、お互いが了承したとしても周りがそれを許さないでしょ」

「私は小学生じゃないよっ!!そしてそんなことは初めて聞いたよ!!」

「あれ、そうだっけ?」

「そうだよ!ねぇねぇ、そろそろ種明かししてよぉっ。話適当なの?元から私抜きで話し合ってたの?そろそろ泣いちゃうよっ?」

涙を浮かべながら懇願する香苗を想像すると……

「「「是非お願いします」」」

「凄いやっ!息ぴったりだ!!」

もう香苗が違うところに関心がいってしまった。

「ん～、そろそろネタバラシする？てかそこまでのネタなんてないけど」

「だよね～。はっきり言っちゃえばその場のネタで終わらせようと思ってた？カクカクシカジカ？だったんだけどそれになんの話もなくアンちゃんが乗ってきたんだよね」

アンに視線を向ける沙鳥。

「てかお前なんで話に乗れたの？俺は沙鳥が何言いたいか分かったけどさ、その事言ってないよな？」

そう、昨日の話はめんどくさかったから何一つ話してなかったのだ。昨日は俺一人で買い物に言ったし、もしかしてアンにストーカーされてた？

「確かに聞いてないけど、昨日夏哉が出掛けて、今沙鳥が夏哉に怒ってるってことはその時に何かあったんだろうなって思って、沙鳥が怒る理由は多分女関係だろうな～って思ったから、確証なしだけど言ってみたんだよ。結果当たったみたいだけど」

俺は感心していた。

よくもまぁそんな推測を一瞬のうちに立てられたものだ。

実は魔族ではないのではないだろうか？

「うん、アンの言うことは分かったけど、香苗だったらこんくらい想像ついたんじゃないの？」

「だって私夏哉君が出掛けたなんて知らないし」

あぁなるほど。

「それで、昨日何あったの？」

今度は？カクカクシカジカ？ではなくちゃんとした言葉で説明した。

「……夏哉君ってさ、本当にこの世の人間？」

説明し終えての香苗の第一声がそれだった。

なんと失礼なことを言うんだろう。

「違うな。多分漫画の世界から抜け出してきたんだろう。しかも凄いトラブル体質で」

「確かあったよね～。ペンタブで絵を描いたらそこから絵が飛び出してくるって言う小説が。もしかしたらそれかな？」

アンも沙鳥も香苗に同調する。

「お前ら酷いよ。そんなに俺の存在消したいわけ？」

「だって夏哉うちの妹にも手ぇ出しやがってさ～」

「口調変わってんぞ」

「うるさい。とにかく、最初は私かカナのどっちかを選ぶってなっ

たのにそこからアンちゃんが加わって真樹が加わって最悪灯里さんが加わってるあちゃんが加わって、それから結が加わってナンパから救った女の人が加わって、どんだけタラシなのさ？」

「いや、その、それ言われるとほんと今にも土下座したいくらい謝らないとって思ってしまうんですが、ほんとにごめんなさい」

ペコリと頭を下げる。

二人に、待っててと言ったのにどんどん他の仲良くなっていく女の人を増やしていくと言うのは、流石に最低なことをしていると言うのは理解しているつもりだ。
それでも二人が怒らないのは単に器がでかいだけ。
本当に感謝しまくりだ。

「もぅ、そんなガチでとらえないでよ～。こっちが申し訳ない気がするじゃん。というわけでカナ、お仕置き」

「は～い」

二人は意思疏通してるのか、ツンツンと俺の両脇腹をつついてきた。

「や、やめ、う、めろ！ぬ、が、あっ！？」

必死に身をよじるが、それにお構いなしと言った風につついてくる。

「なぁ、私もやりたい」

アンが物欲しそうに懇願するが、

「アンさんは泥棒猫だから駄目だよね、沙鳥ちゃん」

「うん、駄目」

「差別だ差別！私は猫は好きだが猫になったつもりはない！！」

「てかお前らまず止めろ！！あぐっ！？」

「あ～、夏哉面白～い。これが、好きな子をいぢめちゃう男子小学生の心理か～。分かるかも」

「あ、そういえば沙鳥ちゃん」

「ん？」

「沙鳥ちゃんってあんま怒ってないよね？もしかして最初に夏哉君固めたのって痛め付けるためじゃなかったり？」

「あ、あれ？うん。なんか夏哉主人公になりたがってるようだったからさ、私が怒って無防備にも体に接触してその柔らかさを堪能したいのかな～って思ったの」

「俺はっ！しゅじんこっ、になんかなりた！！くないぃっ！！」

必死になって言葉を紡いで沙鳥の言葉を否定する。

確かに気持ちよかったが外でなんて趣味は持ち合わせていない。

「んっと、だったら私もそんなことやった方がいいのかな？」

そんな香苗の呟きを、俺は想像してしまった。

香苗にヘッドロックされる俺。

ちっちゃい体でヘッドロックをされる俺。

見た目小学生にヘッドロックをされる俺。

……これ、色々とまずくね？

俺完璧危ない人だよね、これって。

「あ、あのね、カナ、流石にそれはかなりコア過ぎるというか……やってみたいって気持ちは分かるよ？でもそんなことやって、仮にも夏哉が一瞬でもにやってしたら、さすがの沙鳥ちゃんも引いちゃうな～、うん」

「……なんだか沙鳥ちゃんにそこはかとなく酷い扱いを受けた気がする」

沙鳥の意見には大いに賛同できた。

当然沙鳥と同意見だが、香苗にはご不満のようだ。

ていうかいつの間にかくすぐりから解放されていた。

俺は慌てて前に出て逃げた。

「あ、夏哉君逃げたっ！！」

「ちょ、まてぇいっ！！」

後ろを振り返るとこちらを追ってきた。

向こうの会話が辛うじて聞こえる。

「さ、沙鳥ちゃん、速い……」

「よし、なら香苗に力を貸そう」

「へ？あっ、軽いっ！」

「風魔法を掛けてやったぞ。今なら沙鳥と同じくらいだ」

「アンさんありがとうっ。よ～し」

「お、カナほんとにはや～い。じゃあ私も本気では～しろっ」

「え、それ本気じゃなかったの！？む～！」

ひょいっと横にずれてやると、脇を香苗と沙鳥が駆け抜けていった。
すでに目的を忘れているらしい。

残ったのは俺とアン。

「まさかとは思うが、本当にまさかとは思うが、お前あの二人に暗示なんかかけてないよな？」

「かけるか。あの二人が勝手に暴走しただけだ。私は一切関係ない」

「だよな。ま、俺らはゆっくり行こうぜ」

「そうだな」

教室につくと、香苗と沙鳥がぐったりしてた。

「お疲れ。で、どっちが勝った？」

弱々しくも手をあげたのは沙鳥だった。

魔法に生身で勝つ人間って凄いと思う。

いや、単に香苗のステータスが低かっただけか。

鞄を横にかけて席につくと、いつもよりやけに教室内が騒がしいと気付く。

「なぁ二人とも、なんで騒がしいか知ってる？」

「「分かんな～い」」

机に伏せながら答えてくれた。

「私が聞いてこようか？」

気を利かしたアンがそう言ってくる。

盗み聞きするようで微妙だったが、好奇心が上回ってしまった。

アンにお願いすると、スーッと飛んでクラスメイトのところに行っ

て話を聞いてきた。
すぐに戻ってくる。
「どうやら転校生が来るらしい」
「転校生？なるへそね。なんか他にあった？」
「いや、性別も分かってないらしい」
「あ～、だから色々妄想して騒がしいわけだ」
するとまだ時間が早いのに担任の園原先生が教室に入ってきた。
「ちょっと聞いて～。ネタバレになっちゃうけど、誰か男の子机と椅子運んできてくれないかな？向こうの相談室から」
一時の沈黙。
きちんと先生の言葉を間違えがないか理解して、爆発。
「ま、マジですか！？」
「先生！いつ来るの転校生！？」
「男！？女！？」
「美形ですか！？」
「な、名前を！！名前を！！」
もうすでに先生の頼みを忘れてしまったようで、皆転校生の話に夢中になってしまった。

俺行くか。

席を立って相談室に向かう。

アンと、復活した香苗と沙鳥もついてきた。

「アンはともかく、何せ二人も？」

「耳が痛かったから……」

「沙鳥ちゃんに同じく」

なるほどね、と苦笑する。

元々用意されていた机と椅子を取りだし、運んでる途中に二人に聞いてみる。

「二人は転校生、男女どっちだと思う？」

「私は女の子かな」

「私も」

香苗と沙鳥は同意見だった。

「理由とかある？」

「だって私たちの教室には夏哉君っていう主人公がいるから」

「そうだよ。だから転校生も私たちのクラスに来たんだし」

「来たんだしって断定かよ」

「もしこれで本当に女だったら夏哉は主人公確定な」

「アンまで言うか。確率たった二分の一だぞ？」

教室に入ると、未だわいわい騒いでいた。

先生もあたふたしている。

ここは沙鳥の出番かな？

「沙鳥先生、鶴の一声お願いします」

「りょーかいです。すぅ……園原センセぇ！机はどこに置けばいーですかぁ！？」

耳をつんざくような大声ではなかったのにも関わらず、この場がシーンとした。

流石沙鳥ちゃんヴォイス、効果絶大。

「あ、えっと、廊下側の一番後ろに置いてください」

「分かりました」

言われた場所に机を運ぶと、予鈴のチャイムが鳴った。

「あ、じゃあ私は転校生つれてくるから」

そう言って先生はどこかに行ってしまった。

そして待つこと十五分、ホームルームの始まる時刻になると、再び園原先生が一人で入ってきた。

「じゃあ号令」

委員長が号令をかける。

「はい、じゃあまず皆おまちかねの転校生登場。入ってきて」

「失礼します」

その声はとても澄んでいて、聞き覚えがあった。

ガラガラッとドアを開ける音が聞こえたのでそちらに視線を向けると、

ゴッ！！

俺は頭を机に打ち付けた。

しかしその音はクラス――特に男子――の声に書き消された。

「な、夏哉？」

「ど、どうしたの夏哉君！？」

「何してんの夏哉！？」

アン、香苗、沙鳥には俺の打ち付ける音が聞こえたようで、声を掛けてきた。

「皆、ごめん。俺やっぱ主人公かも」

「「「へ？」」」

三人とも声を揃えて聞き返す。

「「「あ」」」

そしてすぐに納得するような声をあげる。

そう、転校生は女子だった。

しかもただの女子ではない。

「じゃあ黒板に名前書いて自己紹介お願いします」

「はい」

そしてカッカッカッと、恐らくチョークで書いているんだろう。

いい加減顔をあげる。

先生の隣には、綺麗な水色の髪が見えた。

名前を書き終えたのかクルッとこちらを向く。

「空揺火津那です。皆には空ねぇと呼ばれています。こう見えてもれっきとした十五歳です。一昨日までずっとアメリカに暮らしていて、日本語は喋れますが常識が不安なので、色々と教えてください」

自己紹介が終わり、教室内を見渡していると俺と視線が会った。

小さく手で答える。

「空揺さんが言った通り、帰国子女なので色々大変だと思うので皆支えてあげ――え？」

途中で言葉を止めてしまう先生。

理由は転校生である人がいきなり走り出してしまったからだ。

しかも俺に向かって。

「夏くぅぅぅぅぅぅぅんっ！！また会ったね！！しかもクラスメイトだぁっ！！」

あのときと同様空ねぇは俺に抱きついてきた。

クラスは全員唖然としている。

いきなり俺に抱きついたからか、大人びた印象から一転して甘えたような声を出したからか、それとも両方か。

いずれにしろ皆口を開けずにいた。

「あの、空ねぇさん？いきなり抱きつくとはいかがなものかと……」

「だって昨日偶然会って別れてまた会えたんだよっ！？すごい奇跡だよっ！！もう神様の力が働いたとしか思えないでしょっ！？もう嬉しさ爆発だよっ」

ほ、本当に子供のようだ。

香苗とはベクトルがちょっと違うが。

「あ、な、夏哉君？その人が昨日の人？」

香苗が恐る恐るといった感じで訊ねてくる。

よく我に帰れたな。

「あ、貴女夏君のお友だち？よろしくっ」

「あ、えと、花街香苗です」

空ねぇは反対側に顔を向ける。

「あれ？もしかして貴女結ちゃんのお姉さん？」

「へ？あっ、はい。天雲沙鳥です」

「よろしくっ。それから夏君」

「は、はい？」

小声で俺に話し掛ける空ねぇは、とんでもないことを口にした。

「そこの金髪の子もお友だちかな？」

第六話　《三章》転校生（後書き）

作者「空揺火津那学校に登場！！」

夏哉「なんか物凄いベタな登場の仕方だったな」

作「因みに空ねぇは本当のことを言ったよ」

アン「は？なんのことだ？」

作「ネタバレになるようなことを言うかアホ垂れ。取り敢えずは空揺火津那さん登場」

火津那「夏君、アンちゃん、また会えたね」

夏「どうも」

ア「というか作者、火津那が私のこと見えてて平気なのか？」

作「だって空ねぇがアンのこと見えなきゃ可哀想だろ、二人とも」

火「私アンちゃんのこと見えてスッゴい嬉しいよ」

ア「ありがとう、火津那」

作「はい、じゃあ空ねぇプロフ紹介しな」

火「は～い」

空揺火津那（そらゆりかづな）
身長：１６８？
体重：４５？
ＢＷＨ：８７，６１，７７
誕生日：５月３０日
好きなもの：海鮮炒飯、猫、光
嫌いなもの：他人に迷惑かける人、暗闇
特徴：転校生。いつも木刀を所持しており、念じるだけで真剣に変化する。名前は炎暝耶（かぎろいのみょうや）。キリッとした目付きの上、性格も大人びているので高校生には見えない。髪は腰まで伸ばしたストレートの水色。
通称空ねぇ。

夏「やっぱ空ねぇ優遇されてるな。プロフ紹介されるなんて。他はされてないのに」

ア「いや、優遇というより登場キャラが少ないだけだろ」

夏「納得」

作「いいもんっ。登場キャラが少ないところがいいって言ってくれる人がいるから」

火「なんか痩せ我慢だね、作者（こうくん）」

作「空ねぇも言うか！？もういい！！空ねぇ、ｋｉｉｔｉさん、ソラトさん、斗真さん、Ｃｏｌｏｒｆｕｌさん感想ありがとう！」

火「どういたしまして」

作「そっちの空ねぇじゃない！ソラトさん、ご指摘をくださいましたが、なにぶん若輩者なのですぐには改善しないと思いますが、これからもよろしくご指導ください！」

夏「作者がすらすらと丁寧語よく言えたな」

作「いちいち混ぜっ返すな！！それでは皆さんまた今度！！」

第六話　《四章》秘密裏の行動

一時間目が終わった休み時間、クラスの皆が空ねぇを囲む前に声を掛ける。

「空ねぇちょっと話があるんだ。来てくれる？」

「ん？何々？いいよ」

素直で助かる。

俺たちの後に香苗、沙鳥、アンもついてくる。

向かった場所は学年棟の屋上に通じる階段。

学年棟の屋上は解放されていないため、必然的にそこに足を運ぼうとする人は少ない。

内緒話をするにはもってこいの場所だ。

「どうしたの夏君？こんな人気のないとこ――も、もしかして！あ、あのね、私たちまだ会ったばっかりだし、だからそういうのはちょっと、それに五人とかは……」

何を妄想してるんだろう。

「あのさ、空ねぇ。そんなどこぞのラブコメのヒロインじゃないんだからさ、そんな台詞吐かないでよ。それより聞きたいことがあるの」

「聞きたいことって？」

俺はアンを指差す。
空ねぇもそちらに顔を向ける。
「本当にアンのことが見えるの？」
「あ、アンちゃんって言うんだ。うん、見えるよ。他の人には見えてないようだけど。よろしくね、アンちゃん」
「あ、あぁ」
空ねぇが手を差し出したので、アンも戸惑いながらも手を出して握手を交わす。
「えぇっと、ここにいるなぁちゃんとさぁちゃんもアンちゃんのことは見えてるのかな？」
「な、なぁちゃん？」
「あ～、私さぁちゃん？」
香苗と沙鳥が自分を指差しながら聞き返す。
「うん。香苗ちゃんだからなぁちゃんで、沙鳥ちゃんだからさぁちゃん。私のことは空ね――いやいやいや、アンちゃんにはそのまま？火津那？で、さぁちゃんには？空お姉ちゃん？、なぁちゃんには？姉様？って呼ばれたいな」
「ちょっと待って空ねぇ。何そのあだ名の数々？」
なんでここにいる四人全員が違う呼び方になってるんだろうか？

「だってアンちゃんはちょっと強気な気がするからそのままで、さぁちゃんにはそのままシンプルにって感じがいいかな～って。それからなぁちゃんは、私にずぅっとついてきてくれそうだし、？姉様ぁ～？の方が幼さが残るし」

「残らなくていいですよ火津那さん！」

「姉様って言って」

「で、でも」

「姉様～」

「うぅ～」

なんだろう、帰国子女ってこんな風に押しが強いのかな？
それとも空ねぇオンリー？

そんなこと考えていると、どうやら香苗は根気負けしたようで。

「え、えと、ね、ね、姉様……」

うぅぅ、と手で顔を隠してしまった。
まぁ、よっぽど恥ずかしいんだろうな。

「ねぇ夏君」

空ねぇが香苗を見ながら話し掛けてきた。

「なん、ですか？」

「夏君の聞きたかったことってアンちゃんのことだけかな？」

「ま、その、そうなんだけど」

じゃあ、とこちらに顔を向けて言った。

「ちょっとトイレ行ってきていいかな？」

鼻血を滴ながら。

香苗の恥ずかしげな態度は効果は抜群、急所に当たったようだ。

「あ、あの、どうぞ……」

俺は勧めることしか出来なかった。
床に垂らされても困るし。

「ありがとう」

お礼を言うとポケットからティッシュを取りだし、それを鼻に当ててから階段を駆け降りていく空ねぇ。

階段に残されたのは俺たち四人。

最初は俺から話しかけたはずなのにいつの間にか空ねぇのペースに乗せられていた。
その本人がいなくなってしまったのでどう反応すればいいか分からなかった。

「……あ～、なんだ？その、色々話はあるけど、教室行った方がいいんじゃないのか？」

アンに指摘されたため、俺たちは階段を降りた。

教室に入ると、男たちが固まっていた。

その男子集団に睨まれる。

「柊夏哉！ちょっと来い」

クラスの沃村隆康（よくむらたかやす）が代表して俺を呼ぶ。

「お、あ、ん、な、何？」

俺はしどろもどろになりながらも返事をする。

クラスメイトに呼ばれるというのは、香苗と沙鳥を――あ、今日から空ねぇもか。

とにかくそういう経験がかなり少ないので怖かった。

一応沃村に近付く。

すると首に腕を回され、若干引きずられるように男たちが集まるところに連れてかれた。

ほんと何がなんだか分からない！

今までなんて、それこそ？死ねこら！！？？嫌じゃボケ！！？という、お世辞にも言いという関係ではなかったため、何されるか分か

らない。

「柊、お前に聞きたいことがある」

「な、なんでしょう？」

最悪力ずくでも逃げるか？

「女子が近寄る方法を教えろ」

「……は？」

ちょっと待て。

今何言ったこの人？

女子が近寄る方法？

そんな質問を俺に？

予想の斜め、いや１３５度違った質問に頭がクラッシュしそうだ。

「いやいやいやいやいやいやいやいや！何？急に何？ホントに何！？なんか罰ゲーム！？何がどうなれば俺にそういう質問が来るの！？」

「だってお前、仲がいい女子が多いだろ？香苗ちゃんとか穂菜ちゃんとか千佳音さんとか真樹さんとか灯里さんとか。しかも転校生に

も抱きつかれてるし。それに皆レベルがかなり高い」

あ、沙鳥の名前がないってことは、やっぱり沙鳥は認めないのね。
あと六人は人数？多い？に含まれるのか？
それに灯里は、まぁ俺の中では仲のいいに分類されてるけどしょっちゅうあってる訳じゃないし。

って、じゃなくてさ！

「ちょっとおかしいでしょ！！なんで聞く対象が俺なの！？」

「なんでって、言っただろ？クラスの中でお前が一番女子と仲がいいからだって」

「そぉじゃなくて！今まで目の敵にしてたのにいきなりなんで俺にそんな変な質問を俺にすんだって聞いてんだよ！！」

まぁ、確かに話し掛けられるのは嬉しいけども！

すると沃村は、いや沃村だけでなく男子全員が悟ったような表情を浮かべる。

「あの時の俺たちはまだガキだったんだよ」

へぇそうなんだ、人間というのは一ヶ月やそこらで大人になれるんだな。

「俺たちは二週間前のあのオカマとの戦いを見て目が覚めた。お前はくずなんかじゃない、英雄だったんだ。男に希望を与えてくれたんだ。お前こそが沙鳥様一のボディーガードなんだ」

……あれ？
なんか話がかなりでかくなりすぎてない？
てかそんなこと言って恥ずかしくないのか？
あ、沙鳥に色々やってるから恥はもうないのか。
でも沙鳥一のボディーガードというのは素直に受け取っておこう。

「それによくよく考えるとなんやかんやでお前女子に好かれてね？
とか思ったんだよ。ほら、香苗ちゃんとよく登下校してるし」

あくまでも沙鳥はいれないのね。

「あの、別にそれが他の女子から好かれてるって理由にはならないよね？なんで好かれてるって分かるわけ？」

むしろ俺は少ない方だと思っているんだけど。

「最近お前ずっと見てるとさ、絶対傍に女子がいるし」

ず、ずっと……

「ごめん、俺にそんな趣味ないんだ。他当たってくれ」

急いでその場から離れようと――

「待て。俺にそんな趣味はない。それより早く仲良くなれる方法教えろ」

ガッと肩を捕まれて動きを止められた。

……俺、クラスメイトとわいわいがやがやそれなりに仲良く休み時間過ごせたらいいな～とかなんとか夢見たことがあるけど、このクラスじゃ無理そうだ。

「あぁ、もう！きりぃつ！！」

俺が叫ぶと男が一斉に立った。

「仲良くなりたいやつのところにいく！！」

そして一斉に沙鳥のもとに行き、

「復唱！友達になってください！！」

『友達になってくださいッ！！』

「ひ、ひいっ！？」

一斉に沙鳥にそんなことを言うと、沙鳥は怯えたような声を出した。

二十人弱の男が一斉に声を揃えれば怯えもするか。

すると。

「こぉら男子！！何沙鳥様怯えさせてるんだクソヤロウ共！！」

「貴様らに生きる価値なんてないわ！！」

「最低！クズ！！」

今度は一斉に女子がキレ始めた。

そして男女の争いが始まった。

俺はこっそりと自分の席に戻る。

「沙鳥、ごめんな」

「えと、い、いいけど、あれ何？」

「女子と仲良くなる方法は何かと聞かれたから、？友達になってください？って言えばいいって言ったんだけど……」

首を傾けると大騒ぎになってるクラスメイトたち。

「あれも仲のいい内でいいよな？」

「そ、う～ん、ま、まぁね」

無理矢理という風に納得するとチャイムが鳴った。

――――――――――

二つ目の勉強が終わって三つ目、次は魔法の勉強を外でするらしい。

私はいつもの三人に加え火津那と一緒に固まる。

外に出ると教師らしき人物がいた。

「あ、空揺さんちょっと来てくれませんか？」

火津那がそちらに呼ばれたので、私たちから離れた。
それを見計らうかのように夏哉が話し掛けてくる。

「アン、単刀直入に言って、あの人魔族だと思うか？」

「ないな。あいつはちゃんとこの世界に干渉出来てるし。もしかしたら夏哉みたいなやつなのかもしれないな」

そう言えば夏哉が私に干渉してる理由というのが全く分からないな。

まぁそれは置いといて、問題は火津那だ。

あいつは何か変だ。
どこが、と言われたら答えられない、ごくわずかな違和感を覚える。

だからと言って毛嫌いはしていない。
むしろ好意的に接しられると思う。

しかし、ふと意識すると？あれ？？という風に何かが引っ掛かる。

言おうかどうか悩んでいると、沙鳥がなんとも言えない、しかし普通の顔をしていなかった。

「沙鳥ちゃんどうしたの？微妙な顔をして」

香苗も気付いたようで話しかける。

「う～ん、なんて言うかね、火津那さ――もとい空お姉ちゃん見てるとね、こう、もやもや、じゃないんだけど、？ん？？みたいな。違和感、にしては小さすぎるんだけど、ん～、言いにくい」

顎に手を当て悩む沙鳥。
その言い種、もしかしたら私と同じなのかもしれない。

「お前もか。私もだ」

「何？二人なんか空ねぇ嫌いなの？」

「ううん、嫌いじゃないよ。むしろ友達になれて嬉しいよ。でもね、う～ん、ほんと言いにくいの。察してほしいな」

「私もだ」

夏哉の言葉を否定する。
そして夏哉は、次に香苗に水を向けた。

「香苗はどうだ？違和感的なのあるか？」

「ううん私はないよ。夏哉君は？」

「俺もない」

「ん～、でも気のせいかもしれないし」

沙鳥が自信なさげに言うと、勉強の始まる鐘がなった。

「はい、聞いてください！今日は始めに転校生の空揺火津那さんに魔法を使ってもらいます！空揺さん、言った通りにやってみて」

「はいっ」

火津那が返事をすると、突然人差し指から小さい炎が上がった。

「なるほど、空揺さんは火の魔法が使えるようですね」

……待て。

今なんて言った？

「夏哉、あれなんだ？」

「ん？あ、お前知らないの？指に魔力通すとな自分の使える属性の色の光が出るんだよ」

「……嘘だぁ」

試しに右手にただ魔力を流してみる。

すると、

ボボボボッ。

人差し指、中指、薬指、小指から四色の光が生まれた。

「ほんとだ……」

「え、お前ほんとに知らなかったの？」

「いゃ、だ、だって、私こんなことしなくても最初から魔法全部使えるし！改めて確認する必要がないし！夏哉だってあれだろ？どうして他の人と仲良くする？お前らにとってそれは当たり前だからわざわざ確認しないだろっ？」

「わ、わりぃわりぃ、そんな怒るなっ、な？」

夏哉になだめられて渋々下がる。

と、問題はここじゃないんだ。

もう一度火津那を見る。

既に指から炎は出ておらず、こちらに向かってきている。

どうする？

言うか？

いや、夏哉たちにはまだいいだろう。

ほんの少し前に色々あって疲れてるだろうし、すぐにどうこうするでもない。

そのまま時間は流れて勉強が終わる。

「ねぇ夏君、先行っててくれないかな。私ちょっと電話してくる」

「いいけど、教室の場所覚えてる？」

「大丈夫。じゃね」

皆が教室に戻るなか、一人だけ校舎裏に向かう火津那。

行くか。

「夏哉。悪い、私も」

「ん？なんか用あんの？」

「まぁな」

「アンちゃん行ってらっしゃ～い。早めに帰ってきなさいよ」

「沙鳥ちゃん、アンさん子供じゃないんだから」

「え、子供だよ。私と夏哉の」

「冗談でも言うなボケ」

「あいたっ！」

いつも通りのやり取りをつい見とれてしまった。

「じゃあ行ってくる。それから、私は夏哉と沙鳥の子じゃないぞ。私と夏哉の子は香苗だが」

「な、何それ！？」

香苗の叫びを無視しながら、私も校舎裏へ向かう。

というか香苗のやつ、私に対して叫んだりして平気なのだろうか。

――――――――――

校舎裏に誰もいないことを確認すると、私は携帯を取り出す。

そこに唯一登録されたところに電話を掛ける。

『もしもし？』

「もしもし、お母さんですか？」

『うむ、ちゃんと慣れたようだのぉ』

「慣れるなんて、お母さんに言われればちゃんと出来るって」

『まぁそうか。それより、何かあったのか？先程連絡したばっかりだと思うが？』

「ん～、ただの報告、ていうかね。一応皆の前でやったことを」

『そうか。で、声の様子だと出来たようだな』

「うん、なんとか――あれ？」

『どうした？』

「ちょっとお知り合いに」

私の視界の中に、空を飛んでる金髪の少女が入った。

「アンちゃん、どうかした？」

こっそりとポケットの中に手を入れる。

「いや、気になったことがあってな」

「私に？」

「ああ、単刀直入に言う」

アンちゃんは友達に向けるものではない視線を向ける。

「貴様、誰だ？」

完全に殺気を込めている。

「あ～お母様？どうやら早速使うかも」

『仕方ないのぉ。頑張れ』

「は～い」

電話を切ると、そのタイミングで一気に近づいてくる。

私はただ立ったままで待ち構える。

チュゥゥゥン！

アンちゃんは動きを止めた。

正確に言えば止められたと言った方が正しいだろう。

なにせ、あの光に貫かれたのだから。

アンちゃんは体から力が抜けたかのように倒れる。

「大丈夫？痛くはないよね」

「き、さま……そうい、う、こと」

「じゃ、時間がないからね。大丈夫。『私とアンちゃんは、友達だよ。しかも魔法が使えちゃう。だから、安心してね』」

私がそういうと、アンちゃんは目を閉じた。

第六話　《四章》秘密裏の行動（後書き）

真樹「で、出番が、出番がありませんわ！！」

香苗「うぅぅ、ごめんね、真樹ちゃん。前の前の後書きで愚痴なんて言っちゃって。真樹ちゃんの方がつらいって言うのに」

真「いいんですのよ香苗。貴女は？ヒロイン？で、わたくしは？サブ？なんですから」

香「嫌みだ～、完全な嫌みだよ～」

真「というより、まさか千佳音や穂菜の名前が出てくるとは思いませんでしたわ」

香「そうだね。でも、予定だけどちょこっと第七話で出るらしいよ。予定だけど」

真「強調しますわね。それより、そう言えば作者は？」

香「ん～、あ」

作「……」

真「お、落ち込んでますわね」

香「さ、作者さんっ、どうしたのっ？嫌なことがあったの！？」

作「いや、別にね、嫌なことではないんだけど、今、なのはのスト

ック書いてて、そこがかなり鬱でさ～。俺も鬱になってるんです」

香「作者さんって鬱になるときなんてあるの？」

作「そうなんだよね……。意外とあっちゃうんだよね～」

香「ま、真樹ちゃんどうしよっ！！いつもだったら作者さん、『お前の出番は減らす方向で』とか言うもんっ！これはガチだよっ」

真「ど、どうやらそのようですわね」

作「しかもさ、しかもだよ？気が紛れるかな～って自分の小説一から読み直してたらさ、もう泣けてきちゃって」

真「そ、そんなに感動したんですのっ？」

作「いや、あまりの自分のレベルの低さにさ」

香＆amp;真「……」

作「その調子で、でもこの小説見てくれてる人のために書いては見たんだけど……うだ～」

真「あぁもう作者は何がしたいんですの！？どうすればいつもの調子に戻るんですの！？」

作「……彼女、作りたいっす」

真「どうしましょう、一生元に戻りませんわ」

作「うん、分かってるよ……」

真「突っ込んでくださいまし！せめて、声は小さくていいですから突っ込んでくださいまし！！わたくしも流石に心が痛みますわっ！！」

作「真樹、ありがと。慰めてくれて。香苗も。俺はいいキャラに恵まれてるな」

香「作者さん！お願いします！！もう限界です！！早く戻ってきてください！！いつもの、ちょっと人を小バカにした作者さんに戻ってください！！」

真「もう傷つけませんから！！殺そうなんて思いませんから！！お願いしますわっ！！」

作「何泣いてるの？ほら拭きな」

香＆ａｍｐ；真「「作者ぁ（さぁん）っ！！」」

第六話　《五章》約束の取り決め

「あ、お帰り～」

次の授業まであと一分というところでアンと空ねぇが帰ってきた。

二人一緒ということは、アンは空ねぇに用があったらしい。

「空お姉さま？何かあったの？」

「様付けはやめてさぁちゃん、なんか鳥肌が立っちゃう」

身をすくめる空ねぇ。

空ねぇの言葉を聞いて嬉々とした様子の鼎が言葉を紡ぐ。

「じゃ、じゃあ火津那さんっ！私？姉様？って呼ばなくて良いよね！？良いよね！？」

「なぁちゃんはと・く・べ・つっ！いっぱい呼んでね」

「うぅぅ……」

香苗がうなだれてると授業が始まってしまった。

結局聞けずじまいだったので、こっそりアンに聞くことにしよう。

「アン、何かあった？」

「そんな大袈裟なことではない――いや、私たちにとっては大袈裟

なことか。夏哉のこと好きかどうか聞いたんだ」

ガタガタッ！！

「あ、天雲様？花街さん？どうしました？」

「「いえ、なんでもありません」」

あははは～、と笑って誤魔化した。

先生は、相手が沙鳥だからどうかは分からないが気にしない風に授業を再開する。

「そ、それで！アンちゃん！空お姉ちゃんなんだって？」

「好き、だそうが」

「「……」」

香苗さん、沙鳥さん、ジト目で睨み付けないでください。

両側からそんなことされたら顔が逸らせないじゃないか。

「まぁ待て二人とも。まだ続きがある。好きは好きでも、どうやら友達だからだそうだ」

その言葉を聞いて視線がなくなった。

両側を見るとほっとひと安心している。

助かった～。

ふと香苗越し、二つ隣の空ねぇに顔を向けた。
視線が合う。
やっほー、といいたげに手を振られた。
首を動かしてそれに返したら、

クイッ。

その間に香苗の顔が間に入る。
さっきと同じようなジト目を向けてくる。
俺そんなつもりないのに。
てかさっき俺を睨み付けられたの、理不尽じゃね？
まぁ良いけどさ。

授業も終わって昼休み。
いつものメンバープラス空ねぇを加えて屋上に。

「はい、空ねぇこと空揺火津那さん。今日転校生の帰国子女。はい、こっち早乙女真樹さん」

「初めましてきぃちゃん、空揺火津那です。ん～、火津那って呼んでね」

「きぃ……あ、わたくしのことですか」

「へぇ、きぃちゃん？わたくし？って一人称なんだ」

「あ、申し訳ありません。もうこれが癖でして」

「ううん、別に不快って訳じゃないから、気にしないで」

「はい。あ、早乙女真樹です。よろしくお願いしますわ」

いつもより丁寧な口調で対応する真樹。

あぁそうか。

「真樹、空ねぇ同級生だから」

「え、そうなんですのっ？」

「うん、これでも十五歳。同い年だよ」

「そうでしたか」

そういうと香苗を見て、

「神というのは残酷ですわね」

「ま、真樹ちゃん!?何?どういうこと!?どういう意図があって言ったの!?」

「いえ、深い意味は。……足して二で割ればちょうどいいかもしれませんわ」

「ひ、酷いよ真樹ちゃん!!いじめだいじめ!」

「ほぉらなぁちゃん、そんな騒がないの」

よしよしと頭を撫でてあげている。

「か、火津那さん……」
むにっとほっぺをつまんだ。
「ふえ」
「ね・え・さ・ま～」
「ふぉ、ふぉめんなふぁいねーふぁわ」
「よろしい」
空ねぇ笑って離してあげる。
トントン、と膝を叩かれる。
顔を向けると真樹だった。
「姉様って？」
「香苗にはそう呼ばれたいらしいよ。因みに俺は空ねぇ、沙鳥は空お姉ちゃん、アンは火津那」
「へ～――え？アンさん？」
「あ、お～い夏哉～」
真樹との話の途中で声を掛けられた。
「う？あぁ、快斗か。おひさ～」

快斗だった。
その後ろには夕馬に千佳音、種原が控えていた。
「みんなひさしぶり～。二週間ぶりだね。そっちもう平気なの？」
「えぇ、お陰様で。色々ご迷惑お掛けしました」
沙鳥に言われて夕馬が頭を下げる。
香苗と俺の間を開けて四人を入れる。
「あ、空揺さん。こんにちわ。私同じクラスの種原穂菜です」
「うん、見覚えあるよ。よろしくね。空ねぇって呼んで」
「穂菜、こちらのお方は？」
夕馬が訊ねる。
穂菜が説明してるときに、今度は真樹に肘でこづかれた。
「ちょっと、夏哉」
こそっと小さい声で話し掛けてくる。
「ん？」
「どういうことですの？アンさんの名前出ましたよね？」
最初なんのこと言ってるのか悩んでると、アンが教えてくれた。

「多分あれじゃないか？さっき火津那の呼び方の時に私の名前を出したこと」

真樹は頷いた。

「私たちにも分からないんだが、どうやら夏哉みたいに最初から見えてるようなんだ」

「そうなんですの……」

じっと空ねぇを見つめる真樹。
どっから見ても普通の人間だ。
俺みたいに変な力があるとは思えない。

「その、普通の人、なんですの？」

「見る限りは、な。でも夏哉はあった頃は普通だったし」

「謎だな。俺と共通点とかなんかあるのかな？」

「わたくしにはなんとも言えませんが……」

「でもまぁ、悪いやつでもなさそうだし、普通に接すればいいんじゃないか」

「そうだな」

「夏哉」

自己紹介が終わったようで夕馬が俺の名前を呼ぶ。

「ん？」

「真樹さんとこそこそ話してたみたいだけど、そんなに仲良かったっけ？」

そう言われて真樹を見る。

視線が合う。

「まぁあれだ、お前らがいない間に色々あったんだよ」

な、と友好を示すように肩に手を回そうとする。

まぁ軽く払われるんだろうな～とか思っていたら、

ガシッと回そうとした右手首を右手で捕まれた。

「へ？」

ドッ！！

左肘が鳩尾を貫いた。

真樹は肘を支点に拳が迫ってくる。

それは顎に当たって脳が揺さぶられ、一瞬目眩のように気持ち悪くなる。

今度はそのまま倒れ込んで肘をめり込ませる。

顎に拳をぶつけられて仰け反ってるプラス気持ち悪いという状況で

真樹の全体重がのし掛かってきたので支えることが出来ずに、

ゴッ！！

受け身などは取れるわけもなく、背中からコンクリートの床にぶつかった。

「ぐは、ガッ！！」

「ふん、気安くさわらないでくださいまし」

「「「「「「「「「……」」」」」」」」」

誰一人言葉を発しない。

「あれ、どうしました？そんなキョトンとした顔をして」

「え、い、ちょちょ、だっ、えぇ～っ」

「あ、あの、真樹さん？いや真樹様？な、夏哉は生きていらっしゃるんっしょうか？」

沙鳥が戸惑いの声をあげ、快斗は恐る恐るといった感じで真樹に訊ねる。

「何を丁寧語になってるんですの？」

「いや普通の人間なら引くだろ！」

むくりと起き上がって真樹にツッコむ。

「「「きゃぁぁぁぁぁぁっ！！」」」

香苗、沙鳥、種原の三人が悲鳴をあげる。

「なな、な、なつ、な、夏君っ？い、いき、いきて、いき、いきて、生きてるのっ？」

「な、夏哉！凄い音がしたけど、だ、大丈夫なのか？」

空ねぇとアンが心配してくれた。

アンに至っては俺の腹をさすってくれている。

「ん、全然、じゃないけど平気」

うあ～っと声をあげながら背筋を伸ばす。

「……夏哉ってさ、人間？」

「あれだよきっと。魔装少女なんだよ」

「俺はゾンビじゃねぇぞ夕馬！」

「まぁそれはそれとして、真樹さん凄いですね」

「別に、この程度は誉められるほどではありませんわよ」

「そうではなく、真樹さんは夏哉のことを凄い信じてるなぁと」

「……はい？」

「普通あんなこと、通常の人間にはやりません。それこそ手を肩に回す程度じゃ。それなのに、沙鳥さんがいる前にも関わらず皆が引くような行為をする。これは、？夏哉ならこの程度は全然平気だ？と信じているから。いや～流石です、相当夏哉のことが好きなんですね」

「だ、黙りなさい夕馬！！」

夕馬の、淡々とした状況解説に真樹は顔を真っ赤にさせる。

「あっるぇ～？真樹ちゃぁん、顔真っ赤だよぉ？それに夕馬の言葉は否定しないんだぁ～？」

「ち、千佳音、貴女何――」

「あ～そう言えば真樹、いつもは私とカナの間に座ってたのに、今日は夏哉の隣に座ってる～」

「沙鳥様まで！！」

「へぇ～、きぃちゃん夏君のこと好きなんだ～。夏君モッテモテ～」

「ありがとうね」

「あぁぁぁぁぁもおぉぉぉぉぉぉっ！！さっさと弁当食べますわよおおおぉぉぉぉぉぉっ！！」

真樹の叫びで、俺たちは弁当を開く。

アン、ほんっっっっっっっとぉぉぉぉっにごめんなさい。
待っててください。

弁当を食べ始めてしばらくしたとき、夕馬に気になったことを聞く。

「夕馬夕馬」

「何？」

「結局さ、結果どうなったの？いい方向に行った？」

「……あぁ、夏哉知ってたんだっけ？」

「沙鳥経由で」

俺たちの話が意味分からず疑問符を浮かべてる。

「ラヴッラヴだよ」

それを聞いた途端種原の顔が真っ赤になった。

皆も俺のいった意味が分かったようだ。

一人を除いて。

「え、何？ええっと……夕馬くんって誰かと付き合ってるの？」

「はい。少し前に穂菜と」

「へぇ、そうなんだ～。おめでただね」

「うぅぅ、なんか恥ずかしい……」

種原は俯いて、小さく弁当を摘まむ。

「そう言えば僕も夏哉に聞きたいことが」

「何？」

「明後日高校の創立記念日で休みでしょ？だから周りに見せつけながらイチャイチャデートしようと――」

「ちょ、ゆう――人前でそんな恥ずかしいこと言わないでよっ！」

「だって本当のことでしょ？僕はイチャイチャしたいって思ってるけど」

「だ、だから！その、家とかならいいけど、周りに人がいるのにそんなこと言ったら恥ずかしいし！夕馬くん引かれちゃうし……」

「大丈夫だよ。こういうこと言うのが僕なんだから、そんなことじゃ引かないよ。そんなこと心配しなくていいから」

「う、うん、そうだね。なんか変なこと気にしちゃった」

「心配してくれてありがと」

「どういたしまして」

「そのピンクい空気に引くわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

ついに耐えきれなくなったようで、千佳音が怒声を浴びせる。

「なんっかい言えば分かるの！？何、嫌がらせ！？あんたたちがそんな空気出しちゃわたしら喋れないじゃない！邪魔しちゃダメって思っちゃうじゃない！！もういい加減にしろよー。なんで穂菜ちゃんも変なところに気を使うの！？夕馬しか見えてないの！？盲目過ぎでしょ！！」

はぁはぁと肩を揺らす。

千佳音も大変そうだ。

「おい夕馬。話がズレてる。休みの日にデートがどうした？」

快斗が軌道修正してくれた。

あぁ、と夕馬も話を戻す。

「で、デートしようと思ってるんだけど、どこがいいかな？」

「……なんでそれを俺に聞く？」

よりにもよって俺か？

おかしくね？

「だって夏哉香苗さんと行ってないの？」

「……何故香苗ちゃんの名前が出てくるんだい？」

「種原さんにシンパシーを感じるから、かな？」

そこ疑問かい。

「残念、私と夏哉君はデートしたことないよ。買い物くらいはあるけど」

「因みに私も。しかも多分カナよりも買い物の数は少ないと思う」

「買い物なら私の方が多いな」

香苗の後に沙鳥、アンと続く。

「……意外だな。よく行ってると思ってたけど」

「てか夏哉、香苗ちゃんと沙鳥と真樹ちゃんの誰かさっさと決めなよ～。何？三股かける気」

「違うよ千佳音ちゃん。そこに五組の灯里さんっていう人と、アンさんっていう外国の人もいるから五股だよ」

「まてまて香苗！灯里を入れるな。それはないから」

「その灯里さんとはどういう？」

「夏哉のお向かいさんで、小中高と同じ幼馴染みさん」

千佳音の質問に沙鳥が答える。

「つまり夏哉は、ロリアイドルお嬢様幼馴染み外人、後転校生も侍

らせてるのか。頑張ってハーレム目指す気？」

「あら、私も夏君のハーレム要員に入ってるの？」

「空ねぇ、夕馬の言葉真に受けるな。そして夕馬ボコされたいか？」

「夏哉、それにはわたくしも加わりますわ。勝手に人をハーレム要員扱いにして。覚悟は出来てますの？」

「すみませんでした」

即座に頭を下げる夕馬。

まぁ殴る気もなかったのですぐに引いた。

「あ、そだ。穂菜ちゃん以外の女の子、グー出して」

千佳音が女子にそんなことを提案した。

言われた通りに香苗、沙鳥、真樹、空ねぇが手を出す。

アンは女子だったが、まぁ見えないので見学だ。

「はい最初はグー、ジャンケンポン」

突然じゃんけんが始まり、慌てて手を動かす四人。

グーグーチョキチョキ。

「はい、香苗ちゃんと沙鳥勝ち抜け。じゃあ二人とも～、最初はグー、ジャンケンポン」

パーパー。

「あいこでしょ」

パーパー。

「あいこでしょ」

チョキチョキ。

「あいこでしょ」

グーグー。

「あいこでしょ」

パーパー。

「あいこでしょ」

グーグー。

「あいこでしょ」

チョキチョキ。

「あいこでしょ」

チョキパー。

「はい〜、香苗ちゃん勝利〜。優勝おめでとう」

「わ、わ～い、って、これは？」

「夏哉とのデート権を授与しま～す」

「「「「えぇぇぇっ！？」」」」

俺、香苗、沙鳥、アンは叫んだ。

それはいきなり過ぎる。

「千佳音ちゃんなんでぇ？先に言えばもっと真剣にやったのに」

「ちょっとま、ももう一回もう一回！」

「それなら私も混ぜろ！！」

空ねぇは拗ねたように千佳音に抗議し、沙鳥は再挑戦を必死に訴える。

アンは参加を要望するが、生憎千佳音には届かない。

「空ねぇのに答えると、？ええっ？ていう驚きがほしかったから。

沙鳥のに答えると、再戦はなし」

「てか千佳音、いきなりその提案はなんだ？」

快斗があきれた口調で質問する。

「いや～ね、夏哉は好きな人を決めかねてるみたいだから、切っ掛けでも与えてあげようかな～って。活かすも殺すも香苗ちゃん次第」

「本音は？」

「なんか面白そうじゃん。嫉妬のオーラを纏った人の姿を見れそうだし。人の不幸は蜜の味、てね」

「沙鳥ちゃん、いい趣味してるよ……」

種原にそう言われてるが、気にしてないようだ。

「ちょっ、千佳音！私嫉妬なんかしないもん！だから取り消しなさい！！」

「ダメだよ沙鳥ちゃん、千佳音ちゃんに無理言ったら。わがままも大概にね」

「ちょっと待ってよ。私もデートしてみたいな。こっちに来て全然日にち経ってないから町案内も夏君にしてもらいたいし」

「だぁめ。それはまた今度にするか、他の人にやってもらいなさい。真樹もいいね？」

「もとより反論する気はありませんわ」

「はい、じゃあけって～。邪魔しちゃダメだよ」

「「「え～」」」

沙鳥にアンに空ねぇが不満の声をあげる。

「というより今さらですが」

と、夕馬が会話に入ってきた。

「香苗さんも沙鳥さんも、夏哉に惚れてることは隠さないんですか？」

「「あ……」」

みるみるうちに顔が赤くなる二人。

「まぁここにいる皆は知ってると思いますが」

キーンコーンカーンコーン

「予鈴ですね。さ、戻りましょう」

第六話　《五章》約束の取り決め（後書き）

作者「んん、ん～、十人捌くの疲れた～」

夏哉「……あれ？確か香苗と真樹、作者が大変だからなんとかして、みたいなこと言ってなかった？」

沙鳥「言ってた、よね？」

夏「普通に見えね？」

沙「普通に見える」

夏「聞いてみっか。お～い作者～、お前平気なの？」

作「ん？ああ、平気。小説読んでたら鬱状態なんとかなった」

沙「現金な……」

作「それより……まさか夕馬たちが一ヶ月ぶりに出てくるとは思わなかったよ」

夏「いや、てめぇで言っちゃダメじゃん」

作「まぁちょっと強引な気がしたけど、これで香苗と夏哉のデートが決まったな」

沙「ちょと、さくしゃぁ、ひどいよひいきだよ！私もデートしたい」

作「いや、お前よーく考えろ。お色気でよく活躍しただろ?おっぱい丸見えにしたりヘッドロックでおっぱい押し付けたり」

沙「い、言うなばかぁ!!」

夏「……作者、流石にそれはないわ」

作「ごめんなさい……」

夏「はぁ～。まぁ元気出せよ沙鳥」

沙「うん……」

作「まぁ出番は分かんないけど、七話でなら……いいかな?」

沙「うぅぅ～、先が長い気がする～」

作「空ねぇ、Ｃｏｌｏｒｆｕｌさん!感想ありがとう!他の皆さんも、よろしければ感想評価ください。俺のやる気ステータスが変わります」

第六話　《六章》偶然の確率

「あ、そうだ。皆さんに言いたいことがあるんですけど」

昼休みが終わりせっせと弁当を片付けていると、香苗が言った。

「特に、沙鳥ちゃんとか」

「わ、私？何？」

「お願いがあるんですけど」

ひとつ前置きをすると、笑顔になる。

「私と夏哉君のデート、邪魔しないでくださいね？」

ゾクッ！！

多分この場にいる人は皆、アンも入れてとてつもなく冷や汗があふれでているだろう。

対象じゃでもない俺でも汗だらだらだから間違えない。

香苗は笑顔のままだ。

ままなのに体からドス黒いオーラを発生している。

多分これで気の弱い人、ちっちゃい子は死ねる。

証拠に種原が、涙を流しガタガタブルブル震えながら夕馬にしがみつき、香苗の視界に入らないように隠れようとしている。
しがみつかれている夕馬も顔が青い。

「皆さんのことですから、いい歳こいて漫画みたいにストーキング的なこともやりませんよね？」

コクコクコクコクッ！！

首がもげてしまうのではないかという程上下に振る。
その中に俺も含まれている。

語ってはいないが、あの言葉には続きがある筈だ。

？邪魔したり付いてきたりしたら、生きてること後悔させますから？

そう言ってる筈だ。

逆らったら、死ぬ！！

「かかか、か、カナちゃん？だ、だだだい、だい、ダイジョブだから！！ぜ、ぜたいね！そんなことしないから！！し、信じて！信じてねっ！？ねっ！？」

そう沙鳥が言うと、香苗から黒いオーラが消えていくのを感じ取れた。

「うん、分かった。お願いね、沙鳥ちゃん」

今はただの可愛らしい笑顔になった。

そして一瞬香苗が目を動かした。
その先には、アンがいる。

「か、香苗！安心しろ！！私もそんなことはしない！！じゃああれだ！ずっと沙鳥と一緒にいるから！！なっ！？」

必死に香苗を説得、というかなだめる、というか、安心させようとするアン。
しかしアンのことが見えない人もいるので香苗は何も反応せずに立ち上がった。

「じゃあ皆、行こっ。授業遅れちゃうよ」

確かにその通りなので、どっと疲れた体を動かして立つ。

「な、なぁなぁ、なぁ夏哉！私、信じてもらえたのか！？香苗に分かってもらえたのか！？無反応すごい怖いんだが！！」

「……多分、大丈夫だと思う」

ボソッと周りには聞こえないくらいで言う。
耳のいいアンにはこのくらい聞こえるだろう。

「た、多分なのか！？確証はないのか！？」

「あとで、聞こうな」

そう言って屋上を後にした。

―――――――――

「あ、そうだ」

昼休み、私は今日るあに頼まれたことを思い出した。

あっちゃ～、今日朝に言おうと思ってたのに、言うの忘れてた～。

私は顔に手を当てため息をつく。

「ん？灯里どうしたの？」

購買のパンを頬張りながら訊ねてくる、右隣に座っている友達の葉月。

因みにパンの中身はキムチ。

美味しいのかどうかは分からないし、なんでそんなコアなものが購買にあるのかも分からないけど、葉月も美味しそうに食べてるから美味しいんだろう。

食べる勇気はないけど。

「ちょっとね。頼まれごと今思い出したんだけど、やるの忘れた～って思って」

「それって私ら関係ある？」

「全く。妹のことだから」

「あぁ、るあちゃん？」

話に途中参加してきた、左隣に座っている友達の友美。
友美は弁当持参。
普通一段か二段弁当なのにこの子は三段だ。
しかも大きい。
どんだけ大食らいなのかと思う。
私たちは三人三角形で座っている。

「そうそう。明後日休みでしょ？その日両親が帰り遅くてさ、私に帰ってこいって」

「へぇ～――え？それ頼まれごと？ため息つくようなこと？」

スパゲッティを口に含んで、友美が訊ねてきた。
その時口ついたソースが気になったのでティッシュを取って拭いてあげる。

「あ、ありがと。灯里やっさし～」

「どういたしまして。で、話戻すけど、るあが呼んでほしい人がいるから、言っておいてって言われたの。ほんとは朝言うつもりだったんだけど忘れちゃってたから、はぁ～というため息。また忘れそうだから電話してくるね」

席を立とうとした瞬間、ガシッと両脇から手首を捕まれた。

「「ちょっと待とうか」」

見事に声が揃っている。

「どうしたの？」

「それっふぇ急ふぃのふぉうひゃないほね？」

葉月が聞いてくる。

ご丁寧にパンを食べながら。

「何言ってるか分かんないし、行儀悪いよ」

ゴックンと喉を動かす。

「それって急ぎの用じゃないよね？」

「ないけど……二人私に用事あるの？」

「いや～そういう訳じゃないんだけどさ～」

「じゃあ何、友美？」

「その電話の相手って、まさか柊？」

「え、なんで分かったのっ？」

友美の言う通り、電話する相手は柊だ。

るあのお気に入りのお兄ちゃん。

何かとあればいつもお兄ちゃんを呼んでお兄ちゃんを呼んでと駄々をこねる。

でもなんでそれを知ってるんだろう。

言った覚えはない。
言ったらからかわれると思ったから。

「お～当たった当たった。予想は大当たりだね葉月」

「だね～」

嬉しそうにニヤニヤする二人。
その会話から察するにもしかして……。

「……あんたたち私に鎌かけたでしょ？」

「いやいや～、そんなことはないよ～？ただ単に、この学校で灯里が電話番号知ってる人で、なおかつ灯里とるあちゃんが知ってる人は誰かな～って」

「で、そこで当てはまりそうな人は、レクの時灯里の下の名前を呼んで、しかも幼馴染みの彼じゃないかな～って思ったんだよ」

「しかもしかも、その中で自分から会いに行ける人っていうのは限られるでしょ？」

「それに今ふと思い出せたと言うことは、相手の顔を見れば思い出せる程度。ここに来てまだ二ヶ月くらいだから知ってる人もそうそう多くないだろうし、麦谷高に入った灯里と同じ小中の人も少ないだろうからね。てか私たちの知ってる、灯里の昔からの知り合いって柊しか知らないし」

友美と葉月が交互に根拠を言い合う。

全く、どうしてこの二人はこんなどうでもいいことに頭が回るんだろう。
もっと別のことで頭が回ればいいのに……。

「まぁそんなこと言ってるけど本当は」

友美が葉月に視線を送って、合図的なのを出している。

「「そっちの方が面白そうだから」」

「ほんとにもう……」

二人のいつも通りさにやる気が失って、椅子に座った。
って、そういえば止められた理由聞いてないし。

「ねぇねぇ、それは分かったけど、どうしてそれが私を止める理由になってるの？」

「いや～ね、もしそうなら直接会って言った方がいいでしょ？」

「いや葉月、意味分からないんだけど」

「だってさ、もし直接会えば、キュンとときめきイベントが起こるかもしれないでしょ？特に放課後なんてシチュなら帰りも一緒になるだろうし」

「……柊いつも花街さんと天雲さんと帰ってるから、そんなことないでしょ」

「わっかんないよ～。逆に過去の思い出っていう利点つけば振り払えるかもよ～」

そんなもんかな……あれ？

「てかなんで私が柊落とすって話になってるの？」

「「まぁいいからいいから」」

「……はぁ～」

まぁそれならそれで電話代かからないからいいけど。

――――――――――

五、六時間目が終わって帰りのホームルーム。

「じゃあ、二ヶ月たったんで席替えしま～す。方法はあみだ。紙は用意したので、前回と同じようにやります。はい、四隅じゃんけん」

担任が、明日の予定を言う前に席替えについて言ってきた。

ホントにどんだけ席替え好きなんだろう。

先生に言われた通り四人が立ち上がってじゃんけんをする。

そして勝った人に先生があみだを書いた紙を渡して回していく。

その間に先生は伝達することをしていった。

全員に紙が回り、席替えを行った。

「……おかしいだろ」

行って、俺は呟いた。

だってそうでしょ。

俺の席は一番窓側の前から四番目。
そして俺の前、俺の前にはなんと香苗。
しかも俺の後ろ、俺の後ろには沙鳥。
さらに俺の右、俺の右には空ねぇ。

どういう偶然の確率でこんなことが出きるんだろうか？

「夏哉～、どうして夏哉の周りに私たちが集まってるの？」

「何？夏君私のこと好き？そんなに私の傍にいたいの？」

「いやいやいや、俺も知りたいんだけど……」

ホントに、何これ？
俺にもしかして主人公補正かかってるの？

そんな疑問を抱きながら放課後。

「そういえばさ、空ねぇって寮なの？」

「ううん、自宅。二駅くらい行ったところ。名前は忘れちゃった」

「へぇ、意外と近いんだね」

「そうなの。今度遊びに来てね」

「はい。そうします」

「もうなぁちゃん、同い年なのに敬語だよ」

「まぁ、それはしょうがないでしょ。カナと空お姉ちゃん十歳も違うんだから。私ですら空お姉ちゃんのこと敬語で言いそうになるし」

「くすん、夏哉君、沙鳥ちゃんがいじめるよ。泣いていいかな?」

「やめなさい。そんなことしたら俺がどやされそうだから」

なでなでポンポンと香苗の頭を撫でたり叩いたりしてると、前から声をかけられた。

「柊、ちょっといい?」

声をかけてきたのは灯里だった。
その後ろに二人の女子もいた。

「どうした?」

一歩前に出て灯里に近づく。

「あのさ、明後日学校休みでしょ?暇かな?」

灯里がそれを聞くということは、るあちゃんのことか。

「何々？あの子夏君にデートの申し込み？」

後ろでそんな声が聞こえた。

まぁ初対面だからそういう反応もしょうがないか。

隣で沙鳥が簡単に事情説明をしている。

「あの人は気にしなくていいから」

「うん、そうさせてもらう」

若干頬が赤いのは、見ないことにしておこう。

「それで、どうかな？」

「わり、その日抜け出せない用事があんだよな」

手を合わせて謝る。

もしその予定をすっぽかしたりしたら……やっぱり考えるのはやめよう。

いいことはひとつもない。

「そっか。あ、しつこいかもしれないけど、夕方はダメかな？るあ小学校あるから、終わるの三時か四時くらいなんだけど。私たちが行くでもいいし」

「ん～、また微妙な時間だな……。香苗、話聞いてた？」

振り返って香苗に訊ねる。

「うん。えっと、じゃあ三時半まででいいよ。その代わり朝早くね」
「はいよ。ということで許し得たんで、その時間ならいいよ」
「あ、ありがとう。で、でもさ、もしかしてその……二人って、その日デートだった？」
少し気まずそうな顔をする。
「まぁそうだけど、気にすることねぇよ。香苗からも許可降りたし」
「いや、それも思ってるんだけど、言いたいのはそれだけじゃなくて……」
一回俺を見て、香苗を見る。
もう一回俺を見て、香苗を見る。
そして内緒話するためか、ぐいっと俺の耳に顔を近づかせてボソッと言った。
「警察とかに捕まらないでね」
灯里は言い終えると顔を話した。
香苗を見る俺。
多分灯里と顔を近づけたせいだろう、若干不機嫌そうな顔をしている。
俺は熟考する。
平日に俺と香苗がデートするところを。

「灯里、リアルすぎる忠告ありがとう。気を付けるよ」

「ちょ、ちょっと夏哉君!?峯岸さんに何言われたの!?」

「いや、ただ安全に、人の迷惑にかからないようにって強く忠告してもらっただけだよ」

「え、私たちってそんなに周りに被害あるの!?」

「たち、っていうより、私はカナだと思うな」

流石沙鳥、よく分かってる。

「私なの!?私何もしないよ!?」

「や、ね。カナの小ささだと、捕まっちゃうとか、そういうことを言ったんじゃないの?」

「ちょっとさぁちゃん、それをなぁちゃんに聞かせないために灯里ちゃんは夏君に内緒話したんじゃないの?」

「あ」

沙鳥は気付いたが時すでに遅し。

思いっきり下を向いて俯いてしまった香苗。

俺はなんとか戻ってもらおうと必死に声をかける。

「香苗、ほら大丈夫だから。そんなマンガみたいなことあり得ない

だろ、即補導なんか。普通に堂々としてたら平気だって。気を落とすな」

「いいよ夏哉君、そんな気を使わなくて」

いや、そんなに落ち込まれたら気を使わざるを得ないというか。

「どうせ私はちっちゃい小学生くらいに見えちゃうんでしょ？こうなったら学生証でも保険証でも持っていくんだからぁぁっ！！」

ヒクヒクと泣きながら俺の学ランを掴んで顔を埋める。

よ～しよ～しとなだめながら灯里に顔を向ける。

「じゃあとにかく、その日はＯＫってことで、よろしく言っといてくれ」

「分かった。じゃあね」

「おー」

挨拶を交わすと灯里は他の女子のところへ戻った。

「ちょ、何撮ってるのっ！？」

向こうにいくとすぐに叫んだ灯里。

何があったのかはちょっと気になったが、今はこっちが優先ということで、明後日覚えていたら聞いておこう。

「ほら香苗、俺らも帰るぞ」

「……うん」

香苗は頷いたので、俺たちは帰った。

第六話　《六章》偶然の確率（後書き）

作者「歌の名前です」

夏哉「とうとう壊れたな」

真樹「全く、いきなり何を言うかと思えば」

作「いや～、ふとこの題名思い付いたんだよね。別に聞いてたわけでもないのに」

真「まぁ言い曲ですがね」

夏「あれ、真樹知ってんの？意外だな」

真「えぇ。昔耳にしました」

作「いや、それにしてもあれだな」

夏「なんだよ？」

作「自分で言うのもなんだけど、よく灯里の一人称かいたな俺」

夏「全くだな」

真「その代わり私の出番がない……」

作「まぁそれはしょうがないよ。ところでさ、感想で？夏哉と真樹がデートも面白いよね？って来たんだけど……感想では真樹が一蹴

したんだっけ？」

真「当たり前ですわ。誰がそんなこと」

作「でもそうすれば出番は増えるよな？」

真「……」

夏「あ、真樹が揺れ動いてる」

作「悩むところだろうな」

夏「まぁ今日のところはこんなところだろ」

作「どんなところかはわからないけど、やることがないのでさんせー。空ねぇことｓｋｙｆｌａｒｅさん、ｒｙｏさん、ｋｉｉｔｉさん、Ｃｏｌｏｒｆｕｌさん、感想ありがとうございます。みんな、評価感想ください！待ってます」

真「やっぱりなしの方向で」

作「ようやく決まったのがそっちなのね……」

第六話　《七章》再始動

俺たち四人はいつも通り登校して教室に入る。
先に登校して自分の席についている空ねぇが挨拶してきた。
それを俺たちも返す。
ふと昨日までなかったものが目に入った。
でも見覚えはあった。

「姉様、それって竹刀袋？」

香苗がそう言うと、空ねぇは固まった。
俺と沙鳥、アンも同様にだ。

一人訳が分からないといった風に首をキョロキョロ回している少女がいた。
もちろん香苗だ。

「え、ちょっと、皆どうしたの？」

「だ、だって、なぁちゃんが……」

「わ、私？」

「うん。なぁちゃんが普通に、私のこと？姉様？って……」

そうなのだ。
昨日はずっと？火津那さん火津那さん？と呼んで、その後空ねぇがグイっと詰め寄って強制的に？姉様？と呼ばされていた。
そうなると、いつも羞恥心が生まれて顔を真っ赤にして、つっかえつっかえになりながら呼んでいたのだ。
まぁそういうのも、何故か上目使いをして名前も呼ぶのでいつも悶えていた。
目を向けられていない俺たちも悶えていた。
……なんか焦点がズレた気がする。

とにかく、だ。
香苗はもうそんなことはなく、普通に照れもなく自分から呼んでいるのだ。
昨日何があったのか。

「いや、そんな驚かれることかな？多分これからも？姉様って呼んで？って言われると思ったから、昨日家で名前呼ぶ練習したの」

部屋の隅で？姉様姉様？と呟く香苗を想像する。
……かなりイタイ人じゃない？

そんなことを思ってたのはどうやら俺だけのようだ。

「なぁちゃあああ～んっ！」

「うみゅっ！？」

空ねぇはぎゅっと香苗に抱きついた。

「自分から？姉様？って言ってくれるなんて～！もう私、さいこぉ

ぉっ！！」

頬擦りしながら喜びを表現している。
空ねぇには恥とか外聞とかないのだろうか。

空ねぇの過度なスキンシップにあうあう目を回している香苗。
ちょっと不憫に思えてきた。

「ねぇ何？カナってさ、そんな簡単に？姉様？って呼んでくれるの？お願い、頼むから私にも？姉様？って――あ、いや、？お姉ちゃん？の方がいいかな？う～ん、じゃあ折衷案ってことで両方呼んで」

「火津那いいな～。なぁ香苗、私にもたまにでいいから言ってくれ。優しく、お前好みの体で抱き締めてあげるから」

沙鳥もアンも香苗にご執心になっている。
てかアン、最後の言葉はちょっとまずいんじゃないのか？

「よ、呼ばないよぉ～」

「なにそれ～？空お姉ちゃんだけぇ？差別差別～」

「だって、アンさんだったらまだいいけど、沙鳥ちゃんは痛いし柔らかいからやなの！」

柔ら――あぁそういうことか。
そうだよな、抱きつくってことはそういうことだもんな。
自己嫌悪に陥っちゃうのか。

「だったら！空お姉ちゃんはなんなの！？お姉ちゃん凄いふかふか

そうじゃないの！？」

「あ、そう言えば……え、でも」

「安心して。私胸の部分は押し付けてないから」

「あ、ほんとだ」

「え、空お姉ちゃんなんでそんな風にしてるの？」

「私ね、向こうでいっぱいハグして泣かせちゃったことがあるからね。ツルツルペッタンな子にはあんまり押し付けないことにし――あ」

「ひうっ、あうっ……グズッ……夏哉くぅ～ん……」

「うん、よしよし。ほら泣くな」

空ねぇを振り払ってこちらに来た。
俺は優しく頭を撫でてあげる。

「……私、土下座した方がいいかな？」

「いや、そこまでしなくてもいいと思うぞ。それで、香苗が聞きたかったこと引き継ぐけど、それ竹刀袋でしょ？確か最初会ったときも持ってたけど、剣道部に入るの？」

「あ、ううん。えっとね、実はこの中竹刀が入ってるんじゃないんだよね」

空ねぇは竹刀袋に入ってる何かを手に取った。

「じゃあ何入ってるの？」

沙鳥が訊ねると、空ねぇは紐をほどいてそれを取り出した。

「木刀？」

沙鳥のいう通り、それは木刀だった。
そこら辺に売っているようななんの変鉄もない木刀。
でも、木刀使う部活ってあったっけ？

「これね、親に護身用って言われたの」

「護身用って、この日本で？」

他国ならまだしも――まぁ拳銃を所持してる国もあるから、そこだと木刀は護身用にはならない気がするが――日本でそこまで警戒する必要があるのか？

「しかもね、これ念じると真剣になるの」

「「「……は？」」」

俺と沙鳥、そして先程まで落ち込んでいた香苗が聞き返す。
そこにアンが入っていないのは、きっと意味が全くわかっていないからだ。

念じるだけで木刀が刀に変わるって、どこの魔法だよ。
あ、ここ魔法使えるじゃん。

「疑ってるでしょ？見ててね」

そう言った瞬間、木刀の形が崩れたと思ったら形を変え、真剣に変わった。

「はい終わり」

そう言うとまた木刀に変わって、それをしまった。

「なぁアン、今のって魔法？」

小声でボソッと聞いた。

「いや、そんな気配はなかったが……」

「あ、これ？これは魔法じゃなくて科学だよ、科学。英語で言うとｓｃｉｅｎｃｅ」

サイエンスの部分の発音が凄くよかった。

流石帰国子女。

「へ～、外国の技術ってここまで進んでるんだね～」

「ほんとに。提供者はＮＡＳＡかな？」

「多分な～」

「「「はっはっは～」」」

俺たちは乾いた笑いをしばらくする。

「「「ってあり得ないでしょ！！」」」

そして同時にツッコんだ。

「なんで今の科学でそんなことが出来るんだよ！？」

「そうだよ！そんなことがあるならとっくにニュースになってるもんっ！！」

「てかＮＡＳＡのものだったとしてもなんで一端の帰国子女がそんなの持ってるの！？」

はぁはぁと肩を切らす。

「……えと、お疲れ様？」

「空ねぇに言われたくないわッ！！」

「そ、そんな。疲れさせるようなこと言ってないけど……」

て、天然かい……

「おい火津那、そろそろ種明かしすればどうだ？話を聞く限りだと今の地球にはそれを作る技術はないそうだし、魔法も使ってないし」

「えっとね、別に私は嘘はついてないよ。これは、魔法と科学で作ったものなんだって。親がここ出身で、親が作ったの」

あぁなるほど、そうなるのか。
確か熊谷が作った薬は魔法と薬の複合で、アンはなんにも反応しなかった。
魔法と科学が合わさると魔族には感知されないらしい。
「姉様のご両親って科学者なの？」
「姉様……はっ、そ、そうだよ。日本では全然やってないけど、外国でいろいろやってるよ。まぁ詳しくは分からないんだけどね。あ、これね、私が名前つけたんだけど、炎冥耶（かぎろいのみょうや）って名前なんだよ。どうかな？」
「なんかかっこよくね？」
「でしょ？私火津那で？火？があるから、それ関係使ってみたの」
「へ？火？」
カギロイノミョウヤに火が使われてるか？
「ねぇ姉様、もしかして炎の字使ってる？」
「す、凄い。なぁちゃんよく分かったね。私自慢したかったのに……」
空ねぇはちょっと落ち込んでしまった。
「か、カナちゃんカナちゃん、カギロイノミョウヤのどこに炎が使われてるの？」

少し腰を低くして香苗に訊ねる沙鳥。
それは俺も聞きたい。

「炎ってね、？かぎろい？とも読めるんだよ」

「「うっそだ～」」

俺はポケットから携帯を取り出して、メモ機能の場所で？かぎろい？と打ってみた。

「……かぎろいないけど」

「まぁこんな字普通は使わないけどね。漢字辞書には乗ってると思うよ」

「俺は漢字辞書にしか載ってないような字を知ってるお前に驚きだわ」

「へへ、凄いでしょ」

「うん、冗談抜きで凄いわ」

「カナ凄いよ～」

「香苗流石だな」

「うん、あの、嬉しいんだけど、なんで急にそんなに褒め――もしかして、夏哉君は置いといて、他は私の機嫌を取り戻して？お姉ちゃん？とか？姉様？とか言わせようとしてるんじゃないの？」

「「……」」

沙鳥とアンの方がピクッと動き、顔を逸らす。

二人とも図星のようだ。

「……ねぇ夏哉君。私どうすれば同い年に？お姉ちゃんって呼んで？って言われないようにできるのかな？」

な、こ、ここでそんな難解な問題だと！？

こ、答えが全く浮かばない……。

チラッと時計を見た。

「あぁ！もうこんな時間じゃん！！早く席つかないと先生来ちゃうな！！」

俺は強引に動きだし、席についた。

「ちょ、夏哉君！なんでにげるの！？それから席について逃げたって本気で思ってるの！？私目の前だよ！！」

あ、そうだったじゃん。

俺は机に伏せて聞かなかったことにする。

「ちょ、夏哉君！ねえなんで顔伏せるの！？ねえ答えてよ！！私の質問に答えてよぉぉぉぉぉっ！！」

―――――――――――

「……はぁ、ネハラ。少し落ち着こうか」

「そ、そうね。我ながら慌てすぎたわ」

私たちはアルクシア様からの命を受けてから、何故か二日が経っていた。
進展は全くない。
むしろ疲労が溜まってしまった。

今は魔界にいる。

何故二日経って進展が全くなしかというと。

まず私たちはタクノムから話を聞いてすぐに地球に来た。
そこまではよかった。
しかしそこで重大なことに気づいた。

そういえばナツヤの見た目が全くわからない。

はっきり言ってこの広い地球から、どこにいるかも分からない、どんな姿なのかすら分からない生き物を探すというのは無理に等しい。
お姉様を探せば、恐らくナツヤもいるんだろうけど、お姉様も何処にいるか分からない。

だから一旦魔界に帰った。
この時、魔界から別の世界に行く場合は問題ないのだが、帰るとき

は少し手間がかかる。
行くときは門(ゲート)を潜って魔力を残すだけで構わないけど、帰る際にはその残留魔力を辿り、そこを魔力を込めてこじ開けないと期間出来ない。
もし行くときに魔力を残し忘れたとしたら、それは導がなくなるということになるので、記憶を頼りに手探りで門を探し当てこじ開けるか、別の魔族がこちらに来て助けてもらうしかない。

で、とにかく私たちは戻ってもう一度、癪だけどタクノムに会って居場所と人相を確認した。

その後またすぐに地球にいこうとしたのだが、門(ゲート)を使うための時間がまだ掛かるのでしばし待機。

使えるようになってすぐに門(ゲート)をくぐる。

向こうについてまず始めにヤチクが確認してきた。

「人間の姿になる準備はいいか」

と。

正直のところ、私は嫌だった。
いつもの姿は気に入ってるし、いろいろと勝手がよかった。
それに比べ地球上に住んでる生物はたった二本の細い足で動かなければならなく、バランスが取りにくいったらありゃしない。
それでも、お姉様に気に入られるという思いが勝ったので頷いた。

「よし、やるか」

ヤチクの合図で、私たちは各々の光に包まれた。
それが引くと、姿が地球の生物のように変わっていた。
なるべくお姉様のような形状を意識したのだが、自分の顔は見えない。
だからヤチクに聞いてみる。

「ヤチク、私お姉様と同じ？」

「バカなことを言ってるんじゃない。クーお嬢の姿がアタシたち如きに真似できるわけがないだろう」

確かにその通りだった。
そう言った本人もお姉様とは若干の違いがあった。

「ヤチク、頭の毛薄い緑にしたの？」

お姉様は輝くような金色だった筈だ。
私もそこは真似ることが出来た。

「いや、クーお嬢と同じということを考えると、失礼な気がしてやめたんだが……お前は全く一緒だな」

「当たり前よ。少しでも共通点を増やしたいって思ってるんだし」

「それにしてはネハラ、そこの肉が少なすぎるんじゃないか？」

ヤチクはとてもとても細い指を私の心臓があるところに指差した。

「あぁ、これね。お姉様には申し訳ないんだけど、こんな肉の塊あっても邪魔だと思って。そういうヤチクはかなり大きくない？重くない？」

私はヤチクのそれに手を伸ばし、鷲掴みする。
なんてことない、やはりただの肉の塊だ。
地球の生物はどうしてこんなものをつけているんだろうか。
理解に苦しむ。

「アタシにとってはこの重量感が安心するというか、しっくりくるんだよ。と言っても、意味が分からないって顔してるな、ネハラ」

「だってそんな重いもの、機動力が減るじゃない」

「アタシにとっては邪魔だとは思ってないからいいんだ。……それより、何か違くないか？」

「何？さっきあんたが自分で言ったんじゃない。お姉様のそっくりにはなれないって」

「そうじゃない。ただ、何かが足りないような……」

「足りないって……」

私はお姉様の姿を想像した。

あぁ、とてもお美しい。

いやそうじゃなく。

私はそのお姿と、自分は見えないからヤチクの姿との違いを思い浮かべると、すぐに分かった。

「「私（アタシ）たち何もまとってない」」

声を揃えて口にした。

確かにお姉様は自分の体をさらけ出しはしなかった。

「しょうがない、また戻るか」

私は頷き、再び魔界に帰った。

その後も探し物や忘れもにになど、いろいろやってたら今の状態になってしまった。

「「はぁ～」」

私たちはため息をついた。

「もう、ないよな？」

「多分ね。というかもう何かあっても帰ってこないってことにしない？」

「……そうだな」

私たちが門（ゲート）の前で開くのを待っていたとき。

「ブック、あははははははははっ！！」

突然笑い声が聞こえた。
そちらを向くと、《偉大》のもとで腰巾着のルホンが一人で、腹を抱えてのたうち回っていた。
珍しく近くに《偉大》はいない。

「ははは、はぁっ、はぁっ。いや、あんたたち、バカだバカだとは思っていたが、ここまでとは。何二日無駄にしてるんだ？」

「貴様……！」

ヤチクは睨み付けるが、ルホンはどこ吹く風だ。

「門（ゲート）、開いたぞ」

そう言われた。
確認すると、確かに開いていた。

「時間を無駄にする気？」

「貴様、覚えてろよ」

「後で私たちがミンチにしてあげるから」

「やれるもんならやってみなさい」

ルホンの最後の言葉を無視して私たちは、もう何回と潜り抜けた門（ゲート）をくぐった。

第六話　《七章》再始動（後書き）

沙鳥「お～、なんだか後半シリアスなんだかギャグなんだか全く分からないね～」

アン「そうだな。この中途半端が！」

作者「すいませんでした！」

沙「ねぇそれより作者、気付いてる？」

作「あにが？」

沙「これで九十話目なんだよね」

作「そうだよ」

ア「長かったな～、ここまで」

沙「ほんとだね～……ってなんかそれ最終回っぽい台詞じゃない？」

作「や、やめろ！まだ続けるから！！二百話ぐらいで終わらせるから！！」

沙「に、二百話！？何？これから後倍以上の中身書く気！？」

ア「無謀だな」

作「酷い！酷い！！そんくらい望んでもいいでしょ！！」

ア「おい作者、お前いつだか言ったよな？２０１２年５／１４までに完結させるっていけるのか？今まで以上の量を一年で」

作「計算上なら、三日に一回投稿できれば間に合うさ！！」

沙「『なのは』も『最勇記』も書きながら？」

作「……」

沙「だって今でこそ春休みで、一日中使えてるから二日にいっぺん、三日にいっぺんできてるんだよ？それなのにこれから学校なんて始まるんだから。それにバイトとかするんでしょ？お母さん心配」

作「なんで俺より年下の人が俺の母さんなんだ！？」

ア「だが言ってることは確かだよな？」

作「……」

ア「目を逸らすな逸らすな」

作「……もう一年伸ばしていいかな？」

沙「やっぱりそうなるよね」

作「うぅぅ、もう期限なんて決めなくていいや！！」

沙「あ～あ、約束破棄しちゃった」

作「いんだよ！とにかく完結させるのを優先させてやる！！」

ア「頑張れ～」

作「おうっ！空ねぇ、Ｃｏｌｏｒｆｕｌさん感想ありがとう！みんな評価とかちょうだいです！！」

第六話　《八章》デート前

寮の部屋の玄関のところで俺はアンにそう言った。

「じゃあ行ってくるな」

「あぁ」

時刻は八時十分ほど。

今日は香苗と二人きりのデートだ。

恋人気分、というか漫画気分を味わいたいために駅前を集合場所にした。

「あ、そうだアン」

「なんだ？」

「その、あれだ。ついては来ない方がいいぞ？俺まだアンの亡骸は見たくないから」

そう言うとアンは少しだけ視線を逸らし、遠い目をした。

「夏哉。昨日の帰り、夏哉を一人で帰らしただろ？」

「あぁ」

昨日は香苗が、『女の子だけで話があるから』と言ったので俺は偶然灯里とその友達二人で帰った。

「それな、釘差しだったんだ」

「はい？ちょっと意味分からないんですけど」

「つまり、香苗が念を……」

そのときのことを思い出しているんだろう、みるみるうちに顔が真っ青になり、体を震わし、挙げ句の果てには膝を床につき自分の両腕で体を抱き締めた。

「ちょ、え、アン！？大丈夫か！？」

香苗関係で、アンがここまで脅えるということは、ひとつしか考えられなかった。

俺のことだ。

さっき？釘指し？と言ったことと、その話題をここで出したことから答えを導いていくと、？ストーカーなんてみっともない真似、絶対しちゃダメだからね？的なことを真っ黒な笑顔で言われたんだろう。

でも流石にこの脅え様は異常すぎる。

アンと出会っての一ヶ月ちょっとの間で一度もこんな姿を見たことがない。

アンを宥めようと肩に手を置こうとすると、

「ひいっ！？」

それを手で払った。

その態度に、驚きが隠せなかった。

拒絶されたから、ではない。

あのちょっと強気なアンが、今にも壊れてしまいそうな、全力で否定するような声を出したからだ。

演技でもドッキリでもない、昔の俺に近づかれたときの人と同じ、心からの恐怖。

何度も、何度も見てきたから、嘘か本当かが分かる。

「あ……、すす、済まない……。な、夏哉のことが嫌いになった、というわけでは、ないんだ。で、でも、きょ、今日だけは勘弁してくれ。あ、明日には普通になるから」

震えるように懇願する。

アンはつらいんだろう。

好きな俺に触れられないことが。

好きな俺を拒絶してしまったことが。

俺は見るに耐えれなかった。

靴を脱ぎ、嫌がるアンの体を無理やり抱き締めてやる。

「な、夏哉!?やや、やめてくれ!今日だけは!今日だけは本当に頼む!!」

そんな叫びを無視して俺はアンの耳元で囁く。

「そんなに脅えなくていいから」
なるべく優しく、恐がらせないように。
「気にしないでいいんだよ。お前はいつも通り俺に触ってきても平気なんだ」
「で、でも、香苗が……」
少しだけど、声の震えが収まる。
「大丈夫だ。俺がなんとかしてやる。安心しろ。俺が絶対お前を守ってやる。香苗に何もさせないよ」
「ほ、本当か？」
しかしまた震える。
それは恐怖のせいではなく、嗚咽のため。
それが不安から来ているのか、喜悦から来ているのかは分からない。
「あぁ」
「本当に、私は夏哉に触ってもいいのか？」
でも、とにかく安心させようと、力を込めて強く抱き締める。
「いいんだよ。そんなのは誰かに制限されることじゃない」
「私は、まだお前の傍にいていいのか？」

「……それはアンが決めることだ。お前はどうしたい？」

「私は……」

少しいいよどむ。
しかしそれはほんの一瞬。

「私は夏哉と一緒にいたい。触れ合いたい。ずっと、ずっとだ」

それを聞いて、ポンポンと頭を叩く。

「それなら、お前のその希望を叶えるために動いてやる。だから安心しろ」

「……ありがとう」

ゆっくりとアンから体を離し、自分の部屋を出る。

「行ってくる」

諸悪の根元を潰すために。

――――――――――

「う～ん、そろそろかな」

デートの時間も迫ってきたので、忘れ物ないか確認して、鏡の前で身だしなみを再チェックする。

どこも悪いところはない、気がする。

デートなんて初めてだから勝手が分からない。

いつも通りにすればいいんだと思うけど、やっぱりいつも以上に可愛く見られたいと思うのは女の子として当然のことだ。

「うぅぅ……よし！もう行こうっ」

私は決心して荷物を取る。

ゴンゴンゴン。

するとドアを叩く音が聞こえた。

誰だろう？

心当たりは全くない。

「は～い！ちょっと待ってくださぁ～い」

小走りで玄関まで行き、覗き穴から外を見てみる。

そこから夏哉君が見えた。

私は疑問に思う。

どうしてここにいるんだろう？

集合場所は駅前の筈だ。

もしかして、私のことが待てなかったのかな？

そんな嬉しい願望を考えながらドアを開ける。

その瞬間、夏哉君は即座に体を滑り込ませるように中に入ってきた。
そして私の肩をガッと掴む。
それと同時に足で開いていたドアを閉めた。
外から私たちのことは見えなくなる。

「え、な、あれ？な、夏哉君？」

突然の出来事に訳が分からず混乱する。

覗き穴から見てたときには気づかなかったけど、ものすごい必死の形相をしている。

「お前は」

「へ？」

「お前は俺の大切な奴を傷付けた。あいつは、ただ好きな人と楽しく接したかっただけなんだ。それなのに、お前はそれを潰したんだ！俺が近づくだけであいつは震えるんだ！！あいつは何もしてないのにッ！！」

……え、えええぇぇぇぇッ！？
ちょっと、な、何これ！？
な、なんで夏哉君こんなに怒ってるの！？
何があったの！？
デート前なのにどうしてこんなシリアスな空気になってるの！？
今までるんるんな空気だったよね！？
私何か夏哉君にした！？
あいつって誰！？

理解が追い付かなくて何も喋れない。
何を喋ればいいかも分からない。

「あいつはまだ泣いてるんだ。流す必要のない涙を流してる。いつも強いあいつが脅えてるんだよ。見たこともないほど体をびくつかせるんだよ。あんな姿を俺はもう見たくない。だから！あいつをあんな風にするお前を潰す！！」

「ふわぁっ！？」

夏哉君の訴えが終わったようで、私を脇に抱えた。

あの、これ……ドッキリ、だよね？
きっとすぐにみんなが来て？ドッキリ大成功～？っていう看板を持ってくるんだよね？
ということはどこからドッキリが始まってたのかな？
最近ドッキリも凝ってるからな～。
もしかしたらデートしなって言った二日前からかもしれない。
そうなら昼休みにいたみんなが仕掛人ってことになるのか。
もうみんな酷いよ。
早く助けて～。

ドサッと私はベッドの上に放りだされた。

そこで私の現実逃避は途切れてしまい、強制的に現実に戻された。

仰向けになった私は首を回して夏哉君を見る。

あ、これ本気だ。

理解はしたくなかったけど、理解できてしまった。
夏哉君は冗談ではなく本気で私に何かしようとしている。
夏哉君の大きな手で私の細い両手首を掴み、背中に馬乗りになった。
……こ、この絵ヅラ大丈夫かな？
色々とマズイ気がする。
ていうか、まず夏哉君私にあんな怖い顔して乱暴なことしないよね？
ということは……
「な、夏哉君！！本物の夏哉君っ！！助けてぇ！偽物の夏哉君に変なことされそうなの！！お願いだからなんとかしてぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！」
そんな叫びもむなしく、夏哉君は空いた手を私の体に伸ばして――
脇腹にこちょこちょし始めた。
「にぎゅにゅあああああああああっ！？」
あまりのくすぐったさに身をよじろうとするが、馬乗りにされて手首を捕まれて動けない。

「あ、きゃ、ぬっ、あぁっ！！ちょ、ちょと！や、な、にゅ、にゃぁぁぁっ！！」

「グスッ、あうっ、あ、アンさん……ご、ご、ごめんな、ズズッ、ごめんなさい……！ひくっ、あっ！」

十分間、十分間の間ずっと夏哉君にこちょこちょ地獄を受けて、その後デートの前に夏哉君の部屋に来た。

そこで一人待っていたアンちゃんに頭を下げた。

「……香苗、もう怒ってないか？」

「う、うう、うん……ヒクッ、怒って、ないよぉ……」

もうつらくて怖くて涙が止まらない。

「私、夏哉と一緒にいていいいんだよな？」

「い、グズ、いい、よ。ご、ひっ、あぅっ、ごめんなさい……」

「アン、もう大丈夫か？」

「あぁ、時間を掛けて悪かった」

「気にするな。それで香苗、デート行くか？」

「ズズッ……、行く……」

目を擦りながら頷く。
ここは何があっても首を横に振れない。

「そうか。じゃあほら、これで涙拭けよ」

そう言って夏哉君はハンカチを渡してきてくれた。

「ありがとう……」

それを借りて流れ落ちていく涙を拭う。
少し落ち着いた。

というか……

「夏哉君」

「ん？」

「態度、変わりすぎじゃないかな？どうしてそんな一瞬で出来るの？」

「そりゃお前がアンに謝ったからだ」

う～ん、分かったような分からないような。

「じゃあそろそろい――ちょっと待て」

夏哉君は立ち上がろうとすると、途中で止まった。

「どうした夏哉？」

「アンがこうだったということは、沙鳥もそうなんじゃないか？」

「「あ」」

「香苗！すぐ謝りに行くぞ！アンも来い！！それで、超本気で行くからアンは俺たちの姿見えないようにしてくれ。それから香苗を風圧から守るようなやつ」

「分かった」

「ちょ、ちょっと夏哉君？どうしてそこまで？」

「そりゃお前、少しでもお前と長くデートしたいからだろ。ただでさえ誰かのせいで時間押してるんだから」

その夏哉君の言葉はとても嬉しかった。

でも、私は思うんだ。

ちょっとは夏哉君のせいでもあるんじゃないかって。

でも言わない。

何を言われるか分からないから。

その後三十秒ほどで沙鳥ちゃんの家に辿り着き――寮から沙鳥ちゃんの家まで直線５００ｍほど。私たちは空から屋根伝いで向かった――、十分掛けて謝罪した。

私の顔を見たとき、沙鳥ちゃんが本当に怖がっていたときは、逆に自分が怖かった。
そんなに怖くしたつもりなかったのにな。

そして約束の時間から十分遅れ、色々あってようやくデートの始まり。
乗る予定の電車はギリギリ乗れた。

今日の予定は大雑把に、まず前半に遊園地でいっぱい遊んで、最後にお買い物という感じだ。

目的の駅に着いて切符を機械に入れようとしたとき、私たちは駅員の人に呼び止められた。

「そこのお嬢さんと君、ちょっとこちらに」

私たちは言われた通り駅員のもとに行く。
その間にポーチの中に手を入れる。

「君たち学生だよね？ちょっと――」

「あの、これ見てください」

駅員が言い終わる前に私は自分の学生証明書を出して見せた。

「私たち、歴とした？高校生？で、今日は創立記念日で学校が休みなので遊びに来たんです。決して！この人が小さい子を連れ回してる、ということはありませんから」

「あ、それは、失礼しました……」

そう言って駅員は私たちから離れていく。

お仕事お疲れさまです。

そう、これは仕事なんだ。

だから私たちに仕方なく話しかけてきたんだ。

仕事だから仕方なく、仕事だから仕方なく仕事だから仕方なく……

「仕事だから仕方なくなんだ仕事だから仕方なくなんだ仕事だから仕方なくなんだ仕事だから仕方なくなんだ仕事だから……」

「お、お～い、香苗ちゃ～ん？何ぶつぶつ言ってるの～？」

「あ、ううん、なんでもないよ」

いけない、声に出ちゃったようだ。

夏哉君は何か言いたげな顔をしていたけど、結局言わなかった。

駅から遊園地まではちょっと距離があって、そこまでバスが出ていたけど、そのまま乗って時間を過ごすというのは味気ないので、色々な店を見ながら歩いていく。

「あ、そうだ。あの、さ、香苗」

「ん？何、夏哉君？」

夏哉君から話しかけてきたのに、なんだか言いにくそうにしている。

……若干耳がいつもより赤い、かな？

「あ～、あれだ。手ぇ、繋がない？」

すっと夏哉君は手を差し出してきた。

私は夏哉君が言い淀んだ意味が分かった。

夏哉君照れてるんだ。

ちょっと可愛い、かな？

そう思った一秒後、私は夏哉君の耳よりも赤くなった。

え、えっと、これは私に言ってるんだよね？

思わずキョロキョロと周りを見回してしまう。

当然ながら知り合いの顔は見つからない。

「え、えっと……うん」

私は、まるで繊細な雨細工に触れるかのように恐る恐る夏哉君の手を繋いだ。

私と手と夏哉君の手が触れると、夏哉君は握手のようにではなく、一本一本指を絡ませるように繋いだ。

私も握り返す。

こ、こういう風に繋ぐのって初めてだな。

なんか緊張する。

するとじわっと私の手が湿っていく。

「ああっ！夏哉君、ちょっと待ってっ」

私は夏哉君の手をほどいてハンカチを取り出した。

「どうした？」

「あ、あの、手汗が、ね。ごめんね、すぐ拭くから」

ふきふきと右手をぬぐうと、それを鞄にしまった。

「……あのさ香苗。これから二、三十分くらい繋いでいくと思うんだけど、最初から拭いてたらきりがないと思うけど」

確かに夏哉君の言う通りだった。

でもここでそれを変えると言うのはちょっと恥ずかしかった。

なので言い訳をしてみた。

「う……、い、いいのっ。こういうのは最初が肝心なんだからっ」

我ながら何を言ってるか分からない。

どうにかして夏哉君の言葉に反論しようと思ったけど結局思い付かなかったので適当に言ってしまった。

「何それ？そんなの初めて聞いたけど」

「つ、追求してこないでよっ」

私は夏哉君の手を握り、歩き出した。

この町には色々な店が連なっていて、外見だけを見てても楽しい。
色々可愛いアクセサリー等を見つけたので、今度買ってみよう。
あ、でも値段見ていなかったからちょっと気になるな。

私たちの予想より早めに遊園地に到着した。
平日のため入場券を買うためにかける時間はあまり必要なかった。

よし、入場券も買ったし、いっぱい遊んじゃおう

第六話　《八章》デート前（後書き）

真樹「なんですの今回の話は？」

作者＆ａｍｐ；香苗「「ごめんなさい……」」

真「全く、最初からグダグダではありませんか。なんですの？前回以上にシリアスとコメディが入ってる出はありませんの。それきシリアスと言っても微妙に違う気がしますし。どうして書いたんですの？」

作「いや、思い浮かんじゃったからとしか言いようが」

香「ごめんね真樹ちゃん。私のせいで変な風になっちゃって」

真「全くですわ。昨日の放課後一緒にいなかったことが効を奏しましたわね」

香「ごめんなさい……」

真「それで、次回はデートの続きでいいんですの？」

作「そうだよ。続き。次でデートは終わりにしたいな～とは思ってるんだけど、あんまし決めてないから期待はしないでください」

真「まぁ作者ですから仕方がないでしょうが」

作「なんかもうね、そんな風に言われるの慣れてきちゃった」

香「慣れる前に実行しようよ」

作「おっしゃる通りです……」

真「はぁ、全く。では、ここで謝辞をさせてもらいます。ｓｋｙｆｌａｒｅさん、こんな小説で参考に出来るものがあればぜひどうぞ、あるかどうかは分かりませんが。ファルコさん、やはりわたくしは登場するべきですわよね。どうして作者にはそれが分からないのでしょうか……」

香「最後にＣｏｌｏｒｆｕｌさん、読みやすいと言ってくれてありがとうございます。たぶん作者さんは、本気で投稿スピードをあげると思いますが、間に合わなかったらごめんなさい」

作「というわけでお三方感想ありがとうございます！えっと皆さん！お願い、というかわたくしの願望を聞いてください！！」

真「突然なんですの？」

作「いいからいいから。今ねこの小説の評価が２７６で、３００がみえそうなの」

香「本当に皆さんありがとうございます」

作「で、目標として第六話が終わるまでに３００に到達したいんです。第六話は後十話近く。ぜひ、ぜひ力を貸してください！何があるというわけではないですがお願いします！！」

真「そうですわね。確かにそれは私たちにとっても喜ばしいことですので、よければですが」

香「２７６でも十分多いんだけどね」

作「まぁそうだけど、キリの言い方がいいじゃん」

香「それはそうだね」

作「ではそういうわけで」

第六話　《九章》初デート

「まず何処行く？」

遊園地に入ってすぐに香苗に聞く。

園内はそこまで人がいないから、何処に行っても三十分以内にはアトラクションが出来るだろう。

「ん～、どうしようっか？夏哉君決めてる？」

「全く。ここ選んだの俺だけど、こういうとこ来たことないからな」

昔にこんなところ来たらあちこち壊し回ってると思うし。

「私は中学の卒業旅行以来かな。確かあのときはジェットコースターに乗ったよ」

「あぁね。じゃあそこでいい？」

「うん」

手を繋いで、ジェットコースターのあるところに歩いていく。

手を繋ぐのはそろそろ慣れてきた。

ぷにぷに柔らかい。

「そういえばさ、俺中学のお前よく知らないんだけどさ、どんな感じだったの？」

「……夏哉君、私の汚点をどうして簡単に聞いてくるかな？」

少しあきれながら、ジト目で睨み付けてきた。

「え？お前汚点なんてあったの？」

「え？」

「え？」

お互い顔を見合わせたまま固まった。

あれ～、なんか……あれ？

「あ、か、香苗さん。取り敢えず、時間とかもあるから、歩きながら話そう」

「う、うん」

硬直状態から脱し、歩き出した。

「えっと、まず俺からでいい？」

「うん、いいよ」

「じゃあ聞くけど、香苗ってさ、実は俺とか沙鳥とかと同じでなんかあった？」

「そ、そんな大袈裟なことはないけど……勉強出来るから、それ目当てでしか近づいてる人がいなくて、友達誰もいなくていつも一人

で過ごしてたんだけど……。多分だけど、私こんなにちっちゃいのにどうして頭がいいんだ？気持ち悪い、とか思われてたんだと思う。でも苛めとかはなくて、なんか自然に私は疎外するって暗黙の了解が流れてるらしく……。言って、なかったっけ？」

「全く。あぁでも、友達がいないってのは聞いたよ。いやぁぁ、ただ引っ込み思案だから出来ないとかって思ってたんだけど……」

「あの、秘密にしてた訳じゃなくてね、その、言ってたつもりだったんだけど～……。ごめんね」

「別に謝んなくていいけどさ。いや～、知らなかったな。沙鳥は知ってんの？」

「あ、うん。かなり最初の頃に」

「ズズッ、酷いや。やっぱり香苗は俺より沙鳥を選ぶのね……」

「ちょ、ちょっと色々ツッコ見たいことはあるけど！ひとまずゴメンねっ！私は夏哉君選ぶからぁ！」

「ありがと。あ、それから」

「ん？どうしたの？」

「俺は絶対謝らないからな」

「うんっ、ありがとう」

「どういたしまして。それで、香苗さん、もうひとつ聞いていい？」

「なぁに？」

「ジェットコースターどこにあるの？」

「えぇっ！？それ聞いちゃうの！？」

結果として、並ぶ時間より探す時間の方が長かった。

俺たちの番まで回ってくる。

「香苗さ、こういう絶叫系って平気なの？」

「ん～、かなり怖いけど、嫌いじゃないって感じ。夏哉君は？」

「俺乗ったことないからな。でも、それこそ俺だぜ？平気っしょ」

大っぴらには言えなかったけど、それで香苗には通じ、苦笑された。

「そういう人ほどさ、実は一番わーきゃー言うんだよね」

「おま、香苗の癖に生意気～」

ほっぺをむに～っと引っ張る。

「うぅぅ～、暴力はんたぁ～い！」

「脅迫はんたーい」

「……沙鳥ちゃん、アンさん、ごめんなさい」

たぶん頭の中に二人の姿が浮かんでるんだろう。

そんな俺たちを、訝しげに見る人がいた。

ここの従業員だ。

香苗、と肘で小突いてやると、香苗もそれを理解して学生証を取り出す。

そして従業員とのすれ違い様に学生証を見せる。

「高校生です。今日は学校がお休みなので」

そういうと従業員は驚き、しかし納得して笑ってくれた。

「そうですか。楽しんでいってくださいね」

そう見送られ、ジェットコースターに乗った俺たち。

真ん中より少し後ろの席で、俺が右側で香苗が左側。

「夏哉君、怖い？」

「いや、怖いって言うよりは緊張してる。もう心臓はバクバク」

「怖かったら私の手繋いでもいいからね」

「ちっちゃい子を頼りにするとか、なんかプライドが許さないんだけど」

「ふっふっふ～、その減らず口がいつまで続くかな～？」

いたずらを仕掛けた子供のような笑みを浮かべる。

あんまり見ないような顔だ。

そうしてるとジェットコースターが動き出した。

徐々に徐々に高度が上がっていく。

ま、前が見えねぇ。

「香苗、これっていつ落ちるの？」

不安になったから隣に聞いてみる。

もちろん答えが帰ってくるとは思わない。

すると、香苗はクスッと笑った。

「やっぱり聞いてきた。えっと、この速さであそこまでの高さだと……あ、うん。カウントダウン行くよ？」

え、こいつ分かるの！？

俺が思っているのを余所にカウントダウンを始める香苗。

「六、五、四、三、二――」

ブオッ！！

「うあぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！！」

突然視界が変わり、前から力が加えられた。
体が宙に投げ出される感覚に陥る。

スピードも徐々に上がってきた。

「きゃあああああああああっ！うわあああっ、うわあああっ！！なあああああああああっ！！」

隣もすごい叫び声をあげている。

手を繋ぐとか言ってたけど、それどころじゃない。

この速さで右に三周するときは死ぬかと思った。
俺はこの時凄い叫び声をあげた。

ジェットコースターは終着し、少しふらふらになりながら降りた。

「あぁ、楽しかったね夏哉君」

隣にいるちっちゃい子は、何故かニコニコだった。

「香苗さん、マジですか？」

「マジですよ？なんで？」

「あんなに悲鳴あげてたのに？」

「夏哉君これは絶叫マシンなんだよ？声あげない絶叫マシンはもは

や絶叫マシンじゃないでしょ」

俺たちはここを出て、適当に歩く。

「香苗ちょっと興奮してる？」

「う～んと、多分してるね。こういうのそれなりに好きだし、夏哉君と一緒だし」

香苗は顔を赤くしながら笑った。

可愛いやつだなこんちくしょう。

「それにしてもさ」

「ん？」

「夏哉君、？平気っしょ？とか言いながら、すっごい絶叫してたね」

「う、うっせえ！てかお前！あのカウントダウンなんだよ！？やるんだったら正確にやれ！中途半端にずれて心の準備が出来なかったじゃねぇかッ！」

「えぇ？別に私は、夏哉君に思いっきり叫んでほしいからわざと一、二秒ずらしたってことはしてないよ？」

なんとも白々しく、指を顎に当てて言ってきた。

「香苗ひでぇ。この腹黒女！」

「もうどうでもいいもん。ねぇそれよりさ、今度はあの船乗ろうよ

っ」

指差したのは、船で周遊を目的としたアトラクション。

「了解。じゃあ行くか」

「ん、ん～！楽しかった～」

俺たちは今、園内にあるレストランで昼食を摂っている。
俺はスパゲッティとグラタンで香苗はピラフだ。
真ん中には二人で食べられるように唐揚げとフライドポテトがある。
午前中はそれなりに回り、ジェットコースターと遊覧船以外にお化け屋敷に行ったりパレード見たりと充実していた。

「そうだな。楽しかった。ここで言ってはいけないこと言っていい」

「なになに？」

「沙鳥とかアンとかと一緒に来たらもっと楽しいだろうな～」

「夏哉君ひどいよっ、とかは言わないよ。私も同じこと思っちゃったし」

「思っちゃったんだ」

「うん、思っちゃたの。私たちライバルなのにね」

「でも友達なんだから、普通なんじゃないの？」

「うん、そうだね。普通だね」

香苗は笑いながら、パクっとピラフを一口含んだ。

「香苗、それ一口食っていい？」

スプーンでちょいちょい、とピラフを差す。

「いいよ」

「サンキュ」

俺は手を伸ばしてピラフを掬おうとするが、それを香苗に止められた。

「あ、ごめんっ、ちょっと待って」

何かいいことを思い付いたのか、ニヤニヤしている。

香苗は自分のスプーンで掬うとそれを俺に向けてきた。

「ほ、本気ですか？」

「本気です。ほら、あ～ん」

それは俺の口許まで延びてきて、口が開くのを今か今かと待っている。

これ、予想以上に恥ずかしい。

香苗がちっちゃいからという理由を抜いても恥ずかしい。

彼氏彼女はよくああ言うことができるな。

自分の顔が赤くなって行くのが分かる。

しかし香苗は意外とがんこ頑固だから俺の抵抗なんて聞いてくれないんだろう。

仕方いので観念して食べさせてもらった。

パクっと一口。

「どう？」

「まぁ、上手いよ」

「そっか、よかった」

自分が作ったわけでもないのに嬉しそうだ。

俺は恥ずかしいと言うのに。

「香苗、スパゲッティとグラタン、どっち食いたい？」

「え？」

ポクポクポクポクチーン

「わ、わたしもっ？」

「当たり前」

「う、えっと……」

キョロキョロと周りを確認する。
少しでもこっちを見ていませんようにという願いが込められているのかも知れない。

「じゃ、じゃあ、グラタン、で……」

「はいよ」

そう言えば香苗は、これを否定するという考えは持ってなかったのか。
ずいぶん素直だった。

そんなことを考えながらスプーンで一掬いする、が気付いた。

このグラタンはまだ熱々だ。

うん、しょうがない。
しょうがないんだ。
火傷しないように、だもんな。

香苗に運ぼうとする手を戻し、グラタンに息を吹き掛ける。

「え、ふぅふぅっ？」

「だって熱いだろ？火傷しないようにな」

「なんか……ふぅふぅ凄い恥ずかしい気がするんだけど、気のせいかな？」

「気のせい気のせい。よし。はい、あーん」

「あ、あ～ん……」

顔を赤くしながら一口。

「どう？熱い？」

「え、えっと……顔が熱いです」

「お、上手いこと言うね。じゃあグラタンもう一口」

「待って！もう限界！！もう色々熱いから嫌だっ！！」

手と顔をブンブン振って断った。

これで俺の恥ずかしさを思い知ったか。

「酷いな、香苗は。俺の料理が食べられないのか……」

「それ夏哉君が作った料理じゃないでしょっ！」

「熱いのが嫌だって言うなら今度はスパゲッティ？」

「そういう問題じゃないよっ」

俺たちがボケとツッコミを繰り返していたら、周りから声が聞こえ

た。

「あらあら、仲がいいわね～」

その声で俺たちは一旦止まり、声のする方向へ顔を向けた。

すると、三十代前半の女性三人がこちらを見ていたことに気がつく。

あの言葉は、俺たちを見て言った言葉かもしれない。

視線が交わったので軽く会釈をする。

「知り合い？」

「いんや全く。ただ視線があったから」

「そっか。でもあれ、私たちに言ったのかな？」

「こっち見てたしな」

「そっか、仲良く見られて――」

「本当に仲の良さそうな兄妹だよねぇ」

香苗の言葉を遮り、向こうの女性は言った、言ってしまった。

こ～れは、ちょっと……ねぇ。

ちらりと香苗を見ると、テーブルに思いっきり伏せていた。
時々肩が震えてるから泣いているのかもしれない。

「あの、香苗？だ、大丈夫か？」

「どうせ、どうせ私はちっちゃいよっ。でも……兄妹だと結婚できないじゃんっ！」

「え、そっち！？」

ちょっと違うところでお悩みの香苗。

こんなところでうーうー言われても周りに迷惑がかかるのでちゃっちゃと食べるように勧めてここを出た。

そしてその後ちょっと遊園地で遊び、そこから出た。

次はショッピングに行く予定。

「香苗、最後に行きたい所があるから、時間余裕持たせていいか？」

「最後？いいよ別に。夏哉君、何買うの？」

「アクセサリー。もっと言えばネックレス、かな？」

「へぇ、夏哉君珍しいね。そう言うの着けないと思ってたんだけど」

確かに俺はそう言うのを一切着けない。
でも今回買うのはちょっと特別。

「まぁね。じゃ、手当たり次第行くか。来るとき行きたい場所とか見つけた？」

「うぅぅん、見つけたけど、駅の近くだからな。最後になっちゃうかも。夏哉君はどこら辺のお店なの？」

「俺も駅前。さてどうしようか？今時刻は二時七分前。電車は三時一分。だいたい一時間だけど、このまま駅に向かって、ちょくちょく店を冷やかしに、でいいか？」

「それには賛成だけど、冷やかしはやめなよ」

「はいはい」

「結局、残り二十分で、入った店は七件、買ったのがソフトクリームひとつ」

「お店の皆さん、ごめんなさい」

涙を浮かべながらペロリとアイスを舐める香苗。
食べるの遅いな。
俺はもう食べ終えた。

「香苗、早く食べちゃえよ。俺の行きたい店近いんだから」

「うん、あ、でも時間的にこれが最後かな。じゃあ私のはいいや。次夏哉君の行きたいお店で最後ね」

「どーも。でも多分大丈夫だと……あ、あれだあれ。もしかしてさ、香苗が行きたい店ってあそこ？」

俺が指差す先には『茜色』とかかれたアクセサリーショップの看板。

「え？あ、うんっ。あそこだったけど……夏哉君も？」

「そうだよ」

「お、同じ場所だったんだ」

その言葉には、少しの驚きと多くの喜びが混じっていた。

「言っておくけど、これは偶然でもなんでもなく、香苗がこっち来るとき一番長く止まった店だからここ選んだわけ。買ってあげるよ」

「え、う、うそっ？そんなこと覚えててくれたのっ？」

「いや、実はもっと種明かしすると、駅からバスに乗らないで歩いていこうって言ったのはさ、香苗の好きな店知りたかったからなんだよね」

「そ、そうだったんだ……」

香苗はちょっと下を向き、きゅっと繋いでる手を強く握った。

「あ、ありがとう夏哉君……」

「お礼は言わんでいい。この後怒られることするから」

「へ？」

驚いている香苗を余所に、店の中に入った。

そして迷うことなく、外に展示されていたやつと同じのを選び、その後四つ他のを選んだ。

「え、五つ……って」

香苗は気付いたようだかそれを無視してレジに持っていく。

お会計１０５０円。

今月生きていけるかな。

「じゃあ香苗、ちょっと外に出て」

「え？あ、ちょっと待って！私も一個だけかうから」

そう言って香苗は俺に見せないようにひとつ買った。

で、俺たちは外に出てベンチに座った。

「では香苗さん」

「は、はい」

俺は袋からひとつ取り出した。

それはさっき言った通りのネックレスで、長方形の中に星が浮かび上がっている。

「香苗が見てたのとは違うけどさ、こっちの方が似合うなぁと思って」

「そうかな？理由とかある？」

「あるけど、怒られそうで怖い」

「えぇ？怒らないから教えてよ～」

じっと見つめられた。
そうなると俺も弱い。

「星は、ちっちゃいながらも凄い綺麗だから、香苗とおんなじだな～と」

「あ、ええ、うぅぅ……」

香苗は顔を真っ赤にして逸らしてしまった。
俺も同じだ。
言ってて恥ずかしくなった。

ちっちゃいと言って怒られるかと思ったが、それどころではないようだ。

「そ、その、考えてくれて、ありがとう……。嬉しいよ。だから、えっと……つけて、くれないかな？」

香苗のお願いに、俺は頷いた。
首に手を回し、星のネックレスをつけてあげる。
「えへへっ、ありがとう」
赤くしたまま、お礼を言われた。
凄い可愛かった。
「どういたしまして。じゃあそろそろ――」
「あ、待って！私も」
香苗は慌てて俺を引き留め、自分で買ったネックレスを取り出す。
どうやら俺が買ったのとお揃いのようで、違うのは星ではなく十字架というところだけ。
「えっと、神のご加護がありますようにって意味でこれ買ったんだけど、どうかな？」
めっちゃ嬉しかった。
でも照れもめっちゃあった。
「神の依代が言うんだから、説得力あるな」
だから軽い風に言った。
そんな俺を見て、何も言わないけどふふっと笑った香苗。
照れ隠しと気づかれたのかもしれない。

「夏哉君、首出して。つけてあげる」

言われた通りに首を差し出すと、腕を回してつけてくれた。

「ありがと」

「どういたしまして」

「じゃあ、もういいよな？」

「うん」

俺たちは駅に向かった。

「ところでさ、沙鳥ちゃんたちには何買ったの？」

「……やっぱバレてた？」

「それはもう」

「怒ってる？」

「全然」

「そっか」

「で、何買ったの？」

「香苗と同じネックレス。沙鳥は太陽、アンは月、真樹は雫、空ねぇは炎」

「意味とかは、ある？」

「沙鳥は、明るくて人を暖かくするように笑うから。アンはクールで、ちょっと高貴な感じで、暖かいって感じじゃないけど明るく光ってるから。真樹は、冷たいときもあるけど結局は暖かく包んでくれるから。空ねぇは……炎が好きそうだから」

「姉様のだけ適当」

「だって空ねぇのこと全然知らねぇし！」

「そうだけどさ……。後、真樹ちゃんのってその理由だと雫というより、お風呂？」

「うっせぇコノヤロウッ」

香苗に色々と指摘されながら、俺は色々と反論しながら電車に乗って麦谷町に帰った。

第六話　《九章》初デート（後書き）

夏哉「おい作者、今回なんか投稿遅いぞ。どうした？」

作者「いや～、いつもは夜頑張って、十二時近くに投稿してたんだけど、今日に、いや昨日に限ってめっちゃ眠くなってな。書けなかった」

アン「もっと早く投稿しろ！そして私の出番をもっと出せ！！」

夏「えっと、アン？主人公の俺が言えることじゃないけどさ、出番が少ない子もいるわけでさ」

ア「あ」

真樹「……」

ア「その、謝ってくるな」

作＆amp;夏「「行ってらっしゃい」」

作「さて、ようやくデートは終わったけども」

夏「ようやくって、実際デートしたの一話だけじゃん」

作「細かいことは気にするな。それで、次回から話は動き出します。和やか一転です」

夏「今までの、特に前回の話は和やかだったか？恐怖で泣いた人が

いるじゃないか」

作「あれは……本当なんであんなの書いたんだろう？テンションは平常だったと思うんだけど」

夏「俺は知らん」

作「あ～まずいまずい、そろそろおかしくなってきたか？」

夏「もともとおかしいだろ」

作「うるさい！てかもしそうなら！おかしいやつから産み出されたお前もおかしいやつだろ！」

夏「あ、俺特別変異なんで。だから異常なお前から平常な俺が生まれちゃったんだよ」

作「なわけあるか！！」

夏「はいはい、じゃあそういうことにしておこうな」

作「なんでガキをあやすような風に言うんだ！？」

夏「お前がガキだからだ。それより、空ねぇ、ファルコさん、Ｃｏｌｏｒｆｕｌさん感想ありがとう」

作「なんか話変えられた気がするけど……まぁいいや。みんな！オラに評価をちょっとずつ分けてくれ！」

夏「評価は分けるもんじゃないけどな」

作「うるさい！黙れ！！」

第六話　《十章》発見

俺たちが麦谷町へ戻ってくると、一本の電話が入った。

『あ、もしもし？柊？』

灯里だった。

「はい、何？」

『えっと、今お邪魔じゃないかな？』

チラリと隣に目を向ければ、どうしたの？という目を向けてきた。

「まぁ、今帰り途中だから平気だ」

『そう、それならいいんだけど――あ、こら、るあちょっと待って！ちょっと、ゴメンね。るあうるさくて』

「いいよ気にしなくて。ところでどうした？」

『えっとね、私たち今寮に向かってるんだけど、そっちはどうかなって。もうこっちに着く電車は来てると思ったんだけど、大丈夫そう？』

「全然平気。後十五分くらいで着きそうな距離だから」

『あ、寮に？私たちもそのくらいだから案外近くかもね……あぁはいはい。柊、るあに代わるね』

「はいよ」

『もしもしっ？おにいちゃんっ？』

「そうだよ」

『あのねっ、るああかねぇといっしょにいまからおにいちゃんのところにいくの！』

「うん、知ってるよ。もしかしたらるあちゃんが先にお兄ちゃんの家に着いちゃうと思うけど、ちょっと待っててね」

『うんっ。……えぇ～。……はぁい。おにいちゃん、あかねぇにかわるね』

「うん。またね。るあちゃん」

『ばいば～いおにいちゃん。……じゃ、そういうことだから、私たちゆっくり行くつもりだけど、先についちゃったら自分の部屋にいるから電話してほしいんだけど』

「了解。んじゃあな」

「はい」

電源ボタンを押す。

「峯岸さんから？」

「そ。もう少しで着くって」

「じゃあもうちょっと急いだ方がいいかな？」

「いや、向こうゆっくり行くって言ってたし、るあちゃんがいるから早くいけないでしょ」

「そうだけど、準備とか必要じゃないの？」

「一応来る前に整理したんだけどな～。アンも今沙鳥のとこだから動かしてないだろうし」

「いやいや、おもてなしとかは必要じゃないの？」

「るあちゃんの場合は、おもてなしより遊んで～っていうと思う」

「それもそうだね」

俺たちは苦笑した。

いつも通りで、なんて言ったけど、やっぱり二人を待たせるのは気が引けるので少し歩を早める。

すると前方、四人の影が見える。

少し距離が近づくとその内二人に見覚えがあることに気付く。

灯里とるあちゃんだ。

仲良く手を繋いでいる。

そしてその後ろ、俺から見れば手前側にもう二人。

二人とも髪が長く、金髪と薄い緑。

一見すればあの二人の知り合いなんだろうと思う。
しかし俺はそんなこと聞いていない。
もしかしたらどっきりさせる為かもしれないが。

しかし、問題はそこではない。

灯里とるあちゃんの後ろにいる二人。

二人は宙に浮いていないか？

「香苗」

俺は咄嗟に香苗を引いて電信柱の影に隠れた。

「峯岸さんの後ろにいるのは、普通の人じゃないよね？」

香苗もしっかり見えていたようで、俺に確認してきた。

ポケット空携帯を取り出す。

「普通さ、知り合いだろうと傍で浮いてて何も言わないってことはないよな？」

「うん。少なくとも私は無反応ってことはないよ。それ以前に二人

とも目に入ってないみたいだし」

「じゃあ……魔族、とか？」

香苗はいくつかボタンを押して耳に当てる。

「多分。今沙鳥ちゃんに電話してアンさんに来てもらうから」

「頼む」

周りの通行人に不信がられないように気を払いながら、魔族と思われる二人を見る。

その内の金髪の方が振り返ると、手をかざす。

俺に向けてではなく、他の通行人に。

その手のひらから炎が生成される。

まさか……

最悪な想像が浮かび上がった。

そしてその想像が現実となる。

炎が噴射していく。

「クソ――」

「待って！」

ガシッと香苗に腕を掴まれる。

「大丈夫。私を信じて」

香苗は真剣な目で俺を捉えた。

そう言うにはちゃんと根拠があるんだろう。

俺は力を抜いて成り行きを見る。

炎はどんどん通行人に迫っていき――すり抜けた。

「あぁ、そうか」

気付けば簡単だった。

あの炎は魔法で生成されている。

人間の魔法なら露知らず、魔族の魔法ならこの世界に干渉出来ないということだ。

パタッと携帯を閉じる音が聞こえた。

「あの魔族の人、無差別に魔法を放ってるってことは、多分あれに干渉出来る人を探してるのかもしれないよ」

香苗が自分の推論を話す。

「干渉って、俺ら？でもなんで？」

「夏哉君、一ヶ月前魔族のかなり偉い人倒したよね？」

それを聞いて思い出すのは、タクノムのことだった。

俺とあいつは、文字通り死闘を繰り広げた。
最後には多少分かりあえたけど。
それで思い付くのはひとつ。
「復讐？」
「が、可能性高いかも」
じゃあ狙いは俺の可能性が高い。
「香苗さ、灯里たちのことなんとかしてくれないか？俺あっちに行くから」
「え！で、でも！」
「向こう手当たり次第やるってことは、いつか俺らにも攻撃してくるってことでしょ？俺はなんとかなってもお前無理――」
？だろ？？と言いたかった。
しかし、そんな暇はなかった。
向こうが俺らに気がついたんだろう、こちらに炎が向かってきた。
香苗を引っ張ってその軌道から逃れる。
すると向こうに反応があった。
二人はこちらを睨み付ける。

その時初めて二人の顔が見えた。
髪が長いから女性だろうと思っていたが、実際女性だった、
魔族からなのか、どことなくアンに似ている。

「アンタ！今私の奇法が見えてたわね！？」

金髪の方が叫ぶ。

それを無視して香苗に呟く。

「お前は見えてないふりしてろよ」

小さく頷いた。

ダンッと、俺は後ろに向きを変えて走り出す。

「な！？ちょっと待ちなさい！！」

肩越しに見ると、二人は追い掛けてきてくれた。

話し合うにしても、戦い合うにしてもこんな人目の着く場所じゃ大
騒ぎになってしまう。
人目のない場所を目指す。
しかしここに来てまだ二ヶ月ほどなので、完璧というほどの土地勘
はない。
ぐるっと首を回して、ありそうな場所はと言えば、少し離れたとこ
ろにある小さな山。
大きな丘とも呼べるかもしれない。
木々も生えているみたいだし、人の目は滅多にないだろう。

そう決めて、どう行こうか悩んでいると、

「待て、って言ってんでしょうがゴミがッ！！」

金髪が叫ぶと、目の前に道を塞ぐほどの岩の壁が出現した。
たまにバチッという音がしていて、紫電が走る。

「借りるぞ！」

今度は薄い緑の髪の人が言った。

目の前の壁からボコボコと小さなでっぱりがたくさん出てきて、俺に射出された。

俺はそれを無視してツッコんだ。
流石に顔や、食らったら死ぬだろうと思うつぶては弾いたり避けたりする。

つぶての当たる鈍痛や、電流の突き刺すような痛みが襲うが耐えられないものではない。

「えっ！？」
「な！？」

俺の行為に驚きの声をあげる二人。

俺はそのまま壁に近づき、全力で蹴る。
極少人数にしか聞こえない轟音が鳴り響き、壁が崩れ去る。

徐々に消えていく岩の壁を越えると、尻餅をついている人がいた。
水色の長い髪に竹刀袋を下げている女性。
心当たりはある。

「そ、空ねぇ？」

「へ？あ、夏君っ！！こんなところで会え――」

いつも通り飛び込んでくるんだろう、と少し身構えるが、空ねぇは固まっている。

「あぁ！ゴメンナサイ！！なぁちゃん！別にね、私がここにいるのは奇跡的偶然なの！！故意は全くないのっ！！ほんとだから！本当だから！！だから許してっ！！ちゃんと抱きついたの我慢したからっ！！」

ここにはいない香苗に何度も許しを請おうとしている。

そう言えば沙鳥とアンが香苗の嫉妬心全開の感情をぶつけられたのなら当然、最近傍にいる空ねぇにも食らっているはずだ。
ごめん空ねぇ、フォロー入れるの忘れてた。
でも、家が分からないからしょうがないよね、という言い訳が思い付いたが、それどころではない。

「空ねぇ！すぐ逃げて！！」

「え？ど、どうしたの？えっと、さっきの岩の壁に関係ある？」

「大有り」

チラッと後ろを振り向けば、二人が話している。
なんかの相談をしてるんだろうか。
でも今はそんなこと考えてる暇はない。
「あいつら今俺を狙ってくれてるから、早く逃げて」
まずは空ねぇを安全なところに向かわせないと。
「夏君を？」
ピクッと肩を震わすと、肩に掛けた竹刀袋を手にする。
その中から一振りの木刀を抜いた。
「おいちょ、空ねぇ？」
「ふふっ、夏君を狙う人は許さない」
そんなヤンデレみたいな台詞を言うと、あの二人に向かって駆け出した。
その途中で木刀が真剣に変わる。
「な！？ちょ、ちょっと！こんな道端で――」
叫んでいる途中に気付いた。
誰もいない。
まだ人が出歩く時間だというのに、俺たち四人以外誰もいなくなっ

ていた。

――――――――――――

アタシたちは驚きを隠せなかった。
しかし同時に確信も得ていた。

アタシが放ったつぶては、確かに威力は低い方だ。
しかしそれなりに速さも出ていて、何よりネハラの電気が付加している。
普通魔族でも動きは止まる筈だ。
それなのに怯むことなく突き進み、なおかつネハラの創った壁を体ひとつで一撃で壊せるなんて、この世界で出来るとすればそれはあの《偉大》を倒したナツヤに違いない。

「ヤチク、あいつよね？」

「アタシもそう思う。黒に少し跳ねている髪、高さ的にも近い」

「でもお姉様は見えないようだけど、どうする？どっち優先させる？ああ！どうして私の体はひとつしかないのよ！」

「まぁ待て。まずあいつを優先させて、あの首を持ってクーお嬢を驚かしてやろう。きっと喜ぶぞ」

「喜ぶ……」

その姿を想像しているのだろう、若干顔がにやけている。

おそらくアタシも緩んでいるだろう。

そう思っていると、前から一人の女が刀を持って走ってきた。

アタシたちは一瞬で顔をもとに戻す。

普段ならあんな人間、アタシたちに触れることは出来ないからどうってことはないが、ナツヤという例外がいるし、何よりこちらに殺意を向けている。

アタシたちが見えてるんだろうし、殺せると思っているんだろう。

ネハラが雷(いかずち)を落とす。

それを見て無数の水弾を放つ。

水弾に威力はない。

その目的はただひとつ、雷の威力範囲を広げるため。

当たってダメージを食らうもよし、打ち消しても濡れて感電でもよし。

とりあえず損は何もない。

そう思っていたが、女は叫ぶ。

「ｉｎｖｉｄｉａ(レヴィアタン)！」

すると橙色の光が刀を包み、大きな鎌へとなった。

前後に刈り取るための刃がついている。

それを一振りすると、それに触れたものが消えていく。

雷さえも。

いや、消えるのは少し違う。

相殺されたのだ。

あんな鎌一本に。

驚きのあまり固まってると徐々に迫ってくる。

女は鎌を水平に振りかぶったのを見て、慌てて盾を張る。

ガキンッ！！

防いでほっとするのも束の間、女の鎌は消えていて、元の刀を振りかぶっていた。

ブンッと振りかぶる直前――

「まてぇぇぇぇッ！！」

そんな声が聞こえたと思ったら、突き飛ばされた。

突き飛ばした正体は――

アタシたちの憎むべき人間だった。

第六話　《十章》発見（後書き）

沙鳥「おぉ、ちょっとバトル始まったね～」

香苗「そうだね。私もう出番無さそうだけど……」

沙「私だってさ魔族との戦闘は無理そうだし。多分出番ないね」

作者「まぁそんな落ち込まないでくださいよ。次があるから。次は文化祭だから」

香&沙「「はぁい」」

作「あ、そうだ。少し補足説明をします」

沙「補足説明？珍しいね」

作「まぁね。で、この話でネハラが一般人に魔法放ったじゃん？で、通り抜けた」

香「うん」

作「でもアンは真樹に幻術かけられるじゃん？」

香「それって、真樹ちゃんが魔法使えるからじゃないの？」

作「確かに体内に魔族の一部が入ってるけどさ、それは微々たるものだから、向こうが干渉できる程じゃないの。だから、どうしてアンが魔法かけられたかというと、こっちの世界に干渉できるからね。

もし干渉モードをオフにしたら、ネハラ同様魔法は人間には干渉しません。一部除く」

沙「はいはい！ついでだからちょっと質問」

作「はい、天雲さん」

沙「人間の使った魔法は魔族に通用するの？通用するのは私とか夏哉みたいな人だけ？」

作「いいえ。人間の魔法というのは、人間の科学で魔族に干渉出来るようにして、その魔族の一部を薬品として人に飲ませることによって、力が使えるというものになっています。つまり人が使う魔法は、魔族の遺伝と人の科学が混じったもの。だから人と魔族に干渉できるのです。分かりました？」

沙「分からないので後でカナに教えてもらいます」

作「テメェ……」

香「あ」

沙「どうしたの？」

香「今思うと矛盾があるな～って」

作「え、嘘！どこ！？耳打ちで！！」

香「えっとね、ゴニョゴニョゴニョゴニョ」

作「あ、それ絶対言うなよ。色々ネタバレとかそういうのになりそう」

香「はぁい」

沙「えぇ、何々?教えてよ〜」

作「ソラトさん、ファルコさん、空ねぇ、感想ありがとう!!またよろしくね」

沙「ちょ、無視すんなぁ!」

第六話　《十一章》人の幸せ

捉えた。
まずは一人。

そう思って振り上げた刀を振り下ろす。

しかし、

「まてぇぇぇぇッ！！」

夏君の叫びが聞こえたと思ったら、そこにいる人たちを突き飛ばした。

そして私の刀は虚空を切り裂く――ことはなく、

「イッ！？」

夏君の背中を斬った。

幸い斬った手応えは全然なかったので皮一枚とかその程度だと思う。
しかし、斬ったことは代わりない。

そして、一番驚いたことはそれじゃない。

夏君は、敵である二人を庇ったこと。

「なつ、くん？どうして……」

理解が出来ずに言葉を漏らすと、夏君はこっちに近づくと私を抱えて驚異的な脚力で跳んで電柱のてっぺんに足をつける。
そしてまた跳躍。

かなり高いところまで到達したら、魔法を使ったんだろう、宙に浮いた。

「はぁ、アンに教えてもらってよかった～」

夏君の呟きで我に返った。

「な、夏君！？なんであんなことしたの！？」

「あんなこ――あぁあれか」

「あれか、じゃないよ！どうして敵を助けたの！？」

「敵かどうかは分からないから」

「敵でしょ！？相手は魔族で、攻撃し掛けてきたんだよ！？」

「でも敵とは言われてない」

夏君は、真剣な目で私を見つめる。
それに嘘や誤魔化し等は感じなかった。
あくまで私から見たら、だけど。

「それに、魔族云々ならアンだって魔族だ。お前は知らないだろうけど、タクノムっていう魔族だっていいやつだ。種族が違うってだけで敵にはならないって俺は思う」

「……」

その言葉を聞いて、反論は出来なかった。
出来るはずもなかった。

「それで、あの刀何？いきなり鎌になったり魔法防いだり」

「あっ、あれ？あれ私の能力でね、七つの大罪って分かる？」

「えっと、嫉妬とかそういうやつ？」

「そう。能力の名前は七人の罪断者（アルカンシエル）。その七つの罪のうちひとつだけを刀に乗せて、その状態で切りつけると相手の感覚を罪ごとに消していくの」

私の説明で、夏君は顔を歪ませた。

「ごめん、分かんない」

「さっき、橙色の鎌になったでしょ？あれはｉｎｖｉｄｉａ（レヴィアタン）、嫉妬の罪。あのときに斬られたら固有感覚が五分間だけ消されるの」

「固有、感覚って？」

「簡単に言っちゃえば、気配とか第六感とかそういうの」

「斬られただけでそれが働かなくなるのか？」

「うん。それが罪の数だけね」

「じゃあ何か？そんなのが後六個もあるのか？」

「うん。触覚とか視覚とか。でもね、リスクもあるの。刀に載せられるのは三十秒だけ。その時間内に相手に罪を乗せられなかったら、その罪を私が受ける」

「へぇ、そうなん――ってちょっと待て？空ねぇさっき相手斬ったか？」

どうやら夏君は気付いたようだ。

「斬ってないから、今人の気配とかそういうの全然分からないんだ。ほら、さっき夏君が近づいたの全く気付かなかったし」

「空ねぇ……」

「大丈夫。さっきも言ったけど五分経てば消えるし。それよりもさ」

「ん？」

「後ろ大丈夫なの？私後ろ夏君で見えないんだけど」

私の言葉で夏君が振り返ると、ガクンと私たちの体が重力に引かれた。

その直後、私たちがいた空間を炎が焼き尽くす。

「な、なつく～ん。ナイスだよ～。撫で撫でしてあげようか？」

「なんでこんなときにそんなこと言えるの！？余裕過ぎない！？そしてなんで向こうそんなにタイミングがいいの！？もしかして待っててくれたッ！？やっぱり優しいね！！」

「いや、優しかったら攻撃はしてこないからね」

今だってバンバン雷や炎が私たちを襲う。

夏君の魔法のお陰だろう、ジグザグに動いてそれらを躱していく。

「そ、それはそうだけどさ……」

少し苦そうな顔をした。

指摘はされてほしくなかったようだ。

「というより夏君」

「何？」

「私たち普通に落下してるけど、平気なの？」

夏君は魔法を解いたようで、ずっと下がりっぱなしだ。

大体１５ｍからだろうか？

そこからパラシュートなしでスカイダイビングしている。

「平気平気。空ねぇがちゃんと捕まってたら死なないよ」

「あ、魔法ね。夏君、失敗したら許さないんだから」

「いや、魔法は使わないよ」

「へ？」

夏君は顔色を変えず、世間話するかのように言った。

「いや俺さぁまだ魔法全然だから、避けながら飛ぶってこと出来ないんだよね」

「……はぁっ！？」

我ながらキャラに似合わない声を出してしまったが、それどころではない事態なので気に出来なかった。

「でも大丈夫だから、しっかり捕まっててよ。幸い下は目的の場所だし。ほんと向こうは気が利きすぎてる気がするんだけど……」

いや、どこが大丈夫なんだろうか？

私の知識では１５ｍという高さから落ちたら人はぐちゃっとなって死ぬと思う。

夏君が普通じゃないのは知っているが、流石に不安になる。

ここで死ぬと色々まずい。

想定外過ぎる。

チラリと夏君を見る。

この男は、いや、この男の周りは想定外なことを起こしやすいらしい。

徐々に地面が迫ってくる。

夏君は落下地点を調整して樹が生えていない場所にする。

「衝撃が来ると思うから気をつけて」

「き、気をつけてって言われても……」

私には何も出来ない。

目をつぶって衝撃に備える。

一瞬変な浮遊感を覚えると、すぐ後に凄まじい音が響く。

しかし予想してた衝撃は全くなかった。

目を開けると、空が見えた。

あれ、と思っていると、肩と膝の裏に何かが触れているのを感じた。

「空ねぇ大丈夫?」

「うわっ」

夏君の顔がドアップになった。

ゆっくりと私の足を地面に着けさせてくれた。

「あ、ありがと……えぇぇぇ～」

お礼を言おうとしたが、あるものを見て驚きの声をあげた。

地面が小さなクレーターと化していた。

夏君が着地したからこうなったんだろう。

見たところ夏君の足に怪我はない。

「夏君足平気なの」

「まぁね。それよりあっち――げ？」

夏君が空を見て嫌そうな顔をしたので、咄嗟に後ろに下がる。

夏君もこっちに下がる。

その瞬間雷が落ちた。

上空には二つの人影。

「おぉぉい！そこの魔族の二人！！話があるから降りてきなさいッ！！」

夏君がそう叫ぶと、二人は言うことを聞いて降りてきた。

地面に着地すると、私はようやく二人の顔を見た。

どことなくアンちゃんに似ている。

先に言葉を発したのは、金髪の女性だった。

「アンタ、ナツヤね？」

向こうの狙いは本当に夏君のようだ。

「人の名前聞くときはまず自分から、とか習わなかった？」

「何言ってるの？意味分からないし」

「簡単に言えば、二人の名前は？って聞いてんの」

すると金髪の女性は夏君を睨み付ける。
まるで嫌いなものを気持ち悪がりながら見るように。

「誰がゴミに言うか。私たちの名前が汚れるわ」

「あっそうですか。で？目的は何？タクノムの復讐？」

「ハンッ、誰があんなやつのために動くか。あり得ない」

「全くだな。そんな得にもならないこと。地界のクズに負けた魔族なんて、それこそ死んだ方がマシだな」

緑髪の方が辛辣な言葉を浴びせる。
タクノムという魔族は嫌われているらしい。

しかしその言葉は夏君の琴線に触れた。

「おい、タクノムの陰口はやめろ」

夏君にとってはその魔族も大切な一人ということが伝わってくる。
金髪と緑髪の魔族は、ほしいものを見つけた子供のような笑みを浮かべる。
「そうか。タクノムのことを知ってるということはやっぱり貴様がナツヤなのだな」
「だからどうした？」
「お姉様はどこ！？」
緑髪の女性が確認をとると、怒気を含めた質問を金髪の女性がする。
お姉様とは誰のことだろう。
ここに来てまだ月日が経っていないため、私には分からない。
でも夏君には検討はついたようだ。
「お姉様って、アンのことか？あ、いや、アンじゃ分からねぇか。クーレラの――」
言葉の途中で、音もなく風が吹き抜けた。
夏君が体を傾けると、頬に一筋の傷が生まれていた。
「クーお嬢の名を容易く口にするな」
緑髪の女性が怒りを込めながら言う。

夏君は一歩前に出る。

「で？あいつをどうする気だ？」

「連れて帰る。クーお嬢は魔界にいるべきお方だ。この様な腐った居場所ではない。そして、この腐った居場所にとどめている貴様は殺す。さあ言え！クーお嬢はどこにいる！？」

「取り敢えず最後の質問から答えると、あいつはもうすぐこっちに来る」

「は？どういう意味よ？」

金髪が聞く。

「あいつはな、俺と空ねぇが戦おうとしてるところを見逃すなんて器用な真似は出来ねぇんだよ。アンは必ず来る」

「アン？ふざけんじゃないわよ！！何お姉様をそんな変な名前で呼んでるのよッ！！」

すると地面から夏君ほどの刃が出現し、夏君の左肩に振り降ろされる。

それだけではなく空から巨大な氷柱が三本、回転しながら夏君めがけて落下する。

私は反応できなかった。

向こうが早すぎる。

しかし、

ベキッ!!パリンパリンパリン!!

夏君はまず右の拳で刃を砕くと、そのまま前宙をして、踵で氷柱を砕く。

それを、たったコンマ五秒でやってのけた。

「それから」

息も切らさないで夏君は言う。

「魔界にいるべき？腐った居場所ではない？そんなのテメェラが決めんじゃねぇ。それはあいつが決めることだ。名前だってそうだ。あいつは昔じゃなくて今って呼んでほしいって決めたんだ。だから俺はあいつの決めたことに従う」

夏君はアンちゃんのことを真剣に考えている。

どうすれば幸せになるのかと。

どうしたほうが幸せになるのかと。

「確かにお前らからしたら俺はあいつを奪った最低な男って思われても仕方がない立場なのかもしれない。でも」

そして夏君は知っている。

どうすればアンちゃんが幸せになってくれるかを。

だから動く。

そんな単純なことが、夏君の行動原理なんだろう。

「俺が傷付いたり、死んだりしたらあいつは絶対悲しむ。俺はそんなとこなんて見たくないし、見させたくもない。だから！」

こんな短い間でも、それが分かってしまう。

なんて心の綺麗な人間なんだろう。

だからそんなところを見れる人はみんな夏君に惹かれるんだ。

「お前らの要求には答えられない！あいつは俺を頼った！！俺はあいつを守るって決めた！！もしお前らがそれでもアンを強制的に魔界に帰そうと思ってるなら……」

私は突如生まれた胸の苦しみに左手を当てる。

「意地でも止めてやる！」

――――――――――

香苗からの連絡を受け、私は文字通り翔んで駆けつけた。

一緒にいた沙鳥も家から出たが、魔法を使って空をけにもいかないので走ってくるそうだ。

香苗が言った場所から沙鳥の家までは全然離れていなかったため一分もかからずに着いた。

「香苗！！」

私が呼ぶと、香苗は顔をあげた。

携帯を取り出して耳元に当てる。

「アンさんっ。沙鳥ちゃんは？」

「走ってきてる。ところで夏哉は？」

「それが、魔族を引き付けるってことで荷物おいてあっちいっちゃった」

指を指すが何も見えない。

「あのバカ。一人で行って……」

巻き込みたくないという考えは分かるが、一人でなんとかしようとするのはやめてほしい。

「まぁいい、お仕置きは後にするとして、その魔族はどんなやつだった？」

「二人とも人間っぽかったよ。金髪に薄い緑色の髪をした女のひと。どことなくアンさんに似てたと思う」

「私に？」

私は考える。

魔族が人間の姿になるのは、全くといっていいほどない。
むしろ毛嫌っている。
それなのにそんなことをするのは命令されたからか物好きか。
でも私の中では、もしかしたらという人物が二人浮かんでいる。
「名前は言ってたか？」
「ううん、言ってなかった」
「そうか……」
「おお～い！カナぁ～！！」
私がおいてきてしまった沙鳥が、自転車に乗ってやって来た。
「夏哉は？」
「魔族の人たち引き付けるためにどこか行っちゃった」
「あ～、夏哉らしいね。そういえばアンちゃんさ、魔族が近くにいること気付かなかったの？なんか魔法いっぱい使ってたみたいだけど」
「いや、ここは魔法を使う者が大勢いて、魔法を使う＝魔族という式が成り立たなくなってきてな。基本魔法を使った反応は無視してる」
「そっか～。それならしょうがないね。それより、夏哉追いかけた

方がいいのかな？」

確かに沙鳥の言う通り、夏哉を追うべきだろう。
しかし……

「あぁ、そうすべきだが……でも、お前らは」

「分かってるよアンさん」

香苗が、いや、香苗と沙鳥が微笑む。

「私足手まといだもんね。ついては行かないよ」

「私も、魔法は使えるけど戦闘なんて出来ないし。見送るよ」

「……済まん」

私は香苗の指した方向に行こうとするが、視界の上に小さな影が見えた。
それは空高く跳んでいく。

かなり上まで到達すると、そこから魔法を使う気配があった。

もしかして、あれが夏哉か？

「香苗、沙鳥、夏哉らしきものが空に飛んでいった。私も追いかけてくる」

私も空を飛ぼうとしたとき、両手首を掴まれた。

「アンさん、私の、ううん、私たちのお願い聞いて」
「……なんだ？」
聞き返すが、大方の検討はついている。
「「怪我しないで」」
やっぱりそうだ、二人は予想通りお願いしてきた。
この答えはもう決まっている。
「無理だ」
「えっ」
「あっ」
二人が声をあげるが、聞かない振りをする。
「闘って傷付かないなんて殆どあり得ない。大小違いはあるけど、傷は追う。だから」
私は力を入れて二人の手から逃れる。
そして振り返り、頭の上に手を置く。
「私たちが帰ってきたとき、泣いて怒れ。そして手当てをして、労いの言葉をひとつくれ。それはお前らしか出来ない。だから、頼むな」
「……うん」
「分かった」

「じゃあ行ってくる」

「「行ってらっしゃい」」

今度こそ空を駆け、夏哉であろう影のところまで向かう。

第六話　《十一章》人の幸せ（後書き）

夏哉「皆さん、『四人の魔法使い』を読んでくれてありがとうございます。空ねぇ、ファルコさん、Ｃｏｌｏｒｆｕｌさん感想をくれてありがとうございます」

真樹「どうして最初からこのように真面目かと言いますと、さすがにイベントの日はそうしようという風になったからです」

夏「そうなんです。で、今日はなんのイベントで、誰が主役かと言いますと、まずはこの人登場！！」

作者「どうも～。主役の作者で～す」

真「どうしてこのような駄人間が主役かと言いますと」

作「ひどい……」

パンパン！！

夏＆ａｍｐ；真「「誕生日おめでとう～」」

作「うわ～い、やった～！！」

夏「というわけで、２０１１年三月三十一日は作者の十八回目の誕生日です」

真「しかし、年度末が誕生日だというのは……珍しいですわね」

作「ありがとう。みんなにも？すげぇ？とか？珍しい？とかよく言われるよ。声優さんでは坂本真綾さんとか新谷良子さんと同じなんだよ」

夏「坂本さんは黒執事のシエルで、新谷さんはひだまりスケッチの沙英さんだな」

作「そうそう。誕生日おめでとうございます」

夏「よし、じゃあ取り敢えず食べようぜ」

真「そうですわね。あ、作者。沙鳥様たちにもあげますが、構いませんわよね？」

作「はい、ぜひぜひ」

真「では切り分けて……と。こんなものですか？」

夏「おぉ、上手いもんだな」

真「ありがとうございますわ」

パクパクパクパク

作「ごちそうさまでした」

夏「ごちそうさま」

真「ごちそうさま」

作「じゃあ俺さ、なのはの方にも呼ばれてるから」

夏「ん、いってらっしゃ～い」

作「では皆さん、今投稿中の四作品をお願いします。じゃっ」

夏「皆さんよろしくお願いしま――あれ？なんかちょっと違和感」

真「夏哉もですの？わたくしも若干……」

夏「作者さっき四作品っつったよな？」

真「いいまし――あ」

夏「どうした？」

真「作者、？投稿中の？といいましたわよね？」

夏「ああ」

真「今作者が投稿してる小説の中で、投稿中は三つ！ひとつは完結していますわ！！」

夏「え！？ちょっと待て。それって……」

真「まさかとは思いますが、五作目」

夏「作者あああああああッ！！真樹！！今からあいつんとこ行って聞き出すぞ！！」

真「分かりましたわ！！」

第六話　《十二章》悲劇のヒロイン

「ハッ、止める？何をどうしたら止められる訳ッ！？」

金髪の魔族が叫ぶと、俺に向かって走って、いや飛んできた。

すると一瞬にして消えた。

どこに行ったのかと思ったら、背中に鈍痛が走った。

必死の思いで後ろを見ると、金髪が空ねぇを攻撃していた。

瞬間移動をしたのか？

そう思っていたら、今度は、前から炎が飛んできた。

「ゲッ！？」

慌てて魔法を使って俺の体を逸らす。

炎が足に掠った。

「アガッ！？」

靴は全く焼かれず、しかし足は火傷になった。

そのせいで着地するとき痛みが走りバランスを崩す。

そこに前後から炎と雷がせまってくる。

ダメージの食らっていない足を使ってそれを躱そうと動けば、二つの魔法が軌道を変えて俺を襲ってくる。

躱せないので痛みに耐えようと体を強張らせる。
しかし予想していた痛みは来ないで、バチッという音とジュウウウウという音が聞こえた。
見れば、土の壁と水の壁が二人の攻撃を遮っていた。
「夏哉ッ！！」
空から声が降ってきたので見上げる。
一人の金髪の少女も、俺に向かって降って来るような速さで降りてくる。
アンは俺の傍で着地すると、すぐに俺を気遣い始めた。
「夏哉、大丈夫かっ？怪我はしてないか？」
意地を張ってもなんにもならないので素直に言う。
「足が少し焼けた。つっても火傷程度だから今すぐまずいってわけじゃない」
「しかし！！……クッ。おい貴様ら、名を名乗れ」
アンは俺の足を見て苦虫を潰すような表情を浮かべながら魔族二人に言う。
顔は上げない。
二人を見れば、恭しく頭を下げる。

「我が名は《義妹》、ネハラと申します」

まず金髪の魔族が言う。

「我が名は《愛憎》、ヤチクと申します」

次に薄い緑の髪の魔族が言う。

「やっぱりお前らか……」

俺の予想通り三人は知り合いの様だ。

「クーお嬢様、貴女様をお迎えにあがりました」

ヤチクと呼ばれた魔族はそのままの状態でアンに告げる。

「そんなのはいらない。私はそっちに帰るつもりはない」

それに驚いたのか、ネハラと呼ばれた魔族が顔を上げて驚く。

「な、どうしてですか!?」

「向こうに行って何があるわけでもないし、第一私は神に逆らった身だ、殺されるのがオチだろう」

「そんなことはありません!!アルクシア様はお姉様を生かして捉えろという命を下しました!それはお姉様の命が大切だからです!!」

「なるほど、おお前らの目的は私か」

「その通りです」

「じゃあ何故夏哉を狙った？私が狙いなら夏哉に攻撃する必要はないよな？」

「アルクシア様に許可をいただきました。お姉様をここへ留めておくだけではなく変な名前を付けた――」

ネハラの言葉の途中で、アンは一瞬で創った炎弾を放つ。

ネハラはそれを寸でのところで躱した。

「夏哉のつけた私の名を侮辱するなよ？」

言葉は静かに、しかし殺気を込めながら言うアン。

それに対しヤチクが激昂する。

「何故ですかクーお嬢様！！どうしてこの世界にそこまで執着するんですか！？クーお嬢様はこの世界では異端ではありませんか！？それなのにどうしてアタシたちの世界で自由に生きるより縛られた世界で生きようとするんですか！？」

向こうも向こうでアンのことを想っているのだ。

少しでもアンが快適に生きていけるようにと。

でも、想っているから俺たちと衝突する。

「お前らが私のことを想ってくれてるのは分かる。普通だったら大切な人がわざわざ違う世界でつらく生きていこうとしてたら少しで

も楽に生きてほしいと思うだろうな。だが、生憎私は普通じゃないんだ。私はな」

アンがチラッと俺を見る。

「自分の世界で何も縛られずにただ退屈に生きていくよりも、全くと言っていい程何も出来ないこの世界で夏哉と一緒にいて、夏哉を愛する方がいい。それがなくなる自由なら私はいらない。私に触れられない世界の方がいい」

ネハラとヤチクは唖然としながら聞いていた。

信じられないだろう。

アンの口からあんな言葉がでてくるのは。

「もしお前たちが納得出来ないなら気が済むまで殴れ。いくらでも甘んじて受ける。その代わり夏哉と火津那には手を出すな」

「「……」」

二人は少しの間沈黙を保った。

しかし。

「あはっ、あははは」

「ふふふふっ」

「あはははははははははははははははははははははははははははははッ！！」

「ふはははははははははははははははははははははははははははははは

ッ！！」

突然二人は笑い出した。

俺は何をしてくるか分からずに警戒する。

「あぁそうか、そういうことなのか。つまりあれだよなネハラ」

「ええ。お姉様は操られているのよ！！あの人間風情な生き物が！！」

二人はアンが自分たちにつかない理由を俺に擦り付けてきた。

二人の目は正常ではないことは、素人の俺が見ても分かる。

「そうだな！じゃああれを殺せばアタシたちの知るクーお嬢様に戻ってきてくれるはずだ！！」

「じゃあ早く殺さないと。そうしてまたお嬢様と一緒に暮らさないと……」

「貴様ら……！」

現実逃避する二人に怒りを覚えるアン。

作った拳が震えている。

「アン」

そんな少女に俺は声をかける。

「なんだ？」

「俺たちとあいつら、どっちの方が大事？」

「夏哉に決まってる」

即答された。

「と言いたいところだが、正直のところ向こうも大切だ。あいつらは少なからず私に慕ってくれて、私のためにいつも何かしようとしてくれたんだ。嬉しくない訳ないし、大切に思えない訳がない。それにだ、私が魔界を追放されたというのに、まだ慕ってくれるんだ。だから都合のいい話を言えば、両方大切だ。今まで離れてても変わりはない」

アンのこの言葉は、あの二人に届いているだろうか？

前と後ろにいる二人を見ると、未だ自分の世界に入ったままぶつぶつと呟いている。

その時、ネハラの背後で動く陰があった。

空ねぇだ。

最初に食らった攻撃の後木々を使って隠れながらネハラの背後を取ったんだろう。

刀を振り下ろし、ネハラを斬ろうとする。

これに気付いたネハラは岩の盾を生成してそれを受け止める。

しかし下の方は見えなかった様で、空ねぇの足払いを防げなかった。

バランスを崩すと、一気に力を入れた空ねぇがネハラを押し倒す。
ネハラは仰向けになり、その腹に馬乗りになる空ねぇ。
刀を逆手に持って突こうとした時、バチッという音が聞こえた。
反射的だったのだろう、咄嗟にネハラから離れた。
するとさっきまで空ねぇの頭があった場所に雷撃が貫く。
空ねぇは一旦俺たちのいる場所に戻ってきた。
ネハラの動向をしっかり目に入れるために背を向けている。
「アンちゃん、凄いタイミングで来たね。主人公っぽいよ」
などと軽口で言えば、
「まぁな。差し詰め夏哉がヒロインってところか。しかしどちらかといえばヒロインの方がよかったな」
などと同じく軽口で返す。
空ねぇの行動で我に返った二人は、憎しみがこもっている視線を俺と空ねぇに向けてくる。
「あんたらは殺す。ヤチク、あの時は残酷に殺すって言ったけど――」
「安心しろ、分かってる。クーお嬢様のために一瞬で殺す」
?殺す?という単語が出てきて身構える。

しかしその肩にポンッと手を置かれた。
アンの手だ。

「身構える必要はない。これは私が蒔いた種だ、この決着は私がつける」

そう言って一歩出ようとするアンを――

「「ダメ」」

俺と空ねぇはお互い右手と左手を掴んで止める。

「え、いや、ダメって……あ、ネハラ、ヤチク、少し待ってろ」

アンが二人に時間を要求する。
いやいや、流石にそれは――

「「分かりました」」

言うこと聞くんですね。

「お前らが参加する必要はないだろ？無駄に怪我をする必要はない」

アンが気遣っているのはよく分かる。
同じ立場なら俺もそう言ってただろうし。

だからこそ、アンがもし今の俺の立場だったら、ということを思いながら喋る。

「でも、なぁ空ねぇ、参加しない必要もないよな？」

「うん、そうだね。それにここでのこのこ逃げるっていうのも気が引けるし」

「そういうことだ。自分だけで背負おうとするな。ここに二人いるんだからそれを分けろ。そうしないといつかつぶれるぞ？」

「いや、お前だけには絶対言われたくない」

アンにそう返されて言葉に詰まってしまう。

俺は誤魔化すように前と後ろにいる魔族に言う。

「悪いな！こいつは俺たちが守る！絶対魔界には帰さない！！でもそれじゃあお前らの気も済まない。いつもなら俺を好きなだけ殴ってもらうところだけど、どうやら最近俺が怪我をすると泣く人が出てくる様になってきてな、むやみやたらに怪我できねぇんだわ」

想像してしまった。

泣き顔の三人の少女。

いや、もしかしたらもう一人か二人も流すかもしれない、と考えてしまったので二名追加する。

こんな泣き姿は見たくない。

俺は拳を一つ作る。

「だから俺はおまえたちを追い返す！アンが望む限り絶対ここに留

め続けてやる！！……って、いつから俺こんな熱血になったんだよ。
こんな熱いキャラじゃなかったのに。お前のせいだぞ、アン。バツとして悲劇のヒロインをやってろ」

「え？」

アンが何か言おうとする前に空ねぇが俺の言葉を継ぐ。

「そうそう、アンちゃんはそこで座って、私たちを応援しながら待っててていいんだよ。今日のこれはアンちゃん争奪戦なんだから。景品が自ら攻撃とかするのはダメだよ」

「景品って……」

アンは何か言おうとするが、飲み込んだ。

そして、別の言葉を言う。

「私は、ここにいたい。だから勝ってくれ」

「「了解！」」

俺たちは同時に返事をすると、お互い別の方向に走り出した。
俺は薄い緑の髪のヤチク、空ねぇは金の髪のネハラ。

律儀にアンの言葉を守っていた二人は、まだ動かない。
しかしそれはアンに言われたからではなく俺たちがくるのを待ってるだけなのだろう。

俺とヤチクの間が縮まる。

最初に動いたのはヤチク。

掌からドロッとした赤黒いものが上の方に、放射線を描くように飛んでくる。

グツグツ言ってることからマグマのようなものかと推測する。

思いの外ゆっくりで、上に放ったものだったのでその下にいないように一歩ずれてから、またヤチクに迫る。

しかし――

ボンッ！！

頭上で爆発音が聞こえた。

見上げれば小さな赤黒い粒が大量に、雨のように降ってきた。

いやな予感がする。

さっきヤチクが放ったあれが予想通りマグマだったとしたら、あの粒でもかなりの温度があるはずだ。

体が丈夫だとはいえ、あれに当たったらおそらく溶けるだろう。

足に風の魔法を纏わせ、強化された脚力で思いっきり前に飛ぶ。

視界がブレ、額に鈍痛が走る。

メキメキメキ、ドォォン！！

そんな音が聞こえたので目を開けると、一本の木が倒れていた。
おそらく木の幹に頭をぶつけて、その衝撃で木が折れたのだろう。
見たところ体にあのマグマで焼けたところはない。
頭を打ったけど普通に体は動く。

ヤチクを見れば、驚愕の表情が張り付いている。

「……どうやって躱した？」

躱してくるとは思ってなかったのか、毛嫌いしている俺に聞いてきた。
それ程までの意外なことだったのだろう。

しかしどう躱した、と言われても単純に二言しかいえない。

「風の魔法で足を強化させて、全力で走った」

「は、走った、だと？ふざけるな！！脆弱なこの世界の生物にアタシが見えないような速さで動けるわけがないだろうがッ！！」

ヤチクは、今度も同様にマグマを射出する。
しかし今度は上ではなく直に俺に向かって、だ。

俺今度は横ではなく上に飛んで躱した。

ヤチクはマグマを放った手を振り上げると、つられるようにマグマもあがる。

ベチッ！！

堅く、そして熱い何かが背中を叩いた。

「ィギ、ガアアアアアアアアアアアッ！！」

そのせいで俺は地面に叩きつけられた。

「夏哉！？」

アンの声が聞こえた。

気絶しそうな頭を振って、立ち上がる。

背中に服が触れたとき、そこに激痛が走る。

「ギッ、ア！？」

慌てて服を脱ぐ。

外気に当てられ、熱を持った背中が冷やされていく。

どうして背中を攻撃されたのか。

そんな疑問が浮かぶが、ヤチクを、正確にはその手を見てすぐに分かった。

手から生み出されたマグマが形を保っている。

液体だったあれを固体化して、鞭のように振るって背中を襲ったのだろう。

「チッ、今ので死なないか。やはり頑丈だな。もう少し威力を増すか」

そんな独り言が聞こえた。

俺は焦る。

今でさえかなり堪えているのだ、これ以上のものを食らったらピンチだ。

俺はヤチクに向かって走り出す。

先手必勝で、やられる前にやるしかない。

風魔法で牽制を入れる。

しかし俺の魔法では牽制にすらならないようで、マグマの鞭を一回振るっただけでかき消され、しかも俺を狙う。

頭を狙ってきたので腰を低くして躱す。

俺の頭を通り過ぎた瞬間、マグマの鞭の一部が液体化して俺に飛び散る。

鞭の進行方向とは逆に飛ぶ。

足を地面につけた瞬間にまたヤチクに向かって走り出した。

それとほぼ同時に鞭が切り返してくる。

しかし遅い。

ほかの魔法が発動しないかどうかを意識しながら拳を振るう。

ヤチクはそれを躱し、口から炎を吐く。

それをしゃがんで躱し、顎にめがけてアッパーを食らわす。

しかし体を反らして躱される。

そのままヤチクはバック転をして距離を取る。

しばらく膠着状態が続く。

「当たらない……！」

決定打を与えられずいらついているヤチク。

しかし俺はまだ、自分では冷静と思っていられる。

ここで焦っても、たぶんダメだ。

大きく深呼吸をして、確実に頭を冷やす。

背中の熱は引いてきた。

「火津那、大丈夫か！？」

「大丈夫っ。アンちゃんは待っててね」

後ろでそんなやりとりが聞こえた。

空ねぇも苦戦してるみたいだ。

改めて気を引き締め、戦闘を再開する。

第六話　《十二章》悲劇のヒロイン（後書き）

アン「遅い！！更新が遅すぎる！！」

香苗「あ、荒れてるね、アンさん」

ア「だってそうだろう？今まで曲がりなりにも二日投稿だぞ？二、三回３日間になったことはあるが、でもほかの作品も合わせたら毎日投稿だ」

香「あ～、作者さん何気に頑張ってるんだね」

ア「確かにそこは褒められるべきかもしれない。よく頑張っている。しかしだ！なんかいつの間に予告なしに新しい新作が出来てるし！」

香「宣伝すると、『その想いは変わりますか？』の続編です」

ア「あれだぞ？昨日なんて一切執筆しなかったんだぞ！？荒れるのも仕方がないだろう！！」

香「まぁまぁまぁまぁ、落ち着こうよ。昨日は作者さん、寮に色々荷物を運んでお疲れなんだよ。ほら、今日だって来てないでしょ？メタ発言しちゃうと、今作者眠い目をこすりながらこれぽちぽち打ってるんだし、新しい携帯に買ったばっかりだからまだ馴染んでないんだよ」

ア「……香苗、どうしてそんなに作者を庇う？いつもと違うな？」

香「だって、夏哉君と誰にも邪魔されずにデート出来たんだもん。

今私はご機嫌なの」

ア「……そうか」

香「うん。あ、アンさん、これ食べません？活動報告でガスキンさんがくれたものなんですが」

ア「あ、あぁ。……これは、ぬか漬けか？」

香「うん。きゅうりのぬか漬け。じゃあいただきます」

ア「いただきます」

ぱりぽりぱりぽり

香「ごちそうさまでした」

ア「でした」

香「じゃあ、もう終わりかな」

ア「まぁやることはないな」

香「ではではみなさん、第六話ももう少しです。よろしくお願いします」

ア「私の出番、あるかな？」

香「後付け足しで、雑談でいろいろネタをやるようで、是非楽しみにしてください」

第六話　《十三章》一方の決着

私はネハラと呼ばれた金髪の魔族に向かって走る。

アンちゃんが来てくれたお陰で時間が稼げ、罪の有効時間である五分が過ぎた。

「ｉｎｖｉｄｉａ（レヴィアタン）！」

もう一度橙の鎌を作り出す。

そのまま横凪をすると、ネハラは後ろに下がって躱し、雷を放つ。

鎌で弾くと、その隙に肉薄してきた。

危険を感じ、無理矢理体を倒すように仰け反らせると拳が空を切った。

ザシュッ！

なんにも触れていないのに、衣服を通り越して二の腕と胸元が切り裂かれた。

幸いにも深くはなかった。

しかし失念していた。

魔法という存在が使えるというのを忘れていた。

落ち込んでいる暇はない。

そう頭を切り替えさせ、右腕を引く。

次の瞬間、

音も立てずに鎌がネハラの首を刈る。

ネハラから見ればいきなり首から鎌が出てきたように見えたのだろう、驚きの表情を浮かべている。

しかし、

鎌が首を刈ったのに、

斬れていない。

「ｉｒａ（サタン）！」

ネハラが固まっている間に、効力を失ってもとの刀になってしまった炎冥耶（かぎろいのみょうや）に新たな力を注ぐ。

光色は黄。

形状は先が直径２０ｃｍほどの太さの棍棒。

それを生み出すと、手首を利かせて振るう。

狙うは肩。

その動きに対してネハラは我に返った様だが、すでに遅かった。

棍棒はネハラの肩に当た――らずにすり抜ける。

罪が乗せられて効力を失った炎冥耶（かぎろいのみょうり）は刀に戻る。

「な、目が！？」

首をキョロキョロして慌て出すネハラ。

それはそうだろう。
私が乗せたｉｒａ（サタン）は視覚を奪う。
今のネハラの目には黒一色しか映っていないだろう。
「ちょっと！アンタ何したの！？どうして何も見えなくなったの！？どうしてすり抜けるの！？」
ネハラが体をいちいち動かしながら質問する。
私は思う。
そしてそれを口にした。
「こういう場面で、マンガだとなんでいちいち自分の能力を教える場面があるんだろうね。普通に考えてわざわざ自分の不利になるようなことを敵に漏らすとかおかしいし」
こういう考えは、大人の冷めた意見なんだろうとは自覚する。
でも自分がそれと同じ立場になったとき、そう思ってしまう。
私の声を聞いて大方の場所は掴めたのだろう、こちらを向くネハラ。
あ～、呟かなきゃよかった。
「何訳の分からないこと言ってるのよ！！」
ネハラはそう叫ぶだけで攻撃はしてこない。
私はてっきり苛ついて無差別に攻撃して来ると思ったので訝しく思う。
その時、

「ィギ、ガアアアアアアアアアアアッ！！」

「夏哉！？」

後ろで夏君の悲痛な叫びが聞こえた。

咄嗟に振り向く。

夏君が赤黒い巨大な鞭のようなもので地面に叩きつけられていた。

夏君の名前を叫ぼうとしたとき、背中に痛みを感じた。

「ギ、あああああっ！！」

あまりの痛さに地面に片膝を着き、倒れそうな体を炎冥耶（かぎろいのみょうや）で支える。

背中から全身に痺れるような痛みが走ることから、雷撃を受けたんだと予想する。

ネハラを見ると、既にどこかに行ったのかその場にはいなかった。

でもどういうこと？

どうして私が背中を向けた瞬間に攻撃が仕掛けられた？

いやそれ以前に、どうして目が見えない状態で攻撃を当てられた？

私の場所が判別出来るような魔法を使った？

――――――――――――

「ちょっと！アンタ何したの！？どうして何も見えなくなったの！？どうしてすり抜けるの！？」

大丈夫、頭は冷静でいられてる。

私の目が見えてない理由はなんとなく分かる。
ｉｒａ（サタン）とか言う棍棒が体に触れた瞬間、目の前が真っ暗になった。
それに触れたから視力が奪われたのだろう。

いや、今はまだそのことはどうでもいい。
まずは一旦引かないと。
でも引くにも相手の隙をつかなきゃどうしようもない。

風魔法で耳を強化して音を聞き分ける。

思い出せ。
私は、私たちはどういう立ち位置にいる？
集中して思い出すのよ。
私はそれが得意なんだから。

列的には私、女、お姉様、ナツヤ、ヤチクだったはず。
でもヤチクとナツヤはかなり動いているから正確な位置は分からない。

お姉様からは足音がしないので今動いても分からない。
もし動いてないなら分かる。

問題は女だ。

一歩間違えてお姉様の方に攻撃が行ってしまったら、私に生きる価

値がなくなる。
それだけは決してしてはいけない。

「こういう場面で、マンガだとなんでいちいち自分の能力を教える場面があるんだろうね。普通に考えてわざわざ自分の不利になるようなことを敵に漏らすとかおかしいし」

よし、女の場所は分かった。
体をそちらに向ける。

言葉の内容はよく分からないが、私の疑問には答えるつもりはないらしい。
私もそこは期待していない。

重要なのは音だ。

集中してよく聞け。

視覚がなくなった今、音が私の最大の情報元だ。
少しでも時間を稼ぐために話す。

「何訳の分からないこと言ってるのよ！！」

問題はお姉様の正確な場所が分かれば――

「ィギ、ガアアアアアアアアアアアッ！！」

思考に陥っている時、ナツヤの叫びとそこから地面に叩きつけられる音が聞こえた。

「夏哉！？」

そしてお姉様の声も。

この瞬間私の頭の中にヤチク以外の立ち位置が刻まれた。

お姉様の少し左に女はいる。

そこに向けて雷を撃つ。

それとほぼ同時に後ろに下がる。

これで躱すにしても弾くにしても一瞬の間が空くはずだ。

「ギ、あああああっ！！」

女の悲鳴が聞こえた。

どうやら私の予想は外れて当たったようだ。

ナツヤの叫びに気を逸らしたか。

私にしては何でもいい。

距離を置いて女について考察する。

あいつの武器はあの刀。

言葉を叫ぶとその都度形状が変わる。

斬られても殺傷能力はない。

しかし斬られると視力を奪わ――いや違う。

それ限定ではない。

鎌で斬られても視力は奪われなかったということは、あの棍棒が体に当たったから視力が奪われたということだ。

恐らく鎌で斬られたことで私になんらかの変化がある筈。
でも体は動くし耳も魔法も使える。肌にも触れる感覚がある。
ここはひとまず保留。
他に思い出せることは……あ、そう言えばあの女、普通の刀の時にナツヤの背中を斬った。
あの時うめき声を上げていたから、普通の刀の時は殺傷能力がある。

他に、他に思い出せることは――

「極光の断罪者（ジャッジメント）！」

離れた場所で、女の声が聞こえた。

これはつまり刀が何かに変形したということだ。
距離があるから飛び道具か。
恐らく広範囲の攻撃をして当てる可能性がある。

私は低く宙を飛び、しかし木々の高さを思い出しながら、その上を越さないようにする。
空で姿を表したら的にされてしまう。

そう考えていたとき、左の腹に激痛が走った。

「ア、グゥ！？」

あまりにも強い衝撃のため吐血する。

どうして？
どうして動き回っていた私に当たるの？

考えられるのは二つ。
まぐれで当たったか、追尾型。
多分後者の方が可能性が高い。

少しまずいかもしれないわね。
相殺するにも躱すにも目が見えないと無理だ。

「……やろう」

誰に言うでもなく呟く。

しかしこれは凄い集中力が必要だし、何より時間が掛かる。
もう一度あの痛みが襲うかもしれないが、覚悟を決める。

その場で目を瞑り、集中する。
頭に描くのはお姉様の姿。
そのお姉様が特殊能力を発動させる。
技の名前は呪術抹消（チャームキャンセル）。
自分の認識する相手に掛けられた状態異常を取り消す、お姉様だけの特殊能力（アビリティ）。
でも私は《義妹》だ。
妹は姉の姿を真似て成長する。

つまり、

私は、私がお姉様と決意した方の技が使える。

とは言ってもかなりの劣化版で、本来のニ割程度しか威力は発揮しない。それでも視界が少しでも戻る方がよかった。

思い出せ。
お姉様はどんな風にしていた？
三十秒ほど、お姉様のことに集中して目を開ける。
まぁ景色は変わらないけど。
その時、二発目の攻撃が当たる。
「グ、ガアッ」
痛みにこらえながら、頭に刻んだお姉様と同じ様なことをする。
「……呪術抹消（チャームキャンセル）」
そう呟けば、視界がぼやけながらも戻った。
はっきりとは分からないけど、輪郭程度なら分かる。
これで対処しようと、お姉様がいる場所まで戻る。
その間にも極光の断罪者（ジャッジメント）のことを考える。
二発目の攻撃が遅かったということは、連射は出来ないと言うことだ。
連射が出来ないなら楽だ。
それに、あの追尾式。
あれは女が私を意識すれば追尾してくるのか？
それとも別の目印が――
そこで私は思い出す。
そう言えばどうして今初めて使った？

もしあれが思うことで追尾するものなら、空中で私たちが追ってる時に使えばいい。
攻撃に制限回数がある？
その可能性は否定出来ない。
でも、私の中では一つの仮説が成り立った。

それを確認するには、聞くしかないか。

そう結論が出たとき、上空に巨大な円錐型の何かが見えた。
恐らくヤチクの奇法だろう。

と、ここで違和感を感じ、一旦止まる。

ヤチクが奇法を使ったのに、ぼんやりとしか感じられない。
魔族は誰しも奇法をはっきりと感じ取ることが出来るのに、今は靄が掛かっているみたいにあやふやだ。

これが意味することは、奇法の感覚が消されているということだ。
それが橙の鎌の効果なのだろう。
そして呪術抹消（チャームキャンセル）によって微かに治った。
しかしこれはそこまで戦いに必要はないか。

しばらくして、四つの人影が目に入る。
やはりぼやけてよくは見えないが、よく動いてるのがふたつ、そして止まっているのが二つ。
どっちかがお姉様で、どっちかが女。

しかし、その二つの陰には決定的な違いがある。
ひとつは美しい金色、もうひとつは水色が映る。

お姉様は金色の髪を持っているので、あの水色が標的。

あそこに向かって、比較的得意な雷撃を放つ。

それと同時に私も女に向かう。

「ｓｕｐｅｒｂｉａ（ルシファー）！」

そういうと女とおぼしき影に赤の色が入った。

形状は分からない。

だが悲鳴は聞こえないので弾かれたのだろう。

それを気にせずもう一度、今度は炎弾をふたつ放つ。

多分これも防がれるが、もう距離は稼いだ。

赤いものに当らないように細心の注意を払いながら、身を屈めて女の懐に入る。

最初の攻撃では風だけだったが、今度は地も腕に纏わせる。

そして適当に殴る。

躱されたようで、殴った感覚がない。

その瞬間、纏わせていた二属性の奇法を放つ。

風と地。

これ混ぜることによって風の威力が増す。

「っああ！」

今度は悲鳴が聞こえたので当たったのだろう。

「ど、どうして……罪はまだ、被ってるはず、なのに……！」

女は痛みで声を震わしながら喋る。

だから私は返してやる。

「『こういう場面で、マンガだとなんでいちいち自分の能力を教える場面があるんだろうね。普通に考えてわざわざ自分の不利になるようなことを敵に漏らすとかおかしいし』」

一言一句性格に返してあげた。

「な！？まさかそれ覚えて……！」

このくらい、集中してるときの私にとっては造作もないことだ。

「さて、お姉様もそろそろ退屈してるから――な？」

私は言葉を途切らす。

唐突に、視界がハッキリしたからだ。

目の前で手を握ったり開いたりする。

ハッキリ見える。

戻ったのだ。

自分の視覚が。

すぐ傍でヤチクが奇法を使っているのも分かる。

「フンッ、もう罪とやらは解けたみたいね。これで極光（ジャッジメント）の断罪者は使えない」

片膝を着いてる女に向かって言う。

「え？ど、どうしてそれを知って――」

「あぁ、そうだったんだ～。刀に斬られないとあれは使えないんだ～。教えてくれてありがとう」

やはりそうか。

あれは、女の言う罪とやらを目印にこちらに飛んでくる。

今の今まで使わなかったのではなく、使えなかったというわけ。

「やってくれたね。鎌掛けたってわけ？」

「さぁね」

今まで向こうが使ってきた攻撃の中、殺傷能力があるのは生身の刀と極光（ジャッジメント）の断罪者。

罪がなければ極光（ジャッジメント）の断罪者は追尾してこない。

もう余裕だ。

油断を持たなければいける。

女は立ち上がって、生身の刀を構える。

「ｇｕｌａ（ベルゼブブ）」

刀は藍色に光り、先端に、同じく藍色の球体が生まれる。

それがなんの前触れもなく飛んできた。

私は慌てず、地属性の奇法で壁を作りそれを防ぐ。

光を纏った時の刀は物体をすり抜けるようだが、奇法は別のようだ。

鎌で奇法を弾くことから分かる。

そしてこの飛び道具は追尾型ではなく直線的なもの。

もし追尾型なら最初のうちに使っていた筈だから。

私は右にずれる。

壁の陰から出てきた私を見て女はもう一度光球を放ってきた。

それを身を捻って躱す。

「クッ、ａｃｅｄｉａ（ベルフェゴール）！」

刀が緑に変わり、形状も十文字槍に変わる。

女はそれを顔目掛けて突いてくる。

それを左に躱すと、追う様に右から迫ってくる。

それを身を屈めてまた躱し、掌底を女の右手にぶつける。
腕が上がり、脇ががら空きになる。
そんな隙を逃す訳なく、膝を思いっきり当てる。
「ア、アアッ！！」
ボキッという鈍い音が聞こえた。
倒れる女の上にまたがる。
「極光（ジャッジ）の、断罪者（メント）！！」
刀の先から赤、藍、緑の光が輝くと、光球となって飛び出された。
私は身をよじらせて躱す。
本当に追尾機能は失われているようだ。
輝きを失った刀を手で弾き飛ばす。
もう手を伸ばしても届かない。
これで決まった。
その筈なのに、女は笑みを浮かべている。
「何よ。いよいよ壊れ――」
「これで私の勝ち」
私の言葉を遮り、勝利宣言をした女。

どういうことだ？
この状況で逆転出来る可能性があるのか？

チラリとお姉様たちを見る。

お姉様は震える体を抑え、ヤチクとナツヤは未だ戦闘中。
加勢は望めない。

「極光の断罪者（ジャッジメント）の、効果はね、貴女の言う通り、罪を乗せたものにホーミングする弾。相手に罪が、乗れば乗るほど威力も、増す……」

途切れ途切れに語り出す女。

「後ね、別のこと、なんだけど、この刀ね、三十秒経っても、相手に罪を乗せ、られなかったら、自分が、罪かぶっちゃうの」

どうして今そんなこと言うんだ？

これを聞かせて何に――いや待て、こいつ今なんと言った？

自分が罪をかぶる？

そして極光の断罪者（ジャッジメント）の効果は――

『極光の断罪者（ジャッジメント）の、効果はね、貴女の言う通り、罪を乗せたものにホーミングする弾。相手に罪が、乗れば乗るほど威力も、増す……』

ということは！

バッと後ろを振り返る。

「それは、私にも有効。今は嗅覚、味覚、聴覚の、三つの罪を受けてるの」

私に迫ってくる一つの光の玉。

赤、藍、緑に点滅する。

「さっきのより痛い攻撃、食らっちゃいな」

咄嗟に逃げようとするが、両手首を掴まれて逃げられない。

急いで地の奇法で盾を張るが――

バリンッ！！

一瞬で砕かれた。

私は強い衝撃を受け、意識を失う。

第六話　《十三章》一方の決着（後書き）

真樹「また四日振りの投稿ですわ」

沙鳥「しかも昨日なんにも投稿してないし」

作者「ですわ～！！」

沙「え、さ、作者何！？いきなり？ですわ？って何！？」

作「いや～、久々に？ですわ？って打てて嬉しくなっちゃって」

真「だったらさっさと私を出せばいいではありませんか！！」

作「どう考えても無理でしょ！！この戦闘の中お前がどう活躍するって言うんだ！？」

沙「あ、戦闘と言えばさ、ネハラって魔族凄く頭がいいんだね。魔族頭が悪いとか言われてるけどそんなことないじゃん」

作「いや、ネハラは頭がいいって言うんじゃなくて、頭の回転が速いっていう風に書いたつもりなんだけど。それこそさ、ネハラ事実をただ覚えて、それをつなげただけじゃん？」

真「そうですが、でも音だけで相手の場所が分かるなんて、コウモリじゃないんですから」

作「魔族だからいいの。それから、少し話変わるけど構わない？」

沙「何？」

作「このままこの調子で行くと、雑談の時にいい報告があるんだけど」

真「なんですのそれは？」

作「えっとだな、ゴニョゴニョ……」

沙&真「「……ええええええええええっ！？」」

作「な、凄いだろ？」

沙「いや、凄い凄くないじゃなくて、えぇぇっ！？」

真「それ本気で言ってますの！？嘘はいけませんわよ！！」

作「本当だって！！後ホントもうちょいなんだって！！」

沙「何？これタイミングよすぎじゃないの？作者ちゃんとその時に終わらすんだよね？」

作「終わらす終わらす。絶対終わらす。構成はもう出来てるから！！」

真「ではさっさと終わらせなさい！！まだ学校は始まってませんのよね！？」

作「うん。二日後」

真「ではさっさと終わらせなさい！」

作「でも、ね、今日本買って来ちゃったから」

沙「それどころじゃないでしょ！ほら、代わりに私が本読んであげるから！」

作「それ意味ねぇだろうが！！」

真「そうこうしてるうちに後書き終わりますわよ？」

作「なぬっ！？えぇそれじゃあ！空ねえ、Ｃｏｌｌｔｙさん、ファルコさん、感想ありがとう！！これからもよろしく！！他の皆さんも感想などなどよろしく！！君たちの意見が、これからの物語を創っていく」

沙「え、何最後の？」

作「いや～、頭の中ではさ、第九話くらいまで出来てるんだけど、それじゃ目標二百話まで足りないんだ。だからこういう話を書いて、とかこのキャラだして、とかあったら嬉しいなって。ギャグでもシリアスでもオールオッケーってね」

沙＆ａｍｐ；真「「他人任せ……」」

第六話　《十四章》許せない行動

一歩足を前に出す。

しかし相手に近付こうとするが、土の槍や炎の球が飛んできて近づけない。

どうしようも出来なかった。

多分向こうも、俺が遠距離型の攻撃の術を持ってないことに気付いたのだろう。

マグマの鞭を手放して飛び道具ばかり使ってくる。

俺も、それを躱すことに専念すれば躱せるが近づくことも出来ないので攻撃が出来ない。

どちらも決定打が出ずに不毛な争いをしている。

いつもだったら全力でヤチクの元まで走って近付くのだが、今は背中に大火傷、足にあまり力が入らないためそう出来ない。

しかしこんなことを続けて、先に体力が切れるのは俺だろう。

早いところなんとかしないとマズい。

そう思ったとき、攻撃がやんだ。

突然のことで不気味に思い、立ち止まる。

ヤチクをよく見れば、口元が動いてる風に見えた。

何を喋っているのかは分からないが。

「……い」

今一瞬何かが聞こえた。

「……たらない、かつくうざい腹立つ憎い当たらない目障りウザったい憎いムカつくイライラする憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い！！」

音量が徐々にあがり、ついに叫び声になったとき、とてつもないプレッシャーがのしかかってきた。

胃がきりきりと締め付けられるように痛い。

額から、背中から、手のひらから、体中至る所から汗が噴き出してくる。

これが殺気と言うものなのかもしれない。

似たような感覚を、一ヶ月ほど前に香苗から受けた。

足が竦む。

疲労も加わり、気を抜けばすぐに崩れ落ちてしまうだろう。

大きく深呼吸をして、心を落ち着けようとする。

肺が空気で満たされると、ほんの少しだけだけど震えが止まる。

「上だ夏哉！上を見ろ！！」

アンが焦ったように叫ぶ。

咄嗟に上を見ると、そこには巨大な岩があった。

そう言えば魔族の使う魔法はこの世界に干渉できないから影も音もしないんだった。

足に力を込めて横に飛ぶ。

その瞬間、地面にぶつかる前に岩は小石程度まで砕け、全てが俺に向けられた。

かなりの速さがあり、しかも数がある。

少しでも石から逃れられるように、と体に風をまとわせ、ヤチクの方へ走る。

目の前に、先の尖った岩があった。

首を曲げて躱すが、そこで立ち止まってしまったため礫が襲う。

顔――特に目――は守ろうと腕をクロスしてガードする。

幸にも礫の嵐の中心にいる訳じゃなかったので直撃は免れたが、左側に礫が突き刺さる。

「グゥッ！！」

よろめきながらも何とか堪える。

「フッ」

息を吐くような音が聞こえた。

確認もせずに右腕を払うようにして振ると、何かにぶつかった。

今初めて確認すると、それがヤチクの足だと言うことが分かった。
初めての相手からの接近戦。
このチャンスを逃すわけにはいかなかった。
左手を拳にして殴りにいく。
しかしそれは叶わず、俺の拳よりも早く相手がアッパーカットを左腕にあててきた。
強制的に脇ががら空きになる。
そんな隙を突いてこない様な敵ではなく。
岩のとげが付いた足で蹴ってくる。
「アアアアアアアアアアアアアッ！！」
わき腹に突き刺さると、それが射出したのか刺さったまま吹き飛ばされる。
なんとか思考力はあったので背中で着地しないように注意しながら地面に着地する。
しかし着地という綺麗なものではなく、右肩を地面にぶつけて３ｍほど引きずられた形だったが。
左腕で巨大な棘を抜いて立ち上がる。
血も流れ、当然よろけた。
でも立たなければいけなかった――いや、こんな義務的なものじゃない。

立ち上がりたいから立ち上がる。

多分、俺がこのまま倒れてもアンは何も責める言葉は言わないと思う。

むしろ私のために動いてありがとう、とか言うと思う。

でも俺は、アンにお礼を言って欲しいから立ち上がるんじゃない。

アンを俺の傍に置いておきたいから立ち上がるんだ。

当然アンがそれを否定するなら諦めるが、否定されない限り俺は無理やりにでも側に置きたい。

あぁ、俺は意外にも独占欲が強いのかもしれない。

アンの傍で笑顔を見たい。

アンだけじゃなく香苗も沙鳥も、真樹も灯里も空ねぇも。

皆の笑顔を無理矢理にでも見たいんだ。

全く、俺はなんて強欲なんだろう。

それこそ嫌われてしまう。

いや、それはないか。

なんて言ったって周りは変な奴ばかりなんだから。

こんな俺に少なからず好意を寄せるような奴らなんだから。

俺なんかに好意を寄せたら、それを返さなければいけないじゃないか。

本当に苦労する。

でも俺は強欲だから、そんな苦労も欲しているんだ。

頭の中で、他人が聞けば意味不明な言葉が作られていく。
今はとにかく何か考えていなければ意識がどこかへ飛んでいきそうだからだ。
意識を保とうと奮闘してると、霞みそうになる視界に動きがあった。
ヤチクの右腕が土に包まれた。
それはまるでスピアの様な円錐形だった。
それで突いてくるのだろうか、と考えて身構える。
しかしそうではなかった。
土の側面から、手に纏ったスピアより小振りなものが数本生えてきた。
少し伸びたら、また同じようにそれから小さいスピアが生える。
それを後二回繰り返すと、止まった。
そして一斉に射出された。
今の足では避けるよりも打ち落とした方がいい。
ヤチクが俺のわき腹に指した棘を握ってそう考える。
その時、俺は見てしまった。
射出されたもののいくつかが、アンに向かっているのを。
「う、おおおおおおおオオオオオオオッ！！」

声を振り絞り力の限り足に力を込める。

震える足？
そんなのアンを助けない理由にはならない。

溢れる血？
そんなのアンを見捨てる言い訳にはならない。

霞む視界？
そんなのアンを守らない口実にはならない。

とにかくアンの元へ走った。
邪魔な土の塊は捨てる。

迫る土の槍。

右手と左手を握りしめてそれらを、その数だけ殴る。

「うあ……！！」

その度に脇腹が痛むが無視する。

全部打ち落とした頃には息遣いも速くなっていた。

「な、なつ……ば、バカ。どうして、私を助けるためにここに来た？あの程度の攻撃くらい！私はなんとか出来た。お前も分かってるだろっ！？」

確かにそうだ。
アンは本気すら出す必要もなく、それこそこんなボロボロの人間な

んかに助けられなくたってなんとかなっただろう。

でも、そうじゃない。

そう言うことじゃないんだ。

「俺は、強欲、だから、大切、なもん、に攻撃、されるのが、許せなかった、だけ、だ」

息も切れ切れに言う。

そして、許せないのはもうひとつ。

大きく息を吸い込む。

「ヤチクーーーーーーーーーーッ!!」

怒りにまかせて叫ぶ。

「テメェは!アンを、クーレラを!守るためにここに来たんだろうが!!それなのに!どうしてこいつに!攻撃当てようとしてんだッ!?クーレラのことを!!大切に思ってんなら!!そいつだけにはぜってぇ攻撃すんじゃねぇよッ!!」

収まってきた息切れも、今の叫びで悪化してしまった。

それほどまでに相手に怒鳴りつけてやりたかった。

自分の大切な奴に攻撃するのは、絶対やってはいけないことだ。

それだけは誰であろうと俺が許さない。

「うあ、あぁ……」

するとヤチクは呻き声を上げた。

「あぅわ、あああああ、あああああああああああああああああああ！？！？！？」

そして天に向かって砲口を上げる。

――――――――――――

憎い。

憎い憎い憎い。

憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い！！

クーお嬢の傍にいるあの男が憎い。

クーお嬢に慕われているあの男が憎い。

クーお嬢を守る立場にいるあの男が憎い。

ソシテ、

ナニヨリ、

クーオジョウニ、

ヤイバヲムケテシマッタ、

ワタシジシンガ、

ニクイ。

ニクイ。

ニクイニクイニクイ。

ニクイニクイニクイニクイニクイニクイニクイニクイニクイニクイ！！

――――――――――――

「な、なんだあれは！？」

アンが声を荒らげて言うので上を見上げる。

とてつもない大きさの円錐形の岩が上空に浮いていた。

いや正確には円錐ではなく、先端に当たる部分が切り取られて、円形になっている。

大きさは分からない。

大きすぎて具体的な数字が出てこなかった。

「逃げろ夏哉！！潰されるぞ！！」

俺の身を案じて叫ぶアン。

俺は後ろに下がろうとしたとき、違和感を感じた。
真上を見上げて確認すると、やはりそうだった。

あの岩の塊、中心が俺じゃない。

俺を殺すために作るなら、普通俺を中心にするはずだ。

なのにどうして――

ひとつ思い当たる節を見つけてヤチクを見る。
天を見上げながら微動だにしない。

そこから視線を上に上げていく。
多少の誤差はあるかもしれないが、先端の円の中にヤチクは入っている。

あのまま落ちたらヤチクまで潰されて死ぬ。

「くっ、そぉッ！！」

後ろに進める足を止め、前に駆け出す。
駆け出すとは言ってもかなりふらふらで遅いものだが。

「夏哉！？」

アンの呼び止めを聞かない振りして走る。
俺が近づいても全く反応を示さないヤチク。
完全に我を忘れてるようだ。

残り七歩強。
後もうちょっと。

しかし空から降ってくる塊は、それを待ってくれない。
今の俺にはもう間に合いそうにない。
ならばと思い上を向く。

あれを壊すしかない。
出来るのか、そう聞かれたら分からないとしか答えられない。
でもやるしかない。

力を込めると、頭の中で声が聞こえた。

『俺は力が欲しいか?』

紛れもない俺自身の声だった。
しかしその言葉は決して俺が考えたものではない。

では誰だろう。

本当はそのことを考えたかった。
でも時間がなかった。

だから謎の俺の言葉に答える。

力が欲しい。

と。

なんな疑いもなく欲望のままに言った。

『いいだろうくれてやる』

途端に体が軽くなった。

疲れも痛みも、完全ではないが引いていく。

その分拳に力を込める。

岩の塊が俺の拳の届く範囲にくるかこないかのところで、拳を放つ。

ドゴオオオオオオンッ！！

そんな音が響き渡る。

ミシッ、ミシミシミシ！！

巨大な岩の塊に罅が入り、

ドドドドドドドドドッ！！

粉々になって崩れ落ちていく。

自分に振ってくる欠片は手で払う。

「あ、あああ、ああ……」

自分の魔法が崩れ去ったのが堪えたのかどうかは分からないけど、若干うつろ気味になるヤチク。

ゆっくりと歩いて近づく。

「お前自分で死のうとしただろ？アン、クーレラに攻撃したからって理由で。ふざけんなよ。確かに俺は大切な奴に攻撃するなとは言った。でも！死ぬことの方がもっと許されるわけねえだろうが！！」

「黙れッ！！アタシには、クーお嬢に攻撃したアタシにはもう生きる価値なんてないんだ！！道連れにしてやるッ！！」

たった三つの、手のひらサイズの土弾を作り出してそれを飛ばしてきた。

「価値が、なんだってんだッ！！」

俺は土弾全てを殴り壊した。

「アンを攻撃したから価値がなくて死ぬ？そんなのただアンの反応が怖くて逃げてるだけじゃねえか！！お前は今までアンの、クーレラの何を見てきたんだ！？」

「黙れ……」

「あいつが一回攻撃された程度でお前を嫌いになると思ってんのか？あいつがただ一回のミスで見方を変えるような奴だと思ってんの

か？」

「黙れ」

「クーレラが俺たちになんて言ったか知ってるか？大切だって言ったんだ。今のこんな状態でも！お前らのことを大切だって！！」

「黙れ黙れ」

「お前らは俺たちよりもクーレラのことを知ってんだろ！？だったら！お前の知ってるクーレラは、自分の大切な奴が死ぬのを喜べる奴なのか！？」

「黙れ黙れ黙れ！！」

「あいつは誰かのために行動できて、誰かのために涙を流せる奴だ！！そんな奴をお前は、価値がないからって言う理由で死んで！クーレラを、アンを泣かせるつも」

「黙れぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇッ！！」

自暴自棄になったヤチクはそのまま突っ込んできた。

俺も走り出す。

「あああああああああああああああッ！！」

「オオオオオオオオオオオオオオッ！！」

お互いに叫び合い、拳を作る。

ほぼ同時に振りかぶり、放つ。

ゴッ！！

先に繰り出したのは、俺だ。

ヤチクの拳が俺に届く前に、ヤチクの腹に拳を当てた。

そして空に向かって振り切る。

「あ、カ……！」

空高く飛び、地面に落下する時にはもう気絶していた。

「おっしゃあ……、これで、おれの、か、ち……」

勝利を確信した途端緊張の糸がほどけて崩れ去った。

第六話　《十四章》許せない行動（後書き）

作者「……」

夏哉「え、あの、作者？香苗、どうしたのこいつ？」

香苗「えっとね、作者は今スゴく眠くて、目をこすりながらも後書きを書いたのに、操作ミスで一度書いた後書きを一瞬にして全て消しちゃってね」

夏哉「ん～、ご愁傷様だな」

作者「空ねえ、Ｃｏｌｌｔｙさん、感想ありがとう。今日は、てか今日も既に眠いから、後書き短くやらせていたきます」

夏「感想評価待ってます」

香「誤字脱字報告もお願いします」

第六話　《十五章》話し合い

私はずっと我慢した。

自惚れた言い方をすれば、私を巡った戦いを、じっと見ながら我慢した。

体が震える。

それを無理矢理にでも抑えて、二つの戦いを見ていた。

怪我をする夏哉に火津那。

何度駆けつけようと思ったか。

『自分だけで背負おうとするな。ここに二人いるんだからそれを分けろ。そうしないといつかつぶれるぞ？』

『お前のせいだぞ、アン。バツとして悲劇のヒロインをやってろ』

夏哉は言った。

だから、二人に任せてみた。

ヒロインのように主人公を見守っていた。

するとどうだろう。

戦いに全く参加していないのに、痛い。

どんなにつらく厳しい戦いより、痛い。

胸が張り裂けそうだ。

これが、心の痛みなのか。

香苗と沙鳥が、どうしてあんな悲痛な表情を浮かべて私の袖を掴んだのか、ようやく分かった。

戦う者より、見守る者の方がつらい。

こんなことなら戦って体が傷つく方がよっぽどマシだ。

こんな痛みに、香苗と沙鳥はずっと耐えていたのか。

あの二人は尊敬に値する。

二人を見ると、まず先に火津那が終わった。

仰向けになる火津那の隣に、俯せになって気絶しているネハラ。

私は急いで傍に掛けよる。

「火津那！大丈夫か！？」

「あっ、アンちゃん……。ちゃんと、勝ったよ……。わき腹折れてるけど」

ははっ、と力なく笑った。

「何笑ってるんだっ？ボロボロじゃないか！すぐ直す」

私は治癒魔法を発動させて、折れている脇腹を重点的に治していく。

その時、

「あああああああああああああああッ！！」

「オオオオオオオオオオオオオオオッ！！」

ヤチクと、夏哉の叫び声が聞こえた。

顔だけ向けると、ヤチクが殴られて宙に舞っていたところだった。

地面に落下した後、夏哉も力が抜けたのか倒れた。

「夏哉っ！！」

「お、おお……勝った、ぞ……」

声を出すのもつらいようで、とても小さく、短かった。

「アンちゃん、私は、いいから夏君、の方行って、あげな。あっちのほうが、ひどいんでしょ？」

火津那が気遣ってくれた様だが、

「俺は……気に、すんな……空、ねぇ……先、で、いい」

夏哉にも聞こえていた様で火津那を先に、と促す。

「いやいや、夏君が」

「いや……空ねぇ」

「夏君が」

「空ねぇ」

「夏君」

「空ねぇ」

「夏――」

「空――」

「いい加減にしろっ！！」

とうとう私の堪忍袋の緒が切れた。

大声で怒鳴りつけると、二人は黙った。

「お前らは怪我人なんだから黙って治療を受けてればいいんだ！！火津那、ちょっと我慢しろ！」

私は火津那に風をまとわせて浮かすと、夏哉の傍に降ろす。

「うげ、夏君の背中凄いグロ……。よく生きてるね……」

「ほんっとだよ。自分でも、びっくり」

そんな会話を聞きながら、私は二人同時に治癒魔法を掛ける。

「どうしてお前らは、そんな調子が軽いんだ。そんなにボロボロなのに……。私はお前らが言った通りずっと見てた。凄くつらかった。私には力があるのに何もしなくて……ただお前らが傷付くのを見てるだけで……。本当に痛いんだぞ」

語ってるうちに涙がこぼれてきた。

「私のために戦ってくれてるのに、嬉しい気持ちと苦しい気持ちがゴチャゴチャになって……。もういやだ。私にはヒロインなんて向いてない。ただ見てるのは耐えられないんだ……」

そう言うと、私の涙を拭う手があった。

「そうか、そりゃ悪いことしちゃったな。見てるだけってそんなにつらいんだ」

「アンちゃん、ごめんね。そこまでは考えつかなかったよ。そうだよね、怪我していくところを見たら胸が痛いよね」

二人が拭ってくれるが、全然止まらない。

そして二人は、

「「もー無理（駄目）」」

バタンと手を下げた。

「わりぃアン。もう手があがんねぇ……」

「右に同じく……」

二人は腕をあげるのも無理なほど疲労している。

それを再認識して、より魔力を込める。

今日ほど魔力を欲する日はなかった。

しかしそれはないものねだりでしかない。

「そういえば夏君今更だけどさ」

と、突然火津那が切り出した。

「夏君何者？拳でいろいろぶっ壊したり、すんごい跳躍したり。もはや人間じゃなくない？」

ビクッと夏哉の右腕が動く。

「あ……そういえば、空ねぇって、俺のことご存知ない？」

「ご存知ないよ。まだ会って四日も経ってないんだし」

「あぁ、そりゃそうだよな。でも説明って言われてもな、俺もよく分かんないんだけどさ、生まれつきこんな変な力が出るようになったんだよ。魔法とかじゃなくて。ごめん、怖いっしょ？」

夏哉は笑って言った。

私にはよく分からないが、多分笑えるような内容じゃないのに。

「ぜんっぜん。もしかして、？人間じゃない？って言葉が効いちゃ

ったかな？私こそごめん。夏君は夏君だよ。それこそ化け物だったとしても対応は返るつもりないし。夏君は大切な……大切な友達だから」

「……ありがとう、空ねぇ」

火津那の言葉が凄く嬉しい様で、はにかんでいる。

そして対する火津那は――

「……」

苦虫を噛み潰した様に顔をゆがませている。

「火津那、大丈夫か？」

心配して声を掛ける。

「うん、大丈夫。気にしないで」

「てか空ねぇこそ何者よ？なんかいつの間にか戦いに参戦しちゃって。アンたちのこと見えたり戦闘慣れしてたり」

「私はただの女子高生だけど？」

「それはないな」

確かに夏哉の言うとおりだ。

あんなに動けてただの一般人とは思えない。

……まぁ夏哉という例外はいるが。

夏哉の場合は攻撃が目に入ったからそれを避け、自分の拳が相手に届くから殴る、という単純作業しかしていない。
それであれだけ動けるのはおかしいがな。

「あ～、その、秘密、っていうのは駄目？」

「俺はいいよ」

「え、ほんと？」

「あぁ。アンは？」

「別に構わない」

「あ～助かるよ。ちょっと面倒な立ち位置でね」

ははっと弱く笑った。

その時、夏哉が手を閉じたり開いたりするのが目に入った。

「夏哉どうした？どこか変なところがあるか？」

「いや、体動くかな～って。んしょ」

そう言った瞬間、夏哉は立ち上がった。

「っておまっ！何立ち上がってるんだッ！？」

「いや、結構痛みはなくなってきたし」

「まだ怪我治してないぞ!!皮膚なんてでれんでれんだ!!」

「夏君、それで人前に立っちゃ駄目だよ。ショック死しちゃう人が絶対いるから。てかなんでそんな状態で立てるかな?私の方が被害少なめなのに全然立てないよ」

「そう言われてもな~。立てるものは立てるんだし。それで、動けるようになったから、邪魔者は消えた方がいいでしょ。お前ら三人で話したいことあるだろうし」

夏哉は倒れているネハラとヤチクを見た。
最後は私がケリをつけろと言うことか。

「空ねぇ……は動けないんだよな。どこ痛い?」

「右わき腹骨折、全身軽い火傷、ってとこかな?」

「了解。そこ気をつけるよ」

夏哉は火津那をお姫様抱っこした。

「うわっ」

「痛くない空ねぇ?」

「だ、大丈夫だけど……」

「ならよし」

次に自分が放った服を取り、この場を去っていった。

―――――――――――

「ねえ夏君、これからどうするの？」

腕の中にいる空ねぇに聞かれた。

「取り敢えず、携帯持ってる？」

「あるけど……壊れてないかな？」

空ねぇはゆっくりとズボンのポケットから携帯を取り出す。

「今更だけど、いきなりお姫様抱っことかごめんな」

「気にしなくていいよ。それで、さぁちゃんに掛けるの？」

「いや、真樹に電話して欲しい」

「え、きぃちゃん？なんで？」

「沙鳥が俺の背中見たら、多分卒倒する。その点真樹なら大丈夫だし。魔法も上手いから治してくれるし」

「なるほど。分かった、電話してみる」

空ねぇが電話をしてから十五分後、真樹は来てくれた。

俺たちの状態に驚きは隠せていなかったけど、きちんと治してくれ

た。

その時、こんなグロいものを見せないでくださいまし、とか愚痴を言われた。

――――――――――――

私はネハラをヤチクの隣に寝かせた。
そしてなけなしの魔力を使って二人に治癒魔法を掛けた。

最初に目覚めたのはネハラだった。

「ん、んあ……」

「大丈夫か？」

「お、姉さ――お姉様！？」

ガバッと起き上がるが、痛みが抜けていないのか顔をゆがます。

「まだ寝てろ。お前は怪我人なんだから」

「そう言うわけには――アイツらは！？」

首を回して辺りを警戒する。

「帰ったよ」

「帰った……ということは私たちが――」

「違う。お前たちは負けて、夏哉たちは私に後を任せたんだ」

「負け、た？私たちが？」

「う、ああ……」

隣でヤチクも気が付いた。

「ヤチク」

「あ……？あ、クーお嬢！？」

ヤチクも起き上がろうとしたが、痛みのせいなのか疲労のせいなのか起き上がれなかった。

「大丈夫か？」

ネハラと同じ様に声を掛ける。

「アタシ、確かナツヤに……負けた、んですか？」

「ああ。負けた」

「そうですか……。ネハラ」

「分かってるわ。早くあの二人を――」

「アタシを殺せ」

「へ？」

「はぁ？」

突然の言葉に私とネハラは変な声を出した。

「アタシはクーお嬢に、この世でもっとも敬愛するお方に攻撃をしてしまった。そんなアタシなんて生きる価値がな――」

ドスッと私は治癒の手を止めてヤチクの腹に拳を突き立てる。

「うぐっ！？」

「お、お姉様？」

二人の反応は無視する。

「お前は夏哉から何を聞いた？自分が死んで、私を悲しませる気か、と言われなかったか？」

「ナツヤ……」

ヤチクは何か考え、口を開く。

「クーお嬢。クーお嬢は、ナツヤのどこがいいんですか？」

「ちょ、ヤチク！？アンタ何聞いてんのよ！？」

「済まない。ネハラが嫌がるのは当然だが、聞きたいんだ。クーお

嬢、お願いします」

ヤチクに言われ、私は夏哉に惹かれたわけを端的に話す。

「頼ってくれ、って言われたんだ」

「頼る？」

「そう。初めて会ったとき、何故か私のことが見れて触れた夏哉が、頼ってくれって言ったんだ」

「お姉様が頼るとか、アレも身の程知らずね」

「ネハラ、黙ってろ」

「二人に聞くが、私は誰かから頼られる奴か？誰かに頼る奴か？」

「お姉様が誰かに頼るなんてありえません。美も力も持っている、頼られる側です」

「アタシもそう思います」

二人は私の予想通りのことを返してくれた。

「お前らの言う通り、私は頼られる側の者なのだろう。だから、嬉しかった」

「「え？」」

「誰かに頼れるのが。なまじ私はほとんどが出来たから頼る必要が

なかった。でもこの世界では、私はなんにも出来なかった。無力だった。その時、夏哉が現れて、頼ってくれって言ってくれたんだ。胸のつかえが取れたようだった。自分の重荷を背負ってくれて凄く楽になった。その時から私は夏哉を愛おしく思い始めた。アイツはな、見知らぬ他人のために体を張って守ってくれるような奴なんだ。それはお前らもそうなんだが、なんて言えばいいんだろうな。とにかく、私はお前らのことも好きだが、お前らが私に向けるような感情を私は夏哉に向けているんだ。お前らがこんな所まで来て連れ戻そうとするように、私もここで夏哉たちに降りかかる火の粉を払いたいんだ。だから済まない。私はお前らとは帰れない」

頭を下げる。

長々と喋ったが、それで二人が納得するとは思っていない。

「分からない、ですよ。だって、種族が違うじゃないですか。それなのにどうしてお姉様は?頼ってくれ?の一言でここに留まるんですか?頼って欲しいなら、私たちに言ってくれれば、いつだって頼ってくれればよかったのに……」

ネハラの言葉に私は答えようとした。
しかし答えられなかった。

「アイツは、凄いクーお嬢のことを想ってるんだ」

先にヤチクが答えたから。

「アイツ、クーお嬢の為にアタシを怒鳴りつけたんだ。その言葉が凄い突き刺さってきた。ほんの少ししかクーお嬢と一緒にいないのに、クーお嬢のために敵であるアタシたちのことを気遣ってるんだ。

いや、もしかしたら敵とすら思っていないかもしれない」

「ちょっ、と、何？何言…ネハラ、アンタまさかとは思うけど」

「なんだ？」

「あれに愛情を抱いたとか言わないわよね？」

ヤチクの肩がピクッと動くのを、私は見逃さなかった。
ヤチクの胸ぐらを掴む。

「ヤチク～。貴様も夏哉を狙う気か？あいつ競争率高いんだよ。人がいっぱいなんだよ。どうしてあいつはこうも簡単にフラグを立てるかな～」

「え、きょうそう？ふらぐ？」

「言っておくがな、アイツとは一緒の狭い部屋で暮らしてるんだ。貴様なんぞに夏哉はやらんぞ」

「お、お姉様！？いい、今、一緒に暮らしてると！？ふふふ、やはりあれは殺すべきよ」

「まてネハラ。言っただろ？ナツヤはクーお嬢をきずつけたりはしないと」

「止めるな！というか、何ナツヤを庇ってるわけ！？本気で愛してるの！？」

「いや、愛してるというか……。アイツはクーお嬢のことをよく思

ってくれていい奴だし、力も結構あって、あんな傷を負っても一歩も引かないなんて凄いとは思っているが、別に……」

「何よベタほめじゃない！！この裏切り者！！アンタのお姉様に対する愛は偽物が！？何がヤチク(あいぞう)よ、そんな名前さっさと捨てなさい！！」

「おいネハラ、今のは聞き捨てならないぞ。アタシのクーお嬢に対する思いは本物だ！！それを侮辱するならネハラ(ぎまい)とて容赦はし――」

「怪我人は黙って寝てろおおおおおおおおっ！！」

私は持てる最大の力で二人に拳骨を落とす。

二人は気絶した。

全く、どうして怪我人というのはこうも騒がしいんだ！

第六話　《十五章》話し合い（後書き）

沙鳥「第六話残りエピローグー！！」

アン「もう終わるな。結局沙鳥出番らしい出番なし」

沙「やめてアンちゃん！！私それ傷つく！！」

ア「済まないな。それで例によって作者は？」

沙「今日はね、こないって」

ア「なんで？」

沙「バイト――まぁ簡単に言ったらお仕事やってお金を稼ごうとしたんだけど、その働くところで、？お前はここで働くな？てな風になっちゃったの」

ア「よかったじゃないか。その分その時間を小説に回せるぞ」

沙「あ、あのね、流石に今回はそっとしてあげて。そりゃ確かに周りから見れば？たった一回で何へこたれてんじゃこら？ってなるけど、それなりにダメージ大きいみたいだから。作者甘えん坊だからここで追い打ち掛けちゃうと余計小説がアホみたいになっちゃうよ」

ア「む、それはまずいな」

沙「しかもなんか知らんけと頭の中でポエムなんぞを作り出しちゃって」

ア「ぽえむ?」

沙「詩だよ詩。自分の気持ちを文章にしたもの。大抵こう言うのは素人が書くとただの恥ずかしい文章になるんだけどね」

ア「へぇ」

沙「まぁ作者の話はこの辺で。空ねぇとファルコさん、感想をありがとう!!これからもよろしくっ」

ア「皆も感想や評価を気軽にくれ。感想は百パーセント返すから」

沙「でわみなさん」

沙&ア「「まったね～」」

ア「二人同時に言うのは久し振りにやったな」

沙「そうだね」

第六話　《エピローグ》愛しみ

俺達は真樹の治癒があらかた終わると、寮に向かって歩いていった。
るあちゃんと遊ぶという理由でだ。
自分の部屋につき、ふと思った。
「どうしましたの？」
急に固まった俺を不思議に思ったようで、真樹が聞いてきた。
「俺今鍵ない」
「え、夏君部屋の鍵なくしたの！？スペアは！？」
「あ、いや、なくしたんじゃなくて、香苗に預けたままなんだよ。携帯ごと」
「はぁ、ほんとにもう、夏哉は携帯に無頓着すぎません？」
「いや、今回しょうがなくね？」
真樹には今日のあらましを説明した。
真樹も真樹で、突然アンのかけた幻術魔法が消えたので何かあると思っていたらしい。
「しょうがなくありませんわよ。普通携帯はポッケに入れません？それはともかく、香苗ですわね？」

真樹は携帯を取り出し、香苗に電話を掛ける。

「もしもし、香苗？……今どこにいます？……今夏哉を回収しま――」

『え、夏哉君!?今いるの!?ねぇどこ!?どこにいるのっ!?』

携帯から大音量の叫び声が聞こえた。

少し離れた俺にも聞こえたんだ、それを耳元で聞いた真樹なんて三半規管がイカレたのかフラフラしている。

それを支え、真樹から携帯を取り上げる。

耳元から少し離し、声を掛ける。

「あー香苗？お前ボリュームさげ――」

『夏哉君!!今どこ!?どうして教えてくれなかったの!?大丈夫!?怪我してないっ!?』

「だあ、落ち着け!俺大丈夫。モーマンタイ!俺も空ねぇもアンも無事!!」

『そっかぁ、よか――あれ？なんで姉様がいるの？』

「え？……あぁ、そういやお前と別れた後に空ねぇと会ったんだ。成り行き上な、空ねぇも戦ったんだよ」

『姉様が？どうして？』

「言いたくないんだって」

『そうなんだ。それならしょうがないけど……で！今どこにいるの！？』

「俺の部屋の前。取り敢えず家に戻ろうとしたんだけどさ、お前俺の荷物持ってる？」

『うんっ。今灯里ちゃんの部屋にいるよ』

「あ、下で呼ぶようになったんだ」

『うん。じゃあ待ってるね』

「あいよ～」

ぽちっと通話を切る。

「真樹、大丈夫か？」

「え、ええ、なんとか……」

未だ耳を抑えている。

「今灯里のとこにいるって。今更だけど二人も来る？」

「ここまで来て、ほんと今更ですわね」

「私その子知らないんだけど、いいのかな？」

「大丈夫でしょ。じゃあ行くか」

「……夏君」

灯里の部屋に向かおうとしたとき、空ねぇに止められた。

「ん？」

「あのね、背中の服が破けてるんだけど……てか私が斬っちゃったんだけど、大丈夫？」

「……忘れてた」

そうだった。

そういえば斬られてたんだ。

首を回してみてみると、ちょっとだけ斬れてるのが見えた。

「ま、しょうがないでしょ。なんとかなるって」

取り敢えず前向きに考え、灯里の部屋に向かう。

コンコン。

「は～い」

扉の向こうから灯里の声が聞こえた。

扉が開くと、予想通り灯里が出迎えてくれた。

「あれ？柊と早乙女さんだけじゃないの？」

「あ～ごめんね。成り行き上夏君と一緒になっちゃって。最近転校してきた空揺火津那です。空ねぇって呼んでね。因みに同い年」

「あ、峯岸灯里です。じゃあ上がってください」

「「お邪魔します」」

「お邪魔しますわ」

俺たちが上がると、灯里が袖を引っ張ってきた。

「どうした？」

俺の声で真樹と空ねぇが止まる。

灯里は二人に先を促して行かせる。

玄関に二人きりになった。

「ちょっと！柊何別の女の人誑し込んでるの！？」

小声で俺に向かって叫んでくる。

別の女の人とは空ねぇのことだろう。

「いや、誑し込んだつもりはないんだけど……。一応ただの友達とは思ってるよ？」

「じゃあ柊はただの友達と一緒に、デート相手をほっぽったってこ

と?香苗ちゃん、凄い寂しそうな顔してたよ。それに沙鳥さんも」

「沙鳥もいんのか。まぁそれは置いといて、今回はしょうがなかったんだよ。香苗たちとおんなじくらい大事な人がピンチだったから」

「どうせその人も女の人なんでしょ?この誑し」

うぐ、否定したいがアンは女だからなんとも言えない……。

と考えて、一つ不思議に思ったことがあった。

「てかさ、どうして灯里がそんなピリピリしながら俺に言うわけ?まさか俺にホの字じゃないでしょ?」

「そんな訳ないでしょ。るあに悪影響を与えない為よ」

これが漫画とかだったら?あぁツンデレかな?と思えるが、灯里は見る限り真顔だ。

多分本当にそう思ってるんだろう。

「悪影響とかは大丈夫。俺が何かするつもりもないし、周りも何かしようとする奴じゃないよ」

「まぁそれならいいんだけど。取り敢えずるあが待ってるから来て」

「はいよ」

灯里につれられてリビングに入ると――

「あ、おに――」

「「夏哉（君）っ！！」」

子供を差し置いてでっかいのとちっちゃいのが飛び込んできた。
るあちゃんもこちらに来ようとしていたが、出遅れている。

「こら、ちょっと今はやめなさい。他の人が見てるでしょ？特に真樹と灯里が殺気立ててるじゃないですか。今は我慢してくださいよ～」

「夏君、口調が変わってるよ」

こうでもして気を少しでも紛らわさないと二人の殺気に押しつぶされそうなので。

肩に手を置いて押すと、二人は俺から離れた。

「因みに灯里ちゃん。どうして灯里ちゃんもお怒り？実は夏君狙ってるの？」

「違いますよ。ただるあの前ではやめて欲しいだけで」

「まきおねえちゃん、ねらうって？」

「それは峯――灯里お姉ちゃんが夏哉のこと好きかってことですわ」

「ちょ、早乙女さん！何教え――」

「え、じゃああかねぇはおにいちゃんのことすきじゃないの？」

「狙ってない、ということは一緒にいたいと思っていないということですの」

「そんなのだめっ！あかねぇはおにいちゃんとけっこんするの！！」

「ブッ！？る、るあっ！？何言い出すのよ！？」

「だっておにいちゃんとけっこんすればおにいちゃんかぞくになるんでしょ？るあおにいちゃんほしいっ！」

欲しいってあなた……。

俺はるあちゃんのところまで行って腰を下ろす。

「るあちゃん。結婚って言うのはね、お互いが本当に好きな人同士がするものなんだよ。だからるあちゃんがあかねぇの結婚相手を決めちゃ駄目なの。分かる？」

「う、ううぅぅ～……じゃあるあがするっ」

ちゅっ。

るあちゃんの顔が近づいたと思ったら唇が触れた。

人生四回目のことだ。

「へへっ、これでるあとおにいちゃんはこいびとだぁ」

ゾクッ！！

全身で殺気を感じた。

さっきのとは比べ物にならないほどの恐怖を感じる。
目は向けたくない。
見ないでこれほどなのだ、直視したら心臓停止してしまう。

「ひいいいいらぎいいいいい」

灯里のドスの利いた言葉が飛んでくる。

「ひうっ！？」

あまりの怖さに留あちゃんは涙目だ。

「るあちゃん。俺ね、今から鬼ごっこやってくるね。だから、るあちゃんはあそこにいる空お姉ちゃんと一緒にここで待っててくれるかな？」

「ぐずっ……、うん……」

頷いたのを確認した瞬間、俺は走り出した。
後ろから足音が複数聞こえる。

靴を履き、扉を開けて、階段を飛ぶ。
比喩でもなんでもなく、一番上から下までひとっ飛び。
因みに九段。

そうやって降りて外に出て、後ろを確認すれば、三人の般若が追ってきた。
俺からの距離がかなり近い。

「まっず……！」

すぐさま前を向き、走り出す。

「てか俺悪いことしてなくね!?でもさすがに小学生はアウトだよね!!いやいやいや、あれはノーカンでしょ!子供のお遊びでしょ!でもやっちゃったのは事実だし!!」

変な自問自答を繰り返して、T字路を左に曲がった時、予想もしない人物と出会った。

「や、ヤチク!?」

先程まで死闘を繰り広げていたヤチクがいた。

「あ、ナツヤ。探してたんだ」

しかし今のヤチクには戦う意志がないようだ。

それを感じ取った瞬間、俺は肩を掴んで迫る。

「ヤチク!お前魔法で姿隠すやつ使えない!?」

「は?まほう?」

「あー違う!奇法だ奇法!!」

「使えるが――」

「今すぐ俺とお前の姿を消してください!!」

「あ、あぁ、分かった」

ヤチクが頷いた瞬間――

「ロリコーーーーーーンッ!!」

沙鳥が叫びとともにやってきた。

ビクッと反応してしまうが、なんとか声を出さずにすんだ。

頼む、ヤチクの魔法が聞いてますように!!

心で何度も願う。

そして沙鳥たち三人は、俺たちの前を通り過ぎていった。

十秒待ち、あいつらが戻ってこないことを確認して、ヤチクに話し掛ける。

「ヤチク、本当に助かった!ありがとう!!」

「いや、それはいいんだが、アイツらはなんだ?アタシが震えるほどの殺気を放っていたが……」

確かによく見ると手が震えていた。

「あー、えっと、俺とアン――じゃなくてクーレラの知り合いと思ってくれれば」

「まて。ナツヤとあの女以外にアタシたちのことが見えるのか?」

「あぁ。さっきのちっちゃいのと黒髪のがよ――」

言い掛けてやめた。

そう言えば俺たちって一応敵同士だったんだ。

「あのさ、今から戦ったりする？」

俺が言うと、苦笑された。

「安心しろ、そんなことするつもりだったらお前の頼みは聞かないし、今すぐ殺ってる。今でさえ浮いてるのがやっとなんだ」

「そうなのか。わりぃ、やりすぎたかも」

「何、お前が謝る必要はない。むしろ礼に来た」

「礼？俺なんかしたか？」

思い出すはヤチクをぶん殴った記憶。

こいつがマゾじゃない限りは喜ばれるようなことはしていない。

「お前の言葉で目が覚めた。魔界にいようが地球（ここ）にいようがクーお嬢はクーお嬢だ。クーお嬢が入れば人が集まるのは自然の摂理、ナツヤたちがクーお嬢の傍にいるのは当然。済まなかった、ただ感情に任せて殺そうとして」

ペコリと頭を下げられた。

やっぱり魔族っていうのは地球に偏見を持ってるだけで、基本いいやつなんだ。

タクノムだってそうだし。

「まぁ気にするな。お互い一応無事なんだし。それよりさ、クーレラは一緒じゃないの？」

「ナツヤ、アタシに気を使わなくていいぞ。？アン？って呼んでも構わない」

「あぁそう？で、アンは？」

「ネハラと一緒に何処かにいる。ネハラはまだお前のことを認めなくてな。しょうがないから一人で来た」

「そっか。それでさ、あの二人のことなんだけど、言ったらなんか魔族の人たちに命とか狙われそうで……」

沙鳥はともかく、香苗は魔族にとって敵方の聖族の依代だ。

いい風には見られないだろう。

「それは気にしなくていい。アイツらはクーお嬢の知り合いなのだろ？」

「あぁ」

「なら何をするつもりもないし、秘密にして欲しいなら言わない」

その言葉は、直感だけど信用できた。

だから言うことにする。

「あの二人な、依代だから。ちっちゃいのが聖族の方で、黒髪のが魔族」
「依代か。それなら納得だ」
「襲わない？」
「襲わない」
「ならよかった」
ほっと胸を撫で下ろす。
「そう言えばさ」
「ん？」
「お前たちってアンを連れ戻すので来たんだよな？その、どうするの？」
「どうする、か。まぁ任務失敗だからな」
「処罰的なのは大丈夫？」
「それは分からないが、死ぬということはないだろう。それよりナツヤ、手を出してくれないか？」
「手？いいけど」
言われた通り差し出す。

ヤチクは俺の手を掴むと、くるっと手の甲を上にした。

「アタシの？ヤチク？という名前は《愛憎》という意味だ。名前のことは知ってるか？」

「確か、その名前通りの存在になるんだっけ？」

「そうだ。アタシは愛と憎しみに生きている」

ヤチクは跪き、そっと俺の手の甲に唇をつけた。

「アタシは、これからナツヤを愛し、支えていく」

誓いの言葉の様なものが紡がれていった。

「あ、えっと、これは……」

「堅く考えなくて良いです。ただの決意の表れ、みたいなようなものですので。アタシはナツヤ様を愛する対象とする、という」

「あ～と、もしかして、ここにとどまったりしたり？」

「愛すべき人がここに二人もいるのです、そう考えております」

「いや、結構大変だ――」

言葉を途切らせ、固まった。

見てはいけないものを見てしまったから。

ヤチクも後ろを振り返り、やはり固まった。

「「ヤチク？」」

怒気を含んだアンとネハラがいた。

「く、クーお嬢と、ネハラ……？ど、どうしました？」

「どうした、ねぇ。ヤチク、貴様夏哉に今何をした？」

「何、とは……ただ単にナツヤ様を愛する誓いを……」

「あんた、誰に誓ってるのか分かってるの？異世界の生物よ？」

「いや、それは関係ない。どんな生き物だろうが、ナツヤ様は愛するに足るべきお方だ」

「さっきはそんなんじゃないとか言ってなかった？」

ネハラにジト目で睨みつけられたヤチク。

「それは、その、はっきり言うのは憚られたから……」

「いやそんなことはどうでもいい」

と、アン。

「それよりヤチク、貴様ここに留まるとか言ったな？どこで暮らす気だ？」

「それはクーお嬢かナツヤ様のところで――」

「却下だ。私は今夏哉と同棲中だ。それにお前はこの世界に干渉出来ないだろ。それで生活さていける気か？」

「愛があれば可能だと思っています！それと、二人のもとが駄目ならどこへでも構いません。この世界に干渉できないのでどこでも変わりませんので」

「ちよ、待ちなさい！魔界はどうするのよ！！裏切る気！？」

「そうなるな。アルクシア様によろしく言っといてくれ」

「何人を伝言板代わりにしてるのよ！！だったら私もここに残るわ！！あんただけがいい思いするなんて許さないんだからっ！！」

な、なんか話が凄い風に流れていくな。
普通に考えて神に逆らうなんてとんでもないことなのではないのでしょうか？

そんな感想を抱いた瞬間、俺の耳に地獄の声が聞こえた。

「なぁぁぁぁぁぁぁぁぁつやぁぁぁぁぁぁぁッ！！」

振り返れば、鬼の形相の沙鳥が迫ってきた。
その後ろに二人が付いてきている。

咄嗟にヤチクの手首を掴み、全力で一歩を踏み出す。

４、５m離れているアンたちの後ろで足を着け、また一気に駆け出す。

一目なんてどうでもよかった。

「な、ナツヤ様？」

「ヤチク、確認するけど、本当にここにいるんだな？」

「はい、そのつもりですが……嫌というなら――」

「嫌じゃない」

「即答ですか」

「まぁな。で、暮らすなら俺のところにいていいから。でも条件。俺の大切な人には手を出さない」

「もとよりそのつもりです」

「敬語はなし」

「よろしいのですか？」

「よろしいのです」

「分かった」

「よし、そんだけだ。よろしくな、ヤチク」

「……あの、ナツヤさ――ナツヤ、その、アタシに名前をくれないか？」

「名前？」

「けじめというか、クーお嬢のようにこの世界でのアタシの名前を持ってみたいと思って……」

「えぇっと……ラス……ラスク」

「ラスク？」

「駄目か？」

「ラスク、ラスク……分かった。今日からアタシはラスクだ」

「じゃあ改めて、よろしくな、ラスク」

「あぁ、よろしく、ナツヤ」

こうしてヤチク改めラスクが俺の傍にいるようになった。

因みに。

「どうして俺のことが好きになったんだ？」

「ナツヤの言葉が心に響いたのと、強くて格好良かったから」

とのこと。

後書きという名の雑談？

作者＆ａｍｐ；夏哉「「どうしてこうなった」」

沙鳥「何二人でｏｒｚしてるの？」

夏「だって！なんでラスクが一緒に暮らすことになってるの！？確かに許可はしたけどさ！！」

香苗「あぁそのこと。で、作者はなんで？」

作「夏哉と同じ。どうして留まることになってるんだよ」

真樹「あなたが決めたことでしょうが！！」

アン「そうだぞ、全く。確か以前後書きで、夏哉に惚れる女はいないとか言ってなかったか？」

作「忘れた？俺有言不実行よ？」

ア「威張って言うな」

作「いやでも今回本当にね、なんでこうなったなの。本来はラスクとネハラは帰る予定だったの。なのにどうして留まってんだよ。微妙に話がずれてきそうな気がする」

沙「もう、後先考えずにやるからそうなるんだよ」

作「すみません……」

真「ところで、もうお気づきの方もいらっしゃると思いますが、なんとこの後書(ざつだん)きでちょうど百話なんですの！」

沙「いっいえ～い！！」

香「すごいすご～いっ！」

ア「本当によくここまで続いたものだな」

夏「しかもちょうど後書きで、なんて。キリがいいな」

作「ふっふっふ～、皆の者、聞いて驚くなよ」

ア「急に口調が変わったな」

作「なんと！今回！第六話！……」

香「た、溜めるね～」

沙「すっごい気になる」

作「ＰＶ２００，０００突破しましたっ！！」

夏＆ａｍｐ；香＆ａｍｐ；沙＆ａｍｐ；ア＆ａｍｐ；真「「「「「

…………………………………………………ええええええ

ええええええええええぇぇっ！？」」」」」

作「うをっ！流石に五人は厳しいぜ」

沙「ちょと、作、嘘でしょ！？」

香「二十万！？待ってよ待ってよ！」

真「確か十万が一月に出たばっかりですわよ！？」

夏「３ヶ月！？三ヶ月で十万もくるのかよ！？あり得なくね！？」

ア「おい作者！見間違えではないんだろうな！？」

作「ほんとだって！！見間違えはない！！それから、総合評価が３３３ｐｔとぞろ目です！さて皆、こんな時に言う言葉は！？」

作＆ａｍｐ；夏＆ａｍｐ；香＆ａｍｐ；沙＆ａｍｐ；ア＆ａｍｐ；真「「「「「ありがとうございます！！」」」」」

作「ほんっとめっちゃ嬉しいっす！ねぇこれ目標完結までＰＶ５００，０００とかじゃ駄目かな！？」

香「もし、もしだよ？このままのペースで行っちゃったら、１９０話で五十万！」

作「いける！俺目標二百話だし！」

夏「頑張れ作者！今日ほど応援しない日はないぞ！」

作「おう！さて、まずは謝辞を。空ねぇ、Ｃｏｌｌｔｙさん、ｋｉｉｔｉさん、ソラトさん、斗真さん、ファルコさん、ｒｙｏさん、第六話で感想をくださいましてありがとうございます。すんごい励みになってます！これからも是非見てください！」

真「で、作者、この後は何をするんですの？」

作「あぁ次は、没ネタ披露祭を催そうと思っています！」

沙「没ネタ？」

作「まぁ結局二つしかなかったけど……。まず第一に、第六話の十一章を思い返してください！」

――――――――――――

「お姉様はどこ！？」

緑髪の女性が確認をとると、怒気を含めた質問を金髪の女性がする。

お姉様とは誰のことだろう。

ここに来てまだ月日が経っていないため、私には分からない。

でも夏君には検討はついたようだ。

「お姉様って、アンのことか？あ、いや、アンじゃ分からねぇか。クーレラの――」

言葉の途中で、音もなく風が吹き抜けた。
夏君が体を傾けると、頬に一筋の傷が生まれていた。
そしてそれと一緒に、こめかみも切れる。

ぱっつーん。

こめかみも切れるということは、そこにある髪も切れるということで、そこだけ綺麗に毛先が切りそろえられてしまっている。

ちょ、えええぇぇぇ！？

私は言うか言わないか迷った。

「クーお嬢の名を容易く口にするな」

私が悩んでる間にも話が続く。

「で？あいつをどうする気だ？」

「連れて帰る。クーお嬢は魔界にいるべきお方だ。この様な腐った居場所ではない。そして、この腐った居場所にとどめている貴様は殺す。さあ言え！クーお嬢はどこにいる！？」

「取り敢えず最後の質問から答えると、あいつはもうすぐこっちに来る」

お願い！

そのぱっつんでシリアスな空気はやめて！
笑いたいのにぜんぜん笑えないよ！！

「は？どういう意味よ？」

ていうかお願い魔族の人たちつっこんでよ！
ドンドン話進んで言っちゃうから私もう指摘できないし！

「あいつはな、俺と空ねぇが戦おうとしてるところを見逃すなんて器用な真似は出来ねぇんだよ。アンは必ず来る」

「アン？ふざけんじゃないわよ！！何お姉様をそんな変な名前で呼んでるのよッ！！」

「それから、魔界にいるべき？腐った居場所ではない？そんなのテメェラが決めんじゃねぇ。それはあいつが決めることだ。名前だってそうだ。あいつは昔じゃなくて今（クーレラ）（アン）って呼んでほしいって決めたんだ。だから俺はあいつの決めたことに従う」

もういい。
夏君の髪は気にしない。
集中してシリアスな気持ちに切り替えよう。

「確かにお前らからしたら俺はあいつを奪った最低な男って思われても仕方がない立場なのかもしれない。でも」

チラチラ。

「俺が傷付いたり、死んだりしたらあいつは絶対悲しむ。俺はそんなとこなんて見たくないし、見させたくもない。だから！」

チラチラチラチラ。

「お前らの要求には答えられない！あいつは俺を頼った！！俺はあいつを守るって決めた！！もしお前らがそれでもアンを強制的に魔界に帰そうと思ってるなら……」

やっぱり気になりすぎる！！

「意地でも止めてやる！」

結局指摘は出来ずに、戦いに突入してしまった。

――――――――――――

沙「ぷっ……くっ、くく、もみあげぱっつんとか、そんな……くふっ」

香「さ、沙鳥ちゃん、そ、そんなに、笑っちゃ駄目、だってば……」

ア「そう、だぞ。夏哉は、本気で私のために、動いて、くれて集中、してたんだ、から」

真「……もう、我慢できませんわ！あははははははっ！！な、夏哉が、もみあげぱっつん！アハ～、もうだめ、おなかが、痛すぎる～」

沙「ま、真樹ぃ～、私ももうだめ～……おなか痛すぎるよ～。どう

にかしてぇ～！」

夏「作っ、おま、ああ～！！お前何やってくれてんだよッ！！」

作「どうよ皆？集中しすぎてもみあげに気付かない夏哉君は？」

香＆ａｍｐ；沙＆ａｍｐ；ア＆ａｍｐ；真「「「「さいっこう！」」」」

夏「あぁ次だ次！さっさと次ぎ見せろ！！」

作「はいはい。じゃあ次は十二章を」

――――――――――――

ほかの魔法が発動しないかどうかを意識しながら拳を振るう。

ヤチクはそれを躱し、口から炎を吐く。

それをしゃがんで躱し、顎にめがけてアッパーを食らわす。

ヤチクは体を反らして躱そうとした。

避けられる。

そう思った瞬間、

もみゅん。

「んあっ！」

拳が物凄い柔らかいものに当たり、なまめかしい声が聞こえた。

見れば、ヤチクの巨乳を殴ってしまっていた。

「あ……！ご、ご、ごめん」

「あ、いや、その、気にするな。なんか変な感じはしたけど、大丈夫、だから」

「……」

「……」

気まずい空気が流れる。

「「あの」」

なんとかしようと声を掛けてみたが、向こうも同じことを考えていたようで、声が揃う。

また余計気まずい雰囲気に陥る。

「あ、あの、さ、ほんと、悪かった。まさか、む、胸に当たるとは、思ってなくて……」

いまだに拳に胸の感触が残っている。

「き、気にするな。こんなのを大きくした、私のせいなんだから…」

「いや、でも、やっぱ女の人の胸、触っちゃったわけだし……」

「あ、アタシは貴様等と同じ種族ではないから、大丈夫だ」

「確かに、そうだけど――」

「貴様ら、何を遊んでいるんだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

突然アンの怒声が聞こえ、強烈な制裁を受けて俺たちは気絶した。

――――――――――――

香＆amp;沙＆amp;ア＆amp;真「「「「じとー……」」」」

夏「そ、そんな視線を向けるな！！あれは没ネタなんだから、実際俺がしたわけじゃない！！」

作「まぁこんな感じで、いろいろやったらアウトなのでやめました」

夏「その判断は非常に正しい！！」

作「さて、そろそろやることもなくなってきたので、ちょっとやっ

てみたいことがあるので、ここで言ってみます」

香「何やるの？」

作「ズバリアンケートです」

ア「アンケート？」

作「今まで百話まで投稿してきました。その中で、『このシーンがよかった！』『この台詞が好き！』というのを聞いてみたいと思います」

香「あの、それ人集まるのかな？」

作「多分集まらない！」

沙「断言しちゃった」

作「出もやってみたかったからしょうがない。簡単なルールとしては、第一話　《プロローグ》から第六話　《エピローグ》まで。期限は第七話　《エピローグ》まで。後書きの内容でも可です。皆、ぜひ送ってね！待ってます！！」

夏「真樹、これどうなると思う？」

真「予想は六人ですわね」

夏「六人じゃアンケートにならねぇな。こう言うのって最低二十人は必要だよな」

真「それでも少ないですわ」

ア「つまりボロボロに終わるってことか」

沙「第一好きな台詞ってさ、私たち印象的な台詞言ってる？」

香「言ってないと思うな～」

作「ちょっと、ボロクソ言わないでおくれ。そのとおりだとしても成功はさせたいんだから」

夏「まぁ成功はさせたいわな。じゃあ皆、出来れば協力してやってください」

真「真面目にでもおふざけにでも大歓迎ですわ」

ア「皆の応募待ってます」

沙「いつも小説読んでくれてありがとうっ」

香「これからもまだまだ続くんでよろしくお願いします」

第七話　《プロローグ》朝御飯

――なつや～、あさだぞ～。

何かフィルターがかかったような声が聞こえてきた。

その後体を揺さぶられる。

――ごあんしんください。おこせばいいのですね。

同じ様にフィルターの掛かった、しかし別の声が聞こえた。
さっきのより少し高い音。

かなり重たい瞼に力を入れ、目を開く。
ぼやっとしか見えない視界の中心に、何かを振りかぶる様な物が見えた。

「ふんっ！！」

「のわっ！？」

咄嗟だった。
勘と言ってもいい。
俺は重たい体に鞭を打って捻った。
ちょうどそこに、音もなく何かが通り過ぎた。

首を回してみると、ネハラが雷の剣を振りかぶっていた。

「おいコラァ！ネハラてめぇあぶねぇだろうが！！」

「あんたがお姉様の言葉に反応しないのがいけないんでしょうが！！ていうかお姉様より後に起きるとか、何様のつもり!?給仕なら主より先に起きてお世話しなさいよ!!」

ネハラとヤチク改めラスクは結局家に泊まることになった。
そして昨日の夜、アンが来てからのあらかたのことを説明した。

「俺たちはそんな関係者ねぇって昨日から言ってんだろうが!!」

本格的に対峙しようと腕に力を込めて立ち上がろうとしたとき、手のひらに柔らかい感触があった。

恐る恐る首を傾けてみると、

俺の左手が、ラスクの太ももに触れていた。

「おはよう、ナツヤ」

特に顔色も変えず、挨拶をする。

「……」

俺は立ち上がり、部屋の隅にうずくまる。

「なんで、どうして俺はラブコメの主人公してんだよ?おかしいだろ。あり得ないだろ。何いきなり太ももに触ってるんだよ。気付よ俺。てかまず何堂々と女子を住まわせてんだよ。しかも異世界の人とか。どんだけイベント起こせば気が済むんだよ。しかもいろいろフラグなんて立てちゃって。俺もう主人公からはあらがえないのか

よ」

「クー――いやアンお嬢、ナツヤは何をしているのでしょうか？」

「まぁ、あれだ。いろいろ悩める年頃なんだよ。お前がこの世界の文化を学べば、多分分かる」

「ていうかあんなうじうじした男のどこがいいのよヤチク」

「あれがナツヤの全てではない。というよりまず、あんな風にうずくまるナツヤ、愛おしいではないか」

「……ごめん、私もうアンタのこと分かんなくなってきた」

「それより夏哉、そろそろ朝御飯が食べたいんだが」

アンの要求を聞き、のそりのそりと立ち上がって朝の支度をする。

俺とアンは地球食、ラスクとネハラは魔界食を食べる。

「そういやさ、ラスクとネハラは飯平気なの？亜空間に食料あるんだろうけど、こっちのもの食えないんだし」

「その点は心配いらない」

ラスクが空中に線を引き、ラスク専用の亜空間を開く。

それを直径２ｍほどの円に広げ、中を見せてくれた。

中には、畑？

「亜空間の中に田畑を設けているから生産できる」

「うわ、なんでもありだな……」

つい呆れてしまう。

まぁ確か亜空間の広さは魔力によって変わるとか言ってたから、畑を作れるほどの魔力を持っているラスクが凄いというわけだが。

「もしもの為に作っておいたんだが、役に立った」

「どんなもしもだよ」

「一人なんにもない更地に向かうときとか、だな」

「そんなところに行くのかお前らは」

「二人はな。私は行かなかった。というより行かせてくれなかった」

「当然です！どうしてお姉様がそのようなところに足を運ばなければならないのですかっ！！」

ネハラが興奮したように言う。

アンは地球で言う沙鳥の立場なのだろうと想像する。

……なんかしっくりくる。

「ところでアンお嬢、ひとつお聞きしたいことがあるのですが、よろしいでしょうか？」

ラスクが真剣な表情でアンに聞く。

「なんだ？」

それを見てアンも真剣みを帯びる。

「異界の生物との子は授かれるのでしょうか？」

「ブフッ！？」

口に含んでいた味噌汁を吹き出してしまった。

そして目の前に座っているネハラを通り抜けて床とテーブルに垂れる。

余談だが、この世界に干渉できないはずの二人は床に座っている。

理由はネハラがこの部屋の床に土の板を張ったから。

そうすることによって浮かなくてもこの部屋に入れる。

最初はアンがやろうとしたことだが、誰がお姉様にそんなことをさせますかということでネハラがやった。

「……あんた、何飛ばしてくれてるのよ」

まずい、完全にネハラキレてる。

そりゃ当たらないとはいえ口のもんを吐き出されたら誰しもキレるだろう。

正直申し開きもない。

「あ、ほんっとごめんッ！！今のはマジ俺が悪かった！でもいきなり子供をどうのこうのと言ったラスクも悪い！！」

「あ、アタシ!?アタシなんか悪いこと言ったか!?アンお嬢、アタシ特に言ってませんよね!?」

「言ってないな。夏哉、ラスクの何が悪いんだ?」

アンまでも訊ねてきた。
ちゃかしとかからかいというものは含まれていない。

俺は視線を逸らす。
俺だって年頃の男だ、そういうのに興味はある。
だからそういうことを想像してしまう。

だかしかし、それを飯時に言えるだろうか、いいや言えない。
反語。
しかもそれを女性にだ。

「あ、いや……、そういう話は飯時に聞くな。マナーがよろしくない」

「そうなのか?魔界ではよく出る会話なんだが……」

ラスクは少しバツの悪い顔をする。
そんな顔をさせてしまったことに罪悪感を覚えなくはないが、今回は仕方ないという風にしておいてもらおう。
てかそんな風な会話堂々と出来るの!?

「……お前らさ、そういうの恥ずかしくないのか?」

「は?いやいや夏哉、どこに恥ずかしい要素があるんだ?」

「いやだって、その……そういうこと、するわけだろ？」

まずい、顔が熱すぎる。

俺ってウブなのか。

「だから、手を一本食べることのどこが恥ずかしいんだ？」

……は？

今、アンはなんと仰いました？

「待て。待て待て待て待て待て待て！何？なに？なんて言った？なんだって？」

「何慌ててるんだ？」

「……あの、お姉様。予想ですが、この世界では子供の作り方が違うのではないですか？」

「え、そうなのか！？夏哉、そうなのかッ！？」

「あ、まぁ、そうなんだけど……」

俺はアンを視界に入れ、想像してしまった。

裸同士の俺たちが、ベッドの上で、俺がアンの手をむしゃむしゃ食

べているところを。

「――――――!?」

必死に吐き気を抑え、台所まで行き、一気に戻した。

「おえぇぇぇぇっ!!」

「な、ナツヤ!?どうした!?アンお嬢!ナツヤはどうしたんですか!?」

「わ、私にも分からん!夏哉、どうした!?」

アンとラスクが叫びながら、ネハラが無言のまま駆けつけてきた。

喉が痛い。

「……アン、ラスク、子作りのこと、絶対沙鳥とかに言うなよ?」

「わ、分かったけど、なんで?」

「……かなり怖いから」

「え、何が?」

アンとラスクは首を傾げ、ネハラは興味がないような態度をとって朝飯を終わらせた。

これから学校に向かう。

第七話　《プロローグ》朝御飯（後書き）

沙鳥「百一話目投稿っ！！」

真樹「まだ、まだわたくしの出番は来ないのですか！？」

沙「ま、真樹、おちつこ？大丈夫だから。絶対出番はあるから」

作者「そうだぞ～。なんたって周りがうらやむことを真樹はやっちゃうんだから」

真「なんですのそれは？」

作「そりゃまだ秘密だ。俺の頭の中では次の次にその話を出す予定だけど……俺のことだ、多分もうちょい後になると思うけど、確実に出す」

沙「自分でそれ言っちゃ世話ないね」

真「全くですわ」

作「そう言うな。一話フル出は何回かやる予定だし、一人称は、分かんないけど活躍はするはず。はぁ、どうして人が多いんだろう。夏哉に香苗に沙鳥にアンに真樹にラスクにネハラ。ところによって灯里に『その想いは変わりますか？』グループ。学園側は動く人がいっぱいで大変」

沙＆ａｍｐ；真「「アンタのせいでしょうが！！」」

作「さて、前回アンケートをやった件ですが」

沙「うわ、堂々と無視したよ」

作「なんと四人の方からきました。ソラトさん、ｋｉｉｔｉさん、空ねぇ、Ｃｏｌｌｔｙさんありがとうございます」

真「それとファルコさんも感想をいただき、ありがとうございます。ゆっくりと考えてください」

作「さて、困ったことに、アンケートに答えてくれそうな人が出尽くした」

沙＆ａｍｐ;真「「早っ！？」」

作「ほんとどうしよう。確かにさ、読む専門で来た人がどうして感想書かなきゃいけないんだって思うだろう。実際俺も最初そうだったし。感想なかなか書き始められなかったし」

沙「応募者全員サービス！的なのがあればもうちょい増やせるんだろうけどな～」

作「……アンケート十個達成したら、後書きで沙鳥が服を脱ぐ、とか？」

沙「なんで私な――」

真「作者、アンケート六つもらってきましたわ」

作「おぉ早速か。じゃあ沙鳥、服脱げ」

沙「まてぇい！おかしいでしょ！真樹！それアンタが六つ書いたんじゃないの！？」

真「そんなことないわ。沙鳥、どうしてわたしが貴女の裸姿を見ないといけないの？」

沙「完全口調変わってるじゃん！私真樹に呼び捨てされたの初めてだよ！！」

真「はっ！？申し訳ありま――」

作「アンケート二十になったら沙鳥と香苗がきわどい水着着てイチャイチャするのやろうかな」

真「作者、追加十個ですわ」

沙「真樹ぃいいいいいいいい！！それでいいの！？完全百合になっちゃうよ！？そしてカナのきわどい水着はいろいろ危ないと思うよっ！！」

第七話　《一章》出し物

「じゃあ出し物決めるけど、何か案がある人いますか？」

昼休みが終わって五現目、委員長の宝井宮江（たからいみやえ）が教卓の前に立ち俺らに促す。

担任の園原先生は窓際にパイプ椅子を置いて座っている。

「ナツヤ、だしものってなんだ？」

昨日来たばっかりのラスクが訊ねてくる。

「ん～、そうだな。学園祭っていう祭のときに出す店のことだ」

俺の声が周りに届かないように、沙鳥の次に魔力のあるラスクが魔法でなんとかしてくれている。

理屈で言えば、それぞれの口元と耳元に風を置き、誰かが喋るとその口元に置いた風が震えて声を吸収、それに連動して耳元に置いた風が震えて先ほどの声が吐き出される、というものだ。

これがあれば遠くからでも通信が出来ると思ったがそうでもないらしく、術者が視覚で認識出来る範囲でしか使えないらしい。

「まつり？」

「皆で集まってワイワイ楽しく騒ぐことだ。まぁこの学校全体での遊びみたいなもんだ。もう少ししたらそれがあるから、今からその祭を楽しくするために皆で相談」

「全く、この世界の生き物の気が知れないわね。なんでそんな遊び

なんてするのかしら。生きていくのに必要？」

アンの隣で、少し苛立ちを含みながら吐き出すネハラ。

「そう言うなよ。逆に聞くけど、お前なんでアンに――」

「死ぬ？」

首に手を突きつけてくる。

そこからバチバチと電気が弾ける。

おそらくアンのことをクーレラと呼ばなかった為にキレているんだろう。

「それはこっちの台詞だ」

そのネハラの頭にラスクが右手をかざす。

「あーお前らやめろ。沙鳥に迷惑掛かってるから。それからネハラ、夏哉に何かしたら姉妹取り消しな」

「そ、そんな！！お姉様ご安心ください、この男には一切手を出しません！！ですのでこれからもお姉様と呼ばせてください！！」

俺から離れて必死に懇願するネハラ。

これで命の危機は去った。

と、そういえば話の続きだったな。

「ラスクもさ、こういうの理解できない？」

「……済まない。この世界ではこういうのが普通だと納得はしているのだが、どうしてやりたいのかが理解できない」

「そうだな～。例えばラスクさ、アンを愛してて幸せだった？」

「当然だ。それが私の存在意義だからな」

「で、人間はそんな幸せをいろんなところから、いろんなことで手に入れたいわけ。俺たちがやる学園祭っていうのも、少しでも幸せになりたいからやるんだよ。そりゃまぁそんなことしなくても生きていけるけどさ、お前も幸せな気持ちはずっと続けていきたいって思うだろ？」

「あぁ、そうだな。ずっとアンお嬢とナツヤを愛していきたい」

ピクッと目の前に座っている香苗の肩が動いた気がした。

……気のせい、ということにしておこう。

「だろ？まぁすぐに理解しろとは言わないけどさ、出来れば分かってほしい」

「大丈夫だ。ナツヤがそういうならきちんと理解する」

「それならよかった」

意識をラスクにではなく黒版に向けると、候補が一つだけでていた。

「えっと……皆喫茶店っていう意見しか出てないんだけど、他には……」

『ありません！！』

クラスのほぼ全員――それ以外は俺、香苗、沙鳥、種原、宝井の五人――が声を揃える。

『絶対沙鳥様のメイド服は似合う！！』『似合う？ふざけんじゃねぇ！沙鳥様に似合わないものなんかねぇ！！』『お帰りなさいませとか言われたい……』『誰かぁ！輸血パック持ってませんか！？この子が鼻血出血多量で危険なんです！！』

とまあそれぞれ思い思いのことを口にする。

「ネハラ、この光景を見るとアルクシア様のこと思い出さないか？」

「あ～、分かるわ。まぁこんな騒ぎの比じゃないけどね」

神と依代という繋がりがあるせいか、こういうところは似てるらしい。

「あ、あのね、喫茶店とかそういう飲食ものは数に限りがあるから予備の案を出してほしいんだけど……」

宝井はそういうが、沙鳥談義に花を咲かせてしまっているために聞いていないようだ。

しょうがない、勇気を振り絞りますか。

「ラスク、俺のところだけ魔法解除してくれないか？周りに言いたいことがあるから」

「分かった」

目には見えないが、多分解除されたんだろう。
宝井に向かって声を掛ける。

「あ～、無難にグッズ売りとかどう？学校のロゴ入りのやつ。でも普通じゃつまんないからブロマイド的なのを付けて」

マズい。
凄い心臓がバクバク言ってる。
やっぱ大勢の人の中で何か言うのって無理だわ。
宝井とかすげぇな。
それ言ったら新入生代表やった香苗も、たくさんの人の中で普通に立ち振る舞えてる沙鳥も凄いんだけど。

「グッズ売りね。柊君ありがとぉ！」

案を出してくれたのが嬉しかったのだろう、屈託のない笑みを浮かべている。

「「「夏哉くぅ～ん」」」

すると前後左から負の感情を乗せて名前を呼ぶものが三人。

香苗、沙鳥、アンの三人。

先ほどの緊張以上に心臓がバクバク言っている。

因みに香苗と沙鳥、空ねぇにもラスクの風魔法を使っているので、三人の声はこの場にいる七人にしか聞こえない。

「な、なんでしょうか？」

「夏哉君はさ、どうして女の子にフラグ立てちゃうかな～？」

沙鳥が、無駄に明るく聞いてくる。
その顔を見るのが怖くて振り返れません。

「ふ、フラグ、でしたか今の？今のはちょと違うんじゃないでしょうか？」

「へェ、じゃあ夏哉君は、会話もしたことのない女子から、たった一言言葉を投げかけただけであんな笑顔を向けられるような人なんだぁ」

香苗が、こちらを振り返らず前だけを見ている。
振り返られたら地獄を見そうなのでどうかそのままで。

「いやいや、今のは違いますよ。ただ向こうは、こんな状態で自分の言葉を聞いてくれて、なおかつ答えてくれたのが嬉しかっただけですよ」

「それをフラグが立ったと、この世界では言うのではないか夏哉君？」

アンが、俺の表情を横から見ようとのぞき込んでくる。
視線が合ったら心臓が止まってしまいそうなのでのぞき込まないでください。

「あの、柊君？さっきからぶつぶつ言ってるけど、他に案があった

りする？」

あ、そういえば魔法はなくなってるから俺の声はダイレクトに聞こえるのか。
そして宝井さん、そこで俺に話し掛けるのは正直つらいです。
でも宝井には他意はないわけだし。

「あ、ごめん、そういうことじゃないんだ。案は浮かんでない」

「そっか。じゃあ浮かんだら遠慮なく言ってね」

再び屈託のない笑み。

どうして彼女は俺限定なんでしょうか？

「「夏哉くぅ～ん」」

そして再びの負の感情。

「ラスク、また魔法――じゃなくて奇法頼めるか？」

「分かった……出来たぞ」

ラスクの言葉を聞き、口元を手で抑える。

「俺はどうすればいいんですか！？絶対向こうは惚れてないよね！？ただ、あ、あの人ちゃんと私の言葉聞いてくれてたんだ、ぐらいにしか思ってないよね！？つーかこの状況で無視はかわいそすぎるでしょ！！お前らはあれか？自分がよけりゃ全て良しの人間なのか！？」

「「「うっ……」」」

「違うだろ!?委員長が困ってたんだからクラスの生徒として当然のことしただけだろ?それに!この際はっきりと言うが完全フラグが立ったのは四人だけだッ!!」

「「「それはない」」」

即答否定された。

「なんで!?四人以外に完璧なフラグがたった人は誰がいる!?」

「私、カナ、アンちゃん、空お姉ちゃん、真樹、灯里ちゃん、るあちゃん、ラスクさん、ネハラさん、宝井さん」

「まてまてまてそれはおかしい!まずいままで黙ってる空ねぇ!空ねぇは友達だよな!?片思いしてないよな!?」

「うん。私は夏君と友達でいるつもりだよ。今はね」

「その含みがかなり気になるけどそこは置いといて、まず一人は減る。そしてネハラ」

「馴れ馴れしく呼ぶな」

「愚問な質問だけど、お前俺のこと嫌いだろ?」

「当たり前よ。それ以外にお前にどんな感情を抱けと言うの?」

「ならよしだ。で、灯里もあれは俺に惚れてない。見りゃ分かる」

「なんでそう断言出来るの？」

沙鳥が訊ねてくる。

「真顔で惚れてないって言われたから」

「「それだけ！？」」

「それだけも何も、あいつはただの友人。ギャルゲみたいに幼なじみだから惚れてるなんてことはない。そりゃ確かにマイナスのイメージからはあがってきたけど、今はプラマイゼロだ。るあちゃんはただ物事が分かってないだけ」

「ま、まぁ、それは認めておくけどさ……」

なんと香苗が譲歩してくれた。

もしかしたらマイナスのイメージのことで強く言えないのかもしれない。

「でも！真樹ちゃんは絶対夏哉君に惚れてるよ！！あんなに分かりやすいのにここで夏哉君が鈍感になったら後戻りできないよ！？」

「そうだそうだー」

「香苗の言う通りだ～！もっと言え～！」

「お、お姉様が、あのお姉様が……そんな……！きっと幻覚よこれは。そうよ。頭を冷やせばいつものお姉様。というわけでヤチ

ク、頭を冷やしてくるから適当にふらつくわ」

現実逃避がしたいためかネハラは壁をすり抜けてどこかに行ってしまった。

「……あのな、言っておくけど真樹だけは絶対ない。あいつは沙鳥一筋だって」

「いや、最近真樹は私より夏哉と話す方が多くなってる気がする」

「まぁそりゃあさ？仲良くはなってると思うけどさ？友達の域は越えてなくね？」

「私に近づく男を罵倒しないのはおかしい！！」

「いやむしろあいつが俺に惚れてて、俺が沙鳥に近づいたら罵倒されるだろ。つまり真樹は俺のことどうとも思ってない」

「さ、沙鳥ちゃんっ、何墓穴掘ってるの！？」

「うぅぅ、ごめんなさい……」

「ところでお前らは、真樹が俺に惚れてほしいの？アンには聞いたけどさ、どうなの？ただライバル増えるだけだぞ？俺は真樹を友達だと思ってる。真樹は俺を友達だと思ってる。お互い学校以外積極的に出会ったりはしてない。恋愛感情抱いてないって思った方がいいんじゃねぇの？」

「あ、う～ん、理屈ではそうなんだけどね……乙女心ってやつ？」

「ごめん沙鳥、俺にはその乙女心はまだ分からんわ」

「うん、大丈夫だよ。私もよく分からないから」

乙女がそんなこと言っちゃ世話ねぇな。

「でも真樹ちゃんが夏哉君のこと好きなのは事実なんだよ？」

「その好きは友人としてだろ。本人から『早乙女真樹は柊夏哉のことが好きです』聞いたのか？」

「聞いてないけど、勘っ！」

「そんな役立たずな勘は捨ててしまいなさい。それより、話が進むぞ」

「「「へ？」」」

「じゃあ結局二つしか出なかったけど、第一候補喫茶店、それがダメだったらグッズ売り。それでいい人挙手してください」

結果満場一致。

「じゃあ内容を決めようと思うんだ――」

キーンコーンカーンコーン

次の話に入ろうとした瞬間に時間が来てしまった。

「じゃあ皆休憩時間だから勝手に休んでいいわよ～」

椅子に座ったまま担任が声を掛ける。
その一言でクラスは喧騒で満たされていく。
「ラスク、奇法解除していいよ」
「分かった。夏哉、魔法でいい」
「りょーかい」
「ふと思ったんだけどさ」
授業中もほとんど喋らなかった空ねぇが話し掛けてくる。
「ラスクさんってアンちゃんと夏君のことを愛してるんだよね？」
「勿論だ」
「なんでアンちゃんは敬語で、夏君はタメ口なの？」
「ためぐち？」
首をこちらに傾ける。
「普通の言葉遣いのことだ。敬語を使わないで会話するってこと」
「それはアンお嬢にはもう百五十年以上使えているから、敬語での対応が慣れてしまったからだ。ここに来てアンお嬢に普通に話せと言われたんだが、どうにも気持ち悪くて。ナツヤは昨日まで敵対し

てたから敬語じゃなくても違和感がないし、ここで暮らす条件として敬語はやめろと言われたからな。だからアンお嬢には敬語、ナツヤには普通に話しているわけだ」

「へぇ。そうだったんだ。じゃあさ、アンちゃんと夏君が喧嘩したらどっちの味方に付く？」

「……何故そんな質問を？」

「あ、深い意味はないよ。ただの暇つぶしというか好奇心」

「それはまたかなり難解な質問だな……」

ラスクにとってはやっぱり難しい質問なんだろう。
かなり難しい表情を浮かべている。

「まず俺とアンが喧嘩するという場面が想像つかないな」

俺も頭を働かせてみるが、全く思いつかない。

「それは言えてるな。多少言い合いになったとしてもすぐに解決してしまうし」

「まぁもしも話だから」

「……そうだな。多分その時はどちらに付くということではなく、仲違いを直そうと動くな。アタシはどちらともの味方でありたいのでな」

「あぁ、そう来たか。まぁそれが一番大切だよね」

うんうんと頷く空ねぇ。
よくは分からないが納得したようだ。

「ところでさ」

俺もふと疑問に思ったことを口にする。

「ネハラって一人でどっかに行っちゃったけど大丈夫？」

「大丈夫って何が？」

香苗が聞いてくる。

「一人でいて、迷子にでもならないのかと」

「それは大丈夫だろ。あいつだって伊達に二百年は生きてない。それなりに頭は使ってるだろう」

「それもそうか。因みに女性に聞くのは失礼かもしれんけど、お前とラスクってどっちが年上？見た目じゃラスクが上なんだけど、見た目じゃはかれないだろ？」

「取り敢えず私が……十くらい年上か？」

「はい。アンお嬢が２５７歳、アタシが２４１歳、ネハラが２１０歳です」

「へぇそうなんだ」

―――――――――――

右を見る。

左を見る。

上を見る。

下を見る。

前を見る。

後ろを見る。

「……迷った」

一人知らない異界の地で、私は迷った。

これは仕方がないことだと思う。

この世界は障害物が多すぎる。

無意味にでかい建物がたくさん建っているし。

お姉様のあまりの変貌ぶりにショックを受け、適当にふらふらしていたら、いつの間にか知らない場所に来てしまい、しかも道順を覚えていないという始末。

「それもこれも全部あの男のせいじゃない」

あの凛々しい態度で、全てを切り刻むような冷たい眼差しはどこにいってしまわれたのか。

『香苗の言う通りだ～！もっと言え～！』

あんな緩みきった表情であんなことを言うなんてお姉様ではない。

……

「楽しそうだったな」

そんな言葉をぽつりと吐いてしまい、慌てて首を振る。

何を考えているのだろうか。
あんなのはお姉様ではない。
すぐに元に戻ってもらわなければ。
そのためにも早くお姉様の元へ帰らなければ。

第七話　《一章》出し物（後書き）

作者「アンケート結果がこない！！」

夏哉「うをっ！？いきなりなんだ！？」

アン「それから叫ぶな」

作「だって！あの後アンケートが帰ってきたの一人だけなんだもん！！」

夏「何言ってるんだ？一人だけじゃなくてひとりでもきてくれて、だろ？」

ア「そうだな。読者にはいつも感謝していかなければな」

作「そりゃそうですな。ファルコさんありがとう！！でももっとアンケートはほしいわけだ。じゃあどうすれば人が集まってくれるんでしょうか！？教えてください！！」

夏「俺に言うなよ」

作「あ、そだ。わざと誤字を増やして、感想を書きやすくして上げる」

ア「それだと読者が経る」

作「なぁっ！？そこは盲点だった……。もう俺に出来ることは何も思いつかない……」

夏「思いついたのあるだけなの!?全然じゃん!!」

作「そんなこと言われても……」

ア「皆、出来れば作者の為を思ってアンケートに参加してくれ。どんな場面、台詞でもかまわないぞ」

作「アン、お前……」

ア「私もアンケートの結果を知りたいからな」

作「ありがとうアンさん!!ということでこのままお礼に言っちゃおう!!空ねぇ、ソラトさん、ファルコさん、Ｃｏｌｌｔｙさん感想ありがとう!!これからもよろしくお願いします!!感想評価、アンケート待ってます。気軽にお願いします!!」

作「実はここで終わらない」

夏「何？」

作「感想でね、複数回答あり？って聞かれたの」

ア「そう言えば設定してなかったな、それ」

作「だからここで追加ルールを。好きなシーンと好きな台詞は、それぞれ五つまで可とします。理由はぶっちゃけそうでもしないと数が集まらないから」

ア「ほんとにぶっちゃけたな」

夏「これで増えなかったらもうどうしようもないな」

作「それは言うな。じゃあみなさんそういうことでよろしくお願いします！！」

第七話　《二章》パートナー

「はぁい、取り敢えず着席してくださぁい」

授業開始まで残り数十秒、既に生徒たちは教室内にいたので園原先生は俺たちに着席を促した。

「じゃあ次の授業は、まぁ最早授業じゃないんだけど、学園祭最後にやるダンスのペアを決めてもらいます」

そう言ってチャイムが鳴り響いた。

その間に皆はざわつく。

「静かにして。このダンスのペアは男女ね。クラスは関係なしだけど、他学年はなし。この時間は外の出入り自由だから、好きな人とペアを組んでください。決まったら誰でもいいので教師に報告。もしこの授業中に決まらなかったらランダムにペアを決めるんで注意してください。じゃあ解散っ！！」

ん～男女ペアのダンスか。

じゃああいつしかいねぇか。

「夏哉！」

「夏哉君！」

「夏君！」

前後右からほぼ同時に名前を呼ばれた。

あぁそうか、他の連中もどうにかしないといけないのか。

「「「一緒に踊ろうっ！！」」」

「だが断る」

「「「即答！？」」」

「三人とも息ぴったりだな。打ち合わせした？」

「いや、別にしてないよ。じゃなくて！なんでダメなの！？」

沙鳥がノリツッコミをしてくれた。

「まぁ先約、っていうか優先した方がいい人がいんだよ。そいつがやだって言えば考え直すけどな。んじゃあいってきま～す。あ、できればその場で言い争いはしたくないので、てかしたら変な目で見られちゃうので二人もこの場待機でお願いします」

多分皆言いたいことがあっただろう。
でもそんなことしてたら時間がとられそうだったので半ば強引に話を終わらせて教室を出た。

――――――――――――

「あ～かりっ！ダンスどーする？」

座ってる後ろから友美が抱きついてきた。

「どうするって？」

「柊君のところ行かないと取られちゃうんじゃないの？」

やっぱりそうくるか。

「行かないよ。どうせ柊は沙鳥さんか香苗ちゃんが選ぶでしょ。私はランダムでいいよ」

「え～、つまんなぁい」

「何がつまんないの？」

葉月が入ってきた。

「あーたん柊君を奪いに行かないんだって」

「何よそのあーたんって。初めて呼ばれたよ」

「あーたん知らない？」

「友美、それって天王洲？」

「正解。流石葉月」

「それってハヤテだっけ？それなら読んだよ」

私がそういうと、二人が驚いた風な顔をする。

「あれ、灯里ってマンガ読むっけ？知らない単語バンバン言ってか

らかおうとしてたのに」

落ち込み気味に言う葉月。

「そんな趣味の悪いことはしなくて言い。前に柊から借りて――」

と言ったところで自分の愚かさに気が付いた。

ここで柊の話題を出したら何言われるか分かったものじゃない。

案の定二人は良いカモを見つけた風ににやける。

「ほうほう、柊君からマンガをね～」

「何？友達なんだから本借りるくらいなんでもないでしょ？」

なるべく平然を装って言葉を紡ぐ。

「まぁ確かにそおだけどぉ」

「その後返しに行くために一人で柊君のところに行ってぇ」

「二人きりになったところで」

「きゃーーー！！柊君だいたーん！」

友美と葉月が変なことを言い出す。

「あんたら何言い出してんのよ！大体柊は二人きりでもそういうことする奴じゃない――」

ってまた何言っちゃってんのよ私はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！

あぁまたにやついちゃって！

「灯里さん、その言い種だと二人きりになったことがあると、そういうことですね？」

「おぉ、流石灯里さん。行動力ありますなぁ。あ、そういえば昨日はどうでしたか？るあちゃんと一緒と言っても柊君と二人で入れたんでしょ？るあちゃんという娘を持った夫婦を演じましたかな？」

昨日という単語で蘇る記憶。

るあが、柊と、キス……。

「ほぇっ！？ちょ、灯里さん？何をそんなに怒っているのでしょうか？」

「あ、も、もしかして柊君に乱暴に服を脱がされて、なぁんて……」

「そんな訳ないでしょ！」

感情のままに友美に叫んでしまった。

「じゃ、じゃあなんでそんなにキレてんのよ！それ以外に何があるの！？」

「そんなことより二人はダンスの相手決まったの！？」

うわっ、葉月の質問遮ったけど流石に話が強引すぎたかな。

でも本当のこと言ったら余計からかわれるのは絶対。
流石の私でも客観的に見ればただの嫉妬に狂った女と認識出来る。
だから二人がそんな事実を知ったら興奮して何言われるか分かったもんじゃない。

「ねぇちょっと奥さん、灯里さん話を強引に変えようとしてますよ」

「そうですね奥さん。つまり隠さなければならない何かがあるというわけですよ」

「ほんっとお願い！これだけは聞き出さないで！いろいろまずいの！！私にも柊にも！」

両手を合わせて懇願する。
この事実が知られれば柊もロリコン扱いされ――あれ？
柊は香苗ちゃんがいるからもうロリコン扱いされてるの？
ならいいのかな？

「灯里がここまで懇願するとは……。正直余計好奇心が増してくるけど」

「まぁ友人として何も聞かないであげよう」

「あ、ありがとう二人とも」

友美と葉月が輝いて見える。

……て、こうなったの二人が原因じゃん。
まぁ掘り返したら余計ややこしくなるからつっこまないでおこう。

「で、話戻すけど二人は相手どうするの？」

「ん～、私は源くんに声掛けてみたいんだけど、多分無理なんだろうね」

競争率が高いことを知っているためか最初から諦めモードに入っている友美。

その言葉に寂寥は感じられない。

「あ、じゃあ私も灯里同様ランダムになるかも。葉月は」

「ふっふっふっ、私をあんたたちと一緒にしないでもらおうか」

急に偉ぶった態度をとる葉月。

もしかして決まっているのだろうか。

「私は辰巳君に声を掛けるつもりなんだよ」

「え、辰巳ってうちらのクラスの？え、マジで！？つまり葉月ってもしかして……」

興奮するように葉月にせめよる友美。

「じ、実は昨日ね、買い物行ったとき足くじいちゃってね、あ、今は平気なんだけど。で、丁度辰巳君が通りかかって応急手当てしてくれて、もう、なんかかっこよくてね。しかもさ！その後ケーキなんて奢ってくれて、優しいのなんのって！」

あぁ、これは完全にベタ惚れだ。

顔を赤くしていやいや首を振っている。
これが恋する乙女って奴か。

「じゃあ、ねぇ灯里さん」

「えぇ友美さん。手伝うしか――」

「に、西山さんっ」

突然葉月の後ろから葉月の名字を呼ぶ人が現れた。
皆そちらを見ると、なんと先ほど話題があがっていた辰巳君がいた。
顔が少し赤い。

「え、あ、た、辰巳、くん？わ、私？」

「あ、あの、と、突然で申し訳ないんですけど、その、ぼ、僕とダンス踊ってくれませんかっ？」
勇気を振り絞って言ったのだろう、多少しどろもどろになっている。
多分、いやほぼ確実に脈ありだ。
友達の恋路がうまく行くのは嬉しいことだが、同時に今までのような付き合いは少なくなっていくんだろうなという寂寥感はある。

「ご……」

しかし葉月は、最初の頭文字としてはおかしい文字を言った。
ご？
まさかテンパってごめんなさいとか言う気じゃ――

「五分だけ待っててくださぁぁぁぁぁぁぁいッ！！」

そう叫びながら私と友美の腕をつかんで走っていく。
今の状況が不明すぎてされるがままだ。
「ちょ、葉月！何すんのよ！？灯里どういうこと！？」
「私が知りたいわよ！！」
葉月は廊下に出るとようやく止まり、こちらに顔を向けた。
真っ赤で今にも泣きそうな顔を。
小声で叫ぶ。
「ね、ねねねね、ねぇ！私、なな、何すればいいの！？あ、あああれ、あれっていわゆるその、そういう意味に捉えていいんだよね！？」
あぁなるほど、テンパりすぎて何すればいいのか分からなくなったのか。
こいつ、今まで私をからかってきた癖にいざ自分がとなったらここまでになるんだ。
「あのねぇ葉月、確かに私から見たら脈ありだと思うけどさ」
友美も気づいたんだろう、だから説得するような柔らかい口調になる。
「あそこで逃げたら最悪向こうは自分に脈なしって勘違いされるよ」

「え、あ、う、うそ……え？」

ここまで動揺する葉月も初めて見るかもしれない。

すると葉月の後ろ、そこに何故か柊がいた。

なんでいるんだろうと首を傾げてよく見てみる。

どうやら一人のようだ。

あ、視線が合った。

どうしよう、この状況でこっちから声を掛けてもいいものなんだろうか？

そんなことを悩んでいたら友美に不思議がられた。

「灯里どうしたの？」

「あ、いや、えっと……」

「ん？あ、柊君だ」

友美が柊の存在に気付いた。

それを聞いて葉月も振り向く。

そして柊に詰め寄り、何を思ったのかこう言った。

「あ、あぁ、柊君っ！灯里をオトした柊君っ！この状況をなんとかしてください！」

何トチ狂ったことを言ってるんだあの女は。

誰が誰にオトされたって？

「え、ちょっとまて。何？この状況ってどの状況？おい灯里、どういうこと？せめて理由を教えてくれ。俺が何かしたのか？俺はこの人と関わりを持った覚えはないんだけど」

まぁ柊はなんも関係ないしね。
それなのにいきなり訳も分からず知らない女子に懇願されても分からないだろう。

「さっきその子にね――ってどこ見てるの？」

丁度話だそうとしたとき柊は私から視線を外し、私の後ろを見ている。

それに倣って私もえ代を振り返ってみる。

辰巳君がいた。

えぇっと、これは非常にまずいシチュエーションなのでは？

少女に告白に等しい発言をした少年。
少女は逃げる。
少年が様子を見に来た。
少女が別の少年に迫っている。

あちゃー。

辰巳君はいたたまれなくなったのだろう、この場から逃げ出した。

この状況はなんとかしなきゃならない。

「柊！何とかして！」

「だから状況が飲み込めないんだって！三行で簡潔に！！」

「葉月は辰巳君のこと好き。
辰巳君が葉月をダンスに誘う。
葉月がテンパって逃げた」

「俺関係ねぇ！」

そう叫びながらも柊は走って追いかけていった。

――――――――――

なんだよこれ！
俺かなりまずい状況に巻き込まれたんじゃね？
修羅場ってやつか！？

目の前に、おそらく辰巳と呼ばれる男が走っている。

一応状況は理解した。
そう言えば？五分だけ待っててくださぁぁぁぁぁぁぁい！！？って叫びがあったけど、多分あの子が言ったのだろう。

足は断然俺の方が早かったのですぐ追いついた。

肩を掴み、動きを止める。

「ちょっと待て！話を聞け！」

「離してください！どうして貴方が追いかけてくるんですか！？ほっといてください！」

「だから話を聞けっつってんだろうがッ！！」

足払いを掛けて尻餅を付かせる。

「なんで逃げるんだよ。理由を聞かせろ」

「……ふられたから」

チッ、やっぱり誤解してたか。

と言うことはやっぱりこいつはあの葉月ってこに脈あり。

灯里曰く葉月はこいつに脈あり。

つまり両想い。

なら二人を付き合わせれば万事解決。

「それは本人から聞いた言葉か？」

「だって、西山さんが貴方と……」

「それはお前が早とちりしたんだろ？本人が言ってないのに勝手に思い込んでんじゃねぇよ。そういうのは本人から直接答え聞いてこい」

「無理だよ。どうせ答えなんて決まりきってる。僕はダンスに誘っ

た。でも逃げられた。最悪な答え知っててどうしてもう一度なんて言えるんだよ!?」

「簡単に諦めてんじゃねぇよ!!」

辰巳の叫びに俺も叫びで返した。

「お前はあいつのことが好きなんだろ!?だから勇気振り絞って誘ったんだろ!?偉いよ!それは尊敬に値するよ!!でもだからってすぐに諦めつけられんのかよ!答えも聞かないで諦められるような存在なのかよッ!?」

「ち、違う!僕だって諦めたいわけじゃないよ!でも、西山さんが貴方を選ぶんだったら引くしかないでしょ!好きな人に好きな人がいたらそれを見守るしかないでしょっ!」

その言葉を聞いて、後ろを向く。

こんな一本の廊下だ、付いてこなかったとしてもこんだけ叫べば届くだろう。

しかし案の定そいつは付いてきていた。

「聞いたな?」

俺はそいつに、葉月に声を掛ける。

「え、あ、その……」

「な、え、えぇっ!?」

葉月は顔を赤くして俯き、辰巳は葉月の存在にようやく気が付いた

ようで驚いている。

「今度はあんたの番だろ？こいつはちゃんと言ったぞ。もう逃げるはなしだ。自分の思ったことを口にすればいい」

「あ、う、うん……」

葉月はゆっくりと歩きだし、辰巳のもとに向かう。
辰巳は立ち上がって葉月を待つ。

「あ、あの、さっきは、その、逃げてごめんなさい。か、かっかなりテンパっちゃって……。そ、その、だ、ダンス、よろしくお願いします」

ぺこりと頭を下げる。

「え、あ、えっと、そ、それって！その、それって、そういう意味で捉えちゃって、いいんでしょうか？」

「う、うん。そ、その、好き、です……」

かなり小さい声だったが、葉月は言った。
葉月の顔は見えないが、辰巳の顔はものすごく赤くなっている。

「う、ううん、えっと、よろしく、お願いします……」

「よ、よろしくお願いします……」

ぱちぱちぱち

少し後ろで拍手の音が聞こえた。
そちらを見ると、灯里の隣の女子が手を打っていた。
それが感染して灯里、そしていつの間にか周りに集まっていた野次馬にも広がって、指笛や祝辞も加わって大きな祝福の音になっていく。

肩を叩かれる。
後ろに灯里がいた。

「ありがと。助かったよ」

「どーいたしまして」

「ところで、どうしてここにいるの？三組でしょ？」

「ちょいとダンスの相手捜しててな」

「……沙鳥さんか香苗ちゃんじゃないの？」

「違うよ五組の人」

「えっと、まさかとは思うけど――」

「夏哉ー、どこですのー――って、これはお邪魔でしたか」

灯里の言葉を遮るのは真樹の声。
真樹は後ろにいた。

「俺はお邪魔じゃないけど、お前のせいで灯里の言葉が途中にはなった」

「それは失礼。ではお二人どうぞ」

「あ、いやいや！別にいいよそんなこと！それより真樹さん用があったんじゃないのっ！？」

ちょっと慌て気味に言う灯里。

さっきの続きは聞かれたくないものだったのか。

「いえ、用事はありません。ただこのお節介のことだからそろそろくるのではと思っていましたが、わたくしがトイレに行っている間に色々あったようで」

「俺は被害者だ。で、それより、俺のお節介は受け取ってくれるのでしょうか？」

「不本意ですがはっきり言って助かりますので、受け取らせていただきましょう」

「はい決定」

「えぇっと……何が決定したの？話に突いていけないんだけど」

そりゃそうだ、真樹のあの秘密を知らない限りこの話は全く分からないはずだ。

「簡単に言っちゃうと、俺のダンスパートナーは真樹に決まりました、と言うことです」

第七話　《二章》パートナー（後書き）

真樹「ようやく私が出てきたと思ったら、最後だけですか」

アン「真樹うらやましいよ～。私も夏哉と踊りたいぃ」

真「……アンさん？」

ア「……済まん、今のは見なかったことにしてくれ。ちょっと沙鳥みたいな口調を使ってみたくなっただけなんだ。決して頭がおかしくなったというわけではない」

真「そんなに否定しなくても」

ア「だが、キャラじゃなかったろ？」

真「否定はしませんわ。ところで作者は？」

作者「いるよ～」

ア「どうして黙ってた？」

作「いつはいればいいか分からなかったもので」

ア「なるほど」

真「ところで、最近灯里さんがよく出るようなのですが」

作「別に灯里が重要なキャラと言うわけではないよ。でもなんか動

かしやすいんだよね～」

真「では出番の少ないわたくしは動かしにくいと、そういうことですの？」

作「いや、動かしにくいというか、お前は勝手に動くからもしかしたら物語に影響を与えかねないから、自重させるために動かさないだけだ。今回だって夏哉と二人きりにさせて何するか分からないし」

真「何もしませんわよ。どうせアンさんたちもついてくるんでしょ？」

ア「気を使って二人きりにさせてやろうか？」

真「……アンさんは本当に夏哉をものにしたいのか分からなくなってきますわ」

ア「いや夏哉が私以外に惚れても私たちは同棲できるだろ？実際問題私と付き合っていたら端から見れば一生独身だぞ。流石に可哀想だ」

真「そうですか」

ア「愛人という立場なら真樹も大歓迎だ。真樹とも一緒に暮らせるしな」

真「それはありがたく拒否させていただきます」

作「あーそだそだ！一応ここでも言っておかないと」

ア「急になん――あぁ、前回のか」

作「そうそれ。もしかしたら見てない人がいるかもなんで言っておきますが、前回の後書きでアンケートの追加ルールを書きました。是非見て、このような駄作者にアンケートというものを恵んでくださいお願いします！！」

真「必死ですわね～」

ア「だな。それより感想の謝辞でもしよう。空ねぇとファルコさん、感想ありがとう。あ、空ねぇ……空ねぇは違和感があるな。まあいい。空ねぇには感想のことで言い忘れたが、別に夏哉の台詞でないといけないというわけではないから。誰でもかまわないとのことだ」

真「感想評価、いろいろ待っていますので、お気軽にどうぞ」

第七話　《三章》女子の集まり

「ジーーーーーーー」

「ジーーーーーーー」

「……」

俺は今、教室で二人の少女に睨みつけられています。

「夏哉、どういうこと？」

「どう、とは何がでしょう沙鳥様」

「どうして夏哉は、有無をいわさず真樹を選んだんでしょう！」

ビシッと、同席している真樹を指さす。

「それに真樹も素直に応じるし。二人は付き合ってるの！？」

「「それはない（ありません）」」

「う、真顔で即答されるとなんて言えばいいのか……」

なんか勝手に質問して勝手にたじろいでいる。

沙鳥に代わり、今度は香苗が声を投げかけてくる。

「二人私たちになんか隠してる？」

「「隠してます」」

「しょ、正面から言われちゃった……」

香苗も同様にたじろぐ。

「でも二人ともすごい息ぴったりだよね。それに二人だけの秘密ごともあるし。実は相思相あ――」

「火津那さん？いい加減口を閉じてくれません？」

一瞬で空ねぇとの間合いを詰めた真樹は手刀を首に当てて忠告する。

「ひ、ひいっ？き、きぃちゃん、ご、ごめんっ、言い過ぎました！」

「分かればよろしいのですわ」

空ねぇから一歩離れ、沙鳥に体を向けた。

「沙鳥様、申し訳ないのですがダンスの件は夏哉を譲っていただけませんか？」

「どうしても？」

「どうしてもです」

「りょーかい。カナも、いいね？」

「うん。いろいろ事情がありそうだからね」

「申し訳ありません」

「いーよ。でもそうしたら私たちどうしよっか？」

「そうだね。よく考えたら私たち男の子の知り合いかなり少ないし」

「あーそれなんだけどな」

誰と組むかの話になったので俺も会話に入る。

「沙鳥はあて、っていうか頼んできた」

「へ？私？誰？」

「快斗に頼んでみた。あいつなら沙鳥相手でも平気だろ？」

真樹に会いに行く前に話し掛けた。

「そうだね。ありがとー夏哉。じゃあ快斗君のところに行ってくるね」

「はいよ～」

沙鳥は教室を出ていった。

「で、問題は香苗と空ねぇなんだけど……」

皆二人を見る。

「俺に男友達は残り夕馬しかいないけど、あいつ彼女持ちだから無理」

「私も他になし」

「わたくしも男と仲のいい人はいない」

「私も転入下ばっかりだから知り合いも少ない」

「……今更だけどお前らって友達少ないんだな」

グサッ！！

アンの言葉が胸に突き刺さった。

ま、まぁそりゃ事実だけどさ。

「わたくしは違いますわ。男との関わりがないだけで、決して友達が少ないということはありませんの」

真樹は反論したが、それ以外の俺らは出来なかった。

「まぁ安心しろ。私も友達は少ない。何せ魔界よりも地球が好きな異端人だからな」

「……アンお嬢、それは慰めにはなっていないと思うのですが」

「そうか？」

とりあえず魔族たちはおいといて。

「……ナンパされてくれれば？」

「夏哉君、その言い方はイヤだよ」

「流石にそれはないよ夏君」

俺の言葉を非難する二人。

ナンパと言われて快くは思わないか。

「まぁ冗談はやめて、多分お前らなら立ってりゃ誰かよってくるんじゃね？」

「そうかな？」

「それかランダムで決めるしかないな。空ねぇはともかく香苗は誰かいい男見つけて誘うなんて真似はしないだろ？」

「夏哉君それ聞く必要ある？」

「ないな」

「あぁでしたら」

ぽんっと手をたたく真樹。

何か案が浮かんだんだろうか。

「二人のどちらかが男装して誤魔化すというのは」

「アホかお前は！！」

そんなの出来るわけねぇだろ。
普通にばれるだろうし。

「ま、真樹ちゃんは男装させるとしたらどっち想像したの？」

「ん～、そうですわね……火津那さんは、胸があって隠せないので香苗ですわね」

「胸！？そこで決まるの！？見た目は！？」

「香苗、この世界女顔の少年なんてごまんといますわ。顔は関係ないでしょう。髪の毛も短い方なのでちょっとゴムで縛ればそういう風に見えますわ」

う～ん、香苗が男装か……。
出来ないこともないかもしれないな。

「なぁちゃんちょっと来て」

すると突然空ねぇが香苗の手を掴み歩いていく。

「あ、え、姉様？」

進む先には担任がいる。

「先生」

「あ、空揺さん、どうしたの？」

「私どうしても男装した香苗さんと踊りたいんですがダメでしょう

か？」

「「「ぶふっ！？」」」

俺と香苗、真樹は肺にあった空気を吹き出してしまった。

何を言っているんだ空ねぇは。
しかも真顔で頼み込んでるし。
先生も戸惑いの表情を浮かべてる。

「あ、あの、空揺、さん？何を言ってるの？男装って、これは男女ペアでやるものなんだけど」

「だからこその男装です。私男子に知り合いがいなくて、だから数少ない友人と踊るしかないんです」

「えっと、だからこそ知らない男の子と交流を持って仲良くなってほしいんだけど……」

「いえ、私はもっと友人のこの子と仲良くしたいんです。そのために踊らせてください」

「いや、だからこれは男女で――」

「夏君ブレザー貸して！」

「え、良いけど……」

いそいそと脱いでそれを放る。

「なぁちゃんジャージ持ってるよね？」

ブレザーをキャッチして香苗に聞く。

「持ってるけど……なんで？」

「スカート脱いでそれ穿いて、あと夏君のブレザー着てきて」

「え、なんで！？」

「女子の皆なら分かるでしょ！！もしなぁちゃんみたいな男の子が存在して、『姉様』とか呼ばれたらどう思う！？ハァッ、ハァッ、女の子みたいな可愛らしい子が？僕？とか言って、そんな子と二人でダンスを踊ったらどう思う！？幸せじゃない！？幸せって思わない！？……あ、もうダメ、妄想止まらない」

クラスの女子を味方に付けようとしてるのだろう、さっきまでの冷静な口調とは一変して熱弁を振るっている。

そして何トリップしているのだろう。

「こんな可愛いなぁちゃんの男装姿見てみたくないッ！？」

『見たいですッ！！』

満場一致の答えだった。

それを聞いて矛先を先生に向ける。

「先生も分かるでしょ！？貴女は先生の前に一人の女性でしょ！？その女性の部分は、なぁちゃんの男装姿を思い浮かべてどう思いま

すか!?ぎゅうっと抱きしめて、はぁはぁしたくなりませんか!?」

「そ、それは……」

今まで戸惑いながらも反対意見を持っていた先生が、初めて言葉を詰まらせた。

あと一息と感じたんだろう、香苗に迫る。

「なぁちゃん、お願い。今すぐはぁはぁさせて、じゃない、着替えてきて」

「い、いやいや、まだ私男装するとは一言も言ってないよ?それに女の子が女の子に、しかも授業中に興奮するのはいろいろダメだと思うよ?」

男装する意志を見せない香苗の耳元に空ねぇは口を寄せる。

それを離すと、香苗は唸りだした。

「う、うぅぅ、うーーー!」

そして走って教室から出ていってしまった。

説得は失敗したのだろうか。

「あ~、夏哉?これはいったいどういう状況なのでしょうか?」

後ろから沙鳥の声が聞こえた。

いつの間にか戻ってきたのか。

「どっかの誰かさんがな、男相手がいないなら男装してペアになっちゃえばいいじゃないとか言いだして、それを現実にしようと空ねぇ奮闘中。男装は香苗」

真樹のことを見ながら言った。

本人もここまで本気に捉えられるとは思ってなかったのだろう、気まずそうに顔を逸らす。

「その、ナツヤ。アタシも何が起こってるのか分からないのだが、この世界ではこういうのが普通なのか？」

あ～、ここにいては魔族たちに変な知識を与えかねないな。

「いや、あれは特殊な場面だから、あれが俺たちの常識とは捉えないでくれ」

「分かった」

さて、どうやって正しい知識を身につけさせてあげようかなとか考えていたとき、香苗が帰ってきた。

俺のサイズが明らかに違うブカブカなブレザーに紺のジャージズボン、短い髪を一つにまとめている香苗が。

先生の前に近づく。

「せ、先生！えと、ぼ、僕姉様と一緒に踊りたいですっ！その、駄目、でしょうか？」

たらぁ～。

先生が一筋の赤い液体を流した。

「わっ、せ、先生！鼻血鼻血っ！！えとティッシュは……制服だ！あ～、あっ夏哉君！ティッシュ借りていい！？」

「え？あ、あぁいいぞ」

ちょっと放心しかけた意識が、香苗の呼び掛けによって呼び戻された。

香苗は俺のブレザーのポケットからティッシュを取り出し、先生の鼻血を拭く。

「先生、大丈夫ですか？」

「う、あ……か、香苗くぅぅぅぅぅぅんっ！！」

「うわっ！？」

突然の先生の抱きつきに反応出来ず、そのまま捕まってしまった。

「うわあああああっ！ほんっと可愛い！ねえ香苗君！どう？私の息子になってくれない！？」

「む、息子！？わ、わた――ぼ、僕は女の子ですっ」

こんな状況でも僕っ子を演じる香苗は凄いな。

「もうどっちでもいい！とにかく愛でさせてぇぇぇっ！？」

「先生、どうですか？こんななぁちゃんずっと長く見てたくないですか？男装を許してくれたらもっと見れます――」

「ＯＫ！許可する！許可するからもっとぉ！もっと抱きしめるのぉおぉおぉっ！」

「先生独り占めはズルいです！香苗君は先生だけのものではありません！」

するとクラスの女子が一斉に香苗に向かう。

取り残された男子たち。

「えっと、これは止めた方がいいよなさと――」

首を傾けてみると、俺が声を掛けた少女はいなかった。

まさかと思い女子の群がる方に目を向けると。

「カナぁぁぁ！カナが男の子、いや男の娘だよぉ！さいっこう！！」

……

まさかまさかと思い首を逆に傾ける。

真樹がその場にいた。

「……真樹さん貴女だけは行かないでください」

「あ、安心しなさい。わたくしはあんな趣味には走りませんわ。それよりもこんな大事になってしまった罪悪感の方が……」

「そうか。ま、まぁ皆喜んでるんだし、いいんじゃないのか？」

「そういうことに、しておきましょう」

「な、なぁナツヤ、我らが依代もあそこに行ってしまわれたが、本当にあれはこの世界の常識ではないのだな？」

「ラスクさんお願いします。あの人たちを基準に考えないでください。あの人たちはちょっと興奮状態に入っているだけで、あれがこの世界の常識ではないんです。この世界の生物が皆あんなことをしているのではないのです。信じてくださいお願いします」

「安心してくれ。アタシはアンお嬢とナツヤの言葉を信じる。ナツヤの言うとおりにするさ」

「ありがとう。あぁ、魔族の人たちって凄いいい人がいっぱいだ。アン、お前も平気か？」

「あぁ。正直今の私にはあの香苗は今までの香苗と大差ないから平気なのだろうが、この世界に馴染みすぎたらああなるだろうな」

自己分析出来てるアンは凄いな。

そして、絶対沙鳥たちのような道は踏ませないようにしないとな。

そう決意をした。

「皆ちょっと静かにしてほしい！」

空ねぇがよく通る声を出して静寂を促した。
それを聞いて静まりかえるクラス。

「私は思うんだ。今のなぁちゃんを？香苗？と呼ぶのはいただけないと。今のなぁちゃんは男の子なわけで、？香苗？という女の子らしい名前はどうかと思うの。だから今からなぁちゃんは？花街香（かおる）？と命名することを提案したい。どうかな？」

『賛成ですッ！！』

「よし、じゃあ皆！はぁ、はぁ、香君をもっと愛でようっ！！」

『おー！！』

「え、まだやるの！？しかも名前勝手に変えられてるしっ！もう無理！夏哉君助けてぇぇぇ！」

「きゃぁぁぁぁぁぁっ！涙を浮かべる香君可愛いぃぃぃ！」
「ちょ、ウチ写メ撮っていい！？」
「香君香君！お願い、私の弟になってぇ！！」
「はぁ、あ、んっ！なんで？なんでこんなに可愛いの！？」
「ぎゅうってしたい！私もぎゅうって香君を感じたいのぉっ！！」

ごめんなさい香苗、いや香君。
俺にそちらに行く勇気はありません。

合掌して香君の無事を祈る。

第七話　《三章》女子の集まり（後書き）

作者「わぁい、連続投稿だぁ～！」

夏哉「喜んでる場合か。まず謝れ馬鹿」

作「火津那の元になったｓｋｙｆｌａｒｅさんごめんなさい！ちょっと変態行動を取らせてしまいました！」

夏「ほんとに、あれでいいわけ？」

作「いや、でも今時の女の子の頭の中はああいう風になっているはずだ」

夏「お前に女子の何が分かってるというんだ。彼女すらいねぇだろ」

作「うるさい！とにかく最近の女の子カッコ妄想カッコ閉じはこんななんだ！」

沙鳥「はぁっ、香君っ。香君と、夏哉が、あ、それいいよっ！」

夏「まてぇぇぇぇぇ！！沙鳥はなんだ！？今何を妄想しているんだ！？俺と香苗の絡みか！？その場合の香苗はどっちなんだ！？てかただ発情してるだけじゃなねぇか！」

作「思春期ですからみんな」

夏「教師も発情してただろ」

作「うるさい！黙れ！そんなに騒ぐんだったらフラグを立つフラグを作ってやる！」

夏「なんかややこしいが是非やめろ！てかもっと男を出せよ！そうすればそっちにプラグが流れるかもしれないんだから！！」

作「いや、前回だしたからもう出さないかなぁと」

夏「マジでか！？」

作「まぁそれより感想お礼いおーよ。沙鳥〜」

沙「はぁい。空お姉ちゃん、ファルコさん、ソラトさん、感想ありがとうございます。お姉ちゃんとファルコさんはアンケートもくれて。凄いうれしいです」

夏「お、ようやく沙鳥がまともなこと言ってくれた」

作「じゃあ皆さん、感想評価アンケート待ってます。特にアンケートを。もし送ってくれないと、病むまでアンケート言い続けますよ？アンケートアンケー

トアンケ」

夏「こっちが病むわぁぁぁぁぁぁぁ！！」

作「グブピュフエ！？」

沙「みなさんごめんなさい」

第七話　《四章》迷走する思い

学校が終わり、俺たちは寮に帰った。

鞄から鍵を取り出し、中に入ると当然誰もいなかった。

「なぁ、しつこいかもしれないけどホントネハラは大丈夫なのか？」

「心配性だな夏哉は。あいつに限って何か事件が起こることはないだろ。干渉出来ないから尚更だ」

「アンお嬢の言う通りだ。恐らく観光でもしているんだろう」

信頼してるのか適当なのか。

まぁ多分前者なんだろうけど。

ネハラが迷子になるとは考えないんだろうか。

二人が心配ないと言うんなら俺も頷かざるを得ないので、荷物を置いて今日の晩ご飯を考えるために冷蔵庫へ向かう。

その時ふと視界に醤油が目に入った。

残りが少ないからそろそろ買って――

「あああああああッ！！」

ま、マズい、すっかり忘れてた。

「な、ナツヤ？いきなりどうした？」

「すまん！急用思い出した！！今日は醤油の特売日だッ！！」

「「は？」」

今日の四時から五時の間にとあるスーパーでセールが行われる。
そこで醤油が１リットルたったの五十円で販売されるのだ。

現在の時刻は四時二分前。
あんなの絶対最初の方で切れてしまう。

「二人はゆっくりしててくれ！あ、アン鍵お願い！！」

バッグを持って走り出す。

「あ～ぶなかった」

結果を言えば、醤油は買えた。
あの激闘の末残り三本のうちの一本を手に入れられた俺は凄いと思う。
それにあのタイミングで牛肉の特売が開催されたのも効いたのだろう。

その他諸々もついで買いして、そろそろ帰ろうと思ったとき、見覚えのある後ろ姿を見た。

ポケットから携帯を取り出し、耳に当てて名前を呼ぶ。

「お～いネハラ～、何してるんだ～？」

俺の声に反応したネハラは振り向くと、かなりのスピードでこちらにやってきた。

「あんったの……」

その途中に拳を作っている。

あれ、嫌な予感がする。

「せいだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！！」

俺の懐までくると、思いっきり振りかぶった拳で腹を殴った。

「グッ……！！」

声が漏れそうになるのと、体が動きそうになるのを必死でこらえる。

他人から見たらネハラは誰にも見えないのだ。

突然叫び声をあげたり、倒れて膝を付いたりしたら変な人に見られてしまう。

「お、まえ、いきなりなんだよ？」

なるべく平然を装って訊ねる。

「なんで全力で殴って倒れないのよ！？アンタなんなのよ！？」

「そう言われても困るな。俺だってなんでこんな体になってるか分かんねぇんだし。それより頭は冷えたのか？」

「アンタのせいでまた血が上ってるわよ！！もうアンタがいるからお姉様はあんな風になっちゃうしヤチクもアルクシア様に逆らっちゃうし私も道に迷うし……最悪！！」

「なんだよそれ。てか本当に道に迷ってたのかよ。そりゃ俺関係ねぇし」

「関係大ありよ！！お姉様があんなに変貌されてショックを受けて放心状態になってその間の道筋覚えてなかったんだから！！アンタがいなきゃこんなことにはならなかったのにッ！！」

ネハラは思いっきり睨みつけてきた。

俺は思う。

それは完全に八つ当たりなのではないかと。

口に出したら後が怖いので言わないが。

「あ、そういやさ、お前俺殴ったらクーレラとの姉妹関係取り消しにされるんじゃなかったっけ？」

ピタッ。

ネハラはその場で固まってしまった。

あ、いや、かすかに震えている。

「あ、ど、どうしよう。わ、私、お姉様との約束……あ、ああ……

お姉様がお姉様じゃなくなって……」

「あ、ああ悪い悪い！悪かった！言わない！！絶対言わないから！このことは秘密にするから！！」

あそこまで恐怖の表情を浮かべられたら罪悪感が生まれないわけがない。

慌ててフォローを入れる。

「ほ、ほんと？」

「ホントだ！絶対言わない！！」

「じゃあもし言ったら殺すわね」

強烈な殺気を当てられる。

おそらく本気なのだろう。

「ＯＫ、大丈夫だ。俺もまだ死にたくない」

てか殺したら余計アンに嫌われるんじゃないんだろうか。

そんなことを言ったら無限ループになりそうなので言わないでおく。

「ところで聞きたいことがあんだけどさ」

「……何よ？」

「クーレラって今のと全然違うの？」

「違うわよ！！あんな軽い空気の御方じゃないわッ！！」

言葉の末尾を言い終わる前に被せてきた。

相当違うらしい。

「いつものお姉様はもっと冷静な御方なの！あんな風に笑わないし、毅然な態度をとって、突き刺すような視線を向けてくるの！孤高な存在で、気安く話しかけていいような存在じゃないの！！今のお姉様は正反対じゃない！あんなのお姉様じゃないわ！！」

「そりゃそうだろ」

「え？」

俺から同意がもらえたのが意外だったのか、キョトンとした表情を浮かべている。

「お前が知ってるのは？クーレラ？っていう名前のあいつだろ？今見てるのは？アン？っていう名前のあいつだ。別人、とまでは言わないけどいろいろ変わってるだろうよ。多分だけど素の性格はこっちだと思う」

「は？何それ？じゃあ何？お姉様は今まで私たちをだましてたとでも言うの！？」

「そうじゃねぇよ。あいつ、よく分かんねぇけど『二番目』とか言う名前だから偉い立場だったんじゃねぇの？」

「そうよ！アルクシア様の次に偉い御方なんだからっ！」

「だったらさ、あいつのことだから自分のことより周り優先したんじゃねぇの？自分の浮かれた姿なんて見せたらどうなるか分からないとか考えて。実際お前だってあいつのあんな姿見てかなり落ち込んでただろ？」

「それは、確かにそうだけど……」

「おちゃらけたやつが上に立つよりお前が言った冷静で毅然とした方が人はついてくるだろ。で、この世界に来てそんな態度を取る必要がないからあんな風になった。あぁこれあくまで予想だから、本当にこうとは限らないからな」

付け足しはしておく。

これで俺の間違いだったら申し訳ないし。

「そんな、だって、あんたがお姉様を変えて……それであんな風になって……」

「まぁそりゃ俺が関わって変わったことはあるだろうけどさ、別に何を強制したわけじゃないし、俺は最初からあのアンしか知らないぞ」

「じゃ、じゃあ何？お姉様は今まで無理してて、今が幸せって言いたいの？」

ネハラの声が震えてるのが分かる。

「昔がどうとかは知らないけど、今は幸せって言うんじゃないか？」

幸せじゃなかったらあんな笑みは浮かべないだろう。

「……」

反応がなく、どうしたのかと顔を向けると、そこにネハラはいなかった。

もっと顔を後ろに向けると、ネハラは俯いて立ち尽くし――いや、浮き尽くしていた。

足を戻してちらっと顔をのぞき込むと、恐怖したような表情をしていた。

どうして恐怖なんて？

ネハラの立場になって考えてみる。

自分の知ってる大切な人が、実は無理をしていて、自分がいない世界で幸せな生活を送っている。

あぁそうか、そのことでネハラは恐怖をしているのか。

「クーレラに捨てられるのが怖いのか？」

ビクッと肩を震わした。

どうやら図星のようだ。

「だ、だって、お姉様、地球（ここ）で凄い楽しそうなんだもん。楽しそうにあんな笑みを浮かべるんだもん。あんな幸せそうな笑顔なんて見たことないもん。認めたくないじゃない。１５９年よ。１５９年ずっとお姉様の幸せを考えて生きてきたのに、私たちと別れたほんの一瞬の間の方が幸せなんて、考えたくないじゃない。私はお姉様がいないと生きていけないのよ？私が好きなお姉様がどこかに行った

ら、私はどうすればいいの？誰かのせいにするしかないじゃない！！どうにかしていつものお姉様に戻ってもらいたいって思うしかないじゃない！！分かってんのよ！今のお姉様が心からあんたのことを愛してるのは！！でもそれを応援したらお姉様の心の中の私が消えちゃうじゃない！私はヤチクみたいに愛する人を複数にするなんて出来ない！私にはお姉様しかいないの！！どうすればいいのよッ！！嫌なの！お姉様に必要とされないことが嫌なの！！ただの奴隷としてでもいいから必要とされたいの！！でも、あんたがいるから、私なんて、必要とされないのよ……。あんたがいなければ、私は幸せのままで、でもお姉様は幸せになれなくて……。どうすればいいのよ？ねぇ、教えてよ。私は、どうすればいいのよ？」

ネハラは泣き崩れ、地面に座った。

俺に出来るのはひとつだけだった。

ぽん。

ネハラの頭の上に手を置いた。

「ネハラさ、お前の知ってるクーレラって大切な人見捨てるような奴だった？」

「……そんなこと、ないわ。お姉様は平民（トアラ）の命さえ守ろうとして体を張るような御方よ」

トアラというのは分からなかったが、多分位の低い奴らのことなんだろう。

「俺が知ってるアンもな、仲間は大切にするような奴だ。そんなあ

いつがさ、環境が変わってもそこは変わらないあいつがさ、妹のお前を見捨てるなんてことしねぇって。もっと言えばお前を奴隷なんて絶対思わない。あいつは絶対お前のことが必要って言う」

「分かんないじゃない。ほんの少ししか会ってないあんたに何が分かるのよ？」

「まぁそう言われりゃそうだ。多分俺はアンのこと半分も分かってないだろうな。でもさ、そのほんの少ししか会ってない間でさ、多少はあいつのことは知れたよ。アンは地球の食べ物、特にうどんが好きだ」

「……は？」

「ピリ辛が好きで七味をよく入れるな。でも、コーラみたいな炭酸は駄目だ。舌がヒリヒリするらしい。後好きなものは猫だ。あの耳がなんとも言えないらしい。最近箸を使いたいって言って特訓中だ。かなりぎこちないけど、まぁくえる程度には使える。皆が寝てる早朝によく出かけて魔法の練習もしてるな」

「ちょ、ちょっと、何言ってんのよ？」

「知ってたか？あいつもの食べるとき絶対目を瞑るんだぞ？」

「そのくらい知ってるわよ！あと食べるときは必ず二本の指は立てるわ！」

「ああ、そうそう。それとなんか知らんけどものまねが好きみたいでな、たまに急に他の奴の声で話しかけてくる」

「あ、それ私もやられたわ。一回ヤチクの声で話しかけられて、その時ものすごく不機嫌で苛つきながら返しちゃって……私の存在価値がなくなったわ」

「あぁ、そっちでも意外とイタズラとかすんのか」

「いや、ほんのちょっとだけよ」

「あ～そうなんだ。こっちはいつも胸のサイズ変えられてさりげなく見せつけられて、もう困って困って」

「ねぇ疑問に思ったんだけど、どうしてこんな肉の塊があるわけ？しかも女にだけ。邪魔じゃない」

「あーそれはな、男を惹きつける働きを持ってるというか、興奮させるためにあるというか」

「は？あんたってこんな肉の塊に惹かれるわけ？」

「いや、それは本能っていうかさ、この世界の男はそう言う風に出来てるわけ」

「ふぅん。変な生き物ね」

「あ、そうだ。話は脱線したけど、俺がこの短い間であいつについて一番分かったこと。アンは優しい。からかうことはあるけど嫌がることは絶対してこないし、何より友達とか大切な人をよく考えてくれる。お前らの姉妹の関係って、よくは分かんないけど、お前が一方的に押し付けたんじゃないんだろ？」

「……えぇ。お姉様も同意してくれましたわ。方法は、ヤチクがアンタにしたようなことよ」

「なるほどな。なら平気だ。二回目言うけど、自分の妹をあいつが大切に思わないわけがない。もう一回ぐらいさ、自分のお姉様を信じてみろよ。お前が敬うに足る奴だからあいつの妹になったんだろ？」

「……うん」

「おし、じゃあ帰ろうぜ。クーレラとラスクが待ってる」

「……で、いいわよ」

「ん？なんだって？」

「アンでいいわよ、って言ったの。今のお姉様はアンって呼ばれてるんでしょ？」

「おぅ、確かにそうだな。じゃあ改めて。アンとラスクが待ってる。今度は迷子にならないようについてこいよ」

「なぁっ！それ絶対お姉様たちには言わないでよね！」

「じゃあさ、魔界の飯食わせてくれよ。俺まだ食ったことねぇんだよな。朝と昼の旨そうだったし」

「ま、まぁ別にそのくらいならいいわよ。どんなのが食べたいの、ナツヤは？」

「……。そうだな、よく分かんねぇからネハラの好きなもの食わせてくれ」

「分かったわ」

「ただいま～」

「遅いぞ夏哉！早く料理を食べさせてくれ！」

帰ってくるなりアンの注文が飛ぶ。
せめてお帰りは言われたかった。

「ってなんだ、ネハラも一緒か。お帰り」

「おいこらアン、俺にお帰りはなしか？」

「じゃあお帰りのキスをしてやろう」

「それはいらん」

結構日常となってきたこの手の会話をしていると、ひょっこりラスクが顔を出した。

「お帰りナツヤ、ネハラ」

「ただいま～」

「た、ただいま……」

「ん、ネハラどうした？元気ないな。まだ頭冷えてないのか？」

ラスクが傍に近寄ってきた。

「あ、いや、冷静にはなったんだけど、その……」

気まずそうな顔でアンをチラチラ見る。

「私か？なんだ、言いたいことがあるのか？」

「えっと、その……お姉様！」

「おぉ、なんだ？」

「その、お姉様は、私のこと大切に思ってますか！？」

アンにとっては突然な質問にキョトンとした表情を浮かべる。

「あー、いきなりどうした？」

「まぁ答えてやれよ」

俺はアンを促した。

「よく分からんが、大切に決まってるだろ。お前は妹なんだぞ？」

その言葉を聞いてネハラはぱあっと明るい顔をする。

こんな顔は初めて見た。
嬉しい余りか俺の手を握って上下に振る。
「ねぇナツヤ聞いたっ？お姉様私のこと大切だって！」
「あぁ、よかっ――」
一瞬の出来事だった。
その一瞬に反応出来た俺は凄いと思う。
ネハラを横に飛ばし、迫り来る刀を両手で挟んで止める。
「夏哉、聞きたいことがあるんだが」
「ＯＫＯＫ、だったらまずは力を抜こうか。暴力だけじゃ何も解決しないぞ？」
一瞬もしないうちに作り出した土の刀でアンが斬り掛かってきていた。
「説明が先だ。夏哉、お前まさか帰りが遅かったのは妹を口説くためではないだろうな？」
「口説くなんて人聞きの悪い。俺はただ俺の大事な人の妹様を励ましただけですが？」
「ほう？励ましただけで、下の名前を呼ばれるほど仲良くなったのか。お前は完全にネハラルートも立ち上げたようだな」

「ちょっと待ちなさいアンちゃん。貴女何？ルート？とかそんな言葉使っちゃってるわけ？俺そんな言葉教えてないよ？」

「沙鳥から聞いた」

「よ～しよぉく分かった。俺は今から無駄な知識を与えた黒髪ポニーテール女をきっちり叱ってくる」

「逃がすと思うか？」

「うん、きっと逃げられないね。ラスク様！助けてくださいお願いします！！」

俺はこの場にいる最強の砦に頼ることにした。

「いや、済まない。話の流れがよく分からなくてどちらにつけばいいのか分からなくて……」

「いやそれでいいんだ！ラスクにはこんな無駄知識なんて入れなくていい！純粋なお前の方が嬉しい！ほらアン思い出せ。お前も昔はあんなに純粋でキレイな子だったのに！」

「人は何かを知ることで成長していくものなんだよ」

「なんで人じゃないお前が人を悟ってるんだ！？こうなりゃ最後の砦、ネハラ！助けてください！」

「私はお姉様命だから何をもってしてもお姉様優先よ？」

「このシスコンが！」

「よ〜し、流石ネハラだ。ご褒美に頭なでなでしてやろう」

「なっ！ネハラだけズルいです！！アタシもアンお嬢の味方につきます！！」

「味方いなくなった！？おいアン！いいのか！？ここで俺をどうにかしたら飯が食えないぞ！？」

「あ、お姉様。今日ナツヤ魔界の料理食べたいそうなので料理は作らないそうです。お姉様も食べませんか？」

「あぁそうだな。二ヶ月ぶりに食べるとしよう。じゃあ夏哉はどうなっても平気だな」

「ちょ、待て、仮にもお前俺のこと好き――ギャアアアアアアアアアアアアアアア！！」

第七話　《四章》迷走する思い（後書き）

香苗「祝、『四人の魔法使い』一周年！！」

作者「わぁい！一周年一周年！！」

香「凄いね。よく一年なんて続いたね」

作「ほんとだよ。一年前って言ったら、アンがこっちに来るちょっと前だよ」

香「うん、懐かしいね。確かあの頃は一日一話ペースで投稿できてたのにね」

作「まぁ文章が短かったから。じゃあ――」

真樹「ちょっと待ちなさい！今回はわたくしたちの会議の時間ですわ！！二人は退場してくださいまし！」

香「え、真樹ちゃん？いきなりどうしたの？というよりたちって？」

灯里「どうも、後書きでは初めまして」

作「え、えぇっ！？俺呼んでないよ！？なんでいるの！？」

灯「いや私も真樹さんに連れられて来たんだけど」

真「いいから！とにかく二人はここから出てください！」

作「まぁそう言うなら出てくけど。じゃあ香苗、感想謝辞最後にしといて」

香「は～い。えっと、姉様とソラトさん、感想ありがとうございます。ソラトさんはアンケートの追加もいただきまして、助かります。皆さんも人助けと思ってアンケートに答えてくれると嬉しいです。待ってます」

作「じゃ、真樹、灯里、またな」

香「じゃあね～」

真「よし、二人は行きましたわね」

灯「あの、真樹さん。どうして私なんですか？会議っていっても話すようなことは何も――」

真「いえ、わたくしたちにはある共通点があるんですの」

灯「ありましたっけ？」

真「周りに夏哉のことが好きと思われている」

灯「あっ」

真「確認しますが、灯里さんは夏哉と付き合いたいですか？」

灯「いえ全く」

真「ですわよね。わたくしも同じですわ。なので、どうしたら周り

から夏哉が好きだという認識を取り除くことが出来るか、話し合いましょう」

灯「賛成です。まず、正攻法では無理ですよね？」

真「わたくしは夏哉なんて好きでもなんでもありません、ということですの？」

灯「そう。私は何度か言ってるんですけど、どうやら照れ隠しに見えるようで」

真「わたくしも同じですわ。でもだからと言って？好きです？なんて言ったら？デレ期が来た？なんて言われそうですわ」

灯「でしょうね。ならここは思い切って柊を無視するというのは？」

真「……夏哉に全力で謝られて、痴話喧嘩してる風に想像できてしまうのはわたくしだけでしょうか？」

灯「あ～そうか。無視なんかしたら柊自分に責任があるとか思って土下座しそうですもんね」

真「でしょ？まぁ取り敢えず、手っ取り早い方法は思いついてますの」

灯「なんですか？」

真「彼氏を作る」

灯「え、いや、確かにそうなんですが、それは……」

真「分かってますの。ぶっちゃけて言いますと、わたくしは夏哉以外男は苦手なので彼氏を作る気はさらさらありません」

灯「私は……嫌いっていう訳じゃないんですけど、まぁ一番仲のいい男子は柊なんでそんなことは考えてないんですけど」

真「多分それがマズいんでしょうね」

灯「……？あぁ、男友達がいなくて、柊と仲がいいってことですか？」

真「えぇ」

灯「全く、嫌になりますよね。どうして友達という関係のままでいきたいのに周りはすぐ色恋沙汰に話を持って行くんでしょう」

真「それには同意しますわ。それに夏哉本人もわたくしたちと友達宣言してくれてるのに信じてくれないんでしょう」

灯「困りましたね～」

真「困りましたね～」

灯「……なんででしょう、何をしても周りの認識が変わらないって思ってくるんですけど」

真「奇遇ですわね。わたくしもですわ」

灯「真樹さんだけはお願いします。私と柊は友人と認識していてく

ださい」

真「分かってますわ。灯里さんも、よろしくお願いしますわ」

灯「はい」

第七話　《五章》主人公イベント

日にちは過ぎて六月十九日。
文化祭当日だ。
文化祭は二日あり、土曜日の今日は学生のみ、日曜日の明日は一般公開ということになっている。

俺たち三組の出し物は結局喫茶店になった。
沙鳥がいるから当然といえば当然だろう。
名前は『ヘブンクラウド』。
見て分かるように、直訳で『天雲』という意味だ。
その名前に決まった時沙鳥は苦笑していた。
本人曰くいつものことらしい。

役割は、俺、空ねぇはウエイターウエイトレスで香苗、沙鳥が料理。
最初は沙鳥はウエイトレスという案だったが、痴漢とかがありそうだったので、そのことを沙鳥に言ってやめてもらった。

場所は二階の科学室。
教室は広く、いつも使ってる三組の二倍ほどなので半分くらいに区切り、片方で席を作り片方で調理をするという方法を取った。

さて、今俺、香苗、沙鳥、魔族三人はいつもより一時間以上早く学校へ向かっている。
これというのも、昨日まだ教室の装飾が終わらなかったからだ。
と言っても九割型は終わっている。
あと風船と看板をつけるだけだ。
人手もいらないので俺たちでやっちゃおうということになった。

「ううぅぅ、ようやく文化祭だね～」

沙鳥がウキウキしながら言う。

相当楽しみなようだ。

「うん、そうだね。僕友達と回るってこととしたことないから楽しみっ」

そう言うのは香苗――改め香君。

制服もしっかり男物だ。

香苗が男装するってなった日の放課後、担任が理事長（♀）に掛け合い、香苗を男装させる許可をもらいにいったのだ。

最初は駄目だと言っていた理事長だが、担任は男装させた香苗を連れて再び行くと鼻血を出して許可をしたらしい。

クラスの皆から、文化祭が終わるまででいいから男装してっていう要望があったため、普段も僕っ子を演じている。

最近はそれも見慣れ、違和感はなくなった。

「そういや料理作る側はなんか着替えたりするの？」

「あ～、なんも言われてないね。まぁエプロンは当然だけど、特に着替えって言うのはないよ。ね、香君？」

「うん。衛生面がよかったら多分なんでも良いと思うよ」

「そっか。で、アンたちどうする？何も出来ないんじゃつまんないだろ？」

今度は魔族の三人に話を振る。
三人が何も出来ないのに俺だけ楽しむっていうのは気が引ける。

「いや、今日は一緒にいさせてもらう。明日はちょっとやることがあるから別行動させてくれ」

「ん、了解。ってそれはラスクたちも？」

「あぁ。アンお嬢と一緒だ」

「はいよ。じゃあ明日は基本俺たち三人店の方にいるからそっち来てくれ」

「分かった」

ラスクが頷く。

特に会話らしい会話はなく学校に到着した。
言っておくが、会話がないのは仲が悪いというわけではなく、単に今まで話しすぎて話題がなかっただけだ。

「あ、夏哉。ちょいトイレ行ってくるね」

「いいけど、女が普通男にどうどうと言うか？」

「夏哉だからいーの。先行っててていいよ」

「あ、僕も行く」

香苗も沙鳥の後に付いていこうとする。

「香苗ってさ、その格好で女子トイレ行くのどうよ？」

「あ、夏哉君知らないんだ。今女子トイレね、僕専用の札が急遽付けられてるんだよ。？香君がいます。男子と間違えないように？って」

「はぁ！？全部！？」

「うん。理事長の指示で付けられたの」

「へぇ～……」

「じゃ、行ってきまーす」

沙鳥が香苗の手を引いて近くのトイレに入っていった。

俺たちは二人を置いて二階の科学室に向かう。

「あ、そだ。アンも装飾手伝ってくんね？」

「構わないぞ」

アンが了承すると、ラスクが気落ちした様子で謝ってきた。

「済まないナツヤ。アタシも手伝えたらよかったんだが……」

なんにも出来ない自分に落ち込んでいるらしい。

「まぁしょうがねぇよ。それより二人は誰か来たら教えてくれないか？端から見たらアンが持ってるもの浮いちゃってる様に見えるからさ」

「分かった」
「は～い」

二人が頷くと、ちょうど目的の教室に着いた。

「うーし、じゃあ頑張りますか」

軽く意気込みを入れてドアを開く。

目の前に、

数人の女子が、

服を脱ぎかけていた。

『……』

静まり返る教室。

最初に動けたのは、俺だった。

「すいません、部屋間違えました」

ガラガラガラ、バタン。

『きゃあああああああああっ！！』

そんな彼女たちの叫び声をＢＧＭに、俺は窓側の方の壁に背中をつけてうずくまった。

そして俺も叫ぶ。

「なんっでだァァァァァァァァァッ！！」

おかしい。

絶対におかしい！

なんで現実にあんなことが起こる！？

ここは歴とした科学室だよな？

女子更衣室でも女子トイレでもないよな！？

これはもう誰かの仕組んだわなとしか思えない！！

沙鳥か？

沙鳥なのか？

沙鳥がわざわざ俺に主人公の道を歩ませるためにこんな罠を仕組んだのか？

なんでだよ！！

訳分かんねぇよ！！

なんでこうなるんだよ！？

「あ、その、ナツヤ？」

「ちょっ、と、いきなり何、よ？」

「……あぁそうか」

なるほど、理解した。

詰まるところ、幸せを掴みすぎた俺を自殺に追い込もうとしてるわけだな？

そうかそうか、よーく分かった。

俺は立ち上がって窓を全開にした。

「ナ、ツヤ？今度はどうした？」

隣から聞こえてくる声があったが気にしてられない。

俺は窓の縁に足をかける。

「そんなに死んでほしいんだろ？じゃあ望み通りこっから飛び降りてやるよ。でも二階だし、俺だからあんまり怪我らしい怪我はないだろうな。でもあれ？流石に頭から落ちればこの高さでも折れるよな。よし、じゃあ逝こう」

両手も窓の縁に掛け、飛び降りる準備を――

「「「待てーっ！！」」」

した瞬間、両腕と胴体を捕まれた。

そのため窓から落ちれない。

「ちょ、ナツヤ！何しようとしてるんだ！？意味が分からないぞ！！」

「そうよ！！なんでこっから飛び降りて死のうとするわけ！？命大事にしなさい！」

「おまえが何悩んでるかは分かってはいるが、あんな主人公じみた展開はもう慣れっこだろうが！今更飛び降り自殺なんてするな！！」

「ふんっ、どうせ俺は主人公じみた展開はお馴染みになってきてますよ。そんな俺が消えれば、着替え中にばったり会うことも事故で押し倒すこともなくなって女子はみんなハッピーなんだろ？だったら死ぬしかないじゃないか」

「アンお嬢！今の台詞で余計死にそうになってるじゃないですか！！」

「ちょ、どうするんですか！？こいつ無駄に力あって動かないし！」

「そんなこと言われたって私にも分からない」

ガラガラ

「あ、あの、柊君？その、着替えおわ――ってえぇぇっ！？ちょっとみんな来て！！なんか柊君飛び降りようとしてるよ！！」

「本当に申し訳ありませんでしたッ！！」

俺は床に額がつくほど深く土下座をした。

あの後女子四人も一斉になって俺を引き留めた。
そのため頭から落ちることは叶わず、今こうして土下座をしている。
今は着替え終わって皆ウエイトレス服姿だ。

「いや、その、私たち気にしてないよ？ていうか私たちだってこんなところで着替えちゃってたんだし、ねぇ？」

委員長である宝井宮江が周りに促している。

「まぁね。それに別に下着くらい男に見られたところで何か減るわけでもないし」

「そ、その考え方はどうかと思うよ？それに一番叫んでたの鳴海（なるみ）ちゃんだったじゃん」

「それ言うなバカ！」

顔を上げていないので分からないが、どうやら四人いるうちの二人――確か名前は時雨（しぐれ）鳴海と布田夕紀（ぬのだゆき）――は言い争いを始めてしまったようだ。

「ねぇ柊君」

そう声を掛けてきたのはたしか小野寺風里花（おのでらふりか）。

「なんでしょう？」

顔を上げずに答える。

おそらくここで顔を上げたら見えてしまうからだ。
何とは言わない。

「うちらの中で誰が下着一番に会ってた？」

「「「はぁっ！？」」」

他の女子三人が同時に叫ぶ。

「ちょ、風里花！何聞こうとしてるの！？」

「お前バカか！？バカなのか！？」

「普通男の子に聞くことじゃないよ！！」

「いやいやゆーちゃん、女だけじゃなく男の意見も重要でしょ？いい下着つければ気になる彼に振り向いてもらえるかもよ？」

「し、しし、下着って、どれだけ先に進むのっ！？」

なんだかガールズトークを始めてしまった。
そして俺はというと、突然の質問に頭がついてこれずにいた。

「あ～夏哉？質問に答えてあげれば？」

アンが声を掛けてくれたため我に返る。

「え、あ、えっと、どういう、意味？」

そう言うと小野寺はガールズトークを話をやめた。

「意味も何も、柊君はうちらの下着見たでしょ？うちらも麗しき女子高生、男子がどんな下着が好きか気になる年頃な訳だ。でもそう言うことなんて素面で面と向かってなんて恥ずかしくて聞けない。だからこういう場を借りて勢いよく聞こうかと思ってね」

「ちょっとバカ言わないでよ！柊君答えなくていいからね？」

小野寺をたしなめながら俺に声を掛けた宝井。

「いや、ごめん。まずいきなりのことで何穿いてたかなんて良く覚えてないませんでした。覗きした上に質問に答えられないとか、マジ死んだ方がいいですね。じゃあ逝ってきます」

まずそのままの状態でくるっと反転。
その後立ち上がり廊下の方へ――

「もう行かせないぞ」

「ちょ、だから駄目！」

前からはアンたち、後ろからは宝井たちに阻まれてしまった。

「その、ね柊君！覚えてないなら全然いいから！はいこの話は終わりっ！皆飾り付け残ってるからそれ実行！」

パンパンと手を叩いて皆に指示を送る宝井。
指導力があるなと思いながら指示に従い廊下に店名の入ったポスターを張る。
ほんとは室内のそれなりに重い看板をやろうとしたのだが、ポスタ

ーの方は皆身長が足りないということで俺に任された。
多分それだけじゃなく、単に俺と顔を合わせずらいからという理由もありそうだ。

「夏哉、手伝うか？」

「ん～、そうだな。廊下だと一目が多いし、いつくるか分かんないからやめといてくれ。悪いな」

「気にするな」

そういってアンはラスクとネハラとともに俺の作業を見ていた。
貼っていると、画鋲がなくなった。

「中あるかな？」

「どうしたのよ？」

「あぁ画鋲、これがなくなったから取りに行こうと思ってな」

ネハラにそう言うと、教室内に入る。

「すいませーん、画鋲ってありますー？」

「あーはいはい。こっちにあるよ！」

俺が入ってきたところからちょうど反対側の壁にいる時雨が言う。
机の上に乗っていて、看板を支えている。

そっちまで取りに行くと、向こうも机から降りた。

「鳴海、何降りてんのっ？看板支えないと！」

バランスを見ていた小野寺が言う。

「だいじょーぶ。仮止めはしたし」

「その仮止めでグラグラいってるから行ってんのよ！」

「へ？」

時雨は上を見上げた。確かに看板はグラグラ揺れて、とても心許ない様子だ。

「まずっ」

慌てて机の上に乗って支え直そうとする。

しかしそれがまずかった。

机の端の方で足に体重をかけてしまい、机が傾いた。

そうなると当然時雨もバランスを崩れる。

最悪な想像をしてしまい、俺は全力で走った。

そう、全力で。

俺のそばにあった客用の机は風圧で軽く揺れる。

おそらく紙とかそういう軽いものは吹き飛んでるかもしれない。

そんなことを考えてる間にも床と時雨の間に体をスライディングの要領で滑り込ませることが出来た。

ダンッ！！

両足を壁にぶつけて勢いを殺し、その間に時雨の体を腕に納める。
お姫様だっこ状態だ。

ガッシャンッ！！

時雨が乗ろうとした机が倒れる。

「だいじょ――」

続きが言えなかった。
何故なら、さっき俺が壁に足を着けたせいなのか、仮止めされていた看板が耐えられなくなって下に落ちてきているからだ。

時雨の持ち方を変え、左腕で頭、右腕で両腕と胴体を抱くようにする。

両足に力を込め、一気に壁を蹴る。
背中を床に擦り付けながらもその場を回避する事が出来た。
しかしその際頭やら肩やらに何度か机や椅子がぶつかったが、時雨にはぶつかっていない。

ドシンッ！！

看板が床に落ち、かなり大きい音がした。
看板は大丈夫だろうか？

まぁ看板より今は時雨の方だ。

「なぁ、大丈夫か？」

「え？あ……」

すると時雨は体を震わし始めた。
ようやく恐怖が体を支配し始めたのだろう。

「……ひぐっ、グスッ、こわ、かったよぉ……怖かったよぉ！ひうっ！あうっ！怖かった！」

時雨は俺の腕の中で泣き始めた。
そりゃもしかしたら大怪我をしかねない状況だったのでしょうがない。
看板は俺のせいな気がするが。

「取り敢えずもう大丈夫だからな」

そう声をかけると、

「ちょ、カナ！凄い音したよね！？」

「うん！多分ウチのクラス！」

聞き覚えのある大声が聞こえた。

えぇっと……これは、非常にまずいんではないでしょうか？

「アン！ちょ、なんっかし――」

ガラガラ！

「「夏哉（君）！！」」

アンへの懇願は届かず、無情にも扉が開かれた。

顔を上げてそちらを見る。

目があった。

俺は固まる。

向こうも固まる。

さぁ向こうはどう思うだろうか？

泣いてるウエイトレスを俺が抱きしめている。

この状況で俺は何を言えばいいだろうか？

「話を聞いてくださいお願いします！！」

心から叫んだ。

第七話　《五章》主人公イベント（後書き）

夏哉「作者ぁぁぁぁぁぁ！なんでだ！？なんでこんなに盛り込んだ！？一話でなんで着替えと事故が起こるんだ！？」

作者「いやね、ちょっと前ソラトさんからの感想で、主人公なら後は『ヒロイン達の着替え中に部屋に入る事』と『事故で女の子、又はヒロインを押し倒してそれを他のヒロイン達に見られる』っていうのがあったから、再現してみました。ソラトさんすいません。着替えはヒロインになりませんでした」

夏「そーかそーか。じゃあちょっと行ってくる」

作「どこに？」

夏「ソラトさんのとこ」

作「待てー！！早まるな！！おま、ソラトさん読者様だぞ！！」

夏「読者だろうとなんだろうと同じ人間だろッ！！どうしてくてめぇはそうやって差別するんだよ！？どうして無理矢理にでも特別扱いしようとするんだよ！？変わんねぇんだよ！あの人だって俺たちと変わんねぇんだよ！だから間違いを犯すんだよ！！だったら！その間違いを直すのも変わんねぇ人間の俺たちだろうが！！」

作「夏哉……俺はそんな言葉に惑わされるかぁ！！俺はソラトさんを護る！ソラトさんのもとに行きたきゃ、まずは俺を倒してから行け！」

夏「そう言うのは死亡フラグって言うんだよ！！」

作「ゲフッ！！く、くそ、こうなったら……あ、アンさん！よろしくお願いします！」

アン「というよりいつまでこの三文芝居は続くんだ？」

夏「三文芝居なんかじゃねえよ！！俺は本気だ！」

ア「やめろ。ただでさえ少ない感想をくれる人が消えてしまうぞ？」

夏「その感想のせいで作者が感化されて主人公フラグが立っていくんだよ！！」

ア「そもそも主人公フラグってなんだ？主人公の定義とは、物語の中心人物だろ？それはこの小説が始まった頃からお前だろ？主人公なのに主人公フラグが立つというのはおかしな話だろ？お前に主人公フラグは立たないよ」

夏「え？いや、でも、え？」

ア「さて、そろそろ時間だな。ファルコさん、ソラトさん、いつも感想ありがとう。他の者もいつでも感想は受け付けるぞ。別に最新話の話だけじゃなくても、昔の話の感想でもかまわないし、『つまらなかった』という一言だけでも構わない。是非送ってくれ。では、また次回も待っていてくれ」

第七話　《六章》写真撮影

「つまり、倒れそうになった時雨さんを助けようと全力で走って受け止めた、と」

「はい」

「そしてその後看板が落ちてきたからこれまた全力で回避した、と」

「はい」

「そして恐怖のあまり時雨さんが泣いてしまった、と」

「はい」

「そしてその姿をちょうど私たちが目撃してしまった、と」

「はい」

「ねぇカナ、どう思う？」

「出来すぎだよね～」

「だよね～」

俺は今香苗と沙鳥の前で正座している。
そして二人の言葉を受けている。
もう？どうしてこうなった？？を通り越してため息が出る。

「まずなんで私たちが来る直前に夏哉と時雨さんは抱きついてたわけ？タイミングおかしくない？」

「それは大きな音が出て、お前らがダッシュで来たからだろ？タイミングを合わせたのはお前らだ」

「でもインターバルはあったよね？その間までずっと抱きつくなんてねぇ」

「泣いてる人をほっとけっつーのかよ。薄情な人間だな」

「……夏哉君、話は変わるけどさ、私たちに隠してることない？」

俺と沙鳥の押し問答に割り込んできた香苗。
突然なんだろうか。

「いや、洗いざらい全部話したけど」

装飾やってて画鋲が切れたがらもらおうとして、時雨が俺に渡そうとしたら看板がグラグラになってたことに気付いた。
それを慌てて直そうとして机に足をかけるが、予想以上に手前に足を掛けてしまったため机が傾きバランスを崩す。
俺はそれを目視して全力ダッシュで時雨と床の間に体を滑り込ませてキャッチする。
その時壁に足を付けてしまい、その衝撃で看板が落下した。
それも全力で回避し、その恐怖のあまり泣き出す時雨。
その瞬間を二人が見た。

どこも抜けてるところはない。

「ふぅん、じゃあどうしてウエイトレス服を着てる四人の内小野寺さん以外がボタンの掛け間違えをしてるのかな？」

「「「へ？」」」

後ろで三人の声が聞こえた。

「うわっ！あ、ああ！」

「ふみゃあーっ！！」

「い、やぁぁぁぁっ！」

悲鳴を上げる宝井、布田、時雨。

「なんだ皆今頃気付いたのか」

「ちょ、風里花気付いてたんならいいなさい！」

「いや、普通に服の隙間から見える肌やブラを見せて柊君を誘ってたのかと。柊君も何も言わないから眼福眼福とでも思ってたから」

「「夏哉君？」」

「違う！俺はあの後から皆を正面から見てなかっただけだ！」

あ、そういえば言ってなかったことがあった。

「あの後？あの後ってどの後なの？」

沙鳥がせめ寄ってくる。

俺は顔を逸らす。
流石にこれは言えない。
言ったら女子たちもあのときのこと思い出して恥ずかしい思いするだろうし。

「あぁ、それは柊君が私たちの着替え途中に教室に入ってきたことです沙鳥さん」

そう思ってたのに、小野寺が自分で言ってしまった。
あ、いや、普通に考えてこれは当然のことか。
俺に対する制裁は必要だし。

「え、何？なんなの？夏哉主人公になるためにそこまでしちゃうの？てか着替えに突入とかってセクハラで犯罪にならない？」

「ん～、その判断はどうかは分からないけど、でもいけないことはしてるよね。ほんて夏哉君ってたくさんの女の子と関わり持つよね。やっぱり誑しだね」

まぁ俺に対する制裁は必要なんだけど、それはそれとして、

「おい」

俺は我慢の限界を迎えていた。

「ちょおっといい加減にしろよ」

立ち上がり、二人の顔に手を伸ばす。

「いつもいつもいつもいつも、言いたいこと言いやがってよぉ」

がしっ。

右手で香苗の、左手で沙鳥の頭を掴む。

きりきりきりきり。

「ちょ、いた、いたいたいたいたいたい！夏哉痛い！」

「な、夏哉君いたい！死んじゃう死んじゃう！頭潰れちゃう！」

「痛い？潰れちゃう？何言ってんの？俺一割くらいしか力入れてねぇぞ？」

「い、痛いものは痛いの！」

「ちょ、これ冗談抜きでいたいっ！」

「俺さ、よーく耐えた方だよ？今まで俺になんの非もないことでガミガミ言われてさ。俺頑張ったよ？でももう限界だわ。いい加減現実見ようぜ二人とも。そろそろキレるぞ？俺はなんもしてねぇよッ！！全部事故だ！！故意なんてどこにも入ってねぇッ！！それ認めやがれッ！！」

「わ、わかっ、いたいいたい！分かったから！お願い離して！」

「な、夏哉君！！もう無理！認めるよ！いたい！これ以上やったらバカになっちゃう！！」

認証の言葉を聞いて、手を離す。

二人はしりもちをつくとこめかみを抑える。

「うぅぅ、いたい……」

「ひどい夏哉。ＤＶだＤＶ。ドメスティックバイオレンス」

「俺らは家族じゃねぇ」

うずくまっている二人のもとに時雨が近づく。

「あ、あの、天雲、さん、香君、その、私たち本当に何があったとかじゃないですから……」

「わ、分かってるよ。でも、なんか嫌だし」

沙鳥は視線を逸らすと、拗ねたような表情を浮かべた。

「あ、うっ、あま、くも、さん……」

もの凄く可愛らしい沙鳥の表情を時雨はもろに受け、ふらついたと思ったら倒れた。

「ちょ――」

急いで腕を伸ばして床との接触を防ぐ。

「ふぅ。大丈夫か？」

時雨の顔をのぞき込んでみる。

「あ、天雲さん、拗ねて、可愛い……」

頬を真っ赤に染め、譫言を紡ぐ。

まぁ平気だろ。

ってアレ？

なんかこの状況嫌な予感しか――

「おはよー――ってえ、夏君女の子抱き寄せて、何してるの？まさか学校でそんな――」

「いい加減なこと言ってると拳骨な」

「わー、夏君倒れそうな女の子を支えてあげるなんてヤサシー！」

棒読みで言う空ねぇ。

なんで倒れそうななんて分かるんだろう。

そんなことより。

「取り敢えず俺外で装飾やってるから、服を直す。それでいいな？」

返事を聞かずに、俺は目的だった画鋲を手に外に出た。

時間は過ぎ、いよいよ文化祭開始。

俺は今日午後からなので午前中は空いている。
明日も午前中にある。
香苗と沙鳥は今日一日やって、明日がフリー。

「そうだ、お前らバンドでも聞きに行かないか？」

俺は二階の廊下を歩きながらアンたちに声を掛ける。
以前ラスクが掛けてくれた風魔法のおかげで周りには聞こえていない。

「夏哉、その単語を知らない私たちに聞くのか？」

「え、私は知ってますが」

「何！？ネハラなんで知ってるんだ！？」

自分の知らない単語を知っていたのが余程意外だったのか、大きな声を出す。

「あーえっと、この前迷――じゃなくて、一人で町を散策してたときに人が話してまして。ついていったらそれをやっていまして。叫んだり箱を叩いたり糸を弾いたりして音を出すのよね？」

「そんなもんだ。そういやさ、お前らんとこって歌なんて娯楽あるのか？」

俺の問いにラスクが答えてくれた。

「あると言えばあるが、娯楽ではないな。まず娯楽自体数えるほどしかないんだ」

「へ～。じゃあさ、歌ってアレか？神を讃える歌的な？」

「そんな感じだな。ナツヤのところはどうなんだ？」

「いや、アレ全然違うわよ！なんか人間のくせに顔真っ白で、何言ってるか分かんないほど思いっきり叫んだり！頭は振るは動き回るはで、もう驚いたわ」

なるほど、ネハラはメタルの方を見たのね。

「まぁそういうのもあるし、ゆっくり歌うのもあるし、いろいろだな。こういうのしか歌わないっていうのは基本ないよ」

「ふ～ん、そんなのがあったんだな。ネハラ、楽しかったか？」

「すみません、その時はこの世界のことは興味なかったのでよく覚えてなくて。ただ驚いたとしか」

「そうか。じゃあ夏哉、そこ見てみたい」

「ＯＫ。二人はどうする？別行動でも構わないぞ？」

「私はお姉様の傍から離れないわ」

「アタシもだ。アンお嬢と夏哉がいくならアタシも行く」

「了解。じゃあ体育館だからあっちだな」

近くに階段があったのでひとまず一階に降りようとすると、

「な～つく～ん」

後ろから空ねぇが声を掛けてきた。

「ん、どーした？」

「あれ？夏君、何口ぱくぱくしてるの？」

「は？何が？」

「ほらまた。え～っと、まさか読唇術で読み取れと？」

もしかして空ねぇには声が聞こえてない？

あぁそうか。

「ラスク、解除してくれ」

「分かった」

「っと、これで聞こえる？」

「あ、やっとしゃべった。もう夏君、私読唇術なんて出来ないんだからね」

「ごめんごめん。さっきまでアンたちと喋ってたからさ、魔法で周りに聞こえないようにしてたんだよ」

「あぁ、なるほど。そういうことね。で、夏君、これからどこ行くの？」

「音楽聴きに体育館だ。バンドそろそろ始まるしな」

「じゃあ私も一緒にいいかな？」

横に視線を送る。

「私は構わないぞ」

「私も別に」

「アタシも」

「よし、じゃあ行くか」

「あー待って！確かこの近くで綿あめ売ってたはずだから、買ってくるね」

「はいよ。待ってた方がいい？」

「一緒に来る？恋人って思われちゃうかもだけど」

「そうか？まぁいいや。暇だし行くよ教室どこ？」

「二階の三年一組の教室。一回渡り廊下渡んなきゃだけど、いい？」

「いーよ別に」

「ありがと」

一段降りてしまった階段を上がり、一緒に三年一組の教室に向かう。

「お姉様、わたあめってなんですか？」

「確か、砂糖っていうこの世界の甘い食べ物を熱で溶かして、細くしたやつを棒に巻き付けて食べるもの、じゃなかったか？」

「はい、アン正解。お前らの世界にさ、甘くて熱にすぐ溶けるものってあるか？」

「ん～、ルシルの粉、か？」

アンが答えると、それにラスクも付け足す。

「そうですね。でもアレただ甘いだけであまり使い道ありませんよね。それなのにいっぱい生えてきて、除去するのが大変で」

「へぇ、そういう作業ってラスクさんがやるんだ。てっきり位の低い人たちがやるんだと思ってた」

空ねぇが感心しながら言う。

実は俺もそう思っていた。

「お姉様はね、平民（トアラ）の生活を知りたいって言って、平民のところで暮らしてたのよ。で、付き添いは私とヤチクだけ。正直大変だったわ。それこそ普通の貴族（アルトラ）だったら平民をこき使って暮らしてたけど、お姉様はそれを嫌ってね」

「私なんかにこき使われるなんて嫌だろ？」

「アンお嬢。いくらアンお嬢でも、クーお嬢の侮辱は許しませんよ？」

「あれ？なんか私多重人格になってる？どっちも私なんだが」

「だとしてもです。誰であっても貴女を侮辱する人は許しません」

「分かったよ。まぁあの頃はな、ほんとは一人暮らしをやってみようと思ったんだが」

「そんな危ないことはやらせられません！」

「ということだったから二人連れて三人暮らししてたんだ」

「へ～。あ、ここだ」

三年一組の教室を見つけ、中に入る。

「ここ二年の出し物か」

中は、人が少ししかいなかった。

「こんなに人が少ないのか？確かわたあめって有名だった気がするんだが」

「あ～それね。多分だけど、理由はある」

「すいませーん。綿アメ、夏君食べる？」

「そうだな。食うか」

「じゃあ二つください」

「はい。あの、二人はカップルですか？」

「へ？なんでですか？」

「実はカップル限定で、この猫ちゃんストラップをペアでプレゼントしてるんです」

店の人は猫のストラップを二つ見せてくれた。

「にゃ、にゃんこ……にゃ、にゃつくん！にゃんこにゃんこっ！にゃんこだよ！」

「落ち着きなさい。なんだよにゃつくんって。じゃあそれ、もらえます？」

「にゃ、にゃつくん、いいにょ？」

「いいも何も、恋人なんだからいいでしょ？」

「わ～いっ！ありがとうっ！！」

「じゃあこちらにどうぞ」

そういって連れて行かれると、カーテン的な大きな布で仕切られた場所があった。

「えっと、ここは？」

「恋人を証明してもらうために、キスショットをもらいます」

「「ブッ！？」」

俺と空ねぇは吹き出した。

「ま、マジっすか？」

「マジっす。あぁ、これは別にどこかに張り出す、なんてことはしません。中に人はいませんので、用意されたタイマー式のカメラで写真を撮って、三十秒ほどしたら写真が出てきますので、それを見せてくれたら猫ちゃんストラップを差し上げます。ではどうぞ」

俺たちはカーテンを開け、中に入った。

ひょいっと中から首を出す。

「アンたちは入ってこないように」

「分かった」

「悪いな」

カーテンを閉める。

狭い空間で二人きりという状況になり、変に緊張してしまう。

「あ、あの、空ねぇ？なんか、勢いで入って来ちゃったけど、どうする？」

「あ、えっと、その、ね？私は、まぁキスをしたい年頃だし、にゃんこほしいし、相手が夏君だったら吝かではないしね、嫌ってことはないんだよ？でも、心の準備もあるわけだし、何より初めてだから、躊躇っちゃうこともあるの」

「まぁ、だろう、な。それよりさ、聞きたいことがいくつか」

「な、なんでしょう？」

「俺を恋愛対象に見てますか？」

「私は、お友達の関係を築いていきたいと思ってるけど」

「うん、ならいい。あと、写真をひけらかすようなことはしますか？」

「し、しないよっ。やっぱ恥ずかしいし……」

「まぁそうだよな。で、どうする？俺も、こんな発言したらほんと最低な男になるんだけど、空ねぇとしても平気だとは思ってる」

「ふぅ～、よし！しよう」

「分かった」

カメラをセットするために近付く。

「行くよ」

「うんっ。どんと来い！」

ポチッとボタンを押す。

少し大股に歩いて空ねぇのもとに戻る。

空ねぇと向かい合い、肩に手を置く。

「じゃあ、お願いします」

「えっと、こちらこそ」

そう言葉を交わし、俺たちはキスをした。

「ありがとうございました～」

「「……」」

俺たちは顔を合わせられなかった。

「ちょ、どうしたのよ二人とも」

「……ネハラ」

俺は名前を呼んだ。

「な、何よ？」

「絶対、誰にも言うなよ？」

「は？」

「アンも、ラスクも絶対言うなよ？」

「あ、あぁ」

「分かった……」

「言ったら、そうだね。私たち全力で三人をぶっ飛ばすね？」

にっこり笑う空ねぇを見て、コクコクと頷く三人。

あれは、ヤバかった。

すぐに写真は撮れると思い、俺たちも早めにキスをして、

十五秒も待った。

正直待ってる間は気まずかった。

第七話　《六章》写真撮影（後書き）

作者「一応言っておきます。この世界はあくまで後書き世界なので、本編とは関わりはありません」

香苗「何、いきなり」

作「つまり、本編の会話をしてもいいってこと」

沙鳥「あぁなるほど。ねぇ作者。もしかしてこの文化祭はヒロイン準ヒロイン皆と夏哉絡ませるの？」

作「あ～分かんない。取り敢えず、沙鳥以外は絡ませるアンはある」

沙「え、私以外!?なんで!?」

作「あーでもアレだ、灯里は分からん」

沙「ちょ、それはどうでもいいとは言わないけど、なんで私はなんもなしなの!?」

作「いや～だってさ、やってもいいんだけど、このままやってもオチないぞ？」

沙「いやいらないから」

香「ちょっと待って。と言うことは何？私はオチあるの？」

作「おぉ、あるぞ。飛びっきりの。俺は自分で考えて、吹いた」

香「そ、それって、嫌な予感しかしないんだけど……」

作「まぁ、お楽しみってことで。取り敢えず今回の話は空ねぇでした。あ～そうだそうだ、取り敢えず皆さんにクイズ、的なことを出してみたいと思います」

香＆ａｍｐ；沙「「クイズ？」」

作「うん。なんで今更？て思うかもだけど、それは空ねぇが出てきたからです」

沙「ということは、空ねぇに関するクイズ？」

作「そ。えっと、第六話《十章》の後書きで、香苗が？矛盾を見つけた？って話がありました」

香「えぇっと、あの時は確か、確か……あぁ！ごにょごにょ？」

作「そうそれそれ。それを見つけてみてください。なお、誤字脱字ではありません」

沙「なんか、最後の付け足し悲しいね」

作「言ってくれるな。ではお待ちしてます。期間は特に設けません。あとこの矛盾は伏線ですので、答えが出たら後書きで発表、的なことはしません。するとしたら、その複線が回収されたときにです」

沙「さて、お知らせは終わったし、そろそろ締めますか。えっと、ファルコさん、ソラトさん、紅き月の魔王さん、ｋｉｉｔｉさん、

感想ありがとうございます。ｋｉｉｔｉさんにはアンケートもくださいまして」

香「感想評価、アンケートなどなどは待ってますんで、気軽にお願いします。正直なところ、アンケートはもうちょっとほしいと思ってます」

作「よろしくお願いします」

第七話　《七章》痴漢

俺たちは体育館に向かっている。
バンドを聞きに行くためだ。

チラッと空ねぇを見る。
今は猫のストラップを手にして笑っている。
それを見て五分ほど前のことを思い出してしまう。

「はぁ」

自分に嫌気がさした。

何普通にキスしてんだよ俺。
しかもあって二週間の子に。
節操のなさにも程がある。

「どうした夏哉？」

アンが気に掛けて声を掛けてくれた。

「いや、俺はつくづく最低な男だなって」

「それはどのことについて言ってるんだ？」

「アンと会うちょっと前から今までの自分。なんも答えなくてズルズル先延ばしにして、しかも他の女子に手を出し、あまつさえキスをした自分」

「ふざけるなよ。お前は最高な男だ。今まで何を救った？神が現れたときは私や香苗、沙鳥、もっと言えば世界を救い、タクノムが現れたときは私に敵、灯里にるあ。薬で操られたときは香苗、沙鳥の心。妹たちが現れたときはラスクとネハラ、私の居場所。これだけを救って、どこが最低だ。そんなことを言ってみろ、お前の周りはそいつを必ず排除する。お前も例外じゃないぞ？」

アンに言われて改めて思い返すと、二ヶ月くらいでどんだけ動いてるんだ、と思った。

確かに、いろんな人は救えたんだと思う。

自惚れていいなら、ちゃんと主人公の如く動けてるんだと思う。

でも、

そうじゃない。

「人の想いに答えられなきゃ最低だろ？俺三人も待たせてるんだし」

「……」

アンは無言で、俺の手を掴んだ。

「火津那、夏哉の綿アメもって先に言ってろ」

その言葉を空ねぇたちに向ける。

空ねぇは猫のストラップをポケットの中に入れ、言われた通り俺の綿アメを持った。

そして、俺は腕を引っ張られた。

「来い」

「ちょ、待て。逃げねえから離せっ」

このまま引っ張られたら変な格好に見られる。

アンは手を離し、俺を誘導した。

そこは校舎裏だった。

学園祭を行っているため喧噪は聞こえるが、やはり薄暗い。

「どうした？」

そう訊ねると、

ゴッ！！

拳で返ってきた。

右ストレートが無防備な顔面を突いた。

あまりの衝撃に耐えられず、若干浮き上がって校舎の壁に背中を打った。

「グ、ハッ！！」

肺の中の空気が、うめき声とともに吐き出される。

「私は言った筈だ。夏哉のことを『最低』と言ったものは排除すると」

何か言おうとして、でも何を言えばいいか分からず黙っていると、

アンが俺の胸ぐらを掴み、顔を合わせる。

「私は言った筈だ。？今は答えを出さなくていい？と。？もっとお互いを知ってから答えを出してほしい？と。お前は私の何を知ってる？私はお前の何を知ってる？お互い、まだほんのちょっとしか、二ヶ月くらいしか知らないじゃないか。９０年だぞ？私はこの地に想いを馳せて９０年待ってようやく来れたのだぞ？それに比べたら二ヶ月なんてほんの一瞬だ。夏哉は、この二ヶ月つまらなかったか？私と一緒にいることが苦痛だったか？」

「んなわけねぇだろ」

これは即答出来る。

アンがいたから苦痛？
そんなのはあり得ない。
むしろ逆に、たくさん救われてる。
幸せだ。

「ならいいだろ？正直なところな、私はお前と付き合わなくてもいいんだ。ただ、夏哉の傍にいれるだけで私は幸せなんだ。夏哉が他の女を好きになっても、ちょっとだけ目を合わせてくれたらそれで幸せなんだ。だから答えなんて出さなくてもいい、とは言わないが、まだ待てるんだ。というより、お前は私に、じゃなくて私たちに？もう少し待て？と答えたじゃないか。私たちはそれに頷いて、今幸せに生きてるじゃないか。だったら夏哉が悩む必要はない。自分を最低と罵る必要はない」

手を離すと、優しく抱きしめてくれた。

「悩むな。今日は祭りなんだろ？楽しくなくちゃダメじゃないか。その程度の悩みなんて今日一日くらい忘れてもいいって神だって言ってくれるさ」

アンの言葉を聞いて、自分が情けなくなってきた。

「はぁ、悪かったなアン。アホだったわ、俺」

アンの腕から解放された俺は立ち上がる。

「全くだ。お前は私の主人公なんだからシャキッとしろ。無駄にウジウジしてると嫌いになるぞ」

「……そっか、嫌いになるのか」

「あぁ」

「じゃあしょうがない。アンに嫌われるんならアンは諦めよう」

「あぁ――ん？」

俺は校舎裏から歩いていく。

「多分これから先ウジウジしちゃうだろうし、アンにいっぱい嫌われるくらいならここですっぱり関係を断ち切った方がいいし」

「は？ちょっとまて」

「俺のこういう弱さも丸ごと好きになってくれる香苗とか沙鳥だけに答えられるように頑張ろう」

「な、夏哉ぁ！ち、違うぞ？さっきのは言葉の綾みたいなもので、本当に嫌う訳じゃないからな！？私は何があってもお前のことが好きだからな？本当だぞ？本当に好きなんだからな！？そりゃ確かに他の女をどうのこうのとは言ったが、やっぱり好きになってもらいたいわけだし！！だから、な？頼む！見捨てないでくれ！」

アンは俺の背中にすがりついてきた。
ちょっとやりすぎてしまったかもしれない。

くるっと反転し、右手でアンの頭を抱くようにして撫でてやる。

「嘘だ。冗談だ。ちゃんとお前にも答えられるように頑張るよ。ありがとな」

「うぅぅ、バカバカバカバカバカバカバカバカ」

ポコポコという効果音を発しそうなくらい柔らかく俺の胸を殴る。
若干涙目なアン。
もう、なんというか、ギャップ萌え？

「はぁ～」

アンから顔を逸らしてため息をつく。

正直まずい。
あまりの可愛さに悶えてしまいそうだ。
ここが学校ではなく家だったら完全アウトだ。

アンはぴたりと止まった。

「なぁ、夏哉、どうしてため息ついた?やっぱり、人間じゃない私はイヤか?」

「断じて違う!」

語尾を少し強めて否定する。

「別にお前が人間どうのこうのでため息をついたのではなく、ため息をつくと幸せが逃げると言うだろ?今俺は幸せがいっぱいすぎてパンクしそうだったから、ガス抜きのためについただけだ」

「じゃあ、私がイヤという訳じゃないんだな?」

「ったりめーだ。こんな思われて、嫌いになれるはずがねぇだろ。いいか?幸せ詰め込みすぎると逆に死んじゃうんだぞ?気をつけろ」

「う、わかった」

「よし、じゃあ戻るか」

「そうだな」

「まぁ私たちはここにいるんだけどね」

「「え?」」

声のした方向に首を傾ける。

普通にしてる空ねぇと、嬉しそうなラスクと、震えているネハラが

いた。

「アンお嬢、可愛いです」

多分あのポコポコのことを言っているんだろう。
ラスクに大ダメージを与えているようだ。

「ナツヤァァァァ。あんったのこと、少しは見直したと思ったけど、こんな人気のないところにお姉様を連れ込んで抱きしめるあまりか泣かせるなんて……殺す！！」

雷を腕に纏わせたのだろう、パチパチと弾ける音がする。

ネハラは俺との距離を詰めようと飛んできて、消えた。

「え」

一瞬慌てるが、すぐに思い出す。
確かネハラは視界の入る範囲でテレポートが使える。

咄嗟に屈む。

その上をネハラの腕が通る。
アレはきっと顔面直撃コースだ。

「チ、躱され――え？」

何故か背中あたりに軽い衝撃を受けた。

「うみゃあっ！？」

その後ネハラの可愛らしい悲鳴が聞こえた。

顔を上げると、地面にうつ伏せになっているネハラがいた。

なるほど、つまり俺に足を引っかけて転んでしまったというわけか。

「だ、大丈夫かネハラ？」

俺は歩み寄る。

が

ガバッと起き上がり、電気を纏っていない左手で俺の首を掴む。

「ふふふ、引っ掛かったわね。あんなの演技に決まってるじゃない」

「……でこと鼻を赤くして、涙目になって言っても説得力はないぞ？」

「うるさい！黙れ！演技っていったら演技なの！！」

もう一部真っ赤になった。

言うまでもなく頬だ。

「ネハラ」

そこにアンの声が飛び込んだ。

「あ、あの、お姉様、これはほんとに演技ですよ？ほんとですよ？」

「お前さ、魔界にいた頃はよくドジしたことがあったな」
ここでドジっ娘属性追加!?
「い、いや、そんなことは……」
「その度にな、私はお前にやりたかったことがあるんだ」
「な、なんでしょうか?」
一歩、アンはネハラに近づくと、
「ネハラ~!」
「ひょわっ!?」
思いっきり抱きついた。
「ネハラ~!お前もうドジっ娘可愛すぎる!なんだ?うみゃあっ?って!悶え死んでしまうではないか!!」
「ご、ごめんなさい……」
謝るネハラだが、顔は満面の笑みを浮かべている。
「ネハラずるいぞ!アタシだって抱きしめられたい!!」
「そんなラスクさんには夏君をプレゼント!ラスクさん、今夏君に飛び込めば抱きしめてくれるよ!」
「何!?そうなのか!?な、ナツヤ!私を抱きしめてくれ!!」

迫ってくるラスク。
その目は期待一色に塗りつぶされていた。
今の俺にそれを回避する勇気はなかった。
だきっ
「ラスク、これでどうだ？」
「あぁ、これはいいな。ナツヤ、あったかい」
「何この抱き合ってる状況」
こら空ねぇ、それを貴女が言いますか？

その後二十分掛けて皆正常に戻り、体育館に向かった。
アンもラスクもネハラもきちんと楽しんでくれたようで何よりだった。

時間は過ぎていき、午後になる。

俺と空ねぇの店番の時間が近くなってきているため、科学室に戻ってきたのだが、

「アン、最初の頃にさ、どうして有名な綿アメのところに人が少ないんだ、って聞いたよな？」

「あぁ」

「ラスクとネハラに質問だけど、激ウマ料理とアンの普通な料理、どっち選ぶ？」

「「アンお嬢（お姉様）」」

「というわけだ」

「なるほどな」

俺たちの目の前には長蛇の列が並んでいた。

言わずもがな、沙鳥効果だろう。

出口の方から中に入ると、ちょうど客が外に出るところだった。

「ご来店ありがとうございました～！またよろしくお願いしま～す」

その客に、キッチン、というか料理を扱うスペースから顔を覗かせて声を掛ける沙鳥の姿があった。

満面の笑みである。

因みにその場所はと言えば、出入り口の正反対、窓側一面に布で仕切られ、出口側に沙鳥がいる。

沙鳥に見送られ、顔を真っ赤にする客たち。

それを見送った俺たちは沙鳥の元へと向かう。

「お疲れ～」

「あ、お疲れ～。ちょっと人多くなってきたからよろしくね」

「あいよ」

料理を扱うスペースの奥、クラス用スペースの中に入る。
ここにはクラスの荷物がたくさん置いてある。
ここも布で仕切られている。

「さて、午後から俺たちは皆店番なんだが、三人はどうする？」

俺はアンたち三人に聞く。
真樹はどうやら平気そうだが、そうなると真樹は端から見れば一人でにこにこ笑いながら喋りながら歩くおかしな人に見られかねない。
真樹が他の人と行くとなったら三人は真樹と会話出来なくなる。

「私は、夏哉のところにいる予定だ」

「じゃあ私も」

「アタシもそうする」

「つまんないかもよ？」

「言ったろ？お前の傍にいられるだけで幸せだ」

「ありがとよ」

「あの～夏哉さんたち？二人の間に何があったのでしょうか？いき

なり幸せとか言って」

背後から沙鳥が首をひょっこり出した。
ちょっと拗ねている様子。

「いや何、夏哉が少し前まで自分のことを最低とかぬかしていたから喝を入れてやっただけだ」

「本当に？」

「本当だ」

「ならよし。じゃあ夏哉も空お姉ちゃんも早めに来てね。それから夏哉、あんたは最高の男よん」

最後に手を残して、バイビ～と言って振った。

「ほらな？」

「全く、心が広いね～皆」

俺と空ねぇはクラス用Tシャツの上からウエイターウエイトレス用の服を着て外に出た。

「じゃあ頑張りますか空ねぇ」

「ん、了解」

そう言って外に出る。

「「いらっしゃいませ～」」

人生初となる接客が始まった。

最初は慣れなく、ちょっと固いところがあったけど、だんだんそんなこと言ってられないほどに忙しくなってきた。

「三番ショートケーキ二つとロールケーキ一つ、カルピス三つお願い！」

「三番ショート二、ロール一、カルピス三、ＯＫ！」

「柊！八番これ持ってってくれ！」

「はぁい！」

伝票を伝え終えると、厨房から料理が運ばれたのでお盆に乗せる。

「お待たせしました。えっと、ホットケーキ二つとコーヒー一つ、烏龍茶一つでよろしいですね？」

「あ、はい。ありがとう――」

「きゃあっ！？」

ホットケーキをテーブルに置こうとしたとき、悲鳴が聞こえた。

声の主は少女Ｂこと草原奏。

首を向ければ、客の男が草原のお尻に手を伸ばしていた。

いわゆる痴漢だ。

客は二人連れ。
そのうち片方が行った。

「何すんじゃんよ!!」

「お、なんだ?客にそんなこと言っていいのか?」

そんな光景を見て、若干キレそうになるがなんとか抑える。

「わりぃんだけど、ちょっとテーブルお盆乗せたままで待っててくれね?」

丁寧言葉なんて忘れ、素で言ってしまった。

返事を聞かず歩き出す。

「客とか関係ないじゃんかよ!!わりぃことわりぃって言って何がわりぃんだよ!?」

「アァ!?わりぃわりぃうっせぇんだよッ!!」

どう聞いても理不尽な言葉を吐きながら拳を振るった。

パシッ。

乾いた音が響く。

それは決して顔を殴った音ではない。

では何か。

「お客様、申し訳ありませんが全席お触り禁止なので、うちのウエイトレスに手を出すのはやめていただけませんか？」

客の拳は、俺の掌に収まっていた。

「ひい、らぎ？」

「アン！？んだてめぇは――」

「まぁまぁまぁまぁ、取り敢えず座りましょうよ」

空いている左手で客の肩を掴むと、それなりの力を込めて下に押し、強引に座らせた。

「え、アレ……？」

戸惑う客に構うことなく喋る。

「きっとアレですよね。手を出してしまったのは手持ち無沙汰だったからですよね。待っててください。飲み物サービスしますんで」

後ろを振り返り厨房に向かって叫ぶ。

「特別オーダー入りました！リンゴジュース一丁！！」

「は～い、ただいま！！」

俺の呼びかけに香苗が答えると、仕切りから出てきた。

その手には三つのものを持っている。

俺は香苗に向けて手を伸ばす。

「いきま～す！」

まずその三つの内の一つ、受け皿を放る。
続いてもう一つ、コップも。
ちなみに両方ガラス性。

香苗の放ったそれらは綺麗な放物線を描き、まるでビデオの巻き戻しを見る様に俺の両手に収まった。

客の前にそれを置き、今度は香苗を見ずに右手だけを顔の横、左肩の上に置くと、そこにリンゴが到着した。

しっかりキャッチして、それをコップの上に掲げると、

グシャッ！！

それを本気で握りつぶした。

そのためリンゴからは汁がたくさん吹きだし、下にあるコップへと溜まる。

オーダーから出すまでおよそ十五秒。
当店最速の品だ。

「どうぞ、リンゴジュースです。どうしました？顔が真っ青ですよ？あぁ、衛生面のことですか？ご安心ください、そこには気をつけています。それでも飲まないのでしたら、お出口はあちらになりま

す」

「ひ、ひぃぃぃっ！？」

男は連れと一緒に逃げていった。

『わぁぁぁぁぁぁぁ！！』

室内に歓声が上がった。

「大丈夫か草原？」

左手でポケットからハンカチを取り、右手を拭いながら訊ねる。

「あ、あぁ……」

「わりぃな。ほんとはボコるべきなんだけど、暴力沙汰はまずいと思ってな。これで勘弁してくれ」

「いや、それはいいんだけど……色々気きたいことがあるじゃん」

「まぁだろうな。手短に言うと、あれは香苗と前から打ち合わせしてた痴漢対策。香苗は的当てがメチャクチャ得意。俺無駄に力がある。他に質問は？」

「……柊と香君って確か店番今日しか重なってなかった気がするじゃん。つまりこの日に痴漢がくるって知ってたってことじゃん？」

「あ、いや、それはな、思いついたのが店番決まった後だからって

ことだけなんだ……」

「ふぅん。まぁいいじゃんな。ありがとうじゃん柊」

「どういたしまして。さて、最後までがんばっか」

俺はお盆を置いたままの席に戻った。

第七話　《七章》痴漢（後書き）

真樹「私の出番がありませんわ」

作者「まぁ待て。二日目の後半だお前の出番は。絶対出すから待ってろ」

アン「そうだぞ真樹。少しくらい我慢してあげろ！女だろっ？」

真「いや、女関係な――って、えぇっ！？アンさんが作者を庇う！？作者！何したんですの！？」

ア「作者はな、私に夢と希望を与えてくれたんだ」

真「……作者、アンさんは宗教にでも入ったんですの？」

作「詳しくは活動報告の『アン「わ～い！」ネハラ「はい？」ラスク「アレは、誰だ？」』の前後編を読んでください」

真「……あぁ、なるほど。そういうことですのね。それにしても今回の最後、まさかあの方が出てくるとは思いませんでしたわ」

作「草原奏を忘れたという方は、戻りに戻って第二話《五章》をご覧ください」

ア「さすが作者だな！こんなありきたりなシーンをヒロインにじゃなく意外性のある人物で作り出すなんて。お前は最高だ。もう神として崇めても構わないぞ」

真「い、いいんですの？最早キャラ崩壊していますわよ？」

ア「そんなもの！猫と夏哉の前では容易く崩壊する！！」

作「じゃあアン、もう少ししたら夏哉といい思いさせてやるからな」

ア「さ、作者、私はお前を愛していいか？」

作「おう、どんと来い」

ア「さぁくしゃぁぁぁぁぁぁぁ！」

作「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！」

真「……えぇ、皆さん。ここはあくまで後書きであって『四人の魔法使い』とはなんの関係もありませんことをご理解してください。さて、今回の『四人の魔法使い』は、シリアスなのかコメディなのか分からない内容でしたわね。もうやりたい放題になっています。ｓｋｙｆｌａｒｅさん、ソラトさん、感想ありがとうございますわ。そういえばわたくし、ｓｋｙｆｌａｒｅさんと呼んでいますが変えた方がよろしいのでしょうか？」

第七話　《八章》下校

「皆お疲れ様～。皆が頑張ってくれたお陰で、本日の売上金、なんと８５，７００円！２３，４４７円の黒字でした！！」

『わぁぁぁぁぁぁ！』

文化祭一日目が終わり、俺たち一年三組は科学室に集まっている。
委員長の宝井が前に立ち、今日の売上高を報告した。
皆嬉しそうだ。
まぁそれは当然俺もだけど。

「香君、いえ～い！」

隣にいる沙鳥が香苗に向けて両手を出してきた。
香苗も両手を出してハイタッチする。

「いえ～い！」

パシッといい音がした。

「夏哉、いえ～い！」

沙鳥は、今度は体の向きを変えて俺の方を向いて両手を出してきた。

「いえ～い！」

パンッ。

「夏哉君、僕も！」

「おう」

少し香苗に近づいてハイタッチする。

「香く～ん！私も～！」

空ねぇも香苗に近づいた。

「は～い。いえ～い！」

香苗は両手を出すが、それはスカしてしまった。

その代わり、

むぎゅっ。

抱きしめられた。

「はえ？」

間抜けな声を出す香苗。突然抱きしめられた本人としては、理解が不可能なのだろう。

客観的に見た俺ですら分からない。

「いえ～い！ほら、体でハイタッチ！いや～ん、もう香君柔らか～い」

「ちょ、火津那さん！独り占めはズルいよ！私も体でハイタッチす

る！！」

「歩夢（あゆむ）、何抜け駆けしようとしてるの！？香君は私の！」

空ねぇに続いて続々と香苗に群がる女子たち。

それは沙鳥も例外じゃない。

「くっそぉ！空お姉ちゃんのやつ、そう来たか！うかつだった！」

もはやキャラが変わってる。

そして今日もまた取り残される宝井。

「あ、の、その、今日も皆頑張ってくれたので、黒字で終わりました……」

物凄い心地の悪そうな風に言葉を並べる。

ちなみに男子は、女子たちの群がりを観察してる。

たまに中から、『香君、可愛くね？』とかそういう言葉が聞こえた。

？香君？と言ったということは、まさかそっちの人なのか？

……香苗の貞操を守る為に殺っておくか？

そう考えていると、宝井が首を回し始めた。

誰かを捜してるのか？

視線が合い、宝井は止まった。

俺か！？

宝井は俺に困った表情を浮かべながら視線を送る。

どうしよう。
絶対ＳＯＳ的な視線だよ。
俺だって人前に出るのなんて苦手だし、ここで助けたらまた周りにフラグがどうのこうの言われる。
でも宝井が困ってるのは事実な訳で。

あーもう！

俺は手の力を使って少し移動し、近くにある風船を手にした。

ちょっと怖いんだよな、これ。

そう思いながらも、その風船を左手に持ち、右手で思いっきり殴った。

パアンッ！！

風船の割れる音が教室内を支配した。
割っても意外と手は痛くなかった。

喧騒が静まり、視線がこちらに向く。

「取り敢えず、最後まで宝井の言葉聞きましょう。それ終わったら香苗――もとい香君といちゃつけばいい」

『……』

皆何も言わない。
この空気は、正直嫌だ。

早く誰かなんとか言ってくれ。

「あ～、えっと、皆、明日はもっと人が来るから、大変だと思うけど、頑張って黒字に終わらせましょう！先生、何かありますか？」

「ん～、じゃあ明日も遅刻しないように。それから、明日は夜ダンスがあるから、早めにペアの人と一緒にいてね。これでおしまい。宝井さん号令」

「きりーつ。礼」

『さよーならー！』

これで学校が終わり、早速女子のほとんどは香苗に群がった。
香苗、明日から女として生活出来んのかな？
強制的に男装とかされそうな気がする。

香苗たちを待つか、アンたちと先に帰るか悩んでいたとき、

「な、なぁ柊」

名前を呼ばれた。
そちらに顔を向けて、だいたい話は分かった。

「どうした、少女B？」

「まだそれ言うじゃんかよ！？」

今日の午後、痴漢にあった草原奏だった。
改めてお礼でも言いに来てくれたのだろう。

「で、どうした？お礼は言われたけど？」

「いや、あの時は忙しくてちゃんと言えなかったじゃん。だから改めて、言おうと思って……」

やっぱりそうなるか。

……フラグとか言われそう。

「うし、じゃあどうぞ」

「おぉ。って、お礼言うの待たせてるってシチュ、凄い違和感あるじゃんよ」

まぁ確かに、服従させる気もないのに俺が『お礼を言え』なんて言ったら変な感じがするだろう。

「気にしない気にしない。早く言わないと放課後減るぞ？」

「あぁ、えっと、に、二時間ほど前は痴漢にあった私を――」

「カットぉ！」

「はぁっ！？いきなりなんじゃんよ！？」

「まだるっこしいんだよ！ほら、お礼っつったらあるだろ簡潔なの！それでいいから。お礼なんて気持ちが伝わればいいんだから」

俺と草原の間に手を入れる。

「はい、テイク2、アクション！」

言葉とともに手を下ろす。

「え、えっと、ありがとじゃん。助かった」

「おう。どういたしまして。でもよかったな、痴漢にあって。可愛いって認められたってことだろ？」

「お前それ本気で言ってんじゃん？」

「なわけねぇだろ。ご愁傷様」

「たく、お前いい奴かどうかよく分かんねぇじゃんよ」

「何を言う！夏哉はいい奴意外の何者でもない！今だってお前の気を紛らわそうと冗談言ってくれたんだぞ！！」

今まで黙っていたアンが叫んだ。

いい奴、なのか俺は？

よく分からん。

「じゃあお前はどう見えてるわけ？」

「そうだな……。ロリコン？」

「それは香苗のこと言ってんのか？ふざけんなバカやろう」

「あぁわりぃじゃん。今はショタコンじゃんな」

「待て待て待て待て待て！それは言うな！ちっちゃい男好きって最悪じゃねぇか！！俺は至ってノーマルだ！！ロリでもショタでもない！！」

「たく、冗談通じねぇじゃんよ」

「お前、噂の力は怖いんだぞ？もしその発言誰か信じちゃったらどうしてくれんだよ？」

「私関係ないじゃん」

「ぶん殴るぞ」

軽く拳を作る。

「これも冗談じゃんかよ。とにかく、ほんとに助けてくれてありがとじゃん。これは冗談じゃないじゃん」

「そうかい。じゃあ気をつけろよ」

「あぁ。あ、それからいっとくじゃん」

教室から出ようとした草原だが、首を回してこっちを振り返る。

「お前はいい奴じゃん」

その一言を言って、本当に教室から出ていった。

「へぇ、柊君ってモテるんだね」

ビクッと肩を震わし、後ろを見る。

宝井だった。

「え、えっと、なんのご用でしょうか？委員長」

「いや、私もお礼、言おうかなって」

はて、宝井からお礼を言われることなんて――あるな、普通に。

「じゃあお前も、シンプルイズザベストの精神を持ってお礼を言ってくれ。はい、三、二、一、Q」

先ほどと同様、間に手を入れて、下ろす。

「今日はありがとう。助かりました」

「どういたしまして。まぁ、しょうがねぇよ。香苗が中心だったわけだし。多分誰でも話聞かないって」

「そうかな？柊君なら出来そうだけど。ねぇ、委員長代わる？」

「冗談。人前に立つなんて無理だよ。案を出すだけで心臓痛いほどだったんだし」

「そうなの？でも私よりはマシでしょ。私話聞いてもらえないわけだし」

「はぁ」

自虐する宝井にため息を付く。

「あのさ、宝井のこと強くは言えないけどさ、自虐はしなくていいと思うぞ？あんな騒ぎ止められんのなんて沙鳥くらいだろうし。それに沙鳥と香苗が絡んでないときはちゃんと引っ張れてる訳だ。指示も出せてるし。あ！言っとくけど、口説いてるわけじゃないからな！？誤解すんなよ！？ツンデレでもないからな！？普通に、宝井はよく頑張ってるなって思ってるだけだからな？」

キョトンとしてる宝井。

そして笑い出した。

「ははっ、柊君って面白いね」

「そ、そうか？」

「うん。話してると元気になる」

「ちょっと待て。なんか嫌な予感しかしない。その台詞はマズい気がする。宝井、頼む。自意識過剰と言ってくれ。俺お前にフラグなんて立ててないよな？」

「フラグって、惚れたかどうかってやつだよね？」

「簡単に言うとそうだ」

「ふふっ、秘密。じゃあね。ほんとにありがと」

そう言って宝井は俺の脇を通り過ぎた。

って、なんだよあの匂わせるような台詞は！

何？

本当にフラグ立てちまったのか俺！？

いやいやいや待て俺、俺はあいつの着替えを覗いたという、男として最低なことをしてしまった男だ。

そう簡単にマイナスがプラスになる訳がない。

そうだ安心しろ。

俺はフラグなんて立ててない――

「夏哉！何こんな短時間で二人に更なるフラグを立ててるんだ！？種まきが終わって今は水やりか！？もうじき花を咲かせる気か！？」

あれ～？

なんか幻聴が聞こえるな～。

フラグ？

なんのこと？

俺はそんなのは立てていない。

「よし帰ろう。寝れば幻聴なんてすぐ消える」

「ナツヤ、現実逃避してんじゃないわよ。フラグってあれでしょ？アンタが言った言葉が後に響いて好きになるってやつでしょ？ならアンタフラグ立ってるわよ。この世界の生き物じゃない私が言ってるんだからそうなんでしょ？」

「よし帰ろう。寝れば幻聴なんてすぐ消える」

「ナツヤ、アタシはナツヤが誰を愛そうとも、誰に愛されようとも

関係ない。死ぬまで愛してるからな」

「俺もう帰る！！」

周りを置いてダッシュする。

そうだ、きっと家に帰ればいつも通りになるはずだ。

「夏哉、廊下は走ってはいけませんわよ」

ザザザザザ！！

声を掛けられたので、靴底を滑らしながら止まる。

「おう真樹、今帰りか？」

「えぇ。沙鳥様は？」

「香君に夢中」

「……まだ続いてたんですのね、あれ」

「明日まで続くらしい。あ、そういやさ、ちょっと思ったことがあるんだけど」

「なんですの？」

「お前、男装は平気なの？」

「そうですわね……、多分わたくしが男と認めたら駄目なんでしょ

うから、香苗なら大丈夫なんじゃないんでしょうか？」

「俺に聞かれても困るんだけどな。ま、いいや。沙鳥に用？」

「ありませんわよ。ただ一人は珍しいと思って。アンさんたちは？」

「……逃げてきた」

「それはまたなんで？」

説明。

「……凄いですわね」

「それは、褒めてるの？貶してるの？」

「褒めてますわ。ほんとに、夏哉は女を惹きつけますわね。実は今までもそうで、ただ気付かなかったってことはありませんの？」

「……なかったことを祈りたい」

「否定はしませんのね」

昇降口に到着。

三組と五組じゃ棚が違うので別れる。

「そういや真樹さ、いつも帰り一緒じゃないけどなんかあんの？家と寮近いんだろ？」

「単に切っ掛けがなかっただけですわ。……それと、帰りに沙鳥と

一緒だと逆に男たちがつけてきたり絡んできそうだったからね」

「あぁなるほど。ま、しょうがないわな」

「……ほんと夏哉は主人公ですわね」

「は、何がっ？いきなり何！？そんな台詞言った！？」

「自覚なし？」

「いや、今回は分からん」

「普通、ヒロイン見捨てたサブヒロインをしょうがないの一言で済ませますか？『よくも大切な人利用しやがったな』ぐらいは言いますわよ？」

「そんなこと言わないからお前はそれ言ったんだろ？」

「それはまぁ、そうですが……」

「それに、お前は俺の大切な奴だ。沙鳥とか香苗とかと同じくらい大切な存在なんだ。そんなお前を罵倒するなんて、出来るわけねぇだろ？」

「……」

俺の台詞に沈黙する真樹。

あぁ、俺分かった。

沈黙は怖いです。

お願いだから何か言ってください。

出来れば俺の望む言葉を。

「なんですのその台詞？クサすぎますわ。その台詞でわたくしもオトす気ですの？」

「そうそれ！その反応が俺欲しかった！そういうフラグっぽい台詞言ってもへし折ってくれる反応！」

「人を貶す反応に喜ぶとか、夏哉マゾですの？」

「よ～しよ～く分かった。今度一緒に満員電車乗りにいこうな。当然女性専用車両じゃなくておっさんたちがいるところ」

「夏哉って素晴らしい人ですわ。最高です。神です」

うをぉぉぉ……。

い、今、なんか凄い気持ち悪かった。

「ま、真樹、頼む。シリアスでもないシーンで俺を褒めるな。もう、ぞわってきた」

「奇遇ですわね。わたくしも吐き気がしましたわ……」

お互い深呼吸をして、心を落ち着かせる。

「って夏哉、貴方なんでこちらにいるんですの？こちらはわたくしの家の道ですわよ」

「え？」

右を見る。
左を見る。
前を見る。
後ろを見る。

「あ、ほんとだ」

「はぁ、会話に夢中で道間違えるとか、バカですか？」

「その事実に気付かなかったお前もバカだな」

「殺していいですか？」

「やれるならな。ところでさ、こっからどう行けば寮に行ける？」

「そうですわね……。家の少し手前にＴ字路がありますので、そこを曲がれば」

「なるほどなるほど。じゃあ行くか」

「そうですわね」

俺たちはまた歩き出す。

ふと思いついたことを口にする。

「真樹ってさ」

「はい？」

「こうやって喋りながら帰ったことってある？」

「ないです――いや、沙鳥様たちが夏哉のところに泊まりに行ったときアンさんと一緒だったくらいですわね」

「あーそういやアンと帰ったのか。どうよ一人で帰るのと比べて」

「ん～……いつの間にか家に着いてますわね」

「あ～、分かるわ～」

中学の通学路より高校の通学路の方が長かったのに、何故か高校の方が早く着く感覚がある。

「じゃあこの期に帰るか？」

「……二人きりとか言いませんわよね？」

「誰が言うか。余計勘違いされるわ。ルートは気分次第ってことで。あ、朝はどうする？いつもは八時五分くらいに寮前集合なんだけど」

「いいんですの？愛の巣に入り込んでも？」

「おう、かまわねぇぜ。むしろ入るか？」

「冗談。誰が入りますか。わたくしの目標は男と恋愛しないことですから」

「……それ、ほかで言うなよ？同性愛者って勘違いされるぞ？」

「言いませんわよ。あ、そこの道ですわ」

真樹が視線で教えてくれた。

ということはその少し奥のオレンジ色の家が真樹のウチか。

デケ。

「真樹ん家ってさ、リムジンある？」

「そこまで金持ちではありませんわよ。メイドとかもいませんし。あ、家政婦はメイドに入ります？」

「あ、家政婦はいるのね」

「会わないでくださいよ。フラグが立って『夏哉の家政婦やってきます』とか言われたくありませんし」

「気をつけますよ。ん、じゃあまた明日な。明日も五分を目安に行くから、来たかったら来てくれ」

「じゃあお邪魔させていただきますわ」

そういって俺たちは別の道を歩いた。

第七話　《八章》下校（後書き）

沙鳥「夏哉～」

夏哉「なんでしょう？」

沙「フ・ラ・グ・メ・エ・カ・ア」

夏「なんでそんなゆっくり言う！？」

沙「自覚してもらおうとね」

作者「というわけで一日目終了！さぁて、二日目は本気を出すぜ！」

夏「いや、本気出すなら最初から出せよ」

作「いいのか？本気出したら初日からフラグ立った子ともっとデートしてたんだぞ？」

夏「是非怠けろ」

作「だが断る。ねぇところで話はガラッと、いやある意味変わってないんだけど変えていい？」

沙「ん？どうしたの？」

作「いやぁ、我が自覚ありフラグメーカー君なんだけど」

夏「嫌な称号手に入れたな俺」

作「やかましい。で、フラグメーカーはどこまで通用するかなと」

沙「どこまで、とは？」

作「他作品」

沙「えっ！？そこまで行っちゃう！？」

夏「待て！そんな作品ねぇだろ！！」

作「あ、別にやるつもりはないよ。夏哉の言うとおりそんな作品ないし。だからあくまで妄想話」

沙「いや、いけるんじゃない？普通に。相手が女の子で意志疎通出来るなら」

夏「おい、その台詞だと俺守備範囲広すぎねぇか？」

沙「広いよ～。おさらいするとロリヤンデレアイドル巨乳ポニテ黒髪異世界人金髪お嬢様幼なじみ小学生クーデレ年上義妹委員長口癖。こんなにあるんだもん」

作「1、2……16個だな」

夏「最後の口癖ってなんだ。属性でもなんでもないだろ。まぁそれ抜いても多いんだけど」

作「先輩後輩いないな～」

夏「いてたまるか！先輩はともかく後輩なんてまず無理だろ。一年だし、中学なんて関わり合いないし」

作「ほらいるだろ？最初が？あ？で、最後が？う？のやつ」

沙「あ……う？ん～……あぁ、天雲結」

夏「結ちゃんねぇ。……沙鳥ごめん、一瞬でもありそうって思っちゃった」

沙「いいよ。私もよぎったし」

作「おし、時間じゃい！」

沙「じゃ、えぇっと、まず感想から。ファルコさん、ソラトさん、感想ありがとうございました！」

夏「ほかの読者のみなさまも読んでくれてありがとう。感想評価は随時待ってます。アンケートは、作者曰く６／２１までに七章終わるので、といっていたのでその日までにお願いします。あ、この日はあくまで目安なので、多分代わります。さて、作者から一言あるようで」

作「アンケートがたくさんくる方法を感想で教えてください」

夏「だからその感想がこないんだろ？」

第七話　《九章》騒動

「なぁネハラ、ラスク、本当にいいんだな？」

「いいも何も、お姉様のお願いなら聞かないわけがないじゃないですか」

「そうですよ。それに、たまに向こうでもやってたではありませんか？」

「そうなんだがな、やっぱり確認は必要だろ？無理矢理というのは好かん」

「私は別に無理矢理でも、お姉様がしたいのならいつでも……」

「それにアンお嬢、こっちに来て全然ではありませんか。満足出来る人なんてサトリくらいしかいませんし」

「ここに来て、もう使わないと思っていたんだがな。二人がここにいてくれて助かった。これで存分に使える」

「お礼なんていりません。アタシもいい思いが出来るのです。むしろ感謝しています」

「そうか。じゃあ少し痛むが、最初だけだ。少し我慢してくれ」

――――――――――――

「えっと、行ってくるけど、本当にいいのか？」

朝八時ちょうど。

玄関の前で俺は振り返ってアンたちに訊ねる。

「何度も言うな。私たちは私たちでやることが出来たんだ。それとも何か？夏哉は私と離れたくないのか？」

アンはからかうように俺にすり寄ってきた。

「あぁ、俺はお前らとは離れたくねぇよ。ずっと傍にいたいよ。だって心配だろ？こんなお前らに不便な世界で三人きりになるなんて。俺はお前たちのことが大切だから、不安になっちゃうじゃねぇか」

我ながらクサい台詞をよく吐けたと思う。

これも主人公補正ならもう一生言わない。

アンは徐々に嬉しそうな顔をする。

「な、夏哉……。分かった！離れない！一生離れないぞ夏哉！」

ぎゅうっと右腕に抱きついてきた。

「ナツヤ！アタシも！アタシも絶対離れないからな！！」

ラスクまでも俺の左腕に抱きついてきた。

マズい！

二人は巨乳なのだ！

理性がマズい！

落ち着け落ち着け、平常心だ。
あ～そういや真樹は時間通り来てくれるだろうか？
……あれ？
なんで思いつくのが真樹の胸を触ってしまったシーンなんだ？
いやーマズいマズいマズい！！
忘れろ！
それは忘れるんだ！！

「ちょ、待ちなさいよ！離れないじゃ――って私はお姉様になんて口利いてんのよ！？バカ！？私バカなの！？申し訳ありません！！私死にます！死んで償います！？」

「黙れよお前らぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！！」

いい加減カオスになってきたので止める。

「お前らやることあんだろ！？じゃあそれやれよ！学校行かせろよ！！」

携帯を取りだして時間を確認する。
八時四分。
そろそろみんな集まってるだろう。

俺の叫びで二人も離れたので、ドアを開ける。

「うわっ」

「え？」

目の前に女子がいた。

薄い緑色のツインテール。

メガネを掛けていて、身長は香苗ほどではないが小さめ。

雰囲気としては文学少女だろうか。

そんな女の子が、何故か俺の部屋の前に立っていた。

知り合いではない。

「えっと、何かご用でしょうか？」

「あ、の……叫び声……聞こえて……あ、ああ、その……私、隣で……」

典型的な恥ずかしがり屋なのだろう、つっかえながら説明してくれた。

「あ～そうか、わりぃ。その……」

どう言おう。

目に見えない魔族たちと騒いでました、とは言えない。

そこで、自分の手に携帯を持っていることに気付いた。

「さっきまで、電話してな。つい熱が入っちゃって。わりぃな」

「い、いえ……ご、ごめんなさい、お節介で……」

「別にいいよ。俺が騒いでたのが悪いんだし。マナー守らなかった

のは俺だし」

「ひ、柊さん……自虐、しすぎだと思います……」

「そうか？って昨日も言われたなそれ。って、なんで俺の名前？」

「ふえっ？……あっ、その……ゆ、有名、ですから……」

「え、マジ？」

どういう風に有名なんだろうか？

「え～っと、どういう風に？」

「えっ？あ……っと、学校で――じゃなくて、あ、天雲さんの、ボディガードとして……」

ボディガードか。

確かにそれは一回男子から聞いた。

それより気になることが一つ。

「学校が、何？」

ビクッと肩を震わすお隣さん。

そう言えば名前知らない。

それは今は置いておき、先程言い直したと言うことは言いにくいことなんだろうな。

でもだからこそ気になる。

「あ、その、えっと……」

やっぱり悪評なのか？

「あ～ごめん、言いたくなきゃ言わなくていいから」

「……らし」

「ん？」

「学校一、美少女誑し、と、男の人たちが……」

なん、だと……？

「言い得て妙だな」

後ろでアンの声が聞こえた。

グラッと体が傾き、壁にもたれらかかる。

くそ、俺男にそんな風に思われてたんだ……。

客観的に見た否定材料が見つからない自分に嘆く。

「で、で、でも……女の子は、柊さん、知ってる人……優しいって言って、ました」

「へ？」

「うん、こっちも言い得て妙だな」

再びアンが頷く。

待て、俺が優しい？

てか俺まず人とあんまり関わってないんだけど。

「あ～、え～っと、気を使って、とかはいらないぞ？第一俺女子と関わってないし」

「ち、違い、ます……本当に、西山さん、とか、布田さんとか」

一瞬、誰だと思ったが、布田は思い出した。

同じクラスの布田夕紀のことだろう。

でも西山？

聞き覚えはない。

まぁいいか。

「へぇ。なんつうか、君もそう言う噂信じてるの？」

「う、噂じゃ、ないです……。事実、です……」

何故かお隣さんに断言されてしまった。

え、待って。

もしかして……

「あの、聞きづらいんですが、俺たちって、お知り合いですか？」

「え？」

「いや、なんか、俺のこと知ってるみたいな感じなんで……。俺が気づかぬ内に関わりを持ったのかと」

「い、いいい、いえっ！そそそ、そんな、かか関わり、なんてっ。いっぽ、一方的に知ってるだけですっ……！」

「あぁなるほど。一方的に――」

ってちょっと待て。
それもちょっと待て。

その台詞に深い意味を感じるのは俺だけか？

一方的に？
まさか俺に惚れて、俺の噂とか気になるようになって知った？

はぁ、待てよ俺。
そりゃいくらなんでも自意識過剰だ。

俺は別にイケメンなわけじゃないから見た目で惚れるなんてそうそうない。
認めたくはないが、フラグを立ててしまったであろう女子は皆俺との接触があって初めてフラグを確立していったんだ、出会う前からフラグが立つなんてない。
……その理屈で言えば今こうして出会ったことでフラグを立ててしまう可能性はあるということだが、そこはあえて無視しよう。

「あ、えっと……どう、しました？」

「あぁごめん、なんでも――」

「「な〜つやく〜ん」」

悪魔のような声が聞こえた。

ゆっくりと顔を傾ける。

香苗、沙鳥、真樹がいた。

「おぉ真樹、ちゃんと来てくれたんだ」

「それはまぁ、誘われましたから」

「そりゃ嬉しいねぇ。えっとじゃあ、俺そろそろ行くから。ホント騒いで悪かったな」

「い、いえっ、そんな……」

俺は扉を閉め、鍵を掛ける。

「わりわり、ちょっと遅れた。学校行こっか」

「もう夏哉君遅いよ」

「女の子待たせるなんてサイテー」

「そっか。じゃあそんな最低な奴とは付き合って――」

「夏哉、私の目には貴方しか映っていません。私には貴方しかいないのです。だから、私から離れるなんて真似しないでください」

「しゃーねぇな～」

「待ちなさい夏哉。どうして夏哉が沙鳥様の傍にいることになるんですか？この女誑し」

「そりゃお前入っちゃいけねぇ――」

「「ちょっと待てぇぇぇぇ！！」」

ガシッと両腕を捕まれた。

「お？二人どうしたの？」

「『どうした』じゃないよ！さっきの子誰！？夏哉君またフラグ立てたの！？」

「あまりにも自然な対応だったからつい流れそうになっちゃったじゃない！！」

「え、お前ら気付かなかったの！？逆にすげぇ！」

「わたくしも、普通にあのことは許したものだと思っていましたわ……」

俺たちは驚嘆の意を述べる。

「ねぇ夏哉、ホント誰？真面目な話、私ヤンデレじゃないから女の子といちゃついても本気じゃ怒らないけど、せめて一言遅れるくらいは言って欲しかったな」

「いや、今回は普通に俺が悪かった。アンたちをからかって俺が大声を出して、そしたらさっきの子が騒がしいと思って様子を見に来てバッタリ出会う。で、会話してたら時間が過ぎてお前ら登場。これは言い訳しようのないほど俺のせいだった。すまん」

筋を通すために頭を下げる。

「はいはい、分かりましたよ。許してあげます」

「僕も許すよ」

すんなりと許しを出した沙鳥と香苗。

ちょっと驚き。

「お前ら、やけに素直だな。特に香苗。昨日なんてガミガミ言ってきた癖に」

「いや、あのね、昨日だって一応は理解してたよ？でも好きな人が他の女の子と密着するっていうのは、少なからずもやもやってするわけで。でも言い過ぎたっても思ったからちゃんと反省はして、ちゃんと事情聞いてから判断しようって沙鳥ちゃんと話したの」

「さすがに、冗談でも理不尽で怒っちゃ嫌われちゃうもんね。自分で言うのもなんだけど、物分かりのあるヒロインでしょ？」

「ほんっとありがとう。ここで皆が皆誤解を誤解のままで終わらせてたら俺死んでるわ」

俺がマンガの主人公だとしても、香苗たちが一途すぎるヒロインじ

ゃなくてよかった。
いや、香苗はそれに当てはまるか。

「ところで話は変わりますが、アンさんたちは来ないんですの？」

「らしい。なんかやることがあるんだって」

「やること……。ねぇ、いやな予感がするんだけど」

香苗がシリアスな空気で言う。

その瞬間この場の空気も引き締まる。

「カナ、いやな予感って？」

「アンさんたちが地球でやることってある？まぁあるかもしれないけど、夏哉君を置いてはしないと思う。だからさ、魔界関係のことじゃないかなって」

「あっ！クソッ！あり得るかも！！」

ほんの少し前、アンは俺と空ねぇが戦う姿を見て、？見守るのはつらい？と言った。
だったら自分だけで解決使用とするのは当然だ。

「ちょっとお前ら待ってろ！」

周りは気にせず、ダッシュで自分の部屋へと戻る。

十秒で辿り着くと、鍵を取り出して中に入る。

「アンッ！」

「へ？夏哉、どうした？」

アンがリビングから出てくる。
その後に続きラスクとネハラも。
まだ出て行ってはなかった。

「単刀直入に聞く。お前らの用事って魔界関係か？」

「は？何言って――って待て、誰か来たのか？」

アンは身構えながら聞き返してくる。

「まずは俺の質問が先だ。お前らの用事は、魔界関係か？」

「違う」

その一言を聞いて、脱力する。

「は～、よかった～」

アンの肩に手を置き、もたれらかる。

「えっ、と、な、どういうことだ？ま、魔族は？」

「いや、ごめん、俺の勘違いだ。お前がさ、用事があるって言ったから魔界関係かなって思っただけだ」

「もう一度言っておくが、違うからな。全く危険なことでもない。信じてくれ」

「分かった。はぁ～、悪かった。改めて言ってきます」

「あぁ、行ってらっしゃい」

本日二度目。

鍵を掛けて香苗たちの元に戻ろうとしたとき、隣のドアが開いた。

そこから顔が覗く。

その顔は、さっき迷惑をかけたお隣さん。

「あ、わりぃ。言ったばかりなのにまた叫んじまった」

「い、いえ、その……私は、気にして、ませんので……」

「そっか。ありがとな」

「あ……い、いえ……その、行ってらっしゃい……」

「おぉ――って君も学校だろ？」

「あ……！うぅ、うぅ～……」

照れてしまったのか、少し扉が閉まる。

「まぁ、なんにしても遅刻はしないようにな。文化祭とはいえ」

「は、はい……」

「ん、じゃあな」

軽く手を振ってこの場を後にする。

香苗たちと合流。

「魔界関係じゃないって」

「そっか、よかった～。ごめんね夏哉君、私変なこと言っちゃって」

「気にしてねぇよ。それよりさ、真樹のこと聞いた？」

「あ、本人から聞いたよ。ていうか何気夏哉真樹と昨日二人きりで帰ったんだよね？進展合った？」

「そうですわね……。強いて言えば、夏哉を褒めると吐き気がすると言うことが分かりましたわ」

「同じく俺も鳥肌が立った。シリアスなシーン以外やめてほしいと本気で思った」

「……ホント二人って仲がいいのにフラグ立たないね」

「友人ですから」

「友達だからな」

同時に答える。

「ねぇ僕さ、五月に入ってから今までで、フラグって単語人生の中で二十倍は使った気がするんだけど」

「急に話変わったな。まぁ俺もそうだな。五月辺りから使いまくってる……」

「やっぱり真樹が切っ掛けかな？」

「灯里さんではないのですか？わたくしは知りませんわ」

「真樹に一票」

「沙鳥ちゃんに同じく」

「沙鳥に同じく」

「多数決で決めるんですの！？」

「三対一で多数。ということで真樹が切っ掛け」

「横暴ですわ沙鳥様……」

「手か切っ掛け見つけたからって何があるわけでもないだろ？」

「あれだよ夏哉。切っ掛けをオトせば一生フラグ立たなくなるんだよ」

「一生！？う、う～、あああああ～！真樹！付き合ってくれ」

「いやですわ」

「あ、今気付けば俺初告白だ」

「ちょ、ま、なつ、夏哉君!?そんな大事なことをそんなあっさり!!しかも振られてる!」

「いや、香君落ち着いて!確かどっかで初恋は成就しないとか聞いたことある!つまりここで夏哉が振られたってことは次の恋は成就するんだよ!」

「沙鳥ちゃんこそ落ち着いて!その言葉で行くと初恋である私たちも成就しないよ!」

「なぬっ!?じゃ、じゃあその幻想をぶち壊す!!」

「自分で作った幻想自分でぶち壊しやがったよ沙鳥……」

「う、うるさいっ!」

そんな会話をして、学校に到着した。

第七話　《九章》騒動（後書き）

作者「ちょっと待て」

香苗「作者さんどうしたの？」

作「あのお隣さん誰！？」

アン「お前が生み出したんだろ？」

作「いや今回ね、これを書き始める一瞬前までは本気でアンにいい思いをさせようと考えてたの。でもさ、なんか夏哉が叫んだときふと思い浮かんだのが、『あれ、普通叫んだら隣が気付くよな？』だったんです」

香「そうしたらあの子が産まれたの？」

ア「また思いつきだな。しかもフラグ立ってるし」

作「この小説では新しいタイプだよな。出会う前からフラグが立ち上がりかけてる子。てかマズいな。出した女の子全員フラグ立ちそうな予感がしてきた」

ア「おま、ふざけるなよ。さすがにそれは多すぎだ！いくら夏哉がフラグメーカーだったとしても限度がある！」

香「そういえば前回の後書きの妄想話どうなの？感想で楽しみに待ってますって言われたけど」

作「……俺さ、友達少ないんだ」

ア「あ～、その、言ってくれるな」

作「でもでも！なんかいつの間にか総合評価４００突破してた！」

香「うそぉっ！？す、凄いよ！４００！？えええええっ！？」

ア「ほんと、唐突だな……」

香「あ、アンさんちょっとテンション低くない！？」

ア「あ、いや、そうじゃなくて、驚きすぎて感情が付いていけてないというか」

作「取り敢えず、募集をかけてみます！夏哉君たちとコラボしてもいいよって人は、ぜひ感想でもメッセージでもください。お気に入りしてる人とか、ユーザー登録してる人限定とかはありません」

香「まぁ来ないよね」

ア「来ないだろうな、普通に」

作「まぁもしかしたらこの小説の大ファンの人がいるかもしれないだろ？」

ア「どうだろうな」

香「まぁそれは分からないけど、とりあえず感想くれた人にお礼いお。姉様とファルコさん、ｋｉｉｔｉさん、感想ありがとうござい

ました。これからもぜひよろしくお願いします」

第七話　《十章》叱咤

「ありがとうございました！」

店から出る客に頭を下げる。

現在時刻九時五分。

文化祭二日目が始まって五分しか経っていないというのに、すでに満員だ。

やはり沙鳥効果だろう。

沙鳥いないけど。

あいつと香苗は一日目フルに店番をしたから今日は文化祭を楽しむとのこと。

「お待たせいたしました、ご注文はいかがしますか？」

一日目やって多少接客は慣れた。

マニュアル化された行動を取っていると、見覚えのある顔が見えた。

「いらっしゃいませ、三名様でよろしいですね」

「夏哉の敬語とは、気持ち悪いですわ……」

「真樹さんそう言わないの。柊君、三人で」

「ホントは灯里も来る予定だったんだけどね～。子供たちが一緒に回りたいってことで」

来たのは真樹と、灯里とよくいる二人。
一人は葉月、だっけな。
もう一人は知らない。
五組繋がりということで仲良くなったのだろう。

「ではこちらにどうぞ」

三人を席に座らせる。

「メニューになります」

「あ、もう何頼むかは決まってるよ」

葉月がメニューを断った。

「ショートケーキ二つにロールケーキ一つ、カルピス三つで」

「かしこまりました。沙鳥から聞いたの？」

真樹に聞いてみる。

「えぇ。誰かさんを待っている間に」

「申し訳ありませんでしたお嬢様。ご注文の方、しばしお待ちくださ
い」

わざと恭しい態度を取ってお辞儀をする。
そうして後に使用としたとき、

「オイちょっとそこの学生」

誰のことだろうと、首を回してみる。

あからさまに不良といった風貌の人四人と目が合った。

ん～……マズくね？

多分俺のことを呼んでいるんだろう。

二日連続不良が来るとか、俺の存在のせいな気がしてげんなりする。

「いかが致しましたかお客様？」

「いかがしたじゃねぇよ。俺たちは沙鳥さんを見に来たんだよ！！なのになんでいねぇんだよ！！」

「……申し訳ありません、当店は天雲沙鳥の鑑賞を目的としたところではありませんので、その様な苦情を申されても。今は文化祭を楽しんでおりまして」

我ながらよく咄嗟にこんな丁寧言葉を使えたな、と内心驚く。

丁寧に言ったにも関わらず、不良と思しき者は引かなかった。

「あぁ！？そんなん関係ねぇだろうが！！俺たちゃ客だぞ客！客の要望に答えんのが店ってもんだろうが！！」

「生憎と、それは管轄外なことですので、その要望には応えられません。騒がれますと他のお客様に迷惑がかかりますので、お引き取りください。教師呼びますよ」

「んだとコラッ！！よえぇからって権力に頼る気か腰抜けッ！！」

不良の一人が立ち上がり、テーブルの端を掴んだ。

怒りに任せてそれをぶっ飛ばす気だと判断し、腕を掴む。

「落ち着いてくれませんか？」

「え？あれ――イデデデデ！？」

キリキリと指に力を込めると、不良の顔がゆがんでいく。

不良の手を離す。

「お客様、現在天雲沙鳥はここにおりません。申し訳ありませんが、天雲沙鳥にご用でしたらこの校内にいますので、お探しになってくださいませんか？」

頭を下げる。

流石の不良でも騒ぎにはしたくな――

ゴッ！！

後頭部に衝撃が加えられた。

頭を下げるという体勢もあって踏ん張れず、床に倒れる。

そして頭を踏みつけられた。「きゃ、きゃあああああああああっ！！」

多分俺たちのやりとりが物騒で怖くなったんだろう、女性の悲鳴が聞こえた。
それがどんどん連鎖していき、周りがドタバタしていく。

「ちょ、皆、落ち着いてください！！大丈夫です！！争い事なんかにはなりませんので！！」

宝井の声が響く。

「オイてめぇ、今更謝って済むとか思ってんのか？ァァ！？てめぇはもうボコ決定なんだよ！！」

頭から踏みつけられる感覚が消える。
次が来ると思い体をゴロッと転がす。

ダンッ！！

顔の傍に足が踏み落とされた。

間一髪躱したとホッとするも束の間、今度は背中に衝撃が走る。
恐らく他の奴が蹴りをかましたのだろう。
それもかなり本気で。
まぁでも、ラスクの時よりは痛くない。

だからといってサンドバックになる趣味もないので立ち上がる。

「お客様、暴力沙汰はやめてください。いい加減にしないと正当防衛を行使しますよ」

「ハンッ、そんなひょりょひょりょが俺たち三人相手に何出来んだよ！！」

あ、今ひょろひょろ言えなかった。
しかも真顔だから間違ったの気付いてないんだろうな。
恥ずかし。

と、変なことを考えていると引っ掛かるものがあった。

三人？
あいつらは四人組だった筈だ。
しかし目を動かしても三人しかいない。
待て、嫌な予感しか――

「きゃあっ！？」

後ろから叫び声が聞こえた。
その声は、ある意味この状況で一番聞こえたくなかった者の声だった。

バッと振り返れば、不良の四人目が一人の少女を捕らえていた。
その少女は、早乙女真樹。

「へへっ、そこ動くんじゃねぇぞ」

右手でポケットからナイフを取り出す。

「動けばこいつ刺す。何、殺しはしねぇよ。こいつ上だ――」

ゴガッ！！

俺は真樹を捕らえている不良の顎に掌底を食らわす。
微かに残った理性を使い、吹っ飛ばないように不良の服を掴んで。
気絶した不良の腕を真樹から払う。

「真樹、大丈夫だ。ホント大丈夫だからな」

俺は真樹の頭を抱いた。
真樹は小刻みに震えている。

「い、いや……」

「真樹、落ち着いて。わりぃ、気付かなくて」

「……なつ、や……？」

「あぁ俺だ。もうちょい待ってろ」

真樹を抱きしめたまま、残りの不良を睨む。

「てめぇら、誰に手ぇ出してんだよ。四人もいて女子人質？しかもよりにもよって俺の大切な奴を？クズ以外の何者でもねぇよ」

怒りが沸いてくる。
頭が熱くなり、今にも暴れ出したくなりそうになる。

その一方震えている真樹を抱きしめていることで冷静にもなれた。
ここであいつらをぶっ飛ばしたら、折角の文化祭が台無しになる。
「消えろ。こいつを人質にしたてめぇらはぶん殴らねぇと気がすまねぇけど、今は文化祭だ。俺のせいで周りに迷惑は掛けられねぇ。だからさっさと消えろ」
駄目だ、言葉にして少しは発散できたけど、それ以上に怒りが沸き上がってくる。
理性が飛びそうになる。
だから、対象を変えるんだ。
これは全て柊夏哉のせい。
柊夏哉がちゃんとした接客を出来なかったから騒ぎになった。
柊夏哉があのまま殴られていなかったから不良は怒っている。
柊夏哉が不良をよく見ていなかったから真樹が震えている。
だから、
「……ざ、けんじゃねぇぞてめぇッ！！」
今回の被害者を殴るな。
ガシッ。
不良（ひがいしゃ）が迫り、拳を振るってきたので、掴んで止める。

「帰ってくれ」

その一言を放ったとき、

「どいてどいて！はい、道空けて！そこの喫茶店に用があるから！」

声が近づいてくる。
恐らく教師だろう。
誰かが伝えてくれたのか。

「チッ、オイ！ヤマ連れて帰るぞ！！」

殴りかかってきた不良がそう指示を出したので、手を離す。
不良たちは二人で気絶した奴を担ぎ、教室を出ていった。

「ちょ、待ちなさいッ！！」

別の声が聞こえた。
教師は二人来ていたようだ。

「真樹、平気か？」

真樹を気に掛ける。

男に捕まる、なんてトラウマもいいところだろう。
そんなこいつを守れなかった自分に腹が立つ。

「……うん。だい、じょうぶ、だよ」

全然大丈夫そうには見えない。
まだ体が震えている。

でも、そこを指摘しても真樹のためにはならない。

「そっか。なぁ、もしかしたらこの騒ぎで沙鳥たちが来るかもしれないからさ、口調は直せるか？バレたくないんだろ？」

「あ……。え、えぇ。こちらも大丈夫ですわ」

真樹がいつもの口調に戻ったとき、教師が入ってきた。

「私はこの学校の教師です！ここで騒ぎがあったって聞いてやってきました！誰か事情を説明出来る人はいますか！？」

この騒ぎの中心人物だと思ったのだろう、教師と視線が合う。
周りを見回してみると皆端の方に固まっていた。

実際俺が中心に立っていたので、俺が話す。

「すいません。俺のせいです」

「え？」

真樹が小さく声を上げた。
しかしそれは無視する。

「君が？君、この学校の生徒だよね？」

「はい。一年三組の柊夏哉です。客の一人を殴って気絶――」

「ま、待ってください！違います！夏哉は何もしていません！！むしろ先程逃げた不良たちに暴力を受けた被害者です！！」

「真樹は静かにしてて」

腕に力を込める。

「……さっきから気になっていたんだが、何をしているんだい？」

「この子、俺のせいで不良に捕まっちゃってナイフ突きつけられちゃって震えちゃってるんです。そういうことにトラウマがあって。気にしないでくれると嬉しいです」

「そ、そうか……。で、話を戻すけど、この騒ぎの原因は君なのか？」

「はい。至らない接客で客に不快な思いをさせてしまい、抗議してきた客の一人を気絶させて黙らせようとしました。これは俺一人の責任です。だから、この出し物は続けさせてください。お願いします！周りは関係ありません！！皆ここを楽しみにしてたんです！お願いしますッ！！」

真樹を抱きしめた状態じゃ腰を折ることは出来なかったので首を下げる。

どうしよう、俺のせいで皆に迷惑かけた。

俺がバカやったから皆が文化祭楽しめなくなる。

そう思ったとき、

「待ってください先生！」

女子の声が聞こえた。

その声は、クラスの時雨鳴海のものだった。

「柊は悪いことしてません！！てか普通に柊嘘付いてます！！抗議してきた不良を黙らせるために殴ったんじゃなくて、そこにいる女の子を助けるために殴ったんです！！しかもその前に柊は殴られてましたし、柊が不良を殴らなかったら女の子は絶対どうにかされてました！！正当防衛以外の何物でもないですっ！！」

「そうですよ！」

時雨の後を引き継いで言うのは、委員長である宝井宮江。

「柊君がいなかったらもっと酷い怪我してましたし、事態も収拾していませんでした！！柊君のおかげで怪我をしたのがさっきの気絶した不良の一人だけだったんです！柊君のせいでこんな騒ぎになったわけではありません！！」

宝井の言葉に、他の人も何故か同調する。

それはクラスの者もいたり、多学年の者もいたり、一般客の者もいる。

どうして皆は俺を擁護するようなことを言うんだろう？

俺のせいなのに。

それに、俺は化け物なのに。

「まぁ、状況は一目瞭然ですか。じゃあ一年三組の皆さんはここのセッティングのし直しを！お客様方は申し訳ありませんが、準備が終わるまでしばしお待ちください」

そう指示を出すと、教師は帰っていった。

そして、周りの擁護する声が歓声に変わる。

『かっこよかったぞ～！！』
『よくやった少年！！』
『柊君漢だったよ！！』
『ふん、俺から見ればまだまだ――』
『柊最高！彼女とお幸せに！！』
『台詞被せるな！！』
『よ、あんちゃん日本一！！嬢ちゃん、いい男選んだな！！』

分からない。
どうして周りが俺を褒めるような言葉を言う？
今回はどう見ても俺のせいじゃないか。
昨日の草原とは違う。
今日は俺が関わったせいで真樹が恐怖に縛られたのに。
褒められる理由なんて、どこにもない。

理解が追いつかないでいると、いきなり足を払われた。
バランスを崩し、尻餅を付く。
まもなくして胸を押され、仰向けの状態にされた。

そこでようやく現実に意識が戻る。
俺を倒した相手の名前を呼ぶ。

「ま、き？」

真樹はその後俺に馬乗りをして、顔を近づけてきた。
長い桜色の髪が俺の顔にかかる。

「貴方、どうして周りがあんな態度を取ってるか分からないって顔していますわ」

ズバリ真樹に当てられた。
相当顔に出ていたようだ。

「客観的に見なさい。主観で見ないでください。あんなの、どう見ても貴方のせいではないではありませんか。それを言ったら、周りに気を取られて捕まったわたくしはなんだって言うんですの？貴方の行動が悪いというなら、わたくしの行動は重罪ですわ。わたくしが捕まらなければ、夏哉は殴らずに済んだんですのよ。元凶を指摘するなら、まずわたくしではありませんか」

「それは違うだろ。お前はただの被害者――」

「貴方だって被害者ですわ！夏哉はおかしいですわ！！どうして自分が殴られても平然と出来るのに、わたくしが捕まっただけで理性を失えるんですの！？逆ですわよ！！夏哉はもっと自分を大事にしてください！！わたくしが、わたくしでさえこんなに苦しいんですのよ！？あの三人はこれ以上の苦しみを感じてるんですのよ！？耐えられませんわよ！！しかも全て自分のせいにして、周りのことを考えるなんて。夏哉が最初に教師に言うべきことは正当防衛だって

ことですわよ！！どうして貴方は周りのことを考えないんですの！？どうして自分の存在をそこまで卑下に出来るんですの！？夏哉は何も悪くありません！！わたくしを救ってくれました！！被害を最小限に抑えてくれました！！こんな素晴らしい結果、夏哉にしか出来ませんわよ！！どれだけ自分に鈍感なのですか！？だから周りに主人公なんて言われるんですのよ！！夏哉はもっと！もっと自分が与える影響力を知るべきですわ！！貴方言いましたよね！？わたくしたちに恩を返してくれるんでしょ！？なのにどうして傷つけるんですの！？お願いですから！自分を化け物として嫌わないでくださいッ！！自分を人間として好きになってくださいッ！！わたくしは自分を罵る夏哉が嫌いですわ！！そんな嫌いな姿、わたくしに見せないでください！！」

自分の気持ちを全力で吐き終えたのだろう、息がかなり切れている。
今にも泣きそうなほどに顔を歪ませている。

どうして俺は真樹にこんな顔をさせているんだろう。
それは俺のやるべきことじゃない。

「ごめん、真樹」

「謝る必要はありませんわ。ただ、誓いなさい。貴方が本当に恩返しをするつもりなら、自分のことも考えなさい。自分なりにではなく、わたくしが見ても分かるくらい、自分のことを大切にしなさい。それを誓えないなら、もう二度と他人を救わないでください。余計に周りが傷つきますわ」

「……分かった――」

「な～つや～！遊びに来たぞ～！！」

空気が壊れる音が、聞こえた。

第七話　《十章》叱咤（後書き）

作者「アンちゃんごめんなさい」

沙鳥「おぉ、後書きでここにいない自分のキャラへの謝罪が一番最初の言葉とはまた斬新な」

作「いや、ホントに今回ね、いろいろやろうと思ったの。でもなんか真樹が現れて」

真樹「神出鬼没みたいに言わないでくださいまし」

作「そう言えばソラトさんが真樹との絡みをどうのこうのといってたので、ちょっとシチュは違うけどやってみようと思って、ホントはギャグにするつもりだったんだけどなんかシリアスになっちゃって、もう真樹ふざけるな！！」

真「わたくしのせいですか！？」

沙「それにしても真樹ちゃんや、あれは言い過ぎですよ。普通に聞いたら『真樹夏哉のこと好き！でも自分のこと嫌いな夏哉は嫌い！真樹の好きな夏哉でいて！』ってなるよ」

真「いや、それは、その、勢いといいますか、熱くなったと言いますか……」

作「つまり真樹は夏哉のことになると自分の制御が効かないと、そういうことですね分かります」

真「分からないでくださいまし！」

作「あ、そういえばね沙鳥ちゃん」

沙「なんだい香樹君」

作「なんと感想が百通に達したんだよ！！」

沙「な、なんだって！？そいつは一体、誰なんだ！？」

真「見事に胡散臭い台詞ですわよ沙鳥様」

沙「うるさい！」

作「え～、今回百通目に感想を書いてくださいました方は、マリィ愛してるぅぅ！！さんです！ありがとうございますと、おめでとうございますの言葉を送ります。受け取ってください！」

真「その他にも、ｋｉｔｉさん、ファルコさん、ｓｋｙｆｌａｒｅさん、感想ありがとうございました」

沙「さてさて、作者が傍にいるのに敢えて私が作者の言葉を言います。前回登場した恥ずかしがり屋の文学少女的な少女。どうやらその子の名前を集めてるようです。別に出すか出さないかも決まってませんし、出すとしてもいつ出せばいいかも決まってません。アンケートの様に本気で集めていませんが、もしよければという人がいたりしましら、送ってください。でわでわまたで～す」

第七話　《十一章》ここにいる理由

「な～つや～、遊びに来たぞ～」

冷たく、ピリッとした空気の中で、突然明るい空気を纏った言葉が教室内に響いた。

皆静まりかえる。

俺と真樹は、首だけを動かして声の主を見る。

そこには、アンがいた。

アンだけでなく、ラスク、ネハラもいる。

言葉を失った。

いや、失っているという言葉の方が正しいだろう。

目の前にいる筈のない、他に用事がある筈の魔族たち三人が。

「ま」

最初に声を出したのは、アンだった。

「真樹が夏哉を襲ってる！？」

「「え？」」

アンは何を言ってんだ？

真樹が俺を襲ってる？
そんなことしてないだろう。

真樹と顔を合わせる。

顔が近い。

腹部になんか柔らかいものが――

「「ぬわあああああっ！？」」

慌てて俺たちは離れる。

待て待て待て！
今の状況はマズくなかったか！？
まさか今までずっと真樹が馬乗りしてた！？
ギャラリーがいる状況で！？

周りがザワザワとどよめきが走っている。

俺たちのことを見たり、アンたちのことを見たり――え？

「ま、真樹、あれ？皆さ、あいつのこと見てない？」

「で、ですわよね？わたくしもそう思って、あの、ラスクさんとネハラさん、床に足着けてません？」

真樹に指摘され、二人の足元を見るが、確かに床に足を着けている。
少なくとも浮いてる風には見えない。

「確かアレですよねアンお嬢。さっきみたいに馬乗りになっているっていうのは、好きな人を自分の物にするためにやる行為なんですよね？」

「そうらしいな。襲われる方は分からないが」

「ちょ――」

真樹が叫ぼうとするが、口を抑えてそれを止める。

「落ち着こう真樹。もしあいつらが見えてなかったら俺らは変なやつというレッテルを貼られるぞ」

コクコク。

頷いたのを見て、手を離す。

「あ、えっと、柊君？」

この中で比較的会話をしている宝井が話掛けてくる。

「そこの人とは知り合い――」

俺たちの行動は早かった。

ほぼ同時に立ち上がって走り出し、アンとラスク、ネハラの腕を掴む。

「「失礼します！！」」

そのまま廊下に出て走る。

さっきの騒ぎがあったせいか、人が少ない。
これ幸いと思い階段を駆け下り、靴に履き替えずに外に出て誰もいない校舎裏に向かう。

「「アン(さん)！」」

「なんだ？というか同時に質問されるのは困る。まぁ声が揃うなら別だが」

真樹と顔を合わせる。

「俺でいい？」

「どうぞ」

「じゃあアン、なんでここにいる？」

「先程言った通り遊びに来た」

「なんで周りがお前のこと見えてる？」

「私はお前に用事があると言ったな。このことだ。この学校を中心に広範囲の幻覚を発動させた。今まで真樹にやっていたのは人物特定で、今のは効果範囲に足を踏み入れた者に無差別に幻覚を掛けるといったものだ。分かったか？」

「分かった。で、なんでラスクたちは歩いてた？浮いてる風には見えなかった」

「私の魔力を二人の体に纏わせた。詳細は省くが、私の魔法はこの世界に干渉出来るから、それを二人に纏わせれば触ったり掴んだり出来る。私の傍から離れず、魔力が続く限り持続される」

「お前の魔力で足りんのか？素人目で見ても凄いことしてるのは分かるぞ」

「足りない。だから私の特殊能力（アビリティ）でネハラとラスクから魔力を分けてもらった。これで足りる」

「最後。なんで言わなかった？」

「ビックリさせたかったから」

しばしアンと見つめ合い、ため息をつく。

「お前な～、別にそれやるなとは言わないし、むしろ嬉しいけど、タイミングが悪すぎる」

「そんなことを言われても困る。それよりも真樹、デレ期か？」

「は？」

意味が分からないのだろう、キョトンとした表情を浮かべる。

しかしすぐに怒声を浴びせる。

「そんなわけありませんわ！！わたくしはこの腑抜けに説教していただけですの！！」

「まぁ落ち着け真樹。私は別に夏哉のことを好きになろうが構わない。むしろ同類が増えたと喜ぶぞ。お前らは？」

隣にいるネラハとラスクに水を傾ける。

「私はナツヤが誰と一緒だろうと構いません」

「アタシもです。それでナツヤが幸せなら」

「だから！違うと言ってるではありませんか！！まず話を聞きなさいッ！！」

真樹はあの騒動を説明した。

「よし」

「アンお嬢、手伝わせてください」

「私もお供いたします」

「いいぞ」

何故か脈略のない、しかし魔族の間では通じている会話をしている。

「あぁ、三人さん？何する気？」

タイミングを計って俺は聞いてみる。

「わざわざ私の口から言わなきゃいけないことか？」

「ではアタシが。その不良とやらを殺しに」

「待て待て待て！それはやめろ！！そんなことする必要はない！！」

「する必要はない？何言ってんのよ。逆に他に何をしろって言うの？」

「文化祭楽しめ！お前らはあれか！？俺たちと遊ぶより他の男に構う方が楽しいのか！？」

「「「そんなわけない（わ）」」」

「だったら遊ぼう！それからネハラ！なんで俺庇ってくれるの！？めっちゃ嬉しいけどアンラブのお前がそこまでしてくれるの！？」

「家主に恩を返すところのどこが悪いわけ？」

「わ～い！ネハラやっさし～！」

「そういえば夏哉、アンさんから聞きたいこと全部聞きましたが、貴方は平気ですの？」

「何が？」

「店番」

「あ」

「夏哉君大丈夫！？」

すると何故かここに香苗が来た。
沙鳥と空ねぇもいる。

「え、二人どうした？」

俺の質問に沙鳥が答えてくれた。

「いや噂で三組で騒ぎがあったって聞いたから戻って、そしたらいつも通りにやってて、厨房で事情聞いたら夏哉が彼女助けるために不良やっつけたと言うではないですか。しかも彼女は夏哉を襲ったらしいし。性的な意味で。で、その後金髪二人と薄緑色の髪をした女の人三人をカップルが連れ去ったそうで。人物はだいたい予想できたから、香君が夏哉たちの行きそうな場所を予想してきたわけ」

「長々と説明ありがとう。でも俺はそろそろ店番に戻んないといけないので、いったん失礼。アンたちも楽しんでな。で、沙鳥たちはアンに事情聞いとけな」

走って沙鳥たちの脇を抜けようとしたとき、

がしっと肩を掴まれた。

沙鳥だ。

「夏哉、ちょっと待って」

「ん？なん――」

ゴッ！！

突然沙鳥に殴られた。

え、訳が分からない。

「これは、私を振った分」

「は？」

「そして！！」

ゴッ！！

「これはカナを振った分！」

ゴッ！！

「アンちゃんを振った分！」

ゴッ！！

「灯里さんを振った分！」

ゴッ！！

「空ねぇを振った分！」

「待て待て待て待て待て！なんだいきなり！？」

突然拳を振るってきた沙鳥に叫ぶ。

そんなことお構いなしに沙鳥はまた殴ってくるので、今度は掴んで止める。
その際顔が近くなったので、額同士を合わせる。

「なぁ沙鳥、せめて殴る理由を教えてくれ。別にストレス発散っていう理由でもいいから、理由を教えなさい。大丈夫、殴り足りないならまだ殴っていいから」

「だって夏哉、真樹と彼女になったんでしょ？だったら振った人の痛みは感じるべきだよ。安心して。夏哉と真樹が本気で付き合うなら私は手を出さないから」

「よ～しよ～く分かった。お前が俺のことを思ってくれてるのは分かった。だがしかし、俺と真樹は付き合っていない。そりゃ端から見たら俺のくっさい台詞で恋人と誤解されてるかもしんねぇけど、その事実はない。真樹に馬乗りは確かにされた。でもあれは俺が不甲斐ないからやってくれたわけで、襲うという事実は全くない。頼む、信じろ」

「え、そうなの？なんだ、殴り損じゃん」

沙鳥は額を離す。
殴る気配はないので手を離す。

「ごめんね夏哉、殴っちゃって」

「いやいいんだけどさ、お前香苗と話して、俺の話をちゃんと聞こうってことになったんじゃねぇの？」

「あ。ご、ごめん、ほんっとごめん！これは私が悪かった！ついや

らなきゃって思っちゃって」

「別にいいけどよ。で、他はもう用ない？」

見回すけど誰も用はないようだ。

「よし、じゃあな。騒がせて悪かった」

俺は走って教室に戻る。

「あ、柊君、もう店番やんなくていいよ」

「は？」

喫茶店に戻ると、宝井にそんなことを言われた。

なんでそうなるか。

答えは一つしかない。

「まぁそうだよな。ホント悪かった」

「へ？」

何故かキョトンとした顔をされた。

「え、どうした？」

「いや、どうして謝られたのかなと」

「え、だって、俺がいたらまた騒ぎになるから来ないでってことなんじゃないの？」

「違うよ！？ただ柊君は彼女を慰めないといけないかなって思って。それに不良二回も払ってくれたから、休みくらいあげてもいいって思ってるし。皆もそう言ってるよ」

「いや、でも待て待て。ウエイター一人減ったらマズいだろ。ただでさえ忙しいってのに」

「大丈夫だよそのくらい。一人の穴くらいは埋められるよ」

宝井は笑って答えた。

見た目だと無理してる風には見えない。

どうしよう。

正直俺の中で揺れ動く物はあった。

早くアンたちと回ってみたかった。

こういうところで、人目を気にせず会話出来る機会などそうそうない。

きっと楽しみにしてるはずだ。

「あ、あのさ、本当にいいの？」

「何度も言うけど、大丈夫だよ」

「じゃあ、お言葉に甘えるけど、そだ！もし手が回らなかったら電話来れ。ほい、携帯」

赤外線通信送信画面までボタンを押して宝井に向ける。

「あ、ちょっと待ってね。……はい、じゃあ、あ、携帯こ。……うん、来たよ。じゃあ送るね。……はい終わった」

「うん、じゃあホント言ってくれな」

「分かったよ」

「じゃ」

俺はまた駆け出す、前に伝える。

「っとその前に」

「何？」

「俺と真樹は付き合ってない」

「いやいやいや、そんな恥ずかしがらなくてもいいよ」

「土下座すれば分かってくれる？それとも窓から飛び降り？」

「分かった。皆に言って聞かせておくね」

物分かりの早い委員長でよかった。

「いや、宝井という奴は偉いな」

「本当ですね」

「私はお姉様といれたらそれだけでいいのですが」

宝井と分かれた後すぐにアンたちと合流、事情を説明した。
するとアンが香苗と沙鳥、真樹に空ねぇにお願い事をした。

夏哉と一緒に回らさせてほしい、と。

皆はアンが堂々と俺と会話などを出来ないということを知っているため、快く頷いてくれた。

アンは、ほんとは二人きりの方がよかったんだろうけど、そうして二人と離れるとラスクやネハラに纏わせた魔力が解けてしまうため、この四人で回ることとなった。

「じゃあまずどこ行く？てかラスクたち食い物は食えんの？」

「いや、そこまでは無理だ。流石の私でも触覚しか細かに再現出来なかった。悪いな」

「謝る必要はありません。アンお嬢がいなければ、まず学園祭というものに参加出来ませんでしたし。何より――」

一旦言葉を区切ったラスクは、俺の腕に抱きついた。

「堂々とこういう風に抱きつけますので。姿が見えないとナツヤが不自然に見えてしまうので」

「ちょっと待てラスク。何夏哉に抱きつい――っと」

一瞬アンの動きが止まった。

「どうした？」

「ちょっと疲れただけだ。なぁネハラ、いいか？」

「どうぞお姉様」

ネハラはアンに手を差し出した。

「済まないな」

「いえ、これくらいは」

アンはネラハの手を掴むと、その人差し指を噛んだ。

「は？」

「あれが先程アンお嬢が言った魔力を集める、一番身体ダメージの軽い方法だ」

最近ラスクは奇法などと使わないようにしている。

「魔力を取り込むためには一部でも相手の体に自分の体を侵入させないといけないんだ。だからネハラの指を噛んで歯を中に入れてるんだ」

「へぇ。それって痛くないの？」

「痛覚は感じるが、全然我慢できる程度だし、アンお嬢がくれた傷だ――」

「あぁ、お姉様が私の指を噛んで……んっ、いい……」

「あれくらい快感に変えられる」

「……ごめんなラスク。俺にはあんな行為は出来ないから、指を噛まれたかったらアンに頼みなさい。それから、もうあいつは遅いけど、こういう人が見える場所ではやめてください」

「分かった」

「ふぅ、ありがとなネハラ」

「あっ、はい……」

満足そうなアンに、ちょっと残念そうなネハラ。

ちょうどその時、いい出し物を見つけた。

「なぁ、金魚すくいやらないか？」

「金魚すくい？」

看板を指さして言うが、アンは分からない様子。
それはネラハもラスクも変わらない。

「簡単に言えば、与えられたもので水の中にいる生き物を捕まえろってやつ。もちろん力使用禁止。取り敢えず中に入って見てみない？」

三人は同意してくれたので、中に入る。

ちょうど中で誰かがやっていた。

「ほら、あの丸いやつ、ポイって言うんだけど、アレを水の中に……あんな風に救ってあの器の中に入れる。ポイが三枚破けたら終わり。分かったか？」

「大丈夫だ」
「理解はした」
「覚えたわよ」

ポイを四人分買って、早速開始だ。

「あ、言っておくけど、ポイについてる紙は水に弱いから、すぐ破けるぞ」

ピタッと三人の動きが止まった。
言っておいてよかったと心の中で自分を褒める。

「なぁ夏哉、それは厳しいんじゃないか？水を入れたら弱くなる物を水につけてそれを使って生き物をすくうなんて」

「だからそれを楽しむんだよ。まぁそんなこと言ってる俺も出来る訳じゃないけど」

テレビでやっていた金魚すくい必勝法を思い出しながら、ポイを水の中につける。

金魚をすくえる位置にポイを持っていくと尾ひれをフレームの外に出すよう意識して、ポイを上に上げる。

一匹すくえた。

「「「おお～」」」

三人から歓声が上がるのは、ちょっと照れくさかった。

「まぁこんな感じ、といっても見本になったかは知らんけど、とにかくすくうんだよ。やってみ」

「よし！ネハラ、ラスク、ここは勝負と行こうじゃないか」

「そんな、お姉様と勝負なんて出来ません」

「勝ったら私に抱きついたり、私がなでなでしたり、とにかくこれでもかってほど愛でてやる」

「やらせていただきます」

「申し訳ありませんがアンお嬢、手加減は出来そうにありません」

「ふん、お前らに負ける私ではない！私が勝ったら夏哉、私を愛でろ」

「分かりましたよお嬢様。まぁ俺は審判ということで。ズルなしだかんな。はい、じゃあよーいスタート！」

第一回愛でられるのは誰か！？金魚すくい大会が開催された。

第七話　《十一章》ここにいる理由（後書き）

作者「わ～い！」

夏哉「唐突に喜ぶな。意味不明だ」

香苗「いいことあったの？」

作「コラボしてくださいという要求が三つ来ました！！」

夏「物好きな人もいるんだな～」

香「そうだね～」

作「まぁその内の一人は『やってみたいくらいです』と曖昧だから確証はないけどね」

香「それでも二人は驚きだよ」

作「ホントにね。で、もう一つ、夏哉のお隣さんの名前が送られました！」

夏「あぁ、あの子ね。どうすんだよ。四つも送られてきたんだろ？それなのにやっぱ出す機会がありませんでした、は通用しないぞ？」

作「なぁに、本編が無理でも番外編が――と、そう言えばすいません。ちょっと報告、というか謝罪というか。作者の中で企画している番外編なのですが、数名の方に第八話と第九話の間にやる可能性が高いと言ってしまいました。しかし、コラボの都合上ちょっとば

かし遅いのではと思い、この第七話が終了したら番外編を行いたいと思います」

香「番外編って何やるの？」

作「基本ギャグ、というかザ、ベタなことをやる。コラボは別かもだけど」

夏「嫌な予感がするのは俺だけか？」

作「因みに初期の頃はこんなのやるとは思ってなかったけど、まさか夏哉がヒロイン以外にフラグ立てるとは思わなくてな。よくある主人公になったからよくある展開も書いてみたくなった」

夏「ぜひやめてほしかった」

作「それから、ちょっとミスがあったんだけど、聞いてくれる？」

香「どうしたの？」

作「いやさ、ラスクの髪の色って薄い緑じゃん？」

香「うん」

作「……お隣の女の子も薄い緑にしちゃった」

香「え？あ、ホントだ。でも別にいいんじゃないの？髪の色くらい一緒で。夏哉君と沙鳥ちゃんも一緒だし」

作「まぁ、そうか。そうだな。よし、じゃあいいか」

香「さて、今回の感想をくれた方、姉様とソラトさんとｋｉｉｔｉさんには感謝です」

作「取り敢えず今募集中なのは、アンケートとコラボ、名前の三つです」

夏「あぁ、そういやアンケートも集めてたな。もう誰も来ないから忘れてた」

作「い、言うなバカ！！まだアンケートを送っていない皆様、ぜひ人助けをしてくれませんか？」

夏「感想評価待ってます」

第七話　《十二章》お化け屋敷

「〜〜〜〜♪〜〜〜♪」

「「うぅぅ〜……」」

今、俺の右隣にはルンルンなアンが腕を抱き、後ろでネハラとラスクが肩を落としている。

第一回愛でられるのは誰か！？金魚すくい大会の勝者はアンだった。
三人はそれなりに白熱した戦いを繰り広げていた。
三人とも最初のポイは練習用に使い、二つ目三つ目で真剣に取りに行った。

単純な結果では、ラスク二匹、ネハラ三匹、アン四匹だった。
初めてなのに凄い。
因みに俺は三匹だった。

しかしネハラは一番最初に終わった。
その時ラスクは二匹、アンは三匹。
お互いポイは残り一個。
ほぼ同時に仕掛けた結果、アンが一匹確保、ラスクは破けてしまい試合終了。
記録を伸ばそうとしたアンだったが、次には破れてしまった。

そのときのアンの表情は、悔しさよりも嬉しさの方がにじみ出ていた。

「なぁつや〜」

「ん？」

アンがニコニコなまま俺の名前を呼ぶ。

「これだけじゃ済まないからなっ。帰ったらいろいろやってもらうからな！」

「分かってますよお嬢様」

空いている手で頭を撫でてやる。

「ふゃ～～～」

とても気持ちよさそうだ。

「ナツヤ、お姉様に何かしたら殺すから」

俺たちのやりとりに嫉妬しているのだろう、さっきまで落ち込んでいたのに今は鋭いカッターのような殺気を突き刺してくる。

「アンの嫌がることはしないって。それより殺気を消せ。周りが避けてる。迷惑掛けるな」

周囲の客たちが後ずさっていく。

しかしそんなことは知ったことか、変わらず殺気を突き刺す。

そこで地球人よりも空気の読める魔族が登場した。

「ネハラやめろ」

その一言で、殺気が嘘のように消えた。

周囲の人たちもホッと息を吐くと文化祭を楽しみ出す。

「さて、どうしよっか。適当に歩いてるけど、パンフ見て他行きたいところあるか？」

「あ、ナツヤ、聞きたいことがあるんだが」

「ん？」

ラスクがアンのいない左側に来て歩を揃える。

昇降口でもらったであろうパンフを片手に、一つ指さす。

「このお化け屋敷とはなんだ？屋敷は建物のことなんだろうが、お化けというのが分からなくて」

「え、お化けしらねぇの？アンは？」

「名前はテレビで聞いたことはあるが、詳しくは」

「……じゃあ幽霊も知らない？」

「知らないな」

「知らん」

ラスクとアンがほぼ同時に答える。

へぇ、魔族ってそういう怪談話はないのか。
娯楽がないって言ってたからそうなのか。

「おばけとか幽霊ってのは、この世界では死者の魂のことだ。人が死んで、生きてた時に未練を残したらそれをどうにかしようと魂だけでこの世界に彷徨うってことになってる」

「へぇ。私たちのところだと死んだら神の元に集まって、生前の記憶を消されてまた新しい命を神に授けてもらう、というものだ」

「あぁ、それ俺らも、輪廻転生っていってそう言うのがあるんだよ。で、その神のところに行かないでここにとどまるのが幽霊、またはおばけ」

「なるほど。ではお化け屋敷というのはその死んだ者の魂が集まるところなのか？」

ラスクが問う。

「違う違う。俺らにとってな、お化けとかって恐怖の対象なんだよ。お化けって基本姿が見えなくて、でも向こうは人間になんらかの影響を与えてくるし、触れないし」

「ねぇ、じゃあ幽霊っていうの最強じゃない？」

後ろからネハラも話に参加してきた。

「あぁ言っておくけど、幽霊は本当にいるかどうかは分からないからな。なんつーか、生きてる人間が勝手に想像して、広がっていった、みたいな？でも写真取ったらいないはずのところに誰かがいた

りとか、普通じゃ考えられないことが起きたりするから信じられてる、みたいな」

「要するに曖昧な存在ってことか？」

アンが簡潔にまとめた。

「まぁな。いるかどうかも分からない相手とか、怖くない？」

「アタシは、よく分からないな。話を聞いただけではどうとでもなりそうだが、実際そういう場面に陥ったらどうなるか分からない」

「ま、そりゃそうか。で、話を戻すけど、お化け屋敷っていうのは、お化けがいるみたいな恐怖の体験をしましょうってところ。本物の幽霊が出るわけじゃないよ」

「どうして恐怖を体験したいわけ？恐怖って嫌なものでしょ？」

魔族には分からないのか、ネハラが訊ねてくる。

「簡単に言っちゃえば、刺激が欲しいわけだ。恐怖っていっても命の危険がないから安全なわけだから、結構好かれてるよ」

「ふぅん」

納得したのか、興味が薄れたのか、それ以上追求してこなかった。

「で、どうする？学校のだし、お前らじゃあんま怖くないかもしれないけど」

「いや、アタシは行ってみたいな。安全な恐怖というのは気になる」
「私もいいぞ。特に回りたい場所があるわけでもないし」
「お姉様が行くなら私も行くわ」
三人の同意も得られたので、四階まで歩いていく。

さて、ここで問題が起きた。
どうやらここのお化け屋敷、一人から三人の人数ごとでしか入ることは出来ないらしい。
四人以上のグループだと人数が多すぎとのことだ。
運良く俺らは四人なので、ニ、ニで分かれることになったのだが、そこが問題だった。

「私夏哉！」

「アタシはアンお嬢かナツヤ」

「絶対お姉様！」

つまり意見が合わない。

一番収まりが良さそうなのは、俺とラスク、アンとネハラだ。
だがアンが、？金魚すくい勝ったから夏哉と組む？とただをこねる。

もうじき俺たちの番まで回ってくるし、後ろに人もいる。

「おし、グッパで決めよ」

「「「グッパ？」」」

魔族三人に簡単な説明をした。

「よし行くぞ。グッパ！」

「なんでこうなるのよ……」

俺の隣にはネハラがいた。

俺たちはグー、向こうはパーだった。

「ほらぐーたれるな」

アンとラスクは最初に行った。

次は俺たちだ。

「どうして。私ちゃんとお姉様の思考パターンを熟知してるはずなのに……！」

「……それ、アンじゃなくてクーレラの思考パターンだったりしな

い？」

「あっ！？」

ネハラはアホのようだ。
確かドジッ娘スキルが付け加えられたはずだ。
そのせいだろう。

「では次の方どうぞ！」

俺たちの番が回った。

「じゃあ行くか。早く回ってアンたちと合流したいんだろ？」

「分かってるわよ」

「走らないようにしてくださいね」

受付の人に忠告されたので、軽い会釈をして返す。

中に入れば、結構雰囲気はあった。
他の高校は知らないが、クオリティは高い方だと思う。

「あんまり見えないわね」

「転けるなよ」

「黙れ」

ん～、なんか微妙に真樹と一緒にいる気がする。

『ケェケケケケ』

奇妙な笑い声が前から聞こえた。

「ひやっ!?な、なにっ!?」

え、まさか……

「……あの～、ネハラさん?もしかしてこういうの苦手?」

「そ、そんな訳ないでしょ!ただいきなり声がしたからおどろにょわあああああっ!!」

否定したと思ったら、突然飛び跳ねた。

「どうした?」

「いいい、今、後ろ、足!」

もはや文章になってはいなかったが、だいたい意味は分かった。

後ろから足に触れる何かがあったんだろう。

後ろを振り返る。

しかし暗いせいか、触れたものを急いで回収したせいか何も見えなかった。

しゃがんでみても何もない。

「もう大丈夫なんじゃないのか?」

立ちながら聞いてみる。

「え、えぇ。何も感じないわ……」

ネハラも徐々に落ち着いてきたのだろう。

俺たちは前に進もうとする。

目の前に、眼球が飛び出たゾンビがいた。

「うを――」

「きゃあああああああああああああっ！？！？！？！？」

俺の驚きの声は、ネハラの叫び声に消された。

ぎゅうっ！

腕に抱きつかれる感触があった。

相当怖いんだろう、形振り構っていられない様子だ。

よく見ると目の前のゾンビは首だけのもので宙に浮いて消えていった。

誰かが吊っていたんだろう

「ほらネハラ。もういないぞ」

「……ほ、ほんと？」

クソ！

なんだこの可愛い生物は！？
涙目＋上目遣いはやめろ！
なんだ？
俺はギャップ萌えに弱かったのか！？

ネハラにときめきを感じながら、今はなだめるために頭を撫でてやる。

「ホントにいないよ。早くこんなところ出てアンたちに会いに行こうぜ」

「……う、うん」

俺たちは歩き出す。

そのままの状態で。

はぁ～。

心の中でため息をつく。

いろいろ言いたいことがあった。

ネハラの柔らかい体が当たってる、や抱きつかれて歩きにくい、など。

言えるわけがない。

言ったら捨てられた子犬のような視線を浴びせてくるに決まっている。

正直どぎまぎしている。

俺だって思春期の男だ、こんな暗闇で女子に抱きつかれるなんてシチュエーションは嬉しかったり気恥ずかしかったりする。
でもそこでやましい気持ちを抱いてしまったら、必ず罪悪感という重荷に潰されてしまう。

だから心の中でため息をすることで自分の感情をごまかす。

ぺちょ

「ぬわっ!?」

「ふみゃあああああああああああ!?にゃ、にゃに!?にゃににゃにゃにゃに!?」

首筋に変な感触を感じ、叫び声を出してしまった。
その俺の声に驚いたネハラは、舌が回っていない。

振り返って見てみると、なんとまぁベタなこんにゃくがあった。

なんか恥ずかしい。

「ごめんなネハラ驚かせて。首に変なのが当たっただけだ」

「だ、大丈夫?食べられてない?」

「大丈夫だよ。ちゃんと体はあるよ」

「よかった〜」

ホッとしたのか、俺にもたれ掛かる。

それにしても性格変わったな。
凄い優しい。

「よし、歩けるか？」

「な、なんとか」

頷いたのを確認して、少し早足で歩く。
出口までの間、叫び声が何度も聞こえたのは言うまでもない。

――――――――――

「ありがとうございました～！」

出口に到着した私とラスクは受付の女に出迎えられた。

「いや～、結構楽しかったな」

「そうですね。恐怖は恐怖ですが、今までに感じたことのないものでした。安全な恐怖を求める人間の気持ちも多少分かりました。何度も来たいとは思えませんでしたが」

ラスクの言う通りだ。
私やラスクでも声を上げてしまった。
何度も来たいとは思わなかった。

「そうだな。でも、たまにならいいかもしれん。しばらく経ったら夏哉に頼んで行ってみようか」

「はい。ところで……」

ラスクは後ろを向く。

つられて私もそちらに顔を向ける。

「ネハラは大丈夫なん――」

『みゅにょおおおおおおおおおおお！！』

ネハラのなんとまぁ可愛らしい叫びが聞こえた。

「大丈夫なんでしょうか？」

「ま、まぁ夏哉がいるし、平気だろ？」

そう言ったが、不安じゃないといえば嘘だった。

そんな状態で約五分待った。

「ひくっ、ぐすっ……ぐすっ……」

「た、ただいま～」

苦笑している夏哉に抱きついているネハラが帰ってきた。

「取り敢えず聞くが、夏哉何かしたのか？」

「生憎俺じゃあない。ほらネハラ、アンがいるぞ」

「おね、さま……？お姉様ぁぁぁあああああああああ！」

ネハラは夏哉から離れ、私に抱きついてきた。
いつもだったら抱きつかれている夏哉をからかうところだが、ネハラが本当に泣いているのだ、それどころではない。

「ネハラ、もう大丈夫だからな」

私は出来る限りの優しい声で安全を促し、頭を撫でる。

「こ、怖かったです！すごく怖かったです！！」

「よしよし、大丈夫だからな」

ネハラがいつものネハラと違う。
命がけの恐怖なら全くと言っていいほど動じないくせに、こういうのは駄目らしい。
まぁわたしたちも声は出したが。

「すいません。この子こういうところ初めてで。別にどこが悪かったというわけではなくてですね。むしろ凄くよかったです」

夏哉が受付で謝っていた。
つまりここに長居するのはマズいか。

「ラスク、少し早いが香苗のところに戻るぞ」

「はい」

短くそう答えたので、次に夏哉に声を掛ける。

「夏哉、私たち香苗のところに行きたいんだが！」

「了解。あの、ホントすいませんでした」

最後にそう謝ると、こちらに合流した。

「お疲れナツヤ。済まないなネハラが」

「別にそれはいいんだけど、お前らは平気か？」

夏哉とラスクが会話を始めた。

「あぁ。驚きはしたが楽しむ余裕はあったぞ。人がこういうものを求める気持ちも分かった」

「そりゃ何よりだ」

会話には入りたかったがネハラを放って話にふけるのは嫌だったのでただ聞いている。

「で、もういいのか？昼にはちょっと早いぞ？」

「ネハラがアレではな。回れないだろ」

「そっか」

その後はこの学園祭について話していた。

徐々にネハラも落ち着きを取り戻し、集合場所の真樹のクラスが提供している休憩場所に着く頃にはいつも通りのネハラに戻っていた。

第七話　《十二章》お化け屋敷（後書き）

作者「すみませんでした」

沙鳥「なんか後書き始まりで謝罪が定番になってきた気がする」

アン「言うな。言っても空しくなるだけだ」

沙「そうだね。で作者。今回は何？」

作「活動報告で？日曜日に投稿する？って言っちゃった」

ア「もう四十分もオーバーしているな」

沙「うそつき～」

作「いや、これには訳があるんだ！」

沙「なに？」

作「これ！」

＞ｉ２５２２５｜３２９１＜

ア「あ、夏哉だ」

作「これ描くの六時間掛かっちゃってさ。やっぱり寝っ転がりながらじゃ腕が疲れる疲れる」

沙「え、作者、これ何？」

作「夏哉胸から上画像」

沙「それは分かってる。なんで今夏哉なの？」

作「実は今日ようやくネットが繋がってさ。ＧＩＭＰっていうフリーソフトダウンロード出来たがら描いた。予定だとこの後の後書きもがんばって描いていく」

ア「私たちをか？」

作「四人の魔法使い＋2をね。登場順だから次は香苗。正直ポーズはメンドクサいんでなしで」

沙「因みにストックというのは」

作「ストック？何それ楽しいの？」

ア「つまり更新が遅れるということか……」

作「うん。そろそろ他の小説も更新したいし」

沙「りょーかい。で、他にお知らせは？」

作「お知らせというか喜び。最近私をお気に入りユーザーに登録してくださる方々がいて。昨日なんか一気に四人！めちゃ嬉しいです！！」

ア「おお、それはよかったな。登録してくれた方はありがとう」

沙「ホント感謝感謝だね。ｋｉｉｔｉさんもソラトさんも感想くれて感謝感謝です」

ア「次回もよろしく頼む」

作「夏哉はイメージ通りだっただろうか？」

第七話　《十三章》他人の目

五組の休憩所に着いたが、知り合いはいなかった。

時刻は十一時四十五分。

集合まであと十五分。

取り敢えず休憩上という場所を有効利用する。

ここでは飲み物を売っているみたいだが、喉は渇いていなかった。

「……流石に早かったな」

ラスクがそう呟く。

「俺はいいけどな。のんびり出来るし。お前らはまだ動きたい？」

次にアンが答える。

「それはな。こういう体験は貴重だし。でも夏哉の言う通り、のんびりするのも悪くはない」

「アンお嬢に同じだな。それにこういう休む場所がなかったらいつまでも痴態を晒す者もいるようだし」

からかう相手が見つかって嬉しいのか、にやっと笑みを浮かべながらネハラを見る。

「うっさいわね！少し黙ってなさい！」

ネハラは誰にも目を合わさないように顔を逸らす。
若干頬が赤いのは恥ずかしさのせいなのか怒りのせいなのか。

「でも驚いたぞ。ネハラってああいうのは駄目なんだな」

「……お姉様もやめてください。あんなことすぐに忘れたいんです」

「いいだろ。あのネハラが、聞いたことのないような叫び声あげたんだから。もう思い出しただけで可愛さを感じてしまう」

「お姉様、一生のお願いです。忘れてください。

「無理だ。もう完全に記憶された」

「『みゅにょおおおおおおおおおおお』か。ネハラを知ってる者が聞いたらなんて反応するんだろうな。最悪気絶するんじゃないか？」

アンがからかい始めたためか、ここぞとばかりラスクも混ざりに行く。

「こらこら、ネハラが嫌がっているでしょうが。滅多にやんないことだからってネハラをいぢめないの」

「うぅぅ、唯一の味方があんたってのは癪だけどありがとう！」

「この夏哉！そんな甘い台詞吐くからフラグが立つんだ！！」

「ネハラって叫び声ホント可愛いよね～。いつものツンとした態度とはえらい違い。これはツンデレって言うのか？」

「ちょ、ナツヤ！何一瞬で鞍替えしてるのよ！？」

「いや、だって、ねぇ」

さっきの俺の言葉がフラグとなるというならば、その言葉は全力で撤回させてもらう。

「何フラグ？フラグのことなの？なら安心しなさい。私はお姉様一人よ。それ以外の人に愛情を抱くことは必ずと言っていいほどないわ」

「二人ともいぢめはよくないよ。ネハラが可哀想だ」

「ナツヤ、いくらなんでも鞍替えしすぎじゃないのか？」

「だってネハラがフラグ立たないって言うから。立たないんならネハラいぢめる理由はないし」

「夏哉はフラグにこだわりすぎじゃないか？」

「いやだってお前、待たせてるのにそういうの増やすって申し訳ないだろ？」

「私はいいのに」

「そういう問題じゃないの」

ちょうど話のきりがいいとき、

「あり？夏哉たち早いね」

沙鳥が声を上げながら入ってきた。
香苗が一緒で、空ねぇはいない。
午後からが店番だから。

「何かあった？」

香苗が聞いてくる。

「いんや、この前にお化け屋敷行ったんだけど、その終わった時間が微妙だったから早めに切り上げてきた」

「あ、お化け屋敷行ったんだ。どうだった？」

沙鳥は俺たちとは違うテーブルの椅子に座り、体をこちらに向ける。
香苗も同じだ。

「結構本格的だったぞ。一部超ベタなのもあったけど」

「でも今はいろんなお化け屋敷があるんだから同じのがあってもしょうがないよ？」

「いやいや香苗さん、そういうんじゃなくて。こんにゃくをぺたってやってきたり」

「うわ、べった～。何？それに我らが夏哉君は情けない声だしちゃった？」

「出しちゃったね～。アレは地味に驚くぞ。沙鳥は絶対腰抜かす」

「私かい。香君じゃないの？」

「香苗は意外と図太そう」

「なんか褒められてる気はしない……」

「アンちゃんたちはどうだった？」

ピクッとネハラの方が反応した。

今までのアンたちの態度が態度だったから、秘密にしてくれるのか気になるんだろう。

「楽しかったぞ」

「そうですね。こういう恐怖ならたまには感じてもいいかもしれないな」

「え、ラスクさん怖かったんですか？」

香苗が驚きの表情で訪ねる。

「まぁな。いきなり変なのが目の前に出てきたり、さっきのこんにゃくとやらが触れたり、もしかしたら恐怖より驚きの方が強かったかも知れないが、怖かったことには違いない」

二人ともネハラのことは触れなかったため、ホッと胸をなで下ろした様子。

「へぇ、アンちゃんもラスクさんも魔族だから平気だと思った。ネ

ハラさんは？」

「わ、私はあんなの全然よ！つまんなかったわ！た、ただ暗闇の中で物が出てくるだけでしょ？それが何って感じよ」

必死にお化け屋敷を否定するその姿は、事情を知っている俺にとってはおかしな姿というか微笑ましい姿というか。

とにかく笑いをこらえていた。

それは俺だけではなくアンとラスクもそのようで、小刻みに肩が震えている。

「そっか。そんな感じに捉えられちゃうんだ。凄いねネハラさん。声出さなかった？」

「だ、出す訳ないじゃない。むしろ、ナツヤの方が出してたわ」

くそー！！

にやけが、にやけが止まんない！

「へぇ～、夏哉なっさけなぁ～い」

「わ、悪うございました」

声が震える。

それをどう捉えたのか、二人とも笑う。

「もう夏哉君、そんなに怖かったの？声震えてるよ？」

「私の大きな胸で抱きしめてあげようか？」

「さ、沙鳥ちゃんそういうセクハラは駄目だよ！」

「どこが！？一体私のどこが性的嫌がらせ！？別に夏哉になにやってないよね！？」

「僕にだよ！胸ないのに一人そんな行動取るなんて、嫌がらせだよ！性的嫌がらせだよ！」

「じゃあ私夏哉に抱きつけないじゃん！！いいでしょ別に！！それに貧乳は希少価値のあるステータスってよく言うじゃん！巨乳なんて最近マンガとかじゃ普通に大量生産されてるじゃん！私だってもうちょっと小さくなりたー――」

ヒュン。

いつの間にか香苗は沙鳥の首にカッターを押しつけようとしていた。つかなんでカッター常備！？

「沙鳥ちゃん、それは強者の悩みってやつだよね。弱者の苦しみを知らない強者が吐く妬みなんだよね」

「ちょ、カナさん？カッターなんて、どこから？」

「沙鳥ちゃんは今言葉の暴力を吐いた。もうちょっと小さくなりたい？大きくなれない悲しみが分かる！？この小さな胸のせいで私は幼く見えるんだよ！？」

関係ないと思う。

きっとこれを聞いた皆はそう思っているだろう。

「そんな世の女の子を虐める沙鳥ちゃんには、お仕置きが必要だよね」

「ま、待て待て！カナさん待ってください！私が悪かった！これは土下座してもいいから悪かったです！だからせめてカッターは外してくれないかな？ま、まさかとは思うけど、お仕置きってカッターで切りつける、じゃないよね？」

「ふふ」

「なにその笑み怖いよ！な、夏哉！助けて！」

沙鳥が俺に懇願してくる。

さすがにこんなところで流血沙汰になったらマズいので介入する。

「香苗、冗談でももうやめなさい。沙鳥も反省してるだろうし、事件起こしたらいろいろまずいだろ。もう遊べないぞ」

「は～い」

香苗はカッターをしまい、席に着く。

「夏哉ありがと～。後カナもごめんね。傷つける意味で行った訳じゃないんだけどね……」

「そういう自覚なしが一番たち悪いんだよ。沙鳥ちゃんのバカ」

「はうぅっ！！その拗ねた感じで？バカ？って言われるの可愛いよ

おっ！！」

「沙鳥、トリップすんな。で、午後はどうするよ？そろそろ決めない？」

「あ、それ決まってるよ」

「なぬ？」

「僕と夏哉君のデート。沙鳥ちゃんはもう説得した」

「へぇ、いいのか沙鳥？」

「だって空お姉ちゃんと約束したんだって。カナが男装したら夏哉とデートさせてあげるって」

いつの間に……てか俺抜きで決めたのかよ。

「了解。じゃあアンたちは沙鳥と一緒でいいか？」

「構わんぞ。お前らもいいな？」

「「はい」」

というわけで俺と香苗は一緒に巡回することになった。

「さぁどこ行こう」

「あ、実は決めてるんだ」

「ん？どこ？」

「地学部のプラネタリウム。後……十五分くらいに開演だから行こ？」

「りょーかい」

俺達は四階特別棟に向かう。

「ところで、なんでプラネタリウム？」

「多分夏哉君アンさんたちとは行かないだろうなって思ったのと、夏哉君が僕のこと？星みたい？って言ってくれたから」

思い出すのは十一日前の学校創立記念日。

人生初のデートをした日だ。

「ちゃんと持ってるよ」

香苗はポケットからひし形の中に星を象ったネックレスをつけている。

因みにうちの学校はネックレスやイヤリングなどの装飾品は禁止だ。

だからポケットにしまっているんだろう。

そういえばアンもつけてたな、と今更ながら思い出してみる。

「そりゃどうもありがとな。それから、僕はやめろ。男装には興味ない」

「あったら私もちょっと……だけど。で、夏哉君は？」

「は？というと？」

「私があげたネックレス」

「あぁあれ？るあちゃんにあげた」

「えええぇっ！？ちょ、それひどくない！？」

「嘘だ嘘だ。ちょい待ち」

財布を取り出す。

その中で三つあるうち一つの小銭入れをあける。

そこには同じくひし形の、十字を象ったネックレスがある。

「ほれ。誰が親以外の初プレゼント捨てるか」

「え、初プレゼントなの？」

「おう、そうよ」

「へへっ。もう、嬉しいね」

「そりゃよかったな」

「うん――ってうわっ！？」

何故か香苗は転んだ。

「っと」

体が床に着く前になんとかささえられた。

「おいいきなりどうした？」

「転んじゃった……」

「そりゃ見りゃ分かる。なんで転んだんだよ？転ける要素な――あ、そういやお前なんもないところで転べる習性合ったんだよな。最近転んでなかったから忘れてたけど」

「そんな習性持ってないよぉ」

「でも最近ホント転ばなくなったよな。最近転んだのいつ？」

「……昨日」

「……は？」

「昨日の午前中、厨房で転んだ」

「……まさかとは思うけど、俺のいないところでよく転んでる？」

こくり。

なんてことだ。

こいつの転ぶ癖はまだ失っていなかったのか。

「それにしても俺のいないときに転ぶとか頑張るな」

「夏哉君さ、アンさんが来てからちょくちょく私たちから離れるよ

うになったからだよ」

「あぁなるほど。俺はいつも通り香苗といるつもりだったんだけどな。でも、となると沙鳥は知ってんの？」

「うん。よく傍で見てるよ。恥ずかしいから言いふらさないようにお願いしたけど」

「あ～ね。ところでさ、なんか回り騒がしくね？」

周りを見ると、ザワザワという音が聞こえる。
視線はこちらを向いている。

俺たちなんかして――ってマズ！

「香苗わりぃ！！」

俺は香苗を体から離した。

「え……あ、そ、そうだよねっ！こんな廊下で！！」

香苗も理解したようで顔を赤くする。

多分俺も赤いだろう。

それよりも、俺は多分ロリコンのレッテルを貼られてしまうだろう。
ただでさえ二人きりなのだ、それが端から見れば抱き合うまでいったら完璧アウトだ。
初デートの時は兄妹だと勘違いされていたが、それだとしても抱き合うのはマズい。

しかしなんだろう、一部女性から放たれる視線に熱がこもっている気がする。
気がするで、そんな感情は読みとれないが、少なくとも嫌悪の視線ではないことは間違いない。
その時、女性たちの会話を聞いてしまった。

「あの子たちホモなのね」

……は？

「ねぇ、どっちが受けだと思う？」

「そりゃ当然髪縛ってる子でしょ」

「あんな見るからにショタとか、あの子も幸せね」

「もしかしたらこの後アーッな展開に――」

俺は香苗の手を掴み、一気に廊下を駆け抜ける。

「きゃあああああっ！！もしかして、今から！？」

「ねぇ早く見に行こう！」

後ろから聞こえる言葉は無視。

急いで地学部のプラネタリウムを開演する教室に到着した。

「お客様二名でよろしいですか？」

教室の前で地学部員の男子とおぼしき人が出迎えてくれた。

「はい！場所どこでもいいんで、急いで座らせてください！」

「え、あ、は、はい。では入って左側の……前から三列目の席にどうぞ」

言われてすぐに教室に入り、指定され場所に座る。

そして頭を抱える。

「なんっでだよぉぉぉぉぉぉぉ……！」

周りに迷惑がかからないように頭を抱えて苦悩を吐き出す。

「あ、な、夏哉君、ホントごめんなさい。その、この格好に慣れちゃって……」

今更ながらに香苗の服装を説明すると、上はクラスTシャツ、下は男用の制服のズボン。

髪は縛ってある。

「いや、お前のせいじゃないだろ。つーかもう、あぁぁぁ～、まだロリコンって思われてた方がよか――」

バンッ！！

入り口の方で凄まじい音が聞こえた。
予想だと扉が開く音がした。

何事と思い振り返る。

「あ、いたいたいた」

あの声には聞き覚えがあった。

さっきのホモがどうのと言いだした人の声だ。
ここまで追ってくるか普通？

どうやら三人組のようで、俺たちの後ろの列に座った。

「まだかなまだかな～」

後ろからそんな陽気な声が聞こえた。

それはプラネタリウムにたいして言っているのだと思いたい。

結局、プラネタリウムは楽しめなかった。

第七話　《十三章》他人の目（後書き）

真樹「何やら、ＢＬフラグを確立させたようで」

作者「いや～、これは自分で吹いたぜ。ということで今回は夏哉と一緒に誤解された香苗ちゃんです！！」

＞ｉ２５２７０―３２９１＜

夏哉「……なぁ真樹、皆で、無人島にでも行かないか？」

真「え、いきなりなんですの？」

夏「俺と真樹と香苗と沙鳥とアンとラスク、ネハラと空ねぇで、どっか誰も行かないところに行かないか？」

作「あれま～、なんか壊れちゃったね～」

真「貴方のせいではありませんか。それにしても……無人島ですか」

作「おい、なに真剣に考えてんだよ」

真「別に考えるくらいいいでしょう」

作「まぁな。おい夏哉、気にするな。あの方たちはもう出番ないから」

夏「お前の言うことなんて信じられるか。どうせああ言うのがまた出てくるんだろ？男キャラ少ないのにそういう話になるんだろ？」

作「いや、もうないって。これは断言する。コラボでやってくださいって言われたら別だけど」

夏「読者様お願いします。そのコラボだけはやめてください」

真「土下座しなくても……」

作「あ、そうだ。話は変わりますが、この第七話、後プロローグ入れて四話くらいで終了出来ると思います」

真「つまり残り四話では終わらないということですので、お気を付けください」

作「否定できない自分がいる！！さて、そろそろやることもなくなってきたので、真樹感想よろしくぅ」

真「空お姉ちゃん、マリィ愛してるぅぅぅ！！さん、ありがとうございました。これからもよろしくお願いします」

作「感想評価、アンケート待ってます！！」

第七話　《十四話》不良の器

ため息をつきたくなった。

しかし隣には香苗がいて、仮にもデート中なのでそれを飲み込む。

でもやっぱり耐えられなくなり、

「はぁ」

結局ため息をついてしまった。

これはちょっとマズいということは、それなりに女の子の気持ちを分かっているつもりである俺も分かる。

「いや、香苗悪い。お前に対してではなくな、ついでちゃった」

「気にしなくていいよ。半分は私のせいだし」

現在俺たちは三階廊下を散策中だ。

プラネタリウムでは、ずっと女性の視線を感じていて落ち着かなかった。

その人たちは俺たちがそういうことをやらないと分かるとどこかに行ってしまった。

視線から解放されてよかった。

「香苗」

「ん？何？」

「当てもなく歩いてるんだけど、行き先決まってるの？」

「え？夏哉君どっか向かってたんじゃないの？夏哉君について行ったつもりだったんだけど……」

どうやらお互い適当だったらしい。

と言うことは何か、香苗の行く予定はプラネタリウムオンリーだったのか。

そこをため息で終わらせてしまったのか。

「香苗、ホントごめんな。埋め合わせにお姫様だっこでもどう？」

「えっ！？そ、それはとても魅惑的な誘いだけど……」

きょろきょろと首を動かして辺りを見る。

「もちろん家でだぞ。外でやったら変な目で見られる」

「よろしくお願いします」

ペコリと頭を下げた。

即決力がある少女だ。

「お。なぁなぁ、アイスくわね？」

ちょうど目の前にアイス家があったため指さしてみる。

「あ、いいかも」

足先を変え、中に入ってみる。
そこにはコンビニにおいてある、アイスを入れる冷凍庫と、簡易的なソフトクリームが作れる機械があった。
「何食う？」
「私ソフトクリーム」
「ん、じゃあ俺は……」
何があるか眺め、最中の中にアイスクリームと板チョコが入っているアイスを手に取る。
「じゃあこれとソフトクリームください」
「かしこまりました～」
すぐにソフトクリームが手渡された。
因みに支払いはもちろん俺。
用意されている椅子に座ってそれを食べる。
流石にソフトクリームをこの人混みの中で食べたら、俺もいることだし香苗と不良がぶつかって、またいざこざが起こるかもしれない。
「夏哉君、食べる？」
香苗が若干頬を赤くして、食べかけのソフトクリームを傾ける。
スプーンなるものはない。
直で食えということか。

「それはお前がスカート穿いてどっからどう見ても女の子に見えるようになったら食わせてもらう。俺の予想だと、アイス口にした瞬間をさっきの人たちに見られてメンドクサいことになる」

「……ごめんなさい。簡単に想像できちゃった」

「だろ？だから俺のためにやめれ」

「うん。はぁ～、スカートくらい持ってくればよかった……。なんで私男装するなんて引き受けちゃったんだろ」

「そりゃ俺とデートがしたかったからだろ？」

「イチャイチャ出来なかったら意味ないと思う」

確かにいちゃいちゃは出来ないな。
したら俺がＢＬのレッテルを貼られてしまう。

「なんでズボン穿いただけで男に見られるんだろうな。香苗はこんなにも可愛くて愛らしくて素敵なロリなのに」

最後はわざとらしく言ってみた。

「……夏哉君、それは喜ぶべき？笑うべき？起こるべき？」

「喜んで笑うべきだ」

「分かった。夏哉君、ロリとか言わないでよ！！」

「え、なんでそっち!?喜べ言っただろ!?」

「ロリって言ったから怒るんだからね!!」

なんか一瞬ツンデレを垣間見た気がするが、香苗にツンデレは合わない気がするな。

などを思いながら目尻をあげ、眉を逆ハの字にする香苗を見ていたとき、

「おいガキ!!どこ見てんだよ!?」

廊下(そと)で怒声が聞こえた。

定番の展開だったら、子供が不良にぶつかってさっきの言葉が出たんだろう。

どうして俺の耳に届いてしまったんだろう。

「香苗ちゃん」

「分かってますよ。私は理解のある女ですから。デート中夏哉君が他の女の子を助けに言っても笑って過ごせますよ」

「まず女の子かどうか知らんし、その笑うっていうのがヤンデレ的な気もするけど、ホントわりぃ」

俺はアイスを置き、廊下に出る。

野次馬が群がっていた。

その間を強引に入っていき、中心へ向かった。

「なんとか言えや！！」

あからさまに不良といった体の男二人に、少し濃いめの桃色の髪をツインテールにした少女がいた。

「やかましいわよクズ共。さっさとどっか行ってくれない？周りにどれだけ迷惑掛かってるか気付いてないわけ？」

後ろから見ているため顔は見えないが、身長的に中学生だろうか。香苗という例があるので一概に言えないが。

その少女は、なんとも口が悪かった。

こりゃ嫌な予感しかしない。

「おいガキぃ、テメェからぶつかってきて何言ってやがんだ？」

「これだから最近のガキは。謝るっつーことを知らねぇからよ。ちっと教育が必要みてぇだな」

ドスの利いた風に言うが、少女は全く動じない。

「教育？それが必要なのはあんたらでしょ？この社会のゴミが」

むしろ罵倒を浴びせた。

こりゃマズいか。

そろそろ介入する。

「あの――」

「チッ、上等じゃねぇかよ。その顔グチャグチャにしてやんよ!!」

男が拳を振りかぶった。

俺は二人の間に入り、その拳を受け止めた。

「な、なんだテメェ!?」

「ちょっとお兄さん、詳しくは知んないし女の子に非があんのかも知んないけどさ、拳振るうのはどうなんだ?」

「だからテメェ誰だよ!?離せ!!」

言われた通り離す。

「通りすがりの学生だよ。それより女の子に暴力振るんじゃねぇよ。馬鹿にされてむしゃくしゃすんのは分かるよ。向こうも口が過ぎてた。アンタは何もしてないかもしんない。だったら俺を殴れ。本気で一発殴れ!その一発で全部チャラに出来る器見せてみろよ!!それだけで社会のゴミって言われたことを否定して見せろよ!!アンタも男だろ!?ここで女の子殴ったら本当にただのクズじゃねぇかッ!!」

途中からだんだん熱が入ってきた。

拳を振りかぶってきた男はジッと俺を見て、ニヤリと笑った。

「いいねぇ。サイッコーじゃねぇかお前。サイコーに主人公やって

んじゃねぇか。その役はまってんぞ」

男はどこか嬉しそうだった。

「おい、お前名前は？」

「柊夏哉」

「そうか、柊か」

ゴッ！！

男は俺の左頬を殴った。

そのまま倒れてしまったら後ろにいる女の子を巻き込んでしまうので踏ん張る。

「へぇ、倒れねぇのか。俺は須藤荒木（すどうあらき）だ。テメェに免じてここは引いてやるよじゃあな」

須藤は連れのもう一人を連れてこの場から立ち去る。

そうだ、と須藤は振り返った。

「ここに桜庭高の不良が来てんぜ。テメェはヒーロー気取ってるみたいだから気をつけな」

どうやら俺に忠告をしてくれたようだ。

素直にここを引いてくれたし、結構いい人らしい。

「忠告どうも。生憎もしかしたらそれ殴ったかも」

「マジかよ……。四人組だったか？」

「あぁ」

「あいつらしつけぇからな。気をつけるこった」

「たびたびどうも。アンタダークヒーローに向いてるよ」

「そりゃどうも」

手を振って、今度こそ立ち去った。

さて、後ろを振り返る。

予想通り幼い、少し目つきの鋭い女の子だった。

なんか驚いている。

そんな彼女に、

「てい！」

「あきゃあっ！？」

拳骨を頭に食らわせた。

ちょっと強めだったため涙目になって頭を押さえている。

「ちょ、夏哉君！？暴力反対って言ってなかった！？」

この人混みの中をわざわざ割り込んできたんだろう、香苗が大声を

出す。
片手に俺の買ったアイスを持っていた。

「うるさい。香苗は黙ってなさい。で、君。口悪すぎ。グズとかゴミとか。思ってもそういう罵倒は言っちゃだめだよ。俺は途中からしか聞いてないからどっちが悪いか分かんないけど、もっと言葉選べたでしょ。向こうも話通じる人だったんだから話さないと」

女の子は終始キョトンとしてたが、俺の説教もどきが終わると走り去っていった。

ん～、意外と精神年齢は低いのか？
などと失礼なことを自覚しながらも思ってみる。

袖をクイクイと引っ張られた。

「追っかけなくていいの？」

香苗が何かを促すような視線を送ってくる。

「いかねぇよ。行く必要もないし。俺が説教して逃げたってことは自覚してくれたからだろうし。流石にまた不良といざこざにってことはないでしょ」

「……夏哉君のに全部反論しちゃうんだけど、逃げたのは夏哉君に急に殴られてパニックになっちゃったかもだし、夏哉君に関わったからその可能性もゼロじゃないと思うよ。初対面の人にも主人公言われてたし」

そう言われると、ちょっと自信なくしてきたが、いやいや、と俺も

返す。

「別に俺が酷いこと言ったら追いかけるけど、叱るのは必要だろ？流石に不良だからってあんな罵倒はないでしょ？」

「まぁ、それはそうだけど……」

「もし真樹みたいだったらちゃんと分別分かってるだろうけど、初対面に言うっていうことは微妙ってことだし。つーか第一、あの子追って何すりゃいいんだよ？」

「う、冷静に考えるとそうだよね。ごめん、つい女の子が逃げたら夏哉君に追わせなきゃっていう心理状態が働いちゃった」

「そんな心理状況は消してしまいなさい」

ゴツンと拳骨。

「うぅぅ、痛いよぉ～」

頭をすりすりしながら涙を浮かべる。

「なぁ、香苗、ちょいとおトイレ行っていい？」

「いいけど……アイスどうする？」

あ、忘れてた。

「食べたいなら食べちゃっていいよ。むしろ溶けちゃいそうだから頼む。早めに帰ってくるつもりだけど、わりぃな」

「うん。いってらっしゃい」

俺は周りに迷惑が掛からない程度に駆け足で香苗から離れた。

――――――――――

夏哉君は小走りでトイレに向かった。

取り敢えず教室の中に戻ろ。

さっきまで座っていた席に座って、右手に持っているそれを両手に持ち直し、凝視する。

「な、夏哉君の食べかけ……」

そりゃ私も思春期の女の子、好きな男の子の食べかけのアイスに、食欲意外の欲求を抱いてしまう。

ほ、本当に舐めちゃおっかな？

夏哉君も食べていいって言ってたし。

ごくっとのどを鳴らし、夏哉君の買った最中アイスを近づけ――こういうときに限って邪魔入るのが入る気がする。

急に、そんなお約束な展開が頭の中に浮かび、周囲を確認する。

うん、誰も知り合いはいない――って私のバカ！

確認するくらいならさっさと食べちゃえばよかったのに！！

自分のアホさか現に呆れつつ、今度は勇気を出して早く口に運んだ。

私の考えはどうやら杞憂に終わり、口の中には少ししなっとしている最中と冷たいアイス、甘くて少し固いチョコが広がった。

食べた感想は、熱かった。

夏哉君とは？あーん？をした仲だと言うのに、全然耐性が出来ていなかった。

その熱を冷ますためにアイスを一口。

はたと、思ったことがあった。

夏哉君と一番色々やったのって、私じゃないのだろうかと。

だってデートしたし食べ比べしたしファーストキスしたしお泊まりしたし手も握ったし、今だってデートだし。

アンさんは……あ、でもアンさんに負けてるかも。いつもお泊まりしてるしキスもしたし、夏哉君の手作り料理ほぼ毎日食べてるし、戦いで一緒だし今日も同伴があったとはいえデートしたし。

逆に沙鳥ちゃんには勝ってると思う。

沙鳥ちゃんなんて、キスしたのと胸押しつけたりお風呂一緒に入った程度で……あれ？

なんか沙鳥ちゃん、ほとんど体メインじゃない？

なんか落ち込んできた。

で、でもよくよく考えたら、沙鳥ちゃんほとんど体に頼ってるってことは、その体を抜きにしたら私とアンさんの方が上ってことになるんだよね？

うん、沙鳥ちゃんには悪いけど、なんか負ける気がしない。

そんなことを考えていたら、私の名前を呼ぶ人が現れた。

「あっ、かなえおねえちゃんだ～！」

廊下から聞こえたのでそちらを見ると、パタパタとスリッパを鳴らしてこちらにやってきた子がいた。

るあちゃんだ。

その後ろには灯里ちゃんと、るあちゃんの友達であろう二人の女の子がいた。

「るーちゃん、このひとだあれ？」

「かなえおねえちゃんだよあかねぇのおともだち」

因みにるあちゃんには私の実年齢をきちんと教えた。

ゴールデンウイークのとき夏哉君がるあちゃんに九歳なんてでたらめを教えたからるあちゃん本当に信じちゃって。

理解させるのに時間がかかった。

「香苗ちゃんどうも。一人？」

灯里ちゃんが話しかけてきた。

「ううん、夏哉君が今おトイレ」

「ねぇねぇ、何食べてるの？」

紫色の髪をしたもう一人の女の子が私の傍で聞いてきた。

「アイスだよ。あ、そだ」

私は最中アイスを折った。

「はい、どうぞ。冷たくておいしいよ」

「いいのっ？ありがとうお姉ちゃん！」

アイス一欠片でここまで喜んでくれるなんて、物凄く可愛い。

あとお姉ちゃんっていうのも高得点だ。

あぁなるほど、これが沙鳥ちゃんたちの、私に対する感情なんだ。

ちょっとだけお姉ちゃんって呼んであげようかな。

「あぁっ！つみれちゃんだけずるい～！おねえちゃんわたしも～」

「るあもるあも～」

「大丈夫大丈夫、ちゃんとあげるからね」

残った方も二等分して二人にあげる。

「「ありがと〜！」」

うぅぅ、私ロリコンなのかな？
可愛すぎるよ〜。
ぎゅってしてみたいな〜。

「香苗ちゃんごめんね。いくらだった？」

「へ？あ、あぁ、いいよ別に。私もあれ夏哉君からもらったものだから。気にしないで」

「あ、そう？ならよかったけど」

それからしばらく雑談していた。

ん〜、夏哉君がなかなか帰ってこない。
まさかあの女の子捜してるのかな？

なんて思って携帯を取り出して夏哉君に掛けてみた。

第七話　《十四話》不良の器（後書き）

作者「真樹さん読者さんすいませんでした！！」

香苗「何いきなり謝ってるの？それに真樹ちゃんいないし」

作「いやあのさ、まず読者さんには、四日とか思いの外待たせちゃったからごめんなさい。で、真樹さんの方は、俺、絵を描くの四人の魔法使い＋２って言ったじゃん？」

アン「あぁ言ってたな」

作「リアルの忙しい日々の仲、実現が不可能になってきました。とりあえず今回は、出番が一切ない沙鳥ちゃんです」

＞ｉ２５４５６―３２９１＜

香「……沙鳥ちゃん、胸おっきいな～」

作「実は沙鳥着痩せする」

香「えっ！？あれで着痩せ状態！？」

ア「いや、単なる嘘だろ。というかお前は沙鳥の裸見ただろ？どうだったんだ？」

香「……おっきかったです」

ア「サイズの話をしてるんじゃないんだが……」

香「だってそんなにじっくり見てないもん！じっくり見たら私死んじゃうよ！？」

ア「それくらいで死ぬな」

作「さて、やることないからアン、愚痴聞いてくんね？」

ア「まぁ暇だしいいが」

作「あ、その前に。会話で終わるかも知んないから先にお礼頼む」

ア「了解だ。ファルコさん、感想ありがとう。忙しい中感想をくれるなんてうれしい限りです」

香「皆もここまで呼んでくれてありがとうございます。次回もよろしくお願いします。ではまた」

作「え、ちょ、待て！俺の愚痴コーナーは！？」

香「え？これもう終わりなんじゃないの？アンさん謝辞送ってたし」

作「違う違う違う。もしかしたらだら話してそこで時間終了になっちゃうかもしんないから先にやってもらってたんだよ」

香「あ、そうなんだ。気付かなかった。では皆さん、こんなだらだらと話してた結果時間が終了に近づいてきました」

作「え？」

ア「生憎だが作者の愚痴を聞いてる暇はないな」

作「え、ちょ、待ってよ。なんで?折角ここで愚痴を言おうとしてたのに!!」

ア「残念だったな。では皆、次回の後書きではいよいよ最後のヒロインと名目された私のイラストを公開します」

香「私先に見たけど、何これ?私たちのとあからさまに違うものがあるんだけど」

ア「ただの気まぐれだそうだ」

香「へ〜、そうなんだ」

作「てかこの二人の会話があるなら愚痴言わせろよ!!」

第七話　《十五章》喧嘩

ん～、マズった。

迷子の子を道案内させてたら時間掛かっちゃったな。
香苗にメールでも送っときゃよかった。
一人でかなり待たせちゃってるだろうしな。

と、ここでタイミング良く携帯が鳴った。

香苗心配してるんだろうな～、とか思いながら携帯を取り出す。
しかし携帯の画面に登録された香苗の文字は浮かんでおらず、知らない電話番号が代わりに浮かんでいた。
誰だろうと思いながら通話ボタンを押す。

「もしもし？」

『あ、あの、柊、夏哉君ですか？』

少し震えたような女子の声が聞こえた。
聞き覚えはある。

「えっと、布田か？」

布田夕紀。
昨日間違えて俺が着替えを覗いてしまった女子の一人だ。
しかし、何故彼女が電話してくるんだろう。
あれ以来話なんかも全くしてないし。

『はい、そうです』

「どうした？」

『い、今すぐ、教室に戻ってきてくれませんかっ？今、その――きゃあああっ！？』

「布田！？」

突然悲鳴をあげた。

電話中歩いて、今コケたという展開なら望ましいけど。

『も～しも～し、ひ～らぎクンですかぁ～？』

男の声だった。

喋り方からチャラそうだ。

「おい、布田はどうした？」

『別にぃ～、なんもしてねぇよ』

信用は出来ない。

確か布田は教室に来いって言ってたからそこか。

走りながら会話をする。

「アンタ誰だ？」

『昨日はよろしくやってくれたな～、おい？』

会話になってないし。

しかし、昨日か。
昨日と言えば……

「お前昨日の痴漢野郎か」

それ以外に思い当たる節はない。
つまり布田が何かされた原因は俺か。

布田に対する罪悪感に苛まれながら、しかし助けようと行動する。

『誰が痴漢だ!?』

しまった、ここで挑発させたら布田に何かされる可能性がある。

「で、アンタはなんの用だよ?」

『俺らはなぁ、調子こいてるテメェを潰してぇんだよ。今から言う場所に一人で来い』

そういって指定してきた場所は、隣町のとある廃ビルだった。
恐らくそこが不良の溜まり場となっているんだろう。

「おい、布田はどうするつもりだ?」

『そんなのもちろん、お楽しみに決まってんだろ?』

ギャハハ、と気持ち悪い笑みを浮かべる。

……ふう、落ち着け。
キレるんじゃねぇぞ俺。
まだ大丈夫だ。
布田の叫びが聞こえないってことはまだ何もしてないってことだ。
慌てるな、落ち着け。

もう一度息をついて心を静める。

「おい、絶対布田には手ぇ出すなよ？あいつがこれ以上嫌悪するようなことしたら潰すからな」

『やれるもんならやってみろよ！』

不良は俺を挑発してきた。

というか、今更ながらに思うんだが、こいつバカか？
俺を縛ってるのは布田一人だ。
それで布田は教室に来てって言った。
つまり布田はまだ拉致されてないで教室にいるはずだ。
だったら布田をすぐに助けりゃわざわざ廃ビルなんてとこに行かなくて済む。

目の前にはたくさんの野次馬がいた。

その中心となっているのは、二回特別棟にある科学教室。
俺たちのクラスが出し物をしている教室だ。
扉は閉まっている。

本日二度目、強引に人混みの中をかき分ける。

その中には見知った大人、教師が数人いた。
中で生徒が人質に取られてるということで動きあぐねているんだろう。

俺は教師を見ない振りして扉を思いっきり開ける。

バン！！

大きな音を立てて入ると、教室の中にいる人たちが一斉にこちらに視線を飛ばしてくる。

みんなは中心に集まって座って――いや座らされていて、三人だけ立っている。
一人は布田。
あとの二人は不良。
その内の、布田の両手を掴んで携帯を片手に持っている不良に携帯で話し掛ける。

「よぉ、言われたとおり潰しに来たぞ」

不良たちは驚いていた。

俺は一歩足に力を入れて駆け出そうとした。

が。

「ま、待って！」

制止をかけられた。

他でもない、布田夕紀本人に。

布田はかなり慌てた様子だ。
俺が何かしたらマズいことになるのか。

言われた通り動きを止める。

「あ、あの、この人たちに何かしたら、宮江ちゃんが！」

宮江ちゃん？
宮江は確か、宝井のことか。

じゃあ待て、何か？
こいつらは布田だけじゃなくって宝井にも手を出したのか？
しかも全然関係ないやつじゃねぇか。

「おい、宝井はどこだ？」

怒りを抑えながら、しかしドスの利いた声で不良に訊ねる。

「さっき言った廃ビルだ。さっさと行ってこいや！！」

不良が声を荒らげた。
心なしか嬉しそうだ。
興奮してると言っても良いかもしれない。
ムカつく俺がボコボコにされるところを想像してるのかもしれない。

「……分かった、行く。だから布田を離せ」

正直この言葉が効くとは思っていない。

こいつらのことだから、どうせ有利な立場を利用して拒否してくるだろう。
案の定、

「はぁ？誰がテメェの言葉なんか聞くかよ？」

予想通り過ぎる言葉で、逆に呆れてしまう。
でもこの状況でため息はつけない。

「布田」

俺は出来る限りトゲを取って話し掛ける。

「ゴメン、今すぐには助けられない。多分宝井の方がピンチだと思うから今すぐそっちに行かなきゃなんないからさ。でも、絶対助けるから。お前にも宝井にも絶対怪我させないから。だからもうちょっとだけ我慢してくれ」

布田は言葉で返さなかった。
変わりに小さな頭をコクリと下げた。

それを見て俺は決心が付いた。

一度廊下を見る。
人がいっぱいで満足に走れない。
だったら出口はひとつだ。

俺は厨房がある方に向かって走る。

「な、テメ、どこに行くんだ！？」

不良の言葉は無視。

大きな仕切りようの布をどけて中に入り窓を開ける。

俺はソコから飛び降りた。

外にはまばらに人がいた。

でもそんなのは気にしない。気にしてられない。

痛みを感じずに着地をすると、携帯に電話があった。

その主は、今度は香苗だ。

なんてやつだ。

タイミングが良すぎる。

『あ、もしも――』

「香苗、真剣話」

「どうしたの？」

俺の一言で慌てず空気を変えてくれるのは、流石香苗だ。

「大至急アンを科学室に連れていけ。不良に布田が捕まった。俺はラチられた宝井助けに行く。大至急だ。でも不良に何かあったらそれがラチった方に伝わってマズい」

「分かった。ついたら連絡して」

「頼む」

最後に短く言葉を残すと俺は電話を切った。

その時、

「夏哉何してますの？」

横から、本当にタイミング良く声を掛けて来た人物がいた。

「真樹！？お前ナイス！！」

俺は真樹に近づく。

どうしてここにいる、と言う疑問は端に置いておく。

きっと主人公補正だ。

今日ほど自分が主人公でよかったと思わなかった日はない。

「は、何が、ですの？」

「話は後だ！人助けしてくれ！」

真樹の手を掴むと、半ば強引に学校の敷地内から出る。

「な、夏哉！ちょっと！簡単で良いので説明しなさい！！」

「知り合いがラチられた！お前俺の姿消せるか！？」

本当に手短に話した。

正直余裕が全然ない。

「少し集中したら出来ますが……」

「じゃあそれ俺にやれ！それと、かなり本気で飛ばすから自分の体は自分で守れ！」

「ちょっと、待ちなさい！一旦止まりなさい！集中できませんわ！」

そう言われて黙って足を止めた。

「ふぅ。ひとまずこちらに来なさい」

腕を掴まれて細い路地に連れて行かれた。

「ここなら、誰も見ないでしょう」

そうつぶやくと真樹の桜色の髪がなびき始めた。

「これで大丈夫ですわ。事情を知りたいのは山々ですが、話しかけないでくださいまし」

集中したいからだろう、話しかけられてそれを途切れらせないように釘を刺した。

「行くぞ。多分目は瞑った方がいい」

「分かりましたわ」

真樹を脇に抱えると、俺は屋根を伝い、電信柱を伝い、本気で廃ビルに向かった。

七分くらいだろうか、俺たちは廃ビルに到着した。ビルは五階ほどの高さで、周囲を見るとニタヨウナ建物がある、

「真樹、ここで待ってろ、とは言わないけど、その前に香苗に着いたって連絡してくれ。俺先に行ってる」

「分かりました」

俺は足に力を込めて中に入る。
不良はいない

おそらくとひとかたまりにに集まっているんだろう。

階段を駆けあげて上に向かう。するとひとりの不良が現れた。
時間もあまりないため、問答無用で鳩尾に、抉るように殴った。

「あ、グッ……！」

不良はそのまま気絶した。

そいつを放置して、階段をまた駆ける。

「いやあああああ！」

すぐ上で女子の、宝井の叫び声が聞こえた。

クソッ、間に合え！！

階段を駆ける、というより飛んで上へ上がる。

四階に到着。

「宝井いいいいいッ！！」

名前を呼んだ。

「ひ、柊君！？」

姿はまだ見えないが、声の方向でだいたい位置は掴めた。

ここから一番遠い奥の部屋だ。

ソコまでの廊下は一直線なので進みやすい。

一瞬でその部屋に辿り着くと、宝井を囲う二十人程度の男たちがいた。

見たところ被害はなさそうだ。

ふとここで、見覚えのある不良がいた。

真樹を襲った奴らだ。

その四人もここに混ざっていた。

より一層怒りが増していく。

でもそんなことより、

「テメェら、宝井から離れろ！！」

俺はここから一番近い不良の懐まで一気に潜り込むと、右手で腹部に拳を突き刺した。

「グキャア――！！」

不良は吹き飛び、周りを巻き込みながら倒れていく。

振りかぶった勢いで両手を床に付け、土台を固めたところで今度は右の回し蹴りで近くの不良を飛ばす。

「クソがぁぁぁぁぁッ！！」

一人が鉄パイプを振りかぶって来る。

俺の動体視力が良いせいか、隙だらけだ。

一歩前に足を踏み込むと、腰の捻りを加えた拳をそいつの顎にぶつける。

ガクッ、という音と共に倒れていく。

「後ろっ！！」

宝井の悲鳴にもにた叫び声が聞こえた。

殴った瞬間で首だけしか動かせなかった。

ゴッ！！

背中に鉄パイプがめり込まれた。
かなり痛い。

「い……ぎぃ……！」

でも全然耐えられる程度だ。

「動くな！！」

やり返そうと構えを戻したら不良の、ある種定番の言葉が聞こえた。

宝井は無理矢理立たされ、胸にナイフを当てられている。

「動いたらどうなるかわか――」

パリンっ！！

不良の言葉を遮るように、ガラスの割れる音が聞こえた。
みんなの視線がそちらに向く。
そこには真樹が入り込んできていたた。
真樹は本当にナイスだ
因みにここは四階だから、魔法を使ったんだろう。
俺でもない限り生身じゃ無理だ。

気がそれている間に宝井に近づき、その後ろ、宝井を捕まえている
不良の、まずナイフを持っている方の手首を左手で掴み、眉間めが
けて右拳を放つ。

不良は気絶。

急いで宝井の安否を確認する。

「宝井、大丈夫か？怪我とか、何かされたとかない？」

「え？あ、うん」

「よし、じゃあもうちょっとだけ待っててくれな。真樹！こっち来い！！」

俺と真樹の間にいる不良は邪魔だったので、蹴りで排除する。

もちろん宝井からは離れない。

真樹がこちらにやってきた。

宝井を守るようにして立つ。

「わりぃな真樹、なんもいわねぇで巻き込んで」

「別に、構いませんわ。取り敢えずその方が無事で何よりです」

「全くだ。俺のせいで――」

ドゴッ！！

真樹の右踵が俺の鳩尾にクリーンヒットした。

正直鉄パイプで殴られたときより痛い。

「な～つや～、自虐するなってちょっと前に言ったばかりでしょうが～！ぶん殴ります！！」

「ちょ、おま、待て待て！状況を考えろ！！いや確かに俺が悪いが今はそれどころじゃない！」

「そんなこと関係ありませんわ！！夏哉を殴らなければ気が済みませんの！」

「よーし分かった！殴られるのはいつでもいい。でも今は駄目ぇぇぇぇ！！」

「なんだ？痴話喧嘩か？」

ピクッ。

どこの誰かがそんなことを呟いた。
いや、まぁ誰かは声でだいたい分かる。

「「どこが……」」

俺たちはそちらに体を向けた。

「「痴話喧嘩だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！！」」

俺は左手で鳩尾、真樹は右手で顔面に掌底を浴びせる。

「おい真樹！喧嘩は後だ！ここにいる野郎ぶっつぶすぞ！！」

「分かってますわよ！！生きてきたことを後悔させてやりますわ！

！」

それから俺たちは無双だった。

「なッ！？このカップルつえぇ――」

「「誰がカップルだぁぁぁぁぁぁぁぁッ！！」」

ゴッ！！

「カップルじゃない！？じゃあ夫婦――」

「「死にさらせぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇッ！！」」

バキッ！！

「この！リア充爆死し――」

「「テメェ（アンタ）が爆死しろぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉッ！！」」

ゴキュ！！

「はぁ、はぁ、はぁ、」

真樹が肩で呼吸している。

目の前には不良の残骸。

俺たちは、疲労はしてるが怪我はそこまでない。
二発程度殴られただけだし。

「真樹、大丈夫か？ほれ」

肩を貸してやる。

「た、助かりますわ……」

首を後ろに向ける。

「宝井は平気か？」

「……」

反応がない。

もしかしたら放心してるのかもしれない。

「あー、真樹？」

「分かってますわよ」

真樹は俺の肩から手をどけた。

宝井の前でしゃがみ込み、視線を合わせる。

「宝井、大丈夫か？」

トントンと肩を叩いて覚醒を促す。

「え、あ……柊、君？」

「おう。ゴメンな、怖い思いさせちゃって。もう大丈夫だから」

「あ、えっと……」

まだ完全には理解把握出来ていないみたいだ。

「取り敢えず学校に帰ろうぜ。まだ文化祭やってるし、ダンスだってあるし」

「あ、うん……。ねぇ、柊君」

「ん？」

「その、怒らないで聞いてほしいんだけど」

何かいいにくそうなことを言いたいのか、時々視線を逸らしている。

「二人さ、本当に付き合ってないの？」

「「もちろん」」

真樹と声が合わさった。

「いやおかしいよ！だって二人とも、ここに来てから半分以上は声揃えてたよ！？凄いシンクロ率だよ！！逆に付き合ってないって方がおかしいよ！二人とももしかして鈍か――」

ダン！！

堪えきれなくなったのだろう、真樹が地面に足を叩きつけた。

「宝井さん、でしたわね。それ以上妄言を吐くとわたくし、我慢の限界に達してしまいますわ。夏哉と付き合う？天地がひっくり帰ってもあり得ませんわ」

「いいよ！そんなの関係なく言うよ！午前中だって普通に二人の世界入ってたし、今日のダンスペアなんでしょ！？絶対付き合った方がいいって！！てかもう周りは付き合ってるとか思われてるよ！？」

は？

ちょっと待て。

「た、宝井さん？それはどういう意味なのでしょうか？」

「だって、今日のあの事があったし、昨日だって二人きりで下校してたんだよね？」

「「ちょっと待ちなさい」」

なんで？

どうして宝井がそれを知ってる？

別に隠してたわけじゃないけどさ。

「真樹どうぞ」

「どうして貴方がそれ知ってますの？」

「普通に他の生徒がそれ見かけて、その子噂好きだからどんどん広まっていったよ。一年で知らない人の方が少ないんじゃないかな？」

「なんだよそれ……！」

俺は頭を抱えた。

なんで真樹なんだよ？

いや、別に真樹が嫌いってわけじゃないし、もし告白されても嬉しくはなる。

でもこいつは過去にいろいろあったからそういうのは無理なはずだ。

俺が鈍感、てわけじゃない。

そりゃ他人の気持ちなんて百パー分かる訳じゃないが、それでも真樹は恋人より親友を望んでいる。

恋人にはならない。

「夏哉、どうしましょうか？まずそんなほらを吹く人は殺るとして、その噂を信じた人に片っ端から殴って聞かせた方がいいかもしれませんわね。というわけで宝井さん、殴られてください」

「へ？あ、え？」

一歩真樹が宝井に近づく。

「ちょ、真樹ぃ！それはいくらなんでも物騒すぎ――お前目がマジじゃねぇかよ！？宝井、逃げるぞ！！」

手首を握って走りだす。

「待ちなさいッ！！」

後ろから真樹が追ってくる。

あれ、なんかこれ真樹が俺らに嫉妬する構図に見えなくない？

第七話　《十五章》喧嘩（後書き）

沙鳥「作者おそぉい！！６／１６に投稿するって言ったじゃん！！６／１７じゃん今！！」

作者「ホント申し訳ない。これは俺が普通に悪かった。しかも内容も急展開すぎた気がする」

夏哉「分かってんなら直せよ」

作「そんな時間はない！ということで今回はちょこっと名前の出たアンちゃんを」

＞ｉ２５５６３―３２９１＜

夏「な、なんかオーラが出てる……」

沙「作者何これ？」

作「暇だったから付け足してみた」

夏「小説書けよ」

作「すいませんでした」

沙「ねぇなんかさ、第七話ちょくちょくシリアスがあるよね。ギャグをコンセプトにしたんでしょ？」

作「いや、ホントにね。俺もこれはビックリだった。だから最後ギャグペーストを入れてみたんだけど、なんという微妙な話……」

夏「なぁ、俺が言うのもなんだけど、真樹って沙鳥よりメインヒロイン者ね？」

沙「あぁ！夏哉それ言わないでよ！私も気にしてたのに！！」

作「わりぃな。さすがに沙鳥と香苗の話は考えないと」

沙「絶対だからね！」

作「了解。さて夏哉、いつものあれを」

夏「はいよ。ｋｉｉｔｉさん、クロスライトさん、感想ありがとうございました」

沙「クロスライトさんはアンケートと名前、コラボ全部答えてくれたからね。うれしい限りです」

夏「ｋｉｉｔｉさんもコラボの追加設定ありがとうございます」

作「ではでは皆さんまた明後日」

沙「そうなの？」

作「知らないけど」

夏「おい」

第七話　《十六章》ダンス

～～～～♪～～～♪～～～～～♪

私の隣にいる沙鳥のポケットから携帯が鳴り始めた。

「おりょ、電話だ。アンちゃんたちちょい待っててね～」

携帯を取りだして耳に当てた。

「もっし～、香君どうしたの？……へ？何？……了解」

香苗からの電話だろう。

何かに了承すると、顔をこちらに向けた。

先ほどまでの陽気な表情から一転、真剣身を帯びている。

「アンちゃん、カナから電話。かなりマジっぽい話」

香苗のことを？香君？ではなく？カナ？と呼ぶところからも、沙鳥が真剣なんだと分かる。

だがしかし、

「沙鳥、私に携帯は使えないから通訳してくれ」

「あ、そっか。ごめん。でも取り敢えず耳に当てといて。私が言うから」

沙鳥から携帯を手渡され、それを耳に当てる。

「カナ、アンちゃんの声そっちに届かないから私が代わりに言うね」

『あ、そっか。それすっかり忘れてた。ゴメンね沙鳥ちゃん』

「謝ってる暇があるのか？急ぎの用なんだろ？」

「謝ってる暇あるの？急ぎの用なんでしょ？」

『うん。取り敢えず私たちのクラスがやってる科学室に向かって』

「分かった。で、何があった？」

「了解。で、どうしたの？」

『私も夏哉君から聞いただけで詳しくは分からないんだけど、教室で不良がクラスの子を人質にして、しかも拉致したみたいなの。夏哉君は拉致された方に向かったから教室のいる方に向かえって』

性根の腐った奴とはどこにでもいるものだな。

夏哉たちとはえらい違いだ。

同等の人種とは思えない。

「分かった。かなり近くにいるからすぐ行く」

「近くにいるからすぐ行けるよ」

『あ、駄目！すぐには行かないで！こっちで騒ぎが起きたら別の場所で捕まってる方に連絡が行っちゃうから！』

「チッ、ホントに腐ってるな。じゃあどうする？」

「じゃあどうするの？」

『向こうに着いたら夏哉君が連絡してくれるって。そしたら不良をボッコボコにして』

「分かった。全く、この文化祭もその不良のせいで台無しだな」

「了解。もう、不良のせいで文化祭が台無しだよ」

『ホントだよね。じゃあアンさん教室の前で待機しててね』

「分かった」

「了解」

沙鳥に携帯を返す。

私は後ろを振り返り、元従者に声を掛ける。

「悪いなネハラ、ラスク。折角の地球の遊びだというのに害虫駆除が入ってしまって」

「気にしないでくださいお嬢。アタシは十分に楽しめましたので」

「そうですよ。それにサトリ、この後もまだイベントがあるのよね？」

「うん。皆でダンスやるよ」

「その邪魔をさせては後味が悪いではありませんか」

ネハラの言葉に、私はきょとんとした表情を浮かべてしまった。

「どうしたの、アンちゃん？あ、ラスクさんも」

沙鳥の言葉から察してラスクもキョトンとしているんだろう。

ボーってしているのもしょうがない。

「あ、いや、ネハラ丸くなったな～と」

「え、丸く、ですか？この体はどちらかというと細長いに分類されるのではないでしょうか？」

体のあちこちを見ながら、ネハラは自分の考えを言った。

「そうじゃなくて、アンお嬢は性格のことを言っているんだと思うんだが」

「性格？」

「あぁ。少し前のお前ならアンお嬢以外のことは見向きもしなかったのに、今は見ず知らずの大勢のために行動しているだろ？」

「やはり夏哉か。夏哉の影響力はホント凄いな」

「お、お姉様？どうしてそこでナツヤの名前が出てくるんですか？」

「だってアイツと一緒にいるようになってから丸くなったわけだし」

「ネハラさん、気にしなくていいと思うよ。夏哉だし」

普通に聞けばその理屈に疑問を投げかけるのだが、夏哉を知る者ならそれで理解できてしまう。

なんせ主人公でフラグメーカーだし。

「なんというか、納得したくない理由よ、それは」

「したくないということは、納得しているということだな？」

「まぁ、そうなるけど……」

ラスクの問いに渋々と言った風に答える。

「よし、そろそろ気を引き締めるぞ。ラスク、ネハラ、向こうは人質がいるから油断はするなよ」

「「はい」」

「沙鳥は手を出すなよ？お前が動くと周りが騒がしくなるだろうし」

「うん、分かってるよ」

少し歩けば、たくさんの人が集まっている場所があった。

そこは私たちの目的地である教室。

中には恐らく不良と、人質となっている生徒がいるんだろう。

私ははやる気持ちを抑えながら香苗からの連絡を待つ。

―――――――――――

柊君が厨房の方に行ってから全く出てこなかった。

「おい、宮！そっちに行って確認しろ！！」

私を捕らえてる不良が、宮と呼ぶ相方に指示を送った。

宮さんは小走りで向かい、厨房の中を覗いた。

「知治さん！柊の野郎いません！変わりに窓が開いてます」

「窓？」

訝しげな声を出す知治さん。

こんなところで宮さんが嘘をつく必要はないから、本当なんだろう。

じゃあ柊君は窓から飛び降りて宮江ちゃんを助けに行った？

普通だったらそんな危ない真似をしたら、それ相応に慌てふためいていただろう。

でも私は普通じゃない。

魔法というものが使える。

きっと柊君なら大丈夫だろう。

それよりも私は、柊君が助けに来てくれるまで頑張って耐えないと。

「な、なぁ、柊もしかして、飛び降りたんじゃ……」

帰ってきた宮さんが声を震わしていた。

このまま二人が言い争いになって時間をかせげたら最高だ。

「安心しろ。下で騒ぎが起きてないんだ、多分あれでも使ったんだろう」

でも知治さんは意外と冷静に対応していて、喧嘩とかにはならなかった。

「そ、そうか、そうだよな。で、その女どうする？」

宮さんは私を見て言った。

「もちろん犯る、が。こうも人前だとな」

最初の言葉でゾッと背筋が凍る。

私は本当にこの人たちに犯されてしまうのだろうか。

そんなのは絶対嫌だ。

凄く逃げ出したいけど、ここで逃げ出したら宮江ちゃんが大変なことになっちゃう。

それに……

『ゴメン、今すぐには助けられない。多分宝井の方がピンチだと思うから今すぐそっちに行かなきゃなんないからさ。でも、絶対助けるから。お前にも宝井にも絶対怪我させないから。だからもうちょっとだけ我慢してくれ』

柊君のその言葉は、どこか安心出来た。
信じられるような言葉だった。

だから私はギリギリまで我慢してみる。

幸いにも今すぐ犯られるというのはないらしい。

「いやお前人前って、結構ビビりだな」

「うっせぇ。ここで犯ったら向こうもなりふり構わずやってくんだろ?今のうちにずらかるぞ」

これは、マズい気がする。

柊君は私がずっと教室にいると思っているだろう。
仮に誰かに助けを求めてくれるなら、教室に行けっていうだろう。

なんか目印的な物を残したいけど、生憎パンを持っていない。

「ずらかんの?どうする?女まだ連れてく?」

宮さんの言葉に、真ん中に集まっている女の子たちがビクッと反応する。
普通に怖いのだろう。
私だって凄い怖い。

「アホか。人数連れて行ったら捕まりやすくなんだろうが。一人で十分だ」

「でもよ～、こいつ乳全然ねーぜ。つまんねぇっつーの」

宮さんは私の胸に手を伸ばしてきた。

「い、いやっ！！」

身をよじらせてそれを回避しようとするが、両腕を掴まれてそれは叶わない。

宮さんのゴツゴツした手が私の胸を揉む。

気持ち悪かった。

すぐにでも逃げたい。

その手は、後ろから伸びた手によって捕まり、私の胸から離れた。

「やめろ。自暴自棄になって暴れだされたら困る」

知治さんだった。

二人は軽く睨み合う。

「それに貧乳でも楽しもうと思えばいくらでも楽しめる」

「あ～ハイハイ、貧乳属性乙」

「黙れおっぱい星人」

「おっぱい星人のどこが悪い！？でけぇ胸に興奮すんのは男の摂理だろうが！！」

「これだから本能でしか動けない奴は。あんなのただの脂肪の塊だと何故分からない？そんなに胸揉みたかったらデブな女と付き合って全身揉め」

「そうじゃねぇだろ！胸の脂肪は周りの脂肪とは全然ちげえだろうが！あの丸みを帯びたフォルムがいいんじゃねえか！！運動するときに人一倍揺れるのがいいんじゃねぇか！！貧乳にはその揺れがねぇッ！！」

……え、と。

確かに喧嘩して時間を稼げたらいいな～、とは思ったけど、その内容が、胸？

他の人は物凄く引いている。

男の人っていつもこんなこと考えているのだろうか。

まぁ何はともあれ、時間は少しずつ稼げているのだ、もう少し辛抱しよう。

そう思ったとき、

バンッ！！と勢いよく扉が開いた。

綺麗な人が立っていた。

ウェーブのかかった金髪で、凛とした顔つき。
青を基調としたキャミを着ていて、ジーンズを穿いている。
その人は視線を私に向けて口を動かす。
「そこの、布田とか言ったか？」
初対面なはずなのに、名前を呼ばれた。
「え、あ、はい……」
「少しだけ待っていろ。一瞬で片を付けてやる」
堂々とした態度で、ゆっくりと私の方へ歩いてくる。
もしかして、私を助けてくれるのだろうか。
安堵が心の中を支配した。
しかしそれも一瞬のこと。
頭の中には宮江ちゃんの顔が浮かんだ。
「だ、駄目です！！ここで騒ぎがあったら宮江ちゃんが――」
「安心しろ」
金髪の女の人は立ち止まり、私の忠告に被せて優しく言った。
「向こうには夏哉が行った。何があっても向こうは平気だ。あっちは助かる」

この人は柊君のことをとても信用しているのだろう。
それが言葉の端から伝わってくる。
だからああやって？助かる？と断言出来るんだ。

「今度はお前の番だ、布田。夏哉じゃなくて悪いが、必ず救ってやる。ちなみに、怪我なんかされたか？」

「あ、いえ……」

「よかったな、性根の腐った男共。今なら半殺しで手を打ってやる」

その言葉を聞いて、知治さんは乾いた笑みを浮かべた。

「はは、半殺し、だと？じゃあやって見ろよ！！俺たちは二人で、しかも人質がいる！！女一人が何出来んだよ！？」

叫ぶと、女の人の肩が震えだした。
やっぱり叫ばれて怖いのだろうか。

「へへ、こいつビビってるよ。知治、こいつ俺にくれ。良い乳してる」

「好きにし――」

「あはははははははっ！」

突然女の人が笑い出した。

ど、どうしたんだろう、とちょっと心配になる。

「なんだ？」

「さあ？」

二人も訝しげに思っている。

「この状況でいい加減にしろアホ！さっさとやれ！！」

「「了解しました」」

え、後ろから、声？

振り返ると、さっきの女の人に似た人と、薄い緑色の髪をした、大人のお姉さんの雰囲気を纏わせている人がいた。

今までこんな人はいなかった筈だ。

二人はそれぞれ不良を殴り、私は薄緑色の髪の人に肩を抱かれた。

「大丈夫か？」

「あ、はい……」

「じゃあアンタたち、もうちょっとここで待ってなさい。大勢で動けば混乱するし、廊下にも人がいっぱいいるから」

さっきの女の人に似た人が周りに指示を出した。

こういうこと慣れてる人なのかな？

「さて、暴力が嫌いな人は目を閉じ、耳を塞いでくれ。今からお仕

置きが始まるからな」

女の人の凶悪な笑みを見て、ほとんどの人が目と耳を塞いだとのこと。

―――――――――――

俺たちは電車で麦谷高に戻った。

流石に帰りまで俺が運ぶというのは、宝井に変な目で見られてしまうので避けた。

電車の中で、いっぱい謝罪しようと思いましたよ、えぇ。

でも最近の女子は何とも心が広いのか、謝らなくていいという言葉をいただいた。

しかも柊君のせいじゃないとも言ってきた。

ほんと心広すぎだ。

学校に戻り、早速布田の元に向かって謝罪した。

布田も宝井と同じ反応だった。

その場にはアンもいて、『なんでまた自虐するんだ馬鹿者!!』と言って殴られた。

その後香苗にも謝り、その場にいつものメンバーが揃ってしまい、香苗と二人きりになるという感じじゃなくなったので、残り一時間ほど皆で回った。

そして午後六時。

来場客はいなくなり、グラウンドには全校生徒が揃っていた。
俺の隣には真樹がいる。
『じゃあ皆さん！早速音楽を流しましょう！え？ダンス練習もレクチャーもしてないのに出来るわけねーよ？アドリブで頑張ってね～！決まりなんてないんだから！！』
女教師がスピーカー片手にそんなこと言った。
凄い軽いな。
「真樹踊れる？」
「なんとかなるでしょう」
「ではお嬢様、わたくしめにダンスの指導でもよろしくお願いします」
「よろしくてよ」
恭しく言ってみたが、真樹もノリノリのようだ。
『よ～し！じゃあミュージックスタート！！』
そう言って流れた曲は、
『サンバッッッ！？！？！？』
全校生徒のツッコミが炸裂した。

何故ここでサンバの時のような曲が流れるのだろうか？
いや確かに踊る局ではあるが、もっとゆったりな曲を想像していたのに。

『ほらほら～、もう曲は始まってるよ～！！』

問答無用らしい。

「真樹、どうしましょうか？」

「どう、と言われましても……サンバは無理ですわよ？」

「ですよね～。普通にゆったり踊っちゃう？」

「違和感はありまくりでしょうが、そうしましょう」

俺たちは手を取り合った。

「そういや真樹、今日はゴメンな」

「いきなりなんですの？」

「いや、なんやかんやで不良に絡ませちゃっただろ？午後のは完全巻き込まれだったし」

はぁ、と短いため息をつかれた。

「アンさんがいなくてよかったですわね。殴られてたところですわよ」

「いないの分かってて言ったんだ」

アンは、流石に幻術掛けてラスクたちに魔力纏わせて軽いながらも喧嘩して疲れてしまったため寮でおやすみだ。

「別に構いませんわ。というか、巻き込んだことの謝罪よりわたくしたちの恋人関係の噂をどうにかしてほしいですわ」

「あぁ、あれね。ホントどうしよっか?噂とかってなかなか消えねぇよな」

「恐らくですが、わたくしたちが他の人と付き合ったら、二股とか言われて騒がれるんでしょうね」

「かもな。じゃあ喧嘩とかするか?それとも俺がなんかやらかして真樹が俺を振るとか」

「付き合ってもないのに振ると言うのは、人生でもそうそうないでしょうね」

「まぁな。でもそれがだとウッ!?」

「あ」

突然右足の甲に痛みを感じた。

恐る恐る下を見てみる。

真樹の足が俺の足を踏んでいた。

「……真樹さん、これは俺がいけないのでしょうか？あからさまに真樹さんの足が前に出過ぎてるような気がするのですが」

「やはりうまく行きませんでしたか。お嬢様補正が掛かってなんとか出来ると思っていたのですが」

「なんだよその補正？何？お前踊れないの？」

「元引きこもりが他人と踊ったりすると思いますか？」

あ、そういえばそうだった。

「わりぃ、お嬢様＝ダンスは嗜んでるって思ってた」

「全く、そんな偏見を。で、どうします？下手同士踊りますか？」

「踊りましょうよ。折角の学園祭ですから」

その後もしっかり踊った。
そして何度も真樹に足を踏まれた。
俺も何度も真樹の足を踏んだ。

まぁ痛かったけど、

「夏哉、ありがとう」

「急に何さ？」

「多分夏哉がいなかったら、ずっと沙鳥を利用してるって思い込ん

で楽しめなかったと思う。今更かもしれないけど、わたしを助けてくれてありがとう、主人公。貴方のおかげでわたしは今凄い楽しいよ」

真樹の笑顔が見れたから足の痛みなんて気にならないほど嬉しかった。

第七話　《十六章》ダンス（後書き）

作者「いや～、遅れた遅れた。皆さん投稿遅れてすんません」

アン「何があったんだ？昨日は一日暇だったんだろ？どの小説も投稿しないで」

「いやね、一昨日友達から『あの日見た花の名前を僕達はまだ知らない。』と言う作品を進められて、深夜一時、つまり昨日から十話まで一気に見てたんだよ。で、見終わったのが四時」

真樹「つまり徹夜して見たわけですわね」

作「一応四時半頃に寝たんだけど、六時半に起きてしまい、その後目を覚ますために絵を描いたり、ちょくちょく小説書いたりしてたら友達とメールのやりとりしてて、まぁ夜にやれば間に合うだろうと思ったら……」

ア「強烈な眠気に襲われたと」

作「そう言うことです……」

真「全く、しっかりしてくださいまし。まさか次の話を書いてないということはありませんわよね？明日すぐに更新しなきゃいけませんのに」

作「……」

ア「ちょ、お前！流石にそれはマズいだろ！！明日だぞ！？明日は

絶対更新しなきゃマズいんだぞ！？」

作「分かってる分かってる分かってる！明日は何があっても更新するって！！だからその代わり雑談の内容を短くさせてください！！」

真「しょうがないですわね。明日はとにかく間に合わせなければなりませんので、そうしましょう」

ア「ちなみに私たちが明日にこだわっている理由、この小説を読み込んでくれている人なら気づくかもしれないが、分からない人は更新までお楽しみということで頼む」

作「よし、じゃあ後書き終わる前にこれ！」

真「チョコケーキとコーヒーですわね」

作「クロスライトさんの小説の主人公、羽鳥飛鳥君からもらいました」

ア「おぉ、うまいうまい。飛鳥、ありがとうな」

真「本当においしいですわね」

作「ほらほら、食ってるのも良いけど締めの言葉を」

真「そうですわね。空お姉ちゃん、クロスライトさん、ソラトさん、感想ありがとうございました」

ア「取り敢えず次回がエピローグになるから、それが更新された時点でアンケートの方は終了だ。送りたい人は今のうちだぞ」

真「というわけで、ここで終わります次回もよろしくお願いしますわ」

第七話　《エピローグ》ありがとう

「んじゃあね～」

時刻は夜八時半ほど。

寮の前で私は夏哉たちと別れた。

少し上から差し込む街灯が、私を照らす。

手を組んで背筋を伸ばす。

「ん～、今日は楽しかった～」

中学の時に比べて全然楽しかった。

香君とアンちゃんとラスクさん、ネハラさんに空ねぇと一緒に回ったり、皆でお店回したり。

夜には快斗君とダンスもした――

「あれ？」

ちょっと待って。

私……

夏哉と思い出らしい思い出作ってなくね？

思い出せ。
昨日は私ずっと店番やってて、午後は夏哉と一緒だったけどそこまで関われなくて。
今日は夏哉をぶん殴って皆と一時間ほど回って……それだけ！？

「はぁ～」

学園祭なのに好きな人とちょっとしか遊べないって。
神様、貴方は私を不幸にさせたいんですか？
明日はあの日というのに、プレゼントをくれないんですか？

私はいもしない神様に愚痴を頭の中で並べ――いや、そういえば神様はいるのか。

アンちゃんたちを思い出しながら家に帰った。

「ただいま～」

「お帰り～」

リビングでお母さんの声が聞こえた。

ちょっと糖分を接種したくなったので、冷蔵庫に入っているであろうリンゴジュースを取りにキッチンに向かう。
因みにキッチンにはリビングを介してじゃないと行けない。

お母さんはバラエティー番組を見ていた。

「もしかしてご飯食べちゃった？」

いつもだったらこの時間帯は夕食の準備をしているはずだ。

「ううん、今日は暇だったから早めにしただけ。今日文化祭でしょ？いっぱい動いてお腹空いてるかと思って」

さすが母親、私のお腹を見抜いてるとは。

「そっか。うん、お腹ちょっと空き気味。ねぇ、リンゴジュースもらっていい？」

「いい――あ、待って。冷蔵庫に入ってないから」

「あれ、なかったっけ？」

「冷蔵庫いっぱいだったからさ。そこにクーラーボックスない？」

キッチンへと顔を覗かせる。

「あるある。飲んでいい？」

「手、洗ってからね」

「は～い」

水道の蛇口を捻る。

ゴシゴシ、ゴシゴシ。

すぐ側にあるタオルに手を伸ばす。

フキフキ、フキフキ。

食器棚からコップを、クーラーボックスからリンゴジュースを取り出す。

コポコポ、コポコポ。

「文化祭どうだった?」

お母さんが訊ねる。

「楽しかったよ」

リンゴジュースを口に含む。

あ〜、甘い。

「夏哉君とキスした?」

「ブフッ!?」

あまりに変なことを言ったためつい吹き出してしまった。

「もう沙鳥、何やってんの?ほら早く拭いちゃって」

「ご、ゴメン」

取り敢えず一気に残りのリンゴジュースを飲み干し、私はタオルを手に、まず床を拭く。

「おね～ちゃ～ん、帰って来たの？」

タイミング良く結がリビングに入ってきた。

「ゆうぞうパス」

私は、最初お母さんにもやらせようと思って持ってた二枚目のタオルを放った。

「うわっ？何したの？」

「沙鳥がリンゴジュース吹き出したのよ」

「いや、お母さんが変な質問、てかなんで夏哉の名前が出てくんの！？」

私は両親には夏哉、というか友達の名前は出していない。

「どんな質問したの？」

結は健気にも本当に私を手伝うために屈んで床を拭く。

「変な質問はしてないって。文化祭どうだった、って聞いて、その後夏哉君とキスしたか聞いただけ――」

「そこがおかしい！私夏哉の名前今までお母さんに出してないよ！」

「あ、私が全部話したよ」
「お前かー！！」
左手で頭を叩く。
「痛い……」
「なぁに勝手に喋ってくれちゃってるのさ？」
「いや、隠す必要はないかなと思い」
「そーよ。しかももしかしたら息子になるかもな人なんでしょ？名前くらい良いじゃない」
「ちょ、そこ！気ぃ早いって！」
バサッとお母さん向けてタオルを振るう。
離れてるから当然届かないけど。
「ほらほら、早く拭きなさい。シミになっちゃうでしょ」
まぁそれは言われた通りなので床拭きを再開する。
「で、どうなの？キスした？」
「……デートすらしてない」
「あら～。じゃあ他の女の子と一緒だったんだ。さすがフラグメーカーね。青春してるな～」

因みにお母さんもお父さんも、その手の話は全然バッチシ。
マンガなんか娘たちから借りて普通に読んでるような両親だ。
と、そんなお母さんとは対照的に、結はちょっと不安そうな風に聞いてきた。

「ねぇお姉ちゃん。お姉ちゃんのクラス不良に絡まれたって聞いたけど、大丈夫だった？」

確か結も学園祭に来てた筈だ。
その時噂で聞いたのだろう。

「え、不良？沙鳥怪我しなかった？」

お母さんも一気に空気を代えて安否の確認をしてくる。

「私は平気。ちょーっと他の人が大変な目にあったけど、全部夏哉がなんとかしてくれたよ」

「……夏哉さんって、実はどっかの組織で鍛えられてきてるの？」

結がかなり真面目に聞いてきた。

「まぁ、ちょっと凄いけど、普通の人だって。一般ピープルよ。主人公って肩書きはつくけど」

「ほんと夏哉君凄いわね～。もしかしてそれでまたフラグ立っちゃった？」

「ん～……それ関係なしに、学園祭中に四人くらい、かな」

「四に、はぁ～ホント凄いわね～」

夏哉の行動に驚き呆れているお母さん。

「あ、そうだ。お姉ちゃん、その夏哉さんのメアド教えてほしいんだけど」

「ん？なんで？」

「友達が迷子になっちゃって、夏哉さんが見つけてくれたの。その子恥ずかしがり屋で、その時お礼言えなかったらどうしようかって悩んでて」

「お母様、五人目です」

「それでフラグ立ったことになるの？」

「貴女、夏哉の主人公力舐めちゃいかんよ。取り敢えず初対面だと特になんも感じないけど、次に会えば何かしらイベントが起きて、女の子なんてイチコロにしちゃうんだから」

「え、それって人妻も可なのかしら？」

右手を頬に当てて悩む母親。

「いや、まだ年上は攻略されてないけど、否定は出来ないからマジでやめてね。そのせいで離婚とかやだから」

「冗談だってば。流石にそりゃないって」

「ただいま～」

我が家の大黒柱様で、唯一の男性が帰ってきた。

その後皆で晩御飯を食べ、お風呂で体を洗った。

それが終わると仲良しこよしの結と今日の学園祭の話をして、終わったのが十時半。

それからずっとゲームしたり携帯小説を読んだりノートパソコン付けたりと暇を潰していた。

そしてベッドでごろごろ携帯の待ち受けを開いていると、時刻は十一時五十九分、五十六秒。

五。

四。

三。

二。

一。

零。

今この時をもって六月は二十一日となり、私は十六回目の誕生日を迎えた。

「ハッピーバースデー、私」

私は自分にお祝いの言葉を送った。

これは毎年――といっても中二の頃からだけど――の週間になっていた。

特に意味なかったけど、なんとなく自分の誕生日は自分が一番に祝いたかったから。

すると携帯の上らへんにメールが送られてきているマークが浮かんだ。

このタイミング、恐らく夏哉たちの誰かだろう。

それを想像すると嬉しくて鼻がつーんとする。

メールが来たことを知らせるためのアラームがなると、私は目を疑った。

メールは四通来ていた。

急いで受信ボックスを開く。

中には当然の如く四つの未開封のメール。

そこに四つの名前。

『早乙女真樹』
『空揺火津那』
『花街香苗』
『柊夏哉』

私を特別視しない四人の名前があった。
皆私の親友。

自然と涙が流れていた。

私は改めて幸せを感じた。

私は友達に恵まれている。

こんな友達を恵んでくれた夏哉に、心から感謝する。

ありがとう。

私にカナ(こいのライバル)を恵んでくれて。

ありがとう。

私に真樹(したってくれるひと)を恵んでくれて。

ありがとう。

私に空お姉ちゃん(しゅみのりかいしゃ)を恵んでくれて。

ありがとう。

私にアンちゃん(みんなとくべつにしてくれたひと)を恵んでくれて。

ありがとう。

私に夏哉(だいすきなひと)を恵んでくれて。

私は皆にそれぞれメールを返した。
夏哉のメールにはアンちゃんとラスクさん、ネハラさんの簡潔な言葉も書かれていた。

神様、さっきはごめんなさい。
私にすてきなプレゼントを送ってくれてありがとうございます。

多分私は、今までの人生で最高に幸せを噛み締めながら、眠りについた。

時刻は七時二分。
今日は学園祭の代休日。
自分の誕生日が休日というのは、なんか特別な気がして、もしかしたら夏哉たちがドッキリを仕掛けようと押し掛けてくるんじゃないか、とか妄想をしながら、深夜に更新されたかもしれない携帯小説のチェックをしていた。

休日とはいえ、いつも六時半ほどに目が覚めてしまうため、いつもより長く寝ちゃうということはない。

「沙鳥〜、朝ご飯食べる〜？」

一階(した)からお母さんの声が聞こえた。

「食べる〜！」

「じゃあ結起こしてくれない？」

「は〜い！」

私と違って結は朝は弱い。

週六で私が起こしにいく。

「あ〜、おね〜ちゃ〜ん？起きてるよぉ〜」

とても眠そうな声が隣から聞こえた。

珍しいと思いつつ、まだ布団から出ていないと予想を立てながら部屋を出て、隣の結の部屋の前に立つ。

「結あけるよ〜」

「う〜ん」

許可をもらったので中に入る。

案の定結は布団の中だった。

「ほら結、今日学校でしょ？起きないと」

結に覆い被さっている布団を剥ぐ。

ピンク色の可愛らしいパジャマ姿の我が妹がいた。

「あうぅぅぅ〜、温もりが〜……」

「甘えた声出してないで。ほらほら」

結に手を差し出してあげる。

結はそれを握り、私の手を使って上半身を起きあがらせた。

「おはよ」

「ん……、おはよ……」

目を擦りながら挨拶を返してくれた。

この可愛さ。

さすがは妹。

多分私が男で、兄妹じゃなかったら襲っていただろう。

「お姉ちゃん」

「なぁに？」

「誕生日おめでと」

妹にはもう何回も誕生日コメントをもらっている。

だがしかし、それに慣れるということはなく、幸せと嬉しさがにじみ出てくる。

「ありがと。ほら、朝御飯食べるよ」

「うん……あ、ちょっと着替えちゃうから先行ってて」

「着替えながら寝ちゃうっていうのはなしね」

「だ～いじょ～ぶ。じゃ、また後でね」

「は～い」

私は結の部屋を出る。

階段を下りながら、そういえばなんで着替えるなんて言い出したんだろうと疑問に思った。

いつもならパジャマのまま食べていたはずなのに。

まぁ私が考えても分からないことだからすぐに考えるのをやめた。

一階に到着、リビングのドアを開いた。

パァン！！

パァンパァンパァン！！

「うわあああっ！？！？！？」

突然破裂音のような物が聞こえたため、驚いて尻餅を付く。

「「「「「「「天雲沙鳥、誕生日おめでとう！！」」」」」」」

声が聞こえ、顔をあげると、目の前には見知った七人の顔が。

「え、えぇっ！？」

私には驚くことしか出来なかった。

2000

後書きという名の雑談？

作者「第七話、これにて終了です！！」

沙鳥「ちょ、ねぇ！え、あの終わり何？ここで終了なの！？」

作「もちろん続きはちゃんと八話であるぞ」

夏哉「あれで次完全別の話ってなったら、誹謗中傷をしてくださいって言ってるようなもんだしな」

作「あ、因みに知っている人もいるかもですが、次回は番外編をやります」

香苗「それってコラボのことだよね？」

真樹「そうでしょうね」

作「ほかにもいろいろやるぞ」

アン「どういうのをやるんだ？」

作「取り敢えずラブコメにありそうな展開は考えてる」

夏「嫌な予感しかしねぇ」

作「そりゃどうかな。あ、話戻すけど、今回の第七話。どうしてギャグオンリーで書こうとしていたのに所々シリアスが入ってきたん

てしょう？」

沙「私たちが知るわけないね」

香「そうだね」

夏「取り敢えずお礼言った方がよくね？」

ア「それもそうだな。ではこの第七話で感想をくれた、空ねぇ、ソラトさん、ファルコさん、Ｃｏｌｌｔｙさん、紅き月の魔王さん、ｋｉｉｔｉさん、マリィ愛してるぅぅぅ！！さん、クロスライトさん、感想ありがとうございました」

真「これだけ多くの人から感想がいただけるというのは嬉しい限りです」

作「それと後アンケートの結果でも報告しようと思います」

夏「まぁきてくれたからな」

作「まず好きなシーンから」

第一話特別な四人＋戦闘シーン（プロローグ）

第二話　《プロローグ》私と私と貴方の出会い

第三話　戦闘シーン

第五話　《エピローグ》お泊まり

六話　《三章》転校生

香苗だけ理解出来ず、「泣いちゃうよ」って発言に全員が「是非お願いします」

第六話　《九章》デート
　デートシーン
第六話　《十四話》許せない行動　説教シーン

第六話　《十五章》話し合い　アンが見守る恐怖を感じたシーン

作「となりました！」

ア「なんかまんべんなくあるな」

香「そうだね。プロローグとかエピローグなんか多いね」

作「さて次！好きな台詞です！」

第一話　《エピローグ》特別な四人

アン「今はまだ答えは出さなくていい。答えを　出すには私たちはお互いを知らなさすぎ　る。だから出来ればこれから先、お互いのことを知ったら答えが欲しい　」

第二話　《十章》抑えきれない気持ち

夏哉「俺にとっちゃお前と香苗は、特別で大切な存在なんだよ。そんなやつが屋上から飛び降りたら、大丈夫だって言われても、すっげぇ不安になるに決まってんだろ?どうしようもなくなるんだよ。頼むから、だから今度は、俺の前で、香苗の前で、みんなの前で絶対やるな！！」

第三話　《十九章》怒り

真樹「沙鳥はわたしの大切な友達だ！！あんたみたいなクズ野郎のものじゃないっ！！」

六話　《十一章》人の幸せ

夏哉「魔界にいるべき？腐った居場所ではない？そんなのテメェラが決めんじゃねぇ。それはあいつが決めることだ。名前だってそうだ。あいつは昔（クーレラ）じゃなくて今（アン）って呼んでほしいって決めたんだ。だから俺はあいつの決めたことに従う。確かにお前らからしたら俺はあいつを奪った最低な男って思われても仕方がない立場なのかもしれない。でも。俺が傷付いたり、死んだりしたらあいつは絶対悲しむ。俺はそんなとこなんて見たくないし、見させたくもない。だから！お前らの要求には答えられない！あいつは俺を頼った！！俺はあいつを守るって決めた！！もしお前らがそれでもアンを強制的に魔界に帰そうと思ってるなら……意地でも止めてやる！」

作「となりました。因みに第一話のアンの台詞、何故か二票入っていました」

真「理由は大人っぽいからとのことですわ」

作「なお、このアンケートなのですが、超速攻で書き上げたので、もしかしたら抜けてる物があるかもしれません。僕が私が書いたのがないじゃんと言うのがありましたら、すぐに言ってください。土下座しながら書き加えます」

夏「アホな作者ですいません」

作「すいません。さて、今度はもう一つ、名前を募集していました」

沙「夏哉のお隣さん？」

作「そうそう。取り敢えず」

恥野　雪奈（　ちの　ゆきな　）

坂野有希（さかのゆき）

中島雨音（なかじまあまね）

翠谷綯羽（みどりやなう）

篠原神奈（しのはらかんな）

作「この五つの応募がありました」

香「五つ、意外ときたね」

作「えぇ、来ましたね。予想外です。さて、この中から一人、選ばさせていただきます！！沙鳥ちゃん司会的なの！！」

沙「は～い。では。第一回！夏哉のお隣さんの名前はなんなんでしょう大会！」

ア「大会なのか？」

夏「ツッコんだら負けだ」

沙「決勝戦まで残ったのはこの五名！さぁ、栄えある勝者は！？ダラララララララララララララ……」

作「三番！中島雨音さんに決まりました！！」

パチパチパチパチパチ！！

沙「三番の名前は、ｋｉｉｔｉさんのご提供でした！ｋｉｉｔｉさん、ありがとうございます！！」

真「因みに理由はいかほどの？」

作「はっきり言って俺の独断で偏見が入ってるけど、俺は？音？っていう字がなんか好き。お淑やかそうな気がするからです」

夏「選ばれなかった四つの名前はすいません。もしかしたら別のキャラの名前になるかもしれないんで、そのときになったら有効利用させていただきます」

作「夏哉のお隣さん、中島雨音ちゃんは、次の番外編で登場させようと思っていますので、そのときはよろしくお願いします」

真「作者。今回はいろいろやりましたが、そろそろ終わりですの？」

作「いや、ラストに報告を」

香「なんの？」

作「ＰＶ三十万越えて、３０８，４００になりました」

夏＆ａｍｐ；香＆ａｍｐ；沙＆ａｍｐ；アン＆ａｍｐ；真「「「「「「はぁ！？」」」」」」

作「いやマジで。前回二十万が四月後半だから、今度は二ヶ月で十万アクセスありました」

夏「いや、あり得なくね？」

作「それにお気に入りも二百人突破」

香「あ～……言葉出ないね」

沙「うん……」

ア「えっと、皆ありがとうございます」

真「その、実感は沸きませんが、かなり嬉しいですわ」

作「皆のテンションが低いのは勘弁してやってください。ではそろそろこの辺で、後書きというなの雑談を終了します。感想評価、まだコラボ待っています」

番外編　《一章》隣の声

ピピピピ、ピピピピ……

「ん、んん～……」

一定の電子音が、先ほどまで寝ていた私の鼓膜を震わす。

ゆっくりと重い瞼が開いていく。

まず視界に入ったのは、二ヶ月以上生活して見慣れたぼやけた天井。

指で目を擦りながらムクリと起き上がり、大きく欠伸をする。

徐々に薄れていくまどろみを名残惜しみながら、私、中島雨音（なかじまあまね）は布団から体を出した。

布団のすぐ側に置いてあるメガネを手にしてそれを掛けると、視界がクリアになる。

「ふぅ……」

一息付くと、私は再び布団に横になる。

朝は苦手です。

手に持っている携帯を開く。

時刻は六時二十三分。

あ、そろそろ動かないと。

頑張って理性を働かして体を起こす。

立ち上がって最初に向かったのは冷蔵庫。
この中には昨日のうちに作った朝ご飯がある。
それを取り出して電子レンジに入れる。
その間にご飯をよそう。

どうして私が、朝弱いのにこんなに早く朝ご飯の準備をするかというと、一応理由がある。

後十五分くらい。

朝ご飯の準備が終わると、部屋の中心に置いてある丸いテーブルを壁の近くに移動させ、その間に入ると壁に寄り掛かる。

「……いただき、ます」

胸の前で手を合わせて、ご飯を食べ始める。

すると、

「ぬをッ！？」

私のお隣で暮らしている柊夏哉さんの叫び声が聞こえた。

後頭部も壁に付けて、始まったな～と思いながら耳を澄ませる。
多分私の口は笑っている。

これが朝早く起きる理由。
ちょっとした日課になっていること。

「お前、なんでいちいちその起こし方なんだよ！？」

一人暮らしの筈の柊さんが叫ぶ。
きっと、いや間違いなく携帯で話しているわけではない。

「あ～も～、普通に起こしてくれよ……つかラスクも止めてくれ」

誰か柊さんの部屋にいるんだろう。
幽霊的な何かが。
それに対して別に恐怖はなかった。
魔法なんてものがあるんだから、そのくらいはいるだろう。
むしろ喜んでいる私がいる。

私とひとつ隣で暮らしている人はどんな生活をしているんだろうか。

五月が始まった辺りから隣の声が聞こえ始め、何をしているのか興味が沸いた。
昔から耳は良かったので、集中して聞けば小声でなければ聞こえる。
まぁ私のやっていることは盗聴とか盗み聞きになるんだろうけど、聞こえちゃうと言うことで多目に見てほしい。

「え、そうなの？でもお前俺より先に起きてない？」

今までの柊さんのところの見えない登場人物は、アンさんとネハラさんとラスクさん。
ネハラさんとラスクさんは、一週間くらい前から住み着いているようだ。

私はさっきの状況を想像してみる。

多分ネハラさんが激しい――暴力的な意味――起こし方をして柊さんが叫ぶ。
その柊さんはラスクさんに、ネハラさんの起こし方を止めるようにお願いしたが、どうやらラスクさんには無理な様だ。

「あ、へぇ～。お前もネハラに起こされてんの？」

ということはラスクさんも朝早起きということではないようだ。

「はぁ？おいネハラ、なんでこいつには普通なんだ？俺もちゃんと起こせよ」

ネハラさんにとって、柊さんとラスクさんの扱いは全然違う。
もっと言えばアンさんとも違う。
優先順位で言えば、アンさん、ラスクさん、柊さん。
これはネハラさんたちが来て三日目くらいで分かった。

「いいのか、そんなこと言って。アンちゃ～ん、実は――ネハラさんがアンさんに魔界の料理を食べさせたいとのことなのですが」

最初は軽めに言ったのに、途中で声に真剣さに転換された。

柊さんは何かネハラさんの弱みを握っている。
それをちらつかせることで黙らせようと考えていたようだけど、ネハラさんが実力行使に乗り出たようで、結局柊さんが折れてしまった。

「だとさ。じゃあおいネハラ、早く朝飯準備してくれ。……え？ちょ、それヒドくね！？……ラスクさんありがとうございます。おいしくいただかせてもらいます」

ネハラさんに拒否されたけど、朝ご飯はラスクさんが日本食、というか地球食以外の食べ物をだしてくれるようだ。
どんな食べ物があるのか、興味がある。

とりあえず向こうが食べ始めるようなので、私も残り少しの朝ご飯を食べ終える。

洗うのには時間がないため、水に漬けるだけ。

また壁とテーブルの間に入ろうと思ったけど、その前に壁に掛けられといる制服を取ってパジャマから着替える。

「え、これホントに、旨いの……？」

隣ではどんな朝ご飯がでているのだろうか？
物凄く気になる。

「分かった分かった！食べるって！！」

慌てた調子で発言する。
なんか脅されたのかな？

「お、うめぇ。目ぇ瞑れば意見じゃね？」

味は好評の様だ。
ご飯食べ終わった後なのにますます食べたくなってきた。

「ん？何これ？」

何か入っていたのだろうか？

「あ、へぇ。うまい？……そりゃそうだわな」

ちょっと笑いながら
言った。

「皆これ掛けた？……ほいよラスク」

もしかしてさっきのはご飯の中にあったものじゃなくてふりかけ的なものだったのかな。
ん～、どんなのだろう。
お米を食べてるとは断言出来ないから、チーズとか七味唐辛子かもしれないし。

でもひとつ言えることは、この世の物ではないということだ。
今更だけど柊さんはアンさん達のご飯を食べて大丈夫なのかな？

「だ～！叫ぶなお前ら！！近所迷惑だろうが！！」

貴方の声の方が大きいです、柊さん。
そちらの声は柊さんの声しか聞こえないので、近所迷惑ではありませんよ。

「あ、そう言えばそうだった……」

三人の誰かが諭したのだろう、柊さんはちょっと落ち込んでいる風だった。

「ヤバいな、周り起こしてないかな？」

すでに起きています。

「いや行かなくていいよ。それよりさっさと飯食おう」

誰か、おそらくアンさんかラスクさんが部屋を覗こうかとか言ったのだろう。

そう言えば私は、もしかしたらあの三人のうちの誰かにこの部屋を覗かれてるかもしれないのか。

「あ、まず！弁当作んの忘れた！！」

朝ご飯を作ってないから、それは当然だろう。

「今日は購買だな。アンもパンで良いか？……うまいって言われてもな～。いろんな種類あるから一概にうまいとは言えないな。……俺はあんパンが好きだな。ほれ、前に見せたっしょ？……そうそう、それ。ごめんなラスク、食べさせてあげられなくて」

どうもアンさんとラスクさんたちは違うようで、アンさんは私たちの物を食べられて、ラスクさんたちは食べられないらしい。

「はいはい、後で撫でてやるから――ネハラ睨むな。アン、何とかしないと撫でられないぞ」

これは予想だけど、アンさんは柊さんの事が好きなんだと思う。

普通の人間じゃないと思うけど、柊さんは普通の人と同じ様に優しく接しているので、納得は出来る。

「ホントお前ってアン好きなのな。少しくらいその優しさをわたく

しに向けてはくださいませんか？……ちげぇよアホ！いつもツンツンされてたら嫌だろ！沙鳥といいアンといい、どうしてフラグに話を繋げんだよ？」

柊さんはフラグという言葉をよく否定するけど、フラグってなんだろ？

旗？

「お前がフラグフラグ言うからやだ」

ん？

話が進んだ。

多分アンさんが行動に移したのだろう。

「じゃあそうだな……。俺をどうにかして気持ちよくさせたらいいぞ。最近朝気持ちよく起きられないからな。地味に疲れる。……妹の始末くらい姉がやりなさい」

気持ちよく……。

柊さんは何をやらせようとしてるんだろう？

マッサージとかかな？

「胸はなしだ」

む、胸！？

どうしてマッサージに胸が出てくるの！？

「んっ、あぁ～。気持ちいいよ、アン。なぁ、もっとしてくれないか？……あ～時間時間……」

現在七時二十九分。

「じゃあ十五分くらい頼む。……なんだ？ラスクもやりたいか？…
…駄目なわけねぇだろ。頼むな、ラスク」

多分ラスクさんはいい笑顔をしてるんだろう。
顔は分からないけど容易に想像出来た。

「ん～、もうちょっと強くしてくれ……あ、それくらい」

柊さんは凄く気持ちよさそうな声を出している。

ところで、アンさんは女の人だよね？
胸がどうのとか言ってたし。
多分ラスクさんも。

端から見れば――二人が見えたとしたら――柊さんは女の人二人を
侍らせてるってことになるのかな？
柊さんモテモテだな。

「……ネハラさん？そんなチラチラ見られたら興味あるんじゃない
かって思うんですが。……じゃあ頼む。アンたちと同じ風にし
てくれないか？……ありがと」

これで三人。
やっぱり仲が良さそうだな、あの四人。

その後は特に何があったわけではなく、柊さんの気持ちよさそうな
ため息を聞くばかりであった。

「う〜し、もうそろそろ時間だな」

携帯を開くと、確かにもう四十五分だった。

「よ〜し、まずはアンさん。マッサージお疲れ様でした」

恐らく柊さんは頭を撫で撫でしてあげている。

「次にラスクさん。ありがとうございました」

ラスクさんにも同様に。

「最後、ネハラさん。気持ちよかったです」

あれ？

ネハラさんにも撫でるんだ。

平気なのか――

「グフッ！？」

あ、やっぱり殴られたのかな。

「い、いやノリで？で、でもネハラさん、凄いいい笑顔を浮かべ――え？ちょ、それ何？……ぬわあっ！？それ駄目！普通に死ねる！！アン助けて！……ふぅ、よかった〜。……ん、大丈夫だ。それよりお前ら、着替えたいからちょいと部屋から出てってくれないか？」

そう言えば柊さんまだ着替えてなかったんだ。

多分歯磨きも顔も洗ってないだろうし。

じゃあ十五分くらいで身支度全部終わらせちゃうんだ。

男の人って凄いな～。

あ、歯磨き忘れてた。
早くやらないと。

壁に寄りかかってた背中を離し、キッチンへ向かい、歯磨き開始する。

きっちり三分で歯磨きを終える。

「お～し、お前ら行くぞ～」

早っ！？
流石に早すぎじゃないのかな！？
まだ柊さん着替え始めてから三分しか経ってないのに！？
は、歯磨きしてないのかな？

「わ、なんかネハラ凄い顔なんだけど……ラスク、何あった？」

隣の玄関近くで柊さんの声がした。
どうしたんだろう？
事件でも起きたのかな？

でも柊さんの声、あんまり必死そうじゃないし。

「あぁ、なるほどな。流石アン」

何が流石なんだろう。
ご飯と同じくらい気になる。

「じゃあアン、ネハラ満足に動けなさそうだからお姫様だっこしてあげなさい」

お姫様だっこか～。
ちょっと憧れる、かな。
まぁしてくれる人なんていないけど。

ガチャッと扉が開く音が聞こえる。

「じゃ、いってきま～す」

誰に言ってるんだろう。
もしかしてお留守番する人がいるのかな？

「いや、なんとなく言いたかっただけ」

私の思ったことをタイミングよく答えてくれて、ちょっと驚いた。
一瞬心を読まれたのかと思った。

その後扉が閉まる音がして、隣から声が聞こえなくなった。

これで隣の生活の想像、朝の部終了。
今日も面白かった。
夕方も楽しみだ。

ヘアゴムで髪を二つに縛り、身嗜みを軽くチェック。

鞄を手にして玄関に向かう。

靴を履き、ドアノブに手を掛ける。

ふと後ろを振り返り、数分前の記憶をよみがえらせる。

「いって、きます……」

私は一歩踏みだし、学校へ向かう。

2020

番外編　《一章》隣の声（後書き）

作者「ｋｉｉｔｉさんすみませんでしたぁぁぁぁぁッ！！」

香苗「今度はどうしたの？」

作「……とりあえず、まずゲスト登場」

雨音「あ、の……中島、雨音です……」

夏哉「いらっしゃい」

香「で、どうしたの？」

作「今の今まで雨音ちゃんを変換ミスして天音って打ってた」

夏哉「死ねクソヤロオオオオオオ！！」

バキッ！！

作「グハッ！？」

夏「アン行ったぞ！！」

アン「分かってる！！」

作「え、なんで――」

ア「真樹いいいいいいいい！！」

ボキ！！

作「ゲハッ！！」

真樹「沙鳥様っ！！」

ゴッ！！

作「ゴ、あ！！」

沙鳥「魔法でどーん！」

ドン！！

作「ブヘッ！！」

沙「カナ～、魔法で体強化しといたよ」

香「ありがとう！じゃあこの金属バットでぇぇぇぇ、夏哉くぅん！！」

ガキーン！！

作「あ、が……！」

夏「じゃあ俺も香苗に習って……ホームラン！！」

ゴキュ！！

作「――――――！！」

キラッ

雨「あ、さ、作者、さん……っ！」

夏「ふぅ、三人ありがとうお疲れ～」

香「お疲れ～」

沙＆amp;ア＆amp;真「「「お疲れ様～」」」

雨「……あの、いい、んですか？」

夏「ん？あぁ別にいいんだよ、あいつは。せっかくのお前の名前間違えやがって」

香「そうだよ。人の名前間違えるのは最低なことなんだし。中島さんは気にしなくていいんだよ」

雨「は、はぁ……」

夏「さて、今回はちょっと早めに謝辞を。ｋｉｉｔｉさん、クロスライトさん、感想ありがとう。クロスライトさんにはチョコケーキに引き続き葛餅をくださいまして。おいしくいただきま――」

？？「マスターマスター！葛餅の匂いがするんだよ！」

？？「葛餅って匂いあるのか？」

夏「あれ？貴方達どちら？」

春美「あ、紹介遅れたな。俺はｓｋｙｆｌａｒｅ、通称空ねぇの『ネギまの世界で新たな人生を・・・』の主人公の皇樹春美（すめらぎはるみ）だ」

サクラ「サクラなんだよっ」

夏「あぁ、もしかしてコラボの？」

春「あぁ。次回参加させてもらうから予告という形できた」

香「いらっしゃい。葛餅食べます？」

サ「食べるんだよっ」

春「ところで問題があるんだが」

夏「ん？何？」

春「俺たち空ねぇに許可無しで来てしまった」

夏「はぁ！？おいこら作者！！何勝手にやってんだ！？」

サ「大丈夫なんだよ！空ねぇに香君を非難する権限なんてないんだから」

夏「この腐れ作者あああああああああああああああああ？何作者の分際でサクラに言わせてんだあああああああああああああッ？」

春「（もぐもぐ）『四人の魔法使い』を読んでる皆、次回の俺たち

をよろしく頼むな。俺たちのことは、今から『ネギまの世界で新たな人生を・・・』を読んで復習しといてくれ。そうすれば話についていけるし小説のＰＶも増えるし、一石二鳥だ」

サ「堂々と宣伝してるんだよマスター……」

春「こういうのは言ったもん勝ちなんだよ」

番外編　《二章》探し人

「さすがゼウス～。ありがとぉ～」

今私の目の前では私達神を創り出した小さな創造神様が先ほど渡した書類を一枚、そう一枚だけ持ってルンルン気分でスキップしながら進んでいる。

あれ？

なんか前にもこんなことがあった気がする。

いやあった。

六十年ほど前にこの創造神様は、『仕事を手伝いたい』などと言って簡単な仕事を手伝わせたものの、持ち前のドジッ娘スキルが発動して？皇樹春美（すめらぎはるみ）？という少年の命を奪ってしまったのだ。

因みにその二千年前にもドジッ娘スキルが発動、大惨事になった。

で、今回も懲りずにこの幼女――もとい創造神様は私のお手伝いをしたいといいだしたのだ。

しかもそのときの言葉が、

『大丈夫だよっ！今度こそ名誉返上、汚名挽回するからっ！』

もはや不安しかない。

さすがの私も馬鹿ではない。

創造神様に任せたら失敗するなんて、人が呼吸しないと死んでしまう事よりも明らかであった。

上司に対してもＮＯといえる神なのだ。

2026

だが、

『ひくっ……ダメ？』

幼女＋涙目＋上目遣い＝男敗北

こんな図式がこの世界には広がっている。

それに当てはまるのは私も例外ではない。

なので適当な書類を一枚見繕って創造神様に渡し、冒頭に戻る。

「創造神様、今回はくれぐれも！くれぐれもお気をつけください！」

「わ、わかってるよぉ。同じ様な間違えなんて馬鹿じゃないんだからしないって」

「……二千年前書類を駄目にしたのは誰ですか？」

「うっ、ゼウスがいぢめる～」

いちいち涙目にならないでください。

なるべく顔を見ないようにして質問する。

「創造神様。その書類、どこに届ければいいか分かっていますね？」

「うん、バッチリだよ！特別保護科に届ければいいんだよね？」

特別保護科。

そこに人の暮らしている世界が記載されている書類を届けると、そ

の人が比較的住みやすい世界へと偶然を装って転移させることが出来る。
この特別保護科だが、誰もがそれを利用できるわけじゃない。
その世界において、あからさまに異端で、人から忌み嫌われている存在を保護すべきと私たちが判断したのみ可能だ。

今回の書類は命の書かれた書類ではないので、破かれても死なないし、新しい書類に位置情報を記載すればなんとかなる。
それをやってしまったら修正するためにかなり奮闘しなければならなくなるが、ミスで人を殺すよりはマシだ。

「そうですよ」

「ちょっと距離があるね～。まぁ大丈夫かなっ」

私はデジャビュを見ているようだ。

「じゃあいってきま～すっ」

創造神様は私の方を振り返りながら歩いていった。

「前見て歩かなければまた転びますよ！」

……創造神様は私たち神の親に当たるのに、どうして私が親に子供にするような注意をしてるんだろうか。

それよりも、んん。
鼻がムズムズする。

「大丈夫だいじょ――」

「はっくしょん！！はっくしょん！！」

ん～、誰かが噂でもしてるのだろうか？

「あ、あ～！！」

む、創造神様が何やら困ったような声を上げている。

ま、まさかまた破った！？

「ゼウスのくしゃみのせいで書類飛んじゃった～！！」

「そんなわけあるかッ！！」

ハッ、咄嗟にタメ口を利いてしまった！！

だがあの幼女、自分の失態を私のせいにするとは……

「ひうっ！？だってここ風吹いてないし、紙を上に飛ばしてもあんな上に行かないもんっ！！」

そういって上を指させば……１０ｍ以上高く舞い上がって、もはや点にしか見えない書類があった。

いや、あんな、それこそくしゃみでも無理じゃないだろうか？

「あっ！」

「今度はどうしました？」

「書類、次元の歪みのところに入っちゃって消えちゃった……」

「な、なんですって！？」

というかあんな離れたところまで見えるのか？
さすがは創造神様といったところか――ではなくて！

「マズいですよ！次元の歪みに入ったらどこ行くか分からなくなります！」

次元の歪みというのはここでは自然現象のようなもので、いわゆる行き先不明のワープゲートのようなものだ。

というかこんな設定向こうじゃ知らないぞ？
香樹勝手に作っていいのか？
まぁｓｋｙｆｌａｒｅに何言われても私の知ったことではないが。

……私はいきなり何を考えているんだ……！？

「ね、ねぇねぇゼウス～。何ｏｒｚポーズとってるの？」

「い、いえ。なんでもありません……」

「そうなの？で、で、どうするのっ？なんか地球科のところに飛ばされちゃってるんだけど」

「……は？ちょ、創造神様？どこに飛ばされたか分かるんですか？」

「うん、わかるけど、なんで？」

いや、普通分からないでしょ。
今やってる事って、人で言うといつどこで雨が降るというのを、空を見ただけで判断出来るということだ。

流石は創造神様といったところだ。

「……で、その地球というのは？」

地球という名称のある星がある世界は、それこそ星の数ほどある。

「えっとね、あそこは……ストリックがいるとこなんだけど」

「あぁあそこですか。また厄介なところに」

あそこは例外な星だからな。
しかもあいつ引きこもりだし。

「ねぇどうするの？ゼウスのせいなんだからねっ」

「うっ……。し、仕方ありません。彼に頼むしかありませんね……」

――――――――――

よう皆。

俺は皇樹春美だ。
え、誰だって？
『ネギマの世界で新たな人生を・・・』って小説を読め。
そっちの方が早い。

「って、俺は誰に説明してるんだ……」

自分がいよいよ電波を受信したかと思うと、軽く落ち込む。

「マスター、どうかしたの？」

俺のつぶやきが聞こえたんだろう、金髪紅眼の少女、サクラが声を掛けてきた。

「いやなんでもない。気にしないでくれると助かる」

「分かったんだよ」

素直な奴で助かる。

今現在、俺とサクラは仲間入りした赤き翼（アラルブラ）の連中といて、現在昼飯中。

と、ここで念話が入った。

「（は、春美さ～ん）」

神（ようじょ）だった。
なんかテンションが低い。

「（どうした？もしかして能力の追加か？）」

因みに俺は転生者で、神からチート級の能力をいくつかもらった。

「（いえ、その……今回はちょっとお願いがありまして～）」

「（お願い？）」

「（はいです。その、女の子を捜してほしいんですが）」

「（女の子……。お前幼女の癖に女の子に興味あるのか？）」

「（え？なんの話ですか？）」

神の癖に知識は乏しいらしい。

というか俺は幼女になんて質問をしてるんだ。

「（済まない、聞かなかったことにしてくれ。で、女の子探し？なんだそれは？）」

「（えっと、まぁいろいろあって女の子を保護しようとしてるんですが、その仕事を私がしてたときに……）」

だいたい展開は読めた。

「（お前が俺の時同様ドジしてミスったんだな？）」

「（ち、違いますっ！私のせいじゃないですっ！ゼウスのくしゃみのせいですっ！！）」

くしゃみでどういうミスが出来んだよ……。

「（まぁいい。で、どこにいるんだ？その女の子は）」

「（地球です）」

「（いや、そりゃそうだろうよ。アバウト過ぎだ）」

「（あ、正確には異世界にある地球に行ってほしいんです）」

……は？

「（済まない、意味が分からないんだが）」

「（えっと、簡単に説明するとですね、春美さんが今いる世界と、生前の世界って違うじゃないですか）」

「（まぁそうだな）」

方や二次元、方や三次元だしな。

「（そういうのがいっぱいあるって考えてください。で、春美さんに行ってほしいのが、そのいくつもあるうちのひとつということなんです）」

パラレルワールドみたいなものか？

まぁだいたい理屈は分かったからいいか。

「（で、なんで俺なんだ？そう言うのって神の仕事じゃないのか？）」

「（そ、そうなんですが……。そこを担当してる神はちょっと特殊で、引きこもりしてるみたいなんです）」

神も引きこもりとかするんだな。

「（基本神は人間がいる星に降りて何かするっていう事が出来なくて……。だから春美さんっ、どうか協力してくれませんかっ？）」

まぁ断る理由はないな。

この神のおかげでつまらない人生も終わりにしてくれたし、チート級の能力手に入れたわけだし。

「（別にそんくらいなら構わないぞ）」

「（あ、ありがとうございますっ！じゃあ早速お二人で行ってきてくださいっ！こちらで送るんで）」

「（まて、ひとまずこっちで挨拶してからだ）」

「（分かりました）」

「（それから容姿とか名前を知らなきゃ捜せない）」

「（あ、忘れてましたっ。えっと……ぜ、ゼウス～）」

神も分からないらしい。

「（春美、いいか？）」

どうやらゼウスに変わったようだ。

「（名前は翠谷綯羽（みどりやなう）だ。容姿は後で写真を送る）」

「（分かった）」

「（ではよろしくたのむ。五分後にこちらで送る用意をするから）」

そこで念話が切れる。

よし、まずはサクラか。

「サクラ」

「何マスター？」

「ちょっと出掛けるぞ」

「どこ？」

「異世界」

「へ？」

「神に頼まれた。人探しだ。お前も来る――」

「もちろん行くんだよっ！」

念のための確認だったが、言い切る前に言われた。

よし、次は皆か。

「なぁ、ちょっといいか？」

「ん、どうした？」

代表してナギが聞いてくる。

「俺とサクラ、ちょっと人探ししなきゃなんなくなってな。少しここを離れる」

「人探し？手伝おうか？」

「異世界だから無理だ」

「異世界に人探しって……。もうあまり驚かなくなりましたね」

溜め息混じり呟くアル。

「とにかく、向こうで見つけ次第戻ってくるからいつになるか分からんが、早めに戻ってくる」

「それはいいんだけどよ、どうやっていくんだ？」

「それはか――知り合いがなんとかしてくれるらしいんだが」

と、ナギに言った瞬間、

体がふっと浮かんだ。

正確には座っている感覚がなくなった。
下を見る。
芝生はなくなり、そこが見えない真っ暗な穴があった。
「うわっ！？」
「きゃあああああああっ！？」
隣でサクラの叫びも聞こえた。
まさかこれがワープの方法か？
もっと科学っぽいものにしてほしかった。
やがて視界が真っ暗になり一点だけ光が差し込んでいる。
俺の体はそこに引かれていて、どうやらあそこが出口のようだ。
徐々に視界が暗闇から光に支配されていく。
完全に光が支配したとき目に入ったのは、水だった。
ザブーン！！
俺は全身からその水に入った。
なんかあったかい。
もしかしてお湯か？
しかもタイルの床があるから、どっかの温泉か。

そう判断しながら、あの神共を恨む。
ろくでもないところに落としてくれたな。
せめて地面に落としてくれ。

そろそろ息も続かなくなってきたため、水面に上がる。

「ぷはっ」

そこで目にしたのは、

女。

「…………え？」

十人程だろうか、数は分からないが、とにかく女が複数いた。
しかも裸。

「よ……」

よりにもよって女湯かよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ！！

ザブーン！！

すぐそばで水しぶきが舞った。

「ぷはっ！？え、こ、ここどこっ！？マスター！マスターどこっ！？」

サクラの叫びで我に返る。

ひとまずこの場所から逃げなければ。

手っ取り早い方法は――

「きゃあああああああああああああっっっ！？」

女湯の中で悲鳴が広がった。

慌てて俺とサクラ二人分の空間を想像、右手で指を鳴らした。

それが発動条件である。

『悠久の幻影（アイ・スペース）』

指定した空間に結界を張って周りからの干渉を遮断できる空間。

当然姿も見えない。

「（ご、ごめんなさいぃ～）」

『悠久の幻影（アイ・スペース）』に入って早々、幼女が念話を掛けてきた。

こいつ、よもや転移座標間違えて女湯に転移させちゃった、とか言うんじゃないだろうな？

「（えと、その、えへへっ）」

「（笑ってごまかすなっ！！）」

あの幼女、許しまじ。

「（ふぇっ！？ご、ごめをなさいですっ！！）」

というかナチュラルに心読まれてるな。

「ねぇマスター」

すると俺の袖を引っ張ってくるサクラがいた。

「私訳が分からないんだよ。事情を教えてほしいんだよ」

そういやこいつは神と念話してないのか。

「（おい、サクラにも聞こえるようにしろ）」

「（は、はいっ。ええっと……聞こえますか？）」

「（あからさまに幼女って分かる声がするんだけど、どなたなんだよ？）」

「（こいつは幼女だ）」

「（違うよっ！創造神だよっ）」

「（そんなことはどうでもいい。それよりお前人の記憶消せるか？）」

「（それはまぁ、出来ますけど）」

「（だったら風呂場にいる女の記憶を消せ。もちろん全部じゃなくて俺が女湯にいたっていう記憶だけだ）」

「（分かりましたけど、能力として付け加えましょうか？自分のタイミングでやった方がいいと思うんですが）」

ん～、確かにそうかもしれないな。

「（じゃあ付け加えますね。使用方法は、口笛を吹いてください。それが聞こえて、春美さんが指定した人の記憶を消せます。消したい記憶は頭の中で想像すれば平気です）」

「（分かった）」

「（あ、あと、これが翠谷綯羽の容姿です）」

そういうと頭の中に一人の子供の姿が浮かび上がった。
黒みがかった緑の髪をサイドでくくっている、大人しそうな子だ。

「（場所は検討ついてんのか？）」

「（えっと、そこから１００？圏内にはいます）」

ずいぶんアバウトすぎないか？

これは時間が掛かりそうだ。

「（分かった。さっさと見つけてくる）」

「（ありがとうございますっ。全くゼウスったら～）」

そう言いながら念話が切れた。

って結局サクラは念話で話さなかったな。

――――――――――

俺たちは今現在昼間っから銭湯に入っている。

俺たちというのは、香苗、沙鳥、アン、真樹、空ねぇ、ラスク、ネハラの事だ。

見事に男が俺しかいない。

で、銭湯にいる理由として、空ねぇが銭湯に行きたいといいだしたため、文化祭一週間前の休日を利用してきたのだ。

昼からの理由は単に空ねぇと真樹が夜に用があるため。

昼間と言うこともあるため人の数は少ない。

ちょっと事情があって皆と風呂に入るタイミングが遅れてしまい、今ようやく頭を洗おうとしたとき、

「きゃあああああああああああああああっっっ！？」

隣の女湯から叫び声が聞こえた。

もし無効で何かあったとき、一番冷静でいられるであろう人物に話しかける。

「香苗！どうした！？」

「な、夏哉君っ！え、えっと、突然男の人がこっちにいたと思ったら急に消えて……」

ごめん、ぜんぜん意味分からん。

でもパニックって事は分かった。

「被害とかは！？」

「実害はないけ――うわっ！？」

「香苗！？」

クソッ、本当に分からん！

このまま突撃！なんて事は普通に出来ないから、まず脱衣所に向かう。

軽く体を拭いてパンツとズボンだけを穿いて外に出る。

すると二人組の男女が女湯から出てきた。

男は香苗と同じくらいの身長で茶色っぽい黒髪。

女は金髪で、なんか特殊な括り方をしている。

共通して二人ともびしょ濡れな服を着ている。

女の方はともかく、男の方が女湯から出てくるのはおかしい。
痴漢だとしてもそうじゃないとしても、取り敢えず捕まえておくのが吉だろう。
二人と視線が合う。
でも距離は５ｍもない。
それなりに力はセーブして――それでも人間にしては早い方――一歩踏み出して男を捉える。
筈だった。
「うおっ！？」
驚きの声を上げ、男は躱した。
そう、躱したのだ。
俺の身体能力は化け物だ。
人間の限界なんてとうに越えている。
だからセーブしたところで反応出来ない程度の力は出せる。
普通じゃないと思いながら、更に速さをあげて男に右手を振るう。
今度は確実に掴んだ。
相手の右腕。

それを手前に引き寄せ、バランスを崩す。
右足を使って男の両足を刈り、尻餅を付かせる。
左手で右手首を掴み、肘が曲がらない方向へと力を込める。
「いでで!!」
「おい、女湯から出てきた理由教えてもらおうか?」
俺がそう言った瞬間、
「マスターを離すんだよ、このホモ!!」
そばにいた女が俺の脇腹を殴ってきた。
「あ、グッ……!!」
お、おかしい。
俺と同じくらいの女なのに拳の威力がハンパない。
普通の人間だったら骨折どころか内臓は破裂、下手したら死んでいる。
なんとか男を離さずに堪えられた。
「え、今の耐えた……?」
女は驚愕の表情を浮かべている。
というより訂正しなければならない事がある。

「俺はホモじゃねぇ！！つかこの男の方が変態じゃねえか！！堂々と女湯から出てきやがって！！」

「変態じゃねぇよ！」

「女湯から出てきやがってそれを言うのかお前は？」

「事情があんだよ」

「どんな事情だ！？」

「夏哉～、何騒いでるんだ？」

すると女湯ののれんをすり抜けてアンが出てきた。

「な、のれんすり抜けた……？」

男から、あり得ない言葉を聞いた。

まさか、アンが見える？

「どういうことだよ……」

「いや夏哉、お前のこの状態こそどういうことだ？」

番外編　《二章》探し人（後書き）

沙鳥「はいっ、ということで人生初のコラボ、第一話です」

真樹「因みに前後編にする予定ですので次回も楽しみにしていてください」

作者「さて今回はゲストが来ています。ゲストはもちろんこの方、皇樹春美君です」

春美「お前死ね」

作者「ガハッ！？」

沙「おぉ、早速やったね～」

春「たく、なんで俺を女湯に落とすんだ。もっと別の場所があるだろ」

沙「えっと、初めましてだよね？」

春「そうだな。本編でも挨拶すると思うが、皇樹春美だ」

真「早乙女真樹ですわ」

沙「天雲沙鳥だよ」

真「ほんとに申し訳ありませんですわ。作者がバカで」

春「まぁもう過ぎたからいいが……」

沙「話変わるけど、予告でもする？」

春「そうだな。そうさせてもらう」

平穏な日常に飽きを感じていた主人公、皇樹春美（すめらぎはるみ）。彼は、神のミスにより死んでしまった。そして神からテンプレみたいな感じで能力貰って転生する。　転生先はネギま。さてこの主人公はどんな物語を紡いでいくのか・・・。この小説は主人公強めでハーレム目指します。なのでこういうのが苦手な方は読むのを控えた方がいいかもしれません。もしかしたら軽くアンチ入るかも・・・

春「現在１１話まで投稿している」

沙「そっちもよろしくねっ」

真「そう言えば空お姉ちゃん、『翠谷綯羽』という名前、使わせていただきました」

春「そう言えばそっちに作者の元になったキャラがいるんだよな？」

沙「うん。空揺火津那って名前だよ」

春「なんか複雑だな……」

真「まぁそうでしょうね」

沙「じゃあそろそろいいかな？」

春「あぁ」

沙「クロスライトさん、空お姉ちゃん、ｋｉｉｔｉさん、感想ありがとうございました。次回もぜひ感想をお願いします」

真「春美さんも、次回よろしくお願いします」

春「こちらこそよろしく頼む」

番外編　《三章》負の体質

「じゃあ何か？お前は異世界から来た人間で」

「あぁ」

「神様から人探しを頼まれて」

「あぁ」

「こっちに来たはいいけど落とされた場所が女風呂で」

「あぁ」

「騒ぎになると面倒だから記憶を消した」

「そうだ」

「よし信じよう」

「……え、マジで？」

俺とサクラは、一度落ち着いた男、柊夏哉とその連れ七人――皆女子とか夏哉ハーレム過ぎ――に今までのことを説明した。
したんだが、普通に理解されてしまった。

「マジって、何が？」

「いや、異世界とか普通信じられるか？」

「この方三人異世界の住人です」

そう指さすのは、金髪の少女二人と薄い緑髪の女性。

「私はアンだ」

「ネハラよ」

「ラスクだ」

アンとネハラが金髪で、どことなく顔が似てるから姉妹なんだろうと当たりをつける。

「というわけで前例があるから信じられるんだよ」

「なるほどな」

じゃあもっと言っても平気か？

「後俺、不老で吸血鬼でチート仕様だから。あ、不老はサクラもな」

さすがに今回のカミングアウトは驚いているようだが、思ったほどの驚きではなかった。

それどころか、

「チートってどのくらい？」

さっそく黒髪の超美少女が質問してきた。

というかこの子、スタイルも抜群でこん中じゃ一番胸デカいんじゃ

ないか？

「マスター、鼻の下伸びてるんだよ。そんなに胸大きい人の方がいいの？」

隣でジェラシー百パーセントで攻め寄ってくるサクラ。
嬉しいんだが怖いんだか分からん。

まともに答えて状況が悪化するのは避けるべきなので話を変える。
というか質問に答える。

「えっと、さっきの質問だが、取り敢えず視界に納めたものを消す能力はあるぞ」

「マスター、スルーなの？私をスルーするの？私の質問は話を逸らさなきゃいけないような質問だったの？ねぇマスター」

「そんなんじゃねぇよ。ていうかお前こっちに来てなんかキャラ変わってないか？そんな食いついてくるような性格だったか？」

俺が指摘すると、サクラは少しばかり俯く。

「……だって、向こうじゃあんまり女の子いなくて、こっちには可愛い子がいっぱいいるんだよ。だから私なんて目に入らないんじゃないかって……」

あぁなるほどな。
つまり極論で言うと捨てられるんじゃないかって思ってるわけか。

「アホかお前は」

俺はサクラの頭に手を置く。

「誰が嫁を放っておくかっての。それに、お前だって可愛いだろうが」

「マスター……」

サクラから熱のこもった視線が送られてく――

「あー、その、なんだ？一応ギャラリーがいるから、その辺気にしてくれると嬉しいわけなんだけどな～」

……

「え……あ、はうぅぅ～……」

バタリ。

恥ずかしさのあまりサクラが気絶してしまった。

俺？

俺だって恥ずかしいに決まってる。

そんな俺たちの姿を見て、さっきの黒髪の美少女と水色髪の女性がニヤニヤしていた。

「いや～お熱いですな、火津那ちゃん」

「ほんとね沙鳥ちゃん。お風呂出てすぐなのに火照って来ちゃいましたよ」

「同じくですよ。さあ……えっと、春美、君だよね？」

そういえば夏哉にはしたが、女たちにはしてなかったな。

「皇樹春美だ。で、気絶してるのはサクラ」

「あ、私天雲沙鳥。で、空揺火津那。このちっこいのが花街香苗で、最後に早乙女真樹」

黒髪の美少女、沙鳥が自己紹介をしてくれた。

自己紹介とか、なんか切っ掛けがないとやりづらいよな、とか思う。

どうでもいいが。

「で、春美君はこれからどんな風にサクラちゃんといちゃつくのかな～？」

「というかご結婚してたのねお二人とも～。おめでたおめでた」

なんか嫌な二人に知られてしまったかもしれない。

というかどうしてチートやら吸血鬼やらに反応しないでこっちに反応するんだ？

この様子だと視界に納めたものを消す能力があるって言ったことは忘れていそうだ。

さすが女子高生といったところか。

「あ、やっべ！！忘れてた！！」

唐突に夏哉が大声を上げた。

「どうした？」

「いや、ちょっと用事思い出して。わり、ちょっと抜ける。香苗、進行よろしく」

夏哉は出口に向かって歩いていった。

「あ、えっと、春美君？じゃあ話を戻すけど、人捜しに来たんだよね？」

あぁ、そういえば元の話はそれだったな。

「そうだ」

「どこ当たりにいるか検討付いてるの？」

「……神曰くここから１００？圏内」

「そ、それは……限りなくノーヒントに近い気がするんだけど……」

それは俺も思った。

するとおふざけテンションから変わって真面目な雰囲気をまとわせた沙鳥が話しかけてくる。

「ねぇ、その子って女の子？」

「あぁ。翠谷綯羽って言って黒みがかった緑の髪をサイドでくくっている、大人しそうな子だ。まぁ髪型は変わってるかもしれないが」

「じゃあ平気だよ」

「そうだな。すぐ見つかる」

沙鳥が言ってアンが頷くと、他の奴らもうんうんと頷く。

「どういうことだ？なんか探索出来る力があんのか？」

「ちょっと違うんだけどね。我らが柊夏哉君は、実は主人公なわけです」

「……意味分からんが」

疑問符を浮かべる俺に、更に沙鳥は説明してくれた。

「つまり、夏哉はマンガの主人公みないな人間なの。その証拠に、我ら夏哉ラバーズ」

手を広げて言われた。

あいつ、ホントにハーレム築いてたんだな。

「待ってください沙鳥様。私は違いますわ。夏哉に惚れてなどいません」

典型的なお嬢様口調の真樹。

うん、なるほど。

「ツンデレという――」

ヒュン。

言い終わる前に手刀が目の前に飛んできた。
首を曲げてそれを躱す。
というか今のは危なかったぞ？
眼球潰されるところだった。

「申し訳ありませんわ。手が滑ってしまいました」

「手が滑って眼球狙うとかおかしくね？」

「いえいえ。これが普通ですわ。あ、一応申しておきますが、わたくしはツンデレではないのであしからず」

笑顔でそう言われてしまった。
女は怖いということを痛感した。

「で、そう言えば話を戻すが、あいつが主人公だからなんだって？」

俺の疑問に、香苗が答えてくれた。

「つまりね、主人公、特に恋愛バトル系のマンガだと主人公と女の子っていろんなイベントが起こるでしょ？だから多分迷子の女の子だったらまず夏哉君の前にエンカウントするだろうって沙鳥ちゃんは言いたいんだと思うよ」

「じゃあ何か？今夏哉は出ていったけど、それって翠谷綯羽と出会うってことか？」

「可能性は高いよ」

沙鳥はガチで言っているようだ。
そんな都合のいい話あるわけ――
「なぁ皆～、誰か翠谷綯羽って子の知り合い知らないか？この子迷子になっちゃってさ」
「あったあああああああああッ！！」
「ひゃうっ」
つい叫んでしまった。
そのせいで、たった今夏哉がタイミングよくつれてきた翠谷綯羽は夏哉の後ろに隠れてしまった。
「ん、ん～……」
それと大声のせいでサクラが起きた。
「……夏哉、そいつ誰だ？」
アンが夏哉に不機嫌そうに訊ねる。
もしかして嫉妬か？
見た目五歳くらいの少女に。
夏哉はアンを一瞥し、俺に顔を向けた。
「いきなり叫んでなんだよ春美？何があったんだ？」

堂々とアンを無視した。
俺に話しかけられるとは思わず、すぐには答えられなかった。
その間にアンのいらだちは増していっている様子。
「夏哉、無視する気か！？」
「あうっ」
アンの大声で再び方を震わせる。
綯羽って臆病なのか。
そう思っていると、何故か夏哉は驚きの表情を浮かべていた。
膝を折り、綯羽と同じ目線にあわせた。
「ねぇ綯羽ちゃん、もしかしてあの金髪のお姉ちゃん見える？」
「え？みえるけど……なんで？」
「……どういうことなんですか？香苗、端的に説明しなさい」
「その子は春美君の探し人。異世界の子だから多分見えるんだと思うよ」
「なんつー繋がりだよ……。で、アンはなんで不機嫌？」
「そ、それは分からないけど……アンさんどうしたの？」
「何故だか分からんが、お前のその子を見てると無性に腹が立って

くる」

不機嫌だってことは口調から分かる。

「わ、わたしのせいなのです……」

俺たちの疑問に答えるように、綯羽は話す。

それを聞いた夏哉は先を促す。

「それってどういうことか教えてくれる？」

「……わたし、みんなをおこりんぼうにさせちゃうのです。わたしのちかくにくると、みんなこわくなっちゃうのです」

「えっと、それはなんでだか分かる？」

綯羽は首を横に振る。

「きづいたら、みんなそんなふうになっちゃってるのです……」

わけが分からん。

神に聞くか。

「（おい神、説明しろ）」

「（はい？何がですか？）」

「（……俺たちの状況知らねぇのか？）」

「（ふぇ？……あぁっ！もう目的の子見つけてるじゃないですかっ？凄いです春美さんっ！ありがとうございますっ！！）」

「（それはいいんだよ。で、どういうことだ？綯羽の側に近づくと変化があるみたいだが）」

「（実はですね、その子特殊な体質でして、他人の視界に入るとその人の不平不満を大きくしちゃうんですよ）」

「（なんでそんな体質がある？）」

「（それを言われても……。そういうのがあるからとしか言い表せません）」

「（じゃあなんとか出来ないのか？）」

俺も人間だ、自分の体質でいろいろ苦しんでいるだろう少女をなんとかしてあげたいという気持ちはある。
人間じゃなくて吸血鬼だろというツッコミはなしだ。

「（出来ますよ）」

神はあっさりと言った。

？でも？と付け加える。

「（それをするには一旦こちらに来なければいけないんですよ。ほら、私たちと初めてあった場所です。覚えてますか？）」

あの白い空間か。

ってちょっと待て。

「（じゃあ何か？あの子を殺さなきゃだめってことか？）」

あそこは死んだ奴が行くところの筈だが。

「（いえ、大丈夫ですよ。少女を特定の場所に連れていってくれたらこちらで移動させますので）」

そういえばふと思ったんだが。

「（なぁ、お前ら神ってこういう星に干渉出来ないんだよな？）」

「（はい。そんなぽんぽんとしてしまったら世界のバランスが崩れてしまいますので）」

「（それなのにワープ的なのを堂々と使ってもいいのか？）」

「（……）」

沈黙。

まさか考えてなかったのか？

「（では場所を教えますね）」

「（堂々とスルーしたな）」

俺のツッコミもスルーされ、所定の場所を説明された。

あ、ところで。

「（なんで俺は綯羽の側にいても変化ないんだ？）」

特に苛立ちはない。

「（それは神の力が働いているからです。春美さんの使える力は一応神のものですから。体内に神の力があればそういう影響はありません）」

なるほど、そういうことか。

「（じゃあ、この後もよろしくお願いします）」

ここで念話が切れた。

さて、こいつらには退散してもらおうか。

「夏哉、その子他人の苛立ちを助長させる体質があるらしい」

「は？何その体質？俺あんま変化ないけど。皆ある？」

「私はナッシング」

と沙鳥。

「私もないよ？」

と香苗。

「多分私はそれが働いてる」

とアン。

「アタシも同じです。なんかムカムカします」

とラスク。

「私も」

とネハラ。

「わたくしは抑えられますが、違和感はありますわ」

と真樹。

「私も、そうかな」

と火津那。

なんで夏哉たち三人は普通なんだ？

まさか神の力があるとか？

「そうだな。じゃあここで解散した方がいいかもな。俺と香苗と沙鳥以外解散。長居して苛立ち積もってもあれだし」

「なんでアンタに指図されなきゃならないのよ？」

綯羽の影響で苛立っているネハラが夏哉に突っかかる。

夏哉は一度ため息を付き、『これやりたくなかったんだけどな』と呟く。

「ラスク、命令だ。アンとネハラを連れて俺の部屋まで帰れ。今すぐだ」

「ハッ！」

短く返事をすると、ラスクはネハラとアンを抱えて銭湯から出ていった。

「真樹と空ねぇも早めに帰れ」

「そうさせていただきますわ」

二人は腰を上げて立ち去ろうとする。

「ちょっと待て」

それに俺は制止をかけた。

「なぁ、あんた空揺火津那、だっけ？」

「そうだけど、何か？」

「一目見たときから、お前に言いたいことがあったんだ」

言いたい言葉は、胸の中でくすぶっている。
この言葉の意味は分からない。
でも無性に言いたくなっているのだ。

「え、な、に？」

「お前……」

言いたいことを、俺はようやく口にする。

「さっさと投稿しやがれ」

空気が固まった。

そりゃそうだ。

いきなり訳分からんことを言われたんだから。

俺自身訳分からん。

「……え？え？と、とうこう？いや、でも、学校今日ないし、いつも遅刻しないで登校してるよ？」

ほんとになんでこんなこと言ったんだろうな、俺。

やっぱり電波でも受信したか？

「済まない。なんでもない。聞かなかったことにしてくれ」

「う、うん……」

今度こそ二人は帰っていった。

「え、えぇっと、マスター？いまいち状況が飲み込めないんだよ。三行くらいで説明してほしいんだよ」

隣でサクラが聞いてきた。

「その子翠谷綯羽。
人の不満を助長させる体質がある。
今から神のところに連れて行く」

「なるほど。分かったんだよ」

理解が早くて助かる。

あぁそれよりも。

「なぁ綯羽」

「はい？」

「お前自分の体質消したいか？」

「たいしつ？」

「つまり周りがおこりんぼうにならないようにしたいか、ってことだ」

「し、したいのですっ。わたしもみんなと仲良くしたいのですっ！」

こう言うってことは、この子は周りから阻害されてたってことか。

「じゃあ俺と来い。それをなんとかしてやる」

「わかったのですっ！」

俺は初めて、この子の笑顔を見た。

なかなか可愛いな。

「マスターって、実はロリコンなの？」

「馬鹿を言うな。これは保護欲だ。というかナチュラルに心を読むな」

全く、ロリコンなんて。

俺はノーマルだってのに。

「ところでさ」

沙鳥がそう切り出した。

「なんで私たちはなんともないの？」

「なんかな、神の力があれば平気らしい。心当たりあるか？」

「あ、うん。バリバリあるね」

「そうだね。というか私たち神様に乗っ取られたし」

どんな状況だよそれ。

聞こうと思ったけど、先に夏哉から切り出されたため無理だった。

「で、これからどうすんの？春美はすぐ帰る？」

「はるみ？」

「あぁ、そういえば自己紹介してなかったな。皇樹春美だ」

「あ、えっと、みどりやなうなのです」

「私はサクラだよっ。よろしくね、綯羽ちゃん」

「よろしくなのです」

「で、質問に答えるが、ある場所に行けば神が送ってくれるんだと」

「ある場所？」

「住所で言われてな。浅宮市西畑三‐四だ」

「ちょっと待て」

何故か夏哉に制止をかけられた。

「どうした？」

「そこ、俺んちの住所だ」

番外編　《三章》負の体質（後書き）

アン「やっぱり作者だな」

作者「ごめんなさい。前回の後書き嘘つきました」

夏哉「何が前後編だよ。後編終わらなかったじゃねぇか」

サクラ「でも私たち的にはここでの出番が増えるから嬉しいんだよ」

作「おぉサクラ！嬉しいこと言ってくれるじゃねぇか！ほら、お前らも見習え」

ア「いや、むしろ私は出番減ったんだが」

作「すいませんでした！てかホンとはさ、綯羽ちゃん単なるめっちゃ不幸な子っていう風にしてたんだけど、でもよくよく考えて、それだけで保護されるのか？と思って。ほら、某幻想殺しさんみたいなモッテモテにもなるわけだし」

夏「ということでもっと可哀想な体質にしてあげようと、周りの不満を無意識的に助長させようってことになって、でもそしたらアンたちも助長しちゃうから強制送還。出番がなくなったわけだ」

作「そういうことです」

ア「別に出番がほしい訳じゃないが、夏哉と一緒にいたい」

サ「アンちゃんって本当に夏君のこと好きなんだね」

ア「あぁ好きだ。お前が春美のことが好きなくらい好きだ」

サ「じゃあ相当好きなんだよっ」

ア「そうなるな」

夏「てか本人の前でそういう話をしないでくれ。どう反応すればいいか分からん」

ア「分かったよ。ところで話は変わるが作者」

作「はいはい？」

ア「お前は春美になんてことを言わせてる？」

作「どこのこと？」

ア「さっさと投稿しやがれ」

作「あ、あ、あれは、春美が言ったことで、わたくしは関係ありませんよ？」

サ「でも香君の言うとおりなんだよっ！空ねぇぜんぜん投稿しなくて困って――」

夏「ぎゃあああああああ！サクラ！アンタ何言ってるの！？自分の作者様だぞ！？そんなこと言っちゃダメッ！！」

サ「……さんざん香君を罵倒してる夏君には説得力がないんだよ」

作「うわあああんっ！サクラ性格よすぎっ！なんか、春美と嬉しいイベント起こしてあげよっか！？」

サ「ほんとっ！？じゃあなでなでと、ハグと、き、き、キスとかがいいんだよっ！」

作「よし！頑張ってみる！」

ア「みんな、いつものことだが作者の言葉は信用するな。きっと無理だ」

夏「だな。さて、ちょっと遅いけど、一週間以上上げてすいませんでした。ｋｉｉｔｉさん改め玲央さん、空ねぇ、クロスライトさん、感想ありがとうございました」

ア「次回は完結させるとか言ってたが、信用しない方がいいぞ」

番外編　《四章》別れ

「あ、そういえば聞くの忘れてたんだけどさ」

綯羽ちゃんを助けるため現在電車で俺の家へ向かっていると、沙鳥がそう切り出した。

「どしたよ？」

メンバーは俺、香苗、沙鳥、春美、サクラ、綯羽ちゃんの六人。
その内香苗と沙鳥と綯羽ちゃんは座って、他は立っている。

「春美君たちって違うとこから来たんでしょ？」

「そうだな」

最初、綯羽ちゃんの体質があるのに電車の中に乗って平気なのか、という問題があったが、春美曰く綯羽ちゃんの体質は、綯羽ちゃんを視界に納めたら人の苛立ちを助長させるらしい。
だから香苗は、沙鳥の魔法を使って綯羽ちゃんの存在を極端に弱くして『そこに何かいるみたいだけど、気のせいか？』という認識にさせれば、誰も綯う羽ちゃんがそこにいるとは気付きもせず、結果苛立ちが積もらないのではないか、という案を出して実行。
それは見事に成功したという訳だ。
現在綯羽ちゃんを綯羽ちゃんと認識できるのは俺たち五人のみ。

ついでに俺たちもそんな風にしてもらっている。
だから会話も俺たちの間でしか聞こえない。

「なんで普通に干渉できてるの？」

「ん？干渉？どういうことだ？」

春美は逆に聞き返した。

ということはいつも干渉できてるのか、それとも今回が初なのか。

「あのさ、アンちゃんたちいたでしょ？」

「あぁ。あ、そういえばあいつのれんすり抜けてたな。すっかり聞くの忘れてた」

「普通ね、そうやって異世界から来た人はこの世界には触ったり見たり出来ないんだって。まぁ私たちみたいな例外はいるけど」

「そうなのか？そんなことはないが……」

春美は呟くと、一度吊革を離し、また掴んだ。

「実際掴めてるし」

「うん。だから私もなんで、って聞いてるんだけどね～。なんでだろ？」

可愛らしく首を傾げる隣、沙鳥の質問のあとずっと俯いていた我らが頭脳が頭を上げた。

「ねぇ春美君。春美君ってどうやってこっちに来たの？」

「どうやってって、落とし穴だよな？」

「そうなんだよ。もういきなりすぎてちょっと怖かったんだよ」

そのことを思い出しているんだろう。

しかし恐怖というより呆れの表情を浮かばせている。

落とし穴に落ちたというのに、なんとも余裕な二人だ。

「じゃあ……うん。多分ね、異世界の渡り方が違うからだと思うよ。アンさんたちは門をくぐって来たって言ってたから、門の副作用で渡った異世界に干渉出来なくなったのか、春美君たちが落ちた穴に異世界に干渉出来るような効果が付け加えられたのかは分からないけど、その違いだと思うの」

「あ～な、なるほど。分かりやすい解説ありがとう香苗ちゃん」

労いを込めて手の上に頭をポンッと置いて撫でてやった。

「どーいたしまして」

香苗は気持ちよさそうな笑顔で返した。

「……ねぇマスター、夏哉君ってロリコンなの？」

ぼそぼそっとサクラが春美に耳打ちをした。

はっきり丸聞こえである。

「まぁ人それぞれの性癖があるだろ。小学生しか愛せなくても優しく見守ってやろうぜ」

「……香苗ちゃあん、ちょっとこの異世界人たちぶっ殺そうと思うんだけど、いかがでしょうか？」
「さぁんせ～いっ！寧ろ私も手伝うよ～」
「そうか～。じゃあ一緒にやろうな～」
多分俺らの周りには、黒いオーラが纏っているのだろう。
マンガで言うと目のハイライトが消えている。
それほどにちょっとキレている。
「な、なんか二人が怖いんだよマスター！」
「落ち着け二人とも。いきなりどうした？」
サクラは怯え、春美に至っては何がなんだか分かっていない様子。
「香苗ちゃん、言ってやりなさい」
香苗に視線を送る。
顔を上げた香苗には、表情がない。
「私、十五歳なんだ」
「「……えぇッ！？」」
二人は声を上げて驚愕した。

「ちょ、待て！え？十五！？もしかして高校生！？」

「そうだよ。歴とした高校一年生で、入試満点で新入生代表を担った私だよ」

「……あ、ありえない」

今まで冷静な態度を取っていた春美とは思えないほど狼狽している。

でもそれはさておき。

俺は春美の首根っこを掴む。

「はぁるみくぅぅん、貴様はあの一瞬でふたつの罪を犯した。ひとつは香苗にデリカシーのないことを言った。そしてもうひとつ、俺をロリコン扱いしたことだ！！」

キリキリと指を絞めていく。

「な、夏哉！お前ガチで掴むな！」

そんな抵抗する言葉は無視。

しかし春美もただやられる訳じゃなかった。

踵で足の甲を踏んできた。

いくら頑丈な俺でも、そりゃ急所をやられたらそれなりに痛い。

握力を弛めてしまい、その隙に上体を前に振ることで首から手が離

れてしまった。

と、その時。

「うおっ！？」

レールとレールの境に入ったのか、電車が揺れた。

体が前のめりで重心が据わっていない上体の時、電車が揺れてしまったため春美はバランスを崩してしまった。

そのまま倒れるかと思われたが、そうはならなかった。

何故か。

理由は単純で、春美を支えた人物がいたからだ。

その人物は、春美をマスターと呼んで慕っている少女。

先ほど支えたと言ったが、特段サクラが何をしたということはない。

ただ春美が倒れ込んだだけだ。

サクラの胸に。

二人は固まっていた。

恐らく二人は何が起きたか分かっていないのだろう。

いつまでこの状態が続くのか。

そんなことを考えていたが、その終わりは意外にも早かった。

ポムッ。

そんな電子音が聞こえたからだ。

続いてこの言葉。

「あ、こんなところに偶然携帯が」

その言葉を発したのは、先程小学生扱いされた、花街香苗という少女。

その言葉が耳に入り、そして理解したのだろう、サクラは顔を真っ赤にした。

「ふあっ、あ、あ、あああああ～！？」

そして混乱してあたふたし始めた。

少し遅れて春美も理解したのか、サクラから離れようとサクラの肩に手を乗せた。

「ちょっと待って！」

そんな時、沙鳥が何故か制止をかけた。

「サクラちゃん、本当にそこで終わりにしていいの？」

何を語り出すんだこいつは。

終わりって何が？

多分サクラも同じことを考えてるのだろう、？えっ、えっ？と戸惑いを示している。

「好きな人に胸を触られたくらいでテンパって何もしないで、本当にそれでいいの？本当に好きならそこからハグでもしちゃいなよ」

意味が分かりません。

どうすればそんな思考回路になるんですか貴女は？

「え、いや、でも、人前なんだよ。流石にそれは……」

理由が人前だからって、人目がなかったらやるんですか？

あ、好きな人同士なら別に構わないのか。

「忘れたの？今私が魔法を使って、人がそこにいるなぁ、程度にしか見られてないから、よっぽどのことがない限り見られないよ」

本当に沙鳥の魔法はなんでもありだな。

「……」

サクラは言葉を発さず、

ギュッ。

春美をしっかり抱きしめた。

「「本当にやるなよ！」」

俺と春美が同時にツッコんだ。

ポムポムッポムッポムッカシャッカシャッカシャッポムッポムッカシャッカシャッカシャッカシャッ。

二つの電子音が重なり合って聞こえてくる。
発生源は二つの携帯。
それを操るのは沙鳥と香苗。
どうやら二人、連写モードで取っているみたいだ。

ふと、香苗の隣に座っている綯羽ちゃんが視界に入った。
どうも不機嫌そうだ。

撮影中の二人の邪魔にならないように傍による。

「綯羽ちゃん、どうしたの？具合でも悪い？」

「……なんかはるみおにいちゃんをみてるとこのあたりがもやもやするのです」

自分の心臓辺りを撫でながらそう言った。

春美を見て胸がもやもや……。
それはつまり、そういうことなのだろう。

でもとりあえずもう少し詳しく聞いてみよう。

「それって初めて見たときから？」

「ちがうのです。はじめてあったときはぽかぽかしてたのですけど、さくらおねえちゃんといっしょにいるところをみると、もやもやするのです」

これはもう確定だ。

さてこの小さい子供にどうやって教えてあげようか。

「……あのさ、春美お兄ちゃんのこと、綯羽ちゃんはどう思ってる？」

「えっ？えっと、かっこよくて、やさしくて、ずっといっしょにいたいなーっておもってるのです」

「なるほど。ということはね、綯羽ちゃんは春美お兄ちゃんのことが好きなんだね」

「すき？」

「そう、好き。で、今感じてるもやもやするのは、自分の好きな人が他の人と一緒にいていやだな～って思ってるからそうなっちゃうんだよ」

「じゃ、じゃあどうすればいいんです？」

「ん～、そうだな～……あ、そうだ」

俺は綯羽ちゃんに耳打ちをした。

「それをすればいいのですか？」

「そ。そうすればポカポカしてくるはずだから」

「分かったのですっ」

綯羽ちゃんは席を立ち、春美に近寄った。

――――――――――――

どうしてこうなった？

俺はそれなりにあるサクラの胸に頭をうずめさせ、その状態でハグされて写メを取られている。
はっきり言ってカオスだ。
でも振りほどこうにも相手はサクラなため間違っても乱暴には出来ない。

それにあまりにも気持ちいいのだ。
これが脱出の気力を削いでいく。

早くなんとかならないだろうか。

そう考えていると変化があった。

俺の服の裾が引っ張られている。

目を動かしてみると、綯羽がいた。

綯羽が近くに来たためか、シャッター音が消えた。

「どーした？」

子供を無視するほど俺は腐ってない。

ということで声をかけてみる。

すると綯羽は裾から手を離し、その小さな両の手で俺の右手を掴んだ。

ぎゅっと掴むでなく、ホニホニ感触を楽しむようにする仕草はどこか微笑ましい。

「あのね、おにいちゃん。わたしのあたまをなでなでしてほしいのです」

俺の身長が低いとはいえ相手はまだ五歳児、身長差があるから当然見上げている。

綯羽は特に何もしていない。

ただ俺にお願いをしているだけだ。

それなのに、どうしてこんなに破壊力があるんだ……！

まるで何かの強制力が掛けられたかのように、断ったら罪悪感という名の槍で貫かれてしまいそうな気がする。

体は勝手に動いた。

なるべく力を入れずにサクラのハグを解除、すぐに綯羽の頭を撫でた。

？あう～、マスタ～！？という声は無視。

こっちの方が優先順位は高い。

言われた通り撫でてやると、とても気持ちよさそうな、弛んだ表情を浮かべる。

「はぅ～、ほ、本当にはかぽかしてきたのです」

なんだ？

この口振りだと誰かに教えてもらったようだな。

誰かと言っても消去法で一人しかいないが。

「夏哉、何言った？」

なでなでを続けながら首を傾ける。

「ん～、幸せになれる方法、と言えば適切かな。後は自分で気づけ」

「自分でって……」

何に気づけと――あぁ、そう言えばこいつ、ずっと独りだったから人肌が恋しかったのか？

だから年上の俺に甘えたかったのか。

理由も分かったところで、より一層心を込めて撫でる。

「ま、マスター！綯羽ちゃんだけずるいんだよ！私にも撫で撫でしてほしいんだよ！」

頬を膨らましながらサクラが要求してくる。

まさか綯羽に嫉妬でもしてるのか？

そんなことを思いながら、暴れられるのも困るため、結局電車内ではずっと二人の頭を撫でてあげた。

電車を降りて夏哉を先頭に町を歩いていく、のだが、何故か夏哉は余計に周囲を気にしている。

「夏哉、どうした？」

「いや、本当に周りは俺らのこと気にしてないのかなと」

「大丈夫だって。電車の中でも問題なしだったんだから、気にしすぎだって」

心配性な夏哉を沙鳥がたしなめる。

「……お前、この状況でバレたらかなりまずい状況になるって分かってて言ってんのか？」

「分かってるって。沙鳥ちゃんを信用しなさいな」

どうも引っかかる。
多分綯羽のことを言ってるんだろうが、それにしても警戒しすぎではないだろうか？

「香苗ちゃん、夏哉君流石に警戒しすぎだと思うんだよ」

「まぁそれにはちょっと訳があってね。この町じゃ夏哉君嫌われ者で、しかも沙鳥ちゃんっていうファンクラブが出来るほどの超美少女有名人がいるから、大騒ぎになっちゃうんだよ。しかも、ね、あれだから嫉妬が膨らんで絡まれるかもしれないから」

香苗が説明してくれると、今度は綯羽が質問をした。

「かなえおねえちゃん、なつやおにいちゃんがきらわれものって、わたしとおなじなのですか？」

それに近い質問は俺もしようと思っていた。

あいつが嫌われ者？

まるで想像がつかない。

むしろラバーズが出来るほど好かれてるだろ。

「う～ん、同じ、と言えば同じかもしれないけど、でも、今の綯羽ちゃんは一人じゃないでしょ？」

「はいなのです」

「夏哉君も今は一人じゃないから平気なんだよ」

綯羽はホッとした様子だ。

その歳で人の気遣いが出来るとか、精神高すぎだろう。

と、そんなこんなで夏哉の家の前に到着。

自分の家だというのにチャイムを押そうとしたとき、

「あ、も、もしかして沙鳥、さんですか？」

見知らぬ男が沙鳥の名前を呼んだ。
まぁ数時間前に来た世界だから殆どが見知らぬ男だが。
風貌と言えば、だいたい大学生かそこらだろう。
私服で筋肉隆々というわけではないがガッシリした体型だ。

「あ、はい。そうですが、どちら様ですか？」

知り合いかと思ったが沙鳥も知らない男らしい。
そんな彼女の肩に夏哉が手を置いて、小声で叫ぶ。

「ちょ、沙鳥！なんでだよ！普通に見られてんじゃん！！」

「いやだって、弓さんと話すかと思ったから、もう解除していいかなって」

「気を抜くな！」

「え、そこにいるのは……まさか、柊……！？」

夏哉のことが視界に入ったのだろう、顔面蒼白になっている。
この反応、どうやら本当に夏哉は嫌われているようだ。

「こ、ここ、このやろう！沙鳥さんから、は、はな、離れろッ！！」

声を震わしながらポケットに手を突っ込むと、折り畳み式のナイフを取り出し、刃を夏哉に向けた。

待て待て、嫌われてるのは分かったがどうして刃物が出てくる？

いくらなんでも過剰防衛すぎる。

その行動に夏哉は全く動じず、ため息をついていた。

「あの、夏哉、その……」

逆に沙鳥が罪悪感に押しつぶられて落ち込んでいた。

そんな沙鳥の頭に夏哉は困った表情をして手を乗せた。

「落ち込むな落ち込むな。俺は気にしてないって」

沙鳥を慰めるような行為。

それを男は違う見解で認識したようで、さらに激高した。

「さ、沙鳥様に何するんだ化け物ッ！！」

叫びと同時に駆けだしてきた。

夏哉と男との距離は５ｍもない。

俺は夏哉と男の間に体を滑り込ませる。

はっきり言って俺はキレていた。

夏哉を化け物呼ばわりしたからだ。

俺たちの出会いは、あまりいいものではなかった。

でも対話をしていくうちに夏哉の優しさに触れ、いい奴だと理解した。

そんな奴を理不尽に化け物呼ばわりして、あまつさえ刃物を向けるなんて、俺の怒りを買うには十分すぎる理由だった。

神からもらった、左目の『直視の魔眼』を発動させる。

すると左目から見える世界には黒い線と点が付け加えられた。

右手を手刀の形にして後ろに引きながら一歩前に出る。

男が俺の間合いに入った瞬間、黒い点目指して腕を振るった。

が。

それは叶わなかった。

何故なら、俺の腕が掴まれたからだ。

俺はその手の主を視線で追った。

いや、追うまでもない。

俺の目の前にいたから。

「夏、哉？」

俺は目の前にいる夏哉に驚きを隠せなかった。

少なくとも俺は夏哉と男の間に入った筈だ。

それなのにその夏哉が目の前にいた。

夏哉は男に顔を向ける。

夏哉は男の右腕も掴んでいた。

「それ、銃刀法違反じゃないんですか？というか、化け物のこの俺にそんな小さい刃物が聞くと思ってるんですか？」

「あ、あ……、あぁ……」

「これは見なかったことにしますから、帰ってください。それ以上暴れるならそれ相応の対処はさせていただきます」

「ひぃぃぃっ！？」

男は夏哉の手を振り払って帰って行った。

それを見て『直視の魔眼』をやめた。

「ふぅ。春美、やめてくれよ。俺ん家の前だぞ？騒ぎ立てないでくれよ」

「でもあいつ化け物呼ばわりしたんだぞ？許せるわけねぇよ」

「いいんだって。俺はガチで化け物なの」

「は？」

俺は夏哉から化け物たる所以を簡潔に説明された。

化け物というのは自分でも理解していて、周りもそれを受け入れているらしい。

「……お前凄いんだな」

「ありがとさん。で、どうすんだ？今思えば別に俺ん家にわざわざ入らなくてもここで出来んじゃないの？沙鳥も人払いの魔法使えるから見つかる心配ないだろうし」

「それもそうだな。ちょっと聞いてみる」

俺は神に念話を放つ。

（「おい、神様」）

……返事がない。

もう一度試してみる。

（「応答しろ幼女」）

（「ひゃ、ひゃいっ？なんでしゅかっ！？」）

何故か噛み噛みで帰ってきた。

（「おいどうした？」）

（「あ、う、ううん、なんでもないですっ」）

そうは思えないが、ここで言い争っても意味がない。

（「到着したぞ。どうすればいい？」）

（「は、はい。じゃあ今から人払いの結界張って、ワープゲートを

出すので、保護対象者をそこにくぐらせてください」）

（「俺たちは行かなくていいのか？」）

（「はい。その後別のを出しますから、そこをくぐってください」）

（「分かった。あ、それから」）

（「はい？」）

（「普通に人払いとかゲートとか使ってるが、神は世界に干渉しちゃいけないんじゃ――」）

（「今日は本当にありがとうございましたっ！それじゃあっ！！」）

堂々と俺の指摘を無視しやがった。

ま、俺が気にしても無駄なことだけど。

「今神が人払いの結界張って、その後ワープゲートが出るって言ってたから、そこをくぐれば綯羽の体質は治って、普通の暮らしが出来る」

「そうなの？よかったね、綯羽ちゃん」

「はいなのですっ」

香苗と綯羽は嬉しそうだ。

言葉にしないだけで、他のみんなも嬉しいという感情は抱いているようだ。

「じゃあ春美君たちはどうするの？」

沙鳥からの質問だ。

「俺たちはまた別のワープゲートで元の世界に帰る。向こうに待たせてる仲間もいるからな」

「あ～、そうなんだ。じゃあそろそろお別れだね」

「そうなるな」

「ちょい待ち」

突然、夏哉に制止をかけられた。

「どうした？」

「それってさ、綯羽ちゃんとも別れるってこと？」

「そうなるな。神たちは綯羽を保護するって言ってたから」

「そっか……。じゃあさ、その神と会話とかって出来るか？」

「会話？」

（「春美さ～ん、準備できました～」）

ここでちょうどよく神から念話が入った。

（「ナイスタイミングだ。なぁ神、夏哉がおまえと話したいって言ってる」）

（「ふえっ？なな、夏哉君がっ！？」）

ん？

なんか……慌ててる？

（「どうした？」）

（「な、なんでもないですっ！」）

って、またこのやりとりか。

（「えっと、じゃあこれでっ」）

ブンッ

そう言うと、空中にモニターみたいなのが現れた。

そこには神――そういえば正式名称は創造神だっけか――が写されていた。

「うわっ、な、何これっ！？」

俺以外には予告なしの登場だから皆驚いている。

あ、最初に声を上げたのは沙鳥だ。

「夏哉、これが神だ」

「あ、マジで？えっと、神様？聞こえますか？」

『は、はい。それで、話があるって聞いたんですけど……』

なんか、俺の時と比べてテンパってないか？

それともただの気のせいか。

そんな考えをしている間に話は続いていく。

「あ、はい。その、綯羽ちゃんのことなんですけど、そっちが保護するって話を聞いたんですけど」

『そうですよ。その女の子はあまりにも迫害を受けていたので、その原因となっている力を消して、別の治安のいい世界に送る予定です。因みに前の世界ではその子に関する記憶は消されてしまいます』

「そうですか……。ちょっと待っててください」

一旦区切ると、夏哉は綯羽に目線を合わせるようにしゃがんだ。

「ねぇ、綯羽ちゃんはお父さんとかお母さんに会いたい？」

「え？あ、その、パパとママはもういないのです……。じこでしんじゃって……」

「そう、なんだ。よし」

再び顔を上げる。

「神様。これは完璧わがままなんですけど、この子春美のところで保護させてあげられませんか？」

「へ？ちょっと待て。どうしてそうなる？いや、綯羽を預かるのは別に構わないけどさ」

『その、私も理由を聞きたいんですが』

俺と神は夏哉に説明を要求した。

「この子さ、今までずっと独りな訳だったんでしょ？しかも家族もいない。もし家族がいるなら一緒にいさせてあげればいいけどさ、それができない訳じゃん？安全な世界って言ってもさ、知ってる人が全くいなきゃ嫌でしょ？綯羽ちゃんも、春美と一緒にいたいでしょ？」

「は、はいなのですっ」

「な？しかも春美ってチートなんだろ？つまり綯羽ちゃんを守れる力はもってる。神様って春美となんらかの関わりがあるみたいだから連絡とか取りやすいだろうし、綯羽ちゃんも安心出来る。その方が良くないかなって」

確かに夏哉の説明は理にかなっているかもしれない。

綯羽のことを考えるなら、一人にさせるよりは俺たちと一緒にいた方がいいだろう。

『あ、えっと、女の子がそれでいいならそれで』

「綯羽ちゃん、どうしたい？」

「わたし、おにいちゃんといっしょにいたいですっ」

綯羽は即答だった。

「じゃあ決定だな。神、俺も一緒に行くぞ。サクラもそれでいいな？」

「私は構わないんだよ」

『分かりました。じゃあ今開くので、そこに入ってください』

「分かった」

そこでモニターは消え、入れ替えに縦長の楕円型の光が現れた。
これがワープゲートなんだろう。

俺は夏哉の顔を見る。

「じゃあ俺は行くな」

「おう。ん～、なんか言うべきだよな。じゃあ……絶対綯羽ちゃんを守れよ」

「言われなくてもだ」

言い終わると今度は綯羽が夏哉に言葉を掛ける。

「おにいちゃん、ありがとうっ」

「どういたしまして。幸せにね」

「はいなのですっ！」

隣を見るとサクラも香苗と沙鳥に別れの言葉を贈っていた。

「サクラ、大丈夫か？」

「あ、うん。大丈夫だよ」

サクラも綯羽も俺の側に来て夏哉たちと対面する形になる。

「じゃあ、次会えるかどうかは分かんないけど、次会えたらよろしくな」

「こっちこそ、もしそっちに行ったらよろしくな」

「あぁ」

短く答えて、俺は光をくぐっていった。

――――――――――――

「えへへ～」

翠谷綯羽の問題を解決した後、創造神様は何故かにやにやしていた。

若干頬も赤い。

「どうしましたか、創造神様」

「ねぇゼウス」

「はい？」

「夏哉君って、カッコよくて優しいよね」

「……はいいいいいいいっ！？」

番外編　《四章》別れ（後書き）

作者「投稿遅れて申し訳ありませんでした！」

香苗「二十日ぶりくらい全く投稿してなかったよね？何してたの？」

作「普通に課題やってました」

香「そういうのって計画的にやれば問題ないと思うんだけど」

作「ぐふっ！！それを言われたら困るんですが……」

香「で、ずっと黙ってる真樹ちゃんはどうしたの？」

真樹「……これ作者が言うべきなのでしょうが、はっきり言って後書きが面倒で、ぱぱっと終わらせたくなってきました」

作「あ～、じゃあもう終わらせちゃう？」

香「いや、私はいいんだけど、いいの？久しぶりの投稿なのに後書き短くて。やる気がないとか思われない？」

作「でも何書けばいいか全然思いつかない……」

香「えっと、なんか最後夏哉君にフラグが立ったよね」

作「勝手にフラグを立ててしまい、空ねぇすみませんでした」

真「作者話広げる気がないですわね」

香「じゃあほんとに終わらせちゃおっか」

真「ですわね。クロスライトさん、空お姉ちゃん、感想ありがとうございました」

作「あ、次回の話はゴールデンウイーク最終日のお話です」

真「そういえばそこの描写はありませんでしたわね」

作「そういうことです。それではまた次回に」

番外編　《五章》入れ替え

「ふふっ。あ～、マンガって面白いな」

ゴールデンウイークとかいう休日、初めて夏哉の家に行った日の夜、
私は沙鳥から借りたマンガを読んでいた。
夏哉は風呂に入っている。

それにしても、地球にある娯楽は面白いな。
マンガ然り音楽然り。

「ん？」

次のページをめくると、興味のある絵があった。

「これ、もしかして……」

私は頭の中でひとつ閃きが起きた。

――――――――――

「ああ～あ」

寮の風呂から出ると、つい大きな欠伸をしてしまった。

今日は結構遊んだ。
遊んだと言ってもゲームしかしてなかったけど。

せっせと階段を上がり、自分の部屋へと戻る。

「ただいま～」

「お、夏哉ナイスタイミングだ」

玄関でアンが出迎えてくれた。
どうやら俺を待っていたようで、そしてどこか嬉しそうだ。

「どした？」

「ちょっと試してもらいたいことがあるんだ」

「あーちょいまち。洗濯物おいてくるから」

靴を脱ぎ、中に入る。

「あ、急がなくてもいいからな。急用ではないし」

「はいよ」

そうは言われても、何があるのか気になるからちゃっちゃと終わらせる。

一、二分ほど経って、俺とアンはテーブルがあるところに座る。

「で、なんだ？」

「ちょっと実験をしたくてな」

「実験って？」

「内容は言わん。成功してのお楽しみだ。というわけでこれを飲んでくれ」

アンが俺に小瓶を手渡してきた。
それは透明で、黄色味がかった液体が入っている。

「……飲んだらアンの奴隷になるとか無いよな？」

「お前私をなんだと思ってる？私にそんな趣味はない」

「まぁ冗談だけどさ。死にはしないよな？」

「当たり前だ。どうして好きな奴を殺さなきゃならない」

それも当然か。

「つかさ、まだ一週間くらいしか経ってないのに、俺らすごい仲いいな」

「そういうものか？」

「そでしょ。少なくともキスをする間柄ではないな」

「あ、その、怒ってたりするか？」

イタズラをして叱られるのかとビクビクしている子供のように、アンはこちらの様子をうかがってくる。

ちょっとは不安もあるらしい。

「全然。怒ってねぇよ。つかあれで怒るくらいならここにアン泊めねぇって」

「そ、そうか。へへっ。ありがとう夏哉」

はにかみながらお礼を言ったその姿は、めちゃくちゃ可愛かった。

正直そういうのに耐性が無いために直視は出来ず、話を元に戻す。

「あ～、で？これ、普通に飲めばいいの？」

小瓶を振りながら聞いた。

「ん？そうだ。その蓋を外して飲んで――くれる前にちょっと待て」

蓋を外そうとした瞬間制止をかけられた。

「どうした？」

「その前に、今すぐ誰か人を思い浮かべろ」

「人って、制限広いな……。誰でもいいのか？」

「なるべく私たち四人がいいな」

四人というと、真樹も含まれるのか。

ん～、いきなり言われてもな～。

香苗、沙鳥、アン、真樹……。
そういや香苗に宿題見せてもらわないと。
全く手をつけてないし。
あ、じゃあ香苗でいいか。

「決まったぞ」

「よし、じゃあ一気に飲み干せ」

今度は制止をかけられなかったので蓋を開けて飲み干した。
するとだんだん眠くなる、というか、意識が遠ざかって行く気がした。

「あ、なん……だ、これ……」

「夏哉。出来れば横になってくれないか？」

アンの声が聞こえた。

指示通りその場に横になった。

全体重を床に乗せたためか、更に意識は遠ざかり、何も考えられなくなった。

意識が戻った瞬間、体がビクンとなった。
いや逆か。
ビクンとなったから意識が戻ったのか。
重たい瞼を擦りながら、こうなった現況であろう人物の名前を呼ぶ。
「アン――ん？」
なんか違和感がある。
ちょっと待て、嫌な予感しかしないぞ。
というか俺は何故、横になっていた筈なのにテーブルの上で伏せっている？
目覚めたばかりにも関わらず、事の重大さに気付き始めた俺の頭は冴えていく。
まずは辺りを確認する。
アンはいない。
そして俺の部屋、ではない。
構造は一緒だが、家具の種類や配置が全然違う。
でも見覚えはある。
「こ、これはもしかして……」
あぁ、これで完璧確信した。
念のため自分の体を確認した。

「香苗と体が入れ替わった、だと？」

原因はもちろんあの薬だろう。

――――――――――

ん、んん、あれ？
私いつの間にか寝てた？

瞼が重くて開かないため、ゴシゴシとこする。

「なんだ、私じゃないのか」

すると何故かアンさんの声が聞こえた。
もしかして寝てる間に遊びにでも来たのかな？

「あん、さん？いらっしゃい……」

「アンさん……もしかして香苗か？」

「そうだけど……」

あれ？

今の質問おかしくない？
声を聞く限りじゃ近くにいるはずなのに。
もしかして見えてないのかな？

というか、今の夏哉君の声？

頭はまだ働かないけど、体はやっと動きやすくなってきたため、上半身を起こし目を開ける。

目の前にはアンさんがいる。

そして背景は……あれ？
私の部屋じゃ、ない？

「あれ？何これ？」

訳が分からず呟くが、また夏哉君の声がする。
一体どう言うことだ？

「ほら香苗。これがお前だ」

そういって手渡してきたのは手鏡。
それを見ろってことなんだろう。

アンさんからそれを受け取り、顔をのぞかせる。

夏哉君がいた。

「……え？」

私が声を出すと、鏡の中の夏哉君もつられるように口を開く。

「あ、あの、アンさん？も、もしかして……」

「そういうことだ。お前と夏哉は入れ変わったということだ」

「な、な、なんでッ！？」

私はアンさんに詰め寄ろうとテーブルの上に手を乗せた。

すると、

パリーンッ！！

テーブルのガラス部分が砕けてしまった。

「……え？」

このテーブルは脚の部分とガラスの部分が別々に出来ているようで、脚に影響は及んでいないけど、それに乗っていたガラスは粉々に砕けて、床に散らばった。

「あ、アンさん？何かやった？」

「いや、これは知らない……。普通に、お前がやったんじゃないのか？」

「だ、だって、私全然力入れてないよ？軽く体重掛けただけなのに……」

ドドドドド！

私がどうにか弁解しようとしていると、上からドタバタと音が聞こえてきた。

「ど、どうしたんだろう？」

「一応言っておくが、これも私じゃないぞ」

それは理解しているつもりなので気にせず、思考をテーブルの方に戻す。

これ、弁償しなきゃいけないよね……。

理由はどうあれ壊したのは私な訳だし。

お金足りるかな。

「なぁ香苗。音、近づいてきてないか？」

「え？」

耳を澄ましてみると、確かに大きくなってきていた。

「私見てこようか？」

アンさんが提案した。

アンさんならすり抜けられるし、飛べるから楽なんだろう。

「大丈夫だと思うよ。もし何かあったとしても、今の私は夏哉君だから、介入しても余計混乱しちゃうだろうし」

夏哉君のことは好きだけど、全部を知ってる訳じゃないし、絶対ボロが出ちゃう。

もうほんとに大ピンチという状況にならない限り、下手に動かない方がいい。

そう考えているうちにもどんどん音は近づき、近くまで来たかと思ったら止まった。

「聞こえなくなったな」

「うん――」

バンッ!!

アンさんの言葉に頷くのとほぼ同時に部屋の扉が開かれた。

「夏哉君!」

そして私の叫ぶ声が聞こえた。

なんか自分の声を客観的に聞くのって恥ずかしいな。

って、のんきに考えてるんじゃなくて、私の声って事は、もしかして夏哉君?

「ね、ねぇもしかして夏――」

「絶対動かないで！！」

入り口のところまで行こうとしたけど、夏哉君――かどうかは分からなかった。
私の体を使っている誰かはそれを止めた。

必死な叫びだったため、とっさに従う。

再びドタバタと聞こえるのは、多分慌ててこちらに向かっているからだろう。

「や、やっと、ついた……。はぁ、はぁ」

息も切れ切れといった様子で、膝に手を着けている。

「あの、確認、だけど……香苗で、合ってる？」

「う、うん。夏哉君、だよね？」

「せい、かい……。はぁっ、ちょ、アン、体支えてくれ……。もう無理」

そう言って前に倒れ込んでしまう夏哉君。

それに機敏に反応したアンさんは、しっかりと夏哉君を支えた。

「な、夏哉どうした！？そんなにつらいのか！？す、すまない、あの薬に苦しむ要素なんて入ってないはずなのに……！」

口振りからして、アンさんがこの状況を作り出したのだろう。
私も徐々に冷静になりつつあるから頭も働く。

薬とか言うからには、夏哉君はそれを飲んだのだろう。
そしてアンさんは、目覚めた私に確認を取った。
それは特定の人物と意識を交換させるというものではなく、ランダムにということだ。
でも、もしそうなら知らない人と交換してしまうという可能性もあるから、顔見知りとしか交換できないという条件があるか、または夏哉君が私を指定して、それをアンさんに言わなかったということになる。
後者の方なら嬉しいな。
沙鳥ちゃんでもアンさんでも真樹ちゃんでもなく私を選んだって事だから。

「あ、あの、勘違い、してるみたいだけど……これは走って、転んだりして、疲れたから、ぐったりしてるわけで、毒にやられたとか、じゃない、からな……」

「じゃ、じゃあ平気なんだな!?どこもおかしなところはないんだな!?」

「まぁな。それにしても……被害はテーブルか」

私の声で夏哉君は呟く。
視線の先は床に散らばったガラスの欠片。

「あ、ご、ごめんなさいっ!私、壊しちゃって……」

「気にしなくていいって。むしろこの程度で安心してる」

夏哉君は怒らず、逆にほっとした様子だった。

その様子に疑問が浮かび上がり、それはアンさんも同様だったらしくそれを口にした。

「この程度って……お前こうなること分かってたのか？」

「分かってた、っていうより気付いたんだけどな。香苗、俺が化け物だって話覚えてるか？」

「あ、うん……」

それは三日前に聞かされた、夏哉君の悲惨な過去。

理不尽と不条理が折り重なった、お世辞にも明るい人生とは言えないもの。

「つまりそういうことだ。普通の人間が化け物の体操れると思うか？」

「あ、そっか……」

そこまで言われれば何が言いたいのか分かる。

そして、夏哉君の子供の頃の心情も、分かった。

「あ、あの、ふたりとも？出来れば説明がほしいんだが」

この場でアンさんだけは理解できていないようだ。

「えーと、例えば、私の力を十として、夏哉君の力を千とするよ？」

「あぁ」

「その場合ね、私の十パーセントと夏哉君の十パーセントじゃ数が違うでしょ？」

「そうだな。香苗は一で夏哉は百になる」

「そ。まぁ数値にしたらもっと差はあるんだろうけどね。で、そんな差があるのに、私が自分の体の感覚で三の力を夏哉君の体で使ったらどうなると思う？」

「……夏哉の体だと三百の力がでてしまって、壊そうと思わなくても壊れてしまうわけだ」

「そういうこと」

多分今の夏哉君だからちゃんとコントロール出来るわけで、子供の頃は今の私のように、どの程度力を加えればちょうどいいのか、というのは分からなかっただろう。

だから周りから化け物と罵られてしまう。

「二人とも、ホントすまない……。こんな大変なことになるとは思わなかった……」

アンさんは更に落ち込んでしまった。

「えっと、まず説明っていうか、どうしてこうなったか聞きたいんだけど……」

「お、俺も」

夏哉君も聞くって事は、なんの説明もなしにアンさんの薬を飲んだってこと？

出会ってたった一週間ほどしか経ってない相手が作った、得体の知れない薬を飲むなんて……。

夏哉君にとってのアンさんの立ち位置ってかなり上位って事だよね。

ちょっと嫉妬を覚える。

「じ、実はな、沙鳥から借りた漫画で同じ様な効果のある薬があって、それが面白そうだったから作ってみたのだが……」

「ちょ、待て。いや、確かにそんなシーンあったけど、その巻って俺が風呂入る前に初めて読んでなかったか？」

あ、夏哉君お風呂は言ってたんだ。

それを証明するように、前髪がちょっと濡れている。

「そうだが？」

「……じゃあ何か？その薬、たかが三十分で作ったってか？」

「そうなるな。でも比較的簡単だったぞ」

その発言、世の科学者に言ったら泣かれるんだろうな。

「それは、簡単に薬作れたことに誉めればいいのか、その場の思い

つきで作ったものを実験もせず飲ますなと怒ればいいのか分からないな」

「怒ってくれ。これは完全に私のせいなんだから、気の済むまで怒鳴りつけてくれ」

アンさんは苦虫を潰したような、苦悩な表情を浮かべている。
相当後悔しているんだろう。
その感情は痛いほど分かる。

そんなアンさんを見て、夏哉君はこちらに顔を向けずに答えた。

「じゃあ許す」

じゃあって。
どういう繋がりがあったのかは分からない。

でも夏哉君のことだから許すだろうとは思っていたけど。

「ど、どうして？」

アンさんは聞き返す。

「俺思うんだけどさ、どうしてお仕置きしなきゃいけない奴の要求に応えなきゃいけないんだろうな？お仕置きって、そいつの嫌なことをしなきゃいけないだろ？それなのにアンの望んだことしちゃ意味がない。だからお前の嫌なほう、つまり許すを選択した」

夏哉君の説明を聞いて、夏哉君らしい答えだなと、ちょっと微笑んだ。

「それより、さっさと元に戻してくれ。このままじゃ冗談抜きで被害出るぞ」

「そ、そうだな。すぐになんとかする」

「あ、ところでアンさん」

「なんだ？」

「どうして私が夏哉君と入れ替わっちゃったの？」

そこの理由は聞いていない。

「それか」

私の質問に、今度は拗ねるような感じで反応した。

「それはな、夏哉が思い浮かべた相手と入れ替える薬だからだ」

「え、それじゃあ夏哉君私思い浮かべてくれたの？」

これはかなり嬉しい。

しかもこれは夏哉君になんの説明もなく、私を思い浮かべたということになるから、素の夏哉君の感情になる。

そういうことなら、アンさんの薬はありがたい。

「へへっ、私の勝ちだねっ」

「……香苗、頼むから俺の体で可愛らしく言ってくれるな。なんか気持ち悪い」

あ、そういえばそうだった。

「私が言えたことではないが、正直香苗の声、体で夏哉の口調は違和感ありすぎる」

それはそうだろう。
私は絶対俺とか言わないし。
言うとしても僕だ。

「それもすぐ終わるだろ。早くなんとかしてくれ」

「分かってる。夏哉は、もう大丈夫か？」

「うん。ありがとうアンちゃん」

「おぉ、香苗だ」

「違和感あったか？」

「無かったな」

「うん。私が聞いても私っぽかった」

「ありがと」

アンさんは夏哉君を話し、亜空間を開いてその中を覗いた。

「ねぇ夏哉君、ホントごめんね、テーブル壊しちゃって」

「もう、気にしなくていいってば香苗ちゃん。あれは事故なんだから、香苗ちゃんのせいじゃないって」

「……夏哉君、この状況楽しんでる？」

「ちょっと」

「……一応確認したいんだけどさ、私の体触ってないよね？」

「……ごめん、そんな考えはよぎった」

「素直に言っちゃうんだ。でもその口振りじゃ触ってないってことだよね」

「触ってはない」

ん～、複雑だな。
私の体に興味あるってことは喜ばしいことだし、でも実際触られるのは恥ずかしいし。

ところで……

「……夏哉君、さっきからアンさん動かないんだけど、どうしたのかな？」

「俺、ものすごーく嫌な予感がするんだけど……」

「私も」

とりあえず、声を掛けてみよう。

「アンさ～ん、どうしました～？」

「……切れた」

「「はい？」」

「材料が、切れた」

「「や、やっぱり……」」

お決まりすぎる展開に、私たちは驚きよりため息が出た。

番外編　《五章》入れ替え（後書き）

沙鳥「私、出番全くなかった……」

作者「でも名前は出たべ？」

沙「名前を登場とは言わないってば！」

アン「作者のメモによるとな、最初のこの入れ替わるネタ、香苗じゃなくて沙鳥だったらしい」

沙「作者なんで変えた！？」

ア「五章のお泊まりの場面で、夏哉が？沙鳥の家、場所は分かるけど言ったこと無い？っていう発言を思い出したからだ」

沙「夏哉～！なんてことを言ってくれたんだ！！」

作「いや、でも俺的にはちょっと嬉しかったかもしれない」

沙「なんで！？」

作「思いついたネタが、完全下ネタだったから」

沙「そんなの関係ないっ！」

ア「下ネタってなんだ？」

作「人間なら誰しも考えることだ。お前には多分理解できないこと

だ。知りたいなら後で夏哉にでも聞きなさい」

ア「分かった」

沙「素直には教えてくれないだろうけどね」

ア「じゃあ後で教えてくれ沙鳥」

沙「いいよ」

作「で、話し変わるけど、今回のこれは、次話で終わりを目標にしたい」

沙「もう断定できないのが悲しいね」

作「言うな」

ア「まぁ私としては、出番があるから何話あってもいいがな」

作「でも今回は夏哉と香苗がメインだからな。それを忘れるなよ」

沙「ぶ〜！最近私夏哉との絡み少ないって〜」

作「そうなんだよな〜。少し頑張ってみる」

沙「やた〜！」

作「まぁ次回じゃないけどな」

沙「いいよいいよ！でも絶対だからねっ」

作「りょーかい」

ア「ではそろそろ終わりか？」

作「そーだな」

沙「クロスライトさん、ソラトさん、ｋｉｉｔｉさん、感想ありがとうございましたっ。次回もよろしくお願いします」

番外編　《六話》可愛い

「さぁて香苗ちゃん、これは本気でお仕置きが必要だと思うんだけど、どうかな？」

「当然だな。それ以外にやることも見つからないし。悪いことしたら罰は受けてもらわないと」

俺たちはそれぞれ体の口調に合わせて喋り、アンを睨みつける。

アンはたらたら妬汗を流している。

「お、お前ら、この状況楽しんでないか？」

「楽しむ？」

暗に指摘され、少し考えてみる。

……うん、実は楽しんでるかもしれない。

「アンの言う通りだ。多分楽しんでる」

「あ、夏哉君も？実は私も」

どうやら香苗も同じ考えらしい。

「どんな風にアンさんをいぢめようか考えるのって楽しいよね？」

「あぁ、楽しいな」

やっぱり同じだった。

「ははっ、そうか。楽しんでるんだったら良かった」

こちらから顔を逸らし、どこか遠い目をしている。

「まぁ冗談はともかく。アン、明後日の学校までに新しいの作れるか？」

「作る。絶対作ってみせる！」

気の抜けた表情から一転、真剣な表情になった。

俺たちも真剣になる。

「でもどうするの？材料がないんじゃ作りようがないでしょ？」

確かに、それが原因で今俺たちは困ってるわけだし。

「もしかして魔界にでも帰るのか？材料ってこの世界のじゃないんでしょ？」

思ったことを口にしてみるが、言ってすぐにそれはないと気付く。

「それは流石に無理だ。今行ったら材料を取りにいく前に捕まるか、死ぬだけだ」

死ぬと言われて、正直あまり実感は沸かなかった。

？死ぬ？という単語自体はよく使うが、俺たちの使うものとアンが使うものじゃ重みが違う気がした。

「じゃ、じゃあどうするの？」

香苗が当然の質問を投げかける。

「そうだな……。また別の材料を使って作るか」

どんな材料を使うか考えているのだろう、思案する表情を浮かべるアンを見て疑問を覚えた。

「アンってさ、なんでそんな簡単に薬とか作れるの？」

「ん～、それに適切に答えるとしたら、暇つぶしだな」

「というと？」

「魔界と言うところは娯楽がないんだ。というか必要としてない。私もその一人だったが、地球の存在知ってからは娯楽に興味を持つようになって、何をしようかと考えてたら物作りになって、薬とかを作る様になったわけだ」

「なるほど、理解した。で、作るとして時間は？」

「……半日くれ。その間に絶対完成させる」

鋭い視線が向けられる。

絶対その時間までに終わらせてくれる。

そう訴えてくる視線だ。

「じゃあよしだ。アン、明日の夜までいいから、今日は寝るな」

「ね、寝るな？別にいいが、なんで？」

「お前は香苗が起きるまで、寝返りうって物を壊さないようにしろ。香苗、それでいいな？」

「あ、うん。そうだよね。私はいいけど、アンさんは起きれるの？」

「忘れたか？私は人間じゃないからその位余裕だ余裕だ」

「そっか。アンさんよろしくね」

「あぁ」

二人も俺の意見に納得したようだ。

まずは睡眠時の対処は出来た。

「あ、そう言えば夏哉」

「ん？」

「お前らは何処で寝るんだ？」

「何処って、自分の部屋――」

「あ、そっか」

俺が答えようとすると、香苗は言葉を遮りながら納得するような声を上げた。

「どした？」

「私たち体が入れ替わってるから、体に合った部屋を使うか、心に合った部屋を使うかってことだよね？」

「そういうことだ」

納得した。

「やっぱりそこは体に合わせるべきだろ。もし女の子の部屋から男が出てきたらいろいろアウトだろ」

「だね。じゃあ後で私の部屋行こ。布団敷かなきゃ」

「了解」

「……なぁ香苗」

何かに気付いた様で、アンが香苗に話しかける。

首だけを動かしてアンを視界に入れる香苗。

「何？」

「お前風呂入ったか？」

何を突然言い出すのかと思ったら、風呂？

なんか関係ある――

「いや、まだ入ってな――」

「「あぁっ！！」」

俺と香苗は声が重なった。

関係大ありだった。

香苗は風呂に入ってない。

つまり体を洗ってない。

体を洗うためには俺が香苗の体を扱うしかない。

風呂は共同だから裸体の女子がいる。

「香、香苗さん？ちょっと、今日だけはお風呂なしにしてほしいんですけど……」

「き、奇遇だね夏哉君。私もそう言おうとしてたところだよ」

「誰かに誘われて風呂に入るとかある？」

「今のところ無い」

「よし！香苗友達少なくてナイス！」

「嬉しいんだか悲しいんだか分かんないやっ」

あはは、と俺の顔で笑う香苗。

「さて、じゃあそろそろお前の部屋に行こう」

「うん、そうだね」

と、ここで普通に動いてしまうと、また香苗が何を壊してしまうか分からないため、アンの魔法で香苗を不可視状態にし、空中を浮かせるという方法で移動した。

香苗の部屋に入り、テーブルの上を見ると、置いてあった香苗の携帯がチカチカ光っていた。

「香苗、あれ着信来てない？」

「あ、ホントだ」

自分の携帯に手を伸ばそうとして、

「ちょい待ち」

俺は待ったを掛ける。

「俺の体というのを忘れないように」

「あ、そうだね」

「ここはアンがやるべきだな。アン、香苗の指示通りにやってくれ」

「別にいいが、夏哉じゃだめなのか？」

「女の子には男に見せられない秘密がいっぱいあるんだよ。な、香苗？」

「別に夏哉君になら見られていいけど、とは言い切れなくてごめんね」

「いーよ。俺も秘密くらい持ってるし」

「……なぁ、これ言うのも二度目なんだが」

「「ん？」」

「はっきり言って違和感しかなくて気持ち悪い。特に夏哉の体を使う香苗が」

それはそうだ。

いつもロリロリで可愛らしい香苗が男口調、男らしいとは言わないが性別上男の俺が女口調なんて、違和感しかないだろう。

「そんなこと言われたって……」

「そうだよっ！アンさんには言われたくないっ！！」

「ホント楽しんでるな～夏哉。このままでもバレずに過ごせるんじゃないか？」

「そんなこと言って薬作るの怠けたら、あらゆる手段を使って香苗と一緒にお前をいぢめるからな」

「速攻で終わらせる」

素直でよろしい。

「で、着信誰から？」

「えっと、沙鳥からのメールのようだ。内容は……『カナ～、宿題手伝って！この通りっ！！』だそうだ」

「どの通りなんだろうね」

香苗のツッコミに頷く。

「あ、そだ」

その後俺は面白いことを閃いた。

――――――――――――

「カ～ナ～、いますか～？」

九時ちょっと過ぎ、私は麦谷寮のカナの部屋の前に立っている。

中からトテトテという足音が聞こえた。

続いて扉が開く。

「いらっしゃ～い」

「おっじゃましま～す。宿題写させてもらいま～す」

「……入ってきて早々何言ってるの？」

「いや、私だよ?終わる気配ないって」
香苗はため息をついた。
「写すの厳禁。自分でやりなさい」
「え〜」
私は靴を脱ぐ。
その際カナとは別の靴を発見した。
「夏哉いるの?」
「いるよ。朝ご飯一緒に食べたし」
「う〜!カナ卑怯!私もここに住めばよかったな〜」
ひがみを言いながら、後ろから香苗に抱きつく。
するとなんと言うことだろうか。私とカナの身長差が20?はあるため、谷間に後頭部がフィットする形になる。
胸の重さをカナに乗せられるため、若干楽になる。
「ぬわっ!?ちょ、な、何するのっ!?」
何故か慌て出すカナ。
どしたんだろ?

いつものことなのに。

「カナさんや、ちょっと驚きすぎじゃない？」

「いや、いきなりそんなこと、やられたら誰だって……」

「そお？私たちの間じゃ普通じゃない？」

「そ、そんなこと無いってば！常識的に考えておかしいでしょっ」

「家の中で常識は持ち出さないでよ～。いいじゃん、誰も見てないんだからさ～」

「そういうの男の台詞！」

「な～にしてんだ～？」

私たちのやりとりの間に、ひょこっと首だけを出して割り込んだ、私たちの好きな人。

「なつやく～ん、助けて～！」

「……隣がいるから騒いじゃだめだぞ？」

「ちょ――」

「わ～いっ。夏哉のお墨付きもらった～！」

私はより一層強く抱きついた。

「ま、待って！も、もうだめ！負けました！負けましたから、助けて香苗！」

「へ？」

今カナ、香苗って言った？

「へへっ、私の勝ち～。もうちょっとこのままでもよかったのにな」

今度は夏哉が、女の子のような口調で話している。

まるでカナが言っているかのように。

「え、え、な、何これ？」

戸惑うことしか出来なかった。

「……それなんてマンガ？」

夏哉とカナから機能の説明を聞いて、最初の一言がそれだった。

「生憎と、これが現実だ」

カナが男口調で喋った。

……気持ち悪い。

「まぁ魔法がある時点でなんてマンガ？っていう風にはなるんだけ

どね」

夏哉が女口調で喋った。

……気持ち悪い。

「二人とも、普通に喋って」

「お前、信じてないだろ？この状況」

「でも沙鳥ちゃんの反応が一番正しいと思うけどね。普通は信じられないよ」

「でも俺たち普通じゃないだろ？」

「それを言ったらお終いだけど……」

「だーかーら！なんで二人そんな順応してるの！？」

今までの会話、二人の口調が逆転してるだけで鳥肌物だった。

「なんでって言われてもな」

「昨日のうちに慣れちゃったから、とでも言えばいいのかな？」

「それってそんな簡単に慣れるもの？」

「ん～、それなりに慣れるな。てか沙鳥とかこういうの興味ないの？うちらの中じゃ一番興味ありそうに思ってたんだけど」

「いや、興味はあるけど、オカマには興味ないわけ」

「あぁオカマ」

私たちは夏哉の体をジッと見た。

「え、私オカマ!?」

でも中身はカナなので、カナの口調で驚く。

「体は男、中身は女。オカマ以外に何があるの?」

「うっ、そう言われると……」

私の指摘にカナは押しとどまった。

「まぁそれより、宿題やっちゃおうぜ。それ目的なんだし」

「そだね。まぁ私は終わってるけど」

「りょうか〜い――って、さっきから聞きたかったんだけど、アンちゃんは?」

「亜空間に引きこもってお薬制作中だと。夕方には何とかなるって言ってたな」

「ふぅん。で、夏哉が言ってた?負けました?って?」

「あぁそれは、どっちがボロを出さずに沙鳥にばれないでいられるかってので、今日の昼飯四人分を賭けて」

「ボロって言うか、カナ二言しか喋ってなかったけどね」

「言っておくけど、沙鳥ちゃんが私の体に抱きつくのはちゃんと考慮してたよ？昨日は抱きつかれなかったから、今日は来るって」

「マジですか？」

「マジです」

「はぁ、まぁ負けは負けだから従うけどさ。それはともかく、ガチでやろ。沙鳥のことだしやってないんだろ？」

くっ、流石夏哉。
私のことを正確に読んでるじゃないか！
だったら私も読んでやる！

「ま、どうせ夏哉も二割程度しかやってないんでしょ？」

「残念、八割だ」

「はぁっ！？八割！？な訳無いでしょ！？夏哉は勉強劣等生組でしょ！？」

「おいこら。少なくとも成績半分は言ってるぞ」

「カナの声でそんな口悪く言うなっ！」

「ごめんなさい香苗ちゃん」

「気にしなくていいけどさ。もうネタバレした方がよくない？沙鳥ちゃん一生やらないよ？」

「流石カナ。私のことをよく知ってらっしゃる」

夏哉の頭を撫でるというのはちょっぴり違和感があったけど、そんなことはお構いなくよしよしした。

夏哉はため息をつく。

「俺と香苗が賭けやってたのは話したな？」

「うん」

「で、そうなると香苗に化けるためには沙鳥に宿題を教えるって道を通らなきゃならない」

「え、じゃあ……」

バカと定評のある私でもここまで言われれば分かる。

夏哉は、カナとの賭けに勝つためにわざわざ勉強をしたということだ。

よくもまぁお昼ご飯のためにここまでやるもんだ。

尊敬に値す――

「だから昨日の夜香苗の宿題写した」

がしっ

反射的に夏哉のほっぺを掴む。
いや、カナのほっぺって行った方が正しいのか。
「夏哉君？あんたさっき私に宿題写すなとか言わなかった？」
「違うよ。あれは私が言ったんだよ。夏哉君は言ってないって」
「あ、そうなんだ。夏哉は言ってないんだ」
「そうだよ」
よし勝った。
「へぇ、じゃあカナにお仕置きしないとね」
「え、私！？」
夏哉の体がビクッと震える。
何を驚いているんだろう。
「ちょっと、あんたは夏哉でしょ？」
「「へ？」」
私はそれぞれの体を指さす。
「だから、あんたが夏哉で、こっちがカナでしょ？」

「「あ」」

二人もようやく気付いたみたいだ。

つまり私がお仕置きするのは今現在のカナの体ということだ。

「へへっ、か～な～。覚悟してね～」

私は手をわきわきさせながら近づき、コチョコチョの刑を食らわせた。

結果から言うと、八時間以上あるうちの二時間程度しか宿題は出来なかった。

何故か。

問題は開始一時間後に始まった。

この一時間はそれ相応に宿題はやった。

この調子で行けば余裕で終わる。

そんな時、私の服の裾を弱々しく引っ張る人が現れた。

カナだ。
正確に言えば、カナの体を使ってる夏哉だ。
さっきまであぐらをかいていたはずなのに、今は体育座りになっている。

「どしたの？」

「あ、あの……」

私が聞くと、ちょっと赤い顔を逸らし、もじもじし始めた。

何この可愛い生物。

そろそろ決意したのだろう、私の目を見て口を開く。

「あ、あのね、沙鳥……その、トイレ、行きたいんだけど……一緒について来てくれる？」

「……」

開いた口が塞がらない。

私は予想外すぎて動き出せなかった。

何？
なんなのこれ？

どうして私の目の前にこんな激カワ生物が存在してるの？

「か……」

「か？」

「かなぁぁぁぁぁぁぁ！」

「むふッ！？」

私は辛抱たまらず抱きしめた。

あんな可愛い姿を見せられて、誰がハグシないでいられるのだろうか？

「カナカナカナカナカナカナカナカナカナカナカ～ナ～ッ！！」

「ちょ、沙鳥、待って！俺香苗じゃねぇ！！」

「そんなの関係ない！こんな可愛い生物を見せられたら我慢きかないって！」

「待って！俺何気にピンチなの！香苗助けて！」

「いや、私が動いちゃうと何か壊しちゃいそうだし……」

「お前の大事な何かも壊れるぞ！！俺の話聞いてた！？大声じゃ言えないけど思い出せ！」

「あっ！！待って！アンさん呼ぶ」

「たの――ちょ、沙鳥、どこ触ってんだ！」

「はぁ、はぁ、カナ～。可愛いよ～」

「おま、鼻血垂れてる！香苗急げ！お前の貞操が危ない！！」

「分かった！」

その後私はアンちゃんによって気絶させられた。

で、こっからは聞いた話だけど、夏哉は結局カナにレクチャーしてもらって一人で行ったらしい。

帰ってからは二人雑談なんかしてて、私が目覚めたときには二人は元に戻っていた。

私が目覚めてからはまた勉強が始まったけど、私はあのカナ（なつや）のかわいさを忘れられず、集中できなかった。

結果宿題は終わらず、しかも私と薬を作った現況のアンちゃんは夏哉とカナの手によってお仕置きされた。

全く災難な日だった。

楽しかったからいいけど。

因みにお仕置きはいやらしい意味ではなくコチョコチョだった。

あれは拷問すぎる。

番外編　《六話》可愛い（後書き）

真樹「今回の番外編、私名前すらでませんでしたわね」

夏哉「んなこと言われてもな。あん時はお前のことなんて全然知らなかった訳だし」

真「その言いぐさ、今なら分かってる、という風に聞こえて気に入りませんわね」

夏「そりゃわるぅございました」

作者「ふぅ、今回は宣言通りここで終わったな」

真「無理矢理感が否めませんが」

作「それは言わない約束」

真「というかツッコミ。沙鳥様どれだけ気絶していたんですの？薬完成は夕方ではないんですの？」

夏「あれな、遅くて夕方って意味だったらしい。実際二時頃にもってきたってわけ」

作「補足説明サンキュー！」

真「本編で書けばいいものの」

作「忘れてたんだよ」

?:?「それで作者さん、何時になったら紹介してくれるんですか?」

夏&;真「「いつの間に!?」」

作「あぁ玲央君、すっかり忘れてた」

玲央「酷いこと言いますね。慣れてますけど」

夏「で、どなた?」

玲「音野玲央です。kiitiの分身キャラみたいなものです」

作「次回出演予定だ」

真「そうでしたか。よろしくお願いしますわ」

玲「よろしくお願いします」

作「さて、ここで急遽思いつきコーナーをやりたいと思います」

夏「何それ?」

作「実は友達と話してて、キャラ投票面白くね?って言われたのです」

真「つまり人気キャラ投票をするという訳ですわね」

作「そゆこと。ルールは一人三票まで。一人に振ってもバラバラに振ってもあり。二票しか振らないってのもあり。期限は八月三十一

日まで。『四人の魔法使い』で登場したキャラなら誰でもあり、とこんなもんかな？」

真「一位には何かあるんですの？」

作「そいつメインの話しを書こうかと。予定だけど」

真「期待せずに待ちましょう」

夏「あ、あれは？今日より後に登場してくる人物は？」

作「あ、それもあるか。……じゃあ票は変更可ということで。変更する場合は一言付け加えてもらうと嬉しいです」

夏「じゃあそう言うことで、今回はここまで」

真「クロスライトさん、ソラトさん、ｋｉｉｔｉさん、感想ありがとうございました」

番外編　《七章》拉致未遂

五月も半ば頃、俺とアンは二人で学校の帰りに商店街に寄った。
夕食の材料集めのためだ。

「久しぶりに肉でも食うか」

「肉って、なんの肉だ？」

「豚肉だな。牛は高いから無理」

「まあ私は豚も好きだがな。どんな風に食べるんだ？」

「焼き肉。普通に焼いて食うだけだ」

「シンプルだな。楽しみにしてる」

「あいよ」

小声での会話も終わり、ちゃっちゃと買い物をすませる。

そしてそれが終わり、帰宅途中。

「あ～、焼き肉なら香苗呼ぼうかし」

「香苗も食べるのか？」

「思い付きだから決まってはないけどな。焼き肉なら作んの楽だし」

「じゃあ呼ぼう。私も香苗と食べたい」

「無理強いはダメだからな」

「安心しろ。香苗は絶対来る。誰が好きな人と食べるご飯を拒絶するか」

「そーですかい」

と、このような素っ気ない態度を取っているが、内心はかなり期待してた。

やっぱり香苗とも一緒に食べたい。

ここで本来なら沙鳥とか真樹も呼びたいところだけど、二人とも寮生活じゃないから無理。

真樹はともかく、沙鳥は地団駄を踏んでるところだろう。

と、会話をしながら歩いていて、残り１００ｍと言ったところで騒ぎが起きた。

「や、やめてくださいっ」

前方で誰かが二人組の男と思しき人に無理矢理車の中に連れ込まれそうになっていた。

女子、ではなく男子だ。

正直フラグが立たないためホッとした。

「アン」

「ん？私が介入するのか？」

「そうじゃなく、荷物見てて」

「分かった」

道の隅に食材を置き、車の側まで近づいた。

よく見れば、無理矢理連れ込まれそうになっているのはうちの生徒だ。

「あの、すいません」

「あァ！？」

話しかけると、柄の悪そうな男が反応してきた。

「その人、うちの学校の者なんですけど、何かしましたか？」

「てめぇコイツのダチか？」

恐っ！

もの凄く顔を逸らしたい。

「いや、そう言うわけではないんですけど、帰り道に同じ学校の人が騒いでたら気になるじゃない、です、か……」

「……」

喋ってる途中から、何故かジッと俺の顔を見つめてくる男。

まるで値踏みをしているようだ。

「お前、ありだな」

「は？」

何が、と言う前に先に行われた。

「お前、攻めと受けなら受けだろ？」

ゾワッ！！

今、俺の全身に怖気が走った。

こんな恐怖は初めてで、鳥肌なんてビンビンだ。

俺はポケットから携帯を取りだし、ボタンをいくつか押して耳に当てた。

「け、け、警察ですか！？あの、知らない人に変なこと言われて、貞操の危機なんですが！！」

ここで人を殴るという選択肢を取らなかった俺の行動は表彰ものだ。

「はぁ！？普通警察呼ぶか！？」

男はきびすを返して車に戻った。

その時捕まっていた麦谷高生のことを思いだし、未だもう一人の男から逃れられていないのに気付いた。

急いでそちらに向かい、麦谷高生を掴んでいる手に軽く手刀を当てた。

「イテッ」

声とともに手を離したので、麦谷高生を引き剥がす。

「チッ、収穫なしか。ずらかるぞ！」

二人はそのまま車に乗って去っていってしまった。

……あれ、結構犯罪ものだよな？

ガチで警察に電話した方が良かったかもしれない。

メモ帳の画面を開いている携帯を見ながらそう思った。

「あ、えっと、助けてくれてありがとうございます」

「え？あ、あぁ」

どうやら思考に耽りすぎた様で、話しかけられた。

襟元の学年証を見ると、同じ一年だった。

同い年の麦谷高生は黒髪のたれ目で、眼鏡をかけている。

インドア派という印象を受ける。

「大丈夫だった？主に貞操」

「え、貞操？なんでですか？」

「いや、なんでって……あ、それより、何したんだ？」

正直口にするのははばかれたので、話を変える。

「これ、僕の大事なフルートなんですけど」

そう言ってぎゅっとケースを抱きしめた。

その中にフルートが入っているんだろう。

「それを振り回してたらさっきの人に当たっちゃって」

「なんで振り回すんだッ！？大事なものじゃねぇのかよッ！？」

つい初対面に全力でツッコんでしまった。

「でもたまに無性にものを振り回したくなりません？ほら、バックとか」

「少なくとも大切な物は振り回さないな」

「そうですか？まぁそれはさておき、本当にありがとうございました。危うく大変な目にあいそうでした」

「まぁ何事もなくて何よりだ」

「ほんとですね。というか、僕なんかに働かせてなんの得があるん

でしょう」

「へ？働く？」

それは初耳だ。

初耳も何も、全く知らないが。

「あの人たち、ぶつけたんだから体で払えって言ってきて。僕見た目通り力ないのに」

もしかしてこいつ、事の重大さに気付いてない？

「もう済んだことなんだし、気にするな」

知らぬが仏という言葉もあるから、教えないようにしよう。

「あ、そう言えば名乗ってませんでした。音野玲央（おとのれお）です」

「あ、柊夏哉です」

「本当にありがとうございました」

「おう、もう振り回すなよ」

「はい」

そこで俺たちは別れた。

「アンお待たせ」

「あぁ」

「そだ。アン、先に行って香苗に言ってきてくんない？もし早めに飯の準備してたらあれだし」

「そうだな。じゃあ大急ぎで行ってくる」

アンは空を飛び、一瞬で見えなくなった。

見えなくなった理由は、障害物をすり抜けたためだが。

俺は比較的ゆっくり歩いて帰宅した。

「あれ、おかしいな？」

部屋の前に着いた途端、俺は唖然としていた。

目の前に、さっき別れたばかりの音野玲央がいたからだ。

よく見ると、ドアノブを回している。

俺の部屋の扉の。

「……おい」

「へ？あ、夏哉君」

困った顔から一転、嬉しそうな顔をする。

「どうしたんですか？」

「いや、それは俺の台詞だ。何やってるんだ？」

「僕は部屋に入ろうとしてるんですけど、鍵が合わなくて」

俺はため息をつく。

こいつ天然か？

さっきの勘違いといい今といい。

「そりゃ当然だ。そこは俺の部屋だ」

「何言ってるんですか？僕の部屋ですって。ほら、三階で右から五番目の部屋です」

「いや、ここ四階だぞ？」

「へ？」

「だから――あ～、見せた方が早いな」

俺は扉に近づきながら鞄をまさぐり、鍵を一つ取り出した。

「ちょいといいか」

ドアノブに鍵を差し込み、クルッと９０度。

ロックが外れた音がした。

「ほら開いた」

「ほぇ～。夏哉君、僕の部屋の合い鍵持ってたんですか」

「そろそろ納得しろよ！」

「えぇっと、夏哉君どうしたの？」

と、ここで第三者が割り込んできた。

首を傾ければ、俺の初めての友人、花街香苗がいた。

その隣にはアンもいる。

「ちょうどいい。香苗、ここ四階だよな？」

「へ？そう、だけど？」

「ということだ玲央。お前の部屋は一個下だ」

「そうみたいですね。ごめんなさい、間違えちゃいまして」

「まぁ気にしてないけど。もう間違えるなよ」

「はい。じゃあまた今度」

「おう、またな」

本日二度目の別れを終えた俺たち。

「夏哉君って音野君と知り合いだったの？」

「いや、さっきいろいろあって――ってなんであいつの名前知ってんの？」

「なんでって、同じクラスだよ」

「……え、マジですか？」

俺の脳裏にはあの顔はなかった。

でも香苗がそう言うなら、本当にそうなんだろう。

「一番廊下側で、前から二番目の席だよ」

「ホントよく覚えてるな」

「まぁね。で、夏哉君。焼き肉ご一緒していいの？」

「おう。なんか手伝ってもらうかもしんないけど一緒に食おう」

「うんっ」

「あら～、夏哉ついに男の子にまでフラ――」

「それ以上は言うな」

翌日の登校中、昨日のことを沙鳥に説明した後の第一声がこれだった。

俺は沙鳥の両頬を手で掴んだ。

「う～、天下の沙鳥ちゃんにこんな事するの夏哉くらいだよ～」

「あら、どうやらこういう扱いは嫌いなようで。香苗、今から沙鳥をいや沙鳥様を敬おう」

「うん、そうだねっ」

なんか香苗はノリノリである。
日頃の仕返しにということなのだろう。

「沙鳥様、鞄お持ち致します」

香苗はそっと沙鳥の鞄に手を置き、それを取ろうとした。

「うわ～っ、待って待って待って！いいから！もっとさっきみたいにやってよ！」

「さっきみたいって、沙鳥ちゃん口をむーってするってことでしょ？もしかして沙鳥ちゃんマゾ――」

「その程度でマゾ扱い！？それがマゾだったらマッサージ受けて気持ちいいって言う人皆マゾだよ！！」

「やーねー香苗ちゃん、こんな道端でマゾマゾ連呼するなんて」

「ホントだね～。あんな大声ではしたない。常識を知ってんのほしいよね」

「……ねぇ、私泣いていい？」

「「駄目」」

「ダメときましたか。じゃあ怒っていい？」

「「ダメ」」

「それがダメなら何すりゃいいの！？」

「笑うのさ」

「何かっこよさげに言ってんの夏哉！！虐められて笑うなんてホントマゾじゃん！」

「ほらまたマゾ言った。やめなさいって」

「あ～腹立つ！カナ！」

「ん？」

「これから一週間夏哉虐めよう！！」

「こらこら、何本人目の前に堂々と虐め宣言してるんだ。虐めかっこわるい」

「だって私虐められてカナ虐められて、夏哉虐められてないじゃん」

「そんなことないさ。俺は過去悲惨ないじめを」

「それ過ぎたことだからどうでもいい。てか私が虐めてないからノーカン」

「沙鳥神経図太くなったな」

「褒めるな褒めるな。で、カナ。どう？」

「……靴に足つぼのあれを敷くってのはどう？」

「わ～い、香苗が敵に回った～」

「それありかもしれないね。で、靴繋がりで左用の靴だけを揃えるとか」

「それは、夏哉君が靴二組もってなきゃダメでしょ？それよりさ、夏哉君の靴と私の靴を交換しない？」

「それ絶対夏哉履けないね。よし、それでいこう」

「後は、教科書同士を全部一枚一枚交互に挟んでなかなか取れなくするっていうのは？」

「ありだね。えっと、じゃあ授業中シャーシン飛ばすってのは？」

「あぁ、あれ地味にウザいもんね。一緒にやろっか」

「はいけって～」

「ホント全部ウザいやつやろうとしてるなお前ら」

「というか私の存在は完璧忘れ去られてないか？しょうがないけど」

「あぁ！閃いた！」

「沙鳥ちゃんも？」

「うん。いじめの適任者普通にいたね！」

「私か？」

「親子丼、ビーフシチュー、炒飯」

「何をすればいい？」

「心変わりはえぇよ」

「だって沙鳥の料理だぞ！？誘惑されるなと言う方が無理だ！」

「じゃあ俺が作るっていったら？」

「く、くそっ！やめろ！私に究極の二択を迫るなっ！！」

「ハグしてやる」

「夏哉、出来るだけ早めに作ってくれ」

「夏哉それ卑怯！」

「そうだよ！そんなの勝ち目ないよ！」

「なんとでも言え！勝ちは勝ちだ！」

と、こんな会話をしてるうちに学校に到着した。

四時間目が終わって昼休み。

四人屋上で飯を食う前に真樹を拾いに五組に向かった。

「あ、真樹ちゃ～ん」

香苗が見つけ、名前を呼ぶ。

「少々待ってくださいまし」

真樹の声が聞こえたので俺たちは壁により掛かって待つことにした。

「あ、柊」

名前を呼ばれた。

首を傾ければ、灯里がいた。

こっち来いと手招きしている。

「お、どうした？」

「えっと、いつものなんだけどね」

「ん、るあちゃん？」

灯里のいつものはこれくらいしかない。

「うん。明後日、大丈夫？」

「明後日ね。はいよ。灯里はくんの？」

「うん、一応ね」

「了解。ところでさ」

「ん？」

「俺メアド教えたっけ？」

「いや、知らないけど」

ポケットから携帯を取り出す。

「わざわざ言いにくんの面倒だろ？」

「うん、そうだね」

灯里も携帯を取りだし、赤外線でメアド交換をした。

「さてと」

後ろを見ると、真樹が既にいた。

「待ち人が到着したんで俺はこの辺で」

「ねぇ、一つ聞いていい？」

「あに？」

「柊ってハーレムでも目指してるの？」

若干真剣な表情で聞いてきた。

「逆に聞くがあれがラバーズに見えるか？」

それに対して若干おどけた風に質問で返してみる。

「見えなくは、ないかな」

「見えんのかよ」

「でも天雲さんに関しては、見える見えないじゃなくて見ないって人の方が多いかな」

「納得」

「で、実際どうなの？」

「七割五分ラバーズ」

「な、七割って……ってあれ？計算おかしくない？三人なのに七割？」

悩む灯里に、

「秘密だ」

そう言い残して香苗たちと合流し、屋上に向かう。

「……嫉妬していい？」

沙鳥の第一声。

「駄目」

「るあちゃん？」

香苗の第一声。

「そ」

「貴方たち本当に仲違いしてたんですの？」

真樹の第一声。

「俺はしとらん」

「でも仲良かったな」

アンの第一声。

「それは否定しない」

「アンさんはなんて仰いましたの？」

「仲いいなって」

そういや真樹はアンのこと見えないんだよな。
どうにかできるかな～。

難しい議題に頭を悩ませる。

そこから会話は途絶えることなく、屋上への扉に到着した。

扉を開くと、とんでもないものが視界に飛び込んだ。

男子生徒が倒れていた。

番外編　《七章》拉致未遂（後書き）

沙鳥「カナいーなー。夏哉とご飯。しかも焼き肉」

香苗「いいでしょ～。でもちょっとダイエット考えないとな～」

沙「（ま、私は何食べてもあんま体重変わんないから関係ないけど、とは言いません）」

作「こいつ飯食っても体重あんま変わんないんだぜ。しかも全部胸に行く」

沙「さ、作者!?私せっかく空気読んで何も言わなかったのに!!」

香「ははっ、もういいよ。もう諦めたから。私はこれからロリ路線で頑張るから」

沙「え、元からロリ路線じゃ――」

香「なんだって?」

沙「なんでもございません!!」

作「香苗おっかね～。さてそれはさておき、コラボ第二弾です！」

玲央「香樹さん、ありがとうございます。ｋｉｉｔｉも喜んでると思います」

作「それなら何よりだ」

沙「でもまだあんまり活躍してないよね。本格的には次回？」

玲「いや、そんな活躍なんてしませんよ。僕陰薄いですし」

香「そうかな？陰薄くはないと思うけどな～。むしろ天然過ぎて強烈かと」

玲「僕天然なんかじゃないですよ？」

作＆amp;香＆amp;沙「「「（それはない）」」」

作「ま、まぁいいや。それより感想の方よろしく」

沙「えっと、クロスライトさん、蛍夜さん、感想ありがとうございます。蛍夜さんは感想初めてくださいまして、すっごく嬉しいです！」

香「次回もよろしくお願いしますっ。投票の方も待ってます」

番外編　《八章》馴染む

「……え？」

俺は固まった。

今まで通りだったはずだ。

今まで通り朝起きて、アンと部屋を出て、香苗を待って、沙鳥と合流して、学校に行って、昼休みになって真樹を呼んで屋上に来た。

その際灯里と会話をしたが、それも日常範囲内だろう。

目の前に人が倒れている。

こんな光景を見るのは初めて――いや二度目だ。

二度目とは言え慣れるはずはなかった。

「しっかりしなさいッ！！」

声を上げたのは、真樹だった。

その声を聞いて我に返る。

「あの方はわたくしが見ますわ！！沙鳥様、アンさん、いつでも治癒できる準備をお願い致しますわ！香苗はもしもの為に携帯を用意、夏哉もまだいいですから教師を呼びに行ける準備を！！」

的確に指示してくれたお陰で俺たちは適当に動けた。

俺は出入り口付近に待機、香苗も隣で携帯を取り出す。
真樹は生徒の元に駆け寄り、沙鳥とアンはその後に続く。

真樹が生徒に触れた。

「ま、真樹、もしかしてそれに毒があるの？唐揚げ食べかけだし…
…」

ここからじゃ影に隠れて見えないが、どうやら弁当を食べていたらしい。
唐揚げはそのことだろう。

しかし真樹はそれに答えず、ため息をついた。

「全く、人騒がせな……」

「どういうことだ？」

アンが訪ねるが、アンの声は真樹には届かない。

「どう言うこと？だって。アンちゃんが」

「皆さんご安心を。ただ寝てるだけですわ」

真樹の言葉を聞き、緊迫した空気が消える。

「よかった～」

香苗が安堵のため息をつく。

「まぁ真樹、寝てんだよな？」

真樹たちの元に近付きながら聞く。

「寝てますわ」

「まさか睡眠薬でも盛られてたのか？」

香苗と沙鳥は再び張り詰めた空気を纏う。

「いえ……弁当内にそれらしい匂いはありませんし。魔法、と言ってもアンさんが気づかないわけなさそうですし」

「確かにそれらしい反応はないな」

「それらしい反応はないって」

「無臭の睡眠薬か、はたまた単に昼寝か」

真樹の考えに香苗が苦笑する。

「え～、流石に食べてる最中に昼寝は……」

「た、例えばですわよ！」

言った本人も後者の選択は無いようで。

と、俺たちの会話がうるさかったのか、ムクッと起き上がった。

「んん～……」

目をこすりながらキョロキョロ首を振った。
そのとき見えた顔に見覚えがあった。
「玲央！？」
「音野君！？」
俺と香苗の声が重なった。
今起きあがった人は、間違いなく同じクラスで、昨日拉致られそうになっていた音野玲央だった。
その証拠になるかどうかは分からないが、側にフルートが入っているであろうケースがおいてあった。
「え？……あ、夏哉君。おはよう」
「あ？あぁ、おはよう――じゃなくて！お前大丈夫か！？」
「ほぇ？大丈夫って、何がですか？」
状況をいまいち理解していない玲央に、真樹は話しかける。
「えっと、音野さん、で構いませんわね？」
「あ、はい。え～、どちら様でしょう？」
「申し遅れました。わたくし早乙女真樹と申します」
「早乙女ってあの？うわ～、凄い！有名人だ！」

まるではしゃぐ子供のような反応をする。

「早速質問させていただきますが、今意識が朦朧とする、ということはありませんか？」

「ありませんけど、どうしてです？」

「先程まで貴方が寝ていたので、どうしたものかと――」

「あぁッ！！」

真樹の言葉を遮って、玲央が悲痛の叫びをあげた。

どうしたのかと心配になる。

「ぼ、僕の大切な唐揚げが落ちてる！！」

「「「「……」」」」

アンを除く俺たちは拍子抜けしていた。

それは今言わなきゃいけないことなのだろうか？

で、唯一反応が違ったアンはというと、

「やはり、悔しいよな。あれほどうまい食べ物をたったひとかじりしか口に出来なかったんだからな……」

悲しみを共有していた。

俺は思った。

今日の晩ご飯は唐揚げにしよう、と。

昨日焼き肉を食べたが、そこは気にしないようにしよう、と。

「あ、その、私、今日からあげお弁当に持ってきたから、食べます？」

ちょっと可哀想になったからか、香苗が遠慮がちに言った。

玲央の顔が輝く。

「い、いいんですかっ？ありがとうございますっ！！」

「ど、どういたしまして。あ、えっと、私、同じクラスの花街香苗です。よろしくね、音野君」

「はいっ」

玲央はものすごい笑顔だった。

「あ～、その、話が脱線してしまいましたが、音野さん、先ほどまで寝ていらしたのですが、何か心当たりなどありますか？」

「ぽかぽかしてたからです」

「「「「「「は？」」」」」」

五人の声がそろった。

「急に屋上でご飯を食べたくなりまして、それでたべていたんですが、ぽかぽか陽気が気持ちよくってですね。つい寝てしまいました」

「と、言うことは、真樹正解？」

「そ、その様ですわ、沙鳥様」

まさかの後者が正解とは、誰が予想できただろうか。

「そうだ、今更だけど、ご一緒していいか？」

「え？ご一緒って？」

「いや、玲央が先にここ使ってた訳だから、後から来た俺らも使っていいか許可を取ろうと」

「大丈夫ですよ。むしろ僕がここにいていいんですか？」

「俺は構わんよ。皆は？」

俺の問いかけに皆了承した。

「というわけで、一緒に食おう」

「はい」

玲央が頷くと、屋上の扉が開いた。

「さ～とりちゃ～ん、ご一緒してい～で～すか～？」

陽気なリズムに乗せて話しているのは、長嶋千佳音。
その後ろには樋口夕馬、源快斗、種原穂奈の三人がいる。

「ど～ぞ～。あ、この音野君も追加ね～」

「ん、了解～」

四人は俺たちの元まで来た。

「さて、自己紹介しますか。私四組の長嶋千佳音です。で、このデカいのが源快斗、中くらいのが樋口夕馬、ちっこいのが種原穂奈ちゃん。快斗と夕馬は私と同じ四組で、穂奈ちゃんは隣の三組ね」

「音野玲央です。僕も、種原さんと同じ三組です」

「あら、そうなんだ。あ、座っていい？」

「どうぞ」

千佳音に答えると、皆地面に座った。

「それにしても増えたな。九人か。後一人でバスケ出来るな」

弁当の包みを開きながら快斗が言う。

「いや、快斗がいるんだから出来るって」

「四対五か？また微妙だな～。千佳音ありならまぁまぁかも」

「快斗君バスケ出来るの？」

沙鳥が箸でご飯をつつきながら聞く。

「いや、やれないことはないけど……」

「つまりあれよ。快斗はスポーツ万能人間ってこと。一週間くらいやればかなり良い線だと思うよ」

「そういえば千佳音さんはバスケ部でしたわよね？」

「そだよん。で、たまに快斗たちがわたしの練習見てくるからもう大変。女子は先輩の命令で色気使って勧誘しろだ、男子は1対1仕掛けにいくわ、一旦練習が止まんのよ。ま、楽できていいけど」

「そりゃ大変そうだな。でもお前何もしないっしょ？」

俺の言葉の意図が分からないようで、千佳音は首を傾げた。

「なんで？確かに何もやってないけど」

あり、そこは当たったんだ。

ボケのつもりだったのに。

「これ言ったら怒られるから言わない」

「なるほど」

俺のこの発言で何がなるほどなのか、夕馬は納得していた。

「つまり色気も何もない千佳音は快斗の元に言っても意味な――」

「うっさいバカ！」

千佳音は夕馬の頭を叩いた。

そして怒りの矛先は俺に向いた。

「なっつやく～ん、ちょっとこっちに来なさい」

「なぁ種原、ウインナーやるから卵焼きくれない？」

「へ？わ、私ですか？」

突然話を振られて困惑する種原。

「夏哉～、何穂奈ちゃんといちゃついてんの～？またフラグ立てる気～」

「沙鳥、お前はいちいちそっちに話繋げるな」

「いちいち、ということはどこかでフラグ立てたの？」

夕馬が？全く見当はずれな？質問を繰り出した。

「夕馬よ、俺はどっかの主人公じゃないんだ。フラグなんかたたねぇよ」

「少なくとも私とカナとアンちゃんと真樹と峯岸さんには立ってるけどね」

「やめてくださいまし沙鳥様。わたくし夏哉に興味はありませんわ」

「なるほど、これがいわゆるツンデレのツンの部分――」

「あぁ？」

「真樹様申し訳ありませんでした」

深々と頭を下げる千佳音。

真樹は怒らせちゃいかんよ。

「あの、真樹さん」

夕馬が真樹を正面に見据える。

「なんでしょう？」

「貴方はどうしてそこまでツンデレを否定するんですか？」

「はい？」

「ツンデレは絶対悪ではないはずです。むしろそういう性格が好きという人もいます。もちろん嫌いな人もいるでしょうが。そんなツンデレを、どうして人に恐怖を与えてまでして否定しなきゃいけないんですか？そこまでする必要はないと思います」

夕馬のセリフを正論と捉えたのだろう、うっとうめき声を上げた。

「た、確かにその場の空気で必要以上に責め立てたことは否定できませんわ。特段理由もありませんし……。千佳音さん、申し訳あり

ませんわ」

「ゆ、夕馬が私のために……。夕馬、嬉しいよ！抱きついていい！？」

千佳音は手を前に出して抱きつく準備をしていた。

「さぁ、僕の腕の中においで」

夕馬は千佳音の言葉を了承して迎える。

無表情なため若干違和感はあるが。

「わ～い、夕馬様～！」

そして二人はガチで抱き合った。

「お前らほんと仲いいのな」

俺はため息混じりに呟く。

「そりゃもう、わたしたちは一心同体だかんね」

「え、千佳音そんな風に思ってたの？僕は体のいい女だと」

「ヒド！？今までの人生の中で一番酷い言葉だよそれ！！」

「よかった。千佳音に一番をあげられて」

「そんな一番はいらんわっ！！」

まるでコントを見ているようだ。

俺は、いや俺たちは楽しんでいた。

――――――――――

夕馬君たちが来てから、話はより一層盛り上がっていた。
全く不快ではないし、聞いているだけで楽しかった。
それは私だけじゃなく、夏哉君や沙鳥ちゃんたちもそうだ。

ただ一つ、しょうがないと言えばしょうがない問題点があった。

隣を見る。

一人で黙々とご飯を食べる音野君。

殆どが初対面の中、話に参加しろと言うのが難しい話だ。

何か話題を振ってあげようとするが、何を話せばいいか思い付かない。

考えている途中、ふと音野君を視界に入れた。

ボケッとしているのか、箸がだんだん下に傾いてきた。

「ほっ！」

私は落ちそうになった箸を、音野君の手ごと掴んで落ちるのを防いだ。

「へ？花街さん？」

音野君は驚いた表情を浮かぶている。

そりゃいきなり手を捕まれたら驚かれるだろう。

「え～っと、ごめんね？箸落ちそうだったから」

「あっ、ありがとうございます」

「どういたしまして」

あ、そうだ。

「ねぇ音野君」

「はい？」

「どうぞ」

私は自分の弁当を差し出した。

「へ？」

「ほら、唐揚げ。あげるって言ったからね」

「ほ、本当にいいんですか？」

「うん、どうぞ」

「ありがとうございますっ！」

音野君はとても嬉しそうな表情を浮かべ、私の唐揚げに箸を伸ばした。

「あぁ、やっぱり唐揚げおいしいですねっ。本当にありがとうございます！ごちそうさまです」

「お粗末様です」

「おやおや～？カナちゃんや、何おままごとのお母さん役をやっているのかな～？」

私たちのやり取りに気づいた沙鳥ちゃんがからかってくる。

「ちょ、沙鳥ちゃん！何がおままごと！？いいでしょ別に食べ物あげても！」

「いや否定はしないけどさ、こう、カナがお母さん的雰囲気を醸し出してるとどうにも違和感がね」

「そんなことないもんっ。ていうか、私個人にならいいけど、こういうの音野君だって傷つくんだからねっ」

私の言葉でハッとなる沙鳥ちゃん。

「あ、音野君ごめんね？」

「大丈夫ですよ。気にしてないですから」

「……なぁ音野、気になることがあるんだけどよ」

快斗君がちょっと遠慮がちに訪ねる。

「なんですか？」

「そのケースなんだ？」

音野君の足下に置いてあるそれを指さす。

「ちょ、快斗、それ普通聞く？そこはあえてスルーしなきゃさ～」

「いや、気になるっしょ？」

音野君は弁当の上に箸を置いた。

「これはですね、僕の大切なフルートが入ってるんですよ」

両手を使ってフルートの入ったケースを開けた。

しかし、音野君は固まった。

「どうした？」

夏哉君が訪ねる。

「フルート、家に忘れました」

「「大切じゃなかったのッ！？」」

夏哉君と快斗君の声が重なった。

「大切ですよ。僕のお婆ちゃんの形見、を持っていたお隣さんの友人の娘さんが働いていた楽器専門店で売れ残っていた物を頂いた、とても大切なものです」

「逆に凄いよその繋がり！大切かどうかよりそっちの方に目がいくわ！！」

夏哉のツッコミが炸裂する。

そんな光景を見て、音野君も一応は会話に入れたなとホッとした。

番外編　《八章》馴染む（後書き）

夏哉「……作者、お前確か小説全ページ修正中とか言ってなかったか？」

作者「言いました」

アン「で、終わったのか？」

作「終わってません」

夏「何か言うことは？」

作「遅くってすいません！」

ア「まぁ投稿はしたから強くは言わんが、もっとちゃちゃっとやれないのか？」

作「俺にそんなスペックを求めないでください……」

夏「期待はしてなかったけどな。それにしても、夕馬たち超久しぶりだな。覚えてるやついるか？」

作「忘れた人は『その想いは変わりますか？』参照を」

ア「宣伝入ったな」

作「いーじゃん別に～」

夏「で？これから何すんだ作者？」

作「なんもやることないから、終わる？」

夏「早いなおい」

ア「別にそれは今に始まったことじゃないだろ？」

夏「それもそうだな」

作「じゃあ企画として夏哉、アンにコクるか？」

夏「はぁ！？何それ！？」

ア「よし！作者ナイス提案だ！！」

作「はい、３、２、１、スタート」

夏「あ、えっと、だー！！言えねぇ！！無理、帰る！！」

ア「あーあ、帰ったな」

作「おや？そこまでショックを受けてないな？」

ア「あれはつまり私を意識しまくってるということだろ？むしろ嬉しいじゃないか」

作「あぁなるほど。じゃあアンさんよ、お礼を言ってくれ」

ア「ファルコさん、ソラトさん、クロスライトさん、ｖｉｃｔｏｒ

さん、ムーロンさん、ｋｉｉｔｉさん、蛍夜さん感想ありがとうございます次話もよろしくお願いします」

作「キャラ投票の方もよろしくお願いします！」

番外編　《九章》恋の手紙

「ん、じゃ沙鳥、待たな～」

「あ～い」

俺と香苗、アンは沙鳥と別れた。
理由は単純、掃除が別だからだ。

「俺ら玄関で楽だな」

「う～ん、私微妙。棚の掃除できないし。まぁ下をやればいいんだけどね」

あんまり気にしてはないようだが、やはり小さいことにコンプレックスを抱いているらしい。

うん、からかおう。

「そうなったら高い高いしてやるよ」

「うっ、そ、それは……」

あり？
予想してた反応と違う。

「どした？いつもだったら『子供扱いするなー』とか言うのに」

「いや、その、ね？一瞬やって欲しいな～っと」

あらま、そう来たか。

「ちなみに私は毎日やってもらってるぞ」

「ブッ！？」

「嘘！？」

俺と香苗は驚きの声を上げた。

この金髪女、いきなり何言いやがる！？

「もちろん嘘だ」

「……夏哉君、そういえばアンさんって全然イジられてないよね？」

「え？」

「そうだな。つかさ、イジるより虐めるの方がよくね？」

「ちょ、あれ？二人とも？」

「あ、同感かも。乙女の純情を弄んだ罰は受けるべきだもんね」

「も、もしかして私、地雷踏んだか？」

「まずもう飯は作らないわ」

「ほんっとゴメンナサイ！それだけは勘弁してくれ！！」

「あ、そうだ。今日朝言ってたけど、夏哉君ハグ禁止に――いや接触禁止にすれば？」

「……今日ほど香苗を憎んだことはないぞ？」

「ん、了解。じゃあ香苗、さっさと？二人？で昇降口行こっか」

「うん、？二人？でね」

「な、なつやぁ、かなえぇ。わるかった。私が悪かったからいつも通り接してくれぇ」

泣きそうな声を聞き、流石にやりすぎたかと思った。

「悪かった悪かった。本気でそんなこと思ってないって。全部冗談だからな」

「……ほんとか？」

拗ねたアンはギャップがあって可愛いです。

「ホントだって。なぁ、香苗？」

「え、本気じゃないの？」

「……なつやぁ！かなえぇ！」

「うわあっ、アンさんホントごめんっ！冗談だから！今から夏哉君抱きついていいから！」

「ホントか!?やったぁ!」

アンは本気で俺の背中に抱きついてきた。

あ、あらま～、これは……。

「香苗、マジ話していい?」

「ど、どうしたの?」

「俺、男だよな?」

「少なくとも女の子じゃないよね?」

「しかもバリバリの思春期な訳だ」

これを言った瞬間、香苗の顔が真っ赤になった。

流石香苗。

多くを語らずとも理解をしてくれる。

「い、今はその、だ、だだ、大丈夫、なの?」

「う～ん、ってとこ。今は学校って言う環境だからなんとかだな」

「あ、アンさん」

「ん?なんだ?」

嬉しそうな調子で聞き返してくる。

「あ、あのね、アンさん夏哉君のこと好きだよね？」

「今更だな。好きに決まってる」

「その夏哉君のためにね、出来れば今だけ離れてあげて欲しいなって」

「なんでだ？香苗が抱きついていいって言ったんじゃないか」

アンはより一層強く抱きしめてきた。

「ぬおっ」

あ～、これはそろそろマズいかな？

「……アンさん、香苗さん、ちょっとお手洗いに行かせていただけませんでしょうか？」

「え……な、夏哉君っ！も、もしかして！？」

「ま、まだだけど、そろそろ、な」

「アンさんお願い！このままじゃ夏哉君が大変な目に遭うの！」

「わ、分かった」

香苗の必死な姿に折れたアンは俺から離れた。

俺は小走りでトイレに入った。

戻ってみると、二人は既にいなく、掃除場所にいた。

香苗の側によると、赤面された。

「あ、夏哉君、早かったね……」

なんか勘違いされてる気がする。

「言っとくけど、放置したら治るもんだからな？」

「え、あ、そう、なんだ」

「夏哉、結局何があったんだ？香苗は教えてくれないし」

そりゃ香苗は言えないでしょ。

香苗の心情を想像しながら、どう言い訳をしようか悩む。

「あ～つまりだな、お前の体は柔らかいわけだ」

「胸のことか？」

「胸だけじゃなくていろんなとこも。で、それを男の俺に密着させたら気持ちよくて理性が効かなくなるわけだ」

「ん？気持ちいいなら別にいいんじゃないのか？」

「いや～、そうなんだけど、そのまま気持ちよくなりすぎると、男は色々あって変態扱いされるわけだ」

「気持ち良すぎると変態扱いされるのか？」

「そうなんだよ。だからな、抱きつかれること自体は嬉しいんだけど、俺は変態扱いはされたくない。ということで我慢してくれ」

「ん～……取り敢えず分かった」

理解の方はしていないのだろうが、そこは我らがアンちゃん。空気を読んで深くは追求して来なかった。

「じゃあ香苗、ささっと終わらせよう」

俺たち以外の掃除当番は既に開始していた。

「うん」

掃除用具が外にあるため、いったん外に出る。

「あれ？」

するとしゃがんで靴を取ろうとしていた香苗が声を上げた。

余談だが、本来番号的に考えて香苗は上から二番目の棚だった。

ここまで言えば何を語ろうとしているのか分かるだろう。

「どした？」

下を見てみるが、香苗の頭が邪魔で見えない。

「な、なんでもないよっ」

どこか慌てた様子で靴を取りだし、そそくさと外に出てしまった。

「どうしたんだ香苗？」

アンも不思議そうな顔をしている。

「さぁ？」

その後は普通に掃除をして、昇降口で沙鳥を待っていた。

何故か隣でそわそわしている香苗。

トイレか？

「あー、香苗？行きたいんなら行ってもいいぞ？」

「え！？ど、どこに！？」

ものすごい動揺している。

「いや、その、なんつーか……お花、詰みに？」

「へ？……あっ、その……」

何やら迷ってるご様子。

迷うところか？

「じゃ、じゃあ行ってくるねっ。もしかしたら遅くなるかもしれないから先帰っててていいから！」

「あいよ～。転ぶなよ～」

てちてち走る香苗に手を振る。

「あら、夏哉。カナどうしたの？」

後ろから沙鳥が声を掛けてきた。

「おトイレ。遅くなるかもだから先帰っててていいって」

「え？トイレごときでそんな遅くなる？」

「俺もそう思ってるから待とうと思うんだけど」

「りょーかい」

――――――――――

私は急いで駆け出し、女子トイレに入ると個室に閉じこもった。

「はぁ、はぁ、はぁ……」

体内に熱がこもり、鼓動が早くなり、呼吸とともに汗が流れ出る。

これは走ったせいだろうか？

恐らくそうだが、多分三割、四割程度だ。

では残りの要因は？

「ふぅ～」

一度深呼吸をして、ブレザーの胸ポケットに手を入れる。

そこには先ほど自分で握りしめ、クシャクシャになってしまった紙が一枚。

この紙が私の鼓動を早めている要因だ。

それを元の状態に戻そうと、紙を広げる。

その紙はＡ４サイズのノートを破ったようで、二つ折りの状態だった。

片面にはボールペンで『花街香苗様へ』と書かれていて、もう片面には何も書かれていない。

偏見かもしれないけど、ちっちゃくて丸っこい字じゃないから男性の筆跡だと予想する。

「これって……やっぱりあれ、だよね？」

恋文。

またの名をラブレター、もしくはラヴレター。

意味。
恋い慕う気持ちを書いた手紙。

より一層顔に熱を感じた。

こんなのを貰うのは、もちろん生まれて初めてだ。
もしかして私にモテ期がやってきたのだろうか？

これは素直に嬉しかった。

自分に好意を寄せてくれる人がいるということだから、嬉しいに決まってる。

でも、だからこそ申し訳なく思う。

私は夏哉君が好きだ。

それは一ヶ月と半分前から抱き続けてた感情で、これからも変える気はない。
たとえこの手紙の主が超イケメンでハイスペックな人だとしても、だ。
今の私には夏哉君以外考えられない。

そしてふと、私はひとつの疑問が浮かんだ。
その疑問で頭が冷えていく。

この手紙、ラブレターという前提で物事を考えていたけど、ほんとにラブレター？
中身は確認してないし、普通の手紙ではなく破ったノートだし。
まぁ別になんの紙でもラブレターは嬉しいけど。

それは置いといて、本物のラブレターより、罰ゲーム的なラブレターと考えた方がしっくりくるんじゃないだろうか。
ほら、私ちいさ……小さいし、……幼いから……周りから指さされるだろうし……泣かないもん。

「すー、はぁ～」

一度深呼吸する。

それか、まさかまさかの果たし状かもしれないし。

「……読んだ方が早いよね？」

あれこれ考えるよりさっさと読んじゃおう。
答えは目の前にあるんだし。

二つ折りのそれを開くと、そこには短く文字が書いてあった。

「……え？」

私は驚きの声しかあげられなかった。

なぜなら手紙の内容が、『今日の放課後、僕のところに来てください。まってます』のみだったから。

「僕って誰！？」

思わず声を上げてしまった。

よし落ち着こう。

きっと見間違えだ。

人を呼ぶのに自分の名前も場所も書かないなんておかしいもん。

興奮しすぎて違う文字に見えちゃったんだ。

何度目になるか、目を閉じ、深呼吸をする。

そして目を開くと、

『今日の放課後、僕のところに来てください。まってます』

「やっぱり変わらない……」

じゃあこれはやっぱりイタズラか。

なんだか恥ずかしかった。

勝手に興奮して勝手に落ち込んで。

不思議とこの手紙を書いた主に怒りは覚えていなかった。

きっと自分で薄々気付いていたからかもしれない。

私に告白しようとする人なんていないということに。

それに告白されても私の答えは変わらないだろうから、あまり変化はないし。

その手紙を綺麗に折り直し、胸ポケットへと戻した。

個室の鍵を開け、女子トイレから出ようとした。

『まってます』

私はその文字が頭に浮かんだ。

――――――――――

僕は自他ともに認めるほどに影が薄い。

どのくらい影が薄いかというと、友達三人で遊びに行くと忘れられるくらいに影が薄い。

そんな僕は屋上でお昼ご飯を食べようとしていた。

屋上に着いたときには確実に一人だった。

気がつけば四人増え、またさらに四人増えた。

別に大勢の人が嫌いというわけではなかった。

でも声を掛ける勇気はない。

だから僕は黙々と一人で食べているつもりだった。

――ほっ！――

突然手を握ってきた一人の女の子。

どうしてそんなことをしてきたのか分からなかった。

――え～っと、ごめんね？箸落ちそうだったから――

彼女曰くそういう理由らしい。

ということは何か、彼女は僕のことを見ていたということだろうか？

僕という存在に気付いていたということだろうか？

――ほら、唐揚げ。あげるって言ったからね――

まさかそれを覚えているとは思わなかった。

正直に言おう。

すごく嬉しかった。

僕という存在に気付いてくれることが、こんなに嬉しいとは思わなかった。

彼女のお陰で、僕は久しぶりにこんな大勢の前で会話が出来た。

まぁ最初の挨拶は抜くけど。

僕は今までに感じたことのない、初めての感情を覚えた。

なんだか胸の辺りがポカポカする。

テンションも上がってハイな気分になっている。

彼女を思い浮かべると、笑みが浮かぶ。

あれ？

もしかしてこれって、一般常識で考えると恋と言うものじゃないのだろうか？

僕は、彼女のことをどう思ってる？

消去法で行こう。

嫌い――そんな感情はない。

結果、僕は彼女のことが好きなようだ。

さて、ここまで分かって、この後はどうしよう。

彼女のことをもっと知るべく毎日観察する？

駄目だ、僕も学校があるから毎日観察なんて出来ない。

僕のことを知ってもらうために観察してもらう？

こちらも先ほどと同じ理由で無理だ。

親交を深めるため『友達になろう』と声を掛ける？

いや、恋人になりたいから却下。

ん？

僕、彼女と恋人になりたいんだ。

じゃあ選択肢はひとつだ。

これが、五時間目をフルに使った、僕の思考だ。

そして休み時間に動いた。

放課後の現在、ある場所にて彼女を待っている。

十分ほど経ったけど、まだ来なかった。

よし、寝て待とう。

そう思った瞬間、

ガチャッ

ここに来るための唯一の扉が開かれた。

そこに、彼女がいた。

彼女は肩を揺らして息をしていた。

「あの、もしかして忙しかったですか、花街さん？」

「う、うん、忙しかったよ。はぁ、手紙に書かれてたことが、あまりにも少なくて、人物特定と場所を探すのに十分もかかっちゃったよ。音野君」

なるほど、それで彼女――花街さんは疲れてるんだ。

「すみません、平仮名で書いておくべきでしたね」

「へ？なんで？」

「帰国子女の方なんですよね？だから漢字が読めなく――」

「音野君が場所と自分の名前書いてなかったからだよっ！！」

花街さんは声を荒らげた。

疲労した状態で叫んで平気なのだろうか？

案の定先ほどよりも激しく息を切らしていた。

「あれ？僕書きませんでしたっけ？」

「『今日の放課後、僕のところに来てください。まってます』としか書かれてませんでした！もう、何度も読み返して覚えちゃったよ」

ため息混じりに言った。

でもそれはおかしい。

「そんなはずありません他に書いてあるはずですよ」

「え？いや、他には何も――」

「『花街香苗様へ』と書きましたが？」

「……あぁ、確かこういう人なんだよね、音野君は」

今度は納得したような様子で呟いた。

「それで音野君、話って、何かな？」

来た。

ここが僕の一番勝負。

今までに感じたことのない程の鼓動の高鳴りを感じる。

それを落ち着けようと深呼吸をした。

その効果は意外とあって、結構落ち着いた。

僕は僕の中にある勇気と呼ばれるもの全てを振り絞る。

「あ、あの、はな、まちさん」

駄目だ、声が変だ。

「はい」

それなのに花街さんは笑いも指摘もせずじっと待ってた。

彼女を長く待たせてはいけない。

「僕、花街さんのことが、好きです。つきあってください」

言った。

言ってしまった。

これは過去ナンバーワンを誇るほどの勇気を使った。

僕の言葉の後から、時間はもの凄く長く感じた。

早く何か言って欲しい。

そんなことをずっと思っていた。

この時間は、胸が締め付けられるようで辛かった。

感覚で十分くらい経っただろうか、花街さんの口が動く。

「ごめんなさい」

それと同時に頭を下げられた。

その言葉は、悲しみより先に安堵をもたらしてくれた。

ようやくこの空間から抜け出せられたから。

「私には音野君より好きな人がいます。だから貴方の好意は受け取れません」

そして段々いいようのないもやもやが生まれてきた。

「でも」

花街さんは頭を上げた。

「告白されたことは凄く嬉しかったです。私を好きになってくれてありがとう」

そして僕に対して笑顔を向けてくれた。

するとどうだろうか。

胸に出現したもやもやが一瞬で消え、ぽかぽかになった。

もしかして花街さんの笑顔には人を幸せにする効果があるのだろうか？

「……花街さん、お願いが二つほどあるんですが、いいですか？」

「私に出来ることなら」

「花街さんの恋の応援、していいですか？」

「え、それは、音野君こそいいの？」

「はい。僕、どうやら花街さんの笑顔がみたいみたいなので」

「あ、そ、そうなの？」

花街さんは若干頬を赤らめた。

「じゃあ、お願いします」

「ありがとうございます。それでもう一つなんですが……」

ここで一瞬踏みとどまってしまう。

こんなお願いしていいのか、なんて風に考えてしまった。

しかし先ほどの告白に比べたら、大したことではないと考え直し、すぐ口にした。

「香苗さん、と呼んでもいいですか？」

花街さんは一瞬きょとんとして、

「うん。いいよ、玲央君っ」

とびっきりの笑顔を僕に向けてくれた。

今日この日、初めて恋を覚えて、初めて失恋を覚えた。

でも、不思議と嫌な気分にはならなかった。

番外編　《九章》恋の手紙（後書き）

真樹「まさか香苗ルートに入るとは思いませんでしたわ」

香苗「私だって思わなかったよ」

作者「さぁ、今回で玲央君編は終わります。発案者のＫｉｉｔｉさん、ありがとうございました」

香＆ａｍｐ；真「「ありがとうございました！」」

作「ふぅ、正直天然な性格なんて書いたことなかったからちゃんと出来てるかどうか不安だったんだよね」

香「でも、天然だったと思うよ？」

作「ありがとう香苗ちゃん」

真「あの、話は変わるんですが」

作「何？」

真「わたくし、音野さんをさらおうとした男たちが伏線だと思っていましたわ」

香「あ、やっぱり真樹ちゃんも？」

作「で、ですよね～。正直俺も思って、でもそれ書くとページが多すぎるな、なんて思って、でももう一話分にするには少ないなと思

ったのでやめました」

真「まぁわたくしの出番に関係ありませんからどうでもいいですが」

香「真樹ちゃんそんな身も蓋もないことを……」

作「さて、もう特に言うことはないから、大まかな次回予告をしようと」

香「いや、やめた方がいいんじゃないかな？」

真「同感ですわ。貴方どれだけ学習能力ないんですの？」

作「いや、大丈夫だって。そりゃ一話で終わるか、って言われたら微妙だけど、流れ程度なら確定だから」

真「では言ってみてください」

作「次回、夏哉がブッ壊れます」

香「夏哉君に何させる気！？」

作「香苗と真樹に嫌なことさせる」

真「ということはわたくしに出番があると言うことですわね！？」

香「最初のツッコミそっち！？」

作「いや、はっきり言うが、次回真樹は出ない方がいいと思うが、メンバー的にいるから巻き込まれるぞ？」

真「出番のないよりはマシですわ」

香「ねぇ、夏哉君にほんと何させるの？」

作「そりゃ秘密。じゃあそろそろ謝辞をお願いします」

真「そうですわね。クロスライトさん、ｖｉｃｔｏｒさん、蛍夜さん、Ｋｉｉｔｉさん、感想ありがとうございました」

香「みなさん、次回も遅くなるかもですが、よろしくお願いします」

作「アンケートの方もよろしくお願いします！！感想、メッセージどちらでもかまいません」

番外編　《十章》下戸な少年

とある日の午前中。

「なぁネハラ、ラスク」

私はあるものが欲しくなって二人に話しかける

「なんですかお姉様？」

「どうしました？」

因みに今日は土曜日で学校はないが、夏哉はいない。
理由はトイレに行っているから。

「どっちかルーヲヤ持ってないか？」

ルーヲヤとは、魔界の飲み物だ。

少し赤みがかっており、私のお気に入りの飲み物だ。

地球に来る際、それなりの数を持ってきたのだが、魔力が激減してしまったため亜空間が小さくなってしまったため消えてしまった。

亜空間について詳しく説明すると、自分の魔力で亜空間の空域を固定して、そこにその空域の量魔でものを置ける。
そしてその魔力が少なくなれば、同様にその空域も狭まる。
その場合、中にあるものは内側に詰め寄るのではなく、小さな空域内のものだけ残る仕組みになっている。
つまり最初に作った空域と小さくなってしまった空域との差にある

ものは亜空間に解き放たれ、どこかに行ってしまう。
それらを回収する術は私にはない。

「ありますよ。お姉様のために多めに持ってきましたから」

「ひとつくれないか？最近飲めなかったからな」

「分かりました」

ネハラは自分の亜空間を広げ、そこに手を突っ込む。

「アンお嬢、つまみは入りますか？」

「何がある？」

「アシムやマメグリなど、アンお嬢の好きなものなら大抵は持ち合わせております」

なんと気の利く奴なんだラスクは。

「じゃあレヴァイを頼む」

「わかりました」

レヴァイとは生き物の名前で、私が頼んだのはツナみたいなものだ。

「お姉様どうぞ」

ネハラは２０？四方の木で出来た立方体を渡してきた。

私たちの世界には瓶やら缶やらはない。
だから基本この中にに入れて飲み物を保存している。
一応自分で作った、薬を入れる用の小瓶はあるが、この世界のような大きいのは作れなかった。

元は上の部分が開いているのだが、魔法を使ってくっつけている。
他に魔法で飲み物が木に染み込んだり、漏れたりしないようにもなっている。

「ありがとう」

私は結合部分を魔法で解除した。
すると上の部分がほんの少し浮いた。

それを確認したネハラは木の板を外し、亜空間内に放った。

箱の中には私の求めていた、ルーヲヤが入っている。

それを、水の魔法を使って私の口に適量運ばせる。

というのも、コップなんてものはないし、わざわざ箱から別の容器に入れて飲むなんて手間を省くためだ。

口の中がルーヲヤで潤う。

「ん、うまいな」

「アンお嬢、どうぞ」

飲み終わると、ラスクがレヴァイを差し出してきた。

それも魔法で口に運ぶ。
こちらもうまい。

「二人はいいのか？」

否定されるだろうが、一応勧めてみる。

「これらはお姉様のものですので」

予想通りの反応。

「なぁ、前にも言ったと思うが、魔界じゃないんだから本当に好きにしてもいいんだぞ？なんなら抱きついてきたっていいし」

その言葉に二人は驚き、顔を赤くした。

「な、何を言ってるんですかアンお嬢！あ、アタシたちは魔界にいたからアンお嬢に従っていたわけではありません！」

「そ、そうですよ！どこにいてもお姉様はお姉様ですっ！そんなお姉様に抱きつくなど、恐れ多い……！」

こちらも予想通りといえば予想通りだな。

「じゃあ命令だ。一緒に呑もう。一人でというのはつまらない」

「ただいま～」

タイミング良く夏哉がトイレから戻ってきた。

「お～夏哉～、タイミングいいな」

「どした？」

足音が若干早い。

私の声を聞いて小走りで来てるようだ。

部屋に夏哉が入って来たところで話す。

「今から皆で呑み合おうとしててな。夏哉も魔界の飲み物呑まないか？」

「あ、いいの？じゃあコップを――」

「アホ夏哉。そんなのにルーヲヤを入れたらすり抜けて地面を濡らすぞ」

「……忘れてた」

そういって夏哉は私の隣に腰を下ろした。

「生憎私たちの世界にはコップというものが存在しなくてな。ラスク、口に運んでやれ」

「かしこまりました。ナツヤ、口に運ぶぞ」

ラスクはルーヲヤを浮かせ、夏哉の前まで運んだ。

「おぉ、なんか宇宙みたいだな」

「何よ?うちゅう?って」

聞き慣れない単語にネハラが興味を抱く。

それはネハラだけでなく、私も同様だ。

「ん～、簡単に言うと、地球の遙か上にある空間っていうのかな。重力って知ってる?」

私たち三人は疑問符を浮かべる。

「この世界ってさ、高いとこから物を離すと下に落ちるだろ?」

夏哉は手直にあった座布団に手を伸ばし、自分の顔ぐらいまで持ってきたと思ったら落とした。

「まぁ、それはそうだな」

私は頷く。

この世界だけでなく、私たちの世界だってそうだ。

「で、下に落ちるってことはなんかしらの力が働いてるって昔の人は考えたわけ」

「それが重力、という奴か?」

ラスクが聞く。

「そうそれ。で、宇宙ってとこにはその重力がないわけ。重力のあ

るここで液体を垂らすと、下にびちゃってなるけど、重力のない宇宙だと下に落ちないでこんな風に丸くなるんだよ」

「へぇ、そんな空間があるのか。行ってみたいな」

そんな感想を口にすると、夏哉に苦笑された。

「アンさん、残念ながら宇宙という場所は人間個人じゃ行けないのですよ。あそこにゃ人間に必要な空気という物がないから、専用の道具がないと。まぁこの世界に干渉できない三人ならいけるだろうけど」

「別にナツヤならいけるんじゃない？人間やめてるし」

「それはそうかもな」

ネハラの考えに私も賛同する。

ふと、ラスクが何か悩んでいる様子が見えた。

「ラスクどうした？」

「あ、いえ、考えてみたのですが、この世界には重力という物が働いているんだよな？」

夏哉に視線を送るラスク。

「そうだけど？」

「ということはその重力にアタシたちは干渉出来ない。なのにどう

してアタシたちの世界の物は下に落ちるのだろう、と」

「「「……」」」

私たちは黙ってしまった。

「……あぁ、ラスク」

最初に声を出したのは、夏哉。

「ラスクの疑問は確かだと思うけど、そこはほら、世界の不思議、ということであんまりツッコまない方がいいかと――いやあれだ。重力ってのはたしか地球からなんらかの力が働いてるために起こってるものらしい。お前らは地球には干渉できるだろ？だから地球から発生されてる力にも干渉できるんだよ。てかそういうことにしておいてあげた方がいいと思う」

半ば強引な夏哉の説明で取り敢えずこの話は収まった。

「気を取り直して、皆で呑むか」

私がそういうと、三人も頷いた。

夏哉は浮いているルーヲヤに近づき、匂いを嗅いだ。

「ん、なんか酒の匂い……」

「なんだナツヤ、その？さけ？とは」

「この世界の飲み物だ。でもあれ未発達な子供には悪影響及ぼすか

ら大人にならなきゃ飲めないんだよな」

「じゃあアンタこれ飲めないじゃない」

「いやいや、これは酒じゃなく酒に似た何かだ。つか異世界の物なんだから平気だろ。これ口に含めりゃいいの？」

「あ、夏哉、口を開けてくれ」

「了解」

言われたとおり夏哉は口を開け、ラスクがそこにルーヲヤを入れた。

すぐにそれを飲み干す。

「夏哉どうだ？」

「……なんか、すげぇ、うま、い……」

バタン。

「え？」

ラスクが声を上げる。

それも当然だ。

夏哉が倒れたのだから。

「ナツヤ！どうした！？ナツヤ！！」

ラスクが肩を揺らして呼び掛けるが、呻き声を上げるだけで目覚めない。

私も声には出さないがパニックに陥っていた。

いや、声も出ないほどパニックに陥っていた。

「お姉様」

そんな中冷静な声が聞こえた。

「ネ、ハラ？」

私の義妹だった。

「私たちじゃ人の体は分からないので、カナエやマキを連れてきた方がいいのではないですか？」

確かにネハラの言葉に一理ある。

「そう、だな。うん、そうしよう」

今日ほどネハラの夏哉に対する好感度が高くないことをよしと思ったことはない。

もしラスクぐらいまで好感度が上がっていたらネハラも平常心を取り乱していただろう。

「お姉様はここに残った方がいいかと。お姉様の行動を制限させるのは差し出がましいことだとは思いますが、もしものことがあったときこの世界に干渉できた方がよいかと思いまして」

「確かにそうだな。お前の言うとおりだ。うん、冷静になった。ありがとうネハラ」

「そ、そんな、もったいなきお言葉です」

さて、やることも決まったし、後は行動に出るだけだ。

「ラスク！頼みがある」

「アン、お嬢？」

「今から香苗と沙鳥を呼んできてくれ。ネハラは真樹を頼む。出来るか？」

「「はい！」」

二人は頷き、壁をすり抜けて出て行った。

現在この場所には私と夏哉の二人きり。

何をすればいいか悩む。

他人の看病などしたことないため勝手が分からない。

「ひとまず寝かした方がいいよな？」

私は布団を引っ張り出すと、そこに仰向けで寝かせた。
後は、飲み物か？
コップのある場所を思い出しながら、そこに水を入れる。
むくり。
そのとき夏哉が上半身を起こした。
「夏哉！！」
その場にコップを置き、夏哉の側による。
「大丈夫か？気分悪くないか？」
私の呼びかけに首をこちらに向けた。
様子がおかしい。
どこかボーッとしていて、顔が赤い。
目も半分くらいしか開けていない。
「……あん？」
私の名前を呼んだ。
「あぁ、私だ。だいじょう――」

「あんんんんん～！！」

夏哉は私の名前を呼ぶと、抱きついてきた。

「……え？」

夏哉は自身の頭を私の胸に埋めて軽く左右に振ってる。

「んん～、アンのおっぱい気持ち～」

「ちょ、夏哉？どうしたんだ！？」

どうもおかしい。

夏哉はこんな風に抱きついて来るか？

いや、抱きつかれるのは嬉しいことだが、夏哉はこんなことしない。

「うわっ！？」

考え事なんてしていたら、布団の上に押し倒された。

四つん這いになっている夏哉はまず頭を胸に乗せ、その後手も乗せた。

そしてその感触を味わおうとしているのか揉まれる。

「あはっ、アンのおっぱい柔らか～い」

あはっ、だと？

夏哉らしからぬ言葉に戸惑いを覚える。

そんな私にお構いなしに、夏哉は力を込めて揉みしだいていく。

「ん、あっ」

それが私に今まで感じたことのない快楽を与える。

これは、なんか良い。

そんな快楽に溺れそうになったとき、

「夏哉君っ!!」

扉が開かれると共に夏哉の名を呼ぶ者が現れた。

声でわかる。

香苗が来たのだ。

とても必死な様子が分かる。

「夏哉君どうしたの!?倒れたって聞い……」

香苗は途中で言葉を途切らせてしまった。

私たちの姿を見たからだ。

「な、夏哉君?何を、してるのかな?」

声を震わす香苗。

そんな香苗を夏哉は一瞥して、

「アン～」

再び私の胸を揉み始めた。

「ブッ！？夏哉君！？ちょっとアンさんこれどういうこと！？」

「私だぁ！だってしらんんっ。こいつに私の世界のぉ、飲み、物を飲ませたらぁんっ！こうなった」

「え、まさか、また薬？」

「違うぅっ！夏哉は、酒に似てるって、はうっ、言ってたが」

「もしかして、夏哉君酔っぱらい？」

「香苗、なんとかしてくれっ！力がはいら、んっ」

あぁだめだ、気持ち良すぎて全てを投げ出してしまいそうだ。

「な、夏哉君、アンさんもう限界みたいだからやめ――」

「黙れ貧乳。貴様のようなつるぺたに興味はない」

初めて聞いた。

夏哉のあんな冷め切った声を。

「……ひん……つる、ぺ……」

香苗は四つん這いになって落ち込んだ。
あそこだけくらい空気が流れている。
というかさすがに今の発言はいただけない。
「夏哉！今のは言い過ぎだ！！香苗に謝れ！！」
そういうと夏哉は固まった。
そして、
「ひくっ、ぐすっ……」
泣き始めた。
「え、あ、夏哉？」
正直ついていけない。
「うわあああああんっ！アンに嫌われたあああああ！！」
「……はぁ？」
何を言い出すかと思えば、私が夏哉を嫌う？
確かにさっきは言葉を強めに言ったが、別に嫌ってるわけじゃない。
「うわあああああんっ！アンのバカあああああ！！」
夏哉は立ち上がり、玄関へ向かった。

「待て夏哉！！」

私は追いかける。

今の夏哉が外に出たら何をやるか分かったものじゃない。

夏哉が靴を履こうとする少し前、扉が開いた。

そこにはネハラと、真樹がいた。

「二人とも、夏哉を止めろ！」

私はとっさに叫んだが、夏哉は動かなかった。

じっと真樹を見ている。

「な、夏哉？どうしまし――」

「真樹だぁ！」

夏哉は、今度は真樹に抱きついた。

「……は？」

そう声を上げて固まる真樹の反応は正しいのだろう。

「はわ～、真樹のおっぱいもふかふか～」

夏哉は私同様に頭で真樹の胸を堪能している。

「な……な、な……」

次に真樹はわなわなと震えだした。

「何してんだ夏哉ァッ！！」

いつもの口調をかなぐり捨てて、右肘と左膝の両方を夏哉に放とうとする。

しかし、夏哉はそれに反応した。

左手で真樹の右の二の腕を掴み、左足を軸に半回転した。

背後に回った夏哉は、抱きつくのではなく胸を鷲掴みした。

「いい加減に――」

それでも諦めない真樹は、左手で夏哉の右手首を掴んだ後体を低くして、

「しやがれッ！！」

左手一本で夏哉を投げた。

投げられ、床に背中をぶつけた夏哉は、逆に真樹の左手を掴み、引っ張った。

「うわっ」

バランスを崩した真樹はそのまま倒れ込み、なんと胸がちょうど夏

哉の顔の位置にきた。

なんという執念なんだ夏哉は。

そこまでして胸に触りたいのか。

そして夏哉はそのまま抱きしめた。

「あぁもう！どうすればいいんですの！？」

どうやっても夏哉から逃れられず、泣きそうになっている。

「真樹のおっぱい大好き～」

「黙れこのバカ！！さっさとどけ！！」

この言葉を聞き、夏哉は再びピタリ止まった。

まさかこれは……

「ひくっ、ぐすっ……」

予想通り泣き始めた。

「え、夏哉？」

これには真樹も驚いている様子。

「うわあああああんっ！真樹に嫌われたあああああああ！！うわあああああんっ！真樹のバカあああああ！！」

夏哉は真樹をどかすと、自分の部屋に戻っていった。

「……なんなんですのあれは？」

「私だって聞きたい」

真樹の呟きに、そうとしか答えれなかった。

「ネハラさん、夏哉は本当に酒みたいと仰ったんですわよね？」

「そうよ」

「まさか夏哉が下戸だとは思いませんでしたわ……」

「下戸？」

私は聞き返す。

「酒には人の理性を取り除く作用がありまして、多量摂取すると夏哉みたいに普通じゃ考えられないような行動をしてしまうのです」

「でもあいつ一口しか飲んでないわよ？」

「その効き目も人それぞれでして、下戸というのは酒が飲めない人、つまり少量でも酔ってしまう人のことを指すんですの」

「じゃあそれを治す方法はあるのか？」

「時間が経てば治りますわ。ですので殴って蹴って気絶させれば問題ありません」

なるほど、殴って蹴っ――

「ちょっと待て」

「はい？」

「気絶はやめた方がよくないか？」

「何言ってますの？本来なら殺すのが最良。これでも譲歩した方ですわ」

真樹の目は本気だった。

「……うん、まぁ、夏哉だし、平気か」

そう呟くと、外でバタバタと足音が聞こえてきた。

「あ、沙鳥か？」

「え、沙鳥様を呼んだんですの？」

「あぁいちお――」

ちょっと待て。

「真樹、ネハラ、集合」

二人は私の側に近づいた。

「さっき、私は夏哉に胸を揉まれた」

「よしお姉様、今から殺してきます」

「まぁ待て。別に気持ちよかったからいいんだ。で、その後香苗が来たんだが、貧乳には興味ないと言っていた」

「もうただの変態ですわね夏哉」

「でだ、貧乳には興味ないということは、巨乳には興味あるということだ」

「……沙鳥様」

「そうだ。今あったら確実に沙鳥は夏哉に胸を揉まれる」

「それマジ!?」

後ろから声が聞こえた。

バッと振り返れば、少し息を切らしている沙鳥がいた。

その表情は喜々としている。

「ねぇなんでなんで?」

私たちは今までのことを話した。

「ふむふむ。じゃあ仕方ない、私揉まれてくるね。私に集中させれば周りの被害なんてなくなるし」

「なんか、嬉しそうだな」

私は呟いた。

「だって、好きな人に求められてるんだよ？今日ほどこの巨乳に感謝したことないね！」

沙鳥は私たちを避け、中へと入っていく。

私たちも後に続く。

中では布団にくるまってる夏哉と、未だ四つん這いになってぶつぶつ呟いている香苗がいた。

「な～つや」

沙鳥はしゃがみ、優しく声をかけた。

ひょっこり布団から顔を覗かせる。

……保護欲をかき立てられるのは気のせいじゃないはずだ。

「私の胸、揉みたい？」

自分の胸を強調させながら夏哉を誘う。

くそ、もうちょっと胸を大きくしてれば私にメロメロだっただろうに。

そんな後悔を抱いていると、徐々に夏哉は布団から出てきた。

「め、女神様……」

「女神様？ま、まぁいいや。さぁ夏哉、ドーンと私の胸に飛び込みなさい！」

「女神様ー！！」

完全に布団から出て沙鳥に飛び込んだ。

この場の誰しもそう思っただろう。

しかし、

「え？」

夏哉は沙鳥の脇を通った。

そして、

「ふにゃっ！？」

その背後にいたラスクに抱きついた。

「えへへ～、女神様ぁ～」

夏哉は首を振り、手を動かし、それを堪能していた。

「……」

沙鳥は固まったままだ。

「……真樹、カナ」

暫くして二人の名前を呼ぶ。

「夏哉、殺さない？」

「「賛成」」

「私も混ざって良い？」

そこにネハラも参加した。

四人は一カ所に集まり、夏哉を睨みつける。

女の怒りは怖い。

私は身を持ってた意見した。

若干震えています。

「「「「死ねぇッ！！」」」」

沙鳥とネハラは魔法、真樹は拳、香苗はカッターで夏哉に襲いかかる、が、

「消えろカス共」

夏哉がそういうと、一瞬にして四人は伸された。

な、夏哉容赦なさすぎだ。

そして夏哉は再びラスクの胸を堪能し始めた。

私はというと、

「……」

ちょっと胸を大きくして、

「なぁ夏哉、私の胸も、一緒に揉まないか？」

「揉む！」

ラスクと共に夏哉を堪能した。

――――――――――

「ん、んん～……」

意識が目覚めてきたので、俺はムクリと上体を起こす。

あれ、なんで俺寝てたんだ？

寝る前の記憶が曖昧だ。

それに頭が痛い。

「……思い出せん」

アンか誰かに話を聞こうと周りを見渡せば、

「……何これ？」

アンとラスクとネハラ、それに何故か香苗と沙鳥と真樹が寝ていた。

「……え？ほんと何これ？怖い怖い怖い！どういう状況！？」

俺は皆が目覚めるまで頭を悩ませた。

そして目覚めたら、アンとラスク以外にボコボコにされた。

ほんとなんで！？

後日。

「なぁナツヤ、これ、飲まないか？」

「ん？何これ？酒臭いな」

「良いから良いから」

「分かった」

ごくごく

「女神様ぁ～」

「あぁラスク！！」

「あ、アンお嬢！？」

「抜け駆けは卑怯だ！！私も混ざる！！」

「ではご一緒に」

「はわ～、幸せ～」

番外編　《十章》下戸な少年（後書き）

夏哉「お、俺は、なんてことを……」

沙鳥「夏哉のおっぱい星人」

夏「ぐはっ！？」

沙「何？夏哉は異世界人萌えなの？何そのジャンル？」

夏「あ、あの、沙鳥？言い訳、しちゃ駄目かな？」

沙「聞くだけ聞く」

夏「その、ね、俺、真樹のも、その、触っちゃったわけだから、異世界人が好きっていうことではなく、てですね」

沙「ふぅん。じゃあ夏哉は真樹ラブなんだね？胸揉むとき真樹に対してだけ？大好き？なんて言ってたし。胸だけじゃ判断しないよ、とか言いながら、結局夏哉の認識じゃ女＝胸のサイズなんだよね」

夏「……沙鳥、もう殺してください。俺、もう香苗と目が合わせられません」

香苗「へぇ、なんでかな？」

夏「え！？なんで！？ここ基本二人と作者で回してんじゃん！！」

香「私作者さん好きになっちゃった。だって私のために変わってく

れたんだもん」

夏「作者あああああああ！！」

香「夏哉君」

夏「はいぃぃっ！！」

香「今までの私の慰めは偽りだったんだね。私を慰める振りをして、実は裏で笑ってたんだよね？」

夏「……そんなこと、ありません」

香「へぇ、否定できるんだ。あの行為をして否定できるなんて、凄いね、夏哉君」

夏「……すみませんでした。もう俺、一生二人――いや、皆の前に顔を出しません。もし殴り足りなければいつでも読んでください。今までお世話になりました。俺、皆好きだったよ」

香＆amp;沙「「え？」」

夏「さようなら」

沙「ちょ、え、ほ、ほんとに行っちゃったよ？か、カナどうしよう？」

香「だ、大丈夫だよ。きっと夏哉君冗談だって分かってるから――」

作者「いや、あいつは本気だ」

沙「作者!?それどういうこと!?」

作「だってあいつだろ?皆を傷つけたことはあいつだって知ってることだ。大切なお前らを傷つけたんだから、顔なんて出せるわけないだろ」

沙「そんな……!だって!この回はギャグで構成されてたんでしょ!?ギャグならどんなことやっても笑って終わらせられるじゃん!!」

作「二次元、ならな」

沙「!?」

作「ここは現実だ。夏哉が大切な人を傷つけたという事実に変わりはない」

香「だったら、どうしろっていうの?」

作「夏哉次第だろ。あいつが立ち直らなきゃどうしようもない。それから、次回はきっと柊夏哉は出てこない」

香&沙「「!?」」

作「いや、一瞬は出るだろうがほとんど出番はない」

沙「な、なんで?」

香「い、いや、沙鳥ちゃん落ち着いて。きっとあれだよ。これはドッキリだって。作者さんがいったのだって、夏哉君以外の視点で物

事が進むだけだって。それか過去編とか。今までだって夏哉君が出てない回はあったでしょ？」

作「……言っておくが、次回は過去編じゃないし、学校や寮、メインヒロインたちは出てくるぞ」

香「そ、そんなの、まだ分からないでしょ？作者さんまだ次回書いてないんだから。有言不実行の作者さんだよ？それにこの後にコラボの予定が入ってるんだから、夏哉君がいなくなったりするわけないよ」

作「……」

沙「ねぇ、何黙ってるの？作者！！」

作「時間だ。ソラトさん、クロスライトさん、蛍夜さん、感想ありがとうございました。次回もよろしくお願いします」

沙「何終わろうとしてんの！？ねぇ、看板はまだ！？ドッキリの札は！？もう私たち十分驚いたから！！もう良いでしょ！？ほら早く！！！」

作「……お前らだって、分かってんだろ？ドッキリなんかじゃねぇよ」

沙「そん、な……」

香「な、夏哉君……」

番外編　《十一章》体の変化

「な、んで、こうなるの？」

私は驚愕していた。

どうしてこうなったから知っている。
誰にも悪気があったわけではない。

全て承知している。

しかし、だからといって、はいそうですか、というわけにはいかなかった。

何故なら、私の中から大切な物が消えていくから――

――――――――――――

「な、夏哉～。その、頼みがあるんだが……」

六月も後二日で終わりを迎えるという頃、アンが遠慮がちに話しかけてきた。

「なんだ？」

「あの、な、懲りない奴って思うかもしれないんだが、いいか？」

「取り敢えず言ってみ？」

アンはひとつ深呼吸をして、言った。

「また薬を作ってみた」

「馬鹿やろう」

それを聞いて思い出したのは約二ヶ月前。

この魔族っ娘のせいで香苗と体が入れ変わったのだ。

そしてもう一つ。

一ヶ月ほど前の事件。

大切な人達がたくさん傷ついた、あの事件。

もちろんそれとアンの薬は全然違うと理解はしているが、つい思い出してしまう。

「こ、今度のはな、他の人には迷惑かけないんだ！それにすでに解毒剤も作ってある！」

そう言って小瓶をふたつ出す。

片方が薄い黄緑色の液体で、もう片方が薄紅色の液体だ。

「いや、確かに解毒剤はあるんだろう。でもな、それがあっても嫌な予感しかしないんだ」

「そ、そんなことないだろ……。きっと大丈夫だ」

「……アンよ、そんな顔を逸らされて言われても説得力はないぞ？」

少なからずアンも嫌な予感は抱いてるということなのだろう。
その上で俺に服用を求めるとは、どう反応してよいやら。

「ナツヤ、アンタ何お姉様に逆らってんのよ。さっさと飲みなさいよ」

義妹が義姉の味方をするのは当然と言うことで、ネハラが睨みつけてくる。

「アホ！ただでさえ前酷い目にあったんだぞ！？」

「因みにアンお嬢、それの効果というのは？内容次第ではナツヤだって許可をしてくれると思うのですが」

そうアンに情報を求めるのは、俺とアンに愛を捧げるラスク。
といっても、まぁ今は友達みたいな関係だが。

「そうだな。前回それで失敗したわけだしな。この薬の効果は、女体化だ」

「にょ、女体化？それって、俺が女になるってやつ？」

「そうだ」

確かにそれなら他人には迷惑を掛けないが……

「う～ん……」

ハッキリ言って悩む。

実はちょっと興味はある。
女体化というのだから、流石にそのままの姿で女装した風体、ということはないのだろう。
きっと歴とした女になって、でもどこか男の面影がある、といった風になる。
その姿をちょっと見てみたいな、なんて考えてしまう。
「あぁもう！煮え切らないわね！」
イライラした様子のネハラはとうとう痺れを切らしたようで、アンに一言断ると、その手から薬を取り、俺の口へと運んだ。
「ちょおっと待て！！」
俺は薬が口に入る手前でネハラの手首を掴んだ。
「何よ、往生際の悪い！」
「落ち着け。この際飲む飲まないはどっちでもいい。そんなことよりもアン曰く、お前はドジっ娘らしいな」
「そ、そうなんですかお姉様！？」
「否定は出来ない」
その言葉で若干落ち込むネハラ。
「でだ、お前は薄紅色の薬が女体化の薬で、黄緑色のが解毒剤と知

ってて薄紅色の薬を飲まそうとしたんだよな？」

ピタッ。

「……おい」

ちょっと怒気を含める。

「お姉様、薄紅色のこちらの方が女体化の方であっていますよね？」

聞くと言うことは分からなかったということかこのやろう。

「あぁそうだ。……と言いたいところだが、残念ながら黄緑色の方が女体化の薬だ。因みに解毒剤の方は、あくまで女体化の効果が現れてるとき用に作ったものだから、女体化されてない状態で飲んだらどうなるか分からない」

「俺凄くねこの危機回避能力！」

若干自画自賛をすると、ネハラは静かにアンの持ってるもう一つの薬の入った小瓶と交換した。

「ほら飲みなさい！！」

先程までのやり取りを無かったかのような風に振る舞う。

必死の抵抗むなしく、女体化の薬は俺の口に入った。

必死と言っても、実際なら確実に止められた。

現に最初は止められたのだから。

つまりこれは心のどこかで女体化を望んでいたということか、今のように無理矢理飲まされたためいいわけが出来るからか。
全く、嫌な人間だな俺は。

そんなことを考えていたら、俺の体が火照ってきた。
鼓動も早くなる。

「ふぅ～、はぁ～、ふぅ～、はぁ～」

それを落ち着けようと何度か深呼吸する。

「な、夏哉、大丈夫か？今度のもつらくはないはずなんだが」

「だ、大丈夫。痛いとかじゃないから」

その後二回深呼吸をしたら、変化が起きた。

まず頭が妙に重くなった。
続いて胸が服に触れた。

パッと感じたのはそのくらい。
他に強いて言うなら、三人の表情が変わった。

続いて自分の体を見回してみる。

まず下。
あるはずのない膨らみが見える。
これが服に触れている原因だろう。

続いて肌。

若干白くなり、自分で言うのもあれだがすべすべしていそう。

最後に後ろ。

振り返るときに何かが揺れるのを感じ、髪が長いことを理解した。

「ん～――あ、声も変わってる」

ソプラノほどの高さを発している声を体験したのはこれで二度目だ。

いや、子供の頃もソプラノくらいだろうが、覚えていないため数えないことにする。

で、一番肝心なのは顔だ。

一番気になる。

「鏡あったっけ？なぁアン、お前持ってる？」

しかし呼びかけに反応しない。

「アン――」

「お前、ほんとに夏哉か？」

ようやく反応してくれたと思ったらそんなことを聞かれた。

「え、どこか変？」

ペチペチと自分の顔を触る。

触った感じ極端に変なところは感じられないけど――

「――――！！」

ラスクに後ろを向かれた。
若干震えている。

な、何？
もしかして笑われてる？
まさか予想に反して男を無理矢理女にした顔になっているのだろうか。

「か……」

アンが何か言おうとしている。

「アン、どうしたの？」

首を傾げる。

「――――――！！」

目を逸らされた。

でも顔自体は見れて、とても真っ赤だ。

……さっきアン？か？って言ったよな？
もしや、体が女で顔がイケメンになってる、とか？
そうすりゃラスクが笑う理由も分かるし、アンも皮肉で？かっこいい？とでも言おうとしたんだろう。
しかし違和感がひとつ。
こんなに俺が変なら、真っ先にネハラが笑い散らかしたり、からかったりするもんだと思っていた。

そちらを見てみると、

ゴッ!!バキッ!!ガッ!!

自分で自分の頬を殴り続けていた。

「ちょ、ネハラ!?何やってるのよ!?」

慌てて止めに掛かる。

「は、放しなさいよ!私は!私にはお姉様というお方がいながら浮気をしてしまったんだから!!」

浮気!?

こいつにどのタイミングで浮気が出来たの!?

「だから私は目を覚ますために殴り続けなきゃならないのよ!!」

「その根拠は分からないけど、だからって自分の顔を傷つけちゃ駄目よ。ちゃんと反省してるならアンだって分かってくれるって。ね？」

子供をあやすように、なるべく落ち着いて話しかける。

するとネハラから腕力が消え、うなだれる。

「……おねえ、さま、ごめん、なさい……」

なるほど、うなだれたのは涙を隠すためか。

後で何言われるか分からないけど、私はネハラの頭を撫でてあげようとした。

「私、この人もお姉様と呼んでしまうかもしれません！！」

そう叫ぶと、ネハラは私に抱きついてきた。

「え、な、何？」

急展開についていけない。

「ね、ネハラ！お前！義姉（あね）を差し置いてなんてことを！！」

続いてアンも抱きついてきた。

二人ともどうにも様子がおかしい。

唯一抱きついてこない女性に視線を向ける。

「……」

ラスクも私に、チラチラと視線を向けてきた。

まるで様子を窺っているよう。

「ラスク、正直に答えなさい」

私は若干強めに言った。

「は、はい」

言い方を悪くすれば、ラスクは私を愛しているから私に逆らわない。
そこを突くなんてなんともいやらしいけど今回は勘弁して欲しい。

「私の顔、どこか変？」

「い、いえ！そ、その、とても美しくて、直視、出来ません……」

……え？
美しい？

予想外の言葉に戸惑ってしまった。

「……あのね」

「はい」

「鏡、ていうか自分の顔を見れる物を持ってるかな？」

「あ、直ちに！！」

ラスクは亜空間を開き、その中をまさぐっていた。

そう言えば気になる点が。

「ねぇラスク」

「な、なんでしょう？」

「どうしていきなり敬語なのかなって。理由でもあるの？」

「あ、い、いえ。その、なんかそんな雰囲気なきがして……」

「そっか。でも出来れば、いつもと同じのがいいな」

「そう、言うなら分かった」

妙にたどたどしいが、分かってもらえたのなら何よりだ。

「うん、ありがとう」

ガッシャーン！！

お礼を言った瞬間、亜空間に飛び込んだラスク。

「ラスク！？」

突然の事態に声を荒らげる。

心配になったので、未だ抱きつく二人を引きずりながら亜空間の前までいく。

「だ、大丈夫？」

私の言葉に応えるようにぬっと手が伸びてきた。

それを掴み、ゆっくりと引っ張っていく。

「あ、ありがとう、ナツヤ」

お礼を言いながら這い上がってくる。

左手には、黒い物を持っている。

「どうぞ」

それを渡された。

これが鏡ということなんだろう。

それを受け取り、反射する面を顔に向ける。

女の子がいた。

それは歴とした私の顔。

動きに合わせて鏡の中も動いているから、間違いはない。

「うわぁ、私ほんとに女になってる……」

ちょっと感動ものだ。

これは、どれかというと沙鳥系に近い顔立ちかもしれない。

もちろん沙鳥には勝っていない。

というより元が私だからいつものメンバーの中じゃ一番下だ。

つまり地味。

女になったからっていってもそこは変わらない。

この三人がここまで反応する顔とは思えない。

「なつやぁ」

「何？」

アンが話しかけてきた。

若干甘ったるい声なのは勘違いだろう。

「夏哉も結構ノリノリだな。口調も一人称も女に返るなんて」

へ？

「何言ってるのよ。私別にそんなこと――あれ？」

今何気なく言った言葉だったが、振り返ってみると確かに女口調になっていた。

「え、ま、待って！私別に意識してるわけじゃないの！ふつうに言ってるつもりなんだけど……あ、あれ？ねぇアン、私一人称に？俺？って使えないよ！なんで？」

少しパニクっている私にアンは悩みながら答える。

「恐らく副作用……かな。それか女体化というのは、体だけじゃなく心も変化するということか。で、それは本人に違和感を持たせないようになっている……。それ以外に変化は？」

「特にないよ」

「そうか。それで、物は相談なんだが……。夏哉――いや夏子ちゃん、これからその姿で生きな――」

「却下よ」

「そ、そんなぁ！お姉様！私二人のお姉様と一緒に過ごしたいです！！」

未だかつて、ネハラにここまで求められたことはない。
それほどまでに私という存在は大きいのか。

「普通に考えてよ。この世界には女体化の薬なんてないのよ？いきなり性転換なんてしたら大騒ぎよ」

「いや、ほら、魔法があるわけだから、そのくらいは大丈夫だと思うぞ？」

「……アンは私に科学者の実験動物になれと？」

女体化とバレれば、当然科学者の興味を引く。
ただでさえ私は異常なんだから、マンガみたいに切り裂かれたりはしないだろうが、薬漬けにはされる気がする。
まぁ偏見だけど。

「そ、それは駄目だな」

「でしょ？だから長くて明日の朝まで。それまでならこの姿でいてあげる」

「「「本当（か）！？」」」

倒さんばかりの勢いで迫ってくる。

「うん。でも、私魅力ある？沙鳥達の方が可愛かったり綺麗だったりするでしょ？」

「何言ってるのナツお姉様！！お姉様がサトリに劣っているなどあり得ないわ！！」

「そうだそうだ！お前自分で確認しただろ！？あいつらには悪いがお前がダントツで可愛くて綺麗だ！！」

「ナツお嬢自覚してくれ！！ナツお嬢の姿で笑みを浮かべられたらアタシは神々しすぎて狂ってしまいそうなんだ！！」

自分だからそこまで感じないのかもしれないけど、三人の必死さは伝わった。

「わ、分かったわよ。以後気をつけます。それよりご飯食べちゃわない？私そろそろお腹空いちゃって」

「そうだな、そうしよう」

ご飯を二人分作るために立ち上がり、キッチンに立つ。

「何にしようかしら？」

……今更だが、女口調を普通に使ってるのだが、違和感は全く感じない。

これも薬のお陰なのだろう。

「あ、あのさ、夏哉」

「ん？」

アンが遠慮がちに声をかけてきた。

「どうしたの？」

「いや、あの、エプロン、使わないのか？」

「エプロン？別に使わないけど……」

いきなりなんなんだろう。

今までだって使ってなかったのに――

そこまで考えて、閃いた。

なるほど、アンは私のエプロン姿を見たいのか。

どうしてそれに興味があるのかは分からないが、そこは人それぞれだから聞かない。

「そうか……」

期待通りにならなく、落ち込むアン。

私は一旦キッチンから出てアンの傍による。

そして頭に手を置いた。

「ちょっと待ってて」

疑問符を浮かべるアンを背中に、私は服をしまってあるタンスを開ける。

「たぁしか奥に……あったあった」

目的の物を引っ張り出した私はそれを広げ、装着する。

そしてアンの方を向いた。

「男物のエプロンでごめんね」

そう、私が取り出し、装着したのは、親に念のため持って行きなさいと言われた、水色のチェックが入ったシンプルなエプロン。

「え？なんで？」

アンは信じられないといった表情を浮かべる。

「なんでって、着て欲しかったんでしょ？アンの頼みだもん、この程度なら着てあげるわよ。じゃ、改めて料理してくるね」

私は再びキッチンに向かい、冷蔵庫から材料を取り出す。

うん、今日は麻婆茄子にでもしよう。

あ、沙鳥にプリンの作り方教わったし、作ってあげよ。

この程度なら魔界の材料でなんとかなるかもだし簡単だから、魔法駆使して皆で作ろうかな。

「ねぇ皆、魔界の材料でこっちのデザート作ろうと思うんだけど、どうかな？」

「何!?そんなことできるのか!?」

真っ先に反応したのはアンだった。

「三人が魔法を使えば出来るかな～って思って。アンの世界に鳥の卵と砂糖みたいなのある?後ミルク」

「あるにはあるが、二人は持ってきたか?」

「確か……スルドリの卵ならあった気がしますが。後ミルクならチクシウの乳が」

「アンお嬢。砂糖はルシルの粉が近いんですよね?それなら恐らく畑に生えている可能性が」

どうやら揃っているようだ。

「なら多分出来るかもね。作ったことないから分からないけど。手伝ってくれる?」

「「「もちろん!」」」

三人はこちらに来てくれた。

「あ。ねぇアンさ」

「なんだ?」

ちょっと気になってたことを聞いてみる。

「今手ぶらみたいだけど、解毒剤ポッケにでも閉まったの？なくさないようにしてね」

「は？私の服にポッケなんてない、け、ど……」

この場にいる人間全て固まった。

「……あ、あれ？どこにやった？」

「ア――――――――――――――――ン――――――――――――――――ッ！！」

私の部屋には怒声が広がった。

番外編　《十一章》体の変化（後書き）

真樹「確かに夏哉は消えて夏子ちゃんになりましたわね」

アン「いや、あれは一応夏哉だろ？」

真「違いますわ。わたくしたちが知っているのは男の柊夏哉ですの。これが女となったら、心は同じでも法的には同名の柊夏哉になり、同一人物ではないんですの」

ア「そ、そうなのか」

真「そうなんですの。さて、そろそろあの馬鹿を引っ張り出しますか。沙鳥様も待っていることですし」

ア「引っ張り出す？夏哉のことか？でもあいつ、前回の後書き以降姿を見ていないんだが」

真「単純ですわよ。全く、香苗がいながらどうして気づかないのでしょう」

真樹、携帯取り出す。

ア「携帯？」

真「あ、もしもし夏哉？今むしゃくしゃしていますの。殴られに来なさい」

ア「どんな誘い言葉だ！？」

夏哉「来たぞ」

ア「ホントに来た!!」

真「では早速」

ガッ!!バキッ!!ゲシッ!!ゴキッ!!ゴッ!!

ア「ほ、本当に殴るのか!?」

真「夏哉、わたくし学園祭の時言いましたよね?自分が与える影響力を考えなさい、と」

夏「考えた。考えて、悪影響を与えたって判断した」

真「確かに貴方はわたくしの胸を勝手に、しかも二度も触りましたわ。それだけじゃ飽きたらず、沙鳥様と香苗に精神的傷を負わせました。これは完全に貴方の落ち度ですわ。ですが、あの二人も、もちろんわたくしも貴方が正常ではないことは承知でした。承知の上で、落ち度のある貴方に怒りました。だってそうでしょう?どんな女性でも、無理矢理胸を触られたら怒りもしますわ」

夏「あぁ。俺でもそう思う」

真「でも、そんな貴方でもあの二人は貴方を好きでいるんですのよ!?それなのに貴方が消えてしまっては二人はどうすればいいんですの!?想像してみなさい!!逆の立場になって考えてみなさい!!あの二人ですわよ!!言い過ぎたと自分を責めるでしょう!!あの二人は今回のことを軽く流して欲しかったんですのよ!?決して

本気で捉えてもらいたいとは思っていなかった!!それなのに馬鹿正直に捉えて二人の前から消えて逆に傷つけている!それじゃ本末転倒ではありませんか!!分かったらさっさと二人に謝って来なさい!!」

夏「……ごめん真樹」

真「全く、世話の掛かる男ですわ」

夏「わり。でも、また世話掛けるかも」

真「そうならないように努力しなさい」

夏「そう、だな。うん、頑張るわ。ほんとありがとう真樹」

真「どういたしまして。ほら、さっさと言ってきなさい」

夏「あぁ」

ア「……なぁ真樹。もの凄く空気の読めないことを言ってしまうんだが」

真「どうしました?」

ア「前回の後書きのあれ、ガチだったのか?てっきり演技なんだと思ってたんだが」

真「あれはガチでしたわ。ほんっとに、あの馬鹿は……」

ア「はぁ。本気と言うことは、また真樹に対する好感度があがるのか夏哉は」

真「いや、それはないでしょう」

ア「いや、あるでしょう。あんな、自分のために説教をしてくれる人がいるわけだから、惚れるだろ。実際それで沙鳥惚れたわけだし」

真「ラルドさん、蛍夜さん、ｖｉｃｔｏｒさん、ｋｉｉｔｉさん、クロスライトさん、感想ありがとうございますわ。今実施しているアンケートは明後日、八月三十一日締め切りですので、お暇な方はぜひよろしくお願いします。それから、作者曰く次回はコラボ第三段ですわ。お相手はいつも感想をくださるクロスライトさん執筆の、『僕は大切なものすべてを・・・守る！』です。そちら参照の後こちらのコラボを呼んでもらうことを推奨しますわ。もちろん、今話があれで完結、というわけではございませんので出来れば楽しみにしてくださいまし。ではまた」

ア「普通にスルーされた……」

番外編　《十二章》落下少女

「ようやく、出来た……」

私は自分の夢のための機械を完成させた。
でもこれはまだ試作段階。
ちゃんと正常に動くか分からない代物。
そうだとしても、自分の夢に近づけたことに喜びを感じ得ずにはいられない。

でも、これには一つ問題がある。

「これじゃマナが足らないですよね……」

マナというのは、魔術や霊術を使うために必要な魔力や霊力の源。

この世界では本来霊術しか使えない筈なのに三年ほど前に魔術が使えるようになった。
理由は分からない。

ほとんどの人は魔術しか知らないけど、前から霊術について知っていた私は、全ての力の源となっているマナをどうにか有効活用できないかと思い、学生の身でありながら研究を続けていた。

その結果がこの機械なんだけど……

「マナを有効活用したいのにマナが足りないなんて本末転倒すぎますよ」

と、自嘲じみた言葉が口からこぼれた。

「何かないでしょうか、原動力になりえるエネルギー体が」

そんなことを言ってもそんな都合よく見つかるわけが――

「あ」

あった。

私は一人の少年？の顔を思い浮かべて、早速連絡を取った。

――――――――――

ある日の休日。

「理緒（りお）、凄い興奮してたけどなんなんだろうね」

僕たちは叶宮（かなみや）理緒に呼ばれて彼女の研究所に向かっている。

「さあのぉ。だが、あ奴が興奮してたということは研究関連じゃろう」

そう当たりをつけるのは九重九十九（このえつくも）。

彼女はとても綺麗でスタイルもいいのだが、実は人間じゃない。

僕たちでいうところの異世界の住人で、九尾の狐で、妖怪だ。

色々あって彼女は僕の恩人で、大切な人で、守るべき人だ（あえて人と括っている）。

その隣を歩く僕は羽山飛鳥（はやまあすか）。
僕は歴とした人間だけど、普通の人とはちょっと違う力を持っている。
属性術というもので、説明すると長くなるからほとんど省くけど、使える人はかなり少ないらしい。
後クリスタル・コアっていう、マナの結晶化した物を持ってなければ使えない。
僕は現在六つ持っている。

と、そうこうしているうちに理緒の研究所に着いた。
その入り口に、そわそわしている理緒を発見した。

「理緒～」

「あ、飛鳥！」

理緒が気がつくと、こちらに駆け寄ってきて、

ガシッ

「ふえ？」

「ほら急いでください！時間は有限なんですよ！！」

訳も分からずそのまま引っ張られて、中に連れ込まれた。

「やれやれ、熱中してるときの理緒は手に着けられんのぉ」

そんなのんびりな口調で、九十九もついてきた。

「ふえぇぇ、なにこれ？」

目の前にある機械を見て、そう呟いた。

それは高さが２ｍ強、幅が７０？弱の円柱型で、天辺にはアンテナらしき物が乗っていて、理緒のお腹当たり――高さ１ｍ弱くらい――には何かを入力する装置がつけられていた。

この機械がある場所は理緒の研究所で、様々な機械が置いてある。

因みにここにたどり着くまでに、侵入者対策としていろいろな罠が仕掛けられていた。

危うく命を落としそうになったときもある。

「これは私が開発した『次元内世界転移装置』です！」

「「次元内世界転移装置？」」

胸を張って言われた名前を僕たちは繰り返した。

「名前の通りです。簡単に言っちゃえば、これを使えば指定した世界に移動できる機械です」

「うわぁ、理緒凄い！一人で作ったの！？」

「なんとまぁ、よく作ったのぉ」

僕たちが褒めると、照れるような、誇らしいような表情を浮かべた。

「それでですね、これを動かすには大量のマナが必要になるんですよ」

「大量のマナ？」

「はい。それで飛鳥。物は相談なんですが、クリスタル・コアを貸していただけませんか？」

「クリスタル・コアを？」

確かにあれはマナの結晶だから、マナを必要とするこの機械の原動力としてはもってこいかもしれない。

「いいよ」

僕はクリスタル・コアを取り出し、理緒に渡す。

「ありがとうございます！」

理緒がカチカチと機械に何かを入力すると、すぐ隣の部分に縦横１０？ほどの窓？みたいなのが出来た。
その中にクリスタル・コアを入れた。

「よし！これで準備万端ですよ！！」

「のぉ、理緒よ。まさかとは思うが、今すぐこれを起動させるわけじゃあるまいな？」

ふと、九十九が理緒に訪ねた。

「何言ってるんですか？ようやく完成した物なんですよ？使わないわけないじゃないですか」

猛烈に嫌な予感がする。

「理緒ごめんね。僕実はこの後すぐ急用があったんだ」

「妾もじゃ。済まんの」

僕たちは理緒に背を向け、全力でダッシュした。

「逃がすと思いますか？」

ポチッ、という音が聞こえた。

すると外に通じる廊下を塞ぐようにシャッターが降りた。

「「なぁ！？」」

ぶつからないように足を止める。

ガシャッ！

続いて足に冷たい感触。

下を向くと、足枷がされてあった。

「こら理緒！！これを外さんか！！」

「二人が逃げるからいけないんじゃないです。というか逃げる要素なんてありませんよ？」

「理緒よく思い出そう！僕たちが出会ったあのときを！！」

あの時は、まず初めに暴走した理緒の試作品に襲われた。
それを九十九が壊して事なきを得た。
それからいろいろあって僕たちは仲間になった。

「今度のは大丈夫なはずです！きっと成功します！！」

「馬鹿者！！それはどう聞いてもフリにしか聞こえん！！」

「そんなことありません！」

「ね、ねぇ理緒。仮にそれが失敗して、暴走したら大爆発、なんてことないよね？」

恐る恐る聞いてみる。

「それが分からないから試運転をするんじゃないですか。でも、動力源にクリスタル・コアという超エネルギー体を使っているので、かなりの力は放出される可能性はありますが」

「飛鳥あああああああああ！！お主何理緒にクリスタル・コアを渡してるんじゃあああああ！！」

「えぇ！？ここで僕のせい！？」

「飛鳥が渡さなければあれは起動しな――」

カタカタカタ

九十九の声に隠れるように、何かを叩くような音が小さく響いた。

それを僕は――僕たちは聞き逃さなかった。

音の源は、次元内世界転移装置から。

そこに、諸悪の根元？もいた。

「よし、じゃあレッツゴー！！」

理緒は大きく手を挙げた。

指は親指と人差し指を広げ、Ｌ字になっている。

「ま、待て！早まるでない！！」

九十九の呼びかけもなんのその。

理緒はそのまま腕を振り下ろした。

くるかもしれない衝撃にこらえようと、目を閉じる――が、

「……あれ？」

「何も、起こらんぞ？」

「ほら言ったじゃないですか！」

勝ち誇ったような理緒の態度。

その様子に、ちょっぴり悔しい気持ちと、疑って申し訳ない気持ちを抱いた。

「今クリスタル・コアのマナをエネルギーに変換しているところです。三十秒ほどしたらエネルギー充填が完了して異世界にいけます」

「す、凄いね！ねぇ、これどういう風に行けるのっ？」

安全と分かれば後は好奇心の思うがままに行動する。

「予定ではすぐ傍に次元断層が現れて、そこをくぐる形に――」

ピー！！ピー！！ピー！！ピー！！

突如、警告アラームのような音が鳴り響いた。

「な、何！？理緒どうなってるの！？」

この原因を知っているだろう理緒に慌てて聞く。

「わ、私だって分かり――な！？エネルギー過剰！？どうしてこんなに！？マズい、急がないと！！」

何かを理解したのか、必死な表情でパネルを打つ理緒。

「ど、どうしたの！？」

「簡単に説明しますと、なんらかの不具合が生じてしまい、クリスタル・コアから送られるマナが多すぎて、変換されたエネルギーが

機械の許容量を越えようとしてるんです！！今はその過剰分のエネルギーを外に逃がしてるんですが……間に合いそうにありません！！」

「因みにエネルギー過剰だとどうマズいの！？」

僕の言葉とほぼ同時、機械のすぐ傍、右側の空間に亀裂が入った。

それはどんどん広がっていく。

「次元断層が巨大化しすぎて、どこに飛ばされるか分からなくなります。しかも予想だと、本来固定できる次元断層よりも大きくなると、それを元に戻そうと内側に力が働きます」

「つまりどういうことじゃ！？」

「吸い込まれるってことです！！」

ブオッ！！

強力な引力が僕たちに襲いかかった。

「チィ！だったらその機械をぶちこわして――」

「バカですか九十九！！そんなことをしたら大量のエネルギーが爆発してここ一帯木っ端微塵になりますよ！！」

「じゃあどうするのじゃ！！」

その後なんと、理緒がとんでもない提案を出してきた。

「この機械の留め具を壊して、この機械と私が次元断層の中に入ります！！」

「え！？そんな危険な真似させられないよ！！」

「でもそれしかありません！！この機械さえ消えればこの断層は消えます！！でもそうするとクリスタル・コアも異世界に行ってしまいます！！だから私も行ってこれを修理してこちらに戻ってきます！！これは私の落ち度です！！責任くらい自分で取ります！！九十九、私はそろそろ限界です！留め具はこの両脇にあるので早く壊してください！！」

ここで、僕の我慢の限界が来た。

「ふざけるな！！」

「あす――」

「どうして理緒は一人でやろうとするの！？僕たち仲間でしょ！？その大切な仲間を一人で異世界に生かせるわけにはいかないッ！！」

「その通りじゃ」

隣で九十九が同意する。

「お主一人で何が出来る？一人で言ったところで見知らぬ異界の地で朽ち果てるのがオチじゃ。しかし三人ならなんとかなるじゃろう」

「九十九……」

僕たちの意志は決まった。

「覇剛(はごう)ッ！！」

すると右手から赤い光が放たれ、そこから一振りの真剣が現れた。

覇剛――別名剛撃の剣――はいわゆる妖刀で、人格もある。
これは僕が扱う剛撃流剣術になくてはならない相方。
もうひとつ、黎羅(れいら)――別名柔連の剣――という、同じく妖刀も所持している。
こちらは柔連流剣術を扱うのになくてはならない一振り。
普段はどちらも僕の体内にある。

「覇剛、頼むよ！！」

？分かった……？

力業に最適な覇剛でまずは自分につけられた足枷を切断する。
と、同様に九十九の足枷も切断。

「飛鳥！お主は右を狙え！！」

「分かった！！」

九十九の指示に従い、右側の留め具に狙いを定める。

断層の引力を利用して加速する。

気づけば、いつの間にか断層はこの部屋の高さを超えていた。

それを一瞬視界に入れたが、すぐに意識を戻す。

「はあああああああッ！！」

気合いを入れて一振り。

ガキンッ！！

狙い通り、留め具のみを破壊した。

ガシャンッ！！

反対側でも、九十九が妖怪にしか使えない妖術を操り、破壊した。

留め具に全身全霊を注いでいた僕の足は既に床から離れ、断層に吸い込まれた。

ちらっと見えたが、二人もこちらに近づいてきていた。

そのことに少し安堵する。

そして僕の視界は真っ暗になった。

この時は気付かなかった。

僕たちの他に断層の中に入った存在を。

―――――――――――

今、目の前で正座をしている少女が一人。

「アンさん。私は非常に怒っています」

「はい……」

少女――アンは私の言葉にシュンとしている。

「確かに、人間誰しも間違いを起こします。それに、あなたに悪気がないことは重々承知しています」

しかし、と少し強めに言えば、アンはビクッと反応した。

「だからといって感情を抑えられるわけではありません」

「仰るとおりです……」

「さぁ思い出しなさい。あなたは！解毒剤を！！どこでなくしたのかをッ！！」

鞭を持っていたら、恐らく床を打っていただろう。

とにかく、それほどまでに私は怒っていた。

「え、えっと、夏哉が薬を飲む直前までは、確実に持っていました。ちょうどネハラと交換したところだから、間違いありません」

「そうですね。そこは私も覚えています。一応確認ですがネハラ、あのとき実はあなたが二本持っていた、なんてことはありませんよね？」

私の傍で浮いているネハラに質問する。

「そ、それはありません。キチンとお姉様と交換しました」

「はい、よろしい」

「あの、ナツお嬢。少しいいか？」

するとネハラの反対側の隣にいるラスクが何か言おうとしていた。

「どうぞ」

「予想、なんだが、ナツお嬢が薬を飲んでその姿になったとき、皆唖然としていた。その時、アンお嬢がポロッと落としてしまったんじゃないかと」

「ふむ、それはあり得ますね。ラスク、お手柄です」

私はラスクの頭を撫でてあげた。

「な、夏哉。発言をいいですか？」

「どうぞ」

「もし、ラスクのいう通りだったら、確かネハラがこの床の少ししたに、二人が座れるようにと土の床を作ってあるはずだ。だからき

っとそれが受け皿となって無事に――」

「あ、あの、ナツお姉様」

アンの言葉を遮り、ネハラは私の名前を呼んだ。
物凄く悲壮感漂う表情をしている。

「どうしました？」

「じ、実は、私あの時ナツお姉様に見惚れてしまい、意識を完全にナツお姉様に向けてしまったため、その瞬間床を消してしまいました！申し訳ありません！！」

ネハラは、今にも死んで償いますと言わんばかりに頭を下げ、謝罪の言葉をぶつけてきた。

そんな彼女に、私は言葉を投げかける。

「大丈夫よ」

その後、頭の上に手を載せる。

「それはネハラのせいじゃないわよ。私の顔がこんな風になるなんて、ネハラが分かるわけないんだから。だから、ネハラが自分を責める必要はないのよ」

「な、ナツお姉様……」

顔を上げるネハラの瞳は涙で濡れていた。

「ほら泣かないの。分かった？」

「は、はい……」

ネハラは俯いてしまったため、再び顔が見えなくなった。

「あ、あのぉ、夏哉さん？何故かネハラに甘くないですか？ネハラにその理由が通るなら、私だって通るはずですが……」

「何を言っているんですか。あなたには前科があるんですよ？しかも自分の罪に気づいているはずなのに、好奇心に負けて新しい薬を私に飲ませようとした。あなたの方が罪が重いに決まっています。さあ、今から下まで行って見に行ってきなさい！」

「は、はい！」

アンは一旦外に出て、下に向かった。

「……あぁ、ナツお嬢？」

「どうしたの？」

「いや、気になってたことがあって……。どうして今まで敬語だったんだ？」

「それが一番この空気に合ってたと思ったからよ」

「そ、そうか。納得した」

「それなら何よりよ」

「ビ、ビンの欠片があった……」

どうやら本当に落として、解毒剤をぶちまけてしまったようだ。

「……ねぇアン。もちろん、予備の材料はあるわよね？まさかまた材料切れとかは、ないわよね？」

「そ、それは大丈夫だ。。ネハラたちもいるから、材料切れと言うのはない」

「そう。じゃあ何日で完成するの？」

「えっと、四日――」

「因みに作り終わらないまで地球食は何も食べさせないからね」

「二日で仕上げます」

どう頑張っても二日が限界のようだ。

「じゃあさっさと取り掛かりなさい」

「はい！」

アンは早速亜空間を作り、その中で作業を始めた。

こういうやり取りもなんだか新鮮だ。

「あの、ナツお姉様」

「ん？どうしたのネハラ？」

「学校はどうするんですか？」

ネハラが痛いところをつく。

「ん～、どうしようかしら。……やっぱり普通に休むしかないでしょう」

まさかこの体で柊夏哉として学校には行けまい。

「じゃあサトリたちに早めに連絡した方がいいんじゃないか？直前だと焦るだろ」

「それもそうね」

ラスクの言葉に同意し、沙鳥に電話を掛けようとするが、手が止まる。

「どうした？」

「……沙鳥にバレたら何されるか分からない」

ただでさえ女好きの変態だ、それに加え好きな人となったら理性が壊れるだろう。

「じゃあカナエは？」

「そ、そっちの方がまだ安全――」

いやいや待て。

「今度はどうしました？」

「か、考えすぎならいいんだけどさ、私の胸、少なくともネハラ以上はあるわよね？」

もちろん沙鳥やアンには全く届かないし、真樹程もない。

測ってないから正確には分からないけど、まぁ並だと思う。

「はい。普通に私より大きいですが」

「……香苗がこれを見たらどんな反応するかしら」

「「……」」

二人とも固まった。

まだ一ヶ月も経ってはいないけど、お互い性格や特徴はそれなりに掴んでいる。

「よくて涙、悪くて発狂、と言ったところか？」

どうやらラスクは私と同じ結論にたどり着いたらしい。

「……はぁ。真樹しかいないか」

私は真樹に電話を掛けた。

「あ、あの、ナツお姉様。思うのですが、ここで二人に話さなかったとしても、いずれかはバレますよね？休んだらお見舞いに来るでしょうし」

「……」

『もしもし？夏哉どうしましたか？』

現実というのは残酷なものでした。

『夏哉？どうしました？』

おっと、真樹に返事を返さないと。

「あ、もしもし？あの、真樹にお願いがあるんだけど」

『……えぇっと、夏哉、ですわよね？』

「うん。真樹の思ってることはだいたい分かるわ。声と口調が女っていいたいんでしょ？」

『え、えぇ。本当に夏哉ですの？』

「うん。それで簡単に説明すると、アンのせいで女体化の薬飲まされちゃったの」

『女体化？』

ドタバタ

「うん。だから体も口調も女になっちゃったの」

がちゃっ

『それは、俄には信じがたいですが……アンさん絡みだとあり得ない話ではありませんわね』

たったったっ

『それで、お願いとは？』

「明日明後日と、学校休むこと伝えてくれないかなって」

たったったっ

『構いませんが……沙鳥様たちに頼めばよろしいのでは？』

「考えたんだ。私女になったから、まず沙鳥に何されるか分かんなくて、香苗は、私、普通程度に胸あるの。それ見られたら香苗泣くか発狂しそうだったから」

だっだっだっ

『それは否定できませんわね。分かりましたわ。伝えておきましょう。ですが、いずれかは二人にバレると思いますわよ？』

だっだっだっ

「こっちもそこにたどり着いて、どうしようか悩んでる」

ガシャッ

「……あの、真樹さん？」

だっだっだっ

『なんでしょう？』

だっだっだっ

「なんか電話から真樹以外の音が聞こえるんですが……」

『あぁ申し訳ありません。今作業中でして』

「そうなの？なんか悪いね、邪魔しちゃったみたいで」

『構いませんわ。ところで、今夏哉寮にいるんですの？』

「うん。さすがにこの姿で外には出られないよ」

『まぁそうですわね』

ガチャッ

すると、私の部屋の玄関の扉が開いたような音が聞こえた。

「誰！？」

声を上げた時点で後悔した。

私の声は、どう聞いても女だ。

見た目も女。

つまり私は柊夏哉ではない。

それなのに夏哉（わたし）の部屋に夏子（わたし）がいる。

いろいろ誤解されないだろうか。

いや待て。

ここは友人と言うことにしてやり過ごそう。

沙鳥たちにバレれば、またフラグ立てた、なんてことを言われそうだけど、この際気にしてられない。

足音が近づいてくる。

果たして、この部屋に無断進入してきた人物とは――

『「うわ、見事に女ですわね……」』

真樹だった。

耳元と前から同じ声が聞こえる。

「ま、き？」

『「そうですが？」』

あまりにも普通な態度に私は呆然としていた。

『「まぁ何を言いたいかは分かりますが、一旦電話切りますわよ」』

そう言って真樹は電源ボタンを押し、ポケットに閉まった。

「で、わたくしがここに来た理由は、電話を聞いて面白そうだからですわ」

「行動力あるわね真樹！！」

「えぇ、ありますわよ？」

あ、そう言えばこの子、自分を隠すためにもう一人の自分を演じ、更に沙鳥の腰巾着になるために転校までしたんだっけ？

「ところで、以外と可愛いですわね。明後日まで、ということは効果が二日までということですの？」

「ううん。アンが解毒剤作り終わる時間」

「あ、解毒剤作れるんですの？でしたら最初から作っておけばいいものの」

若干の呆れが入り、ため息をつく真樹。

「作ったんだよ」

「はい？」

「アンは一回解毒剤を作ったの。でもあの子、私の姿に見惚れてそれ落としたの。解毒剤は地球にしか干渉できないから一回まで真っ

逆さま。もちろん解毒剤はぶちまかれたわ」

「そ、それはご愁傷様ですわね……。あ、ところで夏子ちゃん」

「夏哉で良いわよ？」

「夏子ちゃんの方が合ってますから。で、夏子ちゃん、家に来ませんか？」

「なんで？」

いきなりの誘いに疑問しか沸かない。

「流石に見知らぬ女が夏哉の部屋にいるのはマズいでしょ。情報操作はこちらでやっておきますので、来ません？」

「う～ん、そうね……。お願いしていいかしら？後三人も」

「問題ありませんわ」

「じゃあラスク、行きましょ。ネハラはアンと一緒に来てくれる？キリの悪いところじゃやめさせられないし」

「かしこまりました」

ネハラはそう言ってアンの開けた亜空間に入っていった。

「じゃあ行きましょう」

私たちは外に出る。

「夏子ちゃん」

道路を歩き始めると、真樹が話し掛けてきた。

「何？」

「何故ネハラさんが夏子ちゃんに敬うような態度をとっていたんですの？」

「あぁ、それ？なんかね、魔族の子たちには、私がとても美しくて笑顔の素敵な女に見えるそうよ？」

ね、とラスクに話を振る。

「あぁ。この美しさはアンお嬢と同等だ」

「でも、私は普通――というか沙鳥には負けてると思うんだけど、真樹はどう思う？」

「ラスクさんには申し訳ありませんが、わたくしも夏子ちゃんに同意見ですわ。夏子ちゃんは魔族受けする顔なのかもしれませんわね。あ、もちろん可愛いことは認めますわ」

そう言われてちょっと嬉しい気分になったのは、感じ方まで女になっているのかもしれない。

そんなことを思いながら夜空を見上げる。

星は自分の存在を示すように輝き、月も半月ながら私たちを僅かば

かり照らしていた。
だから気付くことが出来た。
空から何かが振ってくるのを。
「……ねぇ二人とも、あれなんだと思う？」
二人は疑問符を浮かべながら、私の指さす方向に目を向けた。
「……ちょっと遠くて見えませんわね」
「アタシが見てくる」
ラスクは、通常じゃ考えられない速さで落下物に近づいた。
恐らく魔法を使っているのだろう。
気になったので、私たちはお互い何も言わずに落下物の方に走っていく。
すると、大きな叫び声が聞こえた。
「ナツヤッ！！あれは人間だッ！！」
ラスクの必死な声。
その言葉の意味を理解し、私は本気で走った。
幸い、体は女になっても性質は変わっていなかった。
落下する人にどんどん近づいていくと分かったが、その人物は意識があるのかもがいている。

着地地点に到着する。
幸運なことにそこは住宅の上ではなく、車一台ほどが通れるくらいの路地だった。

落下する人を確認しようと上を見上げると、なんとその人物は刀を持っていた。

「う、うわっ!?ちょ、ちょっとそこの人退いて!!」

女の子の声で、そう叫ばれた。

何?
まさかその剣でなんとかする気!?
あまりにも無謀すぎる。

「ま、待って!それ捨てて!!私が受け止めるから!!」

「な、何言ってるんですか!?そんなの無謀ですよ!!」

「あなたの方が無謀よ!!あぁもう!!」

女の子の位置を確認して、私はその場で垂直跳びした。

正直これはやりたくなかった。
こんなこと周りに見られたら騒動が起きること必須だし、

「い、ぐっ!!」

落下している人の重力と私が上昇跳躍力が重なり、女の子を抱えた瞬間かなりの衝撃を受けた。
でもちぎれてはないから平気。

跳躍力が重力に負け、下へと落ちていく。

ズシンッ！！

着地の瞬間膝を曲げてショックを和らげようとしたが、１０ｍほどの高さから落ちたのだから焼け石に水。

まぁ痛かった。

耐えられないことはなかったが。

「……あれ？生きて、る？」

「だ、大丈夫ですか？お嬢さん？」

これが、私と彼女の出会いだった。

番外編　《十二章》落下少女（後書き）

沙鳥「あら～、今回長いね～」

香苗「過去二番目の長さじゃないかな？」

作者「すいません。書いてるうちに長くなっちゃいました。さて、コラボ第三弾。ゲストに『僕は大切なもの全てを・・・守る！』の主人公、羽山飛鳥さんです！」

飛鳥「皆さん初めまして。羽山飛鳥です」

香「今日は来てくれてありがとうっ」

飛「こちらこそ呼んでくれてありがとう……と言いたいんだけど、香樹さん。一つ質問があるんだけど」

作「ハイ何か？」

飛「一ページ目のことなんだけど、理緒がエネルギー問題について悩んでいたとき、『私は一人の少年？の顔を思い浮かべて、早速連絡を取った』って地の文があったよね？」

作「あぁ、あったな。で？」

飛「？少年？？って何！？？少年？？って！！」

作「そこね。ごめん、修正入れるわ」

私は一人の少女の顔を思い浮かべて、早速連絡を取った。

飛「香樹さん！！」

作「クロスライトさんの作品を呼んでない方はそろそろ気付いているかもしれませんが、飛鳥は男の娘です」

飛「そうだよ！僕は？男？だよ！なのになんで少年？から少女に変わるの！？そのまま少年でいいでしょ！？」

沙「飛鳥君、男の娘の意味分かってないよね？」

香「うん。と言うか今回、ちゃんとした男の人、全く出てきてないね。皆女の子」

沙「そう言えばそうだね」

飛「さあ香樹さん！早く修正して！！さもないと斬るよ！！」

作「な、なんてことを！？飛鳥はそんなこと言う娘じゃない！！」

飛「ここは後書きだからなんでもありなんだよ！！」

作「そ、そうくるか……。ならば！クロスライトさん召還！！」

クロスライト「え？あれ？ここどこ？」

※このクロスライトさんは現実のクロスライトさんとは一切関係ありません。
あくまで畑山香樹が作り上げたクロスライトさんです。

作「さあクロスライトさん！この紙を読むんだ！！」

ク「あ、香樹さん。え、何々？『飛鳥！早くその刀を納めるんだ！さもないと本編であぁんな服装やこぉんな服装を着せるぞ！！』って、飛鳥もいたの――」

飛「証拠隠滅ッ！！」

作＆amp;ク「「ギャアアアアアアア！！」」

飛「これでよし！」

ク「な、なんで俺斬られた……？」

作「こ、こいつ自分の作者に容赦なく……」

沙「あ、飛鳥君終わった？」

飛「うん。ごめんね時間掛けちゃって」

香「気にしなくていいよ。沙鳥ちゃんがクッキー作って来たんだけど、食べる？」

飛「あ、うん。ごめんね、何も持ってこれなくて」

香「気にしなくていいよ」

沙「うんうん。あ、そろそろお別れかな。みんな、小説読んでくれてありがとうございます！」

香「ｖｉｃｔｏｒさん、クロスライトさん、感想ありがとうございます」

飛「次回も僕たちの活躍を見てください」

沙「あ、そう言えば今日の夜まで投票はやってるんで、まだやってない人はぜひお願いします！！」

番外編　《十三章》誓う目標（前書き）

すみません！！
前回のコラボのことでどうやらクロスライトさんの小説の内容を誤解していました！

クロスライトさんに指摘をされまして、マナについて補足説明をさせていただきます。

まずその前に、クロスライトさん執筆の『僕は大切なもの全てを・・・守る！』では五つの世界があります。
人間界、幻界、魔界、天界、ハジマリの祭壇の五つです。
で、その世界にクラス生物にはそれぞれ力があり、霊術、妖術、魔術、天術、属性術を扱えます。
で、それを使うために必要なのがそれぞれ霊力、妖力、魔力、天力となります。
属性術は少し後回しに。
で、この霊力やら妖力やらの源がマナというものです。
本来ならマナを自分が使える力に変換して術を使うのですが、属性術は例外で、マナを変換しないで属性術を使えます。

マナの説明は多分平気……のはず。
違ってたらクロスライトさん、また指摘お願いします。

それから追加でクリスタル・コアについても補足説明させてもらいます。
こちらは俺が小説を書き終わって気付いたことなのでクロスライトさんには聞いていませんので、もしかしたらまた誤解があるかもしれません。

聞いてから投稿しろ！との声が多数寄せられるでしょうが、早く投稿したかったので許してください。

で、クリスタル・コアには属性がある（筈なの）のです。
で、その属性とは火、水、土、風、日、月の六種類（もしかしたら他にあるかも）で、飛鳥はその六種類のクリスタル・コアを持っています。

なんて知ったかでの説明をしてしまいましたが、もし違ってたらどうしよう……。

どうか読者の皆様わたくしを見捨てないでぇぇぇぇ！！

番外編　《十三章》誓う目標

「ナツヤッ！！あれは人間だッ！！」

うわっ！？

突然叫び声が聞こえて、僕はそれにビクッと反応して目が覚めた。

あれ？

と言うことは僕今まで寝てた？

そんな考えを一旦隅に置き、声の主を捜そうと首を回して、異変に気付く。

物凄い突風を上から感じる。

それに足が地面に触れていない。

かといって背中にもお腹にも、手にも着いていない。

上を見上げる。

小さな建物があった。

しかもそれにだんだん近づいている。

「え、あれ、こ、あ、え？」

も、もしかして、落下してる！？

？主、落ち着いてください！！？

突如、頭の中に声が響いた。
聞き覚えのあるこの声は――

「黎羅？」

僕のもう一人の相方、柔連の剣、黎羅だ。

？急いで風の属性術を使って浮いてください！！？

そうだ、今は混乱している暇なんてなかった。

先程からずっと握っていた覇剛をさらに強く握り、意志を堅くする。

僕はイメージした。
属性術のひとつである風を自分の身に纏わせて浮くイメージを。

しかし、

「あ、あれ！？」

？どうしました！？？

「属性術が使えない！！」

？なッ！？どうして！？？

それは僕が聞きたい。

でもその疑問に答えてくれる声があった。

?主は……理緒にひとつ、クリスタル・コアを渡した……？

今手に握っている覇剛だった。

「そ、そうか！それが風のクリスタル・コア！！」

納得したが、問題は解決していない。

？でしたら、水の属性術で着地地点に？質量のある水？を創ってクッションを造るというのは！？？

質量のある水？

「それって巨大なゼリーみたいなの！？」

？イメージしやすいならそれで構いません！！？

属性術を使うには、まずそれを強くイメージしなければならない。

だから黎羅はそう言ったのだ。

「よし、じゃあ――」

？待って……！？

やろう、と言おうと思ったら、覇剛に止められた。

？どうしたんですか覇剛！？？

必死な声で黎羅が聞く。

?下、人がいる……！？

？「なっ！？」？

僕は慌てて着地地点であろう場所を視界に納める。

確かに人がいた。

暗いのでよくは分からないが、人であることは間違いない。

「う、うわっ！？ちょ、ちょっとそこの人退いて！！」

慌てて下にいる人に逃げてもらおうと声を掛ける。

しかし下の人はとんでもないことを口にした。

「ま、待って！それ捨てて！！私が受け止めるから！！」

女性の声だった。

その女性はなんと言った？

それを捨てて？

それというのは覇剛のことを言っているのだろう。

そんなことできるはずがない。

彼女も僕の大切な人なんだから――じゃなくて、問題はそっちではない。

受け止める、と言う単語も聞こえた。

まさか下の女性が僕を受け止める気？

「な、何言ってるんですか!?そんなの無謀ですよ!!」

そう言うことが出来るのはマンガだけだ。

実際の人間――ましてや女性がそんなことをしたら間違いなく僕につぶされる。

「あなたの方が無謀よ!!あぁもう!!」

苛立ちの意を含んだ叫びをあげると、女性は飛んできた。

……は?

飛んできた?

僕は自分の目を疑った。

何せ女性が、高さ……何mかは知らないけど、少なくとも家より高いこの位置まで飛んできたのだ。

女性は腕を出し、お姫様だっこの要領で僕を空中で抱えた。

「い、ぐっ!!」

痛々しい呻き声を上げたが、僕は驚きのため反応が出来なかった。

僕の体は、女性の力が加わり少しだけ上昇した。

やがて重力に負け、再び下へと落ちていく。

死んだ、と思った。

この精神が安定しない状態ではイメージもままならず、上手く属性術が使えない。

たまらず目を瞑る。

ズシンッ！！

恐らく地面に墜落したのだろう、凄まじい音が聞こえた。
僕たちは潰れてしまったんだろう。

……どうして僕はその音を聞ける？
というか、そのことを誰が考えている？

恐る恐る目を開けてみた。
目を開けられるということは……

「……あれ？生きて、る？」

「だ、大丈夫ですか？お嬢さん？」

少し顔を上げる。

そこには月明かりで淡く照らされた、綺麗な黒髪の女性が、多少ひきつりながらも微笑みを浮かべていた。

――――――――――――

手の中にいる少女は驚きを隠せていなかった。
それもそうだろう。
あんな高さから落ちて平気だったんだから。

私は少女を観察してみた。

髪の毛は黒色で肩までのストレートヘアー。
童顔、なのだろうか。
年齢が分からないからなんとも言えないが、私より年下に見える。
それに加えボーイッシュな顔立ちだ。
そしてその見た目にそぐわぬ紅色の刀身をした、日本刀のような刀。

しかしこの少女、私の呼びかけに全く反応しない。
まさか聞こえてない？

「あの～、お嬢さん？大丈夫ですか？」

「……え？あ、はいっ。大丈夫――ですけど！僕はお嬢さんじゃありませんッ！！」

お嬢さんという単語に反応する少女。
お嬢さん扱いは嫌いだったのね。

「あ、ごめんねお姫様」

「そういう意味じゃなくて！僕は男です！オ・ト・コ！！」

お姫様だっこの状態で、器用に私に迫ってくる少女――って、男？

「いやいやいやいや。あなたを男というならこの世界に女はいない

わよ？」

「そんなこと言われても、僕が男であることに代わりはありませんっ！！」

拗ねているのだろう、むくーと頬を含ませているその表情は、まず初めに可愛いという印象を与える。

いやだからと言ってこの子を襲う気にはならないけど。

というかもし本当にこの子が男だとしたら、私は同性愛者になって――しまわないか、今は。

「夏哉～！！」

すると少し離れたところで真樹の声が聞こえた。

それで意識をこの子に戻し、話し掛ける。

「あのさ、お互いいろいろ話したいことがあると思うんだけど、一旦私の友達の家に行かないかな？」

「え？あ、はい」

「歩けそう？」

「大丈夫です」

私はゆっくりこの子を下ろした。

うん、名前がないのは不便だ。

「ねぇ、名前はなんて言うのかしら？私は柊――」

ここまで来て悩んだ。

仮にもこの姿で夏哉と名乗ってもいいのだろうかと。

でもそう言えば既に真樹に夏哉と呼ばれたので今更ごまかせないだろう。

「柊夏哉よ」

「あ、僕は羽山飛鳥です。ところで……夏哉さん、ですか？」

まぁ疑うでしょうね。

？夏哉？なんて名前、明らか男だから。

「こっちにもいろいろあってね。余裕が出来たらそれも説明するけど、今は私のこと女と認識して構わないわ。もし夏哉で言いにくいなら夏子でも構わないわ」

「夏子さん、ですか？」

う～ん、今更ながら、夏子と呼ばれて違和感を感じない。

これは自分の性癖ではなく薬のせいと信じたい。

「ナツお嬢、大丈夫か？」

真樹よりも先にラスクが到着した。

先程の叫びとは裏腹に、冷静な声だった。

その証拠にナツヤからナツお嬢になっていた。

すると、

「え、えっと、夏子、さん？この人は？」

「……飛鳥はラスク、薄緑の髪の女が見える？」

「え、見えますけど……」

飛鳥の正体と、どうして空から降ってきたかがわかった。

「これも後で説明するけどね、彼女普通の人じゃないの」

「え、それってどういう……？」

「この子普通の人には見えないのよ」

「み、見えないって、もしかしてゆう、れい？」

若干表情が青ざめている。

「幽霊じゃないけど、似たようなものよ。でも怖がってあげないで。普通の人間と同じだから。彼女の名前はラスク。ラスク！この子飛鳥って言うの。ラスクのことが見えるみたいだけど、そのこと聞くのはまだ後にしてあげて」

「分かった」

「ふぅ、どうやら無事のようですね」

大きく息をつきながら、真樹も到着した。

「真樹、早速で悪いんだけど、あなたの家お邪魔していいかしら？いろいろ話があるから」

「分かりましたわ」

――――――――――

夏子さんの指示でどんどんことが運んでいく。

僕は感心して、黙ってそれを見ていた。

で、現在は真樹と呼ばれた人物の家に向かう、らしい。

「あの、申し訳ないんですが」

しかしその前に、真樹さんに話しかけられた。

「その刀はどうにかなりませんか？夜中とはいえ銃刀法違反ですし」

「あ」

そう言えばそうだった。

僕は急いで覇剛を体内にしま――

？よろしいのですか、主？？

――おうとしたら黎羅に問いかけられた。

「（よろしいって、何が？）」

僕は頭の中で黎羅に聞き返す。

黎羅と覇剛とは、頭の中で会話が出来る。

？ここにいる者たちは訳ありなようですけど、人間です。刀を体内に仕舞うという行為が普通な環境なのでしょうか？？

あ、そうだ。

今まで彼女たち自体九十九と理緒にしか見せてないし、見る人もいなかったから気にしなかったけど、この三人は初対面なんだから驚かれるに決まって――あぁ！！

そう言えば今までパニックになりすぎて忘れてたけど九十九と理緒は！？

周りを見てもいなかったし、まさか次元断層に入ってからはぐれ――って！

そうだよ！

次元断層に飲み込まれたってことはここ異世界ってことだよね！？

建物がこっちの世界に似てたから気付かなかったけど！

も、もしかして二人ともここと違う世界に飛ばされた！？

ひとつの問題を思考すると、連鎖するように別の問題が浮き上がってくる。

「えっと、飛鳥大丈夫？」

あああああ～、とどうすればいいか悩み頭を抱えていると、夏子さんに心配された。

「い、いえ、やらなきゃいけない問題がたくさんありすぎて……」

そう言うと、何を思ったのかラスクさんに話しかけた。

「ラスク。飛鳥に魔法見せてあげてくれないかしら？」

え、魔法？

僕はその単語に反応して、ラスクさんを見つめる。

「分かった」

そう了承すると、ボウッ、と手のひらから炎が燃え上がった。

恐らく僕の顔はアホみたいになっているだろう。

自覚しても直せられない。

「ということで、私たちちょっと特殊だから、珍しいことをしてもなんの問題もなく納得出来るわ。それに問題が山積みなら一旦あなたが冷静にならないと」

で結局、僕は問題を一旦置いといて真樹さんのお部屋にお邪魔させてもらった。

覇剛を体内に入れても、おー凄い、という反応のみだった。

僕たちはお互い説明した。

この世界には魔法という物があること、異世界があること、ラスクさんが異世界人だということ、夏子さんは本来夏哉君――僕は夏哉

君の方を知らないので夏子さんと呼ぶ――で人よりも力があること。
僕も、こちらに来た理由、魔術や属性術などの力のこと、他に仲間がいることなど説明した。
「それじゃあ僕他の二人を探さなきゃならないので失礼します！本当にありがとうございました！！」
深くお辞儀をしてドアから外に出る。
「待ちなさい」
その前に夏子さんに腕を捕まれた。
「飛鳥。あなたこの辺りの地形分かる？」
「うっ！！」
「二人がどの辺りにいるか検討ついてる？」
「あうっ！！」
「最悪この世界にいないかもしれないんじゃないの？」
「う、うぅ～……」
全て言うとおりだった。
「飛鳥には悪いけど仮定の話で、皆この世界に来たとして、あんな高さから落ちたらその痕跡はどうしても残るはずよ。落下音にした

って魔術かなんか使って着陸したって、……最悪死体だって」

「!?」

そのことは考えたくなかった。

あの二人に対して、そんな結果が残るわけないと信じ込んでいた。

言いようのない感情がお腹の中でグルグルうずき回っている。

そんな感情を引き起こした夏子さんは悪くない。

彼女だって言いたそうな表情はしていない。

「そんな痕跡を住人が無視するわけないでしょ？人気のないところに落ちたら無理だけど。でも、人がいる近くだったら騒ぎが起こる。ただ闇雲に探すよりはそういうところを探した方がよくない？幸い真樹は有名な医者の子供だからその連絡がくるかもしれないし」

確かに正論だった。

こんなどことも知らない場所で一人ただ探すよりはずっといい案だった。

でも。

「……ごめんなさい。夏子さんの言うことは正しいと思うよ。でも、だからってジッとなんてしてられない！もしかしたら僕の方が先に見つけられるかもしれない！夏子さんの言ったとおり人気のない場所にいるかもしれない！だから僕は探しに――」

「待って待って！分かったわ！私たちも手伝うから最後ひとつだけ！」

「ひとつ？」

なんだろう。

「服装見るとなんだか私たちの世界のに似てるんだけど、携帯なんか持ってない？」

「携帯？」

確かに持っていた。

それをポケットの中から取り出す。

「特段変わってはないわね……」

「あの、これが一体？」

「私たちの世界にも携帯はあるの。もしかしたら構造も、電波も似てるかもしれない」

そこまで言われれば何が言いたいのか分かった。

もしかしたら携帯が通じるかもしれないということだ。

「掛けてみる！」

即座に携帯を開き、電話帳ボタンを押す。

掛ける相手は理緒。

通話ボタンを押した。

頼む、通じてくれ！

……プルルルルルル

「やった！」

第一関門は突破。

後は理緒が出るだけ。

プルルルルルル、プルルルル――

『飛鳥！？』

理緒の声が聞こえた。

「理緒平気！？」

『私は大丈夫です！飛鳥は！？』

「僕も平気！ねぇそっちに九十九いる！？」

『こちらにはいません。聞くと言うことはそちらにもいないようですね。でも、どういうことですか？私たち異世界に来たというのに携帯が通じるなんて。まさかただ瞬間移動しただけ？』

「えっと、えっと……」

僕がどう説明しようか悩んでいると、夏子さんに肩を叩かれた。「

私が説明しようか？」

「あ、お願い。理緒、ちょっとある人に代わるね」

『え、ある人？』

僕は携帯を渡した。

「もしもし、理緒さんですね？」

『そうですけど、貴女は？』

「現地の協力者です。事情も聞きました。今から助けに行きたいと思うんですけど、怪我はしてますか？」

『かすり傷程度で、行動には問題ありません』

「なら周りに何が見えますか？」

『森、ですね。山にいるのかもしれません。後事情を聞いてるんなら分かると思うんですが、次元内世界転移装置もあります』

「じゃあ動かない方がいいわね。……ねぇ、空に月見えません？」

『月……見えました。半月です』

「なら、今からあるものを空に打ち上げますんで、月を基準に方角を教えてください」

『分かりました！』

「ラスク、頼める？」

「構わないが、何を打ち上げる？」

「炎が嬉しいわ。真樹、位置特定いい？私空間把握能力ないの」

「分かりましたわ。ではラスクさん外行きましょう。飛鳥さん、携帯借りますわよ」

「あ、うん」

ラスクさんと真樹さんは、僕の携帯を取ると外に向かった。

「これでなんとかなるとして、後一人よね？」

「うん。後九十九だけ。でも九十九は自分でなんとかしてるかもしれないよ」

そんな確信めいたものを僕は抱いていた。

「そうなの？なら火柱を見てこっちに来るかもしれないわね。彼女携帯は？」

「持ってないよ」

「ならそっちは地道に探すしかないわね。飛鳥、今度こそ走り回っていくわよ」

「分かった！」

僕と夏子さんは外に出て走り出した。
その際先に外にいた真樹さんに小言を言っていた。

「夏子さん凄いな」

走りながら、僕はポロッとそんなことを口にした。

「へ？そうかしら？」

独り言で言ったつもりだったが、聞かれていたようだ。

そのまま会話に繋げる。

「そうだよ。突然異世界から来た僕を疑いもせずに助けてくれて、しかもぽんぽん指示を出していって。そのお陰でもう理緒の手がかりを掴めたんだよ。本当に凄いよ。僕なんて慌ててばっかりでなんの役にも立てなくて……」

「私の場合そういうのに耐性があるだけよ。それにしても、話変わるけど飛鳥よく喋りながら平気ね。まぁまぁな速度よ？」

確かに結構なスピードを出している。
普通の人なら長距離なんて走れないほどの。

「僕鍛えてるから。そんな夏子さんだって平気そうだよね？」

「私はもう知ってると思うけど、普通じゃないから。このくらい平気よ」

そう言えば、夏子さんの身体能力については何も聞いていない。

「聞いてもいいかな?その普通じゃないってこと」

「ん～、どう説明しようかしら。私自身ね、この力のことはよく分からないの。生まれつき変に力があってね、殴ればコンクリ粉砕。短距離走れば車には負けない。飛べば学校は越えられる。いわゆる化け物よ」

「化け物って……!」

僕は絶句した。

こんな優しくて、温和そうな人が化け物なんて。

決して、夏子さんが化け物で忌むべき存在と思って絶句した訳ではない。

きっと周りの人にそう呼ばれ続けたのだろう。

それなのに平気そうにしていることに絶句したのだ。

その過去を想像して、悲しくなった。

「でもね、私は化け物でよかったって思ってるの」

「え?」

「化け物だから、真樹とかラスクとか、大切な人に会えたの。しかもそれを守れるの。この力もね、要は使いようって知ってからは重宝出来るようになったわ。だから別に悲しまなくていいからね」

僕の心情を察したのか、夏子さんは僕を気にかけてくれた。

強いな、夏子さんは。

優しくて凄くて、何より心が強い夏子さんに憧れと、尊敬を抱いた。

僕も夏子さんみたいな人間を目指そう。

僕はそう心に強く誓った。

「あ、そう言えば夏子さん。僕たちどこに向かってるの？」

「ん？あぁ、もうそろそろ着くと思うけど、学校よ。私たちが通ってる」

「どうして学校？」

「そこならそこそこ広いし、何より人がいないからね」

「何する気なの？」

「何もしないけど、私ね、皆に不本意ながら主人公って言われてるの」

「主人公？」

「そうなの。それで認めたくはないけど、いろいろフラグとかご都合主義とかが起きてるわけなの」

「……つまり？」

「私が行こうとする先に九十九って人がいる確率が高いわ。九十九が女ならなおさら」

「そんなバカな……」

「飛鳥あああああああああ！！」

目の前にいる九十九が僕に抱きついてきた。

現地は夏子さんたち通う麦谷高校。

「……ぇ……」

「飛鳥？どうしたんじゃ？」

「えええええええええええええええええええええええええええええええええええええッ！？」

「ね、言ったでしょ？」

そ、そんなばかな……。

僕は本当に夏子さんを目指せるのだろうか。

早速誓いが揺るぎ始めてしまった瞬間だった。

番外編　《十三章》誓う目標（後書き）

作者「どうしよう！今回の後書き言うことやることが多すぎる！」

真樹「なら余計なこと言わずにさっさとやりなさい」

夏子「真樹の言うとおりりよ」

作「了解しました！まずやること！キャラ投票結果発表！」

真「皆様本当にありがとうございました」

作「この結果、皆様にとっては予想通りなのかもですが、俺にとっては予想外でした」

夏「そうなの？」

作「うん。じゃあ早速行ってみよう！！」

第五位柊夏哉、天雲沙鳥

真「うわ、主人公が五位ですの？」

夏「まあ男だからしょうがないでしょ」

作「因みに票は最後にまとめて言います。あと夏哉と沙鳥ペケね。俺は夏哉二位に行くと思ったんだけどな～」

夏「そうかしら？私は沙鳥がもうちょっと上に行くと思ってたけど」

真「それより作者次」

作「了解」

第二位

真「待ちなさい」

作「ん？」

真「三位と四位は？」

作「同率三人」

真「納得ですわ」

作「しょうがないから一位もまとめて」

二位花街香苗、アン、空揺り火津那

一位早乙女真樹

真「……は？」

夏「真樹凄いわね。おめでとう！」

作「ということで、このコラボが終わったら真樹の日常話を書いていきたいと思います。ある日の真樹の休日、みたいな」

真「ちょ、ちょっと待ちなさい！！」

作「ん？」

真「ん？じゃないですわ！！な、なんですのこれ！？わたくし誕生日でもなんでもないですわよ！？」

作「いや、俺も予想外だけどさ、お前、正真正銘偽りなしの一位だ」

真「おかしくないですか！？わたくしですよ！？」

夏「あり得ない話じゃないわよ」

真「というかまさかの空お姉ちゃんが二位！？」

作「これもホント予想外」

夏「で、作者。票は？」

作「じゃあ一気に行くぞ？」

五位、一票

二位、二票

一位、六票

真「……」

夏「真樹開いた口がふさがらない！というかほんと凄まじいわね。ひとりだけ六票とか」

作「俺もしかしたら真樹のお陰でこの小説成り立ってるのかもしれない」

真「……あはは、あはははははははははははははははははは！！」

夏「！？」

真「そうよ、これは夢よ。何わたしこんな虚しい夢見てるのよ。もう出番ほしいからって自分が嫌になっちゃうわ、あはははははは」

夏「真樹が壊れた！？」

作「そっとして置いてやろうぜきってもう少ししたら現実と向き合うって」

夏「そ、そうね……」

作「で、後は言うことなんだけど、クロスライトさん申し訳ない！！せっかくコラボ許可してくれたのに変な認識してしまい！！」

夏「本当にすみませんでした」

作「それから、いつの間にかＰＶ４００，０００、評価６００を越えていました！！」

夏「こちらには素直に感謝します。ありがとうございます」

作「後新しい小説が脳内に浮かんで離れません！！」

夏「それは知らないわよ！！てかやめなさい！！ただでさえ三つをやっていくのも精一杯だっていうのに！！」

作「いや、さすがに書かねぇけどさ、一話一ページ小説なら平気じゃないかと言う自分がいる」

夏「読者が許さないと思うわよ？」

作「ですよね～。じゃあ今回はこの辺で。クロスライトさん、ｖｉｃｔｏｒさん、蛍夜さん、感想ありがとうございました！」

「流石にこの人数じゃ多すぎますわね。リビングの方に変えますわよ」

真樹の家の前、私たちはそこに集合していた。
私たちというのは、私と飛鳥と九十九、真樹とラスクと理緒、私たちが真樹の家から出てすぐに到着したというアンとネハラ、そして真樹が連絡したのだろうと思しき香苗と沙鳥の計十人。
こんな大勢になってしまって申し訳ないと思う反面、この十人を収容する一部屋があるという事実に驚きを隠せなかった。
ちなみに後から来た組の自己紹介はまだだが、アンたちに反応する飛鳥たちになんの言葉も発しないのは、もしかしたら真樹が電話で軽い説明をしたからなのかもしれない。
すると前方に歩いている真樹に沙鳥が肩を叩き、話を持ち掛けた。

「ちょ、真樹いい？」

「どういたしましたか？」

「夏哉は？普通ここに夏哉いるもんじゃない？」

もっとも問題としていたところを沙鳥につかれた。

「それ私も思った。アンさんたち知らない？」

「あ、えっと……」

アンは困った風に私を見てきた。

……はぁ、面倒だけど明かしますか。

「香苗さん沙鳥さん」

私が呼ぶと、二人は振り返って私を見る。

若干戸惑いの表情を浮かべている。

まぁ知らない娘にいきなり話しかけられたらそうなるでしょう。

「私、柊夏哉よ」

「「……はい？」」

その反応も想定内。

「まぁ見た目どう見ても女だから戸惑うのも無理ないけど、どっかの馬鹿な魔族が女体化なんて薬を飲まされてこう――」

「おい夏子！」

説明をしていた途中、後ろから九十九に肩を掴まれて体の向きを変えられ、九十九が正面に来た。

どこか焦ってる様子だ。

――――――――――

魔族という単語を聞き、僕と理緒は驚きを隠せなかった。

僕たちの世界では今、魔界と強い関わりを持っている。
魔界の住人にしか使えない筈の魔術が使えるようになったり、魔界四天王と呼ばれるメリルという子に襲撃を掛けられたりした。

「もしやここに魔界の者がいるのか！？」

九十九の叫びに無意識に警戒態勢を取っていたら、金髪の胸の大きい女の人が言葉を発した。

「一応私は魔界の者だが、何か勘違いしていないか？少なくともお前たち何かした覚えはないが……ラスクは何かしたか？」

「いえ、特には」

僕たちとは対照的に冷静、というか疑問を浮かべていた。

「ちょっと九十九、落ち着きなさい。忘れてるかもしれないけど、ここはあなたたちにとって異世界なのよ？予想だけど魔界、とか魔族っていうのはありふれた名前だと思うわ。ただ同じ名前って言う可能性も考えてる？」

「あ、す、済まぬ。つい取り乱してしまった」

「分かってくれたら何よりよ。で、因みにアン。今まで行ったことのある世界は？」

「魔界を含めれば地球と聖界の三つだな。九十九、と言ったか。お前たちが知ってる魔界に精通してるか？」

「全てとは言わぬが、かじり程度にはな」

「ならばアルクシア、クーレラ、タクノムという名前は聞いたことあるか？」

「聞き覚えはないな。皆有名な奴らなのか？」

「あぁ。元トップスリーと言ったところだな」

「元？」

金髪の胸の大きい女の人――アンさんの言葉に疑問を抱いた。

「あぁ。その中のクーレラは脱却した」

「どうして？」

自分の中の好奇心が膨れ上がり、躊躇なく訪ねてしまう。

「クーレラは私だからだ」

「えぇっ！？ど、どうして！？魔界のトップスリーじゃなかったの！？」

「ん～、詳しく説明すると長くなりそうなんだが、一言で言うなら……駆け落ちだな」

「か、駆け落ち？」

あまり予想出来なかった答えだったため戸惑ってしまう。

「本来の意味とはちょっと違うぞ？私はこの世界が好きだから裏切ってこっちに逃げ込んできたんだ。しかもこっちの世界にある程度順応するために魔力の七割方なくなったしな」

アンさんの説明にもっとも早く反応したのは理緒だった。

「失った、ということはもしかして魔力を取り込めなくなった、ということですか？」

「取り込む？いやいや、魔力は体内に存在してて――」

「え、じゃあマナを取り込んで変換、なんて事をしないんですかっ？」

「マナ？それは知らないが、変換なんかはしたことないぞ？ただ普通にイメージして外に放出、みたいな感じだ」

「どことなく属性術に似ていますね……。すみません、もっと詳しく聞かせて下さいっ！」

どうやらこの世界の力は理緒の知的好奇心に火を付けてしまったようだ。

「えっと、まぁ向こうはなんか話し込んじゃったけど、とりあえず誤解って事でいいかしら？」

「あぁ。ほんと済まぬのぉ」

「ちゃんと冷静な人間でよかったわ。話聞かない人だったらめんど

くさい事になってたでしょうし」

「おぉそうだ。一応お主らに伝えておくことがあるんじゃが」

「ん？何？」

「異世界の住人に耐性があるお主らだから言うのじゃが、実は妾人間ではなく九尾の妖狐なんじゃよ」

その証拠と言わんばかりに、今まで幻術を掛けてその姿を消していた耳と尻尾が現れた。

その瞬間、

目の前にいたはずの九十九と夏子さんが、

消えた。

そしてその場所に、黒い陰が――

――――――――――

一瞬の出来事じゃった。

妾でも反応が出来なかった。

妾が本来の姿を見せた瞬間、視界がブレた。

それが収まると、夏子の顔がドアップに映った。

「ぬわっ！？」

驚きの声を上げた。

何がなんだか分からない状態だから、そんな声を上げてしまった妾を許してほしい。

そして気付けば、妾は夏子に抱き抱えられていた。

「チッ、やっぱり私の予感的中ね」

夏子がそう呟きながらどこかを見ている。

妾も倣ってそちらを見た。

黒髪のポニーテールで巨乳の美少女がいた。

あ奴は確か夏子たちの仲間のはず。

それなのにどうして妾を襲った？

そんな疑問が浮かぶと、美少女が低めの声で夏子に話し掛けた。

「なぁつこちゃ～ん。早くその娘を渡してよぉ」

ゾクッ、と全身に怖気が走った。

根拠はないが、あ奴に捕まったらいろいろ終わる！！

そんな確信めいた予感が胸に浮かぶと、妾の体は動きだした。
それは妾自身が動いたのではなく、夏子に抱えられた状態で、夏子が動いたというわけじゃが。

「ごめん真樹！後よろしく！九十九もうちょっと我慢！！」

そう言うと、妾たちが進んできたのと逆の方向、つまり来た道を戻っていく。

夏子の肩越しに見ると、あの美少女もついてきている。

「ちょ、ま、待て夏子！！事情が分からん！！何故妾はお主に抱えられてるのじゃ！？それにあの娘はなんじゃ！？お主の仲間ではないのか！？何故妾が狙われてる！？何もしてないぞ！？」

聞きたいこと全てを一気に捲くし立ててしまった。
しかしそれに夏子は答えてくれた。

「沙鳥はね、若干オタで変態で可愛い物に目がないのよ」

「……は？」

夏子の説明だけではよく理解できなかった。

「つまり！九十九が狐の耳と尻尾を出したせいで沙鳥は極限まで萌えちゃって理性が吹っ飛んじゃったのよ」

「……は？」

一応今度は、意味は理解した。
しかし、先ほどと同じような反応を取ってしまった。

「多分捕まると、これでも勝手ほどにモフモフされて、貞操の危機に陥るわ」

あぁそうか。
怖気の正体はこれだったのか。

「イヤじゃあああ！夏子離せ！！妾はまだ死にとぉない！！」

「お、落ち着きなさい！！だから今逃げてるんじゃない！！」

いつの間にか玄関にたどり着き、夏子は即座に靴を履き、妾のも手にとって外に出た。

「沙鳥は若干チートなのよ！あの子が魔法を駆使したら捕縛なんか余裕でしょうし、オリンピックなんか目じゃないほどに走れるわ！！九十九がどんな力持ってるか分からないけど、ここの地形分からないでしょ！？持久戦になったら絶対負けるわ！！」

「じゃあどうしろと言うんじゃ！？」

「……やるわよ」

「や、やるとは、何を？」

「人気のないところに着いたら、沙鳥を気絶させるわ。そして夢オチって事にさせるの」

「き、気絶っていいのか？大切な奴なんじゃろ？」

確かに出会って間もない妾たちじゃが、普通の友人でこんな夜方に呼ばれたからという理由でくるじゃろうか？

恐らくお互いかなり信頼していて、だから駆けつけたんじゃと思う。

「それは、私たちの関係が壊れるって思っていってくれてるの？」

「というか、お主に罪悪感が覚えぬかと思って」

「それは安心しなさい。今回悪いのは全面的に沙鳥だから。お仕置きは必要よ。あと、殴った程度じゃ関係は壊れないわ。向こうだって私がなんの理由もなしに殴るなんて思ってもくれないだろうし」

夏子の語る姿を見て、少し憧れを抱いた。

そうか、こ奴らはここまでお互いを信頼できているのか。

妾だったら、どんな状態の飛鳥や理緒に攻撃を加えることに若干の躊躇いは生じるじゃろう。

それは罪悪感を抱いたり、攻撃を加えられた当人たちに嫌われるかもという想像が浮かんだりしてしまうから。

なのに夏子は――夏子たちは、そんな躊躇いも消せるほどに信頼をしている。

「妾たちもそうありたいのぉ」

「ん？なんか言った？」

おっと、つい口に漏れてしまったようじゃ。

「なんでもな――」

い、と言おうと思ったが、言えなかった。

その時、ある気配を感じたから。

「夏子止まれ！」

慌てて夏子に制止をかけた。

「どうしたの？」

言われたとおり止まってくれた。

「チッ、何故こんなところにおるのじゃ！？」

妾がいるはずがない存在に文句を言うと、

「やっと、追いついた……」

背後にいた悪魔が追いついていた。

どっちから片づけるか悩んでいたら、

「沙鳥、今シリアスよ」

夏子が一言言った。

その言葉になんの意味があるのかと思っていたが、答えはすぐ分か

った。

「じゃあ……真樹たちに報告？」

さっきとは打って変わって真剣な表情になっていた。

その豹変ぶりに開いた口がふさがらなかった。

「うん。少なくとも飛鳥――異世界からきた人たちは呼ぶべきだと思うわ」

「うん。分かった」

沙鳥は携帯を取り出し、電話をし始めた。

「九十九」

名前を呼ばれ、我に返った。

「お、な、なんじゃ？」

「状況説明いい？」

そうじゃ、今呆けてる暇などない。

「今この世界に、妾たちの世界にいたモンスターの気配を感じたのじゃ。しかも雑魚ではなくかなり強い……」

「モンスター……っていうのはよく分からないけど、妖怪みたいなもの？」

「実際は違うが、お主にとっては似たようなものじゃ。正確にはこちらの世界の魔界の生物じゃが」

「なるほど。凶暴？」

「ではなかったら一瞬でも取り乱したりはせぬわ」

「ですよね」

妾たちの会話がキリのいいところで、沙鳥が話し掛けてくる。

「夏哉、皆来るって。向こうもなんかモンスター的な気配感じたみたいなこと言ってたけど、九十九さんそのこと？」

「あ、あぁ、そうじゃ」

普通に話しかけてはくるが、やはり警戒してしまう。

「じゃあ行こうか。沙鳥、おんぶ」

「わ～い」

夏子が沙鳥に背中を向けると、その上に乗った。

ところで、

「のぉ、お主の名前は夏哉なのか？」

「本来はそうよ。元は男。でもアン――金髪巨乳のせいで女になっ

ちゃったのよ。女なのに男の名前名乗っちゃ変でしょ？だから夏子よ。因みに口調も、女になってからこれしかしゃべれなくなっちゃったの」

ということは今妾は男に抱き抱えられとる、ということか？

……実感が沸かぬ。

「それより、そろそろ行くわよ。九十九方向は？」

「この先直進だが、というかそろそろ降ろせ。自分で走れるぞ」

「あー九十九さん、そのまま抱えられてた方が早いから。というかそうしないと夏哉本気で走れないから」

「は？何言ってるんじゃ？確かに妾を抱えたときも早かったが、妾だって走れるし、それにお主まで背負ってるのじゃぞ？」

「いやいや、この夏哉君、今は夏子ちゃんだけど、とにかく侮っちゃいかんよ。この子本物の化け物だから」

は？

化け物？

「そろそろ行くわよ。九十九、目と口を閉じる事を推奨するわ。沙鳥、風圧お願いね」

「うん」

待て待て、二人では会話が成立してるらしいが、妾にとっては何がなんだか分からん。

疑問を口にしようとしたが、それは叶わなかった。
背景が消えたからじゃ。
いや、正確に言えば、消えたわけではなく、黒の中に所々色が見える。

「な！？」

本当に訳が分からなかった。

「な、夏子！？これはどういう事じゃ！？」

「わっ、ちょっと九十九！喋らない方がいいわよっ？舌噛むわ」

「そんなことはどうでもいい！早よ説明せい！！」

「説明も何も、ただ走ってるだけよ。全力で」

「はぁ！？」

走ってる？
背景が消えかかるほどの速さで？
そんなバカな。

何かそれを嘘とがないかと悩んでいると、夏子が先に言った。

「見つけたわ。沙鳥、止まるわよ」

見つけた？

何を？

そんな疑問を投げかける前に、ザザザザザッという何かを擦る音が聞こえた。

続いて背景がはっきりと見えるようになった。

うえ、なんか気持ち悪……。

「沙鳥、結界的なの張れる？」

「いやはや、マンガみたいなのは無理――かどうかはわからないけど私には無理ですな」

「じゃあ見えない盾は？」

「ん～、風使えばなんとかなるかな」

「じゃあ一旦あれを公園に連れ込むから沙鳥は先回りして私たちが着いたらドーム状に張る。その後人払い。ＯＫ？」

「公園って洛輅公園？」

「そ」

「分かった！頑張る！」

夏子に下ろされ、夏子酔いをしてる間に二人は作戦を立て終わっていた。

「オオオオオッ！！」

前方で咆哮が聞こえた。

重い頭を上げると、信じられないものを目にした。

「ふ、フレイムグールじゃと！？」

２ｍはゆうに越える長身。

足はまるで木の幹のように太く、右腕のほうが胴体と融合していて左腕はまるで鞭のようにしなり、その先は毒々しい紫の爪のようなものが見えた。

肌はカビの生えたような緑色で、左手の爪には纏うように、頭部にはとさかのように炎が発火している。

これは予想外じゃった。

「もしかして、かなりマズいの？」

夏子に話し掛けられた。

見れば沙鳥は既にいない。

「あぁ、あ奴はグールの上位種――と言ってもグールが分からぬか。取り敢えず雑魚ではないことは確かじゃ。しかも名前の通り――」

と、説明の途中、フレイムグールが大きく息を吸い、腹を膨らませた。

「炎属性を使ってくるんじゃ！！」

妾の言葉が終わるのとほぼ同時、フレイムグールがブレスを吐き出した。

直径1ｍほどのブレスを。

「……は？」

つい呆けてしまった。

警戒していた分その反動は大きい。

小さな小さなブレスは、妾たちの５ｍ手前で消滅した。

「あ……っと、九十九さん？まさかあれが脅威、ってわけじゃないわよね？」

夏子も呆れていた。

じゃが薄々その原因を理解し始めた妾にとって、それが示すことが死活問題になっていることに気付き、冗談など言ってられなくなった。

「マズいのぉ。あ奴のブレスがあの程度と言うことは、やはり妾の妖術もほとんど使えんぞ」

「と言うと？」

「妾たちの力はマナと言うものを必要とするのじゃ。薄々気付いてはおったのじゃが、今ので確信した。この世界にはマナがほんのわずかしかない」

「……じゃあ使えることは使えるけど火力が低いと」

「理解力が高くて助かる。肉弾戦で戦えなくもないのじゃが……」

それは向こうも同じ――と言いたいとこじゃが、向こうは基本肉弾戦で、炎は補助。

向こうが有利なのは変わりない。

「そっか。まぁ取り敢えず、あれを公園まで連れて行こう」

自分のブレスの威力に未だ戸惑っているのだろう、あたふたしているフレイムグールを見据えてそう言う。

「それには賛成じゃが、どうやって？」

「その質問の前に、空飛べる？」

「空？飛べるが？」

「じゃあ後からついてきて」

そう言い残し、夏子はフレイムグールに向かって走っていった。

その懐にはいると、緑色のモンスターの右手を掴み、

「そぉぉぉいっ！！」

投げ飛ばした。

因みにこれは一本背負いとかそう言う?投げ飛ばした?ではなく、ボールを?投げ飛ばした?の?投げ飛ばした?だった。

「オォォアァァ!?」

さしものフレイムグールも驚愕な奇声をあげる。

「じゃあついてきて!」

夏子が妾に指示を出すと、空を飛び、フレイムグールに追いついた。

「てりゃ!!」

そして空中で回し蹴り。

「ギャアアアアッ!!」

再び奇声をあげるモンスターに、どういう原理だかは知らんが空を翔て追撃する。

まさか、あれが移動方法?

「は、ははは、ははははは……」

もう笑うしかない。

番外編　《十四章》異界の化け物（後書き）

作者「まず始めに、ホントすいませんでした！」

沙鳥「出た！作者の開始早々謝罪！！」

アン「いいものではないがな。で、なんだ？」

作「前々回の小説で、九十九のこと九重九十九（ここのえつくも）と表記しましたが、実は九重九十九（このえつくも）でした！申し訳ありません！！」

沙「うわ、やっちゃったよ人物名間違い」

ア「しかも他作者様のキャラをなんて、最悪だな」

作「あぁ。俺が最悪なのは分かってるさ！」

沙「なんか若干開き直ってる感があるんだけど……。これで終わり？」

作「実はもう一つ。前回の後書きが、何故か途中で終わっていました。最後まで書いたつもりだったんですが、すみません、書いていなかったようです」

沙「作者しっかり～」

作「ほんとすいません」

ア「で、謝罪が終わって、何をする？」

作「いや、もうひとつあって……」

ア「まだあるのか？」

作「いやこれはね、約束なんかしてないし、俺の信条？みたいな感じなんだけど」

沙「ん？なんかあった？」

作「今までコラボ二回やったでしょ？」

沙「やったねぇ。空お姉ちゃんとｋｉｉｔｉさん」

作「その二人さ、どっちも三章で終わってるわけ。で、差別がないようにこれからもコラボは三章分で終わらそうと思ったんだけど……」

ア「まぁクロスライトさんのコラボはここじゃ終わらせられないな」

作「というわけでクロスライトさんは四章分になってしまいました。なんか差別っぽい気がしたので一応報告させていただきました」

ア「ま、これも作者の文才がないからな」

沙「うんうん。多分作者はだらだら書きすぎなんだよ」

作「ぐっ……それは認めざるをえないんだけど、でもお前らを想像するとああいうだらだらした会話がでちゃうんだもん！あれでも頑張ってハショったんだよ！？」

ア「あれでか……」

沙「もうあきらめよ、アンちゃん。犬に水の上を歩けって言うくらい無理な話だよ」

ア「うん、無理だな」

作「ご迷惑お掛けします」

沙「ではこの辺で。クロスライトさん、ｖｉｃｔｏｒさん、蛍夜さん、感想ありがとうございました！！」

作「最近思うんだけどさ」

ア「どうした急に？」

作「一話に書いてくれる感想の数が決まってるのではと思い始めてきた」

ア「は？」

作「いや、もちろんないんだけどさ、基本一話に三、四人で、今と昔じゃ感想書いてる人が違う」

ア「それって……」

作「一人誰かが感想を書かなくなったら他の新しい人が感想を書いてくれる。喜ぶべきかな？」

ア「……ただでさえ感想をもらっている立場なんだ、しかも数自体は変わってない。文句を言うな」

作「だよね。感想ありがとうございます！！」

番外編　《十五章》討伐

「……」

僕はただ茫然と九十九が連れ去られていくのを見ていた。

何がなんだか全然分からない。

「あの、真樹さん？これは一体……」

夏子さんに託されていた真樹さんに聞いてみることにした。

「簡単に申しますと、沙鳥様は獣耳と尻尾に萌えて理性を失った、ということです」

苦笑しながら説明してくれた。

「えっと、『もえ』って、オタクとかそういう方の『もえ』だよね？」

「そうですわ。後可愛いもの好きですので、飛鳥さんも一歩間違えれば九十九さんの立場になってますわ」

その言葉を聞き、ブルッと震えた。

沙鳥さんの前では大人しくしてよ。

「あ、そう言えばアンお嬢」

何かを思い出したのだろう、ラスクさんが未だ理緒と話しているア

ンさんに話しかけた。

「ん？なんだ？」

「解毒剤、作らなくてよろしいのですか？」

「……あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

突然叫びだしたため、僕は驚いた。

でもそれは僕だけでなく、見た感じでは理緒と、茶髪の小さい……中学生くらいの子も驚いていた。

「しまった忘れてた！理緒済まん！私は今からやることがある！他に聞きたいことがあったらラスクかネハラに聞け！！ではまたな！」

そういってアンさんは空中に人差し指で線を引いた。

するとそこには裂け目が出来て、その中に入っていってしまった。

後に亀裂は、最初から存在しないかのように消えてしまった。

「あ、あれ？アンさんどこに行ったんですか？」

戸惑いながら理緒が誰かにというわけではなく質問した。

それに答えたのはラスクさんだった。

「アンお嬢は亜空間に入って解毒剤の制作をしてる」

「解毒剤って夏子さんの女体化の？」

この世界で夏子さんたちとあってから僅かしか経っていないため、

思い当たる節がこれしかない。

「あぁ。アンお嬢が作った薬でああなったから、アンお嬢にしか作れないんだ」

「女体化ってなんですか？」

興味を持ったようで、理緒が訊ねる。

「なんかね、夏子さんは本当は夏哉君らしいの」

「え、まさか男なんですか！？」

「今は違うがな。どうやら口調も強制的に女になっているみたいだ」

「アンさんはそんなの作れるんですか！？一体何者なんですか！？」

理緒の叫びに、ラスクさんと金髪の子は悩み、金髪の子が教えてくれた。

「神に最も近いお方かしら？二番目なんだし」

「そうだな。アンお嬢が奇法力を殆ど失ったとはいえ、二人でかかっても勝てる気がしないし」

「奇法力？」

初めて聞く単語に、ついつい聞き返してしまった。

「あぁ、済まない。魔力のことだ。アタシたちの世界じゃ魔法のこ

とを奇法と呼んでてな。意味は同じだ」

なるほど。

「あ～、えっと、そろそろ行きません？廊下で立ちっぱも家の人に迷惑だと思うし」

茶髪の子がそう提案した。

「そうですわね。迷惑は気にしなくていいですが、皆さん座りたいでしょうし。そこの部屋なので入りましょう」

真樹さんは前方の扉を指していった。

中に入って、ラスクさんと金髪の子以外座った。

この二人とアンさんは、僕たちと違う方法で異世界に来たため、この世界には干渉出来ないらしい。

僕たちはまず自己紹介をして、お互いの情報を交換した。

そして今の話題はこれからについて。

ちなみに仕切りは真樹さん。

「さて、これからどうしましょう。理緒さんが作った転移装置は……壊れてますわよね？」

「残念ながら。それに元の状態のままだとしても、今回のように失敗します」

「まずはそれを修理、と言いたいところですが、生憎ここは異世界。

理緒さんの作ったものを直せる業者はいませんし、材料ももしかしたらないかもしれない。工具もない。理緒さん、そのところどうですか？」

「真樹さんの言う通りですね。ですが、こちらで携帯が繋がる以上、技術はほぼ同じだと思うので代用は可能だと思います。一番の問題は、こうなった原因が分からないという事ですね」

「そのせいで何が起きたのかは分かるの？失敗してとしか聞いてないんだけど」

詳細を求める香苗さん。
あ、そう言えば香苗さん、中学生と思っていたけど、高校生らしい。
申し訳ないことをしてしまった。

理緒は僕にも分からないくらい詳しく説明した。
はっきり言って専門的すぎる。

しかし香苗さんは、それに相槌を打ったり、質問したりしていた。
理解できてるのだろうか。

香苗さんは十秒ほど思考する。

「あの、理緒さん、クリスタル・コアじゃないとエネルギーが足りないって、数値的に見て分かったの？それとも実際やってみて？」

「実際やってみました。安定値以下ならいくらやっても暴走はしませんし」

「それが、原因じゃないかな？」

「はい？」

え、もしかして香苗さん原因が分かった？
理緒すらわかってないのに？

「最初にやったエネルギーの変換ってさ、一度周囲のマナを集めて変換するんだよね？」

「そうですけど……」

「でもさ、その吸収したマナを１００％エネルギーに変換できる？」

「いえ、流石に１００％は無理――あ、そうか！！そこで変換しきれなかったマナが蓄積されて、次にクリスタル・コアを使って変換しようとしたとき今度は変換しきれなかったマナも吸収されて変換した！」

「もちろん推測の域は出てないから、ちゃんと調べないと分からないけど、多分理緒さんはクリスタル・コアだけのマナを考えてたんじゃないかな？」

「そうです！それです！あぁ！どうしてそんな単純なことに気づかなかったんでしょう！！」

……なんか僕空気な気がしてきたな。

？心配しなくてもいい……。私たちの方が、空気だから……？

覇剛が僕を慰めてくれた。

今すぐ覇剛を抱きしめてあげたくなるけど、流石にそれは人目があるためはばかられた。
なのでお礼だけ言う。

「（ありがとう覇剛。嬉しいよ）」

？どう、いたしまし――ッ！！？

？主！モンスターの気配です！！？

「え、なんだって！？」

黎羅の言葉に思わず声がでてしまった。

「飛鳥どうしたんです？」

「理緒！この世界にモンスターの気配を感じるって黎羅たちが！！」

「そんな！？どうして！？」

僕にだって分からない。
むしろこっちが聞きたい。

この世界は僕たちの世界ではない。
だから僕を狙ってこちらの世界に来るというのはおかしい。

「飛鳥さん、理緒さん落ち着きなさい！出来ればわたくしたちにも教えて――」

プルルルルル

僕たちのために落ち着かせようとしてくれた真樹さんだったけど、携帯がなったためそちらに意識を向けた。

「で、アスカ。モンスターとか言ってたけどそれはなんだ？」

それを引き継いでラスクさんが詳しく聞いてくる。

「えっと、僕たちも詳しくは分からないんですけど――」

「いや、詳しくなくていい。倒すべき敵か守るべき味方かを答えろ」

ラスクさんは僕に単純な二択を用意してくれた。

なんとも選びやすい二択なんだろう。

「倒すべき敵だよ！」

「なら行くぞ」

その言葉を聞いて立ち上がろうとした。

「ちょっといいですか？」

しかし真樹さんに待ったをかけられた。

「どうしたの？」

「今電話で、九十九さんがかなり驚いてて、シリアスな空気になってて、出来れば異世界組は来てほしいと言われたのですが」

このタイミングで九十九が驚いてるという事は……
？十中八九モンスター出現の事ですね？
だね。
黎羅に同意しつつ、そのことを真樹さんに話して、今から向かう意を伝えてもらった。
ここにいるアンさん以外は皆モンスターの元へ向かった。
その際ラスクさんとネハラさんに風の魔法をかけてもらったためかなり体が軽くなって、凄いスピードが出た。
因みにその道中、思い出した理緒が僕にクリスタル・コアを返してくれた。

――――――――――

「とーちゃーく、っと」

夏哉、否、夏子の指示により私は今誰もいない洛輅公園にいる。
夏子ちゃんと別れたとこからだいたい５００ｍくらいあっただろうか。
そこから人目がないことをいいことに魔法を使ってスピードアップしながら来た。
もう外での魔法禁止とかいう学校の決まりなんてないのと同じだな。
あぁそういえば、校則は破るためにあるとか誰かが言ってた気がする。

そんなどうでもいいことを考えていると、結構近くでドォンッ、という落下したような音が聞こえた。

街灯が少なく、よく見えないため手のひらサイズの炎で明かりを作り、そっちに近づいた。

距離にして5m弱、ようやく光に照らされて落下物の全体が見えた。

先ほど夏子ちゃんと分かれる前に見た化け物がいた。

空から降ってくるとか、夏子ちゃんどうやって運んだんだか……。

上にいるだろう夏子ちゃんを見ようと夜空を見上げると、化け物がいる場所からザザッと音が聞こえた。

もしかして動こうとしてる？

未だ役者が揃ってないから人払いが出来ない。

つまり長時間暴れられたら隠しきれない。

魔法を使い、岩石で化け物の手足を地面に拘束した。

「沙鳥～」

空から夏子ちゃんの声が聞こえた。

見上げれば、夏子ちゃんが降ってきた。

私が男だったら、私の上に降ってきてそこから物語が始まって行くのだろう。

当然そんなことはなく、私の隣に着地した。
続いて九十九さんも到着。
「夏子ちゃん、どうやってきたの？」
「投げて空中で蹴って蹴って踵落とし」
「お馬鹿。まだ人払い掛かってないんだからズドーンなんて大きな音出されたら近所迷惑だって」
「あ～、やっちゃったわね」
「フレイムグールをここまで蹴ってきたというのに突っ込まぬのか？それを気にする妾がおかしいのか？」
なんか九十九さん落ち込んでるけど、どしたんだろ？
九十九さんに意識を向けていると、ゴボッという音が聞こえた。
音源はあの化け物。
そちらを見れば、なんと拘束してた岩石が地面から離れてるではありませんか。
つまり拘束が外れている。
「……あれ？ごめん夏子ちゃん。私まぁまぁ力込めたつもりなんだけど」
どの位かというと、車時速５０？でぶつかっても壊れない程度。
試したことないから予想だけど。

まぁとにかく、かなり頑丈にしたつもりだった。

「気にしなくていいわよ。アレ雑魚じゃないらしいから。それより、結界張れる？」

「張れるけど、真樹確認してからね」

「了解。九十九、やるけど準備いい？」

「無論じゃ」

「よし。じゃあやりますか」

二人はほぼ同時に駆けだした、筈なのに既に夏子ちゃんは化け物の背後。

そのまま背中に拳を振るう。

しかしそれは、あの巨体から想像も出来ない速さで躱されてしまった。

と言っても夏子ちゃんほど早くなく、なんとか目で追える程度だ。

「な――――！？」

驚く夏子ちゃん。

「甘い！！」

だけど九十九さんは違うようで、相手の行動を読み、先回りしていた。

少しジャンプしてからの回し蹴りは、こめかみに向かう。
流石の化け物も、あの速さで方向転換は出来ず、もろに蹴りを喰らってしまった。
ってそうだ、真樹たちに報告しなきゃ。
携帯を取り出し、真樹に電話。
『もしもし』
「あ、真樹。今洛輅公園にいて、化け物もいるんだけど、どこいる？」
『わたくしたちも公園はもう見えてますの』
「じゃあどっからでもいいからすぐ入って。人払いかけるから」
『少々お待ちを……入りましたわ』
「ども。じゃあ目印打ち上げるから切るね」
『分かりましたわ』
電話を切り、即座に人払いを公園を包むくらいの大きさに張る。
で、そのちょっと内側に、残り殆どの魔力を注いで風の膜を張る。
この魔力が尽きるまで風は維持される。
それにしても、ちょっと使いすぎたかも……。

夏子ちゃんが守ってくれると信じ、地べたに座り込み、すぐに仰向けになった。

その状態でやり残したことをこなそうと、明かりとして作った炎をちょっと大きくして、空に撃ち出した。
これで真樹たちの目印にはなるだろう。

――――――――――

進展がない。

フレイムグールを攪乱させようと残像が残る速さで周りを走りながらそんなことを思う。

ダメージは最初の九十九以来当てられていない。
あの後から何度も仕掛けたのに、悉く躱される。

とはいえ向こうも躱すので精一杯らしく、腕は振るうものの攻撃らしい攻撃はしてこない。

そんな中、いよいよフレイムグールは行動を起こした。
奴は俺と九十九のいない方向へ駆けだす。

その先には、何故か倒れてる沙鳥。

「沙鳥ぃぃぃぃッ！！」

私はフレイムグールを追う。

速さは勝ってるんだ、絶対追いつく！

一歩二歩と確実にフレイムグールに近づき、間に合うと確信した瞬間、急に奴は回転して、その長い鞭のような左腕を裏拳のごとく振るってきた。

罠！？

躱せない……！

そう直感した後、長い爪の部分がこめかみを直撃した。

「ぐ、あ……！！」

私は吹き飛ばされ、二回バウントして止まった。

すぐに立ち上がるが、脳は生物の弱点。

少しくらくらする。

しかも額から血が流れてる。

「夏哉！」

「沙鳥逃げれる！？」

「無理！」

即答ですか。

というか元気ね。

でもその言葉で力が振り絞れる。

沙鳥を助けなきゃという想いで、足を動かした。

その時、

「蒼衝破ッ！！」

右側から声が聞こえた。
この声はおそらく飛鳥。

声のする方を見れば、予想通り飛鳥がフレイムグールに向かって走り、届かないはずの刃を手から抜刀した。
深紅の刃が完全に露わになると、そこから風圧ではない何かがフレイムグールを襲った。

それに気づいたフレイムグールはそれを躱すために一旦距離を置く。

「はあああああ！！」

その間に接近した九十九が背中に蹴りを放つ。

漸く二度目の攻撃が当たった。

それを横目に、沙鳥に近づく。

「沙鳥平気！？」

「いやはや、皆が守ってくれたからね～」

「てかなんで寝てたのよ？」

「魔力使いすぎ。空っぽになるとかなり疲れるのよね。まぁ夏子ちゃんでも壊せないくらいの壁は作れたから」

それを聞いて、驚きを通り越して呆れてしまった。
そんな強化する必要があるのかと。

「でもちょっとは回復できたから」

沙鳥は私の頭に手を近づけた。

「一回くらいなら使えるよ」

すると頭の痛みが消えた。
治癒魔法を使ってくれたのだろう。

「ありがと」

「うん、頑張ってね」

沙鳥を少し離れたところに寝かし、飛鳥たちに合流した。

「夏子さん大丈夫!?」

「えぇ。沙鳥に治してもらったから。というか今の何?確かここじゃ力殆ど使えないんじゃないの?」

「ここに来る途中理緒にそのことを聞いたから、蒼衝破っていう闘気を飛ばす技を使ったんだ。これならマナを使わなくて済むから」

「なるほどのぉ。考えたな」

九十九が飛鳥を褒める。

「じゃあネハラたちもすぐ来ると思うからそれまで三人で。私が特攻するから二人はその隙をついて」

「うんっ」

「うむ」

頷くのを確認して、早速特攻を仕掛ける。

ド素人の私に技なんてない。

速さと力にものを言わせた一直線の拳を振るう。

それは右に躱された。

殴った勢いを利用し、右足を軸に回転、左踵で腹部を狙った。

フレイムグールはその肥大化した右腕を使いガード。

でも勢いは堪えきれず、足を擦るように下がった。

そこに先回りした九十九が追撃をかける。

腰をひねり、掌底を左わき腹に打ち込む。

しかし寸でのところで後ろに下がられて躱された。

九十九を払おうと左腕を振るうが、バック転で躱す。

その間に、

「剛破撃滅！！」

やや下方に構えていた覇剛をフレイムグールの背中をめがけ斬り上げた。

悲鳴を上げたフレイムグールだが、飛鳥は止まらない。

斬り上げた勢いでジャンプし、そこから自身の体重を加えた袈裟斬り。

地面に足を着けると高速で刀を変換、青い刀身を持つ黎羅。

それを逆手で持ち、まず柄で人間の水月を突き相手をひるませた。

腰をひねり、腕を振るい、遠心力をいっぱいに掛けた黎羅で斬り付ける。

即座に逆手から本手に持ち替え、斬り上げた。

その流れるような連撃は、しかし黎羅に変えてからはそこまでのダメージを与えられなかった。

しかし、時間は稼いでもらった。

飛鳥の攻撃が終わるとほぼ同時、私はフレイムグールの頭上を取り、脳天へと踵落とし。

感触はしっかりあり、フレイムグールは地に伏せた。

「皆退け！！」

ちょうどよく空からラスクの声が聞こえた。

私は飛鳥を抱え、戦線離脱。
同時に閃光が走った。
よく見ると電気のようで、ネハラが放っていた。
まともに喰らったフレイムグールはピクピクと振るえ、そんな奴の下からネハラかラスクかが岩の突起物を五本ほど作り出した。
それに貫かれたフレイムグールは耳を擽(つんざ)くような悲鳴を上げた。
しかしそれはすぐ消えることとなった。
空から溶岩が降ってきたからだ。
それらは全てフレイムグールへと向かい、絶命を迎えた。
フレイムグールの体は何もなかったかのように消える。
「……なんというか、オーバーキルだと思うのは私だけかしら?」
「僕も、そう思う」
助かったからいいんだけどね。
で、その後は一旦真樹の家に集合、話し合いの結果、あれは飛鳥たちがこっちに来る要因になった次元断層に巻き込まれてきたのではないかという仮定が濃いということと、香苗と沙鳥以外は真樹の家にお邪魔させて貰う事と、沙鳥と真樹以外は明日転送装置の修理をする事となった。
何故私と香苗もかというと、私は言わずもがな、女の格好だからで後暇だから。

香苗は聖界の依代だから道具の扱いが上手い、つまり修理も出きるんじゃないかという考えの元。

そこまで話し合って、今日は解散した。
まぁ殆ど真樹の家に残ってる訳だけど。

そして翌日の深夜。

私たち十人は装置のある山へと集まった。

結果を言って、装置は香苗と理緒の手によって直った。
直っただけでなくちゃんと改良もされて大きさが１m程の立方体になった。
こんな小型化出来たのね。

因みにその他のメンバーは全くと言っていいほど修理に手が出せなかったため、九十九とラスクとネハラは組み手なんてしてた。
アンは解毒剤生成中、私と飛鳥は組み手の見学。

と、ふと思った事を聞いてみる。

「ねぇ理緒」

「なんですか？」

「仮にここに来るときその機械が成功してたらさ、その機械向こうに置きっぱだったの？確か留め具がついてたのよね？」

「それはまぁそうですが」
「帰るときどうしようとしてたの？」
「……」
目を逸らされた。
汗もかいている。
「「りぃおおおおおおおッ！！」」
飛鳥と九十九からバッシングを受ける理緒。
事故が起きて本当によかったな、と思った瞬間だった。
「じゃあ僕たち行くね」
「うん。今度はちゃんと安全に来てね」
私がそういうと、理緒は縮こまってしまった。
「うぅぅ、ご迷惑お掛けしました……」
「そんな気にしなくていいよ」
「うん。夏子ちゃんと一緒にいたらこのくらい普通だし」
「香苗の言う通りですわ」
ちょっと香苗に真樹酷くありませんか？

そんなトラブルは起こしてない気がするのですが――とは断言できない自分がいます。

「ラスク、ネハラ、また来たらもう一度手合わせ頼むぞ」

「構わないぞ」

「いいわよ」

「じゃあ二人を倒したらボスと言うことで私が」

魔族っ娘たちも完全に九十九と打ち解けている様子だ。

お別れの言葉を終え、理緒は次元断層を創る。

「またね、皆」

「じゃあね」

三人は次元断層をくぐり、この世界から消えた。

そして翌日の深夜、漸く俺は男に戻れた。

ネハラがもう一度女体化の薬を飲ませようとしてきたので拳骨してやった。

番外編　《十五章》討伐（後書き）

作者「コラボ第三弾おわったー！！」

夏哉「お疲れ。あぁ、ようやく俺の声だ。俺って言えるの素晴らしい」

香苗「え、夏哉君俺っ子好きなの？ていうか夏哉君まさか男の子がいいの！？」

夏「……香苗さんやめてくれません？わたくし女の子しか愛せませんよ？」

作「香苗聞いたか？女の子しか愛せない、つまり女性はアウト。つまり夏哉はロリコンだ！！」

香「そ、それは嬉しい事実かも！じゃあ数年立てば沙鳥ちゃんたちは対象外！！」

作「難敵は魔族っ娘と瑠亜だな」

香「むむ、強敵だね……」

夏「はぁ。はい、ゲストに前回前々回来れなかった九重九十九さんと叶宮理緒さんです」

九十九「なんかボロクソ言われとるのぉ」

理緒「大丈夫ですか？」

夏「あれ？なんでだろう、親友より少ししか会ってない子の方が優しいや」

香「あぁ！夏哉君浮気だめ！」

夏「冗談だろうがそんなこと言うな。てか二人は飛鳥の毒牙にかかってるだろ」

九「その言葉以外に表現できぬのか？」

理「ていうか私は違いますよっ！飛鳥とは友達で仲間なだけです！」

香「ツンデレ？」

理「違います！というかそういうの言わないでくれません！？そういう風に言うから周りもツンデレツンデレ言うようになるんですから！」

夏「こら香苗、流石に他作品のキャラの印象は変えちゃいかんよ」

香「はぁい」

夏「悪いな、理緒」

理「いえ。それより、夏子さん、ですよね？」

夏「元な」

九「ん～、確かに似てると言えば似てるが……」

理「別人ですね」

夏「その認識の方がありがたい。双子の妹とでも思ってくれ」

九「夏哉がそういうならそうしておこう」

理「ですね」

作「あ、今更ながらそっちの作品紹介するの忘れてた。今からします遅くなってすいません！」

僕の名前は羽山飛鳥（はやまあすか）なんてことはない普通の高校一年生。　唯一皆と違うのは・・・僕は魔術が使えない落ちこぼれってことくらいかな？　魔術・・・空想の中だけに存在した不思議な力けれどいつの間にかその力はこの現実の世界に広がり、僕の学校「星蓮学園（せいれんがくえん）」は世界初の魔術をカリキュラムに取り入れた学校。　そんな学校で、僕は今までと変わらない日常を・・・変わらずとも楽しい日常を過ごすはずだったんだ・・・。あの時までは・・・。　＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝　初投稿なので色々と至らない点が多いと思いますが頑張っていきますのでよろしくお願いします。

作「と、これがクロスライトさんの作品、『僕は大切なもの全てを・・・守る！』の説明？です」

理「宣伝ありがとうございます」

九「……のぉ、思ったんじゃが」

夏「どした？」

九「理緒ってこのコラボじゃなんの役にも立っとらんよな？」

理「そ、そんなことないですよ！ほら！私のおかげで夏哉さんたちに会えましたし！」

九「それは事故のお陰じゃろ？しかもモンスターを連れてきたり」

夏「ほらほら、そんな攻めるな。それ言ったらうちのアンなんか殆ど名前しか出て来てないようなキャラだったから。あまつさえ俺を女にしたような極悪人だから」

香「極悪人って……」

作「じゃあこんなところで、そろそろ締めに入りましょうか」

香「だね。クロスライトさん、ｖｉｃｔｏｒさん、蛍夜さん、感想ありがとうございました！」

夏「他の皆さんも、暇な時間があれば感想をよろしくお願いします！」

九「妾たちのほうもよろしく頼む」

理「こちらも感想随時お待ちしてます」

作「因みに次回は投票一位に輝いた真樹のとある休日です。お楽しみに～」

番外編　《十六章》休日

暗い。

この場所はその一言でしか表せなかった。

そこにはわたしが、わたしだけが膝を抱えてうずくまりながら座っていた。

闇しかないというのに、自分はしっかりと見えていた。

誰もいない世界。

そこではわたしは、まるで人形のように動かず、ただ無表情だった。

しかし感情は働いていた。

怖い。

何に対してなのかは、自分にも分からない。

暗闇に対するものかもしれないし、孤独に対するかもしれない。

両方かもしれないし、第三のものかもしれない。

とにかく恐怖を抱いていた。

同時に願った。

誰か助けて、と。

前方に光を感じた。

そこで初めて、首を上げ、目を細めるという動きを見せた。

光は白く、四方に広がっている。

しかしその中央に、翳りが見えた。

その翳りは徐々に近づき、ついには光の大半が見えなくなるほど側に寄られた。

逆光で見にくかったが、それは少年であることが判明した。

黒い短髪にあまりパッとしない顔立ち。

――助けに来たよ。

少年はわたしに手を差し伸べた。

しかしわたしはその手を取ろうとしない。

なかなか動かないわたしに、少年は次の行動に出た。

頭を撫で始めたのだ。

――大丈夫、怖くないよ。俺が守るから。

その手は温もりに満ち、その言葉は恐怖を解かしていった。

ようやくわたしは膝を抱えていた手を動かし、少年に向けて伸ばした。

少年は優しくわたしの手を取り、立ち上がらせてくれた。

――もう怖くないからな。

先ほどと似たような台詞を紡ぐと、未だ離さない手を自分の限界まで後ろに引いてわたしを密着させる。

空いている方の手を腰に回してくると、少年はわたしの顔にゆっくりと自分の顔を近づけ――

ビクッ！！

わたくしは一瞬で目が覚めた。

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ」

緊張というか恐怖というか、とにかく体に負担のかかる感情が胸に混在しているため呼吸が荒い。

寝汗もかいている。

「す～、ふぅ～」

一度呼吸を整え、心を落ち着ける。

「なんて夢を見ているんですの？」

今わたくしの脳には、不完全ながらも先ほど見た夢の記憶が残って

いる。
不完全というのは、台詞は殆ど覚えていないが何が起きたかは覚えているという意味だ。

夏哉ぁ～、夢とはいえなんてことしますの。
殺してやりましょうか。
いや、流石にそれは二次元ならいざ知らず、現実なれば理不尽この上ないことだろう。

そんな自問自答を頭の中で繰り返しながら、ベッドのすぐ近くに置いた携帯を布団から出ずに手探りで捕まえた。

我ながら横着者とは思うが、寝起きの体の倦怠感には勝てない。
カーテンの隙間から差す光の具合から見て早朝、五時くらいと判断。
実際携帯で調べてみると、四時半ちょっと前だった。
残念ハズレ。

携帯で五時にアラームをかけていたけど、三十分以上早く目覚めてしまった。

「……シャワー浴びましょうか」

寝汗を流すためと、目を覚ますために。

言っておくけど、いつもこんな早く起きている訳ではない。
今日は休日で、やるべきことがあるからだ。

未だ重たい体を理性で無理矢理動かし、私服を持ってお風呂場に向

かう。

脱衣所でパジャマを脱ぎ、軽くシャワーを浴びた。
朝風呂は気持ちいい。

お風呂場から出てタオルで体にまとわりつく水分をふき取り、下着を付ける。

そこでふと呟く。

「……キツくなってきましたわね」

胸を多少弄くりながら、最近新しいの買ってなかったなと思い返してみる。

ついでですから、今日買っておきましょう。

今日の予定にひとつ付け加え、取り敢えず我慢してそれを付け、衣服を着る。

「香苗には言いたくありませんわね……」

言ったら最後、香苗に殺されてしまう。

脱衣所へ出て自室に戻り、今日の荷物を再確認する。

今日は三つ離れた町に行かなければならないところがある。

現時刻は四時時五十二分。

ちょうどいいですわね。

荷物を持ち、部屋を出る。

こんな早朝に出掛けることは、既に両親には話してある。

あの事件以来、基本的にわくたしのやりたいことは否定しなくなった。

と言っても事件前の両親をしっかり覚えているのか、ということになるけど。

この半放任主義は、今のわたくしにとってかなり嬉しい。

両親に感謝しつつ、玄関で靴を履こうとしたとき、話し掛けられた。

「真樹ちゃん」

振り返ると、家政婦の三橋夜子（みつはしやこ）さんが不安そうな表情で見つめていた。

彼女は私服に所々フリルがあしらわれたピンク色のエプロンを装着している。

御歳三十六歳で、私の生まれた歳からここに住み込みで働いている。

おっとりとした性格で、それは母性を漂わせる顔立ちからも想像できるだろう。

そんな性格もあって、大人と子供の関係というよりは姉妹の関係に近い。

実際妹はいますが。

「どうしましたの？」

「ほんとに一人で平気？私送っていくよ？」

「心配しすぎですわよ。大丈夫ですわ」

「だってぇ」

生まれたときからお世話になっている家政婦は、当然あの事件を知っていて魔法に関しても存在する、程度には知っている。

その日から夜子さんは心配性になってしまった。

別に鬱陶しいとは思ってないし、寧ろわたくしを想ってくれてるのは嬉しい。

「普通に帰ってきますから。護身用の技は使えますし、いざとなったら魔法も使えます。なんとかなりますわよ」

「うん……」

完全に納得はしてないようだけど、引いてくれた。

気にすることなくドアノブに手をかける。

いつも一人で出掛けるときはあんな感じだから。

「ねぇ真樹ちゃん」

しかし今日は違った。

再び話し掛けられる。

「なんですか？」

「……今まで、聞くか悩んでたんだけどね。あの……今の真樹ちゃんは、本当にあの時の真樹ちゃん？」

「はい？」

この質問の意味を理解できず、聞き返してしまった。

「真樹ちゃんさ、小学校の六年から口調変わったでしょ？もしかしたら二重人格になっちゃったのかなって」

その頃は沙鳥様を徹底的に調べていて、あまりいそうでいないお嬢様キャラなら気に入るのではと模索していたのだ。

「少なくとも二重人格ではありませんわ。でも三、四年も経てば性格なんて変わりません？」

「そ、そうだけど……」

「心配してくれるのはありがたいですが、しすぎるとストレスで倒れてしまいますわよ？」

「真樹ちゃんのためなら本望だよっ」

「両親と風歌はどうしますの？」

「あ」

「全く……。では行ってきますわね」

漸く扉を開けて外に出る。

「何かあったらすぐ電話するんだよっ！」

「分かりましたわ」

そう返事をしてドアを閉める。

「というか、仕事中に電話出れますの？」

そんなツッコミは、雲一つない空に吸い込まれていった。

目的地の駅に到着。

わたくしは真っ先に駅のトイレに向かう。

誰もいないことを確認して、即座に鞄を開ける。

家から駅まではどうでもよかったけど、駅から目的地までは時間の勝負だ。

鞄から取り出したのは、鬘にヘアゴムにカチューシャ。

鬘は黒髪でボブヘアーだ。

手早く自分の長い桃色の紙を束ね、その上に鬘をかぶる。

今まで何度も何度も練習したため素早く出来た。

そしてもう一つ、度の入ってない丸眼鏡を装着。

さらに取りだした手鏡で確認。
特に変なところもないので素早く外に出る。

この見た目だと、十中八九地味子に見えて、スポーツも出来なさそうな外見だからそれに準じてゆっくりと歩く。

落ち着きなさいわたし。
今のわたしは早乙女真樹ではなく高橋早紀（たかはしさき）。
無口で地味な女子高生。
わたしの名前は早紀。
あまり人と関わりを持たない地味で影の薄い女。

道中ずっとそんな暗示めいたことを脳内で流していた。

これは所謂ミッションだ。
誰にも早乙女真樹と認識させず、目的のものを入手する。

高校入学前だったら、鬘なんて使わないし、キャラ設定も考えない。
口調を元に戻し、眼鏡をかける程度だった。

しかし何故今日は、高校入学以降からは違う。

柊夏哉という主人公が現れたからだ。

夏哉のことだから、こういう時に限ってこの街でばったりと出会うのだ。
そんな奇跡的な確率を、わたしが女だからという理由で引き寄せるのだ。
もちろんこのことは話してはいないが、油断してはいけない。
現れず杞憂に終わるなら最高だ。

どうしてここまで隠すのかというと――

「着いた……」

考えてる内に到着してしまった。

視界の中心に収まっているのは、とあるゲームショップ。
開店時刻は十時からで、現在は五時五十分。
それなのにゲームショップの前には三人ほど並んでいた。
多分わたしと同じ目的の人。

その三人は皆男性で、学生ではないようだ。
ひとまず知り合いの可能性は消えたので息をつき、再び自分は高橋早紀と暗示をかけて後ろに並ぶ。

わたしがここにきた理由だが、わたしの目的はＯＮＬＹ　ＹＯＵＲ　ＳＴＯＲＹというオンラインＲＰＧの武器ＩＤを買うこと。

ＯＮＬＹ　ＹＯＵＲ　ＳＴＯＲＹとは、超マイナーオンラインＲＰＧで、まぁやる人は少ない。
ストーリーもありきたりだし、武器や技のスキルも少ない。
でもだからこそ、わたしはこのゲームにはまった。
人が少ないということは、知り合いに会う確率も少ないということだ。

いつもは品行方正、成績優秀で通っているのに、実はゲーオタ――と言ってもやり込んでるのは一人プレイ専用のみ――とバレたらどうなることか。
だからここでは存分にプレイが出来た。

これをやり始めたのは小学五年。
それから今までずっとやり続けて来た。
もちろんカンストキャラはいる。
因みに二体。

で、今求めている武器ＩＤとは、簡単に言ってしまえば武器のランダム引換券だ。
一人五枚まで買えて、一枚千円。
買ったチケットに書かれているＩＤをゲーム内の特定のキャラの会話途中で打ち込むと、それにあった武器をくれる。
武器の価値はピンからキリで、普通にゲーム内で買えるものから、ボスドロップ率１％のレア武器までである。
とは言ってもこの武器ＩＤはレア武器の方が出る確率がほんの少しだけ高い。

今のわたしの目標は、アイテムオールコンプ。
武器のコンプ率は９８％。
ホント後一歩のため、是非ともまだ見ぬ武器を手に入れたい。

言い忘れていたが、チケットは一店舗につき百枚なので、四番目のわたしなら余裕に買える。

流石に早すぎたかな、とか想いながらその場に座り、鞄から暇潰し用の小説を取り出して読む。

九時少し前だろうか、ポケットに入れていた携帯が震え、曲が流れる。
この音はメールだ。

見てみれば沙鳥様からだ。

天雲沙鳥
件名：朝早くごめんね～（＞＜；

今日さ、夏哉たちとお出かけしようとしてるんだけど、真樹暇？

こ、これはフラグが立った気がする……！

わたしはそこに参加出来ない旨と、どこに来るのかを書いてメール。

天雲沙鳥
件名：朝早くごめんね～（＞＜；

ありゃ～、残念ｐ（´（、ｑ）
私たちは三つ離れた舞染（まいぞめ）市に行く予定

やはりドンピシャ！

ここは気合いを入れねばならなくなった。

今日は絶対夏哉と関わりを持つ。
不意を突かれないように慎重になって行動しな――って、別に夏哉にバレる程度どうでもよくない？
そうだ、あいつにバレた程度なんの痛手もない。
夏哉のことだし一言他言無用といえば誰にも言わないし。
ゲーオタバレてもへぇ～くらいしか言わない気がしてきた。

まぁでも、知り合いは他にもまだいるので変装は続行し、残り一時間を待った。

わたしの手の中には五枚の武器ＩＤの書かれたチケットがある。

……おっと涎が。

じゅるり。

うん、我ながら今の姿は性格に合ってないと思うが、今は高橋早紀なので関係ない。

あ、高橋早紀という名前は適当だ。

さぁ早速帰ってネトゲだ！

っと、その前にランジェリーショップ寄らないと。

やってしまった。

「おい嬢ちゃん、ぶつかってきて謝罪もないのかよ？」

認めよう。

念願のチケットを手に入れてものすごく興奮していた。

そのため、周囲に気を配れなかった。

「……ごめん、なさい」

「あァ！？聞こえねぇよ！！」

そして不良に絡まれてしまった。
数は四人。
ぶっちゃけこれはどうとでもなる。
問題はここに夏哉が飛び込んで来ることだ。
夏哉にバレても平気とは思ったが、バレないことにはこしたことないし、沙鳥様や香苗もいる。
特にこれからランジェリーショップに行く身としては、香苗とかかわり合いを持ちたくない。
「ごめんなさい」
「もうおせぇよ！！それにしても……なかなかだな。よし、お詫びとして俺らに奉仕しやがれ」
うん、ボコろう。
騒ぎになるのは痛いけど、そろそろ耐えられない。
でも心に余裕を持ち、夏哉が乱入してくるだろうと予想を立てておく。
そうすれば取り乱さない。
わたしは拳を握りしめ――
「待て！」

後ろから制止を呼びかける声が聞こえた。

こ、この声は……。

後ろを振り返れば案の定。

「あんたたち、わたしの友達に何してるか分かってるの？」

沙鳥いいいいいいいッ！！

どうしてこのタイミングで沙鳥！？
ここは夏哉じゃないの！？
予想が違って今心臓バクバクだ！
っていうかさっき友達とか言った！？
もしかしてバレてる！？

「あァ？なんだ女――」

「ちょ、タカさん！あれって沙鳥様じゃないっすか！？」

「は、そんなバカな……」

「沙鳥ちゃん大丈夫？」

更に香苗もやってきた。
どうやら夏哉はいない様子。

「ほ、本当に沙鳥様……？」

タカさんと言われた不良は驚愕している。

「そうだけど。で、友達に何してるのかな？」

「「「「す、すみませんでしたッ！！」」」」

不良は皆去っていった。

「はぁ、助かった～」

それを見て沙鳥様は安堵の表情を浮かべている。
でもそれはほんの少しの間で、すぐにわたしに体を向けた。

「ねぇ君、大丈夫？怪我とかしてない？」

優しく問いかけられて、ハッと今の状況を再認識する。

無言で首を縦に振る。

「そっか、よかった。あ、急に友達とか言ってごめんね」

よかった、ブラフのようだ。

「いえ……。その、ありがとう」

「どういたしまして」

「お～い、香苗～」

すると夏哉の声が聞こえた。
やはりいたか。

夏哉の側にはアンさんたちもいる。

「どしたよ？」

「女の子が絡まれててね、沙鳥ちゃんが助けたの」

「うわ、沙鳥主人公」

「アホ夏哉。一応知らない子がいるんだからそういうの会話は困るでしょ」

どうやら沙鳥様はわたしには気付いてないようだ。

「あぁそうだな。わりぃわりぃ……」

謝りながら、夏哉はじっとわたしを見てきた。

「な、何か？」

「あ～ごめん。誰かに似てるな～と思い」

ギクッ！

何夏哉、どうしてこんなに鋭いの？

「いや夏哉君、私たちがいるのにナンパはどうかと思うよ？というか方法古いし」

「ごめんね。これもお年頃だからこういうこと言い出しちゃって」

よし、二人には気づかれてない。

「気にしてない……。それより、お礼したいけど……今急いでて」

「あ、気にしなくていいよ。こっちこそ止めちゃってごめんね」

わたしと沙鳥様は言葉を交わし、その場から逃げるように立ち去った。

「ん～、なんか声も聞き覚えあるな」

ほんと無駄に鋭いな夏哉は。

「……はぁ」

わたしはため息をついた。

何故なら、目的のランジェリーショップのあるデパートとは逆の方向に立ち去っていたから。

「諦めようかな……」

いや、それだとなんか夏哉に負けた気がする。

……でもそんな感情に任せて行動すると、嫌なことしか起こらない気がする。

数秒思考し、結局向かうことにした。

流石の夏哉もそこまでこないでしょう。
時間も全然余裕あることだし。

というわけで表通りではなくなるべく細い道を使って向かった。

到着すると、なるべく鉢合わせしないように、予め測ってたサイズを店員に伝えて用意してもらった。

色は適当に水色を。

早速試着室で試着する。
やはりサイズが合えば楽だな――

シャー！

突如、試着室のカーテンが開いた。

夏哉が入ってきた。

シャー！

カーテンが閉まった。

お互い固まっている。

幸い今のわたしはまだ鬘に眼鏡を付けているので早乙女真樹とは気づかないだろう。
まさか体を見ただけで判断は出来るまい。

「……入ってきた理由は？」

「聞いてくれますか？」

「一応」

「実は天雲沙鳥の付き添いで来たんですが、そしたら店員にからかわれて、一緒に着替えちゃえば、なんて言われて無理矢理ここに入れられました」

「どうして、ここ？」

「沙鳥はこの隣の試着室にいる」

成る程、店員が間違えたわけか。

「あなた、災難……」

「あ、分かってくれますか？」

「理解は、出来る……。でも――」

ゴッ！！

夏哉の腹部を思いっきり蹴った。

「許すかどうかは別」

わたしはすぐに服を着て料金を払い、その場から退出したためその後の夏哉を知らない。

「うわ、全部持ってますわ……」

現在十四時二十七分。

帰宅早々、わたくしはログインしてＩＤを打ち込んだ。

しかし結果は全て持っているものばかりだった。

「今日はどんだけ最悪なんですの……」

夏哉に襲われる夢を見て、不良に絡まれて、夏哉に下着姿を見られて、五千円が無駄に終わって。

「はぁ」

本日何度目になるかの溜め息は、誰にも聞こえなかった。

けど、まぁ。

「つまらなくはなかったので良しとしますか」

わたくしは今日を思い出しながら、ネトゲに時間を費やした。

番外編　《十六章》休日（後書き）

作者「さて、今回主人公はなんと真樹さん！」

沙鳥「今回はいろいろ要素振り込んだね～。夢にゲームに変装に不良に着替えって」

真樹「書いてもらって言うのもなんですが、嬉しいのやら苦しいのやらよく分かりませんわ」

沙「あ、てことはさ、真樹も裸殆ど見られたってことだよね？」

真「下着付きで殆どというのなら」

沙「じゃあアンちゃんとカナもあるの？」

作「あ、これ本編じゃ全く関係ないから言うけど、まぁ夏哉アンの裸見てるぞ。沙鳥より先に」

沙＆amp;真「「はぁッ！？」」

作「ちょっと言ったかどうか忘れたんだけど、アンは基本風呂は夏哉の部屋で、温水を空中に浮かせて、そこに入ってるわけ」

真「それでバッタリ、ということですの？」

作「アンがわざとってのもあるけど、ほら、あいつ性の事知らないから、裸を見せれば夏哉は喜ぶ程度にしか思ってないわけだ。後夏哉へたれだからそれ以上はないぞ」

沙「ここで価値観の差が出てきたか……嬉しいのやら悲しいのやら」

作「むしろ魔族は服を着ないからな。着てるのなんてアルクシアとアンとラスクとネハラしかいないぞ」

真「あ、じゃあラスクさんたちのも見てるんですの？」

作「いや、あの二人は風呂入らん。魔法で綺麗にしてるだけ。向こうじゃ風呂入る習慣ないから」

真「なるほど」

作「ところで読者の皆さんにまたまたアンケートでもやろうと思ってます」

沙「今度は何？」

作「実はさ、次回は蛍夜さんの『義妹ハーレムを作った少年』という作品とコラボするんだけど、予定は三章分なわけ。で、それが終わったら次にまた番外編をやるか、いい加減本編を進めるか」

真「番外編、というのはどのくらいの量ですの？」

作「二章か、三章程度で考えてて、あらすじ的なのが、夏哉が一人の少年の恋のためにその身を投げ打ってまで奮闘するという、ギャグのない超シリアス。ちょい役としてヒロインサブヒロインはでる」

沙＆amp;真「「本編進める」」

作「お前らが決めるな」

沙「だってそれ私たち出番ないんでしょ?だったら進めよーよ。本編なら私たちでられる、てか私の誕生日から始まるし」

真「沙鳥様に同意ですわ」

作「えぇ、ｖｉｃｔｏｒさん、蛍夜さん、感想ありがとうございます。いつも励みにさせていただきます。次回はコラボなので、特に蛍夜さんはお楽しみください。アンケートの方は、コラボ終了次第締め切りとさせていただきます。未だ感想書いてない方でも勇気を持ってアンケートに答えましょう　。てか答えてくださいお願いします！！」

沙「普通に私らスルーかい」

番外編　《十七章》仕掛け

休日の午前、俺は魔族っ娘三人組を連れて足りなくなってきた食材を調達しに商店街に向かっていた。

「夏哉、買い物終わったら暇か？」

「というと？」

アンの質問に質問で返すのは、本来失礼なのだろうが、俺たちの間柄ということでご勘弁。

「暇だから何処か出掛けたい。もちろん四人加えて」

四人といえば言わずもがな、ロリに巨乳にお嬢様にお姉さん。

「あいよ。お前らどっか行きたいとこあんの？」

ここでアン単体に聞かなかったのは、前もってアンがラスクとネハラに言ってるだろうと予想を立てたから。

「アタシは特にないな。出掛けるなんて今聞いたし」

「私もよ。というかあってもお姉様優先だし」

あら残念、予想が外れた。

「じゃあアンは？」

「ん～、自分で言っといてあれだが、特に決めてないんだよな……。お化け屋敷にでも行くか？」

「い、いやっ！お姉様！！お願いします！それだけは勘弁してください！！」

泣きすがるようにネハラはアンに懇願する。
あの文化祭が相当答えたらしい。

「す、済まない。冗談だ。まだ見たことないところを見て回りたいだけだ。近場でいいから」

「そうだな……じゃあ俺たちも行ったことないとこに行くか。街探検だ。旨い店あるかも知んないしな」

思ったが吉日、俺はまず沙鳥に電話をしようと思ったのだが、前方に見るからに怪しいものが置いてあった。

――――――――――――

「ねぇお兄ちゃん」

「何？」

ある虚無の日、僕こととヴァイス・ド・アンダールジャは義理の妹、ノイに話しかけられた。

ここはゼロの使い魔という物語を知る人なら誰でも知っているであ

ろうトリステイン魔法学校の男子寮。
そしてこの場にいるのは僕とノイの他に、クレインとフィーラがいる。
この二人もとある事情で僕の義妹だ。

「異世界に渡るゲートって武器になるよね？」

「……はい？」

唐突な義妹の質問に聞き返すしかできなかった。

「だってもしたった一人で無理やり異界の地に放り出されたら精神的にダメージを負っちゃうでしょ？」

彼女には――正確には僕たち兄姉にもだが――特殊な能力があった。
自分が武器だと認識したものを創造する能力だ。
しかも創造したものは自然消滅しないというチート仕様。
その代わりちゃんと創造するものをイメージしなきゃ創れないんだけど。

「いやそうじゃなくて、いきなり何？どうしてそんなこと聞くの？」

「お兄ちゃんの前の世界に行ってみたいなって思って」

「あ、私も行きたいっ」

「面白そうだな。私も行く」

ノイの意見にクレインとフィーラも賛同した。

因みに僕は前世の記憶を持つ転生者で、妹たちはそのことを話した。
妹たちはこの世界の住人だ。

「いやいやいや、行くのはいいとして、本当に創れるの？」

「だって使い魔召還で異世界にいるサイトが来れたんでしょ？ならその逆に私たちを異世界に召還させればいいんじゃないの？」

あ、確かにそれならイメージはしやすいかもしれない。

「というわけで創ってみたよ」

早速ノイの目の前には楕円形の光が現れた。
それは確かにサイトが召還された時にあったものだ。

「作ってみたはいいけど……ちゃんと目的の場所に通じてるの？」

「通じてるはずだけど、初めてだから断言はできないよ」

そんなものを使おうとしてたのか。

「なぁヴァイス。この向こうがヴァイスの世界だって分かれば行くんだな？」

何か策があるのか、フィーラがニヤリと笑いながら確認を取る。

「そうなら別に否定はしないけど、何かあるの？」

「まず猫のぬいぐるみを用意する」

するとどこからともなくフィーラはぬいぐるみを出した。

「そして丈夫なロープも用意」

そして再びどこからともなくロープを取り出した。

「そしてこれをぬいぐるみに括り付けて……」

いいながらぬいぐるみの脇辺りを縄でぐるっと一周させ、固くキュッと縛った。

「ていっ」

ぬいぐるみを光に投じた。

もしかして……。

「フィーラ姉何するの？」

「見てのお楽しみね」

クレインの質問にはぐらかすフィーラ。

「……まさかとは思うけどフィーラ、それで釣る気じゃないよね？」

「よく分かったな」

「「それは無理でしょ！！」」

僕とノイの言葉が被さった。

流石にぬいぐるみで連れるものなんて何も――

「来た！」

「「嘘っ！？」」

僕とノイは疑いの声を上げるが、見れば確かにロープがピンと張っている。

「フィーラ姉引っ張るの手伝う？」

「いや、大丈夫、だッ！！」

フィーラはマグロの一本釣りのようにロープを引っ張った。

「ぬわっ！？」

すると知らない人の声が聞こえた。

その声はノイの創り出した光から、フィーラの取り出したロープの先端から聞こえた。

「いてっ」

その声の主は床にぶつかって声をあげだ。

その主はロングのウェーブが掛かった金髪で、女性。

桃色のTシャツにジーパンという、日本の服装をしていた。

「あ～……、あれ？どこだここ？」

そりゃいきなり異世界に引きずり込まれたらその反応になるだろう。

代表、というか兄として女性に話し掛ける。

「あの、大丈夫ですか？」

女性はこちらを向いた。

とても綺麗な顔立ちだ。

キリッとした目つきで、一目見ただけでカリスマ性がビンビンに伝わってくる。

それなのに胸に猫のぬいぐるみを抱いているというこのギャップ。

それにそのぬいぐるみを抱いているせいで女性の象徴とも言うべき大きく実った二つの果実が押しつぶされてなんとまぁ――

「お兄ちゃん？」

ゾクリ。

後ろから怖気が走った。

タラタラと冷や汗が流れる。

振り返れば、真っ黒く笑うノイがいた。

「お兄ちゃんは、どこを見てるのかな？」

「え、いや、ぬ、ぬいぐるみを……」

嘘はついていません嘘はついていません！

「本当に？」

より一層恐怖が増した気がした。

ここでノイに捕まれば僕の死は確実だ！

「本当だって！」

「ふぅん、そう」

そういうと、これ以上追求してこなかった。

これでひとまず安心だ。

「あ、えっと、それでここはどこなんだ？出来れば教えてほしいんだが……」

と、ここで遠慮がちに女性が訊ねてきた。

「あ、ごめんなさい。えっと、なんて説明すればいいのかな……」

いきなり、ここは異世界ですよ、なんて説明しても戸惑うだけだろうし。

というかまずフィーラのアイディアが杜撰すぎる。

演算能力が高いはずなのに、もうちょっといい案はなかったのだろうか。

「ここはあなたにとって異世界で、私たちはその異世界の情報を知りたかったのよ。あなたどこから来た？」

って普通に聞いてるし！！

声を荒らげてフィーラにツッコもうとしたのだが、出来なかった。

先に答えられたからだ。

「異世界ということは、日本、とか地球、と答えた方がいいか？」

相手も普通に答えてるし！！

え、何？

最近の日本人はこんなに順応性が高くなったの！？

「あの二人に着いていけない僕がおかしいのかな……」

つい嘆きが口に出てしまった。

「安心してお兄ちゃん。私もついていけてないから」

そんな僕にノイが優しく声を掛けてくれた。

心に安らぎが持てた。

「ヴァイス、本当に地球に繋がってるらしいから早く行こう」

「私も早く行きたいよヴァイス兄」

フィーラとクレインが僕を促す。

「えぇっと、こっちに来るのか？というか私は帰れるのか？」

「あぁ、もう帰すよ。済まないね、いきなり呼んで」

「いや平気だが、仮にこういうのに慣れてない人間が来たらどうしてた？少なくとも話を聞ける状態にはならないだろ？」

ごもっともです。

というかこういうのに慣れてる？

果たして僕の世界で異世界に渡ることになれてる人がいるのだろうか。

まぁ神様がいるわけだから否定は出来ないだろうけど。

「そうなったら力ずくで聞き出すだけさ」

フィーラの言葉に偽りはないだろう。

本気でやりそうだ。

「……異世界慣れしててよかったよ」

「それはどういう意味？」

「この四人の中ならお前とは戦いたくない」

この発言で気付く。

まさかこの人、僕たちの力量を見抜いた？

「へぇ……」

ニヤリとフィーラが笑った瞬間――フィーラの姿がブレた。

「ちょ――!?」

驚きの声とともに両腕を左に構える女性。

ほぼ同時に、そこに蹴りが見回られた。

衝撃を殺せなかったようで、床を滑る。

「いっつ……。私はちゃんと答えたはずなんだが？」

「へぇ、私の攻撃を防いだんだ。凄い！」

それに関しては僕も驚いた。

本気を出してはいないだろうけど、フィーラの力、速さは普通の人間でどうこう出来るレベルじゃない。

まぁフィーラの正体が悪魔というもので、身体能力が並外れているからなのだが。

その一撃を、あの女性は防いだのだ。

女性も普通ではない。

「あなた名前は？」

「アンだが」

「私フィーラよ。ねぇちょっと一戦しない？」

張り合えるレベルの相手が現れたことで目を輝かせている。

フィーラとまともに張り合える人なんて、今のところ僕たち三人くらいしかいないだろう。

「待て待て。目的が変わってないか？お前たちはこっちの世界に来たいんじゃなかったのか？」

「別に私は面白ければいいのよ。今はアンと戦う方が面白そうだし」

「待て待て待て！私には向こうに待たせてる奴がいるんだ！早く帰りたい！！」

「じゃあ私を倒してからにしなさい、ってね」

なんだかフィーラが悪役な感じがしてきたなぁ。

って感心してる場合じゃない！！

「待ってフィーラ！こっちが無理矢理喚んだのにその上バトルはまずいって！それに部屋の中で暴れない！！」

「じゃあ分かった！私たちの世界に行ったら戦うからそれまで待て！！」

アンがそう説得して、フィーラは納得した。

―――――――――――――

俺たちは唖然としてその光景を見ていた。

目の前にロープが括り付けられた猫のぬいぐるみ。

その後ろに摩訶不思議の光。

それに速攻で飛びついたアン。

そしてぬいぐるみごと光に吸い込まれたアン。

その光は消えてしまった。

「……あれ？消えた？」

アンのあの行動にも驚いたし、消えてしまったことの方が驚いた。

「消えた、な」

隣のラスクが答えてくれた。

「お、姉……様？」

ぺたんと尻餅をついてしまったネハラ。

自分の一番大切な人が消えてしまったんだから当然だろう。

俺は落ち込んだ少女に声を掛ける。

「ネハラ、落ち着けよ。それより、あの光見たことあるか？」

「ないわよ……。少なくとも魔法じゃないわ」

「あぁ。魔法ではない。こっちの世界じゃ……出来ないよな？」

「多分。聖界の仕業だとしてもさ、あの罠はないよな？」

人形で人を釣るなんて頭のいい聖族があんな仕掛けを考えるだろうか。

てか目的が分かんないし。

「因みにアンが猫のぬいぐるみに抱きつく理由とか、分かる？」

「いや、あんなの見たことがない」

「ネハラは？」

「私も、見たこと無いわ。というかあんなのお姉様じゃない！！」

昔のアンを知ってる身としては、ぬいぐるみごときで飛びついてしまったアンは信じられないんだろう。

俺だって信じられない。

「まさかのアンの偽物説？」

「……ナツヤ、流石にそれには無理があるぞ？」

「まぁそっか。冗談は置いといて、マズくないか？アンのことだから平気だろうけど、もし異世界とかに飛ばされたらどうしようもな

いだろ？」

「そうだな。でもそうならアンお嬢を他の世界に呼べたんだから、こちらに帰ってくる術も持っていると思う」

ラスクがそう予想を立てたと同時、まるで予想してたかのように先ほどと同じ光が現れた。

そこから少年一人、少女三人、そして先ほどのぬいぐるみを抱いたアンが姿を見せた。

「お前らかあああああああああッ！！」

いち早く反応したのはネハラだった。

アンをさらったであろう四人を駆逐すべく一気に駆け出す。

「ネハラ待て！」

アンの一声で暴走しかけたネハラが止まる。

「私はなんともないから何もするな。夏哉、予定変更。異世界の客を連れてきた」

「いや、異世界ってのはだいたい分かったけど……取り敢えず自己紹介？」

俺が言うと、異世界唯一の少年が喋る。

「あの、僕たちのこと驚かないんですか？」

「あぁ平気平気。慣れてるし。それにそこにいるアンと、両隣の二人も異世界の人だし」

「え、そうなんですかッ！？」

あれ、やっぱりアンそのこと言ってないんだ。

じゃああれも言っといた方がいいか。

「それとさ、こっちじゃこの三人普通の人には見えないから話すときは気をつけて」

「見えないってなんでー？」

金髪の、この中では一番幼い顔をしている少女が聞いてきた。

「いや、詳しくは分かんないんだけどね、予想だとアンたちが来た方法のせいでこの世界の人には干渉できないって思ってる」

「じゃあなんで君は見えるの？」

「んー、それも分かんない。今んとこ見えるのは四人だけ。あ、俺柊夏哉ね」

「私クレインっていうの」

「あぁ、じゃあついでたから自己紹介しちゃおうか」

俺の提案で自己紹介した。

中性な顔立ちの少年の名前はヴァイス。
この四人の長男。
とは言っても義理の兄妹らしい。

次に銀色の髪をツインテールにしている長女ノイ。

一番最初に名前を聞いたクレインは次女。

最後に亜麻色の髪をポニーテールにしている三女フィーラ。三女なのにとても大人っぽいのは、なんとフィーラが悪魔という存在だからしい。
今更驚くことではないが。
まぁ見た目が余りにも大人っぽいため公では長女となっている。

あ、そういえばクレインも人間じゃなく吸血鬼らしい。

「で、ヴァイスはどうしてアンを拉致った？」

「いや拉致ったっていうか……」

ヴァイス曰く、こちらの世界の情報を知りたいが為にあんなことをフィーラがしたらしい。
それを思いつくフィーラもフィーラだが、それに引っかかるアンもアンだ。

「そんなことよりアン！さっさとやるわよ」

「アンなんか約束してたの？」

「いや、いろいろあってフィーラと戦闘――ってお前がいるじゃないか」

なんか納得顔されたのだが、訳が分かんない。

「フィーラ。単純な肉弾戦なら夏哉の方が強いぞ」

「そうなのか？」

「ちょ！お前俺に何故押し付ける！？戦闘言ったらアンだろ！お前魔法使えんだし！」

俺は極力戦闘などはしたくない。

「え、夏哉。魔法って？」

？魔法？という単語に興味を示した。

「アンたちの世界のものなんだけどさ、六十年くらい前から使える人は使えるようになったんだよ。まぁほとんどの人は魔法あること知らないんだけど」

「へえ、僕たちのところも魔法使えるんだけど……ちょっと興味あるね」

「じゃあアン見せてやれば？」

「まぁいいが。じゃあいつもの公園に行くか。というか私たちの都合で動いてるんだけど、フィーラたちはいいのか？なんかやりたいことがあって来たんじゃないのか？」

「あ、気にしなくていいよ。ただお兄ちゃんの世界を見たかっただけだから」

ノイがそう説明してくれたけど、もしかしてヴァイスは転生者っていう奴？

気になったので聞いてみる。

「ヴァイスって転生者かなんか？」

「うん、そんな感じ。でもそのままじゃなくて前世の記憶を引き継いでって方だけどね」

「なるほどな～。じゃあひとまず行きますか」

俺たちは、もう馴染みの洛輅公園に向かう。

番外編　《十七章》仕掛け（後書き）

アン「……二週間ぶりだな」

香苗「ホントかなり遅くなったね」

作者「いや、ホント悪かった。正直人に言えない理由があった」

香「そうなの？あんま無理しちゃだめだよ？」

作「……香苗、惚れていい？」

香「いいけど、私夏哉君一番だよ？」

作「それでも構わない！香苗好きだー！」

ア「作者がロリコンになった」

作＆amp;香「「ロリコン言うな！」」

？？「あの～、僕はいつ出れば？」

作「あぁごめんごめん。今回ゲストにヴァイス君が来てくれてます！」

ヴァイス「どうも。ねぇ香樹さん」

作「ん？」

ヴァ「噂じゃこんな長い時間かけたのにないようがスカスカって聞いたんだけど」

作「……すみません」

ヴァ「まぁコラボしてくれたから深くは追求しないけど」

作「マジアザッス！じゃあコラボ相手の蛍夜さんの作品、『義妹ハーレムを作った少年』の紹介文を！」

神に選ばれて死んでしまった少年。彼はゼロの使い魔の世界に転生した。彼は個性的な義妹たちと共に、明るく楽しい生活を送っていく。ヤンデレ気味の義妹、天然ロリッ子吸血鬼の義妹、妖艶な悪魔の義妹。彼の運命は動き出す、個性的すぎるハーレムを目指して！

※タイトル変更しました（旧、守りたい者の為だけに）

作「はい、てなわけでそろそろ終了！」

ヴァ「えぇ！？僕全然喋ってないのに！！」

ア「諦めろヴァイス。こいつはそういう奴なんだ」

香「ｋｉｉｔｉさん、ソラトさん、ｖｉｃｔｏｒさん、蛍夜さん、感想ありがとうございました。コラボ第四弾、皆さんも一回目も見てくれてありがとうございました」

作「ではまた！」

ヴァ「うわっ！本当に終わっちゃう！えっと、僕たちの小説もお願いします！」

番外編　《十八章》組み手

僕はこの世界について、訝しげに思い始めた。

というのも、僕の元いたせ世界に魔法なんて存在しなかった。

別にこの世界が偽物だと言うつもりはないし、夏哉やアンたちが僕たちを騙そうとしてるとも思えない。

考えられるとすれば、ここは本当に僕の知っている地球で、でも違う世界、つまりパラレルワールドとなる可能性が高い。

普通に考えれば、死んだ人が、見た目は変わったとしても元の世界に戻れるとは思えないし。

ここが僕のいた世界じゃないということを三人に言ってもいいけど、ここでも興味津々なようなので言わなくていいだろう。

そうこう考えてるうちに、それなりに広い公園が見えてきた。

これが夏哉たちが言っていた公園なのかもしれない。

「おぉついたついた。じゃあここで詳しく話そうか。多分もう連れも来てるだろうし」

「えっと、なんだっけ？？ケータイ？ってやつで他の人と話をしたんだよね？」

わざわざ説明口調で、納得しようとしているノイ。

僕たちにしては普通な携帯電話も、ノイたちにしたら未知の道具だ。
気になりもするだろう。

「そうそう」

「夏哉～」

公園の方から、綺麗な女の子の声が聞こえた。

そこを見れば、三人の人影。

ひとりは黒髪の少女で女の子としては背が高い。

その隣には、逆に背の低い茶髪の子。

そして黒髪の女の子と同じくらいの身長の、水色の髪の女性。

皆僕たちを待っていたようで、こちらに歩いて近づいてくる。

よく見れば年齢はバラバラで、茶髪の子は小学生、黒髪の人は夏哉と同じくらいの高校生、水色の人は成人だった。
どんな繋がりがあるのかいまいち分からなかった。

「あれ？真樹は？」

「今日来れないって」

どうやらもう一人来る予定だったらしい。

それにしても……。

僕は周りを見渡す。

現在数は十人。

そのうち女子八人男子二人。

五分の四が女子とか、男子率が少なすぎる。

しかもそのうち五人は夏哉がつれてきてるし。

「ねぇねぇ夏哉」

「ん？どうした？」

クレインが夏哉に問いかける。

「この人たち皆夏哉の友達？」

「そうだよ」

「男友達はいないの？」

グサリ！

夏哉の胸からそんな音が聞こえた気がした。

「い、いや？ちゃんといますですよ？でもあ、アンたちのことが見える男がいないだけですよ？」

ものすごく動揺してるところを見ると、本当に男友達がいない、またはいないらしい。

「いやいやお嬢さん、私たちは友達とはちょいと違うのですよ」

すると二人の間に入って黒髪の子が話し掛けてきた。

「ん？どういうこと？」

「まぁたしかに私たちは夏哉と友達と言えば友達なんだけど、ここにいる皆夏哉ラブだから友達以上恋人未満の恋人寄りなんだよ！」

「ちょ！お前何言って――」

「じゃあ夏哉ハーレムだねー」

「クレインちゃん？あなたなんて言葉言ってるの！ヴァイス！お前なんて教育させてんだよ！こんな子にそんな言葉教えてはいけません！！」

何故か飛び火がこちらに飛んできた。

というか夏哉の認識だと僕が最低な男に思われる。

なんとか誤解を解かなければ！

「違う！僕はそんなこと教えてない！」

「まぁ私たちヴァイスのハーレム要因だからね。クレインも知ってて当然よ」

「「……」」

夏哉とアンから冷たい目で見られている。

「いや、ちょっと、それはないんじゃないか？」

アンが若干引きながら呟く言葉に、他のメンバーが首を傾げる。

そりゃ分かってますよ！

義理とはいえ妹をハーレム要因とか言われれば引かれることくらい！！

「あ、アンよ。ここは笑って送ってやろう。こいつらもいろいろ大変だろうけど、自分たちで決めたことなんだから。それに妹だろうが義理なんだから平気だよ」

「そう、だな」

二人は温かい目でこちらを見ながら、近づいて肩を叩く。

「ヴァイス。いろいろ大変だろうが、頑張れ」

「まだ会って短いが、私たちはお前の味方だ。その愛が成就する事を祈ってる」

二人は優しい言葉を投げ掛けてきてくれるが、それは酷く重くのしかかってきた。

そのせいだろうか、つい言い訳じみた言葉を俯きながら漏らしてしまった。

「ち、違うんだ……。ハーレムにしなきゃ自殺するって脅されて……」

ピタッと二人が固まった。

他の人が全く反応を示してないところを見ると、二人にしか聞こえていないようだ。

「ま、マジ？」

コクり。

「……あ～、その、なんだ？妹たち死なせないように気をつけろ？」

今回のアンさんの優しい言葉は、とても気持ちが軽くなった。

「お姉様、どうしたんですか？」

恐らく変な空気を感じたのだろう、アンのことをお姉様と慕うネハラが訊ねる。

「いや、なんでもない。あ、あぁそうだ、この三人のこと紹介してなかったな。黒髪が天雲沙鳥、茶髪が花街香苗、水色の髪が空揺火津那だ」

アンに紹介されると、各々自分の名前を言った。

その後僕たちも自己紹介をすると、ノイが感心したような、呆れたようなため息をつく。

「それにしても夏哉凄いね。子供から大人、異世界人までハーレムのメンバーにするなんて。しかも巨乳が六割……」

最後のは妬みが入ったかな？

「ちょっと待ってください」

しかしそれに異を唱えた人物がいた。

この中でクレインの次に幼いであろう花街香苗ちゃんだった。

「子供って私のことですよね？」

「え、そうだけど……」

「私は夏哉君たちと同じ高校生です！歴とした十五歳ですっ！！」

……

「「「「えええぇぇぇっ！？！？！？」」」」

僕たちアンダルージャ面々は同時に驚きの声をあげた。

か、香苗ちゃんが、僕と同い年……？

というかノイより年下！？

「いやいやちょっと待って！え！？香苗ちゃんが高校生！？義務教育終えてる！？」

僕が言い終わると同時、香苗ちゃんはポケットから何かカードのようなものを取り出し、僕たちに見せつけてきた。

僕たちは一斉にそれを覗く。

それは学生証だった。

麦谷高校と書かれていることから、少なくとも高校在校、十五歳以上だと言うことが分かる。

「ヴァイス、これ何？」

「自分が高校生、つまり十五歳であるってことの証明書」

「じゃ、じゃあもしかして本当に私より年下？」

ノイの言葉が震えている。

信じられないんだろう。

「そうなるね……」

「同い年くらいだと思ってた……」

クレインも珍しく動揺している。

「あ、言っておくけど私も高一で十六歳だから」

ついでのように教えてくれた火津那。

「……ヴァイス、お前の元の世界はこんなにも見た目が変わるのか？」

「いや、僕もここまで違うのは見たことない……」

香苗で驚きすぎたため、ため息をついてしまった。

「あ、ところで言っておくけど」

今度はネハラが何かいいたいそうだ。

「なんか流れで言えなかったけど、私別にナツヤのこと好きじゃないから」

その言葉を聞いて最初に思ったこと。

「「「ツンデレ？」」」

僕と沙鳥、香苗の声が揃った。

「なんでそうなるのよ？別にナツヤのことなんとも思ってないってば」

うわ～、ナチュラルにツンデレだ。

「ふむふむ、真樹の後役としてネハラさんになったのか」

なんか納得している沙鳥。

「じゃあ私もついでに言うけど、私は夏君とはただの友達だよ。実質ハーレム要因は四人ってことになるかな」

追加説明する火津那。

四人でも多いけどね。

「そういえばヴァイス君たちって何しにきたの？私たちそこはまだ聞いてないんだけど」

香苗が聞いてくる。
そういえば三人にはちゃんと説明していなかった。
と言っても説明するほどのことじゃないけど。

「暇つぶしみたいなものだよ。僕ちょっと特殊で、前世の記憶があってね、それがここなんだよ。で、ノイがこの世界みたいって言って来たんだ」

「じゃあ何かやることはないの？」

「あ、フィーラがアンと戦いたいって。後僕はこの世界の魔法を見てみたいな」

「なぁヴァイス、聞き忘れてたんだけど、そっちも魔法使えんの？」

「使えるよ。それ見せるついでに組み手でもする？」

フィーラがやる気満々だけど、実のところ僕も準備は万端だ。
ここの魔法をどういう風に使うのか、僕が何処まで通用するかを知りたい。

「じゃあ相手誰？アンはフィーラだろ？」

「夏哉でよくないか？」

アンの提案に嫌な顔をしている夏哉。

「俺？魔法使えないぞ？」

「でもお前アホみたいに強いだろ？」

「そうなの？」

フィーラの目が輝いた気がした。

「夏哉ならあの攻撃くらい躱せると思うぞ？」

あのフィーラの攻撃をあのくらい？

普通の男子高校生にみえるのに、夏哉はいったいどんな力があるのか。

「あのさ、だったら二対二で戦えば？」

すると香苗がそんな提案を出してくれた。

それにお互い了承し、早速戦闘準備に入る。

作戦タイムは設けられたが、僕たちの場合は『目の前にいるものを倒す』というシンプルなもののみだった。

対する夏哉たちも早かった。

「じゃあ審判は私がやるな」

そう買って出てくれたのはラスクさんだ。

「サトリ、準備はいいか？」

「あ、もういいよ」

「どうしたの？」

僕の問いかけに夏哉が答えてくれた。

「普通に戦ってたら周りに迷惑だろ？だから沙鳥に人払いの魔法使ってもらうわけ」

「へぇ、そんなことも出来るんだ」

「そろそろいいか？」

ラスクにそう聞かれ、僕たちは構える。

「はじめ！」

その言葉と同時にフィーラが駆け出した。

狙うは夏哉。

鋭い蹴りをわき腹めがけて放つ。

アンに放ったのより少し早い。

が、

「うをっ！？」

バランスを崩し、決して上手い躱し方とはいえない。

でも躱した。

「へぇ、本当に躱せるのね」

「ちょいとお姉さん？いきなりすぎやしませんか？」

「何言ってるのよ。もう始まってるわ」

そんな軽口を叩く二人。

それを見ていた僕の前に、アンが立ちふさがる。

「実のところな」

突然語り出すアン。

「私魔力がかなり減っててな、お前の満足のいくものは見せられないかもしれない。だが、私戦闘においては意外と負けず嫌いでな。卑怯な真似を使っても怒るなよ？」

それはつまり頭を使った戦闘をすると言うことだろう。

「ものにもよるね」

「それから、私を女と思わなくていいぞ。私は魔族と言って、人間より頑丈だし、腕をちぎられた程度じゃ死なないから」

「分かった」

僕は得意な獲物、ナイフを取り出す。

「じゃあ行くよ」

まず僕から仕掛ける。

向こうは接近戦で来ると予想するだろう。

「ウォーターカッター！」

言うと高圧で噴射された水がアンを襲う。

それは体を少しずらすことで躱される。

見た感じあんまり焦ってないところから、誤認はされていなかったようだ。

追い討ちをかけようとしたが、その前にアンが石の塊を生成した。

見た目ただの石だが、これが魔法だろうか？

というかまさか呪文とかそういうのなし？

全く口を開かずに石を飛ばしてくる。

僕はウインドアーマーという、風を纏い攻撃を受け流す風魔法を使う。

石は僕の届く前に逸らされ、あらぬ方向に飛んでいく。

「ちっ、厄介だな」

「じゃあ次は僕の番！」

「させると思うか？」

「！？」

僕はその声に驚いた。

今の声はアンのものだ。

それは間違いない。

しかしそれは、後ろから聞こえたのだ、

アンは目の前にいるのに。

慌てて後ろを振り返る。

「いない！？」

しかし誰もいなかった。

気配が高速で近づいてくる。

さっきまで立っていたアンのものだ。

再び振り返ると、拳を構えたアンがすぐ側にいる。

殴るつもりだろうか。

僕はウインドアーマーを纏っているから拳は当たらない――ハズなのに嫌な予感がする。

咄嗟に速度補助魔法のウインドフォースを使い、高速でその場を退避する。

腕が霞むほどの早さで放たれた拳は、僕のウインドアーマーを抉った。

拳が逸らされていないことから、ウインドアーマーの影響を受けていないことが分かる。

あれを真正面から食らってたらと思うと冷や汗が止まらない。

「……質問いいかな？」

「なんだ？」

僕の問いかけに答えてくれるが、やはり隙を見せない。

それは僕もなんだけど。

仮に少しでも隙を見せれば、会話中だろうと襲ってくるだろう。

「なぜ後ろから声が聞こえたのかと、ウインドアーマーを貫けたのか」

「その前に。そのウインドアーマーは攻撃を逸らすもの――つまり風を纏わせてるっていう認識で構わないか？」

「合ってるよ」

「じゃあ初めから説明しよう。基本的なことだが、声はどんな原理で発生してるか分かるか？」

「一応。物体の振動が空気に伝わって――」

そこまで言って自分で気付いた。

「気付いたか？」

「風、かな？」

「そう言うことだ。コツはいるが、まぁ簡単な分野だな」

つまりアンは風を使って僕の後ろの空気を振動、それを自分の声と同じ周波数にしたため、僕の後ろから聞こえたというわけだ。

「よくそんなことを戦闘に使おうと思ったね……」

これ単体で見れば決して戦闘には使わない技だろう。

何事も使いようということか。

「私も使うのは初めてだ。魔族は魔法を使うのが感覚として分かるからな。人間相手にしか使えないんだ。もう使えないがな。で、攻撃の方だが、どうして逸らされるか分からなかったから風だと予想してな。もしそうなら同じ風で相殺すればいいと思ってな。腕に風を纏わせておいた。吹いてる向きはさっきの石を見て分かったから、それの逆回転にした。それとある程度速さがあれば突っ切れるかもしれなかったからな。風の能力は強化。風で拳の速度をあげたんだ」

僕は驚嘆する。

たった一回の攻撃でウインドアーマーを見切って瞬時にその対策を考えて行使するなんて。

「さて、説明も終わったことだし――」

そう言った瞬間――

「本気を出すぞ？」

目の前にいるアンが消えて、後ろから声が聞こえた。

ウインドフォースを使い、その場から退ける。

そこにアンの鋭い蹴りが放たれる。

「それで避けたつもりか？」

「なッ！？」

再び背後から聞こえる声。

前転するように転がると、頭のあった場所に裏拳が飛んできた。

おかしい。

僕はアンから目を逸らしていない。

ずっと見ていた。

動く動作は全くなかった。

それなのに後ろに現れた。

絶対何かある。

そう確信するが、何があるのかはまだ思い付かない。

番外編　《十八章》組み手（後書き）

作者「コラボ第二話でした！」

真樹「作者、もうちょっと始まりどうにかなりませんの？」

沙鳥「それ同意。もうちょっとなんかないの？」

作「生憎さっきの言葉しか思いつかなかった。それより沙鳥ちゃん！」

沙「なんだい香樹君！」

作「俺真樹ちゃんのあだ名考えたんだけどどうかな！？」

真「いきなりすぎません！？あなたの頭の中にどんな繋がりがあったんですの！？」

作「いや、それはもう忘れちゃったんだけどさ、真樹のこと考えてたらふと思いついたんだよ」

沙「おやおや？香樹君そりゃ恋ですかな？」

作「そりゃないね。つか俺の好きなタイプ沙鳥だから」

沙「まさかの告白！？」

作「おう。俺ポニテ大好き。欲を言えばショートカットのポニテがいいんだけど、どちらでもいいな。あと軽いノリの性格も好き」

真「……貴方前回の後書きで香苗好きとか言ってませんでした？」

沙「作者二股！？」

作「違う！俺は好きな女の子しか書かないだけだ！！」

沙「じゃあ最初に戻るけど真樹に恋してるの？」

作「いや、好きっちゃ好きだよ？でもさ、前から言ってるとおり本来真樹はここまで来るキャラじゃ無かったわけ。少なくともシリアスにはならないキャラだったわけ。だから最初あんなツンツンなキャラにしてたんだけどね」

真「どうして出さないこととツンツンが繋がるんですの？」

作「俺ツンツンなキャラそこまで好きじゃないから」

沙「なるほど。あんま出すつもりが無かったからツンツンキャラでいいかな～って思ったわけね」

作「そうそう。でもなんかどんどん真樹が出てくるようになったじゃん？だからあんまツンツン書きたくないから徐々に丸っこくしていこうと思ったんだけど……」

沙「それが皆にはデレ期突入と勘違いされていつの間にかキャラ投票一位に」

作「そういうこと」

真「作者のせいで誤解が生まれたんですのね……」

作「そのおかげでお前は出番を勝ち取った訳だがな」

真「……否定はしませんわ」

沙「で、結局真樹のあだ名は？」

作「あぁそうだそうだ。真樹のあだ名は――？まきりん？」

真「はあ？」

作「だから？まきりん？だって。どお沙鳥？かわいくね」

沙「作者！あんたって奴は……！センスありすぎ！！」

真「沙鳥様！？」

沙「私後書きの時まきりんって呼ぶから」

真「正気ですの！？本気でそんな恥ずかしい名前で呼ぶ気ですの！？」

沙「どこが恥ずかしいの！？全然かわいいよ！作者、もう終わろう！このときめきを早く家に帰って堪能したい！！」

作「なんか沙鳥が変態じみてるが、了解だ！いけまきりん！」

真「……ｖｉｃｔｏｒさん、ｋｉｉｔｉさん、蛍夜さん、クロスライトさん、感想ありがとうございますわ。他の読者の皆様もここま

で読んでくださいましてありがとうございます。作者死になさい」

作「だが断る。……でさ、沙鳥。俺、沙鳥に言わなきゃいけないことがあるんだ」

沙「え、何いきなり真顔で」

作「お前の名前は出してないんだけどな、俺沙鳥の絵を描いたんだよ。で、それを学校が募集してた待ち受けサイトに応募したら、採用されちゃった」

沙「……は？」

作「詳しくはまだよく分かんないんだけど、少なくとも買い取られた。待ち受け画像として載っちゃうかも」

沙「はいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいッ！？」

番外編　《十九章》楽しい思い出

――どちらか一人を動けなくするから、その間片方を抑えててくれ。

アンの作戦、というかお願いを頭の中で反芻しながら、俺はフィーラの攻撃を躱す。

フィーラの攻撃は、あり得ないほど速い。

避けるので精一杯で、攻撃を仕掛けられない。

心の底で、アンがヴァイスを抑えるより早くフィーラを倒せると思ってた。

それが慢心だと分かり、考えを改めるけどまだ進展はない。

それにフィーラも本気じゃないだろう。

ヴァイス曰くフィーラたちの世界にも魔法があるんだから。

使えないなら御の字だけど。

「あのフィーラさん？もうちょっと力弱めてくれると嬉しいんですが……」

「敵にそんなお願いするなんて、神経どうかしてるわよ。それから、これでも私ショック受けてるのよ？ここまで攻めてまだ会話できる余裕があるなんて。もっと攻めた方がいい？」

「それ勘弁！！」

そんなやり取りをしてる間も、フィーラの攻撃は止まらない。

それどころか宣言通り速さが増している。
それも必死に躱していくが、ここで局面は進む。
フィーラの蹴りがわき腹を刈るように襲う。
俺は一歩下がって躱す。
「ぬわっ！？」
俺はそこで足を滑らしてしまい、背中から地面につく。
好機とばかりに馬乗りになる。
「もしかして、謀った？」
「いや？私は何もしてないわよ。貴方が勝手に転けたの」
「うわっ、俺恥ずかし」
「恥ずかしがってる場合？」
確かにそんな場面じゃない。
「じゃあ攻めてみますか」
言い終わると同時、右の拳を放つ。
立ってるよりは全然力が入らないけどそれなりの速度、無反応というわけではないだろう。

案の定、フィーラは左手で俺の手首を掴んで止めた。
今度は左手で殴るが、同じく右手で止められる。
「打つ手なし？」
「まだまだ！」
腹筋と腕を使って上体を起こし、額をフィーラの額にぶつけた。
「ぐっ……！！」
フィーラが一瞬よろけた。
ヘッドバットにかなりの力を込めたし、手を掴んでくれたお陰でその分威力が増したためそれなりのダメージは与えられた。
が――
「いってぇぇ！」
同じように俺にもダメージがあった。
ていうか頭突きって単なる痛み分けでしょ。
同じ部分に同じ力が加えられるんだから。
意識してる分こっちがマシなんだろうが。
「な、何？自分で攻撃して自滅してるの？バカね」

「な、涙目のお前に言われたくない」

「それはこっちのセリフよ」

というわけでお互い涙目になりながら、おでこを抑えながら痛みが引くのを待つ。

「……夏哉はさ」

突然語りかけてくるフィーラ。

「なんで悪魔と対等に動けるの？この世界はそれが普通なわけ？」

「いいや、俺が異常なだけ。原因は分からないけどな」

「へぇ」

聞いておいて、そこまで興味はないようだ。

さて、会話も終わったことだし、今度はこちらから攻めるとしましょうか。

俺は立ちがあり、まだ座っているフィーラとの距離を詰める。

顎を狙って蹴り上げたが、左に躱される。

フィーラはその際右手を地面につけ支えていて、それに反動をつけることで距離を取りつつ立った。

急いで右足を地面につけて接近する。

今度は拳を放つ。

しかしそれは、文字通り紙一重で躱される。
しかも拳を、ではなく風圧を。

躱されることは予想していたのでどんどん攻撃をする――が、やはり紙一重で躱されてしまう。

「貴方の攻撃は速いだけで単調なのよ。戦闘においてそれは致命的。こうやって簡単に躱せるわ」

「あれ、もしかして指導してくれてる？てかしょうがないだろ。こういう戦い初めてまだ二ヶ月だぞ？」

「……修行してないとか言わせないわよ？」

「修行も何も訓練もしてねぇよ。てか比較的この世界安全だからやる意味なし！」

「じゃあ何？私はド素人といい勝負してるってこと？貶すつもりはないけど、本当にショックよ」

とか言いつつしっかりと攻撃は躱している。

「なんかお互い攻撃当たんなくてジリ貧だな」

思わず言葉が漏れてしまう。

その言葉に、フィーラはニヤリと笑って反応する。

「じゃあ攻撃当てるわよ」

刹那、俺の放った右ストレートの側面に拳を当ててきたフィーラ。

気付けば胸が痛みだし、吹き飛ばされた。

「ぐあッ！！」

ちょ、待て。

今何が起きた？

痛みを押し殺してフィーラを見れば、肘をこちらに突き出していた。

もしかしてエルボーを受けたのだろうか。

するとフィーラは消えた。

何処に行ったか探そうとしたが、こういう時の定石は上か背後。

何も考えず飛ぶように前に出ると、そこにフィーラが落ちてきた。

その着地の時膝を思いっきり曲げ、まるでバネのように伸ばしてこちらに飛んでくる。

もはや今までの移動速度の比ではなく、フィーラが霞む。

躱せない。

そう判断したため腕を前に出して防御態勢に入る。

と、その時――

目の前に巨大な壁が現れた。
それを目視すると、今度は腹部に衝撃が来た。
しかしそれに痛みはなく、でも強制的に後ろに下がってしまった。

――――――――――

アンの攻撃はとどまることを知らない。
躱したと思ったら即僕の死角に現れて攻撃を加える。
こんな動作を、十回は繰り返しただろう。
でも五回目以降から違和感の正体には気付いた。
攻撃を当てて来ないんだ。
相手もバカじゃない。
むしろ頭が回る方だ。
だから死角から攻撃してくるとはいえ軌道を修正して当てに来るはずだ。
なのにそれがなく、僕が躱せる攻撃しかしない。
まるで僕に攻撃を躱させるかのように。
「チッ、当たらない……！」

数回の攻撃のうち一回、こうやって言葉を呟く。

もしこういう言葉がなければ、すぐに偽物として判断が出来た。

戦闘中だとはいえ全く声が出ないということはないからだ。

でも声に関しても、アンなら先ほどの技を使って離れた場所から喋ることが出来る。

もしアンが僕の思考を読んで裏をかき、実は本物だったという可能性がある。

うわ～、僕どつぼにはまってるな。

こう思考させることがアンの目的なら、それは成功したことになる。

でも僕に本物と偽物を見分ける術はな――

「いや、ある」

僕は考えを否定し、あることを思いつく。

目を使えばいいんだ。

僕の目は特殊で、精霊の動きをみたり物体の構造の把握をしたり出来る。

後者の方を使ってアンを見ればいいんだ。

ちょっと普通とは違う見方だけど。

構造が把握出来る、というのを細部まで見えるように感度を上げてどの部分に何があるのかを把握する。

つまり今までなら『夏哉の服の構造』を把握するところを、『夏哉の服の袖の構造』まで細かく見ればいいと言うこと。
それを繋ぎ合わせればだいたいの場所やポーズが分かる。
負担は大きいが、幻術にかかって何もしないよりはマシだ。

早速発動させた。

背後から踵落としをしてくるアンを躱し、タイミングを合わせて後ろを見る。

アンと目があった。

それに構わず顔面に拳を放ってきた。

おかしい。

アンをしっかり視野に収めたはずなのに、何も把握できない。

これはどういうことだ？

この能力は神からもらったことだから使えなくなった、ということはない。

なら単純。

僕は躱すのをやめて立ち止まる。

構造が把握できないということは、把握するものがないということ。

つまり――

僕が立ち止まることに構わず殴ってくる。

それは、

僕の体をすり抜けてしまった。

予想通り。

僕はいつの間にかアンに幻術をかけられていたようだ。

ホント分からなかった。

多分アンは夏哉の元に向かっているだろう。

流石のフィーラとはいえアンの搦め手に捕まってしまえば抜け出すのは難しいだろう。

フィーラたちの方を見てみる。

夏哉と一対一で戦っているが、やはり把握できない。

僕の見えてる世界全てが幻術かと思ったけど、ノイたちの服や背景は見た通りに把握できるため、幻術で変わっているのは戦っている人のみだろう。

でもこの目なら見つけられる。

辺りを見回せば、すぐに見つけられた。

フィーラが着ている服、夏哉の身につけている装飾品。

それらの構造が把握出来る。

もちろんアンのも。

「フィーラ！！」

名前を呼ぶ。

しかし返事が来ない。

もしかしたら幻術のせいでフィーラの声が聞こえないのかもしれない。

「フィーラ！ゴメン、幻術かけられた！」

そう叫びながらフィーラに近づく。

これからはいかに意味のない攻撃をしてくるアンを無視できるかにかかっている。

――――――――――――

「夏哉、平気か？」

衝撃を受けて吹き飛ばされた先に、アンがいた。

アンがいるということは、ヴァイスはどうなったんだろう。

周囲を見渡すと、ヴァイスはひとりで何か動いていた。

「アン、ヴァイスに何したの？」

俺と同様ヴァイスを見たフィーラがちょっと呆れた風に訪ねる。

「いや何、あいつに幻術をかけただけだ。今あいつは私が攻撃してくる幻覚を見てる」

「ヴァイス！しっかりしなさい！」

「無駄だ。外の声は聞こえない」

そう告げると、フィーラはヴァイス目掛けて駆け出す。

「夏哉止めろ！」

アンに指示されて俺も駆け出す。

するとフィーラの前に先ほどより分厚い壁が出現。

「邪魔よ」

そう呟くと、フィーラの元から炎が吹き出した。

それはアンの作り出した壁を粉々に砕いた。

足止めにもなっていない。

しかしアンがそこで終わる訳がない。

今度は地面から杭を突き出して腹を狙う。

それは片足を引くことで躱した。

その為足が止まる。

追いつくチャンスだ。

でもそれも一瞬。

すぐに駆け出そうとする。

ドォンッ！！

轟音が轟いた。

フィーラの頭上に雷が落ちたためだ。

粉塵でフィーラが見えなくなった。

まぁいい。

多分すぐ動き出すだろうからフィーラの少し前を目指そう。

そう思い立って粉塵の中に入っていく。

するとはっきりとは見えないが、影が見えた。

この粉塵の中にはフィーラしかいないだろう。

そう思ったら不自然な風が吹き、粉塵が晴れていく。

アンの魔法だろう。

そして俺は見た。

フィーラが拳を構えているところを。

俺は止まれなかった。

だからどうせ突っ込むなら拳を構えた方がいいと思い、思いっきり振りかぶる。

やはりと言うべきか、フィーラの方が攻撃は早い。

狙いは胸だろうか。

今更躱せない。

対する俺はがむしゃらで狙いなんて付けていない。

躱される可能性もある。

俺は来るであろう衝撃に耐えようとした。

そして来た。

拳の方に。

「っが……！！」

どうやら頬に当たったようで、フィーラは一瞬ぐらついたがすぐに体勢を立て直して構える。

「ちょっと、どういうことなの？今攻撃届いて無かったわよ？」

口の中が切れたのだろう、口から滴り落ちる血を手の甲で拭いながら疑問をぶつけてくる。
その疑問は当然だろう。
俺だって分かんないんだから。
でもこの場合誰がやったのかは見当はつく。
アンに顔を向けた。
アンは察してくれたらしく、説明してくれた。
「さっき夏哉の右手の先に圧縮した空気の塊を纏わせておいた。ちょうど拳ひとつ分だな。何か使えるだろうと思ってやったんだが、まぁまぁだな」
い、何時の間に……。
「夏哉！基本どんどん攻めろ！私がサポートするから！！」
「了解！」
再びフィーラとの距離を詰めようとした瞬間、声が聞こえた。
「フィーラ！」
それはヴァイスのものだ。
思わず足を止めてそちらを向く。

フィーラも同様だ。

「ヴァイス！？」

そして名前を呼び返す。

「フィーラ！ゴメン、幻術にかけられた！」

謝ると、ヴァイスは小走りでやってきた。

「ちょっとアン。まさか幻術解けた？」

「いや、まだかかってるが……なんらかの方法で見破ったと思った方がいいだろう。私たちのいる場所バレてるみたいだし」

「じゃあどうすんの？」

「構うことはない。さっき言った通りにしてくれ」

「あいよ」

俺は考えなしに突っ込む。

フォローはアンがなんとかしてくれるから俺は言われたとおりに動けばいい。

多分俺の攻撃は躱されるから狙いはヴァイス。

そういやフィーラも炎使ってたし、俺も風使おう。

俺とヴァイスの距離が残り三歩というとこで、足に風を纏わせて速

度を上げた。

視界の左側で何かが動く。

恐らくフィーラだろう。

思わずそちらに視線を向けてしまった。

やはりフィーラだった。

一瞬足を止めようとした。

でもすぐにヴァイスの方を向く。

アンがきっとなんとかしてくれる。

「チッ！！」

フィーラの舌打ちが聞こえた。

ちゃんとやってくれたようだ。

ヴァイスに意識を完全に向けると、その周囲に水が球を象りながら三つ浮いていた。

「ウォーターカッター」

するとその水が勢いよく俺の元に狙う。

ウォーターカッター。

名前からして水で物体を切断できるのだろう。
死なないように狙ってくれてるだろうが、そんなの関係ない。
あれなら躱せる範囲内だ。
三筋の合間をくぐって更に接近する。

――――――――――――

それなりに距離も近かったから当てる自信はあった。
致命傷を与えない程度の加減も出来ていた。
三つのウォーターカッターも全てタイミングをずらして放った。
一つ目は夏哉の右胸を狙ったのだが、仮にそれを躱されたとしても、その躱すであろう方向を予想して二つ目三つ目を放った。
なのに夏哉は、避けにくい右に体を強引にねじ込ませて迫ってきた。
普通夏哉から見て右側を襲われたら左側に逃げるはずだ。
そちらの方が躱しやすいのだから。
夏哉の行動は、一歩間違えれば自ら攻撃に当たり行くのに等しかった。
それに、わざわざ言う必要のない技名も言った。
?カッター?という言葉で、?切断?を連想させ、確実に躱させるためだ。

そこまで考えての行動だったのに、夏哉はそれを強引に打ち破ってしまったのだ。

次の対策を考える暇がない。

考えたら、一瞬でやられる。

僕の魔法をかいくぐった夏哉は既に殴るタメを終えていた。

さながら砲弾のような拳を、そっと添えるように左手を使って横から逸らす。

力というのは、側面の力にはとても弱い。

それにウインドアーマーもあるので間違っても当たらない。

はずなのに。

ウインドアーマーの領域に入って、でも逸れない。

左手が夏哉の拳に近づいて、でも逸れない。

左手が完全に触れて、でも逸れない。

慌てて体を引いて攻撃を躱そうとした。

ドッ！！

しかし叶わず、左二の腕に当たってしまった。

「いぎ……っ！！」

はっきり言ってマズい。

左腕は折れてはいないだろうけど、痺れが走る。
意識しなければ使えない、と言ったところか。

そんな僕の焦りはお構い無しと言った風に、夏哉は次の攻撃のモーションに入る。

同じ過ちは犯さぬよう、受け流すということはしないで完全に避ける。

そしてちょっと危険な賭に出た。

僕たちの周囲に現れた水の玉。
数は五つ。

その五つ全てを、爆発させた。

ウォーターエクスプロージョン。

読んで字の如く水を爆発させる魔法。
僕がよく使う魔法で、威力もそこそこ。

あの近さじゃ僕も巻き込まれるところだが、ウインドアーマーを使って爆風を上手く流すことによってダメージはほぼゼロ。

しかしまともに食らえば動けないほどに痛めつけられるはず。

水蒸気のせいで夏哉は見えないが、立ち上がることを視野に入れながらフィーラの援護に回ろうとしたとき――

「キャアアアアアッ！！」

「ッ！？ノイ！？」

ノイの叫びが聞こえた僕は振り返って何があったのか確認しようとした。

その時点で、僕は気付くべきだった。

僕は今幻術にかかっていて、聞こえる声と言えばたまに呟く幻術のアンの声のみということを。

幻術なのだから幻聴くらい聞かせられるということを。

そして、ノイが襲われたとしても自分の力でなんとか出来るということを。

不意に、足に違和感を覚えた。

地面から、まるでツタのように足に絡みついてくる岩。
それは徐々に上にあがっている。

捕らえられたのだ。

しかしそれはすぐに砕けた。

僕は特に何もしていない。
予想としてはアンが僕を捕らえようとしたが、フィーラが壊してくれた、というところか。

しかしフィーラに申し訳ないけど、向こうにとって十分な時間を取らせてしまったようだ。

水蒸気を切り裂き、迫り来る影。

後ろを振り返り、岩に足を取られてしまった僕に、ボロボロになった彼の拳を躱す時間は無かった。

――――――――――

アンを対応してる間も、私はちょくちょくヴァイスの方に意識を傾けていた。

そんな余裕があるのかと言えば、アンも夏哉に意識を傾けていたため、そんなことが出来た。

アンの攻撃はいやらしい。

決して、夏哉ほどのスピードや力がある訳じゃない。

それでもアンは二撃目のことをいつも視野に入れてる。

一撃目は基本わざと躱させて体勢を崩したところで二撃目で本命。

だからと言って一撃目が弱い訳じゃない。

それに加えて遠距離近距離の入れ替えが上手い。

遠距離攻撃に慣れたと思ったら素早く近距離に変えて、その逆もまた同じ。

ものすごく厄介すぎる。

夏哉の方が全然マシだ。

まぁあの子も実際は厄介だったけど。

普通に私の対術に追い付いてきてて、私も八割方本気だった。

仮に夏哉が体の動かし方を理解していたら体術面では負けていたかもしれない。

そう考えていたら、爆発音が聞こえた。

ヴァイスがウォーターエクスプロージョンを使ったようだ。

それを夏哉は直に食らったというのに、アンは動揺する様子がない。

「意外ね」

「何が？」

「アンなら心配して夏哉のところに行くものだと思ってたわ」

「フッ、安心しろ。心の中じゃ早く夏哉に駆け寄りたい一心だよ。

でも、夏哉なら耐えられるとも思ってるんだ」

言い終わった瞬間、何故かヴァイスが後ろを振り返った。

何もないのに。

「ヴァイスに何したの？」

「何、夏哉に道を作っただけだ」

その後にヴァイスの足に土がからみついた。
ヴァイスより私がなんとかした方が早い。
風魔法を使ってそれらを切り裂く――が。
捕らえられた一瞬の隙をつき、夏哉がヴァイスの腹部に拳を放った。
渾身の一撃に、たまらず崩れ去ったヴァイス。
これで二対一に――
「アン」
夏哉がアンの名前を呼ぶ。
「ゴメン、俺もう無理そうかも」
そう言って膝から崩れ落ちた。
水の爆発を直に受けたのだ、意識がある分よく耐えたと褒めるべきか。
「安心してろ。もうすぐ片づけてやるから」
「頼むわ～」
私はアンの言葉に反応する。
「何？もう終わらせちゃうの？というか終わらせられるの？」

「まぁな。私の攻撃、耐え切れればお前の勝ち。沈めば私の勝ち。シンプルだろ？それに、私はやりたいことがあるんだ」

「やりたいこと？」

どうさっきの話に繋がるのかしら。

「私は怪我した夏哉に膝枕をしてあげたい！だから夏哉が動けるようになる前に決着をつける！」

アンの顔は真剣だった。

そんな顔を見て思わず――

「プッ」

――笑ってしまった。

「何がおかしい？」

「いや、決着付けたい理由が膝枕って……。いいわ、じゃあ私もそうしよう。早く終わらせてヴァイスに膝枕するわ」

「いい心がけだな。それから、別に私に合わせて攻撃を仕掛けない、なんてことはしなくていいぞ。最も――」

「ッ！？」

私は驚愕した。

未だかつてここまでしたことがあるのだろうか、というくらい驚愕した。

だって――

「――攻撃する暇があればな」

いつの間にか目の前にいたんだから。

おかしかった。

アンは駆け出す動作はおろか、動く動作すらしていない。

仮に私が見えないほどの速さで動いたのだとしても、立っていた場所から私の目の前に現れるまで、若干の時間差はあるはずだ。

なのに今のにはなかった。

消えると現れるが同時だったのだ。

気付けば私は防御も出来ず、一瞬にして十発以上の攻撃を受けた。

――――――――――――

ドサリとフィーラが倒れる。

はっきり言ってフィーラはチート過ぎる。

確かフィーラも魔法が使えたはずだ。

もしそれを最初からフルに使われていたら終わっていた可能性が早い。

まぁそのことを考えるのは後でいい。

今は取り敢えず夏哉を膝枕しなければ！！

夏哉の元に駆け寄ろうとする、が。

どてっ。

私は転んでしまった。

決して私にドジッ子属性がついたのではない。

転んだのには訳がある。

足の感覚が消えたのだ。

ついでに両腕も。

これが、先ほど使った時間支配（タイムルーラー）の副作用。

幸い使った時間は一秒程だったので一分で済むが、最悪だった。

これでは膝枕をしても何も感じない。

いや、まぁいい。
夏哉に私の太ももを感じてもらえるだけで良しとしよう。
体を浮かせ、夏哉の側に近付こうとした。
しかし、私はとんでもないものを見てしまった。
「夏哉、大丈夫っ！？」
私より先に、沙鳥が夏哉に膝枕をしているのだ。
その光景を半放心状態で見ていたら、沙鳥と目が合った。
その目はこう語っていた。
？誰が抜け駆けさせるもんか？
「ひ、酷い……」
私はうなだれてしまった。
腕と足の感覚なくしてこの仕打ちは酷すぎる。
夏哉が動けるようになるまで沙鳥は膝枕をしていた。
十分堪能した後に気絶中の二人の治癒をしてもらう。
そのくらいは当然だろう。
私から膝枕を奪ったんだから。
で、皆怪我を癒したところで今度はこのメンバーで駅三つほど離れた場所に向かった。

そこは皆行ったこと無かったようで、探検でもしているかのようだった。

その中で特に面白かったのが、ヴァイス以外の異世界組の反応する。電車や食べ物など、こちらじゃ普通のものにいちいち驚く様は、まるで昔の自分を見ているようで微笑ましかった。

――――――――――

楽しいときの時間の流れは速いもので、既に日が沈みかけていた。

「じゃあ僕たちそろそろ戻るね」

僕はこの世界の人たちに挨拶する。

「おう。まぁ暇なときにまた来てくれや」

「じゃあ今度来てまた再チャレンジするわよヴァイス」

「待ってくださいフィーラさん！もう戦うのはやめよう！遊びに来いよ！！戦いに来るなよ！！」

「何言ってるのよ。あの戦いも遊びの一部よ」

「遊びの基準がおかしい！！あれは絶対遊びじゃない！！」

必死な夏哉の様子を見て、夏哉以外笑いがこみ上げる。

「あ、そういや最初の方はノイとかクレイン暇じゃなかった?今更だけど」

「それホント今更だね。別に暇じゃなかったよ。お兄ちゃんの戦いみれたし、空ねぇたちとも話できてたし」

このメンバーの中でノイは火津那と一番仲良く出来たそうだ。
仲がいいのは何よりだ。

「私もー。沙鳥とぷよ○よ出来たから楽しかったよ」

「クレインちゃん!次絶対勝つからまた相手してね」

「うん、いいよー」

クレインも仲良くできたようでよかった。

「ノイ、お願い」

「うん」

ノイの能力を使い、異世界へ通じるゲートを作ってもらった。

「またね」

「おう」

短く言葉を交わして、僕たちはゲートをくぐった。

くぐった先には、見慣れた部屋があった。

男子寮の僕たちの部屋だ。

辺りはオレンジ色に輝いている。

「楽しかったね、お兄ちゃんの世界」

誰に言うでなく呟くノイ。

それにフィーラが答える。

「そうね。行って正解だったわ」

「ノイ連れて行ってくれて姉ありがとう」

そうだ。

楽しい思い出を作れたのはノイの発送と能力のお陰だ。

「どういたしまして」

楽しそうな義妹たちを見て思う。

「また暇な時間見つけたら行こうね」

新しい地で作った友達と思い出を作るために。

後書きという名の雑談番外

作者「番外編終わった～！！」

夏哉「ちょっと長くね？まるまる一話分の長さじゃん」

沙鳥「でもよくない？嬉しいことにコラボ四つも出来たんだから」

真樹「そうですわね。まずはお礼を言いましょう。空お姉ちゃん、ｋｉｉｔｉさん、クロスライトさん、蛍夜さん、コラボ承諾ありがとうございますわ」

アン「それでひとつ報告だが、もう一人コラボしていいと言ってくれている人がいて、本当はこの番外編で一緒にやっちゃおうと考えたようだが、感想でもあったとおり番外編が長引いてしまったため次の第八話が完結した後にやらせてもらう予定だ」

作「あぁそうだな、ここでコラボの件でお礼を言っちゃったから感想も言っちゃおう」

香苗「そうだね。今回番外編で感想をくださったクロスライトさん、姉様こと ｓｋｙｆｌａｒｅさん、ｋｉｉｔｉさん、ソラトさん、蛍夜さん、ファルコさん、ｖｉｃｔｏｒさん、ムーロンさん、ラルドさん、火炎猫　魔燐さん、ありがとうございました！」

作「なぁ皆。唐突なんだが質問いいか？」

ア「ホント唐突だな。駄目だと言ったら？」

作「沙鳥を夏哉の嫁候補から外す」

沙「ちょ、なんで私！？」

香＆ａｍｐ；ア「「絶対聞かない」」

沙「ヒドッ！！アンちゃんもそっち側！？」

ア「お前には膝枕妨害されたからな」

沙「ううっ、それか……」

夏「ほらほら落ち込むな。今ならほっぺにチュウくらいしてやるから」

沙「マジですか！？」

夏「マジですよ」

チュッ

夏「な？」

沙「な、夏哉！う、うわっ！もう、うわあああ！」

真「凄い興奮してますわね」

香「夏哉君ずるい！」

ア「そうだそうだ！なんでほっぺにチュウするんだ！」

夏「だって沙鳥もう嫁にならないんだろ?餞別みたいなものだ。あ、沙鳥」

沙「ん?なぁに夏哉ぁ?」

夏「作者、嫁はだめって言ったから彼女とか妻には慣れるだろ?」

沙「わぁ、ホントだ!夏哉あったまい~」

香「やけに沙鳥ちゃんの肩持つね、夏哉君」

夏「お前らがアホなこと言うからだ。一応聞いてあげようよ」

ア「まぁもとから聞くつもりだったが」

真「で、作者。質問ってなんですの?」

作「ようやくか。えっとだな、香苗に関する話と俺の不幸な話、どっちから聞きたい?」

夏「結局両方聞くんだな?」

作「まあな」

真「じゃあ無難に香苗ではありません?作者の話など何時聞いても変わりなさそうです」

作「酷いな。まぁ実際そうなんだけど」

香「じゃあ私の話からでいい？」

沙「いいよ～」

作「じゃあオホン。俺前回にさ、沙鳥の絵のこと話したじゃん？」

夏「あぁ、話したな。待ち受けがどうのって」

作「そうそれ。で、その絵って言うのが実は沙鳥だけじゃなくて香苗のも描いたんだよ」

香「え、ほ、ほんと！？」

真「もしかして、香苗は落選したと？」

作「あー違う違う違う。これは単に期限に間に合いませんでしたってやつ。背景が上手く描けなくてさ。香苗どうよ？出してほしかった？」

香「あ、う～ん……。恥ずかしいからいいよ」

作「そう言ってもらえるならよかったよ。で、だからこうしてみた」

＞ｉ３２３７３―３２９１＜

香「え、え！？これ私！？」

ア「これは完成品なのか？」

作「いや。背景ごっそり消した。で、このポーズは一話の時の香苗

が神と融合?するときを思い出していただけると」

夏「あぁあの時か～」

作「流石に最初に描いた香苗よりはマシに描けた気がするんだけどな～」

真「まぁこれで同じだったら学校行ってる意味ないですからね」

作「ごもっともです」

真「で、わたくしの絵は?」

作「……描いた方がいい?」

真「もちろんですわ」

作「急に言い出すなよ。どんなポーズにすりゃいいか分からん」

真「三連休なんですからさっさと描きなさい」

作「あ、今思いついた。頑張ってみるけど、学校の課題もあるからそっち優先するぞ?」

真「まあ、それは仕方ないですわね……」

ア「なあ作者。私は?」

作「アンごめん。俺そんな高性能じゃないんだ。三日で二枚は厳しいと思う!だからこの三連休ではなしだ」

ア「そうか……」

作「課題がなくなればいけないこともないから、なるべく早く課題終わらせて土日に描くから」

ア「わかった」

作「で、夏哉」

夏「ん？」

作「お前は男だからなしだ」

夏「予想はしてたからかまわない」

作「よし、頑張ろう！」

沙「で、作者の不幸話って？」

作「あぁ実はな、月曜日、学生証をどっかに落としちゃった」

香「作者何してるの……」

作「で、火曜日再発行するために二千円払った」

真「自業自得ですわね」

作「で、水曜日、無くした学生証が学校に届けられてた」

沙「え、ちょっと待って。じゃあもしかして……二千円払い損？」

作「俺の手元には今学生証が二つもあるんだよッ！！なんだよ！なんでこんなタイミングが悪いんだよ！！後一日再発行するの待ってたら！！」

夏「ドンマイ過ぎるな作者」

作「で、水曜日放課後」

ア「まだあるのか？」

作「外土砂降り、俺傘無し」

真「天気予報見なさい」

作「仕方ないからコンビニで傘買おうとして財布だして違和感」

香「財布間違えた？」

コクり

沙「中身は？」

作「二百円」

夏「すくな！？そっちの財布少なすぎるだろ！？」

作「予備用の財布だったんだよ！！で、コンビニの傘四百円！！」

真「買えませんわね」

作「だから近くのブックオ○で雨宿りしてたら雨強まった」

沙「で、どうしたの？」

作「帰りましたよ雨の中！で、最後に百均行きましたよ！傘買いに！！」

夏「お、よかったじゃん百均あって」

作「二百十円」

夏「は？」

作「そこで売ってた傘の値段！！百均のくせに二百十円だったんだよ！」

香「……えっと、残金は？」

作「二百円」

沙「十円足りない！！」

作「だから十五分間土砂降りの中チャリで帰ったよ」

ア「あ～、ドンマイ」

作「はい」

夏「あぁ、やっぱテンション低いな」

真「そうですわね。若干自業自得な点もある気がしますが……」

沙「ねぇ作者。他にやることある？私たちやっとくよ？」

作「えっと、じゃあ本編のあらすじ的なのを。読み返すのもたるいだろうし、こんなに空いてたら忘れてる人もいるだろうし」

沙「了解。えっと最後は確か文化祭だね。文化祭は不良の暴走がいくつかあったけどそこは主人公の夏哉。ちゃっちゃと片付けて女の子にフラグを立てて無事終了しました。そんな中私は、そういや夏哉と絡めなかったな～と思いながら帰宅。いつも通り夜を過ごして午前零時。六月二十一日。この日、私は十六歳になりました。それと同時に皆からお祝いメール。嬉しさを噛み締めながら眠りにつきました。そして朝、目が覚めて下に降りると、何故か夏哉、カナ、アンちゃん、真樹、ネハラさん、ラスクさんがいました。と、ここまでが第七話でした」

真「沙鳥様お疲れさまでした」

沙「いえいえそれほどでも」

夏「じゃあ作者、この辺で終わっていいか？本編の方も長かったし」

作「あ、ちょい待ち。評価がいつの間にか７００行ってました。皆さんありがとうございます！」

夏「ホントありがとうございます。てなわけでこの辺で！」

香「皆さんここまで読んでくれてありがとうございました」

沙「感想評価も徐々に増えていってうれしい限りです」

ア「改めて言うが、コラボしてくれた方々は本当にありがとう」

真「次回の第八話もよろしくお願いしますわ」

第八話　《プロローグ》不思議と殺意

一瞬で世界が色あせてしまった。

実際に色あせた訳ではない。

色あせたように感じてしまったのだ。

原因はなんてことはない。

ただ高校の文化祭に遊びに来て友達とはぐれてしまっただけ。

たったそれだけなのに、そこから世界が恐怖の対象になってしまった。

怖い怖い怖い。

仲良く談笑している人たちが怖い。

店の呼び込みをしている人が怖い。

私とすれ違う人たちが怖い。

皆、何を考えているか分からなくて怖い。

もしかしたら私が知らないところで他人に迷惑をかけてたらと思うと怖い。

胸が締め付けられるように痛い。

この恐怖のせいだ。

でも誰にも言えない。

だってこんな痛みを抱える人なんて異常だから。

普通は赤の他人にこんな恐怖は感じないから。

だからそれを言っても自意識過剰と笑われて終わりだ。

孤独を感じる。

一人でいると、必ずと言っていいほど孤独を感じるようになってしまう。

友達といれば、少しはそのことを忘れられる。

私は、一人で抱え込んでいる悩みがあった。

でもその悩みは、遊んだり友達と話したりすればすぐに忘れられる程度のものだったので、その程度じゃ相談もしにくい。

それに相談したとしてもその結果相手に迷惑をかける。

それはイヤだからため込んで、悩みは肥大化する。

なんとかしなきゃいけないことは分かってる。

でも仕方が分からない。

どうすれば私の悩みが解消され、且つ誰にも迷惑をかけないで済むのだろうか。

と、一人の時だといつもこうやっと思考を巡らせる。

一瞬でも現実逃避をしたいから。

そんなとき、私はある男性とぶつかってしまった。

正直怖かった。

世の中理不尽な人ばかりじゃないし、今までだって一度も絡まれたりしたことなんてなかったけど、もしかしたらというのを考えてしまって足が竦む。

予想に反してというべきか、やっぱりというべきか、男性は私に謝ってきた。

でも心の中じゃ違うんじゃないか。

やっぱりそう考えてしまい、そんな自分がいやになる。

すると男性が、突然私の名前を言い出した。

本当に何かしでかしちゃったんじゃないかと不安になりながらうなずくと、男性はホッとしたように笑った。

その笑顔を見て、何故か私もホッとした。

別にかっこいいわけでも可愛らしいわけでもないのに、気持ちが軽くなった気がした。

なんの魔法だろうと思って気づいた。

私の世界に色が戻った。

世界に対する恐怖が薄れる。

不思議に思いながら、男性の話を聞くと、どうやらこの人は友人の知り合いで探してくれていたそうだ。

男性の言うとおりついて行くと、違和感を覚える。

私、初対面なのに普通でいられる。

今の友人でさえ、最初はドキマギしながらだったのに、恐怖を感じない。

不思議な人だな。

それが、私、篠原神奈（しのはらかんな）が思った柊夏哉さんに対する印象だった。

――――――――――

わたしはイラついていた。

最近、お姉ちゃんに変な虫がまとわりついているから。

今日だってそうだ。

お姉ちゃんがいるから文化祭にきたというのに、虫がお姉ちゃんを付きまとっていた。

殺したい衝動に駆られる。

でも今は我慢。
今そんなことをしたら逆にお姉ちゃんに迷惑をかけちゃう。

しばらくの間友達とぷらぷらして、友達が店でアイス買いたいって言ったので外で待っていた。

すると何処からどう見ても不良が現れた。

ちょうどいい。
鬱憤も最高潮に溜まっていたことだし、あいつで解消しよう。

わたしはわざとぶつかり、挑発的な態度をとる。

案の定不良はブチギレて殴りかかってきた。
正当防衛ということは周りが証明してくれる。

思う存分殴ろうと思ったとき、そいつは現れた。

そいつは私と不良の間に立つといきなり熱っくるしい説教をタラタラと述べ、自分から殴られた。

バカだと思った。

どうしてわざわざ見知らぬ人のために自分から殴られようとするのか。

まぁ化け物の思考なんて分かる訳ないか。

そう自己解決していると、そいつは私の方を向いて拳骨を食らわせた。

ちょっと痛かったけど耐えられないものではなかった。

でも、わたしは何が起きたのか分からずボーっとしていた。

そして今度は私にタラタラと何かを言い始めた。

最初は何を言ってるか、頭が回らなかったので分からなかったが、途中で説教だということに気付いた。

どうしたらいいか分からなくなって、表面には出さなかったがパニック状態になる。

気がつくと話が終わっていたので、すぐにその場から立ち去った。

その最中、わたしは今日までのことを振り返った。

わたし、今まで甘やかされて育てられたから説教なんて受けたことなかった。

そんなわたしに初めて説教したのがあいつ。

思い出しただけで殺意が沸いてきた。

別に説教されたからじゃない。

他の人にされるなら、いい気分にはならないだろうが殺意は生まれない。

あんな化け物なんかに説教されたのだ、正気を保てた不良がおかしい。

まぁ所詮同じ穴の狢か。

その後わたしは、友達に電話して先に帰ることを伝えた。

あんな殺意に満ちた顔、流石に友達に見せるわけにはいかない。

しかしその代わり、今日は殺意を抱きながら眠りにつこう。

柊夏哉への殺意を一瞬たりとも忘れないために。

第八話　《プロローグ》不思議と殺意（後書き）

香苗「……え？これだけで終わり？」

夏哉「だ、だよな？沙鳥の誕生日はどうした？」

作者「何言ってるんですかお二方。今回はプロローグですよ？プロローグなんだから気が早いですよ？始まるのは一章からです！」

香「わ、分かったよ」

作「それでさ、二人に申し訳ないんだけど、ちょっと真樹連れ込んでいい？」

夏「いいけど、どうした？」

作「一応真樹の絵が完成したから真樹にも見てもらおうと思ってな」

真樹「というわけでお邪魔しますわ」

作「さあ真樹ちゃんや！これが二十四時間で描いたものだ！！」

＞ｉ３２６３７―３２９１＜

真「ブフッ！？」

作「あ」

香「わわわっ！夏哉君見ちゃだめッ！！」

夏「あ、あぁ」

作「しまった。真樹に服着せるの忘れてた」

真「あ、あああ、あんた……！ほ、ホント何してんのよ！！」

作「すまんすまん。こっちが服着せた方だ」

＞i32638－3291＜

香「……夏哉君。見たよね？」

夏「な、何を？」

香「真樹ちゃんの下着姿」

夏「……真樹ほんっとごめん！！見るつもりはありませんでした！！」

作「あぁ気にしなくていいよ」

真「なんであんたがそんなことというのよ！あんなの見せられて平気な訳ないでしょ！！」

作「『う……、い、いいでしょう、出番のためならその程度の肌見せは許しましょう』」

真「！？」

作「この文は［２０１１年　０９月　１３日　１５時　０８分］蛍夜さんからの感想の返信から抜粋したものだ。より正確に抜粋すると、

作『だって真樹人気者だよ？一肌脱がないと』

真『真剣になる方のと服を脱ぐのを掛けても面白くありませんわ！！』

作『でも皆に評判いいじゃん。それに出番増えるよ？』

真『う……、い、いいでしょう、出番のためならその程度の肌見せは許しましょう』

という会話がありました。つまり真樹は出番があれば服を脱ぐ露出狂だったんだ！！」

真「違うもんっ！そんな服なんて簡単に脱がないよ！！」

香「……夏哉君、真樹ちゃん壊れた？？もんっ？て」

夏「あいつも作者相手に大変そうだから、突っ込んでやるな？」

香「そんなことしないよ。でもあれじゃ作者の前で滅多なこと言えないよ」

夏「そうだな。真樹の二の舞になりそうだけど……おまえは平気じゃね？」

香「なんで？」

夏「作者ロリじゃないから」

香「そ、それはそれで複雑な気持ちになるんだけど……」

夏「いいからもう締めよう。蛍夜さん、ｖｉｃｔｏｒさん、感想ありがとうございました。皆さんも、次回よろしくお願いします」

香「よろしくお願いします」

夏「でもあの下着どっか見たことあるな……」

真「ギクッ」

香「女の子の下着姿見覚えあるとか、夏哉君最低！！」

第八話　《一章》プレゼント

「……」

「じゃあお父さんたち行くな」

「皆沙鳥をよろしくね」

「お姉ちゃん楽しんでね」

「「「「行ってらっしゃい」」」」

私は、未だ状況を理解できていない。

えーっと、確か今日は六月二十一日、私の誕生日だ。

それは間違いない。

決して四月一日のエイプリルフールではない。

その筈なのに、朝、下で朝食を食べようと降りてきたところ、柊夏哉、花街香苗、早乙女真樹、空揺火津那、アン、ネハラ、ラスクの七人がリビングで出迎えて、しかも一緒に朝食を食べ、更に家族の見送りをしている。

家族が外に出てガチャッと戸を閉める音で我に返り、叫ぶ。

「ちょっと待てぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇッッッ！！！！！！」

私の叫びが大きかったようで、皆耳を塞ぐ。

それにお構いなく続ける。

「え、何!?なんなの!?なんで皆いるの!?てかいつからいたの!?なんで一緒に朝食食べて家族見送ってるの!?訳わかんないよッ!!」

「さ、沙鳥様落ち着いて……」

真樹が宥めようとしてるが、そんな言葉じゃ私は止まらない。

「落ち着いてられるかッ!!もう訳分からなさすぎだよ!!何ひとつ理解出来ないよ!!バカな私だけどこれは誰も理解出来ないっていう自信はあるよ!!ていうか空お姉ちゃん本当に学生!?私服初めて見るけど大人すぎるわッ!!」

「いい加減落ち着け」

ゴツッ

「いたっ!!」

夏哉から拳骨を脳天に受けて私はうずくまる。

この馬鹿力め、加減ってものを知ってるの?

痛みでちょっと涙浮かんできたよ……。

「香苗、沙鳥に説明してあげなさい」

「いいけど、なんで私?」

「こん中で一番分かりやすい説明をしそうだから」

「そっか。ありがと、夏哉君。沙鳥ちゃん、聞く準備いい？」

「いいけど……」

うずくまったままカナを見上げる。

今更だけど、カナを見上げるなんて初めてかもしれない。

「沙鳥ちゃん」

ギクッ！

ホント絶妙すぎるタイミングで私の名前を呼ぶカナ。

ガチで心を読まれたかと思ってしまう。

ヤバいな、もし思ってるのがバレたら誕生日に命日を送ることになってしまう。

「な、何？」

冷や汗をかきながら返事をする。

「沙鳥ちゃんって小さいね」

憎たらしいほどのどや顔で私を見下ろしてくる。

その姿を見て最初に思ったのが苛立ち――ではなく、

「……カナ、そんなこと言って虚しくない？」

可哀想だった。

カナの顔はどや顔から真顔に変わり、更に悲しみに顔をゆがめ、

「ふぇぇぇぇんっ、夏哉君！沙鳥ちゃんがイヂメルよぉ！！」

夏哉に泣きついた。

これは私のせいではないはずだ。

でも何故か罪悪感を抱いてしまう。

何このロリの特権。

「今のは自業自得だバカやろう」

夏哉はカナにも拳骨を落とす。

やはり痛かったようで、私同様頭を抱えうずくまる。

私は痛みは引いてきたので立ち上がる。

「わたくしが説明してよろしいですか？」

ちょっと呆れ口調で真樹が言う。

「よろしくお願いします」

私は仰々しく頭を下げた。

「今日は沙鳥様の誕生日ですわよね？」

「うん」

「ですので、沙鳥様の家族から事前に許可を取り、この場で誕生パーティーを開くことになりましたの。その際普通じゃつまらないからという理由で沙鳥様のお母様が『朝からブッ通しで祝って貰えないかしら』と仰られたので、お邪魔させていただきました。私たちは昨日の夜からこちらにいましたわ」

真樹の長く、しかし分かりやすい説明を理解した私は、即座に口を開く。

「いろいろ聞きたいことがあるけど、一番最初に聞かなければならないことがあります」

「なんでしょうか？」

「この家にはね、四人まとめて寝れる場所はここしかないし、あまり部屋もないわけ。つまりあんたら全員、私が一人寂しくベッドで寝てた中、この部屋で、夏哉と一緒に、イチャイチャ寝てたってわけ？」

言いながら、ズイズイと真樹に迫る。

「お、お言葉ですが沙鳥様？わたくしは別にイチャイチャなんてしてませんわよ？確かに寝ましたが、わたくしたちはリビングで、夏哉はキッチンの方で寝ましたわ。二度言いますが、決してイチャイチャしてません」

「夏哉キッチンなんて可哀想！なんで夏哉は私の部屋に来なかったの！？私のベッド二人なら詰めれば寝れたのに！！」

「俺を気遣ってくれるのは嬉しいけどそっちの方が危険だわ！！」

「安心しろ沙鳥。私が夏哉と添い寝したから不快はなかったはずだぞ」

この場の空気が固まった。

ギギギ、と夏哉の方へ首を向ける。

「夏哉？」

「待て待て待て！俺はガチで知らん！！絶対俺は一人で寝た！断言できる！！アンはネハラとラスクに挟まれて一緒に仲むつまじく寝てた！！確か魔法使って空中にデカいハンモック的なのを作って！」

今度はネハラさんとラスクさんの方を向く。

「ネハラさん、夏哉の言ったことは本当？」

「ほ、本当よ。いつも通り手を繋いで寝てたわよ。ねぇラスク？」

「あ、あぁ。嘘は言ってないぞ。だから睨みつけるなサトリ。結構怖いぞ」

さぁ、三人から事情聴取をしたところ、皆同じことを言っていた。

後一人聞けば十分だろう。

「アンちゃん？説明してもらおうか？」

「い、いや、その、だな……」

「さっさとしなさい」

「私の特殊能力（アビリティ）に自分の思い描いた人形を作り出すものがあり、皆が寝静まった後二人の手を解き人形に手を繋がせて私は夏哉と添い寝しました！」

「へぇ、なるほど。よぉく理解しました」

私は魔力を練る。

それに気付いたアンちゃん（ひょうてき）はこの場から立ち去ろう手とするが、遅い。

頑丈な土の輪でアンちゃんを捕らえる。

「クッ……！」

魔族は確か体を変形出来るし、相手がアンちゃんだから妥協しない。

更に土の輪でアンちゃんを何重にも拘束、家に被害を与えない程度の大きさの風で包み込む。

この風は予備だ。

たとえ土の拘束を剥がされたとしても、この風で時間稼ぎをしてまた拘束する。

アンちゃんは最初から抵抗する気かのか、それとも出来ないのか、身じろぎひとつしない。

土でほぼ全身覆われ、露わになってる部分といえば頭だけだ。

「さぁアンちゃん。今までも夏哉と同棲してたというのに、更に独占しようとした罰、受けてもらいましょうか？」

「さ、沙鳥悪かった！だから勘弁してくれ！」

「あ、そう言えば冷蔵庫にコーラが入ってたなぁ」

「ま、待て！コーラは！コーラだけはやめてくれ！！夏哉！助けてくれ！！コーラだけは無理なんだ！！」

「夏哉、今からここは男子禁制の場所なの。私がいいって言うまで二階の左手前の私の部屋にいて」

「分かりました沙鳥さん！」

ピシッと敬礼をしてくれた。

「物わかりがいいね。そんなところが好きよ」

「では失礼します！」

夏哉は階段を上っていく。

「あ、さぁちゃん？ちょぉっと私も上に行っててていいかな？別に夏

君に何もするつもりはないから」

「火津那!?お前も見捨てるのか!?」

「あ、じゃあ私も」

空お姉ちゃんから始まり、カナ、真樹と続き、予想外のネハラさんとラスクさんも二階に行こうとする。

さすがのアンちゃんもネハラさんたちがこの場を離れるとは思わなかったのだろう、うろたえる。

「ちょ、ラスク、ネハラ!愛するものと義姉がピンチだと言うのに逃げる気か!?」

「い、いえ、その、正直沙鳥をどうこう出来る自信がないので……。申し訳ありませんアンお嬢!」

「その、これはあれです!お姉様に対する愛の鞭です!これはお姉様のためを思って!」

「これの何処が私のためになるんだ!?ぅわっ、お前ら本当に上に行くな!!ま、待ってくれ!!私を見捨てるなッ!!」

「へへっ、アンちゃんの味方がいなくなったね。さぁ、お仕置き始めるよぉ」

「や、やめろォォォォォォォォォッ!」

―――――――――

俺たちは沙鳥の部屋に避難していた。

「……ネハラとラスクはここにいていいのか？」

俺はここに来るとは思っていなかった二人に訊ねる。

「いや、だってサトリ怖かったじゃないか」

ラスクの言葉には酷く賛同する。

するけどさ、

「怖いからってアンちゃんから離れて平気なの？あ、別に責めてる訳じゃないけど。あれは怖いし」

俺と同じことを考えていたらしい空ねぇが俺に続いて質問した。

「ホントはだめなんだけど、なんかサトリに逆らえる気に離れないのよ」

「それって、沙鳥様が依代だからですの？」

「分からないけど、そうかもしれ――」

『ひゃあああああああ！』

下からアンの叫び声が聞こえた。

「……アンさん大丈夫かな？」

「なんか沙鳥が暴力的になったな……」

俺が呟くと、空ねぇも続く。

「あのさ、私が言うのもなんだけど、女の子って怖いね」

その言葉には、皆同時に頷いたという。

――――――――――

「――♪――♪――♪」

鼻歌を歌いながら、私は自分の部屋に向かう。

今の気分はルンルンだった。

そんな調子で私は部屋に入った。

「み～んな～、終わったよ～！」

皆一斉に私の顔を見る。

一様に驚いた顔をしている。

「どしたの？」

「い、いえ、あの……上機嫌ですが、どうしましたか？」

「あぁこれ？いや～、アンちゃんに誕生日プレゼントもらっちゃってさ～」

「プレゼント？」

カナが可愛らしく聞いてくる。

「うん。もういろんな表情見れたしストレス発散出来たし、もう最高だったよっ」

もう口のニヤニヤが直らない。

もうホント可愛かったなぁ、アンちゃん。

「そ、そうか。よかったな」

「うんっ」

夏哉にも笑顔で返す。

「じゃあ下行こっか。特に何があるって訳じゃないけど」

私を先頭にして一階に降りる。

リビングに入れば、ソファーの上でくだったり倒れてるアンちゃんが一人お尻を押さえている。

「うわっ、アン大丈夫か？」

「む、むりぃ～……」

あれぇ？
なんでアンちゃんこんなにぐったりしてるんだろぉ？

「サトリ、ちょっとやりすぎなんじゃないのか？あんなぐったりしてるアンお嬢は久しぶりに見るぞ？」

心配そうな声を出すラスクさん。

「えぇ？私そんな酷いことしてないですよぉ？ただぁ、風の魔法使ってぇ、腕力強化した状態でぇお尻ペンペンをざっと百回やっただけですよぉ？」

なんとなくギャル風に言ってみた。

「……沙鳥ちゃん、それウザい」

グハッ！？

自分でもウザいってのは分かってたけど、なんかカナに言われてそれが倍増した。

「わ、分かってるよぅ」

「なつやぁ、お尻痛い……」

「……生憎俺には何も出来ないからな。お前も、一歩間違えて二度目を食らいたくないだろ？」

私たちの隣でそんなやり取りをしていた夏哉とアンちゃん。

丁度夏哉が話し出すところから見てて、話し終わった後、アンちゃんがコクリと可愛らしく頷く。

なんか弱々しいアンちゃんも新鮮かも。

そう思ったのは私だけじゃないらしく、

「はぁぁ……、お姉様のあの保護欲をかき立てられる姿、可愛い……」

「そうだな。もう抱きしめたいな」

やっぱり魔族と似たような好みなのだろうか。

「ねぇねぇ、そろそろ本番始めない？」

すると空ねぇがそう切り出した。

「本番って？」

意味が分からず訊ねる。

それに空お姉ちゃんではなく真樹が教えてくれた。

「今日は沙鳥様の誕生日ですのでまずは定番のプレゼントを渡しますわ」

「え、ほんとっ！？」

何これ、めっちゃ嬉しい。

皆が来てくれただけで幸せなのに、その上物までもらっちゃうなんてなんか申し訳ない気がする。

「じゃあ私からね。ちょっと待ってて」

カナはキッチンの方へ向かった。

私に見えないようにそこに置いたのか、はたまた食べ物を用意してくれたのか。

でも朝食食べたばかりだから前者が強いだろう。

カナが取りに行く間、夏哉が話しかけてきた。

「沙鳥、今更だけどさ、勝手に押し掛けてきたけど平気か？」

「それ、ホント今更だね。言うなら押し掛ける前に言ってよ」

「それじゃサプライズにならないだろ」

「そりゃそーだ。私は皆来てくれて嬉しいよ。少なくとも迷惑ではない」

「そっか。それなら安心だ」

「お待たせ～」

恐らく私たちの会話が終わるまで待っていてくれたのだろう。

カナが可愛らしく梱包された箱を持って小走りでやってきた。

「はい、沙鳥ちゃん誕生日おめでとう」

「ありがとうっ。早速あけていい？」

「いいよ」

まず巻いてあるリボンを解き、包装紙を破かないように丁寧に開ける。

包装紙を外し、箱を開けるとブレスレットが入っていた。

水色の石が何個も繋がり、アクセントとしてときどき赤色の石が混ざっている。

「わぁ、カナありがとっ！」

「どういたしまして」

早速左腕に巻いてみた。

こういうのは付けたことなかったから新鮮でいい。

「では次わたくしが」

カナからもらうときに既に取りに行ったのだろう、手にはちょっと大きめな紙袋を持っている。

あの大きさはなんだろう。

「最初香苗と同じアクセサリーに使用と思ってたのですが、被る気がしましたので変えました」

「あ、皆一緒に買ったんじゃないんだ」

「えぇ。沙鳥様以外皆が一緒だと沙鳥様に気付かれてしまうので」

あ、そうだね。

「わたくしは沙鳥様ならではということで幼女の写真集を――」

「おいこら待てや」

真樹は私の親衛隊？の癖に私をなんだと思ってる。

「冗談ですわ。普通にマンガを揃えてみました。依然読みたいと仰っていたので」

マンガという言葉に反応して素早く、且つ丁寧に真樹の手から紙袋を取る。

中を覗くとマンガが十九冊。

「わっ、幽〇白書だ！え、これマジもらっていいの！？」

「どうぞ。プレゼントですから」

「やった～！真樹愛してるぜ！」

感極まって真樹に抱きつく。

「ふむ……、これは百合系の漫画も付けた方がよかったのでしょうか？」

「それはどういう意味かな真樹ちゃん？」

私はそのままギュッと真樹を締め付ける。

「痛い！沙鳥様ギブ！ギブですわ！！」

背中にタップを受けたため仕方なく離した。

「あ～、痛かったですわ」

「自業自得だって」

「あぁ次、私なんだけど……」

空お姉ちゃんが言うが、ちょっと気まずげ。
プレゼントでも忘れたのかな？

「空お姉ちゃん、ないならないで私はいいよ？」

「そうじゃなくて、いや、確かにないはないんだけど、私まださぁちゃんのこと分からないから何が喜ぶか分からなくて。だから私は楽しい時間を提供しようかなと」

「楽しい時間？」

「皆でツイスターゲームをやろう」

第八話　《一章》プレゼント（後書き）

作者「更新遅くなりました！」

真樹「全く、変なことを描いてるからそんなことになるんですわ！」

アン「相当荒れてるな。やっぱ前回の絵のことか？」

真「そうですわ！なんでわたくしがあんな格好を……」

作「……アン、ちょい来て」

ア「なんだ？」

作「実はさ、更新遅れたのってこれがあってさ」

ア「ん――！？こ、これって……！」

作「これ、怒られるよな？」

ア「プッ、くっ……！そ、そ、それは、殺され――くくっ！殺されるぞ……！」

真「何が殺されるんですの」

作「い、いや、そのな」

ア「作者」

作「な、何？」

ア「すまん！」

ドスッ！！

作「グハッ！？」

真「い、いきなりどうしたんですの？」

ア「いやぁな、作者が面白いもの描いてな」

作「おい、アンテメェ……」

ア「これだ」

＞ｉ３２７３６―３２９１＜

真「なぁ！？なんですのこれ！？」

ア「可愛いぞまきりんっ」

真「あああああああッッッ！！！！！！！作者殺すッ！！」

作「ま、待って！！アン助けろ！！」

ア「触らぬ神に祟りなし」

作「テメェの絵も描いたんだよ！！一生お披露目なくなるぞ！！」

ア「真樹止まれ！」

真「離しなさいアンさん！どうせ貴方も辱めを受けるんですのよ！？」

ア「それは見てみないと分からないだろ？」

作「てな訳ではいっ！」

＞ｉ３３０５６―３２９１＜

ア「さ、作者……」

真「ほら見なさい！作者は私たちを辱めることしか脳がないん――」

ア「お前は神か！？」

真「……は？」

ア「私に猫耳としっぽを付けてくれるなんて！！さっきは殴ってすまなかった！！」

真「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

作「甘かったな。アンは極度の猫好きなんだよッ！！」

真「いや、そうだとしても！あの姿は恥ずかしくないんですの！？」

ア「いや、魔族って基本服なんて着ないし。だから今地球に来てるから服を着てるけど、脱いだところでなんとも思わないぞ」

真「な……」

作「いや～、アンは結構むずかったんだよな～。いやらしい意味は全くないんだけど、胸が全然描けなくてさ。最初適当に描いたら胸があの二回り以上デカくなっててさ」

ア「それは逆に気持ち悪くないか？別にそのくらいすぐになれるが」

作「自分で描いといてなんだけど四つん這いからの胸なんてまじまじ見たことねぇし」

ア「まぁそれ一歩間違えれば犯罪だから」

真「……なんか毒気をぬかれてしまいましたわ。作者、どうしてわたくしをツインテールにしたんですの？わたくし人生でそんなことしたことありませんわよ？」

作「単なる思いつきだな。そのままストレートじゃつまんないし、何かないかなと思ってたらツインテを思いついたってわけ」

ア「じゃあ私は？特殊な髪型だと思うんだが」

作「はっきり言おう。ウェーブの髪が全く描けなかったからだ！」

ア「つまり誤魔化しか」

作「そういうこと。で、ポニテは沙鳥、ツインテは真樹だからアンはどうしようかと思って、最初に思いついたのが三つ編み二つ作って、だったんだけど……なんか合わない気がしたわけだ」

真「確かに想像つきませんわね……」

作「でもほかに思いつかなかったから結局それにしちゃって、で、片方描いてたら、『あ、サイドにまとめちゃおう』ってひらめいたわけ」

ア「なるほどな。じゃあ実際どうだ？他人から見てこういう髪型はありか？」

真「わたくしはありだと思いますわよ。夏哉がどういうかは分かりませんが」

ア「そうか」

作「あ、そだそだ。二つほど言っておくことがあったんだ」

ア「どうした？」

作「前回プロローグに出てきた篠原神奈、あれは依然夏哉の隣人の名前募集の時にクロスライトさんから頂いた名前です。遅くなりましたが、クロスライトさんありがとうございました！」

真「ありがとうございますわ」

作「で、あと一つ、蛍夜さんのところの『義妹ハーレムを作った少年』で初コラボをやってもらいましたっ！」

ア「蛍夜さんありがとう。楽しかったよ」

真「どうして蛍夜さんの主要メンバーが四人なんですの？五人ならわたくしも行けたのに――」

作「蛍夜さんが困るような発言をした真樹には鉄拳！」

真「いたっ？」

作「じゃあもうない、よな。うん。アン最後に締めるんだ」

ア「クロスライトさん感想ありがとう。ほかのみんなもここまで読んでくれてありがとう。次回もよろしくな」

第八話　《二章》ツイスター

「皆でツイスターゲームをやろう」

空お姉ちゃんの一言で私の頭が回る。

ツイスターゲーム。

ルーレットのような指示板によって示された手や足を、シートの上に示された四色の丸印の上に置いて行き、出来るだけ倒れない様にするゲーム。

基本的に二人で行う。

すると必然的にその二人は接触してしまう。

つまり私と夏哉がツイスターゲームをすれば超接近。

ここまでの思考コンマ一秒。

「「やりますっ！！」」

即答したと思われたけどカナも同じタイミングで返した。

どうやら私と同じ考えに至ったようだ。

「ナツヤ、ツイスターゲームって何よ？」

魔族だからツイスターゲームを知らないネハラさんが夏哉に訊ねる。

ていうか――

「ネハラさん！」

「な、何サトリ？」

「私ずっと違和感を感じてたんだけど、言っていい？」

「いいけど……」

私は一拍あけて、

「今日からネハラちゃんと呼びますっ！」

私は声高らかに宣言するが、皆きょとんとしてる。

「沙、沙鳥様？いきなりどうしましたの？」

「いやだってさ、会ったときはネハラちゃん凄いツンツンして大人！って感じがしてたんだけど、最近同い年くらいに見えて来たんだよね。てかアンちゃんより見た目年下だからさん付けすると変な感じがするんだよね」

私の言葉にネハラちゃん以外皆うなずく。

特にアンちゃんとラスクさんは。

「確かにネハラは丸くなりましたよね」

「そうだな。少なくとも夏哉を起こすとき優しくなったな。やっぱり夏哉の側にいると人は変わるんだな」

「これ俺のせいなの？アンが本心表したからじゃないの？」

「私そんな変わったかしら？」

本人は自覚していないようで、首を傾げている。
そんな姿を見て、自覚ないのか、と呟くアンちゃんは更に続ける。

「私、夏哉に会ったばかりのネハラのものまねします。『お姉様にまとわりつくなゴミが』」

「「「「「「あぁ～」」」」」」

わざわざ声を変えたアンちゃんのものまねに、ネハラちゃん以外納得の声を上げる。

「次、最近のネハラ。『ねぇナツヤ、お姉様と何してるの？』」

「「「「「「おぉ～」」」」」」

またもや納得の声を上げる一同。

「というわけだ、ネハラ。お前は優しくなったんだ」

「お姉様がそう言うならそうなんでしょうが……」

ネハラちゃんが納得したところで、本題を思い出す。

「で、私ネハラちゃんって呼んでいい？」

「あぁ、そういえばそんな話だったわね。別に構わないわ」

「やった～！」

無駄に万歳して喜びを表現する。

「で、話を元に戻すけど、ツイスターゲームってなんなの？」

「じゃあ私が説明するよ」

空お姉ちゃんは手に一枚のシートとルーレットを持つ。

「ツイスターゲームは、基本二人で遊ぶゲームで――あ、夏君シートの端もって」

空お姉ちゃんはお願いすると、シートを広げる。

そこには縦六、横四の丸印があり、赤、青、黄、緑の四色がバラバラになって配置されている。

＞ｉ３３１８２―３２９１＜

「で、なぁちゃんときぃちゃんモデルになって」

「はぁい」

「わかりましたわ」

「なぁちゃんときぃちゃんはゲーム上敵同士で勝敗を決めるの。それを決めるために使うのがこれ」

魔族たちに見えるようにルーレットを前に出す。

ルーレットは十六に分かれてて、その四分の一ごとに先ほどの四色で分かれていて、色にはそれぞれ両手両足のイラストが描かれている。

「順番はまずなぁちゃんから。この真ん中の矢印を回して、止まった色、手足をそのシーツに置くの」

言いながら空お姉ちゃんはルーレットを回す。止まったのは赤の右手。

「赤の右手っと……」

カナは呟きながらシーツの上に手を置く。

「置き終わったら次はきぃちゃん、っていう風に繰り返すの。二人とも適当に手足全部乗せてくれない？」

言われたとおりに二人は手足を乗せた。
特に複雑な形にはなってない。

「じゃあなぁちゃん次左手を青に」

「えぇ！？無理だよ！」

カナの言うとおりそれはきつい。
近くにある青は右側で、しかも真樹が邪魔してる。

「はい頑張って」

「うぅぅ……」

うめき声をあげながらも健気に手を伸ばすが、やはり耐えられずに倒れてしまった。

「あうっ」

「と、こうなったら負けです」

「……これ楽しいの？」

ネハラちゃんが呟くが、全く本質を分かってない。

「考えが足りないよネハラちゃん」

「いや、考えも何もないでしょ」

「ネハラちゃん。ネハラちゃんの好きな人は？」

「お姉様」

「じゃあそのお姉様とあれをやったとします。狭いシート。ランダムに選ばれる足場。その際、ほぼ百パーセントの確率で相手と接触。お姉様がネハラちゃんに自ら近付いてきて、顔が視界いっぱいに映るんだよ。しかも合法的に」

「サトリ、私考えなしだったわ。早くやるわよ！！」

「よく言った！アンちゃん、ラスクさんもいいね！？」

「もちろんだ！」

「アタシもだ！カヅナ、早く始めろ！」

皆熱が上がってき――

「あ、俺やんないからな」

「「「「え？」」」」

私、カナ、アンちゃん、ラスクさんが声を上げた。

「私も遠慮させていただきますわ」

夏哉に続いて真樹も辞退しようとする。

「な、なんで！？」

私は慌てて聞く。

「女七人の中で男一人がやるわけにいかねぇだろ」

「夏哉が抜けると人が余るので」

「あぁ～、やっぱり二人抜けるって言ったか。しょうがないね」

「ちょ、姉様！？諦めるの！？」

「だってやる気がないならしょうがないよ。二人は仲良く七位」

「「七位？」」

空お姉ちゃんの意味ありげな発言に夏哉と真樹が声を合わせた。

「これね、トーナメント戦にしようとしてるの。二人は不戦敗。だから罰ゲームね」

「「はぁ！？」」

「内容は二人以外の皆で考える。逆らうのは厳禁。後、ちゃんと説明するけど、七番八番のクジを持った人が優勝すると、もれなく夏君ときぃちゃんを一日従える権利があります。二人は七位でもあり八位でもあるので」

「「……」」

二人は口を半開きにして唖然とした表情をしてる。

「さて、もう一度チャンスを与えるけど、やりたい人は手を挙げて」

五つの手は元気よく、二つの手は弱々しく手を挙げた。

二つの手と言うのは言うまでもない。

「で、トーナメントの話だけど、これ見て」

空お姉ちゃんはポケットから、何回か織られた紙を取り出す。

開くと、不思議な図形が手書きで書かれていた。

一見するとトーナメントの図なのだが、それが下にも反転した物があった。

その二つの間には、右から3、5、8、4、1、6、2、7と数字

が書かれている。

「なんだ、これ？」

アンちゃんもよく分からないようで質問を繰り出した。

「これね、勝ち抜きトーナメントと負け抜きトーナメントの表を合わせたものだよ。勝ったら上にあがって、負けたら下にさがっていく」

あぁなるほど、理解しました。

「この数字は、今からさっき言ったクジを引いてもらって、ここに当てはめる。番号は適当だから」

はいこれ、と袋を差し出してきた。

この中にクジが八枚入っているのだろう。

「仕組んでないか見ていい？」

「いいよ」

カナがそんな質問をしたので皆中身を見る。

ちゃんと八枚バラバラの数字が書かれていた。

「私最後に引くから皆引いて」

言われたとおりに引くと、結果こうなった。

1、アン

2、ネハラ
3、柊夏哉
4、空揺火津那
5、花街香苗
6、ラスク
7、早乙女真樹
8、天雲沙鳥

「いやった～！！」

カナが溢れんばかりの歓喜を声として放出する。

「火津那！これおかしいだろ！？なんで魔族がこっちに固まってるんだ！？」

「いや、これは運だって。というかまだ説明終わってない」

「まだありますの？」

「うん。皆引いたクジあるよね？その番号が、自分が優勝したとき、その順位の人に命令を出せるよ」

え、ということは……どういうこと？

私の表情を読み取ったようで、カナが教えてくれた。

「つまりね、沙鳥ちゃん八番でしょ？」

「うん」

「だから沙鳥ちゃんが優勝したとき、八位の人に命令が出せるの。逆に私が優勝したら、五番だから五位の人に命令が出せるの」

「あ、分かった分かった。とりあえず私はペケに命令が出せるってことでしょ？」

「そういうこと」

「なぁ、私はどうなるんだ？一番なんだが」

そういえばアンちゃんはそうだ。
自分が優勝しても自分に命令する、ってのは無理な話だ。

「その場合は、誰にでも一人命令できるよ」

「じゃあ夏哉がどんな順位でも夏哉に命令できるんだな！？」

「俺確定かよ！？」

「アンちゃんの言う通りだよ。じゃああらかた説明は終わり。早速開始でいい？あ、そだ。当然だけど魔法禁止で、魔族は体の変換なし。アンちゃん、二人を触れるようにしてあげて」

「了解」

早速アンちゃんは二人に手を伸ばして魔法をかけようとするが、私は待ったをかける。

「アンちゃん、それ私にやらせて」

「は？いやいいけど、少しつらいものがあるぞ？」

「多分へーき。じゃあネハラちゃん、ラスクさん、行くよ～」

イメージするのは全ての属性を両手から放出、それを二人に纏わせ、それを維持する。

これにかかった時間、コンマ五秒。

「よし、これで――」

「「グ――ッ！？」」

ホッと一息つこうと思っていたら、突然二人が自分の口元を腕でふさいだ。

「え！？ど、どうしたの！？」

私は慌てふためく。

失敗した感覚はない。

成功したはずだ。

それなのに二人は顔をゆがませている。

何が起きたのか分からないでいると、ラスクさんが呻くように言葉を紡ぐ。

「なん、だ、この匂い……！？」

「え？匂い？」

「なんか、急に匂い初めてきたわ……」

私はくんかくんかしてみるけど、特に匂わない。

「みんなどお？」

聞いてみるけど、皆私と同じような反応だ――カナ以外。

「真樹ちゃん、ちょっと」

カナは真樹の手を掴んでラスクさんの前に連れていく。

「ラスクさん、真樹ちゃんの匂い分かる？」

カナに言われて匂いを嗅ぐラスクさん。

「いや香苗、流石に匂いまでは分からないだろ」

「……アンお嬢」

「……まさか」

「その、まさかです」

なんか二人は理解してるようだけど、なんだろう。

「……沙鳥！」

「はいっ！？」

急に呼ばれてピンと背筋を伸ばす。

「お前は化け物か……！」

「え、そんな凄いことした？」

「少なくとも、元の力が戻ったとしても嗅覚を関知させてやることは出来ない。それから……今の気分はどうだ？」

「え、別に普通だけど」

「……これをやると、魔力維持させないといけないからかなり魔力を使うし、感覚を与えるわけだから気力も体力も必要とするんだが」

「そうなの？結構余裕だけど。それにこの程度なら一週間はいけると思うけど？」

「だから化け物と言ってるんだ……」

はぁ、とため息をつくアンちゃん。

そこまで凄いことしたかな？

「ネハラちゃん、ラスクさん、大丈夫？」

「え、えぇ、だいぶ慣れてきたわ」

「一応アタシも」

「じゃあ改めて開始したいんだけど、いい？」

空お姉ちゃんの言葉に皆頷く。

「まず一回戦目、夏君ＶＳなぁちゃんの戦い！」

特に打ち合わせをしたようなこともないのに、お互い反対側に立って向かい合う。

「先攻後攻決めるから二人ともジャンケンして」

結果、夏哉が先攻になった。

「じゃあ始めるよ～」

「あ、空ねぇ――」

「夏哉君」

夏哉の言葉を遮るようにカナが声を被せる。

「降参なんて言わないよね？」

「げっ……」

にっこり笑顔なカナなのに、恐怖を覚える。

てか夏哉何？げっ？って。

「カナ、どういうこと？」

「多分夏哉君はこう考えてるの。『香苗みたいなロリとツイスターゲームやってられるか』って」

「カナがロリって認めた！？」

「そこはどうでもいいのッ！！で！それを回避するには降参すること。そうすれば夏哉君が懸念してる、私に接触する必要がなくなるもんね」

「その通りです……」

「そんな事したら……酷いことしちゃうからね？」

カナの笑みに恐怖が増す。

「か、香苗！？お前俺のこと好きなんだろ！？そんなことする気か！？」

「えぇ？夏哉君知らなかったの？私、ヤンデレらしいよ？」

「……空お姉様、開始しましょう」

「夏君がやる気になったところで、回すよ～」

クルクル～っと回し始める。

止まった場所は青の左足。

「夏君青の左足ね」

「はいよ」

夏哉はシートにある六つの青のうち真ん中らへんに足を置く。

「次、なぁちゃん赤の右手」

「は〜い」

カナはわざとだろう、夏哉のすぐとなりにある赤の上に手を置いてしゃがむ。

「おはよう夏哉君」

「おはよ」

意味不明な挨拶を交わしている。

「次、夏君。緑右手」

「ほっ」

夏哉はカナとは反対側の緑に手を置いた。

「……夏哉君本当に私に触りたくないんだね」

「当たり前だ。そんな事したら理性飛ぶわ」

「え？理性？もしかして夏哉君私に興奮してるの？私の体でも興奮

しちゃうの？興奮しちゃうってことだよね！？」

「えぇいやかましい！空ねぇ次！」

「はぁい」

夏哉が若干デレを見せたところで、空お姉ちゃんはルーレットを回す。

「緑左足」

夏哉の左足の隣にある緑に左足を置く。

「夏哉君！どうして右手じゃなくて左足なの！？」

もしカナの言う通りだったら、カナの脇腹あたりに夏哉の顔が来ていただろう。

＞ｉ３３２８９―３２９１＜

「何、慌てることはないだろ。むしろホッとしてる」

「興奮するから？ねぇ、興奮しちゃうから？」

「空ねぇ次！」

「青右足」

一番近いところは、カナが一番最初に置いた右手の両隣。

ただし片方はカナをまたがなきゃいけないし、もう片方はお尻をカナに突き出す形になってしまう。

「ど～すっかな～」

夏哉もそれで悩んでいるようだ。

「どうする？私にお尻向ける？それとも跨がる？あ、下からくぐって脹ら脛で私のお腹堪能する？」

「へぇ、堪能するほど太ってんだ」

「……夏哉君？怒るよ？」

「お前が言ったんじゃねぇか。それに怒ってもお前にゃなんも出来ねえだろ？」

「……」

カナは無言で夏哉の左太股を見つめている。

「お、お～い香苗さん？何を見て――」

ガブリ。

カナは怒りのあまりふくらはぎをガチで噛みついた。

「いってぇぇぇぇッ！！」

さすがの夏哉も痛みに耐えられなかったようで、左膝を床に付ける。

「はい、夏君アウト～。勝者なぁちゃん！」

「え？え？」

どうやら我に返ったようで、空お姉ちゃんの言葉に戸惑いを覚えている。

「ありがとう香苗。お前のおかげで自然に終わらせることが出来たよ。それから、お前が太っていようが痩せていようが、俺は対応変える気はないぞ」

そんなカナに、全く痛がる素振りを見せない、むしろ微笑んで話し掛ける夏哉がいた。

え、あれ？
もしかして……

「な、夏哉君？」

「ん？」

「あ、足は？」

「あの程度全然痛くねぇよ。血も出てねぇし」

やはり演技だったようだ。
カナはまんまと夏哉の手のひらで転がされていたようだ。
カナを操るなんて……夏哉、恐ろしい子……！

「う、うわあああああんっ！！夏哉君の悪魔ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「ふっ、悪魔だろうがなんだろうが勝負は勝負だ。次は空ねぇと沙鳥か？」

泣きじゃくるカナなんてなんのその。
本当に悪魔のようにカナを無視して、次の対戦について話をする。

「そうだね。じゃあスピナーよろしく」

「スピナー？」

「このルーレットのこと」

「あぁ了解了解」

夏哉は空お姉ちゃんからルーレット改めスピナーを受け取った。
スピナーなんて名称、私も知らなかった。

「空お姉ちゃん、トーナメント表、結果書いてよろしいですか？」

「そうだね。きぃちゃんペン持ってる？」

「持ってますわ」

いつも常備してるのか、ポッケから三色ボールペンを取り出した。

「ね、ねぇマキ」

すると、ちょっと遠慮がちに声をかける。

「どうしましたネハラさん？」

「それ、私がやってあげようか？」

ん？

どうしてそんな事をやろうとする？

別に真樹はアンちゃんじゃないからそのくらいの手間、わざわざ自分がやらなくても良さそうなのに。

しかし真樹は納得した顔。

「はい。よろしくお願いしますわ」

真樹はボールペンを渡す。

それをネハラちゃんは手に取ると、なんと凄いきらきらした笑顔を浮かべた。

「あ、使い方説明しましょうか？」

「い、いい！そのくらい知ってるっ！」

「でしたらこう書いてくださいまし」

真樹は指で線をなぞる。

早速赤ボールペンを出すと、なんか変な持ち方で真樹の言われたとおりに線を書く。

「わあっ！」

……今の、何？

「ラ、ラスク……。あいつは誰だ？」

「えぇ……ネハラ以外の何かです」

付き合いの長い二人もあの光景は初めて見るようだ。

「ま、真樹。あれ、何？」

隣にきた真樹を小突いて、小声で聞いてみる。

「あれですわ。ネハラさん、この世界のものに触れられませんわ。ですが沙鳥様のおかげで触れるだけでなく嗅覚まで干渉出来るようになったんですの。ネハラさんたちにとってこの世界のものは未知なものが多いですわ。興味もあるでしょう」

「あぁなるほど」

言われた以外のことまで書いているネハラちゃんは、とても微笑ましかった。

「沙鳥。あれ眺めてんのもいいけど、そろそろどうよ」

「あ、うん。そうだね」

夏哉に言われ、私は空お姉ちゃんと対面して立つ。

「じゃ、第二回戦開始」

第八話　《二章》ツイスター（後書き）

作者「あれ？」

沙鳥「どうしたの？」

作「なんでツイスターゲームこんなに長引いてるの？」

沙「え？これ予定外？」

作「うん。ホントは――っていうか番外編の時に考えてたのは、この辺りでもう夏哉のプレゼントをあげてる予定だったんだけど……なんかグダグダになってるな。まぁ話数稼げてるから嬉しいっちゃ嬉しいんだけどね」

沙「カナと夏哉のエロエロシーンを期待したあなた！夢見過ぎなんだよッ！！」

香苗「はうっ！」

作「自分で打っててなんだけどさ、香苗アホだな」

沙「ほら、言うでしょ。恋する乙女は盲目って」

香「分かってたよ！私がバカだってことは試合終わってすぐ気付いたよ！！」

作「あのさ、ぶっちゃけていい？」

香「何？」

作「実際夏哉と香苗のエロシーンはちょっと考えてみた」

香「え？」

作「でも字数の都合上、流石にこれ以上グダグダにさせないためカット」

香「作者あああああ！だったらそっちより沙鳥ちゃんとネハラさんのやり取りをカットすればよかったじゃん！」

作「いや、そっちの方が重要だろ」

沙「ねぇ」

香「？ねぇ？じゃない！！」

作「じゃあそろそろ終わりましょう」

沙「ソラトさん、ｖｉｃｔｏｒさん、感想ありがとうございます」

作「最近学校の課題が多くて更新遅くなってます。それに次回挿し絵でも描こうかなと思ってるので、更新更に遅れる気がします」

沙「というわけで、出来れば待っててください。それじゃあまた！」

作「因みにツイスターゲームは第八話にほとんど関係していません」

第八話　《三章》巨乳の弊害

第二回戦、私と空お姉ちゃんとの試合が始まろうとしたとき、

「さぁちゃん」

空お姉ちゃんが私の名前を呼ぶ。

「もしかして降参しようとしてる？」

「えっ、なんで分かったのっ？」

空お姉ちゃんが見事私の考えを当てたために驚く。

心を読まれたのかと思った。

「どうせ次夏君とやりたいからって考えてるんでしょ？」

「大せーかい。流石空お姉ちゃん」

降参することに後ろめたさはなく、むしろ開き直っている私がいる。

「はぁ。だからさぁちゃんはアホの子って言われるんだよ」

「いや、そんな事一度も言われてないし、さりげなく酷いこと言ってるよね？」

私のツッコミなんて無かったかのように先を進める。

「もしここで降参したら、夏君と一回きりしかできないんだよ？こ

こで次私に勝って、更にもう一人に勝てば、夏君を一日ゲット出来る可能性があるんだよ？さっきのなぁちゃんの見たでしょ？夏君やる気じゃない、っていうかやめる気満々でしょ？ならペケになる確率も高い。さぁちゃんの優勝の件だって、決勝に進めるの四分の三がルールも殆ど分からない魔族たち。有利には違いないから、取りやすい。先を考えればこっちの方が得だよ。私に負けたとしても結局夏君とツイスター出来て損はない」

私への長い説得がようやく終わった。

私に有利なことを教えてくれたのは分かったけど、こうもすらすらと喋られると、なんだか前から用意されてたように思われる。

「姉様、もしかしてこの組み合わせ本当に仕組んだの？」

カナも疑い始めたようで、そんな質問をぶつけた。

「だから違うって。本当にこれはただのくじ引きの結果。で、なぁちゃんに話の腰を折られちゃったけど」

「まだ続くの？」

次も長い説得が来ると思うと、イラッとは来ないけど我慢できない。長話を聞くくらいならやっても全然構わないし。

ただ夏哉と確実にやりたかったって理由だから。

「後ちょっと。で、今までの話は建前で、本音はさぁちゃんと遊んでもっと仲良くなりたいから、じゃダメ？」

空お姉ちゃんは大人っぽい笑みを浮かべながら子供っぽい台詞を言

った。

このギャップは卑怯だと思う。

どう言えばこれを拒絶出来るというのか。

「そうだね。じゃあ空お姉ちゃんをひいひい言わせてあげるから」

「それはこっちの台詞、って返しておこうかな」

私も戦意が上がってきたので、早速先攻後攻を決めるジャンケンをする。

結果空お姉ちゃんの先攻。

「行くぞー」

夏哉の声とともに、スピナーが回される。

「空ねぇ、左足の赤」

「はぁい」

空お姉ちゃんは端にある赤に足を置いた。

「次、沙鳥。緑の右手」

「ほぉい」

私は空お姉ちゃんに挑発する意味で近くに右手を置く。

>i133943—3291<

「空ねぇ、赤の左足」

「……夏君、それさっき聞いた」

「しょうがねぇだろ、そうなったんだから」

「この場合どうするの？」

私は聞いてみる。

まさか空お姉ちゃんが連続で同じのを出すとは思わなかった。

「ん～、やっぱりその場待機ってのはつまんないから、移動だろ。片足ジャンプで」

「もしかして最初からピンチ？」

そうは言いながらも、片足立ちをする。

でもその直線上には私の体が残っている。

踏んでくれない事を祈りながら、空お姉ちゃんが動き出すのを待つ。

「空ねぇ、滑ってもアンがいるから」

「私か」

「お前だろ」

「というわけだから任せろ」

「多分だいじょー……ぶっ！」

いよいよ空お姉ちゃんは飛んだ。

ちゃんと私の上を越え、目的の赤の上に着地した。

「空お姉ちゃん流石」

「ありがと」

「次行くぞ」

「はぁい」

「左足黄色」

右手のすぐ隣にあるところに足を置く。

「空ねぇ、緑の右足」

「はぁい」

空お姉ちゃんは、やはり近くにある端っこの緑に足を置く。

単なる直立なので楽そうだ。

「沙鳥黄色左手」

「ほい」

無茶な体勢は、夏哉的には嬉しいものが見れるのだろうが、やっぱり勝負だから勝ちにいきたいので近場に置く。

＞ｉ３３９４０―３２９１＜

「空ねぇ左手青」

「ん～」

空お姉ちゃんから見て左が足の左側に手を置く。

「沙鳥、左足赤」

「赤っと」

今度は右手の近くに置く。

「空ねぇ左足青」

「ん～……じゃ」

空お姉ちゃんは足を後ろに下げる。

「ん～、意外と絡み合わないね～」

思わずそう呟く。

「ま、殆ど運だし、現実じゃマンガみたいに上手く行かないね」

空お姉ちゃんも同じ風に思っていたようだ。

「別に絡まんでいい」

そんな私たちに夏哉が割り込む。

「なんで？夏哉だって女の子がいやらしく絡み合う姿みたいでしょ？」

「見たくない」

「え、じゃあ夏君男同士――」

「俺二人が絡み合うのみたいな～！だからそんな事言うな空ねぇ！」

流石は夏哉、心変わりが早い。

「はい次！沙鳥左足青！」

またまたすぐ隣の青に足を置く。

＞ｉ３３９４１―３２９１＜

うん、もうちょっと体勢崩してでも空お姉ちゃんに絡めばよかった。

「次、空ねぇ左足緑」

「夏君夏君」

「何？」

「さぁちゃん贔屓してない？」

確かに、空お姉ちゃんの側に二つほどあるけど、それらに置くと足を大きく開くことになる。

因みに空お姉ちゃんはゆったりしたスカート。

見えるまでは行かなくてもちょっとは上がってしまう。

「俺はただ回してるだけだって」

「ま、このメンバーならいいか」

そう呟くと、躊躇い無く角っこの方の緑に左足を置いた。

「少しは恥じらいをもってください」

「だからこのメンバーだからいいんだって」

「……もう何言っても聞いてくれない気がしたからいいや。沙鳥、左手赤」

「よし、じゃあ今度は攻めに行くよ」

そう言って私は空お姉ちゃんの下にある赤に手を伸ばす。

「え、さぁちゃんちょっと待って――」

何故か制止を呼びかける空お姉ちゃん。

意味が分からなかったのでそのまま置いてみた。

むにゅっ！

私の胸になんか感触があった。

「ん――――ッ！！ん――ッ！！」

それから空お姉ちゃんからの呻き声。

下を見れば、空お姉ちゃんが私の胸に埋もれていた。

＞ｉ３３８１５―３２９１＜

呻き声が聞こえる度にもぞもぞと動いて胸に刺激を与えてくる。

そのせいなのか、右胸がかゆくなって私ももぞもぞと動いてしまう。

「んんっ」

思わず声が出てしまった。

しかし空お姉ちゃんは私のせいで更に動いてしまう、という負の連鎖が続いた。

しかし、その連鎖はすぐ止まった。

「ぷはっ！！」

息が続かなかった様で、全身を動かして私の胸から抜け出した。

「火津那さんアウト。勝者沙鳥様。ネハラさん、早速書いてもらいませんか？」

「分かったわ」

丸印から出てしまったため空お姉ちゃんは負け、私が準決勝に進むことになった――ってあれ？

「なんで真樹が報告？夏哉は？」

勝負が着いたので普通に立ち上がって真樹に訪ねる。

真樹は無言で指を指してくれた。

そこは廊下で、夏哉とカナがこちらに背を向けていた。

「何事？」

「『香苗、見ちゃダメだ』『そうだね、あれは見ちゃいけないものだ』などの会話を繰り広げてましたわ」

あの二人がそんな反応を示すということは……

「胸かな？」

「でしょうね」

私のせいじゃ無い気がするけど、あそこだけ暗い雰囲気になってる

からなんとかしとかないと。

私は二人に近づく。

すると会話が聞こえてきた。

「やっぱ海の方がいいか？無理に金かけるより」

「い、いいけどで……でも、最近ほんとにその、体重が……」

「だから言ったろ？太ってようが痩せてようが関係ないって。大丈夫だって、男って案外そんなくらい気にしないもんだぞ？」

「でも～」

「つーかあれだ。その……水着姿みたい」

「夏哉君……」

「何ラブい雰囲気出してんじゃー！！」

私は両腕を二人の首に回し、間に入る。

「せっかく勝ったのにお祝い言葉なし！？」

ちょっとほんとに酷いと想いながら、腕を更に絞める。

すると二人はキッとこちらを睨んで一言。

「「胸を押しつけるなっ！」」

「うわ息ピッタリ。てか夏哉は好きなくせにこういうの」

「香苗、沙鳥がイヂメル」

「じゃあイヂメ返そう。これは立派な正当防衛だから」

「よし決定」

「え、まっ――キャアッ！」

抵抗する暇もなく夏哉は私の紙と呼べる拘束から抜け出して私に馬乗りになる。
しかも両手も捕まれてる。

「夏哉君？この格好は私的にはちょっと期待大なんだけど、平気？」

好きな人に馬のりされるのは、拘束がなければちょっと嬉しい。

「安心しろ。俺は動かない」

その言葉の後、カナが私の脇に座る。
にっこり笑顔だ。

うん、嫌な予感しかしない。

「沙鳥ちゃん、じゃあね」

カナはそっと私に手を伸ばし――

こちょこちょをし始めた。

「きゃはははははははっ！！だ、だみぇっ！にゃめてっ！」

「あははははっ、沙鳥ちゃんかわいいっ」

「そうだな。俺もちょっくら参戦するわ」

「ひゃあああああああああああっ！」

その後五分間こちょこちょの餌食になった。

「みょうにゃめ～……」

「さぁて続きを再会しましょう！」

「続いて三回戦目はアンさんとラスクさん。二人どうぞっ」

ぐったりしている私に対し、ご機嫌で司会なんかを始めた夏哉とカナ。

「よろしくなラスク」

「こちらこそ」

「じゃあまずジャンケンして」

指示を出すのは、スピナーを回す役の空お姉ちゃん。

先行はアンちゃんになった。

「じゃあアンちゃんは左手青」

「左手に、青っと」

呟きながら、アンちゃんは真ん中らへんに手を置く。

「続いてラスクさんは青の右手」

「青の上に右手……」

空お姉ちゃんの言葉を噛みしめながら、アンちゃんとちょうど対となる場所に手を置く。

＞i３３９４９―３２９１＜

「アンちゃん、黄色左足」

「なぁ、これはラスクに近づいた方がいいのか？」

空お姉ちゃんに聞く。

「一概にそうとは言えないけどね。でもアンちゃんがラスクさんに近づけば近づくほど夏君は目の保養になって喜ぶよ」

「なんで俺を引き合いに出す？」

「アンちゃんの知りたそうな事柄だから」

「教えてくれてありがとう。じゃあ」

アンちゃんはラスクさんに背を向けると、ラスクさんの右を通ってその後ろにある黄色に足を延ばした。
ちょうどお尻を向けている形だ。

アンちゃん好きのラスクさんは嬉しいんだろうなと見てみれば、まんざらではない顔をしている。

「じゃあ次ラスクさんは、左手赤」

ラスクさんは躊躇している。

ラスクさんの目の前には緑があった。
しかしそれとラスクさんの間にはアンちゃんの足――正確には太もも――が邪魔をする。

普段のラスクさんなら安全に左にある赤に行くだろう。

しかしここで空お姉ちゃんの、くっつけば夏哉が喜ぶ発言が効いてくる。

「……アンお嬢、すみません」

ラスクさんはアンちゃんの足の上を通して手を緑に乗せた。

しかしその手、というか腕の位地は微妙にまずい。

当たってないとは言え、その腕はアンちゃんの股の近くに来ている。

まぁ夏哉は、ってか男は喜びそうな体勢だ。

そして時折、ラスクさんの腕が当たるのか、?あっ?という声が漏れる。

「アンちゃん平気?」

「あぁ。触られる場所じゃないから変な感じなだけだ」

ふぅ、どうやらまだ夏哉に触られてないようだ。

変なところでほっとした私。

気になって夏哉を見れば、顔を逸らしていて、カナは私同様ホッとしている様子だ。

「じゃあ行くよ。右手青」

「青か~。あれはちと厳しいか」

考えた結果、アンちゃんは自身の左足から一つ離れた青に乗せることにしたらしい。

しかしそんなことをしたら――

「んあっ!」

「アンお嬢!?」

やっぱりラスクさんの腕が完全に当たっている。

アンちゃんはビクッと体を震わせた。

「き、気にするな。続けろ」

「じゃあ行くよ。左足緑」

ラスクさんはどちらかと言えば仰向けといえる体勢で、アンちゃんの体の下にある緑に足を乗せた。

＞ｉ３３９５０―３２９１＜

「よし、じゃあアンちゃん左足赤」

「ちょ、ちょっと待て、右足はどこに置いてもいいのか？」

「いいよ」

「よかった～」

流石のアンちゃんでも腕だけの力じゃ体を支えられないか。

今のアンちゃんの左足はラスクさんの右腕と脇を通っているので慎重に抜く。

抜き終わった後は素早くアンちゃんの左手の側にある赤に乗せた。

「はい、ラスクさん右足赤」

「……これはまずいかもな」

ラスクさんが呟くのもうなずける。
一番近くにある二つはアンちゃんに潰され、次に近いのは前後なのだが、後ろに至っては左足をすでに前に出してあるため届かない。なので必然的に前になるのだが、そうなると完全に仰向けになってしまう。

なんだか、これぞツイスターゲームって感じがする。

ラスクさんは、アンちゃんに触れないようにゆっくり滑らせるように足を伸ばした。
その足は乗せられたのだが、そのせいで左足は曲げないといけなくなった。

それで二次災害が起こる。

なんとアンちゃんの胸を押し上げたのだ。

ぐいぐいと形を変えるその胸。

そんな光景を見て二人はどんな反応をするだろうか。

「俺は見てない何も見てない俺は見てない何も見てない俺は見てない何も……」
「私は何も見てない私は何も見てない私は何も見てない私は何も……」

背中を向けて分かりやすい現実逃避をしていた。

好きな男の子と好きな親友には悪いけど無視しよう。

それが賢明な判断だと思う。

「うわっ、アンちゃん胸いやらしっ」

空お姉ちゃんがまじまじと見ながら言葉を発した。

「これは私のせいなのか？」

「いえ、申し訳ありません。あたしのせいでしょう」

「あぁ、こんなことで謝らないで。むしろ足らないわ。今ラスクさんがした事は普通の事だから」

「いや、十分普通じゃないと思うけど」

特段ツイスターゲームを知っているって訳じゃないけど、胸変形だけでも十分だと思う。

「これは人それぞれか。まぁいいや。アンちゃん次――うわ～、これ、は厳しいかな」

「どうした？」

「右手青」

「……それはまだあるのか？」

アンちゃんのその問いにネハラさんが答えた。

「今ある右手の縦横の端に一つずつ、左足の左側に一つです」

「……一つは確認できたが、あれは無理だな」

そう言って見つめる先は一列六個ある方の端。

「で？もう一つが左足の隣？それも無理だな」

そうなると必然的に残り一つしかない。

「はぁ。ラスク、当たったら済まないな」

「気にせず」

ラスクさんの言葉を聞いて、アンちゃんは思いっきり右腕を曲げ、床を押した。

その反動で右半身は浮き、今度は左手を、床から離れないようにして押す。

左手からの力も伝わり、アンちゃんは離れた青い丸印に右手を置くことに成功した。

＞ｉ３３９５２―３２９１＜

だがしかし。

アンちゃんは両腕を広げている状態で体勢は低い。

そして下にはラスクさんがいる。

むにゅりむにゅり

巨乳と巨乳、計四つのお山が、二人が息をする度に形を変える。

それにお互いの顔も、巨乳だったからいいものの、そうじゃなかったら絶対くっついていたってほど近い。

二人は体力的にきついのか、それとも胸のせいなのか、顔を上気させている。

恐らく後者だろう。

そのせいでお互い息遣いが荒くなり、それが首筋などに当たってピクリと体を震わせる。

いつまで膠着状態が続くのだろうと思っていたら、どさりという倒れた音が聞こえた。

ラスクさんが顔を真っ赤にさせながら倒れたのだ。

「ラスクさんアウト。アンちゃんの勝利、なんだけどラスクさん平気？」

私は早速ラスクさんの顔を覗いてみた。

うん、とても幸せそうな顔だ。

「たぶん大丈夫だと思うよ」

私はお姫様だっこをしてソファーに寝かせてあげた。

「アンちゃんは平気？」
「まぁな」
アンちゃんは空お姉ちゃんの呼びかけにちゃんと答えられてる。
平気のようだ。
「ラスクさん倒れちゃったけど、今回結構凄かったよね真樹」
「そうですわね。慣れてる人間が微妙で初めてな魔族が熱戦というのもどうかと思いますが……」
「い、言い返す言葉がありません……」
「い、いえ！責めるつもりは全くありませんの！！申し訳ありませんっ！」
「あぁ、気にしてないから。じゃあ次、真樹たち頑張って」
私の言葉で二人は定位置に着く。
一回戦最後の試合が始まる。
因みに。
「今年の夏、金貯めて沖縄行きたくない？」

「香苗ナイスアイディアだな。じゃあ二人で行こうか」

「そうだね」

「いつまで現実逃避してるの二人とも！！」

第八話　《三章》巨乳の弊害（後書き）

作者「遅くなりました！！」

夏哉「十日ぶりだな」

作「学校が大変だったんで……すみません！」

真樹「それで、結局わたくしたちは殆ど活躍していないではないですか」

作「つか、まだ続いてるし。ツイスターゲーム。つか今回挿し絵多すぎだな」

夏「殆どツイスターゲームのシートだけどな」

真「ですが、今回まともなイラストの挿し絵が入ったではないですか」

作「ま、そうだな。でさ、話は変わるんだけど、更新遅れた理由をちょいと話させてください。自業自得なんですが」

夏「何？」

作「一昨日、文化祭がありました。準備のため朝早く学校に行きました。早く行きすぎて誰もいませんでした。暇だったんで外でチャリの鍵でも上に投げて遊んでみました。それがオブジェの上に乗ってしまいました」

夏＆ａｍｐ；真「「バカ」」

作「分かってます。で、届かなかったので諦めて電車で寮に帰りました。寮にスペアキーがあるのでなんとかなると思ってました。しかし一昨日の夜探してもいっこうに見つかりません。昨日、朝から大掃除張りに探しました。見つかりません。お昼、洗濯物を干してたらチャリン。チャリの鍵が落ちました。どうやら俺は小さいものをポッケに入れっぱにして洗濯物に出してしまう傾向があるそうです。どうすればいいでしょう」

夏＆ａｍｐ；真「「どうしようもない」」

作「ですよね～。ＰＶ５００，０００、お気に入り３００人超えました」

真「さりげなく言いますわね」

夏「ホントありがとうございます。どうやら二ヶ月にＰＶ１００，０００が続いているようで。嬉しい限りです」

真「感想ももう少しで２００行きそうですし」

作「逆に謝ります。こんな不定期更新で読んでくださるなんて。おそらく次回、またはその次でツイスターゲームはおわり、ちょっとだけ話が進みます」

夏「思うんだけどさ、これって番外編の延長じゃない？」

真「あ、思いましたわ」

作「一応誰にも分からないだろう伏線は入れたんだがな。気付いた人はここまでご連絡を」

真「誰も分からないに一票」

夏「誰も答えないに一票」

作「夏哉に同じく」

真「作者が言ってしまえば終わりですわね」

夏「じゃ、そろそろしめるか。ソラトさん、Ｖｉｃｔｏｒさん、名無しさん、クロスライトさん、感想ありがとうございました！これからもよろしくお願いします」

真「他の皆様も、ここまで読んでくださって、ありがとうございました」

第八話　《四章》ビリ決定

「さて、ネハラさんどうします？」

試合の始まる前、もはや恒例となってきた会話タイムが始まった。

「どうって何がよ？」

「ネハラさんはアンさんとやりたいんですのよね？」

「当然」

ネハラちゃんは即答で答える。
そりゃアンちゃんが好きなんだから当然か。

「わたくしははっきり言いましょう。あまり変な格好はしたくありませんわ」

「うわ出た、私だけ他の人とは違う発言」

からかってみたかったので発言してみた。

すると真樹はこちらを向いて、悲しそうな目でこちらを見てきた。

「……沙鳥様、実は私のこと嫌いですの？」

「そんなことないよ。真樹好きだよ」

「ならよろしいのですが。ちなみに死んでもやりたくないという程

ではありません。単に選べるならやりたくないを選ぶだけでして」

「あ、別に言い訳しなくても。責めてるわけじゃないんだから」

私の言葉で落ち込まれたら、もう嫌だ。

「分かりましたわ。それで、わたくしなりにもいろいろ考えていまして、沙鳥様を思えばここで負けておきたいんですの」

「私のため？」

「あ、沙鳥様勘違いはしてほしくはないのですが、別に今日沙鳥様が誕生日だから自分の感情を押し切って沙鳥様を立てようとしてるのではなく、仮にわたくしが優勝しても、別に一日自由にしたところで誰に対しても何かしてもらいたいというのがありませんので、それなら好きな沙鳥様にその権利を使ってもらおうかと思っただけですわ」

「話長いわね」

我慢が出来なかったのか、端的な感想を述べるネハラちゃん。

「要は私が勝ちたくて、マキは負けたいのよね？」

「うっ……要領得なくてすみませんわ。ネハラさんがアンさんの前に練習台としてわたくしを利用したいならそれで構いませんし、初めての相手をアンさんにしても構いませんわ」

なんか最後の発言変な意味に聞こえる私は末期だろうか。

「いいわよ、降参しても。練習で私が負けたら元も子もないし」

「ありがとうございますわ。と言うわけで火津那さん、わたくしの負けですわ」

「え～。私さっきさぁちゃんにいいこと言ったつもりだったんだけどな～」

いいことって言うのは、一緒に遊んで仲良くしよう、ってやつだろう。

「生憎とわたくしは火津那さんの言葉より沙鳥様の方が大事ですので」

そう言って真樹とネハラちゃんはツイスターゲーム用のシーツから離れた。

「ねぇ空お姉ちゃん。次はどうするの？」

「ん～、じゃあ勝った人負けた人で交互にやろう。次はさぁちゃんとなぁちゃんで」

「はぁい。じゃあカナやろ～」

私は次の対戦相手の名前を呼んだ。

ついでに首もそちらに向けると、何故か夏哉にしがみついていた。

「な、夏哉君、私もう死んじゃうかも。沙鳥ちゃんに殺されちゃうかも！」

「じゃあ逃げてもいいんだぞ？それを決めるのはお前だ」

何この茶番。

「でも、優勝して夏哉君と一緒にいられる可能性に縋りたいの」

「香苗……」

「夏哉君……」

「あーほらほら、私の胸に触りたくないからって現実逃避しないの。それから妬ましいから二人だけの世界には入らない」

言いながら私はカナの襟をつかんで引っ張る。

「な、夏哉君っ！」

「香苗、すまん！俺には何も出来ない……！！」

「やめてくれる！なんか私悪者みたいな空気やめてくれる！？」

私悪いことなんにもしてないのに。

「だったらこの胸を小さくしてよ！」

泣きながら揉みながら私に訴えてくる。

私は子供をあやすように優しく抱き上げ、正面を向かせる。

「だったらあそこの四人にも言いなさい」

私とカナの視界にはアンちゃん、真樹、空お姉ちゃん、ラスクさんがいる。

ラスクさんは未だ気絶中だけど。

「え、沙鳥様、わたくしもですか？」

「だって真樹８５？はあるでしょ？」

「え、ま、まぁ……」

「えぇッ！？真樹ちゃん確か８２？じゃなかったの！？」

「ま、まぁ、四月の頃は」

「真樹ちゃんなんて消えてしまえっ！！」

「も、申し訳ありませんわ」

真樹は悪くないのに、カナの気迫に圧されて謝ってしまった。

可愛そうに。

「ほらカナ。八つ当たりしちゃだめだって」

「なんか沙鳥ちゃん大人ぶってる気がする」

「カナがわがまま、てか現実逃避してるからでしょ。カナがボケ始めたら私がちゃんとしないとダメでしょ」

「真樹ちゃんがいるから平気だよ」

「ボケてる自覚はあるのね」

そして定位置に着いた私たちは早速ジャンケンをした。

先攻はカナ。

「じゃ、なぁちゃん行くよ。左足緑」

「ねぇ沙鳥ちゃん」

足を置きながら、カナが話しかけてくる。

「ん？」

「さぁちゃん右足青」

「はぁい」

カナの隣に置く。

＞ｉ３４１４４―３２９１＜

「私優勝して夏哉君を独り占めしたいから負けて？」

「私の誕生日なのに堂々と言うね」

「なぁちゃん緑右手」

四つん這いになって端にある一番近い　緑に置いた。

「だって沙鳥ちゃんがイジメるんだもん」

「さぁちゃん右手青」

青。

ちょっと悩む。

私の手の届く範囲には四つある。
そして安牌は三つ。
一つはカナの上か下を行かなければならない。

ここで、今日の試合がちらっと思い出される。

私たちは基本安全に安全にという考えで行った。
しかしそうなると見せ場が特になかった。

そしてアンちゃんたちのように自ら厳しいところに向かえば、いい感じに絡んでエロくなる。

ならやることは一つ。

「ほいさっと」

私はカナの上を通って赤に手を置く。

私は異様に胸がデカい。
しかもまだ成長中。
そんな肉の塊をぶら下げたまま、人一人の上を通ろうとしたら当然

――

むにゅっ。

その人の背中に乗る。

「ふぇぇぇんっ！沙鳥ちゃん重いよぉ！！」

「ごめんね～」

カナもがんばって体を下にやろうとするが、それでも少しだけ乗ってしまう。

「こうした方が早く決着つくし、夏哉にもいいでしょ？」

「夏哉君見てないけどね」

「アンちゃん、よろしく」

「分かった」

アンちゃんに頼んで、そっぽ向いている夏哉を強制的に見させた。

「夏哉～、もうちょい頑張るから」

「頼むからやめてくれ……」

夏哉はぐったりしてるが気にしない方向で。

「空お姉ちゃん」

「はぁい。なぁちゃん左手黄色」

「黄色？」

カナは嫌そうな声を出す。
そりゃ左手の届く範囲が、右腕とクロスさせなきゃいけない場所だから嫌だろう。

カナは仕方ない様子でクロスさせて隣の黄色に置く。

「次さぁちゃん左手青」

「ちょ、青率多っ！！」

カナとの試合全部青だ。
しかも近くに青が見あたらない。

「真樹っ、青どこ！？」

「一番近いのは香苗の左足の後ろですわ」

私からは丁度カナの小尻で死角となって見えない。
でも届かない距離じゃなさそうなので、足を広げて重心を確保、手探りで探す。

何か暖かくて柔らかい物にふれた。

「ひゃっ！？沙鳥ちゃんそこ太股！」

「あ、マジ？じゃあこれたどれば……」

そう呟き、つぅっとカナの足をたどる。

「ちょ、沙鳥ちゃん！？やめ――にゃあっ！？ね、姉様！これ妨害にはいらないの！？」

「面白いからあり！」

「そんなぁ！」

流石空お姉ちゃん、分かってらっしゃる。

時間をかけ、ようやく青に手を置いた。

＞ｉ３４１５３―３２９１＜

「沙鳥ちゃん！お尻重い！」

私が左手を移動させたため、胸の位置がカナのお尻に移動したのだ。

「我慢我慢。私だって胸潰れてるんだから」

「じゃ、次行くよ。なぁちゃん右足黄色」

「黄色！？」

これはつらいだろう。

体を上に上げられるなら楽に行けるのだが、生憎私の体が邪魔している。

カナも頑張って自分の左足と私の右足を通して自分の左手の隣にある黄色に乗せようとするが、その度カナのお尻が私の胸を押し上げてくる。

「もう無理！負けましたっ！」

「なぁちゃん降参。さぁちゃん決勝進出」

決着が付いたので体をどけてあげる。

「夏哉くぅん！つらかったよぉ！」

「お前はよく頑張った方だよ。お疲れ様」

そして二人は熱い抱擁を交わした。

なんか今日カナがいい位置にいるな～。

「きぃちゃん、次スピナー頼める？」

「構いませんが、夏哉がやりますか？」

「あ、やらないから。俺降参」

「夏君、それはずるいんじゃない？」

「ちょっとマジ勘弁してくれよ。別に空ねぇが嫌いじゃねぇけどさ、ホント耐えられないんだって！嫌でしょ？俺に興奮されて」

「私は構わないけど」

「俺が構うの！」

嫌がる夏哉に、意外な助っ人が現れた。

「まぁよいではありませんか。嫌がってる人に強要してもつまらないではありませんか」

なんと真樹が夏哉の味方をしたのだ。

まさかの真樹デレ期？

「そーだそーだ！真樹の言うとおりだ！」

「ちょっと意外だな。きぃちゃんが夏君助けるなんて。デレ期？」

あ、空お姉ちゃん同じ事思ってる。

「な訳ありませんわ」

と、その言葉の後こそっと耳打ちをした真樹。

それを聞いた空ねぇは何やら納得顔。

「しょうがないな。じゃ、私の不戦勝って事で」

「なんか急に流れが変わって怖いな」

「だって夏君の女装みたいから」

へ？

女装？

「ちょっと待て。何をどうなったらそんな話になった？」

「きぃちゃんがね、夏君を確実にビリに落とす方法があるって言うんだって。そしたら夏君罰ゲームでしょ？その際きぃちゃんは夏君に女装させようって案出すんだって」

「「それホントッ！？」」

反応したのは私とカナ。

夏哉の女装姿、それはもち見なければならない。

「もちろん皆の同意を得ればですわ。服は沙鳥様の持ってるゴスロリチックな服装で」

「なんでそのこと知ってるかは分からないけど、了解」

「へぇ、沙鳥ちゃんそんな服持ってるんだ」

「言い訳させてもらうと、それはファンの人たちが送って来て、捨てられずにいるってやつだから」

決して私が趣味で買ったものではない。

「なぁ、話の腰を折るようで悪いんだが」

するとアンちゃんが気まずげに声をかける。

「どうしたのアンちゃん？」

「女装って？」

あぁ、魔族は知らないのか。

「アンちゃんさ、一般的な男ってどういうイメージがある？」

「男……格好いいとか力強い、か？」

「まぁそんな感じだね。女の子は？」

「ん～、可愛らしかったり弱々しかったりかな。一概には言えんが」

「そうそう。女の子って自分を可愛く見せるためにこんな感じにスカートなんか穿くでしょ？」

私は空お姉ちゃんのスカートを軽く持ち上げる。

「で、こういう可愛らしい服を男の子に着せるって言うのが女装」

「それって楽しい？」

ネハラちゃんがバッサリ聞いてくる。

「人それぞれだけど、少なくとも私は、格好いい夏哉が女物の服を着て無理矢理可愛らしくさせたっていう姿の可笑しさに笑うと思うよ」

「お姉様どうします？」

「じゃあ真樹の案に賛成しておくよ。夏哉の罰ゲームも思いつかないし」

「ちょっと待て。なんで俺が罰ゲームやるって決まってるんだよ」

「だってあなた負けますし」

夏哉の抗議をさらりと躱す真樹。

「火津那さん、ちょっと予定変更して先にわたくしたちの方を終わらせてよろしいですか？女装も時間かかりますし」

「アンちゃんたちはどう？アンちゃんとネハラちゃん次なんだけど」

空お姉ちゃんの呼び掛けに二人とも了承する。

「ではまずわたくしとラスクさんですが、わたくし不戦敗しますわ。ラスクさん未だ気絶中ですので、このまま負けさせて罰ゲームをさせるのは酷ですので」

「分かった。じゃあ勝者ラスクさん。で、次は夏君ときぃちゃんでいい？」

「えぇ。夏哉、分かっていますね」

「まぁな。お前のこと考えればやることは一つだ」

夏哉が言うと、二人は半身にして右の拳をわき腹の辺りで構える。

するとカナが真樹に話しかけた。

「ねぇ真樹ちゃん、どうやって夏哉君に勝つの？ツイスターゲームなんて運の方が強いよ？」

確かにそうだ。

真樹は自信満々の表情で、敗北の二文字を意識してないように見える。

でも自分が負けるならともかく、ツイスターゲームでの確実な勝利なんて厳しいものがある。

「そうですわね。わたくしと夏哉はある意味近いものがありますので向こうがどうしたいかは分かってるつもりですの」

「それは相思相愛といいたいのかな？」

私の咄嗟な言葉が滑り込んだ。

「沙鳥様、茶化さず聞いてくださいまし」

「私本気なんだけど」

「やめてください。それで、向こうも何をするかは分かっていると思いますわ。ですので、他のことで決着をつければいいんですの」

「他のこと？」

これぱっかりはカナも分からないようで、首を傾げる。

「まぁ見ててください」

そこで話を終わらせると、顔を夏哉に向けた。

「じゃぁやるぞ」

「えぇ」

「「最初はグー」」

二人の先攻後攻を決めるジャンケンが始まった。

「「ジャンケンぽい！！」」

夏哉が出したのはチョキ。

対する真樹は、グー。

「うっそだァァァァァァッ！！」

後攻となった夏哉の叫びが部屋に響く。

でもどうして後攻になった程度で叫ぶ？

というか真樹、どうしてさっきまで右手を構えていたのに左手を出してる？

「ほら夏哉言いなさい。ここでやっぱ無しと言うほど屑ではないでしょう」

ん？

真樹は何を言わせる気なのだろうか。

「……空ねぇ」

「ん？」

「負けました」

「えぇっ！？」

私は驚きの声を上げた。

何故？

どうして夏哉はここで負けを宣言した？

でも驚いているのは私だけのようで、カナは納得顔だ。

「カナ、どう言うこと？」

「んっとね、夏哉君はツイスターゲームやりたがらなかったでしょ？」

「うん」

「で、今もやりたくない。でも負けたくない。そこで真樹ちゃんが、ジャンケンで決着をつけようって案を出したって事」

「あぁなるほど。でもジャンケンにしたって勝率低くない？」

「沙鳥様お忘れですか？」

どうやら勝者の真樹が教えてくれるようだ。

「夏哉は化け物ですわ。化け物にかかれば動体視力でわたくしの出す手なんて簡単に見破れます」

「え？でもそれじゃ負けちゃうじゃん」

「ですので、まず右手で途中までやるんですの。で、パーを出そうとした瞬間、夏哉はそれを読んでチョキを出す。なのでわたくしはあらかじめ作っておいた左手のグーを出した。ということですの。どこかのマンガでも同じ手を使っていましたわ。夏哉は絶対勝たなければという焦りによってより右手を集中してみていました。ですが逆に左手には集中していなかった。よって左手の動きを悟られずに出せたというわけですわ」

「え？えっと？真樹が右手のパーでチョキが夏哉で、あれ？」

「だからね」

その後カナの分かりやすい講座でなんとか理解した。

「では火津那さん、よろしければ夏哉にメークしてもらってよろしいですか？」

「いいけど、きぃちゃんやらないの？」

「わたくしそう言うのに無頓着ですので沙鳥様もしたことありませんわよね？」

「もち」

あんなめんどくさそうなもの、どうしてやらにゃならんのか。
聞く話によると一時間くらいかかるとか。
そんなことに時間かけるならマンガ読もうマンガ。
動画でもいいけど。

「香苗も、嗜み程度でしょ？」

「うん、ちょっとはやってるんだけどね」

うっそ、カナもやってるんだ。
やった方がいいのかな？

「この中では火津那さんが適任だと思いますので、よろしくお願いしますわ」

「了解。さぁちゃん、部屋どこ使っていい？」

「あ、じゃあ私の部屋使って。あと服も私の部屋のクローゼットにあるから。ついでにカツラも」

「髪（かつら）も送られたの？」

カナが苦笑しながら聞いてくる。

「まぁね。あ、夏哉。私のベッドの下にエロ本ないから探さないでね」

「探すかどアホ！」

「じゃあ夏君行こうね」

「お、お手柔らかにお願いします……」

空お姉ちゃんに手を引かれて退場していく夏哉。

その姿を見て、私はある言葉が浮かんだ。

「ねぇこれってあれだよね」

「何？」

「聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥」

「さ、沙鳥ちゃんがそんな難しい言葉を……！」

「やかましい！」

コツンと頭を叩く。

「しかし、微妙に違いません？」

「でも似てない？もしツイスターゲームやってたら一時の恥になってたかもしれないけど、罰ゲームで女装したら当然写メ撮るじゃん？一生ものの恥でしょ？しかも私の家だからデジカメあるし」

「確かに、言い得て妙ですわね」

「でしょ？じゃ、夏哉が完成するまで私たちで決着つけようか」

次はアンちゃんとネハラちゃんの試合だ。

第八話　《四章》ビリ決定（後書き）

作者「前回すみませんでした！」

沙鳥「何々？」

作「前回に挿し絵があったんですが、入れるのをすっかり忘れてました」

アン「お前そろそろちゃんとした方がよくないか？」

作「ホントすいませんでした」

沙「それにさ、なんやかんやでもう三章も続いてるよ、ツイスターゲーム。それに夏哉ツイスターゲームまともにやってないし」

作「やっぱやらせた方がよかったかなツイスターゲーム」

沙「そりゃあね～」

作「でも夏哉よ？ヘタレよ？どうにかしてやらないように頭を使ってくるでしょ？」

沙「まぁ女装が見られるんだからいいけど！私は！」

ア「それに他の女といちゃいちゃされてもいい気分はしないからな。まぁいいだろう」

作「ということで読者のみなさんも許してください！！それから、

今度こそ断言！次回ツイスターを終わらせます」

沙「ようやくだね」

作「で、ツイスターが終わっての二、三話やってからようやく本編っぽいのが入ってきます」

ア「まだ入らないのか」

作「でもその二、三話は重要っていうか、夏哉の想いが出てくるからね。無駄、ではないはず」

ア「まぁそれならいいんだけど」

作「で、他に言うことは……あ、あれだ。夏哉の女装。いち早くみたい人は？みてみん？っていうサイトでイラストを選択、検索で？夏子ちゃん？と打てば出てきますのでどうぞ」

沙「ねぇ、私たちには見せないの？」

作「後のお楽しみだ。じゃあそろそろいい具合だから締めようか」

ア「ｖｉｃｔｏｒさん、ｃｏｌｏｒｆｕｌさん、感想ありがとうございました」

沙「読者のみなさんも、こんなグダグダ小説を読んでくれてありがとうございます」

作「あの、出来れば、もっと感想をください！！なんか最近人が減っていってるので。おれ何か悪いことした！？」

ア「更新不定期、駄文、有言不実行、他にもあるぞ？」

作「すみませんでした……」

第八話　《五章》優勝者

「じゃあ真樹よろしくな」

次はアンちゃんとネハラちゃんとの試合。

アンちゃんが真樹に促します。

「では先攻後攻を」

二人でジャンケンして、アンちゃんが先攻になった。

「ではアンさん、右手の赤」

「了解だ」

アンちゃんは時間をかけずに手を置いた。

「次、ネハラさん右手を青に」

「えっと確認だけど、決められた場所に手か足を置いて、動かさなければいいのよね？」

ネハラちゃんは真樹に視線を送るけどそれに答えたのはアンちゃんだった。

「あぁ。決められた場所ならどこでもいいんだが、出来れば近くに来てほしいな」

「そ、それはもちろん……」

やっぱり好きな人と近づく、というのは嬉しいことで、少し照れることなんだろう。

若干頬を赤らめている。

女の子というのは、どうして顔を赤らめると可愛くみえるんだろうか。

なんの抵抗もなくこの可愛さを堪能できるんだから、私は女の子に生まれてきてよかった。

そんなことを考えてる内にネハラちゃんはアンちゃんの隣、端っこにある青に右手を置いた。

＞i351911―32911＜

「ではアンさん、黄色に左手を」

「黄色……済まないなネハラ」

アンちゃんはなんとネハラちゃんの隣の黄色に手を置いた。

その為、ネハラちゃんは一方をアンちゃんに、もう一方をシーツに阻まれている。

しかも残りの方向は隅に近い。

ネハラちゃんの動ける範囲がグンと狭まれてしまった。

「お姉様……これはお姉様に思う存分触れていいということですかっ！？」

あら、ネハラちゃん意外と前向きなのね。

「あぁ。そんな程度なら全然構わないぞ」

「マキ！早く次！」

「わ、分かりましたわ！ネハラさんは……左足を青にお願いします」

「青、ならそこしかないわっ！」

ネハラちゃんはアンちゃんの両腕の間に足を通して、その先にある青に足を乗せる。

＞ｉ３５１９２―３２９１＜

その際、アンちゃんの豊満な胸に太股が触れて形を変える。

「……人間のみんな、ごめんなさい。胸っていいものだわ。私も大きくしようかしら――」

「ネハラさん？」

ゾクリ。

隣から殺気を感じる。

首を動かして彼女を視界に入れたいな～、とか考えているのに、体が動かない。

今はもう六月で、初夏に入ったというのに肌寒く感じる。

「まさか、ネハラさんも胸を大きくする、なんて言わないよね？」

一言一言に殺気が込められている。

この言葉に逆らえるものなんているのだろうか。

「い、いや、でもそれは個人の自由じゃ……」

ネハラちゃん！？

あなた何反抗的意識を持ってるの！？

声が震えてるとはいえ今のカナに意見を言えるのは凄いけど！

「へぇ。じゃあネハラちゃんは、胸をおっきくした後私を指さして貧乳って笑うんだ？」

「そ、その、そういう訳じゃ……」

「笑うんだ？」

カナの顔は見えない、というか見られないけど、笑みを浮かべていそうなのは分かる。

「ごめんなさい……。やっぱり今のサイズがちょうど良さそうです……」

あのネハラちゃんがアンちゃん以外に敬語を使った！？

しかもあんな顔を真っ青にするなんて……。

カナの恐怖を直に受けているんだから当然といえば当然か。

「……あ、あの、アンさん？その……」

「あ、あぁ。頼む。続けてくれ」

この空気で続きを促すのは厳しいものがあっただろう。
それなのにそれを切り出した真樹は肝が据わっている。
途中でアンちゃんが引き継いでくれたとはいえ、私なら一言も喋れなかっただろう。

「えっと、左足を赤に」

「左足――っと、ちょっと待て」

急に待ったをかけるアンちゃん。
どうしたんだろう。
別に近くにない訳じゃないのに。

「ネハラ、顔にゴミがついてるぞ」

「え？ど、どこですか？」

ネラハちゃんが空いてる左手で顔を軽くゴシゴシした。

「そこじゃない。もっと上――あぁ、焦れったいな。ちょっと動くなよ」
私の位置からじゃネハラちゃんのついているゴミは見えないけど、
アンちゃんの様子からなかなか取れないんだろう。

痺れを切らしたアンちゃんはネハラちゃんに顔を近づけ――

ペロリ

ネハラちゃんの目元を舐めた。

「……へ？」

何が起きたのか理解できていないようで、間抜けな声を上げる。

「ん、取れたぞ」

アンちゃんは自身の服の肩の部分に舌を擦り付けた。
ゴミを取ってるだろう。

「……ふぁぁぁぁっ」

時間が立って我に返ったのだろう。
真っ青だった顔が一気に真っ赤になって、パタンと倒れてしまった。

魔族の続行不能はこれで二度目。
流石はアンちゃんのカリスマ性と言ったところか。

「……アンさん。あなたはわざとやってますか？」

「は？何をだ？」

真樹の問いかけに真顔で返すアンちゃん。

意外と鈍感というか無意識というか。

ここは夏哉に似たところがあるかもしれない。

「よし、じゃあアンちゃん。ネハラちゃんどけて早速やろう！」

わたしは意気揚々として前に出る。

「でもどうする？ソファーはラスクが占領してるぞ」

確かに、うれしさのあまり気絶してしまったラスクさんはソファーの上。

そこにもう一人分の場所はない。

「ん～。あ、そういえばみんなが寝てた布団は？あれじゃだめなの？」

「あれは沙鳥の家のものだ。お前がいいって言うなら使わせてもらいたいんだが」

「あ、全然。ちょい取りに行ってくるね」

押入に詰め込まれている布団を一セット持って行き、ソファーの隣に敷く。

これでネハラちゃんもよし。

「じゃあアンちゃん。勝負だね」

「あぁ。お互いに夏哉をかけて」

そう。

夏哉は八位になったためわたしが優勝すれば夏哉一日自由権を手に

入れられる。
対するアンちゃんも、優勝すれば誰か一人を自分で選んでその人の一日自由権を手に入れられる。
アンちゃんのことだから、選ぶのは夏哉。
これは、夏哉をかけた真剣勝負なんだ！

「勝負だアンちゃん！」

「おぉ！来い沙鳥！」

「「最初はグー！ジャンケンポン！」」

私が出したのはチョキ。
そしてアンちゃんは、グー。

「くそっ！」

「ふんっ、先攻はもらった！」

「おぉっと！ジャンケンの結果、先攻はアンさんのものとなりました！」

カナが実況者張りのテンションで説明してくれた。

「か、香苗？どうしたんですの？」

「ほら真樹ちゃんも。決勝戦だよ？テンション上げよーよ」

「……香苗もいい具合にボケてきましたわね」

そう言いながら香苗の頭を撫でる真樹。

「では！回しますわよ！」

真樹も本気を出したようで、右手を少し後ろに引いて、それを前に出した勢いでスピナーを回す。

「アンさん、右足の緑！」

「どうやらアンさんの最初の場所は右足の緑のようです！さぁアンさんはどこに置くのでしょうか！？」

「緑……まぁまぁか」

「おっと！？アンさんは自ら逃げ場の少ない端にある、しかも隅に近い緑を選びました！しかし、緑自体その殆どが辺にあるものだから仕方ないことなのでしょうか！？それよりも緑と決まったときのあの反応……。真樹さん！あれをどう見ますか？」

「これは、沙鳥様が不利な可能性がありますわね……」

「そ、それは一体どういうことなのでしょうか！？」

「魔法が縛られた今、アンさんには沙鳥様に持ってないものがあります」

「その持ってないものとは？」

「頭脳です。アンさんは恐らく、どの場所が一番逃げやすいかを判断し、その場に足を置いたのです」

「ですが、それならわざわざ端の方ではなく中央近くにあるところに行けばいいのでは？」

「恐らく、アンさんは短期戦を望んでいるのでしょう」

「あぁそうだ。試合中に夏哉が現れたら、こっちに集中できないだろ？だからさっさと勝ってその余韻に浸りたいんだ」

「ちょっとアンちゃん、何もう勝ってる気になってるの？勝つのは私よ」

「ふんっ！頭脳も使えぬ小娘が、私に勝てると思ってるのか！？」

「勝てるんじゃない！勝つんだ！！真樹！」

「沙鳥様、左手を黄色に」

「なら、ここだぁ！」

「おっと沙鳥ちゃん！アンちゃんの選択肢を絞るような位置に左手を乗せました！」

＞ｉ３５２４２―３２９１＜

「まぁ、お前なら黄色が出たときにそこを置くのは予想できていた。しかし、だからこそお前の負けなんだ！」

「なんと!まだお互い1ターンしか経っていないというのにアンさんの勝利宣言です!」

「なっ!?それはどういうことなのっ!?」

「ふんっ、時期に分かることだ」

「アンさん、左足を青に!」

「ふ、ふはははっ!どうやら神は私に味方したようだ!」

「え、何?たかが青一つで何が出来るって言うの!?」

「それは、これだぁぁッ!」

「な、なんと!!アンさんはすぐ傍に青があるというのに、わざわざ沙鳥ちゃんの後ろにある青に足を置きに行った!?」

「これは、どういう行動の意図があると思いますか、香苗さん?」

「そうですね……。恐らく、アンさんは攻めの体勢に入っていますね」

「攻め、ですか?」

「アンさんはきっとこう考えたのでしょう。『自分から相手に絡んで行けば、次の相手の行動がしにくくなる』と。相手にとって自分が変な場所にいればいるほど、相手は変な体勢になりやすくなる。この短時間でそれを見抜くなんて、流石はアンさんというところでしょうか」

「そういうことだ！これは先攻が有利！！先に攻めた方が勝ちなんだよっ！！」

「強制的に後手に回ってしまう沙鳥ちゃん！これは絶体絶命か！？」

「先攻が、有利？笑わせてくれる」

「何？」

「アンちゃん。あなたはこの勝負の本質を分かっていない」

「本質、だと？」

「それを私が教えてあげる！」

――――――――――――

「なんか下ノリノリだな」

「うん、そうだね。意外なのがなぁちゃんもあんなノリノリになったことかな」

「だな。それにしても……アイツら恥ずかしくないのかな？あんなに叫んで」

「きっと気付いてないだけだよ」

「だろうな」

「おっと、こんなところに作動中の録音機が」

「……空ねぇ、なんでそんなの持ってんだ？」

「乙女の嗜みよ」

「そんな乙女始めてみたわ」

――――――――――

「沙鳥様、右足を赤に！」

「見せてあげる。ツイスターゲームの本質を」

「ん？沙鳥ちゃんは後ろではなくアンさんの股の下を通した？」

「これは、まぁ攻めるのだとしたら普通ですわよね？」

「一体沙鳥ちゃんはどんな意図を持っているのでしょうか！？」

「ツイスターゲームの本質、それは重心よ！」

「重心、だと？」

「重心がちゃんと下にないと体は安定せずにバランスを崩してしまう。だからこれは、相手の下を取った方が勝ちなんだ！」

「そ、そんなのはでたらめだ！実際私は上でもラスクに勝った！」

「それはアンちゃん、あなたのカリスマ性で勝ったの。もしあれが私だったらまだ続いていた。ネハラちゃんだってそう！アンちゃんは実力では一度も勝ったことがないのっ！！」

「クッ……！！」

「アンさん、左手の赤」

「赤、か……」

「アンさん、足下にある赤に手を置きましたが、沙鳥ちゃんが邪魔になって不安定な状態になっています！」

「沙鳥様、右手を緑に！」

「緑、ならここだ！」

「沙鳥ちゃん！右足の次に右腕もアンちゃんの股下に通した！！強引だったせいか顔がアンさんの足に当たっています！しかし、アンさんとは対象に重心は低く、倒れるようなことはないでしょう！」

＞ｉ３５２４３―３２９１＜

「アンさん、左手に緑！」

「緑だと！？」

「アンさんこれは厳しいです！足下に緑はあるのですが、体の構造上届まなければ手が届きません！少し離れたところにあるのですが、届くのでしょうか！？」

「と、届かせてみせるっ！！」

「アンさん、決意を表すと同時にがんばって手を伸ばします！！手と緑の距離は残り２０？ほど！」

「と、届く！」

「さらに距離を縮めて１０？！！しかしここでアンさんの手が止まる！残りたった１０？が、アンさんにとっては分厚い１０？となっています！」

「くっそぉぉぉぉぉっ！！」

「自身に気合いを入れるような叫びがこの部屋に響きます！最後の力を振り絞るように、アンさんは限界まで腕を伸ばしました！その結果……ななな、なんと！！届いていますッ！！アンさんの必死の想いが通じたかの様に届いて――」

「アンさん失格！」

「な！？」

「な、なぁんということでしょう！！真樹さんの判定によりアンさんが失格となりました！！」

「どういうことだ！？私が失格だと！？ちゃんとここに手を付けて

いるではないかッ！！」

「た、確かにアンさんのいう通りなのですが……」

「香苗さん、アンさんの右足を見てくださいまし」

「へ？みぎあ――こ、これは！アンさんの右足が、緑の円を踏み越えている！！」

「な、なんだと！？」

「これはアンさんの反則負け。勝者、天雲沙鳥！！」

「やったあああああッ！！」

「クソッ！クソッ！負けた……！！」

「おめでとう、さぁちゃん」

私たちの試合が終わったちょうどその頃、空お姉ちゃんが私にお祝いコメントをしてくれた。

「ありがとっ、空お姉ちゃん！夏哉はもう終わったの？」

「終わったよ。ほら優勝商品、早く出なよ」

「なぁ、ホント出なきゃダメ？出たくないんだけど」

声は聞こえるものの、姿は見えない。陰に隠れているようだ。

「ダメ。いいでしょ別に。露出があるわけじゃないんだから」

「そういう問題じゃない！」

「早くでないと怒り状態のなぁちゃん襲わせるよ？」

「行きます」

「私って恐怖の対象なの！？」

即答した夏哉に嘆くカナ。
そりゃ怒り状態のカナに恐怖を覚えない方がおかしい。

「違うんだよ香苗。普通だったらお前はめっちゃ可愛いんだよ。怒ったときだけだ、怖いのは」

ホント夏哉無意識に可愛いとか言い出して。
ギャルゲの主人公にでもなるつもりなのかな。

とか考えてるうちに夏哉が陰から出てきた。

いや、夏哉じゃない。
夏子ちゃんだ。

＞ｉ３４１２０―３２９１＜

髪は肩甲骨くらいまでのストレートで濃いブラウン。
両耳のあたりでぴょんっと跳ねている。

服は紺を基調としたゴスロリチック。

フリルなんかもいろいろついている。

「きゃあああああっ！夏子ちゃん似合うぅぅ～！」

私は夏子ちゃんに近づいてマジマジと見る。

「そ、そんなにじっと見るな……」

「その反応は女っぽいですわよ？」

「あ、私も思った。もうちょい声高ければ男の娘いけそうなのに」

「でもさすがに首が太いですわ肩幅もありますし」

「でも肩幅は服の着方でなんとかなりそうじゃない？薄着は無理そうだけど。問題は首か……。たしか青とかの暗い色って小さく見えるよね？」

「なるほど、視覚の効果を使いますか。そうすればもう少し細く見えるかもしれませんわね」

「あぁもう！！俺の目の前でそんな話するな！！」

おっと、どうやら真樹と話し込み過ぎてしまったようだ。

と、ここでカナが夏子ちゃんに近づく。

「なんで、なんで……」

「は？」

突然のカナの言葉に首を傾げる夏子ちゃん。

そりゃいきなり？なんで？とか言われても困るだろう。

もしかしてカナ的にはなしなのかな？

「なんで夏子ちゃんの胸が私より大きいのっ！？」

叫びながら夏子ちゃんの胸を鷲掴む。

ってただのひがみか！

「ま、待て香苗！これタオルだから！タオル詰めただけだから！！沙鳥なんとかして！」

私としては見てたかったけどまぁ夏子ちゃんのために一肌脱ぎますか。

「ほらカナ、やめなさい。カナが揉みすぎたせいで夏子ちゃんぺったんこになっちゃうでしょ？」

「ぺったんこになるならもっとやる！」

「いーかげんにしなさい」

コツッと頭を叩く。

ホント真面目が取り柄のカナだったのに結構おちゃらけになったな。

でもそっちはそっちで楽しいけど。

あ、ところでアンちゃんは？
勝負終わってから全く声聞いてないけど。

後ろを振り向いた。

顔を赤らめ、ちらちらと夏子ちゃんを見ては体をもじもじさせてる、なんとも乙女なアンちゃんがいた。

「……何してるの？」

試しに聞いてみた。
みんなアンちゃんの奇妙な姿に視線を向け、驚く。

「い、いや、なんか、夏哉を見てると、胸がドキドキして、夏哉を見るだけでなんか恥ずかしくなって……」

「ま、まさかアンちゃん……」

「夏子ちゃんに、惚れた？」

私の後にカナが続く。

アンちゃんはカナの言葉に更に赤くして顔を逸らす。

「ちょ、待て！アン！これは俺が女装しただけだ！気持ち悪がる要素はあるがときめく要素は全くないぞ！？」

どうにか目を覚まさせようとしてるのだろう、夏子ちゃんはアンちゃんに詰め寄る。

対するアンちゃんは襟元を口元まで引っ張って口を隠して言った。

「そ、そんなことないだろ……。す、すっごく可愛いし。見てるだけでどうにかなりそうだ……」

な、何この生物可愛すぎるんですけど……！！

「ば、ばかかお前は……。お前の方が可愛いだろ……」

「夏哉……」

夏子ちゃんとアンちゃんは？二人の空気を作っている。

「カナ」

「うん、分かってるよ。今のは夏子ちゃんが正しい」

やっぱりカナも同じ想いだったようだ。

「ぅ、ぁ、さ、さ、沙鳥！」

夏子ちゃんが急に私の名前を呼んだ。

どうしたのだろうか。

もしかしてこの空気に耐えられなくなった？

そんな当たりを付けていると、

「俺からの誕生日プレゼントだ！明日一日中デートしよう！！」

私の明日の休日が決まった。

第八話　《五章》優勝者（後書き）

真樹「十三日」

香苗「私たち暇だったね」

作者「いや、ホントすいませんでした！イラスト描いてたらいつの間にか……。しかもツイスターゲームでシート書かなきゃならなかったんで学校でかけなかったし」

香「だったら前提としてツイスターゲームにしなきゃいいのに」

作「だってそれしか思いつかなかったんだもん！読者様にも同じこと言われたけどしょうがない！」

真「というか、今回のキャラ崩壊はちょっと激しすぎません？」

作「いや、俺もなんでこんなの書いたんだろうね。それより、多分やることはないはずだから謝辞をどうぞ」

真「ｃｏｌｏｒｆｕｌさん、ソラトさん、名無しさん、アダマンタイトさん、クロスライトさん、ｖｉｃｔｏｒさん、感想ありがとうございました！」

香「多分一話でこの感想量は過去最高だと思います。ホント嬉しい限りです」

真「もしよろしければこれからもよろしくお願い致します」

作「多分今回のように日にちをあけることはないと思います」

第八話　《六章》変則デート

ツイスターゲームが終わり、結果としては私が優勝、アンちゃんが準優勝、カナが不戦勝の三位、ネハラちゃんが不戦敗の四位。
空お姉ちゃんも同じく不戦勝の五位でラスクさんが不戦敗の六位、真樹が七位で夏子ちゃんがペケ。

その後は私の部屋にあるゲーム機器を下に持ってきてみんなで遊んでいた。

途中で目が覚めたラスクさんとネハラちゃんは夏子ちゃんを見て赤面していた。
夏子ちゃんは魔族に人気があるようだ。
もし夏子ちゃんが本物の女の子になったらどうなるのだろうか。

遊んでいる内に、気付けばお昼の時間になった。

昼食は魔族三人組の計らいにより魔界料理のフルコースが出た。

とても美味しそうな数々の料理が出てきたのだが、

「真樹、ホント済まない！ここまで考えが及ばなかった……」

頭を下げるアンちゃん。

そう、真樹は魔界の料理が食べられないのだ。

因みに料理はテーブルの上に置いてあるのだが、そのテーブルにはアンちゃんの魔力がまとっていて落ちない仕様となっている。

食器類はネハラちゃんとラスクさんが魔法で作ったという。

「ねぇさぁちゃん、魔法でどうにかならないの？」

空お姉ちゃんが訊ねてくるけど、

「多分無理っぽい」

「沙鳥、そういうのってやってみなくても分かんないもんなのか？」

確認のような質問をしてくる夏哉に私は頷く。

「うん。あ、根拠とかは分からないけど、感覚で無理だって分かる感じ。夏哉だって魔法使わずに空飛べるかって言われたらやらなくても無理だって分かるでしょ？」

「あぁ、なるほどな」

「というわけですので、しばし時間をもらってコンビニで何か買ってきますわ」

そう伝えると真樹は腰を上げて外に出ようとした。

「ちょいまちー」

そんな真樹を私は止める。

「沙鳥様？」

「十五分くらい待ってよちゃちゃっと作っちゃうから」

「え、い、いや、今日は誕生日ですのでそんな手間は……」

「誕生日だから、私の好きなことさせてくれない？」

五秒も満たない間見つめ合い、真樹がため息をついた。

「分かりましたわ。よろしくお願いいたします」

「かしこまり～」

早速私はキッチンに立って冷蔵庫にある材料をかき集める。

「あ、そうだそうだ。なぁちゃん、これ聞いてほしいんだけど」

リビングでは空お姉ちゃんがなにやら楽しそうな雰囲気でカナに話し掛けている。

冷蔵庫を漁っているので姿は見えない。

「何々？」

カナも興味津々のようだ。

「え、空ねぇ、あれ？」

「そ。あれ」

夏哉は知ってるみたいだけど、メーク中に聞いたのかな？

そう予想していると、聞こえてきた。

『どうやらアンさんの最初の場所は右足の緑のようです！さぁアンさんはどこに置くのでしょうか！？』

「なっ！？」

聞こえだしたのはカナの実況していた声。

しかもそれだけじゃ終わらない。

『おっ！？アンさんは自ら逃げ場の少ない端にある、しかも隅に近い緑を選びました！しかし、緑自体その殆どが辺にあるものだから仕方ないことなのでしょうか！？それよりも緑と決まったときのあの反応……。真樹さん！あれをどう見ますか？』

「いやぁぁぁぁぁぁぁっ！！やめてぇぇぇぇっ！！」

カナが発狂してしまった。

今振り返ると恥ずかしい。

私たちはなんであんなテンションでやったんだろう……。

今更ながらに後悔するが、悪夢は終わらなかった。

『ふんっ！頭脳も使えぬ小娘が、私に勝てると思ってるのか！？』

「わ、私もか！？」

『勝てるんじゃない！勝つんだ！！真樹！』

「わー！！やめやめ！アンちゃん止めろ！！」

「分かってる！！」

『なら、ここだぁ！』

「ふぅ、わたくしの台詞はあまり入ってなさそうですわね」

「呑気なこといってるな真樹！ネハラ、ラスク！手伝え！！」

「「はいっ！！」」

『おっと沙鳥ちゃん！アンちゃんの選択肢を絞るような位置に左手を乗せました！』

「はい、夏君パス」

「受け取った」

『まぁ、お前なら黄色が出たときにそこを置くのは予想できていた。しかし、だからこそお前の負けなんだ！』

「よし夏哉！早くその声止めて！もう私聞きたくない！」

「何言ってんだ沙鳥？」

『なんと！まだお互い1ターンしか経っていないというのにアンちゃんの勝利宣言です！』

「いやぁぁぁぁ！夏哉君早く！！」

「お前たちは俺に女装させたんだ！それ相応の罰は食らえ！！」

『なっ！？それはどういうことなのっ！？』

「夏哉ぁ！もうやめて！私たちのライフはもうゼロよ！」

『ふんっ、時期に分かることだ』

『アンさん、左足を青に！』

「あ。改めて聞くと結構きますわね。では夏哉死ね」

「お前ら動くな！暴れるとせっかくの飯が台無しだぞ！！」

『ふ、ふはははっ！どうやら神は私に味方したようだ！』

「な、夏哉もうやめてくれ！もう限界なんだ！！」

「というか忘れてますわね」

ダンッ！

なんの音かと思い首を覗かせると、なんと真樹がテーブルの上に足を乗せて夏子ちゃんの手にある録音機を奪った。

「わたくし、料理に触れられませんので動き回ってもなんの影響もありませんわ」

真樹の姿を見て、私とカナ、アンちゃんの三人は心が重なった。

「「「真樹様ぁ！」」」

三人で同時に真樹を崇める。

「皆さん申し訳ありません。触れられないとはいえテーブルに足を乗せてしまい」

「そんなこと気にしなくていいよっ！別に真樹の足汚くないし！絶対舐めれるほど綺麗だって！」

「な、舐めれるって……」

私の例えに赤面しつつも、真樹が私に料理を勧めた。

「で、では沙鳥様、料理の方をよろしくお願いいたしますわ」

「はぁい」

材料は集められた。

「真樹～、嫌いなものある？オムライスなんだけど」

「平気ですわ」

「りょうか～い」

私は手際よくちゃっちゃと作り出す。

「あ、ねぇ沙鳥ちゃん、今話せる？」

野菜を洗っていると、カナが話しかけてきた。

「なに～？問題ないよ～」

「沙鳥ちゃんって明日夏哉君とデートするんだよね？」

「するよ～。何？もしかして邪魔する気？」

「流石にしないよ。で、明日のデートするのはいいんだけど、夏哉君平気なの？」

「は？俺？」

どうして夏哉が出てくるんだろう。

夏哉が言い出したことだから予定全く皆無ってことはないだろうし。

まぁ皆無でも問題はないけど」

「夏哉君忘れてる？沙鳥ちゃん、親衛隊いるんだよ？」

「「あ」」

そう言えば最近見てないけど私には非公認ではあるが親衛隊がいる。

そんな人たちの前で夏哉とデートしてたら夏哉が殺される。

「あ、あ甘いな香苗。たか、たかが人ごときに俺を止めら、れると思うなよ」

言ってることが強がりだということは簡単に分かる。

「ん～、どうしよっか～」

「単純に魔法使って女にでも見せればどうだ？そうすれば男の夏哉よりはマシだろ」

「女ねぇ。まぁそれが妥当――」

アンちゃんの言葉に納得仕掛けたとき、私はいいことを閃いた。

「……沙鳥さんよ」

「なぁにっ？」

片や覇気のない、聞いて一発で分かるほど不機嫌そうな声を出す少年に、片や嬉々とした、聞いて一発で分かるほど上機嫌そうな声を出す少女。

誰だかは言わなくていいだろう。

今日は六月二十二日。

私の誕生日の翌日だ。

昨日はホント最高な誕生日だった。

いつもいるメンバーなのに飽きもせず夜の八時まで遊び回っていた。

その際夏哉が、女装しているのにも関わらず妹の結にフラグを立てかける状況に陥ったのだが、それはまた別の話。

「ホントに行くのか？デート」

「だってそっちが言ったんじゃん。それに今日は私の奴隷よん」

「奴隷って……」

ちょっと嫌な表現だったか。

「流石に言い過ぎた。でも一日だけ自由にっていうのは守ってもらうんだから、絶対だよ」

現在朝八時半、私たちは夏哉の部屋にいる。

一応いつものメンツがそろっている。

朝早くご苦労なことです。

しかもアンちゃんたちが浮いてるとはいえ狭い。

「俺なんか悪いことした？」

「全く。むしろ嬉しいことしてくれた。というわけで早速行こっか」

私はデート相手を促して立ち上がる。

「はぁぁぁぁ」

ここまで渋る理由、それは私が夏子ちゃんとデートするからだ。

夏子ちゃん。

つまり夏哉の女装した男の娘。
今回は昨日とは違って本格的なメークを空お姉ちゃんにしてもらった。
時間にして約一時間強。
メイクした方もされた方もお疲れ様でした。

その甲斐あって昨日よりも女の子っぽくなっている。
メイクの力ってすげぇ。

ホントは魔法で姿変えて、でもよかったんだけど、それだと私の理想の形になっちゃうから、私が想像した夏子ちゃんと夏哉が女装した夏子ちゃんでは違いが出てくるため、どうせなら本物の夏子ちゃんをみたいと思いこうした。

夏子ちゃんの服装は、青のロングワンピースにオレンジを基調とした薄手のアウターというシンプルなもの。
服は私のだ。
夏哉はズボンがいいと言うが、私のだと丈が合わないし、夏哉の半ズボンだと足でばれちゃうし。

だから基本背丈関係なく着れるワンピースにした。
ウエストはちょっと厳しそうだけど、問題はなさそうだ。

胸はまぁまぁ。
真樹よりちっちゃいくらいのサイズにした。

「じゃあ皆、いってきま～す」

「「「「「「いってらっしゃい（まし）」」」」」」

皆に見送られて夏哉の部屋から出る。

「はい夏子ちゃん、外に出ました。約束を復唱しましょう」

「えっと、一、口調はもちろん女口調。二、声はいつも意識して高めにすること」

早速夏子ちゃんは声を高めにして言ってくれた。
なんやかんや言っても乗ってくれるのが夏哉だ。

「はい、よく言えました。というわけで、何処行くの？」

私はノープランでここにいる。
全部夏子ちゃんに任せっきりだ。

「水族館なんてどお？」

「おぉ、水族館。久しぶりだな～。小五の頃行ったきりだから、えっと……」

指を押って数える。

数学どころか算数も苦手です。

「四年ぶりでしょ」

「そうそう、四年ぶり――って四年ぶり？ねぇ夏子ちゃん、五年ぶりじゃない？」

「いやいや、だって小五でしょ？小六で一年」

「で、中学一、二、三で二、三、四年。それから高一で五年。ほらみた五年でしょ？」

「い……っ」

堂々と言ったのに実は間違えてしまっていた夏子ちゃんは恥ずかしいと思います。

ということで夏子ちゃんは赤面している。

どうしよう、なんか女の子に見えてきた。

「それで？どこの水族館？」

「天野町の。電車で三十分くらいのとこ」

「あ、確か私そこ行ったわ」

天野町という単語は聞いたことある。

というか天野町＝水族館というイメージしかない。

別に水族館が有名という訳じゃないんだけど。

「嘘、かぶった……？」

「あぁ、気にしなくていいよ。どうせ行ったの五年前だし。それに夏子ちゃんといけるんだし」

「……夏哉として行きたかった」

そんな愚痴をこぼした夏子ちゃんは私に手を伸ばしてきた。

なんだろう？

「お手？」

私は右手をポンと夏子ちゃんの左手に乗せた。

「なんでだよ」

「あ、ほら。口調口調。はいやり直し」

こういう細かいところも厳しくいこうと思ってる。

「わざわざやんのかよ……。えっと、なんでそうなるのよ？」

「だって手出されたから」

「違うでしょ。手、繋ごうって言ってるの。デートなんだから」

「え、手、手ぇ！？」

予想外の申し出に変な声を出してしまった。

まさかこんな嬉しいことを自分から言ってくれるとは思わなかった。

いざ手を繋ごうと伸ばすが、だんだんと緊張してきて手が途中で止まってしまう。

そのことに自分で驚く。

キスもして裸も見られてるのに、どうして手を繋ぐという行為がこんなにも緊張するのだろうと。

そんな私に見かねたのか、夏子ちゃんは自分から手を伸ばして私の指に絡ませていった。

鼓動が高鳴るのを感じる。
本当に繋いじゃったんだ、手。

すると手のひらに湿った感覚を覚える。
もしかして、手汗っ!?

「わっ、夏子ちゃんちょっと待って!」

慌てて夏哉の手を解いて自分の手のひらを見る。
本当に手汗をかいていた。

「あーの、沙鳥?」

夏子ちゃんが戸惑った声を出す。

ま、マズい!
手、繋いだのが嫌だったって誤解される!

「違うの!違うの夏哉!手は繋ぎたかったんだけど、ほら!私手汗かいてたから!!」

証拠として手のひらを見せる。

「気持ち悪いって思われると思ったから拭こうとしたの!」

ゴシゴシと手汗を拭う。

見てた夏子ちゃんは呆れ顔だ。

「少なくとも駅まではずっと手を繋いでいこうと思ってたんですけど、今からそんなことしてちゃきりないでしょ。後夏哉って言ってるし」

「えっ、うそっ!?夏哉って言ってた!?」

「うん。手汗かいてるっていって手を見せてきたとき」

完璧無意識だった。

人は必死になると他を忘れるんだ、と再認識する私だった。

「で?手汗いちいち拭ってたらきりないでしょ?」

同じことを二度言う夏子ちゃん。

私はその攻めに言葉を詰まらせる。

夏子ちゃんの言うことは図星だからだ。

でもなんとなくそれを認めるのはしゃくだから言い訳する。

「別にいいじゃんっ。こういうのは最初が肝心なんだからっ」

どんな理由だよこれ、と言ってすぐ自分の語彙のなさに嘆く。

すると突然、夏子ちゃんが顔を逸らして口元を押さえ始めた。
しかも肩を若干震わせている。

「な、何？どうしたの？」

「だ、だって、くくっ、お前、香苗と全く同じこと言うからさぁ。くふっ、あぁ腹いてぇ」

どうやら夏哉は笑っていたようだ。

その反応に少しムッとするところもあったけど、それよりカナの話が気になった。

「カナって、この前のデートの？」

「そうそう。向こうの駅についてさ。まぁあいつは女の子らしくハンカチで拭ってきたけど？」

「そりゃ私が女の子らしくないってことですかい？」

「よく分かってるな」

「うるさい女男。口調を正しなさい」

「好きでこんな格好してません」

そんな言い合いをしながら、お互い手を伸ばして自然と手を絡ませあった。

ここから私の初デートが始まる。

―――――――――――

「あの、本当に行きますの？」

「なんだ真樹？気にならないのか？」

「そういうわけではありませんが」

わたくしたち六人は沙鳥様と夏子ちゃんを見送った後その二人を尾行しようと夏哉の部屋を出た。

「でも、アンちゃんたちは魔法使えばともかくとして、怪しまれず行くとしたら私多分全然見えなくなるよ？」

「そんななぁちゃんにぴったりなものが。はい、双眼鏡」

何処からともなく双眼鏡を取りだした火津那さん。

その用意周到さに香苗も驚いている。

「あ、ありがとう」

でも双眼鏡もってる幼女というのも十分怪しい気がする。

「あ、香苗。私たち魔法使わないぞ」

「え？どうしてですかお姉様？」

アンさんの言葉は予想外だったようで、ネハラさんが訊ねる。

「沙鳥は魔族と同じく魔法を察知できるんだ。流石の沙鳥も尾行には気付くだろう。だから出る前に共鳴地点（シンパシーポイント）を夏子ちゃんにつけてきた。ほら、これを持てば少なくとも位置は分かる」

わたくしたちはアンさんからボタン電池の様なものを渡された。

それが手に触れた瞬間、違和感なく夏子ちゃんの位置情報が脳内に飛び込んできた。

現在前方２５１ｍ先を歩いている。

特に図が思い描かれてる訳ではなく、知識として知っているという感じだ。

「これはバレないの？」

火津那さんが聞く。

「魔法じゃないからな。じゃあ早速行こう」

アンさんの言葉を合図に皆歩み出す。

三人ほど浮いているため、皆歩み出すというのは語弊があるか。

そう思っていると、前方を歩いている沙鳥様がこちらに顔を向けた。

ま、まさかこの位置がバレてる？

その瞬間、沙鳥様と夏子ちゃんが消えた。

「なっ！？」

声を上げたのはアンさんのみ。
しかしみんなも同様驚いている。
わたくしもその一人だ。

「あ、アンお嬢、今！」

「あぁ。私たち幻術かけられたぞ」

「ということは、沙鳥ちゃんたちが消えたっていう幻術をかけられたってこと？だからまだ位置情報が送られてくると」

香苗が簡潔にこの事柄を説明してくれた。

しかし、なぜバレたのだろうか。

「それにしてもサトリすごいわね。ここまで離れた私たち全員にそんな特定した幻術をかけられるなんて」

「感心してる場合ですか――」

と、わたくしは思いついた。

沙鳥様がこの場所を突き止めた理由を。

「ね、ネハラさん、手を出してもらってよろしいですか？」

「ん？はい」

わたくしに向けて差し出された手を、自身の手で触れた。

「ああっ！」

香苗が声を上げる。

気付いたようだ。

「な、なんだ香苗？」

「沙鳥ちゃん！昨日からネハラさんとラスクさんに魔法かけっぱなし！確か永続的な魔法使うと、その場所は魔法の気配で分かるんだよね？そのせいでこの場所がバレたんだよっ」

「……あああああっ！なんで思いつかなかったんだ私は！？」

「じゃあさぁちゃんは常にこっちの場所をわかってるから、尾行は無理？」

「「「「「……」」」」」

火津那さんの結論に皆黙り込む。

「……帰るか？」

言い出しっぺのアンさんが諦めを表明した。

「そう、ですわね。では、ウチに来ますか？広いですし」

「そうだな。皆真樹の案に賛成な人」

アンさんの言葉に全員手を挙げた。

これからの予定が決まった。

第八話　《六章》変則デート（後書き）

沙鳥「あらっ？今回は早かったね？」

作者「うん。ようやく本編に近づいて来たからな。こっちは最初から構成自体は頭ん中に出来てたんだよ。まぁ予想外のことはあったが」

沙「予想外？」

夏子「ちょっと待て！なんで俺ここでもこんなカッコなんだよ！？」

沙「あら夏子ちゃんいらっしゃい」

作「どうして女装した夏哉とデートすることになったんだと」

夏「作者あ！こんな話書くんじゃねぇよ！！俺の女装はお前の話の構成上異物なんだろ！？直ちに排除しろ！！」

作「残念だったな！別にお前が女装してもしなくても話は成立するんだよ！ちょっとお前が変態視されるだけで」

夏「充分成立しねぇよそれ！何！？俺誰かに女装してるのバレるの！？」

作「そいつぁいえねぇな。ネタバレになるんで」

夏「よし、ならここで演じきれば変態扱いされない！」

沙「安心して。例え夏哉が変態になっても、私たちは夏哉を見捨てないよ？」

夏「なんで変態前提で話を進めてんだよ！？」

作「そんなことより沙鳥さん」

沙「なんですか香樹さん？」

夏「無視か？無視なのか？」

作「わたくし学校の課題が一段落ついたんですよ！」

沙「ほうほう、つまり更新ペースがあがると？」

作「そういうことですな。明日は休みなんで、投稿できたらしたいと思ってます」

沙「というわけで皆さん、作者は明日更新しないらしいので、次回をしばらくお待ちください」

作「え？俺更新するって言ったよね？」

夏「有言不実行だからな、お前は」

沙「というわけでこんかいはここまで！ソラトさん、ｖｉｃｔｏｒさん、クロスライトさん、アダマンタイトさん、ｋｉｉｔｉさん、ｃｏｌｏｒｆｕｌさん、感想ありがとうございました！！」

作「感想で、？なんでツイスター？王様ゲームでよくね？？ってい

うのが来たんですが、それは単にツイスターが一番最初に思いついて、その後に何も考えなかったからです。だからきっと思いついたのが王様ゲームだったらそれやってましたし、それがカルタだったらカルタやってましたので、深い意味はありません」

夏「作者は触れてないけど、感想六通もありがとうございます！」

作「次は更新ごとに十通を目標に頑張ります！」

沙「くる気配ないね。六通で奇跡なんだから」

夏「だな」

作「いいじゃんいいじゃん！ということで、待ってます！」

第八話　《七章》ナンパ

ん～、よし、皆付いてきてない。

私は皆にかけた幻術を解いた。

「どうしたの沙鳥？にやけて」

隣に座っている夏子が話しかけてきた。

現在私たちは電車に乗ってガタンゴトン揺れている。

私は夏子ちゃんが気付いてないとこで起きたことを説明してあげた。

「え？何あなた、まさかこうなること予想してラスクたちに魔法かけっぱにしてたの？」

「え？何が？」

「……」

「……」

「ごめん。沙鳥頭いいなって思った私がバカだった」

「ちょ、どういう意味よ！？」

意味が全く分からなかったけど、バカにされたことだけは分かった。

「ほらほら、叫ばない叫ばない。周りに迷惑かかるでしょ」

「なんか釈然としないんだけど……」

そんなもやもやを抱きながら、電車は目的地である天野町へ到着した。

「で？ここからどうやっていくの？」

「ん～と、今九時を回ったとこでしょ～。開くのが十時だから、歩いていかない？寄り道しながら」

夏子ちゃんは携帯を取り出しながら提案してくる。

この様子からして水族館に行く以外特に計画は立てていないようだ。

「さんせー。で？何かいいとこある？」

「あのさ、私別に情報通って訳じゃないから詳しく知ってるわけじゃないわけ」

「そういうのを事前調査するのが男の役目でしょ？」

「あらやだ、わたくしは女でしてよ？」

私がからかうように言えば、夏子ちゃんは今までで一番女らしい口調で返してきた。

「うわっ、意外とノリノリじゃん。しかも真樹の口調だし。やっぱり夏子ちゃんは真樹が好きなのね……」

「なんでそうなるの。あいつの口調が一番女らしいって思っただけ。取り敢えず歩こ。はい」

私に手を差し出してくる夏子ちゃん。
その手をじっと見て、決心した。

ぎゅっ

「なっ……！」

夏子ちゃんは驚きの声を上げた。

私は、夏子ちゃんの腕に抱きついたのだ。

もちろん私の自慢の胸もぐいぐい押し当てています。

「さ、沙鳥、それは流石に……」

「いーでしょー今日は夏子ちゃん私のいーなりなんだからー」

「でも、ほら！そんなことしてるとお前百合扱いされるぞ！」

なかなか煮え切らない夏子ちゃんにばっさりという。

「もーこの際だから周りは気にしなぁい。実際美少女には萌えるし、夏子ちゃんに分かってもらえれば問題なし！」

うっ、とうめき声を上げると、強ばらせていた体の力がほぐれていくのを感じる。

夏子ちゃんも決心ついたようだ。

「じゃ、早く行きましょうか」

「はぁい」

私たちはくっつきながら歩いていく。

む～、抱きつきながらだと歩きにくい。

「ごめん。普通に手、繋ぐ」

「おま……。ったく、わがまますぎるでしょ……」

夏子ちゃんの文句を聞き流しながら、寮から出るときと同じように手を繋ぎ直した。

その時、ふと行きたい場所を思いついた。

「ねぇ夏子ちゃん」

「ん？何？」

だから案を出してみる。

「私ゲーセン行きたい」

「ゲーセンねぇ。あるかな？」

夏子ちゃんは立ち止まって携帯を取りだして、ポチポチボタンを押す。
多分検索をかけてくれてるのだろ。
内容が気になったので夏子ちゃんに引っ付き携帯画面をのぞき込む。
「夏子ちゃんボタン打ち早いね」
「ありがと。お、出た。んーとね、こっちが駅だから……多分行く途中にあるよ」
そういうと、ある程度地図を覚えたのか携帯を閉じた。
「別にいいけどさ、女装してデートして最初の行き先がゲーセンってどうなの？」
愚痴っぽいものを夏子ちゃんが呟きながら、歩き出す。
「別にいいじゃん。私たちらしくて」
「女装を私たちらしいに含めないでください」
「私たちらしいよ。もしかしたらこの先、夏哉と香君（かおる）がデートするかもよ？」
「そのネタはもうやめて」
冗談で言ったつもりなのに、夏子ちゃんは顔をゆがめて、しかも青くなっている。

「なんかあった？」

「あぁ、そういえば言ってなかったっけ？私一昨日香苗と回ったでしょ？」

「うん」

「そしたら私たちＢＬと間違えられた」

「ぷっ！な、何それ！」

「いやね、転んだ香苗を抱き止めたら周りの女の人にそんなこと言われた」

「へぇ。でもちょうどいいじゃん」

「何が？」

「夏子ちゃんと香君がデートすればなんの問題もない」

「またね沙鳥。今日は楽しかったわ。また明日」

夏子ちゃんは私の手を解き駅へ逆戻りしようとした。

「わーわー！夏子ちゃんごめんっ！私が悪かった！夏子ちゃん男装なんかに興味ないもんねっ！普通の女の子が大好きなんだもんねっ！」

「ま、まぁ確かにそうなんだけど、なんか素直に頷けない……」

何はともあれ、無事夏子ちゃんをとどめることに成功したので、ゲーセンに向けて歩きだそうとしたのだが――

「あ、あの……」

「はい？」

話しかけてきたのは大学生っぽい女性。
その後ろにもう三人。

話しかけてきた女性は赤面している。

状況は大体読めた。

じゃんけんか何かで負けて罰ゲーム的な感覚で話しかけてきたのだろう。

「えと、天雲、沙鳥様ですよね？」

「そうですが？」

私が返すと、後ろ三人がキャーキャー騒ぎ出す。

今更だけどどうして皆返事を返すだけで騒ぐのだろうか。
まぁ皆と言っても話しかけてきている人はそれどころじゃなくてテンパっているけど。

「そ、その、えー、あー、お時間、ありますか？」

「えっと……」

ちらりと夏子ちゃんの方を見た。

夏子ちゃんは一言、ご自由に、と言っただけだった。

「じゃあ五分くらいなら」

「あ、ありがとうございますっ！私たち、沙鳥様の大ファンなんですっ！えと、えと、しゃ、写メと、サイン的なのをお願いしますっ！！」

どうやら枷が外れたようで、勢いよくしゃべりかけてくる女性。

好いてくれるのは嬉しいけど、やっぱり限度ってものがある。

今回のこれは許容範囲なのでちゃっちゃと終わらせて夏子ちゃんとのデートに戻りましょう。

――――――――――

沙鳥がファンの人に捕まってしまった。

俺は巻き込まれないように沙鳥たちから距離を置いて見守る。

それにしても、女装が功を奏したのかは分からないが今のところ俺を目の敵にしようとするやつは出てこない。

とは言ってもまだ寮を出て一時間すら経っていないから警戒は怠れ

ない。

しかし沙鳥はホント有名人だな。
どうして沙鳥と仲良くなれたのかが未だに不思議だ。

そんなこと言えば、あんたも特別扱いするのか、と怒られるだろうから言わないが。

と、沙鳥をじっと見ていると思いついたことが一つ。

「沙鳥が変装してりゃ問題なかったんじゃね？」

どうして俺が女装してるかって言うと、沙鳥と男の状態でデートすると親衛隊どもが嫉妬して襲いかかってくるから、その嫉妬を軽減させようと女の姿になったんだ。

だったらことの発端である沙鳥を変装させればどうなっただろうか。

俺が男の状態でも親衛隊はデート相手が沙鳥とは気付かず、嫉妬に刈られることがなくなる。

「はぁぁぁぁ～」

俺は大きなため息をついた。

今まで散々沙鳥をバカバカ言ってたが、人のことは言えない。
こんな単純なことも気付かない俺もバカだ。

いやしかし、沙鳥には俺を一日自由に使える権利を与えられているから、結局は女装する運命にあったのかと、俺は自分の不遇に嘆く。

こんなことなら恥ずかしい思い我慢して空ねぇとツイスターゲームやってればよかった。

今更ながらに後悔していると、後ろから誰かに声をかけられた。

「ねぇ、君今一人？」

「え？」

振り返ると、チャラそうな男三人。
皆高校生ぐらい。

えっと、これはまさか……

「お、やっぱ可愛い」

「ほら言っただろ？俺の読みが当たった」

「バーカ。俺が最初に目ぇつけたんだよ」

三人が何やら俺を品定めするような視線を送る。

そして一言。

「俺たち今男ばっかでむさ苦しいんだよね。だから一緒に遊ばない？」

い、いやあああああああああああああっ！！
お、おと、男、男にナンパされたあああああああああああッ！！
やだやだやだやだやだやだやだやだっ！
何これめっちゃ鳥肌物だよ！！
こいつらバカじゃないの！？
なんで女装って気付かないの！？
目玉腐ってない！？
いや気付かないで！
そのまま女装だって言うこと気付かないでいて！
変態だって思われたくない！！
ていうかなんなの！？
可愛いとか嫌がらせ以外の何者でもないでしょ！！
俺なんかより沙鳥とか香苗とか真樹とかその他大勢の方が可愛いんだからっ！
あぁなんか何考えてるのか分からなくなってきた！

とりあえず俺のやることは一つ！

「逃げる！」

きびすを返して逃げ出す。

「お、ちょ、待てよ！」

三人組の内の一人は反射神経が高いのか、咄嗟に俺の肩を掴んだ。

あくまでこのチャラ男たちは俺を狙うらしい。

ならちょっと脅しましょうか。

俺は左手で肩を掴んでいる手に触れる。

「お、やっとその気になってくれ――」

何か言おうとしていたようだが、途中で止まる。

なぜならその男は空中で逆さまになっているから。

「あれ？」

上から間抜けな声が降ってくる。

俺は左手で触れた瞬間、素早く右手で相手の肘を掴み、宙にあげたのだ。

背負い投げに似たモーションだが、背負ってない為一本釣り投げとか言っておこうか。

男が地面に背中をつける瞬間、流石に頭をぶつけたら大事になると思い腕を上げた。

「イガァァッ！！」

下はマットなどではなく堅いコンクリートだから衝撃がほとんど吸収されない為、痛みは強烈だろう。

腕を放すと痛みでのたうち回る。

「ねぇ、私を帰してくれない？」

残りの二人にちょっとドスの利いた声で言えば、二人とも恐怖に顔を歪めて、倒れている男を回収して退散した。

「はぁ、よかったぁ」

ホッと一息つくと、沙鳥が駆けつけてくれた。

「夏子ちゃん！大丈夫！？」

俺の正面まで来てくれた沙鳥の肩を掴む。

「はへ？」

「さ、さとりぃ、怖かったよぉ！男たちにナンパされてガチで怖かったよぉ！」

情けないことは重々承知していたが、あの恐怖には耐えられなかった。

涙は流してないとはいえ涙目にはなっている。

幸か不幸か女装していたために男が女に泣きつくといった印象は、周囲にはついていないだろう。

「よしよ～し、もう大丈夫だからね～」

沙鳥には頭を撫でられた。

――――――――――――

こ、これは本格的に危険かもしれない。

私は夏子ちゃんの頭を撫でながら思う。

夏子ちゃんが冗談抜きで女の子に見えてきた。

ここまでくると、だんだん笑えなくなってくる。

「ほ、ほら夏子ちゃん。早くゲーセン行こ？あ、その前にさ、近くにコンビニあるみたいだからソフトクリームでも食べよ。私食べたくなってきた」

「……分かった」

夏子ちゃんはだんだん冷静になってきたのか、涙は引いて赤面している。

そりゃ見た目はどうあれ中身は男な訳だから、女である私に泣きついたとあっちゃ恥ずかしいでしょ。

ここでそのことについてからかうなんて真似は私には出来ないので、もう触れないことにした。

私たちはソフトクリームだけ買ってコンビニを後にした。

私はバニラ、夏子ちゃんはチョコを買った。

これは話を逸らすために買ったのではなく、普通に食べたかったか

ら買ったので早速上からがぶりと食べる。
口の中に甘さと冷たさが広がって美味しい。

ふと夏子ちゃんを見れば、なんと舌をチロチロ出して、まるで女の子のように舐めていた。
依然夏哉がソフトクリームを食べてたときは私同様大きく食べていたのに。

「な、夏子ちゃん?その食べ方、女の子っぽいんですけど……そこまで徹底しなくても大丈夫だと思うけど?」

「女の格好しろって言ったやつに言われちゃ世話ないわね」

「うっ……」

夏子ちゃんの言うとおりだった。

「まぁ冗談はさておき、あんま大口開くとメークが崩れるから食べ物はちびちび食べろって空ねぇに言われたの」

「空お姉ちゃんが?ふぅん。女の子って大変だねぇ」

「現役女の子が言っちゃダメでしょ」

「だって私メークしたことないし」

「現役女子高生より先にメーク体験してる私って……」

夏子ちゃんの気持ちはよく分からないけどいい思いをしてないのは分かる。

「あ、ねぇねぇ、あれじゃない？ゲームセンター」

落ち込んでたと思ったら前方に指を指す。

あれは確かにゲーセンだ。

「おぉ、意外と近かった」

「何やりたいの？」

夏子ちゃんが聞いてくるけど、それは愚問と言うやつではなかろうか。

「デートでゲーセン言ったらプリクラしかないでしょ」

「……え、これで撮るの？」

「もち！さぁ急ごう！」

夏子ちゃんの手を引きながら、若干駆け足で近づく。

中に入り、真っ先にプリクラコーナーに向かう。

別にプリクラに詳しい訳じゃないので一番近くにあったものに入る。

「えっと、まずはピースで行こっか」

「え、まずは！？一回じゃないの！？」

「あったり前じゃん。ほら、早く早く」

というわけで私たちはいろいろ撮って、書き込みとかフレームとかつけてみた。

で、一番しっくり来たのが――

「これ、ちょっとよくない？」

「いやいや、アウトでしょ」

――お互い見つめ合い、両手を繋ぎ合い、ハートと百合の花を咲かせたものだった。

第八話　《七章》ナンパ（後書き）

作者「間に合ったあああああああああっ！」

香苗「わっ、いきなり何叫んでるの？」

作「俺は昨日言った。休みの今日に投稿します、と」

アン「投稿できてるな」

作「有言実行できたぁぁぁぁぁぁっ！」

ア「喜ぶことじゃなくて普通は当たり前のことなんじゃないのか？」

香「アンさん正解」

作「う、うるさいっ！でも俺は自分を誉める！なんたって今日は１４時００分から書いて１７時３０分に終わった。五千字以上を携帯でたった三時間半で終わらせたんだぞ！？しかもプロットのような類はなし！これを誉めずにいられるか！もう親指限界です……」

ア「ふぅん、三時間半か」

香「つまり一日六話分書けるね」

作「え？」

ア「頑張れ作者。確かお前二百話出完結させたいんだろ？」

香「えっと、学校があるから……計算上大晦日には終わる！」

作「待て待て待て！香苗！それは間違えだ！俺も確かに計算してぎりぎりいけそうなのは計算したが、感想返信、アイディア出し、後書きなどをやる時間がない！」

香「あっ！！」

作「全く、初歩的なミスを」

ア「だが、お前の誕生日には終わるよな？」

作「え？」

香「あ、それなら余裕だと思うよ」

作「ちょ、待て！厳しすぎる！」

ア「有言実行できたんだ、言ってしまえ」

作「それは無理！絶対言えん！！」

香「でも作者前に、この小説を初めて更新した５／１４までには更新するって言ったよね？」

作「そ、それはまぁ」

香「それは過ぎないよね？」

作「す、過ぎないように頑張ります……」

ア「と言うわけで今回はここまでだ。ｖｉｃｔｏｒさん、クロスライトさん、ソラトさん、アダマンタイト改めフォルスさん、感想ありがとうございました」

香「次回はいつ更新されるか分かりませんが、出来れば待っていてください」

第八話　《八章》嫉妬

私たちは十時半過ぎ、つまり一時間弱ゲームセンターで時間を潰し、メインである水族館に向かう。
意外だったのが、夏子ちゃんレース系が全く駄目で、コンピュータ最下位を争うほどだった。

「夏子ちゃん、水族館ってどのくらい時間かかるか分かる？」

「それって到着時間？水族館にいる時間？」

「到着時間」

「んっと、駅から大体二十分くらいだから、ここからだと十五分くらいじゃないかな？」

「うぇ、意外と歩くのね……」

「ならバス乗る？丁度バス停あるけど」

夏子ちゃんが前方を指さした。
そこには確かにバス停の看板が。

「ん～、歩いていこ。あんまお金かけたくないし」

「そのくらい払いましょうか？」

「だぁめ！夏子ちゃんただでさえ三人養ってるんだから、お金は使

っちゃだめ！」

こんなところで使わなくても、私と夏子ちゃんなら体力は全く問題ない。

それにお金は節約した方がいいだろう。

夏子ちゃんバイトしてないんだから。

「なんかありがとね。気を使ってくれて」

「どーいたしまして。さてさて、ちょっと早めに行こっか。早くいるか見に行きたいっ」

「あれ、いるかいたっけ？」

「え、いないの！？確かちっちゃい頃見た覚えあるんだけど！」

「いや、マジになんないで。私もわかんないから」

「もぉ、洒落になってないってば」

「ごめんごめん。でもいるかねぇ。私水族館初めてなんだけど、どんな感じ？」

「へぇ、夏子ちゃん行ったことな――」

途中で思い出した。

夏哉の昔を。

「ご、ごめんっ！その、えっと……」

どうしよう、私のせいで嫌なことまで思い出させてし待ったかもしれない。

あたふたしてると、ぽんっと繋いでいない方の左手で夏子ちゃんは私の頭を撫でた。

「気にしなくていーよ。私平気だから」

夏子は優しく微笑みながら許してくれた。

「うぅっ、気が利かなくてごめんねぇ」

「大丈夫だって。沙鳥は図太い方が丁度いい」

「図太いって、私こう見えても神経質よ？」

「んんっ？なんか沙鳥からは似つかわしくない言葉が出てきたんだけど？」

「そんなことないってば。少し前だって――」

と、こんな話したら駄目だ。

絶対暗くなるし、何より変に夏哉を追い込んじゃう。

「なんか悩みあるの？」

「あー違う違う。私個人的なことだから、気にしないで」

気取（けど）られないように笑ってごまかす。

「……」

そんな私をジッとみた夏子ちゃんは自分の肩に提げている女物のバックの中を探り始めた。

「ど、どうさたの？」

「ほれ」

そうやって前に掲げられたのは、開いた状態のコンパクト。

どうして夏子ちゃんがこんなのを持ってるかはさておき、夏子ちゃん的に考えて今重要なのはコンパクトではなくそれに付いている鏡。

それは私に向けられているから、当然のごとく私の顔が移る。

「うわっ、酷い顔」

見てすぐ分かった。

頬がひきつっていたり、眉間にしわが寄ってたり。

多分これなら他人が見ても私とは分からないんじゃないか、ってほど酷い。

夏子ちゃんはコンパクトをしまい、ある方向を指さした。

「とりあえず行き先変更。カラオケ行こ」

指さした場所には夏子ちゃんの言うカラオケボックスがあった。

この状況で拒否権がある訳ないと思っている私は、夏子ちゃんの手の引かれるままに歩いていった。

中に入っても、お互い曲を入れようとはしない。
それが目的でないことはお互い分かってるから。

何を言えばいいか分かんないから考えていくと、沈黙が流れる。

「俺さ」

その沈黙を破ったのは夏哉。
女口調で言わないのは場の空気を読んでのことか、二人きりだからか。

「今思うと沙鳥のことあんま知んないんだよな」

そんな風に言われると、私も夏哉について考える。

「……私も、同じかも」

「一応フォローするけど、香苗もアンも知らないことが多いからな」

「だろうと思った」

少しだけ間が空く。

「何考えてたか教えてくんね？さっきの顔は酷かったぞ」

「……」

私はすぐに答えられなかった。

ここに来て言いたくなくなった、というわけではなく、なんて言えばいいか分からなくなったのだ。

夏哉は何も言わずに待っててくれる。

すると、ノックの音が聞こえた。

店員が飲み物を持ってきてくれたようだ。

夏哉は立ち上がり、ドアの前でやり取りをしていた。

私の顔を見せないためだろうか。

それが終わり、夏弥は私の前に飲み物を置いてくれたが、あんまり飲む気にはなれなかった。

一度深呼吸する。

取り敢えず、言葉にしてみよう。

「ごめんなさい」

「それは、何について？」

「折角夏哉が女装してまでもデートしてくれたのに、暗い空気作っちゃって」

「ま、暗いデートってのはあんまよくないよな。どっちかと言えば

楽しい方がいい」

「うん……」

「……」

「……」

「……」

「……あのさ」

「ん？」

「夏哉、私のこと好き？」

「好きだ」

「カナも、アンちゃんも、だよね？」

「……そうだな」

「私の何が好きなの？私の何処に惚れたの？」

「……それで、悩んでたのか？」

「だって、私そんなに特徴ないじゃん。カナは頭いいし、道具とかいろんなの使えるし、ちいさいし。アンちゃんだってスタイルいいし、気が利くし、戦いだって出来るし。私だってさ、夏哉好きになった頃はスタイルに自信あったし、魔法も出来たし、カナが知らな

いマンガのネタとかも知ってたけどさ、アンちゃんが来たら魔法は向こうの方が得意だしスタイルだって私と変わらないし、マンガも読み始めてるし。普通の子みたいになれたけどさ、普通じゃ夏哉の気が引けないじゃん。特徴なくなったら何で気を引けばいいか分からないじゃん。ねぇ、なんでさ、夏哉の好きな人にアンちゃんがいるの？カナなら分かるよ？カナと私同じ時期に夏哉と会って好きになったんだもん。だけどさ！アンちゃんは違うじゃん！アンちゃんはいきなり夏哉のとこ来てさ、突然告白したら私たちと同じポジションに来たじゃん！しかも来て数日で同棲始めちゃって！ねぇ！夏哉はアンちゃんが好きなの！？それ言ったら私たちが傷つくって思ってるから言わないで皆好きだって言ってるの！？ねぇ、どうなの！？教えてよ！私、やだよ！私夏哉がいいよ！！カナじゃなくて、アンちゃんじゃなくて私と一緒にいてよっ！！好きだから！！夏哉のこと大好きだからッ！！」

気付けば涙を流していて、ポタポタとズボンに垂れていく。

そして、夏哉の服にしがみついた。

「なんで……！なんで私アンちゃんけなしてるの！？私アンちゃん大好きなのに！！夏哉とおんなじくらいアンちゃんと一緒にいたいのに！！夏哉なんで？なんで私アンちゃんに酷いこと言ってるの？やだよぉ。こんな私やだよぉ！どうにかしてよっ！！」

自分で何を言ってるのか分からなくなってきた。

内容もメチャクチャになってて、最悪意味も理解できないかもしれない。

でも、一度言葉にしてしまったらもう止まらなくなってしまった。

アンちゃんの悪口なんて言いたくないのに。

夏哉を追い詰める事なんて言いたくないのに。

嗚咽で言葉を詰まらせていると、夏哉に抱きしめられた。

そして耳元でささやかれる。

「ありがとう」

「……え？」

この場の意味を理解するのが遅れた。

どうしてこの状況でありがとうなんて言えるのだろうか。

そう思っていたら、再びささやき始めた。

「アンってさ、人間じゃないじゃん？」

「……うん」

「しかも魔法とかも凄いし力もあるでしょ？」

「うん」

「なんかさ、重なっちゃったんだよ。無駄に力があって人じゃなくて、しかも会ったときは俺にしか見えなくて独りだったろ？俺は一応人で、家族がいたけど、結構つらくてさ。やっぱ話し相手とか、俺を見てくれる人が両親二人しかいなくてさ。でも学校行ってお前

と香苗に会ったらさ、事情知らないとはいえ会話してくれたじゃん？実はさ、凄く嬉しくて寮で泣いちゃってさ。ただ単に俺のこと見てくれるのが嬉しかったからさ。でもこっちじゃアン、誰も見てあげられないだろ？だから余計に構ったっていうか、つらい想いさせたくなかったっていうか……。でも、沙鳥たちと差別しちゃったな。ごめん。二人とも先に告白してくれたのに先延ばしたり、もう一人増やしたり。そんな俺にさ、今も好きだって言ってくれてさ、ホントありがと。凄く嬉しいのにさ、やっぱり決められなくて、ホントにごめん。傷つけたくないからとかじゃなくて、本当に皆好きで。誰かを決めないと皆傷つくって頭じゃ理解してるつもりなのに、いつも先延ばしにしちゃって。沙鳥はさ、特徴ないとか言ってるけど、お前がいてくれるとよく笑えてさ、明るくなれるんだ。空気を和ませてくれるっていうか、心が暖かくなるんだ。でもやらなきゃなんないときには絶対ふざけないでさ、俺たちの間を繋げてくれて。あと、何より沙鳥と一緒にいれて凄い楽しくてさ。それが、沙鳥の好きな理由じゃ駄目かな？」

夏哉の言葉を聞いて、私たちのことを凄く思ってくれてるって分かった。

聞いてて凄く嬉しい。

「でも、私今明るくしてないよ？夏哉の言うように夏哉和ませてないよ？今の私じゃ、夏哉楽しくないでしょ？なのに、好きなの？」

「好きだよ」

「なんで？」

「沙鳥は人だよ？ずっと明るくしていくなんてこと出来る訳ないじ

ゃん。こうやってアンに嫉妬したり自己嫌悪したりするよ。だからさ、そうなったときは――ごめん、なんでもない」

真剣な雰囲気を漂わせていたのが、夏哉の普通のとテンションでの謝罪によって霧散されてしまった。

「え、何？いきなりなんで謝るの？というか何言おうとしたの？」

私も流していた涙は止まってしまい、普通のテンションになってしまう。

「今、沙鳥慰める言葉言おうと思ってたんだけど、それが無性に恥ずかしい言葉だと咄嗟に判断したためやめました」

「聞きたいな～」

私は上目遣いで頼んでみる。

「いや、それはちょっと……」

ぷいっと顔を逸らされた。

「……。夏哉の優柔不断なせいで私は……」

「うっ！」

「夏哉が他の女の子にかまけてるから私は……」

「さ、沙鳥さん？あなた充分図太いと思うのですが……」

「だって、夏哉が言ったんだもん」

私たちはジッと見つめ合った。

すると夏哉は俯いてしまった。

「お前が元気よく飛びまわる為にある天が雲に覆われるんなら、俺がそれを払って光を照らしてやる。柊って魔除けがあるって言われてるんだよぅわあああああああッ！！もう無理沙鳥変なこと言ってごめんなさいっ！！謝るから今のせりふ忘れてください！！」

淡々と言い終わった瞬間に叫び、発狂した夏哉。

正直あんな状況で私の名前に掛けた台詞を言えるのは凄いと思った。

さすが主人公。

感心しながら夏哉の顔を見れば、膝を抱えてうずくまっていた。

律儀に靴は脱いでいる。

そんな夏哉に私は近づき、顔に手を伸ばした。

「夏哉」

顔を上げさせ、ちょっとだけ視線が交わると、その頭を優しく抱きしめた。

「ありがとう。こんな私を好きになってくれて、本当にありがとう。大好きだよ」

私は再び涙を流した。

それは当然嬉し涙。

私が考えてたことを知ってもらえた嬉しさ。

夏哉が考えてたことを知ることが出来た嬉しさ。

私が夏哉のことを好きになれた嬉しさ。

夏哉が私のことを好きになってくれた嬉しさ。

一つ一つの嬉しさを噛みしめながら、私は涙を流す。

「水戸黄門も言ってたよな」

「え？」

なんの前振りもなく、私の胸の中で呟かれた。

意味が分からない私は戸惑うことしかできない。

私は夏哉の言葉を待った。

「人生楽もあれば苦もある。そりゃ当然だよな」

「……いいこと言ってるけど古くない？」

「いいの。でもさ、沙鳥ずっと苦しんだんだから、次は楽しみがくるんだよ」

夏哉は私の腕を解いて立ち上がった。

「歌お。さっきまで暗い話だったから、今から歌ってプラマイゼロにして、午後の水族館で巻き返そ――」

ぎゅるるるる～

あ、夏哉のお腹が鳴った。

「……」

「……」

「……」

「……」

「「プッ、くはははははははっ！」」

私たちはお腹を押さえながら笑った。

もうこれでもかってくらい笑った。

この空間に、暗い空気なんて微塵も存在しなくなった。

「さ、さとり……くふっ！」

「な、何なつ、プッ、な、夏哉？」

「やっぱさ、沙鳥は笑った方が可愛いよ」

「ぬぅっ！？」

いきなりの不意打ちで変な声が出て、しかも顔が赤くなる。

「な、なつやぁ。不意打ち卑怯～。それにそんな台詞、他の女の子にも使うんでしょ？」

「いやいや、使いませんよ。じゃああれだ。もう今の言葉は沙鳥以外には使わない」

「言ったね？言っとくけど文字変えるの無しだからね！笑顔が可愛いとか、笑った方が似合うとか！」

「えぇいいでしょう！やってやろうじゃないの！」

「言ったら夏哉、私ん家に一週間泊まりのお風呂同伴ね」

「別にいいよ、関係ないし。でもそれだと不公平だから、このカラオケの総合点数俺が上なら今ここで頼むの昼飯奢れ！ちなみにお前が勝ったら割り勘」

「いーじゃないの！じゃあ早速勝負よ！」

マイクを握り、選曲する。

今このときを楽しむために。

第八話　《八章》嫉妬（後書き）

作者「……死んでいいですか？」

真樹「これはいくらやっても慣れないのですね」

沙鳥「作者が落ち込んでる理由は、後書き頑張って書いたのに、最後の最後で携帯の電源ボタン押して全消去されてしまったからです」

作「皆様には申し訳ありませんが、私の精神的に同じ文を書くのはつらいので、要件をまとめようと思います」

真「１、本日、停滞中だったなのはの更新が再会しました」

沙「２、今日はなのはと魔法使いの二話分を一日で書きました」

真「３、なんと作者は無謀にも今日中に魔法使いもう一話投稿するぞ、と意気込んでいます。ちなみに全く書いていません」

沙「４、今回湿っぽい話になってすみません」

真「最後に、ｖｉｃｔｏｒさん、フォルスさん、クロスライトさん、ソラトさん、感想ありがとうございました」

作「短いですが、これにて失礼！！三話分を一日で書くなんてしたことないですが、２３時５９分まで諦めません！！」

第八話　《九章》水族館

「じゃ、今度こそ水族館行きましょうか」

俺は沙鳥の手を引いて歩き出す。

しかし繋いだ手の先は重く、力を入れないと動かない。

「沙鳥ー、行こうよー」

そう呼びかけても、沙鳥はぼーっとしたままだ。

仕方なく詰め寄って顔をぎりぎりまで近づける。

「わっ！」

沙鳥にしてみたら、急に俺の顔がドアップに映ったように見えたのだろう、驚きの声を上げる。

「な、夏子ちゃん、どうしたの？」

「ほら、早く行くよ。もう十二時半なんだから」

カラオケは二時間制のを利用したので、利用時間より十分程度早く外に出ている。

「う、うん」

しかし、なんとも歯切れの悪い返事だ。

まだ調子が戻ってないのか。

「大丈夫？また鬱に入った？」

「いや、大丈夫だけど……ねぇ、またカラオケ行かない？」

突然、沙鳥からそんな申し出を受けた。

「え？いや、なんで？さっき行ったばっかでしょ？」

別にカラオケが嫌いというわけじゃない。
というか何気に今日初めてのカラオケで、しかも相手が沙鳥な為凄い楽しかった。
沙鳥の美声を聞けてよかった。

「だって私もう一回夏哉の美声聞きたい！！」

ん？
今変な単語が聞こえた気がする。

「あの、沙鳥さん？美声はあなた様ではございませぬか？それに俺カラオケで歌ったの初なのですが」

「私に点数勝っといてそれ言う！？しかもカラオケ初体験マジ！？あと一人称私にして！」

沙鳥はなにやら大層興奮しているようで全部叫びながらツッコむ。

「ねぇ、ちょっと落ち着いて。まぁ確かに勝ったけど、二点差だったじゃん」

お互い十曲ずつ歌い、千点満点。
沙鳥は９２４点で平均９２，４。
俺はその二点プラスで９２６点の平均９２，６。

「いや、やっぱ点数なんてどうでもいい！！ねぇ夏哉お願い、今度でもいいからまたカラオケ行こっ！？皆連れて行っていいから！！」

「別にいいけど、そんなによかった？普通に歌ってただけなんだけど……」

「めっちゃよかったっ！！絶対カナもいたら褒め称えるよっ！！それに聞いた女の子は惚れる！！だから私とカナと真樹と空お姉ちゃんと魔族三人組以外じゃ絶対行っちゃ駄目だからねっ！」

「わ、分かりました」

どうやら俺の歌は沙鳥に好評だったらしい。
歌った曲と言えばアニソンが主だけど。
これで特技が増えた、でいいのかな。

「沙鳥、俺特技欄にカラオケ書いていい？」

「ぜひ書いて！！あ、いや、もし歌えって言われたらその女の人惚れちゃうから……やっぱ書いちゃ駄目！」

「待て待て。どうして私の特技欄見る人が女の人って決まってるの？」

「夏子ちゃんだから」

「答えがシンプルすぎて全く意味が分からない……。で、とりあえずカラオケは置いといて、次の目的地は水族館でいいね？」

「あ、うん。いいよ」

俺たちは五分くらいかかってやっとカラオケボックスの前から進んだ。

「ねぇ、水族館行ったら最初に何見よっか」

子供のようにうきうきしながら聞いてきた。

「そんなこと言われても、行ったことないからなぁ。沙鳥は、いるかだっけ？それでいいんじゃないか？」

「でもさ、いるかって基本ショーじゃない？」

「ん～、確かにそういうイメージはあるな。行き当たりばったりじゃ駄目？」

「それが妥当かな。じゃ、そうしよっか」

移動中は二人で自分のことを話した。

お互い、自分のことを知ってもらおうと。

でも過去が過去のためにあんま密度の濃い話とは行かなかったけど。

それでも、ちょっとだけお互いのことを知ることが出来た。

そして十五分後、目的の水族館に入った。

「すみません、学生二――じゃなくて学生一枚、大人一枚お願いします」

「へ？」

「はい、かしこまりました。学生一枚に、大人一枚ですね。学生の方は学生証を提示してください」

驚く沙鳥に肘で小突いて学生証の提示を促す。

慌てた様子で取り出す。

事前に持ってきてと言っておいたので、きちんと提示することが出来た。

俺は大人料金分を支払う。

「えぇっ！？あ、天雲沙鳥さんっ！？」

受付の人は多分仕事を忘れて叫んでいる。

「わ、わわっ……本物だぁ」

受付は興奮と感動が入り交じった声を吐き出した。

「えっと、これでお願いします」

俺に遅れること二十秒弱、チケット代を出した。

「あ、はいっ！これをどうぞ！」

渡されたのは二枚分のチケット――だけじゃなかった。

「あの、只今スタンプラリーの方をやってましてね！これを十六時までに七つ全部集めると抽選で三名様に商品が用意されてるので、ぜひよろしくお願いしますっ！！」

俺は沙鳥と目を合わせた。

ひとまずやることは決まった。

――――――――――――

中に入って、早速私たちはスタンプを探す。

「むー、やっぱり地図にゃ乗ってないね」

「お金かかってるから、当然といえば当然だけど」

受付を入ってすぐにあった無料パンフに記載されてある地図をのぞき込みながら、私たちは呟く。

「なんか法則的なのあると思う？」

「私たち、いつものメンバーの中じゃバカコンビだよ？あったとしても分からないって」

「ですよね～――って、そういや夏子ちゃん。なんで受付で学生証見せなかったの？五百円引きなのに」

五百円あればお菓子いろいろ買えるのに。

「あのね沙鳥ちゃん、あなたは今私の事なんて呼んでる？」

「何って、夏子ちゃんだけど？」

「学生証に書いてあるのは柊夏哉。しかも顔写真あるよね？」

「……あ、女装バレる」

ちょっと考えればすぐに思いつくようなことだった。

きっとカナなら、夏子ちゃんが気付く前に気付けるだろう。

これがバカと天才の違いだと思った。

ザッとパンフに目を通すと、あるものに気付いた。

「あ、ねぇこの吹きだしって」

紙の隅っこにあるある一部を指さす。

そこにはサメのミニキャラが台詞を言っていた。

「えぇっと、『スタンプラリーは毎週火曜日限定で、場所はランダムだぜ！見つけたきゃ歩き回れっ！！』歩けということだな」

「そうだね。それで、いるかって……あぁ、やっぱりショーがある。これは……」

「十四時。約一時間後だな」

「ならさ、ここいこっ！」

私が指さしたのは森コーナーという、名前からしてアマゾン的なのを連想する場所だった。

「いいよ。じゃ、行きましょうか」

「うん」

私たちは再び手を繋ぎあい、森コーナーのある方角に向かう。

そして歩いて一分も経たないくらいの時間。

「あ、ねぇ沙鳥。あれ、そうじゃない？」

夏哉が指さしたところには、なんとスタンプが置いてあった。

そして少しだけど人が集まっている。

「おおっ！あったあった！」

私たちは自然と小走りになった。

私たちが到着した頃にはたった一人待ちになっていて、すぐ順番が回ってきた。

私たちの番になると少しだけ話し合った。

「ねぇ、どっちが先に押す？」

「ん～、沙鳥先に押したい？」

「そういう訳じゃないけど、見つけだの夏子ちゃんじゃん？」

「まぁ確かにね。あ、じゃあさ」

夏子ちゃんはなにやらいいことを思いついたようで、笑顔になっている。

「私下持つからさ、上持ってよ」

夏子ちゃんの言いたいことが分かった。

私は二つ返事で了解すると夏子ちゃんが持ったスタンプの上に手を載せる。

「じゃあ行くよ？」

夏子ちゃんの声で、まずはインクを付ける。

二、三回トントンと叩いたら、今度は紙の上に持ってくる。

「じゃ、せーのっ」

トンッ

夏子ちゃんの言葉に合わせてスタンプを降ろした。

七つあるウチの一つが埋まった。

そこには緑色のトビウオのミニキャラが描かれている。

因みにこの辺りにトビウオらしき魚は一切見えないため、場所とスタンプのキャラはマッチしてないことが分かる。

「ねぇ、ここって全部鮫かな？」

「いや、ここの場所だけでしょ。後ろは別の魚泳いでるし」

夏子ちゃんは辺りを見回しながら答えてくれた。

確かに、ここの鮫とは違って後ろでは数えるのもイヤになるくらいの魚が泳いでた。

「あれなんの種類だろ」

「見てみよっか」

私たちは説明がかかれている看板を見に行く。

「あ、マイワシだって」

「イワシなんだ～。すっごい量」

「あ、沙鳥」

「ん？」

私がイワシの群に魅入っていると、夏子ちゃんに名前を呼ばれた。

顔をそちらに向けると、説明文の一部を隠していた。

「イワシって感じでどう書く？」

「分からない！」

夏子ちゃんのお尻の言葉に被せるように答えた。

「少しは考えようよ。というかこれは普通に常識だと思うんだけど」

夏子ちゃんは呆れた表情で私を見る。

「もう、こんなところでもお勉強はやだよぉ。もっと楽しもうよ～」

そう言いながら私は夏子ちゃんの腕に抱きついた。

ここに来てから抱きつこうと思っていたのだが、すっかり忘れてた。

ここなら長距離歩くことはないので、安心して抱きつける。

「しまった。抱きつかれる前に抱きつけばよかった」

「いやいや、夏子ちゃん背が高いから無理でしょ」

あははと笑い合いながら、私たちは歩いていく。

すると目の前に一面ガラス張りで、ドーム状の廊下があった。

これはもしかしなくてもあれだろう。

「ね、ねぇねぇ！ねぇ夏子ちゃん！行きたい行きたい！あそこのトンネル見に行きたいっ」

ぐいぐい引っ張ると、夏子ちゃんは足を止めてくれた。

「はいはい。コースは外れちゃうけど、問題ないね」

進路を変更して水中トンネルをくぐりに行く。

そこは、まるで海のようだった。

「わぁぁぁぁっ」

「すげぇ」

夏哉も驚いているようだ。

そこには多種多様の魚たちが優雅に泳ぎ回っていた。

色も様々で、なんかいっぱいいすぎて統一性がないなって感じ書した。

それでも、いや、それだから絵になっている。

小さい魚が群になって私の横を通り過ぎたと思ったら、今度は大きなエイが頭上を通り過ぎる。

完全に見惚れていると、トントンと肩を叩かれた。
振り向くと、夏子ちゃんが携帯を構えていた。
「一緒に取りましょうよ」
もちろんその申し出にはすぐに頷いた。
私たちの背景に泳ぎ回る魚たち。
そんな写メを何枚も何枚も取っていった。

時間なんてものはあっという間に過ぎ、今は十四時二分前。
いるかのショーが始まろうとしていた。
ショーが始まる前に見つけられたスタンプは三つ。
ショーが終わったらすぐに探しに行こう。
で、私たちは最前列に座ることが出来、その際係員からビニールを渡された。
水が飛んでくるということなんだろう。
今か今かと待っていると、隣に座っている夏子ちゃんが真剣な表情をしていた。

「どうしたの？」

「いや、空ねぇにこれだけはやめてって言われたことがあって」

「うん」

「顔は濡らすな」

「あ～、メーク？」

「沙鳥メークなんて……」

「出来るわけがないね」

「だよね。だからちょっと本気で躱すね」

夏哉が真剣な顔をしている意味が分かった。

だけど……

「私がどうにかしちゃ駄目なの？」

大っぴらには言えないが、私が魔法を使えば夏子ちゃんの心配ごとは一瞬で解決すると思う。

別に水を弾くくらい大した労力じゃないし。

「な、なんかそれだと負けた気がするから……」

少しだけ顔を逸らしてよく分からない言い訳をする。

「えっと、それを訳すと、普通に気付かなかったけど今更頼むのもどうかな、って訳でいい？」

「違う。せっかくビニール貰ったときからどうしようか必死に考えてたのに、隣でなんとも単純で的確な答えを叩きつけられて、恥ずかしくて逃げたい」

声にはあまり感情は入ってなく、淡々と言ってる感じなんだけど、いかんせん顔が朱色に染まっているため、恥ずかしがっていることが容易に分かる。

「ほんっと夏子ちゃんって可愛いよね。私を悶えさせるのが作戦なの？それなら成功だよ」

「そんな作戦立てても考えてもない。ほら、始まるよ」

夏哉が行った十秒後、司会のお兄さんの挨拶から始まり、いるかショーが始まった。

もうなんていうか、凄いの一言に尽きる。

いるかの口先だか鼻先だかは知らないけど、そこに人の足を乗せて大ジャンプする人間ロケットや、いるか単体での大ジャンプからの三回転。

その他にも水面を起用に体を起こしながら泳いだり、飼育員が投げるゴムボールを尾ヒレで叩いて、狙った場所に当てたりと。

ホント様々なことをしてくれた。

そして一番驚いたのが、最前列に座っている人の中からいるかと握

手するっていう企画があって、その握手する人はいるか自身が決めるっていうことになっていた。

いるかは全部で四匹いた。
つまり選ばれるのは四人だけという事だ。

その四人の中に、私と夏子ちゃんが選ばれたのだ。

最初夏哉が選ばれてたから、写メ撮ってあげようと思ってたのに、私も選ばれたから撮れなかった。

いるかたちは水槽の縁（へり）のところに器用に身を乗り出してヒレを差し出してきた。

係員の指示に従って握手をすると、何故か夏子ちゃんのいるかだけ興奮したように尾ビレを水面に何度も何度も叩きつけてバシャバシャした。

それがあまりにも力強かったようで、水しぶきが上から、まるで雨でも降ったかのような量が振ってきた。

夏子ちゃんはもちろん、隣にいた私もびしょびしょだ。

その光景に観客はドッと笑う。
幸い夏子ちゃんは、水をかぶる寸前に頭を押さえたためカツラが流された、という心配なかった。
しかしメークの方はそうは行かず、若干崩れている。

係員はこの事態は予想外だったようで何度も謝られた。

帰り際の『普段はおとなしい女の子なのに……』などという呟きを聞いたときには、私はどうしてこうなったのか納得した。
流石は夏子ちゃんと言っておこう。

服がびしょ濡れになってしまったため、乾くまでということで洋服を借りた。

ここで半ズボンとか来たらちょっと女装がバレるんじゃないかと心配したけど、丁度よくゆったりしたズボンだったため、まあよかった。

上は半袖だったけど、夏哉は案外腕細かったので問題ない。

肝心のメークだけど、一応夏哉は空お姉ちゃんに基本的なレクチャーを、もしもの為に受けていたらしいのでなんとかなった。
でも当然空お姉ちゃんほどとは行かず、若干男っぽく見える。

でもやっぱり少しはなれたところから見れば女なので、取り敢えず外には出れる

さて、いるかショーも終わったことだから残りスタンプ四つを時間内に探さなければ。

第八話　《九章》水族館（後書き）

作者「一時間と五十分オーバー」

夏子「結局有言実行は出来なかったな」

アン「まぁこれが作者だと言われれば納得できるがな」

作「そんならしさはいらないんだけど……あぁ、でも頑張れば間に合ったのに！！」

ア「いや、何をどうしたら間に合うんだ？こんな約二時間を」

作「実はさ、二十時半過ぎから二十三時半の間、寝てた」

夏「なるほど。三時間寝たわけだ」

作「今部屋が寒いからさ、布団の中こもって小説打ってたんだけど、十九時半から書いて二十時半の間にだいたい三割程度話が書き終わったから、？これなら終わる！！？って思ってたんだけど、急に俺が人探しをし始めたんだ」

夏「は？」

作「髪の白い人なんだけど、どうにかして行き止まりの部屋まで追い込んだんだけどその人が消えてて、そうしたら何故か俺が倒れたんだ」

ア「いや、わけが分からないんだが」

作「そうして気付いたら日が覚めて」

夏「夢かよ」

作「携帯を見たら二十三時半。やっべぇとか思って急いで小説打ち始めたんだけど、この時間になってしまいました」

夏「もし前回の後書きで１１／２６に投稿することを期待してしまった人がいるなら、謝ります。ホントウチの作者が申し訳ありませんでした」

ア「そこについての感想もいつでも待ってます。もっと早く更新しろ、と言われれば作者のタイピング速度が上がる、かもしれないので」

作「よろしくお願いします！！」

夏「じゃあ、ここまで読んでくれてありがとうございました」

ア「フォルスさん、クロスライトさん、ソラトさん、こんな短い間に感想をくれてありがとうございました」

第八話　《十章》襲撃

『では皆さん！！お待ちかねの抽選の時間が始まりますよ～！！』

「な、なんとか間に合ったね」

「そうだね」

息を整えながら言う私に、夏子ちゃんは自然に返してきた。

私たちはさっきまで小走りでスタンプを探し回っていた。
とは言っても探し回ったのは十六時十五分前から。
それまでは『ま、残りはすぐ見つかるでしょ』的な雰囲気だったんだけど、残り一個が全く見つからなかった。

慌てた私たちだったけど、私が不意に『そういや入り口見てなくね』と口にしたら、迷わずそこに向かった。

なんと残りの一つは、受付を通ってすぐ脇にあった。

そりゃ意外すぎて見つからないって。

何はともあれ、すべてのスタンプを見つけた私たちは、息を切らしながらギリギリ十六時に間に合ったのだった。
その証拠として、左腕には青いリボンが巻かれている。
これはすぐそこでスタンプカードを見せた時に貰った。

リボンには数字が書かれていて、私は６９、夏子ちゃんは１０１と書かれている。

『さあ、今回の商品はこちら！！私たち天野水族館と提携させて貰ってる、ここから少し離れたところにある友路町（ゆうじちょう）にある遊園地、フレンドランドのペア無料チケットを三名様に！！』

「ねぇ、？ていけい？って何？」

私の知らない単語が出てきたので隣に聞いてみる。

まぁきっと夏子ちゃんも分からないと思うけど。

「タイアップ、っても分からないか。一緒に協力して仕事する事だよ」

「なんで分かるのっ！？私たちバカコンビって言ってくれたのに！？」

酷いや！

夏子ちゃんは私を裏切るのね！

「いやいや、このくらいは普通に知ってるもんでしょ。というかバカコンビとか言ったけど、香苗とか真樹に比べりゃ私たちバカでしょ？でも沙鳥と同レベルのバカになった覚えはない」

「むぅ、仲間だと思ってたのにぃ……」

「だったら勉強してここまで来なさい」

「夏子ちゃんいじめないでぇ」

「ほら、そろそろ黙りなさい」

「はぁい」

『それでは抽選開始します！！今回七つ全部見つけた人たちは百三十三人！この中で見事当選する人は誰なんでしょうか！？』

皆に申し訳ないけど、誰が選ばれるかはだいたい見当はついている。

「ま、一人は私だろうね」

「なんで？」

「忘れた？私だよ？それに隣に主人公がいるし」

抽選方法はくじ引きで、係員が持っている箱の中に百三十三枚の紙が入っている。
その紙には一枚一枚数字が書かれていて、その数字と、私たちがつけているリボンに書かれている数字が合えば、見事当選という風になる。

だから係員がその気になれば私を当選させるなんて朝飯前。

「ま、もらえるんだからもらって、夏子ちゃん、また一緒に行こ？」

「いいよ。じゃ、その時はまたカラオケ行く？」

「行く！」

「でもこういう話するときに限って選ばれないというね」

夏子ちゃんの言っていることは分かる。
いわゆるフラグという奴だ。
でも安心しなさい。
「そんなたかがフラグで私を称えない普通の人がいるなら、私とっくにそういうフラグ立てまくってるから」
『出ました！まず最初の当選者は……６９番の方！！』
「ほらね？じゃ、行ってきまーす」
私は夏子ちゃんに手を振りながら、観客の周りを歩いていき、司会の人が立っているステージへと上がる。
ステージに辿り付くまでの間に、歓声が沸き起こる。
今までは私に気付いていても話しかける勇気がなかったけど、皆でワーワー叫ぶのは平気ってところかな。
『おおっと！どうやら一人目に選ばれたのは、あの有名な天雲沙鳥さんのようです！！わざわざこんなところまで足を運んでくださいまして、職員一同嬉しい限りです！！』
事情をある程度予想出来てしまっているため、その言葉がちょっと白々しく感じる。
でも無料券をもらえるんだからイヤな顔はせず笑って受け取ろう。

ステージを上ると、係員がチケットを既に用意していた。

『天雲沙鳥さん、おめでとうございます！！ぜひお友達と楽しい時間を過ごしてください！！』

「ありがとうございます」

ここで微笑めば、更に皆の声が大きくなる。

叫んでないのは夏子ちゃんがだけじゃないだろうか。

受け取ると、すぐに階段を降りて夏子ちゃんがいるところに戻る。

「お疲れ様」

「別に疲れてないけど」

「これからどうしよっか」

夏子ちゃんが今後の予定を聞いてきた。

「夏子ちゃんは予定あるの？」

「決めてない。香苗と来たときは時間も短かったから、結構時間詰まってたんだけど……」

「帰りますか？」

「ま、そうですね。帰って夕食の用意もしたいし、さっさと女装を終わらせたいし」

そうか、このデートが終わると夏子ちゃんがみれなくなるのか。

「……これから一生夏子ちゃんで貫き通す気ない？」

「沙鳥が死んでも有り得ない」

「じゃあ私が死んで、女装したら蘇るっていったら？」

「性転換してでも蘇らせる」

この言葉がおふざけなのか、本気なのかは私には分からなかった。

分からなかったけど、どっちにしても凄く嬉しいことだった。

「ありがと、夏哉」

「何言ってるの？私は夏子よ？」

夏子ちゃんの言葉に、私は驚いた。

「あ、ねぇ今夏子って言ったよね？」

「言ったけど？」

「じゃあ夏子ちゃんはずっと夏子ちゃんとして生きるって決めたんだね！？」

「今日だけはね。明日からはちゃんと柊夏哉に戻るから」

「夏子ちゃんのケチぃ」

「うるさい」

結局夏子ちゃんは残り二人には選ばれなかった。

私たちは借りてた服を返し、麦谷町へ戻ることにした。

「ねぇどうする？もう解散？それともどっちかの家行く？」

麦谷駅に到着して、私はそんな質問をした。

はっきり言ってまだ遊び足りない。

まだまだずっと夏子ちゃんと遊んでたい。

因みに遊園地の件は電車の中で既に決めた。

再来週の日曜日、七月四日だ。

ホントはもっと早く遊びたいけど、夏哉の金銭的にちょっと待ってといわれた。

自分が大変なのに私にかまってくれるのは、嬉しい半分申し訳ない半分だ。

「ん～、水族館で言ったけど、飯の用意したいから――」

「じゃあ一緒に作ろーよ。新婚バリバリの雰囲気で」

「新婚ねぇ。まぁいいでしょう。子供たちにおいしいご飯を食べさせてあげましょう」

?子供たち?という単語に吹く。

「何?私たち高校生にしてあんなでっかい子供が三人もいるの?」

「じゃああいつらに頼んで幼稚園児くらいにして貰おうか?」

あの三人が小さくなった姿を想像して、また吹く。

「ちょっと、やめて夏子ちゃん!お、お腹痛い!」

「な、なんかさ、皆目つき鋭いって言うか、つり目だから生意気そうじゃない?性格も退化してるとして」

「あ、分かる~。で、そこに現れたお姉ちゃんキャラのカナが皆をまとめるというね」

「あいつ張り切りそ~。あ、沙鳥沙鳥。もし私らが家族だとしたらどうなりそう?人間関係無しで」

「えぇ、家族~?」

また夏子ちゃんも難しい疑問を持ち出す。

確かに面白そうな議題だからちょっとデートを忘れて、真剣に考えてみる。

でも考えるまでもなく一人は決まった。

「カナは末っ子だよね？」

「まぁ当然だよな」

そこはもし夏子ちゃんが違うと言っても全力でそれを否定する。

「でもさ、ネハラも末っ子って感じしない？」

「あっ！うん、分かる分かる！分かるけど、でもどっちかっていうと……あぁもう！夏子ちゃん女の子多すぎ！」

「そう言われても……。あぁ、じゃあこれは？あいつら双子で、香苗が男、ネハラが女」

「双子か～。でもカナが香君（かおる）なのはナイス！」

でも仮にあの二人が二度だとしても、共通点がほぼ皆無。
二卵性双生児という奴か。

「もしそうなると、香君の方が兄貴分かな？」

「多分な。お姉様お姉様だだこねるネハラをたしなめる香君って感じか」

それはとってもイメージがしやすい。
ただ、私の想像ではあの二人は幼稚園が小学一年くらいの大きさになっているが。

「じゃあ肝心のお父さんとお母さんは？やっぱお父さんは夏子ちゃん？」

「いやぁ、これはちょっとガチで考えたんだけど、ラスクはどう？」

「んんんんん～、そう来たか～。ラスクさん巨乳越えて爆入ってるからな～。あれをぺったんにする想像がつかない」

「えぇ、でも私よりはしっくり来ない？」

「いや、そうでもないよ。夏子ちゃんがお父さんの方が私的にはしっくりくるって」

なんかネハラちゃん辺りがうるさいといちいち注意して、そしたらなんやかんやで一緒に遊んでお母さんに『ちょっと遊んでないで家事手伝ってよ』とか言われそう。

「じゃあ仮に俺がお父さんだとして、お母さんは？」

「ここは私！って言いたいところだけど、理想な家族設計を作るなら、一番ピッタリな子は真樹だと思う」

「お前もガチで考えたか」

えぇガチですとも。

こういうところで欲望に負けず、客観視出来るところが、この議題に真剣に取り組んでいると夏子ちゃんに理解して貰いたい。

「多分真樹は夏子ちゃんにがみがみ言うけど、最後の最後では夏子

ちゃんの言うことに従うんだよ」

「ま、まぁ想像できなくもないけどさ、でもラスクと空ねぇが娘って感じがしないんだけど」

「まぁ確かにね……」

親が夏子ちゃんと真樹という時点で、私は娘確定したから、空お姉ちゃんとラスクさんが姉という立場になってしっくりくるけど、夏子ちゃんと真樹の娘って言われると疑問に思ってしまう。

何かよく収まる方法はないかと考える。

私の中では夏子ちゃんがお父さんなのは確定なのだ。

じゃあお母さんがラスクさん？

いや、ラスクさんはお母さんって言うよりかは、夏子ちゃんの言うとおり性格だけを見ればカッコいい女性って感じでお父さん肌だ。

ならば思い切って夏子ちゃんを長男にする？

でもやっぱり夏子ちゃんと真樹っていうカップリングが一番しっくりくるというか、悔しいけど息がピッタリな感じがする。

だったらラスクさんと空お姉ちゃんを両親にして夏子ちゃんの彼女を真樹にする？

でも、夏子ちゃんと真樹は恋人って言うより若いながらも熟年夫婦の貫禄を醸し出すような関係だから微妙。

夏子ちゃんがお父さんでラスクさんもお父さん。

真樹がお母さんで空お姉ちゃんもお母さん。

「あ、じゃあこれでいいじゃん」

私はパッと閃いた。

「何かいいの思いついた？」

「もう一組作っちゃおうよ。空お姉ちゃんお母さんのラスクさんお父さんで」

「あ、うん！しっくりくるしっくりくる！で、じゃあさ、そうなるとネハラがこっちで、香苗がラスクたちの子供じゃね？」

「ん～、でもさ、ネハラちゃんのお姉ちゃんはアンちゃんで、カナのお姉ちゃんは私だよね？」

「だからさ、空ねぇの遺伝子はアンより沙鳥の方が持ってない？で、アンは真樹、かな」

言われてみるとそうだ。

空お姉ちゃんの明るさ、というか朗らかさはアンちゃんよりは私が持っている。

対する真樹の冷静で少し堅い性格はアンちゃんの方が持っている。

「おぉ、決まったね」

討論の結果、私たちを家族としたとき、家族は二グループ出来て、片方は夏哉、真樹夫妻の長女アンちゃんで次女ネハラちゃん。

もう一つはラスクさん、空お姉ちゃん夫妻の、長女私長男香君に決定した。

「私さ、香苗泣くと思うんだけど」

「なんで？」

結構いい家族が作れたと思うんだけど。

「その、いいづらいんだけどさ、皆、胸、大きいでしょ？」

「あ、そういやそうだね」

私たちのグループの中でバストトップ2が香君の家族にいるから、香君はふさぐと思う。

だけど……

「香君男だから問題ないよ。胸なんて育たない」

「ねぇ、この家族構成、絶対皆に言わないでよ。殺される」

夏子ちゃんの言うことに一理ある。

主に夏子ちゃんは真樹に、私はカナに。

「あれ、そう言えばさ」

「ん？」

「なんでこんな話になったんだっけ？」

「えっと……あぁ、あれだ。今日の晩飯一緒に作ろうってなって」

「思い出した思い出した！で、子供たちに作ろうってなったんだっけ」

「そうそう。で、問題がひとつ」

「何？材料ないの？」

「いや、一応あるんだけど、やっぱりラスクとネハラが食べられなくてさ」

そうだった。

あの二人はどう頑張っても地球の食べ物は食べられないんだった。

「もしかしたら、味は伝わるかもしれないんだけど……食べた後が……」

「……うっ」

夏子ちゃんも想像したようで、ちょっと顔を逸らす。

私たちの予想は、食べたものが全く吸収されず、そのままの状態で排泄物として出て行くという感じだ。

あ、そう言えば。

「夏子ちゃん、そう言えばアンちゃんたち、おトイレどうしてるの

？」

「え？あ、そう言えば行ったとこ見たことないな」

「じゃあ魔族ってそういうこととしないんだ」

「全部吸収するってことだから、やっぱり人間より高性能だね」

「まぁ高性能とか今更な気がするけど」

「だね」

っと、そう言えばまた本題からそれてしまった。

夏子ちゃんと話してるとついつい目的を忘れてしまう。

「で、結局ネハラちゃんたちどうしようか」

「ん～、どうしようか――って、あれ？」

不意に夏子ちゃんが変なところで言葉を途切らせた。

顔を向けると前をじっと見てる。

何かいるのかなと思い視線を追った。

小さな黒髪の少女が、地面に散らばっている荷物を拾っている。

ちょっと離れて顔は見えないけど、スカート穿いてるし髪も長いので女の子だろう。

まさか夏子ちゃんのように女装はしてないと思う。

「沙鳥さん」

「いってらっしゃい」

何がいいたいのかすぐ分かったので、一言だけ見送りの言葉を送る。

「ありがと」

夏子ちゃんは少女へ駆け寄った。

――――――――――

俺は少女へ駆け寄った。

顔は俺たちよりは幼く、香苗くらいか、ちょっと上といった感じだろう。

例えが香苗で本人に申し訳ないが。

「ねぇ、君大丈夫？」

少女は顔を上げた。

俺はその顔に少し引っかかりを覚えた。

どこかで見たことあるような顔をしている。

でも黒髪のこんな子には会ったことがない。

もしかしてどこかの道ばたで見かけただけだろうか。
そう思ってると、今度は聞き覚えのある声がした。

「大丈夫よ。変態の化け物さん」

こ、この声は確か――ていうかどうして化け物って!!

疑問点がたくさんありすぎて混乱しているところに、少女は俺に向けて体当たりをしてきた。

バチッ!!

それとほぼ同時、心臓に強い衝撃を受けて、俺は気を失った。

第八話　《十章》襲撃（後書き）

作者「くそー！！更新遅れたッ！！」

沙鳥「いつも五日置きぐらいに更新する作者が言うねぇ」

作「だって、今日は午前中に更新する予定だったんだけどさ」

香苗「普通に十七時だね」

作「昨日は頑張って二時まで起きて更新したんだけど、さすがに集中力が切れまして、寝ようと思っても変に目が覚めてなかなか眠れず、やっと寝たのが午前三時。そして朝起きたのが八時半過ぎ。朝飯食べてよし小説書こうと思ったら指がかじかんでなかなか動かせず、ようやく動くようになったのが十二時くらいで、今に至るというわけです」

香「昨日頑張って起きて時間内に書いてれば午前中ももっと早く書けたかもしれないのにね」

作「ごもっともです……。で、申し訳ありませんが、もうちょっと頑張って小説もう一話投稿しますので、後書きは短くさせてください」

沙「ソラトさん、ＳＴさん、フォルスさん、感想ありがとうございました。またよろしくお願いします」

第八話　《十一章》電話

私は目を疑う。

目の前で起こった出来事が信じられなかった。

夏哉が倒れた。

転んだわけではない。

立ち止まっていたんだから。

私には何が起きたのかさっぱり分からなかった。

ホントに前振りもなく倒れた。

なんで？

なんでっ？

なんでッ！？

立ち尽くすことしかできなかった私を一瞥するひとつの視線。

先ほどの少女のものだった。

表情は見えないものの、分かることがある。

全く怯えた素振りをしないのだ。

しっかりと両足で立って、ちらりと私を見る。

そして私のいる方向とは逆に向かって、走っていった。
その少女の動きがあったから、私も枷が外れたかのように我に返った。

「夏哉ッ！！」

荷物なんて邪魔な物をかなぐり捨てて、夏哉の元へ駆け寄る。
きっと、いや、百パーセントあの少女がやったのだ。
夏哉を倒したことへの怒りがこみ上げるが、今はそんなものどうでもいい。
夏哉が第一優先だ。
側まで駆け寄って、俯せになって動かない夏哉の安否を確認する。

「夏哉ッ！！ねぇ起きて夏哉ッ！！」

肩を揺らしてみるが、全く反応を示さない。
もしあの少女が何かやったとしたら、それはお腹とかその辺りだ。
どうなっているか確認するため、無理矢理体を仰向けにした。

「な、何これ……」

夏哉の左胸に当たる服が焼け焦げてぽっかり穴が空き、服の下にある肌も焦げて水膨れのように腫れている。
見てて気持ちのいいものではない。

「夏哉ッ！！ねぇしっかりしてよ！！夏哉普通の人とは違うんでしょ！？化け物なんでしょ！？だったらこの程度で気絶なんてしないでよッ！！」

私が呼びかけていると、クシャッという、ビニール袋のようなものの擦れる音が鮮明に聞こえた。

勢いよく振り向けば、やはりビニール袋を持っている、銀髪を肩で揃えた少女が立っていた。
ビニールの中身は食材のようだ。

目が合うと、少女はたじろいだ。

「あ、その、えっと……い、今、声が聞こえて……。その、きゅ、きゅ、救急車、呼びましょうか……？」

しどろもどろになりながら、どうしてここにいるのかを答えていく。

少女の要領の得ない、つっかえながらの言葉を聞いて、私は少しだけ頭を冷やせた。

そうだ、ただ叫び散らかしても無意味だ。
専門の人を呼ばないと。

既に少女は携帯を出して準備をしていたので、早速頼もうと思っ―
―たのだが、少しだけ待ったをかける。

今から救急車を呼ぶより、真樹に連絡した方が早いんじゃないか、と。

「待って。お願いがあるんだけど、私の携帯から早乙女真樹に電話して。私ちょっと頭まだ完全に冷えてないから、追いかけてくる」

素早く立ち上がり、ポケットにしまってある携帯を出会ったばかりの少女に渡す。

天雲沙鳥に頼まれたんだからきっとやってくれるだろう。

皮肉なことに、嫌ってた自分の立場が役に立ってしまった。

でも夏哉のためならどうでもいい。

夏哉を少女に任せることが出来たので、再び抑えていた怒りが溢れ出す。

私は夏哉をこんな目に遭わせた少女を見つけるために走り出す。

絶対に許さない……！！

――――――――――

偶然現場に居合わせてしまった。

と言っても一部始終見てたというわけではなく、聞き覚えのある綺麗な声で、最近聞いた名前を、のどが裂けるんじゃないかと思うほど強く大きな叫びを耳にしたので、何があったのか野次馬精神で近づいたのだ。

積極的に関わることは嫌だったので、最初は影から覗くだけにしようって思ってたんだけど、私が思ってた以上に酷いことになってたらしい。

人が倒れていた。

その人の目を覚まさせるように女の人――天雲沙鳥さんが名前を呼び続けていた。

そんな光景にたじろいでしまい、持っていたスーパーの袋の音を立ててしまった。

あんなに叫んでたんだから聞こえない、と思って素早く立ち去ろうとしたんだけど、何故か音は聞こえていたらしい。

天雲さんと視線があった。

心臓が破れるんじゃないかと思うくらい、緊張して鼓動が高鳴る。

こんな大変な状況なのに、軽い気持ちでただ見に来た私に、有名な天雲さんはなんて言ってくるのだろう。

そう考えると、緊張に加え恐怖も上ってきた。

少しでも不快な思いをさせないようにと、今ここにいる理由と、これからした方がいいんじゃないかと思うことを言った。

でも、言ってちょっと失敗したって思った。

声が震えてちゃんと喋れなかったし、救急車を呼ぶには知らない人に電話をかけなければならない。

余計に怖くなった。

関わりを持ったことのない人と会話をするのは苦手だ。
例え相手が事務的な反応で対応してくれたとしても。

だから極力他人と話さないようにしてきたのに。

しかし、天雲さんは救急車を呼ぶのに待ったをかけた。

もしかして電話しなくていい？

そんな淡い希望が生まれたのも束の間、天雲さんは私にお願いごとを言って携帯を渡すと、どこかに行ってしまった。

残されたのは私と、？夏哉？と呼ばれていた女性……なのかな？
夏哉って名前は男性が使う名前だし、私の知ってる夏哉って名前の人も男の人だった。
でもワンピース着てるから女の人、だよね。

倒れてる人の性別について考えると、私は自覚する。

また現実逃避をしている、と。

このまま何もしなければ、天雲さんに怒られるからいやだ。
でも天雲さんの携帯で電話すれば、早乙女真樹さんという知らない人と会話をしなければならないからいやだ。

二つのいやなことが襲いかかり、何もしたくなくなる。
でもどちらかを選ばなきゃいけない。

だったら確実に怒られる天雲さんよりは、もしかしたらすぐに終わるかもしれない電話を選んだ方がいい。

私は恐る恐る携帯を開き、電話帳を開いた。

そしてそこにあるサ行の一番上にきている早乙女真樹さんの携帯番号を押した。

耳元で、コール音が重たく鼓膜を震わせる。

この待ち時間も酷く胸を締め付ける。

二回コールがなると、相手は電話に出た。

『もしもし、沙鳥様いかがなされましたか?』

「あ、あの、その……すみますん……」

私の言葉を聞くと、早乙女真樹さんは明るいしゃべり方から一転、真剣な声を出した。

『申し訳ございません、どちら様でしょう?名前をお伺いしてもよろしいですか?』

「え、えと、篠原(しのはら)、神奈(かんな)です……」

『篠原さん、ですわね。えぇと、どうして沙鳥様の携帯からかけて

いるのか、説明できますか？』

「あっ、と……天雲さんから、渡されて、自分の代わりに電話して、と言われて……」

『ふむ、確認ですが、その携帯は沙鳥様本人からわたされて、わたくしに電話をするように、と言われたのですね？』

早乙女さんは私なんかと違ってハキハキと私の内容をまとめた。

私の言葉、分かりにくくて苛ついてないかな。

「は、はい……」

『では、ゆっくりでいいので、どうして電話をしてきたのか教えてくださいませんか？』

「えっと……ひ、人が倒れてて……」

『人……。服装や髪型の特徴を言って貰いませんか？』

「はい」

説明とか、私が一番苦手な分野だ。

私の言い方を間違えれば、相手の受ける印象がガラリと変わってしまうから。

「か、髪は暗い茶色で、耳の辺りで横にはねてます。服装は、オレンジ色のトップスを着てて、青のワンピースを着ています」

『そうですか。分かりました。周りに人はいますか?』

「いえ……」

見回すが、誰もいない。

どうしてこういうときに私しかいないんだろう。

『でしたらもう少しお付き合いください。今いる場所を説明出来ますか?詳しくなくても、何処と何処の間、でもよろしいので』

この周辺の地図を思い出す。

ここから一番近い、そして目印になるものと言えば……

「え、駅からずっと西の方に歩いて言ったとおりです」

『西、ですわね。ちなみに大きな八回建てほどの建物は見えますか?寮なのですが』

「い、いえ……」

『分かりました。では今からそこに人を向かわせますので、まだお時間の方はありますか?』

ここでないって言えば、電話は終わるんだろう。

そうすれば辺に緊張しなくて済む。

でも、

「だ、大丈夫です」

私は緊張の中、嘘をつける程器用じゃなかった。

『ありがとうございますわ。では再び質問をさせて貰いますが、沙鳥様はどうされましたか？』

「その、冷静になれないから追いかけるって……。な、何を追いかけるかは、聞いてないんですけど……」

『教えてくれてありがとうございます。では夏――っと、倒れている方についてですが、近づいて確認出来ますか？』

「は、はい……」

恐る恐ると近付く。

すると見えてきた。

ちょうど心臓の辺りにある服には穴が空き、肌が焦げたように黒く、腫れている。

「うっ……」

見ていられなくって顔を背けた。

『どうしましたかっ？大丈夫ですのっ？』

少し慌てた風な声を出す早乙女さん。

あんなに冷静だった人も慌てることがあるんだな、と今はどうでもいいことを考えていた。

「は、はい。その、胸の辺りに腫れがありました。あと焦げてるみたいで……」

『胸の辺りに、腫れ……。あ、そういえば伝え忘れたのですが、そこに倒れているのは恐らく私たちの友人で、女装をした男だと思いますので、そのつもりで対応してもらえると嬉しいのですが』

え、じょ、女装っ!?

言われてみれば顔つきは男っぽいけど、でもなんで女装した人が外に出歩いてるのっ!?

出歩いちゃダメっていうわけじゃないけど……。

じゃあ天雲さんが夏哉って言ってたのはやっぱりこの人の名前で、私の知ってる柊夏哉さん、で合ってるのかな。

……柊さん、女装癖があったんだ。

ホント不思議な人だな。

『篠原さん？どうかなさいましたか？』

しまった、考え事に夢中で返事をし忘れてしまった。

怒ってないだろうか……？

「ご、ごめんなさい。その、考え事を……」

『大丈夫ですわ。落ち着いて。篠原さんがちゃんと慌てないで対応してくださるため、事がスムーズに運んでいますわ。ですから、少しくらいゆっくりでも平気です。しかし、まだ確認して貰いたいことがありまして……。よろしいですか？』

「はい、大丈夫、です……」

『ありがとうございますわ。まず、怪我をした人の周辺に凶器などの類はありますか？』

周囲を見るが、女物のバック以外は落ちてない。

「あ、ありません」

『でしたら、次に倒れている方の口元に手を当て、呼吸しているかどうか確認してもらえませんか？』

「分かりました」

極力胸の傷を見ないようにしながら、言われたとおり手を置く。

「呼吸は、してますけど……」

『どうかしましたか？』

「き、気のせいかもしれませんが、呼吸が一定じゃないっていうか、早かったり遅かったり……」

『そうですか……。でしたら、次に脈を計って貰いたいのですが、倒れてる方の右手人差し指からまっすぐ下ろしたところにある手首

の辺りに人差し指と中指を当ててください。これは脈が一定であるかどうかを計るためにやっていることなので、正確さは求めていません。リズムが違うな、と思ったら、そう申し上げてください。では一度携帯を置き、計ってくださいまし』

「わ、分かりました」

えっと、確か人差し指からまっすぐ手首に下ろしたところ……。

ドクン

確かに、すぐに脈を感じることが出来た。

それはいいんだけど、どうやら、脈が呼吸同様一定じゃない。

「あの、脈が早かったり、遅かったりしてて」

『一定ではありませんか……。あ、ちょうどいいですわ。わたくしが遣わせた人たちも到着しましたので、そちらにいる中学生の話を聞いてあげてくださいまし』

中学生？

どこにいるのだろうと辺りを見回すと、それらしき影が見えた。

その影がだんだん近づいてきて、姿が見えてきた。

金髪の女の人に、多分早乙女さんが言ってる中学生位の子が背負われている。

『では通話を終了いたしますわここまで情報を下さいまして、本当にありがとうございました。それでは失礼いたします』

そう言って早乙女さんは通話を切った。

すると画面に通話時間が明記されていて、十分越えていた。

「夏哉ッ！！」

すると金髪の女性が、倒れてる人の名前を呼ぶ。

しかしそれに反応するようなことはなかった。

私たちの元まで到着すると、背負われていた中学生は降り、代わりに倒れてる人をお姫様だっこの要領で抱え、すぐに走っていった。

「えっと、夏哉君の側にいてくれてありがとうございます」

中学生は私に対して頭を下げてきた。

茶髪を肩の辺りで揃えられている中学生は私よりかは幼く見え、中学一年といったところか。

「い、いえ、そんな……」

「えっと……そうですね。じゃあまず沙鳥ちゃんの携帯電話預かります」

そう言われたので、中学生に携帯を渡す。

「えっと、それで、ですね、お願いしたいことがいくつかありまして……」

「な、なんでしょうか？」

「出来れば、警察とかの通報は控えてもらいたいなーと。別に悪いことをしてるわけじゃないんですけど、あんまり大事にはしたくないなって思ってて」

その申し出は助かる。

そうなれば、わざわざ警察に電話する必要がなくなる。

「分かりました」

「それと、でも夏哉君をこんな風にした犯人は探したいから、ちょっとだけお話したいなーって思ってるんだけど、ダメかな？」

可愛らしく首を傾げる中学生に頷きかけるが、今お使い中だということを忘れていた。

「えっと、一旦家に帰ってからなら……」

第八話　《十一章》電話（後書き）

真樹「確か、二十七日は二つ更新するとか言ってませんでしたか？」

アン「言ってたなぁ」

作者「ごめんなさい。また眠気に勝てませんでした……。後今もめっちゃ眠いです。ホント読者様方には申し訳ないですが、後書きも短くしようかな、と思っています」

ア「別に問題ないだろ。こんな後書き誰も楽しみにしてない」

作「それはそれでちょっと悲しい気がするから頑張って起きる！」

真「メタ発言しますと、グダグダになる予感が十二分にしますわ」

ア「同じく」

作「じゃあいいもんっ！正直いつ言おうか悩んでたけど、そこまで言うなら今いってやる！！」

真「何をです？」

作「総合評価９００ｐｔ突破！！ストーリー評価も１００ｐｔ突破しました！！」

ア「……え、本当かそれ？」

作「本当ですとも！３５１もの方からお気に入り登録もされて、も

う嬉し過ぎます！」

真「皆さん本当にありがとうございますわ」

作「で、ようやく第八話の核心というか、メインの話に入ってきました」

ア「というとメインはあの篠原とかいう女か」

作「いちおー。で、今更ながらの今回の話のテーマは人間関係です」

真「そのテーマにはあの沙鳥様も含まれるのですか？」

作「含まれますね。というわけで、今回も魔法関係のお話ではないので、それは第九話でお待ちください。ではそろそろガチで眠くなってきた。寝落ちする前に真樹よろしく！」

真「ＳＴさん、感想ありがとうございますわ」

作「ん～、更新はやく頑張ると感想がなかなか来なくなるな……」

ア「書く暇がなくなるからな」

第八話　《十二章》魔の力

私は夏哉に怪我をさせた少女を探すために走り回る。

当てなんかない。

ただひたすら走り回る。

そうでもしないと、私の中にある何かが破裂しそうになるから。

破裂したら、きっと私は壊れる。

そんな私を、私は嫌悪する。

だから壊れないように、何かをして気を紛らわせる。

「サトリーッ!!どこいんのよ!?いたら返事でもしなさいッ!!」

すると私の耳にネハラちゃんの声が聞こえた。

一度足を止め、ネハラちゃんの声のした方向に走り出す。

「ネハラちゃん!!」

ここにいることを気づいてもらえるように名前を呼んだ。

ほんの十秒もしないうちにネハラちゃんの姿が見えた。

「ネハラちゃん!!夏哉が!夏哉が襲われたの!!一緒に夏哉襲っ

たやつ探し――」

パチンッ！

私がネハラちゃんに助けを求めようとしたが、ネハラちゃんは私の頬をビンタした。

予想外の痛みに、私は呆然となる。

「事情は少し知ってるわ。知らないやつからマキに連絡が入って、ナツヤが怪我して倒れてるって。それで誰かに襲われた可能性があるって事も」

知らない人、というとあの子がちゃんと連絡してくれたんだ。

「あんたの気持ちも痛いほど分かるわよ。私だってお姉様が襲撃を受けたらそいつ殺しに行くから。でも！マキが言うには今ナツヤマズい状況なのよ！？いや、マズくない状況でもあんたは襲ったやつよりナツヤを優先すべきなのよッ！！」

ネハラちゃんの言うことは理解できる。

理解できるけど、そこにいたとしても無力の私は何も出来ない。

「で、でも、わ、私、医者の知識なんてなんにもなくて、何も出来ないから、犯人捜そうと……」

言葉が弱々しくなっていく私を見て苛ついたのか、ネハラちゃんは私の胸ぐらを掴んで顔を寄せた。

「あんた何焦ってるのよ。あんたには魔法があるじゃない！！私よ

りも、ラスクよりも、お姉様よりも凄い魔法が！！」

あ……

「単純な力だけで見れば神の次の力を持ってるのよ！？そんな力を使えばナツヤの傷なんてすぐに完治するでしょうし、しなかったとしてもナツヤの苦しみを軽減できるでしょうがッ！！」

全身に力が抜けるのを感じた。

それは、まるで自分の間抜けさを体で表現しているようだった。

体を自分で支えることが出来ず、一瞬ネハラちゃんの腕だけで支えられていたがすぐに手を離され、地べたに座り込んだ。

そして、涙があふれ出す。

「わ、私……焦ってテンパって、夏哉にしてあげることが出来たのに……。自分の取り柄も忘れて、何も、しないなんて……！！」

この涙は謝罪と後悔と憤懣。

夏哉を助けてあげられなかった事への謝罪と、すぐに魔法を使わなかった事への後悔と、それを忘れてた自分の間抜けさへの憤懣。

「今、お姉様がマキの病院ってところにナツヤを運んで、ラスクが下手なりに治癒魔法をかけてるわ。私もラスクも、元からお姉様に怪我をさせない気でいたから治癒はかじり程度にしか出来ないわ。お姉様も、私たちよりは出来るけど今は移動中。そんなんじゃいくら二番目といえど集中出来なくて対したことは出来ない」

ネハラちゃんが、現状を教えてくれる。

「あんたはどうするの？ただ自分を怒って嫌って泣いてるの？」

「……やだ」

子供がだだをこねる風に、私は否定する。

「私に出来る事があるのに、何もしないのはもうやだ」

そうだ。

今の現状、もっとも高確率で夏哉を助けられるのは、カナでもアンちゃんでもなく、私。

夏哉の為に、私にしかできないことがある。

私は立ち上がり、涙を拭う。

「ネハラちゃん、まだ、間に合うよね？」

「知らないわよ。知らないけど、少なくともナツヤが死ぬまでなら間に合う範囲なんじゃないの？」

「なら平気だ。夏哉死なないもん」

私はネハラちゃんに向けて微笑みを浮かべる。

それを見たネハラちゃんも、同じく微笑んだ。

「じゃあ行くわよ」

一言言って、夏哉たちの方へ向かおうとネハラちゃんは背を向けた。

「待って」

そんなネハラちゃんを私は呼び止める。

「何？まさかまだ犯人捜したいとか言わないでしょうね？」

「言わないよ。ただ、質問に答えてほしいだけ」

私しか夏哉は助けられないんだ。
それなら誰よりも早く、夏哉の側に行かないと。

「何？」

「魔族って魔法で、テレポートか瞬間移動って出来る？」

これが私の中でもっとも夏哉のところで迎える方法だった。

「テレポートっていうのがなんだか知らないけど、瞬間移動なら出来るわ。でもそれ使うやつはほとんどいないし、使えてもほんの少ししか移動できないわよ？」

「ネハラちゃんは使える？」

「出来るけど……これでナツヤのところまで行くつもり？」

「そうすれば走るより早く着くからね」

しかし、いい案だと思ったのに、ネハラちゃんは私の案に否定的だ。

「言っておくけど、あれかなり大変なのよ？短い距離しかいけないし、でも魔力は使うし。戦闘にも最初の奇襲しか使えないわ。私の場合、いち早くお姉様に向かいたくて覚えたけど。それに移動先間違えて物体と重なったら死ぬわよ？」

それを聞くと、確かにリスクも多くて使い勝手も悪そうだ。

でも、ネハラちゃんの言うリスクならまだなんとかなりそうだ。

「距離が出せないのって、魔力が足りないからって事？」

「それもあるけど、単純に場所を把握できないからよ。瞬間移動の肝は、いかに移動先に自分を描くかよ。極端な話、今ここにいる自分の体を消して、移動先に自分の体を作るってイメージをする必要があるの」

もしネハラちゃんの言う通りなら、イメージが大変かもしれない。

でも、本当にそんなことをしなきゃいけないんだろうか。

疑問に思い、口にしてみる。

「……ねぇ、そのイメージ変えられない？例えば、自分のところと移動先のところに門みたいなのを作ってそこにくぐらせる、とか」

「いや、やったことがないから分からないけど……それもイメージ大変じゃない？」

「そうでもないと思うよ。ネハラちゃんたちさ、亜空間みたいなの

を作り出せるでしょ？」

そこにいろいろな道具とか食材などを収納してたのを見たことがある。

「出来るけど？」

「あれってさ、違う場所で開いても中身は変わらないでしょ？」

「そりゃそうよ。自分で作り出してるんだから」

「だったらさ、逆に言えば、亜空間から入り口と全く別の場所に出口を開くことも出来ない？」

難しく言ったつもりはないのだが、ネハラちゃんは頭を抱えて悩んだ。

「んん？じゃあ何？まず亜空間への入り口を作って自分が亜空間の中に入って、そこからまた別の場所に、入り口とはまた別の出口を作るって事？」

「そ。で、その亜空間を限りなく小さくすれば、一瞬で移動できない？そうすれば魔力も少しだけしか消費しないし」

「いや、確かに理屈は分かるけど……でも結局出口が安全か――いや、空に出口を作ればいいけるか？」

一応結論が出た。

「じゃあ話もまとまったし、早速ぶっつけ本番でニュー瞬間移動や

っちゃおっか！」

私は目の前に指で線を引いた。

「あ、待って！お姉様たちの場所はどうやって調べるのよ？」

「ラスクさんには私がずっと魔法かけてるし、今夏哉を治すために治癒魔法使ってくれてるんだよね？」

「あ」

――――――――――

私は真樹に言われた目的地に向かって走り続ける。

真樹も面倒くさい条件を付けたものだ。

空を飛ぶのを禁止、人間より少し早い程度での走行限定。

一刻も早く夏哉を治せる場所まで運びたいというのに、自分の走る早さが遅すぎて精神的につらい。

だが、真樹がこれを私に強いている理由も分かる。

夏哉を回収するためには幻術で姿を見せなければならないし、それは個人に対してだけでなく、その他大勢の人たちにもかけなければならないから、文化祭のときに使った応用で半径１００ｍもの範囲を走行速度にあわせて移動という、かなり集中のいる行為をしている。

よって、他のことに魔力は注げない。
目的地のナビもラスクに全部任せている。
「アンお嬢、次を左に曲がってください」
「分かった」
言われたとおりに曲がり、隣では全く離れないで夏哉に治癒魔法をかけてくれている。
「どうだ、様子は」
「……アタシには、ここが精一杯かもしれません。思いの外ナツヤのダメージが大きすぎてこれ以上変化が見られません。クソッ、もっと治癒を鍛えていれば……」
無力な自分に悪態を付くラスク。
ラスクの思う気持ちも分かる。
私に至っては、まず第一問題の魔力の不足だ。
最初はここに来たなら魔法はいらないって思い、簡単に聖界の神に渡してしまった。
今こそ魔力が必要だというのに
「それで、呼吸とか鼓動はどうだ?」

「少々お待ちください。……ダメです。まだ不規則です」

「チッ！ここから真樹の言ってた病院まで距離が長く感じる……！！」

憎々しげに言っても距離は変わらない。

「アンちゃん！ラスクさん！」

すると、上空から何故か沙鳥の声が聞こえた。

あまりの予想外の事態に、そんな暇がないのに立ち止まって空を見上げてしまった。

すると、空から沙鳥とネハラが降ってくるではないか。

沙鳥は魔法を使い、無事に着地した。

「さ、沙鳥、お前どうやってきた？香苗からはこっちとは反対方向に向かって走っていったって聞いたから、かなり距離があったと思うんだが……」

「説明は後。今から私のバカさを償うから、まずアンちゃんと夏哉の影薄くするね」

どういう意味だ、と言葉にする前に、沙鳥は私と夏哉の額に触れた。

それは一瞬のことで、すぐに離れた。

「これでちょっとやそっとじゃ周りに気づかれなくなった。それか

ら……」

次に夏哉の胸に沙鳥は手を掲げた。

その手には光が宿り、膨大な魔力が流れていった。

「な――――!?」

私はその量に驚く。

その魔力は現在私が保有する優に二十倍は越えていた。

詳しく言えば、夏哉が二十人いても出来ない芸当だし、手のひらサイズの炎弾を二千個作ってもお釣りが出る程だ。

魔力を治療に使ったとしても、その量が多すぎたのなら逆に患者を蝕んでしまう。

それは術者が、その膨大な魔力をコントロール仕切れず、流し込んだ魔力が治癒という効果を失ってしまうからだ。

魔力というのは、この世界で言う薬のようなものだ。

正しく御すれば術者にとって良薬となるし、御しきれなければ毒薬となる。

その光景を見て一番驚いたのが量ではなく、その全ての魔力を制御できていることだ。

沙鳥の魔力は力強く夏哉の体内へ潜り込み、しかしそれでいて優しく包み込んでいる。

矛盾しているかもしれないが、まず力で患部を破壊し、その後に優

しく治している。

つまり、一般的にはマイナスのものを徐々にプラスに変えていく、というものだが沙鳥の場合、マイナスの部分を一旦ゼロにしてしまい、そこから一気にプラスにしてしまう、という事をしているのだ。

沙鳥の方法は、確かに傷の治りは早くなる。

しかしその代わり、細胞を一旦破壊する為に患者（なつや）に激痛が襲うはずだ。

しかし、夏哉に痛がる様子は見えない。

気絶してるからか、と思ったが全くの無反応というのに違和感を覚える。

だったらもっと集中して魔力を感じよう。

そう思ってさらに感度を上げた。

どうやら私は先ほどの言葉を訂正しなければならない。

私は今日一番の驚愕を覚えたのだった。

今までの自分の思考が間違えだったわけじゃない。

実際沙鳥は夏哉の細胞を壊している。

しかし、この魔神の依代（あまくもさとり）というやつは、夏哉が痛みを感じる前に傷を治しているのだ。

あり得ないだろう。

生き物が痛覚を受けてから感じる時間など、調べたことがないから分からないが、それこそ一瞬もないはずだ。

そのわずかとも呼べないほどの時間に壊しては治し、壊しては治しを繰り返している。

はっきり言ってこんな芸当は無理だ。

まず膨大な魔力を制御すること自体困難で、私も出来るかどうか分からないというのに、その上針に糸を通すよりも難しい繊細な事をやってのけているのだ。

まさしく神業と呼ぶに相応しい。

黒ずんで腫れた夏哉の傷が徐々に薄く小さくなっていき、三十秒もしたら跡形もなく消えてしまった。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

沙鳥は肩で息をしていた。

見える肌からは玉のような汗を大量に流している。

無理もない、あれだけの魔力、技術、集中力を使ったのだから。

むしろ疲れた程度で収まったこと自体僥倖と呼べる。

治癒の終わった夏哉の口元に手を当てる。
多少息を乱しているものの、先ほどまでに比べれば整っているに等しい。
脈も同じだ。
「沙鳥、ありがとう。夏哉も大分回復したし、必ず助かる！」
「とーぜん、でしょ……。夏哉、しゅじんこーなんだ、から……。じゃあ、アンちゃん。後はここ、通って」
息も絶え絶えに、沙鳥は言葉を紡ぐ。
自分の腕を重そうにあげながら、宙に一本の線を引いた。
それは私たちがよく使う亜空間だった。
「ここ、くぐれば……びょーいんだから……もうダメ……ネハラちゃんお願い」
すでに体力の限界を迎えていたようで、沙鳥の体が崩れ落ちる。
地面に接触する前に、ネハラが支えた。
後からラスクも加えて支えた。
「沙鳥？」
気絶してしまったかを確認するために問い掛ける。

「な、何……？」

まだ疲労で気絶はしていないらしい。ならついでに聞こう。

「亜空間に入れば病院に着くとはどう言うことだ？」

「い、今は、説明勘弁……。私、信じらんない？」

沙鳥がこれ以上ないほどの愚問を投げかけてきた。

「馬鹿者。お前を信じられなくなったら、それはもはや私ではない。お前はこの世でもっとも信頼できるやつの一人だ」

「へへ、ありがと。……あと、ごめんね」

力なく笑うが、最後の謝罪の意味が分からない。

「最後のはどういう意味だ？」

「なんでもない……。それより、早く……。で、くぐったら、私が行く、間で待って、ね。魔法、解かなきゃ」

「分かった」

短く会話を終わらせ、沙鳥が作ってくれた亜空間への入り口へ入る

第八話　《十二章》魔の力（後書き）

作者「どうも、文章能力に低評のある畑山香樹です」

香苗「いきなり卑屈な登場の仕方だね」

夏哉「名前で呼ばれる幸せ……！！」

香「こっちもこっちでなにやら喜んでるし」

作「まずは謝罪をしましょう。昨日は投稿できずに申し訳ありませんでした！！ホントはこの話を昨日投稿するつもりでしたが、話を書き終えると同時に寝(しんで)てしまって、気付けば時間過ぎてました」

夏「作者は毎日投稿でも目指してたのか？」

作「願望で言えばな」

夏「無理ないか？今までを見れば」

作「俺もそう思ってる。もう少し先になったら課題やんなきゃなんないこといっぱいだから。だから今のうち頑張ろうと」

夏「まぁ、ガンバ」

作「そうします」

香「今回の話は、沙鳥ちゃん無双だったね」

作「まぁね。劣等感に追われてた沙鳥にしかできない事をアンの目の前でやる、的なことを悪印象を持たせず実行できたらな～と思って書いたんだけれども、どんなもんでしょうか？」

夏「作者も考えてんだな～」

作「まね。あ、そういえばひとつアンケート的なものがありまして」

香「なんか久し振りだね」

作「とある読者様が、『真樹の好感度が上がったな』という話をしてまして、第二回目のキャラ投票をやったらどうなるのかって事をふと頭をよぎりましてね」

夏「いいのか？間が短い気がするが……」

作「だからそれ読者様に聞こうと思って。前回キャラ投票参加してない読者様が感想書いてくれるようになってくれたからさ。一応四人ほど賛成意見が出たらやってみようかなって思っていますので、取り合えずば賛成か反対かを教えてくださると嬉しいです。空気を読んで賛成、なんて言うのはしなくてもＯＫなので、反対と言いにくい方はスルーで結構です」

夏「えっと、これでもう伝えることはないな？」

作「ないな」

香「ｖｉｃｔｏｒさん、ソラトさん、フォルスさん、ＳＴさん、ツキトハクヤさん、クロスライトさん、感想ありがとうございましたっ」

第八話　《十三章》容疑者

「多少の心臓の乱れはあるものの、こんなのは日常で起こる乱れの範囲内だ。命に別状はない。怪我なんて、見つけろと言う方が難しいほどだ。さすがは天雲沙鳥さん、と言ったところか」

白を基調とした部屋。
そこにほんの少しだけ彩りをつける、薄緑色のカーテン。

その部屋の三分の一は占めるだろう、大きなベッドの周囲に、人が集まっていた。

でも例外がひとつあり、一人だけ周囲には紛れ込まないで、その上で静かに寝息をたてるものがいた。

柊夏哉だ。

私たちは瞬間移動を使い、一気に病院まで飛んだ。

すぐに真樹と合流すると、医者の人たちがストレッチャーを用いて夏哉を別室へ運んでいった。

その際医者の人たちは夏哉を見て不思議そうな顔をしていた。
女装しているからか、怪我が消えていたからか。

一応アンちゃんが真樹に、ここに来るまでに起こったことを説明した。
私は体力的につらかったため壁により掛かっていただけだった。

真樹は、病院内だというのに誰かに電話していた。
その電話の相手は真樹のお父さんのようで、魔法についても知っていた。

だから夏哉に傷がない事情も理解出来るようで、診断は真樹のお父さんが一通りやってくれた。

私たちは部屋の外で待っていた。

ほんの五分くらいだろうか、診察が終わったようで、真樹のお父さんが出てきた。
その後ろには、未だ横たわっている夏哉を乗せているストレッチャーを、真樹のお父さんが手で引いていた。

その時に聞いた?無事?という単語に、私たちは緊張の糸を切った。

皆が皆、ほっとして頬を緩ませている。

詳しい話は夏哉を個室に運んでから、と言われて皆大移動。

そして現在に至る。

ここにはいつものメンバーにカナが欠け、代わりに真樹のお父さんがいる。

カナは、私が巻き込んでしまった篠原神奈という女の子と一緒に、後から来るそうだ。

あの子がいなければ、私はずっと夏哉の側で泣いてわめいてバカなままだっただろう。

……まぁ、バカはまだ治ってないだろうけど。

それにしても、私あの子に『頭冷えたよ』的なことを言ってた気がするけど、今思い返せば全く冷静になってなかった。
自分のアホさに恥ずかしくなっていく。

「ホント申し訳ありませんわ。結局わたくしたちでなんとかなったのに、わざわざ呼び出したり、機器を用意させたりしてしまって」

その言葉は私の胸にぐさりと突き刺さる。

決して真樹がそういうつもりで言ってるわけじゃないのは分かってるんだけど、もし夏哉の名前をただ叫ぶんじゃなくって、魔法を使っていたら。
きっと夏哉は早く目を覚まし、こんな大がかりなことにはならなかっただろう。

私は自分を心の中で責めてしまう。

決して口には出さない。
だって夏哉の二の舞になって、アンちゃんにボコスカ殴られたくないから。

「気にするな。この子も怪我はもうないとはいえ、怪我はしたんだ。検査するに越したことはない。それにお前は私の娘だ。この程度のわがままくらいは聞いてあげられるさ。まだ親に頼っていい年だよ、お前は」

真樹のお父さんは、言いながら頭をなで始めた。

「ちょ、やめてくださいまし！」

真樹は両手を使ってその手を払う。
しかし顔は正直なもので、満更でもないって顔をしている。
何処からどう見ても照れ隠しだ。

「ははっ、すまない。では私はここで失礼するよ。何かあったら呼んでくれ」

真樹の可愛い一面が見れたところで、真樹のお父さんは退場した。

「それにしても、ホント凄いわね」

それからほんの数秒後、ネハラちゃんが口を開いた。

「何が？」

空お姉ちゃんが聞く。

「サトリよサトリ。あんな精神ガタガタな状態でも、自分がぶっ倒れる程の魔力を使っても、まだ私とラスクにかかってる魔法解けないのよ？」

「そう言われるとそうだな。アタシも今日一度も乱れを感じてない。術者の感情によって変化するものなのだが」

感情、か。

私はほんの数時間前のデートを思い出す。

今日は感情の揺れ幅が大きかった。
緊張したり泣いたり笑ったり、また泣いたりほっとしたり。
こんなに忙しくコロコロ変わるなんて、私の中にいる感情さんも大変だ。
……なんだよ感情さんって。
一体私は何を思って感情さんという存在を作ってるんだ。
変な考えは捨てようと、頭を振った。
「まぁ流石は依代、といったところか」
最後にアンちゃんがまとめたところで、私たちは本題に入った。
「それで沙鳥様。率直に聞きますが、犯人の顔は見れましたか？」
「いや、もしその子が女装してない限りは女の子で、黒髪ロン毛しか分からない。目の前で落とし物を拾ってて、それ夏哉が拾いに行ったらこうなっちゃって……」
こんな事だったら私も夏哉と一緒に近付けばよかった。
「ん～、手掛かりは殆どなしですわね……。服なんて変えられますし、髪も鬘（かつら）を使えば誤魔化すことは用意ですし」
真樹の言うことはもっともだ。
本当に手掛かりがない。
「えっと、強いて言えば、なんだけどね」

私はなるべく少女を思い出しながら呟く。

「最初から夏哉を狙ってたみたいで……。夏哉が倒れた後一瞬目があった気がするんだけど、驚いたり怖がったりした様子はなくて」

「でしょうね。倒れたのが夏哉です、普通の怪我じゃ倒れるどころか、第一怪我もしないでしょう。恐らく夏哉が化け物だと知っての行動ですわ。一般の道具では夏哉が動じるわけありません。改造する技術か、より強力、それこそ軍事用のものを取り揃えられる権力を――」

「夏哉君っ！！」

真樹の説明中に、扉を開く音と幼げな声が響きわたった。

皆そちらに顔を向ければ、汗ダクダクな茶髪の女の子と、同じく汗ダクダクな銀髪の女の子がいた。

「カナっ！」

真樹のお父さんから、夏哉は無事だという報告を受けてすぐ、私はカナに連絡した。

だから夏哉が生きてる事も教えたし、カナが見てなかった状況も教えた。

体力がないのに、きっとここまで走ってきてくれたのだろう、肩で息をしながら、膝に手を着けている。

体力はもう回復した私は、カナを支えようと、側による。

「沙鳥ちゃんっ！夏哉君本当に平気なんだよねっ！？」

嬉しさなのか、焦りなのか、必死な様子で私に訪ねてくる。

「うんっ！大丈夫だって！！もう命に別状はないし、怪我も見あたらないって！！」

「よ、よかった……」

カナは膝から手を離し、私の振くに手を伸ばして掴んだ。

「沙鳥ちゃん、夏哉君助けてくれて、本当にありがとう……！！」

今にも嬉し泣きしそうなカナの頭に、私は手を乗せる。

「いや、私のお陰じゃないよ。結局誰かに言われるまで私泣いてただけだし」

顔をカナから、正面にいる銀髪の女の子に向ける。

「あなたが、篠原神奈さん？」

「あ、は、はい……」

篠原さんは少し緊張した面もちで返事を返した。

「本当にありがとう。あなたがいなかったら私、ずっとバカやってたから。私たちの前に出てきてくれて。後、ごめんなさい。変なことに巻き込んじゃって」

私は謝罪とお礼を込めて頭を下げる。

「い、いえ、そんな……。たまたま通っただけですし……」

「しかし、あなたがいなければこんな早く事は運びませんでしたわ。あ、申し遅れました。わたくし、早乙女真樹と申します。夏哉を助けていただき、本当にありがとうございました」

真樹も私と同様お礼を言った。

その後は皆一通りの自己紹介をした。

そして真樹がカナに聞く。

「香苗、そちらはどうでした？」

「収穫はなかったよ。一応落としたものがないか、探したけど。神奈ちゃんも見てないって」

「ご、ごめんなさい……。もっと早く来てたら……」

この状況で神奈ちゃんに謝る要素なんてあるのだろうか、いいや、ない。

むしろその謝罪は私がすべきだと思う。

「神奈ちゃんは悪くないよ。というか悪いのは私だから謝らないでいいよ。謝られるとなんか情けなくなってくる……」

「あっ……そ、そんなつもりじゃ……！ごめんなさい――」

「いやだから、謝らなくて大丈夫だよっ。こっちこそホントごめんね？」

「い、いえ、そんな……。私の方こそごめんなさい――」

「いやこっちこそごめんなさい――」

「あぁもう！謝罪禁止ッ！！」

突然怒号が聞こえた。

皆予想外の声に目を見張る。

その声の主は――

「か、カナ？」

怒っている空気を出したいのか、両手を腰につけている。

「二人とも謝罪しすぎ！！これから謝罪禁止令を出しますっ！！ルール破ったらデコピンだからっ！！分かった！？」

「は、はい」

思わずカナに敬語を使ってしまった。

「ご、ごめんなさい――あ」

あ。

「はい神奈ちゃんデコピンいっぱーつ！！」

カナは神奈ちゃんとの距離をほぼゼロにして、デコピンをお見舞いした。

「いたっ――くない……？」

しかしカナは力を入れてなかったようだ。

「って、夏哉君ならやってただろうね。実際私やられたし」

すると、さっきまでの怒りの空気が霧散してしまった。

どうやら演技だったらしい。

私たちの謝罪をやめさせるための。

「これも夏哉君の受け売りだけど、謝罪は数言うんじゃなくて、気持ちが伝わればいいとおもうの。だから、沙鳥ちゃんは『巻き込んでごめんなさい』。神奈ちゃんは『遅くなってごめんなさい』。これが伝わってるなら、もう謝らなくてもいいんだよ」

今のカナの言葉、確かに夏哉が言っていた。

六月のはじめ頃に私たちが操られて、それが解かれた時に言われた言葉だ。

ホント夏哉は心に響くような事を言ってくれる。

私は神奈ちゃんに体を向ける。

「えっと、謝罪は禁止みたいだから、ありがとうございました」

「そ、その……どういたしまして」

神奈ちゃんも謝罪せずに対処して、一段落した――と思ったら。

ガラガラッ！

勢いよく部屋の扉が開かれる。

「ちょっと！！ここの部屋うるさいわよッ！！」

入ってきたのは四十代くらいのナース。

「隣は寝てる患者もいるんだから静かにしなさいッ！！」

「ご、ごめんなさいっ！」

ナースに頭を下げるカナ。

確かに騒がしかった。

反省しなければ。

「全く最近の若者ったら……」

「ホントすみませんでしたっ」

グチグチ文句を言うナースの背中に謝罪の言葉を述べるカナ。

と、ここでひとつ大事なことを思い出した事があり、神奈ちゃんに

耳打ちをした。

「……え？いいんですか？」

「いいのいいの。カナ～」

謝罪が終わり、扉を閉めてノロノロ帰ってくるカナを呼んだ。

「な、何――」

カナが返事をした瞬間、私と神奈ちゃんはカナの目の前に右手を出した。

そして同時に――

「「えいっ」」

デコピンを食らわせた。

「あいたっ！ちょ、二人とも何するのっ？」

「だってカナが謝罪禁止って言ったんじゃん。さっき二回言ったから二発分デコピンしたんだよ」

「だ、だってあれは仕方がなかったでしょっ」

さっきの教訓を生かし、静かに叫ぶカナ。

「だっても何も、カナが言い出したことなんだから、自分の言葉に責任持たないと」

「じゃあもう謝罪禁止解禁っ。皆謝っていいよっ！」

「うわっ、カナ自己中すぎ」

あははははっ、とこの病室内に笑いが立ち込めた。

――――――――――

いつの間にか、私は今日初めて会った人たちと笑い合ってた。
人と関わるのが怖かったはずなのに。

さっきまではそれを自覚せずに対応していたが、笑い終わった後、徐々に恐怖が襲ってきた。

「香苗今の状況で他に分かることはありますか？」

「うん、かなりね」

早乙女さんが香苗さんに、今の状況と自分の考えを話した。
その後すぐの今の問いに、香苗さんは頷く。
考える時間なんてなかったのに、何が分かるんだろうか。

「確実なのは、沙鳥ちゃんか真樹ちゃんの関係者で、年下。で、どちらかといえば真樹ちゃん関係の方かも。ここは予想の域からでないけど」

「え、カナ。年下って言うのは分かるけど、なんで私か真樹の関係

者なの？」

皆を代表して、天雲さんが一番思ってるだろう疑問を投げかける。

「消去法だね。まず夏哉君の過去を知ってるだけの人なら、むしろ近付かないし、たった一人で夏哉君をどうにかしようと思わないはず。というか小さい女の子ならわざわざここに一人で来てまでどうにかしようとはしないだろうし、こっちに引っ越してきたなら親に近付かないよう言われてるだろうし。で、私は小さい子と親しい人はいないし、同様にアンさんと姉様も」

事情を知らない私には、何を言ってるか分からない。

疎外感を感じる。

出会ってからたった数十分しか経ってないから当然のことなんだけど、感じずに入られない。

一人が嫌なわけではない。

私という存在が、皆に邪魔と思われていると思うと、怖い。

場違いな私がここにいて皆に迷惑をかけていると思うと、怖い。

きっとこの事を聞けば、皆邪魔と思ってないとか、迷惑かかってないとか言ってくれると思う。

でも、本心がそうとは限らない。

建て前で、邪魔じゃないって言ってる可能性もある。

私にその判断が出来ないから、恐怖に縛られてしまう。

そんなことを思っているうちに、話は進む。

「だからこの辺に住んでる二人の可能性が高いと思うの。沙鳥ちゃん関係の場合だと、親衛隊がいるからその子って可能性があって、真樹ちゃんは分からないけど。後、もっと絞れるとしたら、夏哉君が女装することを知ってる人。これが大きいと思うよ」

「あ、そうでしたわ！！クッ……、そのことを失念していました」

「真樹、どういうことだ？」

アンさんが早乙女さんに訊ねた。

「単純ですわ。女装している夏哉を、夏哉と判断できますか？」

「いや、無理だな」

それは分かる。

私も女性と、見間違えてしまったから。

「ですから、昨日のわたくしたちのやりとりを知らなければ無理なんですわ」

「ちょ、ちょっと待ってよ！じゃあ何？まさか私の家に誰か知らない人がいたって言うの！？」

焦る天雲さん。

昨日は天雲さんの誕生日会をやっていたと、ここに来る前香苗さんに聞いた。

つまりそこでのやり取りを全て聞かれた、ということになる。

「いや、単純に盗聴器の方が可能性あるかも」

「そ、そんな……」

「あ、沙鳥ちゃんっ。これ可能性だから、絶対ってわけじゃないと思うんだけど……」

「か、かもしれないけど……」

フォローをいれた香苗さんだけど、落ち込む天雲さんにはあまり効果がなかったようだ。

でも香苗さんは気を取り直して、話を続けた。

「えっと、それで真樹ちゃんの関係者って理由は、その犯人が沙鳥ちゃんに何も言わなかったから。夏哉君の命を狙おうとしてる女の子だから、ちょっとヤンでる可能性があって、その場合夏哉君倒したらなんかしら沙鳥ちゃんに言うと思うの。『沙鳥様、化け物を退治しました』みたいなこと。それがないから真樹ちゃん関係なのかなって思ったんだけど……これは個人で変わってきちゃうし、盗聴とか夏哉君倒せる武器とかを見ると頭が回るから、自分が犯人って特定されないために話しかけなかったって可能性があるから……」

香苗さんは早乙女さんの顔を見た。

「真樹ちゃん誰か心当たりない？夏哉君と真樹ちゃんが一緒にいて、嫉妬に狂いそうな女の子」

すると真樹さんは、手で両目を覆った。

それに若干肩を震わせている。

「どうしたの真樹ちゃ――」

「沙鳥様。身長は香苗に近い、で合っていますか？」

香苗さんの言葉を遮りながら、早乙女さんは天雲さんに訊ねる。

「あ、うん。離れてたから断言できないけど……」

「香苗と同じくらいの身長で、盗聴器や夏哉用の武器改造が出来、尚且つ夏哉の情報を持っていて、それをまとめられる頭の回転がいい少女……。いますわ」

「えっ！？だ、誰ッ！？誰なのッ！？」

天雲さんが食らいつくかのように早乙女さんに詰め寄った。

少し間を置き、早乙女さんは口を開く。

「早乙女風歌（さおとめふうか）。わたくしの、妹ですわ」

第八話　《十三章》容疑者（後書き）

作者「どうも、作者です」

沙鳥「天雲沙鳥でーす」

真樹「早乙女真樹です、っていきなりどうしましたの？」

作「いや、普通に登場思いつかなかっただけです」

真「別にいつも通りでよかったのではありませんの？」

作「そのいつも通りが曖昧になってきたから、ちょっと基本的にと」

沙「ふむふむ。で、作者。これからどーすんの？内容触れてＯＫ？」

作「いいよ～」

沙「えっとねぇ、今度はカナ長文しゃべったね」

作「ホントすみません！なんで長文になるかな～。文字打ってるときは長く感じないんだけど……」

真「全く、こういうところを意識して直さないから少ない人気が更に落ちるんですのよ？」

沙「え、何真樹。なにかあったの？」

真「何故か作者が伝え忘れていたようで、総合評価が９００ｐｔを

越したんですの」

沙「な、なんですとぉ！？」

真「しかし現在、８９７ｐｔ。お気に入り数が四人ほど減りましたわ」

沙「それって、作者があんな長い台詞を書いたから？」

作「グフッ！！」

真「断定は出来ませんが、可能性は高いと思いますわ」

作「ブハッ！！」

沙「これからどんどん下がっていくのかな？」

真「そうなってくれないことを願いたいですが……」

作「え、えっと！！そういえば前回のキャラ投票賛否のアンケート、期間をいってませんでした！！」

真「現実から目を背けましたわ」

作「と、取り敢えず、十二月十二日まで待とうかと思います。で、現在三名の方から賛成意見をもらえましたので、後一人です！じゃあここまで！！」

沙「しょうがないなぁ。ＳＴさん、ハクヤさんｖｉｃｔｏｒさん、クロスライトさん、フォルスさん、ソラトさん、感想ありがとうご

ざいましたっ。次回もぜひ見てください」

真「感想、評価待ってますわ」

第八話　《十四章》逃走する犯人

私たちは夏哉の病室を出た。

理由は、真樹の家へ向かうためだ。

もしかしたら夏哉を襲った容疑者が帰ってきてるかもしれない。

デートしてた私と夏哉、さっきであった神奈ちゃん以外は、みんな真樹の家で遊んでいたようだ。

その時はまだ妹の風歌ちゃんは学校から帰ってきてないって言ってた。

つまり、もし真樹の妹が犯人だったとしたら、学校が終わってすぐこちらに向かって夏哉を攻撃した、ということになる。

あくまで予測で可能性の範囲内だけど、とカナに念を押された。

予想とは言え可能性があるのだから、夏哉の側でジッとしてるよりは動いた方がいい。

そろそろ病院の受付が見えてくる頃、

「あ、あの……」

後ろから神奈ちゃんの声が聞こえた。

一斉に振り向く。

「どうしたの神奈ちゃん」

神奈ちゃんのすぐ隣にいた空お姉ちゃんが訊ねた。

「そ、その……お手洗いにいきたいんですけど……」

少し俯きながら、弱々しく言った。

「あ、もしかして我慢させちゃった？大丈夫？全然行ってきていいよ」

「ここから一番近いのは、受付のところまでいってすぐ左ですわ」

私が促すと、真樹が補足説明をした。

さらに真樹は付け足す。

「それでは一度解散しましょうか。篠原さん買い物中の様でしたし、むしろここまで付き合わせる義理がありませんでしたわね。本当にわざわざありがとうございました」

本日二度目、真樹は頭を下げた。

「い、いえっ、私、ここにきてあんまり役に立てなくて、ごめんなさい」

「あら～、また謝っちゃった」

「あ……」

この子は謝るのが癖になっているようで、私が指摘するまで気付か

なかったようだ。

「まぁデコピンはしないけど、私はちゃんと面と向かってお礼とごめんなさい言いたかったから、来てくれてありがとう。誤り癖、少しは直せるように頑張ってね」

「あ……は、はい。頑張ります……。じゃ、じゃあ失礼しますっ」

神奈ちゃんは深々とお辞儀をすると、小走りで前に進んでいった。
私たちが話しかけちゃったから限界を迎えちゃったか。

しばらく立ち止まって見送ると、誰かにぶつかりそうになったが、お互い頭を下げて事荒立てずに済んだようだ。
病院で争うなんて、マナー違反もいいところだし。

「じゃあそろそろきぃちゃんの家行こっか」

神奈ちゃんが角を曲がって姿を隠したときを見計らって、空お姉ちゃんがそんな提案をした。

それを否定する必要もなかったので、頷いて皆先へ進もうとしたが、何故か一人だけ動かない者がいた。

「真樹？どうした？」

アンちゃんが動かない人の名前――真樹に訊ねる。

よく見ると目を見開き、視線をある一点から離さない。

それを追うと、先ほど神奈ちゃんとぶつかりそうになった人がいた。

徐々に近づいて来る人は女の子で、真樹よりも濃い桜色の髪をツインテールにしていた。
身長はカナと同じくらいか、ちょっと小さいくらい。
この子と真樹は知り合いなのかな？
そう思っていたら、真樹が小さくつぶやいた。

「風歌」

「「えっ？」」

私とアンちゃんは思わず声を上げてしまった。

まさか今から会いに行こうとしていた、夏哉を襲った容疑者がわざわざ自分からここに来るなんて。

もしかしてバレない自信とかあるのかな。
それともカナと真樹の予想が外れてあの子じゃない、とか。

どう動けばいいか分からなかった私たちだが、真樹の妹の風歌ちゃんは一人、こちらに近付いてくる。

「お姉ちゃん。お母さんが、お姉ちゃんここにいるって聞いたから来たんだけど、どうしたの？」

「な、なんであなたがここにいるんですの……？」

風歌ちゃんの問いに、何故か答えず質問で返す。
若干震えているように感じる真樹を不思議に思った。

「ちょっとお姉ちゃんと話がしたいなって思って家にいたんだけど、なんか先にお姉ちゃん外に出たってお母さんが言ってたから。追いかけて来ちゃった」

可愛らしく小さな舌をぺろっと出した。

現実にやるのかと思わせるほどの漫画らしい仕草なのに、それが妙に合っていた。
状況が状況なら、自己紹介をさっさと済ませて頭でも撫でてやりたかった。

「えっと、皆さんはお姉ちゃんのお友達ですか？」

「え？うん、そうだけど……」

私たちを見回しながらした質問に、代表して私が答えた。
というか風歌ちゃんの視線が最後に私で止まったから、私が答える雰囲気になったのだ。

「お姉ちゃんを学校でよろしくお願いします」

なんと出来た妹だろう。

私はぺこりと頭を下げる風歌ちゃんを見てそう思った。

家の結も大概いい子だけど、それと同じくらいかもしれない。

「ううん、私たちの方こそ学校で真樹ちゃんにお世話になっちゃってるから。いつも真樹ちゃんのお世話になってます」

風歌ちゃんの言葉に、カナも丁寧に返した。

「あ、そうなんですか。お姉ちゃん凄い優しい人ですから」

風歌ちゃんは真樹のことがよっぽどすきなようで、ベタ褒めだ。

でも、『うわ～、コイツシスコンだよ～』という変な関係には感じず、『お姉ちゃん好きで微笑ましいな～』と感じる。

「あ、名前言うの忘れてたね。私、花街香苗です」

そういえば名前を言ってなかった――って、私のことは知ってるかな。

自己紹介するかどうか一瞬悩むと、突然カナが変なことを言い出した。

「あ～あ、こんないい子がいるのに夏哉君来ないなんて」

え？

夏哉が来ない？

夏哉は今ここの病院で寝てるだろうし、ていうかなんで夏哉の名前がここで出た？

全く状況が理解できないのに、話は進んだ。

「ホントだよね～。夏君お見舞いにも来ないなんて」

今度は空お姉ちゃんが、カナから続いた。

私は訳が分からずポカンとしていた。

「お友達がここにいる――って、みなさん病院にいるんですから、誰か入院してるんですね」

やっぱり風歌ちゃんは真樹に似て賢いようだ。

というか、すっかり本題忘れかけてたけど、この子は多分容疑者ではないと思った。

カナたちが出した想像図に近いものはあるけど、夏哉を襲う理由が見つからないし。

しかしカナは、こんな子に嘘をついた。

「そうなの。今日私の親戚の夏子ちゃんが誰かに襲われて意識不明の重体になっちゃったの」

「え？」

この声は、私が出したものでも、ましてはアンちゃんの声でもない。

「風歌ちゃん……？」

真樹の妹が、先ほどの真樹と同じように目を見開いている。

「ホントにさ、夏君ひどいよね～。そりゃ会ってないとはいえなぁちゃんの親戚なんだから来てもいいのに」

私は異議を申し立てようとしたけど、よく考えるとあのカナが何も考えずに言うことはないだろう

開きかけた口を閉じた。

「あ、あの。皆さんのお見舞い相手は……」

「親戚の夏子ちゃん。夏哉君って人と名前が似てるけど、特に二人、何が共通してるってこととかってないんだよね～」

共通点も何も、二人は同一人物。

カナの嘘が何に役立つのかと思っていたら――

「嘘……！だって今日は二人でデートって――」

「デートが、何？」

風歌ちゃんの呟きを即座にカナが質問で問いつめた。

一拍置いて、私も違和感に気づいた。

そう言えばこの子、どうしてデートって分かったの？
今の今まで会ったことも、話したことすらもないのに。

小さな違和感が、大きな疑問となっていった。

そして、分からなかったことがちょっと分かった。
今までのカナの変な言葉は風歌ちゃんに揺さぶりをかけるためで、
それを察した空お姉ちゃんが一緒になって言ったってことだろう。
なんという頭脳プレー。

「因みに今この病院で寝てるのは夏哉君で、夏子ちゃんなんて親戚は私にはいないよ」

「……何？鎌掛けたってこと？」

突然、風歌ちゃんから発せられていた明るい空気が消え、どんよりと重く、口調も荒々しげに変わっていった。
雰囲気も正反対だ。

この変わりようはなんだ？
いや、もしかしたらこっちが素で、私たちの前では猫をかぶってた、と言うことだろうか。

「鎌、と言うよりは確証が欲しかっただけ。あなた、私が学校で真樹ちゃんに世話になってるって言ったとき、全く疑問に思わなくって、質問しなかったよね？」

思い返してみるが、確かに質問はされてないと思う。
でも疑問点があるとして、何がおかしかっただろうか。

「それが何？」

「私、初めてあった人にはほぼ高確率で中学生か小学生に間違えられるの。前情報がない限り、私を真樹ちゃんと同じ学校に通う生徒とは判断できない」

……ん？

よく話しについていけない。

詰まるところ、どういうことなんだろう。

「つまり、私を高校生と判断でき、なおかつ今日沙鳥ちゃんと夏哉君がデートをするってことを知ってるあなたが、夏哉君を襲った犯人、だよね？」

カナが結論を言ってくれた。

犯人はこの子だ、と。

確かに、先ほどの明るい空気の彼女ではやりそうにないけど、今の刺々しくて暗い空気の彼女ならやってもおかしくなさそうだ。

すると真樹が風歌ちゃんに一歩近付く。

「答えなさい。貴女がやったのですか？」

真樹の責めるような口調で問いかける。

「そうよ」

それに即答で答えを言う風歌ちゃん。

あっさりと認めてしまったため、犯人にぶつけようとしていた怒りをどうぶつけていいか分からなくなる。

「だってあいつ、男の分際でお姉ちゃんに近寄るのよ？許せないよ。お姉ちゃん、大丈夫だからね。お姉ちゃんはずっと私が守ってあげるから。お姉ちゃんに近付く汚れきった男は、どんな手段を使ってでも殺すから。だからお姉ちゃんは安心して――」

パチンッ！！

病院内に、乾いた音が響きわたった。

真樹が風歌ちゃんにビンタを食らわせたのだ。

時が止まったような静寂が、この場を支配した。

「あんたは、何わたくしの大切な人に手を出してるんですの？」

「……え？お姉ちゃん？今、なんて、言った……？」

「何わたくしの大切な人に手を出してるのって言ったんですの！！何やってるんですか！？わたくしのために男を殺す？誰がそんなことを望みましたか！？いい加減にしなさい！！貴女のせいでどれだけ迷惑かかってるか分かってますのッ！？」

ビンタの次には、真樹は怒りを風歌ちゃんにぶつけた。

風歌ちゃんは真樹の怒りのせいなのか、体を震わせている。

そして即座に背中を向けて逃げ出した。

真樹はそれを追おうと一瞬体を前に出すが、止まってこちらを振り返った。

「皆さん、申し訳ありませんでした。私の妹がこんな事を引き起こしてしまい……」

妹の不始末は姉が拭うというやつか、真樹が私たちに謝る。

「えっと、なんか複雑そうな様だけど……きぃちゃんのところは仲、悪いの？」

「仲が悪い、と言いますか……本当に複雑と申しますか。申し訳ありません。説明しきれない事情もありまして……」

真樹は申し訳ない雰囲気を漂わせながら言葉を濁した。

いわゆる家庭の事情というやつだろう。

それに首を突っ込めるほど、まだ真樹の家の問題について知らない。

「なぁ、あの風歌って言う女、追いかけた方がよくないか？何するか分からないから、見つけて事前にとめられるようにさ」

「そう、だね。じゃあ手分けして探そう」

アンちゃんの言葉に香苗が頷き、この場の指揮をとった。

私はお手洗いを出た。

ようやく一人になって、誰かに迷惑をかける心配がなくなってホッと一息つく。

人とか変わるのは怖いけど、さっきみたいにお礼を言われるのは嬉しかった。

その時のことを思い出しながら、ふと右の壁をみる。

そこには単に白い壁しかないけど、そのずっと先には先ほどまで私たちがいた、柊さんの病室がある。

気付けば、私は柊さんの病室に向かって歩いていた。

本当に理由がない。

もしかして二人きりにでもなりたいのだろうか。

自分の気持ちに気付けず、ただ本能の赴くままに歩いていく。

この病院という空間はいいかもしれない。

基本静かにしなきゃいけないから、外を出歩くよりも話しかける確率がかなり下がる。

まぁ外で話しかけられることもそこまで頻繁にあるという訳じゃないけど。

柊さんの病室に着いた。

扉を開けると、当然のごとく柊さんが寝ていた。

個室なため他に人もいなく、静寂が支配していた。

なるべく音を立てないように近付き、柊さんの顔をのぞき込む。

軽く化粧をしているようで、どちらかといえば男だけど、女にも見えなくはない、という顔をしている。

私は文化祭の時を思い出した。

私が友達とはぐれてしまったとき、私を見つけて友達と会わせくれた。

その際、内容は忘れたけど会話をしたことは覚えている。

初対面だったのに、恐怖を感じないで普通に対応できていた。

どうしてそんなことが出来たのだろうか。

あ、もしかしたらそれが知りたくてここに来たのかもしれない。

ここに来た理由も考え終わり、特にやることも考えることもなくなったとき、つい思い出してしまった。

自分が起こした失敗の場面を。

大袈裟なことではなく、単に『みんなの前で恥ずかしいことしちゃったな』とか、『なんで私はここでこれを選ばなかったのか』など

の、皆が一度は体験しそうな失敗。

しかし私は、それを過剰に意識してしまう。

意識してしまうから忘れられず、今でも小学一年生の時に起こした恥ずかしい出来事も覚えている。

それを思い出すと、いつも心臓が締め付けられる様な思いをする。

私がこれを覚えているんだ、皆だって覚えてる。

つまり私が失敗して、その時に感じた負の感情も覚えている。

そう考えると、更に胸を締め付けられる。

どうしようも出来ない。

だから、この苦しみから少しでも逃れようと、一人になるといつもつぶやく単語を口にした。

「死にたいな」

死ねば、こんな恐怖も、これから将来他人に与える迷惑を最小限に押さえられるか。

ずっと抱いていた感情。

日が過ぎるごとに膨らんでいくモヤモヤ。

誰にもいえず、相談も出来ずにいた私の悩み。

だったはずなのに。

「死にたいとはまた物騒な」

「えっ！？」

声のする方を見た。

柊さんが、上半身を起こしていた。

第八話　《十四章》逃走する犯人（後書き）

夏哉「俺復活」

アン「やったぁ！夏哉が起きあがった！」

作者「のも束の間」

夏「な、なんだよいきなり」

作「俺は明日のために早く寝なきゃいけないから後書き激短でいきます」

夏「よりによって俺が復活したときに……」

ア「じゃあ何か？もう締めるのか？」

作「その前に報告今からクリスマスの十二月二十五日までの間、第二回キャラ投票を開催したいと思います」

ア「結局賛成意見が揃ったんだな」

作「あぁ。そういうこと。ルールは前回とほぼ同じ。一人三つの投票権を持っていて、一人に三つ投票しても、バラバラに投票しても、二つだけ投稿してもいいです。投票の途中変更もありですし、二回に分けて――一回目は一票だけ。二回目は二票――やるのもＯＫです！後、夏哉と夏子ちゃん、香苗と香君は別人ですのでそこのところよろしく！もし質問ありましたらお願いします！！はいアン！！感想のあれ！！」

ア「ｖｉｃｔｏｒさん、ＳＴさん、ハクヤさん、ソラトさん、フォルスさんｃｏｌｏｒｆｕｌさん、感想ありがとうございました」

夏「次回も待っててください」

作「明日明後日は休みなんで、どっちかに前回成し得なかった三話連続投稿してみたいです」

第八話　《十五章》相談

……知らない天井だ。

目が覚めて一番最初に思ったことがそれだった。

ふざけてるつもりは全くない。

正真正銘始めてみる天井だった。

「死にたいな」

すると突然聞き覚えのある声が聞こえた。

「死にたいとはまた物騒な」

咄嗟に思ったことを口にすると、驚きの声を上げられた。

俺は体を起こして声の主を見る。

一昨日の文化祭の時、結ちゃんと一緒に探した子だ。

「ひ、柊さん、大丈夫なんですかっ？」

大丈夫、と聞かれる意味を把握するのに、少し時間がかかった。

「えっと、確か女の子に襲われたんだっけ？」

「あ、らしいです」

独り言のつもりだったんだけど、神奈ちゃんが答えてくれた。

「もしかして、現場見てたり？」

「途中からですけど」

「あー、そっかー。変なところを見せちゃいました」

ぺこりと頭を下げた。

ズルリ。

それとほぼ同時、頭から何かが落ちた。

なんだろうと、それを手に取ってみてみる。

それは鬘だった。

……ん？

鬘？

そんなものがどうして俺の頭から――

サァッと血の気が引いてく。

ゆっくりと自分の服装を見てみる。

オレンジっぽいトップス。

その下には青いワンピース。

女装姿だった。

「うわっ！？」

慌てて近くにあった掛け布団を体に巻いて、神奈ちゃんに見えないようにする。

「ひ、柊さん？」

「こ、これは違うんだっ！！別に俺に女装癖があるわけじゃないんだッ！！これはいわゆる罰ゲームの一種で、ホントに自分から着てるわけじゃな――」

ガラガラ！！

「だからうるさいって言ってるでしょうがッ！！」

突然扉からナース服のおばさんが、俺以上の怒声を上げて入ってきた。

「あんたたち若い者は何度言えば静かになるのよッ！？ここは病院よ！？常識を弁えなさいッ！！ＴＰＯ知らないの！？」

「ご、ごめんなさい……」

「全く、謝ればなんでも許してくれるとか思ってないでしょうね……」

グチグチと言いながら、部屋を出ていく。

うん、いろいろと疑問が残った。

「あの～、神奈ちゃんは今の状況飲み込めてる？」

「はい、一応は……」

「じゃあ、ここは何処？」

「早乙女総合病院です」

早乙女、といえば真樹の病院か。

「えっと、つまり俺が倒れた後、神奈ちゃんが救急車呼んでくれたの？」

「い、いえ、そうじゃなくてですね……」

神奈ちゃんから、一通りの状況は聞いて、理解できた。

「またなんか変なことになってるな～」

頭をポリポリとかいた。

「ありがとね、わざわざ」

「いえ、大丈夫です。柊さん体の方は？凄いことになってたと思うんですけど……」

神奈ちゃんが布団越しに心臓あたりを見るので、布団の隙間から見てみる。

そこの部分だけぽっかり穴が開いている。

詰めたパットがないことから抜き取られたか、それすらも穴あきにしたのか。

しかし、そこにあると予想される怪我はない。

「なんか、平気っぽいよ。痛みはないし」

恐らく沙鳥かアンが魔法を使ってくれたのだろう。

「この病院の技術って凄いですね」

「そうだな」

そう言うことにしておこう。

魔法の説明はややこしすぎる。

「さて、本題ってわけじゃ無いけど、神奈ちゃんこそ平気？」

「え？」

どうやら俺の言ってる意味を把握できてないようだ。

「えっとね～、絶対話さなきゃいけないって訳じゃないんだけど、幸か不幸か、死にたいって聞いちゃったから」

「あ……、ご、ごめんなさい……」

それは何に対しての謝罪なのか、俺には分からなかった。

だから気にせず話を続ける。

「そういう話、誰かに相談した？」

首を横に振られた。

「じゃあさ――」

相談に乗らせて、と言おうと思ったのに、言えなかった。

ガラガラッ。

ベッドのすぐ脇、つまり俺のすぐ脇にある窓の開く音が聞こえた。

その窓の枠に足を置いて、立っている少女。

ツインテールにした濃い桜色の髪が、風になびいている。

おかしかった。

窓の風景を見れば、ほかの建物の屋根や屋上が見えた。

だからここは一階ではないのだ。

恐らく三階に当たる。

それなのに、窓から入ってきた。

そして次におかしいと思ったのが、両手にそれぞれ何か握っていた。

右手には包丁、左手にはスタンガンだった。

一体何をしているんだろう。

そう思うと同時に、ひとつの記憶が蘇る。

確かあの子は一昨日の文化祭、不良と接触して俺が説教を食らわせた子だ。

それを認識した瞬間、少女は窓の枠を蹴った。

とても少女の脚力だけで出せる早さではなった。

不意をつかれた上に距離もほとんどないため、右手しか動かせなかった。

右手で少女の左手を払うことで、なんとかスタンガンは払えた。

払えたのだが、もう片方の包丁は対処しきれない。

包丁はフックのように横から曲がってきて、肩を刺した。

「アグッ！！」

思わず声を出す。

化け物級の体を持つとはいえ、刺されれば痛みは感じる。

しかし少女は刺すだけじゃ飽きたらず、その包丁から衝撃波の様なものが発生させた。

「ぎ、ア――――――――！！」

傷の上から、更に抉るような衝撃波を受け、声が掠れて出ないほどの叫びをあげる。

体はよろけ、ベッドから落ちてしまった。
俺は痛みをこらえながら考える。
一般常識では、包丁から衝撃波なんて出てこない。
しかし俺らの常識に当てはめると簡単だ。
魔法を使っている。
しかし、なんの魔法を使ってくるのかが読めないため、このままここにいたら関係のない神奈ちゃんが巻き込まれてしまう。
というか一般人的にこの肩の傷だけで色々アウトだろう。
「……っただけは」
どうやって神奈ちゃんから離れようか考えていると、所為序の口から声が漏れた。
しかし小さすぎるためによく聞こえなかった。
「アンタだけは絶対殺すッ！！」
次の言葉は、ハッキリと聞こえた。
しかも明確すぎるほどの殺意を持って。
先ほどと同じように、超脚力で俺に突っ込んでくる。
これも魔法だろう。
しかし、先ほど対処できなかったのは不意打ちだったから。

いつ来るかは分からないけど、襲われると意識すれば反応速度に変化は出る。

今度は少女の両手首をガッチリ掴み、動けないようにする。

その際、刺された左肩に痛みが走ったが、我慢は出来る程度だったため無視した。

手に力を少しだけ入れて、内側に軽く捻る。

「いッ!?」

痛みに堪えられなくなったようで、手にした包丁とスタンガンを地面に落とした。

捻りを戻して、力も逃げられない程度にしか力を込めない。

「ねぇ、出来ればなんで襲うか教えてくれないかな?」

敵意がないことを伝えようと、意識できうる限りの優しさを込める。

と、よく少女の顔を見ると、真樹の顔に似てることに気付く。

やっぱこの子が神奈ちゃんたちが言ってた、真樹の妹か。

「治せよ」

少女は、俺の問いには答えず自分の主張をあげた。

「早く治せよ化け物!!なんでお姉ちゃんなんだよッ!?お姉ちゃ

ん関係ないだろッ!?アンタみたいな男で化け物がお姉ちゃんに近付いていい訳ないだろッ!!早く操ってないで解放しろッ!!」

まるで納得がいかない理不尽な出来事を抗うかのように、耳をつんざく様な声で叫ぶ。

とても必死な様子は見て分かる。

しかし、俺には何がなんだか分からなかった。

仮にお姉ちゃんってのを真樹だとしても、化け物が近付いちゃいけないのは分かるとして、操るの意味が分からなかった。

もちろん俺が真樹にそんなことする訳ないし、第一出来ない。

真樹じゃなかったとしても、他の子を操ったって記憶はない。

「君、名前は?お姉ちゃんって誰?」

「とぼける気!?私は早乙女風歌!!真樹お姉ちゃんの妹よッ!!」

真樹の妹、風歌ちゃんは憎々しげに叫ぶ。

名前と、誰の関係者かが分かったため、後最低一つは知りたい。

「なぁ、なんで俺が真樹を操ってるなんて思ってるんだ?最後にそこだけ教えてくれ」

そう訊ねると、更に目つきを鋭くして、人を殺せるんじゃないかと言うほど強烈な視線を送ってきた。

「あのお姉ちゃんが、お姉ちゃんがあんたらみたいな腐った男と仲

良くするなんてあり得ないのよッ！！絶対あの薬を使ったに違いないわッ！！」

腐った男。

俺の頭の中でそれが引っかかった。

さっき叫んだ時も、わざわざ『男で化け物』と？男？という単語を入れていた。

どうしてこの子はそんなに男に拘る？

そう考えると一つの答えに辿り着いた。

この子、真樹が男に犯されかけたことを知ってるんだ。

人間不振症になりかけて、特に男が苦手になっていることも。

だからよく真樹と一緒にいる男の俺を目の敵にしてるのか。

しかも化け物なんておまけも付いている。

それにしても、最後に薬を使ってどうとかいってた。

薬で真樹を操ってるって思ってるらしい。

そんな薬に、心当たりはあった。

六月の初めに、伊丹槙榎と熊谷力斗が香苗と沙鳥に使った薬だ。

どうやって知ったかは分からないが、調べたのだろう。

真樹のために。

この子は、真樹を守ろうとしてるだけなんだ。

常識を越えた俺に対して、常識を越えたやり方で。

俺はもう、風歌ちゃんに何も出来なくなった。

過激すぎることをしてたけど、それは全部正当な理由があったから。

真樹を助けたいって理由があったから。

気付けば、俺は風歌ちゃんの手を離していた。

それに気付くと、風歌ちゃんは一回のジャンプで後ろに下がり、距離を取った。

でもなかなか襲いかかってこない。

武器がもうないのか、襲ってもまた捕まると思っているのか。

しばらく膠着状態が続いていると――

ガラガラ！！

「いい加減にしなさいッ！！何度言えば……わ、かる……」

再びやってきたナースのおばさん。

だが、この状況に絶句している。

肩から血を流している女装男に加え、足下には包丁とスタンガンが落ちてるのだ、絶句もするだろう。

他の人が入ってきたからか、風歌ちゃんはジリジリと後ろに下がり、窓の近くまで来るとそこから身を投げ出した。

「きゃああっ！！」

今まで黙っていた神奈ちゃんが悲鳴を上げる。
でも登ってこれたのだから恐らく大丈夫だろう。

それより、これからどうするか考える。

現在俺は左肩を負傷中。
血は止まらないし、ズキズキ痛む。

こんな状態で病院から出れないだろう。

この程度、沙鳥の魔法で一発なんだと思うけど、現在沙鳥はいない。
加えてこの状況の説明と言うのは、非常に難しいものがある。
ここは真樹の病院だから、当然風歌ちゃんも認知はされてるだろう。
特に神奈ちゃん曰く父親もいるみたいだから、あんまり言いたくない。

でも神奈ちゃんはともかく、ナースのおばさんにも見られた。

仕方がない、若干の嘘を交えつつ誤魔化そう。

「あの、血は出てるんですけど、そこまで深くはないようなんで止血してもらいたいんですが……」

呆然としてるナースのおばさんに声をかけると、ようやく我に返ったようだ。

「い、今すぐ呼んできます！！」

ナースのおばさんは廊下を駆けだした。

あ、そういや出来ることはあるか。

気付いた俺はトップスを脱いで、それを傷の部分に巻く。

やらないよりはましだろうと思い、更に気付いた。

「これ、沙鳥の服だった……」

そう、この女装してる服は沙鳥から借りたものだった。

弁償しないと、と考えていると、神奈ちゃんが心配そうにこちらを覗いてきた。

取り敢えず微笑む。

「取り敢えず大丈夫。酷い怪我じゃないよ」

そうは言うが、あまり信じてもらえないっぽい。

「で、でも、血が……」

神奈ちゃんは視線を下に降ろす。

足下には、わずかだが血溜まりが出来ていた。

これ見たらそりゃ引くか。

俺は無事を証明するために、足下に落ちてる包丁を手にした。

「俺さ、さっきも言われたけど化け物って言われててさ」

言いながら怪我してる方の左手の指だけで、包丁の腹の部分を持った。

「ちょっとやそっとじゃどうこうならないんだよね」

そして親指に力を込めると、パキッと半分に割れてしまった。

その際ズキリと痛みが走るが、我慢できる。

「ま、今のはちょっと地味だったけど、垂直ジャンプだけで１０ｍ近くは飛べるし、殴れば壁を壊せるし。怖くなったら逃げても平気だよ。秘密がバレたから襲う、なんてことしないし」

「いえ、怖くはないんですけど……」

「そっか。じゃあさっきの話の続きしようよ」

「話って、相談のこと、ですか？」

窓からの襲撃という、インパクトがありすぎる出来事があったのに、ちゃんと覚えていてくれたようだ。

「そ。無理に、とは言わないけど、相談してくれないかな？流石に？死にたい？って言われて無視できる程器用じゃないんだ」

神奈ちゃんは少し俯いて、黙ってしまった。
でもそれはほんの数秒のこと。

「柊さんはどうして、自分のことより私のことを、優先できるんですか？」

紡がれた言葉は、相談ではなく質問。

俺はその質問に唸る。

「別に他人を優先してる訳じゃなくて、俺の中で一番気になってることからなんとかしよう、って考えてて、今はそれが神奈ちゃんって話なだけだからな～」

「自分の怪我より、私なんかを優先してることが、他人を優先してるってことになると思うんですけど……」

「あ、そうなの？ん～、意識してるつもりじゃないんだけどな～。でも皆に自分卑下に見過ぎって言われてるし……。で、でもさ！神奈ちゃんのこと凄い気になってるから！その気になったこと解決しないとモヤモヤしてきて嫌な訳！つーわけでこれは全部俺のため！さぁ、言いなさい！そうしないとこの血みどろの左手で触りにいくよ！？」

俺は一歩神奈ちゃんに近付いて左手を伸ばす。

「えっ！？ちょっと、それはやめてほしいんですけど……」

神奈ちゃんも一歩引いた。

さすがにこれ以上ふざけるのはダメだろうと思い、左手を下げて真面目な雰囲気をつくる。

「俺今日さ、沙鳥とデートしたんだ」

がらりと変わった雰囲気に、神奈ちゃんも黙って聞いてくれた。

「その時まではさ、俺沙鳥のことなんでも知ってるとか思ってたんだけどさ、今日悩み事聞いたんだ。俺、アイツの悩み事には全く気付けなくてさ。どんなこと考えてるのかも分かんなかったんだよ。ほんと俺自惚れ過ぎててさ。それ自覚したよ」

自分から沙鳥に――沙鳥たちに、本人のことも聞こうとしないで、それなのに知ったかを気取っていた自分が恥ずかしくなる。

「悩み事は一般的、っていうかよくあるようなことだったんだけどちょっとだけ沙鳥の考えとか感じ方とか分かってさ。結構嬉しかったんだよ、これが」

自分の大切な人のことを知る、ということに喜びを感じた。
他人が知らないことを、自分が知ってるという独占欲なのかもしれない。

「で、俺は神奈ちゃんのこと全然知らない。何が好きとか、どんなことに興味があるとか、どういう風に考えてるとか。全部知るとかは無理だけど、神奈ちゃんのこと知って友達くらい仲良くはなりたいって思ってる。友達でも自分の悩みいえないなら、親友になってあげたい」

友達、親友なんて単語は、昔の俺には無縁のものだった。

でも今はそんなことない。
、数は少ないし、そのほとんどが女の子という状況だけど、ほんとバカにならないほど大切なものだって分かった。

「俺はそう思ってるけど、もし神奈ちゃんにさ、俺より悩み打ち解けやすい人がいるなら、俺じゃなくてそっちに話していいし。てかそっちの方が親身になってくれるだろうし。どうかな？」

「……私の悩みなんて、くだらないですよ？すぐに忘れられるもの、ですし」

「その悩みを俺知らないからなんとも言えないけど、大なり小なり悩みがあるなら解決したくない？」

悩みの感じ方は、それこそ人それぞれだ。

自分にとって小さな悩みでも、他人にとっては大きいことかもしれないし、逆もまた然り。

全く同じ感じ方をする悩みなんていうのは絶対ない。
それは同一人物でしか成し得ないからだ。

だから、どんなことで悩んでいて、どんなことを感じてるのかは本人の口から直接聞くしかない。

直接聞いても、情報の誤差があるのだ。
言われなかったらもっと分からなくなる。

「……あの、私、人が、怖くて」

ぽつぽつと呟いてくれる神奈ちゃん。

「もしかしたら迷惑かけてるんじゃないかって考えたり、自分が変なことして、相手を苛つかせてるんじゃないかって想像すると、凄い胸が痛くなって……」

だんだん泣き声になっていく。

病室内を見回してみる。

ベッドの脇の台に俺のバッグが置いてあった。

「それに、自分が失敗したときのことがずっと忘れられなくて……。思い出す度に皆の邪魔になってるんじゃないかって考えて……」

手を伸ばす距離にあったので、それを取って中に入っているハンカチを手にする。

神奈ちゃんに近づいて、それを渡した。

「ほら、涙拭きな」

涙を流している神奈ちゃんは、ゆっくりとハンカチを手にして涙を拭い始める。

「で、でも、皆が皆そんなこと思ってないのは分かってて、私が失敗したことなんて覚えてすらないってことも分かってるんですけど……もしかしたらって考えると、本当に、怖くて……つらくて……。こんな思いするくらいなら死にたくて……」

話が終わった様で、頭を撫でてあげようと手を伸ばそうとしたが、？でも？という言葉を聞いて引っ込める。

「死んだらお母さんたちに迷惑かかっちゃうし、仲のいい人と遊んでるだけで、忘れられたから……。相談しても、この程度じゃ？それくらい自分でなんとかしろ？って言われそうで……」

しばらく間を空けて、もう話をしなくなったところで俺は今度こそ頭を撫でてあげた。

「ありがとう、教えてくれて。泣きたくなるほどつらかったんだね」

神奈ちゃんは涙を拭いながら、小さく首を縦に振った。

「今聞いて、俺が最初に思ったのは、神奈ちゃんに人のこと言われたくない、ってことかな」

「……え？」

何を言ってるのか分からなかったようで、キョトンとした表情をしている。

「神奈ちゃんの方が他人を優先しすぎだよ。周りを不快にさせてないか考えて、いつもどうにかしようって考えてたんでしょ？ホント優しすぎるよ」

「そ、そんな……私、違う……」

神奈ちゃんの考え方が、ちょっとだけ分かったので、なんとなく何

を考えてるのか分かった。

「自分がつらかったから、なんとかしようとしただけ？」

小さく頷いた。

「神奈ちゃんにとってはさ、自分のためかもしれないけど、でも結果として皆のことを考えられるんだから、ここは褒め言葉として取っておきなさい」

ポンポン、と二回頭を叩いた。

「でも……？なんとかかもしれない？って考えは結局自分の見方が変わらないと根本的な解決にはなんないしなー」

何かいいアイディアはないか考えていると、質問された。

「柊さんは……迷惑じゃない、ですか？」

「迷惑って、俺が神奈ちゃんの相談受けたこと？」

こくり。

「迷惑、とは感じてないよ。寧ろ神奈ちゃんのこと知れて嬉しい、かな」

その後俺は、？それにさー？っとため息混じりに言う。

「不本意ながら俺は主人公なんぞと呼ばれてさぁ。正直俺も認めざるを得なくなってきてんだわ。今だって、まだ二回しか会ってない

子の悩みを聞いてるでしょ？」

「あ、はい……。そういえば」

「でもさ、王道の主人公はヒロインとか皆助けるでしょ？だから俺が主人公なら、神奈ちゃんはもう大丈夫だよ。きっとなんとかなる。結果は分かんないけど、いい具合に収まりがつくよ」

「主人公……だから、かも知れません」

「何が？」

「柊さんだけは、初めてあった人なのに怖くなくて。今の友達も、最初の頃は怖かったんですけど……」

なるほど、確かに迷子のこの子を見つけたときは、友人とまでは言えないけど、普通に会話はそんなに詰まることなく出来ていた。

「ならいいや。まずは俺から慣れていこう。目標はタメ口」

「た、タメ口、ですか？でも、先輩なのに……」

「まぁ目標だから。あ、それから聞きたいことあるんだけど……学校って何時に終わる？」

「え、と……月曜日と木曜日が六時で、後が四時前には」

「なら明日は水曜だから四時前か。ねぇ、明日の水曜、放課後暇かな？」

「た、多分平気です……」

「ならちょっとさ、真樹に話つけとくから、話してみない？」

「早乙女さん、ですか？」

「あ、やっぱ違うな。話を聞いてあげてくれない？真樹、ちょっと色々あって、もしかしたら神奈ちゃんにアドバイスできるかもしれないから」

どちらも人に恐怖してるので、考えが似るかもしれない。

「私はいいですけど、勝手に決めていいんですか？」

「ダメならダメで別のこと考えよ。とゆわけで連絡先交換しよ？携帯持ってる？」

「あ、はい」

連絡先交換をしてると、タイミング良く医者が中に入ってきた。

まるで話が終わるまで待っていてくれたかのように。

第八話　《十五章》相談（後書き）

作者「遅れた上に長文になってすみません！！」

香苗「活動報告で書いてあったけど、感想とカラオケで昨日休みだっていうのに更新出来なかったの？」

真樹「全く、もっとわたくしたちのことに時間を割きなさい」

作「そ、そんなこといわれてもさ、必要でしょ？息抜き。テスト勉強だって、いざやろうとしても途中で他のことに興味がわくのと同じだよ」

香「そんなことはないよ。というかまずテスト勉強っていう時間を設けないよ」

真「毎日決まった時間に予習復習すれば、そこまでテスト前でも支障を来しませんしね」

香「逆にテスト一日二日前だけにやっちゃうと、すぐに忘れちゃって後半のテストが大変になっちゃうから、三十分くらいでも勉強はした方がいいよ？問題とか解かなくても教科書めくる程度でいいし」

作「ふ、ふんっ！別に俺もうテスト勉強関係ないから、そんなこと言われても関係ないし～！」

真「自分からテスト勉強の話を持ち出したくせに、何を仰っているのでしょう……」

作「うるさい！さぁ、俺は午後もがんばって小説書くから早めに切り上げるぞ！」

香「はいはい。ソラトさん、ｖｉｃｔｏｒさん、ＳＴさん、ｃｏｌｏｒｆｕｌさん、フォルスさん、ハクヤさん、ｓｃａｒＬｅｔ★さん、感想ありがとうございました」

真「こんなに大勢の方から感想をもらえるなんて、嬉しい限りですわ」

作「というわけで、ここで締めさせていただきます！携帯とパソコンの画面の前にいる皆！早くキャラ投票しに、集まれ～！！感想書いたことない人でも、キャラの名前と投票数を書くだけで全然問題ないから！！」

第八話　《十六章》対処法

「お～い」

学校からすぐ側にある、アンと初めて一緒に戦った公園に向かって、俺は手を振ってる。
そこには合計七人の美女美少女が揃っていた。

「夏哉ぁっ！！」
「夏哉君っ！！」

一番最初に反応したのが沙鳥。
ほんの一瞬遅れて香苗。

二人は一斉にこちらへ駆け寄ってきて、俺に抱きつこうとする。

左足を後ろに引いて、右側から来た香苗を右腕で抱き留め、左側から来た沙鳥はそのまま受け流した。
勢い余って沙鳥は地面に膝を付けた。

一瞬、時が止まったかのように静寂が訪れる。

「な、夏哉、怒ってる？私がすぐ魔法使わなかったの怒ってる？」

「いや、これは単に俺のミスだ。病み上がり相手に抱きついてこないだろうって楽観視して、皆に嘘つこうと思った俺のせいだ。むしろ沙鳥には感謝してます。ホントありがとう」

「な、夏哉君、抱きついたのつらかった？ご、ごめんねっ」

そういいながら慌てて俺から離れる香苗。

その間に、残り五人もやってきた。

「いや、香苗は平気なんだけど、ん～、言いにくいな」

チラッと真樹を見る。

姉の前で、妹に刺されました、なんてことはあんまり言うべきじゃないだろう。

「……風歌に、何かされましたか？」

「えっ？」

沙鳥の驚く声。

「なんで分かんだよ……」

「一瞬、こちらに視線が飛んできたので、わたくし関連かと思いまして」

そんな一瞬で判断出来る真樹は凄いと思った。

「左肩に包丁が刺さり、その傷口に風かなんか知らないけど、衝撃を受けた。なんか切り傷のはずなのに潰れてるらしくて、魔法使っても止血が精一杯って言われた」

「傷口に衝撃って……。それが単なる打撃だとしても痛いってレベ

ルじゃないよ。夏君なんで立ってられるの？」

空ねぇの驚きを越したようで、呆れられてる。

「いや、あれはホント痛かった。痛すぎて声が掠れちゃって」

「嫌だから痛いってレベルじゃ――まぁいいや。夏君に何言っても意味ないし」

さらりと酷いこと言われた気がする。

「な、夏哉、じゃあ今すぐ直すから！服、脱げる？見ながらの方が確実だから」

沙鳥に促されて、真樹の父さんから借りた上着を脱ぐ。

「あ、沙鳥。言いたいことが二つ」

「何？どうしたの？」

「お前から借りた服、穴あきにして血まみれにしてごめんなさい。ちゃんと弁償します」

俺は頭を下げた。

「い、いいって服ぐらい！！夏哉が気にすることないって！！しかもあれも貰い物だし、ワンピースなんか着ないしっ！」

「そっか。で、後もう一つは、正直傷グロいよ？」

ピタッと沙鳥の動きが止まる。

「ホント赤黒くなってるし、真樹の父さんもグロいって言ってたし。あ、真樹。一応お前の父さんには風歌ちゃんがやったとは言ってないから」

「あ、えっと、あ、ありがとうございますわ……」

何故か言葉を詰まらせながらお礼を言われた。

でもお礼を言われたってことは、言わなくてよかったらしい。

「アナタはどうして自分がそんな状態なのに他人を気遣える余裕がありますの？」

真樹も空ねぇ同様呆れ口調で言った。

ということは、さっき詰まらせたのは驚きからか。

「で、沙鳥。俺は見ない方がいいと思うよ？ほんとにグロいから。このまま放置か、アンとかにに任せた方がいいと思うけど」

「や、やる！」

いつになく我が儘な雰囲気を醸し出している。

そんなに俺の怪我を治したいか。

痛いとはいえ、傷口に直接触らない限りは問題はないし、医者である真樹の父さんの治療も受けたから、放置でも問題ないのだが。

「じゃあ夏哉包帯外すよ？」

ゆっくりとした手つきで包帯を外していく。

やがて包帯のしたにあるガーゼが見えてきた。

止血が終わってるとはいえ、真っ白だったそれは赤く染まっていた。

「えっと、これ、張り付いてる、よね？じゃあゆっくり剥がすから、痛かったら言ってね？」

「ねぇサトリ。それ外すの痛いなら、ナツヤに痛み止めの魔法でもしたら？感覚遮断の魔法はあるわよ？」

「あっ！！また忘れてた！夏哉ほんっとごめん！！」

ネハラが指摘するまで気付かなかった沙鳥は、自分の無知さに謝罪してきた。

そんな謝んなくても。

俺だって気付かなかったんだから。

「あ、じゃあさぁちゃん待って待って」

すると、空ねぇが呼び止めた。

「痛み止めなら私がちょちょいとするから」

そして、空ねぇはどこからだしたのか、木刀を手にしている。

「……なぁカヅナ。それはどこから取り出した？今の今までそれは持ってなかったよな？」

ラスクの疑問は適切だと思う。

「実はこの刀、完全に使いこなせると、自分の体の中にとけ込ませるようになるんだよ。ちょうど一週間前にこれが出来るようになったの。これ手で持ってきてたの最初の頃だけだったでしょ？」

取って付けたような設定だったけど、確かに最近は全く持ってなかった。

魔法と科学が融合するとそんなことが出来るのか、と感心する。

「ですが、その木刀で何をするんですの？気絶でもさせて、その隙にってことですか？」

「物騒なこと言うな真樹。でも、実際どうすんの？なんか変な力が使えんのは覚えてんだけど、はっきり言って忘れた」

その剣の能力を見たのなんて、たった一度だ。

しかもじっと見てた訳じゃないので、記憶も薄い。

「まぁまぁ見てて。ｌｕｘｕｒｉａ（アスモデウス）」

空ねぇの言葉で、木刀だったそれは真剣になり、更に紫の光が刃にまとう。

それだけではなく、紫の光はその刃の半分ほどの長さがプラスされて長くなっている。

「夏君、私信じてくれるよね？」

「えぇ、信じますとも」

今この状況で、空ねぇに裏切られる要素がない。

「じゃあいくよ」

紫の光を纏った刃が、俺の胸を貫いた。

「ちょ、空お姉ちゃん!?」

「大丈夫だって。夏君、肩、痛み感じる?」

言われて意識してみると、痛みが全く感じない。

「痛くない」

「夏君には説明したけど、この刀いろんなバリエーションがあって、今の長剣は斬った人の痛覚を五分間消す能力があるの。だから、この五分間は夏君全く痛み感じないよ。あとこういうバリエーションになると物体が切れなくなるの」

あぁ、確か感覚を消す能力とか聞いた覚えがある。

その能力のあんまり使い時がないため、ほとんど忘れていた。

空ねぇの言葉を確かめるように、俺は右手でわき腹を抓ってみるが、本当に痛くない。

「夏哉いい?」

「おう、どんと来い」

沙鳥はベリッとガーゼを剥がした。

「うえっ！」

口元を抑えながら、沙鳥は顔を逸らした。

やっぱり無理だったか。

他の人も何が興味あるのか、俺の傷を見ては口元を抑えて?グロい?と呟く。

結局こういうのをなんともいとわない、アンとネハラ、ラスクが三人掛かりで治療を行ってくれた。

ほんの二、三分で見れる程度には回復して、沙鳥にバトンタッチ。

一分弱で全回復してしまった。

流石は沙鳥だった。

傷も治って痛覚も戻って、皆万々歳ってなったところで、真樹が俺の前に立った。

「夏哉、ホント申し訳ありませんでした。わたくしの妹が変な真似をしてしまい……」

「まぁ取り敢えず怒ってはない。少しは風歌ちゃんの事情は知れたし。でもさ、流石にちょいと過激過ぎやしないか?相手が俺だとしても」

真樹のことが好きだとしても、こんな平和な日本であんな殺気を出せる少女がいるだろうか。

俺の問いは、皆気になっていたことなのか、ワイワイガヤガヤしてた空気を引っ込めて、皆耳を傾ける。

「……あの子、少しばかりおかしくて。元からあんな感じで、いつも過剰なことをしますの」

「それは、何かきっかけがあった、とかじゃなくてか？」

アンの言葉に首を横に振る。

「少なくともわたくしが記憶してる時点では、ずっとあの様でしたわ。わたくしに妙に固執していて、無意味にわたくしの側にいたり、独り言を呟いたら、必ずそのことをわたくしに報告して、例えば欲しい物を口にしたらそれを用意してきたり、何かしらの文句を言えば、出来ないことでもなんとかしようと動き回る痕跡が残ったり」

なんというか、薄々気付いてるけどヤンデレっぽいな、風歌ちゃんは。

話を聞いてると、真樹の部屋に盗聴器でも仕掛けてるみたいだ。

「わたくしのためなら周りなんて全く気にせず行動してしまうので、なるべく距離を置いてますわ。わたくしが望まなければ、あの子も何もしないので」

「ねぇ、それならやめろって言えば聞くんじゃないの？マキのこと好きなんでしょ？そいつ」

確かにネハラの言うとおりだ。
これだけ真樹のために動くんだから、やめろって一言言えば言うこと聞いて止まってくれるはずだ。

「もちろん最初に何度も言いましたわ。風歌もその時はやめてくれますが、すぐにわたくしが何かをすれば、再び行動し始めますの。なまじ頭がいいから、巧妙に隠しながら」

それはちょっとやっかいだ。
真樹が風歌ちゃんの手口を見つけて注意したら、風歌ちゃんは次バレないように、頭を使って行動を隠すだろう。
それをまた真樹が見つけたら、更に風歌ちゃんが隠す、といういたちごっこがいつまでも続いてしまう。

「じゃあその風歌って妹の根本を正さなきゃいけないってことか」

アンが結論を言う。

「でもま、そこまで焦る必要もなくね？」

皆が真剣になってる中、俺は楽観視したことを口にする。

「なんで？夏哉君」

「一応あの子を止められることは出来るし、俺を殺すためだからって周りに被害は今んとこ出てないでしょ？周りを巻き込んでまでっていう行動はされてないから、俺一人が頑張ればなんとかなる。それにアンとネハラとラスクもいるから、何か起こる可能性は低いと

思います。どうでしょうか？」

自分の意見を皆に聞いてもらった。

賛成意見が欲しいなぁと考えていたら、香苗が質問してきた。

「夏哉君は、ホントにそれで平気なの？」

「問題はないよ。警察沙汰ってのもめんどくさいし」

「じゃあ夏哉君の意見でいいと思う。この当事者は風歌ちゃんと夏哉君なわけだから、夏哉君がそれでいいなら、私は賛成」

「ま、私たちが入れば万が一のこともないな」

「そうですね」

「じゃあ私たちも賛成」

アンとラスク、ネハラも賛成してくれた。

「というか夏君の場合、私たちが何言っても変えない気がするんだけど」

「そんなことねぇって。意見あるならちゃんと聞くよ？なんかある？」

「何もないから賛成」

空ねぇからも賛成意見をもらった。

「夏哉。賛成してもいいけど、条件ある」

沙鳥が真剣な眼差しで俺を見据える。

「なんだ？」

「気絶するくらいの怪我と、グロい怪我するのはやめて。ほんとにパニクって、どうしていいか分からなくなるから」

そういやこん中で一番心配したのって、きっと沙鳥だよな。

目の前で倒れちゃったわけだし。

「分かった。切り傷打撲くらいはするかもしんないけど、そういう怪我はしないように気をつける」

「怪我したら殴るから」

「うわっ、鬼畜」

クスッと笑い合い、沙鳥も賛成。

最後に真樹。

「真樹はどうする？このまま一旦保留の方針か、他に何かあるのか」

この問いに、真樹は一拍間を空けた。

「夏哉の好きにしていいですわ。わたくしには口出せませんし」

というわけで、全員賛成意見なため、放置決定となった。

「じゃあ解散すっか！他に誰か言い残したことある人？」

皆反応なし。

「では俺から一点。真樹のみ残るように」

「わ、わたくし？何か用でも？」

「ちょっとな。と言うわけで、皆かいさーん。はい散った散った」

「ねぇ夏哉君、真樹ちゃんと何話すの？」

「ま、まさか夏哉ついに真樹に告白！？」

「な、なんだと！？夏哉、それは本当か！？私というものがありながら！！」

「だぁ違う違う！！これからシリアスシーンに入るところなんだから変な妄想入れるな！これガチだから！！」

シッシと手で払うと、ちらちらこちらを見ながら帰って行った。

「さて真樹さん、頼みがあんだけど、明日放課後暇？」

「暇といえば暇ですが……何か？」

「いや、実はさ――」

俺は真樹に神奈ちゃんのことを話した。
そして相談に乗ってもらえるか頼んでみた。

「まぁ、経験者と言えば経験者ですが……」

「相談されたくないなら全くもってしなくてもいいからな。無理して、は絶対しないように」

「構いませんわ。明日の放課後でよろしいんですのね？」

「向こうが四時前に学校終わるって言ってたから、四時ちょっと過ぎくらいか」

「場所は、家で構いませんか？」

そういえばそういう細かいセッティングは決めてなかったな。
言い出しっぺのくせに計画性がなさ過ぎる。

「そういう細かい指定はしてないから、今日夜にでもそれ聞いてみて、特にしていなければ真樹の家で、じゃだめ？待ち合わせ場所も後でってことで」

「構いませんわ。それにしても彼女が対人恐怖症ですか。まだ軽度でしょうが、意外でしたわね」

「悩みなんて言われなきゃ気付かないもんでしょ。ねぇ真樹さん？」

こいつも、悩みとはちょっと違うかも知れないけど、沙鳥をいい様に利用した、と思いこんで苦しんでいた。
それに言われるまで全く気付かなかった。

「……ですわね。わたくし、カウンセラーなどやったことありませんので、我流でいきますわよ？」

「むしろそれ以外に出来るとは思ってませんよ」

「そうですか。では、用事はこれで終わりですの？」

「おう。もう用はない。じゃあ頼むな」

「分かりましたわ」

俺たち二人も解散した。

――――――――――――

翌日の放課後、四時十分。

わたくしは麦谷寮から少し離れた場所に待機していた。

今回篠原さんとの待ち合わせ場所を麦谷寮にしたのだ。

待ち合わせの四時十五分までには時間があったので、家に帰って私服に着替えた。

どうして待ち合わせ場所の寮の前にいないかというと、夏哉から聞く篠原さんの性格上、わたくしを待たせてしまったという罪悪感に苛まれて、最初から縮こまってしまう可能性があったから。

相談を受けるのだから、相手にはなるべくすらすらと語って欲しい。

厳しい物もあるでしょうけど。

十五分まで三分前。

わたくしがいるのとは反対方向から、篠原さんが小走りやってきた。

寮の前で止まって、時計を確認して、一息ついたところでわたくしも出る。

「あら、申し訳ありません。待たせてしまいましたわね」

「あ、い、いえ。私も、今ついたばかり、ですので」

「なら、丁度よかったですわ。時間も丁度いい頃ですので、いきましょうか」

「あ、はい」

わたくしたちは早速歩き出す。

間を持たせるために話し掛ける。

少しでも話して、緊張を和らげてもらえるようにするために。

「取り敢えず、昨日のことを夏哉から聞きました。申し訳ありません、それを考えると、初対面でしたわたくしとの電話はつらかったですわよね？」

「あ、そんな、えっと、その……」

「頷いても構いませんわ。篠原さんにとってはつらいかもしれませんが、わたくし、性格は図太い方ですので気にしませんわ」

まぁこの性格は演技で作り出したもので、本心はなんとも臆病で挙動不審で。

そう考えると篠原さんと同じかも知れない。

「ちょ、ちょっと、つらかったです……」

これは驚いた。

つらい度合いは、恐らく?ちょっと?ではないだろうけど、肯定した。

こういう弱々しくて他人の目を気にする人は、わたくしも含めて、相手に悪印象を与えるかもしれない、と考えて肯定ではなく否定を選ぶと考えていたからだ。

「偉いですわね。ちゃんと自分の意見を言えるではありませんか」

「あ、あの……はい」

これは?わたし?よりも救いようがある。

そんなことを考えながら、篠原さんを家に通し、わたくしの部屋に連れ込んだ。

第八話　《十六章》対処法（後書き）

夏哉「えっと、この後書き読んでる人、すみません。作者に『三話連続投稿するゆーたやろ？有言実行せい』という感想が送られたので、必死こいて頑張るっていってました。なので、後書き激短にさせてください、だそうです」

沙鳥「ホント後書き楽しんでる人すみません」

夏「そんな人いないと思うけど」

沙「だよね～」

作「ほら、夏哉、沙鳥！さっさと感想感想！」

夏「ソラトさん、フォルスさん、感想ありがとうございました。返信まだ書けなくてすみません」

沙「キャラ投票待ってます！」

作「さあ、風呂入って気合い入れよう」

第八話　《十七章》本音

「うわぁ～」

篠原さんを部屋にあげると、感嘆の声が聞こえた。

沙鳥様の約六畳の部屋を一般の広さと考えれば、約十畳あるこの部屋は、とても広いと感じるのだろう。

「一応祖父が病院の院長でして。親の七光りという奴ですわ。この部屋にイスがひとつしかありませんので、座布団で我慢してください。では座ってくださいまし」

ほぼ中央に構えられた、ティッシュの箱ひとつのみ置かれたテーブルを挟んで、わたくしたちは座った。

「では、そうですわね～。篠原さんは、人が怖いというよりは、相手が自分にしたことに関して不快な思いをしているかどうかが分からず、恐怖を感じている、出会ってますか？」

「は、はい……」

「では、例外などありましたか？この人だけは普通に話せた、という人。名前は言われても分からないと思うので、構いませんが」

「えっと……ひ、柊さんが」

おっと、これはある意味ありがちな展開だ。

流石は主人公、と誉めておこう。

「夏哉、ですか。実は昔に出会っていた、などはありませんか？あいつならあり得そうなんですが」

「あ、いえ……多分、ないと思います……」

そこまでお約束の展開はなかったか。

それにしても、やっぱり緊張しているようだ。

下を向いたり、手をいじくり始めた。

何かリラックスできる方法はないか考え、ふと思う。

今のわたくしの口調、かっちりしすぎて真面目な雰囲気しかでないのではないだろうか。

ですます口調で質問されるよりは、タメ口で質問した方が親近感が沸くだろう。

？ですわ？なんて口調、アニメならともかく、素で聞くのは初めてで緊張するだろうし。

「篠原さん、これから下の名前で呼んでいいですか？」

「え？あ、はい……」

「ありがと、神奈。こっちの口調じゃさん付けっていうの合わないのよね」

神奈にとっては訳が変わらないだろう。

彼女にとっては、突然わたしが別人のように変わってしまった、と

感じているだろうから。

それを肯定するかのように、目を見開いて驚きを表現している。

「まぁ驚くのも無理ないけど、こっちが素のわたしよ。あのお嬢様口調は演技。とは言っても、家でもお嬢様口調貫いてるけど」

「あ、その……ど、どうして……」

「どうして演技なんてしてるか？」

こくり、と小さく頷く。

「ちょっとね、昔色々あって。そのこと話すから、ちょっと聞いてて」

これで自分の口から過去を語るのは二度目。

一度話した経験があるからか、案外心に負担なく話せた。

小学四年の頃に誘拐されたこと。
誘拐犯に犯されかけたこと。
魔法で撃退したこと。
研究所で実験体扱いされたこと。
引きこもったこと。
沙鳥を利用したこと。

魔法ってところは全く誤魔化さず、むしろ実際に見せてあげた。

余談だが、その時見せたのは水と土の魔法を使った人形劇。

夏哉から頼まれた時点から、自分の過去を話そうと決めていたので、その際欠かせない魔法の説明をどうしようかと、一晩考えた。
火は危ないし、風は分かりにくいから、だったら水に土を混ぜて泥人形的なのを作ってそれを動かすところを見せようと思いついたのだ。
人形劇の内容も自分で考えたため、わたしの過去を聞いて落ち込んでた神奈が笑ってくれたのを見て、凄く嬉しかった。

すべての話が終わると、やはり優しい神奈はわたしのために涙を流してくれた。

わたしは立ち上がって神奈の隣まで来ると、そこに座り、神奈の頭を抱いた。

「ありがと。わたしの過去聞いて泣いてくれて。はい、ティッシュあるから拭きな」

テーブルの上に置いてあるティッシュをこちらに持ってきて、神奈に渡す。

涙を拭いながら、神奈は聞いてきた。

「さ、早乙女さんは、今私、怖くないんですか？」

同じ、人に対する恐怖を抱いてるものとして、気になるところなんだろう。

だからわたしは本音を言う。

「怖いわ。凄く怖い。こんな話をして、神奈に引かれるんじゃない

かって思うと、凄く怖い。変な目で見られると思うと、凄く胸が締め付けられる」

「そ、それが、ずっと続いてたんですよね？」

「そうね。沙鳥に会った最初の頃は、ただ気に入られようと必死だったし、演じるもう一人のわたしになりきるのに時間かけてたから、少しは忘れてたけど、慣れてきたら怖くなってきたわ。もう一人のわたしを演じてても、結局それはわたしで、皆わたしを単なる道具にしか思ってないんじゃないかって思うときもあったわ」

過去を思い出していると、涙があふれ出そうになる。

でも本音を出してるとはいえ、年下に涙を見せたくないという変なプライドが働いたため、必死に堪える。

「どうして、真樹さん今まで、耐えられたんですか？」

わたしが本音と自分の過去をを喋ったお陰か、涙声で震えてるにしても、すらすらと質問してくれる。

わたしの秘密を教えたから、わたしは本音を話してくれる、と思ってくれてるのだろうか。

「ひとつは、沙鳥にずっと尽くして考える暇をなくしたのよ。あと勉強と魔法にも時間費やしてね。後は、やっぱり沙鳥の存在が大きかったわ」

「天雲、さん？」

「うん。本当に皆沙鳥に意識が行くんだもん。わたしには皆見向きもしないから、あまり人と関わらずに済んだの。それにわたしが沙鳥の親衛隊だって言い張れば、男がわたしに惚れたとしても、ライバルは沙鳥だって勝手に思ってくれるから、自然と諦めていくでしょ？だから人とは本当に必要最低限しか関わってないわ」

「……早乙女さんは凄いです。行動力があって。しかもそれが成功して。私なんか、何かやろうって思ってもすぐに諦めちゃうし、何かと理由づけてやる前に出来ないって決めつけて……」

自分を貶す時にすらすら、はっきり言えてる。

「ねぇ、ひとつ聞いていいかな？」

もしこの子がわたしに近いなら、この子も私と同じ風に考えていることだろう。

「なんですか？」

「神奈は、自分のこと嫌い？」

ピクッと、触れている体が震えた。

図星か。

「あの……はい。嫌いです」

わたしは少し強く抱き締めた。

「もう、ホントに神奈は偉いわね」

「え、な、なんで、ですか？」

「だって、昨日今日会ったばっかりのわたしに、本音で話せてるのよ？凄い勇気がいるって分かるから。だから、本当に偉いって思うわ」

少なくとも昔のわたしにはそんな芸当出来ない。

自分で作り出した、強気なお嬢様という殻に閉じこもって、偽り続けていただろう。

そして、身勝手にも自分の本音にどうして気付いてくれないんだろう、と意味の分からない不満を抱いていただろう。

「で、でも早乙女さんも、わたしにここまで話してくれて……」

「わたしはね、もう夏哉に救ってもらったの。だから、ずっとは無理だけど、今みたいにこの時間だけは本音で言えるの。でも神奈はまだ誰にも救われてないのに、今のわたしみたいに本音を言えてるわ。ホント凄い」

「そんなこと、ないですよ。だって、早乙女さんはすっごくつらくて、酷い目に遭ってるのに私なんかなんにもないんですよ？危険な目にも遭ったことなんて一度もありません。それなのに何考えてるか分からなくて怖い、なんて、ただのわがままじゃないですか。他の人が何考えてるか、全部分かるわけないのに」

この子、自分とわたしを対比させてしまったか。

わたしの過去は、お世辞にもいいものとは言えないし、皆が皆悲劇だと言うようなものだ。

わたしには他人を恐怖する理由があるのに、神奈にはない。

そこが、自分を責める点になっているんだろう。

「うん。神奈が自分責める理由も分かるけど、でも、自分から危ない目に遭いたいわけじゃないでしょ？」

「それは……その、はい。遭いたく、ないです」

「ならいいのよ。遭わないなら遭わないに越したことないし。もしかしたら、神奈の思ってるとおり、わたしの悩みより神奈の悩みの方が小さいかも知れないけど、大きい小さい関係なしに、悩みは悩みでしょ？なら解決するに越したことないわ。小さな悩みでも、解決したら楽しくなるものよ」

出来ればわたしの言葉の意味を理解してもらいたかった。

悩みがあるならなんでもため込まないで、さっさと解決しようってことを。

悩みは、ため込めばため込むほど、質も数も大きくなってしまうものだから。

しかしわたしの言葉じゃ説明不足だったようで、神奈にキョトンとした顔をされてしまう。

「わ、分かりにくかったかしら？」

「あ、ち、違います。その、昨日、柊さんにも同じこと言われて」

なんですと？

「な、何？夏哉も、とにかく悩みを解決しようって言ったの？」

「あ、はい。確か、大なり小なりでも悩みがあるなら解決したくない？って」

同じ意味を言ったようだけど、言葉までも一緒にならなくてよかった。

ここまで同じだったら、絶対皆にからかわれる。

「まぁ、とにかくそういうことよ。今すぐに解決っていうのは無理だと思うけど、少なくともこの二日間で、わたしとはちゃんと話せてるでしょ？」

「は、はい」

「凄い進歩よ。買い物とかは普通に出来るんでしょ？」

「できます」

「なら十分よ。徐々に話せるようになっていこ？焦りは禁物よ」

急がば回れという言葉がある。

焦って言葉を間違えて恐怖に苛まれるより、ゆっくり、数は少ない

けど確実に楽しく話せ手いけるようにした方が断然いい。

「早乙女さん……」

「ん？」

「早乙女さんは今、死にたい、ですか？」

死。

改めてお代として出されると、考える物だった。

少し考えるため無言になり、沈黙がやってくる。

「うん、死にたくないわ。今は皆と一緒にいたいって思ってる」

「そうですか」

少しほっとした様な口調を聞いて、わたしは小さく笑った。

「おかしいわね。死を望んでる子が、生を選ぶ他人を見てホッとするなんて」

「あっ……こ、これは……」

自分でも無意識だった、感情の差違。

自分は死んでもいいけど、他人には生きてもらいたいという考え。

そこを指摘してみると、ちょっと慌てた風になる。

「ごめんね。ちょっと意地悪なこと言っちゃったかな。気にしなくていいわ。わたしが生きてて、ホッとしてくれる人がいるなんて、結構嬉しいものよ」

「そう、なんですか？」

「だって、わたしが生きてていいって言うことを認めてくれたってことよ。ありがとうね」

本人はそこまで気にしてなかったが、わたしにとっては嬉しいことだったのでお礼を言っといた。

「い、いえ……」

話も一段落ついたため、一旦間が空く。

「早乙女さんは、柊さんは平気なんですか？」

予想できた夏哉関連の質問。

わたしは一度深呼吸をする。

「そうね。他の男は怖いけど、夏哉だけは平気よ」

「どうしてでしょうか。私の場合柊さんに、自分が主人公だからって言われたんですが」

「ふむ、夏哉もようやく主人公としての自覚が出てきた、ということですか」

もっとも、自覚してようが今までとやることに大差ないようだけど。

「ん～、改めて理由を求められると少し困るけど、そこは夏哉だからって納得した方がいいと思うわ。アイツは自分のこと大切にしなかったり、自分のことより他人優先しすぎてボロボロになったり、周りを考えてるようで実は考えてない馬鹿だけど、底抜けに優しい奴で、いつも皆が幸せになれる方法を探して、それを行動に移してるわ」

その？皆？の中での自分の立場がかなり低いけど。

「ホントにね、わたしも救われたけど、わたし以上にわたしのこと好きになってくれてるのよ。多分わたしの欠点あげても、それも好きだ、なんて平然と言う男ですわ」

「……好き、なんですか？柊さんのこと」

出た。

わたしにとって一番難しい質問。

「……それね、わたし自身もよく分かってないの。確かにわたし、夏哉のことは他のどの男より好きだし、女を含めたとしても、もしかしたら一番好きかもしれないわ。でも、これが愛情なのか、友情なのかが分からないの。だから、この際友情ってことにしておいて、愛情なんて考えないことにしたわ」

夏哉が好きなのは認めよう。

でも、恋愛とは違うと思う。

そう思いたい。

多分恐れているんだ。

夏哉の奥深くまで踏み込むことを。

それこそ、今神奈が悩んでいる、？嫌な思いをしてるのかもしれない？という思考をしてしまい。

「で、でも、それでいいん、ですか？」

「いいわよ、別に。わたし、今でもホント幸せだから。仮にこの感情が完全に愛情だったとしても、わたしは沙鳥に譲るわ。あの子のお陰で今のわたしがあるから、恩返しの意味を込めて沙鳥の恋路を応援するわ」

「そう、ですか。でも……早乙女さん、本当に幸せ、なんですよね？」

あぁ、さっきの質問に比べてなんて楽な質問だろう。

「本当に幸せよ。まだ短い人生だけど、今が一番よ」

「なら、よかったです」

ずっと抱きしめていたから、神奈の顔は見えないけど、微笑んでいることは予想できた。

「色々話したけど、結論を言っちゃえば夏哉に任せれば、きっとなんとかなるわ。結果は分からないけど、いい具合に収まりがつくわ」

わたしの言葉を聞いて、今度は微笑む、ではなく笑った。

「それ、柊さんと全くおんなじこと言ってます」

「え？ちょっと待って。全く？言葉も同じ？」

「確かそうだったとおもいます」

「神奈、このこと絶対誰にも言わないでよ？こんなこと誰かに知られたら絶対からかわれる。言ったらヤンデレの如く追い詰めて死よりも恐ろしい恐怖を味わうことになるわ」

「あ、あの、私、恐怖について相談を受けに来たんですけど……」

「なら、本当の恐怖を体の随まで叩き込まれないようにしないとね」

「き、気をつけます……」

わたしの忠告に神奈が後込みすると

「「あはははは！」」

なんだか無性におかしくなって、お互い笑い出した。

第八話　《十七章》本音（後書き）

アン「十二月四日までに三話投稿、といってたのだが……」

香苗「普通に過ぎてるね。四十五分くらい」

ア「それに前々回の話、十二月三日から書いたのを投稿したのだろ？」

香「ぜんぜん約束守れてないね。流石有言不実行の作者」

作者「ごめんなさい申し訳ありませんすみません！！」

ア「これで作者の死は確定したな」

作「死ぬの！？俺死ぬの！？」

香「さようなら、作者。私たちは忘れないよ」

作「いやいやいや、ホント申し訳ない思ってるけど、俺死まで行くの！？つか俺死んだら小説続かないって！！」

ア「安心しろ。私たちが交互に書くことになった」

作「もう確定かよ！？」

香「じゃあ先に感想のお礼を。ハクヤさん、ＳＴさん、ｓｃａｒＬｅｔ★さん、感想ありがとうございました」

ア「次回からは作者も変わって、名前どうしようか」

香「夏哉ラバーズでいいんじゃないかな？」

ア「ラバーズ？」

香「夏哉君のこと好きな人って意味」

ア「あぁ、じゃあ決定打な。夏哉ラバーズをよろしく」

作「うわぁ待て待て待て！どうか命だけわぁ！！」

ざしゅっ

第八話　《十八章》宣言

時間にして一時間半ほどだろうか。

ずっとわたしの部屋で神奈と話していた。

話していた、というだけで分かるかも知れないが、相談はあまりしなかった。

わたしが言えることは実体験しかなかったし、神奈の場合、切っ掛けがあればなんとでも出来そうだ。

その切っ掛けを掴み取るまでが一番大変で、一番つらいことなのは分かってるし、わたしから見たら神奈はちゃんと出来てると思えるが、本人からしたらとてもつらく、心が引き裂かれそうな思いをしてるのかもしれない。

でもその後、わたしたちは話し合えた。

身のある内容ではなかったが、楽しく会話が出来た。

今はそれで十分じゃないか。

恐らく本人からしてみれば？死にたい？という、根本から流れ出る感情は消えていない。

わたし自身、彼女を変えた自覚がないから当然だ。

でもそういう重要なことは、全部主人公（なつや）に押しつけてしまえ。

サブの役割はここまでで――ヒロイン（かんな）を笑わせるまでで終わりだ。

神奈を見送るため、部屋の玄関まで一緒に来た。

「あ、最後にひとつだけ言っておくわ」
隣に立っている神奈がわたしを見た。
サービス料として、最後にアドバイスを送る。
「もし、これからも自分じゃどうしようもなくなった時は、なんでもいいから逃げなさい」
「え、逃げるんですか？」
「そ。逃げる。逃げ方はなんでもいいわ。と言っても現実逃避くらいしか出来ないでしょうが。で、逃げて逃げて、もう自分じゃほんとに逃げられなくなったときは、わたしか夏哉のとこに来なさい。どちらかに余裕があれば、必ず助けるわ」
「で、でも、めい――」
「迷惑だなんて言わせないわ。わたしと夏哉は――少なくともわたしとは、腹かっさばいたのよ？他人には言ってないし、沙鳥にすら言ってないことを話したの。神奈を信用して」
だから、と言って、わたしは神奈の頭の上に手を乗せる。
「少しでいいから信用してみなさい。一歳とはいえお姉さんよ？もう後輩の我が儘くらいは聞ける器は持ってるわ」
微笑んで、言ってみた。

安心して任せてもらえるように。

「……はいっ」

返事を返す神奈も、微笑んでくれた。

「よし、じゃあまた今度。あ、今日のこと夏哉に話して平気？」

「柊さんに、ですか？」

「一応アイツの提案でわたしたち話せたわけだから。報告と、次アイツに任せる為にと思って。どうする？」

「えっと……」

流石にパッとは出てこないか。
なら背中を押してあげよう。

「はい、制限時間十秒。言うか、言わないか、どちらでもいいか。どちらでもいいを選ぶと、強制的に言わない方向へ。時間が過ぎると、今日は監禁します。はい、よーいスタート。十」

「え、か、監禁ですか！？」

わたしの条件に驚いている。

「ちなみにガチだから。九……八……七」

「え、えっと、えっと、つ、伝えておいて、くれませんか？」

「はい、よくできました」

ポンポン、と頭を叩く。

「さて、そろそろ本当にお別れね」

最後に、少しだけ意識を変える。

「何かあったらメールしてくださいまし、神奈さん」

「あ……は、はい」

口調が戻って一瞬戸惑ったようだ。

そう言えばこっちじゃそこまで話したことがないから、別人に感じてしまうのか。

「では、さようなら」

「さ、さようなら」

しばらく帰路へ着く神奈さんの背中を見て、わたくしも自身の部屋へ戻る。

早速携帯を取りだし、夏哉へ今日のことを電話で伝えた。

そして最後は任せることも。

『ちょいと真樹さん?別に俺なんぞに任せんでも、自分で出来なかったのかよ?』

「そこは主人公に任せますわ」

『なんでそこだけ謙虚なんだよ。もっと普通に解決してやれよ』

「うっさいですわね。どうせフラグ立てたいのでしょ？その機会与えてあげたではありませんか」

『今からお前のとこ行ってブン殴っていいか？』

「お断りします。というか、あなた自分で主人公とか言ったらしいじゃないですか。だったらケリは自分で付けなさい」

『はぁ～、了解』

「じゃあ切りますわよ」

話すことはもう話したので、通話を切ろうとしたら、待ったが入った。

『あー！ちょいちょい。最後質問』

「なんですの？」

『そこまで知らない人と仲良くなるには何が一番いい？』

「それをわたくしに聞きますか」

人間不信になって引きこもっていたこのわたくしに。

『現状況、いつものメンバーじゃ一番の友人保持者だからな』

「まぁ確かにそうですが……」

咄嗟に聞かれて思いつかない。

仲良くなる方法とは、改めて考えると悩むものだ。

わたくしの場合、仲良くなろうとしてなったわけではなく、いつの間にか仲良くなった、という感じだ。

夏哉や香苗たちと仲良くなったと感じたのは……温泉の時か？

「ん～、遊ぶ、のではないですか？」

『遊ぶ、ねぇ。よし、了解。サンキュー』

「構いませんが、神奈さんと遊びに行くんですの？」

『まだ未定だけどな。取り敢えず、今週中に問題ごとのあらかたは済ませたいと思ってる』

「また大きくでましたわね……」

相手が年単位で悩んでいたことを、たった数日でなんとかしようとか。

まぁそれを言ったら、わたくしもたった一日で救われましたが。

『大きくも何も、早めに悩み事とかそういうの解決させてやりたいじゃん』

「それはそうですが……まぁいいですわ。何かあったら言ってくだ

さいまし。協力いたしますわ」
『おう。頼むわ。じゃーな』

「はい」

今度こそわたくしは電話を切った。

――――――――――

「さて、と」

電話を切り、部屋へと戻る。

一応アンたちに聞かれないように、玄関で電話していた。

「アンちゃんや。ちょいとお願いがあるんだが」

「なんだ？真樹とのデート邪魔するな、か？」

少し不満そうな表情で、こちらを睨みつける。

「違う。もっと言えばデートはせん。まぁアンだけじゃなくって二人にも手伝って貰いたいんだけど」

「ナツヤ、何するんだ？」

ラスクが聞いてくる。

なんにも説明してない状態でこんなこと言うしまうだろう。
だから、そう訊ねられるのも当然だろう。

「ちょっと問題解決のために、な」

――――――――――――

あの化け物を襲ってから三日が経った。

その間、わたしはあの化け物に何もしなかった。
というよりは何も出来なかった。

本当はあのスタンガンで全てを決めるつもりでいた。

かなり高威力に改造して、殺傷力を二十倍にあげた。
普通のスタンガンでも二倍から三倍上げれば命に関わるのだ、絶対殺せると思っていた。

本来そこまで電圧や電流などを上げてしまうと、自分に感電したり、スタンガン事態が壊れてしまうが、わたしが使える風魔法を使って完全にスタンガンの絶縁にして感電を防いだ。
更に空気の抵抗を調整して、電気の流れをコントロールことによって、本体の破壊を防いだ。

しかしこのような精密操作は、今のわたしにはそう何度も出来ないので二発しか使えない。

ここまで調べて考えて試行錯誤したのに、通用しなかった。

いや、通用はしたけど、即死ではなかった。
しっかり心臓を狙って電撃を浴びせたのに、倒れただけだった。
同じ手はもう通用しない。
やったとしても、今度は冷静に対処されて
だから失敗してしまう。
大体、既に警戒されてるだろうし、アイツの周りには見えない何かがいる。
観察してて分かる。
隠した気になっているようで、しかし端から見れば挙動不審な点が多かった。
とにかく、その見えざる何かが傍を離れてくれないだろう。
また前のように誰かと二人きりになってくれればいいのだが。
欲を言えば一人になってくれればいいが、それはないだろう。
「ねぇ風歌ちゃん、なんか悩み事？」
おっと、一緒に帰っている友人のことに変なことを聞かれる前に、ちゃんと誤魔化しておかないと。
「あ、うん。医者継ごうかどうかね。お姉ちゃんとお父さんがそんな話してたから」

「えぇ、風歌ちゃんならないの？頭いいし、今から医者になっちゃえば？」

一応わたしは学年トップだ。

これも全部お姉ちゃんのため。

お姉ちゃんに聞かれたことはなんでも答えられるように、いっぱい勉強した。

今なら高校一年の後半までならなんとか解ける。

「何言ってんのよ～。まだ中一なんだから無理だって」

「いやいや、お父さんに頼めば出来るんじゃない？」

「だから無理だってば～」

笑いながら下校して、別れ道に差し掛かった。

「じゃあね～」

「またね～」

わたしたちは手を振って別れた。

その後は一人で帰宅した。

その時――

「お嬢さん」

前方から声が聞こえたので、バッと顔を上げた。

電信柱の陰から、一人の男が出てきた。

憎むべき化け物。

鞄に入っているナイフとスタンガンをいつでも取り出せるように、右手を突っ込む。

ないよりはマシだろう。

「なんなの？」

憎しみを込めながら声を放つ。

よく見ると、もう一人陰に隠れていた。

篠原神奈だ。

制服を着て鞄を持ってることから、学校帰りなのだろう。

あの二人が一緒にいるのは予想外だった。

周りには誰もいない。

あの見えざる奴らは分からないが。

「俺はちょいと君と話がしたいんだけど」

「黙れ変出者。通報するわよ」

とは言ってもするつもりはない。
だって、警察に捕まったらわたしが殺しにいけないから。

「そりゃ困るな。俺は君と仲良くなりたいだけなんだが」

「わたしにそんな気はないわ」

誰が化け物なんかと仲良くなるか。

「あ、あの、本当にやるんですか？」

すると、篠原神奈がおどおどしながら化け物に訊ねる。
確認しているようだ。

「やるやる。真樹のバーカ。引きこもり～」

「え、えっと、さお――真樹さんの根暗～」

ブチッ！！

わたしの中で何かが切れた。

即座にナイフを取りだし、お姉ちゃんをバカにした二人を殺しに行く。

「な、ナイフ持ってますよっ！？」

「よし、まず逃げよう」

化け物は篠原神奈の手を引いて逃げる。

それならと思い、ナイフを投擲した。

ナイフは回転しながら化け物の背中に向かう。

しかし案の定、それは振り返った化け物が手で止めてしまった。

「いって！流石に刃は掴むもんじゃねぇな……」

「刃、というか、投げられた刃物を掴むものじゃないと思うんですが……」

全くだ。

そのまま刺されてしまえばいいのに。

しかし、これではっきりした。

今のアイツの周りに見えざる奴らはいない。

わたしが攻撃してもなんのアクションもないからだ。

あらかじめ動くなと言われてたとしても、目配せはするだろう。

でもそれがない。

ならばいける可能性がある。

二回連続スタンガンをぶつければいい。

そのためには風魔法を使わず、すべて制御に回さなければならない。

仕方ない、足で追い掛けよう。

しばらく走って、違和感を覚える。

わたしがあの二人についていけている。

篠原神奈の走力がないと仮定しても、化け物に手を引かれているのだ。

それに引き替え、わたしの走力は平均的。

二年も成長差があるのだから、追いつける訳がない。

つまり、わたしのペースに合わせているのだ。

『俺はちょいと君と話がしたいんだけど』

まさかそのために、場所を変えようとしてるのだろうか。

……有り得る。

ならばそこに、わたしの不利になるものがあるはずだ。

そこに辿り着く前に仕掛けなければ……！！

だか向こうはちらちら様子を確認するため、わたしが速度を上げれば、向こうも速度を上げてくる。

足止め出来るものは何もないため、ずっと追いつけずにいた。

気付けば、広い公園に到着した。

すると二人は足を止めた。

人はまばらにいる。

この状況で何か仕掛けてくるのか？

わたしも足を止め、息を整えながら二人の出方を待つ。

全く呼吸を乱していない化け物は、ピンと腕を真上に上げた。

まるで選手宣誓でもするかのようだ。

「さぁここで、第一回三人だけの鬼ゴッコ大会大会を開催します！！」

「……は？」

意味が分からず、間抜けな声を上げてしまった。

第八話　《十八章》宣言（後書き）

夏哉「……遅いな」

真樹「……遅いですわね」

作者「ホントすみません。もう無理です」

真「何が？」

作「一日更新。あのですね、予定が切羽詰まってまして、十三日にアニメ企画書作成、十六日に二十四ページマンガ下書き作成、二十日に色彩に関するプリント八枚作成、同日に自分が考える独特の服装をしたキャラクター作成。正直きついですし、執筆する時間が睡眠直前になってしまい、質の悪い話になってしまいました」

夏「もっと前からやってりゃよかったじゃん」

作「やってないから今まで更新できたの。で、それに皆さんの作品も見れなくて感想も書けず、何より感想くださる皆さんへ返信できないんですよ。なので、一日更新は二十一日まで待っててください。そうなればちゃんとかけると思います」

真「小説自体は書くんですわよね？」

作「もち。まぁ四日更新とかになりそうですが。それにそろそろ別の小説も書かないといけないんで、更新遅くなります。てなわけで、そろそろ終わろうかと思います。真樹頼みます」

真「フォルスさん、クロスライトさん、STさん、名無しさん、ハクヤさん、victorさん、colorfulさん、感想ありがとうございますわ」

夏「次回もよろしくお願いします。キャラ投票、待ってます。ちなみに蛇足かもですが、感想だけじゃなくメッセージに投票でも構いません。こっちなら他人に見られるってことはないので」

作「次回書いて、その次エピローグかいて第八話は終わると思います」

第八話　《十九章》解決

「じゃあ鬼決めるぞ。出さなきゃ負けよ、最初はグー――」

化け物がいきなり拳を前に出した。
それに合わせて篠原神奈も前に出す。

二人のとっさの行動に私もつられて手を出してしまった。

「――ジャンケンぽい」

わたしと篠原神奈はグー、化け物はチョキで化け物の負け。

「あ～、俺か～。はい、十数えるから逃げた逃げた」

「あの、柊さん」

「どうした？」

「流石に女と男じゃ足の差が出ちゃうと思うんですけど」

確かにそうだろう。
こいつは年下相手に力の差が出やすい鬼ゴッコをやろうというのか。
最低だな。

「まぁそこはご安心なさい」

化け物は手首まで隠す自分の袖をまくった。

はじめ見たときから思ったのだが、どうして夏に近いのに私服で、薄とはいえ長袖長ズボンを着ていたのか。
その答えを教えてくれた。
手首には灰色の腕輪をしていた。
オシャレにはとても見えない。
「腕輪、がどうかしたんですか？」
「実はこれ、５０？あります」
「へ？５０？？」
訳が分からないような声を出した篠原神奈。
その気持ちはわたしも分かる。
「証拠に手を出してみて」
言われたとおり手を出す篠原神奈。
その上に化け物は腕輪をつけた手を置いた。
「じゃあ力抜くね」
「わ、わわわわっ！？」
化け物が言った瞬間、篠原神奈の腕は一気に地面に向かって下がっていった。

地面にぶつかる――なんてことはなく、化け物の手は振り子の原理によって、篠原神奈の手のひらを滑って自分の脇に戻った。

「とまぁこんな感じに、神奈ちゃんが支えきれないような重いものを両腕一個ずつ、両足二個ずつの計３００?を付けてるから、多分二人と同じくらいだと思うよ」

「さ、３００?!?そんなにする必要あるんですか!?というかどうして動けるんですか!?」

「前に言ったでしょ?俺化け物級の力あるからさ。こんぐらい付けなきゃ対等にゃならないんだよ。ちなみにこれはとある知り合いの方に魔法を使って貰ってやりました。魔法のことは聞いたよね?」

「あ、はい。一応――」

「どうして……」

篠原神奈の言葉に被せて、わたしは疑問の言葉を呟いた

意味が分からなかった。

わたしたちの力に合わせて、というのは分かる。

しかし、やる理由が分からない。

「なんでそんなバカみたいなことしてるの?３００??そこまでする意味が分からないわ」

やはり相手は化け物だから全く分からない。

分かろうとする事事態間違っていたのかもしれない。

「俺は二人と仲良くなりたい」

化け物は、化け物にそぐわない優しい声で言った。

「私と……？」

篠原神奈が呟く。

「そ。神奈ちゃんと、風歌ちゃんと。二人とはまだ会って一週間も経ってないし、そこまで関わりを持ってないから、ここで遊んで距離を縮めようという画期的な考え」

「どこが画期的よ？ただの子供の考えじゃない」

と、言って私は気付いた。

どうしてこんな男の言葉にツッコミを入れているのかと。

いちいち化け物の言葉を返す必要なんてないのに。

「え、マジ？ガキ？うっそー、この鬼ゴッコいい案だったと思うんだけどなー」

化け物はやはりバカなのか、しまった、という表情をしている。

どうしてこの程度の案が画期的と思えたのか。

逆にどういう思考回路をしてるのか見てみたい。

「わ、私は、いいと、思います。楽しいと思うので」

何を思ったのか、篠原神奈は化け物の意見に賛成のようだ。

この女も化け物の周りにいる女同様、毒気にやられたか。

「よし、二対一で俺たちの勝ち！まぁ一対二でもゴリ押すつもりだったけど。まぁいい。じゃあ十秒数えるぞ」

そういって化け物は座り始めた。

腕で目を隠して、わたしたちを見ないようにする。

本当にやり始めたよ、と思いながら、ふと思い至ったことがあった。

もしかしたらこれはチャンスなのではないか、と。

鬼ゴッコなら篠原神奈も逃げて当然。

しかも今なら標的は目をつぶっている。

仕掛けるなら今がベストだ。

鞄の中にあるスタンガンを取り出そうと中に手を入れると――

「風歌さん」

集中してるときに声を掛けられたので、バッと横を向く。

声を掛けたのは篠原神奈だった。

まだ覚えている。

この女がお姉ちゃんをバカにしたことを。

どうする？

先にやるか？

しかし、手元にスタンガン以外の有効打がない。

スタンガンを使ってしまえば、化け物はしとめられない。

ならばこの女は後回しだ。

そう思っていたら、更に声を掛けられた。

「ごめんなさいっ」

腰を約七十度に傾け、首もちょっとだけ下を向いている。

予想外の行動に、毒気を抜かれてしまった。

「えっと、さっきは早乙女――じゃなくて真樹さんの悪口言っちゃったけど、あれは風歌さんを誘うために言っただけで、本当に根暗だなんて思ってません。初対面の私なんかの相談に乗ってくれたり、親身になってくれたり、本当に優しくて凄い人だって思ってます。だから、妹さんの前で、冗談でもお姉さんを侮辱しちゃってごめんなさい」

普通、中三の先輩が中一のわたしに対して、ここまで頭を下げてくるだろうか。

この女のことは全然知らないが、お姉ちゃんに対して悪く思っていないっていうのは分かった。

悪く思ってたなら、年下で妹であるわたしに謝る理由がない。

「まぁ、いいわよ。本当なら刺してるところだけど」

「さ、刺し……。あ、ありがとうございます」

若干声が震えていて、顔が青ざめてる風に見えるのは気のせいだろうか。

「ところで、なんで敬語なの？先輩じゃない」

「あ、えと……癖っていうか……ダメ、ですか？」

「別に構わないけど」

そんなことで怒るほど器は小さくない。

「あ、風歌さんは敬語に直さなくても平気ですから」

あぁ、そういえばわたし普通にタメ口使ってたわね。
殺す対象だったから敬語はいらないと思ってタメ口使ってたけど。
まぁ許可を貰ったし、このままで行きましょうか。

「おぉ、すげぇじゃん神奈ちゃん。ちゃんと自分から言えるなんて」

突如わたしたちの脇から男の声が聞こえた。

あの化け物の声だ。

そちらを見ると、すぐ傍にいた。

「少しずつ変わっていけてるじゃん。偉い偉い」

化け物は神奈の頭をポンッと叩いた。

「でもな、真樹は優しくないぞ？あいつ何かとすぐにボカボカ人を分殴ってくるし。しかも主人公なんだからとか言って押し付けることもあるし。もうちょいお嬢様らしくおしとやかになってほしいもんだ」

お姉ちゃんは十分おしとやかかだ。

そう言おうと思ったのだが、言えなかった。

「早乙女さんは優しいですし、おしとやかです」

隣にいる神奈に先を越されてしまったからだ。

その言葉を聞いてどう思ったのか、目を見開いて驚いていた。

そしてポリポリと頭をかく。

「ほんっと、真樹に任せて正解だわ。じゃ、俺はもう逃げるんで、鬼の神奈さん、よろしくね～」

「え、鬼？」

「俺、頭ポンッと叩いたよね？」

あぁ、あの時か。

確かにもう十秒経っていたかもしれない。

「あ、そういえば……」

「はい、そういうことで、じゃあね～」

そういって化け物は小走りで去っていった。

わたしはどうすべきだ？

ここで化け物を追って仕留めてもいいが、きっと足が追いつかないだろう。

とりあえず油断を誘うために鬼ゴッコに参加しておくか。

わたしも鬼から逃げておこう。

そう思って逃げようと思ったのだが――

ガシッ。

わたしは手首を掴まれた。

振り返ると、神奈が握っていた。

「何？まだ十秒経ってないでしょ？」

「柊さんに言われてからは経ってませんが、タッチされてからは十秒すぎてます」

過去を思い返してみるが、確かに会話などがあって、十秒程度など軽く過ぎている。

「じゃあ、わたしも逃げるね」

神奈は手を離し、わたしから離れていった。

仕方ない、ルールに乗っ取って十秒数えよう。

さて、この機に乗じて化け物を殺すのはいいと思うが、問題はどうやってだ。

わたしの足じゃ奴には追いつけない。

魔法を使ってしまえばスタンガンは一発しか使え――って待て。

別にスタンガンは一発でよくないか？

よくよく思い出してみると、スタンガン一発で気は失わせることが出来るのだ。

周囲に回復させられるやつはいない。

ならばとどめをスタンガンではなく、別のもので食らわせれば問題ないのでは？

確か筆箱の中にカッターとハサミがあったはずだ。

それを使えば問題ない。

十秒数え終わったので、化け物を探しに行く。

公園は広いとはいえ障害物がほとんどない。
辺を沿うように生えている木々に、五つほどのオブジェのみ。

恐らくわたしの視界に入る場所にいる。

風魔法を使い、視界の強化。
見えた。
少し離れてるが、５０ｍ前後といったところか。

まずは普通に走って近づく。
向こうが気付いてるのかどうかはしらないが、まだ動きはない。

残り２０ｍをきったところで、向こうに動きがあった。

ゆっくりとこっちに歩いてきたのだ。

何を考えているのか分からない。
単に油断をしてるだけだろうか。
それならそれでいい。
油断したままくたばれ。

残り１０ｍをきったところで、風魔法を使って加速。
一気に距離を詰めながら、鞄にしまってあるスタンガンを取り出して化け物に向ける。

しかし化け物に慌てた様子はない。

射程範囲内に入って、スタンガンを当てようとした瞬間――

ガシッと右腕を掴まれてスタンガンを止められた。

「お生憎様、目はまだ化け物級なんで、動きは普通に見えたよ」

どうにかして手を解こうとするが、びくともしない。

仕方無く、右の指の握力を抜いて、スタンガンを地面に落とす――

前に左手でキャッチ。

もう一撃食らわそうと迫る。

しかしそちらも空いてる方の手で掴まれた。

「ホントすげぇ動き。絶対中学生の動きじゃないって」

「黙れ。あんたこそ人間の動きじゃないわよ」

この化け物が。

「そりゃそうだ。それよりさ、武器使うか普通。鬼ゴッコだぞ？ルールに乗っ取ろうや」

「化け物相手に武器使うのは当然だ。それに何が鬼ゴッコだ。やる意味が分からない」

「だから、俺は君と仲良くしたいと思ってるだけなんだよね～。お互い真樹のこと好きなんだから分かりあえると思うんだけど」

「どの口が言う！！お姉ちゃんを薬で操ってるくせに！！」

「そんな薬使ってねぇって。だいたい、あの薬は俺らも被害者だぞ

？しかも手に入れる方法なんてないし。それに仲良くなったのだってゴールデンウイーク辺りからだし、その頃アイツ熱だしたか？薬の副作用で、薬飲んだ後熱出すはずだから」

「う、うるさいうるさいッ！！さっさと手を離せ！！わたしが鬼だったんだから、今手を掴んだあんたが鬼になるんだよ！」

わたしはただただ子供のように叫び散らかし、脈絡もなく言った。

「え、まじか？クソ、やられたぁ……」

化け物はわたしから手を離し、後ろを向いた。

恐らく十数えているのだろう。

これは絶好のチャンスだ。

あの化け物はスタンガンを排除しなかった。

今背中からやつの心臓めがけてスタンガンを当てれば気絶、とどめを刺せる。

息を落ち着け、静かにスタンガンを構える。

そしてスタンガン背中をぶつけようとする。

『俺は君と仲良くしたいと思ってるだけなんだよね～。お互い真樹のこと好きなんだから分かりあえると思うんだけど』

不意に、化け物の台詞が頭の中で再生された。

そして手が止まってしまう。
わたしの体はどうしたと言うのだろうか。
どうしてこの化け物を殺さない。
「……」
しばらく動かなかった。
結局わたしはスタンガンをしまい、化け物に背中を向けて走り去る。
今ここで殺さないで、年下の女に鬼ゴッコで負けるという屈辱を与えてから殺して上げよう。

――――――――――

「はぁ、はぁ、はぁ、神奈ちゃん、何回鬼になった?」
芝生の上で横になっている俺は、ベンチに座っている神奈ちゃんに声を掛ける。
ここのベンチはちょうど木が陰になって涼しい。
「え、えっと……十六回だったと……。風歌さん、は?」
隣に座っている風歌ちゃんに訊ねる神奈ちゃん。

「十、一……。で、あんたは十九回だから、負け」

「だってお前卑怯だって……！！オブジェの上に乗るなんて、よ……！」

こっちは３００?の重りを付けているため、オブジェに乗ったら壊れる。

そんな理由があるため、俺はベンチにも座れない。

というかこの重りは超キツかった。

心配かけまいと平然な顔でやっていたが、ちょっと縛りすぎた。

全力で走って、恐らく５０m七秒切らない程とか、３００?は重すぎる……。

「戦略と、言いなさい……」

まぁ戦略といえば戦略か。

と、約一時間半強に渡ってやってきた鬼ゴッコを振り返って、言うべきことがひとつあった。

「さて、俺は二人に言わなければならないことがある」

「な、なんですか」

神奈ちゃんに指をさす。

「悩んで落ち込んだ顔より」

次に風歌ちゃんの顔をさす。

「憎んで怒った顔より」

?ほいっ?と、俺は足を振って、その勢いで立ち上がる。

「楽しんで笑ってた顔の方が可愛かったぜ」

我ながら気障ったらしい台詞を吐いたもんだが、その甲斐あって二人とも赤面している。

「か、可愛いって何言ってるんですかっ?」

「へ、変なこと言うなこのバカっ!」

「はいはい、二人とも照れちゃってまぁ」

俺は二人の頭を撫でた。

「ちょ、ちょっとやめろ!」

風歌ちゃんはいやがって手をどけようとするが、人の力じゃ俺の手は動かない。

「さてと、本題に入りますか」

「本題?」

手を止めて風歌ちゃんが聞いてくく。

「頭のいい風歌ちゃんならさ、真樹が薬で操られてる訳ないって分かるよね？」

「そ、それは……」

顔を逸らされた。

図星のようだ。

「それに、俺相手だとしても一応人間って枠に入ってるから、殺人になるでしょ？それはやりすぎだと思うし、真樹に？やめろ？って言われてもなんでやり続けるの？」

「な、なんであんたなんかに言わなきゃなんないのよ……！」

まだ教えてくれないらしい。

しかし、この子は今の状況を理解していないらしい。

「ねぇ風歌ちゃん」

「何？」

「俺の左手、何？あると思う？」

「は？何？って――！？」

俺は少しだけ手の力を抜く。

するとその分、５０？の腕の重みが風歌ちゃんの頭へ伝わる。

「さぁ、早く言わないとどんどん重くなって首の骨折れちゃうかもよ？」

「ひ、柊さん！？それちょっとひどすぎませんか！？」

「大丈夫だって。なんとかなる」

「お、重い重い重い！分かった！言うから！言うからどけて！」

「よーし、よく言ったぁ」

腕に力を入れて、重みを消して上げた。

「ちなみに、真樹の昔のことは真樹本人に聞いたから、そのことは言わなくていいよ」

ね、と神奈ちゃんに視線を送ると、少し戸惑ったふうにしながら頷いた。

「……お姉ちゃん、そのころから全然笑わないんだもん。ずっと怯えてたり、顔ひきつってたり。お父さんもお母さんもずっとお姉ちゃんのことでやつれてたから、わたしがなんとかしないとって思って」

そのことは真樹から聞いた。

娘が心の傷を負って、しかも一年ほど施設に閉じこめられて実験動物の扱いを受けていたのだ。

やつれるだけで済んだ方が凄いというものだ。

「でも普通のことじゃお姉ちゃん、振り向いてくれなくて……。だからわたしに出来ることはなんでもした。勉強もしたし、お姉ちゃんを守るための武器の扱いも覚えたし、情報の集め方も学んだし、魔法の存在を知ってからはずっと練習したし」

なるほど。

この子は自分なりに真樹のためを思ってここまでしていたのか。

真樹の役に立ちたくて。

真樹の笑顔を見たくて。

「でも、それでも笑顔は見せてくれなくて。それでも、泣いたり落ち込んだりはしなくなったから良かったって思ってて。でも、高校に入って覗いてみたら、お姉ちゃん凄く笑ってて。まるで別人になったみたいに笑ってて。調べてみたらあんたがいて。おかしいじゃない。男嫌いのお姉ちゃんがあんたみたいな化け物と一緒にいるなんて。何かあるって思うじゃない」

風歌ちゃんが思ってることは、間違いじゃない。

正しい判断だろう。

俺だって、真樹の過去を聞いたときは不思議に思ったし。

「ねぇ、風歌ちゃん」

俺はひとつだけ、聞きたいことがあったので質問してみる。

「真樹が笑った顔見て、どう思った？」

「……分かんないよ。凄くうれしくて、泣くほどうれしくて、でもその隣にいるのがアンタなんかで、ムカついて、どうしてわたしには笑ってくれないのって思って……」

風歌ちゃんも、ずっと悩んでいたんだ。
でもそんな悩み事を打ち明けられる人がいなくて。
ずっとずっと導いてくれる人がいなくて。

「そっか。でももう大丈夫。絶対真樹は風歌ちゃんに笑ってくれるよ」

俺は公園に備え付けられている時計を見る。
五時九分。
もう過ぎてるな。

「無理だよ。わたしお姉ちゃんに何度も怒られたし……」

「だから大丈夫だって。真樹！出てこい！！」

「えっ！？」

俺の言葉に驚きの声を上げる。

すると俺の正面にある木の後ろ、そこから俺が呼んだ人物、早乙女真樹が現れた。

「お、お姉ちゃんっ！？」

「あ、その……」

真樹は気まずそうに顔を逸らす。

どうしてここに真樹がいるのか。

俺が鬼ゴッコ中にメールを送ったからだ。

恐らくベンチでの会話は全て聞いているはずだ。

俺は真樹の前まで歩いていく。

「な、夏哉……」

「この諸悪の根元め！」

ドスッとチョップを一撃。

「イタッ！？」

突然のチョップに訳が分からないようで、オロオロしている。

「お前が昔すんごくつらい思いしてたのは、全部とは言えないけど分かる。自分のことで手一杯だったっていうのもしょうがない」

俺には真樹みたいな経験はしたことないから、なんとも言えない。

「でもだからって、妹の風歌ちゃんをないがしろにしていいわけないだろ。そりゃ人好き嫌いがあるから、絶対仲良くなれとはいわねぇけど、教えてやらなきゃいけねぇことだってあるだろうが！これはダメだって。やっちゃダメだって。お前が風歌ちゃんを拒絶しまくるから！自分の思ってることを口にしないから風歌ちゃんは止まれなかったんだろ！もしお前が逃げなくて？やめて？って最初から

言えてたらこんなことにはならな――」

「フンッ！！」

掛け声と共に、側頭部に衝撃が走った。

いきなりのことで訳が分からず、地面に倒れてしまった。

視界に入ったのは、俺が立ってたすぐ隣に風歌ちゃんが着地したところ。

この威力だと回し蹴りでもしたのだろうか。

「アンタ！！お姉ちゃんに何してんのよッ！！」

ゲシッ、と蹴りを浴びせてくる。

一発だけではなく何発も。

「何がッ！お姉ちゃんがッ！諸悪のッ！根元よッ！！お姉ちゃんはッ！何も悪くッ！ないわよッ！あんたみたいな化け物がッ！お姉ちゃんにッ！説教するなッ！！」

「いて、痛いから！風歌ちゃん痛いから！流石の俺でも痛みは感じるから！」

そうやって抗議していると、蹴りがやんだ。

俺の言葉を聞いてくれたかと思ったが、そうではなかった。

真樹が風歌ちゃんを後ろから優しく抱きしめていた。

「おねえ、ちゃん……？」

「ゴメンね、風歌。わたしのせいでずっと一人にさせちゃって。全然構ってあげられなくて。寂しかったよね？」

「そ、そんな……。なんでお姉ちゃんが謝るの？全部、わたしが勝手にやったことなんだよ？お姉ちゃんが謝る必要はないよ？」

どうやらようやく、姉妹との会話が出来るようになったようだ。

さすがに盗み聞きなんて野暮な真似はしないので、静かにその場から立ち去る。

同じことを思ったのか、神奈ちゃんも席を外した。

「ま、これでどうしようもなんなかったら俺にゃなんも出来んな」

「多分、大丈夫だと思いますよ。姉妹ですし」

「だな」

しばらく遠目から二人を見守る。

「柊さんって凄いですね」

突然神奈ちゃんが誉めるようなことを言った。

「何が？」

「だってこんな簡単に二人の溝を埋めたんですよ？普通出来ませんよ」

「買いかぶりすぎだ。俺は切っ掛けを与えてるだけ」

「それでもです」

神奈ちゃんの方を見れば、にっこり笑っていた。

「でも神奈ちゃんも凄いって。凶器持ってる風歌ちゃんと楽しそうに遊んでたじゃん」

「それは……えっと、はい」

「まだ、怖い？」

核心を突いてみた。

「……やっぱり、考えると怖いです」

「そりゃいきなりじゃ無理か」

でも、と神奈ちゃんは続きを言う。

「今日は凄く楽しかったです。怖いのなんて忘れるくらいに」

「そっか。ならよかった。お、ということはさ」

俺はひとつ閃いた。

「遊べば忘れられるんでしょ？」

「は、はい」

「ならつらくなったらいっぱい遊ぼう。そうすりゃ笑えるようになるし。で、遊ぶ仲間を増やして仲良くなっていきゃいい。もしかしたら仲良くなった中に悩み事をなんとかしてくれる人がいるかもしんないでしょ？」

「そ、そんなに都合よく行くでしょうか？」

「やらないよりはマシだ。遊んで損はない。暇ならいつだって遊べるから、つらいときは現実逃避も手段のひとつだって」

ちょっぴり驚いた風な顔をしたが、すぐにクスッと笑って、？はいっ？と返事をした。

「よし、じゃあ最後の課題だ」

「課題、ですか？」

「そ。前に言った目標覚えてる？」

初めて相談に乗ったとき、俺が言ったやつだ。

俺に対してタメ口といいうやつ。

「目標……？あ、はい」

「それを今試そう。今日の感想を言ってみなさい」

「え、今からですか！？」

「そ。今から」

戸惑いながらあうあうする神奈ちゃんは可愛いな、などと思いながら、言い出すのを待つ。

ひとつ深呼吸をした。

「きょ、今日は凄く楽しくて、凄く笑えたよ。ありがとう、夏哉……さん」

最初は笑顔で言えていたのだが、やっぱり恥ずかしかったのか最後に小さくさん付けした後、俯いてしまった。

でもまぁ及第点でしょう。

「ホントにもう神奈ちゃんは凄いねぇ」

よく言えました、と頭を撫でようとした瞬間。

「よう兄ちゃん」

「どういうことか説明して貰いましょうか？」

後ろから、全く似合わない美少女声で、ヤクザ張りの絡むときに使う台詞が聞こえた。

第八話　《十九章》解決（後書き）

沙鳥「……あれ？私時間感覚狂ってるかな？今体感だと、前回から十日経ってる気がするんだけど」

アン「奇遇だな。私もだ」

作者「……」

沙「私の聞き間違いじゃなければ、四日程度で更新するって聞いた気がするんだけど」

ア「言ってたな」

沙「どう言うこと？」

作「ホント課題が予想以上にはかどらなくて小説書けませんでした！！」

沙「作者のバーカ。有言不実行」

ア「のろまー。裏切り者ー」

作「こ、これに反論できない……！で、でも学生の皆なら分かるはずだ！！宿題やテスト勉強をやろうとするけど、マンガやゲームで脱線してなかなか進まないってことをッ！！」

ア「脱線するな！！もし脱線するなら小説書け！！なぁ沙鳥！！」

沙「……」

ア「沙鳥？」

作「さ、沙鳥、お前まさか……！」

沙「に、人間って何か集中してやろうとする時は脱線しちゃう生き物だよね～。特に勉強とか宿題の場合って」

作「おぉっ！」

ア「沙鳥ぃぃぃぃ！？お前はそっちに行っちゃダメだ！！」

沙「作者～。今課題どんな感じなのぉ～？」

作「ん～？ヤバい」

沙「そっかぁ。じゃあ頑張ろうね」

作「うん」

ア「クソッ！この中でまともなやつは私一人か！！なら私が締めよう。ＳＴさん、ｖｉｃｔｏｒさん、ハクヤさん、ソラトさん、ｓｃａｒＬｅｔ★さん、クロスライトさん、フォルスさん、えいちゃんさん、ｃｏｌｏｒｆｕｌさん、感想ありがとう。正直九人の方から感想が来るとは思ってなかった。こんなに感想をくれてありがとう。それから投票の方も着実に増えていってるが、まだ募集中だ。改めて言うが、期限は十二月二十四日、二十三時五十九分五十九秒までだ。票を変更するのもありだし、まだ票を入れてない人も全然間に合うから、気軽に投票してくれ。では、次回もよろしく頼む」

作「やっぱパソコンで課題やるとか、脱線してくれって言ってるようなもんだってぇ」

沙「作者ぁ、ファイトぉ」

ア「やる気あるのかこいつら……」

第八話　《エピローグ》仲直り

「あの、香苗さん？」

俺の肩に手をかけている幼女――もとい少女に声を掛ける。

「なんですか？」

「どうしてあなたは沙鳥さんと一緒に私の後ろにいるのでしょうか」

「兄ちゃんが私たちに隠れてこそこそ動いてるからだよ」

ヤクザっぽく言ってるつもりなんだろうが、？兄ちゃん？というのが実兄に対して言っているみたいで恐怖は感じず、むしろ可愛さを感じる。

「あの、沙鳥さん？」

同じく反対側で肩に手をかけている少女に声を掛ける。

「あん？なんだこら？」

「いつからあなたは香苗さんとこちらを見ていたのでしょうか」

「兄ちゃんが神奈ちゃんと会う前からに決まっとるだろうが」

香苗よりはヤクザっぽいのだが、いかんせん声が美少女なため、同じく怖くない。

つまり二人にはヤクザは似合わない。

どれだけ睨みつけられても、可愛さが勝ってしまう。

……まぁ香苗の病んだときはまた話は別だけど。

「因みに私たちもいるからな？」

後ろからそう言ってきたのは、居候のアン。

現在後ろを振り替えれない状態なので見えないが、恐らくネハラとラスクもいるだろう。

突然現れたこの五人に、目の前にいる神奈ちゃんは驚いている。

アンたち三人が今見える状態なのかが分からないので、初めは見えない体で話を進めよう。

「それで……あなたたちは何がしたいのでしょうか」

「何がしたいっていうか、あんたは何してんの？私たちに内緒で三人集まって鬼ごっこ？何がしたいの？」

そう、だよな。

よく考えると年下の女の子二人と鬼ゴッコをやってるんだ、周りから変な目で見られる可能性があるが、そこは兄弟で遊んでいたと勘違いしてもらおう。

「何って言われても、単に楽しもうかと」

「神奈ちゃんに怖いってなんで聞いてたの？」

沙鳥に言われ、神奈ちゃんがピクッと反応する。

やっぱりまだ他人に聞かれていい思いはしないか。

「沙鳥。俺って主人公的ポジションじゃん？」

「何を今更」

「だから、俺は偶然にも神奈ちゃんの悩みを知っちゃったんだよ。それに風歌ちゃんの悩みも。お前らだって真剣に悩んでることベラベラ喋られたくないだろ？」

「それはそうだけど……」

「ねぇ夏哉君。それならなんで私たちに協力を仰がないの？私たち役立たず？邪魔にしかならないの？」

自虐する香苗の頭を撫でてやる。

「んなわけねぇだろ。適材適所だ。今回は真樹に助けてもらったし、アンたちにも風歌ちゃん探すの手伝ってもらった。なるべく少人数で終わらせたかったから、お前らに話さなかったんだよ」

「じゃあなんで真樹ちゃんなの？私たちじゃダメなの？」

「ダメって訳じゃないが、俺が知ってる中で真樹が一番神奈ちゃんに近いって思っただけだ」

香苗も沙鳥も、つらい目に遭っては来たが、人に恐怖は感じてないはずだ。
だから真樹に比べて親身にはなれないだろう。

「真樹と近いって、真樹何したの？」

「それは言えん。しりたきゃ真樹に聞きな。で、それが関連してて風歌ちゃんのことも話せない」

本人に口止めされてることだし。

「分かった。じゃあ真樹に聞いてく――」

「はいはい。空気を読んで今は話しかけるな」

真樹に近づこうとする沙鳥をチョップして動きを止める。

ここで話しかけるのはアホのすることだ。

――――――――――

わたしはそっと風歌を抱きしめた。

夏哉の言葉が胸に刺さった。

たぶん夏哉は本気でわたしのことが悪いとは思ってないだろうが、わたしは図星だと感じた。

わたしが大変な時には、何かと気にかけて声を掛けてくれた風歌。

普通に見れば、単にわたしのことを思っての行動だったのだろうが、当時のわたしはその行動にすら疑念を抱いていた。
疑って疑って、信じられなくなって恐怖を感じた。

「ゴメンね、風歌。わたしのせいでずっと一人にさせちゃって。全然構ってあげられなくて。寂しかったよね？」

ただ風歌は構ってほしかっただけなのに。
それだけなのにわたしは、一番最初に感じた、『妙に話しかけてくる風歌が怖い』という先入観からずっと避けてしまっていた。

「そ、そんな……。なんでお姉ちゃんが謝るの？全部、わたしが勝手にやったことなんだよ？お姉ちゃんが謝る必要はないよ？」

それなのに、わたし以上に頭の回る風歌は全く文句も我が儘も言わず、ずっとわたしのために行動してくれていた。

「わたしが、わたしが少しでも風歌のこと見てあげなくちゃいけなかったのに……。ずっと……グスッ、ずっとずっと避けたり冷たい、態度とってゴメンね……ヒクッ。姉として最低な姉で、ゴメンね……」

謝って許される過去ではない。
だって小さい頃のこの子の幸せを、わたしは潰してきたのだから。
だから謝るだけじゃどうにもならない。

でも、今のわたしにはこれしか出来ない。
謝ること以外思いつかない。

「お姉ちゃん、泣かないでよ……。わたし、お姉ちゃんの笑ったとこ、見たいのに。お姉ちゃんの、泣いてるところなんて見たく、ないのに……」

風歌に言われ、わたしは抱きついている腕を離した。

代わりに手を風歌の肩に置き、正面に向けた。

「風歌。今までわたしのことを気にかけてくれてありがとう」

わたしは、今出来うる最上の笑顔を風歌に見せた。

それを見て、風歌も笑顔になり、涙をボロボロと流した。

「や、やった……！おねえ、ちゃんのえがお……グスッ、やっと、やっと……！！」

流れる涙を拭っているが、拭う度に涙が出てきている。

再びわたしは風歌を抱きしめて囁いた。

「風歌、もう夏哉を襲うのはやめて。わたしのために、誰かが傷つくのは見たくないの。これからはずっと風歌のこと見てるから。だからあんまり周りに迷惑をかけないで。わたし、笑えなくなっちゃう」

「……うん」

もう大丈夫だろう。

風歌にわたしの気を引く必要がなくなったんだから。

「ねぇ、お姉ちゃん」

「何？」

「今、幸せ？」

「そうね。幸せよ」

「あんな化け物が一緒にいるのに？」

「一緒にいるから、幸せなの」

それを言うと少し黙って、次の質問をしてきた。

「お姉ちゃんは、柊夏哉のこと好きなの？」

その質問にちょっとつまり、しかしすぐに答えた。

「――――」

――――――――――――

翌日の朝。

いつも通り俺たちは寮の前で、沙鳥と真樹を待っていた。

昨日は酷かった。

真樹に話しかけるのを止めたのまではよかったのだが、その後沙鳥が『結局私たちには内緒なのね！』と怒り出す。

そうではない、と説得してみるものの、事情を説明できないため泥沼化していった。

まぁ殴られる事態にはならなかったけど。

で、時間をおいた後沙鳥は真樹に話を聞きに行った。

最初は渋った真樹だが、沙鳥の真剣な目を見て打たれたようで、ゆっくりと話していった。

真樹が懸念したとおり、聞いた香苗と沙鳥は涙を流した。

しかしその後二人は優しく真樹を抱きしめた。

そんな姿を見て俺は、真樹も香苗と沙鳥に心を開けてよかったと思った。

これで名実共に三人は親友になれただろう。

とまぁそういうわけで、俺と香苗、アンとネハラとラスクは待っていると――

「柊夏哉」

俺の名前を呼ぶ少女が一人。

「あら、風歌ちゃんや。どうしたんだ？」

風歌ちゃんは後ろに手を組み、少し俯いた風にしている。

「……前はごめんなさい。もう襲わないわ。周りにも迷惑かけない」

「おぉ、そりゃいいことだ。真樹の笑顔は見れたかい？」

「まぁ、ね。……あ、ありがと」

これは驚いた。

こんな素直に、俺にお礼を言えるなんて思わなかった。

「どーいたしまして」

「そ、それで……これ。はい」

ずっと後ろで組んでた手を前に持ってきた。

そこには手のひらより少し大きめの箱があった。

「ん？何これ？」

俺はそれを手に取る。

「お詫び」

それだけ言って、俺から離れていった。

「なぁつやくぅん？」

ゾクリ。

背後から、昨日とは全く違う恐怖を感じた。

「な、なな、な、なんでしょう、か、香苗さん？」

「また何フラグ立ててるのかなぁ？」

「い、いやぁ、これは別にフラグじゃな――」

「カナ～。どうしたの？」

するとちょうどいいタイミングで沙鳥が来た。

「どうしました？」

同じタイミングで真樹も登場。

「夏哉君が風歌ちゃんにフラグ立てた」

「なぁつやぁ？」

「待て沙鳥！！違う！俺はただ風歌ちゃんからお詫びの品をもらっただけだから！！」

俺は風歌ちゃんからもらったプレゼントを見せる。

そして中身も、なんでもないことを証明するためにあけて見せてあげた。

「……ほう、これは完璧フラグ経ってますなぁ」

「なにいいいいいい！？」

どうしてまだそうなるんだ！？

俺は自分でそれを確認した。

チョコが入っていた。

しかもハート型の。

「はあぁぁぁぁぁぁぁぁっ！？」

なんだこれ！？

なんでお詫びにハート型のチョコなんだよ！？

しかも字が書いてあ――

「あれ？」

字が書いてある。

確かに書いてある。

その字を読んでみると――

「あんのクソガキがぁぁぁぁぁぁぁぁッ！！」

急いで貰ったものをしまい、周りに気付かれないように走り去る。

後で真樹にしっかり教育するように言っておかないと。

＞i37539―3291＜

後書きという名の雑談？

作者「第八話完結ぅ！！」

沙鳥「やっと終わったね」

香苗「今回は二週間ほど投稿しなかったよね？」

夏哉「それに最悪な話だった」

真樹「女装しましたしね」

アン「私はあんまり活躍できなかったな」

作者「本当に今回は課題が多くで大変でした……」

夏「小説も読まないで感想も返さないで、酷い話だったな」

香「まだそれ言うの？いいじゃん女装くらい。皆に人気だったんだから」

夏「そういう問題じゃねぇ！！」

沙「作者。この話に裏話とかあるの？」

作「裏話ねぇ。前にも言ったかもしれないけど、まさかツイスターゲームがこんなに長引くとは思わなかったし、まさか夏哉が夏子ちゃんになるとは思わなかった」

夏「だからなんで俺が女装しなきゃなんねぇんだよ!?」

作「真樹に言いなさい。真樹がツイスターで言わなきゃ女装なんてしなかった」

夏「この諸悪の根元が!」

真「イタッ!?」

沙「今回真樹目立ってたよね?」

香「いや、沙鳥ちゃんも十分目立ってたよ?デートなんかして」

作「これもちょっと予想外だったな。やっぱメインは後半の神奈と風歌の話だったから、ここまでガチな話になるとは思わなかったわ」

沙「まぁ?私ヒロインだから?こんなシリアスな空気にもなるって感じ?」

ア「何言ってるんだ?ヒロインは私だろ?」

香「違うって。私以外の誰でもないって」

作「あぁうるさいなぁ」

香&沙&ア「「「作者!ヒロインは私だよね(な)!?」」」

作「そんなの投票で一番になったやつに決まってるだろ?」

ギンッ！！

真「な、何故わたくしを見るんですの」

ア「前回の一位はお前だった。ということは今現在のヒロインはお前ということに……」

香「それに今回は真樹ちゃんが超デレ期だったし」

真「どこがデレ期ですの！？わたくしいつも通りでしたわよ！？」

香「神奈ちゃんに夏哉君のこと好きって言ったくせに」

真「な、なんであなたがそれ知ってますの！？」

香「後書きだから」

真「そんなの理屈になってませんわ！！」

作「そうだな。神奈の話が出てきたから言っとくか。神奈の名前をくれたクロスライトさん、繰り返しになりますがありがとうございます！！さぁ沙鳥！次に俺が何言いたいか言ってみなさい！」

沙「アイス食べたい」

作「死ぬわ！！こんな真冬にアイス食べたら死ぬわ！！アン！！」

ア「どうせあれだろ？感想の謝辞。クロスライトさん、ソラトさん、ｖｉｃｔｏｒさん、名無しさん、ｃｏｌｏｒｆｕｌさん、フォルスさん、ｋｉｉｔｉさん改めさん、ＳＴさん、ハクヤさん、ｓｃａｒ

Ｌｅｔ★さん、えいちゃんさん、第八話での感想ありがとうございました。十一人から感想をくれるなんて、ホント予想外だった」

作「流石アン！！よく分かってるな」

ア「まぁな」

夏「ホント凄い数だな」

作「それに６００，０００ｐｖも突破しました！！」

沙「ホント凄い数だね。１，０００，０００行くんじゃないかな？」

夏「流石にそれは見栄張りすぎだろ」

作「それは俺も思う」

真「わたくしもですわ」

作「今回はいろいろあったから、出落ちとして『魔法少女夏子ちゃん』を書こうと思ったんだけど……」

夏「ブフッ！？」

沙「え、なにそれ作者！？」

作「いつだったか学校行く途中に思いついてな。夏子ちゃんが魔法少女となって触手に絡まれながらも冒涜的方法で敵を排除するっていう話をね」

夏「なんてことを思いついてるんだお前は！？」

香「作者！私見たい！」

ア「私も見てみたい！！」

沙「言われずとも私も！」

真「ではわたくしも」

夏「乗るな乗るな！」

作「しょうがない。じゃあやってみよう！！夏哉の拘束はよろしくね」

香＆amp;沙＆amp;ア＆amp;真「「「「はーい」」」」

夏「はーなーせー！！」

――――――――――――

『魔法少女夏子ちゃん』

わたし、柊夏子！十五歳！

普段は普通の女子校に通う高校一年生。成績は普通、お友達もそれなりにいる。スポーツが大得意の普通の女の子。

だけど夜だけは違う。
『夏子ちゃん大変っ！』
「来たのね香苗ちゃん！」
わたしにしか見えない、小さくて小さくてぺったんこな妖精の香苗ちゃんが声を掛けてくれる。
この世界に魔界からのモンスターが現れることを。
出現した学校に向かうと、ひとつの影があった。
「あなたがこの世界にやってきたモンスターね！？」
「ん？誰だ貴様？」
振り返った人はとても綺麗な金髪の美少女がいた。
あまりにも綺麗過ぎてスタイルもよすぎて、一瞬見惚れてしまった。
『夏子ちゃんしっかりして！』
ハッとなって隣に浮いてる香苗ちゃんを見る。うん、小さいとはいえあの人と違って貧相だ。
『あんな無駄におっきいおっぱいに気を取られてちゃだめ！』
やっぱり気にしてるんだ。まぁ女の子だから投ぜんだろうけど。
因みにわたしは胸も普通。
「で、香苗ちゃん、あれは何？」
物知りの香苗ちゃんに聞く。
『あれはサキュバスのアン。男性の精気を奪うモンスターよ。さぁ夏子ちゃん、変身して戦うの』
「分かった！」
わたしはポケットにあるボールペンを取り出す。
「君のハートにズキュンと一発！どんな相手も一撃必殺！君をメロメロにするまで返さないぞっ！」
わたしは呪文を言うと、洋服が変わり、魔法少女へと返信する。
「人にあだなす悪いモンスターは可愛く成敗！魔法少女夏子、推参

！！」
「何！？貴様魔法少女だと！？」
「覚悟しなさい、サキュバスのアン！絶対に倒してやるんだから！！」
「誰が倒されるものか！！いでよ使い魔ども！！」
そう言ってアンの周りに二つの光が現れ、そこから二人現れた。
「香苗ちゃん！？」
『あれはアンの使い魔のサトリとマキ！力はアンより低いけど、強力よ！！そして無駄におっぱいがでかい！！だから早く原形もとどめないほどにグチャグチャにしちゃって！！』
なんだかどっちが悪役だか分からなくなってきたよ香苗ちゃん。
「おぉ、なかなかいい女の子じゃん。アン様、この子イジメてＯＫ？」
「あぁ。存分にやってしまえ！！」
「はぁい。マキ、やるよ！」
「分かりましたわ」
そう言うと、サトリとマキの両手両足を触手を伸ばしてきた。
それが全てわたしの体に巻き付いてきた。
「いやっ！離し――ひやっ！？ちょ、どこ巻き付いてるの！？うわっ！？なんかヌメヌメする！！」
「うわぁ、ホントいやらしいわこの子。やっぱ、興奮してきた……！」
「興奮って！！あなたサキュバスでしょ！？サキュバスがなんで女の子で興奮するの！？」
わたしは捕まりながら聞く。確かサキュバスは男性の精気を吸い取るって、香苗ちゃんが言ってたのに。
「あぁ、私たち両刀いけるの。ね、マキ？」
「もちろんですわ。最近のサキュバスの使い魔ならこのくらい当然ですの」
「というわけで魔法少女」

「わたくしたちの餌になって貰いますわ」
そう言った瞬間、触手がスカートの中に入ってきた。
「いやっ！き、気持ち悪い……！！」
「ふふふ、いい眺めだな。そのまま恥をさらして死ね！！」
するとアンは両手を振りかぶった。爪が伸び、わたしを襲う。
「きゃあっ！？」
襲った爪はわたしを傷つけず、服だけを裂いてわたしは肌を見せることとなった。
「うっひょ～、アン様ナイス！」
「絶景ですわね」
『は、はわわわわ～。あいつらやっちゃったよ……！』
ブチッ。
「……ふふっ。ふふふっ。ふふふふふふふはははははははははははは
はははッ！！」
「な、何？いきなり笑い出して？」
怒った。
わたしは怒った。
あいつらよくもわたしの服を裂いてくれたな。
わたしは力を振り絞って触手を握り潰した。
「な――！？貴女にそんな力がありましたの！？」
「……香苗ちゃん」
『は、はいっ！！』
「潰していいよね？あれ」
『どうぞどうぞ！！』
全身に力を込めて触手を引きちぎる。
「嘘っ！？」
「貴様らは殺す！！」
力の全てを脚力に回して使い魔のクズに接近する。
まずはマキと呼ばれる方の頭を掴む。
「おらららららららららららららッ！！」

わたしは内蔵めがけて殴り続ける。
「ぐえっ！えうっ！がはっ！」
べちゃっと口から何か赤いものが出てきた。
「あはははははははははッ！！何この子！口から変なの出してるぅ！それに殴る度ボキボキ音鳴るし！！たっのしぃ～ッ！！」
「あ、あわわわわっ！あ、アン様！？なんか怖いんですけどこの魔法少女！！」
「と、というかどこが魔法少女だ！？ただ殴ってるだけだろうが！！」
ん？何か聞こえたな。
「何か言った？」
「「ヒィィィィィィ！！な、なんでもありません！！」」
「そう。なら死ね」
「「いやぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」」
ブチュッ。
『どっちが悪だか分からないよ……』

――――――――――――

夏＆amp;香＆amp;沙＆amp;ア＆amp;真「「「「「「なんだこれはぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」」」」」」

作「さぁ読者のみなさん、感想を求む」

夏「クソに決まってるわ！！」

真「どうしてわたくしがあんなケチョンケチョンにされてますの！？」

作「まぁギャグということで勘弁を。ということでみなさん、今回はこの辺で。次、第九話もよろしくお願いします。あと投票の方も」

第九話　《プロローグ》存在理由

私はなんのために生まれてきたの？

最近そんな疑問を抱くようになってきた。

しかしその答えは既に知っている。

私が喋れるようになる前から、理解していた。

しかし、あの人に出会って、あの人と過ごして、それが揺らいでいく。

そびえ立つ柱が、まるで陽炎のように。

ゆらゆらと、ゆらゆらと。

近づく一歩が踏み出しにくくて。

触れる指先が小さく震えだして。

私は何をするために生まれてきたのだろう。

こんな簡単に揺らいでしまう存在理由しか持ち合わせていなかったのだろうか。

それとも単にあの人の存在が大きいだけなのだろうか。

分からない。

分からない。

知能を持っているはずなのに、分からない。

行うべき事があるはずなのに、分からない。

私は壊れてしまったのだろうか。

しかし自分で確認してみても、異常は確認できなかった。

帰るべきだろうか。

ここにとどまっては逆に足を引っ張るだけだから。

でもそんなことをしたら、私は消される。

あの方が手を加えれば、私は一瞬で排除されて代わりが来るだろう。

排除されるのは構わない。

そう言う風に作(そだて)られたから。

しかし、何故だろう。

何故か、私が排除される事を考えると、あの人の悲しむ顔が頭に過ぎる。

そして胸の辺りがきゅーっと締め付けられる。

それが無性に苦しい。

この苦しみの原因は予想がつく。
どうしてそんなことを思うかも予想できる。

しかし、何故そんなことを私が考えられるのかが分からなかった。
どうしてあの方はここまで詳しく私に取り込んだろうか。

あの方の考えあっての行動だろうが、私には単なる障害にしかならないような気がしてならない。

私はどうすればいいのだろうか。

そんな疑問を抱く私は、良いのか悪いのか。

それすらも分からない。

誰か、差し伸べてくれないだろうか。

こんな私に、救いの手を。

第九話　《プロローグ》存在理由（後書き）

作者「やっと始まったよ第九話」

夏哉「しかし、プロローグとはいえ短いな」

香苗「仕方ないよ。作者だし」

夏「まぁ作者だからしょうがないか」

作「お前ら酷いな」

夏「それなりのことをしてるからだ。で、今回のプロローグ、誰いってんの？」

作「ん～、言わない。でもちょっとプロローグで今まで必死に隠してた部分をさらした感じがあるから、バレるだろうな」

夏「あぁ、なんか変な言葉使ってるな。？作られた？を？そだてられた？って読ませたり」

香「まぁ私は誰が言ったか分かってるけどね」

夏「マジで！？」

香「作者の言葉思い出せば分かるよ」

作「おぉっと！それ以上はネタバレになるからもう言わせないぞ」

香「絶対皆にバレてるって」

作「バレてない人がいるかもしれないでしょ！ということでもう終わる！！夏哉！！」

夏「ハクヤさん、ＳＴさん、水鏡に映る月さん、えいちゃんさん、ソラトさん、感想ありがとうございました次回の一章もよろしくお願いします」

香「キャラクター投票も二十四時間切りました。初見の方も、ぜひぜひ投票してみてください」

第九話　《一章》呼び出し

七月一日。

夏もそろそろ本番――というかとっくに始まっててフライング過ぎるわボケ、とツッコみたくなるほどの気温の中、空ねぇを除いたいつものメンバーはいつも通り登校していた。

「女子って夏はいいよな～。スカートで」

「え、何夏哉？もしかして夏子ちゃんになりたいのっ！？」

きらきらと瞳を輝かせるのは沙鳥。

いつからこいつは堂々と好きな男に女装を進めてきたのだろうか。

あぁ、誕生日からか。

「誰がする――」

「何！？夏哉、夏子ちゃんになってくれるのか！？」

そんな自問自答してる中、しっかりと否定しようとする言葉の上から被せてきたアン。

こいつもだんだん沙鳥に影響されてきたか。

「な、ならば沙鳥。女装より女体化にした方がよくないか？というかそっちにしよう！」

こいつ、一昨日に女体化事件があったというのに懲りないやつだな。

「アン、今日から一週間地球食抜きな。ネハラたちと仲良く魔界の食いもん食べな」

「ちょっと待て夏哉！それはあんまりだ！！いや、夏哉は優しい。きっと魔界の材料で地球の料理を作――」

「あ、ラスク、ネハラ。今日は頑張ってそっちの材料で俺たち三人分作ってみようと思ってるから、手伝ってくれな」

沙鳥にちょっぴり料理のレシピは習った為、実践してみる。

……うん、なんか主夫だな。

「夏哉ぁ！！それは酷くないか！？イジメだイジメ！！何か！？好きな女をからかいたくなる小学生か！？あ、いや……それならそれで、ありだな」

「ちょっと待てアン。それ教えたやつ誰だ？からかいたくなる小学生ってやつ」

アンは無言で指をさす。

そこにいたのは……

「沙鳥ちゃぁん？」

変態だった。

「いやいやいや、私は悪くない。悪くないよぉ私は。アンちゃんに地球のことを教えてあげただけだからね」

「だからなんでそういう無駄なことを教えるんだお前は！！」

「朝から元気ですわねぇ皆」

「でも楽しいからいいでしょ？」

「まぁそうですが」

客観的に物事を見て言うのは、香苗と真樹。

真樹も文句、というか呆れ口調だが、にこやかな顔を見る限りちゃんと楽しんでいるようだ。

「そ、それで、ナツヤ？」

少しおどおどしく話しかけてきたのは、あんの後ろに浮いているネハラ。

「それでって、何が？」

「だから……ナツお姉様にはいつ逢えるの！？」

「一生逢えねぇよ！！」

「なッ！？そ、そんな……！！」

「な、ナツヤ！それはあんまりだ！もう一度でいいからナツお嬢を見せてくれッ！！」

ガチで落ち込むネハラに、ガチで講義するラスク。

「お前ら……！お前らにも飯作んねぇぞ」

「「えぇっ！？」」

驚く二人を見て、ネハラもだいぶ丸くなったなと再認識させられた。
昔なら俺の言葉に反応すらしなかっただろう。

「じゃあ多数決しよう」

突如そんな提案をしてきた沙鳥。

「多数決？なんの？」

「女夏子ちゃんが見たいか、女装夏子ちゃんが見たいか」

「男の俺を入れろそこに」

「いや、だって夏哉はもう見てるじゃん」

「じゃんじゃねぇよ！！どうして俺が女の恰好する事前提なんだよ！？」

「それは夏哉がスカートいいなって言ったからでしょうに」

俺の叫びに答えたのは、今まで客観視してきた真樹だった。

「いやいやいや、スカートから女装に飛ぶ理由が分からない。俺は、男の制服だと夏でも長ズボンじゃないといけないから、スカートはいいなって言ったんだよ。談じて穿きたいなぞとは言ってない」

「言ってませんわね」

「言ってないね」

俺の言葉に真樹と香苗が同意してくれた。
というか同意されなかったらおかしいだろう。

「でもナツヤはスカートいいなって言ったでしょ？」

ズイッと詰め寄ってくるのはネハラ。

「ま、まぁ、それは言ったな……」

「今着てる物より、カナエなんかが穿いてる奴の方がいいんでしょ？」

「そっちの方が涼しそうだからな」

「なら穿きな――」

「誰が穿くかアホ」

言いきる前に拒否る俺。

「ナツヤ頼む！アタシからもお願いだ！胸ならいくらでも触らせてあげるから！！」

「どうしてそこで胸が出て来るんだラスク！？」

「だってナツヤ。大きい胸好きなんだろ？」

そう言いながら胸をたぷたぷする姿を直視できず、俺は顔を逸らす。

するとその正面にネハラが回り込んできた。

「そう言えばアンタ胸デカいのが好きなのよね？なら私もおっきくしてあげるから！！」

そう言った瞬間、みるみるとネハラの胸が大きくなって着ている洋服が引っ張られ――

ザッ！！

何かと地面が擦れる音がしたと思ったら、ひとつの影が見えた。

「か、か、カナエ……？」

その影は香苗で、手刀をネハラの首もとに当てている。

正面から見ていないのに、すごい威圧感を感じる。

「ネハラちゃぁん？アナタは胸をおっきくしちゃダメだよ？そうなると夏哉君の周り巨乳ばっかりになって私だけ仲間外れになっちゃうんだから」

「い、いや、で、でもナツお姉様が――」

「あぁなるほど。？死にたいのね？？」

「ひ、ひぃっ！ご、ごめんなさい！！今すぐ戻します！！」

言うが早く、ネハラの胸は一瞬にしていつも通りぺったんこに戻った。

「全く、もう胸なんて大きくしちゃダメだからね？胸なんてただの脂肪で人間には不必要な物なんだから。谷間なんて出来たらそれだけで重罪なんだから。分かった？分かったよねネハラちゃん？」

「は、はい！全く持ってその通りです！」

怯えたネハラは以前にも見たことがあるが、やはりいつ見ても新鮮に感じる。

俺は近くにいる真樹に耳打ちをした。

「（あぁいうこと言って、自分に出来たら大喜びするんだよな）」

「（でしょうね。簡単に想像がつきますわ）」

「何？夏哉君、真樹ちゃん？」

ビクッ！！

「な、なんでもありません！！な、真樹！？」

「全く持ってその通りですわ！！おや？そろそろ学校に急いだ方がよろしいですわね！」

「まだ後二十分ある――」

「そーだな真樹！急いで学校に行かねば！！じゃ、そういうことで、またな～」

俺の言葉が合図となり、俺と真樹は走り出した。

「あ、ちょっと待ってよ夏哉！真樹！」

後ろから聞こえてくる沙鳥の声は無視。

いつもの真樹だったら、沙鳥の言葉に絶対反応していた筈なのに。

前回皆に自分の過去を暴露して、みんなに優しく抱きしめられたのがあったからだろう。

「気持ちの整理は付きましたかい？」

走りながら、真樹に聞いてみる。

「そりゃぁまあ。もう話しちゃいましたからね」

「案外あっさりだったろ？」

「分かってるつもりなのですがね。一歩踏み出すのが一番難しくて、その後は案外簡単な事だっていうのは」

そう言うことはよくある。

日常生活をしてるだけでもそれを感じるんだから、真樹にはものすごく怖く、大変な一歩だったことだろう。

「よかったな。友達出来て」

「ええ。本当に」

「何イチャイチャしてるんだお前ら？」

ビクッ！？

急に話しかけられたので足を止め、振り返る。

後ろにはアンとネハラとラスクがいた。

「あ、アンさん？まさか、聞いていて……」

「ばっちり聞いてたぞ。耳いいからな」

アンはトントンと耳を叩く。

あまりの恥ずかしさに、真樹は顔を真っ赤にして再び駆けだしてしまった。

「あ、おい真樹！」

俺も真樹を追いかけようと駆け出――

「ちょっと待て夏哉」

られなかった。

「あ、アンさん？」

「どうしてお前は逃げる？そんなに真樹と一緒にいたいのか？」

「そういう訳じゃない！普通に香苗が怖いだけだ！」

「それにしても一緒にいすぎだ！最近は私たちより一緒にいないか！？」

「いやいや、むしろ一緒に暮らしてんだからお前らの方が一緒にいるだろうが！！」

「でも、私よりはいるんじゃないの？」

アンを引き継いで、沙鳥が言う。

「お前とはデートしただろ」

「じゃあ私は？」

続けとばかりに香苗。

「同じ寮で、たまに飯一緒に食うだろうが」

「ねぇナツヤ」

今度は以外にもネハラ。

「今度はお前かよ……。ネハラは何？」

「何時なの？」

「は？」

意味が分からず聞き返した。

「ナツお姉様が見れるのは何時なの？」

「一生見せるか！！」

もうたくさんになって駆け出した。

『ピンポンパンポーン。生徒の呼び出しをします。一年三組柊夏哉、至急科学室に来るように。繰り返します。一年三組――』

「え、俺？」

放課後、いつも通り皆で帰ろうとしていたところ、こんな呼び出しを食らってしまった。

「夏哉君どうしたの？何かやらかした？」

「してねぇよ。全く何も」

「どうせあれでしょ。教師をたぶらかしたから――」

「沙鳥俺のこと嫌いだろ？俺も沙鳥嫌いだ」

「いや、嫌いとか言わないでよ！」

「はいはい」

「受け流すな！」

「じゃあ香苗。俺残るから先に帰っててくれ」

「はーい」

「無視するな！」

「ナツヤ。どこか行くのか？」

ラスクに聞かれたので、答える。

「あぁ。先生に話があるって言われたからな。お前らはどうする？」

「「「行く」」」

見事に声が揃った。

「じゃあ待たな香苗」

「うん、じゃあね～」

「夏哉！私には！？」

「ん？まだいたの？」

「ひど！それは流石の私も傷つくよ！？」

「冗談だ」

俺は沙鳥に急接近して、額同士を当てて頭を撫でる。

「俺ちょっと行ってくるから、また明日な」

「は、はい……」

沙鳥は顔を真っ赤に染め上げてしまった。

うん、可愛い可愛い。

「あ～、沙鳥ちゃんいいな～」

「お前はまた今度な」

「っていう夏哉君は絶対今度やらないんだよね」

「……」

過去を思い出せば、否定できない自分がいた。

「か、香苗が、自分から言ってくれれば」

「じゃあ今日行くからね。お姫様だっこかして貰うからね」

「了解しました！」

「でもそういうのって、結局夏哉に何かがあって出来なくなるフラグだよね」

「沙鳥ちゃん！そういうこと言わないの！」

でも沙鳥の言うことはありがちだった。

本当に起こりそうな気がする。

そんなことを考えている俺の肩を叩く人がいた。

「夏君。行かなくていいの？」

たった今合流した空ねぇだった。

「あぁ、行く行く。じゃあな皆」

今度こそ手を振って、三人と分かれた。

「それで？アンタはなんの用があんの？」

「俺も知らん。逆にこっちが聞きたいくらいだわ」

ネハラの質問は、多分俺がめっちゃ気になってると思う。

別に成績が著しく悪い訳じゃないし、ちゃんと出席もしている。

特別おかしいことは何もしていないのだが。

そんなことを思いながら、別棟にある科学室に到着した。

ノックして中に入る。

「失礼します」

そこには二名ほどいた。

一人は爺さんで、もう一人はオッサンだった。

両方に見覚えはあり、どちらも教師だ。

二人はこちらに視線を向ける。

「あの、柊夏哉、ですけど」

「おぉおぉ、君が柊夏哉か」

爺さんの方が反応を示し、こちらに近づいてくる。

その後にオッサンもついていく。

爺さんがメインで話すようだ。

「君、何故ここに呼ばれたか分かってるかい？」

「いえ……」

「だろうと思ったよ。これだから最近のガキは自覚しないで困る」

何故俺は初対面の教師にバカにされにゃならんのだろうか。

怒りは覚えず、若干呆れを露わにするが、後ろに控えてる三人は違った。

「貴様……！！夏哉を侮辱しているのか……！？」

一応、ここには一人で来ている体なので視線を向ける事は出来ないが、おそらく震えているのだろう。
ホント嬉しいことだ。

「あの、俺何かしましたか？誰かの迷惑になるようなことは何も――」

「確かに迷惑になるようなことはしとらんのぉ。佐々木さん、教えてやんなさい」

すると爺さんは何故か説明を佐々木というオッサンの方にバトンタッチした。

「柊夏哉は、時たま誰もいない空間に話しかけたり、人ではありえない走力を駆使したりする事がある。今は走力を例に出したが、腕力、脚力、握力、その他諸々の身体能力の異常な発達を見せている」

げ、マズいな。
アンたちに話しかけてるところ、普通に見られてたか。

それに体のことも。
まぁこっちは過去を調べればすぐ分かることだろうけど。

「えっと、それが何か？」

「まだ分からんのかお前は。やはり頭が悪い。お前を見ている限りじゃ何処も精神に異常は来しておらん。それなのに、まるで独り言

のように誰もいない空間に話しかけているんだ。私らには見えない何かが見えているんだろう？」

どうする？

アンたちのことを話すか？

一瞬そんな事を過ぎったが、すぐに掻き消す。

ここは学校だ。

つまり魔法に関する施設に繋がっている。

真樹が一年近くいた施設に。

もしアンたちを知ったら、どんな手段を使っても実験体にしかねない。

異世界の住人だから干渉できないとはいえ、この世界には異世界の技である魔法が使用できるようになったんだ、なるべく芽は潰していきたい。

「何言ってるんですか？俺にはなんにも見えませんよ。俺よく考え事をするんで、それがポロポロ口に出てしまうんです」

「おかしな事を言うな。独り言で大声を上げるのか君は？」

「それ、何処で聞いたんですか？」

基本外じゃ、アンたちに叫んだとしても周りに香苗や沙鳥がいる。

だから香苗たちに話しかけてるように見えるはずなのに。

「寮でいつも喋っているではないか。一人部屋の筈なのに」

チッ！！
ちょっと騒ぎすぎたか。
恐らく隣人の誰かが学校に言ったんだろう。
少し自重しようと思った。
「さぁ、次はどう言い逃れするんだ？あぁ？」
俺は香苗みたいに頭は良くない。
だからここは開き直ろう。
開き直って、素をぶつけよう。
「アンタ、魔法の研究者か？いろんな実験とかしてるのか？」
「ナツヤ……？」
口調が変わったことに疑問を抱いているのか、ラスクが名前を言った。
「なんだお前は。年上相手にそんな口を利くなんて。だから最近のガキはバカで教育がなってないんだ」
「さっさと言えよ」
「あぁそうだ。わたしは魔法を見つけた不知火源朗（しらぬいげんろう）の息子だ。当然研究している」
「なるほどな。なら何があっても絶対話さねぇ」

「何？」

「俺はな、麦谷高にいる研究員が大っ嫌いなんだよ。俺の大切な奴の心をメチャクチャにしてんだよテメェらは。そんな奴らに話す事なんて何もねぇ」

「何？実験について知っているのか？全く誰が口外したのだろうか。まさかあいつか？いや――」

「ねぇナツヤ。何？大切な奴ってマキの事よね？じゃああいつがあのとき話してくれたのってこいつ関係してるの？」

ごちゃごちゃ喋る爺さんを無視して、ネハラの言葉に小さく頷く。

「こいつが……こいつらが真樹を……！夏哉ッ！！こいつを殺すぞッ！！」

アンの怒りは分かる。

俺だってこんな奴の姿なんて視界に納めたくない。

でも――

「（頼む、行くな）」

俺はすごい小声で魔族三人を止める言葉を言った。

「な、何故だナツヤ！？こいつらはマキを泣かせたんだろ！？」

「（頼む、堪えてくれ……！！）」

殺しだけはダメだ。
魔界じゃ知らないが、地球(ここ)でこいつらが手を汚す必要はない。
俺の頼みが通じたようで、後ろで動く気配がない。
「用件はそれだけか？なら帰るが」
「待て！お前、学校の外で魔法を使っておるだろう？その処罰を与える！」
「は？魔法？そんなの使ってないが？」
ごめんなさい、嘘付いてます。
でもこいつが言ってるのは身体能力に関してのみ。
そこは嘘付いていないのでご了承をば。
「はぁ？これもシラを切る気かお前は？全く、こいつはどういう頭をしてるんだ？」
「シラも何も事実だ。じゃあ俺は帰る」
背中を振り返り、部屋から出ようとしたとき――
「確か、柊弓だったか。お前の母親は」

そんな言葉を聞いて、俺は怖気が走った。

第九話　《一章》呼び出し（後書き）

作者「やっべ、更新遅れた……！！」

真樹「なんですの？本来はいつ投稿するつもりだったんですの？」

作「昨日の二十三時五十七分」

沙鳥「なんでそんな細かいの？」

作「いや、このくらいだったら、投稿した後すぐに読んで、この後書きを読むときは丁度今日の００：００になるかなと思い」

真「ああ、丁度キャラ投票の締め切り日でしたか」

作「そういうこと」

沙「投票、結局どうなるんだろうね」

作「あのね、これだけは言っとく」

沙「何？」

作「俺にとっては予想外の結果だった」

沙「お、マジで？でも真樹が一番でしょ？」

作「言えるわけねぇだろうが。で、実はこのキャラと投票の為、イラストでも書こうかなと思いまして、これからは１日二つ投稿を？

志して？がんばりたいと思います」

真「志して、を強調しますわね」

沙「これで更新しなくても有言不実行にはならないと、そういうことですね分かります」

作「そういう事さ！」

真「開き直らないでくださいまし」

作「というわけで沙鳥！締めをよろしく！」

沙「ソラトさん、ハクヤさん、感想ありがとう！次回もよろしくね！」

真「投票の結果は元旦にやるそうですわ」

第九話　《二章》夫婦

「確か、柊弓だったか。お前の母親は」

俺の背中に寒気が走り、振り返った。

額には冷や汗が流れる。

「どういう意味だお前……！？」

「柊夏哉。お前はこの学校の掟を破り、しかもその罰から逃れようとしているんだ。周りに目を向けるのも当然だろう」

頭を過ぎったのは、俺を産んで、育ててくれた両親の顔――

「アン！！お前俺の言え覚えてるなッ！？」

「あぁ！！」

「頼む！！ネハラとラスクは香苗たちを！！」

「「分かった！！」」

三人は俺の頼みを聞いてここから離れる――が。

「フン、やはりいたか。佐々木さん、試してみようじゃないか」

「了解しました」

何かしようとしている。

それが分かっても、咄嗟に動けなかった。

佐々木と呼ばれるオッサンはポケットからスイッチを取り出し、それを押した。

見た感じ変化はなかった。

しかし、何が起きたのかはすぐ分かった。

「クッ――！？」

「アン！？」

アンの悲鳴を聞き、俺は振り返る。

恐らく壁をすり抜けようとしたのだろう。

しかし、アンは――アンだけでなくネハラとラスクも、壁をすり抜けようとしたのに、今は仰け反っている。

傍に駆け寄り、安否を確認する。

「お前ら大丈夫か！？」

「問題ないわ。ただびっくりしただけ。ダメージは皆無よ」

「あぁ。しかし抜かった。こいらも魔法が使えたんだった」

ネハラとラスクは起き上がりながら答えた。
本当に無事のようだ。

「ふむふむ、どうやらこれはこいつらに効く様だな。では次は当ててみるか」

爺さんは手のひらをこちらに向けると、そこに土色な球を生み出していく。

「アン、抜け出せそうか？」

「余裕だ。単に弾く程度の力だ。拳一つで壊せる」

「分かった」

アンがそういうんだ、簡単に抜け出せるだろう。

よくよく考えれば、人間如きが魔族に勝てるわけがないか。

アンたちが平気なら、俺のやることは一つ。

足に力いっぱい力を込める。
その力を一気に爆発させて、あの爺さんに接近する。

だが、ちょっと遅かったようで、爺さんは土の球を打った。
俺めがけて。

だが、沙鳥でもない魔法が俺に効くはずもない。

飛んできた球を、左手で払う。

そこまで力を入れてないのに払えたので、別にそのまま当たっても良かったなと思いながら、爺さんと佐々木の腕を掴みあげる。

「なッ!?クソ!また魔法を……!!」

「なぁ、あんたらまだ言ってるのか?つかお前ら魔力を計測する何かがあるのか?」

「あ、当たり前だろう。そうしなければ魔法かどうか判断できないだろうが」

「なら判断してみろよ」

俺は掴んだ手を払ってバランスを崩すと、俺は傍にある机に顔を向ける。

「これが、魔法かそうじゃないかをよッ!!」

言いながら足を振り上げ、そのまま振り下ろす。

ドガァンッ!!

机は粉々に砕かれた。

「な……あ、あ……」

唖然としている二人を余所に俺は立ち去り、言葉を残す。

「テメェらが相手にしてんのは化け物だ。その化け物の領域に手ぇ

出すんなら、今度はテメェらを潰すぞ」

部屋を離れ、階段を下り始めた頃に、俺は自分の胸を抑える。

「や、や、やべぇ、俺、学校の机壊しちった……！！これ、器物破損で捕まんねぇかな……？」

やって反省した。

カッとなって物を壊すとか幼稚すぎる。

しかし後悔はしていない。

化け物とはいえ学生である俺相手に親を使うなんて、クズ過ぎる。

それに、俺よりもっと子供だった真樹を実験体にしたんだ。

殴られていい奴らだろう。

クソッ、考えただけで腹が立つ。

やっぱり戻ってブン殴りに言った方がよかっただろうか。

こういう考えをしている俺は、心が綺麗すぎるのだろうか。

成長して大人になれば、皆ああいう風になってしまうのだろうか。

って、俺はなんでこんなことを考えているのだろうか。

ちょっとおかしくなってきたか？

とりあえず今は早く寮に戻って香苗の安否を確認しよう。

そう思って昇降口に到着すると、見覚えのある顔が。

「あ、真樹」

「どうも、夏哉。今お帰りですの？」

「まぁな。お前は？呼び出しか？」

「どうしてわたくしが。単に委員の仕事ですわ」

なるほどね。

まぁありがちだな。

「で、夏哉はなんで呼び出し食らったんですの？それにアンさんたちは？」

さっきのことを指摘され、気分が落ち込む。

あいつらは平気だろうか。

「夏哉？」

「あ、わりぃわりぃ。なんつーかな――」

俺はあったことを話した。

「まぁ、疑われても仕方ないと言えば仕方がないのですが……。というか実際魔法使ってますがね」

「そうだけどさ、でも流石に周りを巻き込むのはダメだろ？」

「まぁそれは当然でしょう」

「真樹にゃまだ変な人見てねぇよな？」

「見てませんわ。それに、その台詞自体ブラフかもしれませんし」

「ならいいんだけどな」

香苗たちや母さんたちになんにもないに越したことはない。

「なぁ、今は施設とかに行ってるの？」

「いや、行ってませんが……どうしてですの？」

「もし行ってたらお前を止めて、憂さ晴らしにその施設をブッ潰す」

あの爺さんみたいな研究者たちが使う、非人道的な実験をする場所なんて、ない方がいい。

「何処の主人公ですの？一個人が組織の一施設を潰すなんて」

「いや、一人じゃなくて、アンもいれば余裕だ」

「ですわね」

俺とアンがいれば、下手な自衛隊より強いのではなかろうか。

「それで？今すぐ潰しますの？場所は覚えてますわよ？引っ越しなどしてなければ、ですが」

「いや、今はいいよ。組織に何されたわけじゃないし。まぁもちろん、真樹の我が儘で?潰せ?なんて言われりゃ潰しに行くけど?」

「我が儘ですの?」

「我が儘でしょ。他人の迷惑を考えず、ただ自分の為に施設を破壊してって頼むのは」

「まぁ、そうですわね」

「で?どうする?」

「遠慮しておきますわ。面倒ごとになりそうですし。まぁ、もし沙鳥様たちに何かあったのなら、夏哉に頼む前に自分で潰すかもしれませんが」

「ま、当然だな」

話に夢中になって、靴を履いていなかったため、パパッと履いて真樹の隣に立つ。

「帰りますか」

「ずっと喋ってるのもなんですしね」

俺たちは十一日ぶりに二人きりで帰る事となった。

……その日のことを思い出し、俺は歩きだそうとしてた足を止める。

「なぁ、真樹」

「なんですの？」

「前一緒に帰ったの覚えてる？」

「覚えてますが？」

「恋人に間違われないだろうか？」

「気にしたら負けですわ。普通にしてたら大丈夫……の筈です、わよね？」

だんだん自信がなくなっていく真樹。

俺も自信がない。

「……そ、そうだ！そういや、風歌ちゃん！風歌ちゃんどう？元気？最近あってないけど」

話を変えて空気を変える。

さっきみたいに恋人云々の話をしてるから誤解されるんだ。

いつも通り友人感覚で会話してれば問題ない筈。

「風歌ですの？まぁ元気ですわ。最近はちゃんと話すようになりましたし。しかしちょっと問題が……」

「どうした？」

もう誰かを襲うということはない筈なんだが。

「やたらと夏哉の話を聞きたがりまして」

「ちょっと待て。俺が風歌ちゃんにフラグ立てたってことか？」

これが沙鳥たちに知れ渡ったら、絶対からかわれる。

「いえ、そうではなく、『お姉ちゃんと柊夏哉はいつになったら付き合うのか』とか、『キスはしたのか』とか、『まだ子供産まないのか』とか」

「あのマセガキが。一発殴っとけ」

「殴りましたわよ」

あのあほんだら、ハート型のチョコじゃ飽きたらず、真樹にそんなことを言うなんてな。

どうしてあいつは俺と真樹をくっつけたがるんだろう。

普通逆じゃないか？

真樹は男苦手なわけだから。

「なぁ、おかしくね？」

「何がですの？」

だから直接その疑問を真樹に話してみる。

「普通男嫌いの真樹と俺をくっつけたがるか？そりゃ俺は真樹と普通に接してられるけどさ」

「だからではありませんの？今のところ夏哉以外はダメですから、

夏哉が他の人に取られないように、ということではありませんか？
例外がまた現れるともありませんし」

「あぁ、そういうことか」

「別に深い企みがある訳じゃないでしょう。他に心当たりはありま
――ありませんし」

「ちょっと待て」

俺は真樹の肩を掴んだ。

「な、なんですの？」

真樹は聞き返すが、目を合わせない。

「なんだ今の間は？」

「なんでもありませんわ」

「なんか心当たりあったんだな？」

「ありませんわ」

「俺の目を見て言ってみろ」

「そんな、どうしてわたくしがあなたと見つめ合わなければなりま
せんの？」

「そうは言ってねぇだろう。顔を見て、もう一度言えって言ってる

だけだ」

この様子、何か隠し事があるのは明白だ。

もしかして真樹、風歌ちゃんが誤解するようなことを言ったのか？

「なるほど。夏哉は一瞬でもわたくしたちが顔を合わせるところを誰かに見られたいわけですわね」

「はぁ？」

いきなり意味不明のことを言われて戸惑う。

「噛み砕いて説明しますと、夏哉はこちらを見ろ、と仰ってますわよね？」

「そうだが？」

「つまりその瞬間、わたくしたちは顔を合わせ、見つめ合うことになりますわね？瞬間的とはいえ」

「そうなるな」

「貴方は主人公ですわよ？このほんの瞬間を、誰かに見られる可能性がないといいきれますか？」

ピクッと肩が動く。

「な、何言ってんだよ真樹。そんな短い時間に人がちょうど来る訳ねぇだろ？ほら、ちょうど下校時間過ぎた頃だから人なんていない

し」

本当に現在、辺りに誰もいない。

「……わたくしの目を、ほんの一瞬でも見てから言いなさい、そういうことを」

もしかしたら真樹にバレてるかもしれないが、今冷や汗を結構かいている。

正直心の奥底では、？あり得るかもしれない？と思っている。

いやいやいや、こういう自分で諦めているところが、皆にフラグがどうのといわれる要因になるんだ。

ここで頑張らなければ、フラグブレイカーの称号なんて手に入らない。

「真樹」

「なんです――」

返事を途中で途切らせてしまった真樹。

その原因は、俺。

真樹の顔と約１０？程の近さで、俺はじっと真樹の目を見ていた。

そして心の中で十秒数える。

十、九、八、七、六、五、四、三、二、一、零。

「よし、十秒たった！」

「は、はい？」

「ほれ見ろ真樹。俺がお前十秒見つめても邪魔する奴は誰もいない！」

これで俺のスキルにフラグブレイカーが備わ――

カツッ。

なんの音だろう。

近くでそんな音が聞こえたので、顔を向ける。

真樹も同じ事を思ったようで、ほぼ同時に、同じ方を向いた。

誰か立っているではないか。

しかも顔見知りの。

「えっと、君って確か隣の部屋の……」

隣人なのにまだ名前を知らない女子が立っていた。

や、やばい。

汗が止まらない……！

「し、失礼……しました……！」

隣人さんは俺たちが歩いてきた道――つまり学校に向かって、駆け足で去っていった。

俺は唖然として、もう何も喋れなった。

「な、なな、なな、夏哉あああああああああああああああああッ！！」

真樹の咆哮と共に
拳が飛んできた。

「グハッ！！」

かなり痛かったが、尻餅付く程度じゃなかった。

「何が邪魔する奴は誰もいない、だ！？確かに邪魔はされなかったが、普通に見られてるじゃねぇか！！」

「ごごご、ごめんなさい！でもあの子大丈夫だから！！多分誰にも言わないから！！」

「言うな！そういうことを言うな！！それが確実にフラグへと繋がるんだろうが！！」

グッと拳に力を入れる真樹。

「わ、分かった！もう言わない！言わないから殴るな！お前ガチで痛いから！！」

なんとか真樹に殴られないように説得しようとしてると――

「おにいちゃんと、まきおねえちゃん？」

聞き覚えのある幼い声が聞こえた。

顔を無けると、そこにはやはり灯里の妹のるあちゃんがいた。

よく見ると、その後ろにもう一人、るあちゃんより小さい女の子がいる。

その小さい女の子は、俺たちを指さして言った。

「あっ！みつけた！」

は？

見つけた？

この子、俺たちを探してたのか？

「え、ひじりちゃん、おにいちゃんたちなの？」

「うんっ。パパとママ！」

……は？

「「はぁあああああああああああああああああああああッ！？」」

第九話　《二章》夫婦（後書き）

作者「おっしゃあっ！！これで真樹の後書きフラグ回収成功だぁ！！」

香苗「へ？後書きフラグ？」

アン「なんだそれは？」

作「あれだよあれ。何処だか忘れたけど、確か第三話の雑談で言ったやつ。真樹と夏哉が抱きついたり、夫婦になったりとかの話をしたはずだ！」

ア「……あったっけ？」

香「あったような……なかったような……」

作「あったんだよ！かなり前からこれは考えてた展開だったんだから！！」

香「そうなの？」

作「そうなの！よっしゃ～。ようやくナツマキの家庭生活がかける！！」

ア「書くのか！？この私を差し置いて！？」

香「私お姫様だっことかもう先に予約してるんだから！真樹ちゃんにかまけてないでちゃんと書いてよね！？」

作「書く書く。香苗のは多分書く。それから、前回は沙鳥回だったから、今回香苗行くぞ」

香「え、ホント!?」

作「ホント。一人称もそろそろ行くから」

香「やったー!!」

ア「香苗。作者を忘れたか?」

香「え?作――あぁっ!!」

作「な、なんだよ?」

香「作者は有言不実行だ!!」

作「そ、そうだった!!」

香「期待しない方がいいかもね……」

ア「だな」

作「ごめんなさい……」

ア「さて、この辺で締めるか。　ＳＴさん、えいちゃんさん、ｓｃａｒＬｅｔ★さん、ソラトさん、クロスライトさん、感想ありがとうこれからもよろしく頼む」

香「他の読者さんも、ここまで読んでくれてありがとうございます」

作「さぁ皆！俺のイラスト年賀状がほしい人は手を挙げて！！」

香「いきなりすぎるし、誰もほしがらないよ」

ア「だな」

作「酷い！」

第九話　《三章》誤解

俺と真樹は今同じ顔をしているだろう。

唖然。

それが今の俺たちの表情を表す言葉にぴったりだろう。

パパ？
ママ？

今までで言われたことのない単語を聴いた。

隣にいるママを見てみる。

目線があった。

「ま、真樹って進んでるな。お前もうその年で母親になったのか。びっくりしたよ」

「な、夏哉こそ、いつの間に彼女を作って子供を産ませたんですの？まさか沙鳥様の子ですか？」

「パパ、ママ、どーしたの？」

「「……」」

もう何も言えなくなった。

「真樹。頑張ろう。頑張って現実を見てみよう」

「わ、分かりましたわ。まず、確実に貴方の子ではありませんわよね？」

「もちろんだ。つか普通に考えて、年上をパパママ言うだけでしょう」

「あぁ、そういうことですか」

真樹は女の子の前に立って屈む。

「ねぇ、お名前はなんて言うんですの？」

「ひじりだよ、ママ」

「……聖ちゃん、ですのね。何歳ですの？」

「ございだよ」

「そうですか。でしたら本当のパパとママは何処にいるんですの？」

聖ちゃんは静かに指さした。

俺と真樹を。

「「……」」

またなんにも言えなくなった。

「……えっと、ど、何処からきたんですの？」

「えっとね、あっち」

太陽とは反対方向を指さす。

ん～、アバウトだ。

「じゃ、じゃあ何しにきたんですの？」

「パパとママにあいにきたの！あえてよかった！」

聖ちゃんはにっこり笑顔になった。

その表情に困り果て、真樹はこちらを向いて助けを求めた。

「な、夏哉、どうしま――」

しかし、真樹は途中で言葉を止めてしまった。

どうしたのだろう、と不思議に思っていると、違和感を感じた。

真樹が俺を見ていない。

俺ではなく、もっと後ろの方――

「あっ、あかねぇだ！」

ギギギギ、と錆びた機械のようにゆっくりとぎこちなく首を動かす。

そこにいたのは、峯岸灯里。
るあちゃんの姉が、呆然としながらそこに立っていた。

「あ、ああ、灯里、さん？あの、いつから、聞いてましたか……？」

声を震わせながら、聞いてみる。

「ま、真樹さんが、何しにきたのってところ……」

つ、つまり、俺たちがパパママと呼ばれたところは見たということ。

冷や汗が止まらない。
視界に納めてないが、後ろにいる真樹も冷や汗をかいていることだろう。

灯里は無言で俺たちに近づき、俺たちの脇を通り過ぎ、るあちゃんの手を掴んだ。

「るあ、行くよ。三人の邪魔しちゃダメだから」

「え？え？わたし、おにいちゃんとあそびたいよ」

「今日はダメ。というか、これからもダメ」

「な、なんで？」

「いいからダメ。邪魔しちゃダメだから」

「ま、まってよあかねぇ！おにいちゃん！おにいちゃーん！」

そのままるあちゃんたちはフェイドアウトしていった。

「「……」」

俺たちはまた固まった。

どうしてこうタイミングが悪いときに人が、しかも知り合いが現れるのか。

もう呪われてるとしか思えない。

「ママ？パパ？どうしたの？」

ハッと、聖ちゃんの声で我に返った。

「え、えっと、じゃあ迷子みたいだから、警察行こうか？」

「そう、ですわね。それが一番です――」

「やだっ！」

突然聖ちゃんが叫んだ。

何事と想い、聖ちゃんをじっと見た。

「わたしママたちとはなれたくないっ！」

そう叫ぶと、聖ちゃんは真樹にしがみついた。

外から見て、力強く抱きついている風に見えるので、本当に離れたくないんだろう。

でも、そうは言ってられないだろう。

「でもね、聖ちゃん。早くパパとママのところに戻らないと、心配するよ？」

「そんなことないよ！パパとママはここにいるもん！」

そう叫びながら、聖ちゃんは真剣な目で俺たちを見てきた。

本当に俺たちと離れたくないのだろう。

どうしてそんなに俺たちに拘るのかはよく分からないけど。

「どうしますの、夏哉」

「どうって言われてもなぁ。ちなみにだが、真樹は時間あるの？」

「それはありますが……」

「親も探してるだろ。少しくらい遊んであげようさ」

「……ふぅ、分かりましたわ。では誤解されないように沙鳥様たちに言っておきなさいよ？」

「あいよ。じゃあ電話してくるわ」

俺はまず香苗に電話する。

「あ、もしもし？香苗さん？」

『……何？』

ん？

なんか香苗の機嫌が悪い気がする。

「香苗、どうした――」

いや、ちょっと待て。

俺には心当たりがあるはずだ。

今日の放課後何があった？

――柊夏哉。お前はこの学校の掟を破り、しかもその罰から逃れようとしているんだ。周りに目を向けるのも当然だろう――

あの爺さんと佐々木ってやつの呼び出し。

俺に罰を与えようとした研究員。

そいつらが何かしたんだ。

ネハラたちが到着する前に。

『どうしたって、心当たりないの？』

「いや、ある。俺のせいだよな？」

『そうだよ。私たちが夏哉君心配してたっていうのに』

心配……？

そうか、呼び出されたことに対してずっと心配してくれてたのか。

それなのに被害が俺じゃなくて香苗たちに来たんだ、怒って当然だ。

「ごめんな、香苗。俺がしっかりしてなかったから」

『違うでしょ？しっかりし過ぎてるからフラグを立ててるんでしょ？』

「フラグ……？」

なんのことだ？

過去を遡り、香苗の言葉を考えてみる。

フラグを立てたってことは、香苗は女の子に関して言ってるのだろう。

女の子と罰。

これが共通してるのは……

「そうか、真樹か」

文化祭の時、不良に捕まった真樹を助けるために本気で移動したり、殴ったりした。

あれは学校内だったか、一般人がたくさんいた。

あの時は何も言われなかったが、冷静になった誰かが違和感に気づいて報告したのかもしれない。

それに不幸なことに、真樹と恋人っていう風に見られてしまってい

る。

『そうだよ。見つめ合ったりして』

「悪かった。沙鳥はどうだ？」

香苗が襲われたんだ、一緒に帰った沙鳥も何かあっただろう。

『沙鳥ちゃん、愚痴言ってたよ』

「そっか……」

やっぱり、沙鳥も怒ってたか。

後でちゃんと謝っておかないと。

『それで、なんの用なの？』

あ、そうだ。

聖ちゃんのこと言わなきゃいけないんだった。

しかし、香苗が落ち込んでいるのに、聖ちゃんと遊ぶ、なんてことを言えるだろうか。

「いや、今日ちょっと用があって帰りが遅くなるから、香苗の約束七時半くらいでいいか？」

『……用って、真樹ちゃんでしょ？』

「まぁ、な」

なんでそんなことが分かったのだろうか。
流石は香苗だ。

『約束、絶対守ってよ？』

「分かった。それは絶対守るから」

『うん。じゃあ、もう用はない？』

「あぁ。じゃあ、またな」

香苗との電話を切り、ひとつため息をついた。
もっと俺がしっかりしてれば、香苗と沙鳥が落ち込むことはなかったのに。

俺は同じように沙鳥に電話した。

沙鳥も香苗同様、機嫌が悪かったが、三日後のデートを楽しませるということで少し機嫌を直してもらった。

二人に連絡したので、真樹の元に戻った。

「じゃあ真樹、行こっか」

「ちゃんと理解してもらいましたか？」

「いや、それどころじゃなくて言えなかった」

「何かあったんですの？」

「いや、学校側から何かあったみたいで、機嫌が悪かった」

「被害があったんですの！？」

真樹は俺に詰め寄ってきた。

「あぁ。気休めにしかなんないけど、機嫌が悪かっただけでどこか怪我とかしたわけじゃなかったと思う」

「ホント気休めにしかなりませんわね。それよりそれが事実なら、それ相応の出方をしなければなりませんわね」

真樹は少し怒りを含めた目をしながら言った。

――――――――――――

「か、カナエ？夏哉はなんだって？」

私の隣にいるラスクさんが、声を震わせて聞いてくる。

「あの噂は本当だって。夏哉君、先生に脅されて落ち込んでるだろうなって思ってたのに、真樹ちゃんとイチャイチャしちゃって……！」

私は偶然にも、今広がっている噂を他の女の子の口から聞いてしま

った。

その噂とは、下校途中に夏哉君と真樹ちゃんが手を取り合い、じっと見つめていたというものだ。

私は信じられなかった。

ちょうどその五分くらい前に、ネハラさんとラスクさんから話を聞いていたのだ。

学校に脅されていて、周りにいる私たちに被害がでるかもしれない、と。

私は――私たちは心配した。

このことで夏哉君が自分のことを責めるんじゃないかと。

夏哉君のことだから、どんなに説得しても、自分に責任があると言って自虐するんじゃないかと。

そう思っていたのに、あのフラグメイカーは。

落ち込むどころか真樹ちゃんと往来のど真ん中でイチャイチャ見つめ合っていたなんて。

そんなに真樹ちゃんのことが好きなんだ、夏哉君は。

真樹ちゃんも真樹ちゃんで、そんな夏哉君を拒否しないし。

それどころか受け入れてる感がある。

まぁ真樹ちゃんにとって、夏哉君は唯一心を許せる男の子だから当然と言えば当然だけど。

でも、ということは、夏哉君は真樹ちゃんの特別な人ということになる。
過去が過去だから、私や沙鳥ちゃん以上に。
夏哉君は、そんな特別に引かれているのだろうか。
それだったら、私は真樹ちゃんに勝てない。
でも――
「そうじゃない……」
「カナエ？」
そうじゃないんだ。
たとえ真樹ちゃんが夏哉君を特別に想っていても、私が真樹ちゃんより想いで負けていい理由にはならない。
そんな理由で逃げてはいけない。
真樹ちゃんにも、沙鳥ちゃんにも、アンさんにも、ネハラさんにもラスクさんにも、夏哉君を想う気持ちで負けるわけには行かない。
「負けない」
夏哉君が好きな気持ちは、誰にも負けてはいけないんだ。
それが親友だとしても。

「夏哉君の隣にいるのは、私なんだ……！」

私は決意を新たにして、皆に負けないように努力することを誓った。

「な、なあカナエ？いきなりどうした？独り言なんて言って」

「え？」

私はラスクさんの方を向いた。

「独り言？」

「あぁ。？負けない？とか、？そうじゃない？とか言ってたが」

かあっと顔が熱くなった。

私、そんな独り言言ってたの！？

全く自覚をしていなかったのでもの凄く恥ずかしい。

決意をしたのに、もの凄く心が折れそうになった。

――――――――――

結局、二時間ほどいつもの公園で遊んでいたのだが、それらしい人は現れなかった。

真樹もこっそり家に電話して、迷子を捜してる親を探すよう頼んだらしいのだが、該当者はなし。

更に念のため迷子届けが警察に出ているか確かめたようだが、そち

らにも該当者はなし。

俺しかしそれでも聖ちゃんの親がアホで子供がいなくなったのを気づかないほど放置してたか、という結論にたどり着いた。

でもそうなると、さほど身なりが汚れていないことに疑念を抱くが、それでもこれが一番ありがちな結論だった。

「真樹、どうするよ？」

「どうするも何も、親が見つかってない状態で放置は流石に出来ませんわ」

「だよな」

「パパ、ママ、どうしたの？」

俺たちが離しているのが気になったのか、聖ちゃんが訊ねてきた。

もうパパと呼ばれることには慣れた。

「ん？なんでもないよ。じゃあそろそろ家行こうか。真樹、空きはあるよな？」

「ありますわまぁ、それが妥当ですわね」

俺たちは手を繋ぎ、真樹の家へと向かった。

第九話　《三章》誤解（後書き）

作者「まずいまずいまずい！更新ペースが上がらん……！！」

夏哉「一日二話投稿はどうした？昨日は一話もあがらなかったぞ？」

作「いや、昨日は別作品を投稿したから、勘弁してください！それにね、今までの三時間睡眠が無理をたたったのか、冬休みに入ってから八時間は寝ないと二度寝するほど眠くなってるんだよ！」

沙鳥「ちゃんと自己管理しないで不規則にしてるからこうなるんだよ」

作「沙鳥様の言う通りです……！！で、それだけではなく、あと今日も入れて二日でイラストも書かなきゃいけないんです」

夏「いや、お前イラスト書くから一日二話って言ってなかった？」

作「言ったけど、睡眠時間が削れないんだよ！！アラームかけても起きられないし！この二話投稿は三時間睡眠での計算だったんだから！！」

沙「じゃあ何？一日一話に変更？」

作「いや、頑張って二話投稿を？志す？けどね」

夏「やっぱ志すだけなんだな」

作「さて、前回の後書きで、まさか年賀状を見たいという人がいて

ですね、それを載せようと思います」

＞ｉ３７９７９―３２９１＜

＞ｉ３７８２７―３２９１＜

作「どうでしょうかねぇ」

沙「いや、結構かわいいよ？」

作「ありがと。それでみなさんに質問。年賀状ほしいって人は、普通に小説に載せる、でいいんですよね？どうにかして送ってほしいという訳じゃなくて」

夏「そりゃそうでしょう。流石に住所聞く訳にゃいかねぇし」

作「いや、この時代Ｓｋｙｐｅというものがあるから、そのＩＤ教えてくれれば、たった一人だけのものになるわけでですね」

沙「あぁ、なるほどねそう考えると個人にって言うのもいいね」

「そゆこと。まぁ、ほしい人は載せるだけでいいのか、送ってほしいのか言ってください」

沙「じゃあ作者、伝えるのはもう終わり？」

作「ん。もう終わり。夏哉」

夏「あいよ。えいちゃんさん、水鏡に映る月さん、ＳＴさん、名無しさん、ソラトさん、ｓｃａｒＬｅｔ★さん、ツキトハクヤさん、

フォルスさん、ｃｏｌｏｒｆｕｌさん、感想ありがとうございます」

沙「そういえば伝え忘れてましたが、ｓｃａｒＬｅｔ★さん！感想三百通目、おめでとうございます！！次四百通行くかどうかは分かりませんが、よろしくお願いします！！」

第九話　《四章》出回る噂

「さて、どうするよ真樹？」

真樹の部屋の中、俺は暫定ママである真樹に話しかける。

現在聖ちゃんは遊び疲れたようで、今は真樹の腕の中でぐっすり寝ている。

「どうすると言われましても、解決方法が親を見つける、しかないではありませんか」

「だよなぁ。で、しかも俺たちには情報が全くない。詰んでるな」

「ですわね。取り敢えず夏哉は帰られたらいかがですの？アンさんたちも心配してるでしょうし、香苗と沙鳥様のことも気になりますし」

そうだ。

俺のせいで被害を受けた香苗と沙鳥。

二人はかなり落ち込んでいる。

そんな二人を放置して、俺は真樹と聖ちゃんと遊んでいたのだ。

真樹たちと遊ぶのがいけないとは言わないが、やはり香苗たちが気掛かりになる。

でも、だからと言って真樹たちを放置できるだろうか。

「いやさ、真樹。お前も大変だろ？お前は平気なのかよ？それに聖ちゃん、騒ぎ立てないか？」

「取り敢えず夏哉は仕事に行った、とでも言って説得しておきますわ。幸いウチの家族は理解が早い方ですので、手は貸してくれると思いますわ」

「そっか。まぁ俺が止まるわけにもいかねぇしな。帰らさせてもらうわ」

そう言って席を立ちあがった瞬間、誰かが真樹の部屋をノックした。

「お姉ちゃん、柊夏哉の子供産んだってホント？」

ノックした主は、真樹の返事を待たずに中に入り、意味分からんことを言い出した。

「ふ、風歌？何を言い出すんですのいきなり？」

「あ、ホントにいる」

真樹の言葉を無視して中を覗いてくる、真樹の妹の風歌ちゃん。

しかし俺たちに風歌ちゃんの台詞に反応する余裕などない。

「あの、風歌ちゃん？何故に俺たちの間に子供が産まれた、などと言ってるんですか？」

今日一日俺たちは風歌ちゃんに会ってないし、この家に入ってきた

ときも、見られないようにここまで来たのに。

「帰り歩いてたとき聞いたわ。確かあんたの幼なじみじゃない？あ、いや、お義兄さんって言った方がいいか」

「誰が義兄だ誰が！ていうか幼なじみ？俺にそんなやついないぞ？」

「は？何言ってますの？」

誰だか予想がつかずに頭を悩ませていたら、予想外の真樹から答えを教えてもらった。

「灯里さんのことでしょ。隣が近所でしたのなら、小中も同じでしょうに。つまり幼なじみですわ。それから、大声出さないように」

真樹の最後の忠告を頭に入れながら、俺は行動を停止して一度頭の中を整理する。

確かに灯里とは、仲がよいとは言えなくても小中高と同じだし、もっと言えば幼稚園も同じだった。
流石に組はいつも同じではなかったが。

でも、もう十年以上同じ場所に通ってたのか、あいつとは。

「言われてみると幼なじみになるな。で、風歌ちゃんは何故幼なじみのことを知ってる？」

「お義兄さんを殺すためにいろいろ調べたから」

「だから義兄さん言うな」

コツンと軽く頭を叩いてやった。

「じゃあわたしはもう確認済んだから行くわね。二人とも楽しんでね」

風歌ちゃんはそそくさと真樹の部屋から出ようとするが、俺はそれをさせない。

「待て待て。お前絶対誤解してるだろ。あの子は迷子だ。常識的に考えろ。あれが俺らの子供だとしたら、真樹何時産んだんだよ」

「まぁそうね、お姉ちゃんはまだ処女だから産める訳ないか」

「ちょ、風歌！アンタなんてこと言ってますの！？」

自分で大声を出すなと言ってるのに、この部屋にいる中で一番大きいが響いた。

まぁ無理もないだろう。

真樹だって女だ、男の前で処女なんてことは言われたくないだろう。

それが、真樹の事情を理解して、そうだろうと簡単に予想できる俺だとしても。

「お姉ちゃん、静かにしないと。その子起きちゃうよ？」

風歌ちゃんの指摘に、真樹は息を詰まらせながら従う。

実際風歌ちゃんの言うことは正しいから、従わざるを得ないのだが。

それにしても、と。

俺は真樹と風歌ちゃんを見比べる。

真樹を絶対神と崇めている風歌ちゃんだと思ったのだが、今のやり取りを見ると意外にも風歌ちゃんが振り回してる感がある。

こうしてみれば風歌ちゃんは全く正常の、ちょっと頭が回る女の子その物だった。

決して俺を恨んで殺そうとしてた子ではない。

上手くやれている、と実際この目で確認できてよかった。

「じゃあ迷子だとして、その子を何処にも届けないで、挙げ句の果てに連れ帰って夫婦気分を味わいたかったのね。それからお姉ちゃんも冷静になりきれてないみたいだから言っておくけど、もしお義兄さんの言うことが本当で、その子が迷子だったら、単なる誘拐よ？」

「「あ」」

俺たちは声を重ねた。

また風歌ちゃんの正論だった。

本当に冷静に考えると、俺たちは誘拐以外の何者でもない。

「じゃあね、お姉ちゃん、お義兄さん。誘拐なんてしないで本当の子供作ってよ」

「やかましいっ。夏哉、ちょっとお灸を据えておいてくださいませ

んか？」

真樹は先ほどの反省を生かして叫ばずに、しかし鋭く言った。

俺も真樹の言うことは実行したかったのですぐ動いた。

部屋から出る風歌ちゃんを追って、俺も部屋を出て腕を掴む。

「何お義兄さん？お姉ちゃんというものがいながらわたしに手を出すの？」

「やかましいマセガキ。お前にゃ一発殴らなきゃ気が済まなかったからちょうどいい。お灸据えてやるよ」

「わたしお義兄さんに殴られるようなことしたっけ？」

こいつ、人を殺しかけてそれを言うか。

まぁそのことについて殴りたいわけじゃないが。

「よくも人がいる前でチョコ渡してくれたな」

「あれわたしの手作り。誰かにプレゼントしたのはお姉ちゃんを抜かすとお義兄さんが初めてよ」

「そんな情報はいらん。なんでハート型なんだ？そして何より、あの字はなんだ？どうしてそんなことを書く？」

英語で『Ｎａｔｓｕｙａ　＆ａｍｐ；　Ｍａｋｉ　ａｒｅ　ｌｏｖｅｌｏｖｅ』と書かれていた。

どうして俺と真樹がラブラブになんなきゃならんのだ。

「どうしてって、事実を書いただけよ。お義兄さんお姉ちゃんのこと好きでしょ？」

「友人としてな。恋愛感情はない」

真樹のことが好きというのは認める。

認めるが、そうすると皆はいつも恋愛感情の方に持って行く。

そういう誤解はやめてほしいというのに。

「お姉ちゃんもお義兄さんのこと大好きって言ってたから、二人は好き同士のラブラブ。わたしは二人にくっついてもらいたいから、あれを作った」

「なんでだ？風歌ちゃんは俺のこと嫌いじゃないの？」

「変わったのよ。お義兄さんがお姉ちゃんに何したわけでもないし、むしろお姉ちゃんにとってお義兄さんは大切な人。奈良一緒にいた方がお姉ちゃんはもっと幸せになれるでしょ？」

「少なくとも真樹は俺と付き合うのは拒否ってるがな」

「知らないの？お姉ちゃんツンデレよ」

「いや、俺はそうは信じない。だからお前グリグリな」

両手で握り拳を作り、それを風歌ちゃんのこめかみに当ててグリグリする。

「いたたた！お義兄さん痛い！痛いわよ！！」

「なら少しはおとなしくしてろマセガキ」

最後に力を入れ、風歌ちゃんを離した。

「じゃあな」

俺は風歌ちゃんに背を向け、真樹の家を退出した。

歩いて五分もかからない距離にある寮に到着した。

このまま香苗の部屋に行って謝ろうかと思ったが、取り敢えず鞄はおいてこようと思い、自分の部屋に向かった。

部屋の前に到着して、中に入ろうと思ったが、不意に隣の部屋の扉が目に入った。

それに連鎖して部屋の住人のことも思い出した。

未だ名も知らぬ隣人さん。

真樹と見つめ合ってるところを見られた。

……誤解を解かないと。

自分の部屋に入る前に、隣部屋の扉をノックした。

「すみませーん」

……

反応がない。

まだ帰っていないのだろうか。

物音がしないか耳をよく澄ませてみる。

たったったっ、と足音が聞こえた。

どうやら中に人はいるようだ。

あぁ、そういえばあの子大きな声はあんまりださない子だった。

ガチャッと静かにドアが開いた。

「ひ、柊……さん？」

「どうも。あの、少し話したいことがあるんだけど、時間ある？」

「あ、はい……。じゃあ……どうぞ」

「わりぃな、いきなり。多分すぐ終わるから」

俺は部屋にあがらせてもらう。

今思うと、誰かの部屋に入るのは香苗と灯里以外ないな。

部屋の中はとても綺麗で、物が割と少ない。

「何も……ない、ですけど」

「あ、いやいやいや、気にしないでいいよ。急に押し掛けたのこっちだし」

誰かが来ることを最初から想定していたらしく、すぐに座布団を用意された。

俺はそこに座らせてもらう。

「それで、何か……？」

「んっとね、まず一番重要なことを聞かせてほしいんだが」

「は、はい……」

俺は一拍あける。

「名前を教えてください」

「……え？」

隣人さんはキョトンとした表情をする。

「いやね、申し訳ないことに俺は君の名前が分からなくてさ。このままじゃ隣人さんって呼ばなきゃならないんで」

「あ、ご、ごめん、なさい……。えと、中島、雨音です」

何故謝られたのかは分からないが、ようやく名前が分かった。

「じゃあ中島さん、今更ですがこれからお隣同士よろしくお願いし

ます」

俺はペコリと頭を下げる。

「あ、こちらこそ……！」

俺に倣い中島も頭を下げた。

「さて、名前も聞けたことだし、後二つほどお話があるのですが」

「なん、ですか……？」

「まず、今日のことなんですが、真樹と見つめ合ってたこと、誰にも言わないでくれませんかい？」

「え……」

「え？」

なんか嫌な予感がするんですが……。

「あの、中島さん？えってなんですか？えって」

「あの、もう友達に……言っちゃい、ました」

は？

ちょっと待て。

今この人、なんて言った？

「えっと、もう一度言ってもらえないでしょうか？」

「ひ、柊さんと離れた後……すぐに西山、葉月さんに……連絡、しちゃって」

五秒ほど固まった。

固まって、言葉の意味を理解した。

「何してんのアンタッ！！」

第九話　《四章》出回る噂（後書き）

作者「あけましておめでとうございます」

夏哉「あけましておめでとうございます」

作「一応元旦ということで、キャラは二人だけじゃなくていっぱいいます」

夏「で、司会ということで俺たち二人がいるということだな」

作「そういうこと」

沙鳥「さくしゃあ、お腹すいた～。なんか作って食べていい？」

作「あ、そうだな。じゃあおせち食べながら進めましょうか」

真樹「そういうと思ったので、すでに用意しましたわ」

アン「流石だな」

夏「じゃあ食うか。いただきます」

全員「いただきます！」

香苗「で、作者。何するの？」

作「何するって言っても、ひとつしかないんだかな」

夏「キャラ投票だな」

作「そ。今回、第二回キャラ投票は、一回目よりかなりの票がきました」

夏「皆協力してくれてありがとう」

作「では早速第五位から！！今回も前回と同じく、投票数は最後にやります！！」

第五位　柊夏哉

夏「おっ、俺か」

ラスク「夏哉おめでとう」

夏「ありがとうな、ラスク」

沙「あっ！ラスクさんが好感度上げに来た！！」

ラ「いや、そういうわけではないんだが……」

作「はいそこ！くっちゃべるな！どんどん行くよ！第四位！！」

第四位　柊夏子

夏「え、私！？てか何時の間に女になったの！？」

作「女装じゃ口調変わらないので、真樹が作った女体化の薬をおせちに混ぜました」

夏「なんてことしてくれてるのよ！！」

ネハラ「な、ナツお姉様！お待ちしておりました！！」

夏「ネハラは待たないでいい！！」

火津那「いやぁ、やっぱり夏子ちゃんはにあうね」

香「夏子ちゃん、元は男なのに私より胸が大きい……」

夏「うるさいうるさい！！次！第三位！！」

作「あ、次同率だから第二位。だから一位と同時にいきます」

第二位　花街香苗、空揺火津那

第一位　早乙女真樹

真「またわたくしが一位ですの！？」

作「おめでとう真樹！！二冠を達成した早乙女真樹ちゃんに盛大な拍手を！！」

パチパチパチパチ！！

真「あ、ありがとうございますわ」

夏「じゃあ次は票数の発表をするわ」

第五位　三票
第四位　四票
第二位　五票
第一位　八票

ラ「一位と二位が離れてるな」

ア「まぁ真樹だからな」

真「えっと、これは誰かが仕組んだとか、そういうことではありませんの？」

作「んなわけねぇだろ。では真樹！一位になった感想をどうぞ！！」

真「え、えっと、なんかわたくしの支持者が多いようで、ありがとうございますわ。ホント嬉しいです」

作「さぁ、実はこのキャラ投票の順位、案外前回と変わってなかったりするのです」

前回
第五位　柊夏哉、天雲沙鳥
第二位　花街香苗、アン、空揺火津那
第一位　早乙女真樹

ア「私と沙鳥が落選して、夏子ちゃんがあがってきたのか」

作「そしてみなさんお気づきだろうか。アンが今言った夏子ちゃん。これは夏哉と同一人物ですよね？」

沙「それがどうしたの？」

作「夏哉と夏子ちゃん、もし票を足したら、真樹と一票差にまで追いつけるという」

ネ「というか二人会わせてもマキには勝てないのね」

作「では次に、惜しくも第五位に届かなかった人たちの紹介です」

第六位　ネハラ、沙鳥
第八位　アン、ラスク、香、雨音、神奈

香「香君がいる！？」

作「因みにこれも足すと、一位真樹、二位夏哉、三位香苗、四位空ねぇ、五位沙鳥、ネハラになります」

火「改めてみると、やっぱりきぃちゃん凄いね、ホント」

ア「ん～、ヒロインの中じゃ私が一番下か。まぁいい、這い上がって頑張ろう」

作「さぁみなさん！！次はお待ちかね、第一位と二位のイラストだよ！！ちょっと見にくいから、パソコン持ってる人はそっちで見ることをお勧めします！！」

真「いや、お待ちかねも何も初耳ですわよ」

＞ｉ３８０６３―３２９１＜

真「って！！どうして作者はこんな露出の高い巫女服を着せるんですの！？」

作「一位のサービスカットというやつだ」

真「いりませんわよ！！」

ラ「そういえばカヅナ、お前素顔初見せじゃないか？」

火「あ、そういえばそうかも。作者、ありがとうね」

香「私もありがとう、書いてくれて」

作「何、人気のある二人が頑張ったからだろ」

真「二人とわたくしの差がおかしいですわ！！わたくしもああいう服なら文句は言いませんわ！！」

作「しょうがないな。じゃあ特別に、夏哉に向けてヤンデレ発言する権利を与えよう」

夏＆ａｍｐ；真「「なんで！？」」

香「作者、今夏哉君は夏子ちゃんだから、夏哉君に言うのは無理だよ？」

夏「そこ！？香苗が言うとこはそこなの！？」

作「ｓｃａｒＬｅｔ★さんが、昔にちょろっと言ってたからな。まぁｓｃａｒＬｅｔ★さんはストーリーをお願いしてたんだけどね。流石に思いつかなくてな。では、真樹行け！！」

真「権利ではなく、強制ではありませんか……。はぁ、夏子ちゃん、いきますわよ？」

夏「え、あ、うん……」

真「ふぅ……。ねえ夏哉？あなたさっき隣にいた女の子は誰？誰なの？わたしの知らない人だったけど。まさか浮気？ふふっ、そんなわけないわよね？だって夏哉、わたし以外誰とも連絡してないもんね？携帯に履歴残ってなかったしね。それに何より、夏哉わたしのことしか見てないもんね。でも、もしわたし以外を見てるんなら……体に刻み込んであげる！」

沙「怖っ！真樹怖っ！！」

真「そ、そうですか？」

夏「うん。香苗とタメ張れるわ」

真「それほどですか！？」

ア「真樹、ツンデレだけじゃなくヤンデレもいけたのか」

真「いけませんわよ！！」

作「さぁ、ちょうどキリがいいのでこの辺で！じゃあこういうのが初めてになるラスク！感想謝辞を！！」

ラ「分かった。ソラトさん、水鏡に映る月さん、えいちゃんさん、ツキトハクヤさん、フォルスさん、ｃｏｌｏｒｆｕｌさん、ｓｃａ

ｒＬｅｔ★さん、感想ありがとうございました。新しい年になっても、よろしく頼むな」

作「ではみなさん、２０１１年はお世話になりました。２０１２もよろしくお願いします」

＞ｉ３８０６２―３２９１＜

第九話　《五章》和解

「あ～、急に叫んで悪かった」

「い、いえ……こちらこそ」

落ち着きを取り戻した俺は取り敢えず中島に謝罪をした。

「えっと、じゃあお前は、前々から西山葉月に俺と真樹のことを何か知ったら教えてくれと言われてたんだな？」

俺の問いに小さく頷く中島。

「峯岸、さんに……情報、提供したいって、言ってました」

そう言われてようやく西山葉月という人物が誰だか分かった。
確か文化祭のちょっと前、ダンスのペアを決めるときいろいろあった人だ。
その後は順調な交際をしてるのだろうか。

そんなことを考えながらも、今の現状を振り返れば諸悪の根元はその彼女に当たるわけだから、交際状況の知識欲よりも怒りの方が勝っている。

「じゃあこの情報はもう灯里に届いてんのか……。後で言っておかねぇとな。じゃあ後もう一つ、いいか？」

「あ、はい」

「俺、やっぱ隣の部屋で声うるさかった？」

このことだ。

きっとこの苦情があったから学校側にも伝わったのだろう。

「え、えっと……うるさい、というか、私は……気にしてません、よ？皆さん、楽しそうですし……それ、聞いてると、私も楽しいし」

「え？てことはもしかして苦情は出してない――ってあれ？皆さん？」

「よ、四人、暮らしして……ますよね？アンさんと、ラスクさんと、ネハラさんの」

俺は驚愕を隠せなかった。

まさか隣人が異世界の三人のことを知っているなんて。

「最初から見えてたの？」

ということはこの子が学校に報告したから、学校側はアンたちの存在を確証したということか。

しかし俺の考えは見事外れた。

「あ、い、いえ……見えてる、訳じゃなくて……。柊さんの……言葉を聞いてると、その三人の、名前が出てきて……」

「え？じゃあ何？見えてる訳じゃなくて……」

「柊さんの話、だけで判断、してるん、ですけと……間違って、ましたか……？」

「い、いや、確かにその三人はいるけど……、つまり普通の言葉も丸気声？」

「わ、私、耳が無駄によくて……」

どうやら照れているようで、ちょっとはにかみながら言った。

「なるほどか～。ホント、自重します」

「いえ、こっちこそ……盗み聞き、しちゃって」

俺が小さく頭を下げると、同じく中島も頭を下げた。

「因みにだ。そのこと誰かに言った？」

「あ、その……それは、周りに言っても、信じてもらえないと、思って……」

うん、こっちはナイス判断だ。

出来ればその考えを真樹とのことにも持ってきてほしかった。

「そっか、じゃあ隣の人か」

「な、何が、ですか？」

「いやね、今日呼び出しがあったんだけど、アンたちのこと聞かれ

たからさ。隣が苦情を言ったのかと。だから謝罪をしに来たというわけです」

「え……でも、私、言ってませんし……、柊さんの、反対側は、誰もいない、はずですよ？」

「なんですと？」

俺の隣人さんって中島だけ？

「確か……そうだと、思いますよ」

マズいな、流石に知らなさすぎだ。

アンたちにかまけてないで、もうちょい周りのこと気にかけた方がいいな。

でもそうするとアンが嫉妬してフラグフラグ言いそうな気がするのは気のせいじゃないはずだ。

「ん～、じゃ両隣じゃないってことは上下か？あれ？でも上と下ってかなり分厚いよね？」

「は、はい……。多分、声が伝わらないと、思います」

「そうだよなぁ。じゃあなんで学校側アンたちのこと知ってんだ？」

別に答えを求めての質問ではなかったが、中島は答えてくれた。

「盗聴、とか……？」

その言葉を聞き、ピクッと反応してしまう。

もしかしたら本当に盗聴が……？

そんな空気を察知したのか、中島はわたわたする。

「あ、あのっ……で、でも、予想ですし……！」

「まぁ、そうだよな。流石にそこまで非常識なことはしないか」

「き、きっと、そうです……！」

「うん、きっと俺の部屋の前で誰かが聞いただけだな。じゃあ邪魔して悪かったな」

少し長居してしまったようだから、鞄を持ってすぐに立ち上がる。

「い、いえ……。構わない、です」

「じゃ、お邪魔しました」

俺は中島の部屋から退出して自分の部屋に戻る。

アンたちはまだ戻ってないようで、誰もいなかった。

鞄を置き、私服に着替えて一息つく。

「あぁ、香苗怒ってるよな～」

呟くと余計落ち込む。

香苗こえぇしな。

それに香苗だけじゃなくて沙鳥にも謝んないといけねぇしな。

「まずは香苗か」

俺は体を伸ばしながら部屋を出て香苗の部屋に向かう。

その時、俺の名前を呼ぶ声が聞こえた。

「夏哉ッ！」

「ん？あっ、アン！」

空を飛んで帰ってきた。

「こっちは誰もいなかった！両親は無事だ！！」

その言葉を聞き、ホッとした。

「あ～、よかった～」

力が抜け、壁により掛かった。

「大丈夫か？」

「あぁ。ありがとな、わざわざ行かせちゃって」

「気にしなくて構わん。ネハラとラスクは？」

「まだ帰ってきてない。でも俺香苗のとこに行くから、ネハラかラスクがいると思うぞ」

「香苗？どうかしたのか？」

「アイツ不機嫌でさ、多分被害受けたみたい」

「な――！？クソッ！！ネハラとラスクが付いてながら間に合わなかったのか……！！」

「あぁ。だから様子を見にな」

「沙鳥は？」

「あいつも機嫌悪かったけど、一応デートするってことで許してもらった」

アンは体を震わせていた。
その震えの原因は怒りだろう。

「夏哉……！あいつらを潰しに行ってもいいだろ！？」

「あぁ。でもまずは香苗のところ行こ。被害受けたのあいつだから」

「……そう、だな」

というわけで俺たちは香苗の部屋に向かった。

出迎えてくれたのは、不機嫌そうな香苗とホッとした表情のラスク。

顔を合わせて一番最初に口を開けたのはアンだった。

「香苗！平気か！？怪我は、ないか！？」

「え？あ、け、怪我？」

その言葉に香苗はキョトントした表情を浮かべていた。

「あぁ！襲われたんだろ！？大丈夫か！？何をされた！？」

「ちょ、ちょっと待って。落ち着いてアンさん。ひとまず私は怪我なんてしてないよ？」

「そうか。よかったぁ」

「うん、だからまず落ち着こう。そして教えて。どうしてそんなに慌ててるの？」

香苗が変なことを聞いてくるなって思ったが、しかし香苗も本当に分からないような顔をしている。

「いや、だってお前、学校に襲われて、だから不機嫌だったんだろ？」

「ナツヤ？カナエは全く襲われてないぞ？何かと勘違いしてるんじゃないか？」

ラスクの言葉が、一瞬分からなかった。

誤解？

何処で何を誤解したと言うのか。

「えっと、香苗さん？ひとつひとつ、こちらから聞いてもよろしい

でしょうか？」

「どうぞ――の前に、一回部屋に入ろ？」

香苗の提案に甘えて、既に見慣れた部屋の中に入った。

「で、夏哉君どうぞ」

「はい。えっと、香苗さんは不機嫌でしたよね？」

「はい。夏哉君のせいで」

「その原因は、俺のせいで学校側から襲われる羽目になったからなのでは？」

「ちがいます。ラスクさんから聞いて、夏哉君が学校側といろいろあって大変そうだなと思ってたのに、当の本人は真樹ちゃんとずっとイチャイチャしていたからです」

「はっ！？え、ちょ、ええっ！？」

俺は言葉にならなかった。

「夏哉？どういうことだ？」

隣にいるアンの視線が怖い。

「ちょっと待ってください。誰に聞いた？それ」

「もう噂で女の子皆言ってるよ」

「うわ、最悪だ～……」

俺は頭を抱えて崩れ落ちた。

「あ、あの、な、カナエ。多分だ。多分誤解じゃないのか？いくらなんでも、二人があの状況でいちゃいちゃするとは思えないんだが」

どうやらラスクは俺の味方をしてくれるようで、弁解してくれる。

しかし、しかしだ。

「ラスク、ありがと。でも俺は端から見れば間違えられる様なことをした自覚はあるので、弁解しなくても大丈夫だよ」

「じゃあお前は真樹と何してたんだ？」

若干責める感じで聞いてくるアン。

「えっとですね、真樹に？あんたと一瞬でも顔を合わせたら絶対フラグが起こりますわ？って言われたので、フラグブレイカーの称号が欲しくて十秒間見つめ合っていました」

すると香苗とアンは同時にため息を付いた。

「なんでお前は不可能なことに挑戦しようとしてるんだ。無謀以外の何ものでもないぞ」

「夏哉君、人は生身で水の上を歩くことは出来ないんだよ？それと同じように、夏哉君はフラグを壊すことは出来ないんだよ？」

散々な言われようである。

「いや、だって見渡す限り人一人いなかったんだぞ！？十秒位余裕だって思うじゃん！」

「だから、お前を常識で測るな」

「お前酷いことな……」

はぁ、と一息ため息を付いた。

「じゃあ香苗は、誰かに襲われちゃないんだよな？」

「うん」

「おっしゃ、よかったよかった～」

俺は背筋を伸ばした。

「よし、香苗ちゃん起立」

俺は立ち上がりながら香苗に言う。

「え、何？」

戸惑いながらも香苗は言う通り立ってくれた。

そんな香苗に間髪を入れず、俺は抱きしめた。

「……え、え？」

「朝言ったからな。問題も解決したし、お姫様だっこも肩車も、お父さんなんでもするぞ」

と、軽い風に言えば、

「も、もう、お父さんって何？」

と、満更でもない風な香苗。

そんな俺たちを見て、普段沸点が高いはずの少女が一瞬で沸騰した。

「あ、あぁ、なな、あ、な、何をしてるんだッ！？」

首を向けると、怒りのせいなのか顔を真っ赤にさせているアンの姿。

「何って、朝言ったろ？今までのツケを払おうとしてんだよ。なぁ」

「ね～。あ、夏哉君、お姫様だっこして～」

「あいよ」

要望通りお姫様だっこをしてやる。

「えへへ～。ありがと、夏哉君」

すぐ近くにある香苗の顔は、とても嬉しそうだった。

「どういたしまして」

「よかったな、カナエ」

「うんっ」

どうやらラスクは祝福する側に回るそうだ。

すると、

プルルルル。

俺のポケットに入っている携帯が震えた。

「あ、香苗ちょい失礼」

ひとまず座り、お姫様だっこしてる香苗を肩車に変えて電話に出る。

電話の相手は灯里だった。

「はいはいもしもし？」

『柊？今いい？』

「構わんが、るあちゃん関係？」

『いや、るあじゃなくて……帰りのことなんだけど』

「帰り？」

何を言われるんだろうと思っていたのだが、気付いた。

気付いてしまった。

冷や汗が流れる。

『えっと、ね。私がとやかく言える立場じゃないと思うけど、やっぱりちゃんと責任は取った方がいいと思うよ。もう産まれちゃったものはしょうがないから、頑張ってね。私もいろいろ手は貸すから』

「いや、ちょっと待て。話を聞いて――」

『じゃあ真樹さんと、聖ちゃんだっけ？まだ学生のうちで大変だと思うけど、応援はしてるから。三人でお幸せにね』

「だから聞――」

プツッと通話が切れてしまった。

「くっそ、ちゃんと聞いてくれよ～。後で直接行くか」

無駄な疲労感を感じていると、キリキリと頭が痛み出す。

何かに捕まれてるような感覚だ。

その痛みの原因は予想がつく。

「あ、あの……香苗さん？頭、痛いんですが……」

力のないはずの香苗からものすごい激痛を受けるなんて、どういう原理なのだろう。

「夏哉君？？責任？？産まれちゃった？？真樹ちゃん？？聖ちゃん

?:三人?:?お幸せに?。これって、夏哉君と真樹ちゃんの子供が産まれたってことだよね?どういうことなのかな?」

「いや、誤解なんです」

「へぇ、じゃあ誤解されるようなことをしたんだね?」

ギュウッと痛みが増した。

「そ、それは……」

「ちゃんと説明、してくれるよね?」

きっと香苗には俺の震えが伝わっていただろう。

それほどまでに、香苗は怖かった。

第九話　《五章》和解（後書き）

アン「九日ぶりだな」

香苗「まぁまぁ。作者もいろいろあったんだよ。正月寝まくったり絵を描いたり免許の試験行って落ちたり」

作者「本当遅くなりました。というわけでまずはこれ！」

＞ｉ３８３２３―３２９１＜

＞ｉ３８６７４―３２９１＜

香「本当に遅くなったけど、ソラトさんとえいちゃんさん、年賀状をどうぞ」

作「とりあえずこのお二方が、？こういう年賀状が欲しい？という要求があったので描きました。もし他に『え、俺もこういう風に描いてって要求したんだけど』っていう人がいらっしゃいましたら行ってください。速攻で描きます」

ア「最初から把握してればこういうの聞く必要がないのだが、なにぶん嬉しいことにこんな小説にも感想をたくさん書いてくれて、何処に書いてあるのか見失ってしまってな」

作「で、皆さんに質問なんですが、二つを見比べて分かるように、髪の描き方を変えてみたわけですが、どちらがよろしいでしょうか」

香「つむじから始まるか、毛先だけ描くかってこと？」

作「そ」

香「まぁそれは読者様に聞くとして、アンちゃん」

ア「なんだ？」

香「夏哉君になんてことしてるの？」

ア「私はただ抱きついただけだが？」

香「ただ抱きついただけでどうやって胸と服の間に腕が挟まってるの！？」

作「裏設定として、まずカメラをタイマーにして、アンが夏哉に目を瞑れって言って、その間に手を取って胸へダイブイン。異変に気づいた夏哉が頭突きしたって感じ」

香「へぇ」

ア「わ、私は自分の武器を使っただけだ！悪くない！」

香「別に悪いとは言ってないよ」

ア「さ、作者！もう終わりにしていいだろ！？」

作「そうだな。じゃあよろしく」

ア「ソラトさん、ＳＴさん、水鏡に映る月さん、ｃｏｌｏｒｆｕｌさん、ｓｃａｒＬｅｔ★さん、名無しさん、ハクヤさん、ｖｉｃｔ

orさん、フォルスさん、感想ありがとうございました！ではまた！」

香「アンさん、なんで逃げるの？」

作「後一人！この人数に加えて後一人感想くれる人が現れたら住人突破するので、よろしくお願いします！！」

第九話　《六章》苦情の出所

香苗からの恐怖を三十分ほど受けていた俺はグロッキー状態にいた。
現在うつ伏せになって倒れている。

「夏哉……？大丈夫か？」

「な、なんとか……」

アンの声に細々と返すと、力を振り絞って起き上がる。

「香苗さん」

「何？」

「ちょっとガチな話があるんですが」

俺が話を切り出すと、空気がだんだん暗くなる気配がしてきた。

「じゃあ何？今までの真樹ちゃんとのことはおふざけってことなの？」

「ち、違う！恋関係じゃなくて学校関係って意味だ！」

このまま話を続けると、またさっきの二の舞になりそうだ。

「学校？」

話を正したことが功をそうしたのが効を奏したのか、暗い雰囲気が

霧散した。

「そ、学校。アンたちがバレた理由のことなんだけど、寮で何独り言言ってんだって言われたんだ。どう思う？」

「どうって、お隣さんが学校に言ったんじゃないの？」

「確認したんだけど、連絡してないって。反対側は空き部屋」

香苗は？ん～？とうなり声をあげながら、考える仕草をする。

「なら上下？」

「可能性あるけど、声届く？」

「分からない」

しばらく香苗から案が出なかったので、中島から聞いた事を話してみた。

「盗聴……。まぁ可能性は高いけど、やるかな？学校側が」

「分からんけどさ。ありそうな気がするじゃん？」

「探す？」

「手伝ってもらえるでしょうか？」

「いいよ。ラスクさんたちも手伝ってもらえる？」

「構わないが、何を探すんだ？」

「盗聴機って言って、それがあると遠くからでも人の会話が聞けるものだよ」

そんなものがあることに関心を持つ魔族二人。

「そういうわけだから、よろしくお願いします。で、俺は上行って声届くか確認したいから一階上に行くわ」

「はぁい」

というわけで俺たちは香苗の部屋から出て、途中まで俺の部屋に向かった。

その途中にネハラと合流。

ネハラも盗聴機探しに尽力を注いでもらった。

皆と別れてから、俺は五階に向かって自分の部屋の真上を探した。

すると目の前に見慣れた人影。

「あら、快斗さんではありませんか」

「なんだよ夏哉、その口調」

目の前にはモテ男の源快斗がいた。

「いや、なんとなく。お前何してんの？」

「そりゃこっちの台詞だ。お前の立ってる前の部屋、俺の部屋だ」

「なぬ？」

それは初耳だった。

そして気付けば、そこは俺の部屋の真上だった。

なんという偶然だ。

「ここお前の部屋？」

指さして確認。

「そうだが？」

「じゃあ丁度いい。聞きたいことあんだけど、俺この真下なんだ」

「あ、そうなの？気付かなかったわ」

「だよな～。で、なんか学校に苦情の電話が来たみたいでさ、俺うるさいって言われててよ。隣は違ったから上かなって思って。俺の声聞こえてる？」

「いや？特に聞こえないけど？」

「あ、そうなの？ならいいや。わりぃな。ありがとよ」

「あいよ」

そして快斗と別れてから俺は自分の部屋に入った。

「ただいま～」

「あれ？夏哉君もう帰ってきたの？上で何か言った？」

香苗に上での事情を話した。

香苗たちの状況と言えば、まだ短時間であるという理由から、探しきれていない。
現状では見つかっていない。

その後十分ほど探したけど、それらしいものは見つかっていない。

と、そのとき俺は一つ閃いた。

閃いた瞬間、何故もっと早く気が付かなかったと後悔した。

「あのさ、香苗さん」

「ん？」

探している途中なので俺に背を向けながら対応してきた。

「もっと簡単に盗聴機見つける方法思いついた」

「何それっ？それホント？」

反応したのはネハラ。
こういう単純作業にはもう飽きてるご様子だ。

ネハラだけじゃなく皆集まってきた。
俺は実況解説のごとく細かく説明する。
「じゃあまず携帯を取り出します」
ポケットから取り出して、二つ折りの携帯を開く。
「そして電話帳を開き、とある方に電話をします」
「とある方って誰だ？」
アンが聞いてきたが、もったいつけるために答えは言わなかった。
電話が繋がる。
「あ、もしもし？真樹？」
電話を繋いだ相手は真樹だ。
『なんですの？』
向こうは囁くように喋ってるから、きっと聖ちゃんが側で寝てるのだろう。
「あの、出来れば風歌ちゃんと代わって欲しいんだが」
『風歌？ちょっと待ってくださいまし』

そう言うとしばらく無言が続いた。

その間にアンが聞いてきた。

「夏哉。風歌がどうしたんだ?」

「いや、盗聴機の探知機でもあるかなと思い。それがあれば一発で盗聴機があるかどうか分かるからさ」

「なんってあんたはもっと早く気付かなかったのよナツヤ!!」

叫びがら、ネハラが俺の胸ぐらを掴んで揺さぶってくる。

「しょーがねぇだろ、思い付いたの今だったんだから!!てか気持ち悪い!もう気持ち悪いからやめてくれ!!」

『何?お義兄さんはわたしを罵倒するために電話してきたの?』

頭を揺さぶられてる状況で、俺が頼みたかった少女の声が耳に入った。

「違う!こっちの事情!ほらネハラ!もうやめなさい!」

相手方が出てきたため、ネハラもちゃんと退(ひ)いてくれた。

『それで?娘を妻に任せっきりのお義兄さんは、わたしに何か用なの?』

「その言い方はやめろ」

『あ、そう。じゃあさような――』

「待て待て待て！」

相手が電話を切りそうな雰囲気だったため、慌てて止める。

まだ頼みごとすら言えてないのに通話を終了してもらいたくない。

『何？お義兄さん？』

こいつ、どうやら意地でも俺と真樹を結婚させたいらしい。

つか中一の癖に脅しを掛けてくるとか。

いろいろ言いたいことがあったが、そこはなんとか飲み込んで話を進める。

「風歌ちゃんってさ、盗聴機の探知機とか持ってる？」

『……それ、中学生の子供に聞く質問じゃないわね』

「そりゃそうなんだが、持ってるかな～って」

『まぁ持ってるけど』

「持ってるんかい」

予想が当たってよかったのだが、なんか釈然としない。

ホントになんで俺らより年下が探知機を持ってるんだろうな。

『それで？急にどうしたのよ？』

アンたちのことを省きながら、苦情が伝わったということを話した。

『分かった。じゃあ今から行くでいいの？』

「お前が暇ならいいんだけどさ。忙しいなら、俺が借りに行って使い方教わって、でもいいんだけど」

『暇だし、今から行くわね。これ貸し一だから』

「アホ。こっちはお前に殺されかけたんだ。等倍だろ。それにこっちはお前らの関係取り持ったんだぞ？」

『だからお姉ちゃんをお嫁にしてあげようとしてるのに』

「そんなプレゼントはいら――」

『いたっ！』

突然悲鳴のような声がした。

風歌ちゃんが殴られたりしたのだろうか？

「風歌ちゃんっ？」

向こう側の状況が分からないのでちょっと焦る。

『あ～、夏哉ですの？』

真樹だ。

「風歌ちゃんどうした？」

『拳骨食らわせておきましたわ』

なるほど、それであの声か。

「真樹」

『はい？』

「グッジョブ」

『言うと思いましたわ。で、用件は済みましたか？風歌に代わります？』

「あ、大丈夫。もう伝えることは伝えたから。ちょいと風歌ちゃん借りるわ。すぐ終わると思うけど」

『構いませんわ』

「じゃ、そういうことで、さよならーす」

『はぁい。また明日』

話が終わったので通話を切る。

「はぁい、というわけで風歌ちゃんを待ちましょうか」

風歌ちゃんが来るまでの十五分ほど、俺たちは適当にダベりながら

過ごしていた。

「おじゃましま～す」

ノックも何もなく、扉の開く音が聞こえた。

いきなりの訪問者を出迎えるために玄関へ向かう。

そこにはやっぱり風歌ちゃんがいた。

「お前よぉ、無断に入るのはどうかと思うぞ？」

「だって身内だからいいかと」

「誰が身内だ」

「それにこの寮おじいちゃんのだし」

「だし、じゃねぇよ。それより、よろしく頼めるか？」

「はぁい」

風歌ちゃんは持ってきた女物の可愛らしいポーチから、似つかわしくない無骨な機械を取り出した。

トランシーバーより一回り大きいものだ。

「あれ？お義兄さん浮気？」

部屋を覗くなり、風歌ちゃんは訳の分からないことを言い出した。

「は？なんのこと？」

風歌ちゃんの上から覗いてみれば、香苗とアンとネハラとラスクの四人がいた。

どこも浮気の場面には見えな――いや待て。

風歌ちゃんにはアンたちが見えない。

つまりこの部屋には俺と香苗しかいない風に見えてるのだろう。

男女が二人きりの部屋に一緒。

確かに浮気に見えるかもしれない。

前提を間違えてなければ。

「おいガキ。なんで浮気だ。俺は誰とも付き合ってねぇぞ？」

「お義兄さん、お姉ちゃんのこと忘れちゃダメよ」

「だから付き合ってねぇって」

ため息混じりにつぶやく。

なんでこいつはここまでくっつけたがるのか。

……あぁ、こいつは真樹のことになると一途過ぎるんだった。

ちらっと香苗を、頼むからキレてませんように、と祈りつつ見る。

するとどうだろう。

香苗は意外にも大人で、苦笑いで済ませていた。
よかった。
もしこの相手が沙鳥とかだったらまずかっただろう。
「香苗は盗聴機探すの手伝ってもらってただけだ。で?探すのって時間結構かかる?」
「そうでもないわよ。すぐに終わるわ」
風歌ちゃんは部屋に入ると、歩きながら探知機を上下左右にゆっくりと振り始めた。
何処に電波が通ってるのか探しているのだろう。
俺たちは何も出来ないので見学。
一分強歩いただろうか。
トイレの中にも入って、調べ終わったようだ。
「盗聴器はないわね」
「そうなの?」
「うん。反応なし」
「そっか~。了解した。わざわざありがとな」
「別に。身内の頼みだし」
「だから誰が身内だ。送ろうか?」

「いいわよ、近くだし。それより、そういう気遣いは妻にやってあげなよ？」

「誰だ妻って！」

拳を掲げてみたら逃げるように帰って行った。

「あのマセガキが……」

ホントため息しか出ない。

「えっと、夏哉君。お疲れ様？」

香苗が気遣いの声をかけてくれた。

「ホントお前らがキレ出さなくてよかったよ」

「？ら？って私も入ってるのか？」

「当たり前だ。てか香苗とアンだ」

「いや、夏哉君ホントに疲れてそうな顔してたから」

どうやらかなり顔に出ていたようだ。

普通にしていたつもりだったんだが。

「まぁ取り敢えず、風歌ちゃんのお陰で盗聴機がないことが分かりました」

「今までの苦労はなんだったのよ……」

ホントつまんなかったようで、ネハラはため息を付いた。

「悪かったな。でもさ……」

「うん。ホントにどこからそんな話が出たんだろうね」

結局問題が解決されず、むしろ謎が深まってしまった。

第九話　《六章》苦情の出所（後書き）

作者「あ〜あ〜、じぬ〜」

夏哉「どうしたどうした？」

作「課題いっぱい」

真樹「また二週間ほど更新停止ですの？」

作「そこまでは行かない。来週以内には出したいと思ってる。というわけでまずｖｉｃｔｏｒさんへ」

＞ｉ３９０８３―３２９１＜

作「さぁ皆さん言いましょう！せーの！ラブラブシュハッ！？」

真「はぁ、はぁ、はぁ、夏哉！！急いで消しなさいッ！！」

夏「あれ！？これどうなってんだ！？真樹消せないんだけど！！」

真「はぁ！？何言ってるんですの！？そのぐらい簡単に――ってほんとに消せませんわ！？」

夏「どうするよ？」

真「……やりましょうか」

夏「……マジでか？」

真「それしかありませんわ」

夏「……だな」

真「この画像を見た方」

夏「俺たちが抹殺しに行くんで見ないように」

真「では感想謝辞を。ＳＴさん、水鏡に映る月さん、ハクヤさん、えいちゃんさん、ソラトさん、ｖｉｃｔｏｒさん、フォルスさん、ｓｃａｒＬｅｔ★さん、ｃｏｌｏｒｆｕｌさん、感想ありがとうございますわ」

夏「ホントこんなに来てくれてありがとうございます。更新が遅くなるかもしれませんが、よろしくお願いします」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4039l/

四人の魔法使い

2012年1月14日20時31分発行